

藪田古墳群
金黒池東遺跡
奥ヶ谷窯跡
中山遺跡・中山古墳群
西山遺跡・西山古墳群
服部遺跡
北溝手遺跡
窪木遺跡
高松田中遺跡

中国横断自動車道
建設に伴う発掘調査
4

1997

日本道路公団中国支社岡山工事事務所
岡山県教育委員会

藪 田 古 墳 群
金 黒 池 東 遺 跡
奥 ケ 谷 窯 跡
中山遺跡・中山古墳群
西山遺跡・西山古墳群
服 部 遺 跡
北 溝 手 遺 跡
窪 木 遺 跡
高 松 田 中 遺 跡

中国横断自動車道
建設に伴う発掘調査

4

1997

日本道路公団中国支社岡山工事事務所
岡山県教育委員会



金黒池東遺跡 石囲い1



奥ヶ谷窯跡 全景（北から）



奥ヶ谷窯跡 窯体（南から）



奥ヶ谷窯跡 出土遺物



中山遺跡 全景（北西から）



中山6号墳 全景（南から）



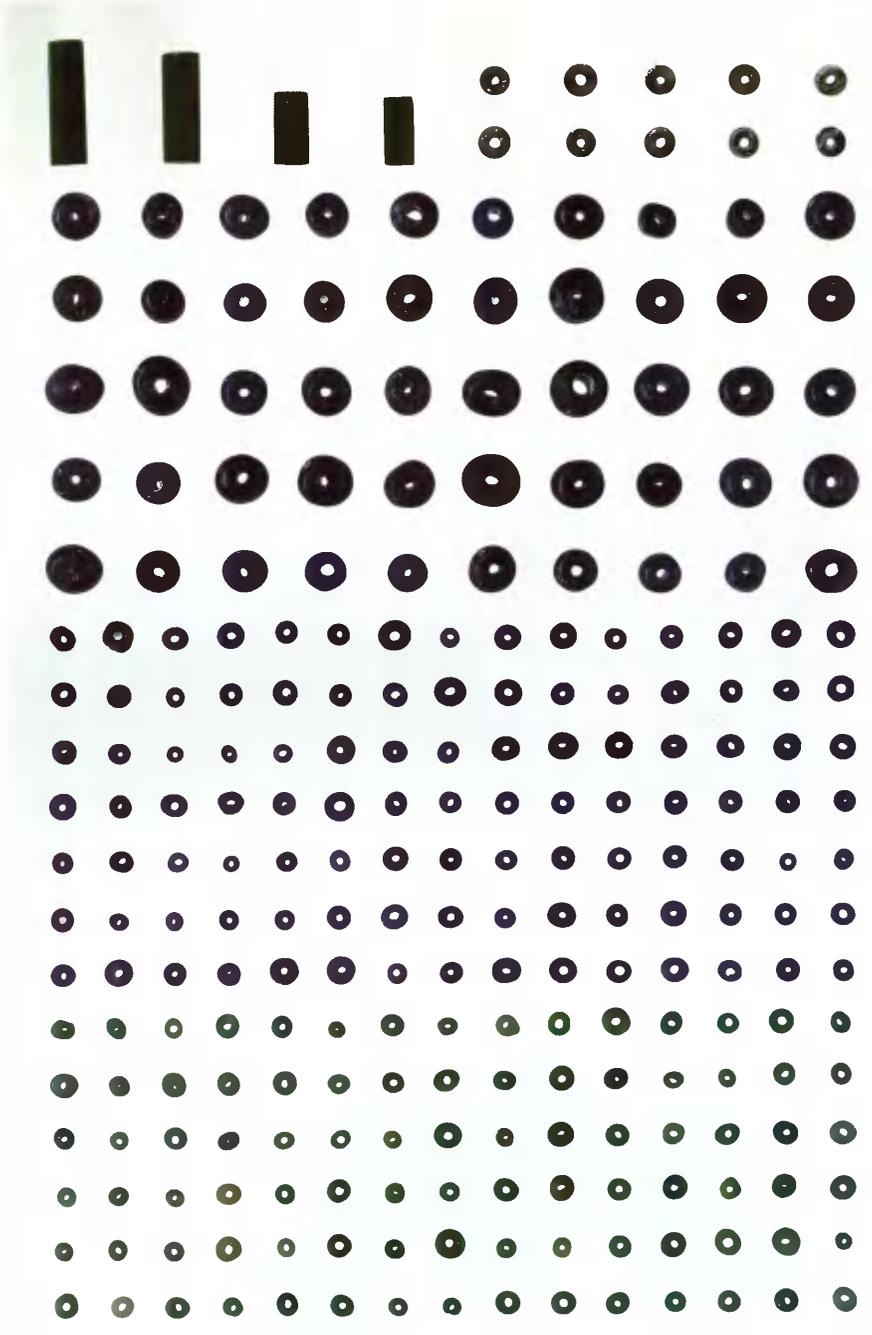
(南から)

中山6号墳
南裾円筒埴輪列

(西から)



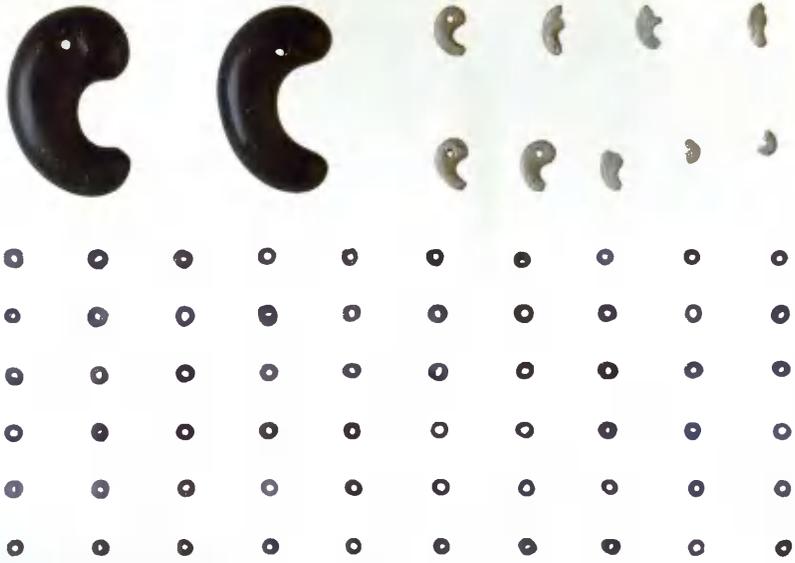
中山6号墳 主体部 (北から)



中山6号墳 出土玉類



西山古墳群 出土埴輪



西山26号墳 出土玉類



服部遺跡から平野部を望む（西から）



服部遺跡 II区P5 粘土採掘坑（北から）



高松田中遺跡 舟形土塚群（南から） および出土壺

序

中国横断自動車道・岡山米子線は「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち岡山～北房間につきましては、昭和63年5月より鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について岡山県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は岡山工事事務所担当区域である岡山市、総社市における服部遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を越えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は岡山県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる謝意を表すものであります。

平成9年3月

日本道路公団中国支社岡山工事事務所

所長 和田 峻

序

中国横断自動車道は、中国地方を南北に結ぶ交通の大動脈であり、この道路が及ぼす文化的・経済的波及効果は計り知れないほど大きなものがあります。

岡山県教育委員会では、この中国横断自動車道の建設に先立ち、その予定地内に所在する埋蔵文化財の保護・保存について関係各機関と繰り返し協議・調整を図ってきたところであり、しかしながら、やむなく記録保存の措置を講じなければならない遺跡については昭和62年から発掘調査を実施してまいりました。

当報告書は、中国横断自動車道建設に伴う発掘調査としては4冊目にあたります。今回は平成5年度から6年度にかけて調査を実施しました総社市および岡山市に所在する遺跡について記載しています。

調査対象地域東部の平野部に所在する遺跡からは縄文時代晩期の遺物をはじめ、高松田中遺跡においては弥生時代の舟形土壙群が、服部遺跡では弥生時代から古墳時代の粘土採掘坑群など、集落の一端を窺わせる遺構が検出されました。一方、西部の丘陵上の遺跡からも、多彩な埴輪を樹立していた西山古墳群やガラス玉2,000余個を伴った中山6号墳、帯金具を出土した金黒池東遺跡など、多くの貴重な遺物が出土しました。さらには、中国地方最古級の須恵器窯跡である奥ヶ谷窯跡の発見など、吉備中枢域の先進性を物語る新たな事例を加えることもできました。

今後この報告書がこの地域の歴史を解明する資料として、また文化財保護の一助として活用されれば幸いに存じます。

なお、今回の発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員の先生方から種々の御教示と御指導を得、また、日本道路公団中国支社岡山工事事務所をはじめ関係各位から多大な御協力、御援助を賜りました。記して厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

岡山県教育委員会

教育長 森 崎 岩之助

例 言

1. 本書は、中国横断自動車道建設に伴い、日本道路公団より委託を受けて、岡山県教育委員会が、平成5年4月～平成7年1月まで発掘調査を実施した岡山工事事務所関係の総社市・岡山市内9か所の報告書第4分冊である。
2. 収載した遺跡は、藪田古墳群、金黒池東遺跡、奥ヶ谷窯跡、中山遺跡・中山古墳群、西山遺跡・西山古墳群、服部遺跡、北溝手遺跡、窪木遺跡、高松田中遺跡である。
3. 発掘調査および報告書作成にあたっては、中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、下記の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは終始有益な指導と助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。
稲田 孝司（岡山大学文学部教授） 船津 昭雄（元久米町立中正小学校長）
白石 純（岡山理科大学自然科学研究所） 間壁 忠彦（倉敷考古館長）
土居 徹（元津山市立北小学校長） 松木 武彦（岡山大学文学部助教授）
中田 啓司（元県立矢掛高校教諭） 水内 昌康（岡山県文化財保護審議会委員）
4. 各専門分野における鑑定、分析等については、下記の方々および機関から有益な教示を得、一部の成果については報告文をいただいた。記して感謝を表す。
熱残留磁気分析 時枝 克安（島根大学）
伊藤 晴明（島根職業能力開発短期大学校）
胎土分析 白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
石材同定 妹尾 護（倉敷芸術科学大学）
プラント・オパール、花粉分析 古環境研究所
樹種鑑定 パリノ・サーヴェイ株式会社
5. 本報告書の作成は、江見正己・小延祥夫・蛸原啓介が担当して行い、遺物の実測・トレース・写真撮影などについては文中に明記した方々の協力を得た。
6. 本文の執筆は、調査担当者が分担し、文責は各節あるいは遺構ごとの文末に示した。なお、第2章地理的・歴史的環境の執筆にあたっては柳瀬昭彦氏から多大なる援助を受けた。
7. 本書の編集は、江見正己が担当した。
8. 出土遺物ならびに図面・写真類は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

凡 例

1. 本報告書にもちいた高度は海拔高であり、方位については各遺跡調査区位置図および遺構全体図は国土座標系の座標北を示し、各遺構等は磁北を示す。
2. 本報告書の遺構および遺物実測図の縮尺については明記しているが、おもなものには一部例外があるもの下記の通りに統一している。
遺構 竪穴住居・掘立柱建物1/80 土壙1/30 舟形土壙1/40 溝・河道1/30、1/60
遺物 土器1/4 埴輪1/5 石製品1/2 金属製品1/2 玉類2/3
3. 図・遺構・遺物の各番号は章ごとの連番号で、中山6号墳のガラス玉は形態別に番号を付した。
4. 遺物番号は材質を示すため土器以外のものについては下記の略号を番号の前に付した。
石製品S 土製品C 木製品W 金属製品M ガラス製品G
5. 土器実測図で表現する中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径復元に不確実性のあるものを示す。
6. 報告書にもちいた時代区分は執筆者の意向に添って統一しておらず、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分、世紀などを併用している。
7. 本報告書に掲載した第2章第1図は国土地理院の1/25000地形図「総社西部」「総社東部」「箭田」「倉敷」を縮小複製し、加筆したものである。

目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査に至る経緯と調査体制	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査および報告書作成の体制	6
第2章 地理的・歴史的環境	9
第3章 藪田古墳群	13
第1節 位置と経過	13
1. 位置	13
2. 経過	13
第2節 調査の概要	15
1. 藪田3号墳	15
(1) 調査前の状況	15
(2) 墳丘と周溝	16
(3) 外護列石・貼り石	16
(4) 横穴式石室	18
(5) 遺物出土状況・出土遺物	19
2. 藪田4号墳	23
(1) 調査前の状況	23
(2) 墳丘と周溝	24
(3) 横穴式石室	25
(4) 遺物出土状況・出土遺物	28
3. その他の遺構と遺物	33
(1) 竪穴住居	33
(2) 土壇	34
(3) 溝群	34
第3節 結語	35
1. 藪田3号墳	35
2. 藪田4号墳	35
遺物一覧表	36
第4章 金黒池東遺跡	39
第1節 位置と経過	39
1. 位置	39
2. 経過	39

第2節 調査の概要	40
1. 縄文時代の遺構と遺物	40
(1) 包含層	40
(2) 縄文土器	41
(3) 石器	42
2. 古代の遺構と遺物	44
(1) 石囲い	44
(2) 遺構に伴わない遺物	46
3. その他の遺構	46
(1) 柵列	46
第3節 結語	47
1. 縄文時代	47
2. 古代	47
縄文時代遺物一覧表	48
第5章 奥ヶ谷窯跡	49
第1節 位置と経過	49
第2節 調査の概要	50
1. 窯体	50
2. 付属施設	53
(1) 周溝	53
(2) 作業面	54
3. 出土遺物	54
(1) 須恵器	55
(2) 須恵質土製品	68
(3) 軟質土器・土師器	68
(4) 土師質土製品	69
第3節 結語	70
1. 窯構造について	70
2. 出土遺物について	70
(1) 「初期須恵器」について	70
(2) 「須恵器」について	71
(3) 軟質土器・土師器について	73
(4) 時期	74
(5) 須恵器生産体制について	74
(6) 最後に	75
遺物一覧表	78
第6章 中山遺跡・中山古墳群	83
第1節 位置と経過	83

第2節 中山遺跡の概要	84
1. 弥生時代の遺構と遺物	84
(1) 竪穴住居	85
(2) 掘立柱建物	86
(3) 段状遺構	96
(4) 土塋	101
(5) 遺構に伴わない遺物	104
第3節 中山古墳群の概要	105
1. 中山6号墳	105
(1) 墳丘と周溝	105
(2) 埴輪	106
(3) 埋葬施設	119
2. 中山7号墳	136
(1) 周溝	136
(2) 埋葬施設	137
(3) 出土遺物	137
第4節 結語	138
遺物一覧表	141
第7章 西山遺跡・西山古墳群	159
第1節 位置と経過	159
第2節 西山遺跡の概要	160
1. A地区	160
(1) 竪穴住居	161
(2) 土塋	164
(3) 遺構に伴わない遺物	165
2. B地区	166
(1) 竪穴住居	167
(2) 掘立柱建物	170
(3) 段状遺構	170
(4) 土塋墓	171
(5) 土塋	173
第3節 西山古墳群の概要	174
1. 西山5号墳	177
(1) 古墳の概要と位置	177
(2) 墳丘	177
(3) 埋葬施設	179
(4) 出土遺物	181
2. 西山25号墳	182

(1) 古墳の概要と位置	182
(2) 墳丘	183
(3) 出土遺物	184
3. 西山1号墳	187
(1) 古墳の概要と位置	187
(2) 墳丘	188
(3) 墳丘の出土遺物	189
(4) 埋葬施設	197
4. 西山26号墳	198
(1) 古墳の概要と位置	198
(2) 墳丘	198
(3) 墳丘の出土遺物	199
(4) 埋葬施設	206
(5) 埋葬施設に伴う出土遺物	209
5. 西山27号墳	210
(1) 古墳の概要と位置	210
(2) 出土遺物	211
第4節 結語	212
遺物一覧表	213
第8章 服部遺跡	219
第1節 位置と経過	219
第2節 調査の概要	221
1. 縄文時代の遺構と遺物	229
(1) 河道	229
2. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	230
(1) 粘土採掘坑	230
(2) 土壙	258
(3) 溝	260
3. 古代以降の遺構と遺物	271
(1) 掘立柱建物	271
(2) 井戸	271
(3) 土壙	271
(4) 溝	274
(5) 河道	285
(6) 水田	287
4. 遺構に伴わない遺物	287
第3節 結語	291
遺物一覧表	293

第9章 北溝手遺跡	299
第1節 位置と経過	299
第2節 調査の概要	299
1. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	308
(1) 井戸	308
(2) 土壇	308
(3) 溝	309
(4) 水田	312
2. 古代以降の遺構と遺物	312
(1) 土壇	312
(2) 柵列状遺構	316
(3) 溝	316
(4) 水田	319
3. 遺構に伴わない遺物	319
第3節 結語	322
遺物一覧表	323
第10章 窪木遺跡	325
第1節 位置と経過	325
第2節 調査の概要	326
1. 古墳時代の遺構と遺物	328
(1) 溝	328
2. 古代以降の遺構と遺物	328
(1) 土壇	328
(2) 溝	328
第11章 高松田中遺跡	333
第1節 位置と経過	333
第2節 調査の概要	340
1. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物	340
(1) 舟形土壇	340
(2) 土壇	349
(3) 小土壇群	353
(4) 溝	353
(5) 河道	359
(6) 水田	364
2. 古代以降の遺構と遺物	365
(1) 掘立柱建物	365
(2) 土壇	366
(3) 溝	367

3. 遺構に伴わない遺物	379
第3節 結語	383
遺物一覧表	385
付載1. 奥ヶ谷窯跡の地磁気年代	389
付載2. 奥ヶ谷窯跡、中山・西山古墳群出土遺物の胎土分析	393

目 次

第1章 調査に至る経緯と調査体制	
第1図 位置図	1
第2図 調査遺跡位置図 (1/75000)	2
第3図 一次調査位置図 (1/1600)	2
第4図 一次調査トレンチ① (1/60)	3
第5図 一次調査トレンチ② (1/60)	4
第2章 地理的・歴史的環境	
第1図 周辺遺跡分布図 (1/60000)	10
第3章 藪田古墳群	
第1図 調査区位置図 (1/4000)	14
第2図 3号墳調査前地形測量図 (1/150)	15
第3図 3号墳墳丘断面図 (1/60)	17
第4図 3号墳調査後墳丘測量図 (1/150)	18
第5図 3号墳天井石検出状況 (1/60)	19
第6図 3号墳石室 (1/60)	20
第7図 3号墳遺物出土状況 (1/40)	21
第8図 3号墳出土遺物 (1/4・1/2)	22
第9図 4号墳調査前地形測量図 (1/150)	23
第10図 4号墳墳丘断面図 (1/150)	24
第11図 4号墳およびその他の遺構配置図 (1/150)	25
第12図 4号墳トレンチ断面図 (1/60)	26
第13図 4号墳石室 (1/60)	27
第14図 4号墳遺物出土状況 (1/40)	28
第15図 4号墳出土遺物① (1/4)	29
第16図 4号墳出土遺物② (1/6・1/2)	30
第17図 4号墳出土遺物③ (1/2)	31
第18図 4号墳出土遺物④ (1/4・1/2)	32
第19図 竪穴住居 (1/80)・出土遺物 (1/4)	33
第20図 土壌1 (1/30)	34
第21図 土壌2 (1/30)	34
第4章 金黒池東遺跡	
第1図 遺跡調査区位置図 (1/4000)	39
第2図 A～C地区遺構全体図 (1/400)	40
第3図 A地区土層断面図 (1/60)	40
第4図 A地区すり石出土状況 (1/20)	41
第5図 A地区出土縄文土器① (1/4)	41
第6図 A地区出土縄文土器② (1/4)	42
第7図 A地区出土石器① (1/2)	42
第8図 A地区出土石器② (1/2・1/3)	43
第9図 B・C地区石囲い配置図 (1/90)	44
第10図 石囲い1 (1/30)・出土遺物(1/4・2/3)	45
第11図 石囲い2 (1/30)	45
第12図 石囲い3 (1/30)	46
第13図 遺構に伴わない遺物 (1/4)	46
第14図 D地区柵列状遺構 (1/300)	46
第5章 奥ヶ谷窯跡	
第1図 調査区位置図 (1/4000)	49
第2図 表採遺物 (1/4)	50
第3図 全体図 (1/150)	51
第4図 窯体 (1/30)	52
第5図 窯体内遺物出土状況 (1/30)	53
第6図 周溝断面 (1/30)	54
第7図 作業面断面 (1/60)	54
第8図 出土遺物① (1/4)	56
第9図 出土遺物② (1/4)	58
第10図 出土遺物③ (1/4)	59
第11図 出土遺物④ (1/4)	61
第12図 出土遺物⑤ (1/4)	62
第13図 出土遺物⑥ (1/4)	63
第14図 出土遺物⑦ (1/4)	64
第15図 出土遺物⑧ (1/4)	65
第16図 出土遺物⑨ (1/4)	67
第17図 出土遺物⑩ (1/4)	69
第6章 中山遺跡・中山古墳群	
第1図 調査区位置図 (1/4000)	83
第2図 遺構全体図 (1/450)	84
第3図 竪穴住居1 (1/80)	85

第4図	竪穴住居2 (1/80).....	85
第5図	掘立柱建物1 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	86
第6図	掘立柱建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	87
第7図	掘立柱建物3 (1/80)・出土遺物① (1/4).....	88
第8図	掘立柱建物3出土遺物② (1/4・1/2).....	89
第9図	掘立柱建物4 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	90
第10図	掘立柱建物5 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2).....	92
第11図	掘立柱建物6 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	93
第12図	掘立柱建物7 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	94
第13図	掘立柱建物8 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	95
第14図	掘立柱建物9 (1/80).....	95
第15図	段状遺構1 (1/100).....	96
第16図	段状遺構2 (1/100)・出土遺物 (1/4・1/2).....	97
第17図	段状遺構3・4 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	98
第18図	段状遺構5 (1/80).....	98
第19図	段状遺構6 (1/80).....	99
第20図	段状遺構7・8 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	99
第21図	段状遺構9 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	99
第22図	段状遺構10 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	100
第23図	段状遺構11 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	100
第24図	土壌1 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	101
第25図	土壌2 (1/30).....	101
第26図	土壌3 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	102
第27図	土壌4 (1/30).....	102
第28図	土壌5 (1/30).....	103
第29図	土壌6 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	103
第30図	土壌7 (1/30).....	104
第31図	遺構に伴わない遺物 (1/2).....	104
第32図	6・7号墳調査前地形測量図 (1/400).....	105
第33図	6号墳調査後墳丘測量図 (1/150).....	106

第34図	6号墳墳丘断面図 (1/80).....	107
第35図	6号墳墳丘出土埴輪分布図 (1/300).....	108
第36図	6号墳墳丘出土埴輪① (1/5).....	109
第37図	6号墳墳丘出土埴輪② (1/5).....	110
第38図	6号墳墳丘下段テラス埴輪配列実測 (1/40).....	111
第39図	6号墳下段東列出土埴輪 (1/5).....	112
第40図	6号墳下段南列出土埴輪① (1/5).....	113
第41図	6号墳下段南列出土埴輪② (1/5).....	114
第42図	6号墳下段西列出土埴輪 (1/5).....	115
第43図	6号墳下段北列出土埴輪 (1/5).....	116
第44図	6号墳墳丘周辺出土土器 (1/4).....	117
第45図	6号墳墳丘周辺出土鉄製品 (1/2).....	118
第46図	6号墳埋葬施設 (1/40).....	120
第47図	6号墳第1主体 (1/30).....	121
第48図	6号墳第1主体遺物出土状況 (1/25・1/5).....	122
第49図	第1主体出土玉および紡錘車 (2/3・1/3).....	123
第50図	第1主体出土鉄製品① (1/2).....	124
第51図	第1主体出土鉄製品② (1/2).....	125
第52図	第1主体出土鉄製品③ (1/2).....	126
第53図	6号墳第2主体 (1/30).....	127
第54図	6号墳第2主体遺物出土状況 (1/25・1/5).....	129
第55図	第2主体出土鉄製品① (1/2).....	130
第56図	第2主体出土鉄製品② (1/2).....	131
第57図	第2主体出土鉄製品③ (1/2).....	132
第58図	第2主体ガラス玉法量散布図.....	133
第59図	第2主体出土石製玉類 (2/3).....	134
第60図	第2主体出土ガラス丸玉(青)(2/3).....	134
第61図	第2主体出土ガラス小玉(青)(2/3).....	135
第62図	第2主体出土ガラス小玉(緑)(2/3).....	135
第63図	7号墳調査後測量図 (1/40).....	136
第64図	埋葬施設 (1/30)・出土遺物 (1/4).....	137
第7章 西山遺跡・西山古墳群		
第1図	調査区位置図 (1/4000).....	159
第2図	A地区遺構全体図 (1/600).....	161
第3図	竪穴住居1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2).....	162
第4図	竪穴住居2 (1/80).....	163
第5図	竪穴住居3 (1/80).....	163
第6図	竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4).....	164
第7図	土壌1 (1/40)・出土遺物 (1/4).....	164

第8図	土壌2 (1/30).....	165
第9図	遺構に伴わない遺物 (1/2).....	165
第10図	B地区遺構全体図 (1/300).....	166
第11図	竪穴住居5 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2).....	167
第12図	竪穴住居6 (1/80)・中央穴 (1/30) および出土遺物① (1/2).....	168
第13図	竪穴住居6出土遺物② (1/4).....	169
第14図	竪穴住居7 (1/80).....	170
第15図	掘立柱建物1 (1/80).....	170
第16図	段状遺構 (1/80).....	171
第17図	土壌墓1 (1/30)・出土遺物 (1/2).....	171
第18図	土壌墓2 (1/30)・出土遺物 (1/2).....	172
第19図	土壌墓3 (1/30).....	172
第20図	土壌3 (1/30).....	173
第21図	土壌4 (1/30).....	173
第22図	土壌5 (1/30).....	173
第23図	古墳位置図 (1/2500).....	174
第24図	5号墳調査前地形測量図 (1/300).....	175
第25図	B地区調査前地形測量図 (1/300).....	176
第26図	5号墳調査後墳丘測量図 (1/300).....	177
第27図	5号墳墳丘断面図 (1/150).....	178
第28図	5号墳埋葬施設および排水路 (1/50).....	179
第29図	埋葬施設 (1/30).....	180
第30図	5号墳出土遺物 (1/4).....	181
第31図	B地区古墳群調査後墳丘測量図 (1/300).....	182
第32図	25号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150).....	183
第33図	25号墳出土遺物① (1/4・1/2).....	184
第34図	25号墳出土遺物② (1/5).....	185
第35図	25号墳出土遺物③ (1/5).....	186
第36図	1号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150).....	187
第37図	1号墳南側周溝内遺物出土状況 (1/50).....	188
第38図	1号墳出土遺物① (1/5).....	190
第39図	1号墳出土遺物② (1/5).....	191
第40図	1号墳出土遺物③ (1/5).....	192
第41図	1号墳出土遺物④ (1/5).....	193
第42図	1号墳出土遺物⑤ (1/5).....	194
第43図	1号墳出土遺物⑥ (1/5).....	195
第44図	1号墳出土遺物⑦ (1/5).....	196
第45図	1号墳出土遺物⑧ (1/2).....	197

第46図	1号墳埋葬施設 (1/30)・出土遺物 (1/2).....	197
第47図	26号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150).....	198
第48図	26号墳出土遺物① (1/2).....	199
第49図	26号墳出土遺物② (1/5).....	200
第50図	26号墳出土遺物③ (1/5).....	201
第51図	26号墳出土遺物④ (1/5).....	202
第52図	26号墳出土遺物⑤ (1/5).....	203
第53図	26号墳出土遺物⑥ (1/5).....	204
第54図	26号墳出土遺物⑦ (1/5).....	205
第55図	26号墳埋葬施設 (1/30).....	206
第56図	埋葬施設遺物出土状況(1/4)・出土遺物① (1/2).....	207
第57図	埋葬施設出土遺物② (2/3).....	208
第58図	埋葬施設出土遺物③ (1/2).....	209
第59図	27号墳地形測量図 (1/150).....	210
第60図	27号墳周溝 (1/60) および遺物出土状況 (1/30).....	211
第61図	27号墳出土遺物 (1/4).....	211
第8章 服部遺跡		
第1図	調査区位置図 (1/4000).....	220
第2図	調査区地形断面図.....	221
第3図	遺構配置図① (1/400).....	222
第4図	遺構配置図② (1/400).....	223
第5図	遺構配置図③ (1/400).....	224
第6図	遺構配置図④ (1/400).....	225
第7図	遺構配置図⑤ (1/400).....	226
第8図	遺構配置図⑥ (1/400).....	227
第9図	遺構配置図⑦ (1/400).....	228
第10図	河道1 (1/60).....	229
第11図	河道2 (1/60)・出土遺物 (1/4).....	229
第12図	粘土採掘坑-I区北側道-(1/100).....	230
第13図	粘土採掘坑-I区P2-(1/100).....	231
第14図	粘土採掘坑-I区北側道・P2-出土遺物① (1/4).....	232
第15図	粘土採掘坑-I区P3-(1/100).....	232
第16図	粘土採掘坑-I区P4-(1/100).....	233
第17図	粘土採掘坑-I区南側道①-(1/100).....	233
第18図	粘土採掘坑-I区南側道②-(1/100).....	234
第19図	粘土採掘坑-I区南側道-出土遺物② (1/4).....	235
第20図	粘土採掘坑-II区北側道①-(1/100).....	236
第21図	粘土採掘坑-II区北側道②-(1/100).....	237
第22図	粘土採掘坑-II区北側道③-(1/100).....	238

第23区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 5-(1/100).....	239	第62区	溝 4 (1/30).....	262
第24区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 6-(1/100).....	239	第63区	溝 5 (1/30).....	262
第25区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 7-(1/100).....	240	第64区	溝 6 (1/30).....	262
第26区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 8-(1/100).....	240	第65区	溝 7 (1/60) · 出土遺物 (1/4).....	263
第27区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 9-(1/100).....	241	第66区	溝 8 (1/60).....	263
第28区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 10-(1/100).....	241	第67区	溝 9 (1/60).....	263
第29区	粘土採掘坑-Ⅱ区南側道①-(1/100).....	242	第68区	溝 9 出土遺物 (1/4·1/2).....	264
第30区	粘土採掘坑-Ⅱ区南側道②-(1/100).....	243	第69区	溝 10 (1/30).....	265
第31区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 11-(1/100).....	243	第70区	溝 11 (1/30).....	265
第32区	粘土採掘坑-Ⅱ区北側道 · P 5-出土遺物③ (1/4).....	244	第71区	溝 12 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	265
第33区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 6 · P 7-出土遺物④ (1/4).....	245	第72区	溝 13 (1/30).....	266
第34区	粘土採掘坑-Ⅱ区P 8 · P 9 · P 10 · Ⅱ区南側道-出土遺物⑤ (1/4).....	246	第73区	溝 14 (1/30) · 出土遺物 (1/2).....	266
第35区	粘土採掘坑-Ⅲ区北側道①-(1/100).....	247	第74区	溝 15 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	266
第36区	粘土採掘坑-Ⅲ区北側道②-(1/100).....	248	第75区	溝 16 (1/30).....	267
第37区	粘土採掘坑-Ⅲ区北側道③-(1/100).....	248	第76区	溝 17 (1/30).....	267
第38区	粘土採掘坑-Ⅲ区P 13-(1/100).....	249	第77区	溝 18 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	267
第39区	粘土採掘坑-Ⅲ区P 14-(1/100).....	249	第78区	溝 19 (1/30).....	268
第40区	粘土採掘坑-Ⅲ区P 15-(1/100).....	250	第79区	溝 20 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	268
第41区	粘土採掘坑-Ⅲ区P 16-(1/100).....	250	第80区	溝 21 (1/30).....	268
第42区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道①-(1/100).....	251	第81区	溝 22 (1/30).....	268
第43区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道②-(1/100).....	252	第82区	溝 23 (1/30).....	269
第44区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道③-(1/100).....	253	第83区	溝 24 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	269
第45区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道④-(1/100).....	253	第84区	溝 25 (1/30).....	269
第46区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道⑤-(1/100).....	254	第85区	溝 26 (1/30).....	270
第47区	粘土採掘坑-Ⅲ区北側道-出土遺物⑥ (1/4).....	255	第86区	溝 27 (1/30).....	270
第48区	粘土採掘坑-Ⅲ区P 13 · P 14 · P 15 · P 16-出土遺物⑦ (1/4).....	256	第87区	溝 28 (1/30).....	270
第49区	粘土採掘坑-Ⅲ区南側道-出土遺物⑧ (1/4).....	257	第88区	掘立柱建物 (1/60).....	271
第50区	粘土採掘坑出土遺物⑨ (1/2).....	257	第89区	井戸 (1/30).....	271
第51区	土壇 1 (1/30).....	258	第90区	土壇 8 (1/30).....	272
第52区	土壇 2 (1/30).....	258	第91区	土壇 9 (1/30).....	272
第53区	土壇 3 (1/30).....	258	第92区	土壇 10 (1/30).....	272
第54区	土壇 4 (1/30).....	259	第93区	土壇 11 (1/30).....	273
第55区	土壇 5 (1/30).....	259	第94区	土壇 12 (1/30).....	273
第56区	土壇 6 (1/30) · 出土遺物 (1/4).....	259	第95区	土壇 13 (1/30).....	273
第57区	土壇 7 (1/30).....	260	第96区	土壇 14 (1/30).....	274
第58区	溝 1 (1/30).....	260	第97区	土壇 15 (1/30).....	274
第59区	溝 1 出土遺物 (1/4·1/2).....	261	第98区	溝 29 (1/30).....	275
第60区	溝 2 (1/60).....	261	第99区	溝 30 (1/30).....	275
第61区	溝 3 (1/60).....	262	第100区	溝 31 (1/30).....	276
			第101区	溝 32 (1/30).....	276
			第102区	溝 33 (1/30).....	276
			第103区	溝 34 (1/30).....	276
			第104区	溝 35 (1/30).....	276
			第105区	溝 36 (1/30).....	276
			第106区	溝 37 (1/30).....	276

第107図	溝38 (1/30)	277
第108図	溝39 (1/30)	277
第109図	溝40 (1/30)	277
第110図	溝41 (1/30)	277
第111図	溝42 (1/30)	277
第112図	溝43 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	278
第113図	溝44 (1/30)	278
第114図	溝45 (1/30)	278
第115図	溝46 (1/30)	278
第116図	溝47 (1/30)	278
第117図	溝48 (1/30)	279
第118図	溝49 (1/30)	279
第119図	溝50 (1/30)	279
第120図	溝51 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	279
第121図	溝52 (1/30)	280
第122図	溝53・54 (1/30)	280
第123図	溝55 (1/30)	280
第124図	溝56 (1/30)	280
第125図	溝57 (1/30)	280
第126図	溝58 (1/30)	280
第127図	溝59 (1/30)	281
第128図	溝60 (1/30)	281
第129図	溝61 (1/30)	281
第130図	溝62 (1/30)	281
第131図	溝63 (1/30)	281
第132図	溝64 (1/30)	281
第133図	溝65 (1/30)	282
第134図	溝66 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	282
第135図	溝67 (1/30)	282
第136図	溝68 (1/30)	282
第137図	溝69 (1/30)	283
第138図	溝70 (1/30)	283
第139図	溝71 (1/30)	283
第140図	溝72 (1/30)	283
第141図	溝73 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	284
第142図	溝74 (1/30)	284
第143図	溝75 (1/30)	284
第144図	溝76 (1/30)	284
第145図	河道護岸施設 (1/30)	285
第146図	出土杭 (1/8)	286
第147図	水田 (1/150) および畦断面(1/60) ・ 出土遺物 (1/4)	287
第148図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	288
第149図	遺構に伴わない遺物② (1/4)	289
第150図	遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/2)	290

第151図	遺構に伴わない遺物④ (1/2)	291
-------	------------------	-----

第9章 北溝手遺跡

第1図	調査区位置図 (1/4000)	300
第2図	調査区土層柱状図 (1/40)	301
第3図	遺構配置図① (1/400)	302
第4図	遺構配置図② (1/400)	303
第5図	遺構配置図③ (1/400)	304
第6図	遺構配置図④ (1/400)	305
第7図	遺構配置図⑤ (1/400)	306
第8図	遺構配置図⑥ (1/400)	307
第9図	遺構配置図⑦ (1/400)	308
第10図	井戸1 (1/30)	309
第11図	土壇1 (1/30)	309
第12図	溝1 (1/30)	309
第13図	溝2 (1/30)	309
第14図	溝3 (1/30)	309
第15図	溝4 (1/30)	310
第16図	溝5 (1/30)	310
第17図	溝6 (1/30)	310
第18図	溝7 (1/30)	310
第19図	溝8 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	310
第20図	溝9 (1/30)	310
第21図	溝10 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	311
第22図	溝11 (1/30)	311
第23図	溝12 (1/30)	311
第24図	溝13 (1/30)	311
第25図	水田2 畦畔断面 (1/60)	312
第26図	土壇2 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	313
第27図	土壇3 (1/30)	313
第28図	土壇4 (1/30)	313
第29図	土壇5 (1/30)	314
第30図	土壇6 (1/30)	314
第31図	土壇7 (1/30)	314
第32図	土壇8 (1/30)	314
第33図	土壇9 (1/30)	314
第34図	土壇10 (1/30)	314
第35図	土壇11 (1/30)	315
第36図	土壇12 (1/30)	315
第37図	土壇13 (1/30)	315
第38図	土壇14 (1/30)	315
第39図	土壇15 (1/30)	315
第40図	土壇16 (1/30)	316
第41図	土壇17 (1/30)	316
第42図	土壇18 (1/30)	316
第43図	柵列状遺構 (1/80)	316

第44図	溝14 (1/30)	317
第45図	溝15 (1/30)	317
第46図	溝16 (1/30)	317
第47図	溝17 (1/30)	317
第48図	溝18 (1/30)	317
第49図	溝19 (1/30)	318
第50図	溝20 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	318
第51図	溝21 (1/30)	318
第52図	溝22 (1/30)	318
第53図	溝23 (1/30)	318
第54図	溝24 (1/30)	319
第55図	溝25 (1/30)	319
第56図	溝26 (1/30)	319
第57図	遺構に伴わない遺物 (1/4)	320
第58図	遺構に伴わない遺物 (1/2)	321
第10章 窪木遺跡		
第1図	調査区位置図 (1/4000)	325
第2図	遺構配置図① (1/400)	326
第3図	遺構配置図② (1/400)	327
第4図	溝1 (1/30) ・ 出土遺跡 (1/4)	328
第5図	土壇1、(1/30)	328
第6図	溝2 (1/60)	329
第7図	溝3 (1/60) ・ 出土遺跡 (1/4)	329
第8図	溝4 (1/60) ・ 出土遺跡 (1/4)	329
第9図	溝5 (1/30)	330
第10図	溝6 (1/60)	330
第11図	溝7 (1/30)	331
第12図	溝8 (1/60) ・ 出土遺跡 (1/4)	331
第13図	溝9 (1/30)	331
第11章 高松田中遺跡		
第1図	調査区位置図 (1/4000)	334
第2図	調査区地形断面図	335
第3図	遺構配置図① (1/400)	335
第4図	遺構配置図② (1/400)	336
第5図	遺構配置図③ (1/400)	337
第6図	遺構配置図④ (1/400)	338
第7図	遺構配置図⑤ (1/400)	339
第8図	舟形土壇配置図 (1/200)	340
第9図	舟形土壇1 (1/40)	341
第10図	舟形土壇2 (1/40)	341
第11図	舟形土壇3 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4・1/2)	342
第12図	舟形土壇4 (1/40) ・ 出土遺物① (1/2・1/3)	343
第13図	舟形土壇4 出土遺物② (1/4・1/2)	344

第14図	舟形土壇5 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4・1/2)	345
第15図	舟形土壇6・7 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4・1/2)	346
第16図	舟形土壇8 出土遺物 (1/4)	346
第17図	舟形土壇8 (1/40)	347
第18図	舟形土壇9 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4・1/2)	348
第19図	舟形土壇10 (1/40)	349
第20図	舟形土壇11 (1/40) ・ 出土遺物 (1/4)	349
第21図	舟形土壇12 (1/40)	349
第22図	舟形土壇13 (1/40)	349
第23図	舟形土壇13出土遺物 (1/4)	350
第24図	土壇1 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2)	351
第25図	土壇2 (1/30)	351
第26図	土壇3 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2)	352
第27図	土壇4 (1/30)	352
第28図	土壇5 (1/30)	352
第29図	土壇6 (1/30)	352
第30図	土壇7 (1/30)	352
第31図	土壇8 (1/30)	353
第32図	溝1 (1/30)	353
第33図	溝2 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	354
第34図	溝3 (1/30)	354
第35図	溝4 (1/30)	354
第36図	溝5 (1/30)	354
第37図	溝6 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2)	354
第38図	溝7 (1/30)	355
第39図	溝8 (1/30)	355
第40図	溝9 (1/30)	355
第41図	溝10 (1/30)	355
第42図	溝11 (1/30)	355
第43図	溝12 (1/30)	355
第44図	溝13 (1/30)	355
第45図	溝14 (1/30)	355
第46図	溝15 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)	356
第47図	溝16 (1/30)	356
第48図	溝17 (1/30)	356
第49図	溝18 (1/30)	356
第50図	溝19 (1/30)	357
第51図	溝20・21 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2・1/4)	357
第52図	溝22 (1/30)	358
第53図	溝23 (1/30)	358

第54図	溝24 (1/30)	358	第98図	溝56 (1/30)	372
第55図	溝25 (1/30)	358	第99図	溝57 (1/30)	372
第56図	溝26 (1/30)	358	第100図	溝58 (1/30)	373
第57図	溝27 (1/30)	358	第101図	溝59 (1/30)	373
第58図	溝28 (1/30)	358	第102図	溝60 (1/30)	373
第59図	溝29 (1/30)	358	第103図	溝61 (1/30)	373
第60図	溝30 (1/30)	359	第104図	溝62 (1/30)	373
第61図	溝31 (1/30)	359	第105図	溝63 (1/30)	373
第62図	溝32 (1/30)	359	第106図	溝64 (1/30)	374
第63図	溝33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	359	第107図	溝65 (1/30)	374
第64図	河道 1 (1/30)	360	第108図	溝66 (1/30)・出土遺物 (1/4)	374
第65図	河道 2 (1/60)	360	第109図	溝67 (1/30)	374
第66図	河道 3 (1/30)・出土遺物① (1/6)	361	第110図	溝68・69 (1/30)	375
第67図	河道 3 出土遺物② (1/6・1/4)	362	第111図	溝70 (1/30)	375
第68図	河道 4 (1/60)・出土遺物① (1/4)	363	第112図	溝71~74 (1/30)	375
第69図	河道 4 出土遺物② (1/2)	364	第113図	溝75 (1/30)	375
第70図	掘立柱建物 1 (1/60)	365	第114図	溝76~78 (1/30)	375
第71図	掘立柱建物 2 (1/60)・出土遺物 (1/4)	365	第115図	溝79 (1/30)	376
第72図	掘立柱建物 3 (1/60)	366	第116図	溝80 (1/30)	376
第73図	土壇 9 (1/30)	366	第117図	溝81 (1/30)	376
第74図	土壇10 (1/30)	366	第118図	溝82 (1/30)	376
第75図	土壇11 (1/30)	367	第119図	溝83 (1/30)	376
第76図	溝34 (1/60)	367	第120図	溝84 (1/30)	376
第77図	溝34出土遺物 (1/4)	368	第121図	溝85 (1/30)	376
第78図	溝35 (1/30)	369	第122図	溝86 (1/30)	376
第79図	溝36 (1/30)	369	第123図	溝87 (1/30)	377
第80図	溝37 (1/30)	369	第124図	溝88 (1/30)	377
第81図	溝38 (1/30)	370	第125図	溝89 (1/30)	377
第82図	溝39 (1/30)	370	第126図	溝90 (1/30)	377
第83図	溝40 (1/30)	370	第127図	溝91 (1/30)	377
第84図	溝41 (1/30)	370	第128図	溝92 (1/30)	377
第85図	溝42 (1/30)	370	第129図	溝93 (1/30)・出土遺物 (1/4)	378
第86図	溝43 (1/30)	370	第130図	溝94 (1/30)	378
第87図	溝44 (1/30)	370	第131図	溝95 (1/30)	378
第88図	溝45 (1/30)	371	第132図	溝96 (1/30)	379
第89図	溝46 (1/30)	371	第133図	溝97 (1/30)	379
第90図	溝47 (1/30)	371	第134図	溝98 (1/30)	379
第91図	溝48 (1/30)	371	第135図	溝99 (1/30)	379
第92図	溝49 (1/30)	371	第136図	溝100 (1/30)	379
第93図	溝50 (1/30)	371	第137図	溝101 (1/30)	379
第94図	溝51・52 (1/30)	371	第138図	溝102 (1/30)	379
第95図	溝53 (1/30)	372	第139図	遺構に伴わない遺物① (1/4)	380
第96図	溝54 (1/30)	372	第140図	遺構に伴わない遺物② (1/4)	381
第97図	溝55 (1/30)	372	第141図	遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/2)	382
			第142図	遺構に伴わない遺物④ (1/2)	383

巻頭図版目次

- | | |
|----------------------------------|-------------------------------|
| 巻頭図版1-1. 金黒池東遺跡 石囲い1 | 巻頭図版5 中山6号墳 出土玉類 |
| 2. 奥ヶ谷窯跡 全景(北から) | 巻頭図版6 西山古墳群 出土埴輪 |
| 巻頭図版2-1. 奥ヶ谷窯跡 窯体(南から) | 巻頭図版7-1. 西山26号墳 出土玉類 |
| 2. 奥ヶ谷窯跡 出土遺物 | 2. 服部遺跡から平野部を望む(西から) |
| 巻頭図版3-1. 中山遺跡 全景(北西から) | 巻頭図版8-1. 服部遺跡 II区P5 粘土採掘(北から) |
| 2. 中山6号墳 全景(南から) | 2. 高松田中遺跡 舟形土壙群(南から) |
| 巻頭図版4-1. 中山6号墳 南裾円筒埴輪列(西から)(南から) | および出土鏝 |
| 2. 中山6号墳 主体部(北から) | |

図版目次

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 藪田古墳群 | 2. C地区石囲い3(南から) |
| 図版1-1. 遠景(秋葉山から) | 3. D地区柵列状遺構(南から) |
| 2. 3号墳調査前全景(南から) | 図版12 A地区出土遺物 |
| 3. 3号墳天井石検出(南から) | 奥ヶ谷窯跡 |
| 図版2-1. 3号墳外護列石(南から) | 図版13-1. 遠景(東から) |
| 2. 3号墳墳丘背面(北から) | 2. 全景(北から) |
| 3. 3号墳周溝断面(東から) | 3. 全景(南から) |
| 図版3-1. 3号墳石室東側壁(西から) | 図版14-1. 窯体床面A遺物出土状況(南から) |
| 2. 3号墳石室西側壁(東から) | 2. 窯体床面B遺物出土状況(南から) |
| 3. 3号墳遺物出土状況(西から) | 3. 窯体完掘状況(南から) |
| 図版4-1. 4号墳調査前全景(南から) | 図版15-1. 周溝断面(東から) |
| 2. 4号墳周溝断面(北東から) | 2. 作業面(西から) |
| 3. 4号墳石室(南から) | 3. 作業面遺物出土状況(南東から) |
| 図版5-1. 4号墳遺物出土状況①(南から) | 図版16 出土遺物①(上段外面、下段内面) |
| 2. 4号墳遺物出土状況②(南から) | 図版17 出土遺物②(上段外面、下段内面) |
| 3. 竪穴住居(南から) | 図版18 出土遺物③(上段外面、下段内面) |
| 図版6 3号墳出土遺物 | 図版19 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 図版7-1. 4号墳出土土器 | 図版20 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 2. 竪穴住居出土土器 | 図版21 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 図版8 4号墳出土鉄器 | 図版22 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 金黒池東遺跡 | 図版23 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 図版9-1. 遠景平成5年度(南から) | 図版24 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 2. 遠景平成6年度(南から) | 図版25 出土遺物④(上段外面、下段内面) |
| 3. A地区石器出土状況(西から) | 図版26-1. 出土遺物⑩(左表採、右C3) |
| 図版10-1. B地区石囲い1・2遠景(東から) | 2. 内面部分拡大写真 |
| 2. B地区石囲い1検出状況(南から) | 中山遺跡・中山古墳群 |
| 3. B地区石囲い2検出状況(北から) | 図版27-1. 遠景(西から) |
| 図版11-1. C地区石囲い3遠景(南から) | 2. 南西部(西から) |

- 3. 南東部 (西から)
- 図版28-1. 竪穴住居 1 (北から)
- 2. 竪穴住居 2 (北から)
- 3. 掘立柱建物 1 (北西から)
- 図版29-1. 掘立柱建物 2 (北から)
- 2. 掘立柱建物 3 (西から)
- 3. 掘立柱建物 4 (西から)
- 図版30-1. 掘立柱建物 5 (南から)
- 2. 掘立柱建物 6 (北西から)
- 3. 掘立柱建物 7 (北から)
- 図版31-1. 掘立柱建物 8 (北から)
- 2. 掘立柱建物 9 (北から)
- 3. 土壌 1 (南から)
- 図版32-1. 土壌 6 (南から)
- 2. 出土遺物
- 図版33-1. 6号墳調査前全景 (南から)
- 2. 6号墳墳丘北側断面 (西から)
- 3. 6号墳墳丘南側周溝断面 (西から)
- 図版34-1. 6号墳墳丘東側断面 (北から)
- 2. 6号墳調査風景 (南から)
- 3. 6号墳南埴輪列 (西から)
- 図版35-1. 6号墳南埴輪列 (南から)
- 2. 6号墳埋葬施設 (北から)
- 3. 6号墳埋葬施設断面 (北から)
- 図版36-1. 6号墳第 1 主体 (南から)
- 2. 6号墳第 1 主体遺物出土状況 (南から)
- 3. 6号墳第 2 主体 (南から)
- 図版37-1. 6号墳墓壇および排水溝 (北から)
- 2. 7号墳全景 (北から)
- 3. 7号墳埋葬施設 (北から)
- 図版38 6号墳出土埴輪
- 図版39 6号墳出土埴輪 (部分拡大)・須恵器
- 図版40 6号墳出土鉄器①
- 図版41 6号墳出土鉄器②
- 西山遺跡・西山古墳群
- 図版42-1. A地区調査前遠景 (西から)
- 2. A地区調査前全景 (南から)
- 3. 竪穴住居 1 (東から)
- 図版43-1. 竪穴住居 2 (東から)
- 2. 竪穴住居 4 (南から)
- 3. 土壌 2 (西から)
- 図版44-1. B地区調査前近景 (南から)
- 2. 竪穴住居 5 (北から)
- 3. 竪穴住居 5 中央穴 (北から)
- 図版45-1. 竪穴住居 6 (西から)

- 2. 竪穴住居 6 中央穴 (北から)
- 3. 掘立柱建物 1 (西から)
- 図版46 出土遺物
- 図版47-1. 5号墳調査前全景 (南から)
- 2. 5号墳調査後全景 (南から)
- 3. 5号墳墳丘南北断面 (南東から)
- 図版48-1. 5号墳墳丘東西断面 (南西から)
- 2. 5号墳埋葬施設から排水溝 (北から)
- 3. 5号墳埋葬施設断面 (東から)
- 図版49-1. 5号墳埋葬施設 (東から)
- 2. 5号墳排水溝入口 (東から)
- 3. 5号墳排水溝 (南から)
- 図版50-1. 25号墳全景 (西から)
- 2. 1号墳全景 (南から)
- 3. 1号墳墳丘断面 (南から)
- 図版51-1. 1号墳北周溝断面 (西から)
- 2. 1号墳南周溝断面 (西から)
- 3. 1号墳南周溝東部埴輪出土状況 (西から)
- 図版52-1. 1号墳南周溝西部埴輪出土状況 (南から)
- 2. 1号墳埋葬施設検出状況 (南から)
- 3. 1号墳埋葬施設 (南から)
- 図版53-1. 26号墳全景 (北から)
- 2. 26号墳全景 (南東から)
- 3. 26号墳北周溝断面 (西から)
- 図版54-1. 26号墳南周溝断面 (西から)
- 2. 26号墳南周溝埴輪出土状況 (北から)
- 3. 26号墳埋葬施設断面 (北西から)
- 図版55-1. 26号墳埋葬施設 (南西から)
- 2. 26号墳埋葬施設北部遺物出土状況 (南から)
- 3. 26号墳埋葬施設南部遺物出土状況 (南から)
- 図版56 土器・埴輪①
- 図版57 埴輪②
- 図版58 埴輪③
- 図版59 埴輪④
- 図版60 円筒棺・須恵器・鉄器・櫛
服部遺跡
- 図版61-1. 遠景 (西から)
- 2. I区南側道 (北西から)
- 3. II区 P 5 (北から)
- 図版62-1. II区 P 11 (北から)
- 2. VI区北側道 (南東から)
- 3. VI区南側道 (北東から)
- 図版63-1. 河道 1 (西から)
- 2. 河道 2 (南から)
- 3. 粘土採掘坑-I区 P 3-(北から)

- 図版64-1. 粘土採掘坑-Ⅱ区P5-(北から)
 2. 粘土採掘坑-Ⅱ区P9-(南から)
 3. 粘土採掘坑4(南から)
- 図版65-1. 粘土採掘坑-Ⅱ区P11-(北から)
 2. 粘土採掘坑断面-Ⅱ区P11-(西から)
 3. 粘土採掘坑-Ⅲ区北側道-(西から)
- 図版66-1. 粘土採掘坑-Ⅲ区南側道①-(東から)
 2. 粘土採掘坑-Ⅲ区南側道②-(東から)
- 図版67-1. 土壌6(南から)
 2. 溝1(西から)
 3. 溝9(南から)
- 図版68-1. 井戸1(西から)
 2. 溝29・30(南東から)
 3. 溝51(西から)
- 図版69-1. 溝66(東から)
 2. 河道3(北東から)
 3. 河道3護岸施設(北西から)
- 図版70 出土遺物
 北溝手遺跡
- 図版71-1. 近景(西から)
 2. Ⅱ区南側道(西から)
 3. Ⅳ区南側道(東から)
- 図版72-1. 井戸(西から)
 2. 土壌1(南から)
 3. 溝2(南から)
- 図版73-1. 溝4(北から)
 2. 溝5・6(北東から)
 3. 溝10(東から)
- 図版74-1. 水田1(西から)
 2. 水田2(北から)
 3. 土壌4(東から)
- 図版75-1. 柵列状遺構(北から)
 2. 溝14(西から)
 3. 溝24(西から)

- 図版76 出土遺物
 窪木遺跡
- 図版77-1. 近景(西から)
 2. Ⅰ区北側道(西から)
 3. 溝2(南から)
- 図版78-1. 溝4(南から)
 2. 溝6(南から)
 3. 出土遺物
- 高松田中遺跡
- 図版79-1. 近景(西から)
 2. Ⅱ区北側道(東から)
 3. Ⅱ区南側道(西から)
- 図版80-1. Ⅳ区舟形土壌群(東から)
 2. 舟形土壌4(南東から)
- 図版81-1. 舟形土壌8・9(南から)
 2. 舟形土壌8(西から)
 3. 舟形土壌12(北から)
- 図版82-1. 溝1(北から)
 2. 溝2(南東から)
 3. 溝20(北から)
- 図版83-1. 河道2(東から)
 2. 河道3(西から)
 3. 水田3(西から)
- 図版84-1. 掘立柱建物2(南東から)
 2. 掘立柱建物3(南東から)
 3. 溝34(東から)
- 図版85-1. 溝35(南から)
 2. 溝53(南から)
 3. 溝71~74(南から)
- 図版86-1. 溝82・83(南から)
 2. 溝85(南から)
 3. 溝86(南から)
- 図版87 出土遺物①
- 図版88 出土遺物②

第1章 調査に至る経緯と調査体制

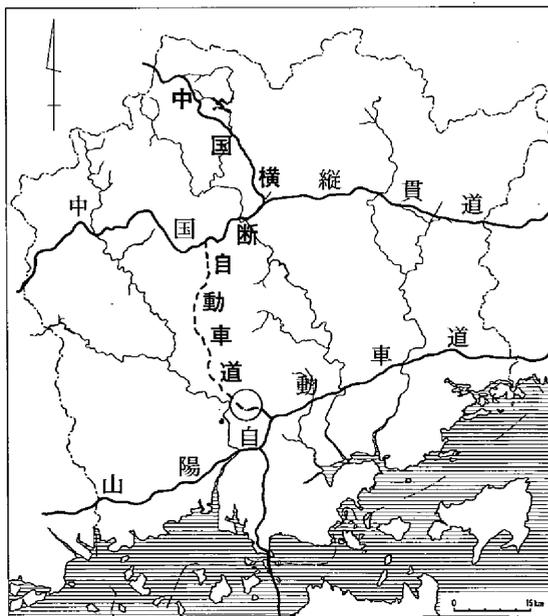
第1節 発掘調査の経緯

岡山市から鳥取県米子市にいたる中国横断自動車道は、すでに米子市から真庭郡を南下し、中国縦貫自動車道落合ジャンクションまで「米子道」として供用を開始されている。北房ジャンクションから岡山総社インターチェンジ間は平成9年3月に開通が予定されている所である。この間の埋蔵文化財の発掘調査は、平成3・4年度に実施した分布調査の結果にもとづいて、平成5年度から6年度にかけて4ヶ所の確認調査、9ヶ所の全面調査を行ってきた。

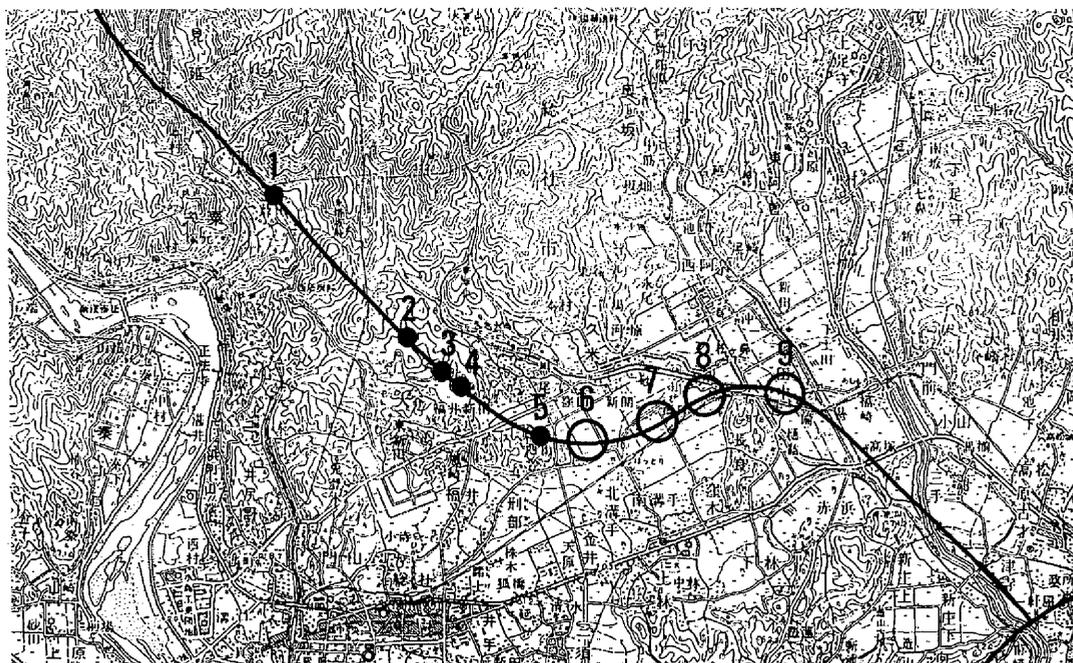
平成5年度は、当初調査員3名で第一次確認調査から実施し、9月からは、賀陽町大村遺跡の調査が終了した6名が加わり、総社市・岡山市平野部に位置する遺跡の確認調査に入り、引き続き総社市金黒池東遺跡・藪田古墳群・中山古墳群・西山1号墳・奥ヶ谷窯跡・服部遺跡・岡山市高松田中遺跡の調査を行ってきた。金黒池東遺跡は、金黒池周辺に広がる湿地植物群落の保存問題が持ちあがり、調査区域の縮小などがあり部分的に二年度にわたって調査を行った。藪田古墳群は一部墓地移転が難行したため、これも翌年度に確認調査後、調査を行うことになった。また藪田3号墳は、道路の側尻にあたるのが判り調査終了後石室内に真砂を入れ被覆した後工事に入っている。中山古墳群は当初古墳1基の予定で調査に入ったが、下層から弥生時代の集落跡が確認され全面調査を行ったが、用地未買収の地点があり二度に分けて調査に入らざるを得なかった。西山古墳も当初は古墳数基の予定であったが、結果的に古墳5基と弥生時代の住居跡等も確認された。奥ヶ谷窯跡は、農道崖面に窯体の一部が露出しており、急傾公団と協議の結果調査を実施した。結果吉備では最も古い須恵器窯であることが判明し、この窯跡も窯体およびその周辺を真砂で被覆を行い工事に入っている。平成6年度は調査員10名で総社市藪田古墳群・金黒池東遺跡・西山古墳・服部遺跡・北溝手遺跡・窪木遺跡・岡山市高松田中遺跡の調査を実施し、平成7年1月にすべての調査区が終了し、中国横断道関係の発掘調査をすべて完了した。

平成7年度は、3名の調査員が報告書作成作業を行った。

第1次調査の概要 先にも少し触れたように中国横断道は総社平野北部を東西に横断し、岡山市高松田中地区でJR吉備線を越え総社インターで接続する。平野部は条里制の地割が全域に認められ、また先年岡山県立大学造成に伴い発掘調査が

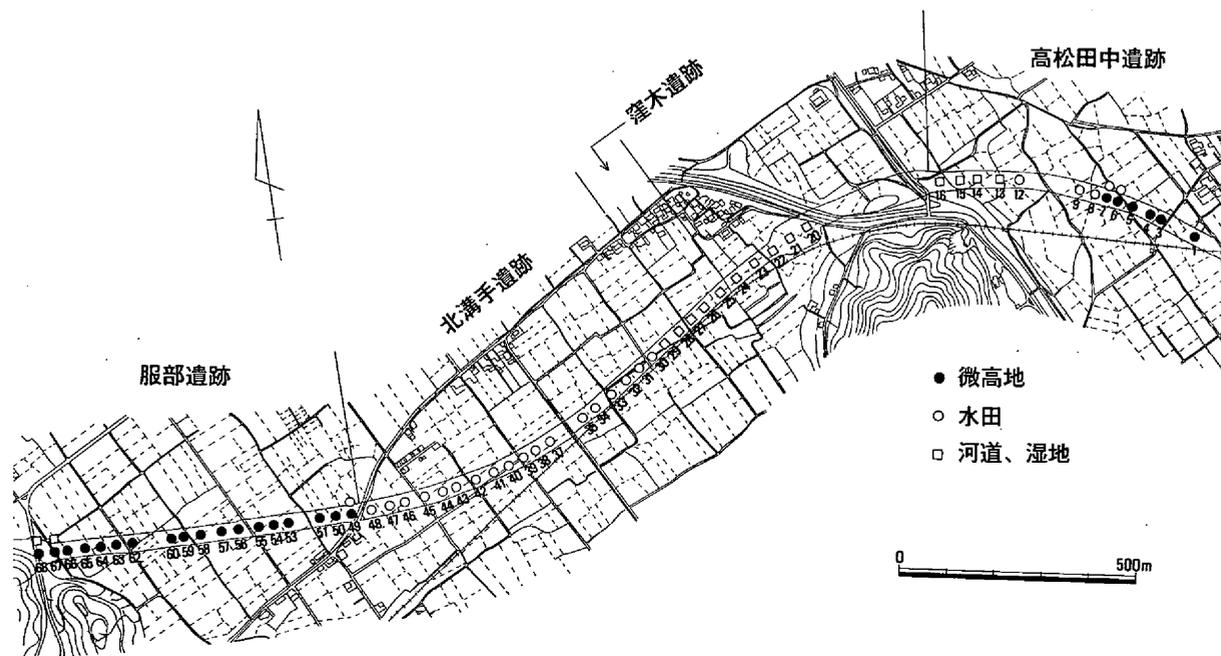


第1図 位置図



- | | | |
|-----------|---------------|-----------|
| 1. 藪田古墳群 | 4. 中山遺跡・中山古墳群 | 7. 北溝手遺跡 |
| 2. 金黒池東遺跡 | 5. 西山遺跡・西山古墳群 | 8. 窪木遺跡 |
| 3. 奥ヶ谷竊跡 | 6. 服部遺跡 | 9. 高松田中遺跡 |

第2図 調査遺跡位置図 (1/75000)



第3図 一次調査位置図 (1/1600)

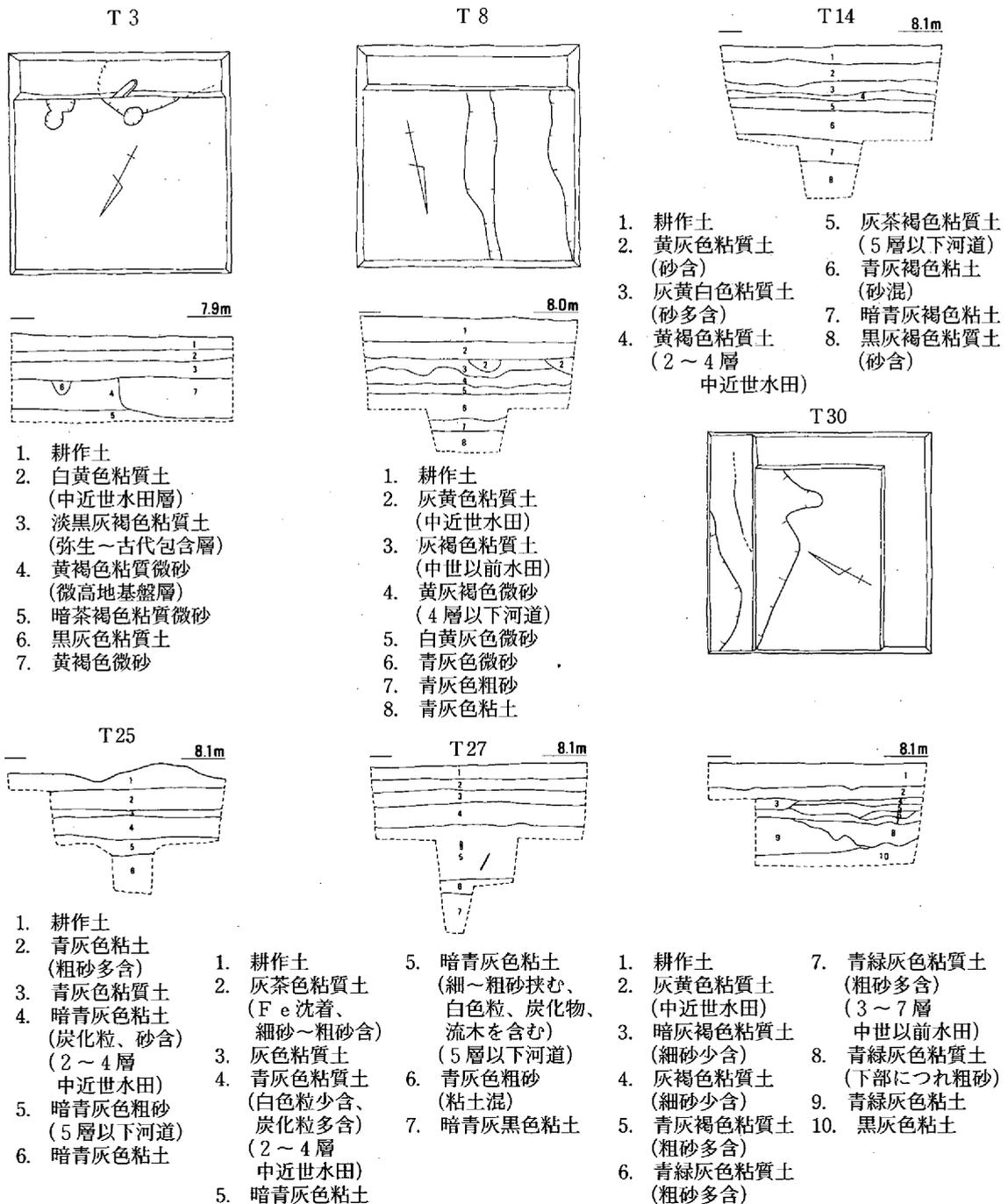
行われた南溝手遺跡・窪木遺跡は、北溝手地区JR吉備線の南側に位置している。

高松田中遺跡 (T-1~15) は当初、高松西部条里跡として捉えていた所で、第1次調査では2×2mのトレンチを13ヶ所入れ、T-1~T-5間は黄褐色粘質土の基盤層上に弥生時代から古代の包

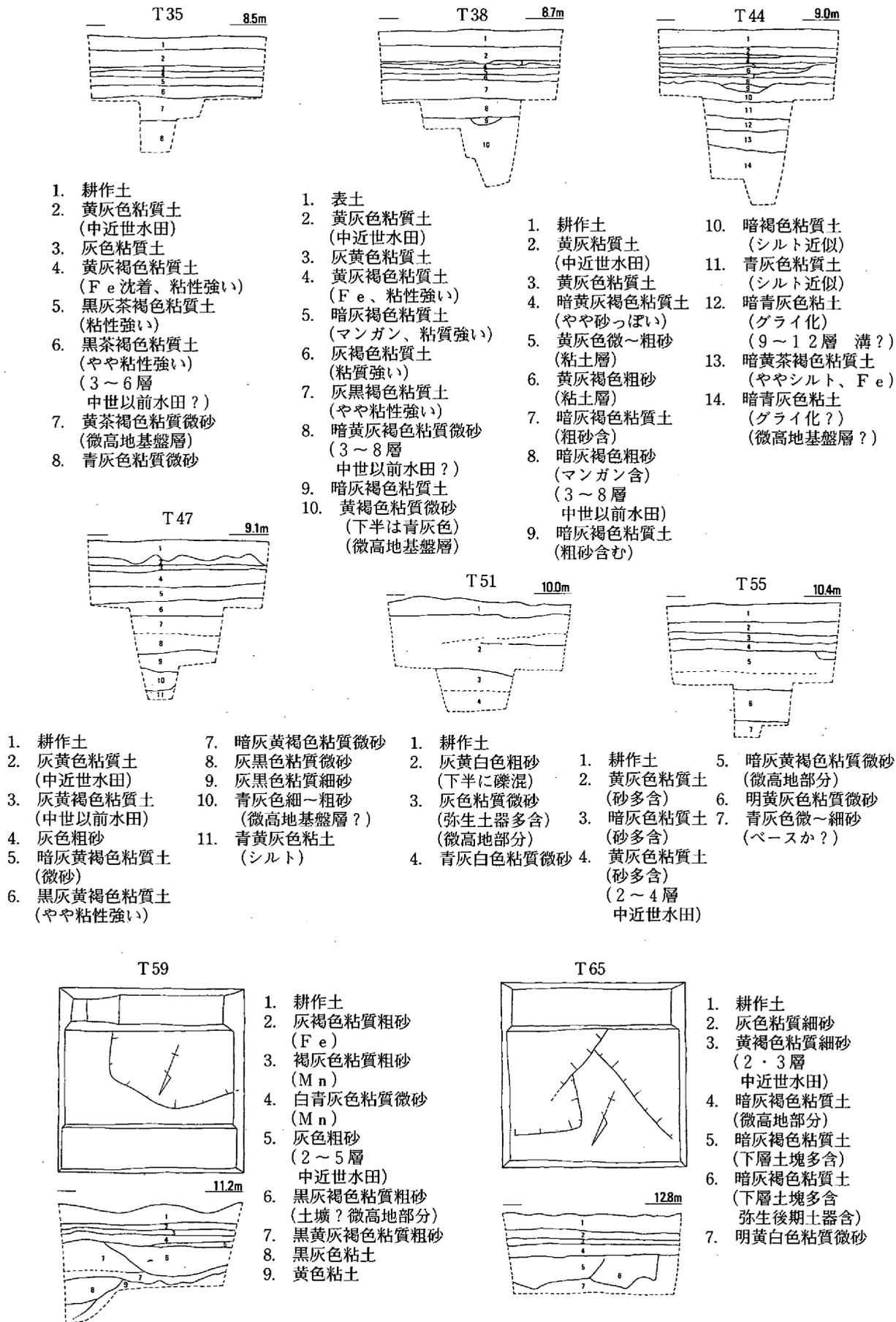
含層がのり、土壌・柱穴・構等が確認された。さらにその上層には中・近世の水田層と考えられ、T-10付近まで範囲の拡がるのが想定された。

T-10以西は中・近世水田層は続くようであったが旧河道あるいは湿地と考えられた。長良山北側の砂川までの間はT-15~20を予定したが、そこはすでに岡山市の塵処理地として数メートルの高さに盛成されており、確認調査は不可能であった。

窪木遺跡・北溝手遺跡内には28ヶ所のトレンチを設定した。長良山北西部には旧河道が1本走り、T-18以西は、県立大学で調査された弥生時代の遺構の続いている可能性が考えられた。T-24では古代前の水田層が、またT-30では微高地の一部が確認されたが、遺構は認められなかった。



第4図 一次調査トレンチ① (1/60)



第5図 一次調査トレンチ② (1/60)

服部遺跡は当初服部条里跡として捉えていた遺跡で、十二ヶ郷用水以西、西山古墳群の裾まで、18ヶ所のトレンチを設定した。T-42~47間は厚い砂礫層があり、旧河道と考えられ、T-48以西は明黄色の基盤層が続き土壌・溝・などの遺構、弥生時代から古代の包含層がみられた。

以上のような結果にかんがみ、高松西部条里跡は小字名から高松田中遺跡、服部条里遺跡は服部遺跡として橋脚部分、および南北側道（窪木遺跡は北側道のみ）の全面調査に入った所である。（伊藤）

調査担当者一覧

遺跡名	所在地	担当者	期間
藪田古墳群	総社市見延字藪田1668ほか	浅倉・三上・小林・石田・大柳 伊藤・中野	9/1~11/16 3/1~3/7 6/23
金黒池東遺跡	総社市福井字金黒谷1562-2ほか	浅倉・三上・小林・竹井・椿・長門 平井・小延・東呂木	5/17~6/4 6/27~7/5
奥ヶ谷窯跡	総社市福井字奥ヶ谷1440-1ほか	田原・東呂木・柴田	11/2~12/8
中山遺跡・ 中山古墳群	総社市福井字奥ヶ谷1551-1ほか	浅倉・三上・竹井・小林・椿・長門	6/7~8/23 11/4~12/8
西山遺跡・ 西山古墳群	総社市総社字小引田2492ほか	竹井・田原・東呂木・柴田・椿 長門・中野・大村・高見	8/17~11/8 12/9~1/21 8/22~11/21
服部遺跡	総社市黒尾字引田2485-1ほか	竹井・椿・長門・浅倉・三上・小林 田原・東呂木・柴田・伊藤・中野 三上・大村・山本・高見・蛭原	4/28~5/13 12/13~3/18 6/3~10/13
北溝手遺跡	総社市北溝手字新田234-1ほか	竹井・椿・長門・浅倉・三上・小林 田原・東呂木・柴田・伊藤・平井 中野・三上・小延・東呂木・大村 山本・高見・蛭原	4/21~4/28 3/11~3/18 4/1~6/24 7/6~1/31
窪木遺跡	総社市窪木字中道91-1ほか	竹井・椿・長門・伊藤・三上・山本 蛭原	4/19~4/21 10/17~12/2
高松田中遺跡	岡山市高松田中295-1ほか	竹井・椿・長門・伊藤・中野・三上 大村・山本・高見・蛭原	4/12~4/19 1/24~3/18 4/1~6/16 11/4~1/20

調査工程表

遺跡名	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	面積
藪田古墳群							—					-													918㎡
金黒池東遺跡			-																						780㎡
奥ヶ谷窯跡											—														450㎡
中山遺跡・ 中山古墳群					—						—														1950㎡
西山遺跡・ 西山古墳群									—																3581㎡
服部遺跡			-									—													9106㎡
北溝手遺跡			-										-												9355㎡
窪木遺跡			-																						2443㎡
高松田中遺跡			-																						7395㎡

第2節 調査および報告書作成の体制

発掘調査・整理・報告書作成については、日本道路公団と岡山県の委託契約に基づき岡山県教育委員会文化課が契約を結び、岡山県古代吉備文化財センターが実施した。

中国横断自動車道（公団岡山）建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

稲田孝司 岡山大学文学部教授	船津昭雄 元久米町立中正小学校長
白石 純 岡山理科大学自然科学研究所	間壁忠彦 倉敷考古館長
土居 徹 元津山市立北小学校長	水内昌康 岡山県文化財保護審議会委員
中田啓司 元岡山県立矢掛高校教諭	松木武彦 岡山大学文学部助教授

発掘調査

1993（平成5）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二
文化課	
課長	渡辺淳平
課長代理	松井新一
課長補佐（埋蔵文化財係長）	高畑知功
主査	時長勇

岡山県古代吉備文化財センター

所長	横山常實
次長	葛原克人
（総務課）	
課長	北原求
課長補佐（総務係長）	小西親男
主査	石井茂

主査	石井善晴
主任	三宅秀吉

（調査課）

第二課課長	伊藤晃
第二係長	浅倉秀昭
文化財保護主査	三上修二
文化財保護主任	竹井孝充
文化財保護主任	小林闊士
文化財保護主任	石田容一
文化財保護主事	椿真治
文化財保護主事	田原順
文化財保護主事	東呂木博
文化財保護主事	大柳浩
文化財保護主事	柴田英樹
主事	長門修

1994（平成6）年度

岡山県教育委員会

教育長	森崎岩之助
教育次長	岸本憲二
文化課	
課長	大場淳
課長代理	松井新一

課長補佐（埋蔵文化財係長）

	高畑知功
主任	若林一憲

岡山県古代吉備文化財センター

所長	河本清
次長	葛原克人

(総務課)
 課長 丸尾洋幸
 課長補佐(総務係長) 杉田卓美
 主査 石井善晴
 主任 三宅秀吉
 (調査課)
 第二課課長 伊藤晃
 課長補佐(第二係長) 平井勝

文化財保護主査 中野雅美
 文化財保護主査 三上修二
 文化財保護主任 小延祥夫
 文化財保護主事 東呂木博
 文化財保護主事 大村俊幸
 文化財保護主事 山本昌彦
 主事 高見生朗
 主事 蛭原啓介

報告書整理

1995(平成7)年度

岡山県教育委員会

教育長 森崎岩之助
 教育次長 黒瀬定生
 文化課
 課長 大場淳
 課長代理 樋本俊二
 参事 葛原克人
 課長補佐(埋蔵文化財係長)
 高畑知功
 主任 若林一憲
 古代吉備文化財センター
 所長 河本清
 次長 高塚恵明

次長(文化課本務)

葛原克人
 (総務課)
 課長 丸尾洋幸
 課長補佐(総務課長) 井戸丈二
 総務主幹 守安邦彦
 主査 石井善晴
 主任 木山伸一
 (調査課)
 第三課課長 柳瀬昭彦
 第三係長 江見正己
 文化財保護主任 小延祥夫
 主事 蛭原啓介

報告書作成協力者

阿部典子 伊原史子 江尻泰幸 川上陽子 川口和美 峠田秀子 松尾和子 三垣佐和子

第2章 地理的・歴史的環境

遺跡の存在する総社平野は、西に高梁川、東に足守川、北に吉備高原南端部、南に都窪丘陵に囲まれた、東西約7.5km南北約2.5kmの狭長な範囲をもち、高梁川以西は小田川下流域に広がる狭隘な平野に、足守川以東は岡山平野の北西端にあたる高松平野にそれぞれ続く。少なくとも古代以前には、高梁川と足守川が繋がっていた、つまり高梁川の一部が東流し足守川に合流していた蓋然性が高いことは、先学の指摘⁽¹⁾や総社市教育委員会による調査等⁽²⁾で明らかである。岡山県下の三大河川の下流域に形成された平野での沖積の過程は、とくに大差はないと思われるが、それぞれ中国山地の山懐に源を發し瀬戸内海に至る傾斜角度でいうと、明らかに高梁川が急であり、それだけに排出される土砂の量や堆積の速度も他を凌駕していたことは想像にかたくない。また、足守川の流路傾斜⁽³⁾を参考にすれば、中流域の血吸川と砂川が合流する岡山市高塚付近は河岸段丘面と沖積面の境にあたり、それぞれの川が大雨ごとに短い距離を一気に土砂を排出した結果、高梁川分流は東流の道が分断され、一部現前川あるいは赤浜付近にクリークが広がる景観を残しながら沖積化が徐々に進行し、今日に至ったと思われる。

総社平野の沖積化に伴い、本格的に人々の進出が始まったのは、いまのところ縄文時代後期に求められる。それ以前の周辺部の足跡は、高梁川本流東岸の低い台地上の宝福寺裏山遺跡⁽⁴⁾や浅尾遺跡⁽⁵⁾、あるいは長良山の南の沖積微高地上に位置する窪木薬師遺跡⁽⁶⁾出土のナイフ形石器などからわずかに捉えられる程度である。その後縄文時代早期では、平野のほぼ中央の真壁遺跡⁽⁷⁾や平野の東寄りの独立丘陵西斜面の長良山遺跡⁽⁸⁾などが確認されているが断片的な資料に限られている。縄文時代後期は、県立大学建設に伴う南溝手遺跡⁽⁹⁾で旧河道が2～3条確認されており、また、晩期にかけての遺物が比較的多く出土している。さらに、微高地の一部には後期中葉から後葉にかけての土壌や土器溜り、火処（焼土面）などの遺構とそれに伴う遺物（土器・石器）も多く確認されるなど、沖積平野が後期中葉には確実に生活の場であったことがうかがえる。なかでも、後期中葉の土器の胎土中からイネのプラント・オパールが検出され、後期後葉の土器片に糊痕が残存すること、モロコシやキビのプラント・オパールも検出されていること、50点を越す数の打製石鋏の出土が知られることなどは、縄文後期のこの地における稲作の導入の可能性あるいは他の植物を含めての農耕栽培の可能性が示唆される。

弥生時代前・中期の遺跡は、今のところ真壁遺跡⁽¹⁰⁾や南溝手遺跡、山津田遺跡⁽¹⁰⁾など数少ないが、調査面積の広い南溝手遺跡では中央穴の脇に2本の柱穴をもついわゆる「松菊里型」の住居を含む比較的多くの遺構が見つかった。また、前期住居のひとつからは、サヌカイト製石器や剥片とともに管玉の未製品や玉砥石、メノウ製錐を含む多くの剥片が出土し、玉作りを兼ねた石器製作場の存在も明らかにされている。弥生時代後期になると、前記の遺跡の拡大とそれらの遺跡に加えて平野部の微高地上あるいは丘陵裾部に点々と集落が確認され、さらに周辺の低丘陵上には古墳の調査に伴って、中期から後期の小集落がいくつか確認される⁽¹¹⁾など、集落規模の拡大とともに人口増による集落の分散化がうかがえる。いっぽう、吉備特有の特殊壺・特殊器台を伴う後期後半の弥生墳丘墓の分布の中心の一つは、足守川中・下流域⁽¹³⁾であり、総社平野を望む丘陵上だけでも総社市柳坪遺跡・宮山墳墓群⁽¹⁴⁾などが知られる。



●墳墓 ■集落 ▲窯跡 □寺院跡 —・—古墳群 (「岡山市遺跡分布地図」および「岡山県遺跡地図」に準じる)

- | | | | |
|---------------|-----------------|---------------|--------------|
| 1. 藪田遺跡 | 25. 新山廃寺 | 49. 足守川加茂遺跡 | 73. 緑山17号墳 |
| 2. 金黒池東遺跡 | 26. 鬼ノ城 | 50. 鯉喰神社弥生墳丘墓 | 74. 三須島田遺跡 |
| 3. 奥ヶ谷遺跡 | 27. 久米10号墳 | 51. 矢部廃寺 | 75. 美野田遺跡 |
| 4. 中山遺跡・中山古墳群 | 28. 随庵廃寺 | 52. 矢部掘越遺跡 | 76. 山津田古墳 |
| 5. 西山遺跡・西山古墳群 | 29. 尾崎2号墳 | 53. 高塚遺跡 | 77. 江崎古墳 |
| 6. 服部遺跡 | 30. 千引かなくろ谷遺跡 | 54. 庚甲山遺跡 | 78. 備中国分寺 |
| 7. 北溝手遺跡 | 31. 千引遺跡 | 55. 鶴亀遺跡 | 79. こうもり塚古墳 |
| 8. 窯木遺跡 | 32. 余町遺跡 | 56. 窪木薬師遺跡 | 80. 備中国分尼寺 |
| 9. 高松田中遺跡 | 33. 足守庄関連遺跡 | 57. 中林古墳 | 81. 柏寺山古墳 |
| 10. 南溝手遺跡 | 34. 南坂遺跡 | 58. 折敷山遺跡 | 82. 金井戸・見延遺跡 |
| 11. 窪木遺跡 | 35. 南坂2号墳 | 59. 折敷山遺跡 | 83. 三須廃寺 |
| 12. 窪木官後遺跡 | 36. 上土田4号墳 | 60. 子造山遺跡 | 84. 天満遺跡 |
| 13. 長良山遺跡 | 37. 上土田1号墳 | 61. 夫婦塚遺跡 | 85. 作山古墳 |
| 14. 深町遺跡 | 38. 延寿寺 | 62. 翁塚古墳 | 86. 清水角遺跡 |
| 15. 栢寺遺跡 | 39. 鶴免遺跡 | 63. 造山古墳 | 87. 真壁遺跡 |
| 16. 備中国府推定地 | 40. 生石神社境内弥生墳丘墓 | 64. 榊山古墳 | 88. 三笠山古墳 |
| 17. 金井戸新田遺跡 | 41. 大崎廃寺 | 65. 千足古墳 | 89. 展望台古墳 |
| 18. 明神遺跡 | 42. 三手遺跡 | 66. 造山古墳付6号墳 | 90. 宮山墳墓群 |
| 19. 西山遺跡群弥生遺跡 | 43. 津寺・三本木遺跡 | 67. 新池大塚古墳 | 91. 三輪廃寺 |
| 20. 尼子山古墳 | 44. 津寺遺跡 | 68. 法 23号墳 | 92. 樋本遺跡 |
| 21. 浅尾遺跡 | 45. 甫崎天神山遺跡 | 69. 龜山塚 | |
| 22. 井山古墳 | 46. 雲山鳥打弥生墳丘墓 | 70. 緑山8号墳 | |
| 23. 宝福寺裏山遺跡 | 47. 惣爪廃寺 | 71. 緑山7号墳 | |
| 24. 泰原廃寺 | 48. 足守川矢部南向遺跡 | 72. 緑山6号墳 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/60,000)

古墳時代の集落は弥生時代からの集落が継続していたと思われるが、いくらか発掘例もふえつつあるものの、平野部では貧弱である。平野部を西および南に望む低丘陵上には、古墳時代を通じて数基から数十基の古墳群が形成されており、前半期には南坂2号墳、尾崎2号墳、久米10号墳、井山古墳などの、全長約30～50m級の前方後円墳や、全長約40mの帆立貝式で竪穴式石室をもつ随庵古墳⁽¹⁵⁾などが存在する。なかでも随庵古墳は、棺内に鏡・刀剣・刀子などの金属製品や多量の玉類・滑石製有孔円板など、棺外に槍・鉾などの武器、短甲・冑などの武具、鉞・鋸・斧・鎌などの工具類、ヤスなどの漁具、鏡・轡・鞍などの馬具、さらに鉄鉗・鉄鎚・鉄床などの鍛造鍛冶具一式と砥石などが副葬され、5世紀後半段階でのこの地域の強力な首長権の一端を垣間見ることができる。ただ、総社平野南側の下林・上林・三須の丘陵の南側に所在する、古備第1・2位の規模を誇る造山・作山両前方後円墳⁽¹⁶⁾に葬られた大首長との間には遠い隔たりがある⁽¹⁷⁾ことも確かであろう。また、平野部を北に望む丘陵上の前半期古墳は、三輪の天望台古墳・三笠山古墳など全長約55・70mの前方後円墳が認められるが、断片的である。大形の前方後円墳である小造山古墳（全長138m）や宿寺山古墳（全長約120m）も近隣に存在するが、総社平野そのものを望む位置にはない。また、前半期には本書掲載の奥ヶ谷窯跡のように、吉備における最古の初期須恵器窯も知られるようになり、そのいちはい導入は当時の吉備と朝鮮半島との密接な関係を如実に示しているといえよう。

後半期の横穴式石室導入以降の古墳は、平野を取り巻く丘陵のほとんどの尾根ごとに群集しているといっても過言ではない。三須丘陵には、大形石室墳だけでもこうもり塚古墳を筆頭にして江崎古墳⁽¹⁸⁾、緑山4・7・8号墳⁽²⁰⁾、亀山塚古墳⁽²¹⁾、鳶尾塚古墳⁽²²⁾など9基にのぼる古墳の存在が知られている。これらの古墳を含めて、横穴式石室墳の大半は盗掘に遭っており、副葬品からの追究を困難にしているが、断片的な資料とはいえ千引古墳群⁽²³⁾・すりばち池古墳群⁽²⁴⁾などに鉄滓の出土も知られ、6世紀後半から7世紀前半にかけての時期の、千引かなぐる谷製鉄遺跡あるいは鍛冶集団が居住した窪木薬師遺跡などの存在は、吉備の中枢部における鉄の掌握の一端を示すものであろう。

総社平野の飛鳥時代の遺構はほとんどわかっていない。周辺では山手村の末の奥窯跡群、高梁川西岸の秦原廃寺⁽²⁵⁾が知られるに過ぎない。白鳳時代になると、加夜評で大崎廃寺⁽²⁶⁾・栢寺廃寺⁽²⁷⁾、窪屋評で三須廃寺⁽²⁸⁾、津宇で惣爪廃寺・日畑廃寺⁽²⁹⁾などが建立され、高梁川以西の下道評の岡田廃寺・箭田廃寺・八高廃寺⁽³⁰⁾などとともに、外区を鋸歯文で飾る重弁のいわゆる備中式軒丸瓦が盛興する。また、この時期には総社平野はいうに及ばず、児島や讃岐の山々も一望できる標高400mの山頂に鬼ノ城が築かれ、律令前夜には他国と緊張関係にあったことが想像される。奈良時代には平野のほぼ中央に方6～8町の備中国府が想定され、市教育委員会の確認調査も行われている⁽²⁾が、確定的な資料は得られていない。また、三須丘陵の南裾を東西に通じる山陽道に面して、備中国分寺・同尼寺⁽³¹⁾があり、律令体制のなかにあっても備中の中枢とされる地域であったと思われるが、今のところ寺以外の集落の存在は真壁遺跡や三須畠田遺跡⁽³²⁾、南溝手遺跡、金井戸・見延遺跡⁽³³⁾など断片的である。

平安時代から中世にかけても、鍛冶関連遺構が検出された樋本遺跡⁽³⁴⁾が注目されるくらいで、平野部の遺構密度は奈良時代と大差なく、南溝手遺跡などで確認されている畝状遺構（畑）や「備中国賀夜郡服部郷図」に見られるように、条里で整然と区画された畑・水田域が広がるなかの、所々に掘立柱建物集落が点々と展開する状況であったと思われる。

（江見）

註

- (1) 葛原克人「吉備豪族の誕生」『歴史手帳』4巻6号 名著出版 1976年
- (2) とくに、総社平野のほぼ中央部を広範囲に調査した備中国府跡の関連確認調査の成果で、古地形の復元が成されている。
「備中国府跡 緊急確認調査」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』7 総社市教育委員会 1989年
- (3) 『足守庄(足守幼稚園) 関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1994年 第2図(根木修氏作図)
- (4) 間壁葎子「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館集報』第2号 倉敷考古館 1967年
- (5) 「浅尾遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (6) 「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 岡山県教育委員会 1983年
- (7) 「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (8) 「長良遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (9) 「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年
「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996年
- (10) 「山津田遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984年
- (11) 「美野田遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年、註2文献
- (12) 「西山遺跡群弥生遺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (13) 宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』(上) 山陽新聞社 1992年
- (14) 「柳坪遺跡」・「宮山墳墓群」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (15) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁葎子『総社市随庵古墳』 総社市教育委員会 1965年
- (16) 「造山古墳」・「作山古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県 1986年
- (17) 葛原克人「古墳時代前期一備中地域の古墳一」『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987年
- (18) 「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 岡山県教育委員会 1979年
- (19) 「江崎古墳」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (20) 「緑山古墳群」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (21) 『三須丘陵遺跡分布調査報告』 岡山大学考古学研究所 1976年
- (22) 「緑山17号墳」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』1 総社市教育委員会 1984年
- (23) 「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 総社市教育委員会 1991年
- (24) 「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13 総社市教育委員会 1993年
- (25) 「秦原廃寺」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (26) 『飛鳥白鳳の古瓦』 奈良国立博物館 1982年 縮刷版
- (27) 「栢寺廃寺緊急発掘調査報告書」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』34 岡山県教育委員会 1979年
- (28) 「三須廃寺」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (29) 永山卯三郎編『吉備郡史』上巻 名著出版 1971年、註26に同じ
- (30) 『鬼ノ城』 鬼ノ城学術調査委員会 1980年
- (31) 「備中国分僧寺跡」「備中国分尼寺跡」『総社市史』考古資料編 総社市教育委員会 1987年
- (32) 「三須・畠田遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2 1993年
- (33) 1996年度岡山県古代吉備文化財センターの調査結果による。
- (34) 「樋本遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』65 岡山県教育委員会 1987年

第3章 藪田古墳群

第1節 位置と経過

1. 位置

総社市身延に所在する藪田古墳群は7基で構成されている⁽¹⁾。総社市身延は総社市街地のある総社平野から高梁川を2km上流に遡った支流槇谷川の川岸にある。藪田は身延の中でも南の端に位置する。槇谷川は賀陽町のある吉備高原に源を発し、景勝地豪溪を下り、岡山県内三大河川の一つ高梁川に合流する。藪田古墳群の所在する地形は槇谷川左岸に流れこむ形で形成された崖積扇状地である。古墳群は扇状地扇央部から先端部の広い範囲に散在している。藪田集落は扇状地先端部すなわち槇谷川に沿って位置している。家並の他は段々畑で果樹園として開発されている。中国横断道はこの果樹園になっている扇状地扇央部に当たる位置を北西から南東に貫通する現在の総社市道に重複するよう設計された。この市道は近世では塔坂峠越えの備中松山への街道として利用されてきた。塔坂峠は中国横断道はトンネルで抜けることになっている。トンネルを抜けるとそこは金黒池東遺跡である。

2. 経過

平成5年度、岡山県教育委員会文化課から岡山県古代吉備文化財センターあてに日本道路公団の中国横断自動車道建設予定に伴う発掘調査受託事業の実施を通知された。この時点ではまだ用地買収交渉中のため、4月から8月までの間に予定の3名の調査員は中国横断自動車道建設に伴う他の遺跡の発掘調査を行っていた。例えば有漢町有漢畦地遺跡・同大鳴古墳・賀陽町岨谷遺跡・総社市福井金黒池東遺跡・同中山6・7号墳・同服部遺跡・同北溝手遺跡・同窪木遺跡・岡山市高松田中遺跡などの一次調査および全面調査である。その間日本道路公団・文化課・古代吉備文化財センターの3者で調査実施における協議を公団事務所及び藪田古墳群現地において開催している。そして9月、藪田古墳群の調査を開始した。最初3号墳から着手し、続けて4号墳の調査を行った。3号墳の調査では廃土の量が多く、また周溝の一部が現市道に掛かっていること、そしてまた側道敷部分にあって現地保存が可能であるなどの判断から墳丘・石室の解体は行わなかった。4号墳の調査では石室の有無を確認することから始まった。つまり発掘前は石垣に使用されている2tほどの大石が横穴式石室の奥壁に使用されていた石を転用したものの可能性があると考えていた。しかし調査が進行して行くうちに、横穴式石室の東側壁であることが判明した。さらに、ここでは石室の下層から古墳時代の堅穴住居が検出された。一般的に堅穴住居は単独で存在することは少ない。したがって周辺部についても、遺跡の確認調査を行う必要が生じた。上記3者で協議の結果、引き続きトレンチを30ヶ所あまりを設定し、用地交渉の成立している部分から発掘を始めた。確認調査は途中事情があつて中断したが、この時点では遺跡のひろがりや7号墳も検出できなかった。7号墳の確認調査は平成6年度になって再開した。しかし、7号墳とされていたものは確認することができなかった。



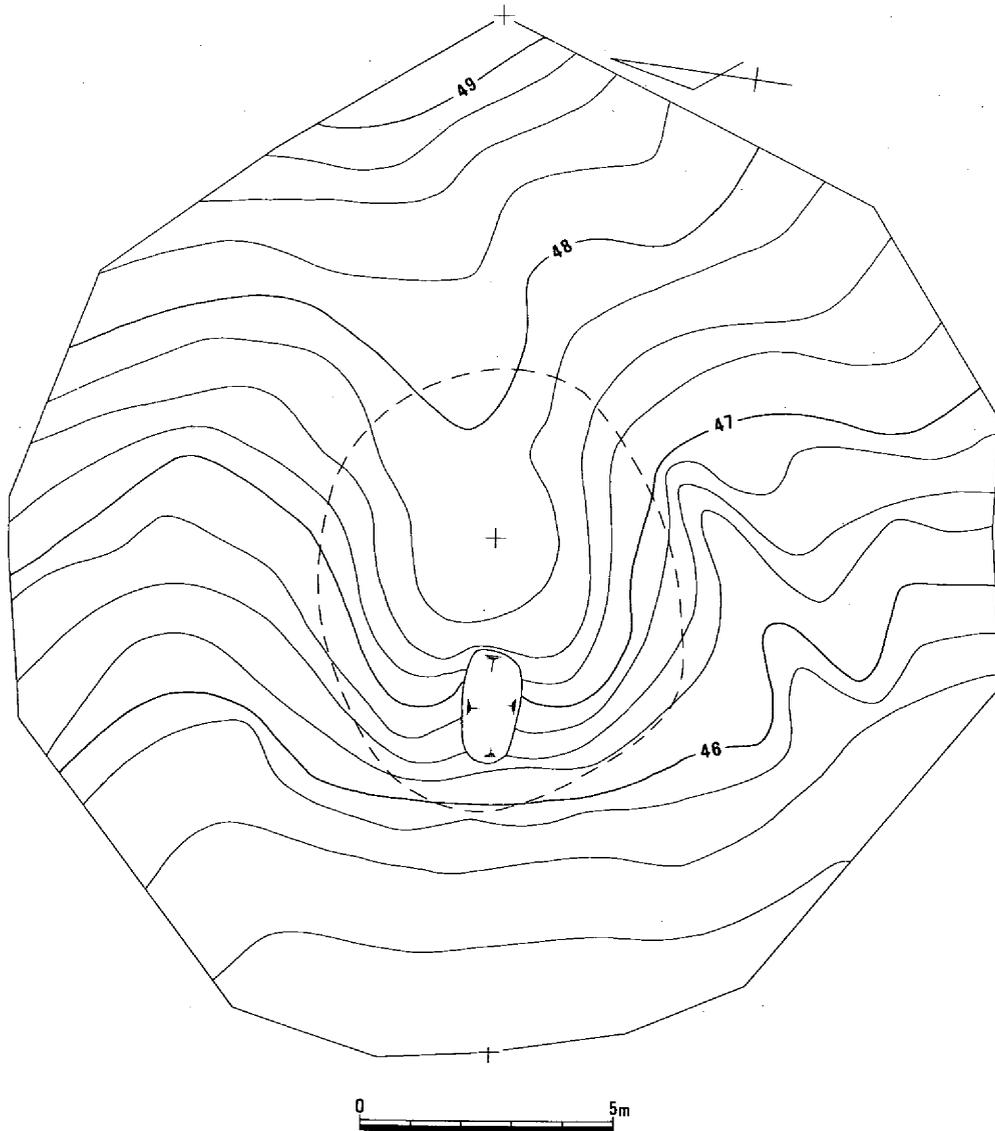
第1図 調査区位置図 (1/4000)

第2節 調査の概要

1. 藪田3号墳

(1) 調査前の状況 (第2図、図版1)

藪田3号墳発掘調査前は槇などの雑木林の中にシイタケの栽培がほぼ済んだホダ木の廃材が乱雑に立てかけられた状態であった。この状態ではすぐに発掘できないため、公団にシイタケのホダ木の移動と雑木の伐開及び搬出をお願いした。発掘範囲は墳丘が認識できる範囲と周溝が想定される範囲を含む直径20mの面積を設定した。片付けが終了して、地表面が現れた後、地形測量したのが第2図である。墳丘の大きさが直径8mの円墳で、天井石が3枚現存する大型の横穴式石室を持つ。また石室内はほとんど乱掘されているようであった。



第2図 3号墳調査前地形測量図 (1/150)

(2) 墳丘と周溝 (第3・4図、図版1・2)

墳丘

発掘調査の結果楕円形の墳丘を持つ事が判明した。東西は9m、南北は8mを測る。また現存の高さ2mを測る。後で述べるように横穴式石室が西に開口し、東西に長く伸びるため、これを完全に覆い隠すためには地形の高い方の周溝を掘削した土石を利用するのが最も合理的である。このため東西に長い楕円形の墳丘が出来上がったものであろう。この古墳は扇状地地形の中でもその後の開析谷の侵入により残丘として取り残された細い尾根の先端を利用して造成されているようである。

墳丘を断ち割った断面図が第3図で、その位置図が第4図である。第3図上段は石室の長軸に直交する断面で、盛り土の状況が良く現れている。同下段は石室奥壁から後ろの盛り土の状況と貼り石の状況が良く見て取れる図面である。

周溝

墳丘後面(東側)から側面(南北)にかけて周溝が検出できた。第3図下段には周溝の埋まった状況が良好に見て取れる。後面は後世の土石流で約1.5mも埋もれており、しかも人力では動かせないような大石も含んでいることから全掘を諦めトレンチによって幅と深さを確認した。墳端から約2mまで平坦になり、そこから徐々に掛け上がる。周溝の幅としては5mと言うところであろうか。側面は現在の開析谷と重複しているため幅等は不明確である。

(3) 外護列石・貼り石 (第4図、図版2)

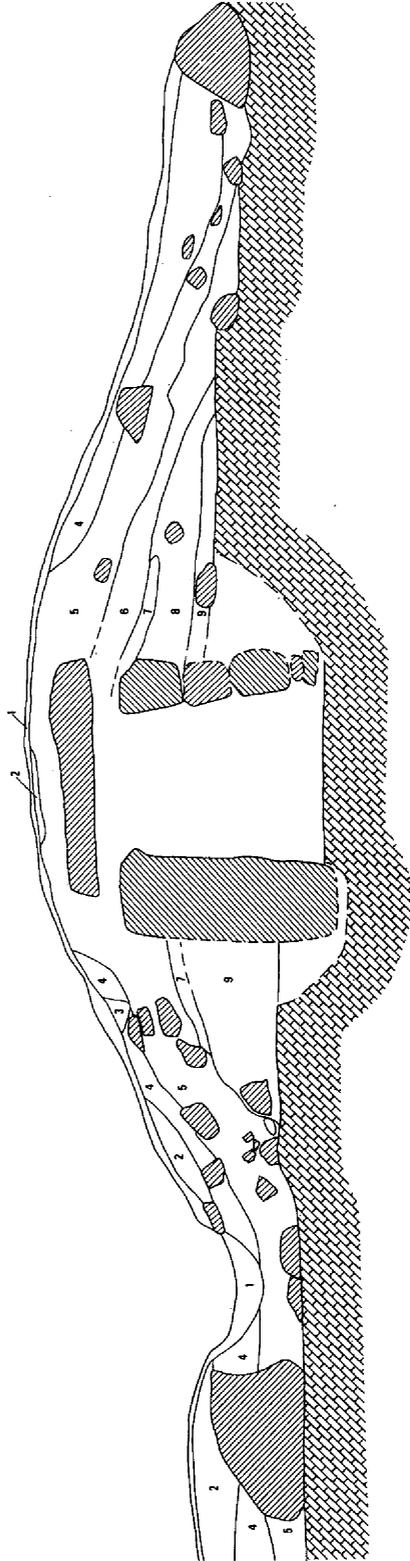
外護列石

墳丘前面(西側)すなわち横穴式石室開口部外面左右と墳丘両側面のあたりまで一辺20cm程度の比較的小型の角礫を使用して外護列石を築造している。墳丘基底部に当たる第一段目の列石は海拔45.5m前後の高さにあり、第二段目の列石は海拔46.0mの位置にある。石室に向かって見ると左右の列石は長さ3mを測る。平面的に見ると第二段目は第一段目の50cm程奥まって並べている。また右側の第二段目は石を縦使いしている。墳丘側面にはさらに上にもう一段の石列が観察できる。第三段目の列石の海拔は47.0mにある。したがってこの古墳の墳丘はもともと3段以上4段の外護列石が付けられていた可能性がある。石室入口を特に豪華に見せ、また側面から見てもある程度華麗に見せる効果をねらったものであろう。使用している小型の角礫は周辺で採集できる流紋岩質溶岩である。このような円墳に外護列石が構築されている例はこの近くでは清音村峠古墳群⁽²⁾がある。また方墳に外護列石が構築されている例は山陽自動車道建設に伴う発掘調査で報告されている倉敷市二子の二子14号墳がある⁽³⁾。

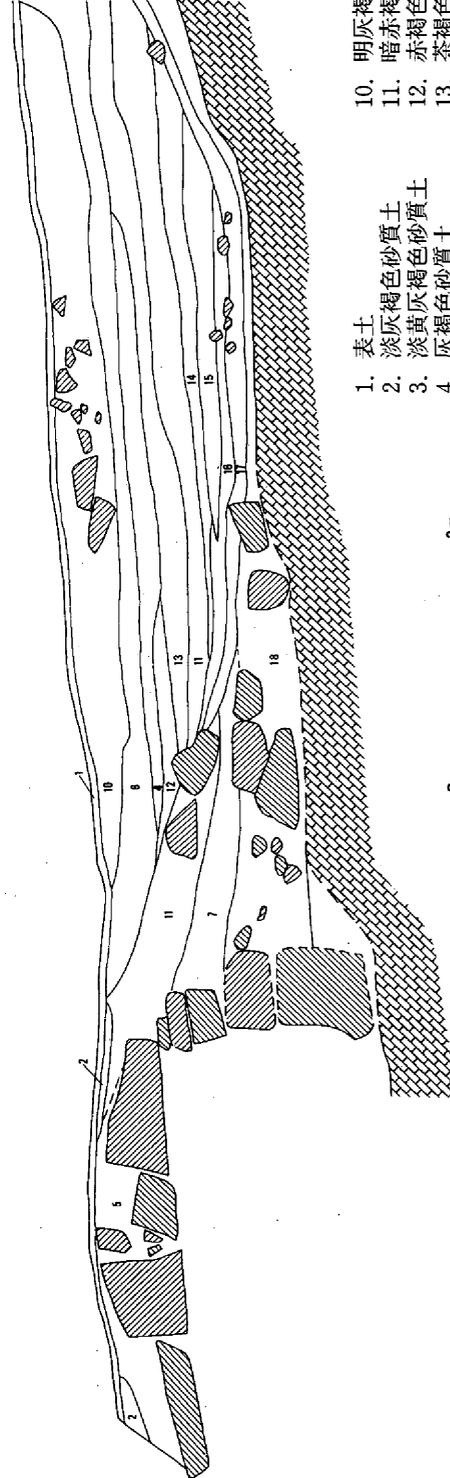
貼り石

墳丘後面である北東部は一辺50cmほどの板状の石を数枚使って貼り石を行っている。墳丘後面の南東部は一辺40cm以下の角礫を数枚貼り付けている。これらの貼り石は墳丘基底部から少し上方に登ったところ、海拔にして46.5m以上に位置している。発掘当初は周囲の角礫を土と混ぜた状態で墳丘に何ら規則性をもたないまま盛り土したものであるという認識であったが、精査の結果、貼り石していることが判明した。墳丘後面から古墳を見る事も築造当初から意識していたようである。使用している角礫は周辺で採集できる花崗岩で、石室に使用している岩石と同じものである。

48.8m



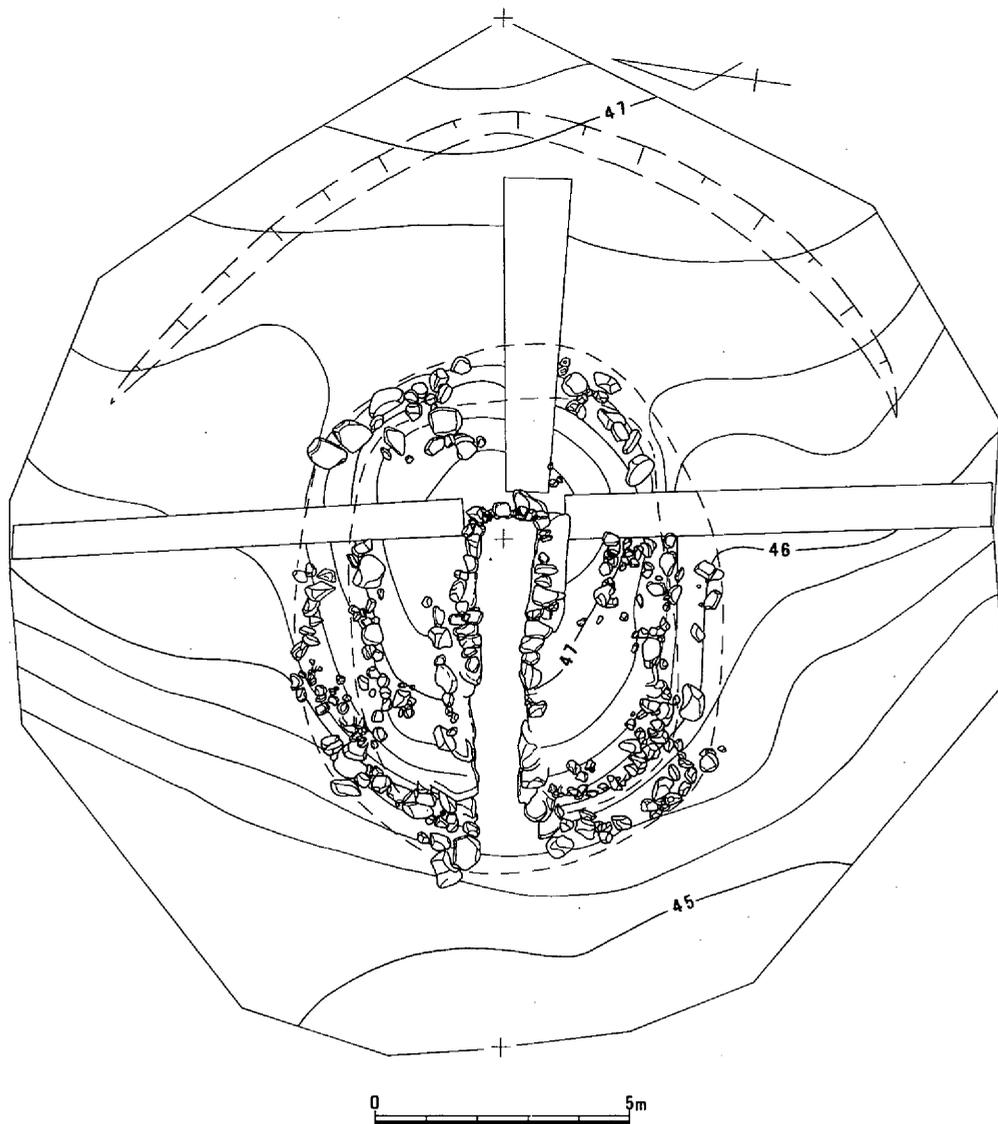
48.8m



- | | |
|-------------|-------------|
| 1. 表土 | 10. 明灰褐色砂質土 |
| 2. 淡黄灰褐色砂質土 | 11. 暗赤褐色砂質土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 12. 赤褐色砂質土 |
| 4. 暗黄灰褐色砂質土 | 13. 茶褐色砂質土 |
| 5. 明黄灰褐色砂質土 | 14. 黒褐色砂質土 |
| 6. 黄灰褐色砂質土 | 15. 明黄褐色砂質土 |
| 7. 黄褐色砂質土 | 16. 暗黄褐色砂質土 |
| 8. 黄褐色砂質土 | 17. 暗灰褐色砂質土 |
| 9. 灰黄褐色砂質土 | |



第3図 3号墳墳丘断面図 (1/60)



第4図 3号墳調査後墳丘測量図 (1/150)

(4) 横穴式石室 (第5・6図、図版3)

天井石

天井石は奥から4枚が原位置に現存しており、その上には盛り土が20cm以上覆っていた。盛り土を完全に除去してみると、第5図の様な状況になった。一番東の天井石は奥壁の上に乗らず、左右の側壁に支えられている。長さ215cm、幅100cm、厚さ60cmを測る。この石が天井石の中では最大で前方に行くほど少しずつ小さくなっている。この4枚の前1枚は片側が石室内に落下し、その前は石室内に落下し、あと1枚は墳丘南西前方にずり落ちていた。つまり全部で7枚使用されていたものと考えられる。7枚それぞれ形や大きさが様々である。板状のものや柱状のものがある。この隙間は拳大の小石で詰めて、石室内への土の侵入を防ぐ構造となっている。石室内調査の安全を考えてこれらの天井石はクレーンで除去した。天井石の石材はこの付近で採集できる花崗岩である。また隙間の石は花崗岩と周辺で採集できる流紋岩質溶岩である。

石室

明瞭ではないが第6図中央の石室平面図を見ると、両袖に近い片袖式と言える。奥壁から開口部に向けて左片袖というべきであろう。室の規模は玄室は内法で測ると長さ420cm、最大幅130cm、推定床面（後でもふれるが、大きく後世の攪乱を受けている。）から天井石までの高さ180cmである。羨道は長さ280cm、最大幅100cm、推定床面から天井石までの高さは天井石が落下あるいは墳丘にずり落とされているため測ることができない。石室全長は700cmを測る。

奥壁

三段の大石とその上に天井石を支える小石で構成している。基礎の石は幅150cm、高さ80cm、厚さ推定60cmの隅丸角石である。二段目は2個の幅70cm、高さ40cm、厚さ推定60cmの隅丸角石、三段目は1個で幅110cmの柱状角石、その上に一辺20cm以下の角礫が乗る。

側壁

南側壁の一番奥の石は畳三帖分もある。本石室中最大の大石である。幅200cm、高さ200cm、厚さ70cmを測る。側壁の方および上段になるほど石は小さくしている。左側壁の第4番目の石は縦に使っている。これが玄門を意識したものである。

床面

玄室は近世以降に大攪乱を受けており床面を30cm以上岩盤が出るまで掘り下げられていた。第6図の敷石は古墳時代の棺台のようにも見えるが、石の下から近世の遺物が出土したことから近世以降の可能性がある。

閉塞石

天井石が落下していた部分の下層には閉塞石が残存していた。第7図では羨道部のほぼ中央部に左側壁に接して図示しているが、実は右側壁の方まで完全に残っていたもので、調査上半分を取り除いたものである。一辺90cm前後の大石から一辺20cm前後の小石まで使用して断面山形に積み上げていた。古墳時代遺物が石の下層から出土しないことからこの時代のものと考えられる。

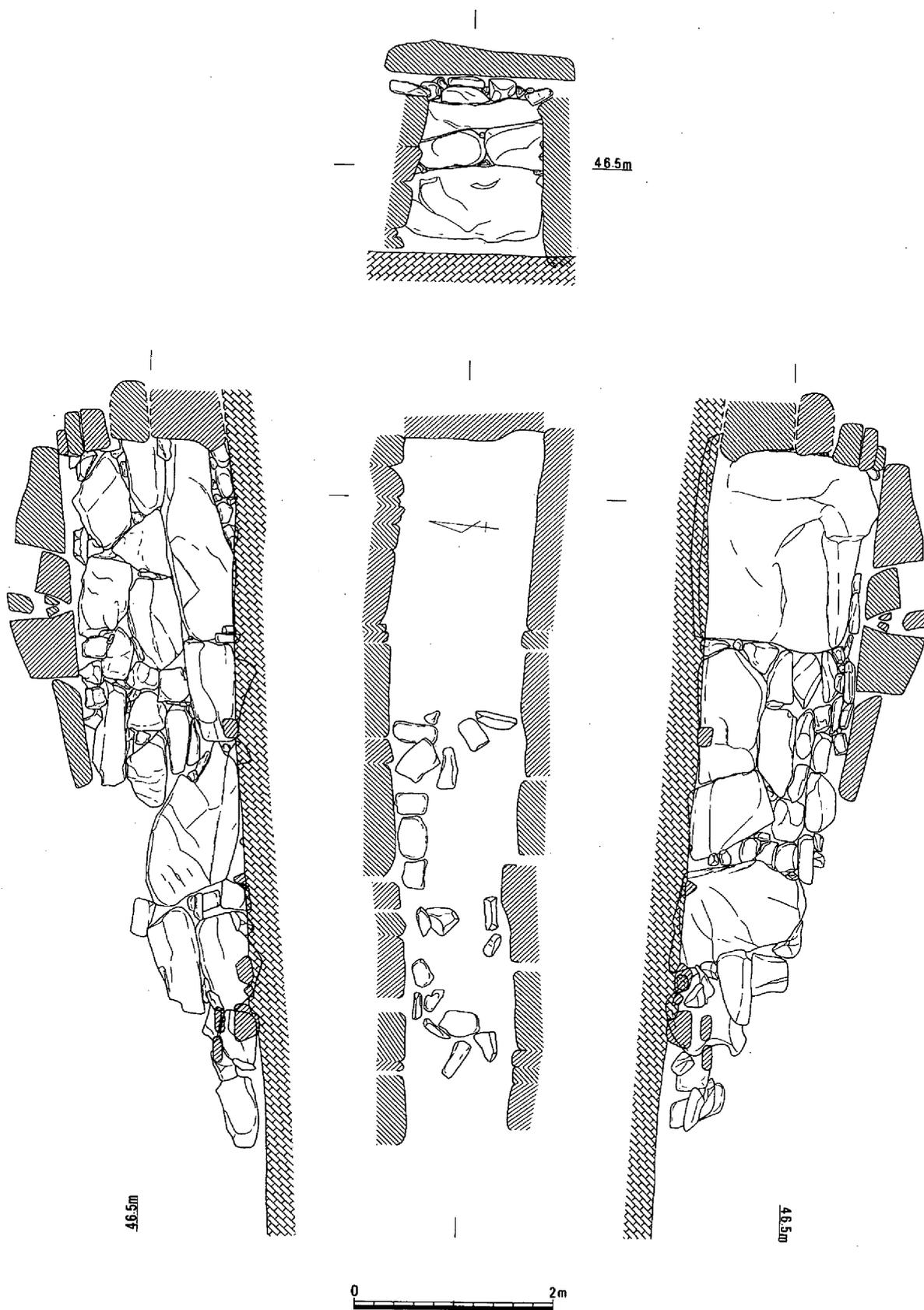
(5) 遺物出土状況・出土遺物 (第7・8図、図版3・6)

遺物出土状況

遺物は石室内上層から近世陶磁器・近世土器、中層で中世土器、下層から古墳時代の土師器・須恵



第5図 3号墳天井石検出状況 (1/60)



第6図 3号墳石室 (1/60)

器が出土している。そして石室外の墳端と南にやや離れたすなわち用地境で須恵器・土師器が見つかった。鉄器はすべて石室内で出土している。

須恵器

1～6は蓋杯と考えたい。天井部はヘラケズリで、口縁端部は丸く納める。体部と口縁部の境に稜線を持つものと持たないものがある。7は扁平なつまみが付く蓋杯で、口縁内面にかえりが付く。8は扁平な宝珠つまみが付く蓋杯で、7同様口縁内面にかえりが付く。閉塞石の外で出土した。9・10は杯身かあるいは蓋杯か迷うところである。11・12は受け部と立ち上がり部がほとんど同じ大きさの杯身である。9・10の蓋としても良いし、1～6の杯身考えても良い。13は小型高杯。14は大型高杯と言うべきかあるいは台付き皿か。15は平瓶で、ほぼ完形品である。16は細首壺で、口縁部を欠く。17は長頸壺で、肩部に沈線と刺突文を有す。19・20は石室外から出土した高杯である。13・14・19・22の高杯の脚端部はほぼ同じ癖を持つが、杯部の形が後者の方が古い様である。21は墳丘裾部から出した焼成不良な土器である。

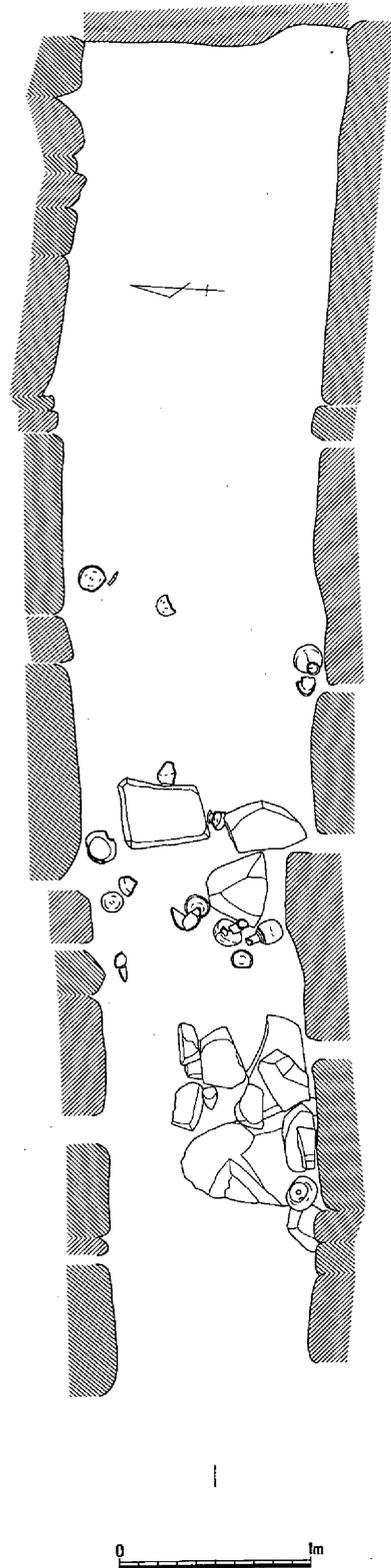
土師器

18は内湾する口縁を持つ鉢で、口径15cm、器高7cmを測る。銅碗を模したものであろう。

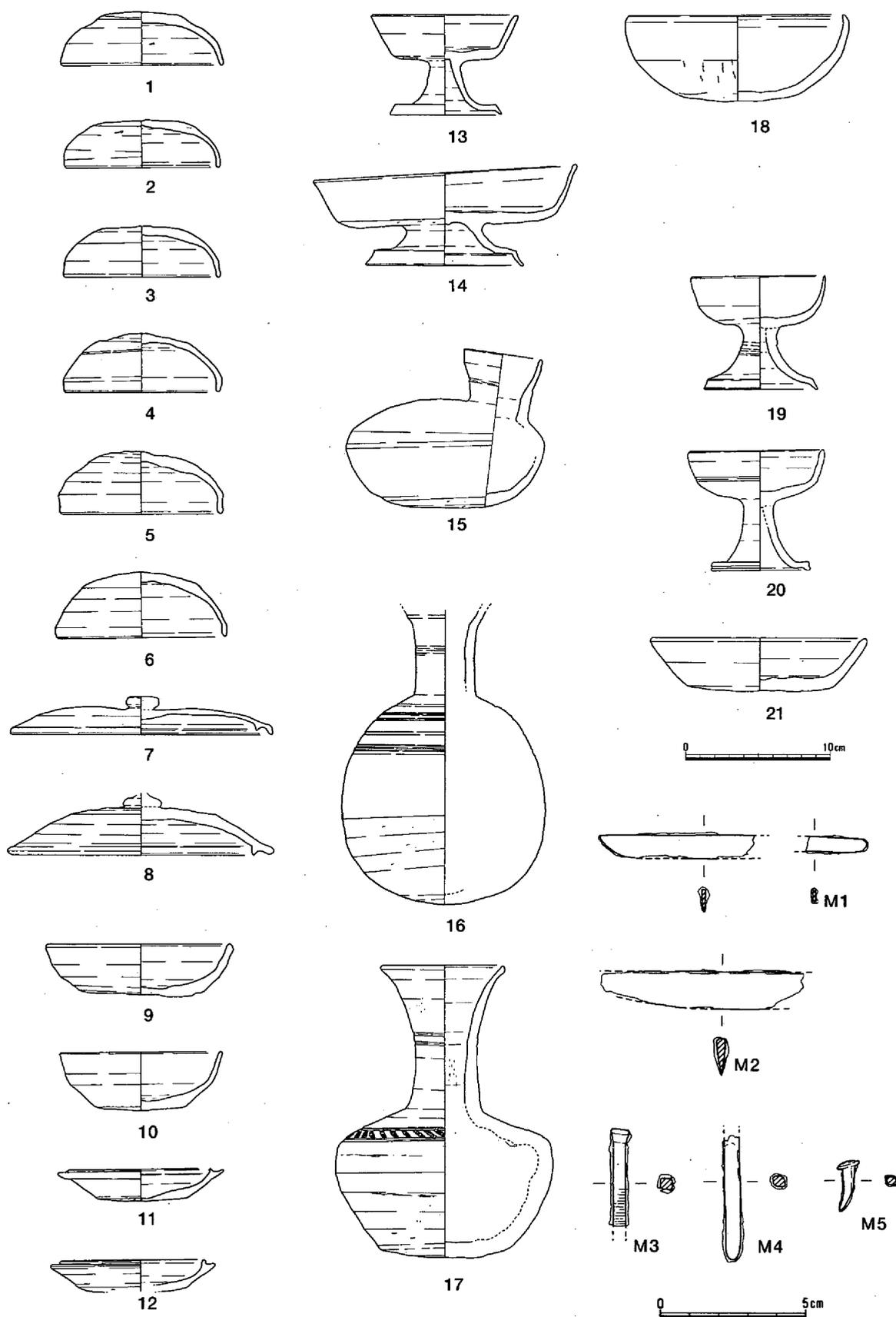
鉄器

5点の鉄器が出土している。

M1は途中が欠損しているが同一個体と考えられる小型の刀子である。復元した全長90mm、刃部の最大幅8mm、同最大厚2mm、茎部残存長20mm、同最大厚1mmを測る。M2は中型の刀子であろうか。切っ先も茎部も欠損している。刃部の最大幅14mm、残存長70mm、同最大厚3mmを測る。M3は棺釘である。頭部は折りまげられている。断面は一辺5mmの方形を呈する。下方には柾目の木質が付着している。残存長は35mmを測る。M4も棺釘であろう。先端部であって頭部が欠損している。残存長は45mmを測る。M3と同一個体の可能性も否定できない。M5は釘ではあるが、棺釘ではないように思われる。この長さで完形品である。全長18mmを測る。



第7図 3号墳遺物出土状況
(1/40)

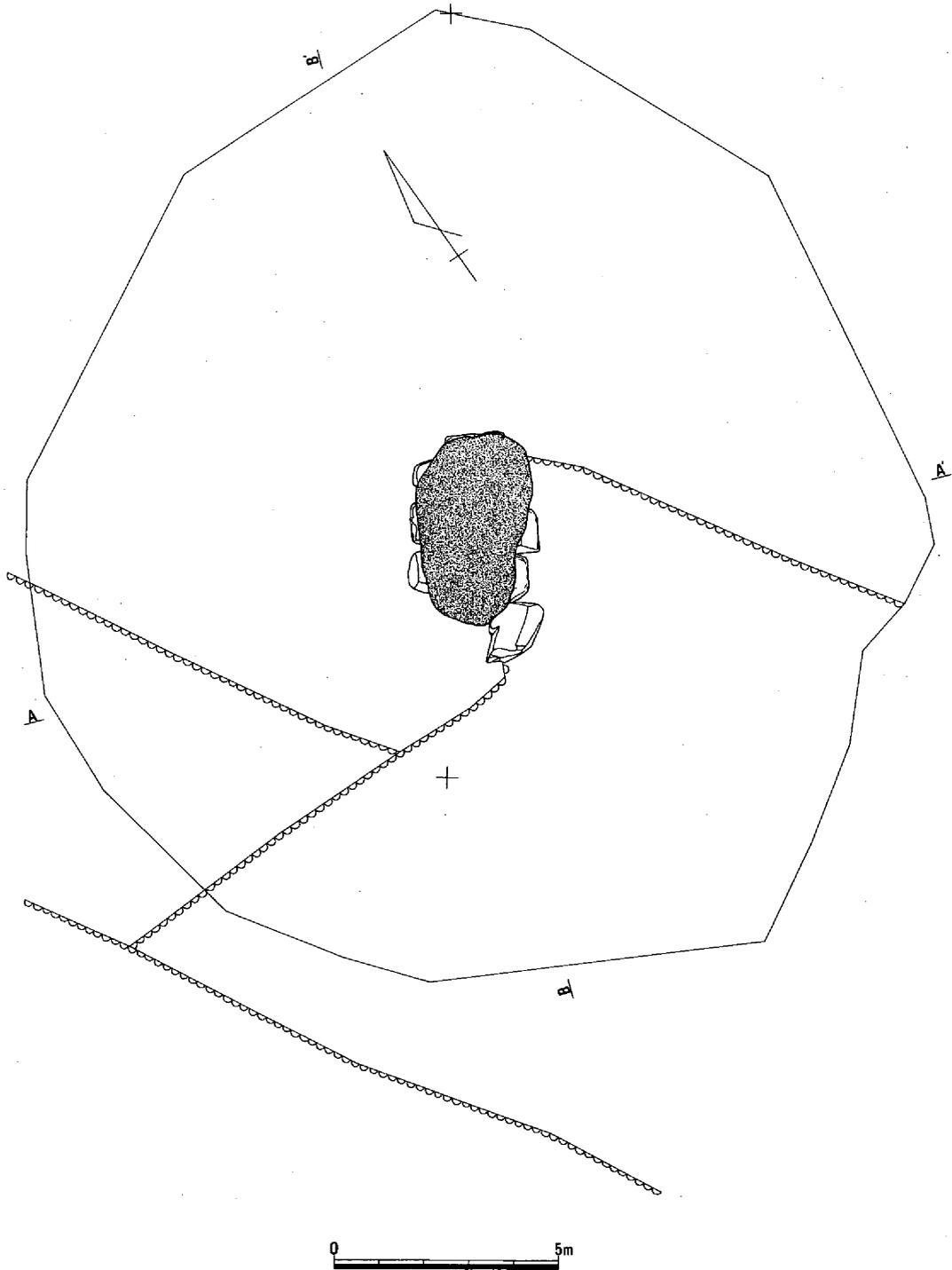


第8図 3号墳出土遺物 (1/4・1/2)

2. 藪田4号墳

(1) 調査前の状況 (第9・10図、図版4)

藪田4号墳の調査前の状況は低いほうに石垣を築造した段々畑であった。古墳と思しき地形は全く見られず、ただ石垣に使用している石がこの部分が特に大きいと言う程度であった。しかも最近畑を耕して居らず、セイタカアワダチソウ・ヤマゴボウ・クズ・サルトリイバラ・ヨモギなどの雑草が背

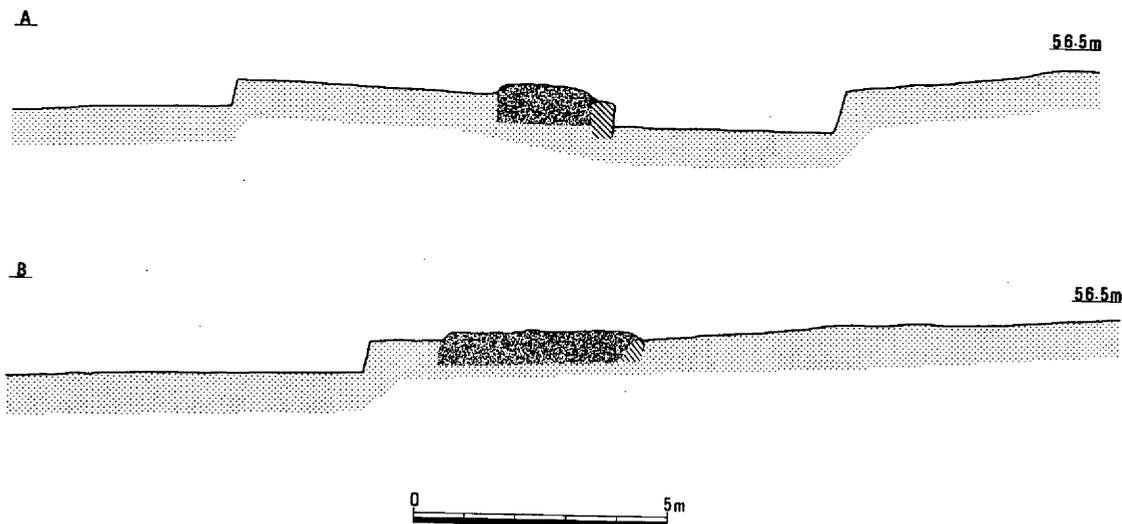


第9図 4号墳調査前地形測量図 (1/150)

丈よりも高く繁茂しており、この石垣にも近寄る事さえできない状況であった。この古墳を発見した当時の遺跡カードには写真が添付されているが、この時の方が、良く大石が現れている。そして、自信を持って4号墳と命名し、奥壁の可能性が高いとしている。

そこで、まず草刈り作業から始めた。この石垣を中心として半径10mの円を描き、その中の草刈りを行い、土捨て場としてその範囲の外を設定した。半径10mを決めたのは大石が奥壁と考えて、古墳の周溝の外まで調査することを仮定したからである。

草刈りの作業終了後、半径10mの円形範囲の中に東西と南北に土層確認用のトレンチを設定しつつ、石周辺の表土を掘削していった。



第10図 4号墳墳丘断面図 (1/150)

(2) 墳丘と周溝 (第11・12図、図版4)

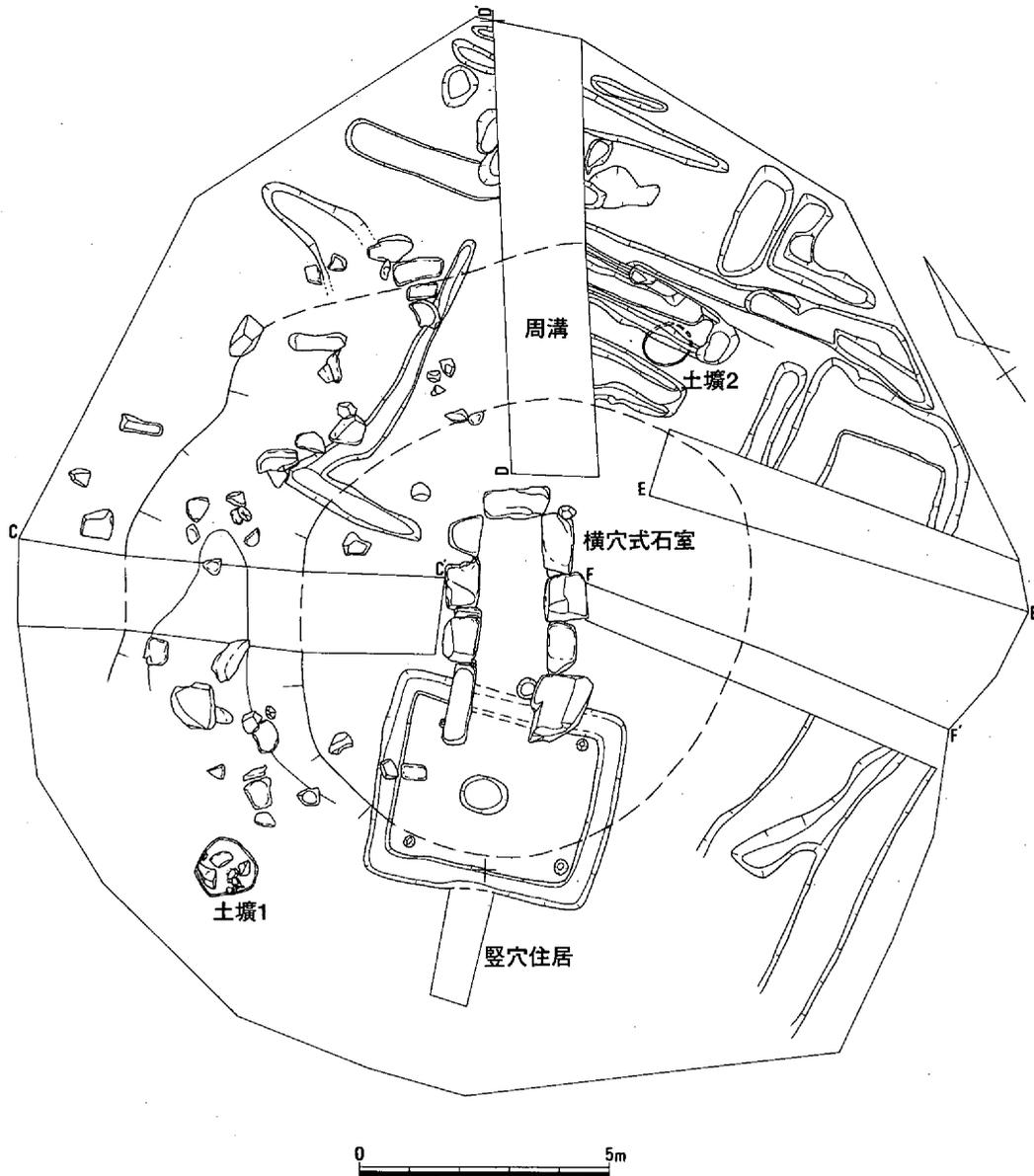
墳丘

発掘当初から古墳であることが判然としない程であった。畑の石垣にやや大振りの石が使用されていた。石室側面と後部のトレンチ断面による若干の盛り土が残存している。当然のことながら石室の天井石をも隠してしまうほどの盛り土がなされていたものであろう。後世の開墾により墳丘が削平されてしまったものである。この古墳の墳丘は周溝・石室から推定すると北東から南西方向に長軸を持つ楕円形の平面形を呈する。長径約12m、短径10mになる。3号墳よりも少し大きくなるのがわかった。高さは3号墳とすぐ側に現存する5号墳から推定して3m近くあったのではないかと推定される。

周溝

石室後部から両脇にかけて浅い周溝を検出した。畑の開墾により地下げが顕著で、しかも畑耕作により攪乱されていたため、特に後部の周溝幅は不明瞭で、明瞭なのは西北部分だけである。この部分の検出面での幅は約4mを測る。したがって墳丘の後部から両脇にかけて4m幅で周溝が巡っていたものと推定できる。深さについては、検出面から約40cmしかない。築造当時の周溝の深さは周囲の地表の高さが不明なため40cm以上と言うしかない。

なお西北部周溝の第4層灰褐色砂質土からは第15図37の大型の甕が出土している。



第11図 4号墳およびその他の遺構配置図 (1/150)

(3) 横穴式石室 (第13図、図版4・5)

天井石

この古墳から約20m北西の段々畑石垣にやや大振りの自然石が3個集中しているところがある。天井石か側壁か判定はできないが、このあたりまで石材を移動して石垣に使用しているのではないだろうか。とにかく分布調査をした時点でもすでに完全に破壊され、失われていたことは確かである。

石室

当初奥壁と考えていた大石は第11図の奥壁から開口部を見て左側壁の第2番目の石であった。当横穴式石室の主軸は畑石垣の方向と同じ北東から南西である。平面形の形態は不明瞭な片袖式で、玄室長350cm、最大幅140cm、現存高150cmを測る。そして羨道部の長さ150cm、最大幅130cm、現存高160cm

第3章 藪田古墳群

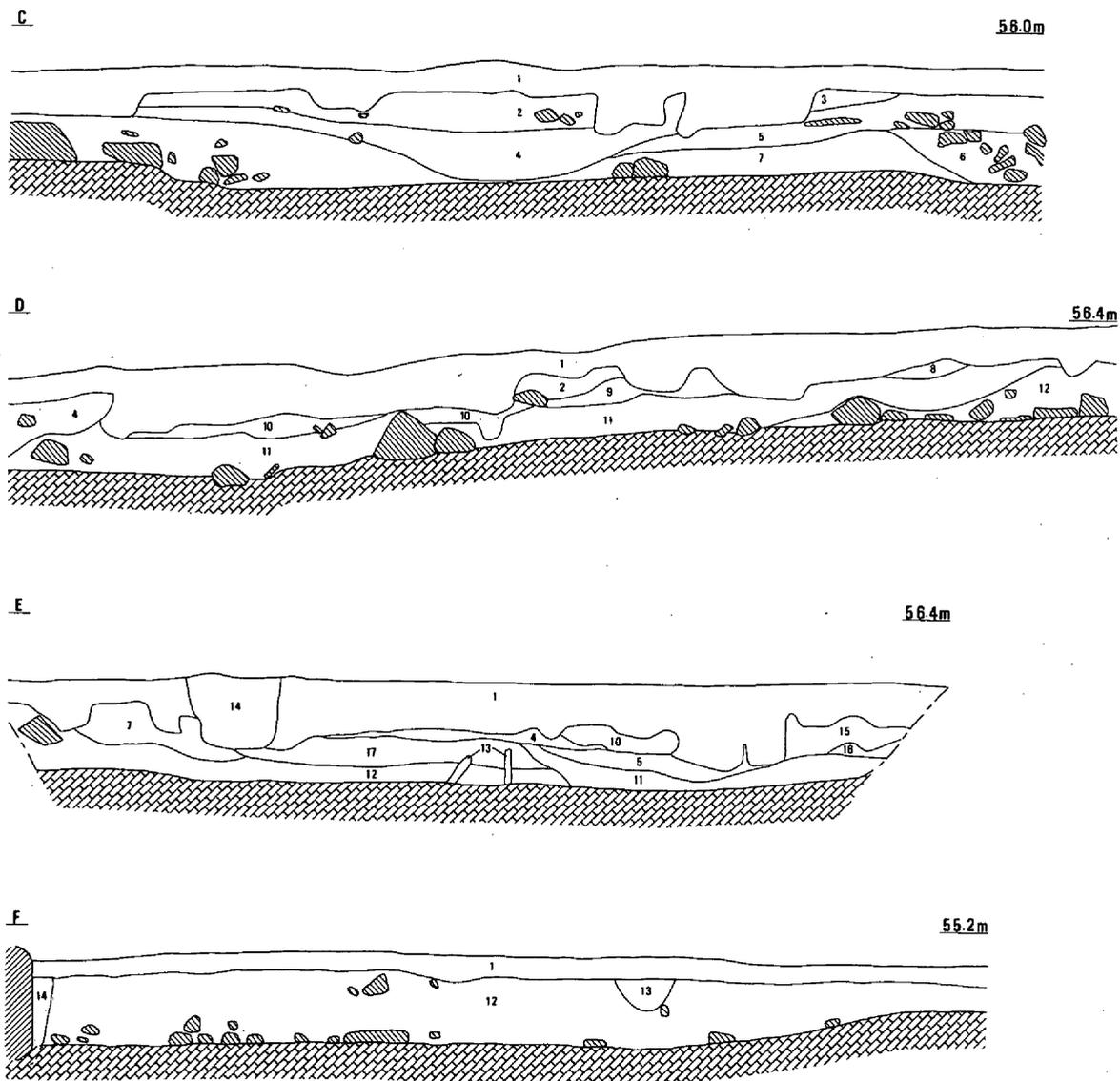
を測る。開口は南西である。また西北側壁（右側壁）の根石・抜き取り穴が2ヶ所検出できた事から推定全長としては550cmを測ることができた。

奥壁

奥壁は一枚岩である。高さ150cm、幅150cm、厚さ70cmを測る。この上にもう何段か石が乗っていた可能性が高い。

側壁

南東側壁は4個の大石が石垣として原位置のまま利用されている。奥から3番目までが玄室になる。



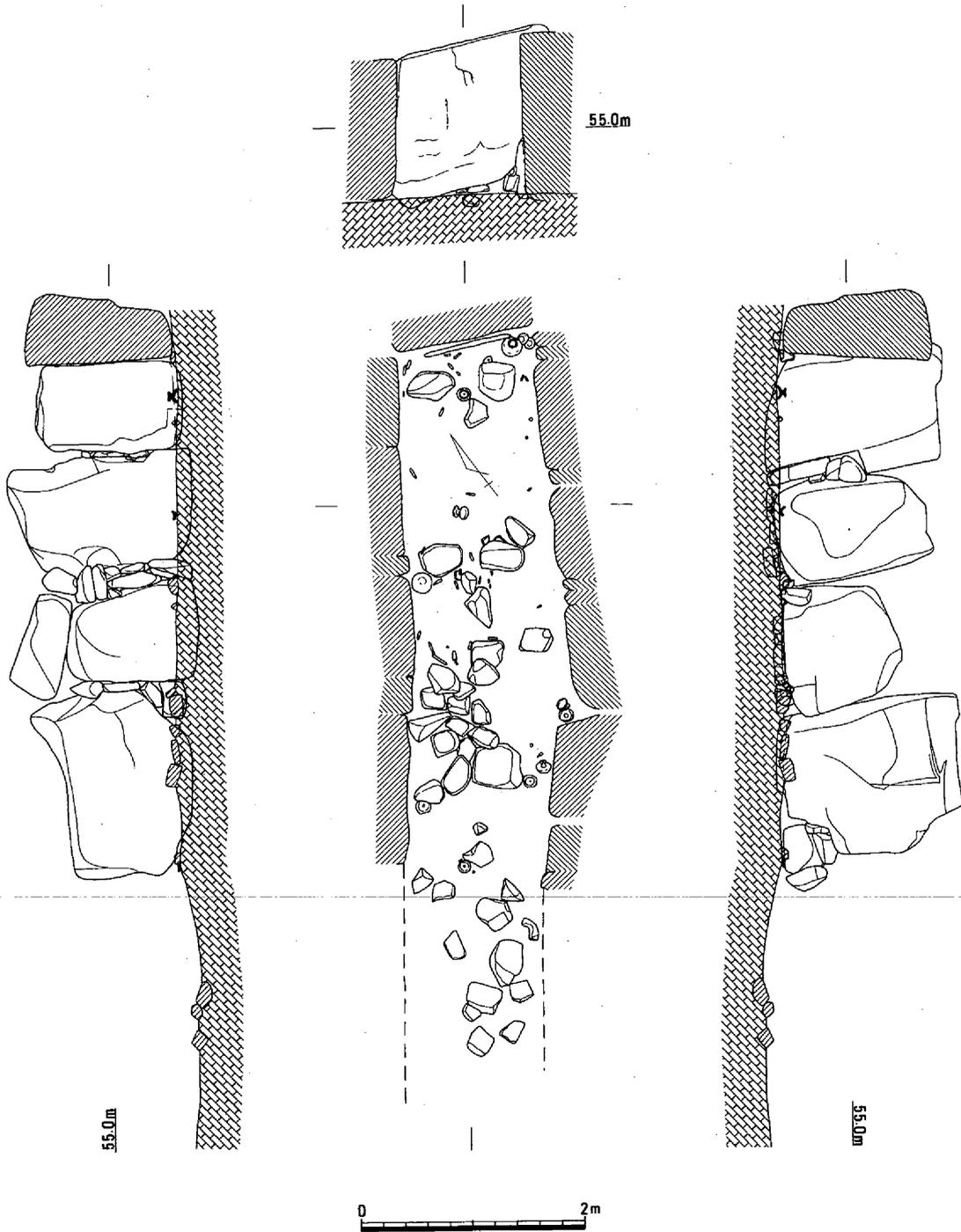
- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 1. 表土 | 5. 暗黄灰褐色砂質土 | 9. 灰黄褐色砂質土 | 13. 茶褐色砂質土 |
| 2. 淡灰褐色砂質土 | 6. 明黄灰褐色砂質土 | 10. 明灰褐色砂質土 | 14. 黒褐色砂質土 |
| 3. 淡黄灰褐色砂質土 | 7. 黄灰褐色砂質土 | 11. 暗赤褐色砂質土 | 15. 明黄褐色砂質土 |
| 4. 灰褐色砂質土 | 8. 黄褐色砂質土 | 12. 赤褐色砂質土 | 16. 暗黄褐色砂質土 |
| | | | 17. 暗灰褐色砂質土 |

第12図 4号墳トレンチ断面図 (1/60)

2個は広口の縦使い。3番目は横使いで、4番目は縦使いしている。北西側壁の4番目は横使いである。5番目は少し動かされ、6・7番目は根石・切り取り穴が検出できた。

棺台

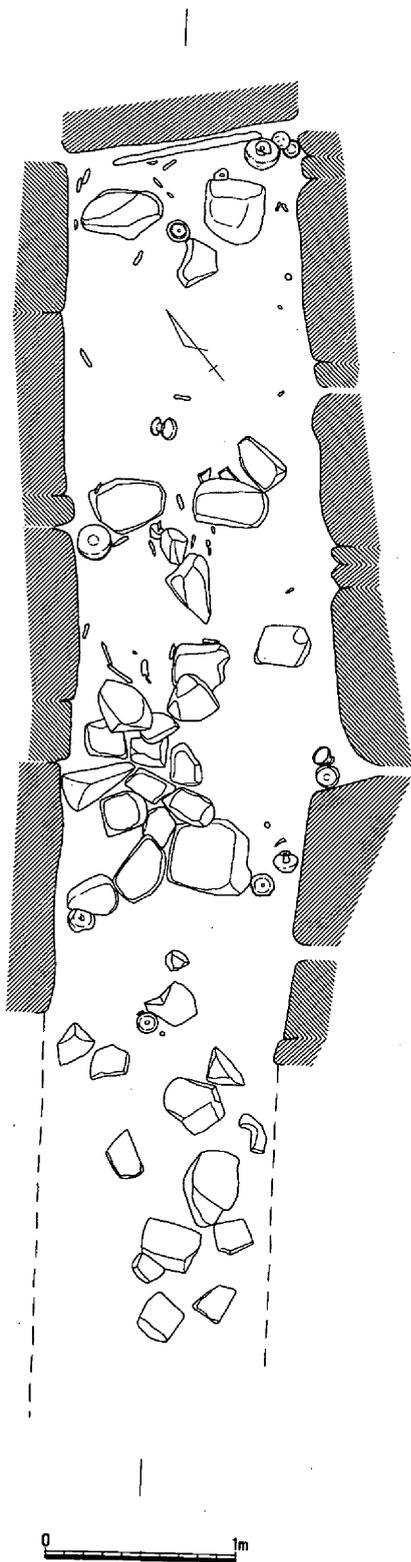
石室床面には一辺30cm程度の角礫が散在している。奥壁から200cmまでにある石の4個は棺台として原位置を留めている。



第13図 4号墳石室 (1/60)

(4) 遺物出土状況・出土遺物 (第14~18図、図版5・7・8)

石室内からは上層で近世瓦・土器・陶磁器・鉄滓、中層から中世土器、下層から古代土師器、最下層から古墳時代土師器・須恵器・鉄器・鉄滓が出土している。周溝・墳裾に当たる部分から須恵器甕が出土している。



須恵器

22は杯であるが、蓋か身のどちらに使用されたか判断できない。23~27も杯で、蓋か身のどちらに使用してもよい。26内面には叩き痕跡が残る。28~33は高杯。34は台付き長頸壺で、胴部最大径部分に沈線と刺突文を持つ。奥壁に接して上下正位置で出土した。36は平瓶である。羨道東側壁に接して上下正位置で出土している。37は北西周溝で出土した大甕である。

土師器

14は棺台脇で出土した鉢である。

鉄器M6は直刀である。奥壁に接して出土した。刃部の長さ800mm、茎部は一部残存、刃部の幅32mm、同厚さ5mmを測り、刃部は弓なりに左へ曲がる。M7は鏝で、M6の側で出土し、それに付属していたものであろう。M8は刀子で、金属製の環状金具が付着している。M9は楕円形を呈する平根式環状鏃、M10は二等辺三角形呈する平根式斧箭鏃である。M11は鉄芯・鉄板の紡錘車である。M12は両端を折りまげたU字形の金具で、鏃形模造品と言える。M13~M24は棺釘である。なお棺釘は34点出土している。

古代土師器

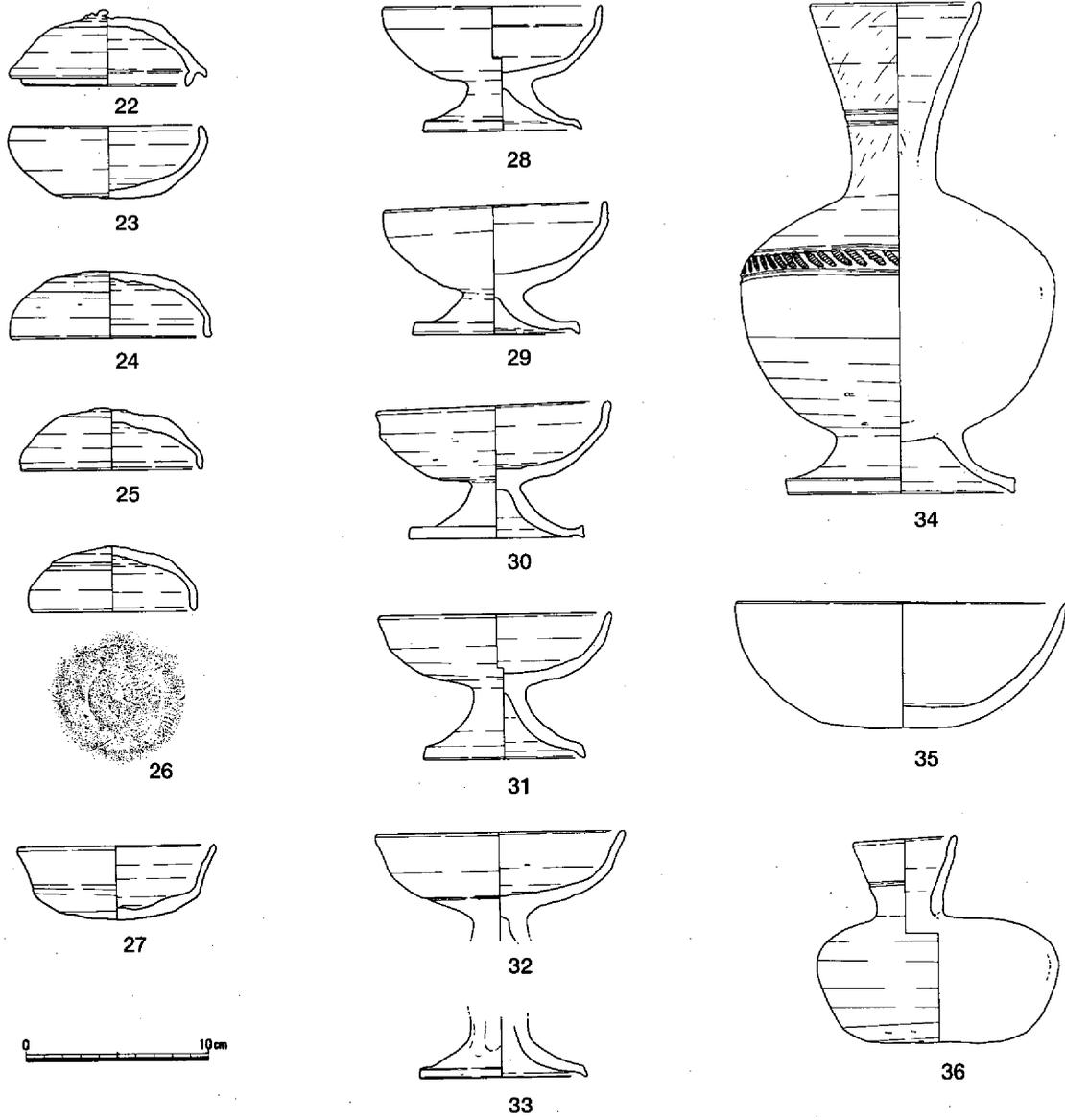
38~41は赤褐色を呈する杯あるいは皿である。器壁は非常に薄い。岡山市高松所在の津寺遺跡⁽⁴⁾では概ね灯明皿として使用されることが多かった。

中・近世土器・その他

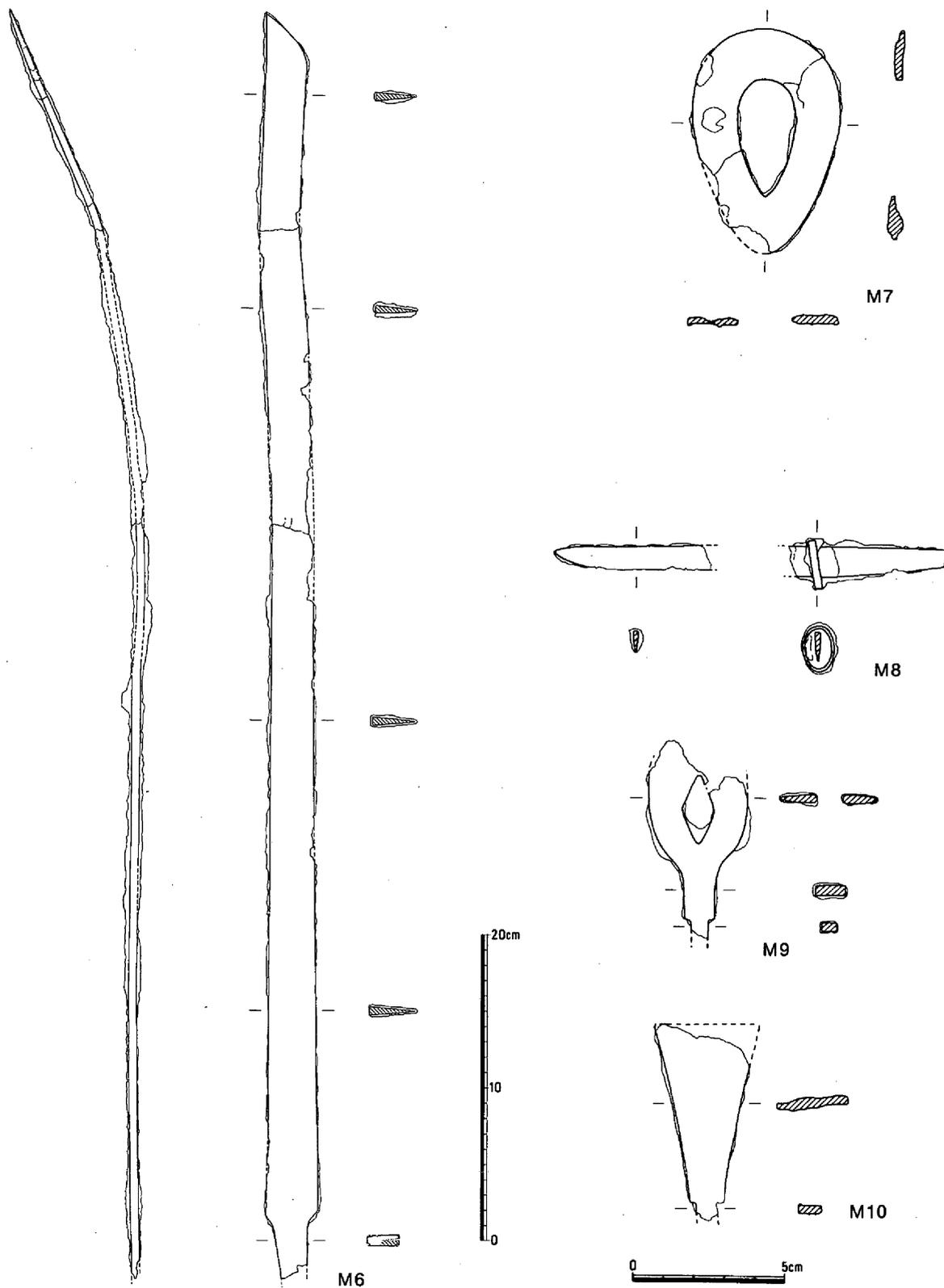
42・43は吉備系土師器小皿、44~47は同土師器椀、49は備前焼甕である。50は羽釜である。

M25・26は銅銭「寛永通宝」である。S1は砥石で、硬砂岩製である。

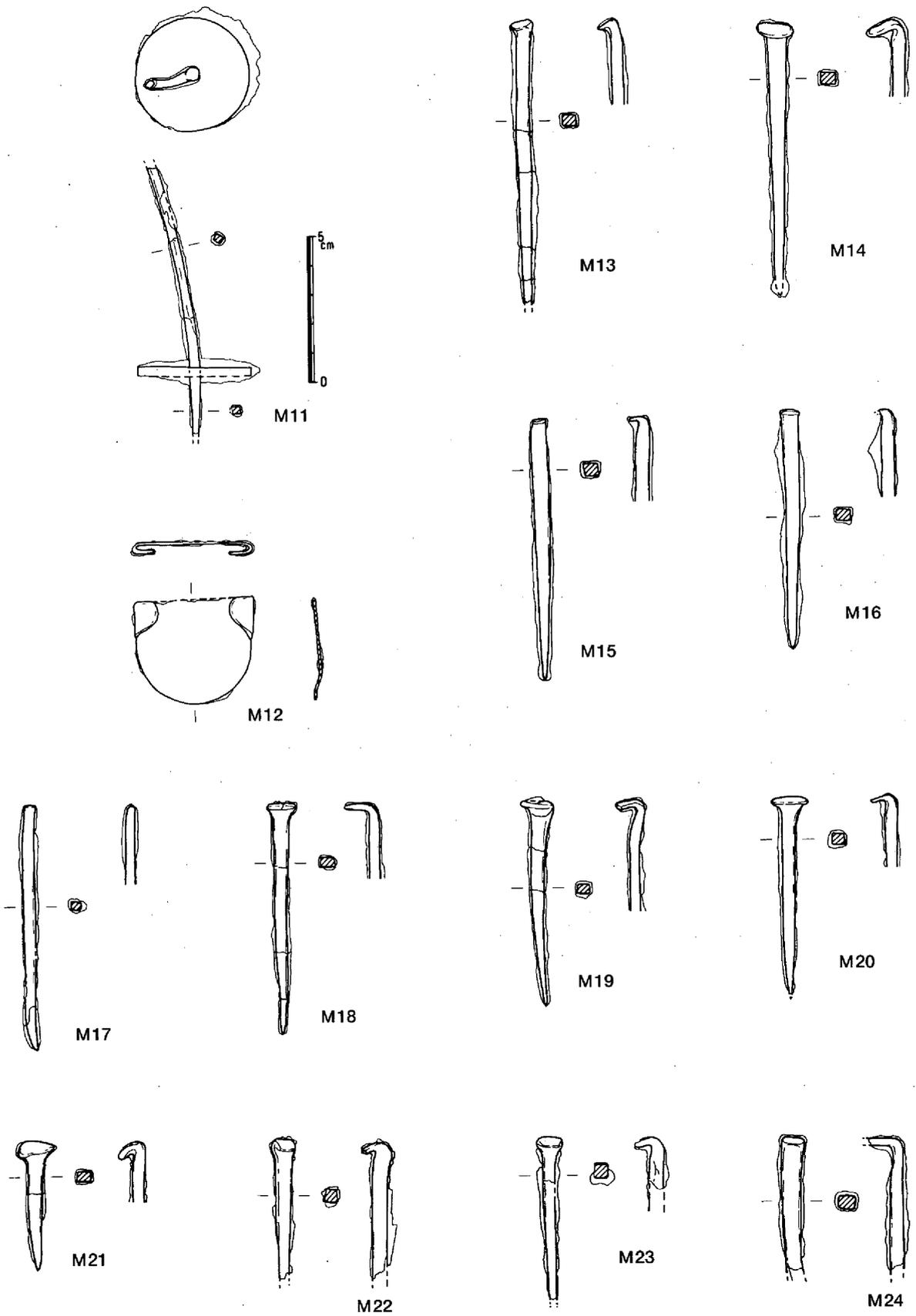
第14図 4号墳遺物出土状況 (1/40)



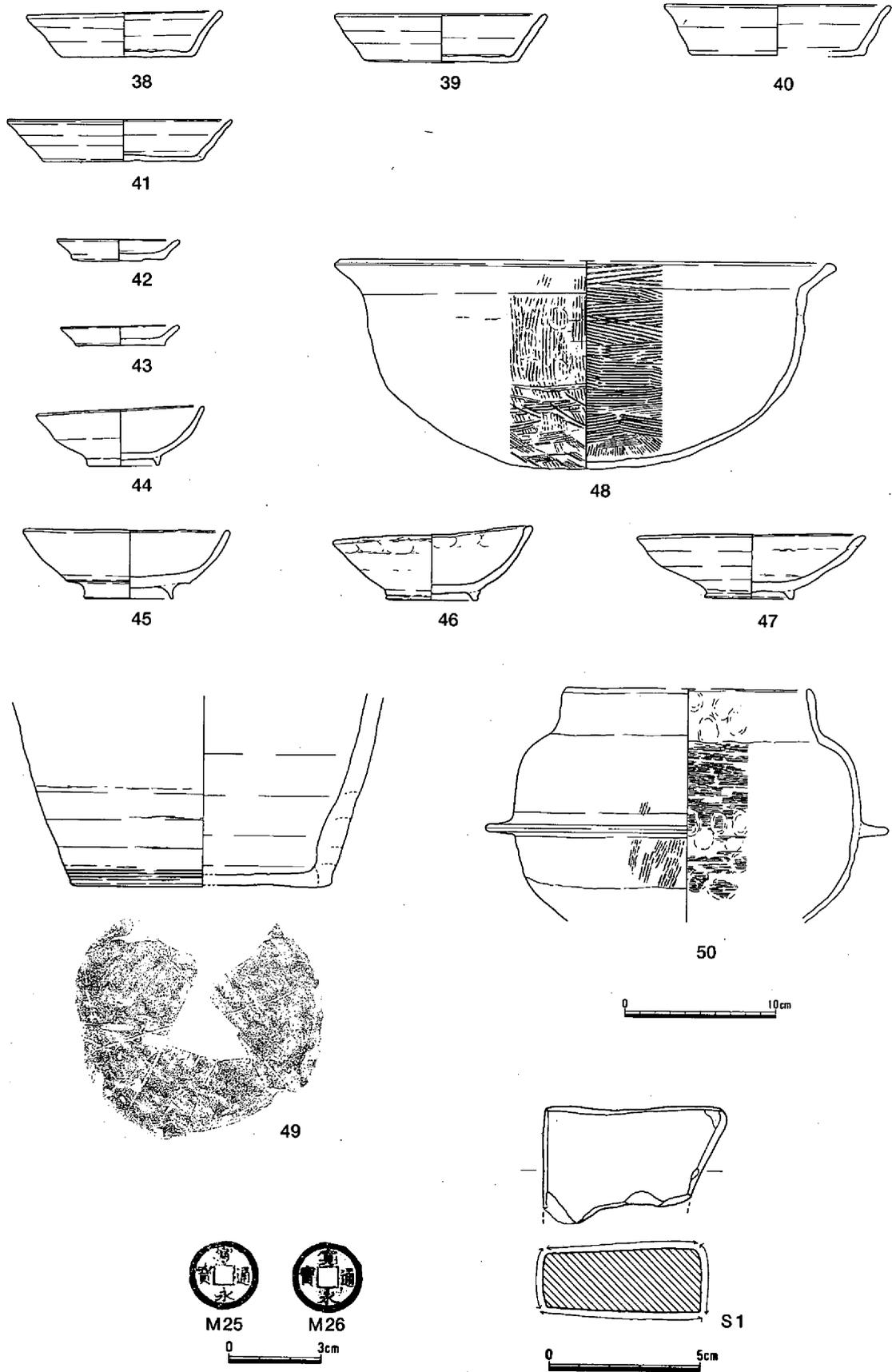
第15図 4号墳出土遺物① (1/4)



第16図 4号墳出土遺物② (1/6・1/2)



第17図 4号墳出土遺物③ (1/2)

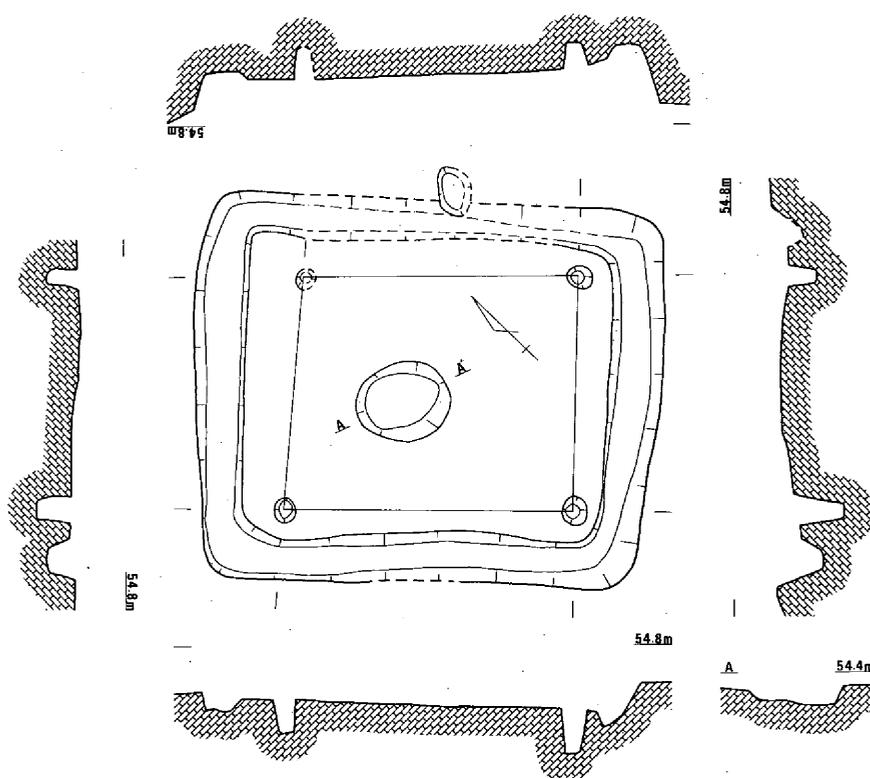


第18図 4号墳出土遺物④ (1/4・1/2)

3. その他の遺構と遺物

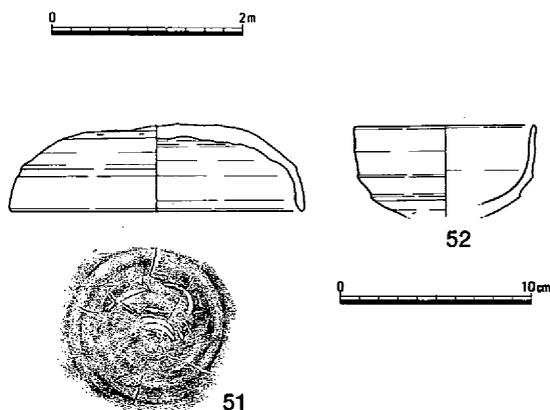
(1) 竪穴住居 (第19図、図版5・7)

4号墳の横穴式石室を解体し、石室の掘方を検出していたところ、石室羨道部から前庭部にかけて竪穴住居を検出した。正方形に近い方形の平面形を呈する。辺の方向は東西南北から約45度傾いているが、石室の長軸方向とは約15度ずれている。しかしこの住居跡地を利用して4号墳を築造したことは明らかである。住居の長辺は北西から南東方向にあり5m、短辺は4mを測る。壁体溝は全周に巡り、石室内では確認できなかった。もし「かまど」が伴うとすればこの位置である。壁体溝の幅は40



cmもあり、深さは20cmである。柱穴は4本とも検出できた。北の1本は石室の北西側壁の奥か4番目の大石の下に発見した。柱穴の大きさは直径30cm、深さ50cm、柱間は240~300cmを測る。中央穴らしき穴を検出したが、住居に伴うかどうか疑わしい。

遺物としては埋土から須恵器杯蓋と高杯が出土している。51は杯蓋で、口径16.0cm、器高4.5cmを測る。天井部内面は同心円叩きが残存している。52は高杯の杯部と考えられ、脚部は欠損しているが、長脚二段透かしになり、無蓋になるのであろう。口径10.0cmを測る。



第19図 竪穴住居 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

(2) 土壇

土壇1 (第20図)

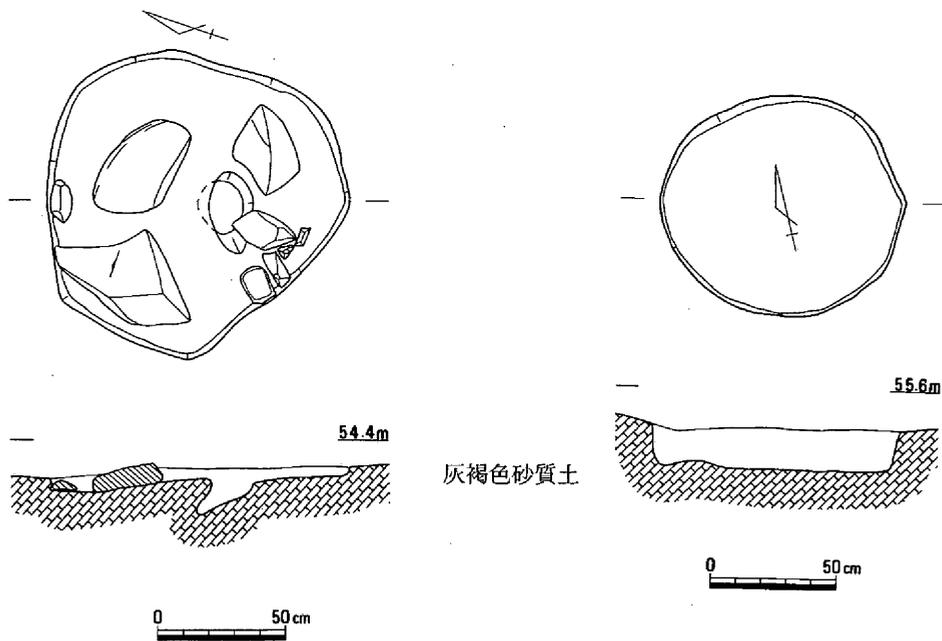
竪穴住居の西250cmの位置で検出した平面形が多角形を呈する浅い土壇である。最大径120cm、最小径110cm、深さ8cmを測る。中には最大一辺40cmほどの角石がぎっしりつまった状態で出土した。中央部分には直径20cm、深さ15cmの木の根状の穴が開いている。

土器などの遺物は全く出ていないが、軟らかい土の質感から近世以降の畑に植えていた果樹の根鉢のように思える。

土壇2 (第21図)

4号墳周溝の上層、石室の東350cmの位置で検出した平面形が円形を呈する浅い土壇である。直径90cm、深さ16cmを測る。床面は平坦である。

埋土は黒色粘質土で遺物は全く出土していない。したがって遺物から時期は確定できないが、周溝よりかなり新しく、畑の耕作による溝群よりはかなり古そうであることから石室内出土の古代～近世の範囲に入る遺構であろう。



第20図 土壇1 (1/30)

第21図 土壇2 (1/30)

(3) 溝群 (第11図)

4号墳石室の北から東にかけての一体で検出した不定形な溝群がある。直線・コの字形・方形土壇状・L字状など、曲線は少なくほぼ直線を基本とする溝である。幅は30～100cm、深さ10～30cmを測る。主軸の方向はN-45°-WとN-45°-Eである。畑の石垣の方向N-45°-Wと同じであること及び埋土が非常に軟らかいことから近世～現代の畑畝と考えられる。

第3節 結 語

藪田古墳群の中、3号墳と4号墳の要約を記して結語としたい。

1. 藪田3号墳

天井石も数枚残存し、墳丘もかなり残りが良かったにもかかわらず、横穴式石室の内部は中世に一度荒らされ、近世には床面はるか下層まで攪乱されていた。しかも中で火を炊いて生活していたようである。近世の街道沿いにあったためこのように荒らされていたのであろう。

古墳として最終埋葬され、古墳が閉塞された時期を推定する事ができる遺物は閉塞石の上で出土した須恵器である。第8図の8がそれで、扁平な宝珠つまみと口縁内面のかえりから中村浩須恵器編年⁽⁵⁾のⅣ型式1段階に相当する。藤原宮土器と平城宮Ⅰにあてており、実年代は8世紀初頭と考えられる。

築造された時期を推定する須恵器は第8図の1～6の杯蓋と11・12の杯身である。これらは中村編年のⅡ型式6段階に相当する。それは消費地の難波宮跡出土遺物の杯Cや川原寺下層出土須恵器に相当し、7世紀前半～中頃であろうか。

なお藪田3号墳は中国横断道建設の用地内ではあるが、設計上側道敷部分に当たり、その道路面のレベルは古墳を天井石を取り去った状態で現状保存できる位置にあった。そこで岡山県教育委員会は現状のまま真砂土で埋め戻して保存するよう日本道路公団に要望し、承認された。

2. 藪田4号墳

墳丘も天井石さえも開墾によって取り去られていた横穴式石室を埋葬主体部とする古墳である。墳丘は推定で直径10cm程度の円墳で幅2mほどの周溝を持つ。

古墳としての最終埋葬の時期は床面から出土した多くの須恵器の中から一番新しい第18図6の杯身で、中村浩の須恵器編年のⅢ型式2段階、7世紀中頃と考えることができる。

横穴式石室は何度も埋葬に使用できることから築造の時期はさらに溯る。築造の時期を推定すると床面から出土した多くの須恵器の中から一番古いと考えられるのが第18図3の杯蓋で、同編年のⅡ型式6段階、7世紀前半～中頃と考えることができる。つまり4号墳と3号墳とは築造の時期が近いと判断される。

古墳時代竪穴住居との関係はまだ住居が廃絶されて数十年しか経て居らず、おそらく屋敷地としてまだ認識できる程度の地形を保っていた可能性がある。

註

- (1) 『岡山県遺跡分布図』1970年岡山県教育委員会ではまだ掲載されていない。
- (2) 『岡山県埋文報告24』1993年岡山県教育委員会に発掘調査概要が掲載されている。
- (3) 井上弘・亀山行雄『二子14号墳』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81」1993年岡山県教育委員会
- (4) 浅倉秀昭ほか『三手・津寺遺跡』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告90」1994年岡山県教育委員会
- (5) 中村浩『須恵器』考古学ライブラリー5 1980年 ニューサイエンス社

土器一覽

藪田3号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	2	石室内	須恵器	杯蓋	10.7	11		3.6	内外面ヨコナデ。外面天井部にヘラケズリ痕。ケズリの方向左。	7.5Y6/1(灰)	2mm以下の砂粒 長石 石英(中)	
2	5	石室内	須恵器	杯蓋	10.3	10.5		3.3	内外面ヨコナデ。口縁端部磨滅。天井部のヘラケズリの方向右。	5Y8/1(灰白)	1.5mm以下の砂粒 石英(多)	
3	4	石室内	須恵器	杯蓋	10.4	10.6		3.5	内外面ヨコナデ。天井部ケズリ痕跡。	2.5Y7/1(灰色)	2mm以下の砂粒 長石 石英・角閃石(多)	
4	13	石室内	須恵器	杯蓋	10.3			4	内外面ヨコナデ。天井部ケズリの方向右。	7.5Y6/1(灰)	1~3mm程の砂粒(多) 長石・雲母(多)	
5	8	石室内	須恵器	杯蓋	10.7	11.1		4.2	内外面ヨコナデ。天井部ヘラキリ、未調整?	5Y6/1(灰)	1~3mm程の砂粒 石英(少) 1mm程の砂粒	
6	3	石室内	須恵器	杯蓋	11.2	11.6		4.5	内外面ヨコナデ。天井部剥落	10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英・黒雲母(中)	
7	12	石室内	須恵器	杯蓋	17.6			2.7	内外面ヨコナデ。	5Y5/1(灰)	1~3mmの砂粒 長石・雲母(多)	
8	16	石室内	須恵器	杯蓋	15.4	18			内外面ヨコナデ。天井部ケズリの後ナデ。ケズリの方向右。	5Y6/1(灰)	3~4mm程の小石(5~6個) 3mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
9	19	石室内	須恵器	杯身	12.3			3.5	内外面ヨコナデ。底部ヘラキリ、未調整?	2.5Y7/1(灰色)	2mm以下の砂粒 長石・石英・角閃石(中)	
10	14	石室内	須恵器	杯身	10.8		6.1	4	内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリ痕跡。	10YR7/4(鈍い黄橙)	1~5mm程度の砂粒(多) 長石(多)・石英(中)	
11	15	石室内	須恵器	杯身	9.5		6.1	2.2	内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリの方向右。	7.5Y8/1(灰色)	1~2mm程度の砂粒(多) 長石・雲母(多)	
12	6	石室内	須恵器	杯身	9.6	11.2			内外面ヨコナデ。底部ヘラケズリの方向右。	2.5Y8/2(灰色)	1.5mm以下の砂粒 石英(中)	
13	17	石室内	須恵器	高杯	9.7	10		6.9	全体に歪む。内外面ヨコナデ。脚端部磨滅。	N6/0(灰)	0.5mm以下の砂粒・長石・石英(個)	
14	11	石室内	須恵器	高杯	17.8		10.6	7	内外面ヨコナデ。杯部、脚端部に沈線。	2.5GY7/1(明オリブ灰)	1mm程度の砂粒 雲母(多)・長石(中)	
15	10	石室内	須恵器	平瓶	5.2	13.5		11	口縁~肩部外面ヨコナデ。底部ヘラケズリの方向右。口縁に沈線。	N6/0(灰)	1~3mm前後の砂粒 長石・雲母(多)・石英	
16	9	石室内	須恵器	細頸壺		13.8			頸部、肩部に沈線。胴部下半はヘラケズリ。	5Y6/1(灰)	1mm程度の砂粒(少) 雲母(多)	全体に自然釉がかかる。
17	1	石室内	須恵器	長頸壺	8.3	14.7		20	頸部、肩部に沈線。肩部に刺突も巡る。胴部下半はヘラケズリ。	5Y7/1(灰色)	5mm程の小石(2~3個) 2mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
18	21	石室内	土師器	椀	14.6			5.9	口縁部ヨコナデ。底部ナデ。外面にひび割れ	10YR7/1(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 赤色酸化土粒(多)	
19	20	丘裾	須恵器	高杯	9.1		7.8	7.9	内外面ヨコナデ。脚柱部に沈線。	5Y6/1(灰)	1~3mm程度の砂粒(少) 長石(多)・黒雲母(少)	
20	18	丘裾	須恵器	高杯	9.2	9.4		8.5	内外面ヨコナデ。杯部、脚端部に沈線。	7.5Y6/1(灰)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
21	7	丘裾	須恵器	杯身	14.7	15	9.8	3.8	全体に器壁が厚い。内外面ヨコナデ。	5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 茶色砂粒(多)	

藪田4号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
22	2A	石室内	須恵器	杯蓋	8.6	10.8		4.2	底部ヘラキリ、未調整。ケズリの方向左。	7.5Y6/1(灰)	1.5mm程度の砂粒 長石(中)	
23	2B	石室内	須恵器	杯身	10.2	10.9		4	内外面ヨコナデ。底部ヘラキリ、未調整。	N6/0(灰)	1mm程度の砂粒 長石・石英(中)	
24	9	石室内	須恵器	杯蓋	10.7	11		3.7	ヨコナデ。天井部ヘラケズリの方向左。	N6/0(灰)	2mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
25	17	石室内	須恵器	杯蓋	9.8	10		3.4	内外面ヨコナデ。天井部ヘラキリ、未調整。	2.5Y8/2(灰色)	4.5mm程の小石(1個) 1mm程の砂粒	
26	12	石室内	須恵器	杯蓋	8.9	9.2		3.7	内外面ヨコナデ。天井部ヘラキリ、未調整。	N3/0(暗灰)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
27	3	石室内	須恵器	杯身	10.6	10.9		4	身下端に沈線?底部未調整。	7.5Y5/1(灰)	1mm程度の砂粒 長石(中)	
28	4	石室内	須恵器	高杯	11.8		8.6	6.9	内外面ヨコナデ。	N7/0(灰白)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)・雲母(中)	1/3自然釉がかかる。
29	5	石室内	須恵器	高杯	12		9	7	内外面ヨコナデ。	2.5Y8/2(灰色)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	内外面剥落著しい。
30	7	石室内	須恵器	高杯	12.5	12.8	9.4	7.5	内外面ヨコナデ。	5Y6/1(灰)	3~4mm程の小石(少) 石英・長石(中)	
31	10	石室内	須恵器	高杯	12.5	12.8	8.6	7.9	内外面ヨコナデ。調整雑で粘土紐跡有り。	5Y5/1(灰)	2~3mm程の小石、砂粒(少)・長石(少)	
32	8	石室内	須恵器	高杯	13.5				内外面ヨコナデ。杯部下端に沈線。	2.5Y7/1(灰白)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	内外面剥落著しい。
33	27	石室内	須恵器	高杯			9		脚端部ヨコナデ。脚柱部オサエ、ナデ	2.5Y7/1(灰白)	1~5mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
34	11	石室内	須恵器	長頸壺	9	17.1	12.3	21.7	頸部、肩部に沈線。肩部に刺突が巡る。	N6/0(灰)	2mm以下の砂粒 石英・長石(中)	
35	1	石室内	土師器	椀	17.9	18		7	内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。	5YR6/6(橙)	1.5mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(多)	

土器一覽

藪田4号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
36	6	石室内	須恵器	平瓶	5.4	13.1	5.4	11.3	口縁~胴部下半ヨコナデ、底部ヘラケズリ。口縁部に沈線。	2.5GY6/1(オリブ灰)	1mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
37	30	周溝	須恵器	甗	19.4				口縁部ヨコナデ。胴部外面カキ目、平行タタキ、内面青海液。	10BG6/1(青灰)	4mm程度の小石 石英、黒っぽい砂粒(多)・長石(中)	口縁部に自然釉がかかる。
38	16	石室内	土師器	杯身	12.5	12.7	8.4	3.1	口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ、ナデ。	5YR6/6(橙)	0.5mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
39	24	石室内	土師器	杯身	13.4	13.8	10	3.2	丹塗り?口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ、ナデ。	10YR6/4(鈍い黄橙)	1mm程の砂粒 赤色酸化土粒(中)	
40	22	石室内	土師器	杯身	14.6	15			丹塗り。底部ユビオサエ、ナデ。	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm程の砂粒 赤色酸化土粒(中)	
41	19	石室内	土師器	杯身	14.5		10.3	2.8	丹塗り。口縁部ヨコナデ。底部ユビオサエ。	7.5YR6/4(鈍い橙) 丹塗りの色 5YR5/6	1mm前後の砂粒 石英・角閃石(多)	
42	28	石室内	土師質土器	小皿	7.9		6		口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ。	5YR8/4(淡橙)	1~3mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
43	29	石室内	土師質土器	小皿	7.5		5.8		口縁部ヨコナデ。底部ヘラキリ。	7.5YB8/4(浅黄橙)	1~2mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
44	15	石室内	土師質土器	高台付碗	10.8	10.9		4	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
45	20	石室内	土師質土器	高台付碗	13.1			4.7	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	7.5YR8/3(浅黄橙)	1.5mm前後の砂粒 石英(多)	
46	14	石室内	土師質土器	高台付碗	12.7	13.1		5	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
47	23	石室内	土師質土器	高台付碗	14.8	15.1		4.3	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	2.5Y8/2(灰白)	1mm以下の砂粒 石英(僅)	
48	21	石室内	土師質土器	鍋	32			13.8	内外面ユビオサエの後ハケ目。	10YR7/3(鈍い黄橙)		外面に煤付着。
49	25	北西	備前焼	壺			16.8		内外面ヨコナデ。	N4/1(灰)	3mm前後の小石(3~4個程) 1mm以下の砂粒	
50	18	北西	瓦質土器	羽釜	15.8				ユビオサエの後ハケ目。	2.5Y4/1(黄灰)	2mm前後の砂粒 赤色酸化土粒(多)	胴部下半に煤付着。

竪穴住居

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
51	13	裾南西	須恵器	杯蓋	15.1	15.4		4.5	内外面ヨコナデ。天井部ヘラズリの方向は左。内面にタタキ痕。	5B5/1(青灰)	5.5mm程の小石(1個) 2.5mm以下の砂粒 長石(少)・石英(中)	
52	26	住居化	須恵器	高杯	9.4				内外面ヨコナデ。	2.5Y7/2(灰黄)	1mm前後の砂粒 長石(少)	外面に自然釉がかかる。

金属器一覽

藪田3号墳石室内

掲載番号	整理番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	出土位置	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
M1	63	刀子	72.7	8	2	3.34		M4	65	針	43	4.5		3.37	錆膨れ
M2	67	刀子	69	12	3	8.89	錆膨れ	M5	66	針	17	3.5		0.6	ほぼ完形?
M3	64	針	42	4		3.21									

藪田4号墳石室内

掲載番号	整理番号	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	出土位置	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考
M6	1	大刀	829	33	7	540.69	茎子錆膨れ	M17	21	釘	84	4		5.97	頂部欠損?
M7	33	鏝	74	48	2	15.69		M18	17	釘	79	5		5.99	完形
M8	12	刀子	90	15.5	2	7.77		M19	16	釘	70	4.5		5.45	完形
M9	11	鉄鏃	54	32.5	3.5	10.71	欠端部欠損	M20	22	釘	63	5		6.18	完形
M10	27	鉄鏃	60	28	3	14.6	欠端部欠損	M21	20	釘	44.5	5		3.99	完形
M11	45	紡錘車	92	39	3	19.45	欠端部欠損	M22	10	釘	48	6		4.93	
M12	41	鋤先	35	41	1	9.46	ミニチュア	M23	37	釘	56	5		4.45	
M13	35	釘	97.5	5		9.6		M24	4	釘	46	8.5		5.6	
M14	23	釘	93	6		11.3		M25	69	寛永通寶				2.66	
M15	34	釘	89	5		9.8	完形	M26	70	寛永通寶				2.55	
M16	2	釘	82	5		7.82	完形								

第4章 金黒池東遺跡

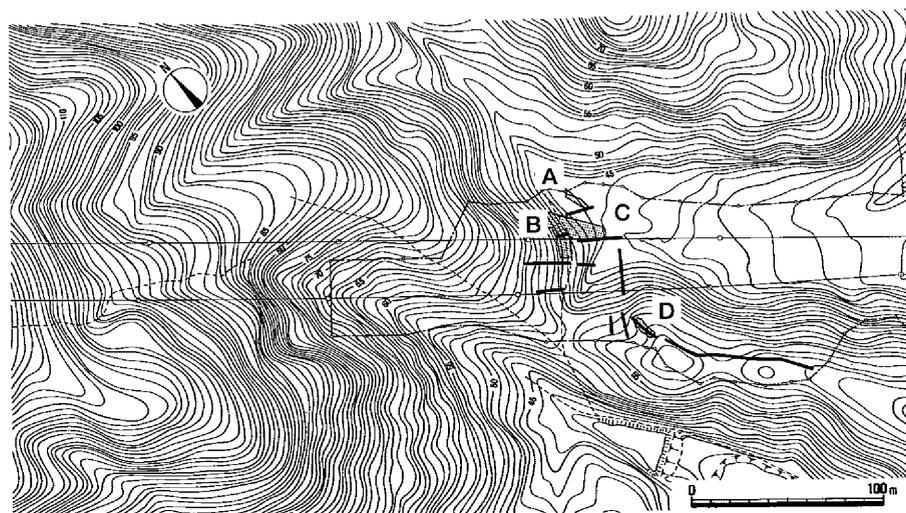
第1節 位置と経過

1. 位置

金黒池東遺跡は総社市福井字奥ヶ谷に所在する。総社市福井は総社平野との間に低い丘陵があって、少し隔絶された東西に細長い谷状の地形を呈している。南の低い丘陵上には福井古墳群・西山古墳群など5世紀～7世紀の中期・後期の古墳群があり、北の丘陵上には中山古墳群・福井大谷古墳群など6・7世紀の後期の古墳群がある。金黒池東遺跡はこの谷が二股に別れた北の小さい谷の中に位置する。その谷の入口はひいご池と呼ばれる5アールほどの大きな池とその上流に1アールばかりの上の池が専地している。ひいご池の東丘陵先端では後で報告する奥ヶ谷窯跡が発見された。遺跡名の元となった金黒池は遺跡南西の低い峠を越えて存在する2つの池である。

2. 経過

当初その地名から製鉄に関連する遺構、すなわち長い炭窯が検出されるものと予想し、一次調査に入った。調査に先立ち現状が保安林に成っていたため、その解除と伐開を日本道路公団にお願いした。伐開した材木の搬出道路がないために調査はまず雑木の片付けから始めた。一次調査も自由にトレンチの設定ができず、またその後の全面調査に移行するにも重機やベルト・コンベヤーも利用できず、人力のみの発掘のため、調査区を十分に広げる事ができなかった。平成4年5月17日～6月14日に一次調査と全面調査の一部を実施し、残務は次年度の6月27日～7月5日に工事と併行して行っている。この調査中断中に遺跡周辺では自然保護の問題⁽¹⁾が起り、工事の一部設計変更が行われた。そのため、予定していた縄文時代の調査区はほとんど調査対象地から外れることになった。



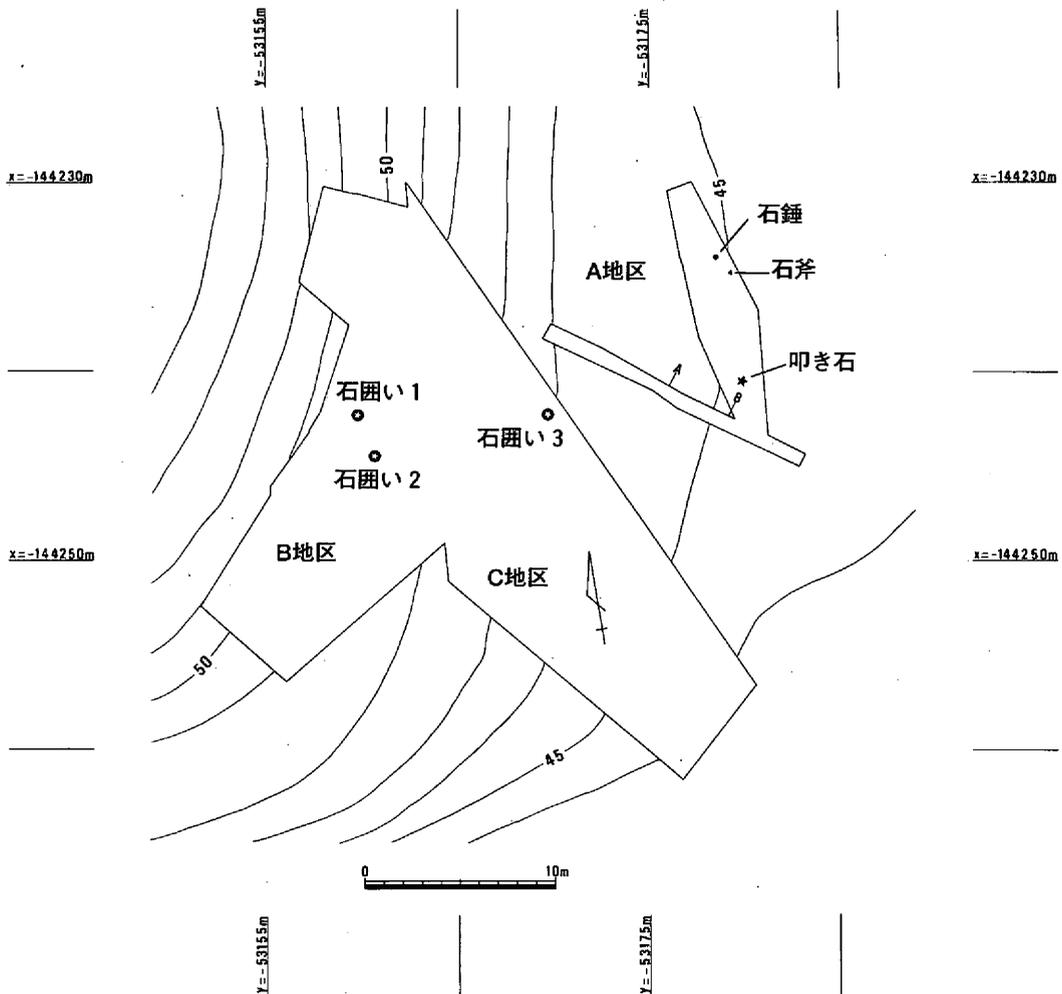
第1図 遺跡調査区位置区 (1/4000)

第2節 調査の概要

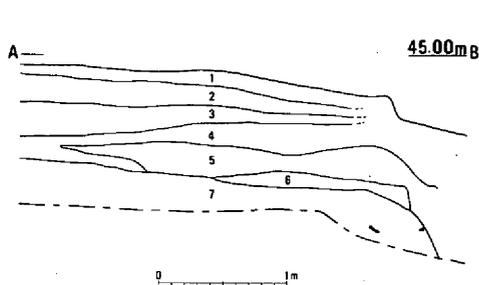
1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 包含層 (第3・4図、図版9)

一次調査のトレンチの内一番北の端で、緩斜面から谷底にあたる部分に設定したトレンチにおいて縄文土器の包含層を確認した。第3図の第7層から土器と石器を出土している。このトレンチの北側



第2図 A~C地区遺構全体図 (1/400)

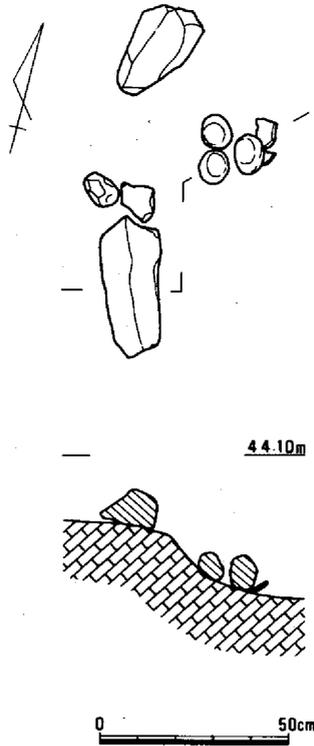


- 1、表土
- 2、黄褐色砂質土
- 3、黄褐色粗砂
- 4、黄褐色砂質土
- 5、黄褐色粗砂
- 6、黄褐色砂質土
- 7、淡茶褐色砂 (縄文土器含む)

第3図 A地区土層断面図 (1/60)

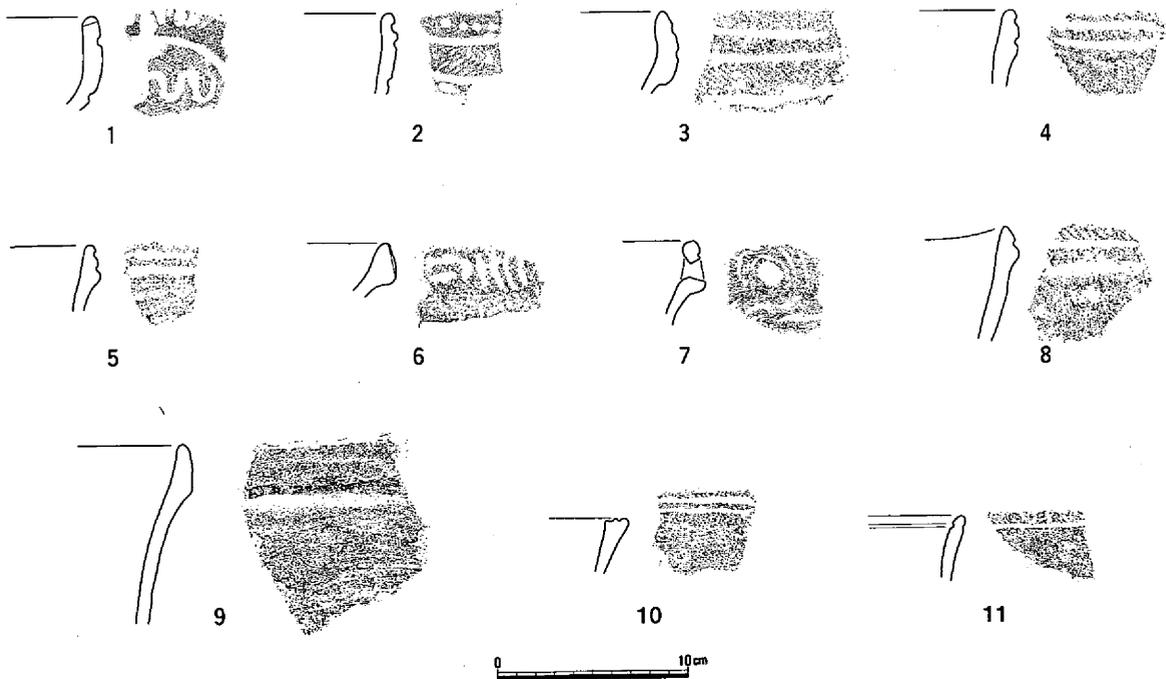
を用地境まで拡張した。遺構は検出できなかったが、第4図のようにすり石が3個集中して出土したところもある。このA地区は平成6年度に調査を予定していたが設計変更によって保存された。

(2) 縄文土器 (第5・6図、図版12)

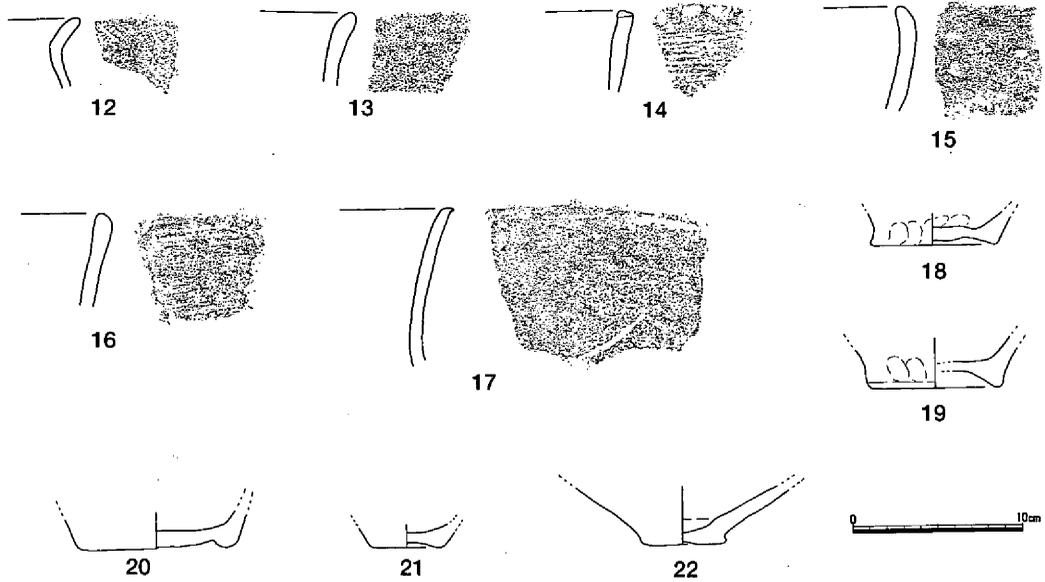


1~17は鉢形土器の口縁部である。1は波状の沈線文と縄文、口唇部には刻み目を施し、やや内湾する。2は沈線文・擦り消し縄文・円形刺突文を施す。3~9は縁帯文の土器。3・4・5・8は沈線文と縄文を施す。6は縁帯部に弧状の沈線を、7は円形の穴を中心に沈線を施す。9は縁帯部は調整不明だが、その下方には二枚貝条痕が確認できる。10は口唇部上端面に2条の沈線文と縄文を施す。11は口縁部内外面に1条ずつ沈線文を施し、その間の口唇部に縄文を付ける。12は「く」の字形に外反する口縁の外面に縄文を施す。13は少し縁帯風の口縁外面に縄文を施すが、拓本にはでないほど器表面が摩滅している。14は口唇部に棒押さえによる断面の丸い刻み目を持ち、外面には二枚貝条痕がある。15は内湾する口縁で、ナデしか見えない。16は条痕文土器である。17はゆるやかに外反する口縁で端部は欠損している本遺跡で最大の疑口縁破片である。18~22は底部である。18・19は上げ底が著しい。20は少し上げ底。21は不安定な小さい平底で、浅鉢と考えられる。22も浅鉢の底部と考えられる。

第4図 A地区すり石出土状況 (1/20) その他土器片は整理箱に3箱採集している。



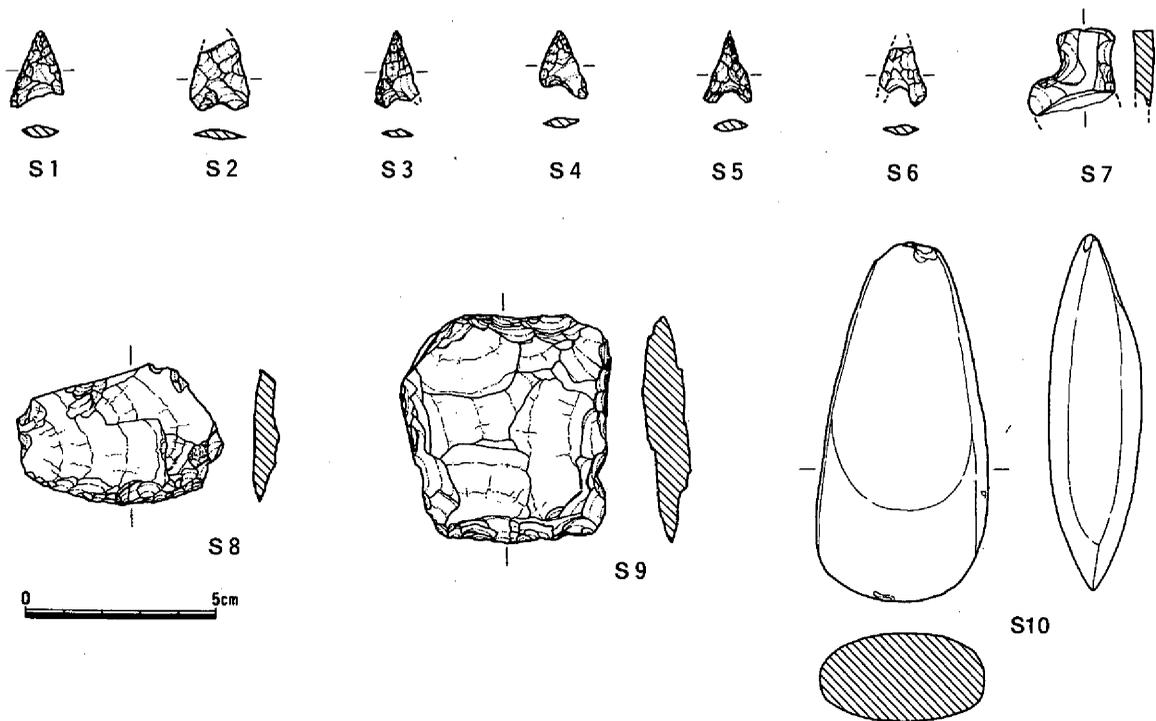
第5図 A地区出土縄文土器① (1/4)



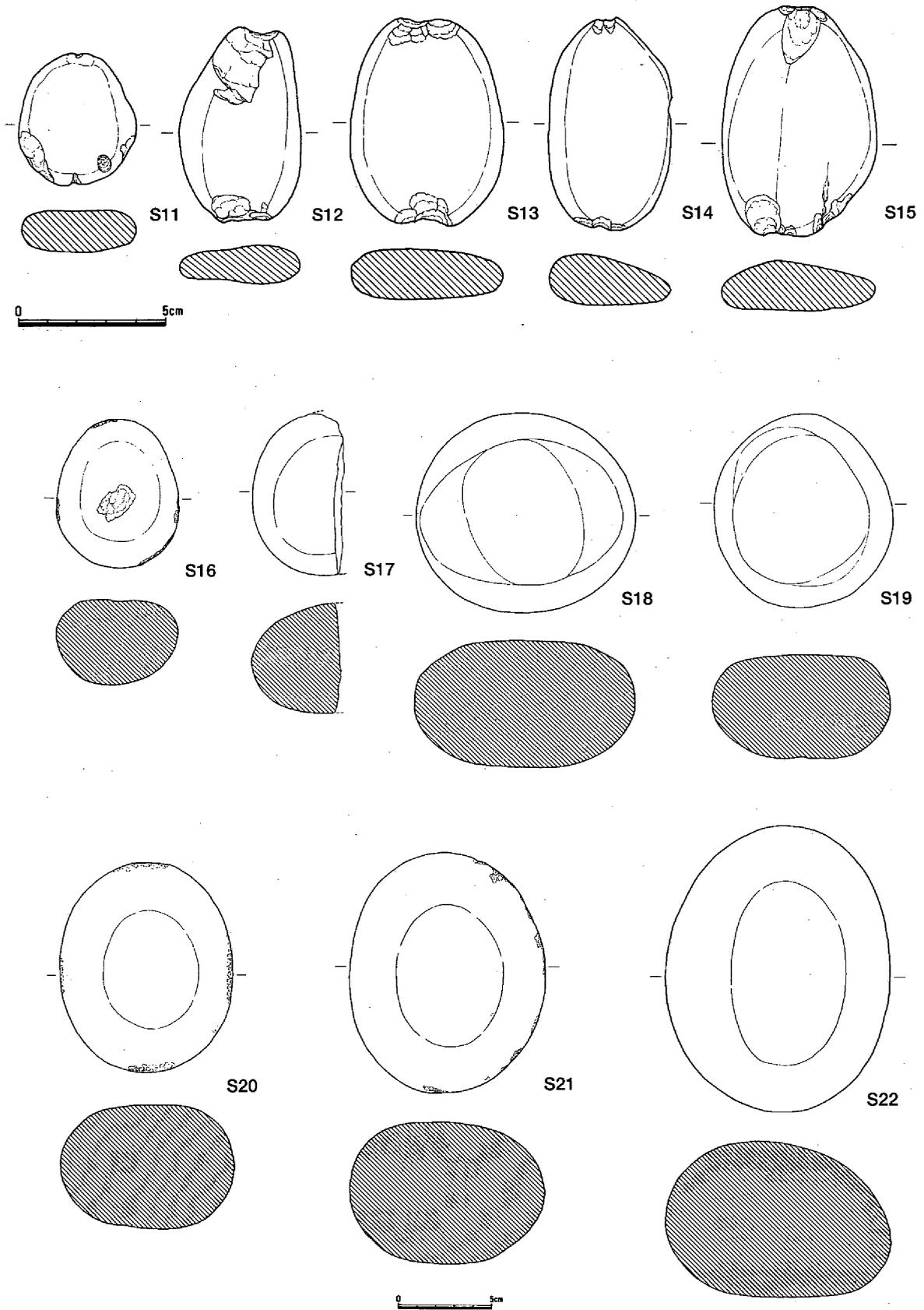
第6図 A地区出土縄文土器② (1/4)

(3) 石器 (第7・8図、図版12)

第7図ではサヌカイト打製の石器はS1～S9である。S1～S6は石鏃でいずれも凹基式石鏃と呼ばれるものである。長さ30mm前後、幅15～20mmの二等辺三角形を呈する。S7は石匙のつまみ部である。縦型ではなく横型のものと考えられる。S8は削器で、獣の皮剥ぎか穂摘み具として使用されたものであろう。S9は楔と思われる。S10は緑色凝灰岩製の小型磨製石斧である。



第7図 A地区出土石器① (1/2)

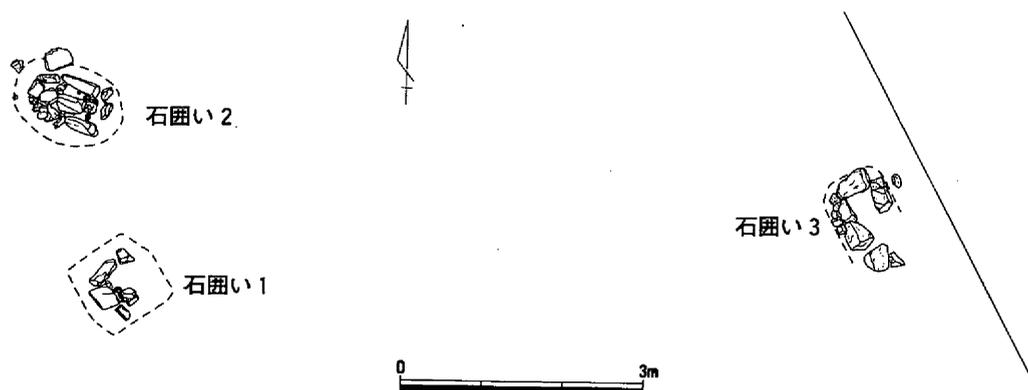


第8図 A地区出土石器② (1/2・1/3)

欠損はほんのわずかで、いまでも木を切り倒せそうである。長さ95mm、最大幅45mm、最大厚25mmを測る。第8図ではS11～S15は石錘で、河原石の両端打ち搔きのもとS14のように四方打ち搔いたものが見られる。甬崎天神山遺跡Ⅱ調査区⁽²⁾でも出土している。

S16は凹み石である。丸い河原石の平坦な面の中央を叩いて凹ませている。また周囲は打撃により4ヵ所少しかけている。叩き石としても使用されたものであろう。S17～S22はすり石で、円形あるいは楕円形のもとも形を整った河原石を擦って堅果などを石皿の上で擦り潰したり、叩き潰したりしていたものであろう。

2. 古代の遺構と遺物



第9図 B・C地区石囲い配置図 (1/90)

(1) 石囲い

石囲い1 (第9・10図、図版10)

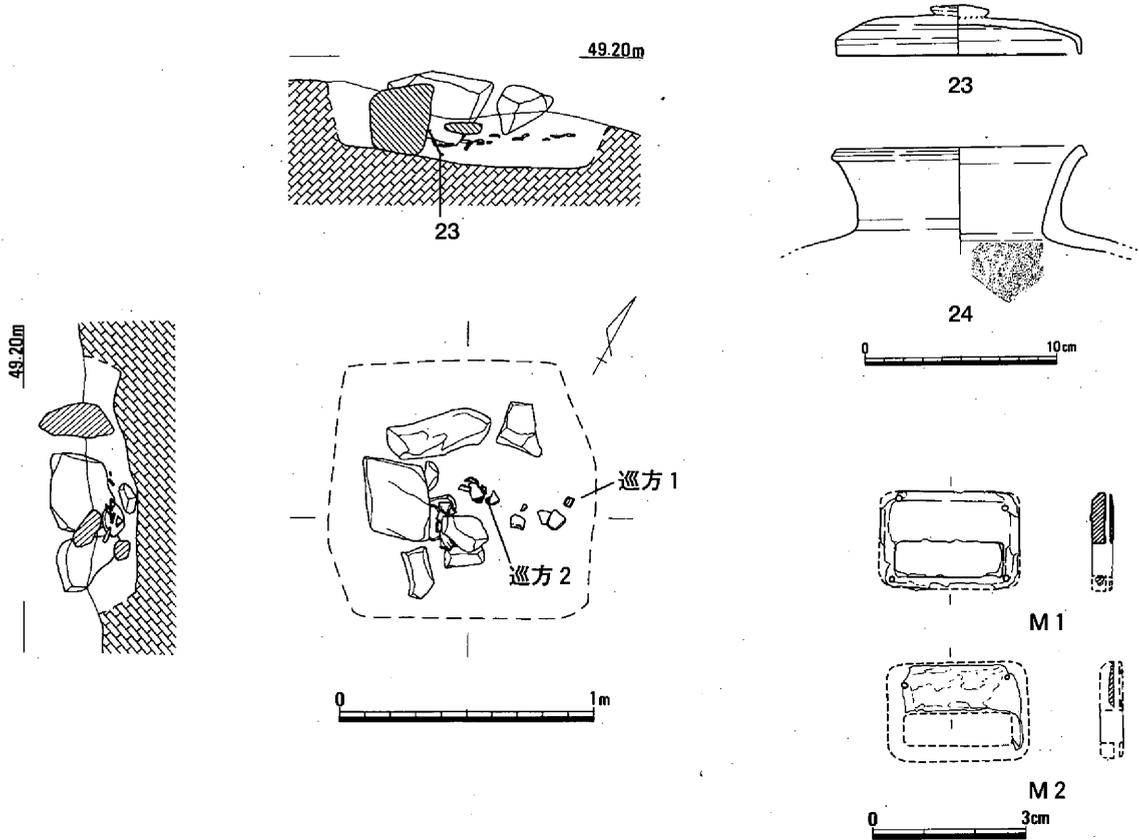
トレンチで検出した石囲いである。一辺20～40cmの角石を方形にして囲う。北側と東側は崩れているため全形は不明である。その崩れた北側、石囲いの外で青銅製の帯金具が出土した。巡方と呼ばれる古代の遺物である。また囲いの内部を発掘したところ、須恵器杯蓋の完形品と俵壺(横瓶とも言う)の胴部片と共にもう一つの巡方が発見できた。つまりこの石囲いには巡方2個を俵壺の破片を容器として杯蓋で蓋をしていたものである。火葬骨は発見できなかったもののこの遺構の性格は火葬墓と考えてよい。なお、この遺跡から南西約200mのすり鉢池古墳群で同一形態の石囲いを火葬墓として報告⁽³⁾している。

23は須恵器杯蓋で、扁平なつまみと口唇部の曲がり特徴である。24は外面細かい格子目、内面同心円叩きの胴部を持つ俵壺。M1は巡方1で、横27mm、縦20mm、重さ4.6gを測る。M2は巡方2で、残存状態が悪い。時期は須恵器杯蓋と巡方から考えて、8世紀後半としたい。

石囲い2 (第9・10図、図版10)

石囲い1から北西に2m離れて検出した。一辺20～60cmの角石を使用して長方形に囲う。東側の石はすでに消失していた。最大幅は36cm、現存長75cm、床面から石の上まで30cmを測る。

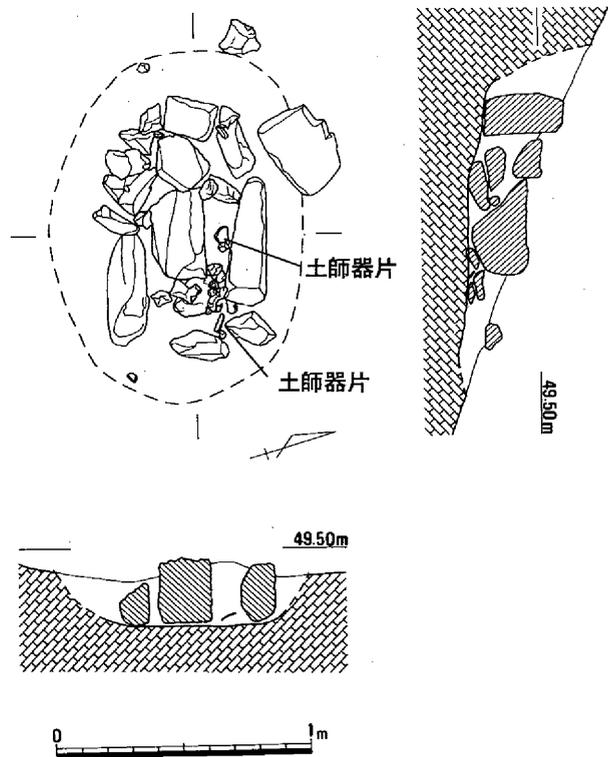
遺物としては土師器甕の胴部細片が床面内部の東端で出土しただけである。火葬墓ではあろうが、古代とは思えるが、時期を限定することはできない。



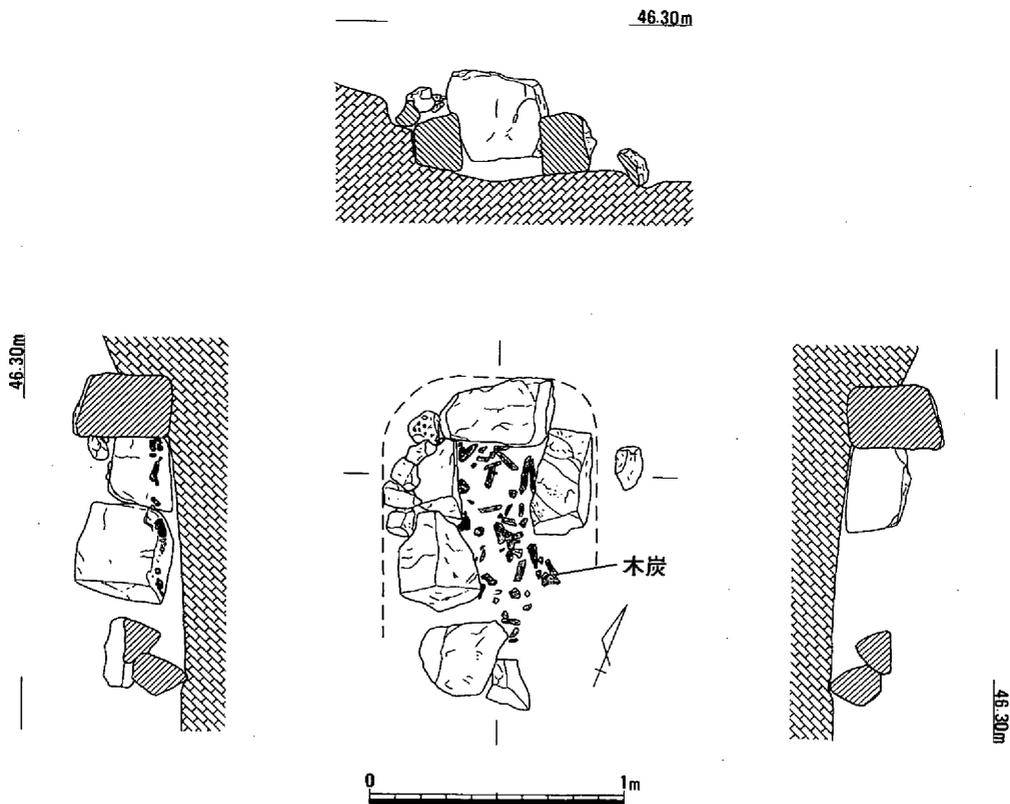
第10図 石囲い1 (1/30)・出土遺物 (1/4・2/3)

石囲い3 (第9・12図、図版11)

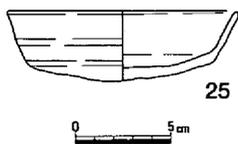
前2者よりも下方で、しかも平成6年度の調査で検出したもの。囲っている石は石囲い2より少し風化の度合いが弱い。南東隅の石は消失している。規模としては石囲い2と同様である。大きさは内法で幅30cm、現存長75cm、床面から石の上まで35cmを測る。床面には木炭が敷き詰められていた。鑑定の結果、木炭はコナラ属クヌギ節に同定されたが、他に遺物は出土していない。時期はしたがって不明と言わざるを得ない。しかし周辺の表土から第13図の須恵器杯が出土している。状況からこの遺構に近い時期と考えると、平城Ⅲ当たりであろう。



第11図 石囲い2 (1/30)



第12図 石囲い3 (1/30)



第13図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

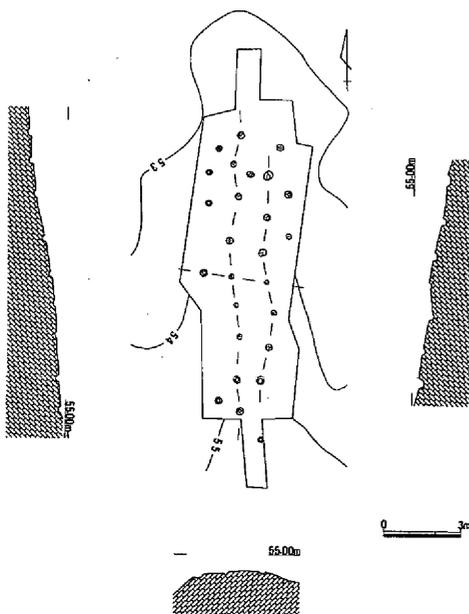
(2) 遺構に伴わない遺物

B区の南西部において遺構は検出できなかったが、第11図25の土器がほぼ完全な形で出土している。遺物の出土していない石囲い2と3の時期を判断する状況証拠に成りうる。土器は土師器杯と呼べるもので、口径12cm、器高3.6cmを測る。

3. その他の遺構

(1) 柵列

南東部の広い尾根から派生する細い低い尾根が北に向けて伸びているが、その痩せ尾根上に2筋の柱穴列を2条検出した。柵列か掘立柱建物か判定しがたい。遺物は全く出ていない。したがって時期は不明である。ただ土質から見て近世以降のように思われる。



第14図 D地区柵列状遺構 (1/300)

第3節 結 語

1. 縄文時代

住居跡などの生活場所は遺構として見つけることができなかった。しかし土器包含層としてかなりの量の縄文土器片が出土した。近くに住居があることは明らかである。また石器からこの縄文人達は漁労・狩猟・堅果類の採集・製粉・材木の伐採・加工などを行っていた事が推定できる。土器の形式から長期間、何代にも亘ってこの場所に暮らしていたものと考えられる。縄文土器の年代は縄文後期から晩期のものである。この遺跡から1 km東の服部遺跡では自然河道から少量の縄文土器が出土し、そのすぐ東の県立大学建設地である南溝手遺跡では、縄文後期の深鉢形土器の底部外面に粉の圧痕跡が発見されている⁽⁴⁾。

2. 古代

火葬墓と考えられる石囲いが3基集中して東向き緩斜面に造られ、しかもその1つには律令時代には官人しか持つことを許されなかった帯金具⁽⁵⁾を副葬している。備中国府か加夜郡衙⁽⁶⁾に勤めていた役人の家族墓地の可能性が高い。この斜面からは先の服部遺跡や北溝手遺跡などの平野部が一望できる。またその先には国府推定地さえも遠望できる。また本遺跡の周辺の小高い尾根には6世紀代の横穴式石室を持つ前方後円墳や大型円墳を含む福井大谷古墳群⁽⁸⁾、5世紀代の埴輪を持つ中山6号墳⁽⁹⁾・西山26号墳⁽¹⁰⁾・中国地方最古の初期須恵器窯跡奥ヶ谷窯跡⁽¹¹⁾などがある。このように古墳時代から墓地・墓域として発展していた地域であり、横穴式石室の追葬が奈良時代まで及んでいるこの地域では火葬墓は豪族の末裔の官人のものと考えてよいのではあるまいか。

註

- (1) 絶滅が懸念されている湿地性植物が群生していることが発見された。
- (2) 浅倉秀昭ほか「甬崎天神山遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告書89』岡山県教育委員会 1994年
- (3) 高田明人ほか「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告書13』総社市教育委員会 1993年
- (4) 平井泰男ほか「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書100』岡山県教育委員会 1995年
- (5) 「巡方の法量と官位」については亀田博氏1983年の研究がある。
- (6) 総社市教育委員会の調査によっても所在が確認できていない。
- (7) 未だ所在が確認できていない。
- (8) 総社市教育委員会が1993～1994年に宅地造成工事に伴い発掘調査した。
- (9) 岡山県古代吉備文化財センターが1993～1994年に中国横断自動車道建設に伴い発掘調査した。本書に掲載している。
- (10) 本書に掲載している。
- (11) この遺跡の東南にあるひいご池の土手の取りつく尾根裾部に半地下式登り窯として築造されている。本書に掲載している。

縄文土器一覽

掲載番号	実測番号	器種	特徴	色調	胎土	備考
1	6	深鉢	内面ミガキ。外面は沈線による施文の後、沈線内部のみに縄文施文。口縁端部に刻み。	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石、石英(多)	
2	7	深鉢	内面ミガキ。外面ミガキ後、沈線による区画文。沈線の区画上部に円形刺突、内部に縄文。	7.5YR5/3(鈍い褐)	6mm大の砂粒含む	波状口縁
3	14	深鉢	内面ミガキ。口縁部は内湾し、RL縄文施文後、巻き貝による区画文を施文。	2.5Y5/2(暗灰黄)	3mm以下の砂粒含む 長石(多)	
4	15	深鉢	内外面ミガキ。口縁外面を肥厚させ、RL縄文施文後、沈線による区画文。	10YR6/3(鈍い黄褐)	2.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
5	17	浅鉢	内外ともミガキ?。口縁部に二条の沈線がめぐる。	10YR7/3(鈍い黄褐)	1mm前後の砂粒含む 長石・石英(多)	
6	4	深鉢	口縁部を外方に肥厚拡張し、拡張部に縄文施文後、刺突と弧状沈線の渦巻文と区画文、内面ミガキ。	10YR6/3(鈍い黄褐)	1.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
7	6	深鉢	口縁部外方を肥厚させ、拡張部に円形の穿孔とそれを取り巻く沈線で渦巻文を施文、内面ミガキ。	10YR6/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒含む 長石(多)	
8	10	深鉢	内外ともミガキ、外面口縁部外面を肥厚させ、そこにRL縄文施文の後、沈線一条をめぐらす。	2.5Y7/3(浅黄)	2.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	波状口縁
9	8	深鉢	外面は丁寧なミガキ。口縁部は斜内上方へ拡張し、下端に強いヨコナデによりふい穢をつける。	10YR5/4(鈍い黄褐)	2.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
10	16	鉢	内外ともミガキ、口縁端部を肥厚させ、その上端部に二条の沈線をめぐらす。	2.5Y6/3(鈍い黄)	1mm程の砂粒含む 長石、石英(少)	
11	11	浅鉢	内外ともミガキ、口縁部の内外に沈線をめぐらせ、上唇部に縄文施文。	2.5YR7/4(浅黄)	1mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
12	12	鉢	内外とも巻貝?によるミガキ、口縁部は外反し、口唇部外面にRL縄文施文。	10YR7/3(鈍い黄橙)	4mm程の砂粒含む	
13	13	深鉢	風化顕著、口縁部をわずかに肥厚させる。端部は尖り気味。	2.5YR6/2(灰黄)	3mm以下の砂粒含む 石英(多)	
14	18	深鉢	外面巻貝条痕、内面ミガキ?口縁端部にオサエあり。	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
15	19	鉢	内外ともミガキ、円湾する口縁で端部は尖る。	7.5YR6/4(鈍い橙)	3mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
16	20	鉢	外面ヨコ方面の巻貝によるミガキ、口縁部は外面に肥厚し、端部は丸く、やや内傾する。	5YR4/4(鈍い赤褐)	2.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
17	9	深鉢	内外とも巻貝による丁寧なミガキ、口縁端部は一部つまんで平たく仕上げている。	10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
18	24	深鉢	底径7.4cm、内外とも丁寧なナデ、底部は円板の周位に粘土紐を巻いて体部を作る。凹み底。	10YR7/4(鈍い黄橙)	3mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
19	25	深鉢	底径7.4cm、内外ともナデ、凹み底。	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
20	21	深鉢	底径(推定)8.4cm、内外とも風化が顕著、内底面はナデ、底部は円板を充填して上げ底にしている。	5YR6/6(橙)	1.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	
21	23	鉢	底径4cm、内外底部はナデにより平滑な仕上げ、凹み底。	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒含む	
22	22	浅鉢	底径(推定)4.6cm、内面巻貝によるミガキ、底部円板充てんにより、内面に段を残す、平底。	7.5YR6/4(鈍い橙)	1.5mm以下の砂粒含む 長石・石英(多)	

石製品一覽

掲載番号	実測番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	材質	備考
S1	4	石 鎌	20	13.5	3.5	0.63	サヌカイト	一方の脚欠損
S2	15	石 鎌	19.5	15.5	2	0.6	サヌカイト	表採 先端欠損
S3	14	石 鎌	20.5	11.5	2.5	0.4	サヌカイト	表採 脚部欠損
S4	3	石 鎌	18	12	2.8	0.42	サヌカイト	
S5	1	石 鎌	17.5	12.5	3	0.37	サヌカイト	端部欠損
S6	2	石 鎌	15.5	12.5	2.5	0.35	サヌカイト	先端欠損
S7	22	石 匙	23	23	5.5	3	サヌカイト	
S8	21	スクレイパー	54	37	7.5	17.3	サヌカイト	
S9	20	楔	55.5	60	13	50	サヌカイト	
S10	9	石 斧	94.5	46	24	156.8	緑色凝灰岩(?)	磨製
S11	5	石 錘	47.5	42	15.2	34	凝灰岩	切目
S12	6	石 錘	69.5	44	13.5	58	安山岩	打欠
S13	16	石 錘	74	54.5	18	119	砂岩	表採 打欠
S14	7	石 錘	76	43.5	19	87	砂岩	打欠
S15	8	石 錘	82	55	20.3	120	安山岩	打欠
S16	13	凹石	79.5	66	46	333.5	石英斑岩	中央敲打
S17	17	すり石	87	49	59	377.7	砂岩	
S18	10	すり石	117	108	69	1253.6	安山岩	裏面中央敲打
S19	11	すり石	104	94.5	57	849.3	花崗閃緑岩	裏面中央敲打
S20	12	すり石	112	93	66	1026.4	石英斑岩	周縁中央敲打
S21	18	すり石	128	105	76.5	1477.4	花崗閃緑岩	両端敲打
S22	19	すり石	154	119	84.5	2350	角閃石安山岩	

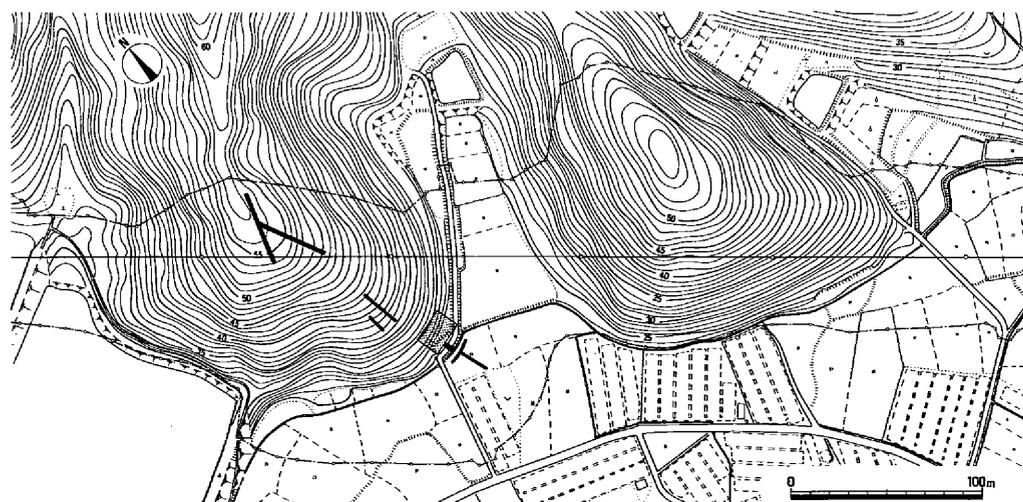
第5章 奥ヶ谷窯跡

第1節 位置と経過

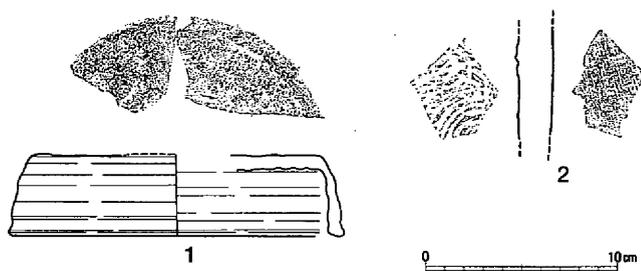
奥ヶ谷窯跡は岡山県総社市福井小字奥ヶ谷に所在する須恵器の窯跡である。ここは吉備高原に接した総社平野の北縁にあたり、奥ヶ谷窯跡はその南裾に位置している。窯跡の南側には大きく東西に延びる標高50m程度の低丘陵が横たわっており、窯跡は言わば大きな谷の中にひっそりと築かれているように感じられる。このため総社平野からは直接、窯を臨むことはできない。

また、ごく周辺には中山古墳群のほか、南の丘陵には西山古墳群や新田古墳群などの古墳群が多数所在する。確認されている限りで、特に中山古墳群や西山古墳群などは4～5世紀代を中心としており、当窯との関連が注目されるものである。さらに6世紀以後も、この周辺は古墳群や墳墓などが連続と形成されている地域であるが、いずれも小規模な古墳が多いことは特徴的である。また、この北には鍛冶道具が出土した随庵古墳（5世紀後半）や西方の谷の奥には6世紀以降の製鉄関連遺跡などが確認されている。これらの点は、総社平野北部の集団について、その吉備における位置付けを検討するうえで非常に重要である。

当該地は、『岡山県遺跡地図』第三分冊（岡山県教育委員会、昭和50年）あるいは『全国遺跡地図岡山県』（文化庁、昭和60年）によると、周知の埋蔵文化財包蔵地として丘陵頂部に中山古墳群が示されていたが、その他のものは確認されていなかった。中国横断自動車道は、この中山古墳群の所在する丘陵の南部分をカットすることとなり、これに伴い岡山県教育委員会では、中山古墳群6・7号墳などの発掘調査を平成5年4月から実施していたが、その調査中の平成5年6月、西側に位置する丘陵の崖面で窯体が発見され、須恵器片が採取された。このため急遽日本道路公団とその取り扱いに



第1図 調査区位置図 (1/4000)



第2図 表採遺物 (1/4)

ついて協議を行ったが、路線の変更等は不可能であり、窯跡の記録保存と周辺の確認調査を実施することとなった。

窯跡の調査は、西山古墳群の調査にあっていた6名の調査員の内の3名が担当することとなり、平成5年11月2日から12月8日までの期間で、確認調査のトレンチを含めて計450㎡の調査を実施し、

その結果吉備における初期の須恵器窯であることが明らかとなった。また、平成5年12月17日には、島根大学の時枝克安氏と島根職業能力開発短期大学の伊藤晴明氏に熱残留地磁気の測定を依頼して実施した。さらに平成6年6月15日には、当該年度の調査担当者が工事に伴う立会調査を行い、農道の造成土から遺物を採取した。

第2節 調査の概要

検出された窯体は残存状況が非常に悪いが、周溝と作業面を伴う吉備における初期の須恵器窯であることが明らかとなった。窯体内からの出土遺物は少量であったが、作業面や農道の造成土などから遺物が出土している。

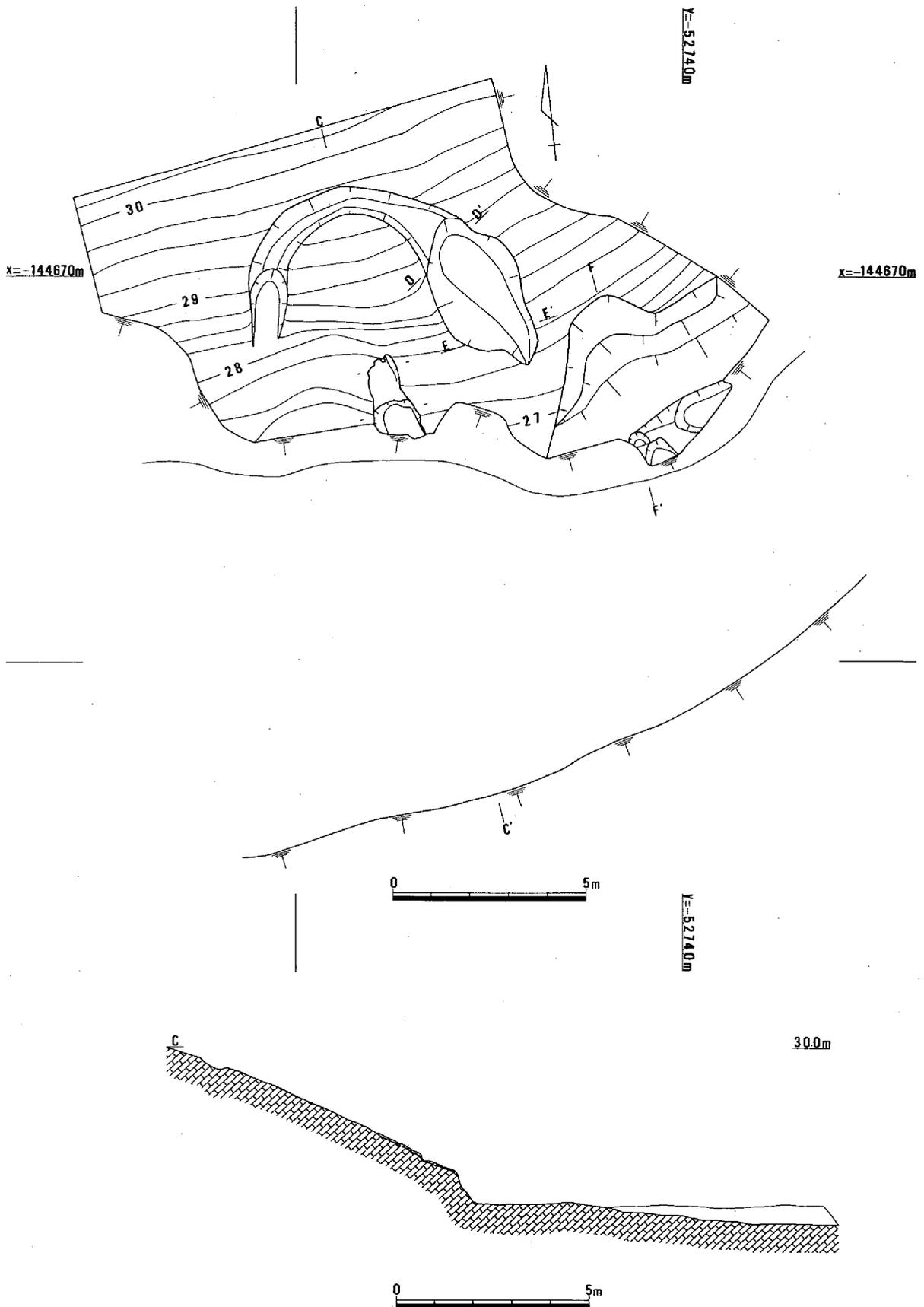
確認調査のトレンチは、丘陵頂部と斜面、窯跡前面の農道と水田部に設定した(第1図)。丘陵斜面では蔵骨器の蓋と甕片(第2図1、2)が採取されたこともあり、窯等その他の遺構の確認のために調査したが、遺構や遺物は確認されなかった。また丘陵には、立木の伐採に伴う重機の進入路がつづら折れに開削されていたが、この部分でも遺構や遺物は確認されなかった。農道と水田部のトレンチは、窯や灰原の残存状況を確認するために調査したが、遺構などは確認されなかった。この点や出土遺物の量などから、奥ヶ谷窯跡は単独で築かれた可能性が高い。

1. 窯体 (第3～5図、図版13・14)

奥ヶ谷窯跡の窯体は、南西に延びる尾根の先端裾部で、やや東の谷に入り込んだ谷の口に位置している。標高は27～28mを測る。斜面に対して直交方向に延びており、窯体の主軸方向はN-9°-Wである。検出されていないが、燃焼部は谷に向かっている。基盤となる地山は花崗岩の岩盤であるが、風化が進んでいるように思われた。

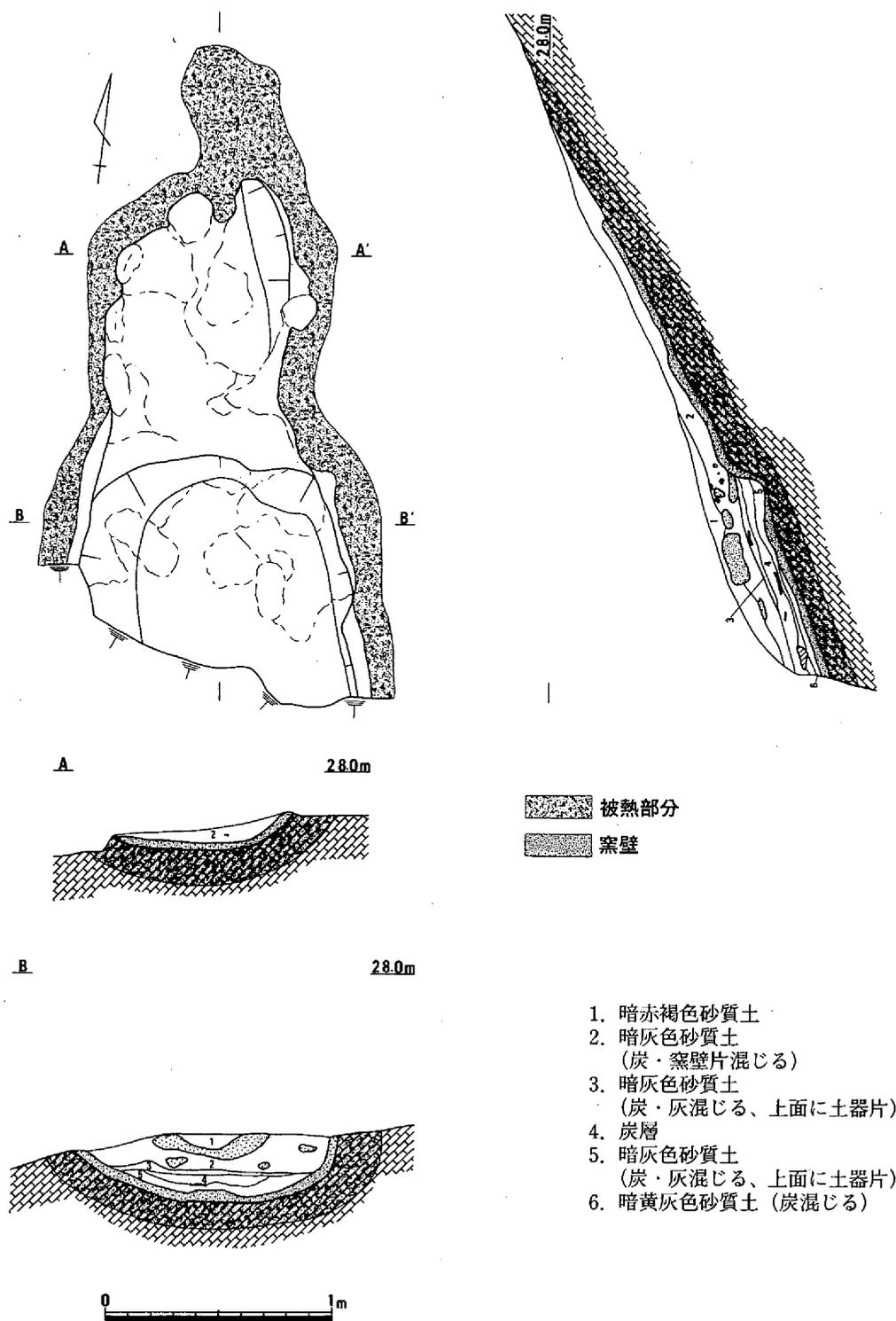
窯体の自然流失は著しく、またかなりの損壊も被っていた。丘陵の裾には農道が沿っており、窯はこれにより大きく削平されている。窯前面の農道部分を掘り下げ、地山の下がりを確認したものの、燃焼部などは残存していなかった。ただし、農道の造成土中からは須恵器片などが出土しており、この丘陵裾を削平した際の残土がそのまま盛られたようである。窯前面の水田部は、耕作土直下で地山が確認され、構造改善などのためか灰原などは確認されなかった。ここには遺物もほとんど含まれていない。

検出された窯体は床面の一部のみで、残存長250cm(残存水平長235cm)、残存幅122cm、残存高28cmを測る。床面中央には高さ21cmの段が認められ、北半部と南半部に分かれている。北半部の横断面は

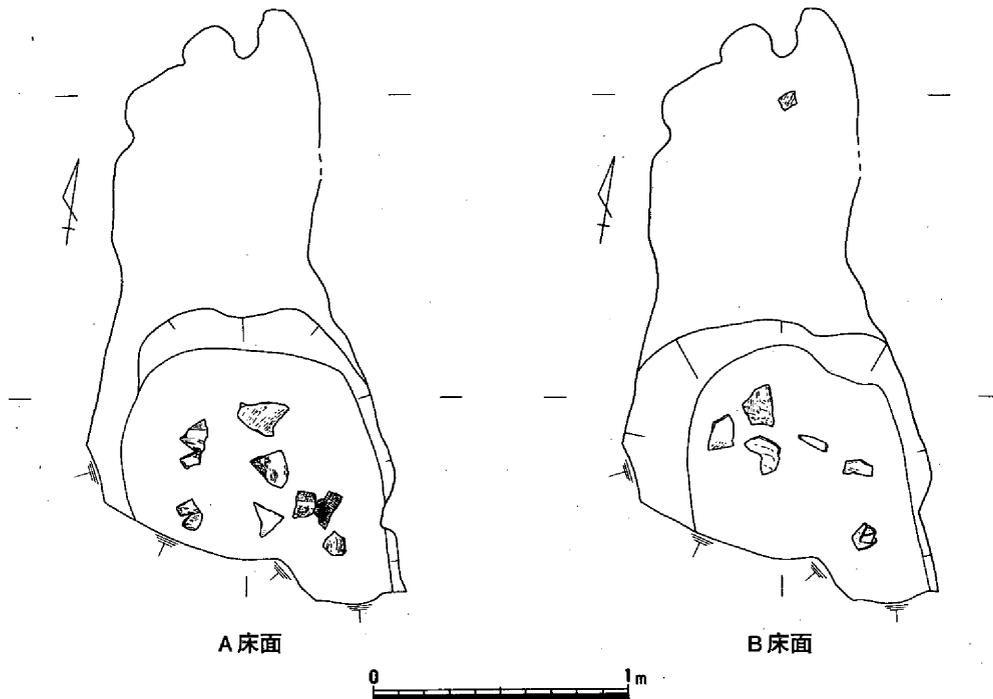


第3図 全体図 (1/150)

わずかに東下がりであるがほぼ水平で、緩やかに窯体東壁に移行する。床面の傾斜角度は 27° を測る。一方、南半部の横断面は皿状に窪んでおり、床面の傾斜角度は北半に比べやや緩やかで 20° を測る。この部分の窯体東壁は上方に立ち上がるが、西壁は立ち上がりは確認されず、床面の湾曲のまま緩やかに延びている。



第4図 窯体 (1/30)



第5図 窯体内遺物出土状況 (1/30)

後述する窯に伴う溝と作業面、前面の地形との関係から、推定される窯体の全長は、最大で考えても8m程度（水平長7m程度）である。しかし、それよりもっと短かった可能性が高いと思われる。幅についても比較的狭いと思われ、長さと併せて特徴的である。燃烧部は農道の高さ付近と推定され、検出部分は焼成部の中程ではないかと考えられる。構造は半地下式である。

床面には厚さ3～4cm程度の粘土を貼っており、窯体内に落ち込んでいた窯壁片には、スサが練り込まれており、厚さ9cmを測る。この本来の床面とは別に、窯体内の土層と遺物出土状況から、厚さ4.5cmの炭層（第4層）を境に上下2面の焼成床面が認められる。炭層の上面を水平にし、部分的に厚さ2～3cm程度の砂質土（第3層）を施した面をA面と称する。窯体床面上に厚さ3cmの炭混じり層が存在し、その上に厚さ3～5cm程度の砂質土（第5層）を施した面をB面と称する。これらは窯体南半の窪み部分に限られている状況で、北半部分には及ばない。それぞれの焼成床面の上面には、焼き台として用いられたと思われる須恵器片が検出された。

A面の出土遺物は、26・36・37・40・41・42・53・68・80・85である。B面の出土遺物は、7・13・24・43・50・72・87である。炭層からの出土は67・91である。

2. 付属施設

(1) 周溝 (第3・6図)

窯体の北側後方に検出された溝である。平面形は「U」字形を呈し、窯体の上半部を取り巻くように存在する。東側の南端が、作業面の西端付近まで延びて止まっているが、作業面の方が窯体の方向へ延びているので、この溝は当初から窯体の周りを全周するものではなかったと思われる。

標高27.5～29.75mの間にあり、窯体北端から北へ3.82m、東西で2.25m離れて位置している。溝の

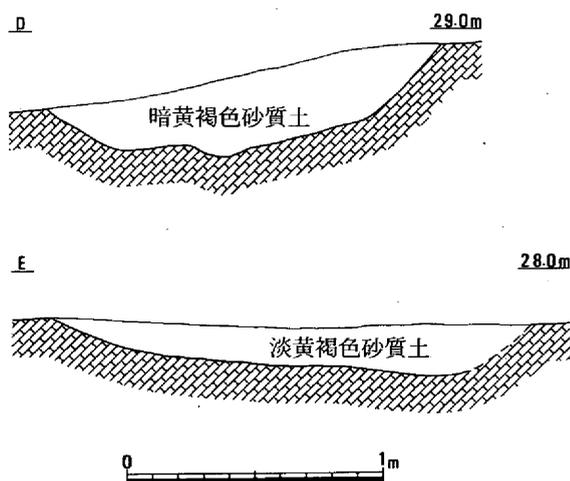
幅は75~142cm、深さ30cmを測る。溝が機能した結果抉れたか、あるいは当初からの構造のためか、標高28.5m付近では幅が240cmと広がる。

この溝は、雨水が丘陵斜面を伝い、直接窯体に流れこまないようにするためのものと考えられる。ただし、作業面にはこの溝からの排水が流れこむため、これについては何らかの工夫があったかもしれない。図示していないが、この周溝から須恵器の小片が1片だけ出土している。

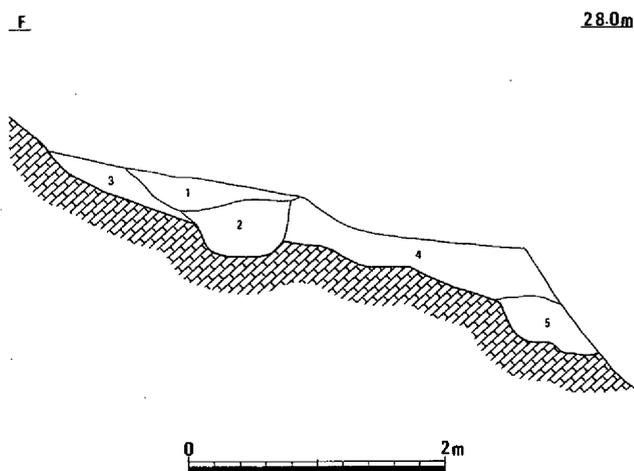
(2) 作業面 (第3・7図、図版15)

窯体の東に約3m離れて検出された遺構で、窯の操業に関係する何らかの作業を行った場所と考えられる。等高線に沿って、東西に長い造成面を形成しているが、全容を捉えることはできない。

検出された作業面は東西6.9m、南北4.5mを測り、上下2段の面が確認された。標高27.5m付近から



第6図 周溝断面 (1/30)



1. 暗灰黄褐色砂質土
2. 暗褐色砂質土
3. 灰黄褐色砂質土
4. 暗灰黄褐色砂質土
5. 暗赤褐色砂質土 (土器、焼土、炭混じる)

第7図 作業面断面 (1/60)

地山をカットし、緩斜面と段を形成している。上段は緩斜面で、幅336cmを測る。下段は上段との比高が42cmあり、法面は急である。床面は標高25.42m、現存で東西315cm、幅118cmを確認した。また、下段の床面には深さ6cm程度の円形あるいは楕円形の浅いくぼみが3基認められた。窯体との関係では、下段が燃焼部とほぼ同じ高さに位置すると思われる。作業面埋土の上層は暗灰黄褐色砂質土、くぼみには暗赤褐色砂質土が堆積しており、これらの土層からは須恵器・軟質土器・土師器・土製品などが出土している。また、後者には焼土や炭が含まれているが、灰原と思われるほどの量はない。

この作業面覆土から出土している遺物は、9・10・35・45・48・55・57・77・88・90・92・100・103・104・105・106・C3である。図示していないが、この他にも多くの破片が出土している。

3. 出土遺物 (第8~17図)

奥ヶ谷窯跡では、窯体内や作業面覆土、表土、農道造成土から遺物が出土している。この内、窯体内は少量で、大半が表土や農道造成土からの出土である。

種類は須恵器、軟質土器、土師器、土製品である。これらは、ほとんどが破片の状態で、器形が判明するものはほとんど認められない。出土量については、須恵器が最も多く大半を占めている。

なお、今回は須恵器として報告しているが、この中には陶質土器と称するほうが適当なものも存在する可能性があると思われる。

(1) 須恵器 (第8～16図、図版16～24・26)

須恵器については、大形の甕や壺と思われる破片が最も多く、高杯は5片、器台は1片と極めて少ない。個体数を推定することは困難であるが、破片量の割合が器種組成をほぼ反映していると考えてもよいと思われる。

本来であれば器種別に記載するところであるが、甕と壺の区別や大きさの区別が困難なものが多いため、それらについては「甕・壺」として区別を明確にはしなかった。格子タタキを施した薄いものについては「壺・甕」とした。また、これらについては、胎土による分類を中心として報告する。

胎土中の砂粒が少ないものをⅠ類、砂粒の多いものをⅡ・Ⅲ類とし、さらにⅡ類は粒径の小さいもの、Ⅲ類は粒径の比較的大きいものとした。その細分については以下のとおりである。

Ⅰa類—少量の長石粒と石英粒を含む Ⅰb類—少量の長石を含む

Ⅰc類—砂粒をほとんど含まない

Ⅱa類—小径の長石粒を非常に多く含む Ⅱb類—小径の長石が多く、石英粒を含む

Ⅱc類—小径の長石粒を多く含む

Ⅲa類—大径の長石粒を非常に多く含む Ⅲb類—大径の長石粒や石英粒を多く含む

Ⅲc類—大径の長石粒を多く含む

いずれにしても、Ⅰ類以外は、全体的に砂っぽい印象を強く受ける胎土が多い。焼成については良質なものが多く、器壁の色調も灰色を基調とするものが多い。

甕や壺の成形についてはタタキが行われており、内面に当具痕跡、外面にタタキが認められるものもある。これにより当具とタタキの工具には複数の種類があることも確認された。当具には「無文当具」、3方への放射状線刻を有し木目の粗い「同心円当具」、木目の細かい「円弧当具」の3種類が確認された。タタキについては格子タタキと平行タタキがあり、格子タタキについては、格子の大きさや形状から10種類が認識できた。

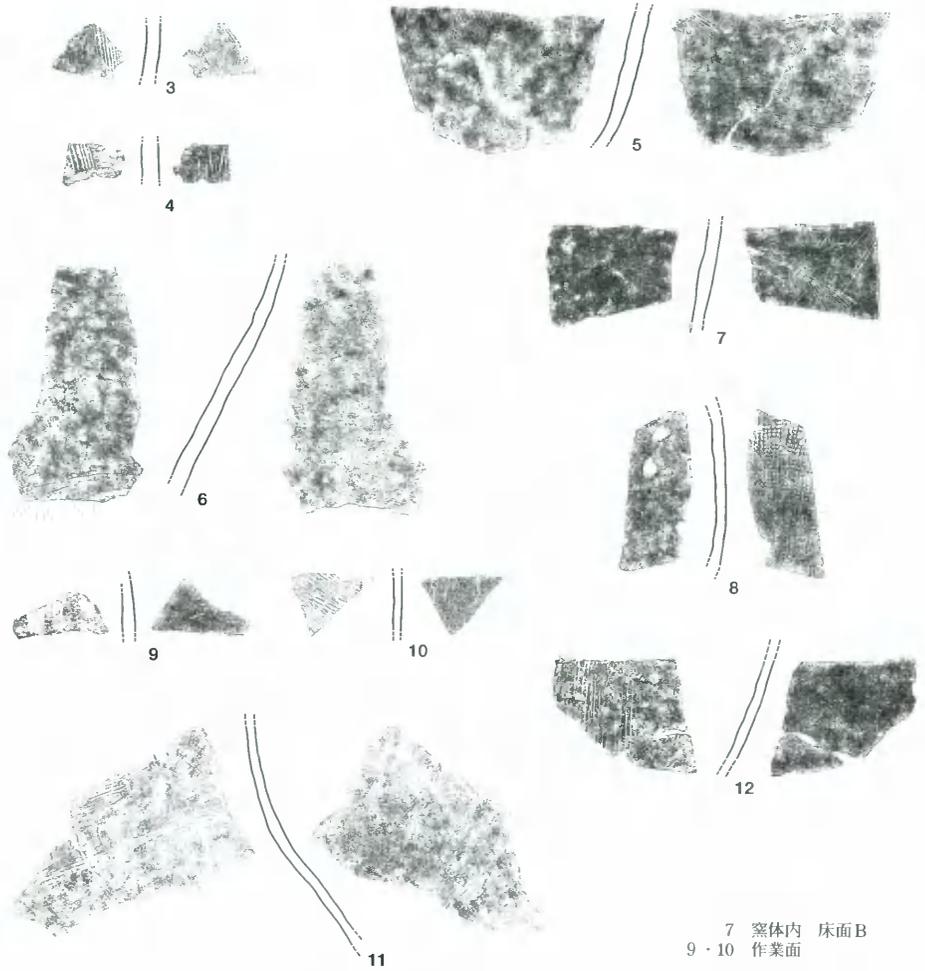
しかし、器種によっては調整段階でナデやハケメ（外面はこの後ナデ）を徹底して施すものが多く、これは当窯の特徴でもある。ハケメについては、器壁に残る凹凸幅（＝夏材と冬材の幅）の相対的な割合が異なり、さまざまである。凹部の幅が凸部に比べ狭いものが多いが、ほぼ同じものや凹部が広いものもある。これは拓本で表現することは困難であるので、できる限り記述した。また、ハケメは比較的粗い印象を与えるものが多いが、幅1cm当たりの凹部の条数も3～7条とさまざまである。これらは一つのハケメ工具内でも部分によって異なることが認められている。

甕・壺 (第8～15図、図版16～23・26)

Ⅰa類

3・4は同一個体と思われるもので、器壁外面は浅黄色や鈍い褐色を呈する。黒色砂粒をわずかに含み、器壁は厚い。内外面ともハケメが認められるが、後にナデが施される。内面のハケメ（4～5条/cm）は凹部の幅が広いが、3の外面のハケメは凸部が広い。5は雲母をわずかに含み、器壁は厚

い。内面は無文当具による凹凸が認められ、後に縦方向のハケメとナデが施される。外面は内面と同じハケメ（5条/cm）が横方向に施されるが、平行あるいは格子タタキの痕跡がわずかに認められる。6は雲母粒をわずかに含み、器壁は厚い。内面は横方向に強いナデが施されるが、同心円当具の痕跡が残されている。外面はナデである。7は黒色砂粒をわずかに含み、器壁は比較的厚い。内面はナデが施されるが、無文当具によると思われる凹凸が残る。外面はナデが施されるが、乱方向にハケメ（6条/cm）が認められる。窯体床B面出土である。8は黒色砂粒をわずかに含み、器壁は比較的薄い。陶質土器の可能性のあるものである。内面は丁寧なナデが施されるが、かすかに円弧当具の痕跡



7 窯体内 床面B
9・10 作業面

0 10cm

第8図 出土遺物① (1/4)

が残る。外面も丁寧なナデが施されるが、当窯では最も小さな区画（1.5mm四方）の格子タタキが残されている。軸（幅1mm）と直交する線（幅1mm）も通るものである。外面は黒灰色を呈し、焼成も非常に堅緻である。9～12は同一個体と思われるもので、雲母や赤色土粒を若干含み、器壁は薄い。内外面ともハケメ（3～6条/cm）が認められるが、後によくナデが施される。ハケメは凹部と凸部の幅がほぼ同じである。焼成は11の下半が不良で、色調も基本的に鈍い黄橙色を呈する。9・10は作業面覆土からの出土である。

I b類

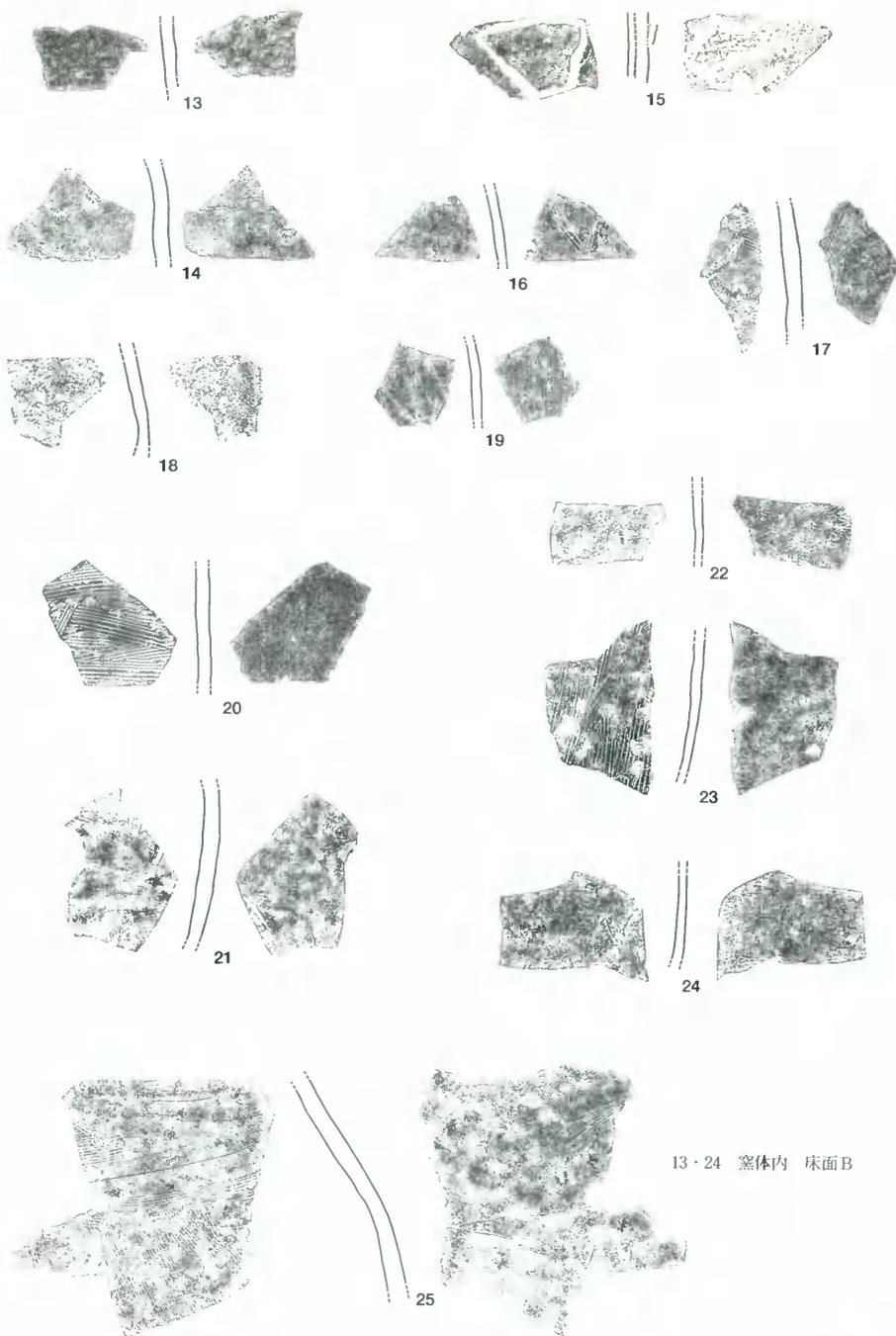
13・14は同一個体と思われるもので、器壁は厚い。内外面ともよくナデが施される。13は窯体床B面出土である。15は器壁が厚く、内外面ともよくナデが施される。格子タタキを施す器壁の薄い土器片が両面に溶着している。16・18・19は器壁が薄く、内面はナデ、外面はハケメ（4～5条/cm）の後ナデを施している。18は焼成が不良で、19とともに灰黄色を呈する。17・21・25は器壁が厚く、内面はハケメ（4～7条/cm）の後強いナデが横方向に施されている。21のハケメは凹部と凸部の幅が同じである。20は器壁が比較的薄く、外面は赤味の強い灰褐色を呈する。内面には凹部が広いハケメ（4条/cm）が横方向に、外面はよくナデが施されている。22・23・24は同一個体と思われるもので、器壁は薄く、焼成は非常に堅緻である。内外面ともハケメ（4～7条/cm）の後ナデが施されている。24は窯体床B面出土である。26は器壁が厚い。内面は木調整で、外面は乱方向のハケメ（6条/cm）の後ナデを施している。窯体床A面出土である。27は器壁が比較的厚い。内面はナデ、外面は縦方向のハケメ（6条/cm）が施されているが、平行あるいは格子タタキがわずかに残されている。28・30は器壁が比較的薄い。内面はナデが施されるが、同心円当具の痕跡が明瞭に残っており、外面はナデを施している。29は器壁が比較的薄い。内面はナデ、外面は縦方向のハケメ（6条/cm）の後ナデが施されるが、ごくわずかに格子タタキが残っている。31は器壁が比較的厚い。内面はハケメ（6条/cm）、外面はナデが施されるが大きい区画（4×2mm）の長方形の格子タタキが残る。軸（幅2mm）と直交する線（幅2mm）は通るもので、凹凸は大きい。32・33は同一個体と思われるもので、器壁は厚く、焼成は非常に堅緻で、断面の色調は鈍い赤褐色を呈する。内外面とも丁寧なナデが施されるが、33の外面には平行タタキが残っている。32の外面は黒褐色を呈し、自然釉がかかる。これは陶質土器の可能性があるとと思われる。

I c類

同一個体と思われる34・35のみで、頸部と肩～胴部が認められる。器壁は薄く、青味の強い灰色を呈する。焼成も非常に堅緻で、断面の色調は主に鈍い赤褐色を呈する。推定される頸部の外径は21.8cmで、垂直に立ち上がり口縁部に向かって外反するようである。頸部の内外面は丁寧なヨコナデで、内面には指の押圧痕跡も認められる。肩部は頸部から屈曲し、撫で肩である。最大径は48cmを測る。肩～胴部の内外面とも非常に丁寧なナデを施している。内面にはハケメか同心円当具の痕跡と思われるものも認められるがどちらであるか確定できない。作りは他の遺物と比較して異質であり、陶質土器の可能性も考えられる。35は作業面覆土からの出土である。

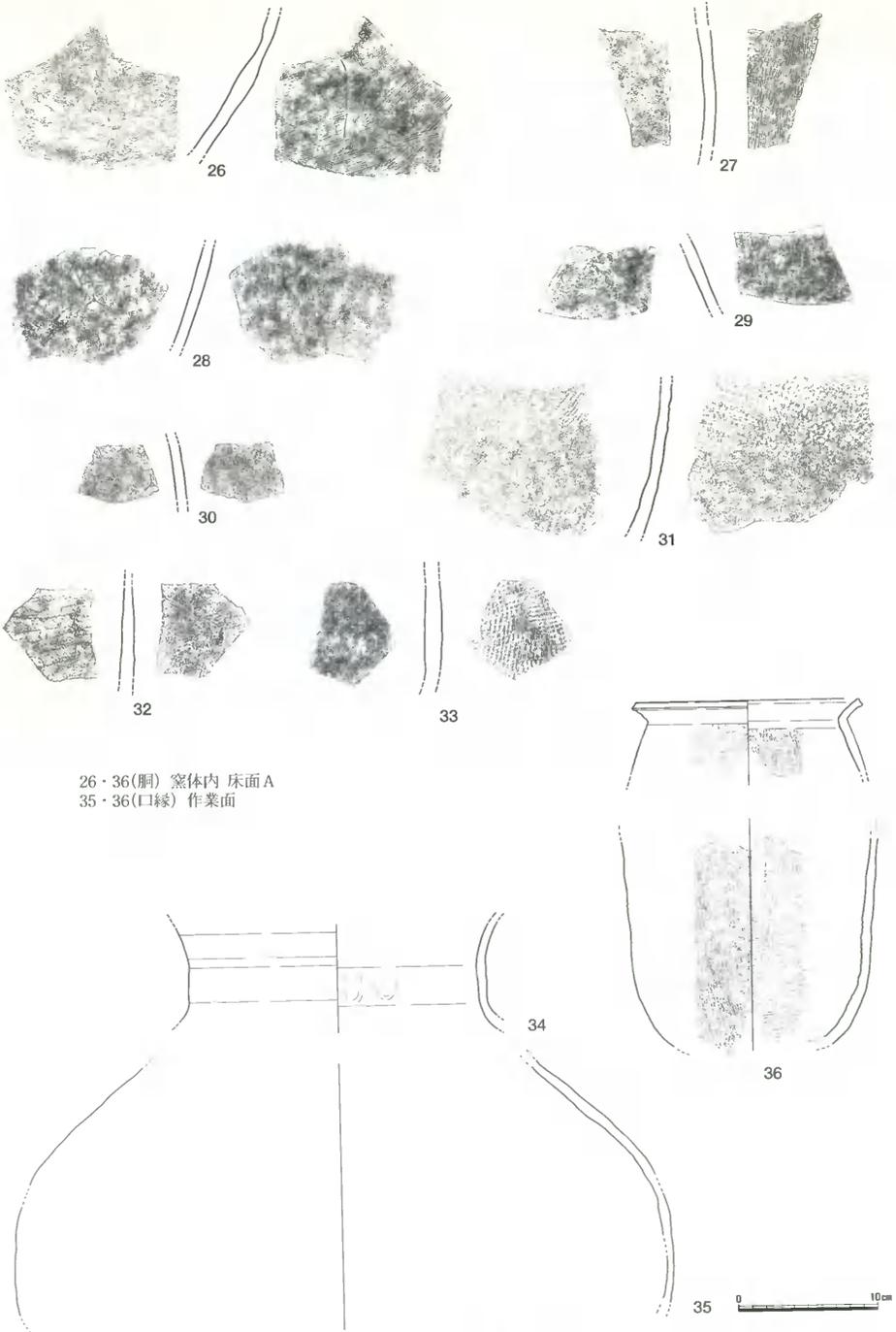
II a類

小形の長胴甕36のみである。同一個体と思われる口頸部と胴部の破片が出土しているが、接合部分は認められなかった。口縁部は短く、端部はくぼんだ面を形成している。頸部は「く」字に屈曲する。推定される口径は16cmで、器高は25cm前後であると思われる。胴部の外面と内面上半は縦方向、



第9図 出土遺物② (1/4)





26・36(胴) 窯体内 床面A
 35・36(口縁) 作業面

第10図 出土遺物③ (1/4)

下半は横方向の粗いハケメ（4条/cm）が徹底して施されている。内面のハケメは凹部と凸部の幅が同じである。口頸部はヨコナデが施される。器形は軟質土器の長胴甕に類似する。口頸部は作業面覆土、胴部は窯体床A面からの出土である。

II b類

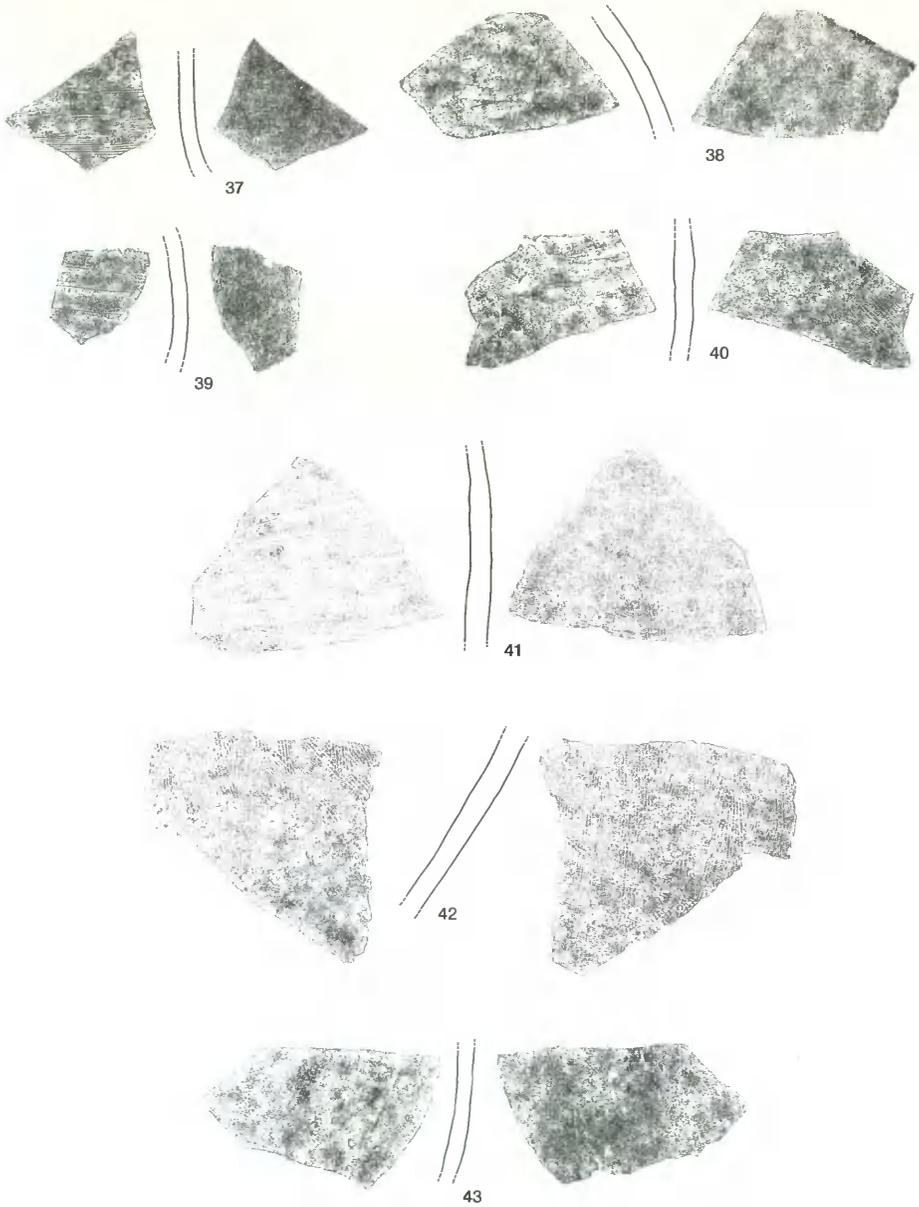
器壁はすべて厚い。37の内面は、凹部と凸部の幅が同じハケメ（5条/cm）を横方向に施した後ナデ、外面はナデが施される。窯体床A面からの出土である。38は黒色砂粒をわずかに含み、外面は灰白色を呈する。焼成は不良である。内面は横方向の強いナデが認められ、外面はナデが施される。39は雲母を含み、内面は丁寧なヨコナデ、外面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（7条/cm）が縦方向に施された後ナデが施される。40～42は同一個体と思われ、窯体床A面からの出土である。40・41の内面は強い横方向のナデが顕著である。外面は斜めあるいは縦方向のハケメ（6条/cm）の後ナデが施される。42の内面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（5条/cm）が縦方向に、外面も縦方向のハケメ（5条/cm）が施される。43は窯体床B面からの出土で内外面ともナデを施している。

II c類

44・45は頸部の同一個体と思われ、内面はナデ、外面はヨコナデを施す。45は作業面覆土からの出土である。46は器壁が薄く、焼成は非常に堅緻である。内面は強い横方向のナデ、外面はナデを施す。47は比較的器壁が薄く、内面はナデ、外面は縦方向のハケメ（5条/cm）の後ナデを施す。48・49は同一個体と思われ、48は作業面覆土からの出土で、器壁が薄い。48の内面は凹部と凸部の幅が同じ横方向のハケメ（4条/cm）、外面は斜め方向にハケメ（4条/cm）が施される。49の内面はナデ、外面は縦方向のハケメ（4条/cm）の後ナデを施す。50は窯体床B面出土で、内面は縦方向のハケメ（5条/cm）の後横方向のナデが粗く施される。外面は主に縦方向と斜め方向のハケメ（7条/cm）が施される。51の内面は縦方向のハケメ（5条/cm）、外面はナデを施すが横方向のハケメ（6条/cm）も認められる。52の内面はハケメの後乱方向のナデ、外面は乱方向のハケメの後ナデ（5条/cm）を施す。53は内外面とも縦方向のハケメ（5条/cm）の後ナデを施しており、内面は斜め方向のナデである。53は窯体床A面からの出土である。54～56は器壁が薄く、また陶質土器の可能性もある。54・56は同一個体と思われ、外面には自然釉がかかり、黒味の強い灰色を呈する。焼成は非常に堅緻で、断面の色調は主に灰赤色を呈する。いずれの内外面とも丁寧なナデが施されているが、内面には同心円当具の痕跡が残っている。55は作業面覆土からの出土である。57～59は同一個体と思われるもので、肩部に円錐状の突起が付く大形甕である。これは陶質土器の可能性がある。断面の色調は主に鈍い赤褐色を呈する。大形で焼け歪みがあるためか、器形の復元は困難であるが、頸部内径37cmを測る。頸部は斜め外方に延び、内面は丁寧なヨコナデを施す。頸部から肩部にかけての屈曲部内面は強い横方向のナデが認められる。肩部は撫で肩で狭く、この中央に裾径1.7～2cm・高さ0.8～1cmの突起が貼り付けられていると思われる。58・59が出土しており、これまでの出土例からも、突起は2個1対ではないかと考えられる。胴部にかけては外方に開く。外面や胴部内面は徹底した横方向のナデが施されるが、内面には当具の痕跡と思われる凹凸が認められる。作業面覆土から出土しているが、底部付近の破片は出土していない。

III a類

60・61は同一個体である。内面は、凹部と凸部の幅が同じハケメ（5条/cm）を縦方向に施しており、外面も縦方向にハケメ（5条/cm）が施される。61の内面には砂などが溶着している。62の

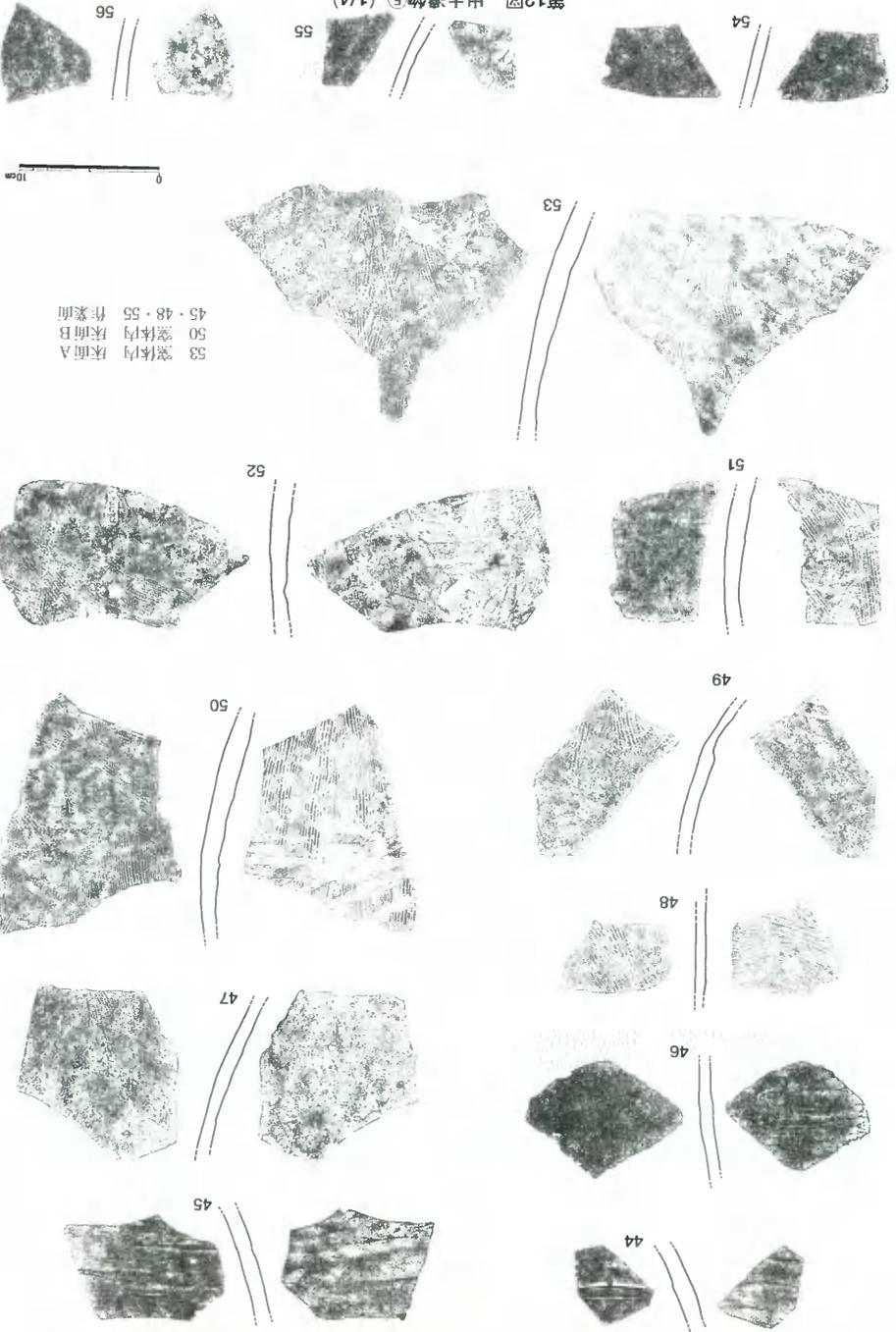


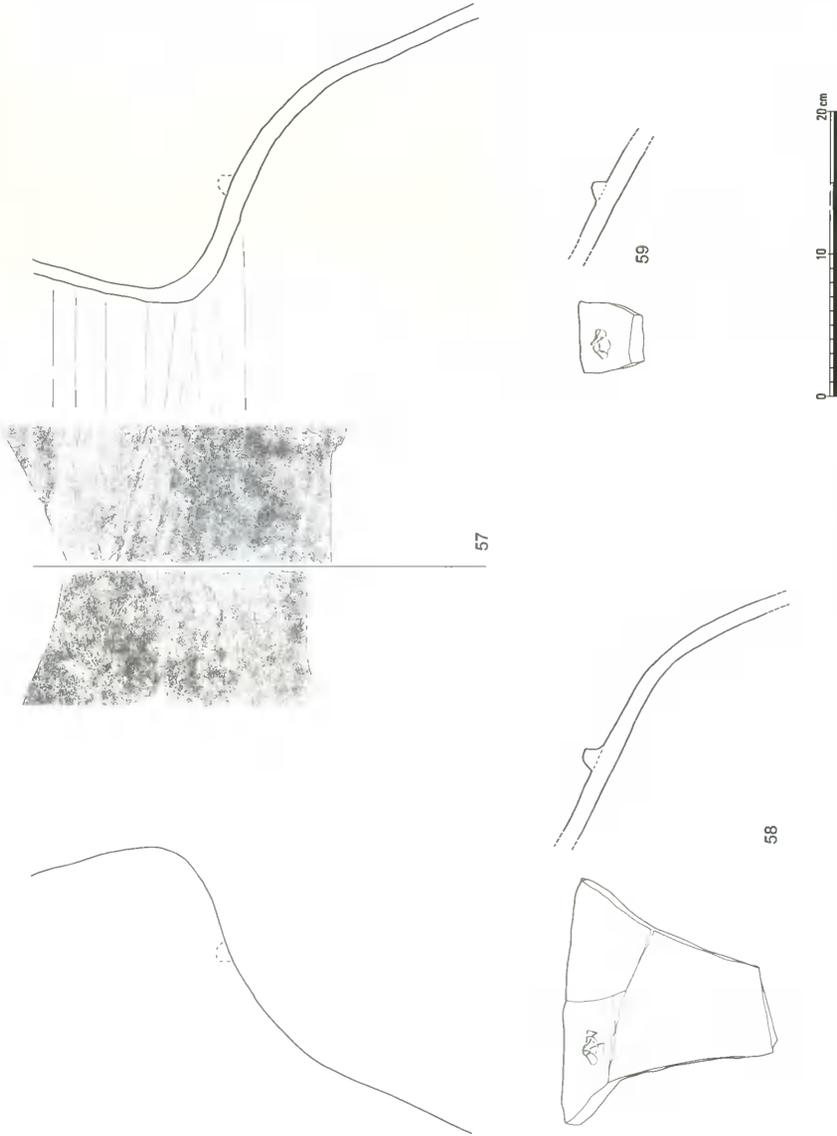
37・40・41・42 窯体内 床面A
43 窯体内 床面B

第11図 出土遺物④ (1/4)

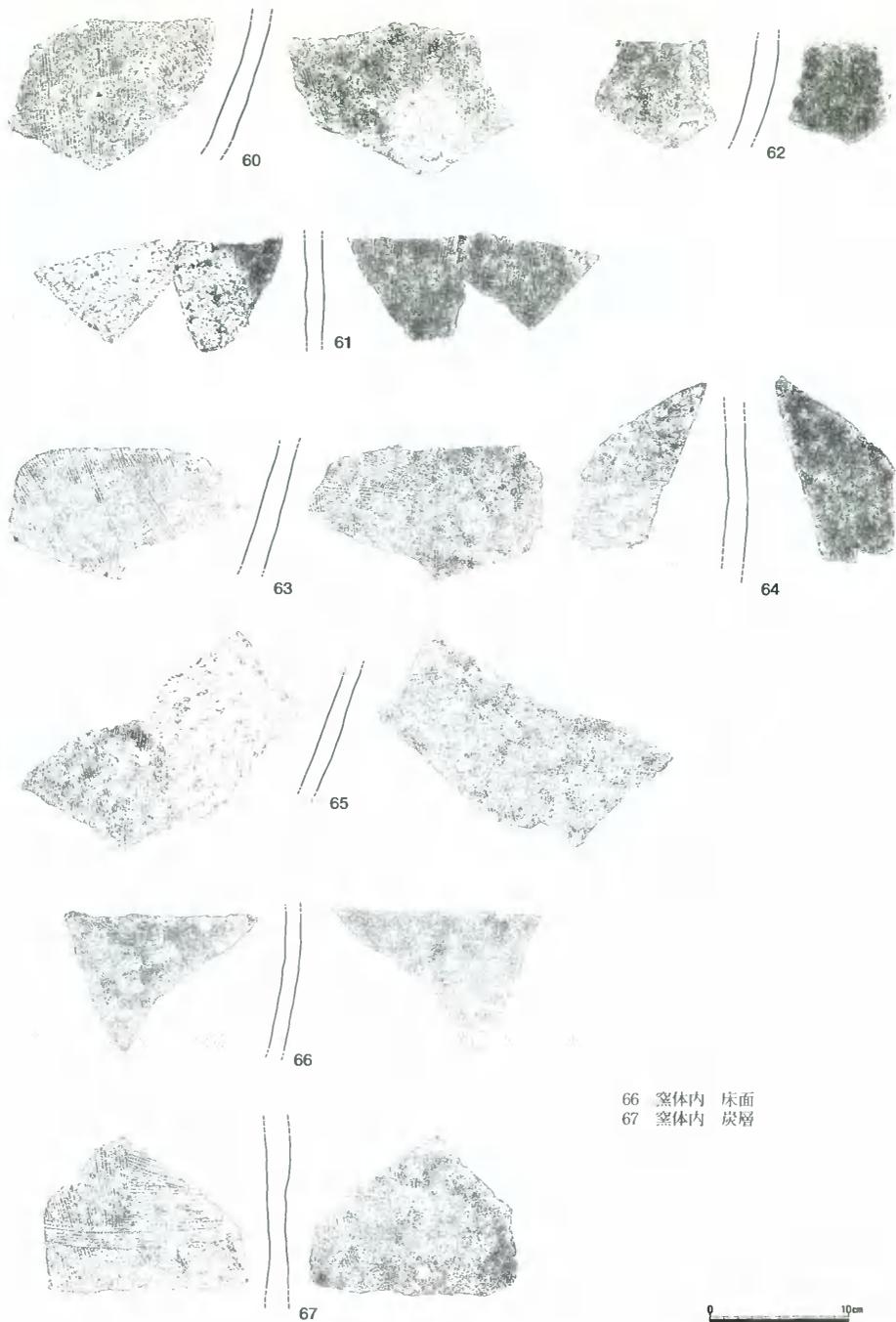


第12図 出土遺物⑤ (1/4)

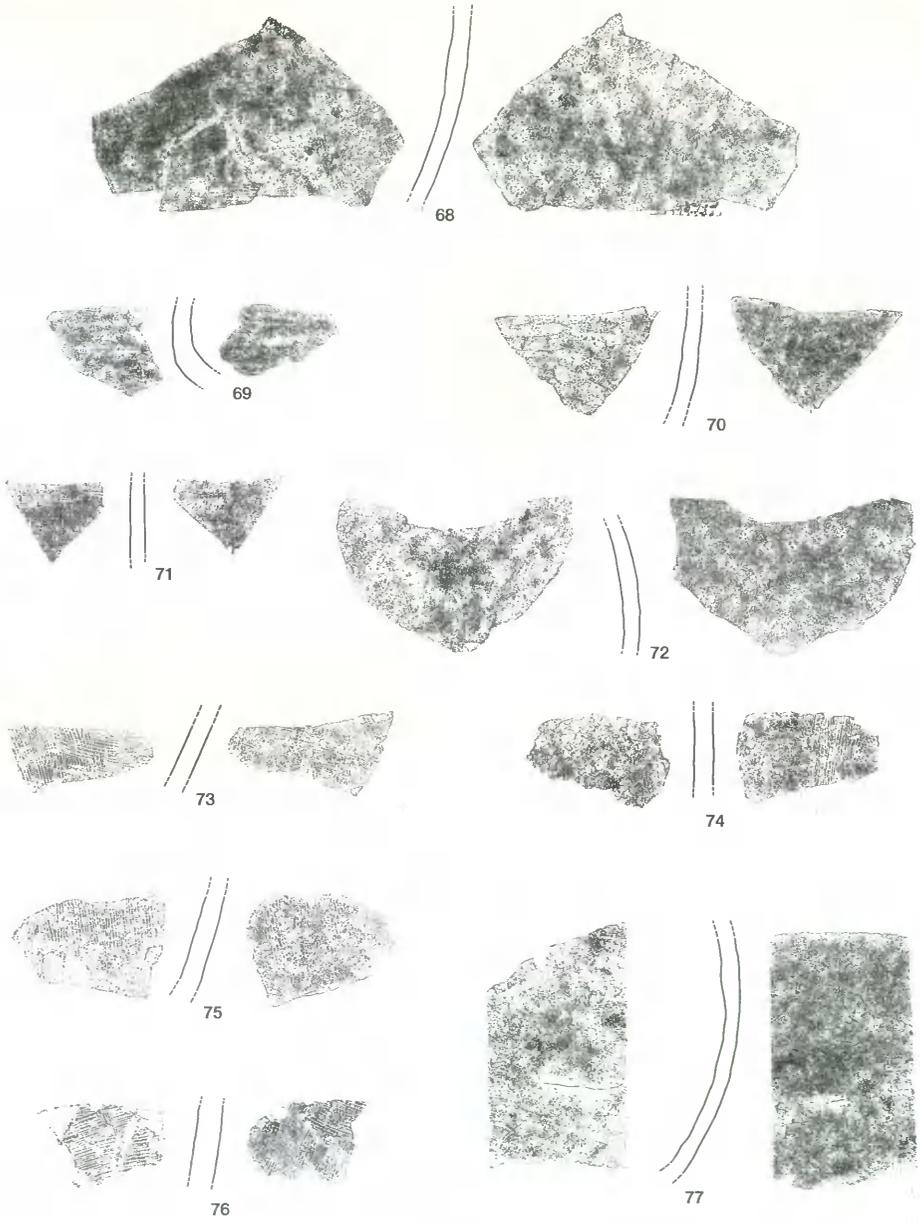




第13図 出土遺物⑥ (1/4)



第14図 出土遺物⑦ (1/4)



68 窯体内 床面A、72 窯体内 床面B、77 作業面

第15図 出土遺物⑧ (1/4)



内面はナデ、外面は縦方向のハケメ（5条/cm）の後ナデが施されている。

Ⅲb類

63～65は同一個体と思われる。63の内面は凹部の幅が広いハケメ（5条/cm）が縦方向に、外面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（6条/cm）が縦あるいは横方向に施された後ナデが認められる。64の内面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（5条/cm）が横方向に施された後横方向のナデが認められる。外面はハケメの後ナデを施す。65の内面は縦方向のハケメ（5条/cm）が施され、砂などが溶着している。外面も内面と同じハケメの後ナデが施されている。66は窯体床面出土で、内外面ともナデが施されるが、外面にはタタキの痕跡がかすかに残っている。67は窯体炭層出土である。内面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（4条/cm）が縦あるいは横方向に、外面は縦方向のハケメ（4条/cm）の後ナデが施される。68は窯体床A面出土である。内面の調整は不明で、器壁の薄い格子タタキを有する破片が溶着している。外面はナデが認められる。

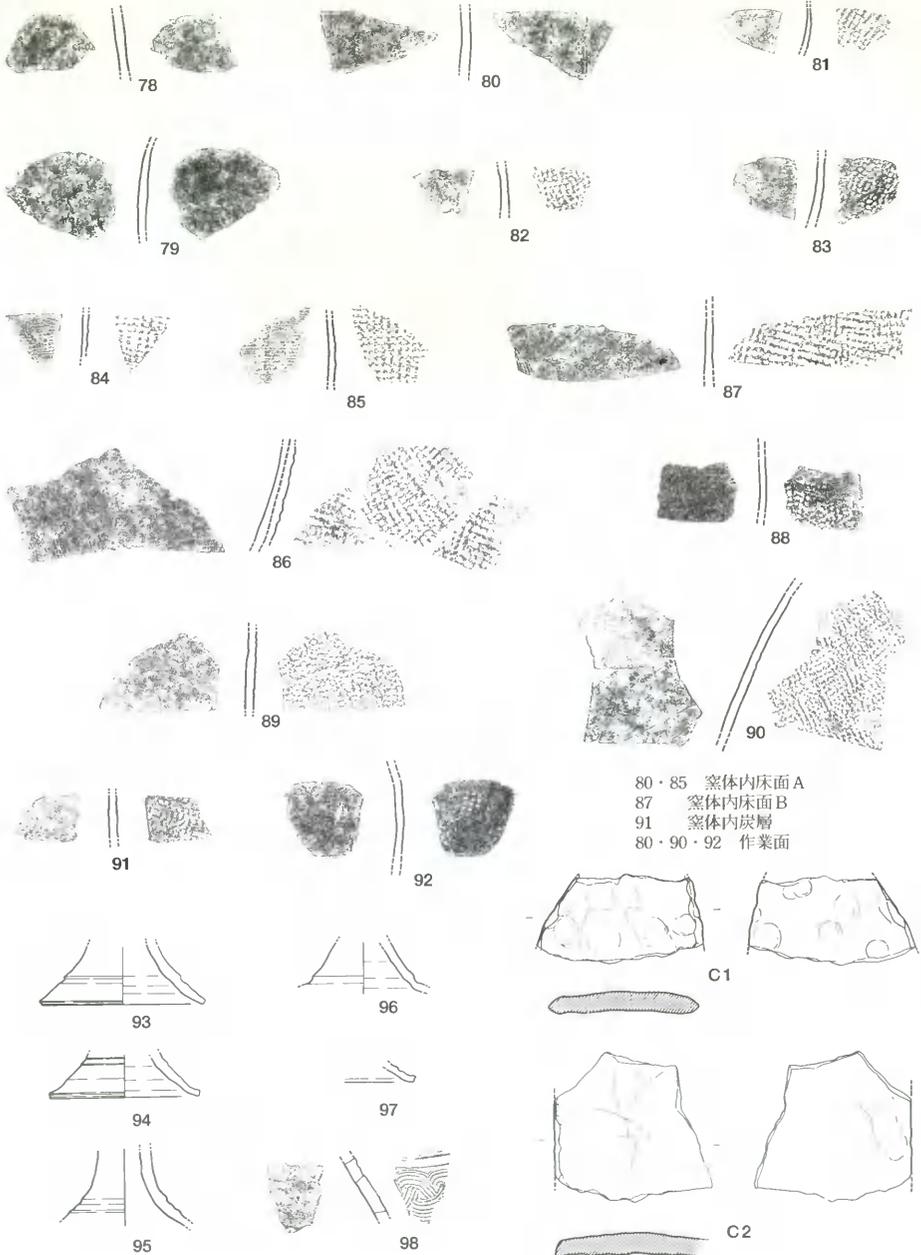
Ⅲc類

69は頸部の破片と思われ、内外面ともヨコナデである。断面の色調は鈍い赤褐色を呈する。70の内面は横方向のナデ、外面はナデを施す。71はやや器壁が薄く、内面は横方向のハケメの後ナデ、外面は横方向のナデが施される。72は窯体床B面出土で、内外面ともナデが施される。73の内面は縦あるいは横方向のハケメ（5条/cm）、外面は横方向のハケメ（5条/cm）の後ナデが施される。74の内面はナデ、外面は凹部と凸部の幅が同じハケメ（6条/cm）が縦方向に施された後ナデが認められる。75は内外面とも縦方向のハケメ（6条/cm）が施されている。76の内面は横方向のハケメ（6条/cm）、外面は縦あるいは横方向のハケメ（5条/cm）が施されている。77は作業面覆土からの出土で、内外面とも横方向のナデであるが、内面には円弧当具の痕跡がかすかに残っている。78・79は器壁が薄く、内外面ともナデで、同一個体と思われる。80は窯体床A面出土で、器壁は薄く、内面は横方向のナデ、外面は縦方向のハケメ（7条/cm）を施している。

壺・甕（第16図、図版24）

器種は断定できないが、器壁が非常に薄く、外面に格子タタキを明瞭に残す破片をここで取り上げる。胎土については長石粒が少ないものが目立ち、82・83はⅠa類、84～92はⅠb類であるが、81だけは小径の長石粒が多いⅡc類となる。また、格子タタキについてはさまざまな種類がある。断面の色調は主に灰色を基調に黄色系あるいは橙色系である。

81の内面はナデが施されるが、円弧当具の痕跡がかすかに残っている。外面の格子タタキは、当窯では最も区画の大きい（4mm四方）もので、軸（幅0.5mm）に直交する線（幅1mm）が通らないものである。タタキの後ナデを施しているのか、凹凸はあまり無い。82・83は雲母を少量含み、同一個体と思われる。内面はナデを施すが、82は同心円当具と思われる痕跡がかすかに認められる。外面の格子タタキは、3×3.5mmの区画のもので、軸（幅1mm）に直交する線（幅1mm）が通らないものである。タタキの後ナデを施しているのか、凹凸はあまり無い。84～86は同一個体と思われる。内面はハケメ（4条/cm）が認められ、86ではナデが施される。外面の格子タタキは3mm四方の区画で、軸（幅2mm）に直交する線（幅2mm）も通るものである。凹凸が著しいのが特徴的である。86は同じ格子タタキを有する破片が窯着している。85は窯体床A面出土である。87は窯体床B面からの出土で、内面にはハケメが認められる。外面の格子タタキは、3×4mmの区画のもので、軸（幅2mm）に直交する線（幅1.5mm）も通るものである。凹凸が著しいのが特徴的である。88は作業面覆



第16図 出土遺物 9 (1/4)

土からの出土で、内面はナデが施される。外面の格子タタキは、3×3.5mmの区画のもので、軸（幅1mm）に直交する線（幅1.5mm）が通らないものである。タタキの後ナデを施しており、凹凸はあまり無い。89・90は同一個体と思われ、内面は丁寧なナデが施される。外面の格子タタキは、2.5×3mmの区画のもので、軸（幅1mm）に直交する線（幅1.5mm）が通らないものである。タタキの後ナデを施しているのか、凹凸はあまり無い。90は作業面覆土からの出土である。91は窯体炭層からの出土で、内面はナデを施す。外面の格子タタキは、3mm四方の区画のもので、軸（幅1mm）に直交する線（幅1.5mm）が通らないものである。タタキの後ナデを施しているようで、凹凸はあまり無い。92は作業面覆土からの出土で、内面はナデを施すが同心円当具の痕跡が残っている。外面はよくナデが施されるが、残っている格子タタキは小さい区画（2mm四方）で、軸（幅2mm）に直交する線（幅2mm）も通るものである。

高杯（第16図、図版24）

高杯は、脚部破片のみの5個体が出土している。胎土については、長石粒が多いものが目立ち、93はⅢa類、94・95はⅡb類、97はⅡc類であるが、96だけはⅠb類である。調整はいずれもヨコナデが認められる。どの外面も、強く摘んで凹線を巡らせることにより段を形成している。スカンは確認されていない。断面の色調は灰色を基調に黄色系あるいは橙色系である。

93は脚径11.2cmと推定され、接地面から2cmの高さで稜線が明瞭な段が巡る。端部はくぼんだ面を有する。94は脚径10.3cmと推定され、接地面から2～3cmの高さで、凹線による稜線の明瞭な段が2段巡る。端部はくぼんだ面を有する。95の端部は欠損しているが、真つすぐ上方へ延びる脚柱部が確認される。裾と柱部の変換点付近に段が2段巡るが、むしろ凹線が巡るといった表現が適当のような鋭さに欠けた段である。96の端部は欠損しているが、裾部が大きく外方に屈曲すると思われる。稜線の鈍い段が巡る。短脚ではないかと思われる。97は端部のみ出土しており、別の器種の口縁端部の可能性もある。端部の形状は94に似ているが、端部近くに比較的稜線の明瞭な段が巡る。

器台（第16図、図版24）

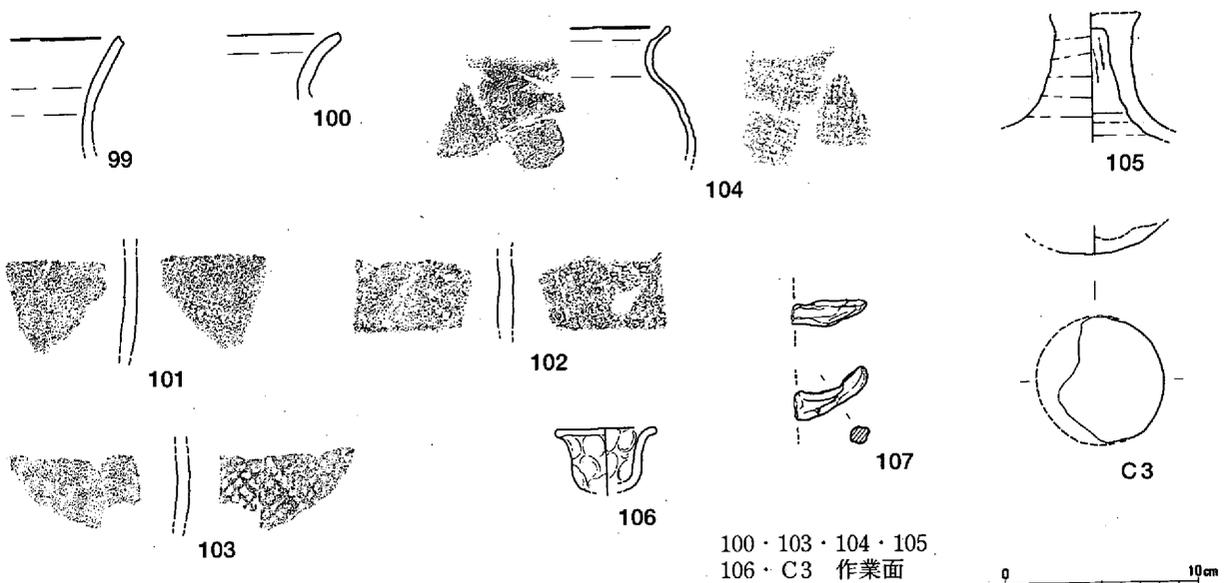
98は、当窯で出土した唯一の器台脚部片である。胎土は長石粒を多く含むⅢa類である。内面はナデが施される。外面には3本の櫛描文による組紐文が描かれ、その上部は1条の凹線で区切られている。スカンは破片を外面から見て左端にあり、凹線より上の区画と組紐文の区画にも施されている。組紐文の部分は斜めに切っており、三角形あるいは台形のスカンが上下に並ぶと思われる。組紐文は幅1.2cmの櫛描きで、断面台形の5条の沈線で構成される。出土したこの部分では、左から右に向かって一つずつ弧を描いており、組紐を丁寧に表現している。

（2）須恵質土製品（第16図、図版25）

C1・C2とも、胎土は長石粒や石英粒が多く含まれるⅢb類で、焼成や色調などほとんど同じである。凹面と凸面が形成されており、凸面の方がユビオサエの痕跡を多く留めている。C1は厚さ13mmで、対面する平行しない2辺に断面三角状の面が形成されている。C2は厚さ15mmで、残存する1辺に斜めの面が形成されている。これらは窯道具と思われる。

（3）軟質土器・土師器（第8～15図、図版25）

甕、小形甕（壺）、高杯、手握ね土器、把手が作業面覆土を中心に出土しているが、量は少ない。



第17図 出土遺物⑩ (1/4)

胎土に含まれる長石粒は少ないが、赤色土粒や雲母などを一定量含むものが多い。

99・100は軟質土器の甕の口縁部である。どちらも外反し、端部に面を持つ。内外面ともヨコナデを施すが、99は外面に強いナデによる凹線が巡る。99は長く、緩やかに湾曲するが、100は短く、やや強く屈曲するようである。101～103は軟質土器の甕の胴部で、100・103は作業面覆土からの出土である。内面はナデであるが、外面には格子タタキが認められる。101・102の格子タタキは、区画が2mm四方で、軸（幅1.5mm）と直交する線（幅1.5mm）も通っている。103の格子タタキは、区画が4mm四方とかなり大きく、軸（幅2.5mm）と直交する線（幅2mm）も通っている。胎土は、わずかに含まれる長石粒以外に目立ったものは認められない。104は作業面覆土から出土した土師器の小形甕（壺）であるが、軟質土器の技法を取り入れている。口縁部から胴部にかけて「S」字状に湾曲し、口縁端部は強いヨコナデにより薄くなっている。胴部内面は横方向のナデを施し、外面の格子タタキは区画が2mm四方で、軸（幅1.5mm）と直交する線（幅1.5mm）も通っている。

105は作業面覆土から出土した土師器の高杯の脚部であるが、ロクロによると思われる調整が明瞭に見られる。柱部は真っすぐ上方に延び、裾部は比較的強く開く。須恵器高杯のような段は認められない。106は作業面覆土から出土した手捏ね土器で、口縁部が水平方向に開き、やや変わった器形である。胎土は、わずかに含まれる長石粒以外に目立ったものは認められない。107は長さ3.9cmの把手で、端部は上方に向かって延びる。あまり丁寧な作りではなく、手捏ね土器の一部と思われる。胎土は、わずかに含まれる長石粒以外に目立ったものは認められない。

（4）土師質土製品（第17図、図版26）

C3は作業面覆土から出土した。胎土には少量の長石粒や石英粒、角閃石が含まれる。欠損が著しいが、径7cm程度の円形の面が認められる。この面は凸面で、表面が滑らかである。裏面は剥離しており、粘土塊の凹凸が見られる。無文当具のアタリ面の部分ではないかと思われる。

第3節 結 語

1. 窯構造について

奥ヶ谷窯跡の残存状況は非常に悪く、他の初期の須恵器窯あるいは陶質土器窯との比較が困難であるが、簡単にまとめておく。

立地については、兵庫県出合窯跡⁽¹⁾だけは平地であるが、ほとんどの窯が丘陵斜面である。焚口方向は、大半の窯が東西方向から南の方向を中心に向いている。この2点については、他の窯との違いは認められず、共通している。

規模は、推定できる最大での長さが8 m程度になるが、TK73号窯⁽²⁾などは長さ11 m程度（幅240cm）でありそれらに比べると小さいと言える。また、現存最大幅は122cmを測り、現在の状況からはこれ以上大きく幅が広がる可能性は少ない。広くても150cm程度と推定され、同程度の規模のものには大阪府吹田32号窯（長さ4.05 m・幅148cm）やTG225号窯⁽³⁾（長さ7 m・幅150cm）、出合窯跡（現存長2 m・現存幅120cm）、福岡県居屋敷窯⁽⁴⁾（現存長5.7 m・幅124cm）などがある。これらから考えると奥ヶ谷窯跡の長さも4～6 m程度に納まるかもしれない。推定の部分が多いが、かなり小規模な窯であると思われ、特徴的である。

床面の断面形はU字形で、同じ形態はTK83号窯⁽⁵⁾、福岡県山隈1号窯⁽⁶⁾くらいであり、ほとんどが平底である。床面の傾斜は、北半20°・南半27°を測る。これも極端に傾斜角度の小さい出合窯跡などを除けば、ほぼ類似していると思われる。

その他の施設で、窯の周囲に排水溝を有するものはTK87号窯である。この窯はTK73型式以降の窯で、溝は「く」字状に屈曲する。奥ヶ谷窯跡のものは「U」字状を呈する点で異なっている。

以上のように、奥ヶ谷窯跡とまったく類似する窯は現在認められないが、規模の比較的小さい一群が存在し、これらは陶質土器窯あるいは初期の須恵器窯と考えられるものである。当窯がその一群に含まれる可能性があることは注目される。

2. 出土遺物について

(1) 「初期須恵器」について

「初期須恵器」という用語は、田辺昭三が「日本での須恵器生産開始から地方窯成立までの時期の須恵器⁽⁷⁾」と定義したが、植野浩三はこれに対し「定型化以前の須恵器」としTK73・TK216型式を当てた。以後、田辺も「定型化以前の須恵器の総称」とし、TK208型式の前半段階までを当てている⁽⁸⁾。これらは陶邑古窯址群（以下陶邑と称する）での須恵器編年を軸としたものであり、「定型化」が陶邑主導で進められたことを想定してのものである⁽⁹⁾。

つまり、「初期須恵器」は、窯業史・政治史におけるその意義が大きいがため、漠然とした初期という時間概念ではなく、具体的にその下限を須恵器の（言い換えれば陶邑での）「定型化」の時期をもって設定され、さらにそこに地方窯を並べてまとめたものである。このため地方窯の須恵器が「初期須恵器」に属するかどうかは、「定型化」の具体的な内容と時期を明らかにしたうえで「初期須恵

器」との比較を行い、さらに「定型化」以前であるという時間的な並行関係の確認が必要である。このような観点から筆者は、「初期」の範囲設定は非常に意味のあるものと考えているが、「初期須恵器」という用語はまずは陶邑地域での用語としてあるべきであり、並行関係の明らかでないその他の地域において安易に用いるべきではないと考える。

また、一方で問題となるのは上限である。須恵器とは、陶質土器の系譜から分岐して、その基本的な技術（一般的に窖窯とロクロの使用など）を導入して日本で展開する土器である。一般的には「日本」において「渡来系（あるいは帰化）工人」により製作された硬質の土器と定義される。この「渡来系（あるいは帰化）工人」は突き詰めると不明確なものであり、渡来直後の工人が日本で生産したのも須恵器とされる可能性があり、型式の認定に曖昧さと矛盾を生み出すこととなる。確かに分岐第一歩の須恵器と陶質土器との具体的な違いはきわめて不明瞭であるのは当然であるが、概念上は製作者（技術）の違いをもって明確に区別されるべきである⁽¹⁰⁾。

このように考えると、最古の須恵器型式には、陶質土器の系譜からは外れる要素が認められなければならないのである。それは、日本における陶質土器の技法・様式の取捨選択や改変、新たな創造などである。ただし、陶質土器型式の編年および地域差、日本との並行関係を詳細に検討する必要があるため作業が困難であることは言うまでもない。

奥ヶ谷窯跡の出土遺物は、窯と関連施設の残存状況を考えた場合、そこでの須恵器生産をどれだけ反映しているか問題の残るところであるが、その点を念頭に置きつつ、これが須恵器窯であるのかどうかなどを含め、以下検討を進めていきたい。

（2）「須恵器」について

器種構成

確認された器種は、甕あるいは壺、高杯、器台である。杯などは認められなかったが、必ずしもなかったとは言いきれない。しかし、杯は主要な器種ではなかったと思われる。また、現状でのそれぞれの破片量については、甕あるいは壺が圧倒的に多く、高杯は5点、器台は1点である。甕や壺は、それ自体の大きさも大いに関係するが、個体数に置き換えたとしても、破片量はその割合をある程度反映していると考えてもよいと思われる。このような器種構成は、伽耶地域の陶質土器や大庭寺遺跡のTG232号窯⁽¹¹⁾などに共通する特徴である。

甕・壺の口縁部あるいは底部が出土していないため、陶質土器や初期の須恵器との詳細な比較はできないが、肩部に突起を有する甕が存在することは注目される。この甕は、押入西1号墳⁽¹²⁾（津山市）や和歌山県楠見遺跡⁽¹³⁾など全国でもそれほど多くない例が認められるのみで、須恵器の系譜に継続して存在する器種ではない。これは朝鮮の洛東江中・下流域の陶質土器に見られる器種であり、奥ヶ谷窯跡の場合搬入品の可能性もある。また、当窯で焼成されたとすれば、なおさらその地域の影響が非常に強いことは明らかである。しかし、外面に平行タタキを残し凹線をめぐらせる甕など陶質土器特有の器種があまり認められないことは、陶質土器の器種構成そのものではないということが言えよう。

このように器種構成のうえでは、伽耶地域の陶質土器の影響が強く、初期の須恵器に類似すると思われる。

胎土

主に備中南部で出土している初期の須恵器の胎土については、これまでに注目されているところで

ある。それは、非常に精良な胎土の陶器などの須恵器に対して、砂粒をかなり含む一群が存在することである。奥ヶ谷窯跡⁽¹⁴⁾の須恵器の胎土も、まさに砂粒を多く含むものが多いことは報告のとおりである。しかし、一方で砂粒をあまり含まないものもある程度存在することも事実であり、これらの違いが何に起因するか考える必要がある。

胎土中に砂粒を多く含むⅡ・Ⅲ類についてみると、器壁の厚い甕・壺と高杯、器台に多く用いられる傾向がある。一方、砂粒をあまり含まないⅠ類については、比較的器壁の薄い壺・甕に用いられる傾向が認められるようである。量についてみると、Ⅱ・Ⅲ類の方がⅠ類より多い。これらは破片の状態からの判断であるため、同一個体の部位での差である可能性もわずかながら残されているが、器種による胎土の選択が行われたか工人差を示す可能性がある。

成形

甕・壺の成形については、調整段階でその痕跡がほとんど消失していると思われるが、5・8・27・29・31・33（すべてⅠ類）では、外面にタタキが残っている。また、器壁の非常に薄い81～92では意図的に外面にタタキが残されているようである。成形の痕跡が残っているということは、調整の施し方と関係し、さらにⅠ類の胎土のものに多くみることができる。これは当窯で比較的器壁の薄い壺・甕を製作した工人の特徴でもある。

器壁に残されている外面のタタキは格子タタキが多く、平行タタキは33のみである。初期の須恵器で、少量ながら特徴的に認められる縄蓆文タタキや斜格子タタキは認められない。また、平行タタキがほとんどみられない点は、他の初期の須恵器や伽耶地域の陶質土器と比較すると異質であり、特徴的である。

格子タタキについては、軸線に対し直交する線が真っすぐ通って方眼となるものと、直交線が通らないものがある。前者の軸線幅は1～2mm、直交線幅も1～2mmを測り、比率は1：1となる。また、これらは凹凸が著しいことも特徴である。後者の軸線幅は0.5～1mmと細く、直交線幅は1～1.5mmを測り、比率は1：1.5～2となる。これらは凹凸があまり顕著でないことも特徴である。さらに両者とも、それぞれに格子の大きさと形に違いがあり、確認できる限りでもタタキの工具は10種類にも及ぶと推定される。窯跡は1基のみであり、それにかかわる工人数はさほど多くないことが想定されるが、それに対してタタキの種類は多く、工人一人当たりの工具は複数になる場合もあると思われる。

器壁に残されている内面の当具については、凹凸幅が広く3方に放射状の線刻を有する同心円当具、凹凸幅が細く半同心円の円弧当具、そして無文当具が確認されている。また、土師質の無文当具と思われる遺物も出土しており、注目される。

同心円当具は、甕・壺の6・28・30（Ⅰ類）、54・55・56（Ⅱ類）、器壁が薄く外面に格子タタキの認められる92（Ⅰ類）で確認されているが、形状からすべて同じ当具と思われる。円弧当具は、甕・壺の8（Ⅰ類）・77（Ⅱ類）、器壁の非常に薄い81（Ⅱ類）で認められるが、これらも同じ当具の可能性はある。タタキの種類に比べて、残された当具痕跡の種類は少ない。8・81・92は外面のタタキとの関係がわかるが、相関関係の有無については判明しない。

調整・施文

甕・壺の器壁調整で顕著であり特徴的なものはハケメである。このハケメは、Ⅰ～Ⅲ類の破片を通じて認められるが、特にⅡ・Ⅲ類の胎土で器壁の厚い器種においては、成形痕が消滅するほど徹底的に施されている様子がうかがえる。外面ではハケメの後ナデを施していることが多いようだが、内面

ではハケメ調整のままである。このハケメは板の小口部分で施されていると思われ、同一工具でも夏材と冬材の幅がさまざまであり、分類や内外面での差などは確認できなかった。ナデに関しては、ほとんどすべての破片で認められる。

このように、奥ヶ谷窯跡の甕・壺は、ごく一部を除きハケメやナデにより徹底して器壁調整が施されていることが特徴であると言える。特にハケメ調整を胴部に施す甕・壺は、既に大庭寺遺跡や楠見遺跡など主に初期の須恵器あるいは陶質土器とされる一群で確認されている。このようなハケメが、朝鮮のどこかの地域で、陶質土器に施される場合も可能性としてはあり得るが、タタキをまったく消し去るほど徹底して、なおかつ器面の広範囲に施されることはあまり多く見られるものではないと思われる。一方でハケメは、土師器の甕や埴輪などで普遍的に用いられる技法であり、それを土師器工人以外の製作者が取り入れたか、あるいは土師器工人が製作したと考えられる。そうであれば、この甕・壺は陶質土器ではなく、まさに須恵器である。ただし、この点については朝鮮の例を検討する必要があることは言うまでもない。

高杯は5片出土しているが、いずれも脚柱部から裾部にかけての破片である。裾部には、初期の須恵器や陶質土器に認められる凹線による段（突線）が形成されている。しかし、段の位置・形状などにおいて、それぞれの個体で異なる。このように高杯の形態に種類が多いことはT G 232号窯でも認められている点であるが、スカシがあまり認められない点は異なっている。また、全体的に段の稜線は93以外はあまり鋭さは感じられない。端部は上下がごくわずかに拡張するだけで、くぼんだ面を形成する。これは、T K 73型式とは異なる特徴を有する大庭寺遺跡T G 232号窯などの高杯に認められる特徴である。

器台は1片出土しているだけであるが、組紐文とスカシが確認できる。組紐文は3本の紐に見立てた櫛描沈線で構成されるもので、丁寧に描かれている。この文様は、須恵器の系譜のなかでは比較的早く消滅する文様である。また、スカシは三角形か台形で上下に並んで配列されており、千鳥配列のT G 232号窯と異なる。これは朝鮮のどこの地域の影響を受けたかの違いと思われる。

焼成

焼成については概ね良好なものが多いが、さらに非常に堅緻なものが若干認められる。33（外面平行タタキ、黒みの強い色調）、34（ナデをよく施した薄い甕・壺）、54（外面黒みの強い色調）、57（突起を有する大形甕）、69などがあり、いずれも断面の色調が鈍い褐色あるいは灰赤色を呈する。また、断面の色調は灰色であるが8（外面非常に小さい格子タタキ、黒みの強い色調）や46も焼成は非常に堅緻である。これらはハケメが認められず、成形や調整、器形などについてみると、奥ヶ谷窯跡で占める割合は少数であるとともに、陶質土器そのものか、それに近いものであると思われる。これらが当窯で焼成されたかどうかは十分な検討が必要であるが、このような土器を製作する可能性を持った人物が、窯の操業に関与していたと考えることができる。

また焼成は良好ではあるが、格子タタキを施す壺・甕や高杯など器壁が非常に薄い器種において、断面の色調が橙色系あるいは黄色系を呈するものが多い。これは焼成や窯詰めの方法、あるいはその技術水準などから生じると思われ、当窯の特徴を示すものと思われる。

（3）軟質土器・土師器について

須恵器に比べるとかなり少量であるが、軟質土器・土師器も出土した。出土箇所は主に作業面で、

窯の操業に関係する容器であったとも思われ、また窯で焼成されたものとする指摘もある。いずれにしても、軟質土器を伴う須恵器は初期のものに多いようである。

器種構成は、長胴甕、小形甕（壺）、高杯、手捏土器である。格子タタキの長胴甕の口縁端部は面を形成するが、小形甕（壺）の口縁部は強いナデにより薄くなり、端部はかすかに上方にのびる。この小形甕（壺）の器形や口縁部の作りなどは、軟質土器や従来の土師器には見られないものと思われるが、タタキなど軟質土器の技法は取り入れられている。ただし当窯の須恵器と同様に、平行タタキが見られない点は、他の遺跡での出土例と比較して特異である。高杯は脚部のみで、ロクロにより成形・調整が施されている。これも軟質土器や従来の土師器には見られない器形であるが、裾に段を形成した可能性が低く、まったくの須恵器の模倣とも言いがたい点もある。

このような特異な器種は、軟質土器や須恵器の技法を取り入れて、一時的に製作されたと考える方が妥当であり、どちらかと言えば土師器と称されるものであろう。したがって、奥ヶ谷窯跡の酸化焰焼成の土器は、朝鮮における軟質土器の系譜からは既に離れているものが存在しており、それらは土師器の系譜上に突如出現し、すぐに消える一時的なものと考えられる。

(4) 時期

朝鮮における陶質土器の編年と地域性をより詳細に検討する必要があるが、以上述べたような特徴から、現時点で奥ヶ谷窯跡は陶質土器窯というより須恵器窯であると言える。さらに、これは型式としては吉備における須恵器の初期段階の型式となることは確実であると思われる。また、T G 232号窯と共通する点があり、T K 73号窯より古く位置付けられる可能性を示すと思われる。

ではどこまでさかのぼり得るのか。これを検討する手がかりとしては共伴する土師器や埴輪が有効であるが、残念ながらそれらは当窯出土の遺物には認められない。そこで他の遺跡の、須恵器と共伴する土師器について編年を検討し、可能性を探ってみることにする。

備中において、陶質土器と土師器が共伴する遺構は、窪木薬師遺跡の竪穴住居11・13、土塙⁽¹⁷⁾などがある。これらの出土土師器は、およそⅡ期⁽¹⁶⁾として捉えられる。また、菅生小学校裏山遺跡⁽¹⁸⁾では、陶質土器や当窯と同じ型式と思われる須恵器と土師器が溝や谷から出土している。出土した土師器はⅡ～Ⅳ期にわたるものが見られるが、中心となる時期はⅡ～Ⅲ-1期と考えられる。おそらく吉備において、陶質土器や初期の須恵器が多く使用され始めるのは、この時期であると考えられる。

畿内との関係において、このⅡ期は布留式期Ⅰ頃⁽¹⁹⁾に、Ⅲ-1期は布留式期Ⅱ～Ⅲ頃に並行する時期と思われる。現在のところ限定することは困難であるが、奥ヶ谷窯跡はほぼⅢ-1期に並行する可能性があると考えている。一方畿内では、布留式期Ⅳの時期にT K 73型式の須恵器が伴うようであり、またT G 232型式は布留式期Ⅱ～Ⅲにおさまるようである。このように見ると、T G 232型式と奥ヶ谷窯跡はあまり大きな時期差は存在しないと考えることが可能である。

この土師器のⅢ-1期に実年代を与えることは非常に難しいが、概ね5世紀前半を当てることが可能であろう。さらに、そのなかでも中葉に近い時期と思われ、初頭までは遡らないと思われる。

(5) 須恵器生産体制について

奥ヶ谷窯の操業は非常に小規模かつ短期間であったと考えられる。そうであるならば、これに関与した工人数もかなり少なかったことは明らかである。ところが、出土遺物の特徴を検討した結果、単

純な様相ではなく、土師器的な要素としてのハケメを施すものや一部伽耶などの朝鮮の影響が強いものが混在することが解った。つまり、須恵器生産に関わる工人集団の最小単位においてさえ、系譜の異なる複数の技術によって構成されているのである⁽²⁰⁾。言い換えれば、奥ヶ谷窯の生産体制は少数の渡来技術者と倭人で構成されており、前者が有する伝統にあまり縛られることなく倭人が独自の技法や模倣によって須恵器製作を行っていたと想像される。

この点について周辺に多く築かれている古墳との関連から考えてみたい。これらはかなり時期幅を有するが、奥ヶ谷窯跡に近い時期についてみると、一辺10～15m程度の小規模な方墳が多いと思われる。西山古墳群⁽²¹⁾の場合、墳形や規模は明確ではないが形象埴輪を多く有する26号墳（埴輪Ⅲ期、4c末～5c初）、1号墳、25号墳（埴輪Ⅳ期前半）、27号墳（TK208型式）の順で連綿と古墳が築造されている。一方これに続く時期には同様な規模であるが、被葬者の出自がそれらとは異なる可能性のある西山44号墳⁽²²⁾や中山古墳群などが認められるようになる。このような状況からこの地域の集団は、長い期間にわたり備中南部地域の政権を何らかの形で支えていた集団と思われ、埴輪Ⅳ期以降渡来人などが受け入れられたと思われる。しかし、そのような地域において窯が大規模に操業されなかったことは、受け入れた側も土器製作を求められた集団ではなく、受け入れられた側も「陶質土器の製作集団」ではなく、単にその指導が可能少数の人物であったことを示唆すると考えられる。また、渡来工人が既存の集落に混じって生活していることは他の遺跡の例と同様である⁽²⁴⁾。

（6）最後に

5世紀中葉までに開始された須恵器生産は、日本の窯業史のなかで大きな変革の一つである。さらにその展開からは、政治権力と技術集団との関係が読み取ることが可能である。このような意味で、生産開始間もない須恵器は5世紀代の社会を象徴するものの一つで、吉備や畿内の政治的特質を検討するためにも重要である。

奥ヶ谷窯跡の操業は、備中南部では造山古墳の後、作山古墳築造までの時期であると思われる。この頃、製鉄や鉄器生産などの分野でも朝鮮からの新しい技術を急速に導入していることは明らかである。これは当然、技術指導者あるいは大量の工人の移入に依るところが大きいわけで、後者の場合、かれらの新たな生活基盤や生産条件を考えると、既存の集落に与える影響は大きいと思われる。ところが、特に吉備での須恵器生産については、あまり大規模な渡来工人の招来も集団の集中的な組織化も為されているとは必ずしも言いがたい面がある。

吉備における須恵器生産は、現在のところ奥ヶ谷窯跡以後6世紀中ごろまで確認されていない⁽²⁵⁾。これは単に確認されていないことも考えられるが、早期に独自ルートで陶質土器の技術を獲得したにもかかわらず、その後陶邑のように大規模な体制を整えて発展したものではなかったことが想定されるわけである。このような状況を理解するには次のようにいくつかの可能性が考えられる。①吉備の首長層にとって須恵器生産の必要性が他の生産分野に比べ低かった、②少量ずつの分散生産を行い大規模な集団を組織する必要がなかった（または何らかの内部要因で組織できなかった）、③畿内の首長層の強大化やそれに伴うさまざまな規制など外部要因が働いた、などである。実際のところこれらは、今後の検討課題であるが、首長墳の在り方から次のように考えることもできよう。

吉備の首長墳は、造山古墳を頂点として作山古墳、両宮山古墳と規模が小さくなり、拠点も備中南部から備前南部へと移っている。そして、造山古墳の次期首長は小造山古墳、作山古墳は宿寺山古墳

と相対的に規模の小さい前方後円墳となる。この点は、ある意味で吉備政権の不安定さを思わせるものであり、吉備と畿内との政治的関係やその変化もさることながら、吉備内部の要因によりもたらされた部分も大きいのではないかと考えられる。少なくともこうした状況では、継続的で大規模な工人集団の組織化は困難であると想定される。このように須恵器窯を通して見た場合、陶邑という大生産地を形成した畿内と吉備との差は歴然としており、ここに吉備の政治的特質の一端がのぞいているのではないだろうか。(柴田)

末筆ながら、調査および本稿をまとめるにあたっては、植野浩三、小田富士雄、亀田修一、定森秀夫、武末純一、藤原学の各氏ならびに岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々から多くの御助言を賜りましたことを感謝するとともに、筆者の力量不足からそれらを十分生かしきれなかったことをお詫びいたします。

註

- (1) 亀田修一「陶製無文当て具小考―播磨出合遺跡出土例の紹介をかねて―」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 1989年
- (2) 中村浩ほか「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告』第30輯大阪府教育委員会 1978年
- (3) 藤原学「吹田32号須恵器窯跡」『昭和60年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』吹田市教育委員会 1986年
- (4) 副島邦弘「居屋敷遺跡」『一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第6集福岡県教育委員会 1996年
- (5) 大谷治孝・中村浩ほか「泉州における遺跡の調査Ⅰ陶邑Ⅷ」『大阪府文化財調査報告』第46輯 大阪府教育委員会1994年
- (6) 九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学』65 九州考古学会 1990年
- (7) 田辺昭三「須恵器生産の開始と展開」『日本美術工芸』391 1971年
- (8) 植野浩三「初期須恵器窯の解釈をめぐって」『文化財学報』第6集奈良大学文学部文化財学科 1988年
- (9) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (10) 通常よく使われる須恵器の定義については、以外に不明確な点が多い。「わが国で帰化工人の手により製作(大塚初重)」『日本考古学辞典』日本考古学協会 1983年、「日本で生産された陶質の土器(阪田正一)」『日本考古学小辞典』江坂輝彌ほか編 1983年、「渡来工人によって始められた焼物(吉田恵二)」『古代史復元7』古墳時代の工芸 白石太一郎編 1990年
- (11) 岡戸哲紀・藤田憲司ほか「陶邑・大庭寺遺跡Ⅳ」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第90輯大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1995年
- (12) 安川豊史「押入西遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料 1986年
- (13) 藺田香融ほか『和歌山市における古墳文化』関西大学文学部考古学研究第4冊関西大学1971年
- (14) 島崎東「岡山県の初期須恵器について(予察)」『古文化談叢』16 1986年
- (15) ハケメは、大庭寺遺跡TG232号窯の須恵器の特徴としてあげられている。註(11)
- (16) 平井泰男・高畑知功・柴田英樹「集成11土師器」『吉備の考古学的研究(下)』 1992年
- (17) 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86岡山県教育委員会 1993年
- (18) 中野雅美ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査5」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 岡山県教育委員会 1993年
- (19) 米田敏幸「土師器の編年1近畿」『古墳時代の研究』6土師器と須恵器 1991年
- (20) 大生産地である大庭寺遺跡をはじめとする陶邑でも認められる。また朝鮮での系譜差以外に、各地で出土している須恵器の器形に似たあるいはその技法が認められる酸化焰焼成の土器や、逆に土師器の

器形に似た還元焰焼成の土器などは初期の須恵器生産の複雑さを示す。

- (21) 本書「第5章西山遺跡・西山古墳群」
- (22) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978年
島崎東「円筒埴輪一中・四国」『古墳時代の研究』9古墳Ⅲ埴輪 1992年
- (23) 鎌木義昌「総社市西山周辺古墳群」『総社市埋蔵文化財調査概報Ⅰ』総社市教育委員会1972年
- (24) 大阪府小阪遺跡や岡山県窪木薬師遺跡（註17）などが挙げられる。
森屋美佐子・清水篤・一瀬和夫ほか『小阪遺跡本報告書－近畿自動車道松原海南線・府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査－』大阪府教育委員会・（財）大阪文化財センター 1992年
- (25) 岡田博「佐伯町矢田部所在の戸瀬池窯址の出土遺物について」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 1983年
- (26) 葛原克人「第8章備中」『前方後円墳集成中国・四国編』近藤義郎編 1991年

参考文献

- 関川尚功「奈良県下出土の初期須恵器」『考古学論攷』第10冊奈良県立橿原考古学研究所 1984年
- 酒井清治「わが国における須恵器生産の開始について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集 国立歴史民俗博物館 1994年
- 中村浩「須恵器の初源－その様相と生産の系譜」『古墳時代須恵器の編年的研究』 1993年
- 植野浩三「日本における初期須恵器生産の開始と展開」『奈良大学紀要』第21号奈良大学 1993年
- 植野浩三「最古の須恵器型式設定の手続き」『文化財学報』第13集奈良大学文学部文化財学科 1995年
- 藤原学「7須恵器生産の展開」『新版古代の日本』5 近畿Ⅰ 監修坪井清足・平野邦雄 1992年
- 藤原学「須恵器の編年 1 近畿 A 畿内」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 1991年
- 山田邦和「須恵器生産系譜論の現状」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ 森浩一編 1985年
- 全榮來「百済地域の陶質土器窯」『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館編 1989年
- 中敬澈「伽耶地域の陶質土器」『陶質土器の国際交流』大谷女子大学資料館編 1989年

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地点 層位	種 別	器種	部位	壁厚	外面調整	内面調整	色 調	胎 土	備 考
1	75	斜 面	須恵器	壺			ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	外面 5Y6/1(灰) 内面 2.5Y6/1(黄灰) 断面 7.5YR4/1(褐灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
2	83	斜 面	須恵器	大形壺	胴	厚い	タタキ→カキメ	同心円当具	外面 5Y6/1(灰) 内面 5Y6/2(オリブ灰) 断面 5Y6/2(オリブ灰)	2mm以下の砂粒を含む 長石(少)・石英(少)	
3	26	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 7.5YR6/3(鈍い褐) 内面 2.5Y8/2(灰白) 断面 7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・石英(少)	4と同一
4	90	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 2.5Y7/3(浅黄) 内面 2.5Y7/3(浅黄) 断面 7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒を含む 長石(少)・黒色砂粒(僅)	3と同一
5	17	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	タタキ→ハケメ	無文当具→ハケ メ	N6/1(灰)	0.5mm以下の砂粒を含む 長石(少)・黒雲母(僅)	
6	20	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	同心円当具→ナデ	外面 10Y6/1(灰) 内面 N6/1(灰) 断面 N6/1(灰)	2~4mm程度の石粒を含む 長石(少)・石英(中)・雲 母(少)	
7	19	窯体床 B	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	無文当具→ナデ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 5Y7/1(灰白) 断面 7.5Y6/1(灰)	3mm程度の石粒を含む 0.5mm程度の砂粒を含む 黒色砂粒(少)・長石(少)	
8	18	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	格子タタキ→ナ デ	円弧当具→ナデ	外面 N4/0(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 5Y6/1(灰) N6/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・黒色砂粒(僅)	
9	89	作業面 覆土	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 10YR7/4(鈍い黄橙) 内面 5Y7/4(灰白) 断面 2.5Y7/4(浅黄)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	10・11・12と 同一
10	25	作業面 覆土	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ハケメ	外面 5YR6/4(鈍い橙) 内面 2.5Y7/2(灰黄) 断面 7.5YR7/4(鈍い橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・黒雲母(少)	9・11・12と 同一
11	21	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ハケメ	外面 2.5Y7/2(灰黄) 内面 10YR6/3(鈍い黄橙) 断面 7.5YR6/4(鈍い橙)	0.5mm程度の砂粒を含む 長石(少)・黒雲母(多)・ 赤色酸化土粒(中)	9・10・12と 同一
12	22	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ハケメ	外面 5YR6/4(鈍い橙) 内面 10YR7/2(鈍い黄橙) 断面 7.5YR6/4(鈍い橙)	1~3mm程度の砂粒を含む 長石(少)・雲母(多)	9・10・11と 同一
13	86	窯体床 B	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ナデ	外面、断面 10Y5/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰)	2mm程度以下の砂粒を含む 長石(少)	14と同一
14	88	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	7.5Y6/1(灰)	1mm以下の砂粒を含む 長石(僅)	13と同一
15	103	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰) 断面 7.5Y4/1(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(少)	格子甕甕着
16	84	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	7.5Y5/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
17	87	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 N6/0(灰) 内面、断面 7.5Y6/1(灰) 10Y6/1(灰)	1mm以下の砂粒を含む 長石(少)	
18	59	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 2.5Y7/2(灰黄) 内面 2.5Y7/3(浅黄) 断面 5Y7/1(灰白)	0.5~1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
19	91	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 2.5Y7/2(灰黄) 内面 2.5Y7/3(浅黄) 断面 N7/1(灰白)	1mm程度の砂粒を含む 長石(僅)	
20	109	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ハケメ	外面 5YR5/2(灰褐) 内面 2.5Y5/1(黄灰) 断面 7.5Y5/1(灰)	2mm程度の石粒を2~3個含 む 1mm以下の砂粒を含む 長石(少)	
21	111	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ハケメ→ナデ	外面 7.5Y4/1(灰) 内面 7.5Y6/2(オリブ灰) 断面 7.5Y5/1(灰)	1mm以下の砂粒を含む 長石(少)	
22	54	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面 5Y5/1(灰) 断面 N5/1(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(少)	23・24と同一
23	63	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ハケメ	外面 5Y5/1(灰) 内面 5Y5/1(灰) N6/0(灰) 断面 7.5Y6/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	22・24と同一
24	62	窯体床 B	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ハケメ	外面 5Y5/1(灰) 内面 7.5Y4/1(灰) 断面 10Y4/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	22・23と同一
25	24	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ ナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰) 断面 7.5Y4/1(灰)	0.5~2mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
26	29	窯体床 A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	未調整	外面 N6(灰) 内面 N6(灰) 断面 5Y5/1(灰)	0.5mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
27	23	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	タタキ→ハケメ	ナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 5YR6/2(灰褐)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
28	12	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	同心円当具→ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 5YR6/2(灰褐)	2~3mm程度の石粒を7~8 個含む 1mm程度の砂粒を 含む 長石(少)	30と同一

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地点層 位	種 別	器種	部位	壁厚	外面調整	内面調整	色 調	胎 土	備 考
29	85	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	格子タタキ→ハケメ	ナデ	N5/0(灰)	1.5mm以下の砂粒を含む長石(少)	
30	110	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	同心当具→ナデ	7.5Y5/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む長石(僅)	28と同一
31	3	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	長方形格子→タタキ→ナデ	ハケメ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 N6/0(灰)	0.5~2mm程度の砂粒を含む長石(小)	
32	58	包含層	須恵器	甕(壺)		厚い	ナデ	ナデ	外面 2.5Y3/1(黒褐) 内面 5Y5/1(灰) 断面 2.5YR5/3(鈍い赤褐)	0.5~1mm程度の砂粒を含む5mm程度の小石粒も僅かに含む長石(小)	33と同一
33	10	包含層	須恵器		胴	厚い	平行タタキ→ナデ	ナデ	外面 N5/0(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 2.5YR5/3(鈍い赤褐)	1mm程度の砂粒を含む長石(少)	32と同一
34	48	包含層	須恵器	甕(壺)	頸	薄い	ヨコナデ	ヨコナデ	外面 N5/0(灰) 内面 5B4/1(暗青灰) 断面 2.5YR5/3(鈍い赤褐)	長石等特に少ない	35と同一
35	49	作業面覆土	須恵器	壺	肩	薄い	ナデ	ヨコナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 N4/0(灰) 断面 5YR5/2(灰褐)	長石等特に少ない	34と同一
36	2	窯体床A	須恵器	小形甕	口胴	薄い	ハケメ	ハケメ	外面 5Y5/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰) 断面 N5/0(灰)	0.5~1mm程度の砂粒を含む長石特に多い	
37	92	窯体床A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ハケメ	外面 10Y4/1(灰) 内面 5Y6/2(オリブ灰) 断面 5Y6/2(オリブ灰)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)・石英(多)	
38	39	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	7.5Y7/1(灰白)	1.5mm程度以下の砂粒を含む長石(中)・石英(少)・黒色砂粒(僅)	
39	28	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ヨコナデ	外面 2.5Y6/1(黄灰) 内面 2.5Y6/1(黄灰) 断面 N5/0(灰)	0.5~1mm程度の砂粒を含む長石(多)・雲母(中)	
40	41	窯体床A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ→ナデ	N6/0(灰)、N5/0(灰)	2mm以下の砂粒を含む長石(多)・石英(中)	41・42と同一
41	37	窯体床A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ→強いナデ	外面 N6/0(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1.5mm以下の砂粒を含む長石(多)・石英(中)	40・42と同一
42	45	窯体床B	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 N6/0(灰) N5/0(灰) 内面 N4/0(灰) 断面 N4/0(灰)	2.5mm以下の砂粒を含む長石(多)・石英(中)	40・41と同一
43	93	窯体床B	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	7.5Y4/1(灰)	3mm程度の石粒を1個含む2mm以下の砂粒を含む長石(多)・石英(中)	
44	33	包含層	須恵器	甕(壺)	頸	厚い	ヨコナデ	ナデ	外面 N6/0(灰) 内面 7.5Y6/1(灰) 断面 7.5Y6/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)	45と同一
45	32	作業面覆土	須恵器	甕(壺)	頸	厚い	ヨコナデ	ナデ	外面 5Y6/1(灰) 内面 5Y7/2(灰白) E28 断面 5Y6/2(オリブ灰)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)	44と同一
46	36	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	強いナデ	外面 N7/0(灰白) 内面 N5/0(灰) 断面 N5/0(灰) N4/0(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む長石(多)	
47	61	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 2.5Y6/2(灰黄) 内面 2.5Y6/1(黄灰) 断面 2.5Y4/1(黄灰)	0.5~1mm程度の砂粒を含む長石(多)	
48	30	作業面覆土	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ハケメ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰) 断面 7.5Y6/1(灰)	0.5~2mm程度の砂粒を含む長石(多)	49と同一
49	27	包含層	須恵器	甕(壺)	胴		ハケメ	ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 5Y5/1(灰) 断面 5Y5/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)	48と同一
50	31	窯体床B	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ→ナデ	外面 N6/0(灰) N4/0(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1.5mm程度までの砂粒を含む長石(多)	
51	97	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ→ナデ	ハケメ	外面 N5/0(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1~2.5mm程度の砂粒を含む長石(多)	
52	43	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ→ナデ	外面、内面 N6/0(灰) N5/0(灰) 断面 N4/0(灰)	3.5mmの石粒を2~3個含む1mm程度の砂粒を含む長石(多)	
53	35	窯体床A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 N6/0(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 N5/0(灰)	0.5~1.5mm程度の砂粒を含む長石(多)	
54	14	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ナデ・同心当具	外面 5Y6/1(灰) 5Y4/1(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 2.5YR5/2(灰赤)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)	56と同一
55	16	作業面覆土	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ナデ・同心当具	外面 5Y6/1(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 5Y6/1(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む長石(多)	
56	15	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ・同心当具	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 N5/1(灰) 断面 2.5YR6/3(鈍い橙)	1mm程度の砂粒を含む長石(多)	54と同一

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地点 層位	種 別	器種	部位	壁厚	外面調整	内面調整	色 調	胎 土	備 考
57	64	包含層	須恵器	甕	頸胴	厚い	ナデ	ナデ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 N4/0(灰) 断面 5YR5/3(鈍い赤褐)	1~3mm程度の砂粒を含む 長石(多)	58・59・64と 同一
58	52	包含層	須恵器	甕	肩	厚い	ナデ・突起	ナデ	外面 10YR5/1(灰) 内面 5B5/1(青灰) 断面 5YR5/2(灰褐)	1~3mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
59	53	包含層	須恵器	甕	肩	厚い	ナデ・突起	ナデ	外面 5Y6/1(灰) 内面 5B5/1(青灰) 断面 2.5YR5/3(鈍い赤褐)	1mm程度の砂粒を含む 長石(多)	57・58と同一
60	60	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 N6/0(灰) 内面 N3/0(暗灰) 断面 2.5GY5/1(オリーブ灰)	0.5~6mm程度の砂粒を含む 長石特に多い	61と同一
61	108	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面、内面 N5/0(灰) 断面 N4/0(灰)	2.5mm程度の石粒を5~7個 含む 1.5mm以下の砂粒を 含む 長石特に多い	60と同一
62	101	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ナデ	外面、5Y7/1(灰白) 内面 7.5Y6/1(灰) 断面 5Y5/1(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石特に多い	
63	42	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 内面 5Y5/1(灰) 断面 N5/0(灰)	3mm程度の石粒を3~5個含 む 1mm程度の砂粒を含む 長石(多)・石英(多)	64・65と同一、 原体3cm
64	47	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ハケメ	外面 10Y6/1(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 N4/0(灰)	2mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(少)	63・65と同一
65	44	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面、断面 N5/0(灰)	5~7.5mm程度の石粒を2個 程度含む 長石(多)・石 英(中)	63・64と同一
66	40	窯体床	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	タクキ→ナデ	ナデ	N6/0(灰)	1.5mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(中)	
67	46	窯体 炭層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	7.5Y6/1(灰)	2mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(中)	
68	34	窯体床 A	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデか	外面 N5/0(灰) 内面 2.5GY8/1(灰白) 断面 N5/0(灰)	2.5mm程度までの砂粒を含 む 長石(多)・石英(中)	格子垂甕溶着
69	13	包含層	須恵器	甕(壺)	頸	厚い	ヨコナデ	ヨコナデ	外面 10YR6/1(褐灰) 内面 N5/0(灰) 断面 5YR5/3(鈍い赤褐)	2~3.5mm程度の石粒を10個 以上含む 1.5mm程度の砂 粒を含む 長石(多)	
70	55	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 5Y5/1(灰) 断面 N4/0(灰)	0.5~3mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
71	102	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ハケメ	外面 5Y5/1(灰) 内面 2.5Y7/2(黄黄) 断面 2.5Y5/1(黄灰)	1~1.5mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
72	38	窯体床 B	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	ナデ	外面 7.5Y4/1(灰) 内面 7.5Y7/1(灰白) 断面 N5/0(灰)	1.5mm以下の砂粒を含む 長石(多)	
73	57	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 N7/0(灰白) 内面 N6/0(灰) 断面 N7/0(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
74	96	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 7.5Y6/1(灰) 断面 5Y5/1(灰)	1~4mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
75	56	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 5Y5/1(灰) 内面 5Y5/1(灰) 断面 5Y5/1(灰)	0.5~2mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
76	95	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ハケメ	ハケメ	外面 7.5YR4/3(褐) 内面 7.5Y6/1(灰) 断面 N5/0(灰)	0.5~1.5mm程度の砂粒を含 む 長石(多)	
77	50	作業面 覆土	須恵器	甕(壺)	胴	厚い	ナデ	円弧当具→ナデ	外面 5B6/1(青灰) 内面 N6/0(灰) 断面 7.5YR6/2(灰褐)	1~3mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
78	100	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 5YR5/2(灰褐)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(多)	79と同一
79	98	包含層	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ナデ	ナデ	外面 7.5Y5/1(灰) 内面 N4/0(灰) 断面 7.5YR5/2(灰褐)	0.5~2mm程度の砂粒を含む 長石(多)	78と同一
80	99	窯体床 A	須恵器	甕(壺)	胴	薄い	ハケメ	ナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 5YR4/1(褐灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(多)	
81	107	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	円弧当具→ナデ	外面 N6/0(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 10YR8/3(浅黄橙)	1mm程度の砂粒を含む長石 特に多い	
82	9	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	同心円当具→ナデ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 7.5YR6/4(鈍い橙)	0.5mm程度の砂粒を含む 長石(少)	83と同一
83	105	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ナデ	外面 5Y6/1(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 7.5YR7/4(鈍い橙)	0.5~1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・雲母(少)	82と同一
84	104	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ハケメ	外面 N5/0(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 N6/0(灰)	1~2mm程度の砂粒を含む 長石(少)	

土器一覽

掲載番号	実測番号	地点層位	種別	器種	部位	壁厚	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
85	8	窯体床A	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ハケメ	外面 N6/0(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	84・86と同一
86	4	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ハケメ	外面 N4/0(灰) 内面 N5/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1~3mm程度の砂粒を少し含む 長石(少)	84・85と同一
87	7	窯体床B	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ハケメ	外面 N5/0(灰) 内面 N6/0(灰) 断面 N5/0(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
88	6	作業面覆土	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ナデ	外面 5Y6/1(灰) 内面 5Y6/1(灰) 断面 2.5Y7/3(浅黄)	1mm程度の石粒を含む 長石(少) 7mm程度の長石を1個含む	
89	1	包含層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ナデ		0.5mm程度の砂粒を含む 長石(少)	90と同一
90	5	作業面覆土	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ナデ	外面 10YR5/1(褐灰) 内面 N5/0(灰) 断面 5YR6/4(鈍い橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	89と同一
91	106	窯体層	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ	ナデ	外面 5Y7/1(灰白) 内面 5Y7/1(灰白) 断面 10YR7/2(鈍い橙)	0.5mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
92	11	作業面覆土	須恵器	壺(甕)	胴	薄い	格子タタキ→ナデ	同心円当具 ナデ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 7.5Y6/1(灰) 断面 5Y6/1(灰)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
93	66	包含層	須恵器	高杯	脚		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y7/2(灰黄)	1mm以下の砂粒を含む 長石(多)	
94	65	包含層	須恵器	高杯	脚		ヨコナデ	ヨコナデ	外面、内面 5Y6/1(灰) 断面 5Y4/1(灰)	1.5mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(中)	
95	68	包含層	須恵器	高杯	脚		ヨコナデ	ヨコナデ	外面、内面 N6/0(灰) 断面 2.5Y7/2(灰黄)	2mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(中)・黒色砂粒(少)	
96	67	包含層	須恵器	高杯	脚		ヨコナデ	ヨコナデ	外面 5Y5/1(灰) 内面、断面 5YR6/4(鈍い橙)	1mmの砂粒を含む 長石(少)	
97	94	包含層	須恵器	高杯?	脚?		ヨコナデ	ヨコナデ	外面 5Y7/2(灰白) 内面 2.5Y6/3(鈍い黄) 断面 5Y7/2(灰白)	1mm以下の砂粒を含む 長石(多)	
98	69	包含層	須恵器	器台	脚		凹線・組紐文	ナデ	N5/0(灰)	2mm以下の砂粒を含む 長石(多)	スカシ
99	79	包含層	軟質土器土師器	甕	口		ヨコナデ・凹線	ヨコナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1~2mm程度の砂粒を含む 赤色酸化土粒(少)・長石(僅)	
100	78	作業面覆土	軟質土器土師器	甕	口		ヨコナデ	ヨコナデ	外面 7.5YR7/4(鈍い橙) 内面 7.5YR7/6(橙) 断面 10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒を含む 長石(少)・石英(少)・角閃石(僅)	
101	80	包含層	軟質土器土師器	甕	胴		格子タタキ	ナデ	外面 5YR6/6(橙) 内面、断面 7.5YR8/8(黄橙)	2~2.5mmの砂粒を含む 長石(少)・赤色酸化土粒(中)・黒色砂粒(僅)	
102	76	包含層	軟質土器土師器	甕	胴		格子タタキ	ナデ	10YR8/6(黄橙)	0.5mm程度の砂粒を含む 長石(僅) 1~2mmの赤色酸化土粒(多)	
103	77	作業面覆土	軟質土器土師器	甕	胴		格子タタキ	ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5mm以下の砂粒を含む 長石(僅)	
104	82	作業面覆土	軟質土器土師器	小形甕	口胴		格子タタキ	ナデ	外面 10YR7/4(鈍い黄橙) 内面 10YR8/4(浅黄橙) 断面 10YR8/4(浅黄橙)	0.5~1mm程度の砂粒を含む 雲母(多)	
105	73	作業面覆土	軟質土器土師器	高杯	脚		ヨコナデ	ヨコナデ	外面、内面 10YR7/6(明黄褐) 断面 7.5YR7/6(橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・石英(少)・角閃石(僅)	ロクロ整形
106	72	作業面覆土	軟質土器土師器	手捏ね					外面、内面 10YR7/4(鈍い黄橙) 断面 2.5YR6/8(橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	
107	81	包含層	軟質土器土師器	手捏ね	把手				外面、内面 10YR7/4(鈍い黄橙) 断面 7.5YR5/4(鈍い褐)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)	

土製品一覽

掲載番号	実測番号	地点層位	器種	最大長	最大幅	最大厚	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
C1	70	包含層	板状窯道具	11.5	6	1.3	ユビオサエ	ユビオサエ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面 7.5Y5/1(灰) 断面 7.5Y5/1(灰)	9.5mmの小石を1個含む 2mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(多)	須恵質
C2	71	包含層	板状窯道具	10.5	11	1.5	ユビオサエ	ユビオサエ	外面 7.5Y6/1(灰) 内面、断面 N5/0(灰)	2mm以下の砂粒を含む 長石(多)・石英(多)	須恵質
C3	74	作業面覆土	無文当具	6.5		1	平滑な状況をしめず	剥離のため不明	外面 7.5YR7/6(橙) 内面 7.5YR6/6(橙) 断面 7.5YR6/0(橙)	1mm程度の砂粒を含む 長石(少)・石英(少)・角閃石(僅)	土師質

第6章 中山遺跡・中山古墳群

第1節 位置と経過

本遺跡は当初分布調査により2基の古墳群として認識していたものである。しかし古墳群の調査中に弥生時代の遺跡を検出し、その後周辺部が弥生時代の集落跡であることが明かとなったため、報告書作成時からこれを中山遺跡として分離したものである。第5章で記載した奥ヶ谷窯跡が位置する丘陵の東には、これとほぼ同様の規模・形状を持つ丘陵尾根部が存在する。遺跡はこの尾根頂部先端に中山6・7号墳が、その周辺部と南側斜面部高所に中山遺跡が占地しており、南側眼下には西山古墳群や平野部の服部遺跡などが見渡せる眺望のよい地点である。丘陵自体は頂部面積も狭く、斜面は急峻な地形を呈しているため、本来ならば遺跡が立地しにくい場所と感じている。特に集落を営むのに非常に困難な場所であり、これは遺跡の性格に帰すること大であると考えている。

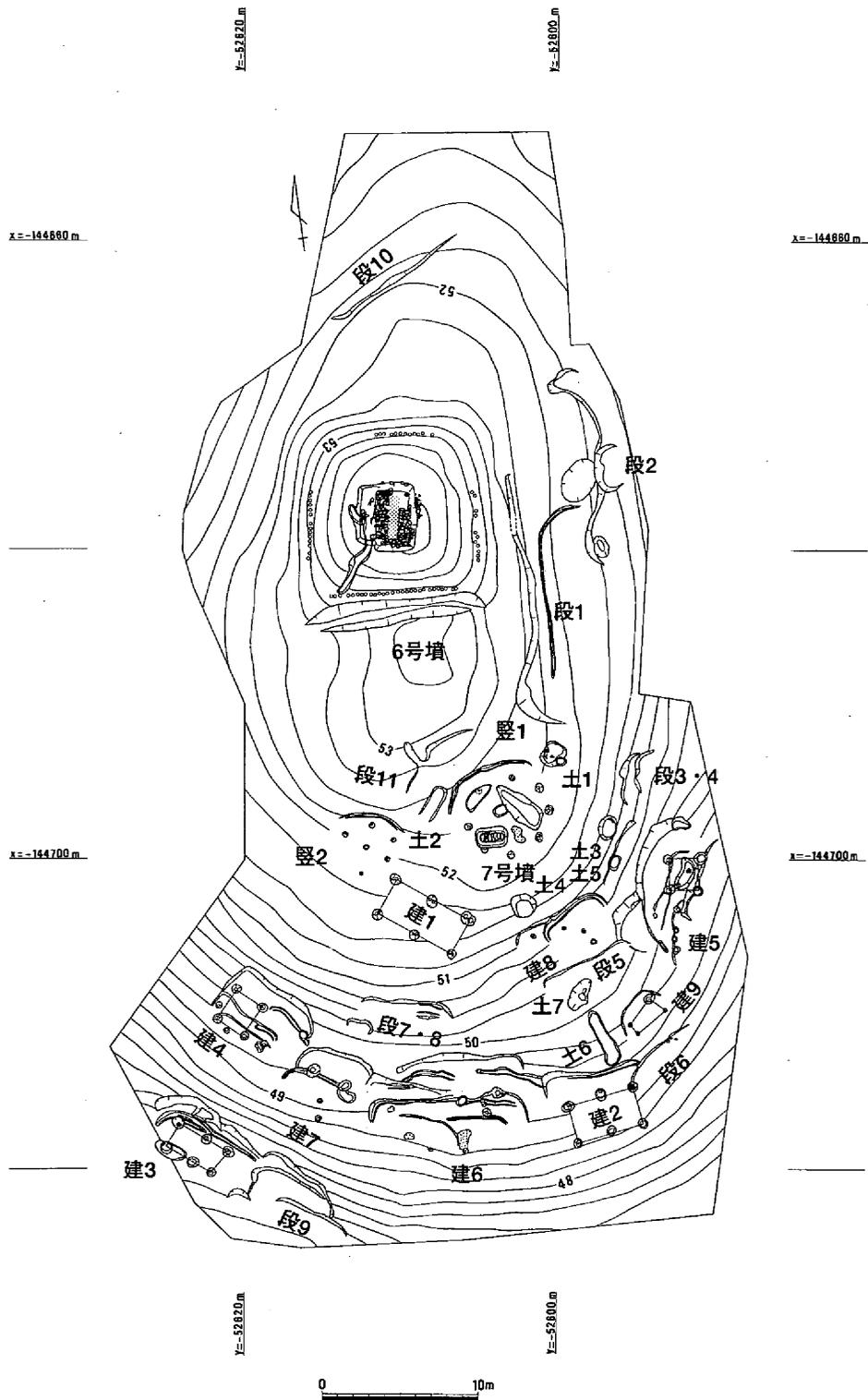
調査は平成4年6月7日より、対象を中山6・7号墳として開始した。この段階では7号墳に未買収地が存在していたため、やや変則的な調査区を設定せざるを得ず、調査は6号墳に集中して行った。その後6号墳の墳裾部から弥生時代中期の土器片が出土し、東側でさらにこの時期の段状遺構を検出した。この時点で周辺地形からこの時期の集落を想定したが、大半は未買収地の尾根南斜面に存在すると推定されたため、とりあえずそれ以外を調査対象とした。6号墳は小形の古墳ながら竪穴式石室2基や多数の埴輪を伴っていたため、調査は難行し、同年8月23日に未買収地を除く部分がようやく完了した。その後調査班は西山古墳群に移動したが、ここでも弥生集落を検出、古墳部分の調査完了後ただちに中山遺跡の調査を再開した。遺跡内、特に南斜面では調査前から段状地形が認められ、重機でなるべく広範囲の表土を除去してこれに対応し、同年12月8日に全調査を完了した。段状遺構多数を検出し、平地集落とは異なる景観の弥生集落が明かとなった。



第1図 調査区位置図 (1/4000)

第2節 中山遺跡の概要

1. 弥生時代の遺構と遺物



第2図 遺構全体図 (1/450)

(1) 竪穴住居

竪穴住居1 (第3図、図版28)

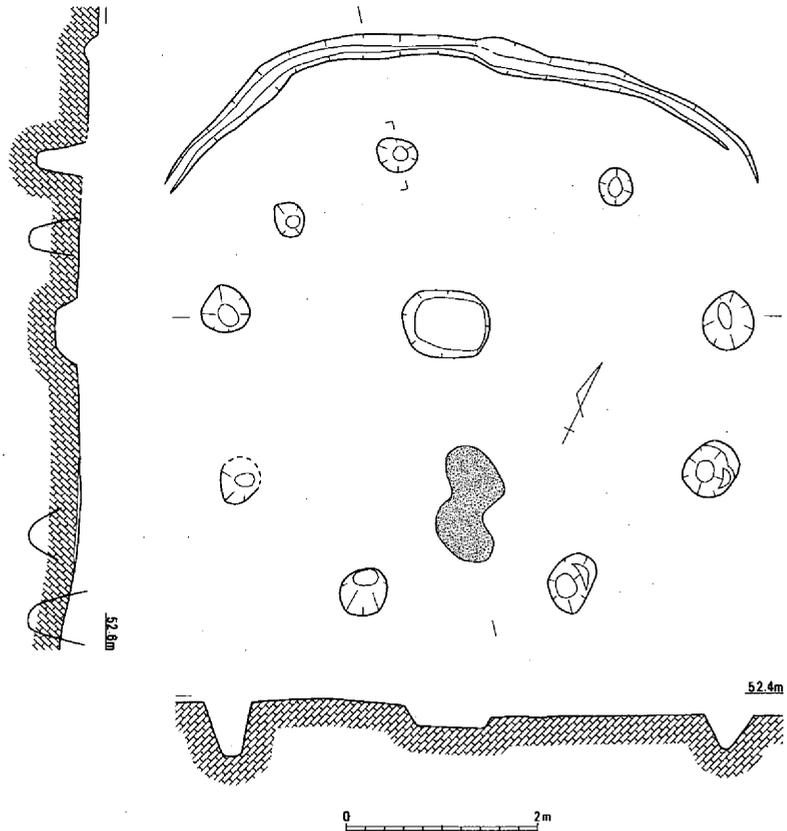
後述する7号墳と重複して検出されたもので、壁体溝の一部と柱穴10、中央穴1からなる。竪穴平面はほぼ円形を呈するものと考えられ、復元径は約7m前後を測る。柱穴は1.6~1.3mの間隔で配置し、立て替えの痕跡が残るものがわずかに存在する。中央穴は隅丸長方形を呈し、堆積土は灰・炭化物を含むものであった。また、この南に被熱面が検出されており、7号墳築造時の可能性も残るが、中央穴が住居北側にややずれていること等を重視すれば、この住居に伴うものと考えてよいだろう。

遺物は壁体溝内に薄手の甕小片が見られたのみであるが、時期的には他と同様の弥生時代中期のものと考えて矛盾ない。

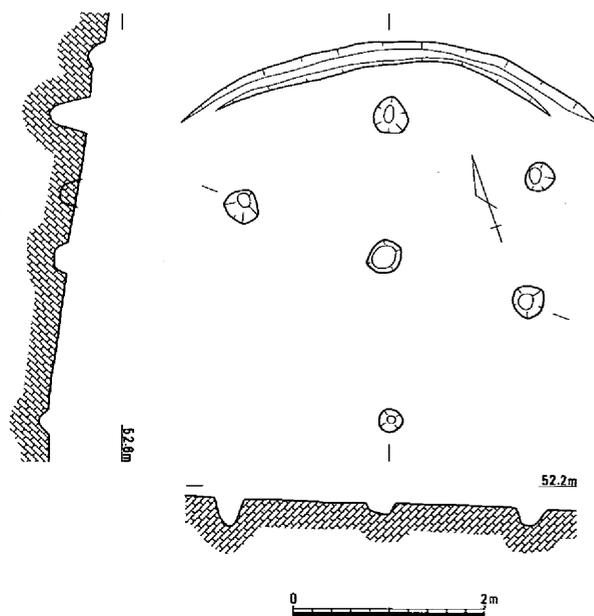
竪穴住居2 (第4図、図版28)

竪穴住居1の西側に隣接するもので、壁体溝と柱穴の一部が検出された。壁体溝が弧状を呈する点、柱穴は本来6本存在していたと考えられることから、竪穴の復元径は約4.6mを測るものと推定される。柱穴の間隔は1.3~1.9mを測り、竪穴住居1とほぼ同じである。中央穴は非常に小型で、床面ほぼ中央に位置する。

遺物は壁体溝内から溝手の甕片が出土しており、本住居も他と同様に、弥生時代中期の内に廃絶されたものと考えられる。



第3図 竪穴住居1 (1/80)



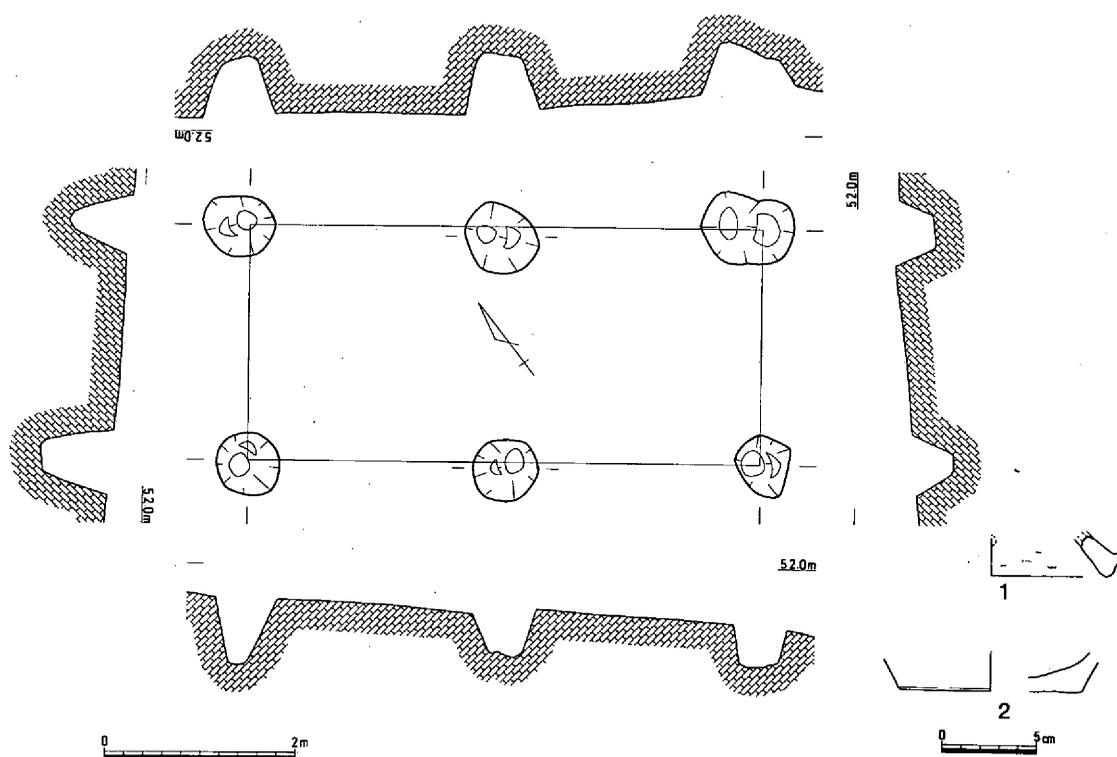
第4図 竪穴住居2 (1/80)

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第5図、図版28)

前述した竪穴住居同様、丘陵尾根部先端で検出された建物で、標高約52mの高所に位置する。柱穴配置は1×2間で、長軸は斜面に対してほぼ平行している。規模は2.46×5.35m、柱穴掘方は検出面で径60cm前後を測り、1回の立て替え痕跡が認められる。この建物は倉庫と推定されるが、緩斜面に立地するため本来は加工段が付随していた可能性もあるものと考えている。

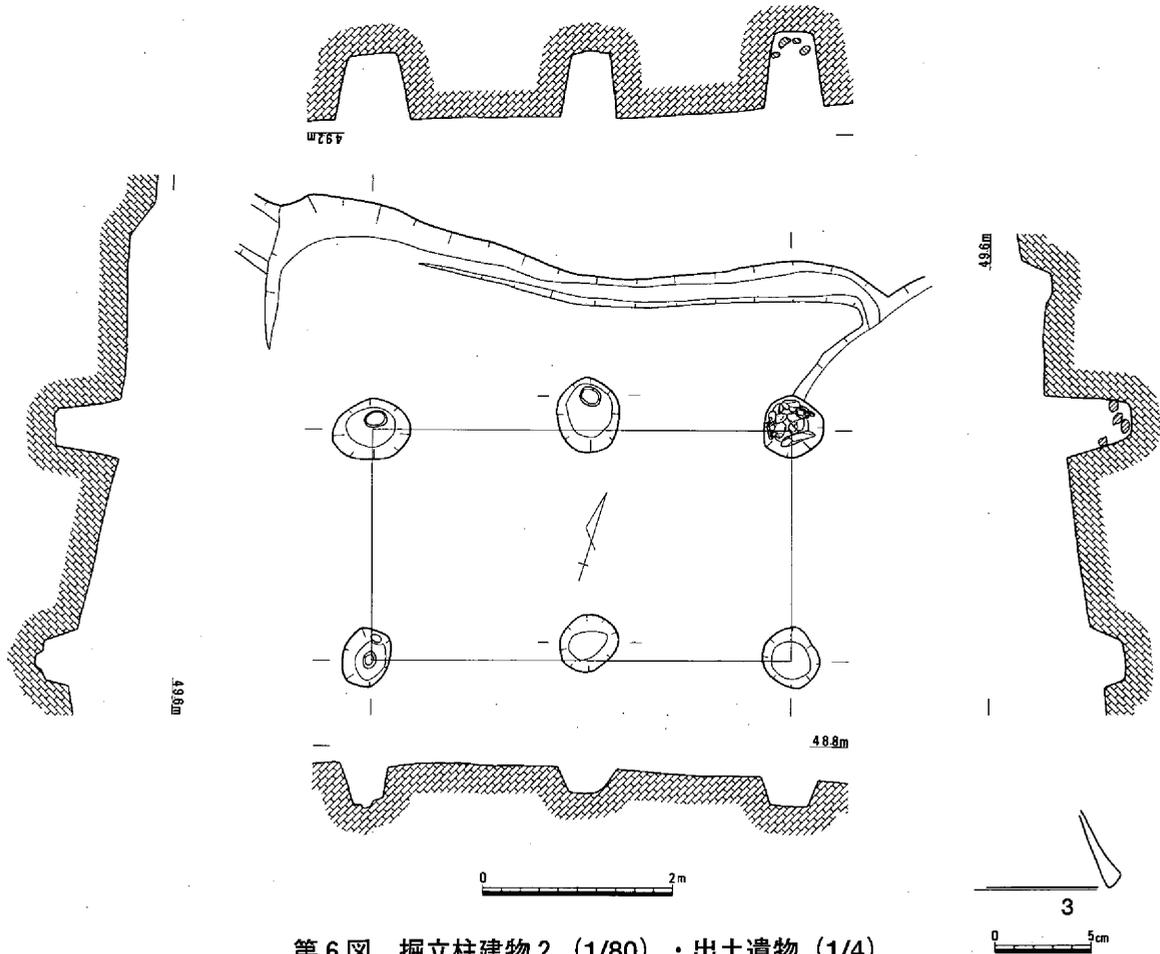
遺物は柱穴内からわずかに出土した土器のみであるが、建物の時期を示していると考えてよいであろう。1は風化した高杯脚部小片で、円孔透かしの痕跡が見られるほか、端部外面は凹線状に作られているものと考えられ、中期末の特徴をもっている。



第5図 掘立柱建物1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物2 (第6図、図版29)

掘立柱建物1の南東下方標高約49mの地点に位置する1×2間の建物で、主軸は斜面に平行している。規模は2.46×4.4mを測り、梁行きは建物1と同じであるが、桁行きはやや短い。柱穴掘方は径60cm前後を測り、径20cm以下の柱痕跡も部分的に認められる。また、柱穴底部に小石を充填したのが見られ、礎板的なものと言うよりは、柱の高さを調整するために埋め戻したのと考えておきたい。この建物に付随する加工段は、北辺柱穴列から1m前後離れた位置に壁体溝状の溝を伴っており、これが雨落ち溝的なものであれば、建物の屋根の規模を推定するうえで参考となるかも知れない。仮に壁体溝の内側の規模が屋根の規模とほぼ同じとすれば、およそ5×6mの大きさとなり、柱穴内部との面積比は約1:2.3となり、建物の高さ、上屋構造の復元の参考となるほか、隣接する建物との最低距離を知るうえでも検討すべき問題である。



第6図 掘立柱建物2 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

建物は加工段堆積土中からわずかな土器片が出土したのみである。3は高杯脚端部小片で、表面の剥離が激しく、底径や細部の調整等は明かでないが、そのおよその形態から弥生時代中期～後期前葉の特徴を持っている。

建物の時期は、周囲の状況から弥生時代中期末として間違いないであろう。その場合出土土器にも矛盾はないものと考えている。

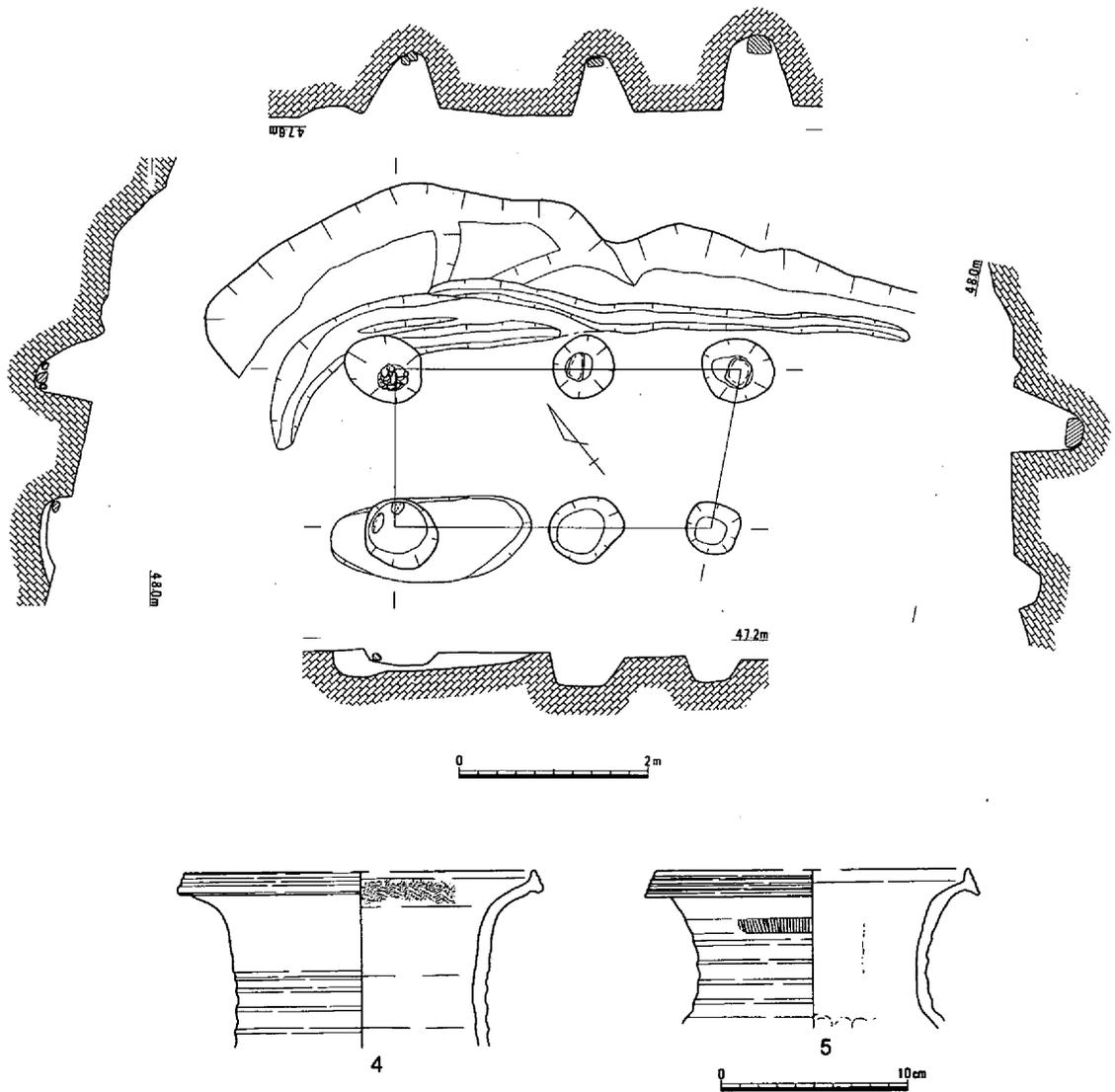
掘立柱建物3 (第7・8図、図版29)

調査区南西の標高47mの低い地点で検出された1×2間の建物跡で、主軸は他と同様斜面に対して平行にとっている。規模は1.7×3.65mを測るやや小型なもので、柱穴掘方は径60cm前後を測り、底面に自然石を伴うものが多い。特に北辺では全ての柱穴に見られ、柱穴自体も底面レベルが南辺より一段低いことなどから、礎板的意味合いよりは建物2と同様、柱材の長さを調整した可能性が強いものと考えている。建物北側には壁体溝状の溝3条のほか不整形な段状遺構が存在しており、少なくとも2回以上の造り替えを行っているものと判断している。しかしこれらが建物とどう有機的に結びつくかは明らかにできなかったため、建物とは別の段状遺構が重複している可能性も十分ある。このほか西端の柱穴に重複して多数の土器を伴う土塊状の遺構が検出されており、柱穴を掘り込む以前の土塊、あるいは建物を建てる際の関連遺構のいずれかと考えられる。

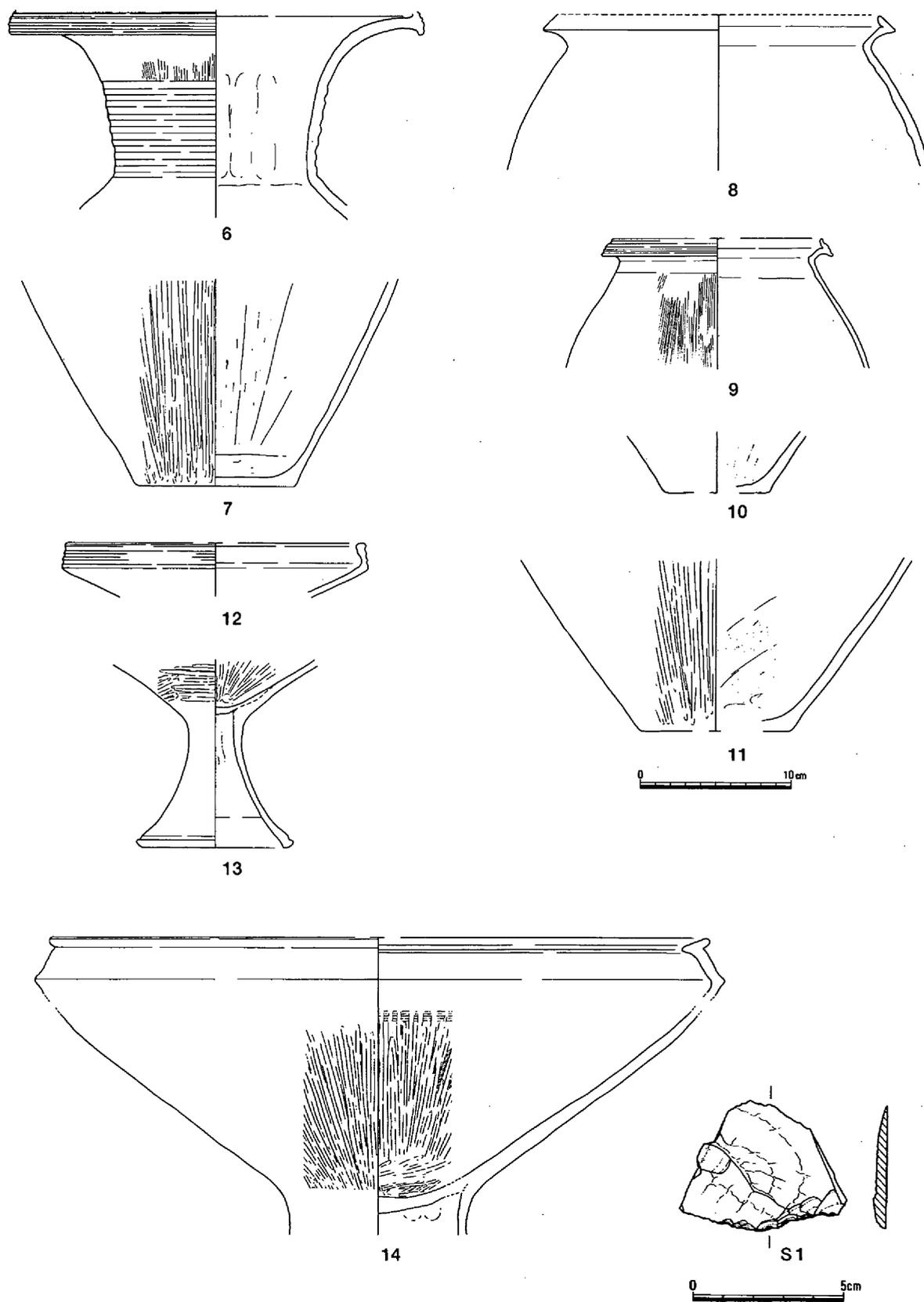
遺物のうち図化できたのは、ほとんどが前述した柱穴下層の土塊から出土したもので、ほぼ同時期の一括品と言えるものである。4は北西コーナーの柱穴内から出土した壺片で、頸部外面に凹線、口

縁内部上面にクシ状工具による波状文を持ち、口縁部外面には2条の凹線文を巡らせている。5～14は土壙出土品である。5は4とほぼ同様の器形を持つ壺口頸部片で、頸部外面に4条の凹線文、口縁部外面にも4条の細かな凹線文を巡らせている。また頸部下部の内面には凹圧痕が認められ、肩部内面の特徴を示している。6は口縁が大きく開くタイプの壺で、頸部外面には8条の凹線文、口縁外面には4条の凹線を施している。頸部内面にはシボリ状の凹凸を残し、肩部内面は剥離しているため調整不明である。7は6と同一個体と考えられる壺底部片で、体部外面に縦方向のヘラミガキ、内面に縦方向のヘラケズリが顕著に認められる。8は復元口径21cmを測る壺で、表面剥離のため不明な部分が多いが、口縁端部を折り返す薄手のタイプと考えられる。9は小型の甕小片で口縁外面に3条の凹線を巡らす。12・13は同一個体の可能性がある高杯で、口縁部外面に3条の凹線、杯部は内面に放射状の、外面に多角形状のヘラミガキを施すタイプと考えられる。14は復元口径44cmを測る大型の高杯で口縁端部は甕と同様に拡張するタイプである。その他サヌカイト製のスクレーパー1点がある。

建物出土土器から弥生時代中期後葉でも最終末に近い時期となるう。



第7図 堀立柱建物3 (1/80) ・出土遺物① (1/4)



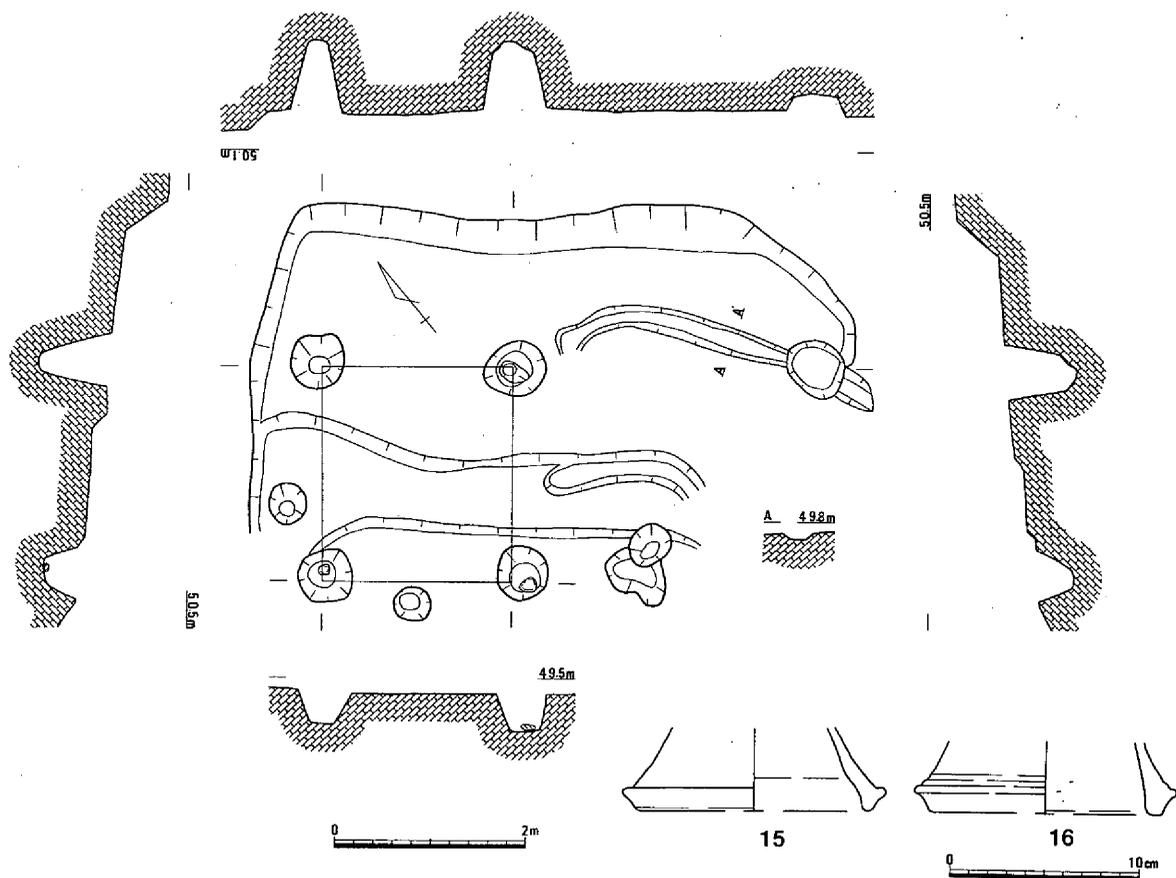
第8図 堀立柱建物3 (1/80) ・出土遺物② (1/4・1/2)

掘立柱建物4 (第9図、図版29)

掘立柱建物3の上方、標高50m付近に位置する建物で、柱穴配置は1×1間、規模は2.3×2mを測り、掘立柱建物2のほぼ半分の大きさである。柱穴は底面に自然石を置くものがあり、他と同様な機能を持つものと考えられ、底面レベルも石材上面レベルでほぼ均一となっている。建物に伴う加工段は最も外側に見られるものと考えられ、建物側はコーナー部が角を持つが、反対側は広い空間を有しており、コーナー部も緩やかに作られている。この空間は建物に付随する施設、あるいは建物の機能に間接的に関係するものと考えているが、いずれにせよこうした斜面地形でのみ検出できるものであることは特に強調しておきたい。また、建物2と同様に、屋根の構造が加工段に影響しているものとするれば、建物北東側の空間が重要視され、単純に考えれば切妻建物が主軸を斜面に平行して建てられていたと想定できる。

このほかにこの建物に重複して別の段状遺構や、壁体溝状の溝が検出されており、その配置状況から、建物が最後に建てられているものと考えている。これら先行する段状遺構には1間分の柱穴配置が想定でき、斜面下方に流出した柱穴があるとすれば、掘立柱建物9と同様なものが存在していた可能性が強いと感じている。この点は後述する掘立柱建物5と同様な状況であり、集落全体を考察するうえで非常に興味深いものと言える。

遺物は図化できたものは高杯2点のみである。15は脚端部の破片で、表面剥離のため調整等是不明確であるが、端部の造りから中期末のものとしてよいであろう。16は外面下端に凹線條の凹凸が



第9図 掘立柱建物4 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

2条残り、端部は幅広の凹面を持っている。これらは他と同様弥生時代中期末のものと考えられ、建物とこれに重複する段状遺構がこの短期間に機能していたことは間違いないものと判断している。

掘立柱建物5 (第10図、図版30)

調査区南側東端で検出された1×1間の建物跡で、掘立柱建物4と同じく標高50m付近に位置し、周辺部には複数の段状遺構が重複している。建物は主軸が不明であるが、東西2m×南北2.1mを測り、ほぼ掘立柱建物4と同規模なものである。柱穴掘方は60cm以上を測り、底面レベルは均一なものとなっている。建物に伴う加工段は最も外側に見られる大型で弧状を呈するものと判断している。その場合建物の周囲の空間配置には大きな特徴が見られ、大胆に考えれば、寄せ棟造りの建物で、南に大きな空間を持っている姿が想定できる。

また、壁体溝が認められない点は、これが排水溝、あるいは本来の壁体溝としての機能を持つものであれ、この建物が高床式のものであることを示唆していると考えておきたい。

重複する段状遺構は3回以上の造り替えを行っているものと判断しており、基本的に斜面上方へ向かって作り直されていることが一部の土層観察により明かとなっている。また柱穴がいくらか認められることから、建物4に重複するものと同様、1×1間程度の簡略的な建物を想定してもよいかも知れない。もちろん柱穴が検出できなかった段状遺構については、壁立ちの建物や、検出困難な極めて浅い柱穴を伴っていた可能性もあるだろう。

遺物は堆積土中から土器細片や、石器が出土したのみである。17は高杯脚端部小片で、表面剥離のため不明な部分が多いが、中期末のものとしても矛盾ないものである。S2は石鏃で、全長4.3cm、最大幅1.2cmを測るやや大型のものである。石材はサヌカイトで、重量は2.4gを測る。

建物の時期は周辺遺構と同様、弥生時代中期末と考えられ、出土遺物にも矛盾はないであろう。

掘立柱建物6 (第11図、図版30)

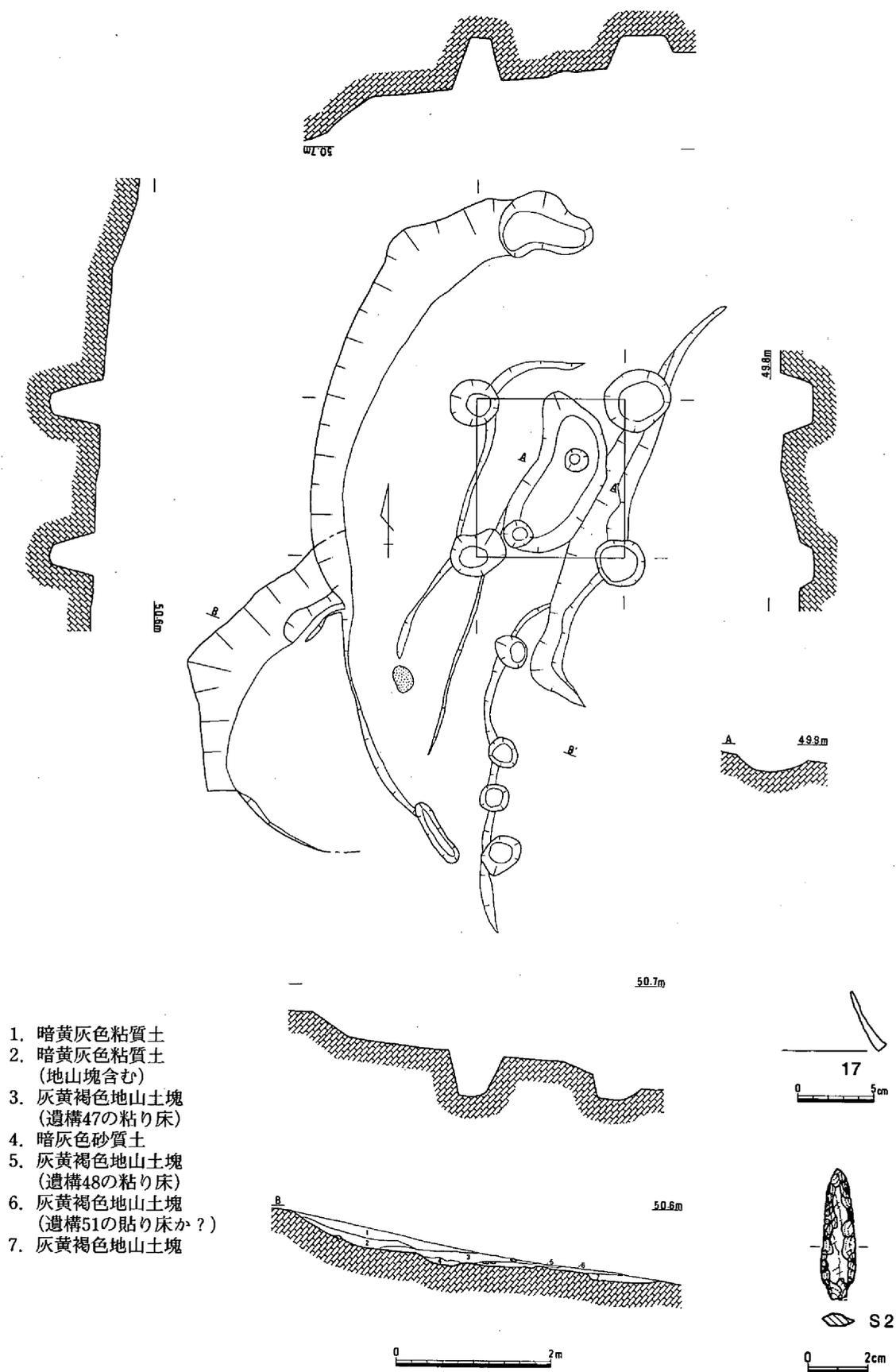
本遺構は便宜的に掘立柱建物として紹介しているが、本来は複数の段状遺構を伴うものとして扱うべきものである。ここでは掘立柱建物6を遺構群東寄りに存在する大型柱穴2本と、これに付随すると考えられる最上段の加工段のみに限定し、他は掘立柱建物6の重複遺構として説明する。

建物は前述したものと同様に大型なもので構成されるが、2穴しか検出できておらず(より下方で何度も精査したが見つからなかった)、他と同様に底面レベルが均一であるならば、流出した可能性は全く無く、棟持柱2本で構成される建物と考えざるを得ない。

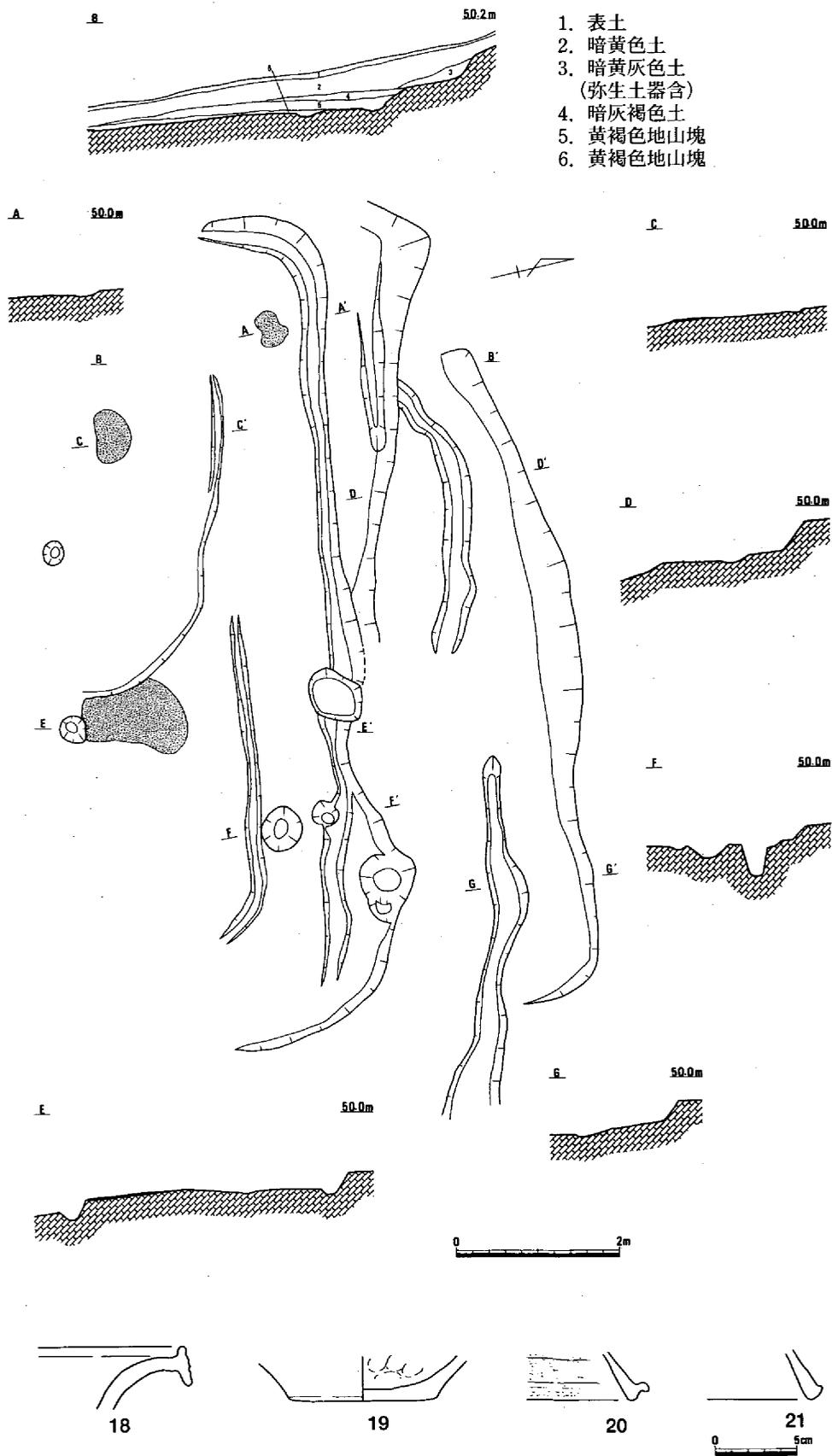
また、これと同じ柱穴配置を持つ建物7が存在することからも、この配置を積極的に評価したいと考えている。その場合、これに伴う加工段と柱穴(列)とで構成される空間配置が参考となるであろう。例えば、北側の空間が異常に広い点は、主軸を斜面に平行にとる切妻造りの建物を感じさせる。

重複遺構はB-B'ラインの土層でも明らかなように、より高所へ向かって造り替えを行っている判断され、3~4回の造り替えが想定できる。このうち床面に被熱面を伴うものが3カ所認められ、部分的に小型の浅い柱穴を検出している。この柱穴は検出が容易な部分でも丹念に精査しないと見つからないもので、図示したもの以外にも存在していた可能性が非常に強いものである。これら段状遺構は本来平地式住居と呼ぶものに対応する可能性が強いと考えている。

これらの遺構群は出土した土器から、弥生時代中期末に連続して作られたものと考えられ、掘立柱建物6はその最終段階に建てられたものと言える。



第10図 掘立柱建物5 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2)



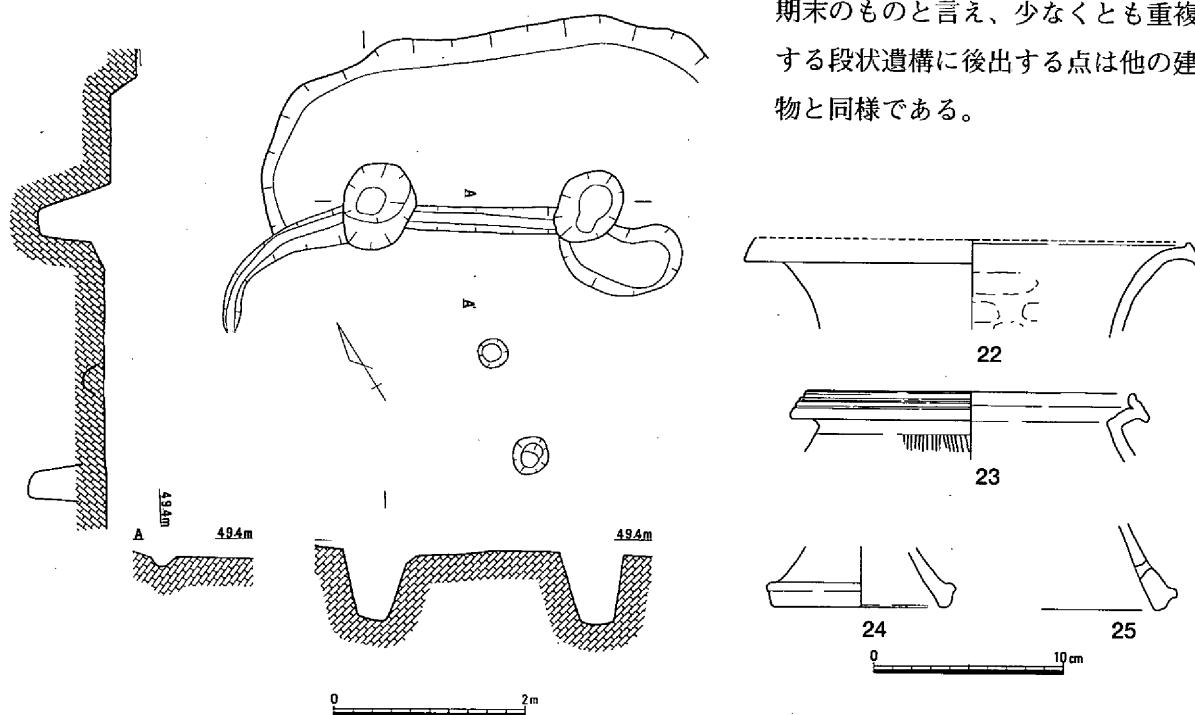
第11図 掘立柱建物6 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

掘立柱建物7 (第12図、図版30)

前述した掘立柱建物4と同6の間で検出されたもので、標高は49mを測る斜面部である。柱穴配置は掘立柱建物6と同様桁行き1間分のみで、流出したものは存在しないと判断している。柱穴間距離も掘立柱建物6と同じく2.4m前後を測り、主軸は斜面に平行している。柱穴は前述したものと同様、径60cm前後を測る大型で深めのものである。これに伴う加工段は壁体溝を持たず、ほぼ建物を囲むように配置している。柱穴列と加工段によって構成される空間配置は掘立柱建物6とはやや異なり、これらは建物のための必要最小限の空間を持っているように感じられる。

建物に重複して検出された段状遺構(壁体溝)は先行する時期のものとして判断され、小柱穴も見られたが、明確な建物を抽出するに至っていない。堆積土中から出土した土器はいずれも小片であるが、他と同様の時期を示している。

本建物は出土土器から弥生時代中期末のものと言え、少なくとも重複する段状遺構に後出する点は他の建物と同様である。



第12図 掘立柱建物7 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

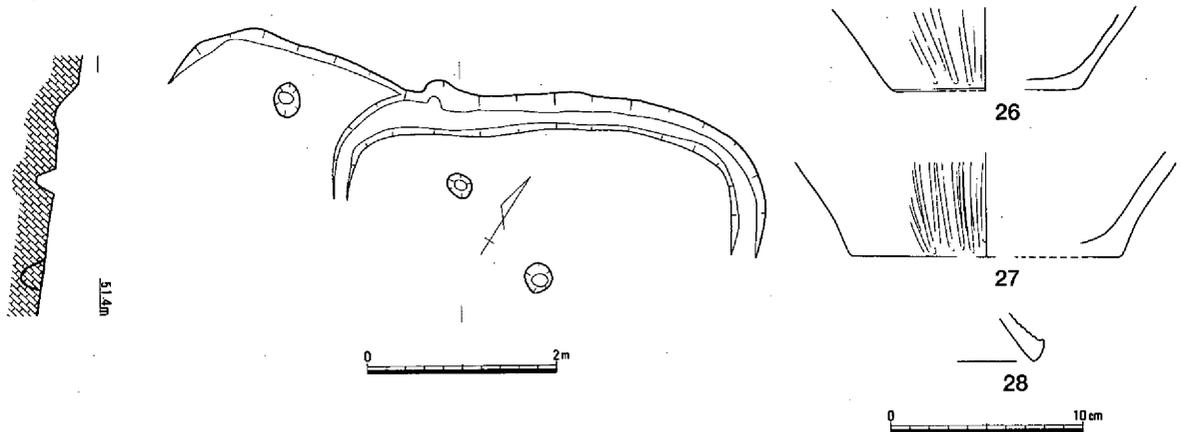
掘立柱建物8 (第13図、図版31)

本建物は斜面上方、標高51mの地点に位置し、より高所には竪穴住居1が存在する。遺構は建物と段状遺構が重複したもので、ここでは便宜的に扱っているが、本来は分離すべきものである。建物は小型の柱穴1間分が検出されており、斜面部のものは流出したものと考えている。本来は掘立柱建物9と同様1×1間ものものと推定され、桁行規模は約2mを測る。明確な壁体溝は検出されていない。また切り合い関係が明かとなっており、東側の加工段に後出するものである。

先行する加工段は壁体溝をともっており段状遺構と確認できるものである。小柱穴が1カ所認められるが、伴うかどうか判断できなかった。壁体溝はコーナー部がかなり明確なもので、少なくとも床面は東西が4m前後を測ることが明かである。

出土遺物は段状遺構側で出土したもので、いずれも小片である。26・27は壺底部片で、内面は風化あるいは剥離のため調整不明である。外面は縦方向のヘラミガキが認められる。28は高杯脚端部の小片で、裾部外面には6条の凹線が認められるが、脚端外面から内面は表面剥離のため調整等は不明である。

建物、段状遺構は出土土器から弥生時代中期末と判断している。



第13図 掘立柱建物 8 (1/80) ・ 出土遺物 (1/4)

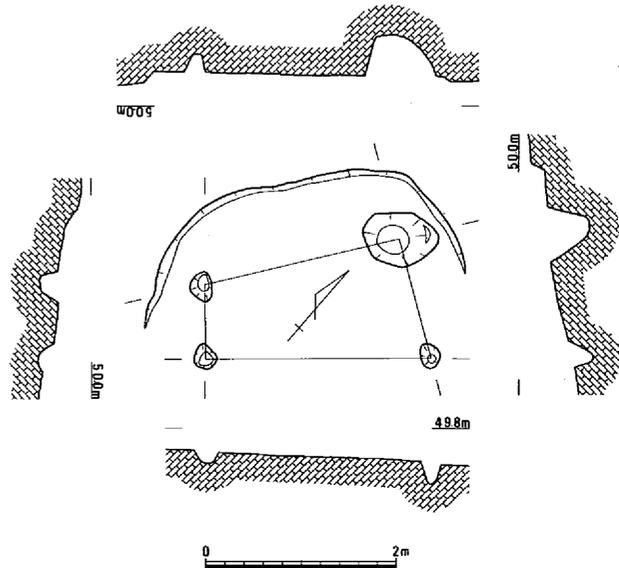
掘立柱建物 9 (第14図、図版31)

調査区南斜面やや東よりの標高50m付近に位置する非常に小型の掘立柱建物跡である。柱穴配置は南側が広く開く1×1間で、規模は約0.8~1.3m×2.1~2.4mを測る。柱穴は北側のものが極端に大きく作られている点が気になるが、他は径20cmを測る小型なもので構成されている。建物に伴う加工段は全体に弧状を呈し、わずかにコーナー部が見て取れる。壁体溝は検出されていない点は、前述した建物8と同様で、この種の建物に共通する可能性を考えている。

遺物は図示できるものはないが、加工段壁寄りの床面から、甕体部片と推定される薄手の土器片があり、周辺部と同様の弥生時代中期末のものと考えている。

建物の時期は出土土器が示す通りである。また、本遺構は一見すると竪穴住居を連想するが、上記した理由などから異なる建物と判断している。柱穴配置が整然としない点も今後の建物を考察するうえで、参考となる。

以上、確証はないが、道具小屋などの従的施設を考えてもよいかも知れない。



第14図 掘立柱建物 9 (1/80)

(3) 段状遺構

段状遺構1 (第15図)

次節で述べる6号墳の東側で検出された遺構で、加工段とその床面で検出された壁体溝状の溝からなるものである。段状遺構としては遺跡内最大規模を持つもので、少なくとも南北は約13mを測る。外側の加工段は壁面が非常に緩やかな形状を持ち、南端部ではやや西側に張り出して特徴的な形態を呈している。壁体溝状の溝は少なくとも北側にコーナー部を残し、西辺は直線的に伸びている。両者の切り合い関係は不明であり、同時期の可能性も強いと考えられる。床面はほぼ水平であるが、明確な柱穴は検出できなかった。

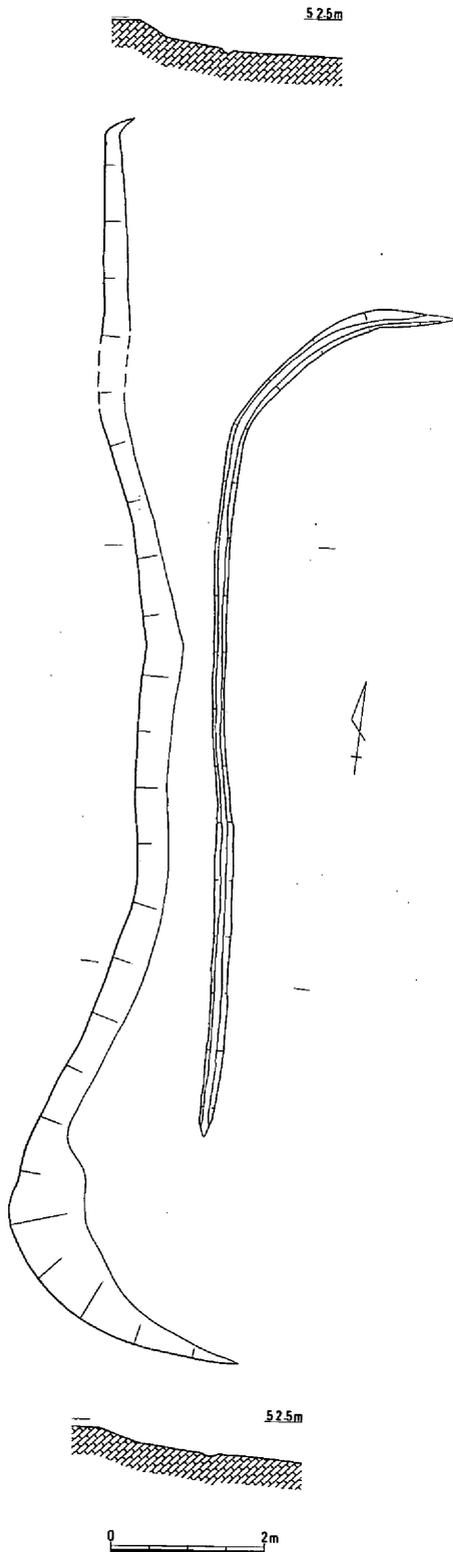
遺物は図示していないが、堆積土中から6号墳の埴輪片以外に弥生土器細片が出土しているが、いずれも中期末頃と推定されるものであった。

遺構の時期は出土土器が示す弥生時代中期末と判断しているが、その性格については判然としない。ここでは掘柱建物6と重複する段状遺構と同様、検出困難な小型柱穴等を持つ平地式建物が存在していた可能性を指摘するにとどめておきたい。

段状遺構2 (第16図)

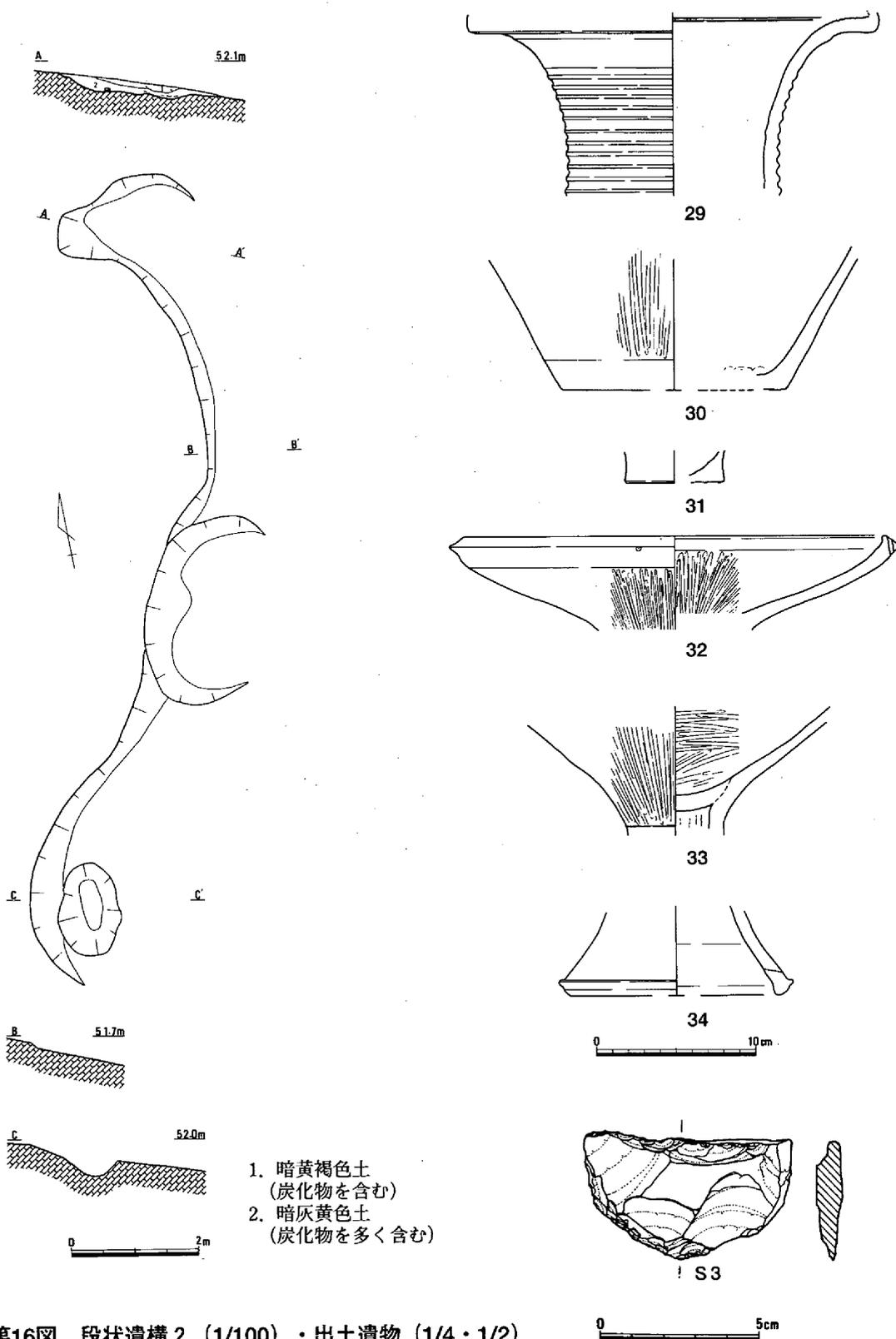
段状遺構1の北東側に隣接するもので、非常に不整形な加工段、土壙状遺構からなる。地形的には尾根頂部から斜面に移行する地形変換点にあるため、床面の大半は流出しているものと判断している。土壙状を呈している部分は壁際中央部と南端部、そして図面では解かりにくい、北端部もやや窪んだ形状を呈している。このうち北端部の窪みでは多量の炭化物とともにまとまった量の土器が出土している。

29は堆積土中からの出土で、頸部外面に12条の凹線文、口縁端部は折り曲げるタイプの壺である。30～34は北側の窪地部分から出土したものである。30は壺底部で、外面には縦方向のヘラミガキが認められ、内面は剥離のため調整不明瞭である。31は小型の甕底部で、調整は不明である。32は高杯杯部片で、口縁端部はやや肥厚して上面を浅い凹面としている。内外面とも放射状のヘラミガキ、口縁端部に小孔が認め

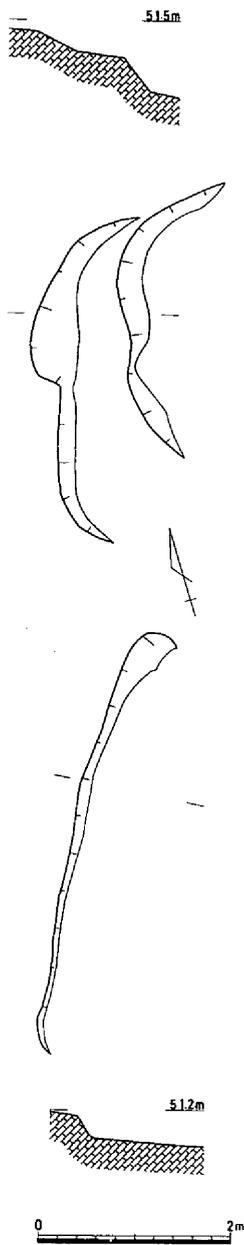


第15図 段状遺構1 (1/100)

られる。33は高杯杯部片で、脚部外面に沈線の痕跡が残る。杯部は内外面ともヘラミガキがされており、底部は円盤充填で形成されている。34は高杯脚端部の小片で、脚裾部に三角形と推定される透かし痕跡が認められる。S3はサヌカイト製のスクレイパーで、長さ6.5cm、幅4cm、厚さ8mmを測る。



第16図 段状遺構2 (1/100) ・出土遺物 (1/4・1/2)



加工段の時期は出土土器から、弥生時代中期後葉と考えられるが、その性格については不明な点が多く、加工段と土壙状部分とはやや時期差が存在する可能性もある。

段状遺構 3 (第17図)

段状遺構 1 の南東部斜面、標高51m付近に位置し、上下の二段が検出されている。いずれも南北3~3.5mを測る小型のもので、同時期のものというより造り替えの可能性が高い。遺物は出土していないが周囲の遺構と同じ堆積土で埋まっていたことからほぼ同時期のものとして間違いないと考えている。

段状遺構 4 (第17図)

段状遺構 4 の南に隣接するもので、西辺は直線的な形状を呈しコーナー部分がわずかに残る。南北は4.5mを測り、床面はほぼ水平であるが、柱穴は検出できなかった。遺物は堆積土中から土器が少量出土している。35は壺の口縁端部片で、上下に拡張した外面には3条の凹線が巡っている。36は高杯底部片で、円盤充填式のものである。表面は風化しているが外面にヘラミガキの痕跡が残る。

時期は他と同様弥生中期末と考えられる。

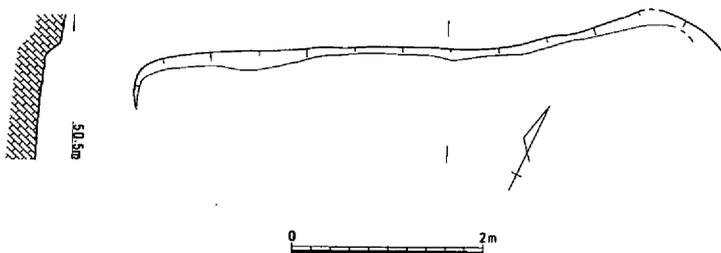
段状遺構 5 (第18図)

段状遺構 4 の南側斜面、標高51m付近に位置するもので、これとほぼ同様の形態・規模を持っている。床面はほぼ平坦に作られているが、柱穴は検出できていない。

時期の解かる遺物は出土していないが、その形態や壁体溝が存在しない点などから他と同様弥生時代中期末のものと判断している。

段状遺構 6 (第19図)

第17図 段状遺構 3・4 (1/80) ・出土遺物 (1/4) 掘立柱建物 2 の東側に隣接するもので、標高は約49mを測る。急斜面のため遺存状態は悪く、わずかに壁側が検出できたにすぎない。規模は長さ5.2m以上を測り、前述した段状遺構 4、同 6 とほぼ同じである。壁体溝は全く検出できておらず、この点もこれらと共通すると言える。また、切り合い関係から、掘立柱建物 2 に先行することが判明している。床面からは土器が少量出土しており、図示できるものはないが、他と同様の時期として矛盾ないものである。



第18図 段状遺構 5 (1/80)

時期は建物2に先行することが明らかであり、弥生時代中期末と考えられる。

段状遺構7 (第20図)

丘陵先端部の南斜面、標高50m付近に位置するもので、加工段と壁体溝状の溝で構成される。形態的には他と同様で、北辺はほぼ直線を呈し、

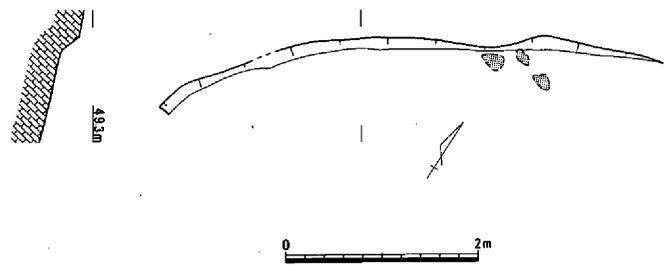
東端部では緩やかなコーナーを形成している。規模は東西6m以上を測るものと推定され、壁体溝は部分的であるが2本認められることから、1回の造り替えを行っているものと判断している。

遺物は出土していないが、他と同様弥生時代中期末のものとしてよいであろう。

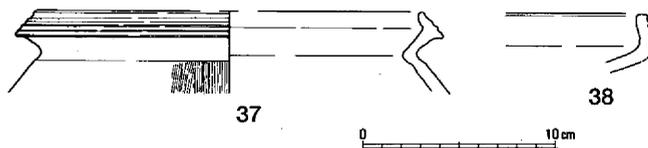
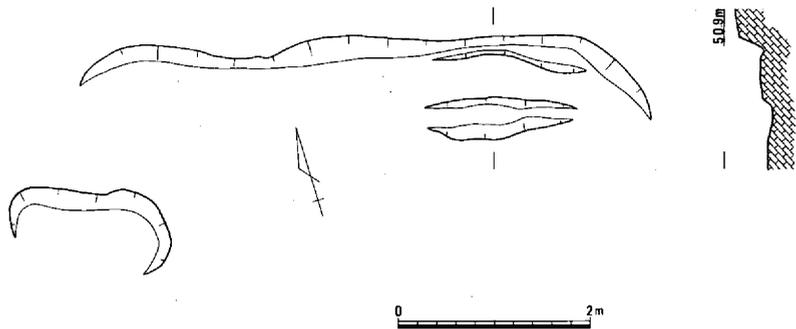
段状遺構8 (第20図)

段状遺構7の南西下方に隣接するもので、形態的には土壇状を呈した小型なものである。床面の規模は東西1.5mを測り、幅は約1.2mほどが存在する。

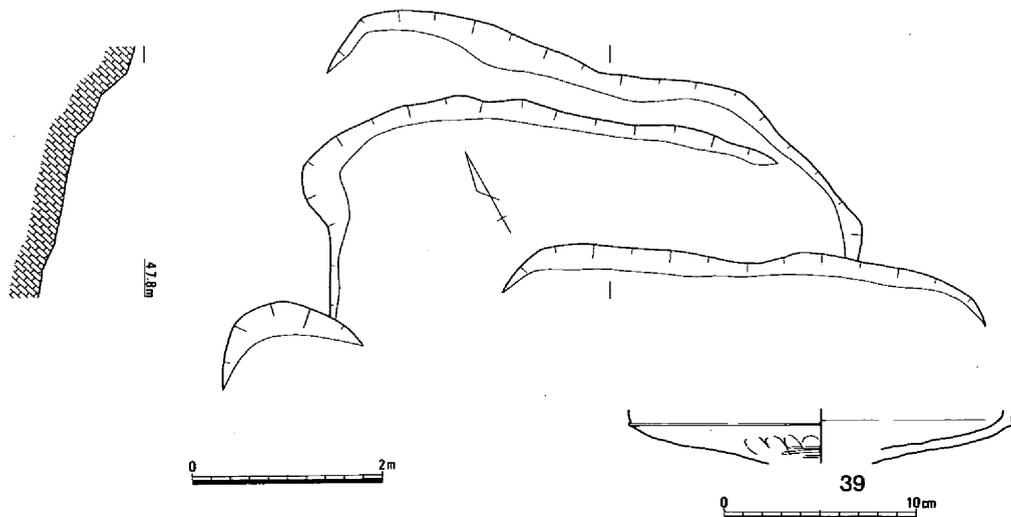
遺物は土器小片がわずかに出土している。37は口径20cm前後を測るものと推定される甕口縁片で、口縁端部は折り返され、外面に4条の凹線を巡らす。38は高杯口縁部



第19図 段状遺構6 (1/80)



第20図 段状遺構7・8 (1/80) ・出土遺物 (1/4)



第21図 段状遺構9 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

小片で、口縁部は屈曲してまっすぐ立ち上がるタイプである。外面には4条の凹線が廻り、端部は平坦に作られている。

時期は、土器の形態から弥生時代中期末と考えられる。

段状遺構9 (第21図)

遺跡最南端かつ最も低い標高47m付近に位置するもので、4つの加工段で構成される。これらは不明確な点が多いが、形態や規模は段状遺構4～6と同様で、規模は最上段から約5.5m、5.1m、5mを測り、最下段は小型に見えるが、本来は同規模な可能性が高い。

遺物は堆積土上層からの出土で、上方遺構からの転落品の可能性もある。このうち図化できたものは39の高杯杯部小片で、口縁は明確に屈曲するタイプである。底部外面は縦方向の強いナデ、あるいは削り後、横方向のヘラミガキが施される。

時期は他と同様、弥生時代中期末と推定され、短期間に連続して造られたものと考えられる。

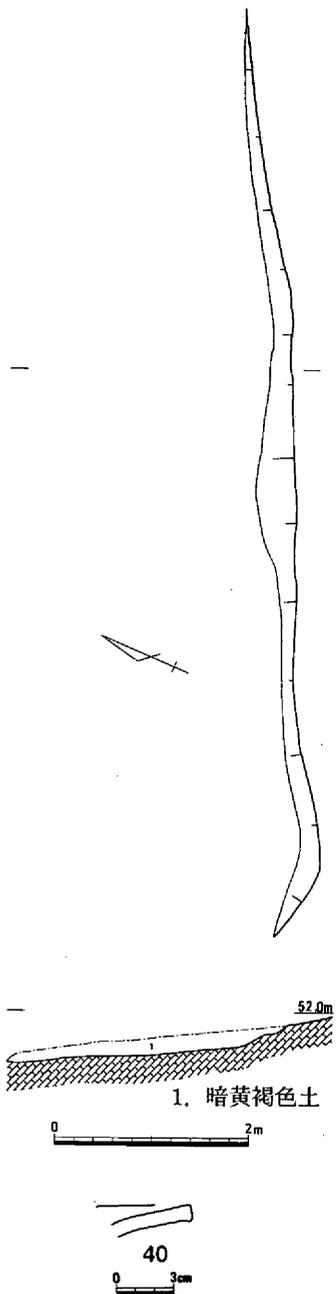
段状遺構10 (第22図)

調査区北端部、6号墳北側の屋根頂部で検出されたもので、南辺が直線的に伸びる大型の段状遺構である。規模は東西10m以上を測り、床面は平坦で壁体溝は検出されなかった。遺物はわずかで、図化できたのは40の壺口縁小片のみである。

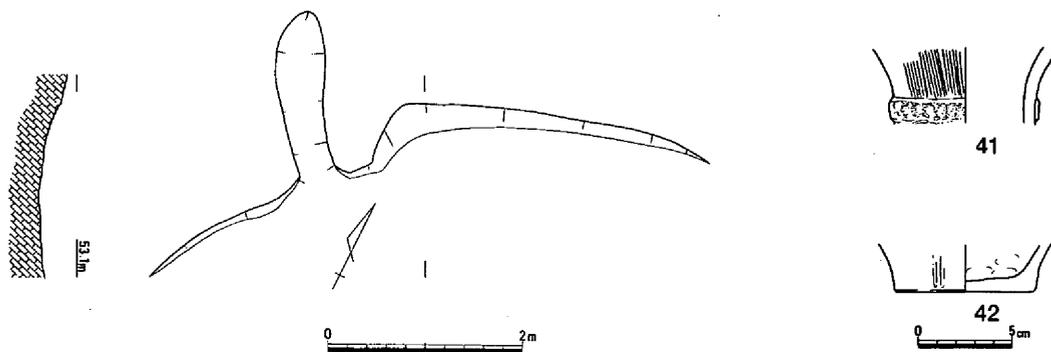
遺構の時期は出土土器から弥生時代中期後葉でも古い段階の可能性が高く、注意しておきたい。

段状遺構11 (第23図)

竪穴住居1の北西部に隣接するもので、一部溝状のものが取り付いているが、基本的には弧状を呈するものである。遺存状態が悪くここでは別な遺構として取り上げているが、その配置から竪穴住居1の周溝の可能性も強い。41は壺頸部小片で、頸部外面に圧痕文を巡らす張り付け突帯をもつ。42は内面に凹圧痕が残る甕底部片で、いずれも弥生時代中期中葉新段階～後葉古段階のものと考えられる。よって、竪穴住居1もこの時期となる可能性が高い。



第22図 段状遺構10 (1/80)
・出土遺物 (1/4)



第23図 段状遺構11 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

(4) 土壌

土壌 1 (第24図、図版31)

丘陵頂部の竪穴住居 1 の北西に隣接するもので、大小ふたつの土壌が切り合っていたものである。いずれも堆積土に炭化物を含んでいたが、明確な被熱痕跡は認められなかった。大型の土壌底面には溝状の窪みが認められるほか、自然石が 2 点密着していた。

出土土器 43 は甕の体部片で、外面は縦方向のハケメ後半を同方向のヘラミガキ、内面は上半にハケメ、下半はナデ調整と推定される。

土壌の時期は出土土器から、弥生時代中期中葉まで溯る可能性があり、屋根上の他の遺構に近い時期となる。

土壌 2 (第25図)

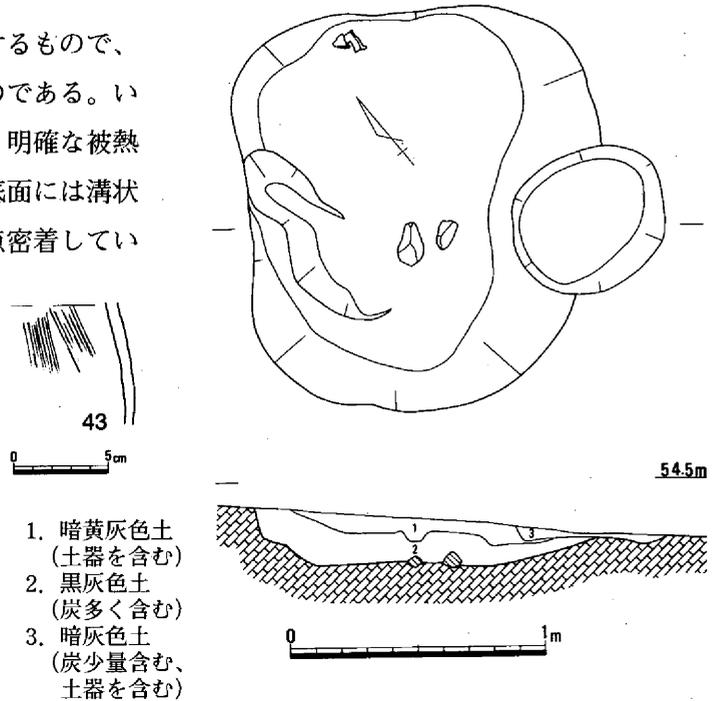
竪穴住居 1 と段状遺構 11 の間で検出された土壌で、南西側は流出しているため全容は明らかにできていない。平面形態からは木棺墓を連想させるが、極めて浅いことや、底面が緩やかに下降する点などから別の性格を検討したほうがよいものと考えられる。

堆積土は弥生時代の遺構と同様であったことからほぼ同時期の遺構と考えている。

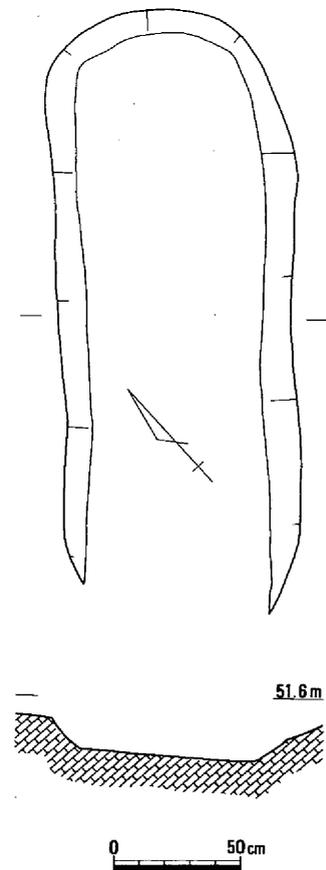
土壌 3 (第26図)

丘陵先端部の地形変換点付近で検出されたもので、規模・形態や炭化物を多く含む点で、後述する土壌 4 と同様な性格のものと考えられる。規模は径 160×116cm、検出面からの深さ 20cm 以上を測る。底面北西部からは土器がややまとまって出土している。

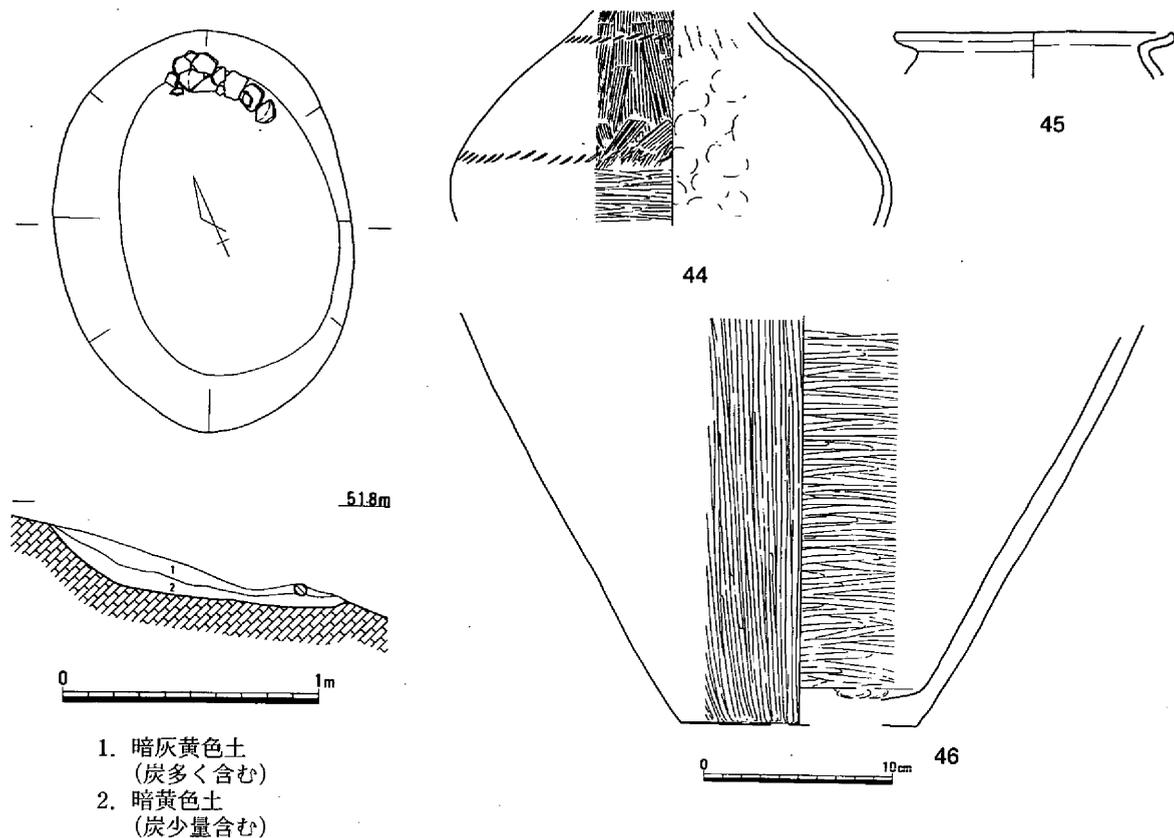
44 は復元最大径約 24cm を測る壺体部片である。外面は縦方向のハケメ後、最大径付近を横方向のヘラミガキ、内面は凹圧痕が多数残り、頸部付近はシボリ痕跡が認められる。また外面には二段の連続刺突文を巡らしている。45 は推定口径約 20cm を測る甕口縁部片で、口縁は鋭く外方に屈曲して開き、端部はやや上方に立ち上がる。内外面とも横ナデ、外面には一部煤が付着している。46 は大型の壺底部片で、復元



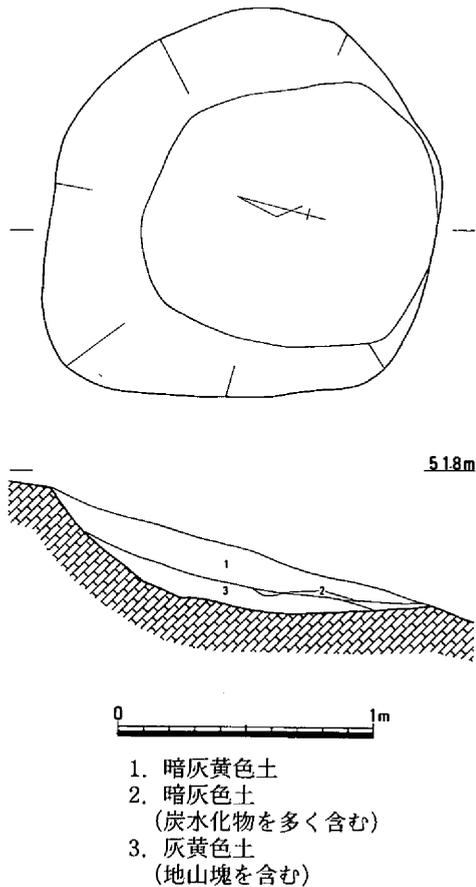
第24図 土壌 1 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第25図 土壌 2 (1/30)



第26図 土壙 3 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第27図 土壙 4 (1/30)

底径12.5cmを測る。体部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが顕著に施されており、大型の甕の可能性もある。

土壙の時期は出土土器から弥生時代中期中葉新段階と考えられ、遺跡内では最も古い時期の遺構といえる。

土壙 4 (第27図)

土壙 3の南西部 8 mの地形変換点付近に位置するもので、平面は方形に近く、規模は検出面で径約1.5m前後を測る。堆積土は下層に人為的に埋められた可能性の強い土、その上面に炭化物が多く認められ、遺構の性格を示しているかも知れない。遺物は出土していない。

土壙の時期は土壙 3に近い時期の可能性が強く、両者は位置的にも竪穴住居 1と関連すると感じている。その場合これらは中期中葉新段階～中期後葉古段階頃になるものと考えられ、本集落開始期のものとなる。

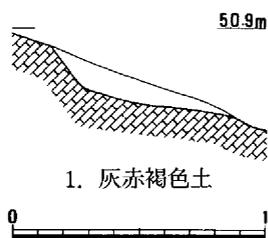
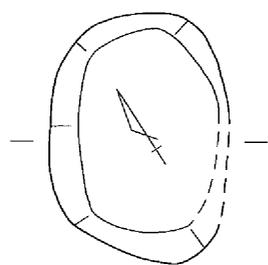
土壌 5 (第28図)

土壌 3 の下方斜面部、標高50m付近で検出されたものである。平面形は長楕円形を呈し、規模は径99~70cm、残存部は最大20cmを測る。堆積土は焼土・炭化物を多く含むもののみで、土壌 3・4 とはやや異なっている。遺物は出土していない。

時期は切り合い関係から、段状遺構 4 に後出することが判明しているが、他と同様の弥生時代中期末頃に収まらない可能性もある。

土壌 6 (第28図、図版32)

丘陵南斜面、標高49m付近で検出されたもので、形態からは溝と理

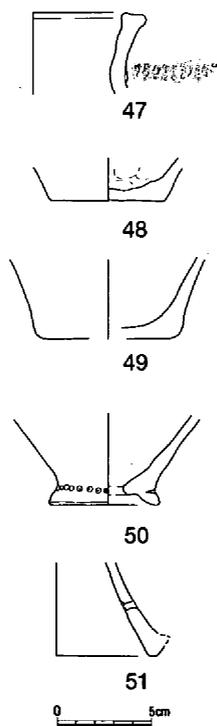


1. 灰赤褐色土

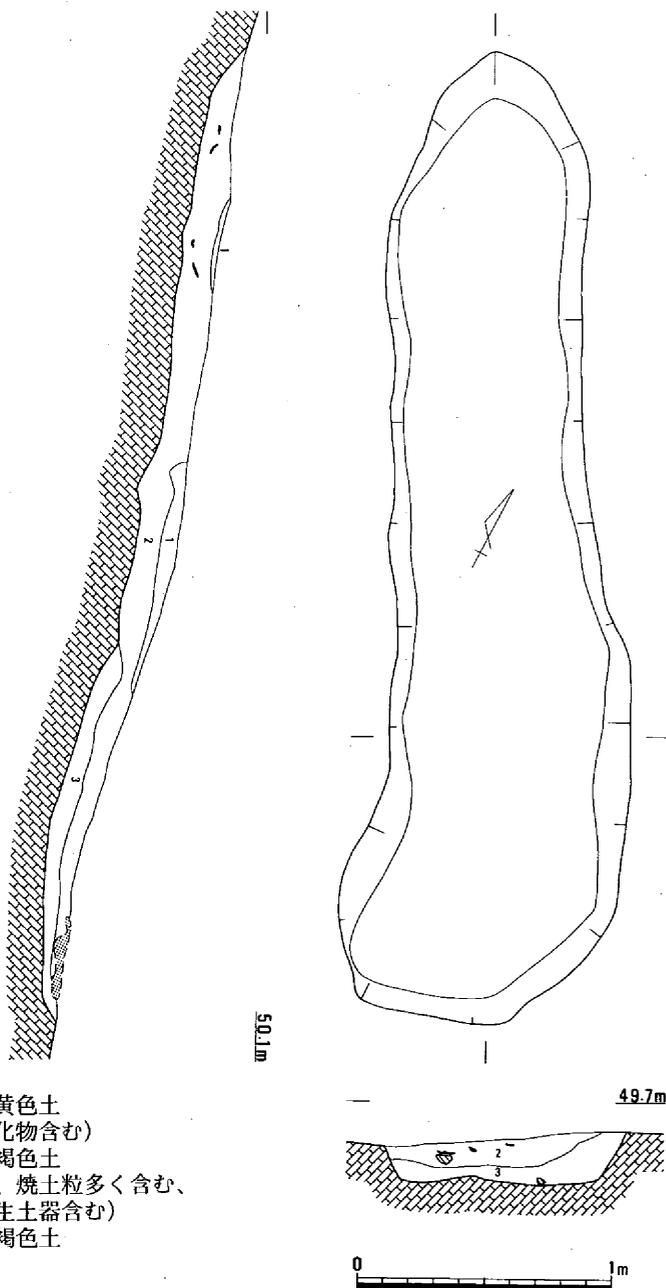
第28図 土壌 5 (1/30)

解したほうがよいかも知れない。主軸は斜面に直行するもので、規模は残存長3.8m、最大幅1mを測る。

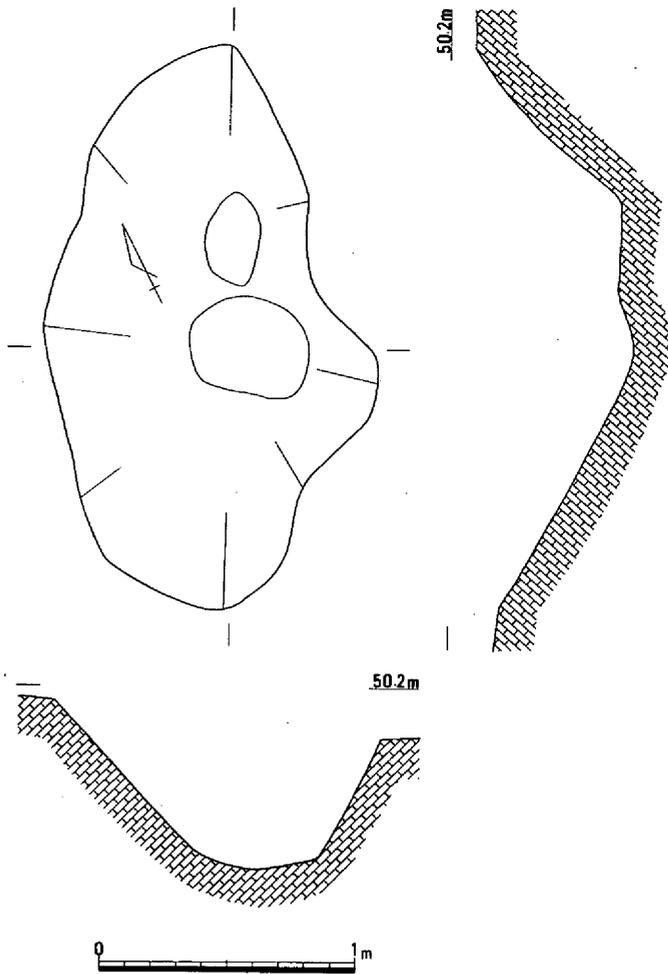
遺物は土器細片が多数出土しているが、図化できたものは少ない。47は壺頸部片で、口縁端部は肥厚して凹面



1. 暗黄色土 (炭化物含む)
2. 黒褐色土 (炭、焼土粒多く含む、弥生土器含む)
3. 黄褐色土



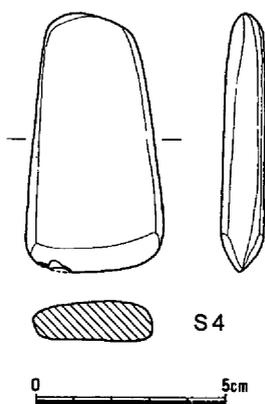
第29図 土壌 6 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



第30図 土壙7 (1/30)

るが、検出面では輪郭不鮮明な黒色土として確認できていたことや、堆積土が非常に硬化していたことから、風倒木痕跡の可能性も強いものと感じている。

直接的な遺物は全く出土していないが、重複する段状遺構に先行することが明かであり、堆積土の硬化具合とあわせて縄文時代以前のものと考えている。



第31図 遺構に伴わない遺物 (1/2)

をもち、頸部外面には連続刺突された粘土帯を貼り付けている。50は台付鉢（あるいは甕）の底部片と考えられ、高台側面に貫通しない小孔を連続して穿つものである。51は高杯の脚部小片で、裾部に円孔を連続して持つタイプと考えられる。

土壙の時期は出土土器から、弥生時代中期中葉新段階頃に位置づけられ、斜面部の遺構としては最も古くなる可能性があり、屋根頂部の遺構群との関係が問題となる。また、この「溝」北方延長線上に土壙4が存在することから、これらが同一遺構となる可能性も考えておきたい。仮にそうであれば、この遺構は屋根頂部の同時期の集落と関連する道となるかも知れない。土壙底面が凹凸の激しい点もこれによって理解できる。

土壙7 (第30図)

土壙6の北側上方に位置し、重複する段状遺構5の床面精査中に検出したものである。形態は非常に不整形なもので、複数の上壙が切り合っている可能性もある。

(5) 遺構に伴わない遺物

遺構に伴わない遺物は非常に少なく、そのほとんどは弥生時代中期中葉を中心とする時期のものである。土器以外ではS4の磨製石斧1点のみで、竪穴住居1を検出する以前にこの周辺部で出土したものである。刃部は両刃に作られ一部欠損するがほぼ完形に近いもので、長さ6.9cm、最大幅3.7cm、厚さ1.1cm、重量46gを測る。石材は頁岩である。

今回の調査で出土した遺物はほとんどが弥生土器であるが、量的には非常に少ないもので、当該期の丘陵立地集落の性格を示していると言える。

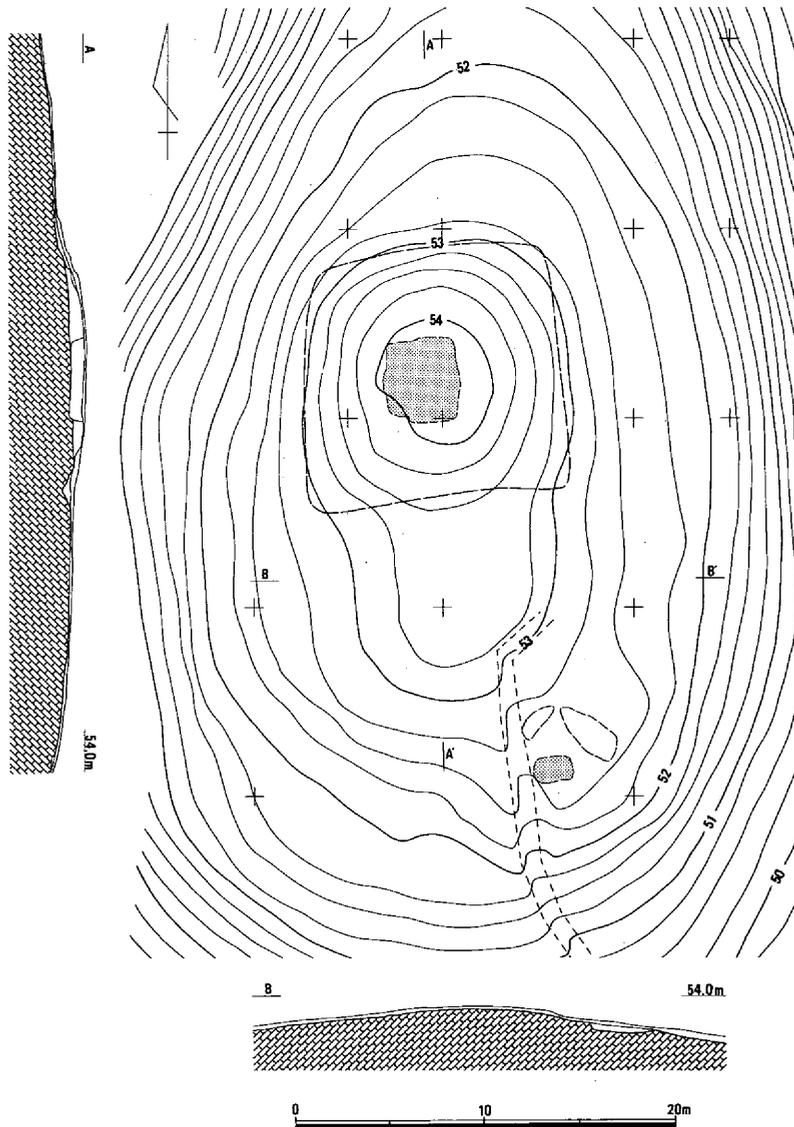
第3節 中山古墳群の概要

1. 中山6号墳

(1) 墳丘と周溝 (第32~34図、図版33・34)

当初は6・7号墳という二つの古墳と認識されていたが、立木伐採後の墳丘は一見すると南北に主軸を持つ前方後円形、あるいは前方後方形を呈していたため、調査区等の設定もこれを多分に意識して行った、しかし、墳丘南側に設定したトレンチでは周溝と推定される溝がすぐに検出されたため、前方部を持つ可能性はこの時点で消えた。また当初前方部と考えていた部分は盛土が認められないことから、墳丘外の自然地形と判断し、7号墳の存在はいったん否定された。

墳丘は上半部では流出のためやや円墳状を呈しているが、南辺以外の裾回りは直線的であることか



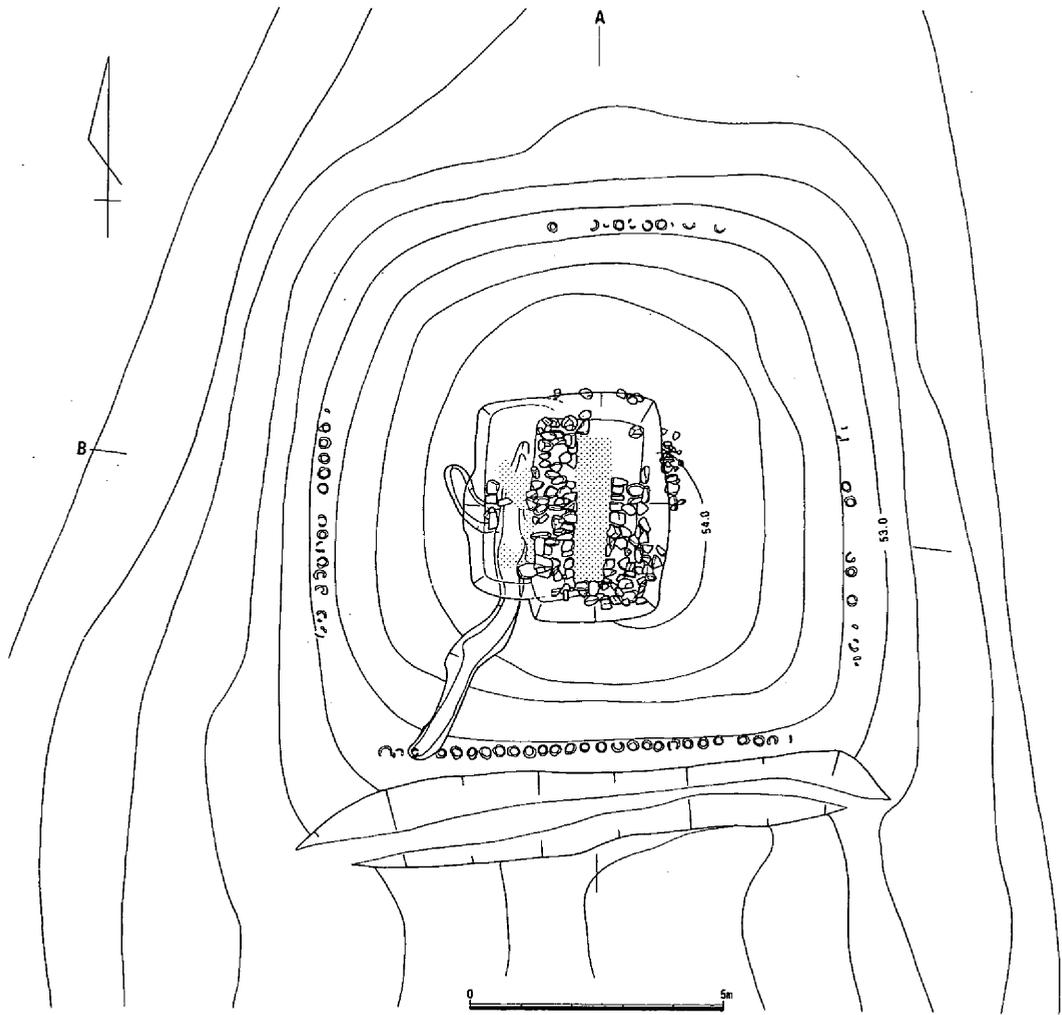
第32図 6・7号墳調査前地形測量図 (1/400)

ら、1辺12m前後の方墳を意識して墳丘検出を行なった。墳丘の流出土は予想以上に厚く堆積しており、多くの埴輪片を包含していた。これらの埴輪片は大半が小片化していたが、これを手がかりに墳丘堆積土と墳丘盛土を明瞭に区別でき、その分布からも明確な方墳であることが徐々に明らかとなった。その後、墳丘基底部上方で埴輪列が検出され、最終的には南北13m、東西13.5mを測る二段築成の方墳であることが判明した。

墳丘の構築状況は土層断面の観察により、(1)旧地表面に直接盛土をしている、(2)墳丘外縁部を先に高く盛っている、(3)北～南部分の盛土下半に表土混じりの8層が認められ、築造初期の段階に低い部分が優先して盛られている、などが指摘できる。これらの盛土は周辺部を掘削したものと考えられ、南側には明瞭な周溝を形成しているほか、他の墳裾付近では溝状を呈さないまでも、凹状に削り出されていることが明かである。南辺のみが溝状を呈しているのは、古墳が旧地形の最高所からやや北側にずれた位置に造られているためと考えているが、この立地がどんな意味を持つかは不明である。

(2) 埴輪

前述したように墳丘は二段築成であり、下段部テラスには原位置の埴輪列も部分的に遺存している。ここでは各埴輪の出土状況を中心に紹介し、築造当初の埴輪配置の概観を復元しておきたい。



第33図 6号墳調査後墳丘測量図 (1/150)

埴輪片出土状況 (第35図、図版34)

まず墳頂部の状況であるが、表土除去から主体部検出の過程で埴輪小片が少量ながら出土している。特に主体部直上では家形埴輪の破片が見られ、おそらく第1主体部にともなっていたものと推定される。この他円筒形と考えられるものが出土しているが、細片化したものがほとんどで、家形埴輪との関係も不明である。

墳頂部から下段埴輪列までの墳丘上段部の斜面では、家形埴輪小片のほか、円筒形埴輪小片がまとまった量出土しており、これらは墳頂部に立てられたものが存在することを示している。

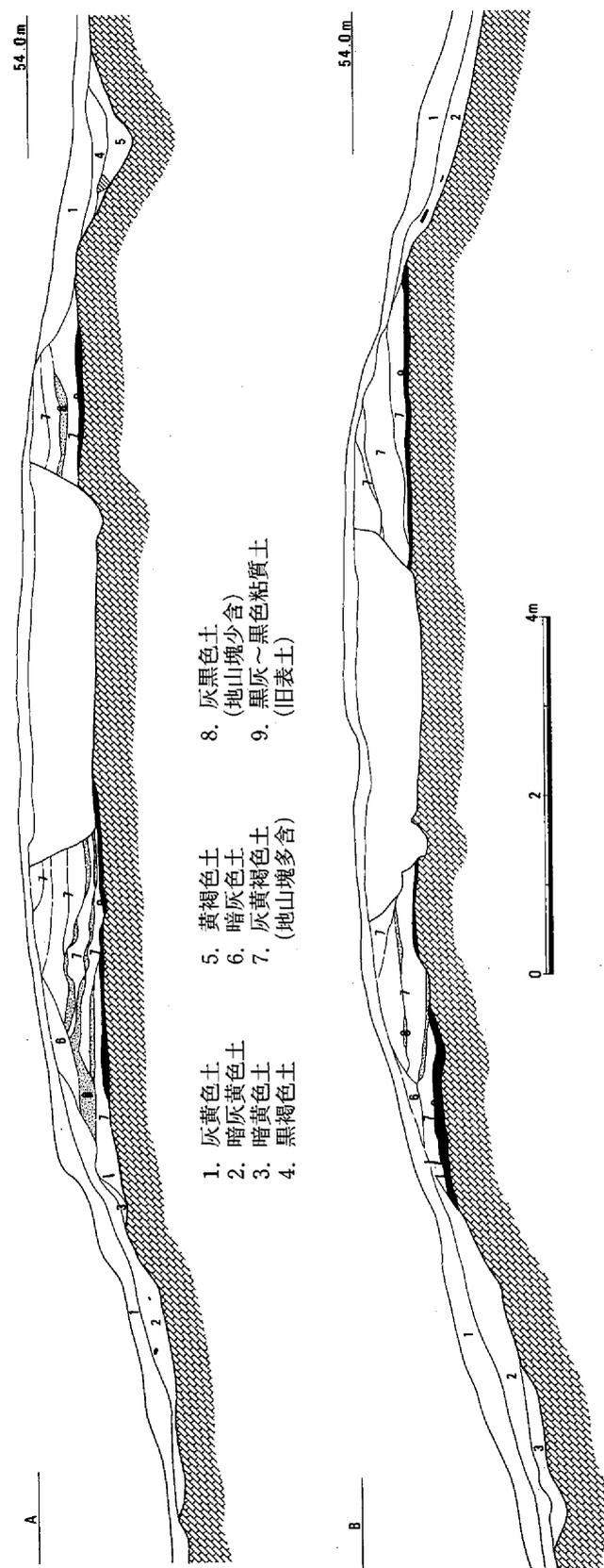
墳丘下段部の埴輪列から墳裾にかけては、非常に多量の埴輪片が出土しており、その状況からは、墳頂部からの転落品と下段部からの転落品を分離できなかった。

また人物や動物と推定される形象埴輪片が、墳丘北西の裾部から集中して出土しているが、原位置を示すとは考えなかった。

以上の出土状況から、墳丘下段テラス以外に、墳頂部に家形埴輪・円筒形(朝顔形の可能性ももちろんある)埴輪が立てられていたことは間違いない。その場合、墳頂部で原位置の円筒形埴輪が1点も認められなかったことは、この種の埴輪が流出しやすい墳頂外縁部に配置されていたことを暗示している。また、墳裾部や墳丘周囲に埴輪が立てられていなかったことも明かである。

原位置が不明な埴輪 (第36・37図)

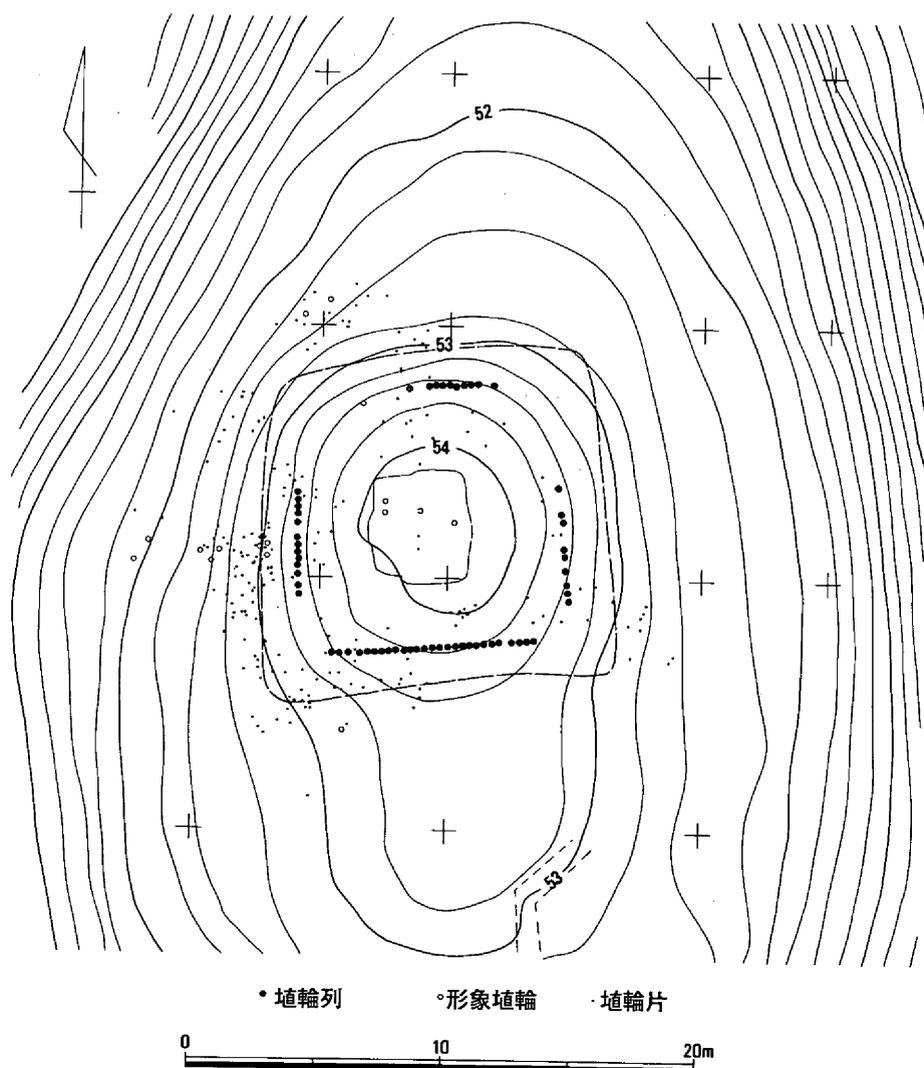
ここでは下段テラスの埴輪列以外の転落品を扱っているが、各埴輪の大き



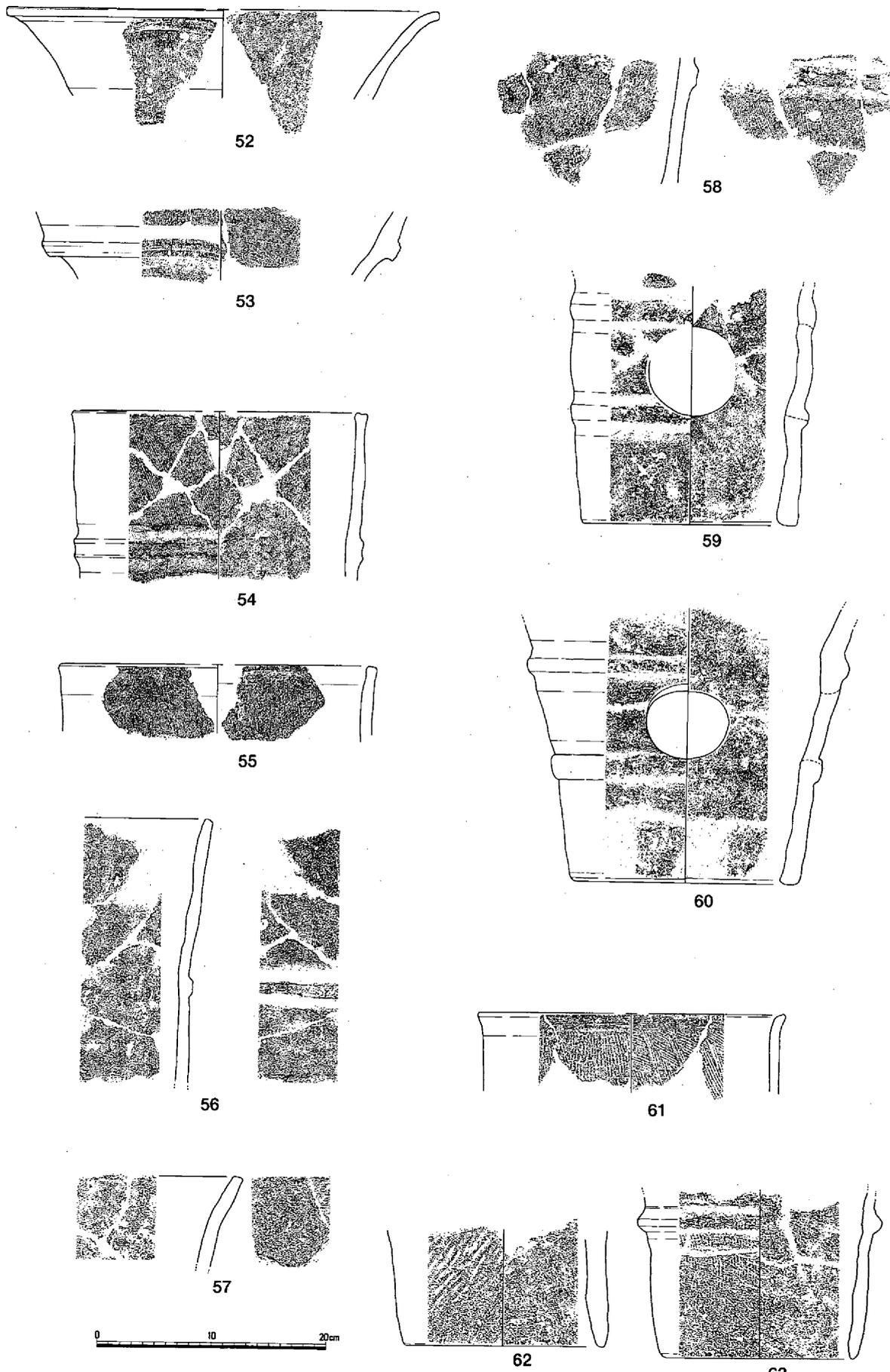
第34図 6号墳墳丘断面図 (1/80)

かな出土位置は遺物観察表を参考にしていきたい。

52・53は朝顔形埴輪の口縁部片で、図示したもの以外にもある程度の数が存在する。52は口縁上半部で、外面は縦方向の、内面は斜め方向のハケメ調整、端部は平坦面を持ち、横ナデ調整である。下端破面には接合痕が残り、外面は丹塗りの可能性がある。53は口縁下半部で、外面はタガ以下が縦方向のハケメ、内面のハケメには横方向も見られる。54～57、61は円筒形埴輪口縁部、58～60、62・63は円筒、あるいは朝顔形埴輪の破片である。このうち54～57は丹塗り痕跡が認められる。54は口縁部が垂直に立ち上がるタイプで、外面に縦方向のハケメ、内面は凹圧痕・ナデが認められ、口縁端部は凹面を持ち、内外面とも横ナデされている。55はやや外傾するが、54とほぼ同様な特徴、調整を持っている。56は口縁部がやや外傾し、外面は縦方向のハケメ、内面は凹圧痕。ナデのほか縦方向のハケメが認められる。57は外傾する口縁端部片で、内面は剥離のため不明であるが、外面に斜め方向のハケメが残る。58は胴部片で、やや外傾するものと考えられる。外面は縦方向のハケメ、内面は凹圧痕・ナデが認められる。59は直行する胴部を持ち、明確な底部調整が認められない厚手のタイプである。外面は縦方向のハケメが基底部にまで施され、内面は凹圧痕・縦方向のハケメが見られる。60は基底部が外傾する器形を持つが、胎土・焼成が59と同じもので、調整も外面斜め

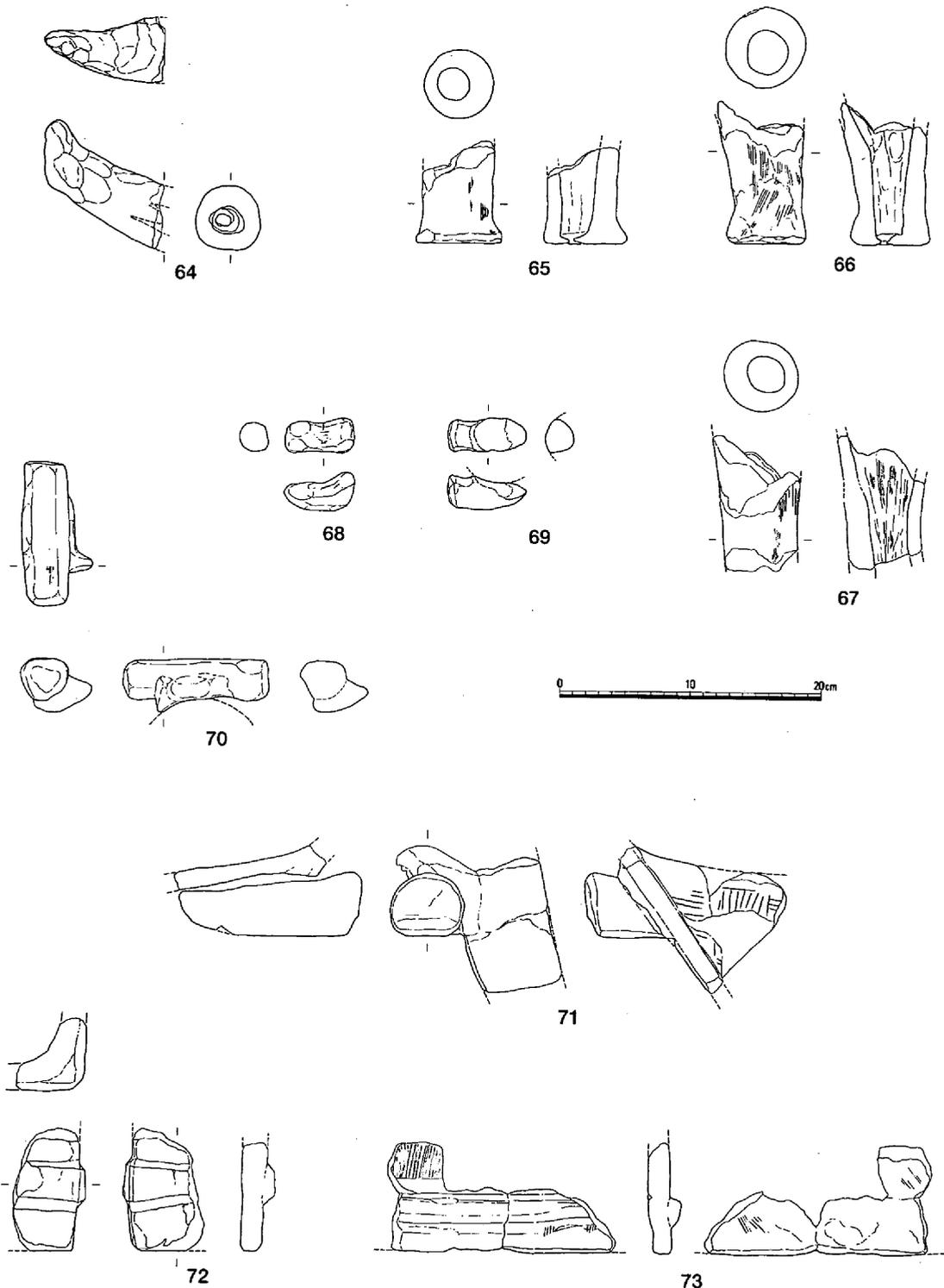


第35図 6号墳墳丘出土埴輪分布図 (1/300)

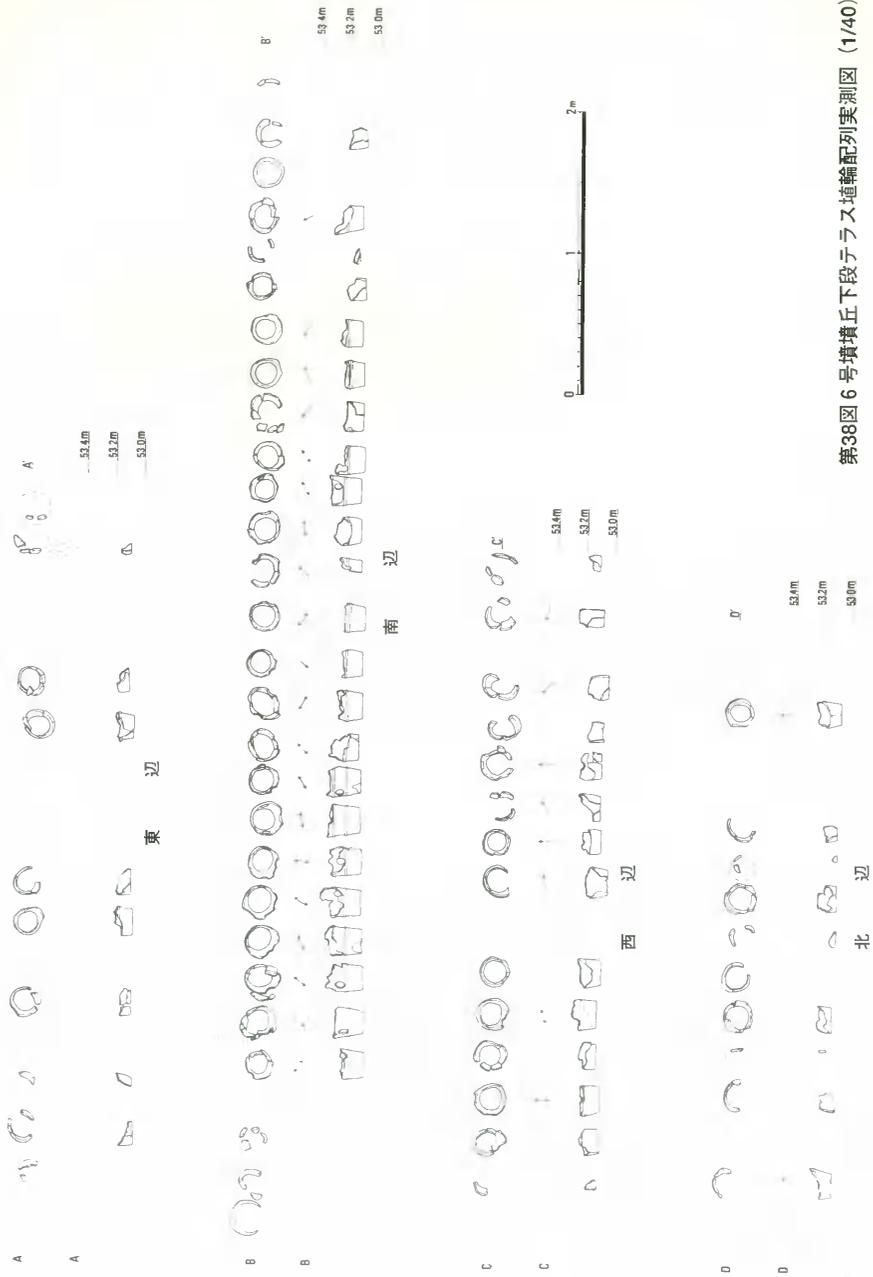


第36図 6号墳墳丘出土埴輪① (1/5)

方向のハケメ、内面は59と同様強い凹圧痕・ナデ調整である。61は外面丹塗りの円筒形埴輪で、口縁端部はやや外側に開き、外面は縦方向の非常に粗いハケメ、内面は同様なハケメが斜め方向に施されている。62はほぼ直立する基底部で、外面は斜め方向の平行タタキを顕著に残し、底部は先細りに調整されている。このタイプは量的に円筒埴輪のうち大多数を占めるものである。63はやや外傾する器形で薄手に作られている。外面には縦方向の粗いハケメ、内面には凹圧痕・ナデが認められる。底部は先細りに作られているが、62のようなタタキ痕は認められない。



第37図 6号墳墳丘出土遺物② (1/5)



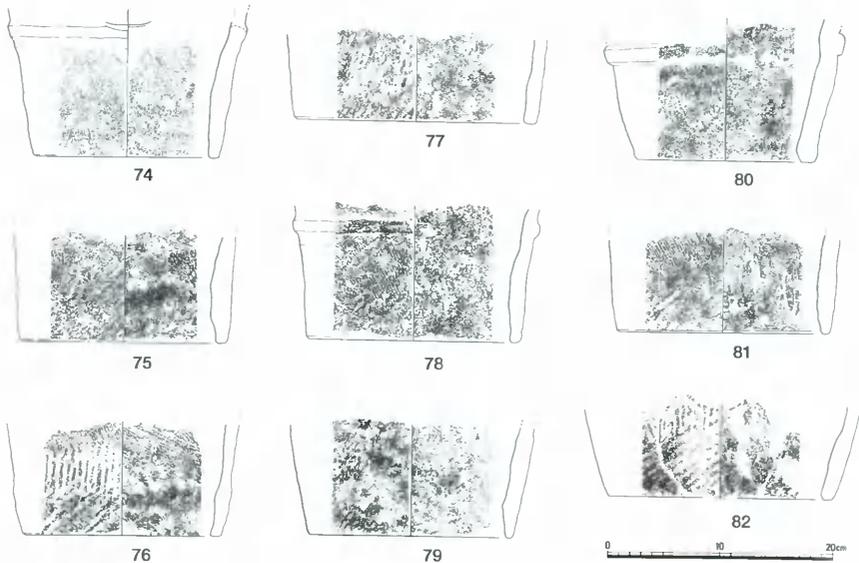
第38図 6号墳 丘下段テラス地輪配列実測図 (1/40)

形象埴輪は小片がほとんどであるが、人物・動物・家を表現したものが少なくともそれぞれ1個体は存在したものと考えられる。これらは前記したように少なくとも家形埴輪は埋葬施設上に置かれていたものと判断しており、人物・動物は墳頂部、もしくは北西墳裾に置かれていた可能性が高い。

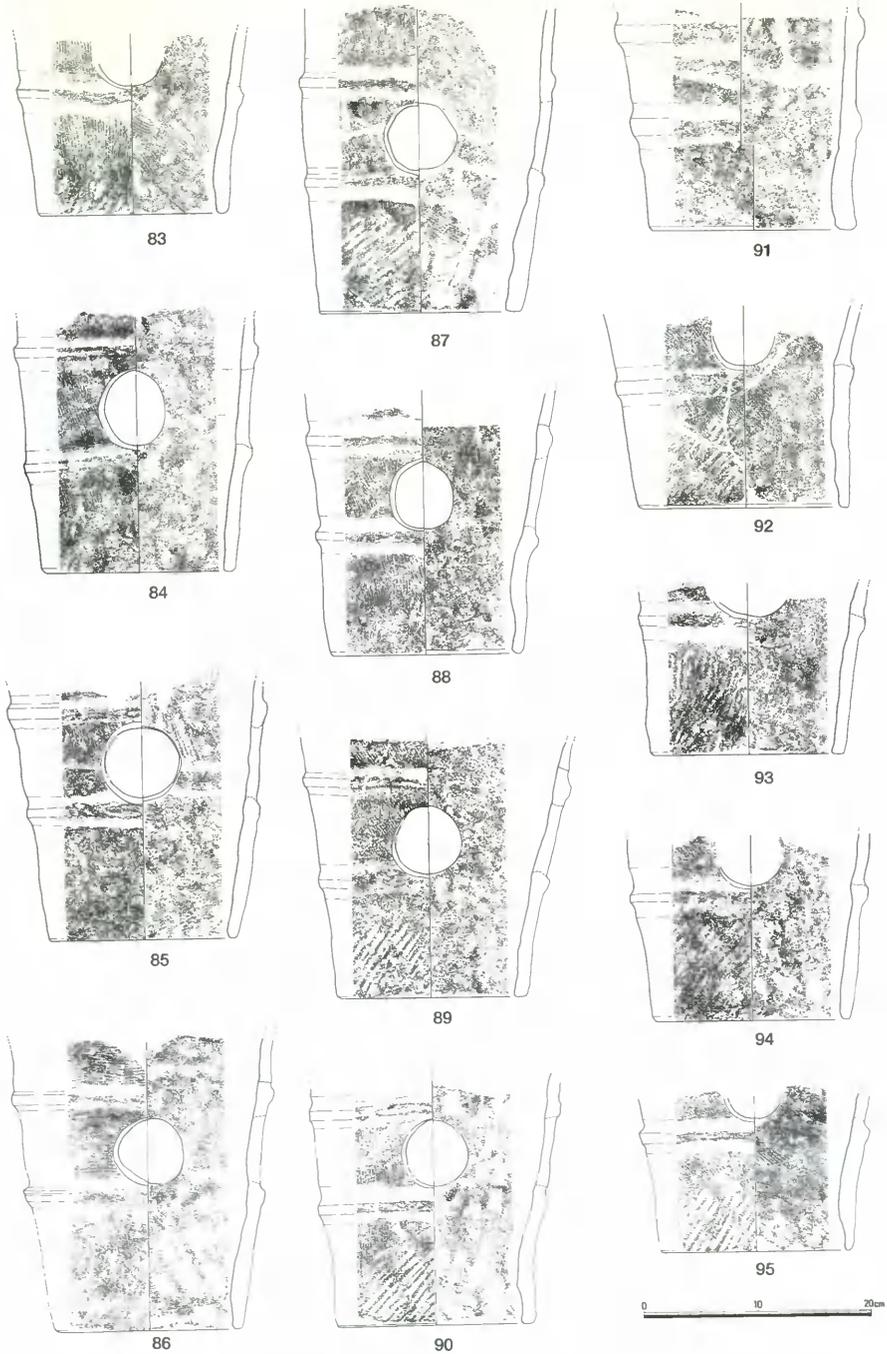
64は人物埴輪の腕と考えられるもので、指と掌部を欠損するが、その形態からおそらく右手を表現しているものと考えられ、前方に腕を掲げた状態の可能性が高い。表面は剥離しており調整は不明であるが、肘に近い側は接合用と考えられる空間が残る。

65～67はいずれも小型の筒状を呈し、別個体の可能性も否定できないが、胎土、大きさなどから同一個体と推定され、四足動物の脚部と考えている。いずれも外面に縦方向のハケメ、内面はシボリ痕跡が残り、部分的にナデあるいは工具痕が認められる。端部底面には閉塞後に径5mm前後の小孔を穿っている。大きさは脚端部径6cm前後、脚高11cm以上を測り、四足動物とすれば、そのバランスから復元長40～50cmを測るものと推定される。

68～73は家形埴輪の破片で、部分的であるがおおよその特徴はつかむことができる。68・69は棟木と同様の形態を持つものであるが、非常に小型であることから、桁木を表現したものである可能性が高い。70は堅魚木と考えられるもので、長さ11.1cm、幅3.6cmを測る大型なものである。上部は幅2cmの平坦面が作られており、下部には棟との接合部が堅魚木を載せる台として表現されている。71は屋根部の妻側の部分で、破風板、棟木が遺存している。屋根部にはヘラ状工具による網代が表現されており、棟から破風板にかけてハケメが認められる。破風板は残存部で最大幅7cm、厚さ2cm前後を測り、やや下方が開くタイプとなる可能性がある。棟木は長さ13.8cm、幅5.6cm、高さ4.8cmと大型で、全体としてかなり丁寧な造りと言える。72は基底部のコーナー部分の小片と考えられ、厚さ1.5cm前後を測り、裾部の突帯が残る。やや風化しているが、外面は突帯部分が横ナデ、と考えら



第39図 6号墳下段東列出土埴輪 (1/5)



第40図 6号墳下段南列出土埴輪① (1/5)



第41図 6号墳下段南列出土埴輪② (1/5)

れ、内面もナデの可能性はある。底面は製作時の作業台と考えられる板目状の圧痕が認められた。またコーナー部は壁面に粘土を貼り付けて仕上げられているように観察された。73も基底部の小片で、厚さは1.5cm前後を測り、裾廻りの突帯も残る。外面には縦方向のハケメが認められ、内面は斜め方向のハケメ後ナデ調整と考えられる。底面には板目状の圧痕、あるいは工具による調整痕が認められる。これらの各部破片から、家形埴輪は切妻造りで、堅魚木を持つかなり大型なものと推定される。

下段テラスの埴輪列 (第38～43図、図版34・35・38・39)

原位置で検出された埴輪は墳丘下段のテラスのものだけで、円筒形、あるいは朝顔形埴輪の基底部分が各辺とも部分的に遺存していた。埴輪はいずれの辺も間隔をほとんど明けずに立て並べられており、口縁部の高さではお互いにほとんど接していたものと推定される。埴輪基底部のレベルは旧表上のほぼ直上の盛上中に取まっており、少なくとも時山面にまでは達していない。明確な掘方は検出できていないため、埋葬施設構築後の最終的な墳丘仕上げ段階に平行して立てられた可能性がある。遺存状



第42図 6号墳下段西列出土埴輪 (1/5)

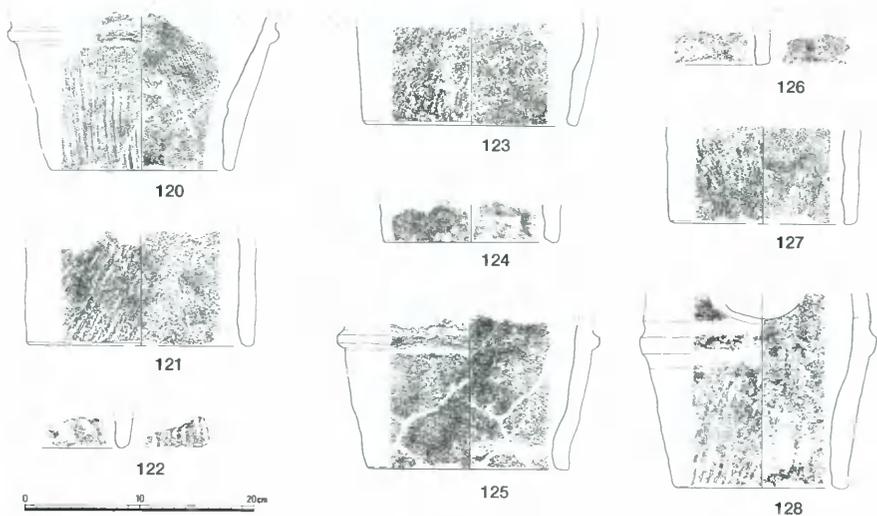
態は各辺とも墳丘コーナー付近が流出しており、特に北西・北東コーナーは大半のものが欠落している。最も良好に遺存するのは南辺埴輪列で、計26本が検出された。以下では各辺ごとにその状況と出土埴輪について概観しておきたい。

東辺埴輪列（74～82）はいずれも基底部分のみ10本が検出され、図化できたのは9本である。所々欠落した部分があるが、およそ4.6m間に17本が並べられていることにより、推定下段テラス長が10.6mを測ることから、本来は39本前後の埴輪列となろう。出土埴輪は75・80以外は薄手に作られており、基本的に底部外面は縦方向のハケメ後タタキ、内面は凹圧痕・ナデ調整が認められ、端部が先細りとなるものや平坦に仕上げられるものがある。また内面に当て具痕と考えられるものを残すもの81もある。80は厚手の造りで、タガは貼り付け痕跡を消し切っておらず、全体として雑な造りのものであり、他の辺でも少数存在するタイプである。

南辺埴輪列（83～105）は遺存状態が良好なものが多く、出土した26本のうち図化できたのは23本である。また基底部痕跡も見られ、これらから東辺同様に復元すると、41本前後で南列を構成していたものと推定される。出上した埴輪は基底部外面に平行叩きを施す薄手のものが大半である。これらは基本的に外面に縦方向から斜め方向のハケメが、内面に凹圧痕・ナデ・ハケメが認められるが、中には下段以外の外面に縦ハケ後の横ハケが認められる86、内面の縦ハケが顕著な83・96、内面に横ハケが認められる98等がある。厚手のものは91・103・104で、外面は基底部まで縦ハケ、内面は凹圧痕・ナデが認められ、縦ハケを残す104もある。

西辺埴輪列（106～119）は欠落部分があるが4.4m分が遺存し、復元すると39本前後となる。出土した14本のうち大半は他と同様の薄手のタイプであるが、底部調整を行わない106、基底部がナデ調整と推定される116、厚手のタイプ117も認められる。

北辺埴輪列（120～128）は10本が遺存しており、図化できたのは9本であるが、復元すると39本前



第43図 6号墳下段北列出土埴輪 (1/5)

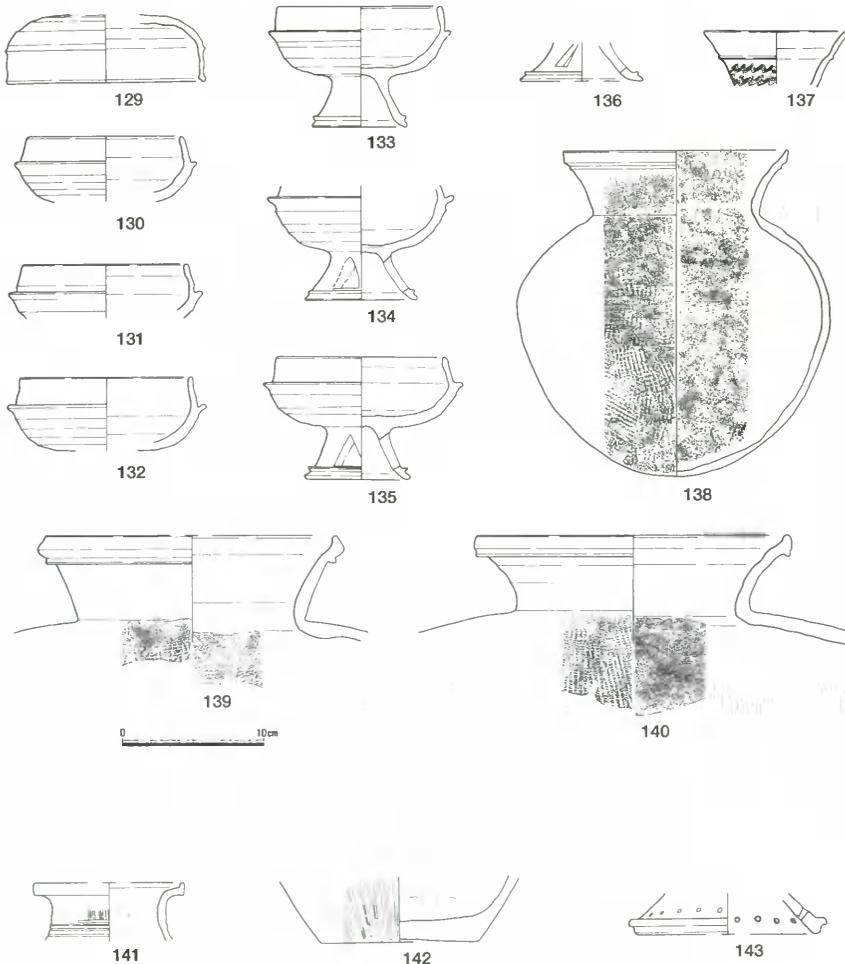
後になるものと推定される。これらは基本的に基底部外面にタタキが認められるタイプである。

以上の点から築造時の下段テラスには、154本前後の埴輪が立て並べていたことになり、そのうち9割が薄手で基底部外面に平行タタキを有するタイプで占められていることになる。またその遺存状況から少なくとも4段の円筒形埴輪になるものと考えられるが、

朝顔形埴輪の抽出については十分な検討を行っていない。ここでは底部調整が行われていないものや、器壁が厚いものに焼成時の変形が見られることから、これらが朝顔形埴輪になる可能性が強い点を指摘するにとどめておきたい。

墳丘出土の土器 (第44図、図版39)

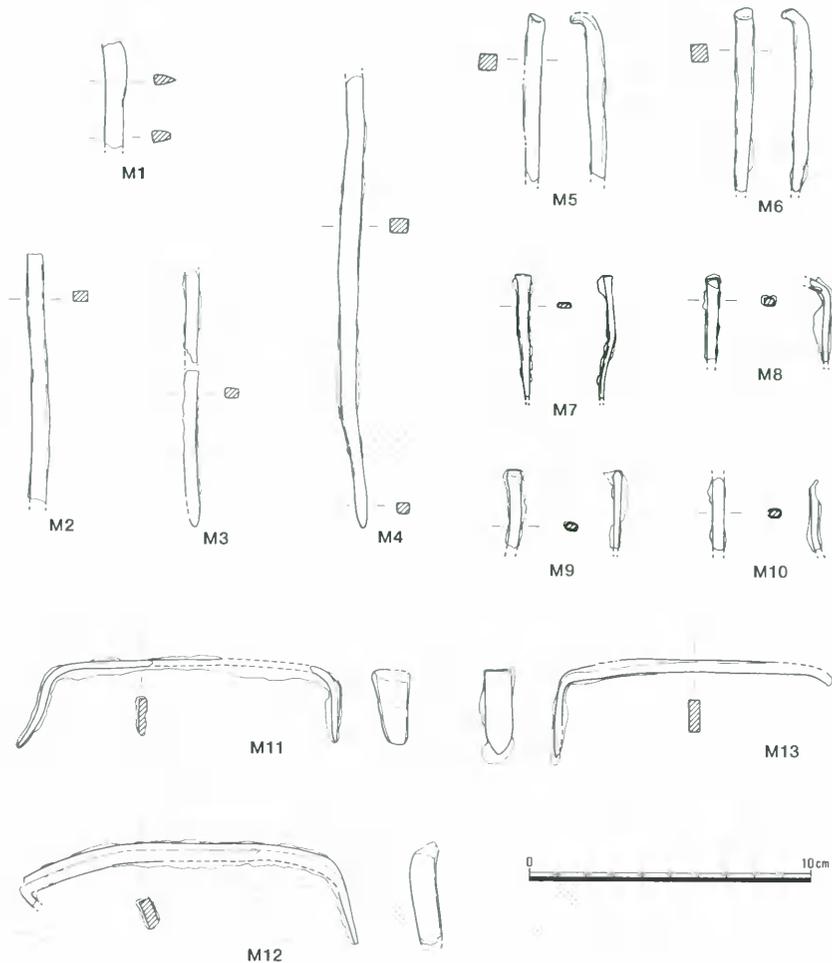
墳丘の検出時には埴輪片のほかに多数の須恵器片が出土しており、特に西側斜面部においてはま



第44図 6号墳墳丘周辺出土土器 (1/4)

まった量が認められている。これらは後述する第2主体に係わるものと推定しているが、第2主体内部では1点も残存しておらず、やや問題が残るものである。

須恵器は蓋1点・甕1点・小型甕1点・甕2点が確認できるほか、130~132は杯の可能性も残るが、形態調整から133~136の有蓋高杯と同様のものとなる可能性が強く、そうであれば有蓋高杯7点を加えることになる。蓋129は復元口径13.8cm、器高4.8cm以上を測るもので、有蓋高杯の蓋となる可能性もあろう。有蓋高杯はいずれも同形態を呈すもので、本地域では類例を見ないタイプである。その特徴は脚部や口縁部によく現れており、透かしは三方向に三角形透かしを持つものと持たないものがある。甕137は口縁端部を丸く取っており、有蓋高杯と関連する特徴かもしれない。小型甕138は外面に格子目タタキを残し、内面はタタキ痕をナデ消している。139・140は体部外面に平行タタ



第45図 6号墳墳丘周辺出土鉄製品 (1/2)

キ、内面はタタキ後のナデ調整が認められ、後者はタタキ痕がほとんど消されている。

この他141～143の弥生時代中期の土器片が出土しているが、いずれも周辺部の弥生集落遺構と関連するものである。

墳丘出土の鉄製品 (第45図)

M1～M12は墳丘検出の際に、墳頂部南西に近い斜面から同墳裾にかけて、須恵器・埴輪片と共に出土したものであり、明らかに2次的な堆積層に包含されたものである。これらはその出土状況から本来は後述する第2主体に関連するものと考えられ、この主体部内に残されたものとも矛盾していないようである。こうした理由からここでは各遺物について説明し、全体の遺物構成は第2主体出土品と共に考察することにする。

M1～M4は長頸鎌と考えられ、M1の身部は、第2主体出土品と同様の片刃と推定される。頸部と茎との境に関節を持つ可能性が強いが明確にできていない。全長は第2主体出土品を参考にすれば、17～21cm程度に復元できるものと推定される。M5～M10は釘と考えられるもので、断面が方形で、径6cmを測るタイプ2本と、断面が扁平で、径4×2mm前後を測るタイプ4片が認められる。M11～M13は鏝で、長辺が10cm前後、短辺が2.5～3cm、幅1.2cm前後、厚さ3～6mmを測り、第1主体出土品と比べて幅・厚さにややばらつきがある点に注意される。

(3) 埋葬施設

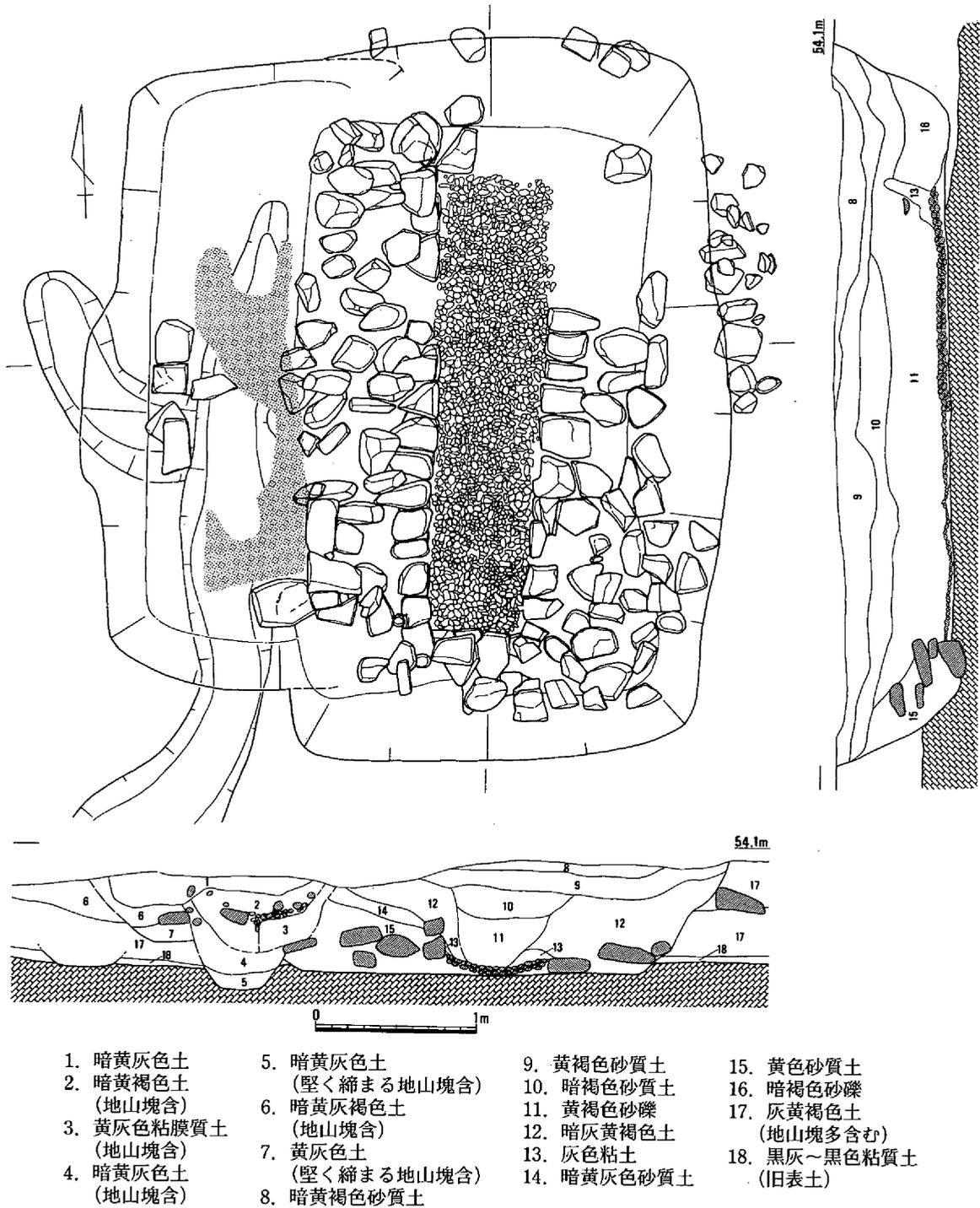
結論を先に述べれば、最終的に検出された埋葬施設は2基の竪穴式石室で、いずれも内部に木棺を安置したものである。中央に位置する第1主体はほぼ完存していたが、西側に隣接された第2主体は後世の乱掘を受け、基底部分の一部と原位置が不明確な遺物が検出されたのみである。第1主体は初葬時の、第2主体は追葬時の埋葬施設であり、いずれも排水溝と考えられる施設を伴っている。副葬品はいずれも鉄製品を中心として多量に出土しており、鏝・釘の存在は特に注目される。これら埋葬施設と副葬品の検出状況には、通常では理解しにくい点が多く見られることから、誤解が生じないように検出時の状況を順を追って説明しておきたい。

墳丘の表土を除去すると中央部に墓壇の輪郭線が検出されたが、西側ではやや不鮮明となっており、また西側墳丘斜面に散乱する遺物の存在などから、この部分から乱掘を受けていると推定した。この乱掘範囲は明瞭に観察できなかったため、墓壇西側ラインの大半が検出できない状況のまま墓壇の推定長軸線を設定し、十字のサブトレンチを先行して掘り下げながら、墓壇内全体を掘り下げていった。その後南西側を中心に扁平な石材による石積施設が検出され、竪穴式石室の存在を確認したが、その上面レベルが不揃いであることから乱掘が石室内に及んでいるものと考えていた。しかし、石材の抜かれた部分は硬質の粘土で補填してあり、乱掘壇のような軟質土の堆積が見られない点が気になっていたため、土層断面の観察を繰り返した。その結果乱掘はこの墓壇内には及んでおらず、西側に別の埋葬施設が存在することが判明した。さらに、石材の存在しない部分は粘土を含む土で固く突き固められていることや、北側小口付近に棺材を固定していたと考えられる粘土の立ち上がりを検出したことなどから、この埋葬用の「室」が当初から石材と粘質土によって構築、あるいは追葬後に再構築したのと考えた。さらに重要なのは上部堆積土に全く乱れがなく、天井「石」は当初から存在していない可能性が強い点である（これについては後述する）。第2主体は第1主体の調査が終了してから本格的に検出作業を行った。乱掘や第1主体の調査を先行したことなどから、墓壇東辺部の様子

が判然としなかったが、遺存部の状態から第1主体に類似する埋葬施設の存在が明かとなっている。

第1主体 (第47図、図版35~37)

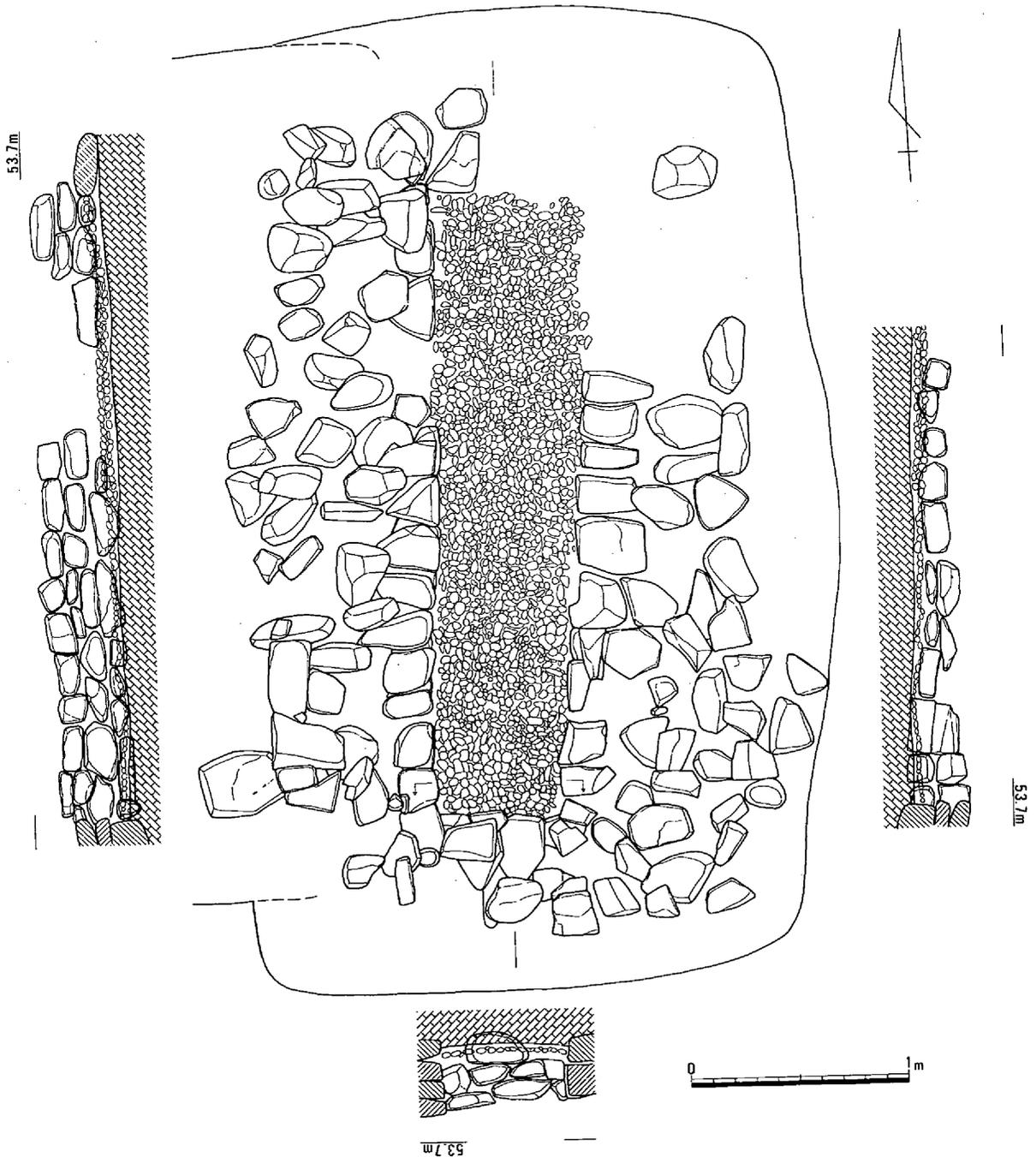
埋葬施設は竪穴式石室内に木棺を納めるもので、主軸を南北方向にとり、墓壇は検出面で長さ4.45m、幅2.8m前後を測る。石室は前述したように石積が不完全なもので、特に東辺と北辺の一部は最下段の石材さえ存在していない。石室内法は長さ288cm、幅は北側で75cm前後、南側で61cmを測り、石積の高さは最も多く積まれた部分で4段、34cmを測るが、土壌でも明かなように「室」としてはさらに数cm高くなる可能性がある。床面には礫敷後に粘土を貼り付けた一種の棺床が存在し、その断面



第46図 6号墳埋葬施設 (1/40)

は緩やかな弧状を呈している。木棺はそれ自体の痕跡を明確に検出できていないが、北側に小口にかかわる粘土が認められることや、鏝の出土位置などからある程度復元が可能かも知れない。なお棺床部の粘土内と礫敷上面にはほぼ前面に渡って薄い赤色顔料が検出されている。また石室解体後に第2主体部下層から排水溝の一部と考えられる溝2本を検出したが、石室との接続関係が不明であり、それぞれがどの主体に伴うものか判断できなかった。

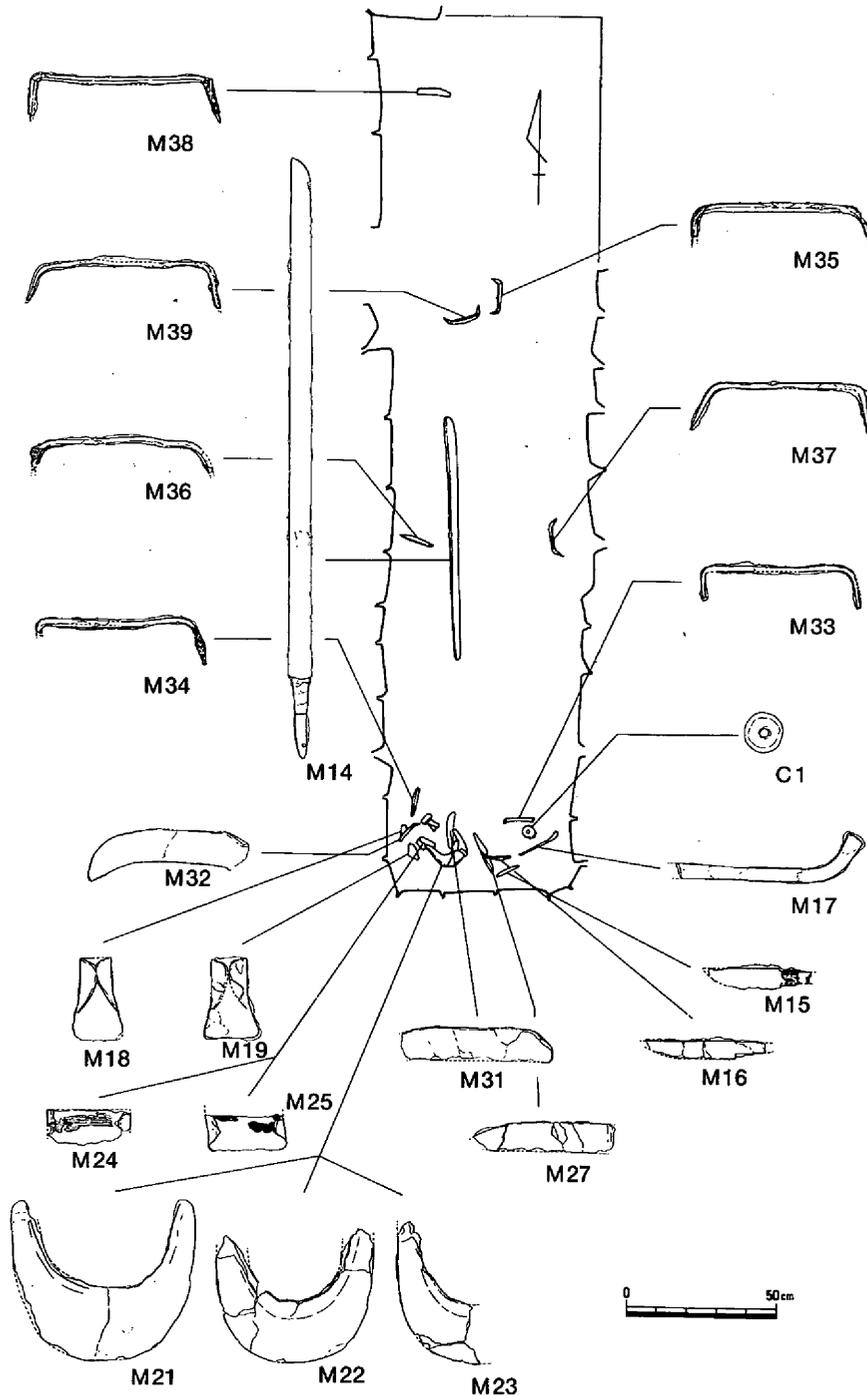
埋葬施設の構築方法は、①墳丘（一次的なもの可能性がある）構築後、墓壙を掘る、②墓壙底部から裏込めをしながら石材を積み上げ、粘質土で補填しながら石室を作る、③礫を敷き、粘土により棺床を作る、④木棺を置き（現地で遺体を入れる場合は棺身を先行して設置した可能性もある）排水



第47図 6号墳第1主体 (1/30)

溝を使用するような行為を行う、と推定されるが、問題はこの次の⑤の段階である。ここでは次の2案を提示することで、今後の叩き台としておきたい。案Ⅰ⑤石室を板材で塞ぎ、墓壙を埋める。案Ⅱ⑤石室に蓋をせずそのまま埋める。

調査時には板材の存在も想定して土層観察を行ったが、もう一つ確証を得られず、むしろ直接埋められている可能性を検討しなければならないように感じている。いずれにせよこの種の石室には天井(蓋)石が遺存しない場合が多く(大半は乱掘りに原因を求めているようであるが、床面遺物が完存する例が多い)、当初から天井石が存在しない類型の設定を積極的に検討すべきものと考えている。



第48図 6号墳第1主体遺物出土状況 (1/25・1/5)

出土遺物（第48～52図、図版40・41）

第1主体に伴う遺物は前記した墓壙上面出土の家形埴輪片以外に、石室内から多数の鉄製品などが出土している。このうち明らかに棺内と考えられるものは鉄刀のみで、南側に集中する遺物群は棺外に置かれた可能性が強いものと考えている。これ以外には、棺材として鋨7本が床面からやや高い位置で出土しており、出土状況から棺身と棺蓋を繋ぎ止めていた可能性が強いと考えている。

ガラス玉G1は棺内床面から1点のみ出土している。第2主体からの混入は考えられないことから、南北方向に伸びる排水溝の出土品と関連する可能性も捨て切れない。C1は土製の紡錘車で、最大径4cm、厚さ2.1cm、孔径1cmを測る。

武器類はM14の太刀1点のみで、全長79.5cm、刃部最大径3.1cmを測る。出土時には切先を北方向に向けていた。目釘穴は1カ所認められ、やや偏った位置に付く。

工具類は刀子3点、斧3点が認められる。M15・16は刀子で、いずれも両関式である。M15は茎に木質が遺存している。M17は曲がり刀子と推定され、刃部先端は欠損しているが、他例からM15と同様の形状になるものと考えられる。全国的に類例の少ないもので、朝鮮半島に系譜を持つものとされていることから注目される遺物の一つである。これら3本の刀子は南側東半部に集中して出土しており、以下の鉄製農工具類は同西半部に集中していたものである。M18～20は全長5.4cm前後、幅3.5cmを測るほぼ同規格の斧である。

農具類は鋤先3点、穂摘具3点、鎌は2種類3点ずつが認められる。M21～23は小型のU字形鋤先で、大きさにはややばらつきがあるが、ほぼ同形態のものと言える。M24～26は穂積具（手鎌）で、いずれも内面に木質が遺存している。大きさは長さ2.2cm前後、幅5.3cm前後を測りほぼ同一規格品と言える。M27～32はいずれも曲刃鎌と考えられるもので、着柄部分の形態から装着角度が90度に近い前三者と、110度前後を測る後三者とに分類できる。一般に前者が刈り取り用の、後者が伐採用のものと考えられている。大きさは長さ11cm前後、幅2cm前後を測るほぼ同サイズのものである。

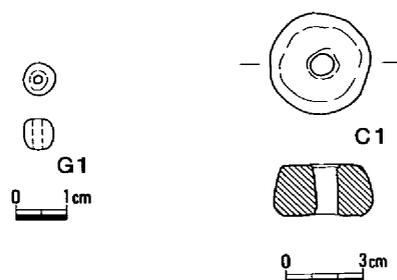
以上は副葬品と考えられるもので、この他棺材と考えられる鋨7点M33～39が認められる。これらは、長さは不明な点が多いが、幅・厚さともほぼ同一であり、規格性の強いものと言える。また先端部に残る木質部の木目方向から棺材の組み合わせが推定できる可能性があるが、両端とも残るものがないため（そのこと自体に意味がある可能性もあるが）、十分検討できていない。ここでは縦方向、横方向のいずれも認められる点から（木棺がくり貫きタイプで長軸方向に木目を持つという前提で）、側辺部のみでなく、短辺部にも打ち込まれていたことは言えるだろう。

これら棺内遺物のうち、副葬品、特に農工具類については、6種類6点の鉄製品が3組存在していることになり、この組み合わせが何を意味するのか非常に興味深い点である。またこれらは全体に小型品であることも注意される点で、ミニチュアではないが、副葬品として作られたものが存在する可能性も考えておきたい。

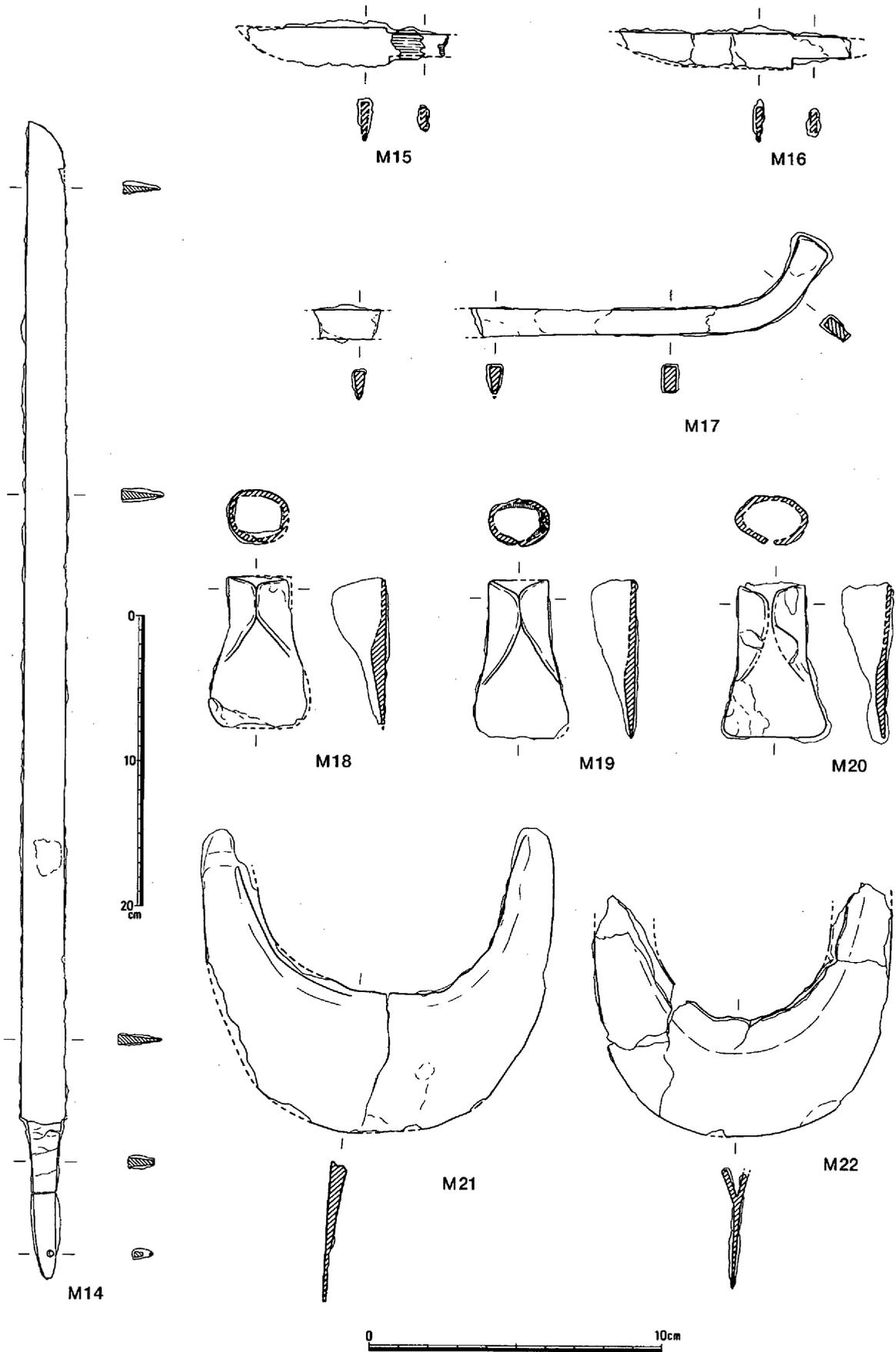
第2主体（第53図、図版36・37）

前記したように本主体部は第1主体に隣接して検出されたものであるが、後世の乱掘によりその痕跡をとどめているに過ぎない。

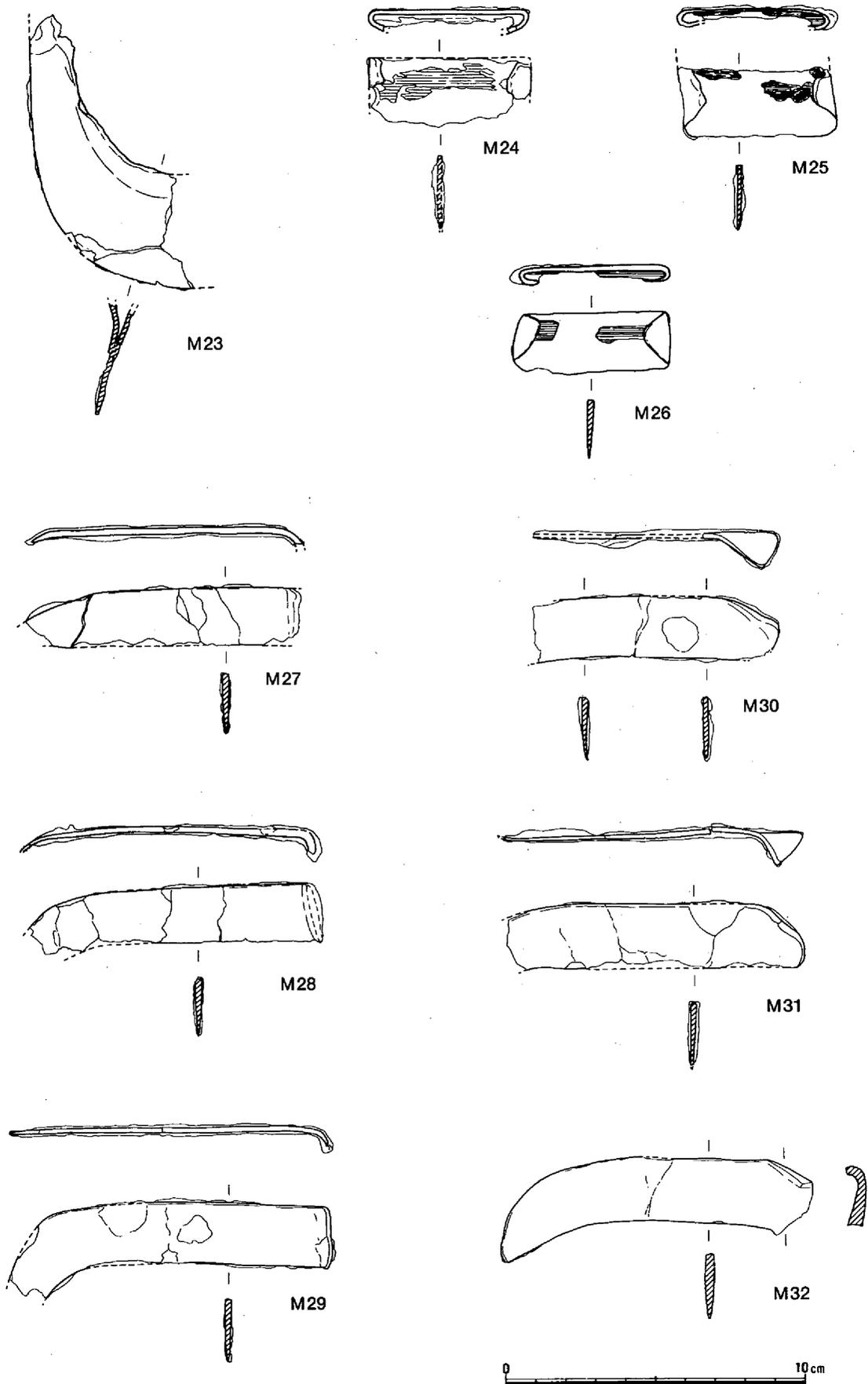
埋葬施設は石室基底部と考えられる石積みの一部、そして



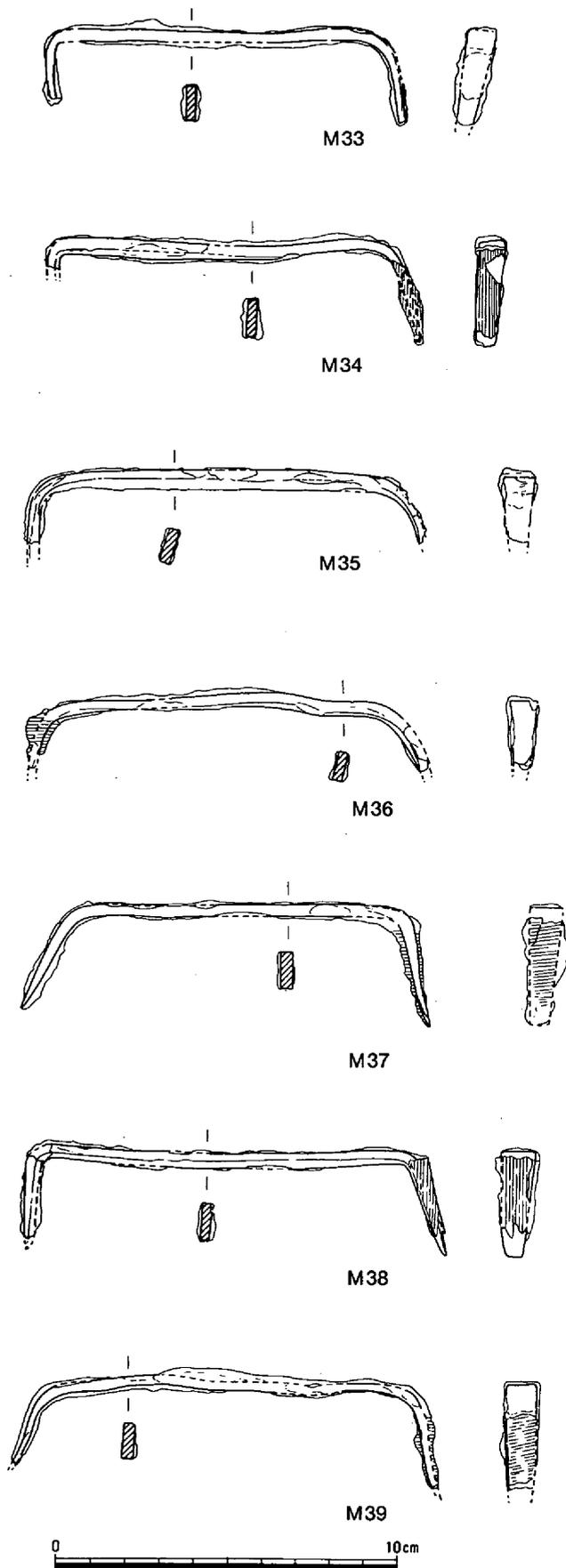
第49図 第1主体出土玉および紡錘車（2/3・1/3）



第50図 第1主体出土鉄製品① (1/2)



第51図 第1主体出土鉄製品② (1/2)



第52図 第1主体出土鉄製品③ (1/2)

床面に敷かれていたと考えられる礫が多量に出土しており、ほぼ第1主体と同様な構造の竪穴式石室と判断している。床面は遺存している部分もあるものと期待したが、礫敷が原位置をとどめている部分を検出できず、その集中する範囲を記録できたに過ぎない。また遺物が石室石材下端の下位からも出土したことから、予想以上に攪乱を受けているものと判断しており、さらには鏃・釘を出土していることから、石室内に木棺を納めていたことは間違いないであろう。

遺存した石室基底は西辺最下段を構成する4枚と、南東コーナーを形成する二段5枚の石材である。後者の石材は第1主体の裏込めの石材上に載っていることが判明しており、これに後出して築かれたことが明かである。この石室残存部と礫・遺物の出土状況、そして墓壙とのバランスから石室内法を推定すると、長さ235cm前後、幅70cm前後となり、幅はほぼ第1主体と同じであるが、長さは75cm前後短いものとなる。また、推定床面レベルは第1主体に比しておよそ20cm高いものと考えられ、排水溝との関係を検討する上で参考となる。

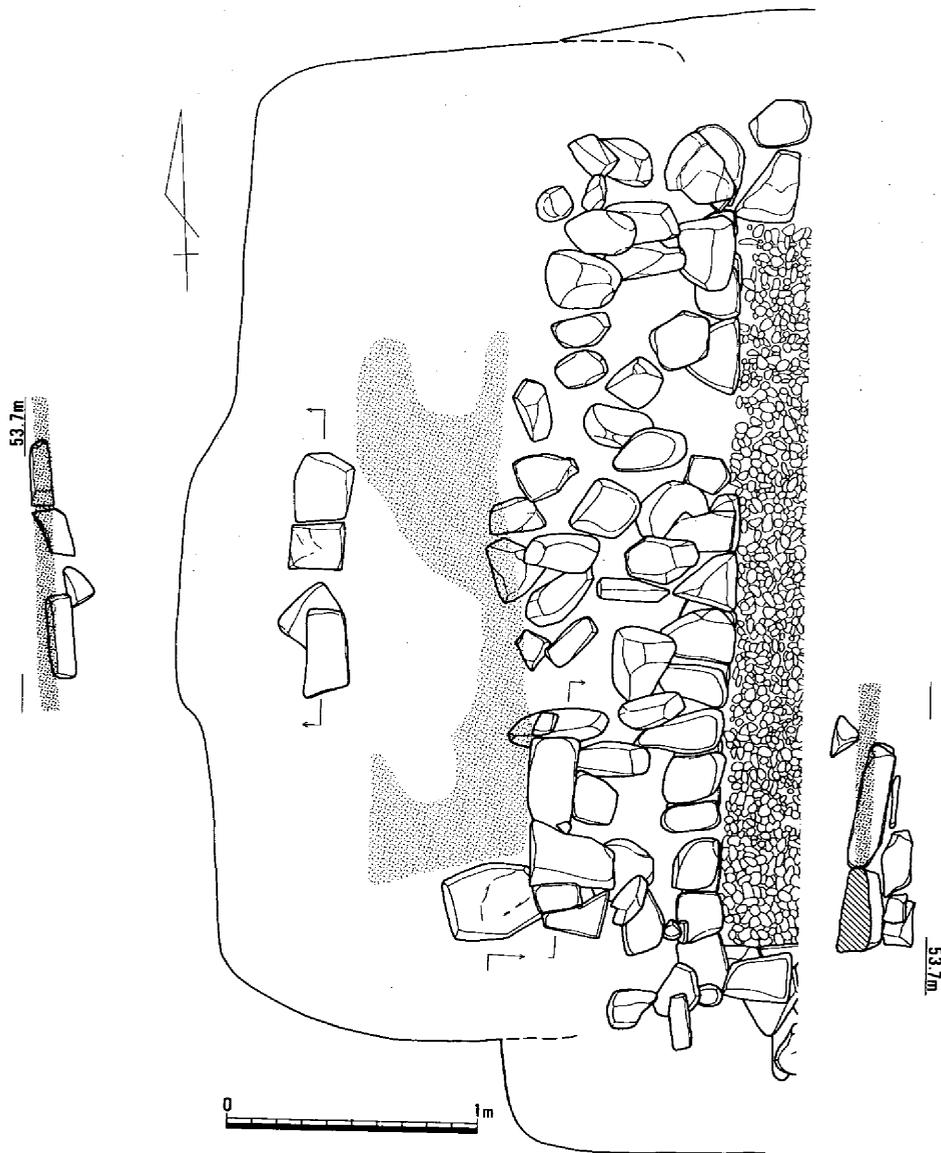
木棺は痕跡すら残っていないが、鏃に加え、釘を多用していることから、第1主体より棺材の数が多い可能性を考えている。仮にそうであれば、棺材の複数化・小型化を意味し、やや簡略的な棺（おそらく蓋）を使用していたと考えることもできる。いずれにせよ棺構造や鏃の使用など、両者は極めて近似した埋葬施設と考えて間違いないであろう。ただし、乱掘された石室の石材と考えられるものは西側斜面でわずかに認められたのみであり、第1主体の石室の簡略さを重視すれば、この石室もより少ない石材によって構築されていた可能性が強

いものと感じている。

第2主体出土遺物（第54～61図、図版41）

まず遺物の出土状況であるが、結論から言えば乱掘されているために、原位置の解かるものは全く存在していない。遺物は石室内のみならず墳丘西側斜面にも散乱しており、元の配置を復元することは石室以上に困難な状況と言える。ここでは石室内の遺物散乱状況と遺物の組成から、おおよその配置を復元してみたいが、これも傾向を示す程度のもので理解していただきたい。

まず石室内の攪乱状況であるが、鋨を例に見てみると、棺内では中央底面付近に2点、上層で2点出土したのみで、残りの3本は石室外の出土である。鋨の本来の配置が第1主体と同様であると言う前提に立てば、石室内の南北端まで乱掘されていると言える。鉄鏃は南半を中心に散乱するが、北端にも1本認められ、他の鉄製工具類は南半部でもやや中央寄りに出土している。ガラス玉はほぼ全体に散布していたが、集中部が中央やや南寄り、北半やや東寄りの2カ所存在する。これの点から副葬品は本来鉄製農工具類が南端付近に、鉄鏃は南端、もしくは中央東側に、ガラス玉は北半部に配置



第53図 6号墳第2主体 (1/30)

されていたものが、いずれも中央寄りに掻き出されていると見ることもできよう。

副葬品は武器類として鉄鏃、刀子・斧・鋤先・鎌などの農工具類。管玉・白玉・ガラス玉などの装身具類が認められる。これらはその出土量から、乱掘時に持ち出されたものを考慮しても（強いて言えば刀剣類の有無が問題となるが）、おおよそ副葬品の構成を示していると考えられ、ほぼ第1主体の副葬品組成に鉄鏃・（多量の）玉類を加えたものと言える。この他木棺の付属具として鏃・釘が出土している。以下では棺内出土遺物について説明し、最後に墳丘出土品を加えて整理しておきたい。ただし、玉類に関しては主体部出土品、墳丘出土品を分離せず記載したことをお断りしておく。

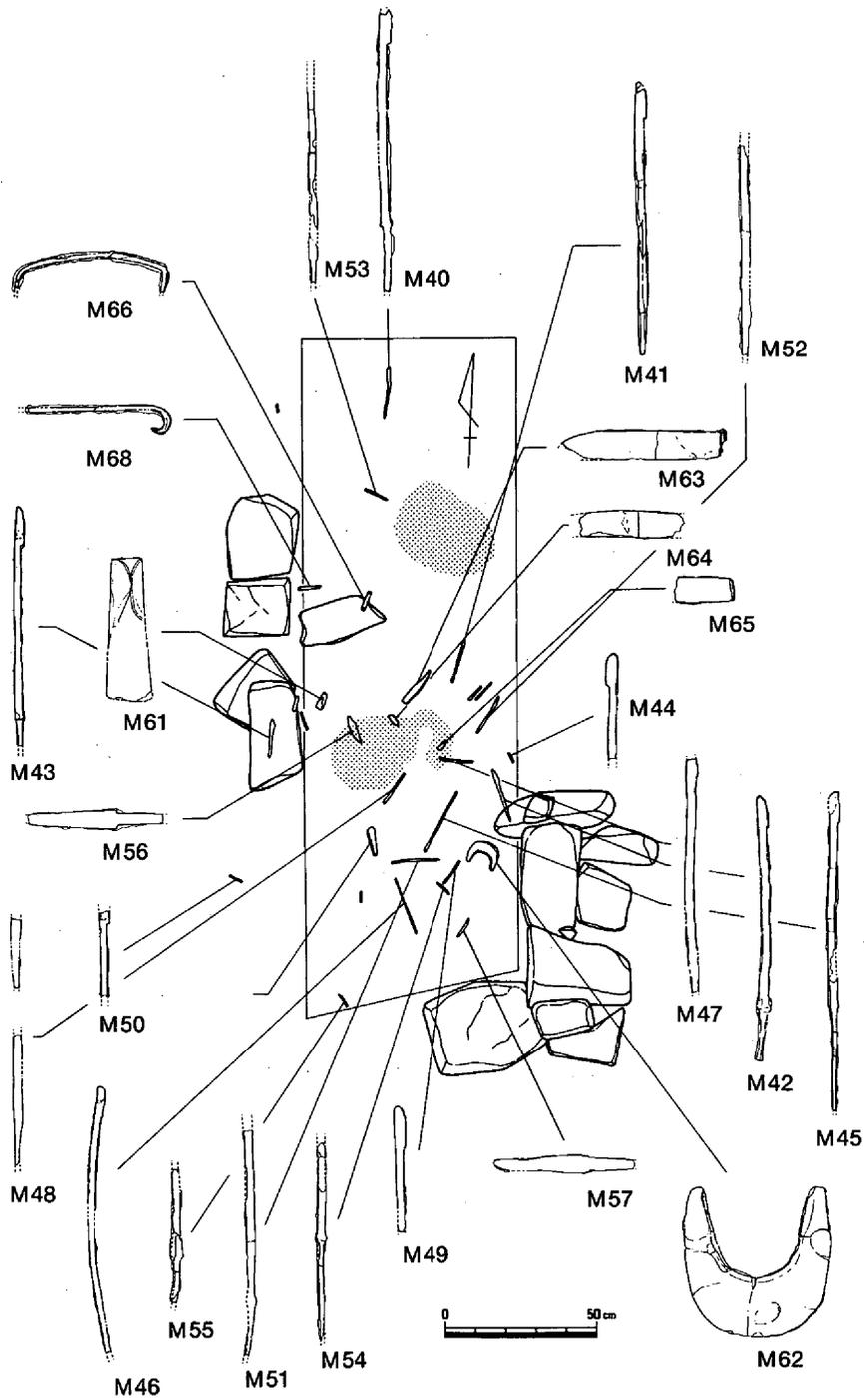
鉄鏃M40～55はいずれも長頸鏃で刃部は片刃式である。破損のため不明確な点が多いが、茎部の長さが長いものと、短いものがあり、関部に棘が付く可能性のあるものも認められる。刀子M56～59は両関式で、復元長10cm前後を測るものと推定される。斧M60～61は長さ9.5cm前後、幅2.9cm前後を測る細長いタイプで、刃部は両刃式である。U字形鋤先M62は1点のみ出土しており、長さ3.9cm、幅9.4cmを測る小型なものである。鎌M63～65はいずれも破損しており、装着部が解かる2点はいずれも装着角度が90度に近いタイプである。鏃M66～69は全て破損しているが、ほぼ全形を復元するものである。幅は第1主体出土品に比べてやや広く、ばらつきもある。木質が認められるものは、木目方向から側辺に打たれたものと考えている。釘M71・72は断面が方形で幅4mm、厚さ2～3mmを測る細身のタイプである。頸部はやや薄く造られ、L字状となっている。この他L字形を呈した板状の鉄製品の破片M70がある。

玉類は濃緑色の碧玉製管玉が長・短2点ずつ計4点（0.2%）、蛇紋岩製白玉17点（0.8%）、滑石製白玉2点（0.1%）の他は全てガラス玉（99%）である。ガラス玉はその大きさから長さ4～9mm、径6～11mm内にほぼ収まる丸玉253（12%）点と、長さ2～3mm、径3～5mm内にほぼ収まる小玉1846以上点（87%）があり、前者にはややばらつきがある。さらに色調は青色、緑色に大きく分けることができ、前者は全て青色である。ちなみに小玉の色調別の比率は、青色49%、緑色51%である。

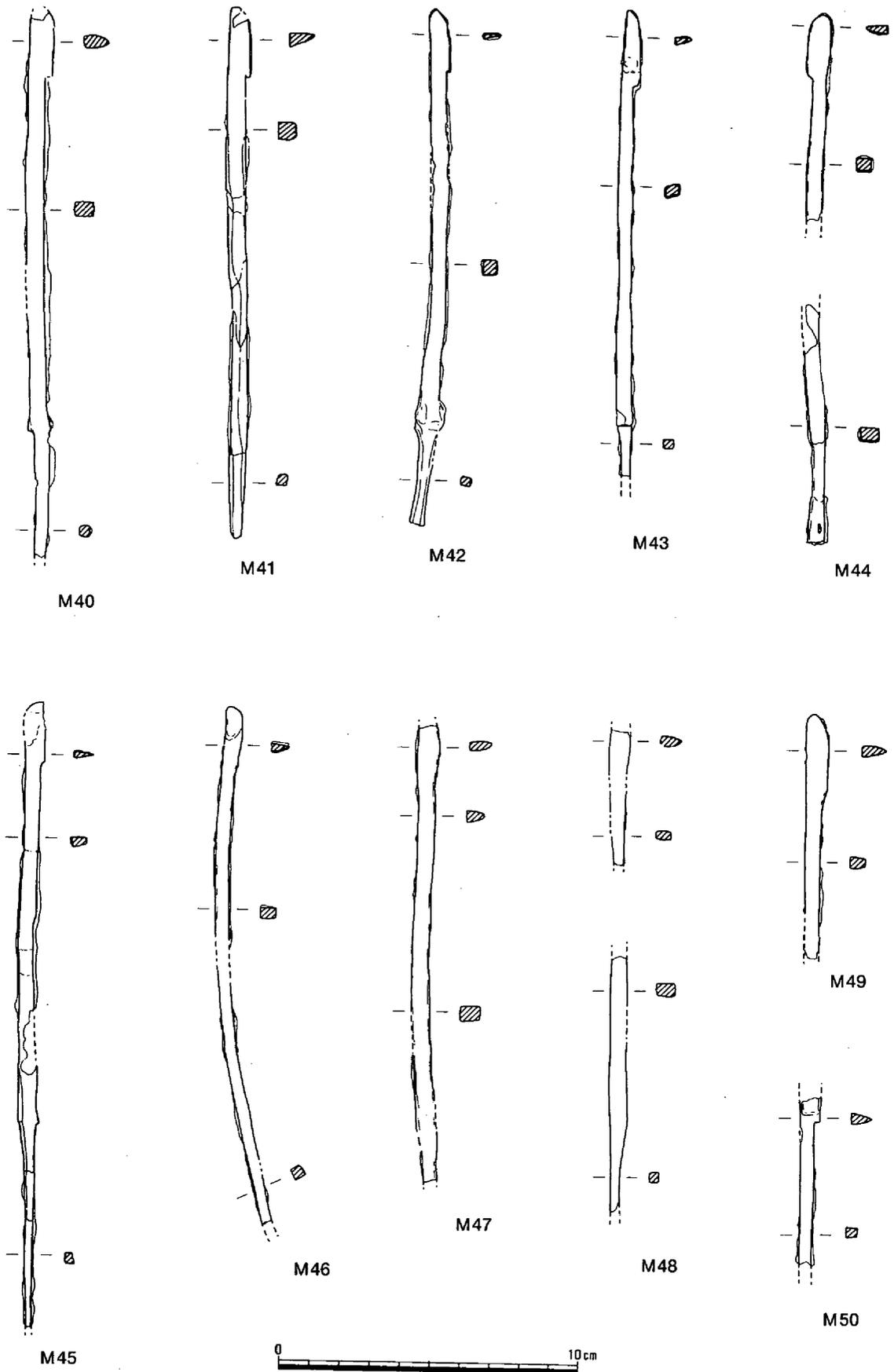
これらの遺物を墳丘斜面出土品と合わせて整理すると、鉄製品は長頸鏃12点以上、刀子4点、斧2点、鋤先1点、鎌3点、鏃7点、釘6点以上となり、乱掘をうけていることを考慮すれば、鉄鏃・太刀を除き、第1主体とほぼ同様の組成をもっていたかも知れない。第1主体と最も異なる点は、膨大な数の玉類（管玉4点、白玉19点、ガラス玉2100点以上）を伴っている点であろう。この数は後期古墳を含めても県内では最多クラスのもので、墳丘の大きさからは想像できないものと言える。

排水溝（第33・46図）

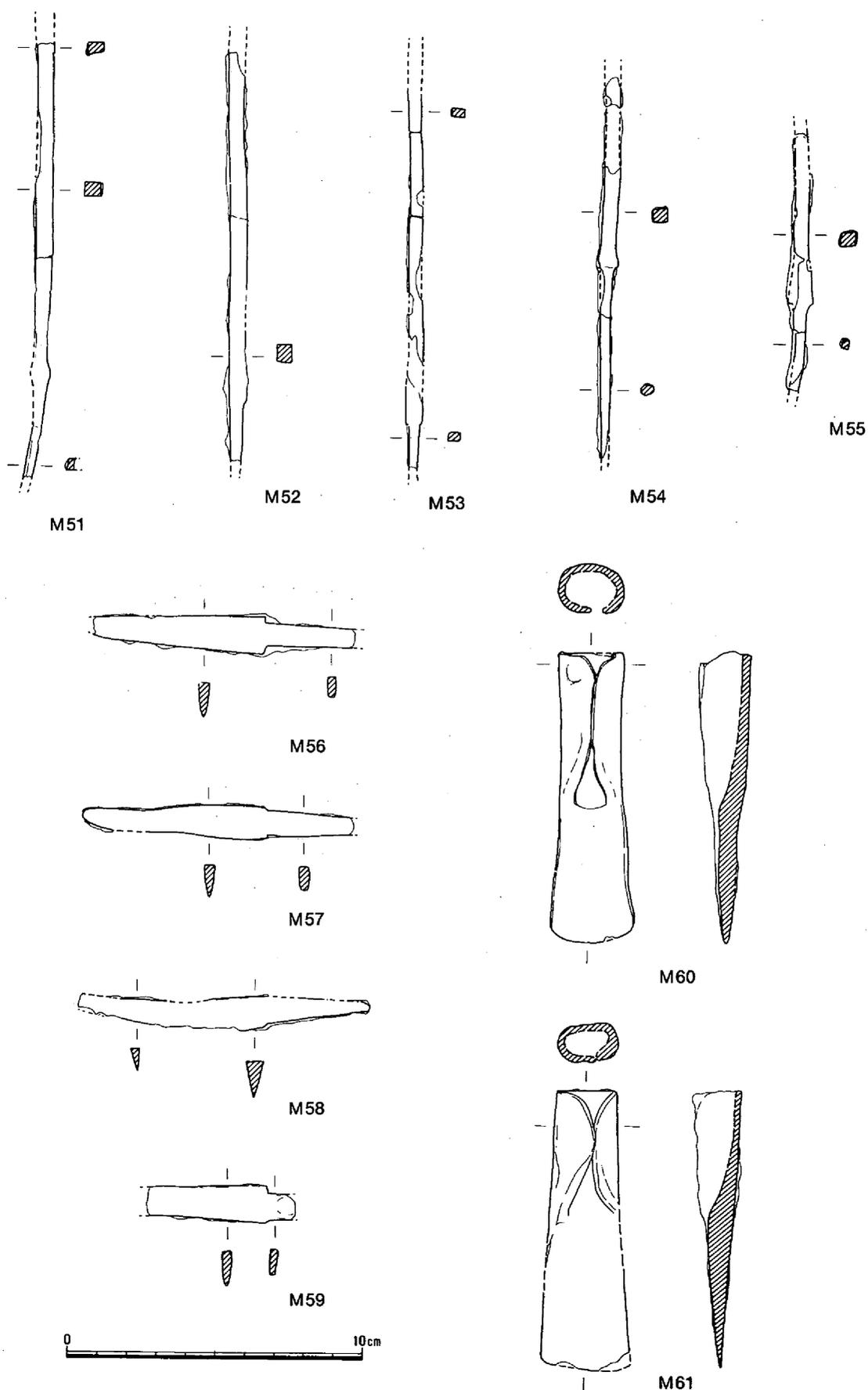
二つの主体部の調査が終了後、旧地表面において溝2条を検出し、その配置状況から埋葬施設に関連する排水溝と判断した、南北方向に長く伸びるもの（排水溝A）と、これに直行する短いもの（排水溝B）は切り合い関係は不明であるが、一見するとAが第2主体に伴うように見て取れる。しかし、Aの北端は検出面での位置であり、さらに伸びる可能性がある点、底面レベルに差があり、排水溝Bが約20cm高く、両主体の床面レベルの差とほぼ等しい点、さらにA内の堆積土中から第1主体でわずか1点のみ出土したものと同サイズのガラス玉（小玉は全く含まない）が10点前後出土したことなどから、排水溝Aが第1主体に関連するものと考えている。これが正しいとすれば、排水溝南端部が墳丘下段の埴輪列の下層にあることから、ガラス玉を使用した埋葬行為等が終了した後に排水溝を埋め、墳丘を完成したものとなる。そして排水溝Bが第2主体に関連するものとするれば、その方向や、非常に小規模な点などから、墳丘完成後に第2主体が構築された可能性が強いものと考えている。



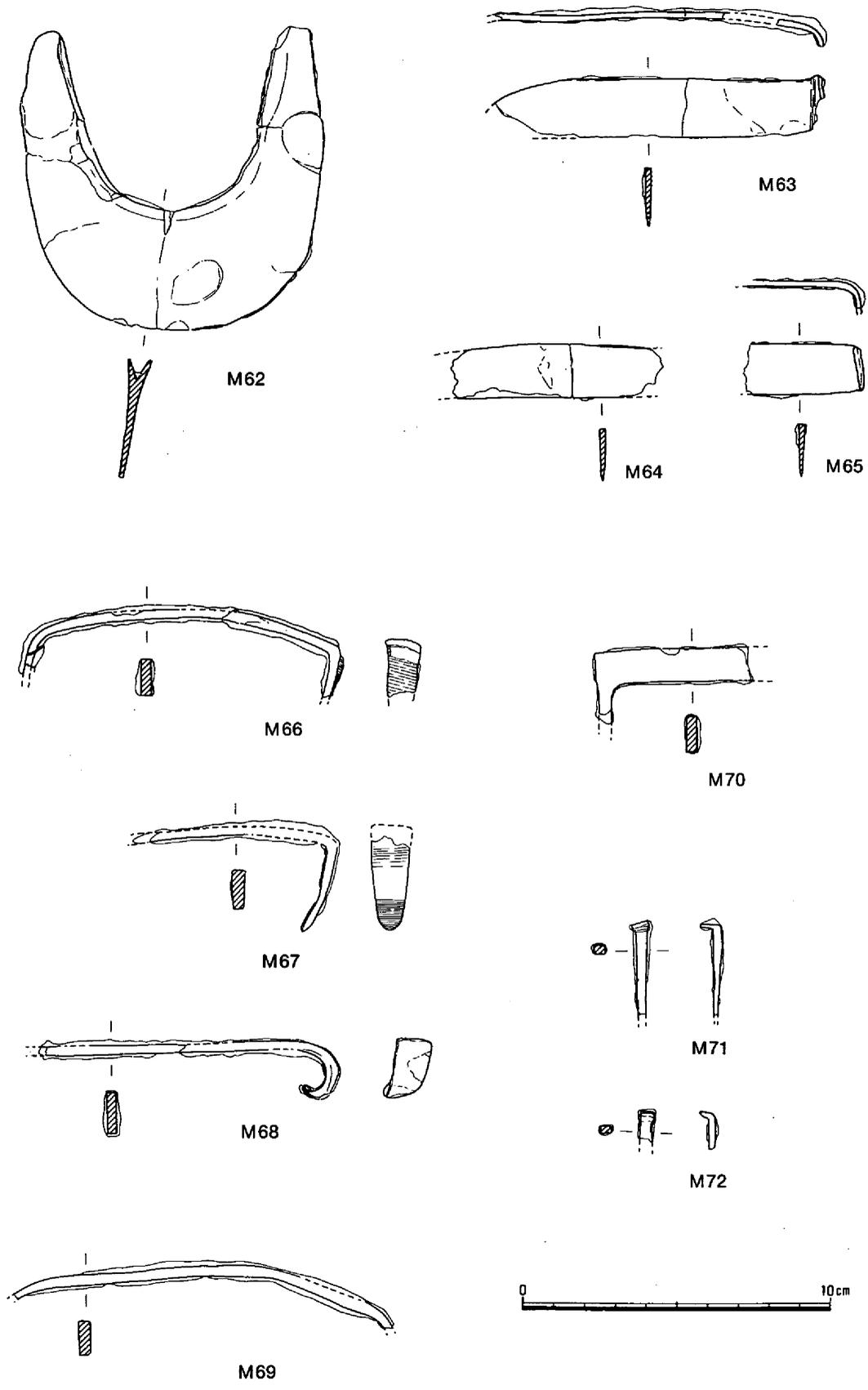
第54図 6号墳第2主体遺物出土状況 (1/25・1/5)



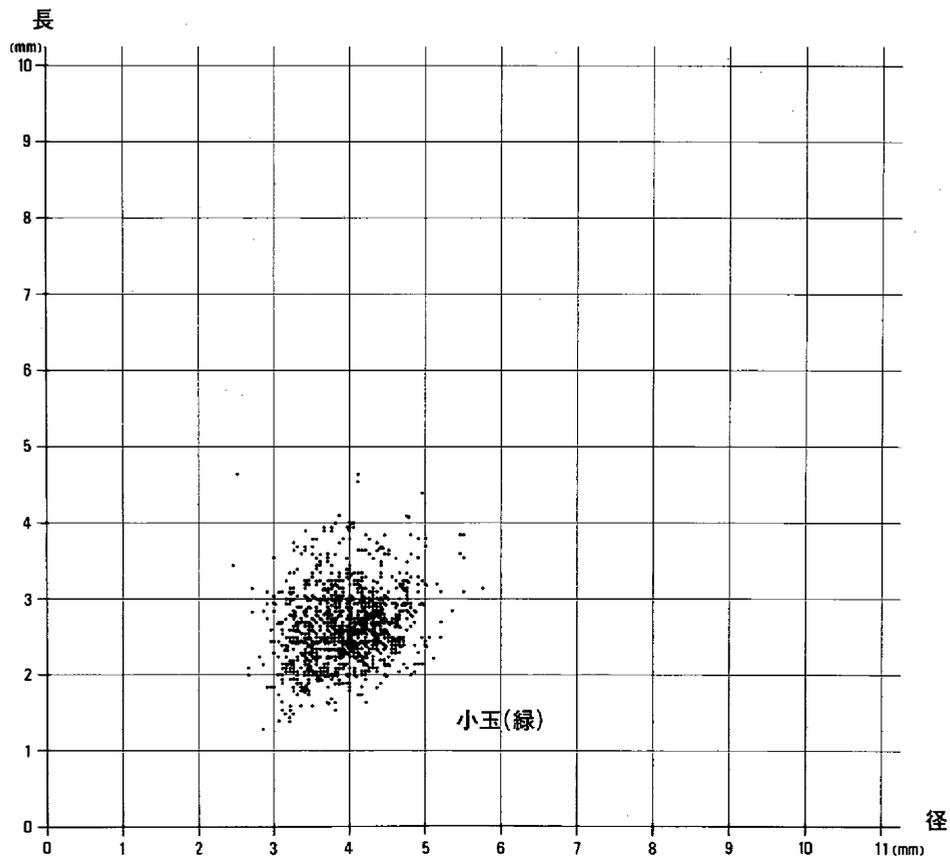
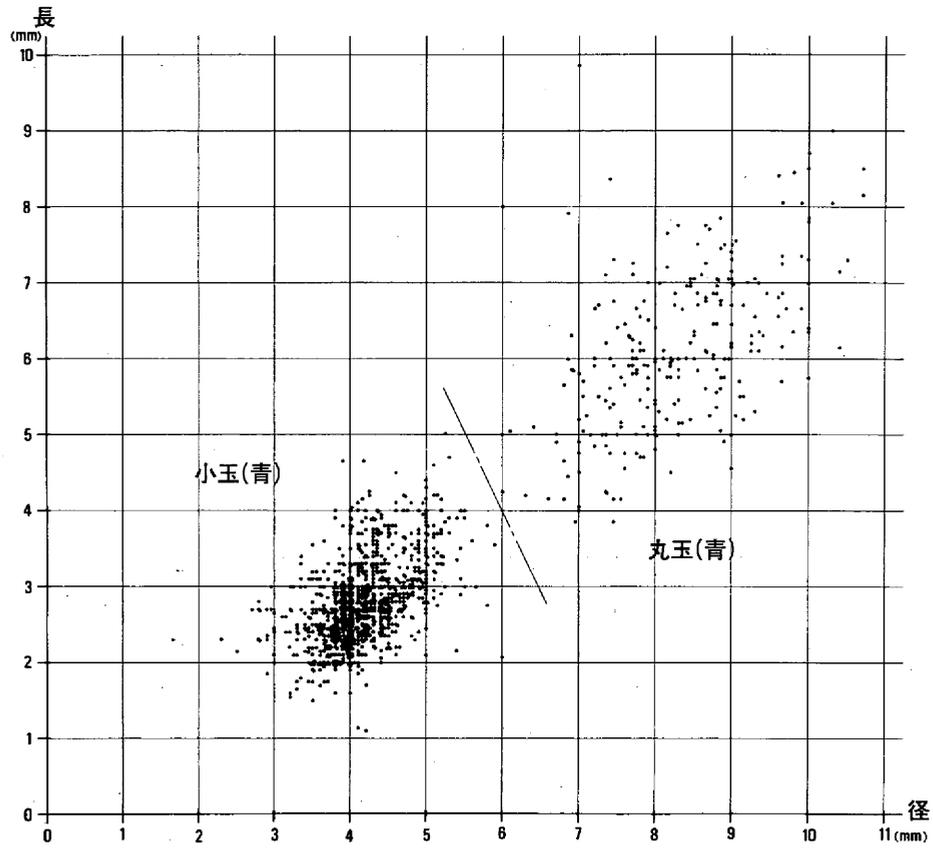
第55図 第2主体出土鉄製品① (1/2)



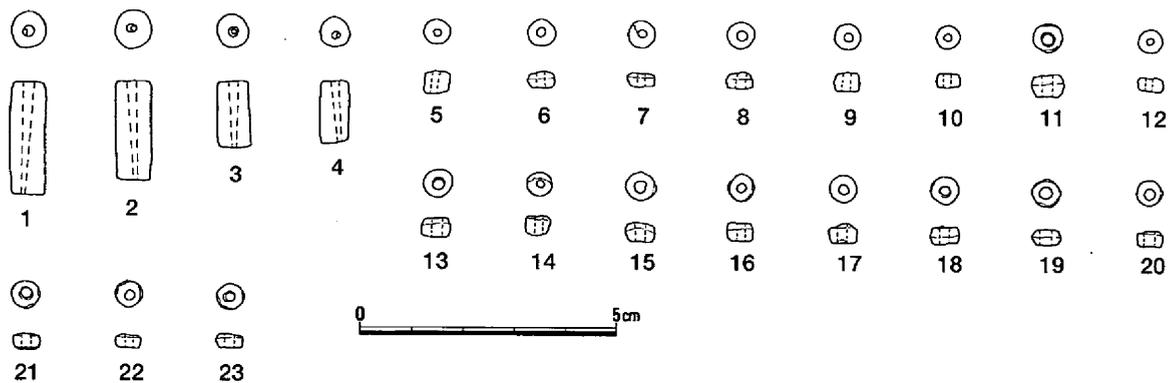
第56図 第2主体出土鉄製品② (1/2)



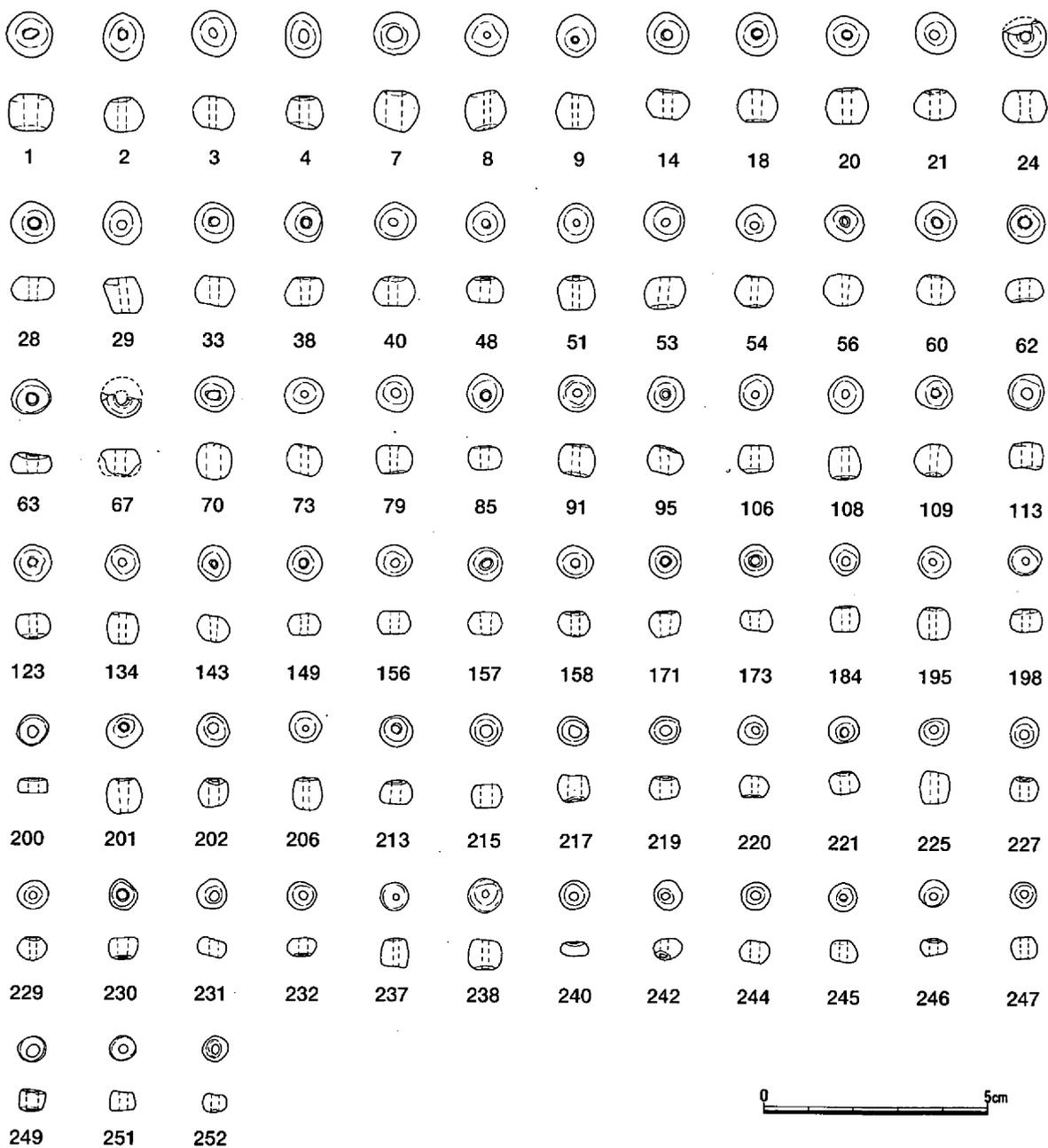
第57図 第2主体出土鉄製品③ (1/2)



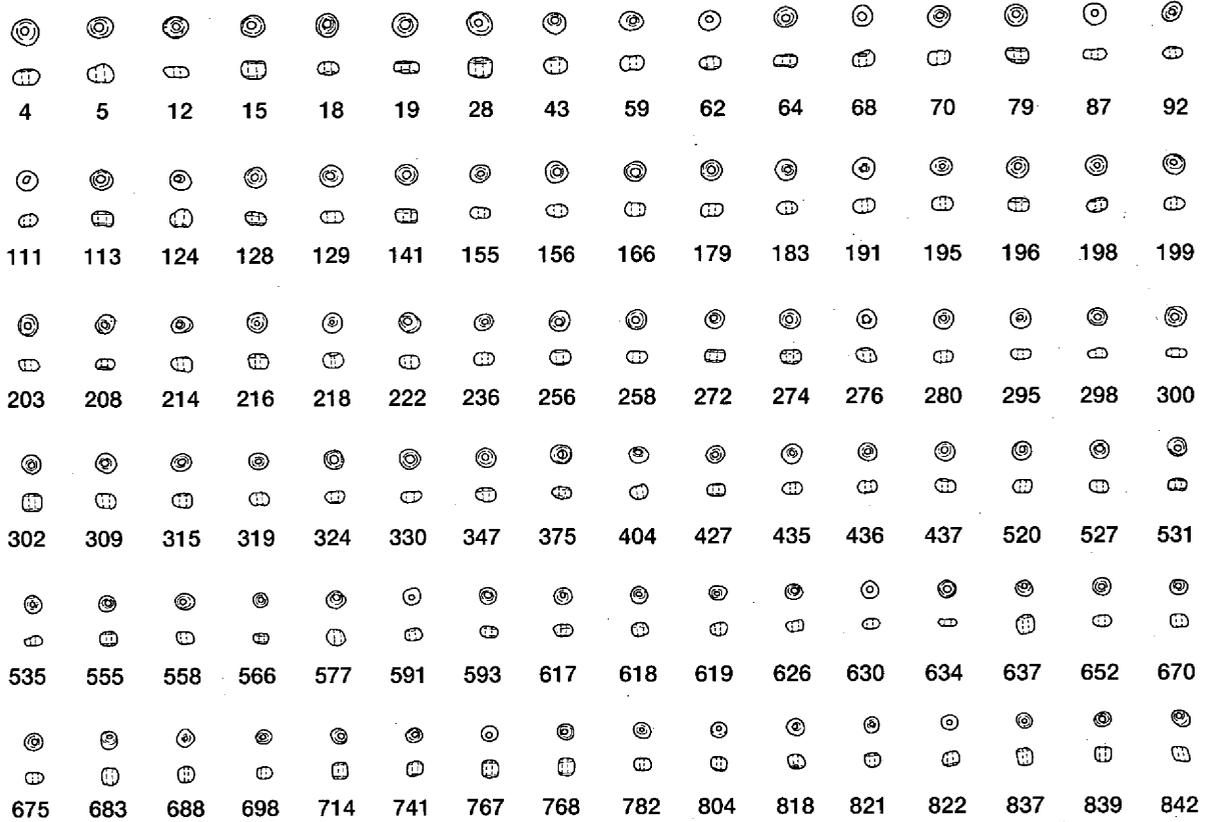
第58図 第2主体ガラス玉法量散布図



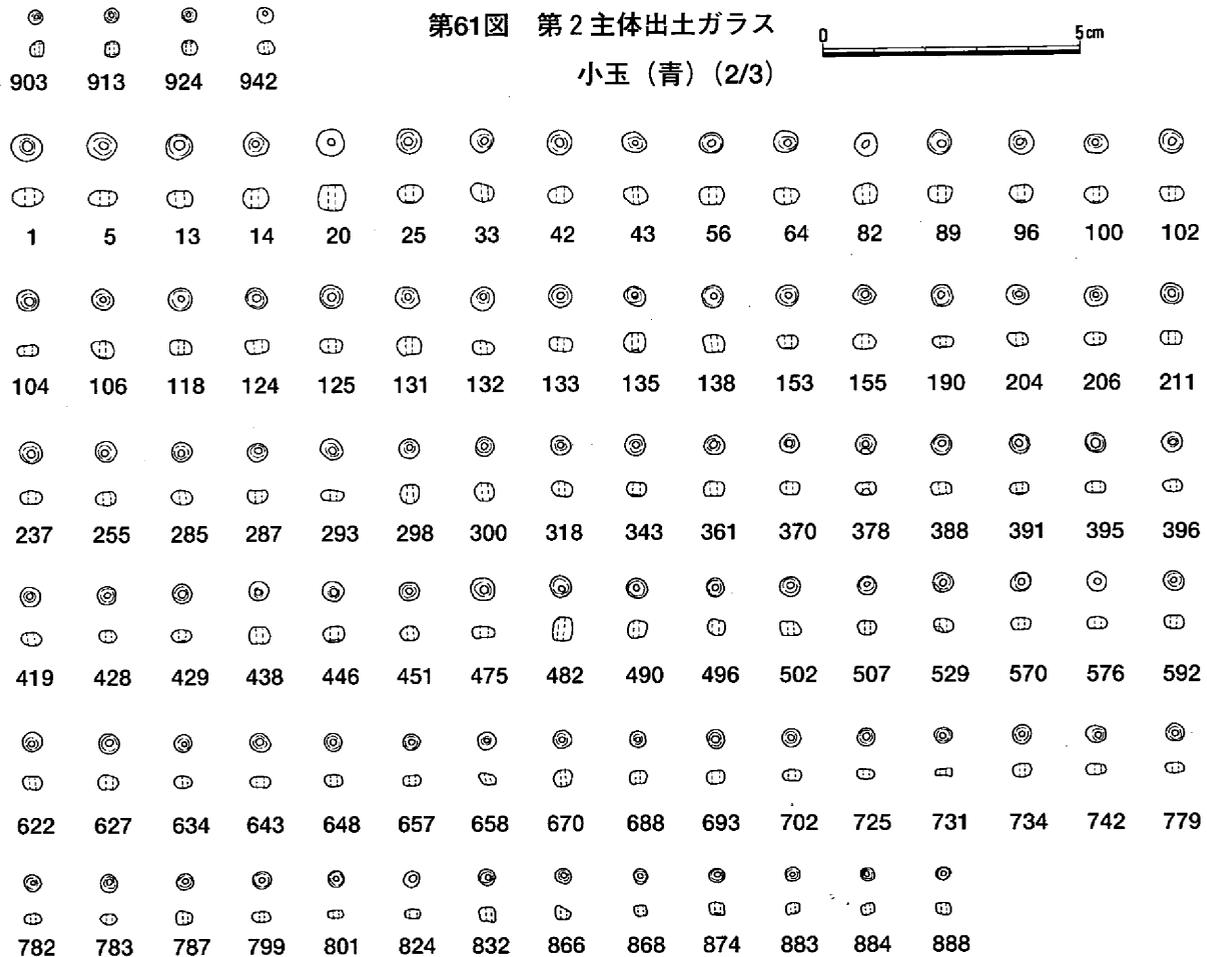
第59図 第2主体出土石製玉類 (2/3)



第60図 第2主体出土ガラス丸玉 (青) (2/3)



第61図 第2主体出土ガラス
小玉 (青) (2/3)

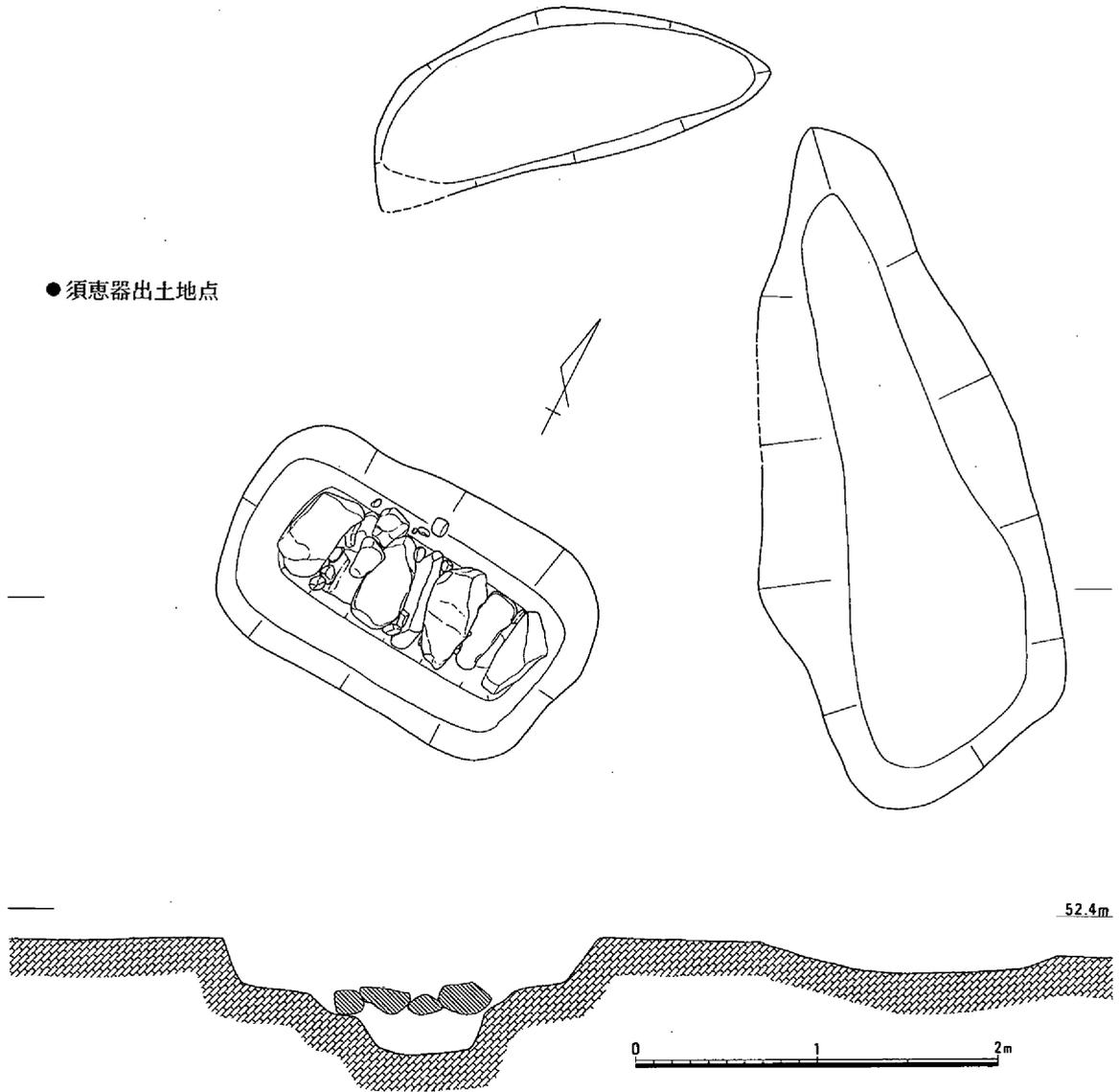


第62図 第2主体出土ガラス小玉 (緑) (2/3)

2. 中山7号墳

(1) 周溝 (第63図、図版37)

前述したように7号墳は当初その存在を認識していなかったもので、埋葬移設を検出後初めて古墳と判断したものである。墳丘盛土は検出できていないが、調査前の地形側量図からこの部分にわずかな高まりが認められ、調査前にはいくらかの盛土が遺存していた可能性はある。墳丘の規模・形態を示すものは、検出できた周溝の基底部分と、須恵器蓋杯出土地点、そしてこれらと埋葬施設の位置関係のみである。周溝は検出面から20cm前後を測る浅いもので、東辺部と北辺部の周溝基底部分のみが分離して残存しているものと考えられる。この二つの「周溝残存部」で形成されるコーナー部はほぼ直角を呈しており、墳丘が方形であることは明かである。また、通例この時期の古墳の周溝は底面レベルが不均一である場合も多く、検出面ではコーナー部がズリッジ状を呈しているように見えるが、本来



第63図 7号墳調査後測量図 (1/40)

は周溝内に取り込まれていたものと考えられる。埋葬施設が墳丘中心部にあると仮定して、復元できる墳丘規模は1辺5m前後を測るものと推定される。また、須恵器出土地点は復元される周溝内の墳裾部に位置することから、同時期の他例と比較しても矛盾しないものと言える。

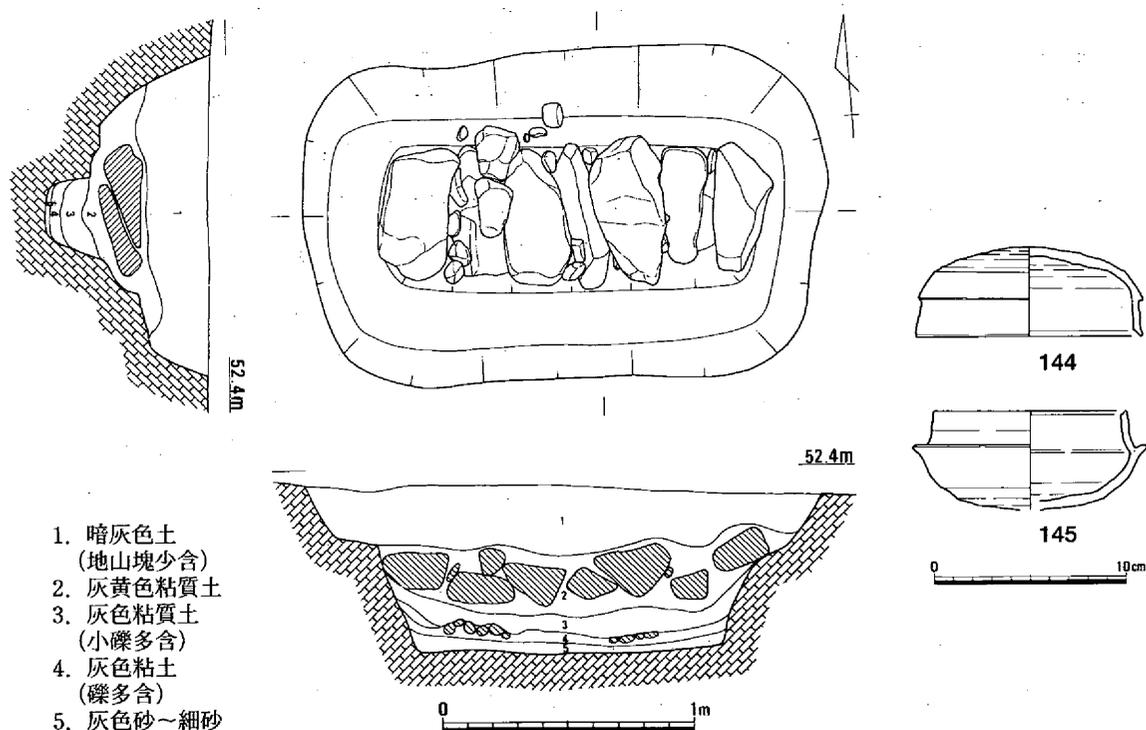
(2) 埋葬施設 (第64図、図版37)

埋葬施設は地山面で検出された「石蓋土壙墓」とされるタイプで、主軸は通常とは異なり、墳丘対角線上にとっている。墓壙は二段に掘り込まれ、上段部は平面小判形、下段は細い溝状に掘られており、規模は上端でそれぞれ、208×129cm、150×57cmを、深さはそれぞれ25、40cmを測る。下段の墓壙上には長さ50cm前後の扁平な石材を蓋として掛け並べており、隙間は小石と粘土によって塞がれていた。下段墓壙内の堆積土は非常に柔らかく、砂粒の状況から水性の自然堆積と観測された。遺物は全く出土していない。

この埋葬施設はその石材のみが注意されるため「石蓋土壙」という名称でよばれるが、本例は構造上は地山を棺身とした一段の墓壙と解することもでき、その場合石棺、あるいは木棺を持つ埋葬施設を十分意識しているものと考えられる。

(3) 出土遺物 (第64図)

出土遺物から7号墳に伴うものと判断している須恵器蓋杯が1組ある。これらは正確な出土状況は不明であるが、切り株を除去した際に一括して出土したことから、当初は重なっていたか、並んでいた可能性が強いものである。144は口径11.7cm、器高4.7cmを測る蓋で、灰色を呈し、焼成は不良である。天井部外面は3分の2を回転ヘラケズリし、口唇部は斜めに面取りされている。145は口径10cm、



第64図 埋葬施設 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)

器高5.2cmを測る杯で、灰色を呈し焼成は不良で前者と同様である。各部の調整もほぼ共通し、両者はセットと考えて矛盾ないものと言える。

これらの須恵器が示す時期は畿内陶邑編年のTK-23~47型式に比定でき、古墳の築造時期を示していると考えておきたい。その場合6号墳とほぼ同時期の築造となるが、立地から考えてこれに後出する可能性が高い。

第4節 結 語

本章で報告した遺跡は、墳丘頂部の5世紀末の古墳群と、その周辺部に位置する弥生時代中期後半の集落である。いずれも資料価値の高いものと考えられるが、直接の調査担当者（本執筆者）が翌年度に県外へ転勤したため、報告書作成において多くの支障をきたしている。特に出土遺物については調査時以降ほとんど観察することができていないため、多くの間違いを記すことになったかも知れない。ここではそのことを踏まえうえて、調査当時に考察したことを中心として、両遺跡の大まかな位置付けと今後に残された問題点を記しておきたい。

1. 中山遺跡の弥生時代中期後半の集落について

調査時の所見、出土遺物の様相からおおよその集落変遷が把握できている。まず集落の開始であるが、最も古い時期の土器（Ⅲ様式の新段階）を出土したのは丘陵頂部の遺構群である。これらは竪穴住居1~2軒と段状遺構3カ所前後で構成されるものと考えられ、これに南斜面で検出された「道」的な遺構が伴う。その後この竪穴住居が使われ続けているかどうかは明かにできていないが、少なくとも集落の中心は南斜面に移っているのは間違いないであろう。さらにこの時期の遺構は段状遺構として把握したものが中心となっている。この段状遺構は、その後数回の造り替えを行い、集落は継続しているが、最終的には大型で深い柱穴を持つ掘立柱建物が出現している。この建物はその柱穴配置等から高床倉庫的なものの可能性が強く、その配置は屋根稜線に対して東西対称的な様相を呈している点が興味深い。もちろんこれと同時に段状遺構も併存するものと考えられるが、抽出作業をするに至っていない。その後、後出する遺構は全く認められず、この墳丘では中期末には集落が廃絶していることが明かである。

遺構の性格については不明確な点が多いが、多数を占める段状遺構について少し触れてみたい。斜面において生活するためには建物を建てるかどうかと関係なく、こうした段状遺構（水平面）が必要不可欠と考えられる。さらに小型で浅い柱穴を検出しているものもあり、検出困難な建物が存在した可能性を積極的に検討すべきと考えている。また倉庫的な建物に付随する空間部分は、屋外の作業スペースを意味するかもしれない。これらを検討するためには、壁体溝状の溝の有無や、床面の被熱面などが多くの示唆を与えてくれるものと感じている。さらに視点を変えれば、こうした検出困難な建物や一種の（水平面を必要とする）空間は斜面地形であるからこそ把握できるものであり、通常の平地集落ではほとんど検出不可能な遺構と言えるはずである。この意味において、竪穴住居や倉庫、（一部の）掘立柱建物で語られる旧態然とした集落論は、多くの面で前提付きの論となるだろう。このことは、斜面集落の成果が群馬県下で明かとなりつつある、火山灰下の集落調査の成果に勝らないものを提示することになるかも知れない。

集落の性格については平野部のものと十分検討する必要があるが、いわゆる高地性集落を考える上で重要な資料となるであろう。その場合、出土土器の量や器種構成の問題、丘陵頂部で検出した土壌が狼煙跡としてよいものかどうか、十分検討することが必要である。また急斜面に立地する倉庫もどのような位置付けをするべきかが大きな課題となろう。

2. 中山6号墳について

本古墳は一辺約13mを測る小規模な方墳であるが、墳丘が二段構成である点、多量の埴輪を配置する点、埋葬施設に2基の竪穴式石室を持つ点、さらに多種多様な副葬品を伴う点など、極めて注目する部分が多い、しかし、筆者の能力不足から、事実関係さえ不明確な点があったことをお詫びしておきたい。ここでは若干ではあるが、調査時に考えていたこと、感じていたことを中心に述べることで、まとめに代えさせてもらいたい。

まず古墳の築造時期であるが、円筒埴輪が基本的に穴窯焼成であり、(黒斑を有するものもその可能性が強い)、底部調整はタタキや凹圧によるものが見られる点から、V期のものとしてよいであろう。墳丘出土の須恵器は陶邑編年のTK-23~47形式⁽⁴⁾に比定できるものと考えられる。この他時期を示すものとして他の副葬品も上げられるが、埋葬施設の構造が時期差を示すという見解⁽⁵⁾もあり、さらに時期を限定できる可能性が強い。通常の場合ならここで5世紀末~6世紀初頭の時期を与えることができよう。しかし、今回同時に報告する西山古墳群や、隣接する奥ヶ谷遺跡の初期須恵器窯、そしてほぼ同時期に総社市教育委員会によって調査された福井大塚古墳群⁽⁶⁾など、古墳時代中期から終末期にかけての資料が一気に得られたことから、まず最初に、その中での位置づけがなされるべきで、その流れが整理できれば、この時期の中でもその意味合いが異なってくる可能性があるものと感じている。

埴輪・副葬品については調査時の観察が十分でなかったため、ここで多くを語ることは無責任と言わざるを得ないであろう。ただ埴輪については非常に特徴を持った一群であり、隣接する西山古墳群で、過去に調査された資料⁽⁷⁾と比較できれば、その流通範囲などが限定できるかも知れないと思っている。また豊富な鉄製品は被葬者が鉄製品の生産に関わっていた、あるいは容易に入手できる立場にいたことを感じさせ、一つの重要な検討課題である。

埋葬施設は近年類例が増加しつつある。「中期型」竪穴式石室に、「鏝を伴う木棺」を納めるタイプで、朝鮮半島南部の影響を指摘されるものである。これに類似する埋葬施設の出現は、管見ではあるが、県内では近隣の総社西阿曾の随庵古墳⁽⁹⁾、真備町の天狗山古墳⁽¹⁰⁾、笠岡市の長福寺裏山古墳群⁽¹¹⁾、そして石室は持たないが鏝を使用した木棺を持つ山陽町の正崎2号古墳⁽¹²⁾などがみられ、県外で著名なものには兵庫県姫路市の宮山古墳⁽¹³⁾がある。いずれも中山6号墳より一段階古い時期と考えられ、定型・普遍化した様子は認められないことから、これらが導入期のものとするれば、その受け入れ方に地域差的なものを認めざるを得ない。中山6号墳とほぼ同時期以降と考えられるものは隣接する西山古墳群の他に県北部で多数検出され始めている⁽¹⁴⁾。これらを詳細に検討したわけではないが、少なくともこの時期(陶邑編年TK-23~47平行期)には、石室についてはかなり普及していると言え、定型化の傾向も指摘できるかも知れない。この石室はその後横穴式石室が本格的に導入される頃まで造られており、須恵器の副葬位置などの面でも興味深い展開をしているようである。さらにこのような石室を持つ古墳はほとんどが小型の円墳、あるいは径20~30mの造り出し付きの中型円墳に多いようである。

これについては、さらに検討する必要があるが、6号墳が独特の墳丘形態を持っていることを考える上で非常に重要な点かも知れない。

この他にも立地や7号墳との関係など、考察すべき問題は多岐にわたる。特に被葬者の出自については大きな関心を寄せられるであろう。その場合副葬品のみ、あるいは埋葬施設のみにその根拠を求めるのは注意を要すると考える。古墳を構成する要素のうち何をもちて出自を語るのか、その方法論が曖昧なまま論じることが非常に危険と思われるからである。

以上を簡単ではあるが6号墳のまとめとしておきたい。もちろんこの古墳の抱える問題の一部を解決するどころか、何が問題であるかさえ十分理解できないものとなったことをお詫びしたい。(椿)

註

- (1) 鎌木義昌『総社市西山周辺古墳群』総社市教育委員会 1972年
- (2) 内田律雄「いわゆる異形刀子について」『新開古墳群』島根県隠岐島前教育委員会 1990年
- (3) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第4号 1978年
島崎 東「中・四国」『古墳時代の研究9Ⅲ埴輪』雄山閣 1992年
- (4) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- (5) 行田裕美『長畝山北古墳群』津山市教育委員会 1992年
- (6) 高橋進一「福井新田地区小規模ほ場整備事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報4』総社市教育委員会 1994年
- (7) 註1参照
- (8) 白石太一郎『古墳の知識Ⅰ 墳丘と内部構造』東京美術 1985年
山本三郎「竪穴系の埋蔵施設」『古墳時代の研究7古墳Ⅰ 墳丘と内部構造』雄山閣 1992年
- (9) 鎌木義昌・間壁忠彦・間壁子『随庵古墳』総社市教育委員会 1965年
- (10) 西川宏「天狗山古墳」『岡山県史』考古資料 岡山県 1986年
- (11) 鎌木義昌「長福寺裏山古墳群」『岡山県史』考古資料 岡山県 1986年
- (12) 則武忠直『正崎2・4号墳』山陽町教育委員会 1989
- (13) 松本正信・加藤史郎『宮山古墳群第2次発掘調査概報』姫路市教育委員会 1972年
- (14) 小郷利幸「まとめ」『門の山古墳群』佐良山門の山古墳群発掘調査委員会・津山市教育委員会 1992年
安川豊史「古墳時代における美作の特質」『吉備の考古学的研究』(下) 山陽新聞社 1992年
- (15) 高田明人ほか『すりばち池古墳群』総社市教育委員会 1993年

土器一覽

中山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	95	建物1	弥生土器	高杯						10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm前後の砂粒 長石(多)	
2	94	建物1	弥生土器	甕			9.6			5YR6/4(鈍い橙)	2mm以下の砂粒 石英(多)・長石(多)	
3	97	建物2	弥生土器	高杯						10R6/6(橙)	0.2mm以下の砂粒 石(中)・石英(中)	長
4	115	建物3	弥生土器	壺	18.4				口縁内面に液状文、頸部に凹線を巡らす	10YR7/4(鈍い黄橙)	3mm程の砂粒 1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
5	110	建物3	弥生土器	壺	16.5				口縁・頸部に4条の凹線を巡らす	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5mm前後の砂粒 石英(多)	
6	120	建物3	弥生土器	壺	27.0				口縁に4条、頸部に8条の凹線が巡る	10YR7/3(鈍い黄橙)	4mm程の砂粒 長石・石英(多)	
7	120	建物3	弥生土器	底部			10.4		外面ヘラミガキ	10YR6/3(鈍い黄橙)	4mm程の砂粒 長石・石英(多)	
8	119	建物3	弥生土器	甕	21.2					2.5Y7/4(浅黄)	0.5~1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
9	113	建物3	弥生土器	甕	14.0				口縁に3条の凹線、外面縦方向のハケ	10YR8/3(浅黄橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(中)	
10	111	建物3	弥生土器	底部			7.0			7.5YR7/4(鈍い橙)	1mm前後の砂粒 長石(多)・石英(中)	
11	109	建物3	弥生土器	底部			10.0		外面ヘラミガキ	10YR7/3(鈍い黄橙)	2mm前後の石英(多) 1mm前後の長石(多)	外面に煤付着
12	114	建物3	弥生土器	高杯	20.0				口縁に3条の凹線	5YR6/6(橙)	1.5mm前後の砂粒 石英・長石(多)	
13	112	建物3	弥生土器	高杯			9.6		外面クモの巣状ヘラミガキ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒 長石(中)	
14	118	建物3	弥生土器	台付鉢	43.7				体部内外面ヘラミガキ	7.5YR6/6(橙)	0.5~2.5mm程の砂粒 長石・石英(多)	
15	93	建物4	弥生土器	高杯						10YR7/4(鈍い黄橙)	0.2mm以下の砂粒 長石・石英・赤色酸化土	
16	92	建物4	弥生土器	高杯			10.0		脚橋部に2条の凹線	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm程の砂粒 長石(多)	
17	108	建物5	弥生土器	脚部						7.5YR6/6(橙)	1.5mm前後の砂粒 長石(多)・石英(中)	
18	96	建物6	弥生土器	壺					口縁に4条の凹線巡る	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	
19	102	建物6	弥生土器	底部			8.8			10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm前後の砂粒 長石・石英(多)	
20	116	建物6	弥生土器	高杯						10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒・石英(中)	
21	117	建物6	弥生土器	高杯						10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 石英・赤色酸化土粒(多)	
22	101	建物7	弥生土器	壺	23.0				器台?	10YR8/3(浅黄橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(中)	
23	98	建物7	弥生土器	甕	17.2				口縁に3条の凹線巡る、外面はハケ	2.5YR7/4(浅黄)	1mm以下の砂粒 石・石英(多)	長
24	100	建物7	弥生土器	高杯			9.0			10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒 赤色酸化土粒(中)	赤
25	99	建物7	弥生土器	高杯						10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)	長
26	85	建物8	弥生土器	底部			9.5		外面はヘラミガキ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~1mm程度の砂粒 黒雲母(多)・長石(中)	黒
27	86	建物8	弥生土器	底部			14.0		外面はヘラミガキ	10YR6/2(灰黄橙)	1mm以下の砂粒 石・石英(多)	長
28	134	段状遺構2	弥生土器	高杯					脚橋部に6条の凹線	10YR8/4(浅黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)	
29	83	段状遺構2	弥生土器	壺	25.8				頸部に11条の凹線巡る	2.5Y7/4(浅黄)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
30	84	段状遺構2	弥生土器	底部			14.0		外面はヘラミガキ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1~2.5mmの砂粒 長石・石英(多)	
31	81	段状遺構2	弥生土器	底部			6.0			5YR6/6(橙)	0.5~1mm程度の砂粒 長石(多)	
32	82	段状遺構2	弥生土器	高杯	26.0				内外面ヘラミガキ、口縁端部に穿孔	5YR5/4(鈍い赤褐)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
33	79	段状遺構2	弥生土器	高杯					内外面ヘラミガキ、円板充填	10YR5/2(灰黄褐)	1mm以下の砂粒 石・石英(多)	長
34	133	段状遺構2	弥生土器	高杯			13.1			2.5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 石・石英(中)	長
35	107	段状遺構3	弥生土器	壺					口縁に3条の凹線巡る	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.2mm以下の砂粒	
36	106	段状遺構3	弥生土器	高杯					外面クモの巣状ヘラミガキ、円板充填	10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm程度の砂粒 石英(多)	
37	91	段状遺構7	弥生土器	甕	20.1				口縁に4条の凹線巡る、外面縦方向のハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(中)	赤
38	80	段状遺構7	弥生土器	高杯					口縁に4条の凹線巡る	7.5YR7/6(橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(中)	赤
39	122	段状遺構9	弥生土器	高杯						5Y6/1(灰)	1mm以下の砂粒 石・石英(多)	長
40	78	段状遺構10	弥生土器	壺						10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒	
41	132	段状遺構11	弥生土器	壺					頸部に圧痕文を巡らす、外面はハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	長
42	76	段状遺構11	弥生土器	底部						7.5YR6/4(鈍い橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
43	75	土壌1	弥生土器	甕					外面縦方向のヘラミガキ、内面ハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒	
44	103	土壌3	弥生土器	壺		23.1			外面上半ハケ、下半ヘラミガキ、内面押圧・ナデ	2.5Y7/4(浅黄)	0.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
45	104	土壌3	弥生土器	甕	14.4					5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)	長 外面に煤付着

土器一覽

中山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
46	105	土塋3	弥生土器	甕			12.5		内外面ヘラミガキ	5YR6/6(橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
47	135	土塋6	弥生土器	壺					頸部に丘痕文	7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
48	90	土塋6	弥生土器	底部			6.0			7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英・角閃石(多)	
49	88	土塋6	弥生土器	底部			6.8			10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 石英・長石(多)	
50	87	土塋6	弥生土器	底部			5.6		32個の刺突が廻る	7.5YR7/4(鈍い橙)	1~1.5mmの砂粒 長石・石英(多)	
51	89	土塋6	弥生土器	高杯						10YR7/4(鈍い黄橙)	1~2.5mm以下の砂粒 長石・石英(中)	

中山6号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
52	140	北部裾東	埴輪	朝顔形円筒	37.2				丹塗り痕跡、外面タテ、内面ヨコハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.2~2mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	
53	142	北部裾東	埴輪	朝顔形円筒					内面横方向ハケ	7.5YR6/6(橙)	1mm前後の砂粒 長石(多)・石英(中)	
54	143	西部斜面	埴輪	円筒	24.0				丹塗り痕跡、外面タテ、内面押圧・ナデ	7.5YR6/4(鈍い橙)	0.5~5mm程度の小石 石英(多)・長石(少)	
55	141	墳頂部北西	埴輪	円筒	26.4				丹塗り痕跡、内外面タテハケ	7.5YR6/4(鈍い橙)	0.2~5mm前後の砂粒 石英(多)	
56	40	西部裾北	埴輪	円筒					丹塗り	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~3mm程度の砂粒 石英(多)	
57	40	西部裾北	埴輪	円筒					丹塗り、内外面タテハケ	2.5Y5/1(黄灰)	0.5~3mm程度の砂粒 石英(多)	
58	144	西部斜面	埴輪	円筒					外面タテハケ、内面押圧・ナデ	5YR6/6(橙)	4mm程度の小石 石英(多)・長石(中)	
59	24	南東部裾	埴輪	円筒		23.0	18.4		外面タテハケ、内面押圧・ナデ	2.5Y7/4(浅黄)	0.5~4.5mm程度の砂粒 石英(多)	
60	39	西部裾北	埴輪	円筒			19.0		外面タテハケ、内面押圧・ナデ	2.5YR8/3(淡黄)	4mm程度の石英(多)	
61	139	西部裾南	埴輪	円筒	26.4				丹塗り、内外面タテハケ	7.5YR7/4(鈍い橙)	2mm以下の砂粒 石英・長石(多)	
62	60	北部	埴輪	円筒			16.8		丹塗り、外面タテハケの後タタキ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~3mm程度の砂粒 石英(多)	
63	59	北部裾西	埴輪	円筒			16.0		外面タテハケ、内面押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~4mm程度の砂粒 石英(多)	下盤に黒炭
64	137	北西部	埴輪	人物(腕?)					先端押圧、全体ナデ	7.5YR7/6(橙)	3mm前後の石英(多)	
65	146	北西部斜面	埴輪	動物(獣足?)			6.5		外面縦方向のハケ、下面に径4mmの穿孔	7.5YR7/6(橙)	4mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
66	136	北西部	埴輪	動物(獣足?)			6.0		外面縦方向のハケ、下面に径5mmの穿孔	7.5YR7/6(橙)	2mm前後の石英(多)	
67	138	北部裾西	埴輪	動物(獣足?)						7.5YR7/6(橙)	3mm前後の石英(多) 1mm以下の黒い砂粒	
68	145	北東部裾	埴輪	家形?						10YR8/4(浅黄橙)	2mm前後の砂粒 石英(多)	
69	121	第2主体部	埴輪	家形?						10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm前後の砂粒 石英(多)	
70	148	西部裾南	埴輪	家形(堅魚木)						10YR8/4(浅黄橙)	3mm前後の砂粒 石英(多)	
71	150	西部裾南	埴輪	家形(破風板・椽木)						7.5YR7/3(鈍い橙)	4mm程度の小石 石英(多)	
72	147	西部裾南	埴輪	家形(軸部下半)						10YR8/4(浅黄橙)	3mm前後の砂粒 石英(多)	
73	149	北東部	埴輪	家形(軸部下半)						7.5YR7/6(橙)	4mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	
74	41	埴輪東列01	埴輪	円筒			15.7	12.0	外面ナメハケ・タタキ痕跡、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	3mm前後の砂粒 石英(多)	
75	42	埴輪東列02	埴輪	円筒			17.6	9.4	外面タタキ痕跡、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	4mm前後の石英(多)	
76	43	埴輪東列03	埴輪	円筒			17.0	10.0	外面ナメハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	3mm前後の石英(多)・1.5mm前後の長石(中)	
77	44	埴輪東列04	埴輪	円筒			20.8	7.5	外面タタキ、内面押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	4mm前後の石英(多)・4mm前後の長石(中)	内面に黒炭
78	45	埴輪東列05	埴輪	円筒			18.2	11.8	外面ナメハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	4mm前後の石英(多)・3mm前後の長石(中)	
79	46	埴輪東列06	埴輪	円筒			17.6	9.8	外面ハケ・タタキ痕跡、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	5mm前後の石英(多)・3mm前後の長石(中)	
80	47	埴輪東列07	埴輪	円筒			15.4	12.7	外面ハケ・ナデ、内面押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	4mm前後の石英(多)・1mm前後の長石(中)	内面に黒炭
81	48	埴輪東列08	埴輪	円筒			18.6	8.8	外面ナメハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	4mm前後の長石(多)・3mm前後の石英(多)	外面に黒炭
82	49	埴輪東列09	埴輪	円筒			19.8	8.2	外面タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	3mm前後の石英(多)・3mm前後の長石(中)	
83	1	埴輪南列03	埴輪	円筒			16.2	15.9	外面タテハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~4mm程度の砂粒と7mm程度の小石粒	
84	2	埴輪南列04	埴輪	円筒			16.1	22.3	外面タテハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	4mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	内外面に黒炭
85	3	埴輪南列05	埴輪	円筒			16.2	22.7	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/3(鈍い黄)	1~4mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
86	4	埴輪南列06	埴輪	円筒			15.2	25.5	上段ヨコハケ、中段タテハケ・ヨコハケ、下段タテハケ・タタキ	10YR7/3(鈍い黄橙)	1~4mm程度の砂粒 長石・石英(多)	

土器一覽

掲載番号	表測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
87	5	埴輪南列07	埴輪	円筒			17.6	27.8	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石・石英(多)	内外面に黒斑
88	6	埴輪南列08	埴輪	円筒			16.4	23.2	外面タテハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/6(明黄褐)	5mm前後の石英(多)、5mm前後の長石(少)	
89	7	埴輪南列09	埴輪	円筒			16.9	23.0	外面ナメハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	1~5.5mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
90	8	埴輪南列10	埴輪	円筒			17.0	22.2	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~3mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	
91	9	埴輪南列11	埴輪	円筒			17.6	19.5	外面タテハケ、内面押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	1~4mm程度の砂粒と8mm程度の小石粒 石英(多)	内面に黒斑
92	10	埴輪南列12	埴輪	円筒			18.0	18.0	外面ナメハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	5mm程の石英(多)・4mm程の長石(中)	外面に黒斑
93	11	埴輪南列13	埴輪	円筒			16.5	15.1	外面ナメハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	5mm前後の石英(多)・5mm前後の長石(中)	
94	12	埴輪南列14	埴輪	円筒			17.0	16.5	外面タテハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	1~6mm程度の石粒 長石・石英(多)	
95	13	埴輪南列15	埴輪	円筒			16.4	13.8	外面ナメハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	0.5~3mm程度の砂粒 石英(多)	
96	14	埴輪南列16	埴輪	円筒			18.7	19.7	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	5mm程までの砂粒 石英・長石(多)	内外面に黒斑
97	15	埴輪南列17	埴輪	円筒			16.8	21.0	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~3mm程の砂粒 石英(多)・長石(少)	
98	16	埴輪南列18	埴輪	円筒			18.1	21.8	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/3(鈍い黄橙)	0.5~4mm程度の石粒 石英・黒雲母(多)	内外面に黒斑
99	17	埴輪南列19	埴輪	円筒			17.2	14.4	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	3mm前後の石英(多)・2mm前後の長石(中)	
100	18	埴輪南列20	埴輪	円筒			18.0	12.8	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	1~6mm程度の砂粒 石英(多)・長石・黒雲母(中)	
101	19	埴輪南列21	埴輪	円筒			16.8	14.2	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/3(鈍い黄)	1~4mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
102	20	埴輪南列22	埴輪	円筒			14.9	13.4	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	5mm程の石英(多)・3mm程の赤酸化土粒(中)	外面に黒斑
103	21	埴輪南列23	埴輪	円筒			16.2	3.9	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)・黒雲母(中)	
104	22	埴輪南列24	埴輪	円筒			14.9	19.9	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)		
105	23	埴輪南列25	埴輪	円筒			17.8	13.5	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	4mm程の石英(多)・2.5mm程の長石(多)	外面に黒斑
106	25	埴輪西列01	埴輪	円筒			18.0	8.5	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1~2mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
107	26	埴輪西列02	埴輪	円筒			15.6	13.1	外面タテハケ	10YR6/4(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)	
108	27	埴輪西列03	埴輪	円筒			17.3	16.4	外面ナメハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~4mm程の砂粒 石英(多)	
109	28	埴輪西列04	埴輪	円筒			15.8	11.7	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	3mm程度の石英(多)・3mm程度の長石(多)	
110	29	埴輪西列05	埴輪	円筒			17.4	17.4	外面ナメハケ・タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	0.5~3.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
111	30	埴輪西列06	埴輪	円筒			17.2	16.5	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	
112	31	埴輪西列07	埴輪	円筒			16.4	15.3	外面ナメハケ、内面押圧・ナデ	2.5Y6/3(鈍い黄)	0.5~3mm程度の砂粒 長石(多)	外面に黒斑
113	32	埴輪西列08	埴輪	円筒			15.4	13.2	外面ハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	3mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
114	33	埴輪西列09	埴輪	円筒			16.4	13.1	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR5/2(灰黄褐)	3mm前後の石英・赤酸化土粒(多)	外面に黒斑
115	34	埴輪西列10	埴輪	円筒			19.7	14.0	外面タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)	
116	35	埴輪西列11	埴輪	円筒			15.8	10.0		10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5~5mm程の砂粒 石英(多)	
117	36	埴輪西列12	埴輪	円筒			16.7	13.7	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	0.5~3.5mm程の砂粒 石英(多)・長石(中)	
118	37	埴輪西列13	埴輪	円筒			19.4	16.5	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~5.5mm程の砂粒 石英(多)	
119	38	埴輪西列14	埴輪	円筒			19.5	8.0	外面タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	0.5~4.5mm程の砂粒 石英(多)	
120	50	埴輪北列01	埴輪	円筒			15.5	13.7	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	内外面に黒斑
121	51	埴輪北列02	埴輪	円筒			19.3	18.6	外面タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	0.5~3.5mm程の砂粒 石英(多)・長石(少)	
122	52	埴輪北列03	埴輪	円筒				2.5	外面タタキ、内面押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~3mm程の砂粒 石英(多)	
123	53	埴輪北列04	埴輪	円筒			18.4	9.2	外面タタキ、内面押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	1~4mm程の砂粒 石英・長石(多)	
124	54	埴輪北列06	埴輪	円筒			15.2	3.3	外面タタキ、内面押圧・ナデ	10YR7/3(鈍い黄橙)	0.5~4mm程の砂粒 石英(多)・長石(僅)	
125	55	埴輪北列07	埴輪	円筒			17.6	12.8	外面タテハケ、内面ハケ・押圧・ナデ	5YR6/6(橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)・長石(中)	内外面に黒斑
126	56	埴輪北列08	埴輪	円筒				2.7	外面タテハケ、内面押圧・ナデ	10YR7/6(明黄褐)	0.5~7mm程の砂粒 石英(多)・長石(少)	石
127	57	埴輪北列09	埴輪	円筒			15.5	8.5	外面タタキ、内面押圧・ナデ	2.5Y6/4(鈍い黄)	1~5mm程の砂粒 石英(多)・長石(少)	
128	58	埴輪北列10	埴輪	円筒			14.9	17.2	外面タテハケ・タタキ、内面ハケ・押圧・ナデ	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~4mm程の砂粒 石英(多)・長石(少)	石
129	65	南東部掘	埴輪	杯蓋	13.8	14.0			ヘラケズリの方向は右	N5/0(灰)	1mm以下程の砂粒	
130	64	南西部掘	須恵器	杯身	10.7	12.8			ヘラケズリの方向は左	7.5Y6/1(灰)	0.5mm以下の砂粒	
131	67	南西部掘	須恵器	杯身						N5/0(灰)	1mm以下の砂粒	

土器一覽

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
132	72	南西部裾	須恵器	高杯?	12.0	14.0			ヘラケズリの方向は右	N5/0(灰)	1mm以下の砂粒	
133	70	南西部裾	須恵器	高杯	11.3	12.8	6.4		ヘラケズリの方向は左 脚部の穿孔は未確認	N6/0(灰)	1mm以下の砂粒	
134	71	南西部裾	須恵器	高杯		12.1	7.8		3方に透かし	N6/0(灰)	1mm程の砂粒	
135	68	南西部裾	須恵器	高杯	11.6	14.0	7.1		3方に透かし	7.5Y6/1(灰)	1mm以下の砂粒	
136	61	南部裾東	須恵器	高杯			8.5			10Y6/1(灰)	0.5mm以下の砂粒	
137	66	南東部斜面	須恵器	甕	10.0				4・7本の櫛描波状文	N5/0(灰)	0.5mm以下の砂粒	
138	69	南東部斜面	須恵器	壺	15.5	21.8			頸部に櫛描波状文	10YR3/2(黒褐)	0.5mm以下の砂粒	
139	62	南西部裾	須恵器	甕	20.4					5Y7/1(灰白)	1mm以下の砂粒	
140	63	南西部裾	須恵器	甕	21.5					5YR5/3(鈍い赤褐)	0.5mm以下の砂粒	
141	123	西部	弥生土器	壺	10.2					2.5Y7/4(浅黄)	0.5mm以下の砂粒	
142	125	墳丘内	弥生土器	壺			7.0			10YR6/2(灰黄褐)	1mm以下の砂粒 長石(多) 石英(多)	
143	124	西畦	弥生土器	高杯			12.0			10YR8/4(浅黄橙)	1mm程の砂粒 長石・石英(中)	

中山7号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
144	74	主体部西方	須恵器	杯蓋	11.7	11.8		4.7	ヘラケズリの方向右	N6/0(灰)	2mm以下の砂粒	
145	73	主体部西方	須恵器	杯身	10.0	12.2			ヘラケズリの方向右	N6/0(灰)	1mm以下の砂粒	

石製品一覽

中山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考
S1	3	掘立柱建物3	スクレイパー	55.0	44.0	6.5	11.70	サヌカイト	
S2	2	掘立柱建物5	石鏃	43.5	11.5	4.0	2.40	サヌカイト	基部欠損
S3	4	段状遺構2	スクレイパー	65.0	40.5	8.5	25.10	サヌカイト	
S4	1	包含層	石斧	68.5	36.5	11.0	46.02	頁岩	磨製

鉄製品一覧

中山6号墳

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M1	86	鏃	4	8	4	3	西頂部
M2	46	鏃	87	6	5	7	南裾
M3	47	鏃	83	6	5	3	南裾
M4	41	鏃	159	8	6	14	南裾西
M5	43	釘	60	7	6	8	南西裾
M6	44	釘	64	6	6	8	南西裾
M7	103	釘	43	5	2	1	南裾東

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M8	104	釘	29	5	3	2	南裾東
M9	106	釘	28	4	2	1	南裾東
M10	105	釘	25	4	3	1	南裾東
M11	45	鏃	93	13	3	26	南西裾
M12	48	鏃	107	11	4	29	南西裾
M13	42	鏃	94	12	5	16	南西裾

第1主体

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M14	7	太刀	795	31	7	770	
M15	15	刀子	68	14	2	8	破片
M16	14	刀子	78	12	2	7	破片
M17	16	曲がり刀子	147	9	4	29	破片
M18	36	斧	52	33	6	39	
M19	32	斧	55	32	4	29	
M20	26	斧	54	36		22	
M21	23	鋤先	50	119	4	63	
M22	19	鋤先	41	101	3	44	
M23	20	鋤先	38	45	4	21	破片
M24	24	穂摘具	23	54	1	9	
M25	25	穂摘具	23	50	1	10	
M26	37	穂摘具	21	53	2	6	

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M27	18	鏃	92	20	3	15	先端欠損
M28	21	鏃	98	19	2	15	先端欠損
M29	33	鏃	107	21	2	18	先端欠損
M30	27	鏃	82	21	2	15	先端欠損
M31	22	鏃	98	21	2	16	先端欠損
M32	31	鏃	21	104	3	16	
M33	13	鏃	90	11	3	19	
M34	30	鏃	93	11	3	21	
M35	10	鏃	100	11	3	26	両端欠損
M36	11	鏃	95	9	3	19	両端欠損
M37	12	鏃	90	11	4	30	
M38	8	鏃	105	11	3	23	
M39	9	鏃	100	11	4	23	

第2主体

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M40	84	鏃	183	9	8	19	
M41	65	鏃	179	4	4	15	
M42	63	鏃	17	10	5	16	
M43	56	鏃	16	6	4	13	
M44	61	鏃	178	7	5	15	
M45	77	鏃	209	5	4	14	
M46	53	鏃	174	5	4	12	
M47	51	鏃	153	8	10	11	
M48	82	鏃	106	7	6	8	
M49	81	鏃	82	8	9	5	
M50	66	鏃	53	4	4	3	
M51	71	鏃	148	6	5	12	
M52	62	鏃	14	6	6	14	
M53	79	鏃	146	4	3	12	
M54	78	鏃	125	5	5	8	
M55	75	鏃	86	6	5	8	
M56	83	刀子	88	16	7	9	

掲載番号	整理番号	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	備考
M57	80	刀子	92	13	4	7	
M58	5	刀子	98	10	6	8	
M59	49	刀子	51	9	3	4	
M60	95	斧	98	28	17	60	
M61	57	斧	94	30	8	49	
M62	72	鋤先	39	94	5	54	
M63	74	鏃	105	19	2	17	先端欠損
M64	69	鏃	58	17	3	6	M65と同?
M65	70	鏃	38	17	3	5	
M66	68	鏃	91	12	3	22	
M67	94	鏃		14	6	13	
M68	73	鏃	80	14	4	19	
M69	50	鏃		13	7	21	
M70	1	?	52	10	4	10	
M71	4	釘	28	4	3	1	
M72	2	釘	11	4	2	0	

石製玉類

中山6号墳第2主体

掲載番号	実測番号	器種	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	備考
1	1	管玉	22.50	6.67	2.01	1.89	碧玉	濃い緑	
2	2	管玉	19.10	6.68	1.09	1.74	碧玉	濃い緑	
3	3	管玉	13.00	6.02	1.08	0.91	碧玉	濃い緑	
4	4	管玉	12.40	5.03	1.07	0.65	碧玉	濃い緑	
5	玉青1	白玉	4.25	5.10	1.02	0.19	蛇紋岩	乳白・灰混	
6	玉青3	白玉	2.05	5.06	1.09	0.11	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
7	玉青7	白玉	2.85	5.05	1.45	0.11	蛇紋岩	青黒・緑灰混	稜線あり
8	玉青4	白玉	2.95	5.04	2.00	0.12	蛇紋岩	青黒・緑灰混	稜線あり
9	玉青2	白玉	4.00	5.02	1.09	0.14	蛇紋岩	暗青灰	
10	玉青6	白玉	2.08	4.85	1.45	0.11	滑石	灰	
11	白1	白玉	6.05	4.80	2.00	0.23	蛇紋岩	暗緑灰	稜線あり
12	玉青5	白玉	2.55	4.09	1.04	0.12	滑石	乳白	

掲載番号	実測番号	器種	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	材質	色調	備考
13	白2	白玉	6.10	4.00	2.00	0.18	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
14	白7	白玉	5.10	3.85	1.85	0.15	蛇紋岩	暗青灰	
15	白3	白玉	6.00	3.80	2.05	0.19	蛇紋岩	緑灰明暗混	稜線あり
16	白4	白玉	5.35	3.80	1.65	0.16	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
17	白10	白玉	5.50	3.60	1.40	0.15	蛇紋岩	灰	
18	白6	白玉	5.80	3.50	2.15	0.15	蛇紋岩	緑灰・青黒混	稜線あり
19	白12	白玉	5.45	3.30	2.05	0.13	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
20	白11	白玉	5.10	3.15	2.05	0.13	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
21	白8	白玉	5.70	3.00	1.80	0.14	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり
22	白5	白玉	5.45	2.90	2.10	0.12	蛇紋岩	青黒	稜線あり
23	白9	白玉	5.40	2.55	1.40	0.10	蛇紋岩	暗青灰	稜線あり

ガラス玉（丸玉青）一覧

中山6号墳第2主体

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	56	8.5	10.7	2.8	1.31	ひび割れ
2	55	8.15	10.7	1.2	1.09	
3	70	7.3	10.5	1.75	1.05	
4	60	7.15	10.4	1.85	0.95	
5	146	6.15	10.4	1.85	0.85	
6	95	8.05	10.3	1.75	1.02	
7	61	9	10.3	3.25	1.14	
8	51	8.7	10	1.8	1.19	ひび割れ
9	75	8.5	10	1.35	1.08	
10	124	7.85	10	2.2	0.97	
11	129	7.8	10	1.5	0.99	
12	99	7.3	10	2.45	0.85	
13	139	7	10	1.5	0.85	
14	62	6.4	10	1.75	0.87	
15	94	6.35	10	1.4	0.8	
16	125	5.75	10	2.1	0.68	
17	89	8.05	9.9	1.85	1.04	
18	68	7.35	9.9	1.75	1	
19	87	6.65	9.9	1.5	0.82	
20	67	8.45	9.8	1.9	1.06	
21	63	6.35	9.8	1.9	0.84	
22	90	6.65	9.7	1.65	0.9	
23	218	8.05	9.65	2.45	1	ひび割れ
24	白14	7.35	9.65	2.2	0.77	1/4欠損
25	138	7.25	9.65	1.45	0.94	
26	98	6.85	9.65	1.55	0.86	
27	220	6.15	9.65	1.5	0.7	1/3欠損
28	74	5.7	9.65	1.9	0.78	
29	71	8.4	9.6	1.4	1.1	
30	142	6.8	9.6	2.2	0.8	
31	121	6.55	9.6	1.75	0.81	
32	111	6.85	9.45	1.8	0.86	
33	73	6.3	9.4	1.7	0.75	
34	117	7	9.35	1.65	0.85	
35	85	6.35	9.35	2	0.78	
36	181	6.1	9.35	2.25	0.65	ひび割れ
37	78	7.05	9.3	2.3	0.78	ひび割れ
38	69	6.55	9.3	1.35	0.78	
39	132	5.3	9.3	2	0.59	
40	64	6.3	9.25	1.6	0.75	
41	92	6.2	9.25	1.3	0.77	
42	147	6.1	9.25	1.85	0.75	
43	112	7	9.2	1.3	0.75	
44	145	6.7	9.15	2	0.79	
45	77	5.5	9.15	1.8	0.68	
46	126	5.2	9.15	2.05	0.57	ひび割れ
47	246	5.7	9.1	1.9	0.56	ひび割れ
48	164	5.5	9.1	1.85	0.63	
49	110	7.55	9.05	1.55	0.93	
50	189	5.25	9.05	1.55	0.41	
51	7	7.5	9	1.5	0.82	
52	150	7.4	9	1.85	0.91	
53	58	7.3	9	1.65	0.91	
54	10	7.15	9	1.55	0.8	
55	107	7.05	9	1.75	0.78	
56	3	7	9	1.35	0.79	
57	242	7	9	1.65	0.63	1/3欠損
58	247	6.7	9	1.45	0.77	ひび割れ
59	80	6.45	9	1.4	0.76	
60	166	6.2	9	2.2	0.72	ひび割れ
61	84	6.15	9	1.85	0.7	

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
62	53	5	9	1.8	0.57	
63	159	4.55	9	2.45	0.42	
64	109	7.05	8.95	1.8	0.75	
65	136	6	8.95	1.35	0.73	
66	148	7.5	8.9	1.75	0.83	
67	白16	6	8.9		0.29	3/5欠損
68	169	5.75	8.9	1.5	0.62	
69	176	4.9	8.9	1.45	0.47	
70	5	7.85	8.85	2.6	0.76	ひび割れ
71	93	7.45	8.85	1.35	0.84	
72	144	6.75	8.85	2	0.72	ひび割れ
73	59	6.7	8.85	1.5	0.69	
74	36	5.75	8.85	2.4	0.45	
75	76	5.6	8.85	1.4	0.6	
76	178	5.05	8.85	1.55	0.46	
77	134	7.05	8.8	1.4	0.77	
78	82	7.05	8.8	1.4	0.68	
79	11	6.95	8.8	1.85	0.72	
80	241	6.85	8.8	1.75	0.72	
81	105	6.45	8.8	1.65	0.72	
82	88	5.85	8.8	1.35	0.65	
83	137	5.55	8.8	1.75	0.57	
84	65	5.35	8.8	1.7	0.59	
85	119	6.85	8.75	1.4	0.7	
86	108	6.45	8.75	1.5	0.68	
87	149	6.05	8.75	1.35	0.65	
88	81	6	8.75	1.6	0.65	
89	116	7.7	8.7	2.1	0.83	
90	131	5.25	8.7	1.9	0.54	
91	1	7.75	8.65	1.35	0.87	ひび割れ
92	97	7.25	8.65	1.7	0.75	
93	127	6.8	8.65	1.85	0.72	
94	122	6.75	8.65	1.6	0.75	
95	155	6.1	8.65	1.5	0.65	
96	115	6.1	8.65	1.75	0.62	
97	104	5.6	8.65	1.45	0.55	
98	135	7.1	8.6	2.15	0.78	
99	83	7.5	8.55	1.35	0.76	
100	180	6.85	8.55	1.55	0.71	
101	113	6.7	8.55	1.55	0.7	
102	140	5.85	8.55	1.4	0.54	
103	221	7.05	8.5	1.35	0.75	
104	16	6.35	8.5	1.2	0.64	
105	234	6.3	8.5	1.7	0.64	
106	91	6	8.5	1.5	0.54	
107	22	7.05	8.45	1.5	0.62	
108	52	7	8.45	1.7	0.74	
109	54	6.95	8.45	1.7	0.7	
110	79	6.2	8.45	1.8	0.66	
111	190	5.2	8.45	1.9	0.5	
112	120	6.95	8.4	1.45	0.7	
113	15	6	8.4	2.35	0.6	破片
114	244		8.4		0.44	
115	130	6.65	8.35	2.65	0.63	
116	128	5.15	8.35	1.3	0.47	
117	101	7.75	8.3	1.4	0.75	
118	114	6	8.3	2	0.58	
119	245	5.85	8.3	1.25	0.47	
120	39	5.75	8.3	1.9	0.52	
121	224	5.45	8.3	1.3	0.54	
122	175	5.15	8.3	2.25	0.49	

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
123	57	5	8.3	1.4	0.54	
124	243	6.85	8.25	1.75	0.62	ひび割れ
125	240	6.7	8.25	1.45	0.61	一部欠損
126	102	5.4	8.25	1.6	0.52	
127	222	6	8.2	1.7	0.61	
128	123	6	8.2	1.35	0.56	
129	106	5.95	8.2	1.25	0.55	
130	96	5.9	8.2	2.3	0.49	
131	177	5.75	8.2	1.25	0.49	
132	200	4.5	8.2	1.8	0.39	
133	28	7.65	8.15	1.85	0.75	
134	72	7.2	8.15	1.5	0.68	
135	103	5.75	8.15	2.1	0.49	
136	86	5.2	8.15	2	0.47	
137	133	6.1	8.1	1.35	0.55	
138	45	6	8.1	1.3	0.53	
139	26	7	8.05	1.5	0.56	
140	182	5.85	8.05	1.05	0.48	
141	173	5.3	8.05	1.5	0.48	
142	233	6.4	8	2	0.51	一部欠損
143	162	6	8	1	0.52	
144	29	5.95	8	1.7	0.52	
145	167	5.45	8	1.7	0.49	
146	170	5.4	8	1.65	0.49	
147	183	5.1	8	1.3	0.41	
148	194	5.05	8	2	0.41	
149	152	5	8	1.4	0.45	
150	184	5	8	1.5	0.45	
151	248	4.8	8	1.85	0.43	一部欠損
152	118	7	7.9	1.35	0.6	
153	17	6.5	7.9	1.25	0.61	
154	227	5.95	7.9	1.55	0.52	
155	20	5.75	7.9	1.5	0.5	
156	161	5.6	7.9	1.45	0.49	
157	156	5.35	7.9	1.75	0.45	
158	165	5	7.9	1.15	0.44	
159	49	6.75	7.85	1.7	0.52	
160	100	6.1	7.85	1.85	0.52	
161	21	5.9	7.85	1.5	0.49	
162	197	5.1	7.85	2.1	0.43	
163	196	4.7	7.85	1.8	0.41	
164	38	6.55	7.8	1.1	0.58	
165	42	6.2	7.8	1.1	0.49	
166	31	6.1	7.8	3	0.52	
167	186	5.45	7.8	2.5	0.41	
168	198	4.7	7.8	1.25	0.37	
169	27	6.65	7.75	1.4	0.5	
170	35	6	7.75	1.5	0.52	
171	66	5.85	7.75	1.3	0.5	
172	19	5.8	7.75	1.1	0.47	
173	151	5	7.75	1.75	0.4	
174	195	4.75	7.75	1.65	0.4	
175	41	7.25	7.7	1.3	0.61	
176	48	7.1	7.7	1.3	0.6	
177	23	6.25	7.7	1.35	0.54	
178	37	6.1	7.7	1.65	0.54	
179	18	6	7.7	1.55	0.51	
180	231	5.9	7.7	2.35	0.42	
181	217	5.8	7.7	1.6	0.5	
182	46	6.3	7.65	1.45	0.51	
183	143	6.3	7.65	1.5	0.51	

ガラス玉 (丸玉青) 一覧

中山6号墳第2主体

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
184	13	5.9	7.65	1.55	0.47	
185	43	6.45	7.6	1.55	0.52	一部欠損
186	34	5.65	7.6	1.25	0.49	
187	171	4.75	7.6	1.45	0.39	
188	179	4.55	7.6	1.5	0.37	
189	228	5.75	7.55	1.45	0.47	
190	192	5.15	7.55	1.1	0.41	
191	191	5.1	7.55	1.55	0.45	ひび割れ
192	185	4.15	7.55	1.5	0.33	
193	44	6.4	7.5	1.35	0.5	
194	199	5	7.5	1.75	0.4	
195	12	7.3	7.45	1.25	0.66	
196	40	6.75	7.45	1.1	0.55	
197	219	5.9	7.45	2.65	0.41	
198	158	5.4	7.45	1.2	0.41	
199	168	4.15	7.45	1.6	0.35	
200	153	3.85	7.45	2.15	0.3	
201	2	8.35	7.4	1.5	0.74	
202	157	6	7.4	1.75	0.46	
203	250	5.6	7.4	2.2	0.31	
204	30	5.35	7.4	1.3	0.45	
205	193	4.75	7.4	1.9	0.35	
206	14	7.1	7.35	1.3	0.6	
207	24	6.2	7.35	1.25	0.44	

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
208	232	5.45	7.35	1.5	0.4	
209	174	5	7.35	1.65	0.39	
210	235	4.85	7.35	2.45	0.33	
211	188	4.25	7.35	1.5	0.34	
212	187	4.25	7.35	1.7	0.29	
213	206	5	7.3	1.65	0.42	
214	25	6.7	7.25	1.75	0.48	
215	6	5.5	7.25	2	0.42	
216	47	6.65	7.2	1.2	0.57	
217	201	6	7.2	2.35	0.37	
218	50	5.9	7.2	1	0.42	
219	163	4.85	7.2	1.7	0.34	
220	154	5	7.15	1	0.35	
221	212	5.25	7.1	2.65	0.35	
222	237	5.7	7.05	1.4	0.4	
223	226	5.5	7.05	1.55	0.38	
224	223	5.05	7.05	1.2	0.33	
225	8	9.85	7	1.15	0.5	
226	141	5.8	7	1.9	0.53	
227	213	5.2	7	1.5	0.34	
228	239	4.9	7	1.7	0.31	
229	216	4.75	7	1.5	0.34	
230	205	4.5	7	2.15	0.29	
231	215	4.05	7	2	0.26	

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
232	203	4	7	1.1	0.28	
233	236	3.85	6.95	1.6	0.26	
234	32	6.3	6.9	1.65	0.36	
235	172	4.85	6.9	1.95	0.36	
236	230	4.85	6.9	2.55	0.32	
237	9		6.9		0.52	
238	4	7.9	6.85	1.4	0.65	
239	249	6	6.85	1.95	0.42	ひび割れ
240	214	4.45	6.85	1.85	0.21	
241	229	5.65	6.8	1.35	0.38	
242	211	4.65	6.8	1.95	0.3	
243	238	4.15	6.8	1	0.27	
244	160	5	6.7	2	0.3	
245	202	4.9	6.7	1.05	0.34	
246	208	4.15	6.6	1.6	0.22	
247	210	5.1	6.4	1.6	0.28	
248	白15	4.2	6.3	2	0.12	1/2欠損
249	204	5.05	6.1	23.5	0.24	
250	33	8	6	1.15	0.53	
251	209	6	6	1.9	0.29	
252	207	4.25	6	1.55	0.21	
253	225				0.61	破片

ガラス玉 (小玉青) 一覧

中山6号墳第1主体

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	1	50.7	6.04	1.06	0.32	

第2主体

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	14	2.07	6	1.75	0.12	
2	き027	3.55	5.9	1.8	0.11	
3	う069	3.8	5.8	1.4	0.18	
4	く065	2.75	5.8	1	0.1	
5	30	3	5.65	1.9	0.1	
6	い005	3.6	5.6	1.4	0.15	
7	う095	4	5.5	1	0.17	
8	い011	3.9	5.5	1.2	0.17	
9	い022	3	5.5	1.4	0.11	
10	い001	4	5.45	1.2	0.17	
11	え037	3.5	5.45	1.05	0.14	
12	お057	3.1	5.45	2	0.1	
13	58	2.9	5.45	2	0.11	
14	47	3.9	5.4	1.4	0.15	
15	い002	3.35	5.4	1.3	0.14	
16	く014	2.15	5.4	1.6	0.1	
17	う059	4.7	5.3	1.6	0.15	
18	あ018	3.9	5.3	1.2	0.11	
19	か026	3.7	5.3	0.8	0.13	
20	9	5.01	5.25	1.05	0.21	一部欠損
21	く018	3.85	5.25	1	0.13	ひび割れ
22	き012	3	5.25	1.5	0.11	
23	け001	4.15	5.2	1	0.16	

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
24	く077	4	5.2	0.7	0.15	
25	22	3.75	5.2	1.3	0.13	
26	い019	3.7	5.2	1.2	0.12	
27	う042	3.4	5.2	1.8	0.12	
28	お038	3.4	5.2	1.2	0.11	
29	い008	3.3	5.2	1.35	0.13	
30	き028	3.3	5.15	1.7	0.1	
31	あ006	2.9	5.15	1.4	0.09	
32	あ013	4.2	5.15	1.1	0.15	
33	99	3.7	5.15	1.6	0.13	
34	え040	3.45	5.15	1.25	0.12	
35	う035	3.3	5.1	1.5	0.11	
36	う075	2.75	5.1	1.9	0.09	
37	う013	4.6	5.1	1.2	0.17	
38	き011	4.2	5.1	1.65	0.13	
39	き015	3.8	5.1	1.1	0.13	
40	お014	3.7	5.1	1.4	0.12	
41	い009	3.65	5.1	1.6	0.11	
42	43	3.5	5.1	1.45	0.12	
43	34	3.4	5.1	1.1	0.07	
44	う058	3.2	5.1	1.35	0.12	
45	え046	3.2	5.1	1.35	0.11	
46	え024	3.1	5.1	1.25	0.13	

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
47	か052	2.95	5.1	1.85	0.11	
48	え012	2.85	5.1	1.35	0.11	
49	い014	4.4	5	1	0.16	
50	う083	4.3	5	1.25	0.18	
51	か008	4.15	5	0.9	0.15	
52	う063	4	5	1.3	0.15	
53	か001	3.95	5	1.1	0.13	
54	き019	3.9	5	1.2	0.13	
55	い013	3.85	5	1.85	0.13	
56	92	3.8	5	1	0.14	
57	あ067	3.8	5	1.5	0.12	
58	う080	3.7	5	1	0.12	
59	き018	3.7	5	1.45	0.09	
60	う003	3.6	5	1.4	0.11	
61	い027	3.5	5	1.2	0.11	
62	き014	3.45	5	1.5	0.09	
63	き022	3.4	5	1.2	0.12	
64	46	3.4	5	1.1	0.11	
65	あ003	3.3	5	1.3	0.11	
66	あ020	3.3	5	1.8	0.08	
67	あ002	3.2	5	1.3	0.1	
68	き021	3.15	5	1.25	0.11	
69	う032	3.1	5	1.6	0.09	

ガラス玉（小玉青）一覧

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
70	え017	3.05	5	1.25	0.1	
71	い004	3	5	1.3	0.11	
72	い025	2.95	5	1.4	0.08	
73	い006	2.9	5	1.2	0.09	
74	う007	2.8	5	1.25	0.11	
75	く042	2.8	5	1.1	0.1	
76	あ054	2.8	5	1.5	0.09	
77	あ009	2.7	5	1.4	0.07	
78	う039	2.65	5	1.5	0.09	
79	え072	2.45	5	1	0.09	
80	き036	2.1	5	1.7	0.05	
81	い003	4.1	4.95	0.9	0.16	
82	48	3.95	4.95	1.4	0.14	
83	か004	3.2	4.95	1.2	0.1	
84	え050	3.05	4.95	1.05	0.1	
85	あ093	3	4.95	1.6	0.1	
86	え036	2.85	4.95	1.2	0.09	
87	く023	4	4.9	0.8	0.16	
88	い015	3.75	4.9	1.3	0.12	
89	21	3.7	4.9	1.6	0.13	
90	う79	3.6	4.9	1.6	0.12	
91	き023	3.55	4.9	1.2	0.11	
92	い020	3.5	4.9	1.1	0.11	
93	き016	3.45	4.9	1.3	0.11	
94	か089	3.35	4.9	0.65	0.09	
95	え013	3.25	4.9	1.05	0.12	
96	53	3.2	4.9	1.3	0.11	
97	う077	3.2	4.9	1.1	0.09	
98	う005	3.1	4.9	1.3	0.1	
99	え001	3.1	4.9	1.3	0.1	
100	55	3.1	4.9	1.45	0.08	
101	う009	3	4.9	1.4	0.12	
102	31	3	4.9	1.55	0.08	
103	あ007	2.85	4.9	1.5	0.08	
104	89	2.4	4.9	1.8	0.07	
105	き008	3.5	4.85	1.6	0.11	
106	50	3.25	4.85	1.4	0.1	
107	い012	3.2	4.85	1.55	0.11	
108	け006	3.1	4.85	0.9	0.1	
109	え080	2.3	4.85	1	0.05	
110	い021	4.1	4.8	1.2	0.13	
111	か015	3.7	4.8	0.75	0.11	
112	う028	3.55	4.8	1.2	0.1	
113	き067	3.4	4.8	1.1	0.1	
114	え039	3.35	4.8	1.5	0.1	
115	か051	3.1	4.8		0.1	
116	え082	3.1	4.8	1	0.08	
117	い029	3	4.8	1.25	0.12	
118	17	3	4.8	1.1	0.11	
119	い026	3	4.8	1.1	0.11	
120	い017	3	4.8	1.3	0.09	
121	う068	3	4.8	1.4	0.09	
122	あ076	2.9	4.8	1.5	0.09	
123	お008	2.9	4.8	1	0.08	一部欠損
124	20	2.9	4.8	1.45	0.07	
125	37	2.9	4.8	1.8	0.05	
126	く072	2.6	4.8	1.2	0.1	
127	う001	2.6	4.8	1.4	0.07	
128	う021	2.35	4.8	1.55	0.09	
129	う020	4	4.75	1.5	0.13	
130	き020	3.25	4.75	1.1	0.09	
131	8	3.08	4.75	1.01	0.11	
132	51	2.9	4.75	1.4	0.09	
133	16	2.85	4.75	1.2	0.1	
134	き013	4.2	4.7	1.1	0.12	
135	56	4.2	4.7	1.6	0.1	
136	あ054	4	4.7	1.4	0.1	
137	え038	3.65	4.7	0.9	0.12	
138	52	3.65	4.7	1.6	0.11	
139	い037	3.5	4.7	1	0.1	
140	い024	3.5	4.7	1.7	0.09	
141	え027	3.45	4.7	1.45	0.1	
142	う044	3.15	4.7	1.1	0.11	
143	い018	3.15	4.7	1.1	0.09	
144	え032	3.05	4.7	0.7	0.09	
145	く055	3	4.7	1	0.11	
146	い023	3	4.7	1.1	0.09	
147	か076	3	4.7	1	0.08	ひび割れ
148	う091	2.9	4.7	1.1	0.08	
149	か002	2.85	4.7	1.55	0.08	
150	う092	2.8	4.7	1.4	0.08	
151	く009	2.75	4.7	0.65	0.09	
152	け004	2.75	4.7	1.05	0.08	
153	74	2.7	4.7	1.5	0.08	
154	お009	2.6	4.7	1	0.07	一部欠損
155	36	3.25	4.65	1.2	0.05	
156	か003	3.05	4.65	1.45	0.08	
157	く095	2.9	4.65	1.7	0.09	
158	う053	2.85	4.65	0.9	0.08	
159	く094	2.8	4.65	1.4	0.11	
160	あ081	2.7	4.65	1.25	0.09	
161	く008	2.7	4.65	1.9	0.09	
162	あ099	2.7	4.65	1.5	0.06	
163	あ077	2.2	4.65	1.8	0.06	
164	う094	4.5	4.6	1.1	0.14	
165	あ034	4.1	4.6	1.1	0.11	
166	い033	4	4.6	1.3	0.12	
167	き017	3.8	4.6	1.1	0.11	
168	き083	3.7	4.6	1.3	0.1	
169	う056	3.4	4.6	1	0.1	
170	き029	3.1	4.6	1.5	0.08	
171	い059	3.1	4.6	1.4	0.07	
172	お100	2.95	4.6	1.6	0.08	
173	え023	2.9	4.6	1.2	0.08	
174	お012	2.9	4.6	1.05	0.08	一部欠損
175	い045	2.8	4.6	1.2	0.07	
176	う036	2.6	4.6	1.5	0.07	
177	か083	2.5	4.6	1.1	0.06	
178	あ041	2.5	4.6	1	0.05	
179	く069	2.4	4.6	1.1	0.09	ひび割れ
180	え065	2.2	4.6	1.2	0.05	ひび割れ
181	き064	2.1	4.6	1.2	0.05	
182	う086	3.8	4.55	1.1	0.11	
183	か038	3.55	4.55	1.1	0.1	
184	か037	3	4.55	1.05	0.09	
185	き076	3	4.55	1.15	0.09	
186	あ078	2.9	4.55	1.2	0.08	
187	あ070	2.9	4.55	1.35	0.07	
188	お091	2.85	4.55	1	0.05	
189	え058	2.8	4.55	1.1	0.08	
190	94	2.5	4.55	1.1	0.08	
191	く080	2.4	4.55	1.5	0.09	
192	く020	3.8	4.5	1.31	0.1	
193	え033	3.75	4.5	1	0.11	
194	く076	3.7	4.5	1.55	0.13	
195	い030	3.7	4.5	0.9	0.11	
196	え073	3.65	4.5	1.25	0.11	
197	い028	3.5	4.5	1	0.09	
198	う055	3.3	4.5	1.3	0.11	
199	い038	3.1	4.5	1	0.07	
200	え045	3.05	4.5	1.25	0.1	
201	く054	3	4.5	1.1	0.11	
202	い086	3	4.5	1.4	0.08	
203	い031	2.9	4.5	1.3	0.08	
204	44	2.85	4.5	0.9	0.08	
205	あ059	2.8	4.5	1.3	0.08	
206	49	2.75	4.5	1.1	0.08	
207	お065	2.7	4.5	1	0.07	
208	き010	2.7	4.5	0.9	0.07	
209	あ087	2.7	4.5	1.2	0.07	
210	23	2.7	4.5	1.3	0.06	
211	く007	2.65	4.5	1.45	0.06	
212	か005	2.6	4.5	1.5	0.08	
213	き007	2.6	4.5	1.25	0.07	
214	か022	2.6	4.5	0.5	0.05	一部欠損
215	き063	2.55	4.5	1.1	0.07	
216	か062	2.5	4.5	1.35	0.06	
217	く025	2.45	4.5	1	0.07	1/3欠損
218	お097	2.35	4.5	1.4	0.1	
219	え035	2.25	4.5	1.3	0.05	
220	か021	2.2	4.5	1	0.07	
221	き070	2.2	4.5	1.3	0.06	
222	あ014	2.2	4.5	1.35	0.06	
223	あ008	3.8	4.45	1.4	0.09	
224	く082	3.35	4.45	1.75	0.07	
225	あ066	3.3	4.45	1.1	0.11	
226	き030	3.2	4.45	1.1	0.08	
227	あ080	3.1	4.45	1.25	0.07	
228	い032	3.1	4.45	1.2	0.06	
229	き069	3	4.45	1.3	0.09	
230	え006	2.85	4.45	1	0.08	
231	え006	2.85	4.45	1.15	0.07	
232	え016	2.85	4.45	1	0.07	
233	お071	2.8	4.45		0.07	
234	え059	2.8	4.45	1.4	0.06	
235	く022	2.7	4.45	1.4	0.09	
236	え076	2.7	4.45	1.35	0.08	
237	27	2.65	4.45	1.5	0.05	
238	か032	2.6	4.45	1.1	0.06	
239	か058	2.45	4.45	1.15	0.06	
240	か067	2.35	4.45	1.35	0.07	一部欠損
241	え007	3.95	4.4	1.1	0.07	
242	い010	3.9	4.4	1.15	0.11	
243	い016	3.7	4.4	0.9	0.1	
244	い040	3.4	4.4	1	0.09	
245	く001	3.3	4.4	1.35	0.08	ひび割れ
246	く031	3.2	4.4	1	0.11	
247	く088	3.2	4.4	0.9	0.11	
248	か016	3.1	4.4	0.7	0.09	
249	か039	3.1	4.4	1	0.08	
250	き037	3.1	4.4	1.35	0.07	
251	き040	3.1	4.4	1.3	0.07	
252	い034	3	4.4	1.1	0.09	

ガラス玉(小玉青)一覧

掲載番号	実測番号	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
253	え044	3	4.4	0.7	0.08		314	あ083	3	4.3	1.2	0.08	一部欠損	375	く083	2.8	4.2	1	0.1	
254	お005	3	4.4	1	0.07		315	き033	3	4.3	1.15	0.06		376	う098	2.8	4.2	0.8	0.08	
255	38	2.9	4.4	1.1	0.05		316	か017	2.9	4.3	0.95	0.07	一部欠損	377	お063	2.8	4.2	1.2	0.06	
256	く071	2.8	4.4	1.1	0.09		317	か009	2.9	4.3	1	0.06		378	57	2.75	4.2	0.85	0.07	一部欠損
257	き065	2.8	4.4	1.35	0.07		318	59	2.85	4.3	1.15	0.06		379	く091	2.7	4.2	1.25	0.1	
258	い073	2.8	4.4	1	0.06		319	え078	2.8	4.3	1	0.08	ひび割れ	380	い041	2.7	4.2	1.3	0.07	
259	か047	2.75	4.4	0.7	0.07		320	う067	2.8	4.3	0.8	0.07		381	う033	2.7	4.2	1.2	0.07	
260	う002	2.7	4.4	1	0.07		321	あ072	2.8	4.3	1.2	0.06	一部欠損	382	か075	2.7	4.2	0.9	0.07	
261	お010	2.7	4.4	1	0.07		322	き098	2.8	4.3	1.1	0.06		383	き086	2.7	4.2	1	0.07	
262	お068	2.7	4.4	1.1	0.06		323	く003	2.8	4.3	1.1	0.06	一部欠損	384	き054	2.7	4.2	1.3	0.06	
263	き052	2.7	4.4	1.25	0.06		324	う024	2.7	4.3	1	0.07		385	お043	2.7	4.2	1	0.05	
264	き005	2.7	4.4	0.8	0.05		325	き006	2.7	4.3	1.15	0.07	一部欠損	386	う046	2.6	4.2	0.9	0.07	
265	き078	2.65	4.4	1	0.06	一部欠損	326	お004	2.7	4.3	1	0.06	一部欠損	387	か065	2.6	4.2	1.15	0.07	
266	い049	2.6	4.4	1.2	0.07		327	か087	2.7	4.3	0.8	0.06		388	19	2.6	4.2	1	0.05	ひび割れ
267	い051	2.6	4.4	1.2	0.05		328	き046	2.7	4.3	1.25	0.05		389	い069	2.6	4.2	1.1	0.05	
268	く033	2.55	4.4	1	0.09		329	あ015	2.6	4.3	1.2	0.06		390	き034	2.6	4.2	0.75	0.05	
269	あ039	2.5	4.4	1.35	0.04		330	え015	2.55	4.3	1.4	0.06		391	88	2.5	4.2	1.15	0.07	
270	い054	2.5	4.4	1.3	0.04		331	か070	2.55	4.3	1.8	0.06		392	え008	2.5	4.2	0.8	0.06	
271	あ044	2.45	4.4	1.5	0.07		332	い080	2.5	4.3	1.3	0.04		393	き025	2.5	4.2	1	0.05	
272	き032	2.45	4.4	1.25	0.05		333	か054	2.4	4.3	1	0.05		394	く005	2.45	4.2	1	0.08	一部欠損
273	く026	2.4	4.4	1.2	0.08		334	お011	2.3	4.3	1.15	0.06	一部欠損	395	97	2.45	4.2	1.5	0.07	
274	あ082	2.4	4.4	1	0.06		335	き066	2.3	4.3	1.35	0.06		396	79	2.45	4.2	1	0.06	
275	う093	2.4	4.4	0.7	0.06		336	う004	2.3	4.3	1.2	0.05		397	あ036	2.4	4.2	0.8	0.04	
276	き002	2.35	4.4	1.2	0.05	一部欠損	337	お055	2.3	4.3	1.3	0.05		398	い071	2.4	4.2	1	0.04	
277	え061	2.15	4.4	1.55	0.04	ひび割れ	338	え085	2.2	4.3	1.05	0.05		399	か079	2.35	4.2	0.75	0.06	
278	か073	2.05	4.4	1.2	0.05	ひび割れ	339	お062	2.2	4.3	1.5	0.05		400	く100	2.3	4.2	1.2	0.09	
279	お085	2	4.4	1.4	0.05		340	い100		4.3	0.9	0.05	1/3欠損	401	う026	2.3	4.2	1.4	0.06	
280	う065	3	4.35	1.6	0.07		341	か044	4.25	4.3	1.2	0.1		402	き042	2.1	4.2	1.3	0.02	
281	か086	3	4.35	1	0.07		342	か099	4.2	4.3	1	0.09		403	く016	1.7	4.2	1.65	0.05	
282	き003	2.75	4.35	0.75	0.07	一部欠損	343	64	2.95	4.3	1.15	0.07		404	お001	1.1	4.2	1.1	0.08	一部欠損
283	き009	2.75	4.35	1.1	0.07		344	か085	2.8	4.3	1	0.06		405	え021	4.65	4.2	0.65	0.12	
284	か050	2.7	4.35	1.1	0.06		345	え056	2.7	4.25	0.75	0.07		406	か100	4.15	4.2	0.85	0.1	
285	63	2.7	4.35	1.1	0.05		346	か020	2.7	4.25	0.8	0.07	ひび割れ	407	く046	3.85	4.2	1.3	0.08	
286	う090	2.6	4.35	1.2	0.07		347	か035	2.7	4.25	1.1	0.05		408	う047	3.7	4.2	1.3	0.07	
287	69	2.55	4.35	1.25	0.04		348	あ057	2.6	4.25	1.5	0.07		409	か036	3.45	4.15	0.8	0.07	
288	え093	2.5	4.35	1.05	0.06		349	え047	2.45	4.25	1	0.05		410	か088	3.3	4.15	1.05	0.08	
289	え002	2.45	4.35	1.1	0.05		350	え034	2.35	4.25	0.85	0.06	ひび割れ	411	う051	3.25	4.15	1.15	0.09	
290	え026	2.35	4.35	1.55	0.06		351	か098	4	4.25	0.6	0.08	一部欠損	412	か019	3.2	4.15	1.3	0.08	
291	く099	2.3	4.35	1.1	0.09		352	い007	3.9	4.25	1.2	0.1		413	き048	3.2	4.15	1	0.06	
292	か014	2.25	4.35	1.2	0.06		353	き088	3.75	4.25	1.2	0.1		414	あ062	3	4.15	1	0.06	一部欠損
293	10	2.2	4.35	1.4	0.07		354	う018	3.55	4.25	1.4	0.09		415	え053	2.95	4.15	1.1	0.08	
294	か018	2.2	4.35	1.1	0.06	ひび割れ	355	え028	3.4	4.2	1	0.09		416	き073	2.95	4.15	1.1	0.07	
295	あ096	3.9	4.3	1.3	0.11		356	う015	3.4	4.2	1.2	0.08		417	か084	2.9	4.15	0.5	0.07	
296	い036	3.9	4.3	1	0.11		357	お053	3.4	4.2	1.1	0.07		418	え025	2.85	4.15	1	0.07	
297	う031	3.9	4.3	1.25	0.07		358	う060	3.3	4.2	0.9	0.08		419	61	2.75	4.15	1.4	0.05	
298	66	3.75	4.3	1.1	0.08		359	き090	3.2	4.2	1.25	0.08		420	か081	2.65	4.15	1.45	0.06	
299	う037	3.7	4.3	1.4	0.09		360	く037	3.15	4.2	1.25	0.1		421	く057	2.6	4.15	0.7	0.09	
300	83	3.65	4.3	1.4	0.1		361	98	3.1	4.2	1.3	0.09		422	え009	2.6	4.15	0.85	0.07	
301	え063	3.6	4.3	1	0.08		362	あ011	3.1	4.2	1	0.08		423	あ084	2.5	4.15	1.1	0.06	
302	う040	3.55	4.3	0.9	0.09		363	い096	3.1	4.2	1	0.06	一部欠損	424	か045	2.5	4.15	0.9	0.06	
303	き001	3.45	4.3	0.9	0.09	ひび割れ	364	い082	3.1	4.2	0.6	0.05		425	え048	2.4	4.15	0.95	0.05	1/4欠損
304	う038	3.4	4.3	1.1	0.09		365	く084	3	4.2	1.2	0.1		426	お080	2.4	4.15	1	0.03	
305	く068	3.3	4.3	1.1	0.11		366	い043	3	4.2	1	0.07	一部欠損	427	え079	2.35	4.15	0.9	0.06	
306	か041	3.3	4.3	0.9	0.08	一部欠損	367	え081	3	4.2	0.95	0.07		428	62	2.3	4.15	1.3	0.06	
307	い046	3.3	4.3	1.5	0.07		368	い060	3	4.2	1.4	0.05		429	26	2.3	4.15	1.12	0.04	
308	く012	3.25	4.3	1.3	0.1		369	あ058	2.95	4.2	1	0.07		430	か030	2.2	4.15	1	0.05	
309	い070	3.2	4.3	1.2	0.06		370	100	2.9	4.2	1	0.08		431	え075	2.1	4.15	1.05	0.06	
310	か040	3.15	4.3	1.1	0.07		371	あ022	2.9	4.2	0.8	0.06		432	く043	1.9	4.15	1.5	0.07	
311	い035	3.1	4.3	1	0.09		372	う008	2.9	4.2	1.4	0.06		433	う073	4.1	4.1	1.3	0.05	
312	え074	3.05	4.3	1.1	0.08		373	か092	2.9	4.2	1	0.06		434	あ029	4	4.1	1.2	0.08	
313	お032	3	4.3	0.8	0.09		374	う088	2.85	4.2	0.9	0.07	一部欠損	435	う048	3.7	4.1	1	0.08	

ガラス玉 (小玉青) 一覧

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
436	あ025	3.55	4.1	1.2	0.06		497	お052	3.1	4	1.2	0.08		558	お002	2.4	4	1.1	0.05	一部欠損
437	あ026	3.55	4.1	1	0.04		498	え064	3.1	4	0.95	0.06		559	い052	2.4	4	1.3	0.05	
438	77	3.5	4.1	1.25	0.08		499	い072	3.1	4	1.3	0.05		560	う017	2.4	4	1.5	0.05	
439	か055	3.5	4.1	0.85	0.08		500	く017	3	4	0.9	0.08		561	う082	2.4	4	1	0.05	
440	か048	3.3	4.1	0.8	0.08	一部欠損	501	く086	3	4	1	0.08	ひび割れ	562	え003	2.4	4	0.8	0.05	
441	い047	3.3	4.1	1.1	0.07		502	き35	3	4	1.45	0.06		563	お030	2.4	4	1.2	0.05	
442	あ037	3.25	4.1	0.8	0.07		503	い074	3	4	1	0.06		564	あ070	2.4	4	1	0.04	
443	え041	3.2	4.1	1.65	0.07		504	お039	3	4	1.2	0.06		565	い065	2.4	4	1	0.04	
444	く002	3.15	4.1	0.8	0.07	一部欠損	505	お044	3	4	1.2	0.05		566	か056	2.4	4	1	0.04	1/3欠損
445	う029	3	4.1	0.9	0.07	一部欠損	506	き039	3	4	0.9	0.05		567	き024	2.4	4	1	0.05	
446	29	2.95	4.1	1.8	0.05		507	75	2.95	4	1	0.07		568	あ093	2.35	4	1	0.05	
447	あ035	2.9	4.1	1.1	0.05		508	う014	2.95	4	1.25	0.07		569	か007	2.35	4	0.9	0.03	
448	お037	2.9	4.1	0.8	0.05		509	い039	2.9	4	1.2	0.07		570	28	2.35	4	1.1	0.06	
449	お083	2.85	4.1	1.5	0.04		510	う010	2.9	4	1.1	0.07		571	お020	2.3	4	1.4	0.05	
450	お021	2.8	4.1	1.2	0.07		511	う045	2.9	4	1.1	0.07		572	う074	2.3	4	1	0.05	
451	54	2.8	4.1	1	0.06		512	あ010	2.9	4	1.5	0.06		573	え022	2.3	4	0.8	0.05	
452	あ031	2.8	4.1	1.5	0.05		513	お067	2.9	4	0.9	0.06		574	お096	2.3	4	0.9	0.05	
453	き057	2.7	4.1	1	0.07		514	き091	2.9	4	1	0.06		575	き051	2.3	4	1.1	0.04	
454	あ038	2.7	4.1	1	0.04		515	い081	2.9	4	1	0.04		576	32	2.3	4	1.15	0.08	
455	く032	2.6	4.1	1.1	0.09		516	く058	2.85	4	1.1	0.09		577	く075	2.25	4	1.15	0.05	
456	く087	2.6	4.1	1.25	0.09		517	く039	2.85	4	1	0.08		578	お098	2.25	4	1.1	0.05	
457	う011	2.6	4.1	1.1	0.07		518	く097	2.8	4	1	0.09		579	き055	2.25	4	1	0.03	
458	か024	2.6	4.1	0.9	0.06		519	き081	2.8	4	0.9	0.07	一部欠損	580	あ028	2.25	4	1.3	0.03	
459	き060	2.6	4.1	1.15	0.06		520	い042	2.8	4	1	0.06	一部欠損	581	あ049	2.25	4	0.8	0.07	一部欠損
460	く040	2.55	4.1	1.1	0.08		521	き031	2.8	4	1	0.06		582	く047	2.2	4	1	0.07	
461	あ088	2.45	4.1	1	0.06		522	お033	2.8	4	1.1	0.05		583	く053	2.2	4	1.1	0.03	
462	く049	2.4	4.1	0.9	0.08		523	き047	2.75	4	1.15	0.05		584	い064	2.2	4	1	0.03	
463	う034	2.4	4.1	1	0.05		524	え031	2.7	4	0.8	0.07		585	き044	2.2	4	1.35	0.06	
464	く036	2.35	4.1	1.25	0.08		525	あ064	2.7	4	1.3	0.06		586	う099	2.1	4	1	0.06	
465	あ066	2.35	4.1	1.1	0.05	ひび割れ	526	い050	2.7	4	1.2	0.06		587	き071	2.1	4	1	0.05	ひび割れ
466	あ074	2.35	4.1	1.1	0.04	一部欠損	527	お089	2.7	4	1.1	0.06		588	う064	2.1	4	1.6	0.04	
467	え055	2.3	4.1	1.35	0.05		528	い005	2.7	4	1	0.06		589	お093	2.1	4	1	0.03	
468	く024	2.25	4.1	1.3	0.07		529	65	2.7	4	0.9	0.05	一部欠損	590	い083	2.1	4	1.2	0.03	
469	か010	2.15	4.1	0.85	0.05		530	お059	2.7	4	1	0.05		591	き038	2.1	4	1.45	0.07	
470	き050	2.1	4.1	1.5	0.02	一部欠損	531	あ042	2.7	4	0.7	0.04		592	12	2.07	4	1.15	0.05	
471	い077	2	4.1	1.5	0.03		532	き043	2.7	4	1	0.04		593	う041	2	4	1.1	0.04	
472	か057	1.95	4.1	0.85	0.03		533	く041	2.65	4	1.1	0.09		594	お056	2	4	1	0.04	
473	い066	1.85	4.1	1.1	0.02		534	く044	2.65	4	1.15	0.08		595	き056	2	4	1.35	0.05	
474	あ013	1.14	4.1	1.4	0.08		535	き062	2.65	4	0.9	0.06		596	あ074	1.95	4	1.3	0.06	
475	11	2.45	4.08	1.35	0.08		536	き049	2.65	4	1	0.03		597	お045	1.9	4	1.35	0.03	
476	か027	3.3	4.05	0.9	0.08		537	く085	2.6	4	0.9	0.09		598	い085	1.6	3.95	1.3	0.05	
477	え043	2.7	4.05	1.3	0.07		538	く004	2.6	4	0.75	0.07	一部欠損	599	か042	2.9	3.95	1	0.05	
478	か069	2.7	4.05	0.85	0.06		539	あ089	2.6	4	1.6	0.06		600	え051	2.5	3.95	1.15	0.05	
479	か049	2.3	4.05	1	0.04		540	い044	2.6	4	1	0.06		601	え098	2.35	3.95	0.9	0.04	
480	え029	2.25	4.05	1.35	0.06		541	あ001	2.6	4	0.8	0.05		602	か093	2.15	3.9	0.8	0.14	
481	え020	2	4.05	1.25	0.05		542	い062	2.6	4	1	0.05		603	く051	4.65	3.9	1	0.1	
482	13	4.04	4.01	1.01	0.11		543	お047	2.6	4	1	0.05		604	あ047	3.8	3.9	1.2	0.07	
483	え004	4	4	1.1	0.06		544	い067	2.6	4	1	0.04		605	う030	3.4	3.9	0.8	0.07	
484	あ095	3.9	4	1	0.09		545	く073	2.55	4	0.9	0.09		606	う019	3.3	3.9	1.3	0.06	
485	あ051	3.9	4	0.8	0.07		546	く092	2.55	4	1.1	0.05		607	き089	3.3	3.9	1.35	0.07	
486	あ100	3.8	4	1.2	0.08		547	え077	2.55	4	1.1	0.05		608	き085	3.15	3.9	0.8	0.06	
487	え054	3.8	4	0.8	0.06		548	き077	2.55	4	1	0.04		609	え030	3.05	3.9	1	0.09	
488	く038	3.75	4	0.8	0.11		549	あ024	2.55	4	1	0.04		610	く063	3	3.9	0.8	0.07	
489	う050	3.7	4	1.1	0.09		550	い063	2.55	4	1.2	0.06		611	あ079	3	3.9	0.9	0.07	
490	24	3.5	4	1	0.07		551	あ075	2.5	4	1.1	0.06		612	あ085	3	3.9	1	0.04	
491	あ091	3.3	4	1.5	0.07		552	お087	2.5	4	1.1	0.05		613	う089	3	3.9	1	0.07	
492	お034	3.3	4	0.7	0.06		553	か094	2.5	4	1	0.03	ひび割れ	614	あ041	3	3.9	0.8	0.08	
493	き092	3.25	4	1.2	0.07		554	い084	2.5	4	0.8	0.03		615	う012	2.95	3.9	1	0.08	
494	う066	3.2	4	1.4	0.07		555	い097	2.5	4	1	0.05	1/2欠損	616	う052	2.9	3.9	1	0.06	
495	く066	3.1	4	1	0.1		556	お036	2.45	4	1	0.08		617	く027	2.9	3.9	0.9	0.06	
496	95	3.1	4	1	0.08		557	く060	2.4	4	1.2	0.06		618	あ086	2.9	3.9	1.25	0.05	

ガラス玉 (小玉青) 一覧

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
619	お084	2.9	3.9	0.9	0.04		680	け003	2	3.85	1.1	0.05		741	え055	2.35	3.75	0.95	0.06	
620	い057	2.9	3.9	1.2	0.07		681	く006	4	3.8	0.8	0.1	ひび割れ	742	あ	2.35	3.75	1.1	0.05	
621	お092	2.9	3.9	1.2	0.07		682	え092	3.9	3.8	1.1	0.07		743	え068	2.1	3.75	0.75	0.04	
622	80	2.85	3.9	1.1	0.05		683	い056	3.2	3.8	1	0.06		744	あ053	3.3	3.75	1.4	0.07	
623	え042	2.85	3.9	0.9	0.07		684	か096	3.05	3.8	1.6	0.05		745	い068	3.1	3.7	0.9	0.05	
624	あ069	2.85	3.9	0.9	0.07		685	く030	3	3.8	0.7	0.08		746	あ052	2.85	3.7	1	0.06	
625	う081	2.8	3.9	0.9	0.06		686	い068	3	3.8	1	0.06		747	く011	2.65	3.7	0.9	0.11	
626	か023	2.8	3.9	1	0.06		687	か029	3	3.8	1.15	0.06		748	い075	2.6	3.7	0.8	0.03	
627	78	2.8	3.9	1.45	0.06		688	91	2.9	3.8	0.8	0.07		749	か060	2.55	3.7	0.8	0.05	
628	え069	2.7	3.9	1	0.06		689	う062	2.9	3.8	1.15	0.07		750	く093	2.45	3.7	0.7	0.07	
629	お031	2.7	3.9	1	0.05		690	う097	2.9	3.8	1	0.06		751	え084	2.35	3.7	1	0.05	
630	き058	2.7	3.9	0.8	0.05		691	お064	2.9	3.8	0.9	0.06		752	あ060	2.2	3.7	0.9	0.05	
631	あ061	2.7	3.9	0.8	0.04	一部欠損	692	い048	2.9	3.8	1.1	0.05		753	お015	2.2	3.7	1	0.05	
632	え052	2.7	3.9	0.7	0.03	1/3欠損	693	93	2.85	3.8	1	0.07		754	あ024	2.2	3.7	0.9	0.05	
633	あ023	2.7	3.9	1.3	0.06		694	く029	2.8	3.8	1	0.08		755	お028	2.2	3.7	1	0.04	
634	39	2.7	3.9	1	0.05		695	き004	2.8	3.8	1.1	0.06	一部欠損	756	か033	2.2	3.7	0.85	0.03	
635	か013	2.65	3.9	0.7	0.04		696	う076	2.7	3.8	0.7	0.05		757	あ030	2.2	3.7	1.3	0.02	
636	き096	2.65	3.9	1.2	0.06		697	お058	2.7	3.8	0.8	0.05		758	あ033	2.2	3.7	0.9	0.02	
637	お035	2.65	3.9	1.3	0.06		698	お090	2.65	3.8	0.9	0.05		759	え090	2.1	3.7	0.6	0.04	
638	あ048	2.6	3.9	0.9	0.06		699	う061	2.6	3.8	1	0.05		760	か046	2.1	3.7	0.95	0.04	一部欠損
639	か078	2.6	3.9	0.85	0.05		700	う084	2.6	3.8	1.1	0.05		761	お050	2.1	3.7	0.9	0.03	
640	き087	2.6	3.9	0.9	0.08		701	き045	2.6	3.8	0.9	0.03		762	あ004	2	3.7	1.2	0.03	
641	え010	2.6	3.9	1	0.07		702	96	2.55	3.8	1.2	0.07		763	き026	2	3.7	1	0.03	
642	く078	2.55	3.9	1	0.05		703	う025	2.5	3.8	0.9	0.06		764	き097	2	3.7	1.3	0.03	
643	90	2.55	3.9	1.4	0.05		704	い061	2.5	3.8	1.2	0.04		765	く021	1.75	3.7	1.2	0.06	
644	き074	2.55	3.9	1.85	0.04		705	か091	2.5	3.8	0.75	0.04		766	う016	3.6	3.7	1	0.07	
645	い053	2.5	3.9	1	0.08		706	い079	2.5	3.8	1.2	0.03		767	き035	3.2	3.7	1.2	0.05	
646	お081	2.5	3.9	1	0.05		707	か034	2.45	3.8	0.85	0.05		768	か043	3	3.65	0.75	0.05	
647	く028	2.45	3.9	1.35	0.05		708	く052	2.4	3.8	0.8	0.08		769	き082	2.75	3.65	1	0.06	
648	18	2.45	3.9	1.3	0.04		709	う057	2.4	3.8	1	0.05		770	あ071	2.7	3.65	0.8	0.05	
649	お006	2.45	3.9	1	0.05	一部欠損	710	え057	2.4	3.8	1.1	0.05		771	あ098	2.7	3.65	1.3	0.05	
650	あ065	2.4	3.9	0.8	0.04		711	お040	2.4	3.8	1.6	0.03		772	き041	2.7	3.65	0.8	0.04	
651	お076	2.35	3.9	0.9	0.07		712	お019	2.35	3.8	1.1	0.05		773	き079	2.65	3.65	1	0.06	
652	あ012	2.35	3.9	1.1	0.05		713	え083	2.35	3.8	0.9	0.04		774	お094	2.5	3.65	0.8	0.05	
653	く015	2.3	3.9	1	0.05		714	く062	2.3	3.8	1	0.08		775	き094	2.45	3.65	0.8	0.04	
654	あ073	2.3	3.9	1	0.04		715	う100	2.3	3.8	0.9	0.05		776	く048	2.35	3.65	1	0.07	
655	お025	2.3	3.9	1.4	0.05		716	え097	2.3	3.8	1.2	0.05		777	く098	2.3	3.65	1.1	0.08	
656	か031	2.3	3.9	0.9	0.04		717	か063	2.3	3.8	0.75	0.05		778	く059	2.3	3.65	0.9	0.07	
657	76	2.25	3.9	1.2	0.07		718	お069	2.3	3.8	0.9	0.04		779	33	2.25	3.65	1.2	0.03	
658	60	2.25	3.9	1.4	0.05		719	か011	2.3	3.8	0.75	0.04		780	く074	2.15	3.65	1.1	0.07	
659	く050	2.2	3.9	1	0.05		720	い076	2.3	3.8	1	0.03		781	か053	2	3.65	1	0.04	
660	あ019	2.2	3.9	1.2	0.05		721	あ040	2.3	3.8	0.8	0.02		782	25	2	3.65	1.15	0.02	
661	い055	2.2	3.9	0.9	0.05		722	き072	2.2	3.8	0.8	0.05		783	15	1.95	3.65	1.15	0.04	
662	お049	2.2	3.9	1	0.05		723	か090	2.2	3.8	0.85	0.04		784	え100	1.75	3.65	1.1	0.03	
663	お061	2.2	3.9	1	0.05		724	お079	2.1	3.8	1.4	0.06		785	お060	3.1	3.65	1	0.06	
664	お046	2.2	3.9	1.2	0.04		725	73	2	3.8	1.2	0.04		786	う006	3	3.65	1	0.06	
665	お023	2.1	3.9	1.3	0.03		726	あ097	2	3.8	1.35	0.04		787	86	2.9	3.6	0.9	0.07	
666	え070	2.05	3.9	1.1	0.05		727	お026	2	3.8	0.8	0.04		788	い078	2.9	3.6	1.1	0.03	
667	あ005	2	3.89	1	0.04		728	か064	2	3.8	0.85	0.04		789	う023	2.7	3.6	1.2	0.06	
668	あ068	2	3.85	1	0.04		729	あ055	2	3.8	1.1	0.03		790	あ090	2.5	3.6	1.3	0.05	
669	う078	3.5	3.85	1.4	0.08		730	く079	1.95	3.8	1.2	0.07		791	お029	2.5	3.6	1.2	0.05	
670	67	3.3	3.85	0.7	0.06	ひび割れ	731	70	1.9	3.8	1.2	0.04		792	え066	2.5	3.6	0.5	0.04	
671	き093	3.2	3.85	1	0.06	一部欠損	732	お099	1.6	3.8	1.35	0.04		793	あ056	2.45	3.6	1	0.04	
672	か077	2.8	3.85	0.8	0.06		733	く070	2.7	3.8	1	0.08		794	う085	2.45	3.6	1.1	0.04	
673	か012	2.55	3.85	0.75	0.06		734	68	2.7	3.75	1	0.05		795	あ032	2.45	3.6	1.5	0.02	
674	か028	2.45	3.85	1	0.05		735	か066	2.65	3.75	0.75	0.05		796	く056	2.4	3.6	1	0.08	
675	き075	2.4	3.85	1	0.05		736	く013	2.45	3.75	1.8	0.07		797	う049	2.4	3.6	1.2	0.06	
676	う022	2.35	3.85	1.25	0.06		737	か068	2.45	3.75	0.75	0.06		798	い091	2.4	3.6	1	0.04	
677	え099	2.35	3.85	1	0.05		738	お088	2.45	3.75	0.9	0.05		799	72	2.15	3.6	0.9	0.04	
678	か095	2.1	3.85	1	0.04		739	き095	2.45	3.75	1.1	0.05		800	き100	2.1	3.6	0.9	0.03	
679	く089	2	3.85	1.2	0.06		740	く045	2.4	3.75	1.1	0.08		801	87	2	3.6	1	0.05	

ガラス玉 (小玉青) 一覧

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	
802	あ017	2	3.6	0.9	0.03		835	き061	2.45	3.45	1.2	0.04		868	81	2.4	3.2	1	0.04		
803	い093	2	3.6	0.8	0.03		836	き059	2.4	3.45	1	0.04	一部欠損	869	う071	2.2	3.2	0.8	0.03		
804	あ043	1.9	3.6	1.2	0.03		837	え049	2.35	3.45	1	0.04		870	い088	1.6	3.2	1.2	0.02		
805	あ045	1.7	3.6	0.9	0.03		838	え096	2.2	3.45	0.85	0.03		871	え095	1.55	3.2	1.35	0.02		
806	か082	3.2	3.6	0.85	0.07		839	え014	2.15	3.45	0.75	0.04		872	く061	2.6	3.15	0.9	0.09		
807	か071	3.1	3.6	1.1	0.06		840	か072	2	3.45	0.75	0.04		873	え086	2.4	3.15	1	0.04		
808	う027	2.9	3.55	1.5	0.09		841	お073	1.75	3.45	1.35	0.02		874	84	2.6	3.15	1.1	0.06		
809	え060	2.7	3.55	1	0.04		842	お007	3	3.4	1.25	0.07	一部欠損	875	か025	2.65	3.15	0.9	0.04		
810	く096	2.65	3.55	0.9	0.08		843	え018	2.65	3.4	0.95	0.04		876	お016	2.45	3.1	1.2	0.04		
811	え019	2.5	3.55	1.05	0.05		844	う072	2.5	3.4	1.3	0.04		877	き084	2.4	3	1.1	0.04		
812	き068	2.5	3.55	1.2	0.05		845	く067	2.45	3.4	1.1	0.06		878	い095	2.1	3	1.2	0.02		
813	き063	2.3	3.55	1.55	0.04		846	お086	2.45	3.4	1	0.04		879	い087	2	3	1	0.03		
814	お082	2.2	3.55	0.8	0.04		847	お042	2.3	3.4	1.2	0.03		880	あ027	3	3	1.1	0.04		
815	く064	3.55	3.5	1	0.09		848	く019	2.15	3.4	0.8	0.06		881	え087	2.7	3	1.65	0.04		
816	あ046	3.2	3.5	1.25	0.07		849	あ050	3.4	3.35	1	0.06		882	お077	2.7	2.95	1	0.04		
817	あ016	3.1	3.5	1.3	0.04	一部欠損	850	あ063	3.3	3.35	0.9	0.11		883	40	2.35	2.95	0.8	0.03		
818	か074	2.8	3.5	0.95	0.05		851	か059	3.1	3.35	0.65	0.05	1/4欠損	884	71	2.3	2.7	1	0.02		
819	き080	2.7	3.5	1.3	0.05		852	く034	3	3.35	1.3	0.07		885	え062	1.85	2.35	0.75	0.02		
820	う054	2.65	3.5	1.5	0.08		853	お017	2.7	3.35	1.1	0.06		886	え091	2.8	2.3	1	0.05		
821	く010	2.5	3.5	1	0.06		854	え094	1.8	3.35	1.1	0.02		887	お027	2.7	1.85	1	0.07		
822	く081	2.4	3.5	1	0.07		855	く035	2.5	3.3	1	0.06		888	41	2.7	2.8	0.9	0.03		
823	お018	2.2	3.5	0.8	0.04		856	う096	2.45	3.3	1	0.05		889	い089	2.3	2.7	1	0.03		
824	42	2	3.5	1.35	0.04		857	う087	2.4	3.3	1.1	0.04		890	け002	2.3	2.7	1	0.03		
825	あ094	2	3.5	0.9	0.04		858	お066	2.4	3.3	0.9	0.04		891	き099	2.7	2.3	1.1	0.05		
826	い092	2	3.5	1	0.03		859	く090	2.3	3.3	0.8	0.02		892	え011	2.15	2.3	0.95	0.03		
827	か097	2	3.5	0.9	0.03		860	い094	2.1	3.3	1.1	0.03		893	お022	2.3	2.7	1	0.03		
828	お048	1.9	3.5	1.3	0.03		861	え067	1.75	3.3	0.75	0.02		894	あ021	2.3	2.5	1	0.02		
829	う043	1.9	3.5	1.1	0.02		862	え071	1.65	3.3	1	0.03		895	あ003	3.65	2.3	1	0.09	一部欠損	
830	え089	1.75	3.5	0.95	0.02		863	お051	3	3.25	1.4	0.04		896	い098	3.3	1.65	1.1	0.04	1/2欠損	
831	い090	1.5	3.5	0.9	0.02		864	え088	2.1	3.25	0.9	0.02		897	い099	2.2		1.1	0.03	1/3欠損	
832	82	3.1	3.45	1	0.07		865	お072	3	3.2	0.9	0.04		898	う070			1	0.09	1/2欠損	
833	か080	2.6	3.45	0.85	0.05		866	85	2.7	3.2	0.9	0.05		899	お078				0.04	破片	
834	お095	2.6	3.45	0.8	0.04		867	か061	2.7	3.2	0.85	0.05									

ガラス玉 (小玉緑) 一覧

中山6号墳第2主体

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
1	I001	3.15	5.75	1.55	0.13		21	G021	4.4	4.95	0.9	0.12		41	G089	3.85	4.8	1.6	0.11	ひび割れ
2	A012	3.85	5.5	1.6	0.13		22	G085	3.25	4.95	1.65	0.09		42	F068	3.6	4.8	1.1	0.09	一部欠損
3	F091	3.55	5.5	1.9	0.14		23	B003	2.95	4.95	1.75	0.09		43	40	3.3	4.8	1.3	0.09	
4	68	3.1	5.5	1.5	0.13		24	A030	2.95	4.95	1.7	0.08		44	B025	2.95	4.8	1	0.07	
5	96	3.85	5.45	1.35	0.1		25	A051	2.55	4.95	1.85	0.06		45	E069	2.9	4.8	1.3	0.06	
6	A059	3.6	5.45	2	0.08	ひび割れ	26	D011	2.5	4.95	1.4	0.08		46	H094	2.8	4.8	1.4	0.09	
7	F013	2.85	5.35	2	0.08	一部欠損	27	D055	2.15	4.95	0.95	0.04		47	E022	2.8	4.8	1.35	0.08	
8	F071	3.1	5.2	1.15	0.08		28	74	3.8	4.9	1.5	0.13		48	G031	2.65	4.8	1.45	0.09	
9	I048	2.7	5.2	1	0.08		29	A077	3.88	4.9	1.55	0.1	一部欠損	49	A094	2	4.8	1.35	0.05	
10	D007	2.5	5.2	1.5	0.08		30	G081	3.3	4.9	1.15	0.1		50	I035	4.1	4.75	1.05	0.11	一部欠損
11	G061	3.2	5.15	1.8	0.09		31	D002	3.2	4.9	1.7	0.1		51	A088	4.1	4.75	1.15	0.09	
12	16	2.2	5.1	1.1	0.07		32	A038	3.1	4.9	1	0.09		52	F041	3.5	4.75	1.4	0.09	
13	G008	2.5	5.05	1.35	0.07	ひび割れ	33	B097	2.3	4.9	1.7	0.06	一部欠損	53	G079	3.35	4.75	0.9	0.06	
14	A063	3.8	5	1.8	0.1		34	C001	2.15	4.9	1.35	0.06		54	A043	3.25	4.75	1.2	0.09	一部欠損
15	73	3.7	5	1.75	0.11		35	E078	2.85	4.85	1.35	0.08	ひび割れ	55	A071	3.25	4.75	2.05	0.08	
16	E045	3.2	5	1.5	0.1		36	E062	2.85	4.85	1.4	0.07		56	D041	3.15	4.75	0.8	0.1	
17	A066	3.2	5	1.75	0.08		37	F059	2.7	4.85	1.75	0.06		57	G066	3.1	4.75	1.75	0.1	
18	38	2.45	5	1.5	0.07		38	E010	2.4	4.85	1.65	0.06		58	A100	3.05	4.75	1.6	0.08	1/3欠損
19	11	2.4	5	1.5	0.08		39	A035	2.15	4.85	1.25	0.04		59	23	3	4.75	1.45	0.07	一部欠損
20	F010	2.4	5	1.5	0.08		40	E088	2.05	4.85	1.7	0.07		60	G050	2.95	4.75	1.3	0.09	

ガラス玉（小玉緑）一覧

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
61	D071	2.85	4.75	1.3	0.08		122	B072	2.2	4.55	1.55	0.05		183	20	2.45	4.4	1.35	0.06	
62	57	2.85	4.75	1.35	0.07		123	G074	3.65	4.5	1.1	0.1		184	D051	2.3	4.4	1.25	0.06	
63	F090	2.75	4.75	1.35	0.08		124	18	3.6	4.5	0.9	0.08		185	D021	2.2	4.4	1.5	0.06	
64	97	2.6	4.75	1.45	0.06		125	C002	3.1	4.5	1.2	0.07		186	A075	1.9	4.4	1.2	0.04	
65	C097	2.1	4.75	1.7	0.05		126	E007	3	4.5	1.2	0.06		187	D003	3.75	4.35	0.8	0.1	
66	A062	3.25	4.7	0.9	0.08		127	D095	2.7	4.5	1.25	0.07	ひび割れ	188	E046	3.65	4.35	1.05	0.07	
67	D061	3.2	4.7	0.55	0.07		128	85	2.7	4.5	1.25	0.06		189	H051	3.2	4.35	1.7	0.07	
68	55	3.15	4.7	1.55	0.08		129	25	2.55	4.5	1.4	0.06		190	F015	3.1	4.35	1.35	0.06	
69	A032	3.15	4.7	1.1	0.08		130	D077	2.5	4.5	1.25	0.07		191	60	3	4.35	1.15	0.08	
70	45	2.95	4.7	1.75	0.07		131	F038	2.45	4.5	1.05	0.07		192	A050	2.95	4.35	1.2	0.07	
71	B001	2.95	4.7	1.1	0.07		132	A044	2.25	4.5	1.7	0.05		193	F001	2.9	4.35	1	0.06	
72	G093	2.95	4.7	1.25	0.07		133	C061	2.15	4.5	1.75	0.06		194	F085	2.85	4.35	1.55	0.06	
73	G037	2.85	4.7	1.65	0.08		134	D026	2.15	4.5	1.4	0.05		195	26	2.8	4.35	0.55	0.06	
74	H043	2.5	4.7	1.6	0.06	ひび割れ	135	A017	3.85	4.45	1.6	0.07		196	66	2.8	4.35	1.4	0.06	
75	A047	2.45	4.7	1.6	0.07		136	F033	3.6	4.45	1.05	0.1		197	H056	2.8	4.35	1.2	0.06	
76	A015	2.4	4.7	0.85	0.07		137	C090	3.05	4.45	1.45	0.08		198	49	2.7	4.35	0.95	0.06	
77	F014	2.15	4.7	1.7	0.05		138	F021	3.05	4.45	1.5	0.07		199	78	2.7	4.35	1.3	0.06	
78	F055	3.35	4.65	1.6	0.05	ひび割れ	139	E030	2.95	4.45	1.2	0.08		200	I013	2.55	4.35	1.2	0.06	
79	64	3.2	4.65	1.5	0.09		140	C100	2.95	4.45	1.35	0.06		201	C084	2.5	4.35	1.2	0.06	
80	C047	3.2	4.65	1.35	0.07		141	93	2.8	4.45	1.5	0.08		202	F083	2.5	4.35	1.3	0.05	
81	C081	3	4.65	1.6	0.08		142	G060	2.75	4.45	1.65	0.08		203	81	2.5	4.35	1.15	0.06	
82	E015	2.85	4.65	1.5	0.07	ひび割れ	143	E028	2.75	4.45	1.3	0.06		204	F100	2.45	4.35	1.55	0.06	
83	C021	2.8	4.65	1.45	0.07		144	I033	2.75	4.45	1.6	0.06		205	A004	2.45	4.35	1.5	0.05	
84	B043	2.75	4.65	1.2	0.07		145	A021	2.7	4.45	1.4	0.07		206	D031	2.4	4.35	1.35	0.06	
85	A003	2.65	4.65	1.4	0.07		146	D092	2.6	4.45	1	0.07		207	D034	2.35	4.35	1	0.06	
86	F050	2.65	4.65	1.7	0.06		147	G002	2.6	4.45	1	0.07		208	9	2.35	4.35	1.2	0.04	
87	72	2.5	4.65	1.2	0.06		148	A016	2.55	4.45	1.65	0.06		209	E074	2.1	4.35	1.3	0.04	
88	D087	2.5	4.65	1.3	0.06		149	G099	2.5	4.45	1.45	0.06		210	F063	2.05	4.35	1.15	0.05	
89	G064	2.5	4.65	1.75	0.06		150	F017	2.4	4.45	1.5	0.05		211	C076	1.85	4.35	1.45	0.05	
90	G091	2.45	4.65	1.6	0.06		151	A028	2.4	4.45	1.45	0.04		212	E009	3.55	4.3	1.35	0.08	
91	B064	2.4	4.65	1.4	0.07		152	F011	2.35	4.45	1.55	0.06		213	F057	3.25	4.3	1.45	0.08	
92	43	2.4	4.65	1.2	0.06		153	A002	2.2	4.45	1.3	0.05		214	1	3.15	4.3	1	0.06	
93	G071	2.3	4.65	1.56	0.05		154	G052	2.15	4.45	1.3	0.06		215	B098	3.1	4.3	1.2	0.08	
94	A079	2.05	4.65	1.5	0.05		155	12	2.15	4.45	1.25	0.04		216	71	3.05	4.3	0.9	0.07	
95	B010	3.55	4.6	1.35	0.09		156	14	2	4.45	1.6	0.05		217	B044	3	4.3	1	0.07	
96	A099	3.25	4.6	1.56	0.08	ひび割れ	157	G028	2	4.45	1.55	0.04		218	59	2.95	4.3	1	0.07	
97	A097	3.15	4.6	1.65	0.07		158	A068	3.7	4.4	1.05	0.1		219	F087	2.95	4.3	1.15	0.05	
98	A010	2.95	4.6	1.3	0.07		159	E081	3.7	4.4	1.35	0.1		220	I010	2.9	4.3	1.05	0.07	
99	F028	2.95	4.6	1.25	0.07		160	I032	3.7	4.4	0.9	0.05		221	B075	2.85	4.3	1.15	0.07	
100	D036	2.9	4.6	1.45	0.08		161	F051	3.5	4.4	0.6	0.07		222	4	2.85	4.3	1.55	0.06	
101	A042	2.8	4.6	1.1	0.07		162	E005	3.45	4.4	1.6	0.08		223	A086	2.8	4.3	1.4	0.06	
102	F079	2.8	4.6	1.8	0.07		163	B014	3.35	4.4	1.6	0.07		224	D063	2.8	4.3	1.35	0.06	
103	E019	2.75	4.6	1	0.07		164	E057	3.3	4.4	1.35	0.08		225	G015	2.8	4.3	1	0.06	
104	F093	2.75	4.6	1.55	0.06		165	F061	3.15	4.4	1	0.07		226	G097	2.8	4.3	1.55	0.06	
105	G040	2.7	4.6	1.25	0.07		166	51	3	4.4	1.45	0.07		227	H065	2.8	4.3	1.5	0.05	
106	G094	2.7	4.6	1.05	0.07		167	F008	3	4.4	0.9	0.07		228	B028	2.75	4.3	1.35	0.05	
107	F080	2.65	4.6	1.6	0.06	一部欠損	168	F094	3	4.4	1.3	0.07		229	D037	2.7	4.3	1.15	0.07	
108	H003	2.45	4.6	1.9	0.07		169	A074	2.95	4.4	1.25	0.06		230	D060	2.7	4.3	1.4	0.06	
109	G041	2.4	4.6	1.85	0.07		170	F078	2.9	4.4	1.05	0.06		231	F095	2.7	4.3	1.25	0.06	
110	I023	2.35	4.6	1.3	0.06		171	B045	2.85	4.4	0.75	0.07		232	D004	2.65	4.3	1.15	0.07	
111	44	2.3	4.6	1.05	0.06		172	D048	2.85	4.4	0.75	0.07		233	H010	2.65	4.3	1.05	0.06	
112	C010	3.3	4.55	1.25	0.09		173	G088	2.85	4.4	1	0.06		234	B058	2.6	4.3	1.35	0.06	
113	90	2.95	4.55	1.4	0.06		174	A054	2.85	4.4	1.2	0.05		235	D012	2.6	4.3	1.1	0.06	
114	I005	2.75	4.55	1.05	0.07		175	G048	2.8	4.4	1.35	0.08		236	80	2.6	4.3	1.4	0.05	
115	G051	2.7	4.55	1.35	0.07		176	B023	2.75	4.4	1.15	0.05		237	E052	2.6	4.3	1.05	0.05	
116	G065	2.5	4.55	1.45	0.07		177	G046	2.7	4.4	1.2	0.06		238	G043	2.55	4.3	1.15	0.07	
117	A065	2.5	4.55	1.5	0.06		178	B021	2.65	4.4	1.45	0.05		239	H061	2.55	4.3	1.1	0.06	
118	I021	2.45	4.55	1.1	0.06		179	84	2.6	4.4	1.65	0.06		240	F029	2.45	4.3	1.35	0.05	
119	C051	2.4	4.55	1.5	0.06		180	G092	2.6	4.4	1.1	0.06		241	D027	2.45	4.3	1.2	0.04	
120	A005	2.35	4.55	1.4	0.06		181	B016	2.55	4.4	1.6	0.07		242	E058	2.4	4.3	1.75	0.05	
121	E087	2.3	4.55	1.5	0.07		182	C031	2.45	4.4	1	0.07		243	H006	2.35	4.3	1.1	0.06	

ガラス玉（小玉緑）一覧

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
244	B062	2.35	4.3	1.7	0.05		305	G076	3.25	4.15	1.5	0.05		366	A036	3.95	4.05	0.6	0.09	
245	H011	2.2	4.3	1.3	0.05		306	C067	3.15	4.15	1.2	0.06		367	D001	3.35	4.05	1.15	0.07	
246	I017	2.15	4.3	1.25	0.04		307	C006	3.1	4.15	1.1	0.06		368	F030	3.25	4.05	1.15	0.08	
247	B049	2.1	4.3	1.2	0.04		308	F026	3.05	4.15	1.35	0.07		369	F074	3.2	4.05	1.05	0.05	
248	G019	3.8	4.25	0.9	0.1		309	19	3.05	4.15	1.2	0.08		370	D064	3	4.05	1	0.06	ひび割れ
249	A001	3.6	4.25	1.75	0.09		310	E029	3	4.15	1.1	0.07		371	G001	2.9	4.05	1.25	0.07	
250	D069	3.1	4.25	1.55	0.07		311	F031	3	4.15	1.45	0.06		372	B011	2.75	4.05	1.5	0.05	
251	D073	3	4.25	1.55	0.07		312	E014	3	4.15	0.6	0.05		373	I044	2.7	4.05	1	0.06	
252	D053	3	4.25	1.15	0.06		313	A026	2.95	4.15	1.05	0.04		374	F009	2.65	4.05	1.25	0.06	
253	H001	2.95	4.25	1	0.07		314	C094	2.9	4.15	1.35	0.06		375	91	2.6	4.05	1.25	0.06	
254	D043	2.9	4.25	0.9	0.06		315	22	2.9	4.15	1.45	0.05		376	D023	2.6	4.05	1.3	0.06	
255	D066	2.8	4.25	1.2	0.08		316	I039	2.85	4.15	1.65	0.06		377	B082	2.6	4.05	1.3	0.05	
256	54	2.8	4.25	1.1	0.07		317	G075	2.75	4.15	1.25	0.06		378	B071	2.55	4.05	1.2	0.05	
257	E100	2.75	4.25	1	0.06		318	C053	2.7	4.15	1	0.06		379	E018	2.45	4.05	1.1	0.06	
258	89	2.6	4.25	1.2	0.05		319	24	5.65	4.15	0.85	0.05		380	E091	2.45	4.05	1.2	0.05	
259	A093	2.45	4.25	1.45	0.06	一部欠損	320	D044	2.65	4.15	1.25	0.05		381	A061	2.4	4.05	1.4	0.06	
260	C005	2.35	4.25	1.05	0.06		321	E093	2.6	4.15	1.35	0.07		382	F056	2.4	4.05	1.3	0.04	
261	A034	2.3	4.25	1.1	0.05		322	F060	2.6	4.15	1	0.06	ひび割れ	383	B041	2.35	4.05	1.05	0.04	
262	D057	2.3	4.25	1.3	0.05		323	E057	2.6	4.15	1.25	0.05		384	A020	2.3	4.05	1.05	0.05	
263	H085	2.1	4.25	1	0.04		324	98	2.55	4.15	1	0.04		385	D045	2.25	4.05	1.2	0.05	
264	A081	2.05	4.25	1.1	0.05		325	E024	2.45	4.15	1.35	0.06		386	E036	2.25	4.05	1.05	0.05	
265	I002	3.85	4.2	1.45	0.09		326	E026	2.45	4.15	1	0.05		387	H018	2.1	4.05	1.3	0.03	
266	G055	3.65	4.2	1	0.09		327	H074	2.45	4.15	1	0.05		388	H028	2.05	4.05	1	0.03	
267	G087	3.3	4.2	1.8	0.07		328	B020	2.35	4.15	1.15	0.03		389	B005	2	4.05	1.4	0.04	
268	C015	3.15	4.2	1.1	0.08		329	C091	2.25	4.15	1	0.06		390	D028	2	4.05	1.1	0.04	
269	H047	3	4.2	1.7	0.06		330	10	2.25	4.15	1.7	0.05		391	E031	2.4	4.005	1.05	0.05	
270	F098	2.95	4.2	1.2	0.06		331	I009	2.2	4.15	1.3	0.05		392	G058	4	4	1.35	0.08	
271	D074	2.9	4.2	1.25	0.06		332	I011	2.2	4.15	1.2	0.04		393	B055	4	4	1	0.06	
272	86	2.85	4.2	1.05	0.06		333	G036	2.05	4.15	1.15	0.06		394	G077	3.95	4	0.8	0.07	
273	C012	2.85	4.2	1.35	0.06		334	A067	2	4.15	1.25	0.04		395	A006	3.9	4	1.25	0.06	
274	88	2.8	4.2	1.1	0.06		335	B047	1.85	4.15	1.45	0.04		396	F081	3.8	4	1.35	0.08	
275	I029	2.8	4.2	0.75	0.06		336	G030	1.75	4.15	1.15	0.03		397	D005	3.45	4	0.95	0.09	
276	56	2.75	4.2	1.2	0.06		337	A039	4.65	4.1	0.9	0.1		398	G069	3.4	4	0.95	0.07	
277	C037	2.75	4.2	1.45	0.06		338	G011	4.55	4.1	0.95	0.1	一部欠損	399	G098	3.35	4	1.15	0.08	
278	C071	2.7	4.2	1.25	0.06		339	A029	3.65	4.1	1	0.07		400	F024	3.35	4	1.2	0.05	ひび割れ
279	D082	2.7	4.2	0.7	0.06		340	G090	3.35	4.1	1.25	0.07		401	I019	3.3	4	1.25	0.06	
280	42	2.65	4.2	1.3	0.06		341	A096	3.25	4.1	0.95	0.08		402	I024	3.2	4	1.3	0.06	
281	F022	2.65	4.2	1.2	0.05		342	D038	3.2	4.1	1.1	0.07		403	D081	3.05	4	1.3	0.07	
282	C096	2.6	4.2	1.2	0.05	一部欠損	343	G013	3.2	4.1	0.95	0.07	ひび割れ	404	15	3.05	4	0.75	0.05	
283	D059	2.55	4.2	1.2	0.05		344	F072	3.15	4.1	0.85	0.06		405	B051	3	4	1.05	0.06	
284	H031	2.55	4.2	1.3	0.05		345	D017	3.1	4.1	0.95	0.06		406	G017	3	4	1.25	0.06	
285	I007	2.5	4.2	1.1	0.05		346	D070	2.95	4.1	0.8	0.05		407	E092	2.95	4	1.1	0.06	
286	H091	2.45	4.2	1.6	0.06		347	92	2.85	4.1	1.05	0.06		408	F037	2.9	4	1.1	0.06	
287	A040	2.45	4.2	2.45	0.05		348	A083	2.8	4.1	1.5	0.06		409	G023	2.9	4	1.1	0.05	
288	A055	2.45	4.2	1.2	0.04		349	F088	2.75	4.1	1	0.06		410	D058	2.85	4	1.65	0.06	
289	A046	2.4	4.2	1.45	0.05		350	D047	2.7	4.1	1	0.06		411	E006	2.85	4	0.95	0.06	
290	H050	2.4	4.2	1.15	0.05		351	D032	2.7	4.1	1.1	0.05		412	E082	2.8	4	1.25	0.06	
291	A033	2.3	4.2	1.35	0.05		352	E076	2.7	4.1	0.95	0.05		413	E095	2.8	4	1.4	0.06	
292	H034	2.3	4.2	1.35	0.05		353	I016	2.7	4.1	1.1	0.04		414	E020	2.8	4	1	0.05	
293	C034	2.25	4.2	1.2	0.05		354	G027	2.6	4.1	1.15	0.06		415	F035	2.75	4	0.85	0.06	
294	F002	2.25	4.2	1.1	0.05		355	A053	2.6	4.1	1.2	0.05		416	D085	2.75	4	1.35	0.05	ひび割れ
295	41	2.15	4.2	1.15	0.04		356	A007	2.55	4.1	1.05	0.04		417	I014	2.7	4	1	0.04	
296	B042	2.15	4.2	1	0.06		357	B007	2.5	4.1	1	0.04		418	I031	2.7	4	0.9	0.04	
297	B053	2.15	4.2	1.35	0.05		358	I047	2.4	4.1	0.8	0.05		419	F070	2.65	4	1.15	0.06	
298	77	2.05	4.2	1.55	0.05		359	F044	2.35	4.1	1.4	0.05		420	B019	2.65	4	1	0.04	
299	E008	2	4.2	1.45	0.03		360	C011	2.3	4.1	1.35	0.05		421	D006	2.6	4	1	0.06	
300	76	1.95	4.2	1.35	0.05		361	D075	2.3	4.1	1.3	0.05		422	C086	2.6	4	1	0.05	
301	D097	1.65	4.2	1.4	0.04		362	A056	2.25	4.1	1.45	0.04		423	D013	2.55	4	1.25	0.06	
302	29	3.65	4.15	1.25	0.02		363	C004	2.2	4.1	1.45	0.05		424	G035	2.55	4	1	0.06	
303	A095	3.35	4.15	1.25	0.07		364	C065	1.75	4.1	1.25	0.04		425	B050	2.55	4	1.4	0.05	
304	A011	3.3	4.15	0.9	0.07		365	H027	4	4.05	1.15	0.08		426	D040	2.55	4	1.2	0.05	

ガラス玉（小玉緑）一覧

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
427	30	2.55	4	1.2	0.04	
428	E047	2.5	4	1.1	0.05	
429	F058	2.5	4	1.15	0.05	
430	I028	2.5	4	0.85	0.03	ひび割れ
431	E079	2.45	4	1.25	0.06	
432	C044	2.45	4	0.8	0.05	
433	G073	2.45	4	0.75	0.05	
434	C063	2.45	4	1.2	0.04	
435	7	2.4	4	1.15	0.06	
436	5	2.4	4	1.05	0.05	
437	33	2.4	4	1.1	0.05	
438	E025	2.4	4	1.45	0.05	
439	I012	2.4	4	1.1	0.04	
440	B061	2.35	4	1.35	0.05	
441	D050	2.35	4	0.6	0.05	一部欠損
442	A018	2.25	4	1.15	0.04	
443	G014	2.1	4	1.55	0.03	
444	A058	2	4	1.15	0.03	ひび割れ
445	D033	1.9	4	1.35	0.03	
446	H092	1.85	4	1.15	0.04	
447	I041	1.8	4	1	0.03	
448	A082	3.95	3.95	1.4	0.08	
449	F099	3.95	3.95	0.9	0.07	ひび割れ
450	D008	3.55	3.95	1.35	0.08	
451	D025	3.4	3.95	0.9	0.08	
452	F048	3.35	3.95	1.05	0.07	
453	F004	3.3	3.95	1	0.06	
454	C098	3	3.95	0.85	0.06	
455	B048	3	3.95	0.8	0.05	
456	E027	2.95	3.95	1.15	0.05	
457	B083	2.9	3.95	1.1	0.06	
458	F019	2.9	3.95	0.75	0.05	
459	H076	2.75	3.95	0.7	0.05	
460	F066	2.65	3.95	1.3	0.05	
461	B086	2.6	3.95	1.15	0.05	
462	D052	2.6	3.95	0.95	0.04	
463	E080	2.45	3.95	1.35	0.06	
464	B065	2.45	3.95	1.3	0.04	
465	D054	2.4	3.95	1.1	0.05	
466	C054	2.3	3.95	0.75	0.04	
467	E037	2.3	3.95	0.95	0.04	
468	B067	2.15	3.95	1.4	0.04	
469	H025	2	3.95	1.2	0.04	
470	H040	2	3.95	0.75	0.03	
471	D098	1.9	3.95	1.35	0.03	
472	I030	3.8	3.9	1.2	0.07	
473	B085	3.25	3.9	1	0.07	
474	A069	3.15	3.9	1.1	0.07	一部欠損
475	B034	3.1	3.9	1.25	0.05	
476	E073	3.05	3.9	1.4	0.07	
477	E061	2.85	3.9	1.15	0.04	
478	C093	2.7	3.9	1.05	0.05	
479	C007	2.65	3.9	1.1	0.05	
480	G086	2.6	3.9	0.95	0.06	
481	E043	2.6	3.9	1.25	0.05	
482	E049	2.55	3.9	1.15	0.04	
483	H070	2.5	3.9	1.25	0.05	
484	B089	2.45	3.9	1.05	0.05	
485	C089	2.45	3.9	1	0.05	
486	D020	2.45	3.9	1.5	0.05	
487	I003	2.4	3.9	1	0.04	

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
488	E017	2.35	3.9	0.65	0.05	
489	F043	2.35	3.9	1	0.04	
490	D030	2.3	3.9	1	0.05	
491	E042	2.3	3.9	1.25	0.05	
492	G049	2.3	3.9	1.1	0.04	
493	I027	2.3	3.9	0.8	0.04	
494	H039	2.25	3.9	1.1	0.04	
495	C085	2.15	3.9	0.95	0.05	
496	H023	2.15	3.9	1	0.04	
497	E099	2.1	3.9	1.15	0.03	
498	H014	1.9	3.9	1.25	0.04	
499	F065	4.1	3.85	1.05	0.06	
500	E048	3.75	3.85	1.3	0.08	
501	E016	3.35	3.85	1.1	0.06	
502	H063	3.3	3.85	0.6	0.06	ひび割れ
503	C092	3.25	3.85	0.9	0.07	
504	D083	3.15	3.85	1.3	0.07	
505	F042	3.05	3.85	1.05	0.06	
506	H060	3	3.85	1.3	0.06	
507	B037	3	3.85	0.6	0.05	
508	B078	3	3.85	0.95	0.05	
509	F075	3	3.85	1.05	0.05	
510	F086	2.95	3.85	1.15	0.06	
511	H037	2.9	3.85	1.25	0.04	
512	E090	2.85	3.85	1.25	0.07	
513	A027	2.85	3.85	1.05	0.04	
514	E032	2.8	3.85	1.2	0.05	
515	E077	2.8	3.85	1.15	0.04	
516	A014	2.8	3.85	1.3	0.03	
517	B040	2.65	3.85	1	0.06	
518	B100	2.65	3.85	1.05	0.05	
519	31	2.6	3.85	0.85	0.07	
520	A087	2.6	3.85	1.1	0.06	
521	F096	2.6	3.85	1.4	0.05	
522	E064	2.6	3.85	1.35	0.04	
523	G083	2.55	3.85	1.35	0.05	
524	F025	2.55	3.85	1	0.04	
525	H004	2.5	3.85	1.15	0.05	
526	I042	2.45	3.85	0.75	0.05	
527	13	2.35	3.85	1.35	0.05	
528	C024	2.35	3.85	1.15	0.04	
529	F027	2.35	3.85	1.15	0.04	
530	D035	2.3	3.85	1.35	0.04	
531	I00	2.25	3.85	0.75	0.04	
532	B069	2.25	3.85	0.9	0.04	
533	C043	2.15	3.85	1.35	0.04	
534	H041	2.1	3.85	1.2	0.04	
535	87	1.95	3.85	0.6	0.03	
536	F052	1.9	3.85	1.2	0.04	
537	A076	4	3.8	1.25	0.08	
538	G006	3.6	3.8	1.25	0.07	ひび割れ
539	A090	3.25	3.8	0.75	0.06	
540	A070	3.2	3.8	1.05	0.06	
541	B052	3.2	3.8	1.2	0.06	
542	F069	3.1	3.8	0.8	0.05	一部欠損
543	D094	3.05	3.8	0.95	0.05	
544	H013	3.05	3.8	0.9	0.05	
545	C095	3	3.8	1.35	0.06	
546	D015	3	3.8	1.1	0.05	
547	A089	2.95	3.8	1.7	0.06	
548	A092	2.9	3.8	1.3	0.06	ひび割れ

掲載番号	実測番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考
549	C008	2.9	3.8	1.15	0.05	
550	C060	2.85	3.8	1.05	0.06	
551	B077	2.75	3.8	1.2	0.05	
552	B099	2.75	3.8	1	0.05	
553	C023	2.75	3.8	1.2	0.05	
554	C056	2.7	3.8	1.05	0.06	
555	35	2.65	3.8	1.1	0.04	
556	F077	2.6	3.8	1.15	0.05	
557	I018	2.6	3.8	1.05	0.04	一部欠損
558	62	2.55	3.8	1.1	0.05	
559	D100	2.5	3.8	0.8	0.04	
560	I038	2.45	3.8	1.05	0.05	
561	H059	2.4	3.8	1.2	0.04	
562	E041	2.35	3.8	1	0.04	
563	F067	2.25	3.8	1	0.04	
564	I020	2.2	3.8	0.75	0.03	
565	C064	2.1	3.8	1	0.04	
566	36	2.05	3.8	1.25	0.03	
567	B026	2.05	3.8	1.25	0.03	
568	E089	2	3.8	1.2	0.05	
569	E065	2	3.8	1.35	0.02	一部欠損
570	C014	1.9	3.8	0.9	0.04	
571	G024	1.6	3.8	1.25	0.03	
572	C052	1.55	3.8	1.3	0.03	
573	F046	3.95	3.75	1.15	0.09	
574	I046	3.9	3.75	0.85	0.06	
575	E023	3.45	3.75	0.95	0.06	ひび割れ
576	D009	3.35	3.75	1.1	0.06	
577	21	3.25	3.75	0.75	0.05	
578	I004	3.2	3.75	1	0.06	
579	D049	3.2	3.75	0.9	0.05	
580	G063	3.15	3.75	1.25	0.06	
581	H067	3.05	3.75	1.1	0.06	
582	D022	3	3.75	0.95	0.06	
583	A098	3	3.75	0.7	0.04	
584	F092	2.95	3.75	1.3	0.06	
585	C082	2.8	3.75	0.9	0.05	
586	A091	2.75	3.75	0.65	0.06	
587	E070	2.7	3.75	0.9	0.04	
588	D065	2.65	3.75	0.85	0.06	
589	D091	2.65	3.75	1	0.05	
590	C049	2.55	3.75	1.2	0.04	
591	58	2.5	3.75	1	0.05	
592	A009	2.45	3.75	1.35	0.02	
593	70	2.35	3.75	0.85	0.05	
594	B002	2.25	3.75	1	0.04	
595	H095	2	3.75	1.35	0.04	
596	H020	2	3.75	1.1	0.03	
597	G068	1.95	3.75	0.9	0.04	
598	D086	1.7	3.75	1.1	0.02	
599	A019	3.6	3.7	1.1	0.07	
600	F053	3.55	3.7	1.05	0.06	
601	H032	3.5	3.7	1.05	0.06	
602	C041	3.25	3.7	1.3	0.06	
603	G003	3.15	3.7	1.05	0.05	
604	G034	3.1	3.7	0.9	0.05	
605	E003	3	3.7	1.35	0.06	
606	G080	2.95	3.7	1.15	0.06	
607	H064	2.9	3.7	0.95	0.05	
608	C027	2.85	3.7	0.85	0.06	
609	E059	2.85	3.7	1.1	0.05	

ガラス玉 (小玉緑) 一覧

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備 考
610	F047	2.85	3.7	0.9	0.05		671	G039	2.65	3.6	0.8	0.05		732	G018	1.6	3.5	1	0.02	
611	G095	2.85	3.7	0.8	0.05		672	G056	2.6	3.6	1.05	0.05		733	B066	3.25	3.45	0.65	0.05	
612	B084	2.8	3.7	0.7	0.05		673	B081	2.5	3.6	1.15	0.05		734	B046	3.2	3.45	1.55	0.04	
613	G005	2.8	3.7	1.1	0.05		674	C048	2.5	3.6	1.15	0.04		735	C078	3	3.45	0.85	0.05	
614	D010	2.75	3.7	0.7	0.05		675	52	2.45	3.6	0.9	0.05		736	C080	3	3.45	1.15	0.05	
615	H029	2.7	3.7	1.2	0.04		676	E072	2.35	3.6	1.1	0.03		737	C038	3	3.45	0.75	0.04	
616	A025	2.65	3.7	1	0.04		677	C074	2.25	3.6	1.05	0.04		738	E084	2.9	3.45	1	0.06	
617	50	2.6	3.7	1.05	0.05		678	H078	2.1	3.6	1	0.04		739	D067	2.9	3.45	0.8	0.05	
618	67	2.6	3.7	0.9	0.05		679	D088	2.05	3.6	1.05	0.03		740	I045	2.7	3.45	0.75	0.05	
619	27	2.5	3.7	1.2	0.03		680	H083	2	3.6	0.6	0.03		741	79	2.7	3.45	0.95	0.04	
620	C045	2.45	3.7	1.15	0.05		681	C032	1.95	3.6	0.55	0.04		742	I015	2.65	3.45	0.8	0.04	
621	G007	2.45	3.7	1.1	0.05		682	C070	1.95	3.6	1.15	0.04		743	F045	2.6	3.45	1	0.04	
622	F040	2.35	3.7	0.95	0.04		683	47	3.8	3.55	1.3	0.06		744	E040	2.55	3.45	1.15	0.04	
623	F064	2.35	3.7	1.15	0.04		684	A080	3.55	3.55	1.1	0.07		745	G022	2.5	3.45	0.9	0.04	
624	B076	2.25	3.7	0.9	0.04		685	D056	3.45	3.55	1	0.07		746	B063	2.5	3.45	0.8	0.03	
625	H088	2.25	3.7	0.6	0.04		686	C009	3.4	3.55	0.8	0.06		747	D016	2.5	3.45	0.65	0.03	
626	3	2.25	3.7	1.3	0.03		687	H087	3.25	3.55	0.95	0.06		748	E034	2.4	3.45	1	0.03	
627	D042	2.15	3.7	0.9	0.04		688	17	3.2	3.55	0.5	0.06		749	F023	2.4	3.45	1.05	0.03	
628	H029	2.1	3.7	1.05	0.03		689	A045	3	3.55	1.1	0.05		750	H052	2.4	3.45	1.35	0.03	
629	H009	2.05	3.7	1	0.03		690	I037	2.9	3.55	1.2	0.05		751	C022	2.3	3.45	1.15	0.04	
630	69	2	3.7	0.95	0.04		691	G045	2.85	3.55	1	0.05		752	H072	2.3	3.45	1	0.04	
631	B094	2	3.7	1.1	0.03		692	D014	2.8	3.55	0.7	0.05		753	A049	2.2	3.45	0.95	0.04	
632	E050	2	3.7	1.4	0.03		693	E054	2.8	3.55	1.1	0.05		754	G020	2.2	3.45	0.95	0.03	
633	D039	1.85	3.7	0.9	0.04		694	C079	2.7	3.55	0.9	0.04	ひび割れ	755	G064	2.15	3.45	0.8	0.03	
634	99	1.65	3.7	1	0.03		695	B091	2.55	3.55	1	0.05		756	C016	2.1	3.45	0.9	0.04	
635	H062	1.65	3.7	1	0.03		696	D096	2.5	3.55	0.5	0.04		757	G044	2.1	3.45	1	0.04	
636	G026	3.95	3.65	1.1	0.07		697	C003	2.45	3.55	0.75	0.04		758	B095	2.1	3.45	1.1	0.03	
637	34	3.9	3.65	0.95	0.06		698	28	2.45	3.55	0.85	0.03		759	G062	2.1	3.45	0.95	0.03	
638	A060	3.2	3.65	0.95	0.05		699	H017	2.45	3.55	0.85	0.03		760	B087	2.05	3.45	0.95	0.03	
639	F006	3.15	3.65	1.05	0.06		700	A073	2.35	3.55	1.25	0.04		761	A072	2	3.45	0.95	0.03	
640	G004	3.15	3.65	1.2	0.06		701	B070	2.3	3.55	1.25	0.03		762	G016	1.95	3.45	0.45	0.02	
641	B004	3.15	3.65	1.05	0.05		702	C083	2.25	3.55	1.1	0.04		763	C046	1.9	3.45	0.95	0.03	
642	B057	3.05	3.65	1	0.05		703	A084	2.25	3.55	1.25	0.03		764	B035	1.8	3.45	1.1	0.02	
643	E012	3	3.65	1	0.05		704	H002	2.2	3.55	0.9	0.05		765	D076	1.75	3.45	0.9	0.03	
644	F039	3	3.65	1.4	0.05		705	H068	2.15	3.55	0.9	0.03		766	E075	3.9	3.4	1.25	0.06	
645	D019	2.8	3.65	1.1	0.05		706	B079	2.05	3.55	1.1	0.03		767	94	3.7	3.4	0.85	0.06	
646	B022	2.7	3.65	0.6	0.04		707	E094	2	3.55	1	0.04		768	82	3.65	3.4	1.05	0.05	
647	C026	2.55	3.65	0.9	0.05		708	F082	2	3.55	1.25	0.03		769	C040	3.25	3.4	0.9	0.05	
648	B054	2.5	3.65	1.35	0.05		709	B015	1.95	3.55	1.1	0.02		770	G009	3.25	3.4	1.25	0.04	
649	F063	2.5	3.65	1.15	0.05		710	B018	1.95	3.55	0.9	0.02		771	B030	3.2	3.4	1	0.04	
650	A064	2.45	3.65	1.1	0.04		711	A048	3.8	3.5	0.8	0.06		772	F089	3.15	3.4	0.95	0.06	
651	B096	2.45	3.65	1.15	0.04		712	I025	3.7	3.5	0.75	0.06		773	H081	3.05	3.4	0.8	0.04	
652	63	2.35	3.65	1	0.04		713	H021	3.6	3.5	1.3	0.05		774	I008	3.05	3.4	0.8	0.04	
653	E066	2.2	3.65	1.2	0.04		714	95	3.35	3.5	0.75	0.05		775	A037	2.85	3.4	0.4	0.05	
654	C028	2.15	3.65	1.05	0.04		715	C099	3.3	3.5	1.05	0.06		776	B058	2.85	3.4	0.9	0.04	
655	B036	2.1	3.65	1.3	0.03		716	E085	3.05	3.5	1	0.06		777	B080	2.85	3.4	0.9	0.04	
656	H089	2.05	3.65	0.9	0.04		717	C017	3.05	3.5	0.9	0.05		778	A008	2.85	3.4	0.75	0.03	
657	D024	2	3.65	1.05	0.04		718	E086	2.75	3.5	1.1	0.05		779	H030	3.4	3.4	1.05	0.04	
658	A085	2	3.65	1.15	0.03		719	G053	2.75	3.5	0.8	0.05		780	H098	3.4	3.4	1.15	0.04	
659	H019	3.6	3.6	1.15	0.06		720	H096	2.65	3.5	0.85	0.04		781	B008	3.4	3.4	1.1	0.03	
660	E038	3.5	3.6	1	0.06		721	G100	2.6	3.5	1	0.04		782	61	3.4	3.4	0.75	0.05	
661	E056	3.45	3.6	1	0.06		722	H007	2.6	3.5	0.95	0.03		783	F073	3.4	3.4	1.1	0.02	
662	A078	3.35	3.6	1.1	0.06		723	B092	2.45	3.5	0.95	0.04		784	D090	3.4	3.4	0.8	0.04	
663	C020	3.25	3.6	0.8	0.06		724	C013	2.4	3.5	0.75	0.04		785	D080	3.4	3.4	0.95	0.04	
664	D072	3	3.6	1.25	0.06		725	I034	2.35	3.5	1.25	0.03		786	F020	3.4	3.4	0.9	0.03	
665	I043	3	3.6	0.75	0.06		726	G029	2.3	3.5	1.2	0.03		787	H038	3.4	3.4	0.75	0.03	
666	D084	3	3.6	1.05	0.05		727	D079	2.25	3.5	1	0.05		788	G010	3.4	3.4	0.8	0.03	
667	E021	2.95	3.6	0.95	0.05		728	C025	2.25	3.5	1.15	0.04		789	H044	3.4	3.4	1.3	0.03	
668	G078	2.85	3.6	1.2	0.05		729	B038	2.05	3.5	1.2	0.03		790	D018	3.4	3.4	1	0.04	ひび割れ
669	G059	2.75	3.6	1	0.04		730	H079	2.05	3.5	1	0.03		791	H086	3.4	3.4	0.56	0.04	
670	8	2.75	3.6	0.85	0.03		731	I006	2	3.5	1	0.03		792	B027	3.4	3.4	1.1	0.03	

ガラス玉 (小玉緑) 一覧

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	備考	
793	F062	3.4	3.4	1.05	0.03		845	G072	2.8	3.25	0.75	0.04		897	B033	2.15	3.15	0.75	0.02		
794	B039	3.4	3.4	0.9	0.03		846	B031	2.8	3.25	1.05	0.03		898	F084	2.1	3.15	1.2	0.02		
795	H035	3.4	3.4	0.8	0.03		847	H093	2.75	3.25	0.7	0.04		899	D062	2.05	3.15	0.8	0.03		
796	E097	3.4	3.4	1.2	0.03		848	F007	2.65	3.25	1.1	0.04		900	H015	1.5	3.15	1.1	0.02		
797	F012	3.4	3.4	1.1	0.03		849	B090	2.6	3.25	0.95	0.04		901	I040	3.1	3.15	0.8	0.05		
798	G038	3.4	3.4	1	0.03		850	F054	2.5	3.25	0.8	0.03		902	D093	2.7	3.1	0.95	0.03		
799	E068	3.4	3.4	1	0.02		851	C019	2.45	3.25	0.95	0.04		903	37	2.6	3.1	1.05	0.02		
800	H012	3.4	3.4	1.1	0.03		852	B006	2.45	3.25	0.9	0.03		904	C039	2.55	3.1	0.85	0.04		
801	B032	3.35	3.35	1.1	0.05		853	C075	2.45	3.25	0.8	0.03		905	H005	2.4	3.1	0.95	0.04		
802	E063	3.35	3.35	0.9	0.05		854	E053	2.35	3.25	1	0.03		906	C036	2.15	3.1	0.85	0.03		
803	B024	3.35	3.35	1.25	0.03		855	B009	2.2	3.25	0.95	0.03		907	H064	2.1	3.1	0.8	0.02		
804	32	3.35	3.35	0.75	0.04		856	F018	2.15	3.25	1	0.03		908	H073	2	3.1	0.75	0.02		
805	G032	3.35	3.35	0.85	0.03		857	G067	2.1	3.25	0.8	0.04		909	H008	1.95	3.1	1	0.02		
806	B093	3.35	3.35	0.9	0.04		858	D068	2.05	3.25	0.75	0.02		910	H066	1.9	3.1	0.65	0.03		
807	D029	3.35	3.35	1.2	0.03		859	C018	1.95	3.25	0.9	0.03		911	H053	1.65	3.1	0.6	0.02		
808	E083	2.3	3.35	1	0.03		860	C088	1.85	3.25	0.75	0.04		912	F032	1.55	3.1	0.95	0.01		
809	H058	2.1	3.35	1.05	0.03		861	C055	1.8	3.25	0.7	0.02		913	75	3.1	3.1	0.45	0.03		
810	B059	1.9	3.35	0.8	0.03		862	H084	1.5	3.25	1	0.02		914	E098	2.7	3.05	1	0.04		
811	G033	1.85	3.35	1.1	0.02		863	A041	3.35	3.2	0.85	0.06		915	D089	2.7	3.05	0.7	0.03		
812	D078	1.8	3.35	0.9	0.03		864	G070	3.15	3.2	0.85	0.04		916	F097	2.7	3.05	1.05	0.03		
813	C035	1.6	3.35	0.95	0.03		865	A023	3.1	3.2	1	0.06		917	H026	2.45	3.05	0.95	0.03		
814	H071	3.7	3.3	1.05	0.07		866	A013	3.1	3.2	1	0.02		918	F005	2.25	3.05	0.6	0.04		
815	E039	3.4	3.3	1.1	0.06		867	C029	3	3.2	0.75	0.04		919	C042	2	3.05	1	0.02		
816	B013	3.05	3.3	0.95	0.04		868	E051	3	3.2	1	0.04		920	H022	1.75	3.05	1.05	0.02		
817	G084	2.9	3.3	0.9	0.05		869	H090	2.95	3.2	0.85	0.04		921	B012	1.4	3.05	0.85	0.02		
818	53	2.7	3.3	1.15	0.05		870	H057	2.8	3.2	0.75	0.03		922	H099	3.55	3.05	0.55	0.04		
819	C072	2.7	3.3	0.95	0.04		871	A057	2.6	3.2	0.9	0.03		923	F049	3.05	3	1	0.03		
820	F033	2.7	3.3	1.1	0.04		872	G096	2.5	3.2	0.9	0.03		924	6	2.95	3	0.5	0.03		
821	39	2.65	3.3	0.55	0.03		873	H075	2.45	3.2	0.75	0.03		925	F016	2.95	3	0.5	0.03		
822	65	2.6	3.3	1.1	0.04		874	F034	2.2	3.2	1.1	0.04		926	G047	2.85	3	0.9	0.04		
823	E013	2.6	3.3	0.75	0.03		875	H048	2.2	3.2	0.95	0.03		927	A024	2.45	3	0.45	0.02		
824	H069	2.6	3.3	0.95	0.03		876	C073	2.15	3.2	0.65	0.03		928	H055	2.3	3	0.45	0.03		
825	A022	2.5	3.3	1.15	0.04		877	H045	2.15	3.2	0.75	0.03		929	E044	1.85	3	0.95	0.02		
826	E044	2.45	3.3	0.7	0.04		878	H042	2.1	3.2	0.6	0.02		930	E071	2.6	2.95	0.95	0.03		
827	C068	2.45	3.3	0.85	0.03		879	H036	2.05	3.2	0.85	0.02		931	G025	2.45	2.95	0.7	0.02		
828	D099	2.45	3.3	0.7	0.03		880	C062	1.95	3.2	0.95	0.03		932	H082	1.85	2.95	0.8	0.02		
829	A052	2.25	3.3	1.2	0.03		881	E096	1.6	3.2	1.15	0.03		933	A031	3.1	2.9	1.1	0.03		
830	E055	2.2	3.3	0.9	0.03	一部欠損	882	G012	1.55	3.2	0.1	0.02		934	D046	2.95	2.9	0.45	0.04		
831	C069	2.05	3.3	1.05	0.04		883	H024	1.45	3.2	0.9	0.02		935	G057	2.75	2.9	0.75	0.03		
832	C033	2	3.3	0.45	0.03		884	C077	1.4	3.2	0.8	0.02		936	H033	1.85	2.9	0.5	0.02		
833	C057	1.95	3.3	1.05	0.03		885	B060	3.25	3.2	0.8	0.05		937	B056	2.85	2.85	0.9	0.04		
834	B074	1.9	3.3	0.9	0.02		886	H016	3	3.15	0.9	0.05		938	B088	2.15	2.85	0.7	0.03		
835	I022	1.75	3.3	1	0.02		887	B073	2.95	3.15	0.95	0.04		939	G042	1.3	2.85	0.65	0.02		
836	F076	3.75	3.25	1.15	0.05		888	G082	2.75	3.15	0.5	0.03		940	H046	2.25	2.8	0.55	0.02		
837	48	3.65	3.25	0.85	0.05		889	C050	2.5	3.15	0.8	0.04		941	H077	3.15	2.7	0.85	0.03		
838	F036	3.35	3.25	0.55	0.06		890	H097	2.4	3.15	1.1	0.04		942	46	2.85	2.7	1	0.04		
839	83	3.15	3.25	0.8	0.04		891	I026	2.4	3.15	0.85	0.03		943	C087	2.1	2.65	0.45	0.03		
840	C066	3.1	3.25	0.95	0.04		892	E011	2.35	3.15	1.1	0.04		944	B017	2	2.65	0.5	0.02		
841	E035	3	3.25	0.8	0.04		893	H049	2.35	3.15	0.95	0.03		945	E001	4.65	2.5	1.2	0.07		
842	2	2.85	3.25	0.8	0.05		894	H080	2.35	3.15	1.1	0.03		946	E002	3.45	2.45	1	0.04		
843	C030	2.85	3.25	0.8	0.05		895	C058	2.25	3.15	0.55	0.04		947	E060				0.04	破片	
844	C059	2.8	3.25	0.7	0.05		896	I036	2.15	3.15	0.8	0.04									

第7章 西山遺跡・西山古墳群

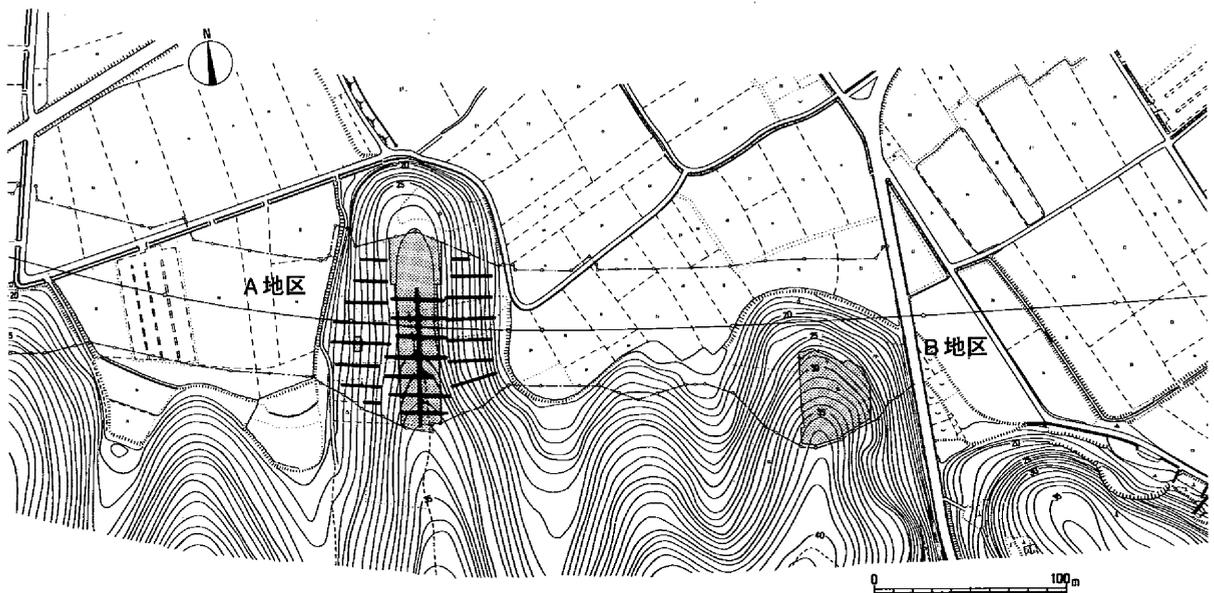
第1節 位置と経過

西山遺跡・西山古墳群は岡山県総社市黒尾に所在する。ここは総社平野の北縁であり、北にひかえる吉備高原からは多くの低丘陵が南の方向に向かって派生している。その内、東に向かってのびている標高30～50mの低丘陵は一見すると尾根続きに思われるが、中央付近を青谷川が南に流れており、これによって東西に分かれている。その東側の丘陵が今回調査の対象となった。

丘陵自体は作山古墳の北約3kmにあり、南斜面は平野部からはよく見えるが、調査を実施した西山遺跡・西山古墳群は、この丘陵の東端で、北に夔状に派生する尾根に位置している。便宜上、最も北に張り出した尾根の先端部をA地区、小さな尾根を挟んでその東方225mに存在する尾根をB地区と称することとした。

この周辺の丘陵には多くの古墳群が存在していることが以前から知られており、昭和45～46年(1970～1971)にかけては、住宅団地開発に関連して確認調査や発掘調査が行われた場所でもあった。A地区の西山5号墳は当時保存予定地であったが、B地区はⅥ区として確認調査が実施されていた。中国横断自動車道はここを通ることとなり、発掘調査を実施した。

A地区では、尾根先端近くの西山5号墳が路線内に所在することは明らかであった。しかし、古墳の南側には細長く緩斜面が認められ、弥生時代の集落などが存在する可能性があったため、東西の斜面とともにトレンチ23本を設定し、確認調査を行った。これにより、尾根上を中心に遺構が確認され、



第1図 調査区位置図 (1/4000)

路線内の2050㎡を対象として、平成6年8月22日～11月21日の期間にわたり発掘調査を実施した。調査の結果、西山5号墳のほかに、弥生時代の竪穴住居や土壇、古墳時代あるいは時期不明の土壇が検出された。

B地区の東斜面は果樹栽培などが行われており、段状に削平されていた。しかし尾根上には、西山1号墳を含めて4箇所の高まりが確認されていたため、そこを中心として平成5年(1993)8月17日から11月8日にかけて発掘調査を実施した。この調査の過程で、主に東斜面から古墳以外に竪穴住居や掘立柱建物、土壇、土壇墓が検出され、調査区を東に拡張する必要性が生じた。このため平成5年12月9日から平成6年1月21日にかけて、あらためて拡張部分の調査を行った。調査面積は最終的に1531㎡になった。

なお後述するが、B地区の古墳名称は、「総社市西山周辺古墳群」(総社市教育委員会 昭和47年)と『岡山県遺跡地図』第三分冊(岡山県教育委員会昭和50年)とでは若干相違が認められた。このため調査対象の古墳がどれに相当するか検討が必要であった。1号墳はほぼ確定できたが、それ以外の3基の古墳については、新規発見である可能性が高いと判断され、従来の西山古墳群の番号に続けて25・26・27号墳とした。(柴田)

日誌抄

平成5年8月17日(火) 西山遺跡B地区、西山1・25・26号墳調査着手

11月8日(月) 西山遺跡B地区、西山1・25・26号墳調査終了

(11月4日(木)～12月8日(水) 中山遺跡・中山古墳群の調査)

12月9日(木) 西山遺跡B地区、西山27号墳調査着手

平成6年1月21日(金) 西山遺跡B地区、西山27号墳調査終了

8月22日(月) 西山遺跡A地区、西山5号墳調査着手

11月21日(月) 西山遺跡A地区、西山5号墳調査終了

第2節 西山遺跡の概要

1. A地区 (図版42・43)

A地区は、北へのびる低丘陵部にあたり、B地区はA地区から東約200mの丘陵部に位置する。調査の結果、当初より明らかとなっていた古墳1基と丘陵上を中心に弥生時代の竪穴住居4軒などが確認された。

弥生時代の遺構としては、丘陵上と頂部よりやや下った東斜面に弥生時代後期前半の竪穴住居が4軒検出された。丘陵上に検出された竪穴住居は円形のもので壁体溝や住穴などから数回の建替えが行われたと考えられる。東斜面に存在した竪穴住居は3軒で方形を呈すると思われる。また、丘陵上の平坦部を中心に柱穴状の土壇を多数検出したが、竪穴住居・建物などを構成するには至らなかった。弥生時代以外としては、調査区の南端部で古墳時代土壇が1基存在し、また丘陵西斜面には時期は不明であるが焼土・炭を多量に含む土壇が確認されている。以上のように、丘陵上に存在した遺構・遺物は希薄で、遺構も後世の削平により残存状況が悪かった。

一方古墳は、墳丘の約3/4が用地内にかかっており、径約17m前後の円墳と考えられた。主体部に

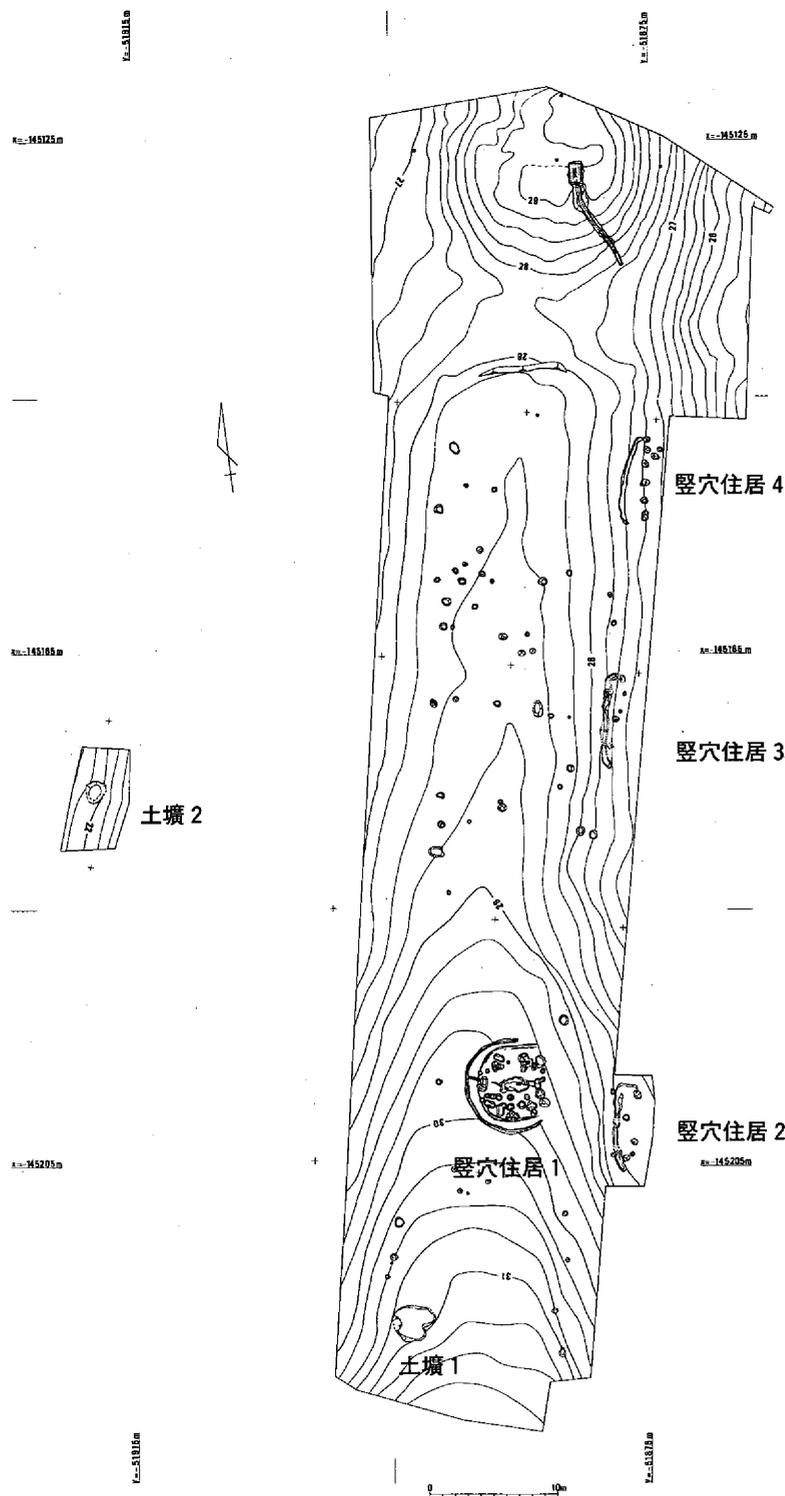
ついで、古墳頂部付近から相当量の石材を他地点に移動されたと地元関係者からの情報を得ていた。さらに、古墳中央やや東寄りに長軸を南北方向にとる長さ約170cm、幅約110cmの土壇(主体部)が検出された。床面には5~10cmの河原石が敷き詰められていたが、出土遺物は認められなかった。また、土壇の南辺からは排水溝が盛土を切り込んで南東方向に検出された。しかしながら、古墳からは出土遺物もなく時期は不明である。

(1) 竪穴住居

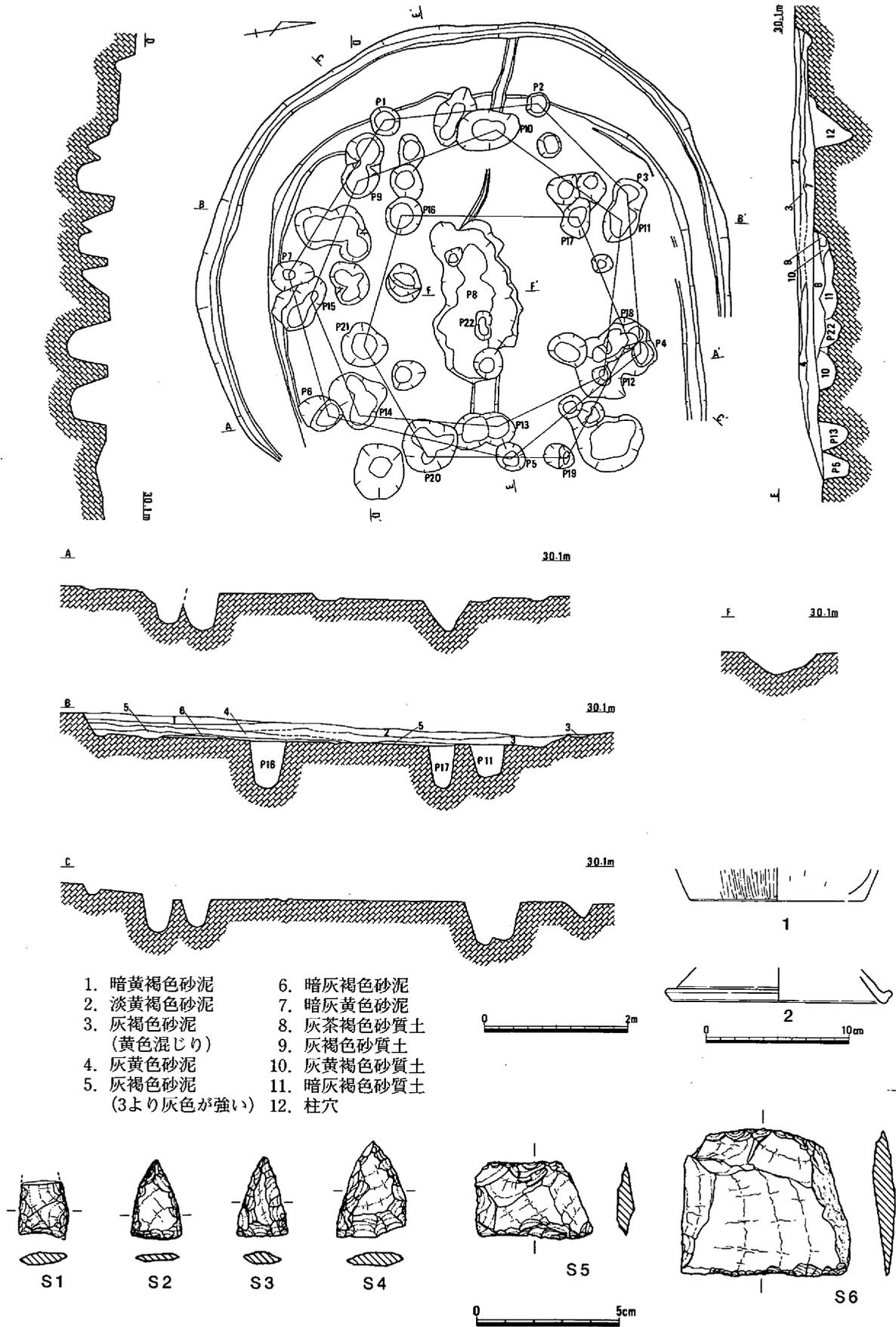
竪穴住居1 (第3図)

この竪穴住居は、調査区南側の丘陵上の平坦部に検出された。竪穴住居は、後世の削平を大きく受けており残存状況も悪く、東側の壁体溝は検出できなかった。規模は、径約740cmの円形を呈すると考えられ、P1~P7の7本前後の柱穴で構成される。また、下部の内側にも壁体溝が検出され、その規模は径約600cm前後と推定できる。柱穴は、多数検出されており、2回以上の建替えが行われたと考えられる。柱穴の構成は、推定はしがたいものの6~7本に

よって構成されていたと思われる。また、竪穴住居の中央部には中央穴が存在しており、竪穴住居西側の中央穴から壁体溝に仕切り溝も1本検出された。出土遺物は、図示した以外に土器が少量検出された。これらの土器は弥生中期末の特徴を示していた。また、石器もS1~S6が検出されており、S1~S4の石鏃、S5、S6の楔形石器でいずれもサヌカイト製である。



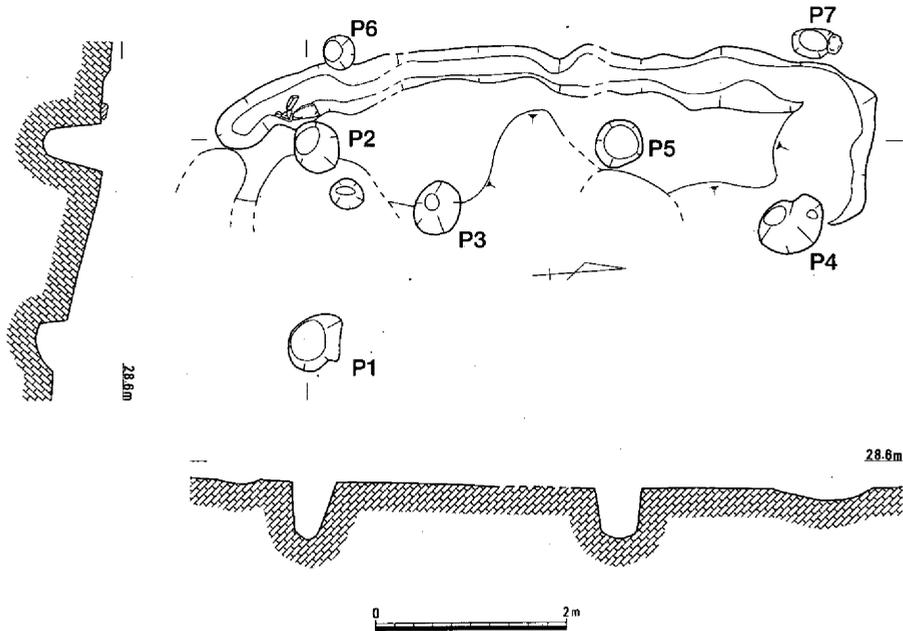
第2図 A地区遺構全体図 (1/600)



第3図 竪穴住居1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2)

竪穴住居 2 (第4図、図版43)

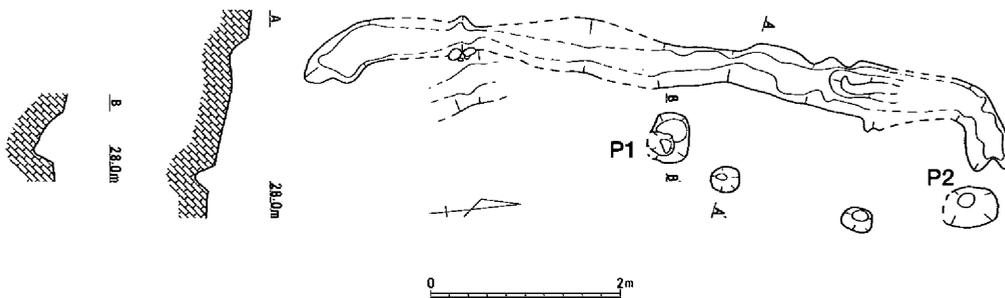
竪穴住居 2 は、調査区の南東部に位置し、竪穴住居 1 の東約 5 m の丘陵稜線上よりやや下った東斜面に検出された。竪穴住居は、後世の削平を受けており残存状況は良くなく、竪穴住居の一部を確認するにとどまった。しかしながら壁体溝および柱穴が数基残存していた。柱穴は、P1・P2・P5・P3・P4が対になると考えられ、複数の建替えがおこなわれた可能性が考えられる。また、壁体溝の外側に検出されたP6・P7もP1～P5と同質の埋土であり、補助的な柱穴として使用された可能性がある。出土遺物としては少量検出された。竪穴住居 1 と同時期であろう。



第4図 竪穴住居 2 (1/80)

竪穴住居 3 (第5図)

竪穴住居 3 は、調査区ほぼ中央部の東端に位置し、丘陵稜線上よりやや下った東側斜面に検出された。竪穴住居は、果樹園の掘削により残存状況は良くなく、壁体溝の一部と柱穴を数基検出したにとどまった。柱穴は、P1・P2がその位置関係から竪穴住居を構成する柱穴と考えられる。壁体溝は、丘陵上側に断続的に検出された。幅は40～50cmで、深さは約10cmを測る。出土遺物は土器の小片が少量検出されたが、時期を限定できるものではなかった。しかしながら状況からみて竪穴住居 1 と同時期と考えられる。

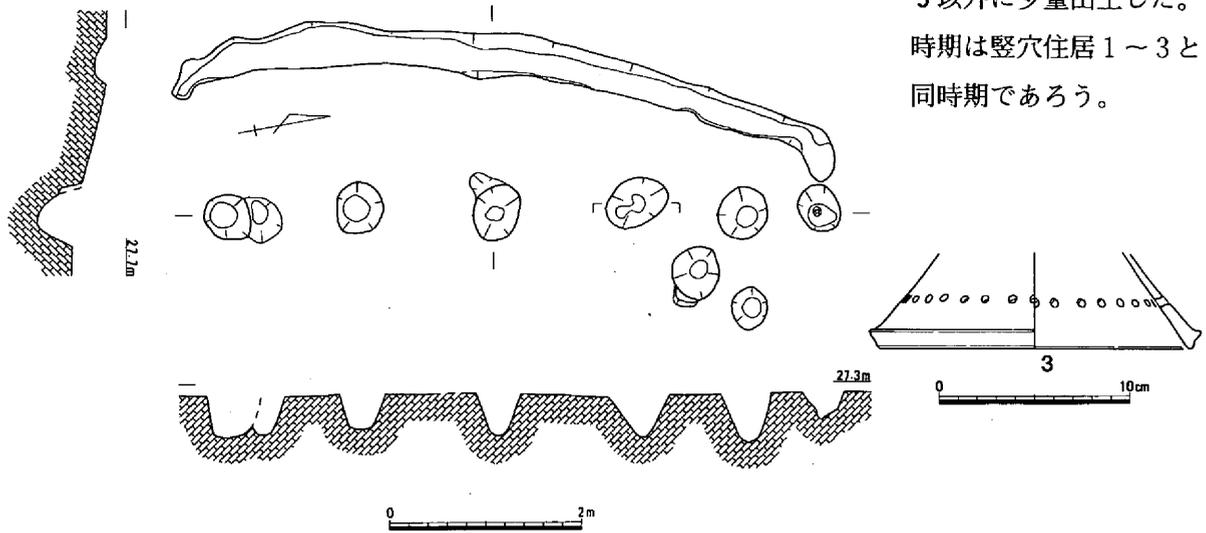


第5図 竪穴住居 3 (1/80)

竪穴住居 4 (第6図、図版43)

この竪穴住居 4 は、丘陵上よりやや下った東側斜面に位置し、竪穴住居 3 の北約12mに検出された。竪穴住居の残存状態は悪く、壁体溝の一部と柱穴が残存していた。柱穴は9本検出され、その内7本が直線的に位置しており、状況からみて何回の建替えがおこなわれた可能性が考えられる。柱穴は20~30cmの直径で、深さは30~50cmを測る。壁体溝は、丘陵上部が残存しており、幅約40cm、深さ約10cmを測る。また、竪穴住居 2・3と同様に海拔27~28mの線上に構築されている。出土遺物は図示した

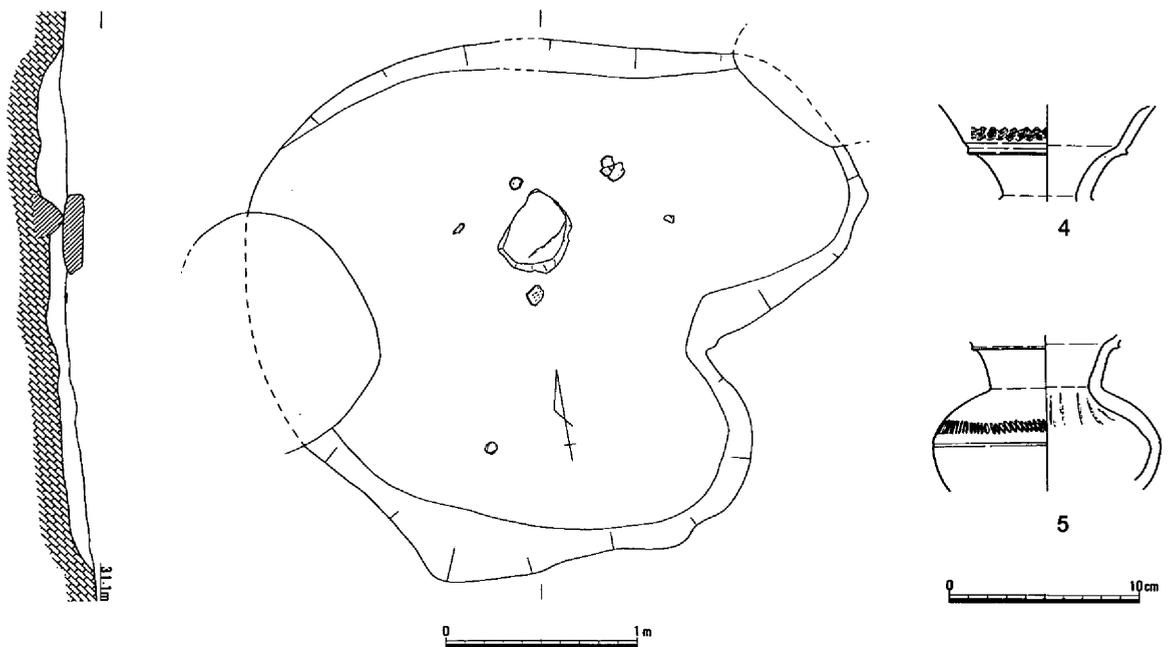
3以外に少量出土した。時期は竪穴住居 1~3と同時期であろう。



第6図 竪穴住居 4 (1/80) ・出土遺物 (1/4)

(2) 土壇

土壇 1 (第8図、図版46)

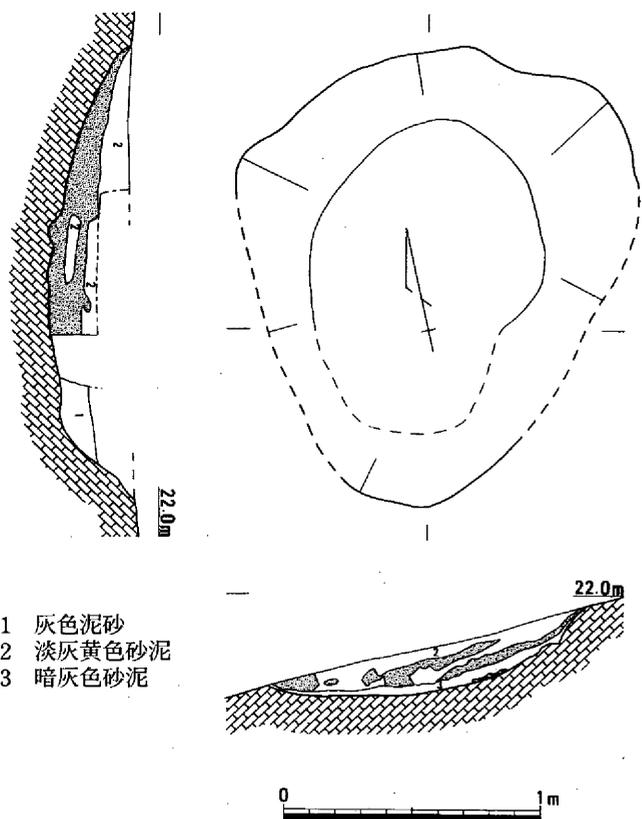


第7図 土壇 1 (1/40) ・出土遺物 (1/4)

この土壌は、調査区の南端部の丘陵稜線上よりやや西側の斜面に位置している。土壌は、長さ約280cmを測り、不整形な形状を呈している。土壌の一部は後世の削平を受けている。深さ約10cmを測る。土壌のほぼ中央部には、40×30cmの平坦な石が存在した。土壌内からは図示した4・5の須恵器が出土したが、土壌の性格等については不明である。

土壌2 (第8図、図版43)

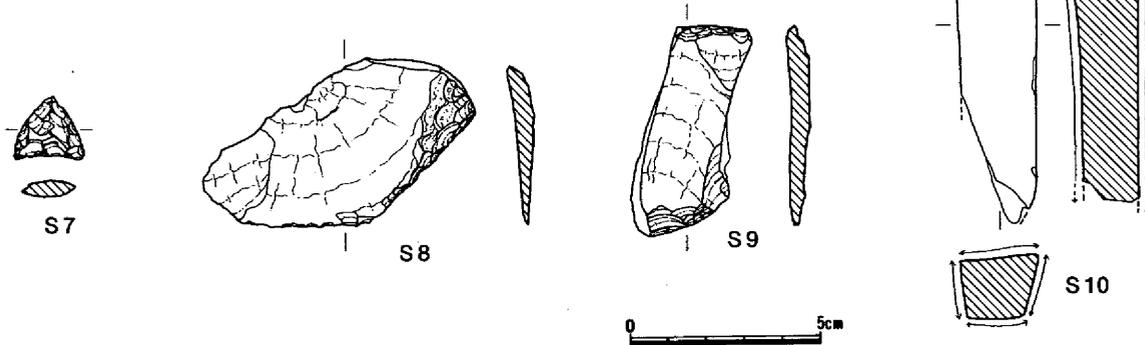
この土壌は、トレンチ調査の段階で丘陵西斜面に検出されたもので、調査区を設けて調査を実施した。土壌は、西側斜面の中位に位置しており、規模は約180×150cmの楕円形を呈している。深さは約30cmを測る。土壌内は、下層に厚く焼土が埋積しており、炭も少量混じっていた。出土遺物はなく、時期・性格については不明である。なお、西斜面には第1図のように8本のトレンチを設定したが類似するような遺構・遺物は検出されていない。



第8図 土壌2 (1/30)

(3) 遺構に伴わない遺物 (第9図、図版46)

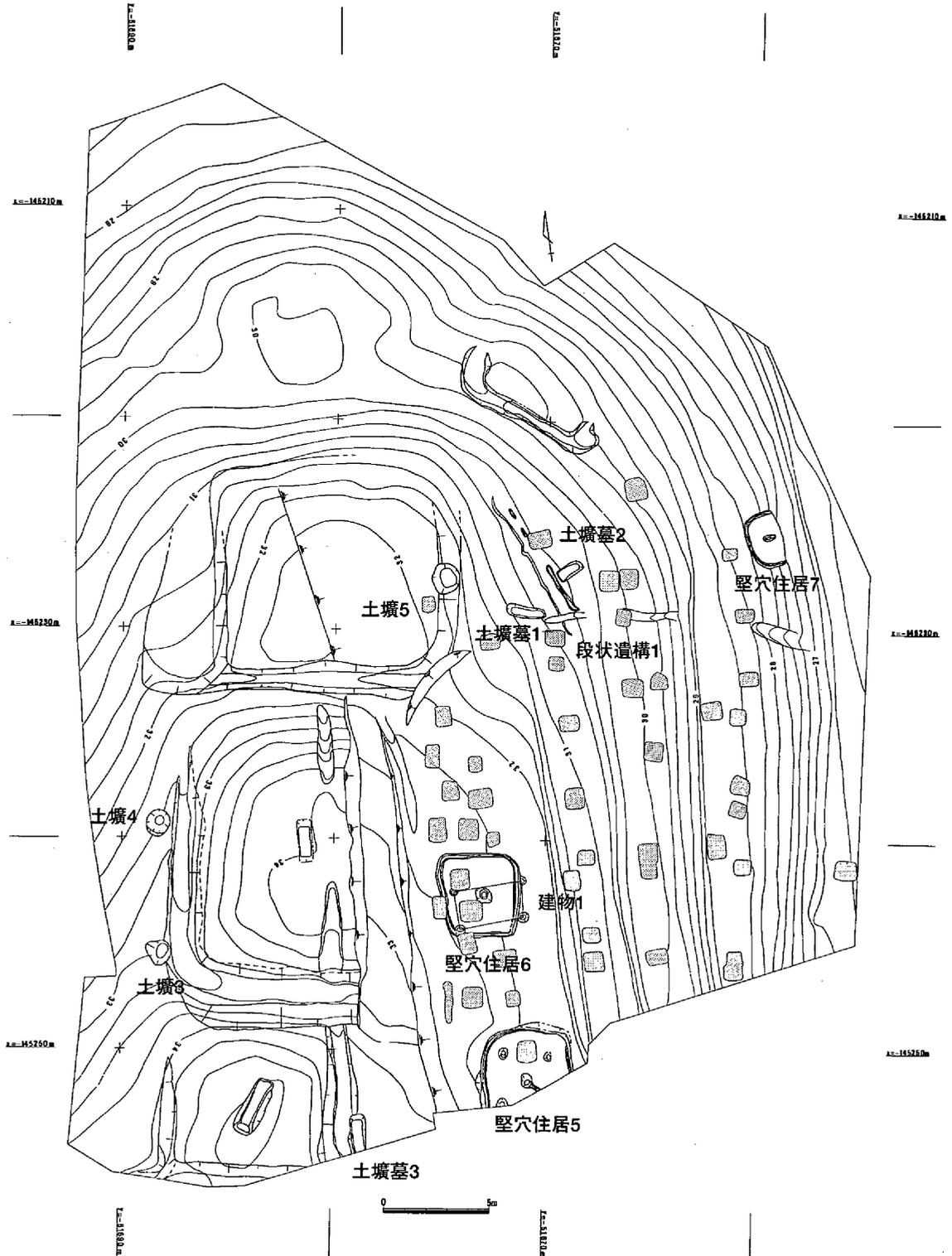
A地区では、出土した遺物はさほど多くなく、竪穴住居などの遺構からも少量の遺物しか検出されていない。遺構も竪穴住居4軒など、数的にも少なかった。しかし、丘陵上の竪穴住居1から古墳の間には柱穴状の土壌が多数検出されており、図示したS7～S10などの石器類がその周辺部から出土している。S7～S9はサヌカイト製で、石鏃、刀器で、S10の砥石は流紋岩製。



第9図 遺構に伴わない遺物 (1/2)

2. B地区

B地区は西山1号墳の所在する丘陵上から、その東斜面にかけての部分であり、後述する古墳群以外に弥生時代の住居や中世の木棺墓等が検出されている。当初調査は古墳群を対象としていたため、調査区は尾根上の部分のみであったが、周辺遺構の存在から東斜面に対象範囲を拡大した。



第10図 B地区遺構全体図 (1/300)

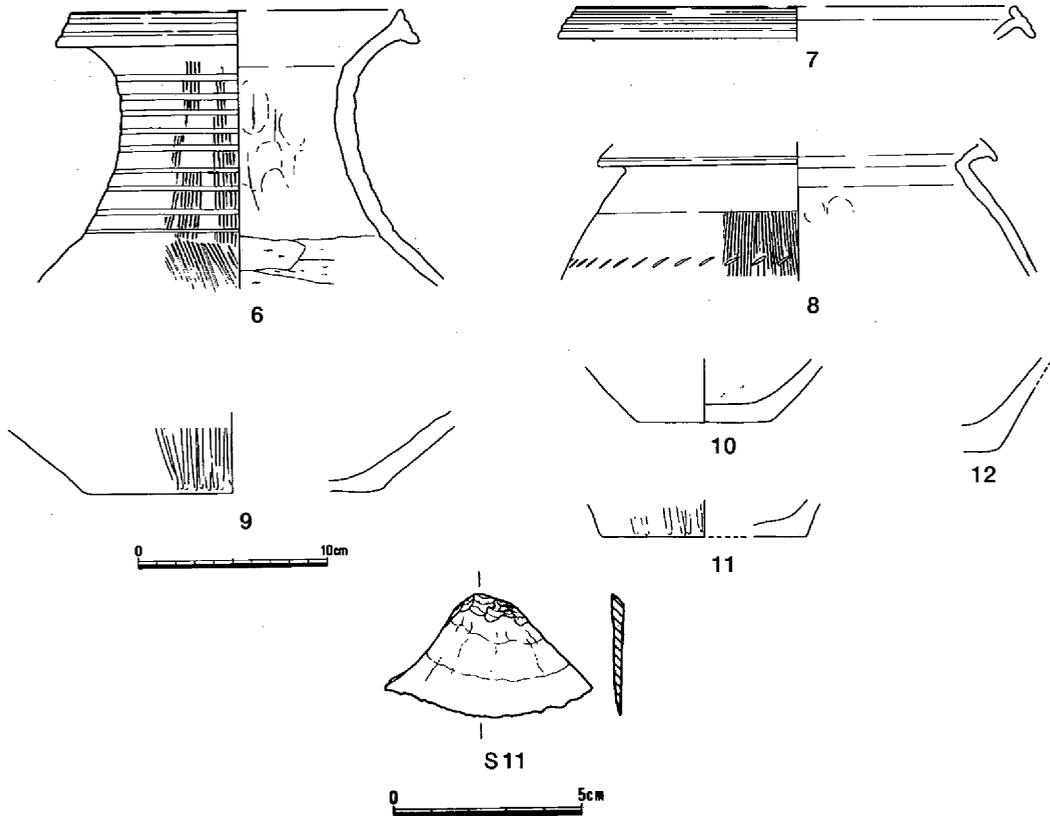
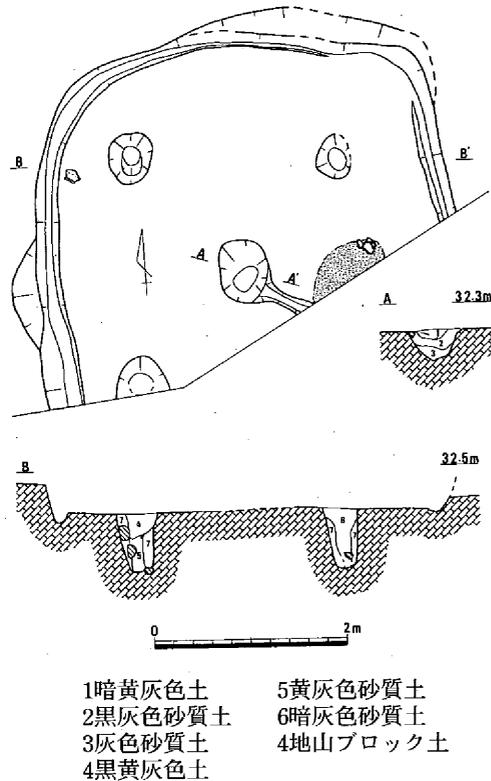
(1) 竪穴住居

竪穴住居 5 (第11図、図版44)

調査区南端で検出されたもので、約3分の1が調査区外にあり全容は明らかでない。竪穴平面は隅丸方形に近く、規模は径440cmと推定され、壁体溝も存在する。床面では柱穴3本と中央穴が検出され、4本柱でやや西側に偏った位置に柱が立つものと判断した。柱穴は床面から深さ30cm、柱径はその痕跡から15cm前後を測るものと推定される。径約50cm、深さ約30cmを測る中央穴には幅12cmの浅い溝が取り付いており、壁体溝に接続するタイプと考えられる。また床面の一部に炭化物の広がりが見られる。

遺物は推積土中、床面からいずれも少量の土器片、サヌカイト製の剥片石器が出土している。

本住居の時期は、床面から出土した8の示す弥生時代中期末と考えられる。



第11図 竪穴住居5 (1/80) ・出土遺物 (1/4・1/2)

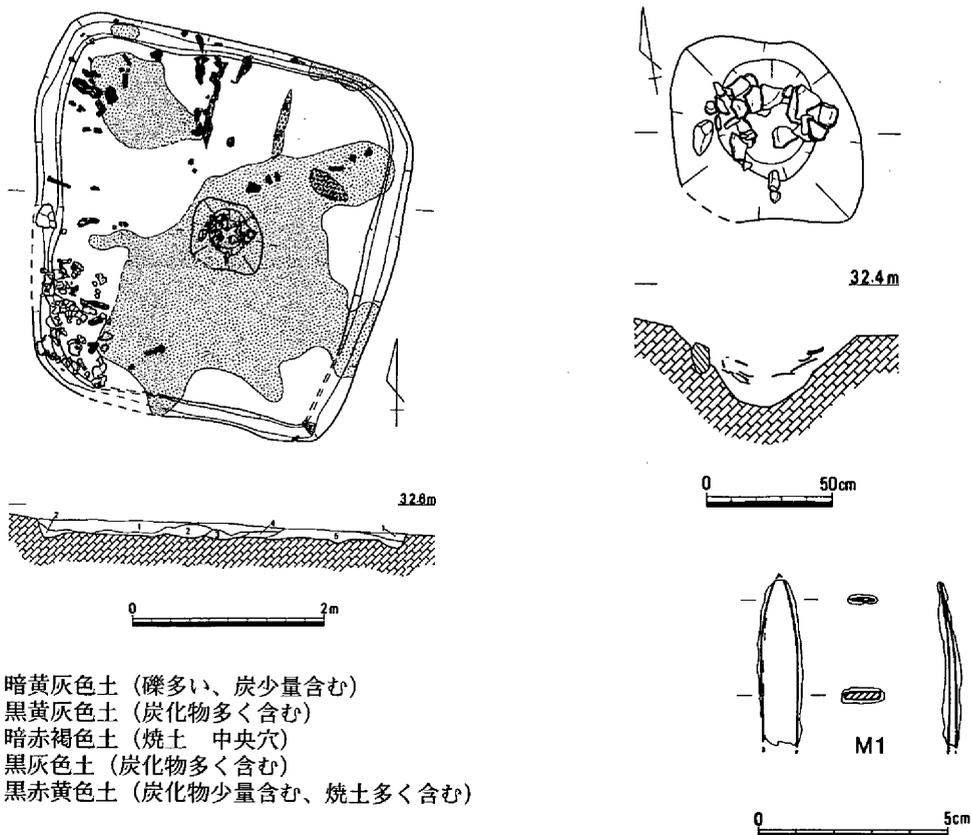
竪穴住居 6 (第12・13図、図版45・46)

前記した住居の北側4.5mに位置するもので、本来この上に造られていた1号墳と同様、後世の大規模な削平により床面付近のみが残存していた。竪穴平面は隅丸方形に近いが、南辺が短くやや歪な形状を呈している。床面付近では多量の炭化材や焼土が出土しており、明らかな焼失状況を示していた。焼失状況は、北西部を中心に垂木材と推定される炭化材が残っていたことから、これと反対の南東側が先に燃烧したものと考えられる。樹種鑑定の結果、サクラ属、コナラ属コナラ亜属コナラ節・アガシ亜属、シイノキ属またはクリなど、多くの種類が確認されている。

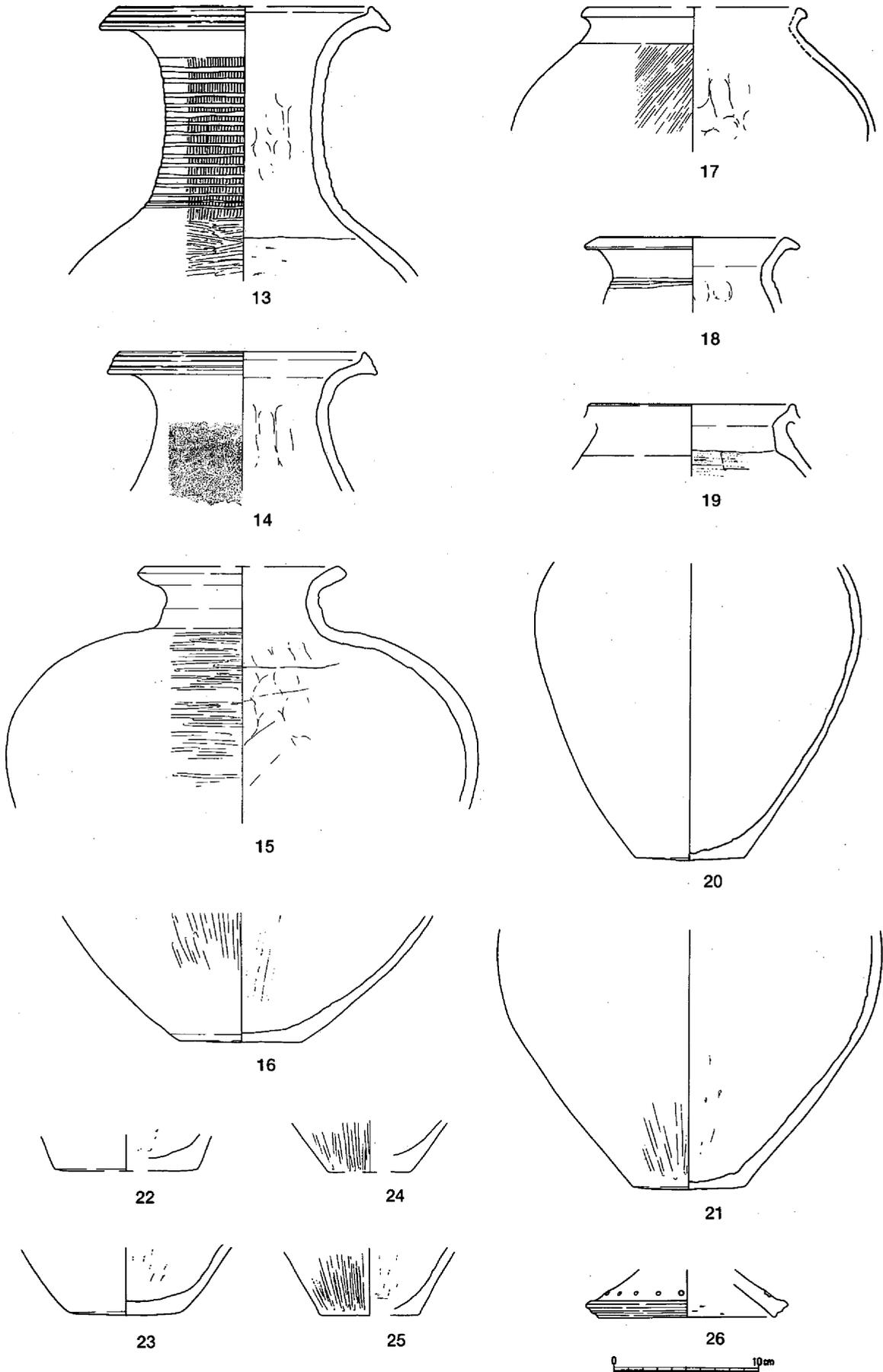
床面からは壁体溝と中央穴を検出したが、柱穴は全く存在しておらず、壁材、あるいは周堤帯で屋根を支えるタイプの住居と推定される。中央穴は上面が方形に近い形状を呈し、径75cm前後とやや広がっているが、下半部は収束してピット状を呈しており、内部からは土器片が集中して出土した。遺物は、南西コーナーの床面からややまとまった量の土器が出土しているが、本来床面に置かれたものというよりは焼失後に廃棄されたものと観察された。いずれにせよほぼ同時期の一括資料の可能性が強いものである。

出土した土器は13・14などの長頸壺、それ以外の頸部の短い壺が中心で、甕がほとんど見られない点が注意される。また堆積土から鉢の破片M1が出土している。

本住居は柱穴を持たない小型の竪穴住居の構造を考える上で、貴重な資料といえよう。その時期については出土土器から竪穴住居 5 に後出する弥生時代後期初頭頃と考えられる。

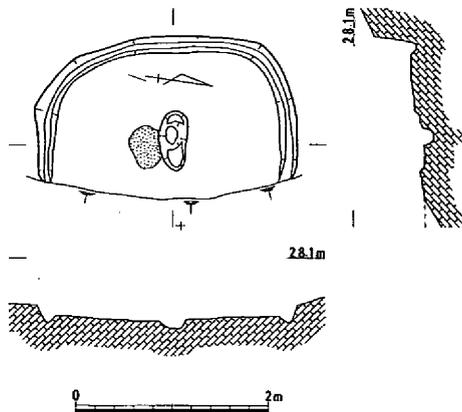


第12図 竪穴住居 6 (1/80) ・中央穴 (1/30) 及び出土遺物① (1/2)



第13図 竪穴住居6出土遺物② (1/4)

竪穴住居7 (第14図)



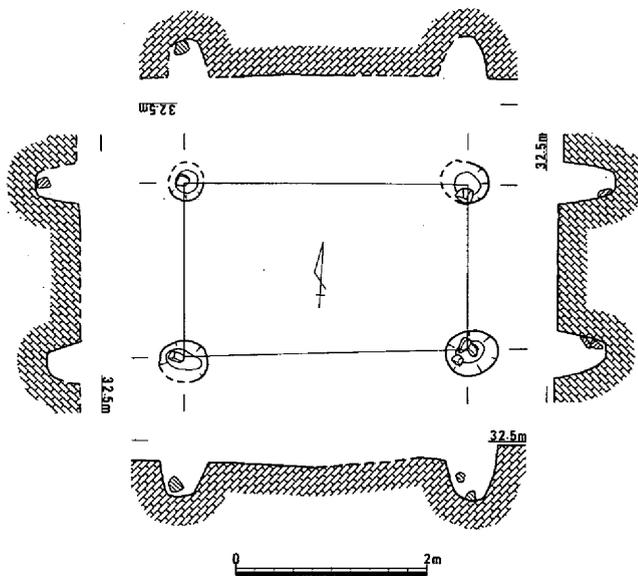
第14図 竪穴住居7 (1/80)

調査区東端部の急斜面で検出されたもので、東側は畑地造成時の削平により消失している。竪穴は平面隅丸方形を呈し、規模は径270cmを測る小型なものである。検出当初は堆積土も非常に硬化しており、その規模からも土壌と想定していた。床面で壁体溝を検出した時点で竪穴住居と判断し、柱穴を探したが、中央穴のみ検出した。中央穴は長楕円の浅い土壌の中央部がビット状となるもので、規模は60×30cm、深さ約10cmを測る。中央穴の南側床面には径約50cmの範囲に炭化物の広がり認められた。

遺物は全く出土していないが、住居状態から竪穴住居6に近い時期のものと考えておきたい。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第15図)



第15図 建物1 (1/80)

竪穴住居6と重複して検出した東西棟の建物跡で、柱穴配置から1×1間と考えられる。規模は東西方向298cm、南北方向178cm前後を測る。柱穴は径50cm前後、深さは30~50cmを測り、いずれの柱穴からも内部には詰め石と推定される拳大の自然石が認められた。

なお、前述した竪穴住居6との切り合い関係は明確なものではないが、竪穴住居の貼り床を除去して検出できたことから、当建物はこれに先行するものと考えている。

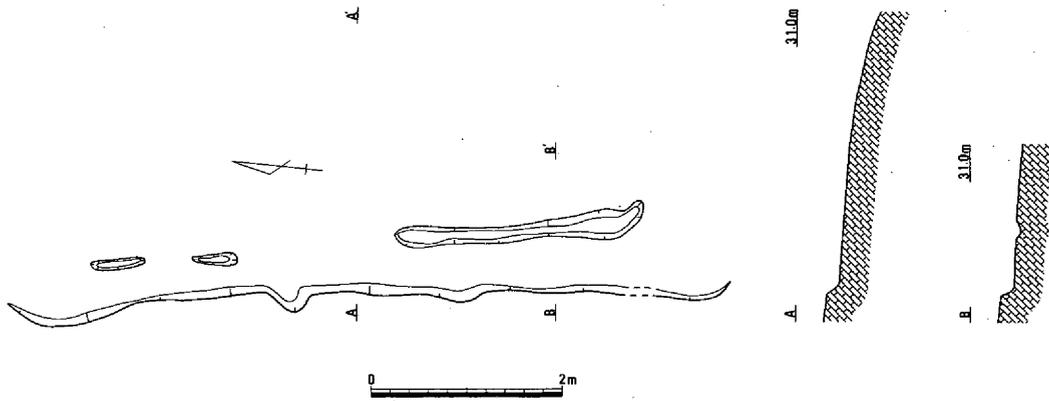
時期は切り合い関係から弥生時代後期初頭以前と考えられ、竪穴住居5と同時期になる可能性が強い。

(3) 段状遺構

段状遺構1 (第16図)

25号墳の東側斜面で検出した加工段で、床面の一部がわずかに残存していた。規模は南北7.5mを測り、東西は周辺の地形から3m以上はあったものと考えられる。床面では壁面から40cm離れた位置に、本来は連続していたと推定される壁体溝状の溝が検出された。柱穴は検出されていない。

時期の判る遺物は出土していないが、遺構自体から弥生時代中期末頃と推定している。斜面に立地することから平地の遺跡では出土できない遺構(平地式住居、屋外作業空間)と考えられる。

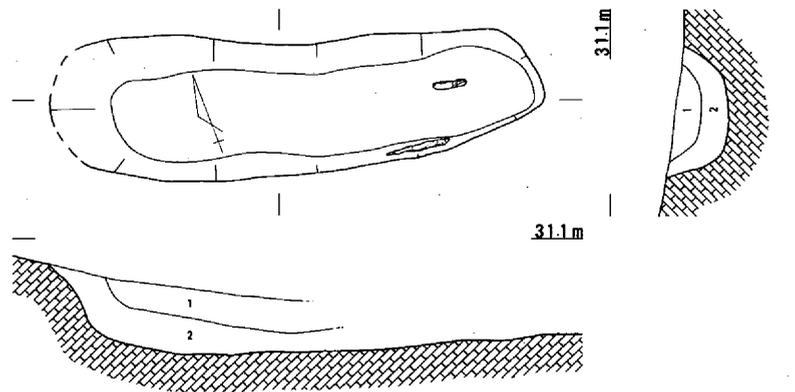


第16図 段状遺構1 (1/80)

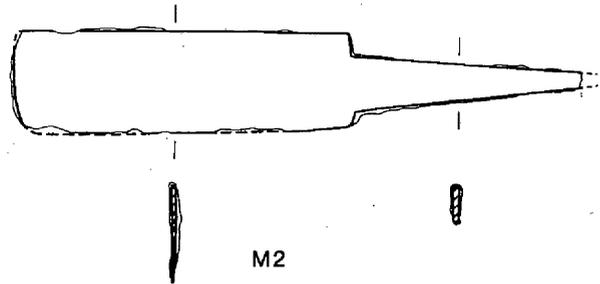
(4) 土壙墓

土壙墓1 (第17図、図版46)

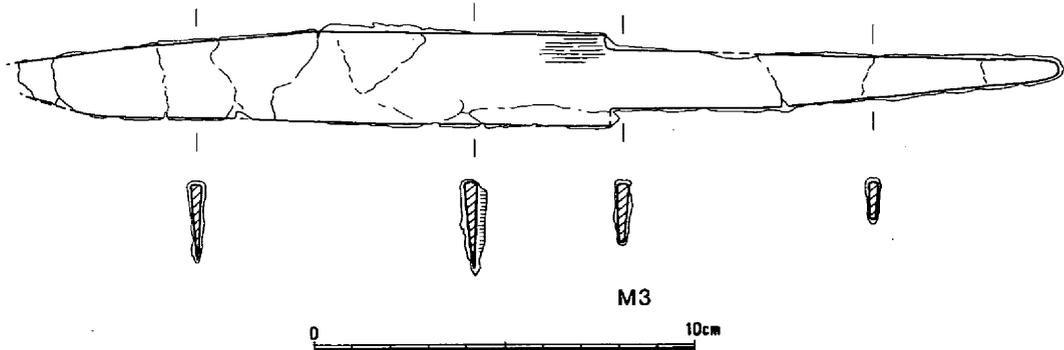
段状遺構1の西側斜面において検出したもので、形態・規模から土壙墓と判断したものである。また、堆積土の状況から木製の蓋が存在していた可能性がある。規模は検出面で長さ194cm、幅58cm以下を測る。床面東側からは剃刀と小刀1点ずつ出土している。M2は全長15.1cmを測る剃刀と推定される。身部は長さ10cm、幅2.8cmを測り、3方向とも刃部を造り出している。M3は全長28.4cmを測る小刀で身部には鞘の木質がわずかに残る。土壙墓の時期は墓壙形態や出土遺物から12世紀末～13世紀頃としておきたい。



1 暗黄灰色土 (地山ブロック少量含む)
2 暗灰色土 (地山ブロック多く含む)



M2



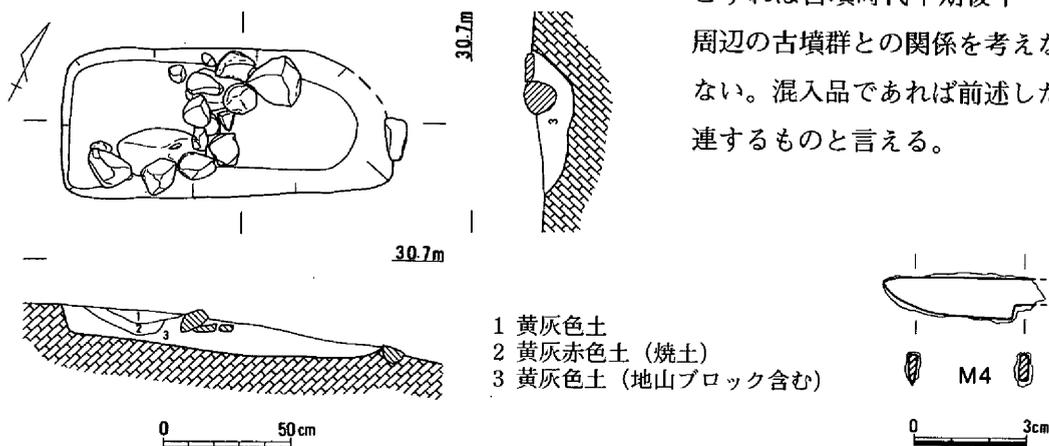
M3

第17図 土壙墓1 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

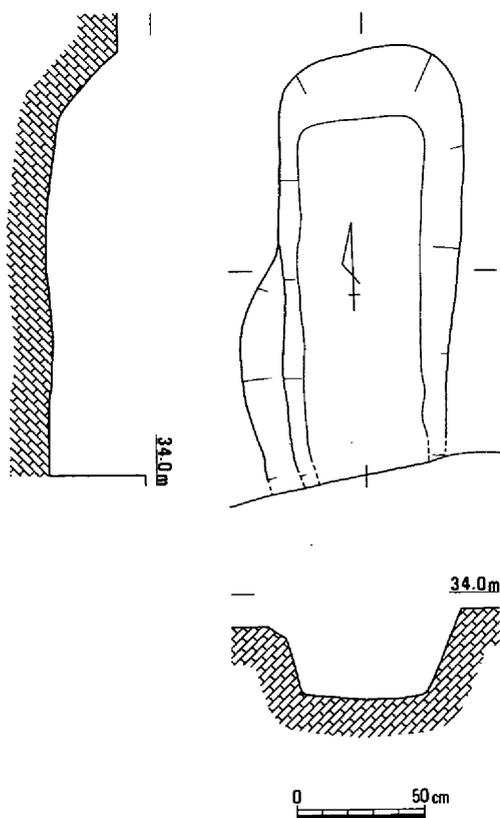
土壙墓 2 (第18図)

段状遺構 1 と重複して検出されたもので、形態・埋土状況から土壙墓と判断したものである。主軸はほぼ東西方向にとり、斜面に直交する。規模は検出面で長さ127cm、幅60cmを測り、内部には拳～人頭大の自然石が認められていた。これらの石材は一部転落した状況を示していたが、大半は底面側壁沿いに据え付けた状態と観察され、内部に木棺等を支えていた可能性がある。この石材上面付近で鉄器片が1点出土している。M4は長頸鎌身部、あるいは刀子の破片と考えられるもので、刃部は片刃で木質らしき痕跡が残り、長さ3.5cm、幅1cmを測る。本土壙墓の時期は出土した鉄器が長頸鎌

とすれば古墳時代中期後半～後期となり、周辺の古墳群との関係を考えなければならない。混入品であれば前述した中世墓と関連するものと言える。



第18図 土壙墓 2 (1/30) ・出土遺物 (1/2)



第19図 土壙墓 3 (1/30)

土壙墓 3 (第19図)

26号墳の東側墳裾から検出されたもので、南端部は調査区外にあり、全容は不明なものである。

主軸は南北方向にとり、26号墳の墳丘と平行し、規模は検出面で長さ165cm以上、幅70cm前後を測る。木棺痕跡は検出できなかったが、墓壙の形態・規模から存在した可能性は十分ある。

遺物は出土していないが、埋土中に埴輪片が全く見られなかったことから、26号墳等の埴輪が転落する以前に造られたものと推定される。また平面的には26号墳を意識して造られたことは間違いなく、これの墳丘外埋葬と考えてよいと思われる。その場合墓壙の深さから墳裾にある程度土が堆積した後のものであると推定される。

以上のことから土壙墓の時期は26号墳とほぼ同時期と考えられる。

(5) 土壙

土壙3 (第20図)

1号墳の南西側の墳裾付近で検出された土壙である。位置的には土壙4と同様で、堆積土の状況も共通していた。平面形態は不整形円で、規模は検出面で径120cm前後、深さ20cm以上を測る。遺物は少量の埴輪片が出土しているが、いずれも細片で風化磨滅したものであった。

時期は出土した埴輪片の状況からかなり新しいものと考えられるが、東斜面の肥料穴とは異なるものである。

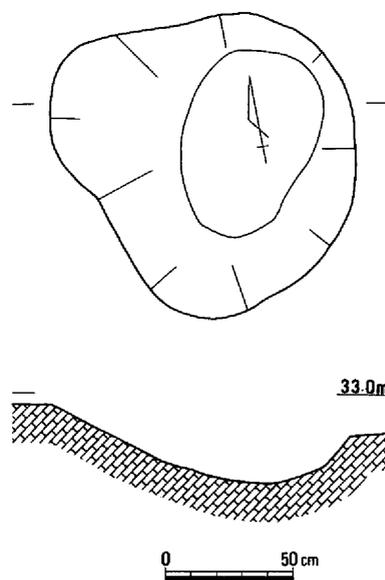
土壙4 (第21図)

前述した土壙3の北側5mの地点で検出した土壙で、平面はほぼ円形を呈している。規模は径110cm前後、深さ55cm以上を測る。底面直上で拳大の自然石2点が出土したほか、遺物は全く見られなかった。

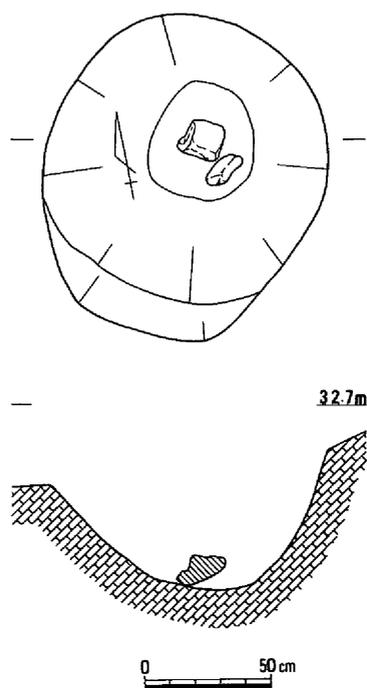
土壙の時期は不明であるが、堆積土の状況から土壙3と同様の時期に造られたものと推定される。

土壙5 (第22図)

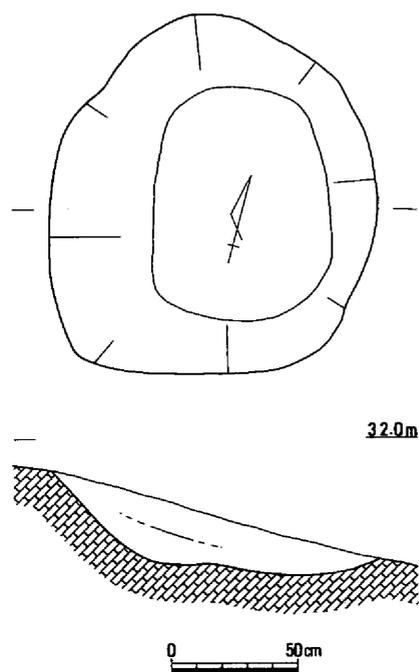
25号墳の東側墳丘で検出された土壙で、堆積土の中央付近には薄い炭層が認められる。検出面での平面形はやや不整なものであるが、本来は隅丸方形を呈していた可能性が高いと思われる。規模は検出面で東西128cm、南北141cm、深さ40cmを測る。出土遺物は特に認められなかったが、25号墳の盛土下からの掘り込みの可能性が高いと思われ、時期は25号墳築造以前と考えられる。(椿)



第20図 土壙3 (1/30)



第21図 土壙4 (1/30)



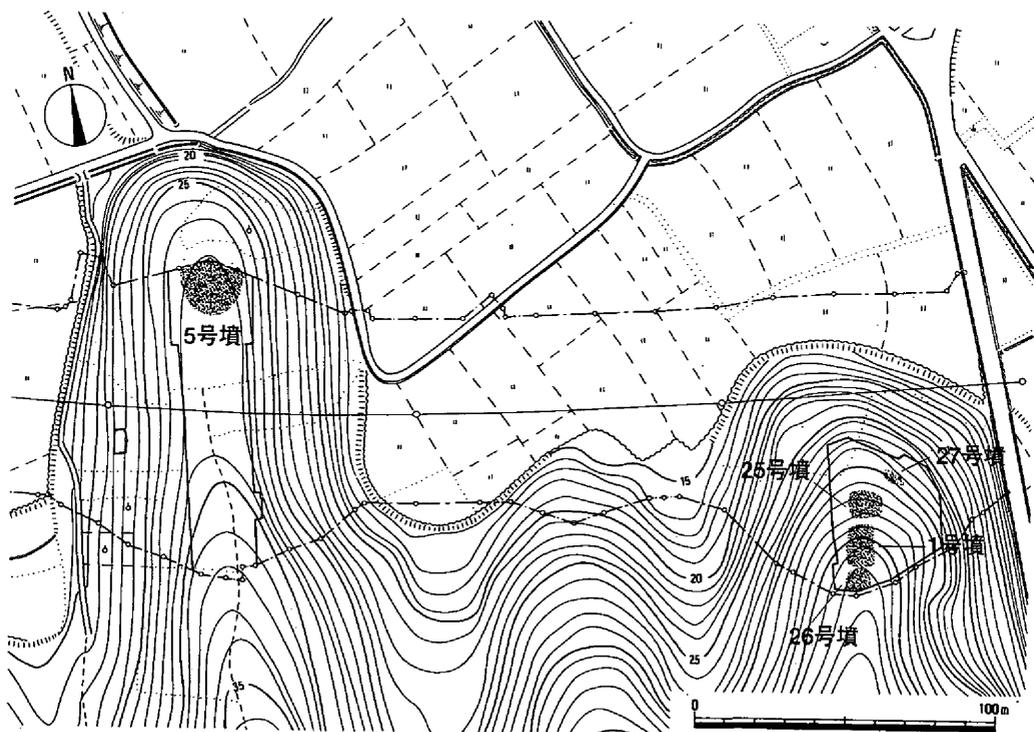
第22図 土壙5 (1/30)

第3節 西山古墳群の概要

西山古墳群は岡山県総社市黒尾に所在する。ここは総社平野の北縁にあたり、北にひかえる吉備高原から派生する丘陵には多くの古墳群が確認されている。その内、東に向かってのびる標高30～50mの低丘陵は青谷川が中央を流れ、その東半部分に西山古墳群が展開している。丘陵自体は作山古墳の北約3kmにあり、南斜面は平野部からはよく見えるが、今回調査を実施した西山1・5・25・26・27号墳は、この丘陵の東端で、北に鬚状に派生する尾根に位置している。最も北に張り出した尾根の先端部（A地区）に5号墳が単独で築造され、小さな尾根を挟んでその東方225mに存在する尾根（B地区）の先端に1・25・26・27号墳が認められた。

西山1号墳は方墳で、26号墳からの転落と思われる埴輪が出土している。中心の埋葬施設は残存していないが、粘土を使用した埋葬施設が確認されている。5号墳は時期不明の円墳で中心の埋葬施設は残存していないが、排水溝を伴う埋葬施設が検出されている。25号墳は方墳で、埋葬施設は残存しないが、須恵質の円筒埴輪が認められる。26号墳は用地境の南に存在する古墳の造出しである可能性が高い。粘土槨の埋葬施設が確認され、形象埴輪も多く出土している。27号墳は非常に小さい方墳であるが、須恵器が出土している。

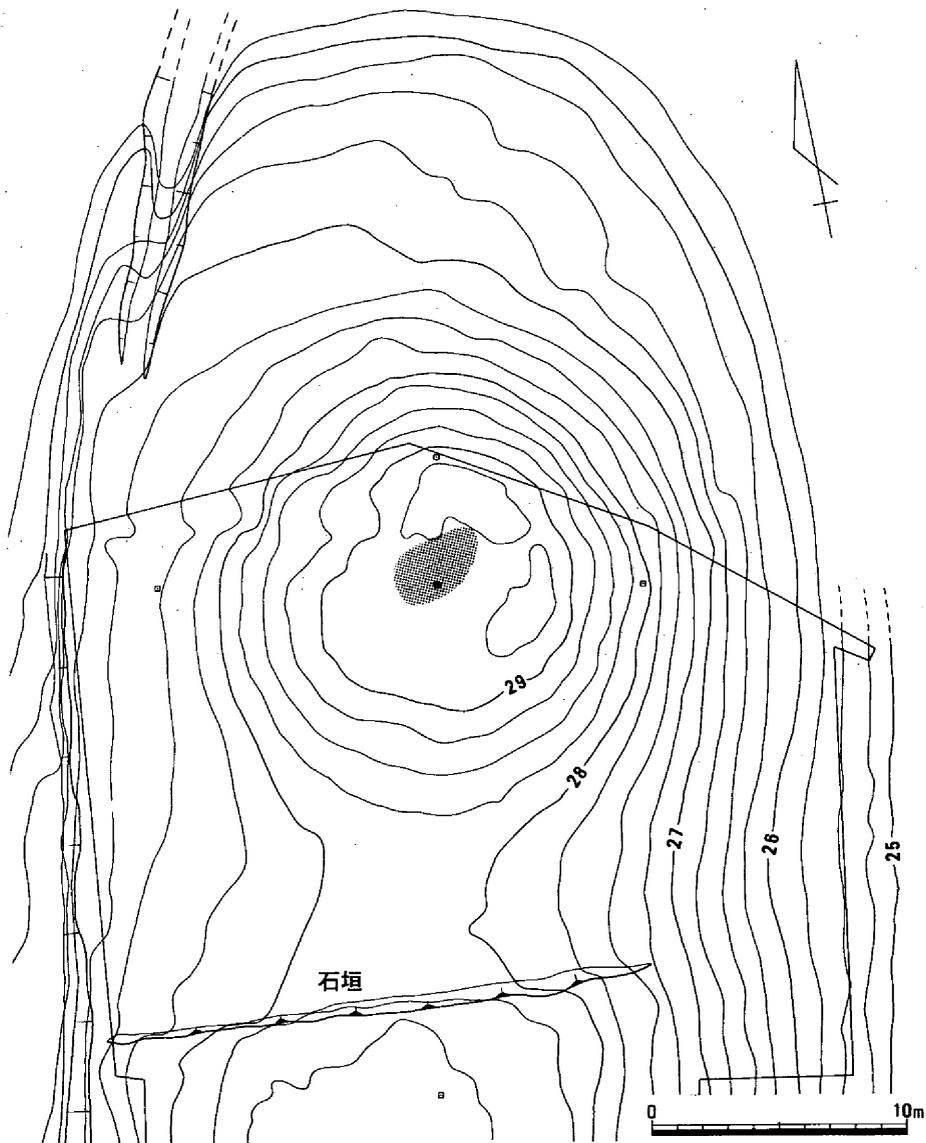
西山古墳群や周辺の古墳群は、昭和45～46年（1970～1971）にかけて確認調査や発掘調査が行われており、1号墳周辺も当時Ⅵ区として確認調査が実施されていた。そして昭和47年（1972）に刊行された報告書では、今回B地区と称した尾根の古墳について、北から1・3・2号墳の名称をあてていた。その後刊行された『岡山県遺跡地図』第三分冊（岡山県教育委員会、昭和50年）では北から1・



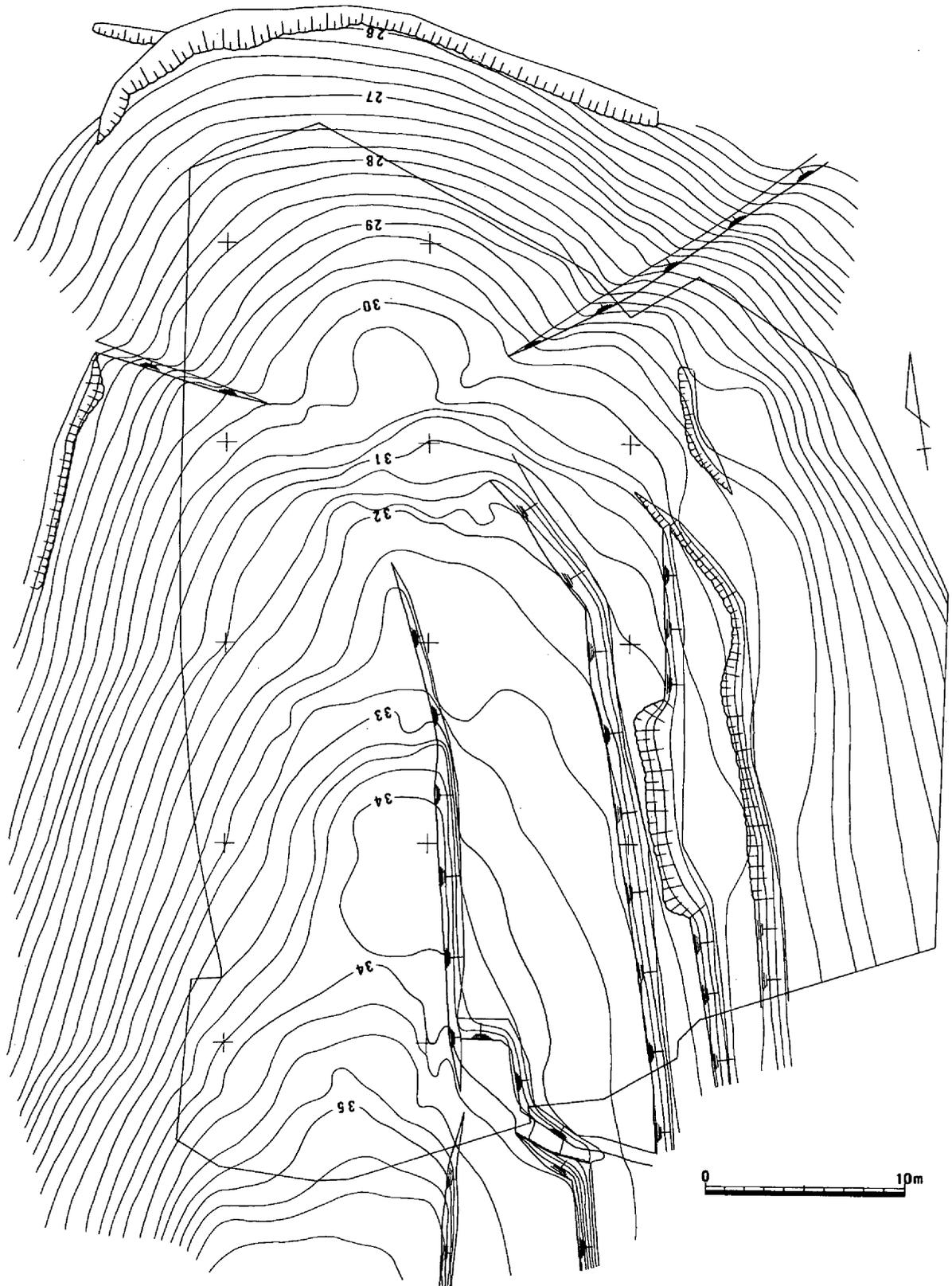
第23図 古墳位置図 (1/2500)

2・3号墳とされた。このような経過もあったため古墳番号については、調査段階では仮称として北からA・E・B・C・D号墳とした。この内、C号墳でトレンチ跡が認められたため、これを1号墳と断定した。そして頂部までに明確な2～3基の高まりが存在し、B・D・E号墳は新規である可能性が高く、従来の西山古墳群の番号に続けてそれぞれ25・26・27号墳とした。

なお、A号墳については、調査前の地形から古墳の存在が想定されていた。しかし調査の結果、周溝と思われた位置には古道が認められ、埋葬施設や遺物も確認できなかった。27号墳の存在などを考えると古墳がまったく無かったかどうか一考を要するところであるが、存在したという積極的な確証も得られなかったため今回は古墳として報告していない。(柴田)



第24図 5号墳調査前地形測量図 (1/300)



第25図 B地区調査前地形測量図 (1/300)

1. 西山5号墳

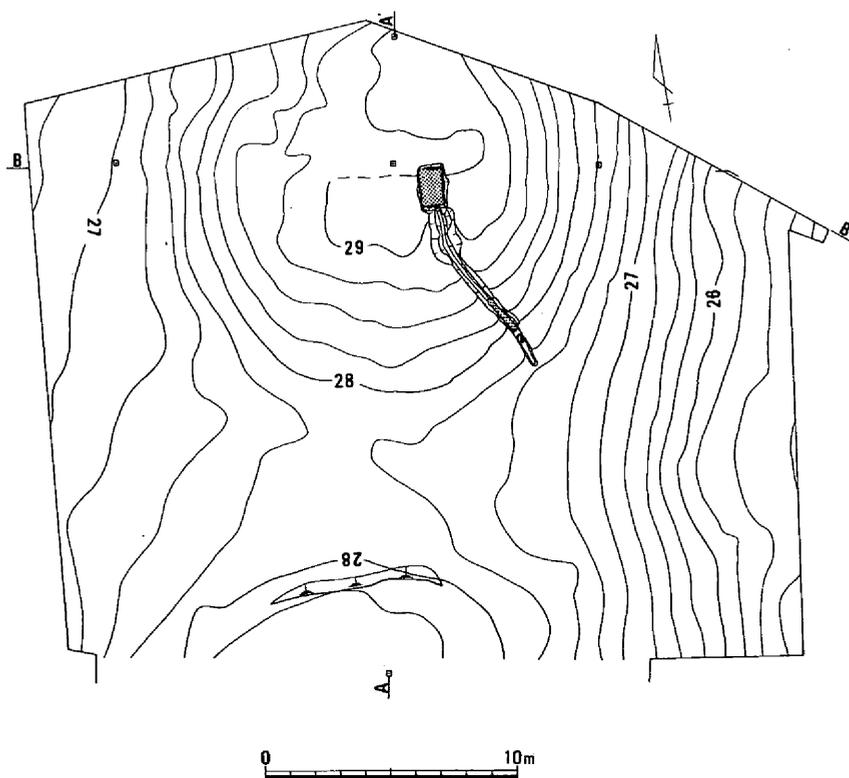
(1) 古墳の概要と位置

西山5号墳は、総社市西山から刑部の低丘陵上に存在する西山古墳群を構成する古墳として従来より周知されていた。今回の調査は、用地内に古墳の3/4程がかかるため調査を実施した。

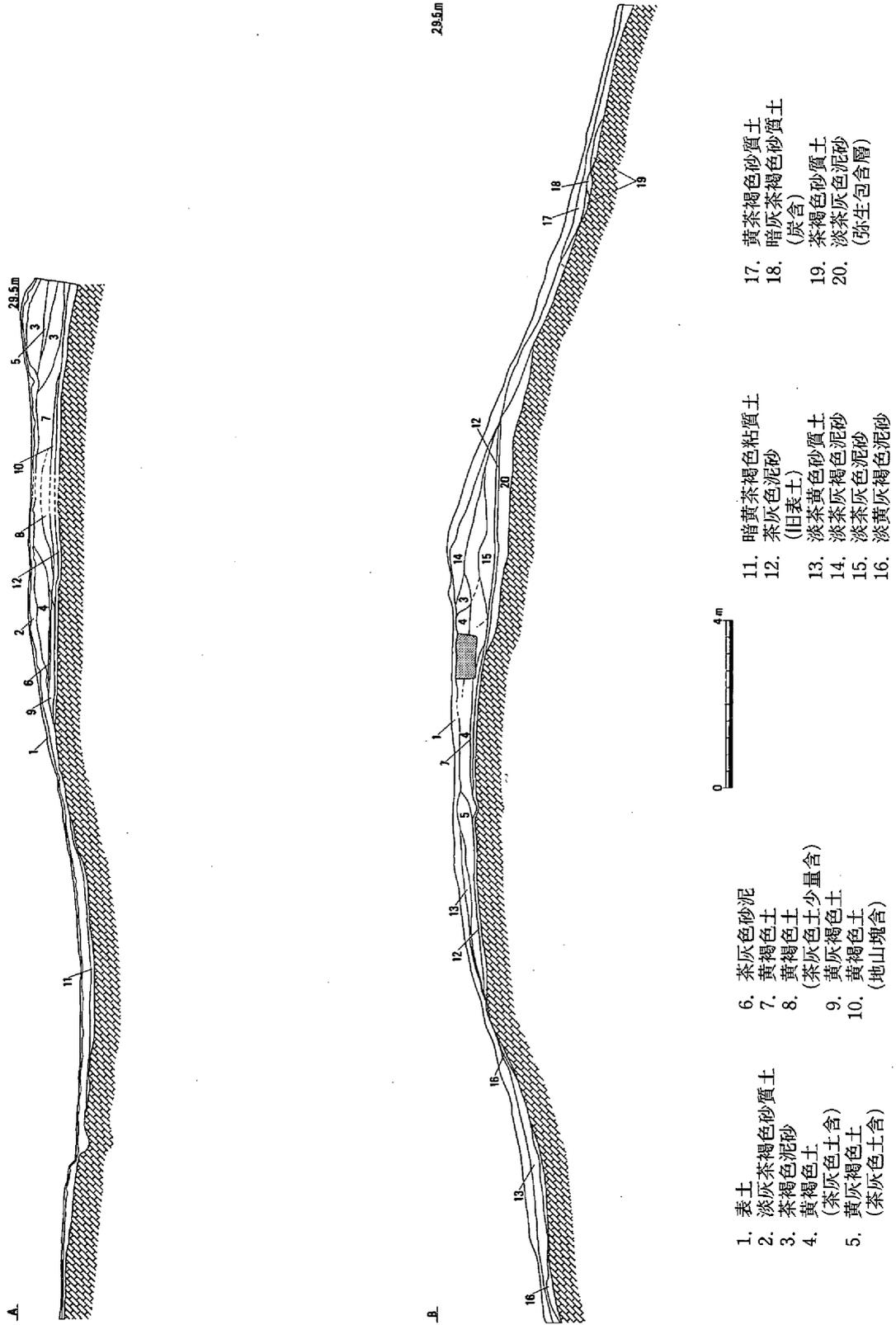
古墳は、北へのびる丘陵部の先端部に位置しており、現況では約1m数十cmの高まりを有していた。古墳の規模は、調査前に用地外も地権者難波隆文氏の厚意により測量を実施し、その結果(第24図)、径約20mの円形であろうと予想された。古墳の頂部は、平坦面をなしてその中央部付近は凹んでおり、保存状況は良くないものと推定された。また、地元の情報によれば、古墳およびその周辺は終戦直後に開墾が行われ、墳丘中央部付近(第24図網部)を掘削し、その際石材が多数出てきたとのことであった。さらに、その石材は、第24図の石垣として積み込んだとのこと、その石材も確認できた。その石材は、20~40・50cm大の河原石と確認でき、古墳の主体部の残骸と考えられた。また、墳丘と石垣部との間は、やや丘陵部がくびれており、周溝の存在も予想された。

(2) 墳丘 (第26・27図、図版47・48)

5号墳の墳丘は、終戦後の開墾により、大きく掘削を受けており、特に墳頂部は前述したように多数の石材が除去され平坦面となっていた。残存の規模は、東西約22m、南北はやや長くなると思われ、高さは2m前後を測る円墳と考えられる。周溝については、後世の削平が著しく明確な周溝は検出で



第26図 5号墳調査後墳丘測量図 (1/300)



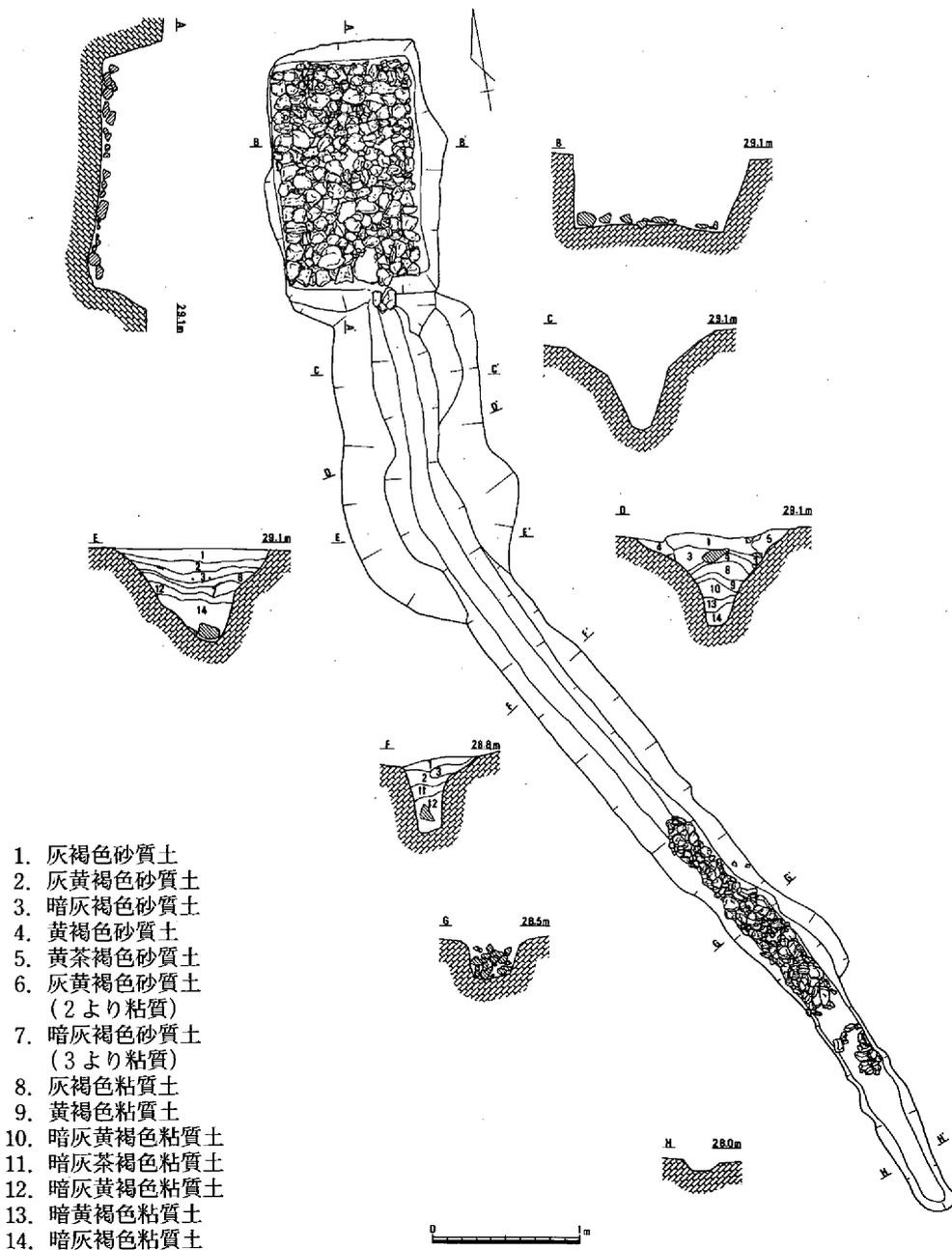
第27图 5号墳填丘断面图 (1/150)

きなかったが、墳丘の南側および西側の墳端部では周溝が想起できる痕跡を残していた。墳端部は、おおよそ海拔27.5~27.75mあたりだと考えられる。

墳丘の構築は、第27図の断面図で第12層が旧表土と考えられ、順次第2~10、13~15層が盛り上げられている。まず、旧表土の上部に積み上げ墳丘部の核を作り、さらにその縁辺部を盛り上げている。特に第4層は、地山土と茶灰色土を互層に版築状に堅く盛り上げている。墳丘の上部は、削平を受けているが、墳丘の残存状況からみて、さらに1m数十cmの盛りが存在したと考えられる。

(3) 埋葬施設 (第28・29図、図版48・49)

埋蔵施設としては、表土を除去すると墳丘中央からやや南東に長さ約180cm、幅約120cmの長方形を

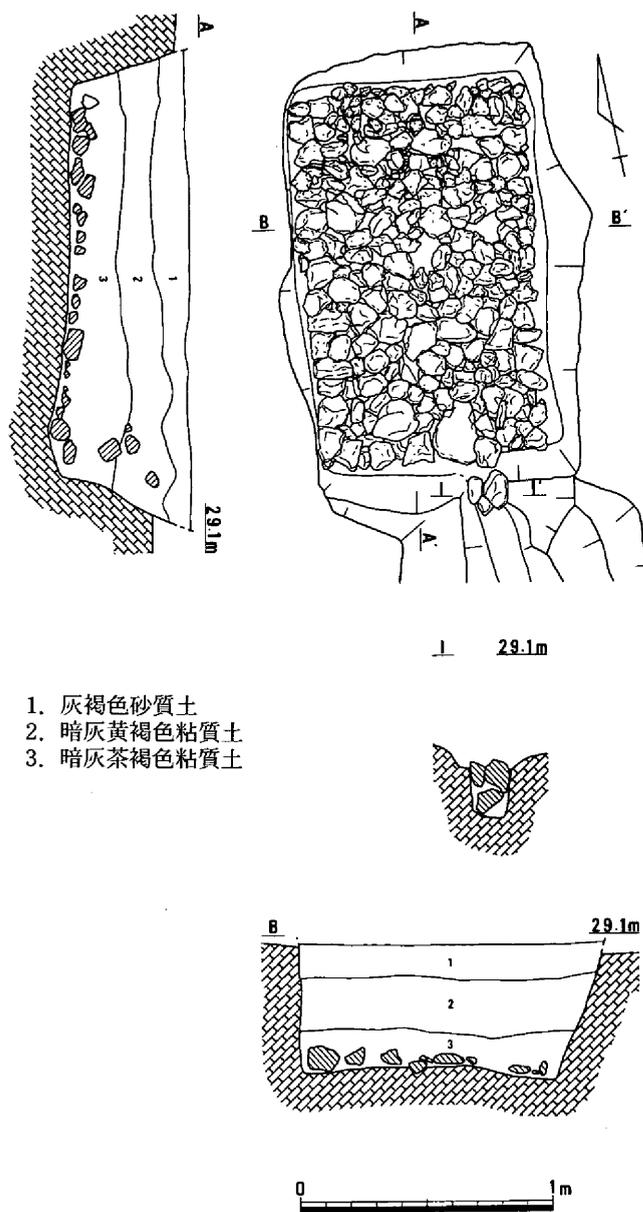


第28図 5号墳埋葬施設および排水溝 (1/50)

呈する墓壙を検出した。この墓壙は、ほぼ南北方向に主軸をとり、深さは約50cm残存していた。また、断面形は逆台形を呈しており、下場での長さは約155cm、幅は約100cmを測る。墓壙底部は、水平ではなく北から南方向に傾斜しており、南端部では若干の凹部が認められたが、これは後述する排水溝に接続するためと考えられる。底部には、数cmから約25cm大の河原石が敷き詰められていたが、10cm前後のものがその大半を占めた。敷石は、縁辺を直線的にそろえており、重ねることなく一面的に敷いている。また敷石の上面は、掘り方底部が北から南へ傾斜しているのに対応して、敷積上面も南方向へ傾斜をもっている。敷石は、2～3ヶ所欠落が認められたが底部一面に残存しており、敷石南端の中央には約25×17cm大の石が配置されていた。この石は、敷石の中で最も大きな石で、後述する排水溝に接続する位置にあたりこれに起

因する可能性も考えられる。この墓壙の埋土は、第29図のように第1～3層がほぼ水平堆積していたが、この埋土はあたかも攪乱層のような状態で密な土質ではなかった。また、この埋土中には敷石と同質の石が若干数認められた。さらに、敷石上面には副葬品等の遺物は検出されず、敷石の下部、埋土中からも全く出土遺物はなかった。

この墓壙には、墓壙南端の中央部から南側へ延びる排水溝が存在した。排水溝は、墓壙から南へ約2m延び、さらにやや東方向に屈曲し約5.5m続く。この排水溝と墓壙の接点には、第29図I—I'断面のようにU字形に溝を切り、石を3個配置している。この排水溝の底部は、墓壙の底部と同じ高さで、排水溝末端との高低差は約60cmをもって傾斜している。排水溝は、墓壙近くでは幅約100cmで、逆「ハ」の字に掘ったのち、さらに「U」字形に掘り下げている。深さは約65cmを測る。排水溝の埋土は、上部には焼土や炭が混じっており、石も若干数含んでいた。また、排水溝中間では幅約50cmで、「U」字形に掘られており深さは約50cmを測る。さらに、排水溝の末端



1. 灰褐色砂質土
2. 暗灰黄褐色粘質土
3. 暗灰茶褐色粘質土

第29図 埋葬施設 (1/30)

部では幅約30cmと狭くなり、深さも浅くなっていく。排水溝の末端近くでは、約2mにわたり数cmから10cm大の石が第28図G～G'断面のように暗渠状に積み込まれていた。排水溝の末端部は、墳丘の墳端部近くで終わっている。また、排水溝からは出土遺物の検出はなかった。

以上のように、この墓壙および排水溝からは出土遺物は皆無で、時期を特定することはできなかった。また、この墓壙の位置は、墳丘中央部より南東によって存在することなど、さらにこの墓壙の規模、形態など、この古墳の主体部としての可能性に若干の不安が残る。

これに対して、前述したようにこの古墳は、第24図の網部付近より、開壜の際多数の石材が確認された情報がある。この石材は、近くに石垣として利用され残存しており、石材は30～50cm前後の河原石であった。

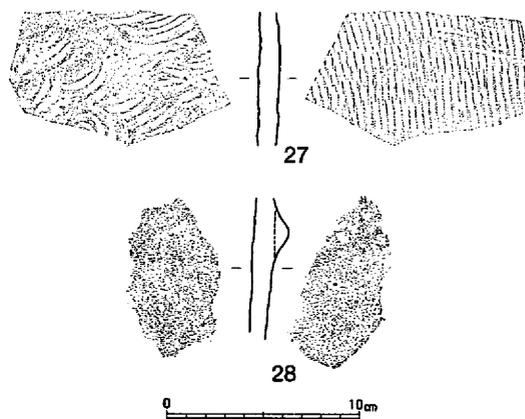
この石材が検出された位置は、移動させた当事者からの聞き取りではほぼ古墳の中央部にあたる。この残存している石材から類推すれば、簡略化された竪穴式石室の存在が想起された。この破壊された古墳中央部は、調査前においては平坦部となっており、部分的に凹凸が認められた。この位置は主体部が存在した可能性があったため、掘り方等の残存部分の検出に努めたが、表土層下には墳丘盛り土が確認され、埋葬施設の残存部は存在しなかった。

このことより、かつて存在した埋葬施設はこの高さまでは掘削していなかったとも考えられる。この古墳に伴う埋葬施設が2基存在したと仮定すれば、古墳築造の契機となった埋葬施設が古墳中央部につくられ、その後、前述した埋葬施設が構築された可能性も考えられる。しかしながら、古墳中央部に存在した埋葬施設と検出された埋葬施設は、埋葬施設の底部の高さをみると推定約50cm以上の差が生じていたと考えられ、多少の違和感が残る。

したがって諸状況からみて、古墳中央部に存在したと考えられる簡略的な竪穴式石室をこの古墳の主体部と考えることが可能性が高いと思われ、検出された埋葬施設については、ここでは古墳との関連が強いということで今後の課題としたい。

(4) 出土遺物 (第30図、図版56)

西山5号墳からは、墳丘、埋葬施設からの出土遺物は全くみとめられなかった。このため5号墳の時期は特定できなかった。しかし、第30図の27・28の遺物は、古墳南東約10mの調査区端部の表土層から出土した。27は、須恵器の甕の体部片と考えられ、内外面とも荒いタタキを施している。この須恵器は、その特徴から6世紀後半を前後するものと考えられる。また、28は円筒埴輪片で、保存状態が悪く内外面の調整は不明である。しかし、タガの状況、焼成の状況などからみて5世紀代におさまるものと考えられる。27・28は、時期差がかなりあり古墳との関連性が限定しがたく、関連遺物として示しておく。(中野)

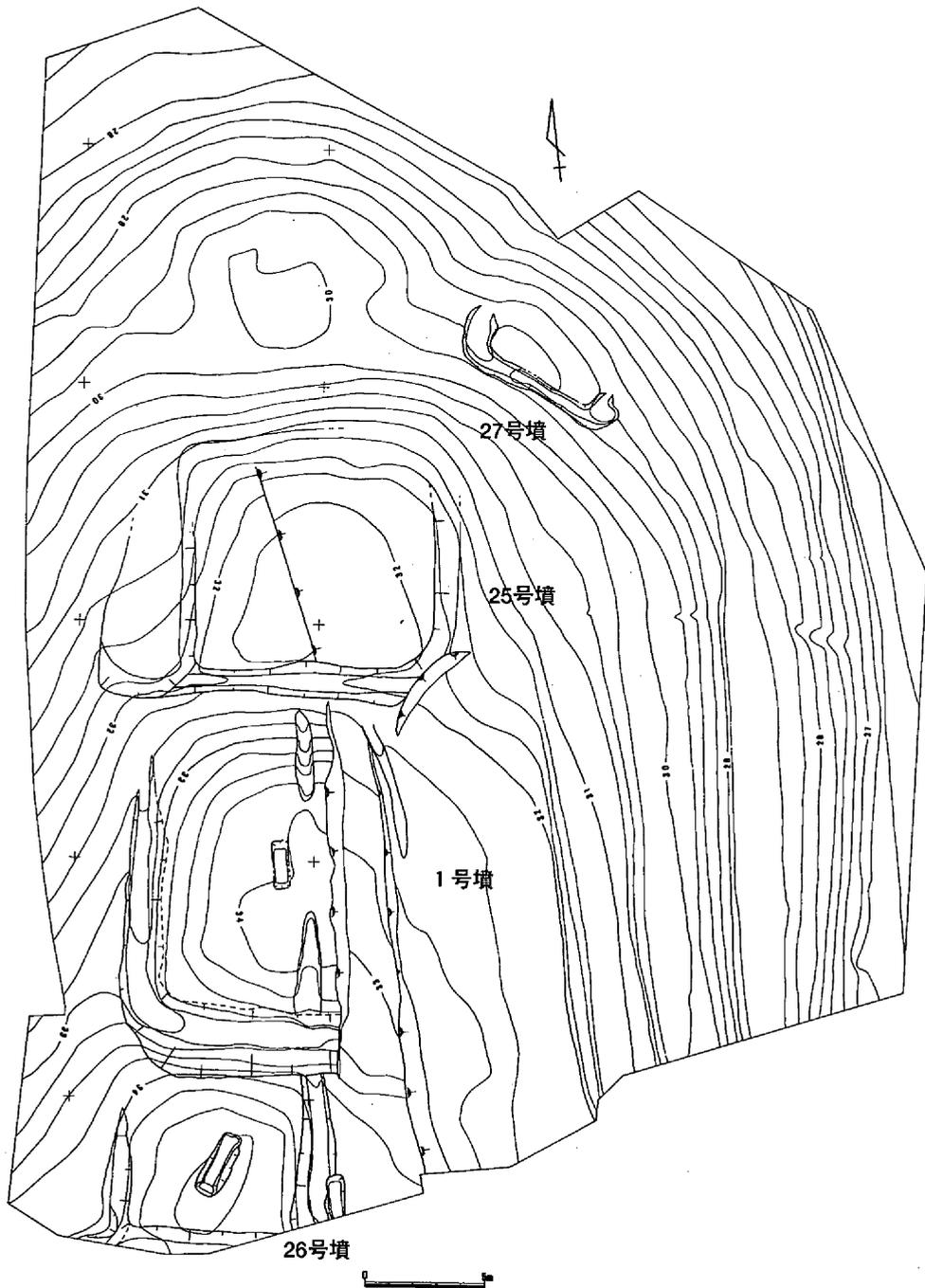


第30図 5号墳出土遺物 (1/4)

2. 西山25号墳

(1) 古墳の概要と位置 (第31・32図)

西山25号墳は1号墳の北に位置する。そこは丘陵の北端にあたり、海拔30~32mを測る。墳丘の大半は既に流失しており、調査前には約80cm程度の低い高まりが認められていた。さらに東側は開墾による削平を受けていたため、平坦になっていた。このように古墳の残存状況は悪く、埋葬施設は認められなかったが、周溝が確認され古墳の規模などは明らかとなった。また、埴輪の据え穴については確認されなかった。

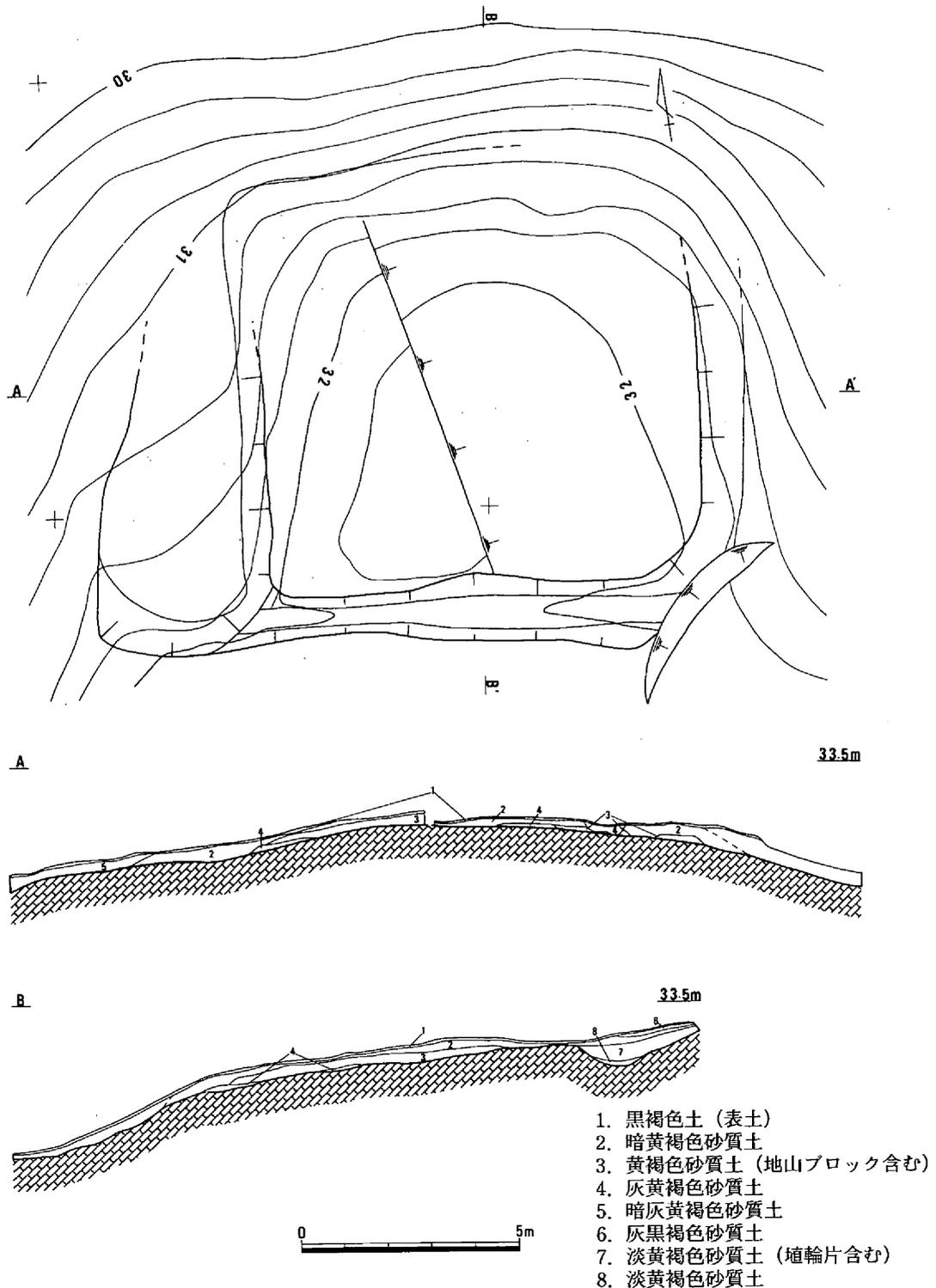


第31図 B地区古墳群調査後墳丘測量図 (1/300)

(2) 墳丘 (第32図、図版50)

周溝などが検出され、東西11.6m・南北10.1mの方墳であることが明らかとなった。主軸方向はN-5° 30' -Eで、真北に近い。現存する墳丘の高さは1.3m前後である。

盛土として厚さ30cm程度の第3層が確認された。第4層は厚さ5~10cmと薄く、部分的に認められる。この層は古墳築造前の旧表土の可能性がある。



第32図 25号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150)

周溝は南の1号墳との間に掘削され、東西にまっすぐのびる。幅は0.9~1.6m、深さは0.49mを測り、断面形は「U」字形である。周溝埋土の第7層から円筒埴輪、朝顔形埴輪と靴形埴輪の破片、下層からは土師器30が出土しているが、1号墳や26号墳からの転落の可能性もある。墳丘の東西と北側については地山の削り出しが行われているだけである。この削り出しにより、海拔31.3~31.4mで地山の傾斜変換が認められる。特に西側は幅2.5~3.3mの平坦面を形成している。また、北側は海拔30mまで削り込んでいる。

墳丘の北裾を中心として須恵質の円筒埴輪が出土している。これはこの古墳に伴う可能性が大きいと考えられる。一方東側の攪乱土中からは刀子片が出土しているが、この古墳に伴うものかどうかは不明である。

(3) 出土遺物 (第33~35図、図版56)

29は高杯の脚柱部で、比較的垂直にのび、高さもある。30は小形壺で、周溝の下層から出土している。M5は大刀の切先付近の破片と思われる。

埴輪には円筒埴輪(あるいは形象埴輪などの円筒部)、朝顔形埴輪、形象埴輪が認められるが、後2者は他の古墳に伴う可能性が大きいものと思われる。円筒埴輪は、土師質と須恵質(45・47・48・53)がある。前者の色調は橙色系のものが多く、黒斑が認められるもの(35・43・49)もある。また灰黄色を呈して焼成の堅緻なもの(44・46・49)もある。

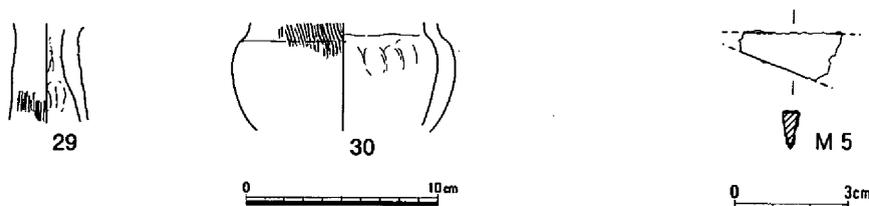
口縁部は、上端部に面を形成し外方にわずかに拡張するもの(31・34・43)と、外方に小さく屈曲し端部に面を形成するもの(44・45)がある。この形態は焼成や色調と関連しているようである。また、基底の端部は肥厚するもの(37)としないもの(40・49・53)があり、後者は焼成が堅緻なものあるいは須恵質のものである。調整については、器壁表面が摩滅したものが多いが、概ね外面は口縁部付近から基底部まで、タテハケの後C種と思われるヨコハケを施すようである。内面については、土師質と須恵質では顕著に異なる。土師質のものは斜め方向のハケメが主体であるが、須恵質のものでは主にナデが施される。

34の外面にはヘラ記号が施されている。底部の37には粘土紐の継ぎ目が認められる。38は口縁部の可能性がある。

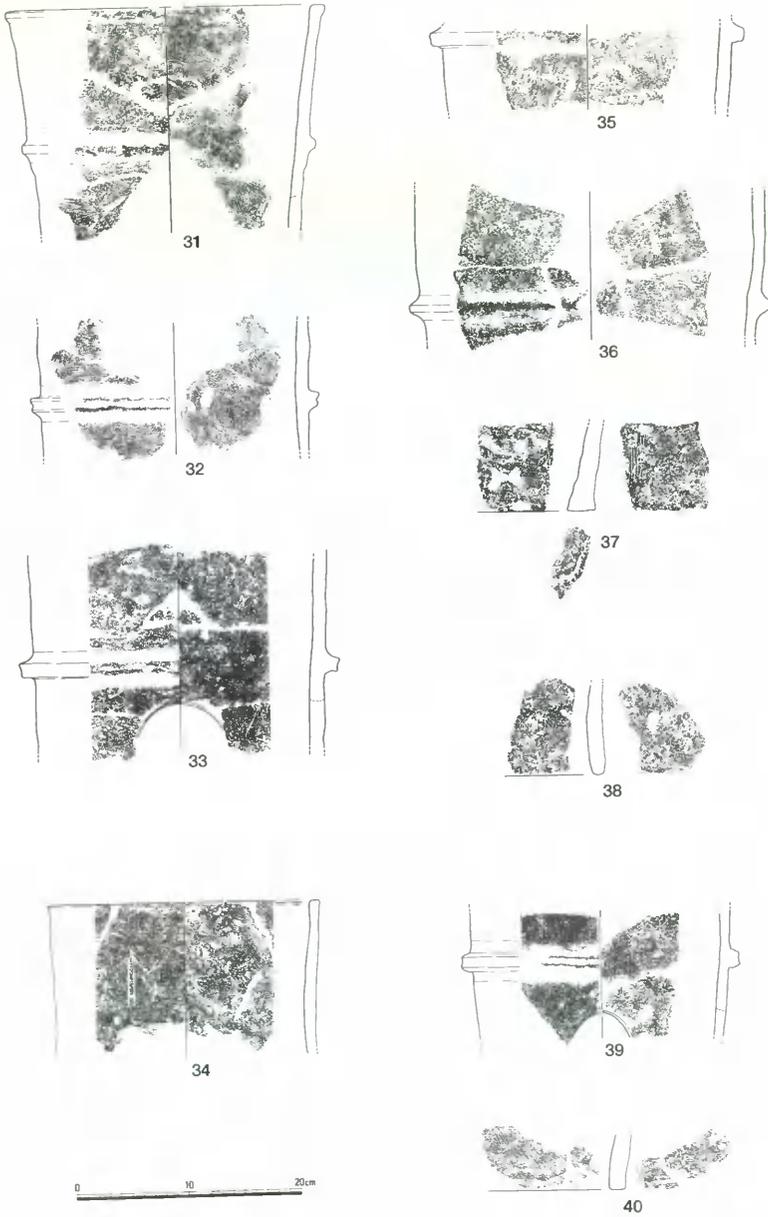
41・42は形象埴輪の破片で、他の古墳に伴うものと思われる。47と48は同一個体と思われる。52は西山1号墳の朝顔形埴輪55と同一個体である可能性がある。

出土遺物などから25号墳の築造時期を考えたい。須恵質の円筒埴輪からIV期に属すると言える。しかし、基底部外面にも2次調整としてヨコハケを施していることから、その古い段階に相当すると思われる。

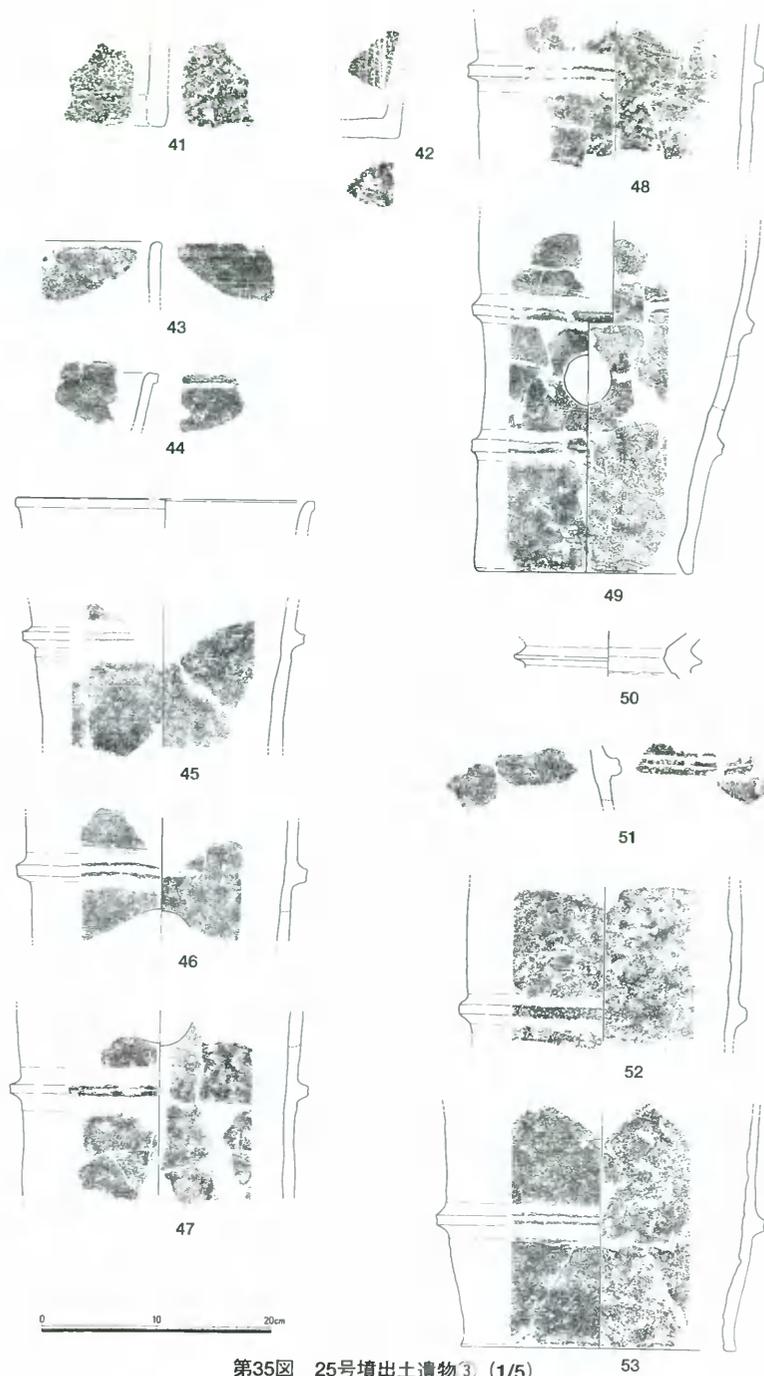
(柴田)



第33図 25号墳出土遺物① (1/4・1/2)



第34図 25号墳出土遺物 2 (1/5)



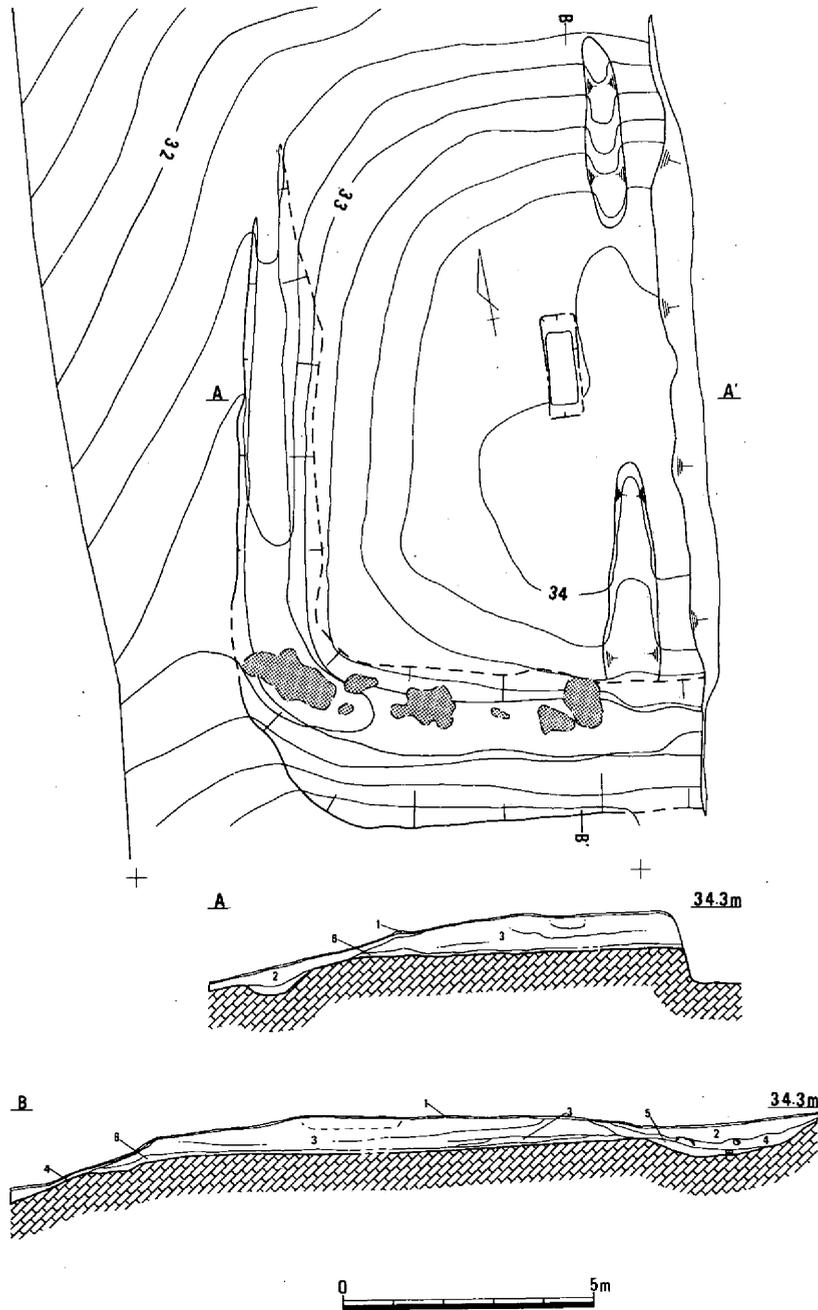
第35図 25号墳出土遺物③ (1/5)

3. 西山1号墳

(1) 古墳の概要と位置 (第31・36図)

本古墳は当初から周知されていたもので、前述したように以前トレンチ調査が行なわれたこともある。立地は丘陵尾根部先端付近で、標高は32m以上である。地形的には尾根頂部が先端で斜面に変換する地点であり、古墳群としての占地状況は25号墳と26号墳に接した位置にある。墳丘は果樹園造成時の大規模な削平により、東半部を完全に失っているが残存部は比較的良好で、方墳であることが明確である。周溝は南側でL字状に残り、26号墳をわずかに削り込んでいた。主体部は墳丘盛土内に納まる木棺1基が検出されているが、中心主体ではない可能性もある。南側の周溝内からは多量の埴輪片が出土しているが、後述するように南側の26号墳以南の古墳に伴うものと考えられる。これらの埴輪は家形が多数を占め、県内では非常に良好な資料と言えるものである。

1970～1971年の調査時のトレンチは、墳丘の南北方向に2本認められ、北側のものは主体部の一部を切り込んでいた。トレンチ内部からは、調査用の水糸や商品名の付いた菓子袋が出土し、調査参加者の記憶とよく整合していることから、当時のものであると判断した。



1. 表土
2. 暗黄灰色土
3. 灰黄褐色土
4. 暗黄灰褐色土
(埴輪片多く含む)
5. 黄灰色土
6. 暗灰黑色土 (旧表土)

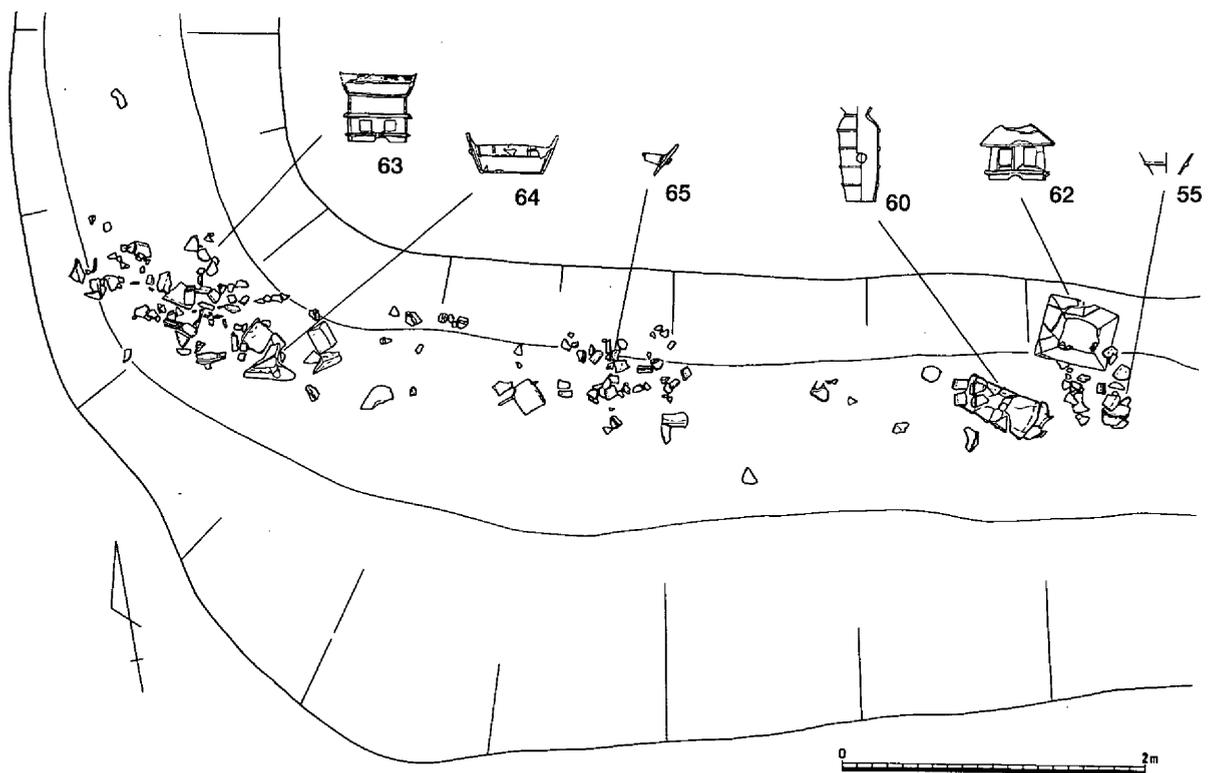
第36図 1号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150)

(2) 墳丘 (第36・37図、図版50～52)

墳丘は東半部を消失しているため、正確な規模等は不明であるが、盛土の状況や周溝残存部の様子からほぼ全容がつかめるものである。まず墳端であるが、南辺及び西辺は周溝が残るためその底面内側ラインとする。次に北側は25号墳の周溝によって削平されているが、土層断面の形状から25号墳周溝の中心付近を墳端としておく。東辺は消失しているため、ここでは墳丘の主軸が隣接する25号墳の延長線上にあると仮定して、西辺の折り返し地点を当てておく。以上の前提で計測できる墳丘規模は南北15m、東西13.6mを測る。復元された墳丘はやや南北に長いものとなるが、斜面に立地することから築造時の墳頂部平坦面はおそらく正方形に近いものと考えられる。残存する墳丘の高さは北側墳端から約150cm、南側墳端から75cmを測る。

墳丘盛土は土層観察から、最初は外縁部を土壘状に構築していることがわかる。残存する盛土で最も厚い部分は60cmを測り、墳丘表面はほとんど流出しているため、最終的な表面構築を行なったかどうか不明である。周溝は南辺から側辺にかけてコの字状に巡っていたものと推定され、25号墳のように側辺側にテラス状の平坦面を持っていない。このことは周溝の掘削土量が墳丘の盛土量を十分まかなっていたものと想定でき、掘削が周辺部にまで及んでいないことで説明できよう。周溝底断面は緩やかな弧状を呈し、さほど墳端を意識していないように見える。

隣接する古墳との切り合い関係は土層では識別できなかったが、平面的には想定可能である。南側の26号墳北側墳端を1号墳周溝が切っていること、北側の25号墳周溝が非常に小規模なもので、1号墳を意識していると考えられることなどから、26号墳→1号墳→25号墳の築造順序が推定できる。



第37図 1号墳南側周溝内遺物出土状況 (1/50)

(3) 墳丘の出土遺物 (第38~45図、図版56~58・60)

1号墳の周溝内及び墳裾からは多量の埴輪片が出土しているが、いずれも本墳に伴わない可能性が強いものである。その理由としては、墳頂部や墳丘斜面からは1片の埴輪も出土していない点、出土した埴輪の分布が南辺周溝内に集中し、西辺周溝内では少量の破片が南半部にわずかに出土したのみである点、そして26号墳からはこれらとセット関係になると考えられる埴輪片が多量に出土している点などである。しかし、多量に出土した家形埴輪のうち1~2点が単独で伴っていた可能性は捨て切れず、ここではあくまでも1号墳周辺部出土の遺物として記載した。

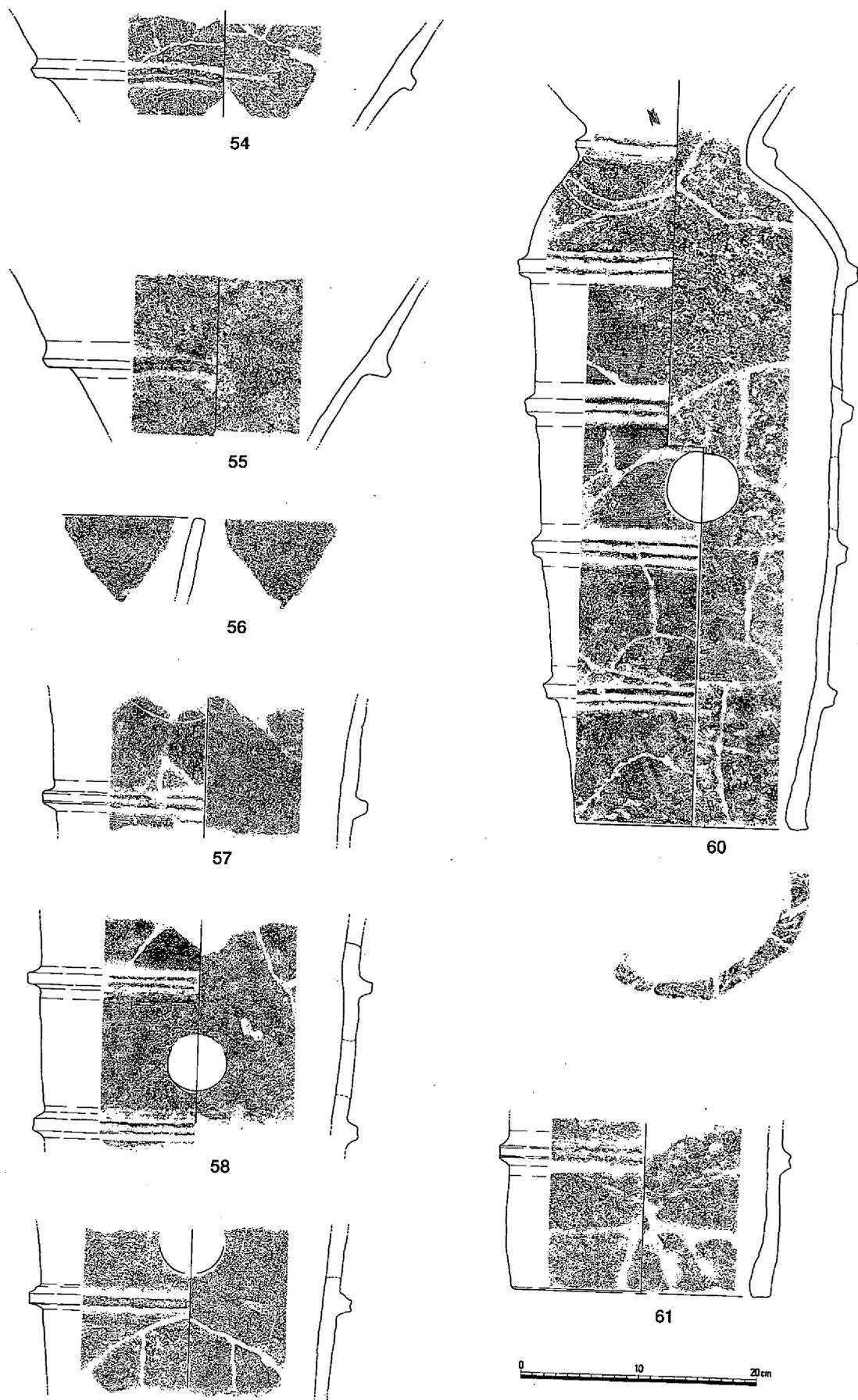
出土した埴輪は朝顔形3本以上、円筒形1本以上、家形3軒以上のほか、鞞、短甲片と推定されるものがあり、一部は26号墳出土品と同一個体になる可能性が強い。

円筒系の埴輪では54・55・60が朝顔形、56は円筒形で、57~59・61は円筒形、朝顔形いずれかと推定される。朝顔形埴輪は口縁部が大きく開き、頸部は径15cm前後を測るものと推定され、断面台形のタガを巡らせている。円筒部の大半が残る60では、体部は4段で、最大径は最上段上端のタガ部で28.7cmを測る。肩部はやや内湾気味に頸部へと続き、外面には二重線で弧状を呈するヘラ記号が認められる。調整は不鮮明な部分もあるが、1次調整が縦方向のハケメと推定され、2次調整は横方向のハケメを基調とし、最下段は風化のため調整不明である。内面は風化しているが、一部に指頭圧痕状の痕跡が認められる。基底部は径18.9cmを測り、端部は肥厚して底面に作成時の圧痕がそのまま残っている。円孔透かしは上部の2段に直交する2方向が認められる。円筒埴輪の口縁部と考えられる56は風化しているため内外面とも調整不明であるが、端部は平坦面を持つ。この他57・59では内面に横~斜め方向のハケメが認められるほか、57は外面に60と同様なヘラ記号の一部が残る。

家形埴輪は欠損しているとはいえ、ほとんどが非常に良好に遺存しており、各部の形態もおおよそ把握できるものである。

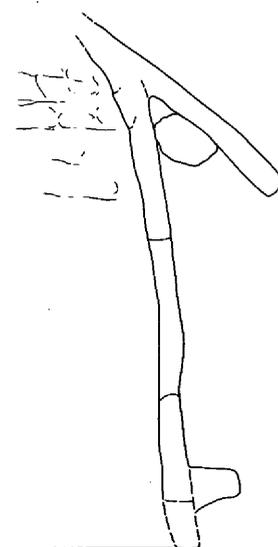
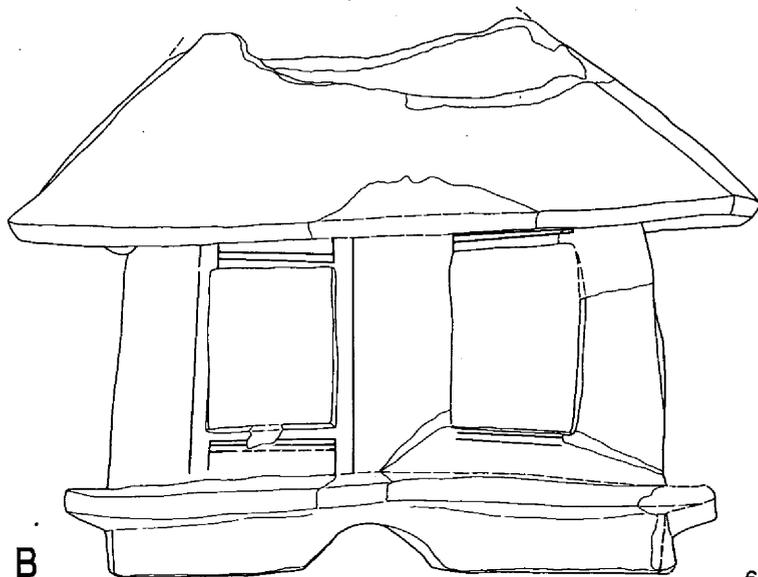
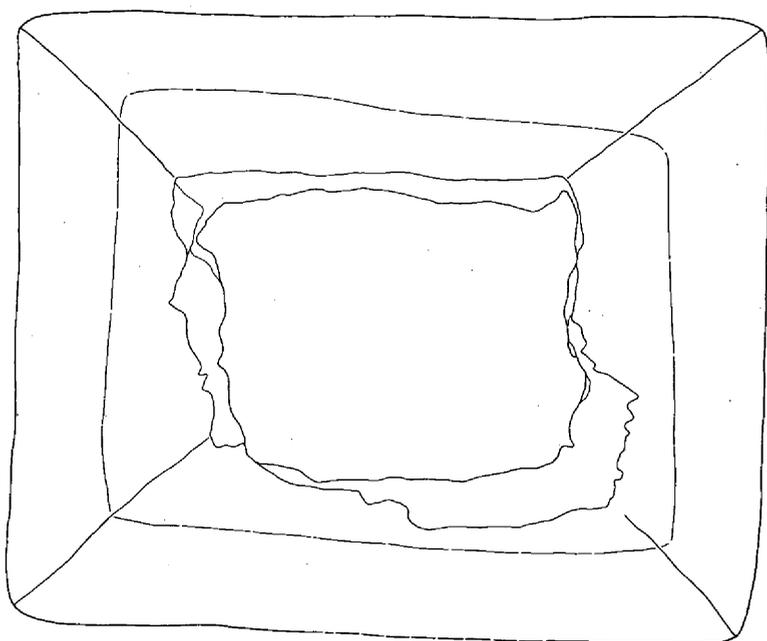
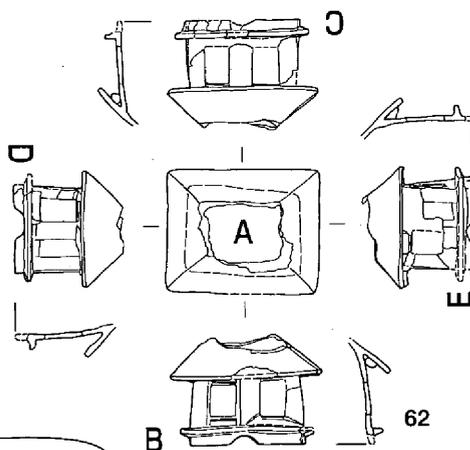
62は屋根頂部が欠損するが入母屋造りと推定されるもので、外面は丹塗り痕跡が認められる。残存高36cmを測り、桁行きは約36.5cm、梁行きは約28cmで、その比は5:4に近い。各側面には透かし窓が認められ、このうちB面左のものは両側にヘラ描きで柱と推定される表現が認められることから入り口となる可能性がある。また短辺側には線刻で四角が描かれており、閉ざされた窓あるいは別の壁面施設を表現しているかもしれない。裾回りの突帯は厚さ2cm、幅3cm前後を測り、基底部は各辺とも半円径の透かしを持つ。壁面の調整は外面は不定方向の細かいハケメが基調となっており、内面は横方向のナデ調整が主で、部分的に細かいハケメが残る。屋根部との変換点付近は凹圧痕が著しい。下屋根の軒下部には補強用と考えられる粘土塊が詰め込まれている。

63は切妻造りで見かけは2階建てを呈し、外面に丹塗り痕跡が残る。破風先端を欠くが、残存部の高さは45cmを測り、桁行きは37cm、梁行きは30cmでその比は5:4に近い。1階部分は長辺側が欠損しているため不明な部分が多いが、各面とも2つの透かし窓を持つと考えられる。これに対して2階部分は短辺側の右側にのみ透かし窓が認められ、残存する長辺側には何も表現されていない。基底部には各辺とも半円形の透かしが施され、外面には幅2cm、厚さ1.2cmの突帯が巡る。1階と2階の境には外面に庇状突帯が、内面に板状の突帯が巡る。屋根は棟覆いに網代や押縁が表現されており、破風板は小型に表現されているようである。棟木は欠落し、接合用の刺突痕が観察される。壁面調整は外面は風化しているが、一部に縦方向のハケメが残る。内面はナデ調整で、各所に凹圧痕が残る。

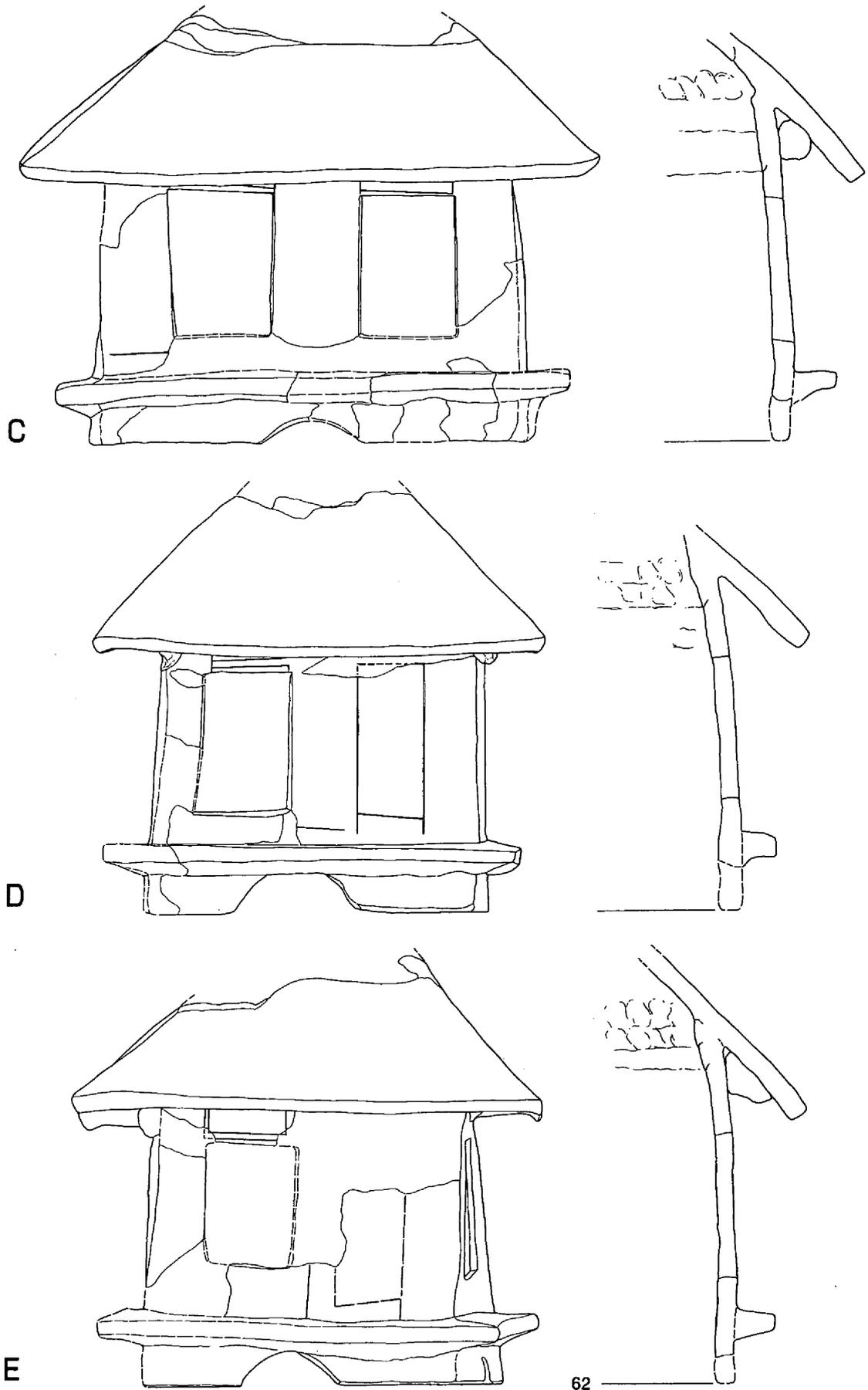


59 第38図 1号墳出土遺物① (1/5)

64は切妻造りの屋根部で、全体に厚手に造られている点は62に近い。全体に風化しているが、各部の表現はよく観察できる。屋根頂部には棟覆いの押し縁のみが2本線により表現されている。破風板はやや大きく表現され、棟木は先端部のみ造られている。妻側にはわずかに壁面部が残り、2本線で棟持柱らしき表現が認められる。



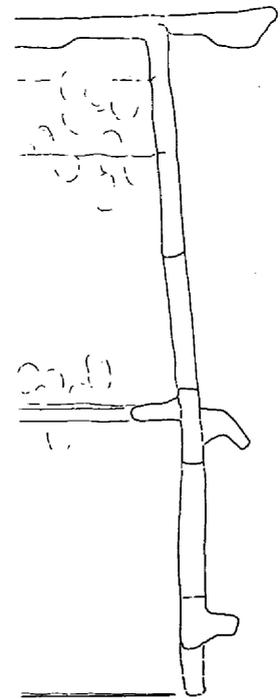
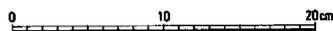
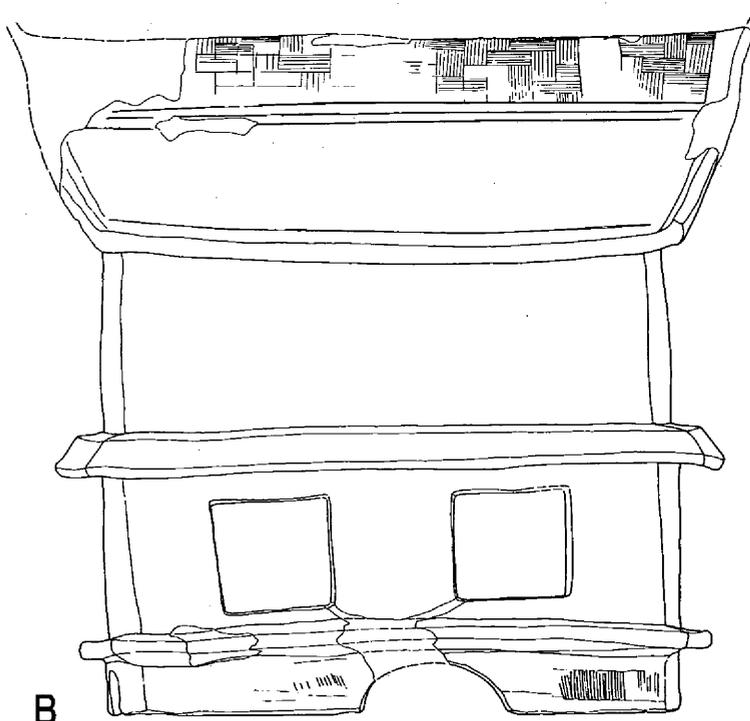
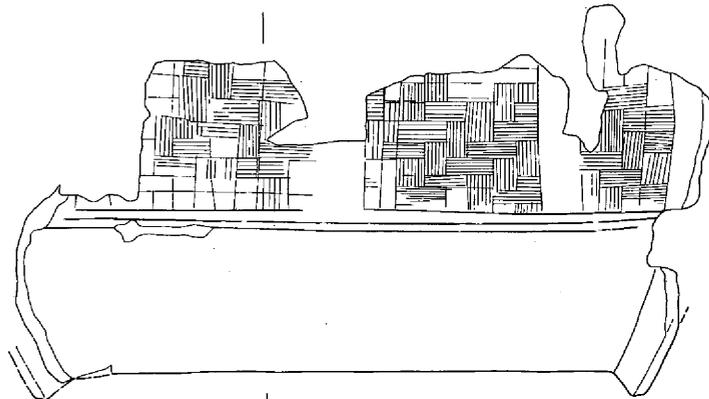
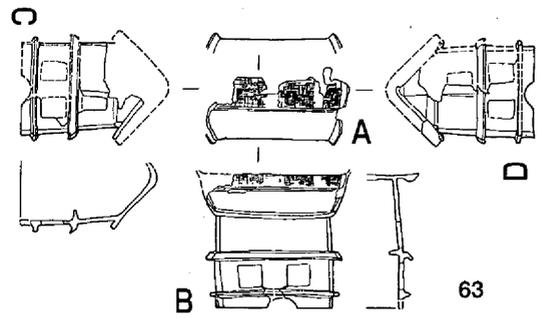
第39図 1号墳出遺物② (1/5)



第40図 1号墳出土遺物③ (1/5)

この他、家形埴輪65～67、鞞68、鞞等の鰭飾り69～71、丹塗り痕跡がある短甲片72・73、草摺等の甲冑と考えられる破片74～79、蓋等の小型円筒部80などが出土しているが、細片のため26号墳出土品と合わせて検討すべきものである。

鉄製品には鎌M6、釘M7が見られるが、いずれも墳裾の堆積土上層からの出土であり、後

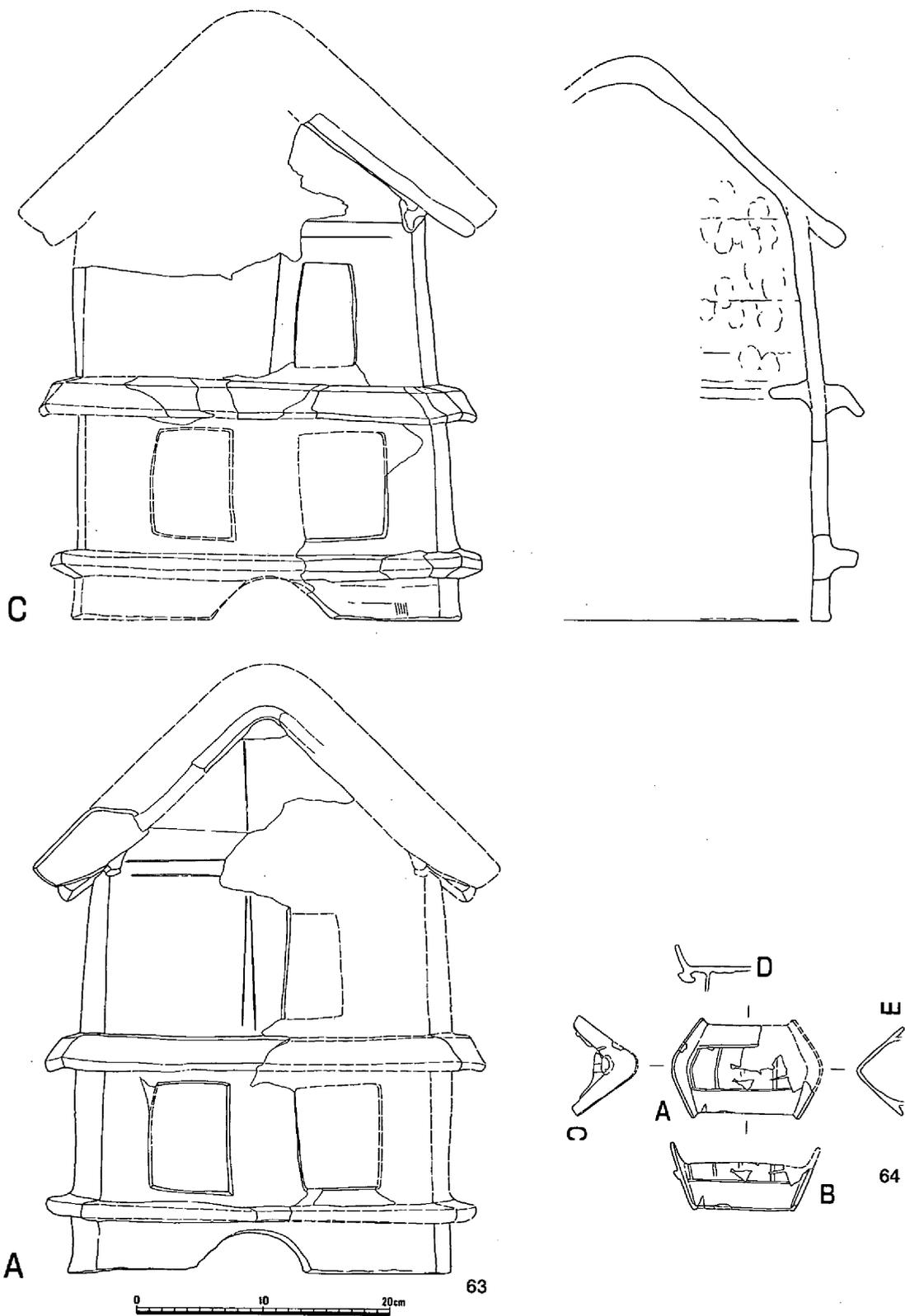


63

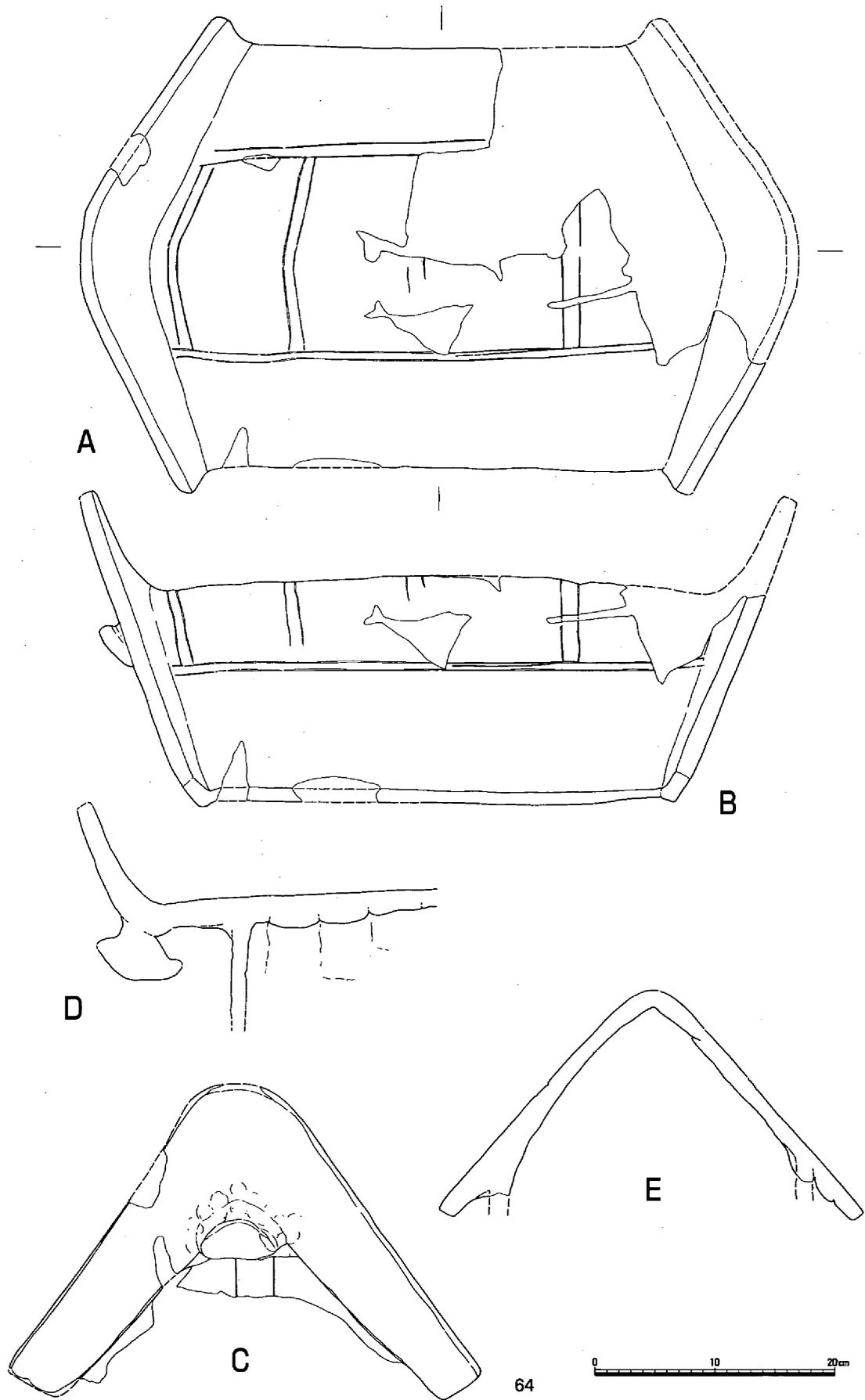
第41図 1号墳出土遺物④ (1/5)

世のものと考えられる。

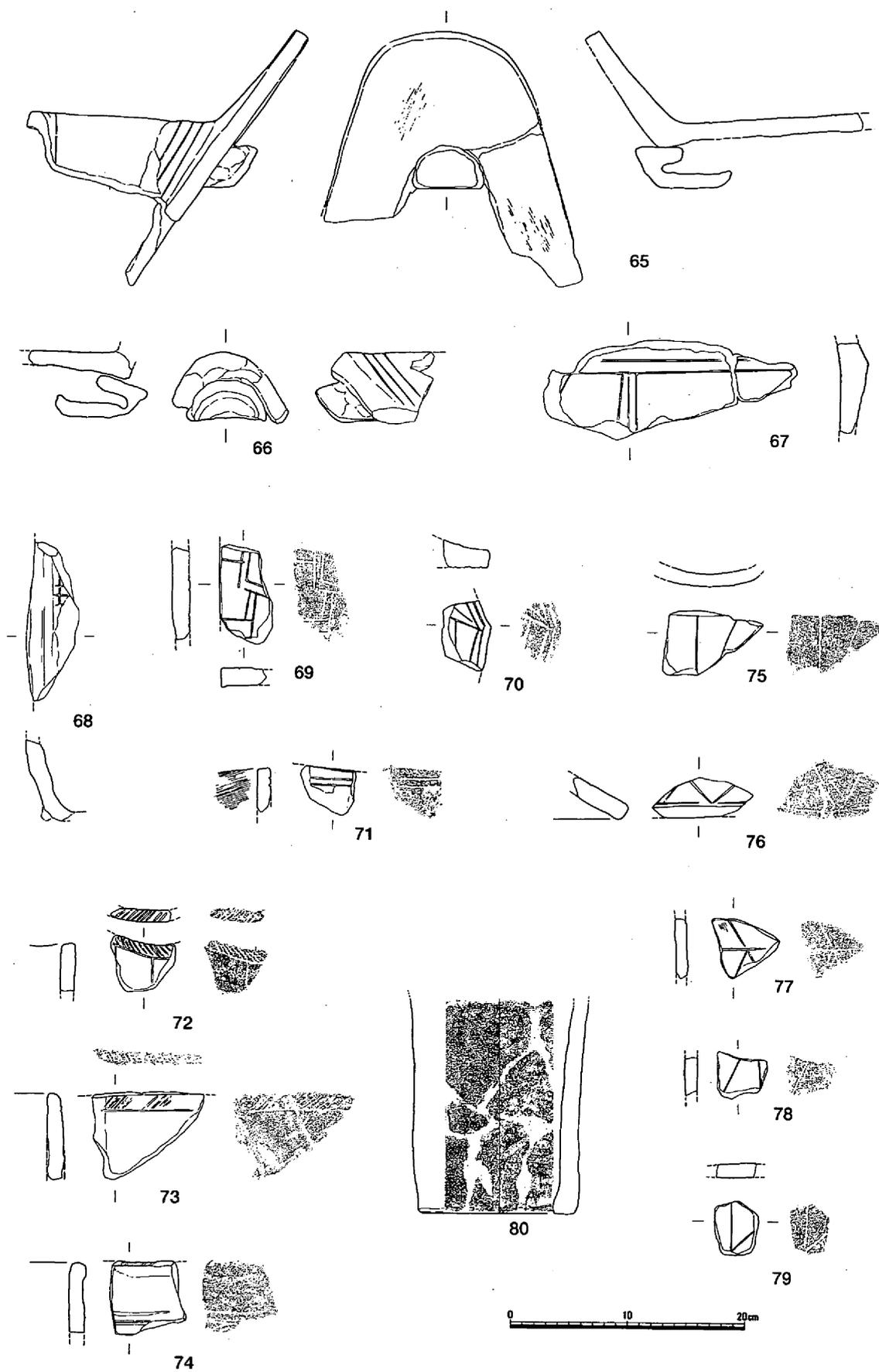
墳丘周辺の出土遺物は以上の通りであるが、前述したように1号墳に確実に伴うものは全く無いか、あったとしても抽出困難と言わざるを得ない状況である。埴輪は大半が黒斑を有していることや、朝



第42図 1号墳出土遺物⑤ (1/5)

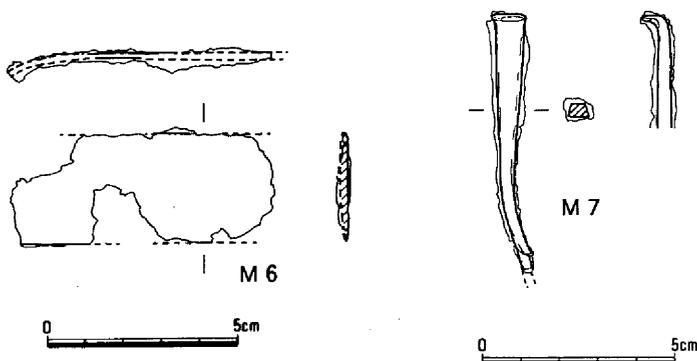


第43図 1号墳出土遺物⑥ (1/5)



第44図 1号墳出土遺物⑦ (1/5)

顔形埴輪の特徴などから、26号墳出土品としても矛盾ないものと考えている。いずれにせよこの古墳が造られたのは26号墳の築造後、かつ25号墳築造前という狭い時期幅に収まることは間違いなく、古墳群全体の造営時期を考える上では、さほど影響のないものと言える。



第45図 1号墳出土遺物⑧ (1/2)

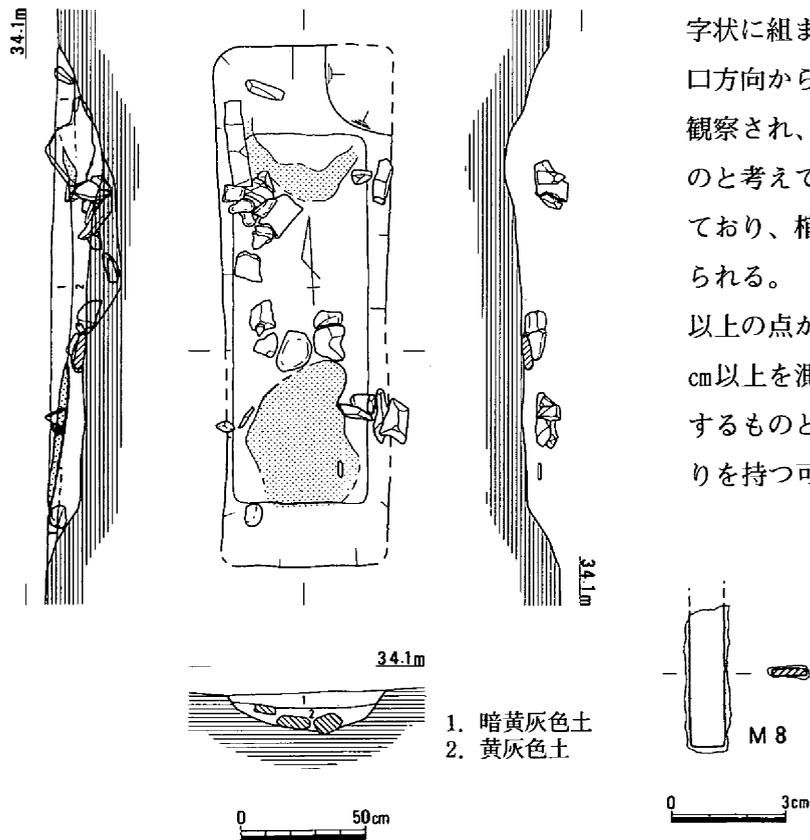
(4) 埋葬施設 (第46図、図版52)

埋葬施設は表土除去直後に黄白色粘土の広がりとして認識されていたが、墳丘主軸とはずれていると判断し、東側墳頂部、さらに削平部断面において主体となる埋葬施設を探した。最終的には別の埋葬施設は検出できず、仮に削平部分に別主体が存在するとしても墳丘主軸上には乗らないことになり、むしろ二つの埋葬施設が平行して存在した可能性を想定すべきかもしれない。

検出された埋葬施設は木棺と考えられるが、墓壇は盛土内に納まっているため、底部の様子が明確にできなかった。墓壇は主軸を南北方向にとり、長さ203cm、幅66cm以上を測る。内部には木棺を支えるためと推定される石材が認めれたほか、赤色顔料も検出されている。石材は墓壇側壁沿いに板状のものが立てられ、床面中央付近にはU字状に組まれたものもある。粘土層は両小口方向から中央部に向けて下降するように観察され、小口板あるいは蓋材に関わるものと考えている。小口側の墓壇壁は外傾しており、棺形態を反映しているものと考えられる。

以上の点から木棺は幅50cm前後、長さ203cm以上を測り、底面が緩やかなU字状を呈するものとなる。また小口側は船底状の反りを持つ可能性が強く、全体として船形木棺を想起させる。

遺物は墓壇底面から浮いた状態で鉄器1点が出土している。M8は残存長3.6cm、幅0.9cmを測る板状を呈し、鉈の茎部と考えられる。



第46図 1号墳埋葬施設 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

(椿)

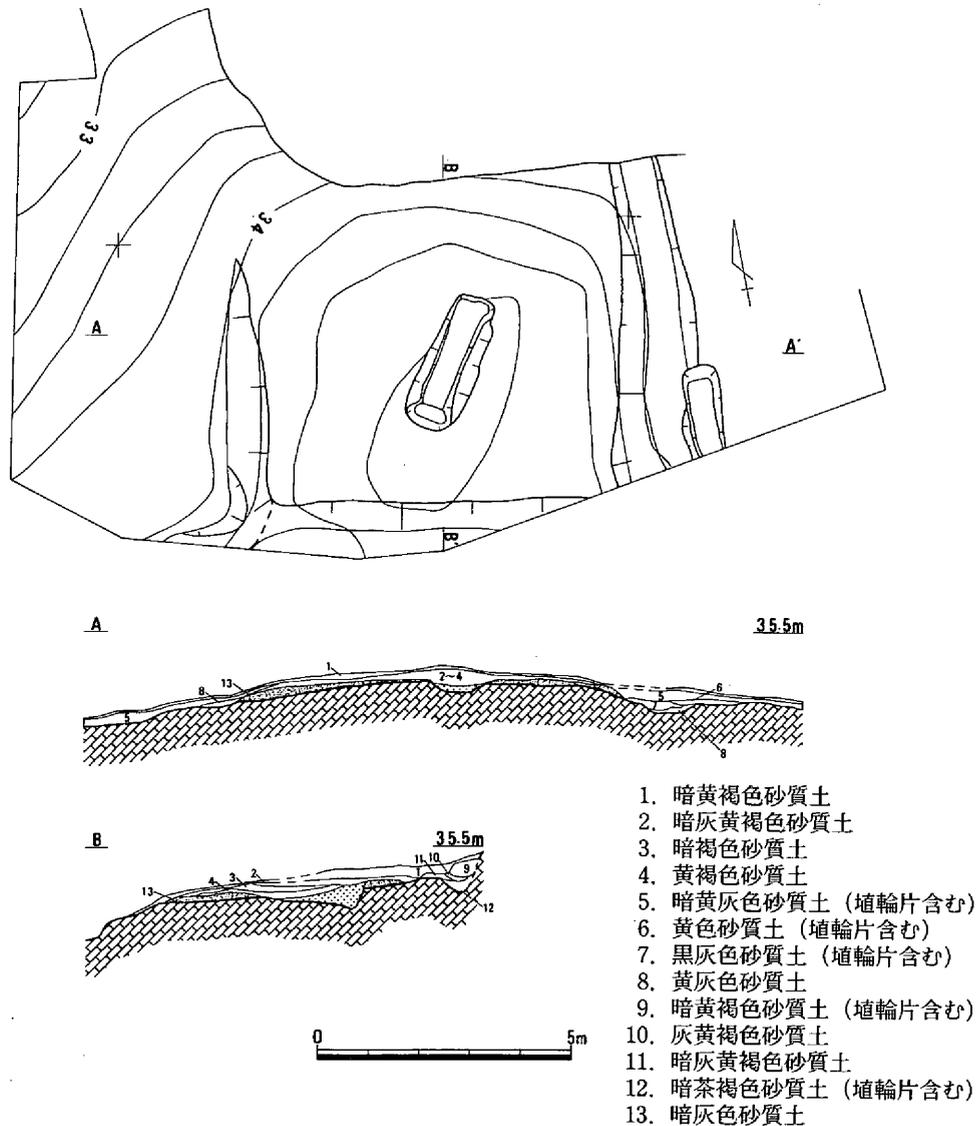
4. 西山26号墳

(1) 古墳の概要と位置 (第31・47図)

西山26号墳は丘陵の頂部、海拔34mに位置するが、1・25号墳と比較するとやや西に寄っている。墳丘の北側は1号墳の周溝で切られており、南側は用地外に続いている。墳丘の大半は既に流失しており、約50cm程度の低い高まりが認められただけであった。しかし、周溝や埋葬施設、多くの埴輪が出土するなど多くのことが明らかとなった。埴輪の据え穴については確認されなかった。

(2) 墳丘 (第47図、図版53・54)

調査区南端から南23mの地点に、東西にまっすぐ切られた地形が認められる。この間はまったく平坦な地形であり、高まりは認められないが、これが南の周溝で墳丘が削平もしくは埋没していると考えられる。26号墳は1辺20m前後の方墳であると考えられる。調査区内の墳丘はこの造出しと思われる。



第47図 26号墳墳丘測量図および墳丘断面図 (1/150)

周溝などが検出され、東西8.25m、南北もほぼ同じと推定される。形は方形で、主軸方向はN-9°-Eで、真北に近い。現存する墳丘の高さは0.76m前後である。

盛土はほとんど残存していないが、厚さ40cm程度の第2～4層が確認された。第13層は厚さ10cm程度で、古墳築造前の旧表土の可能性があり、埋葬施設については、少なくとも第13層を切って作られていることが確認された。墳頂部からは、人物埴輪と思われる破片や蓋形埴輪が出土している。

周溝は東側に認められ、南北にまっすぐのびている。幅は1～1.6m、深さは0.15mを測り、断面形は「U」字形である。この埋土からは円筒形の埴輪片（必ずしも円筒埴輪ではない）、朝顔形埴輪、盾形埴輪、靴形埴輪などが出土している。墳丘の西側と北側は地山の削り出しが行われており、西側では海拔34.1mで地山の傾斜変換が認められる。さらに西側は幅1～2.5mの平坦面を形成している。一方北側は1号墳の周溝によって切られており、海拔33.5m付近に地山の傾斜変換が存在していたと思われる。西裾では家形埴輪が出土している。用地境では、東西にまっすぐのびる溝状の落ちを検出したが、南の肩は確認されていない。深さは30cmを測り、埋土は朝顔形埴輪や鶏形埴輪片を含む暗茶褐色砂質土である。このため主墳丘と造出しの間には段差が設けられていたようである。

周溝の南東肩を切った形で土壙墓3が検出されている。これは墳丘外埋葬である可能性がある。また、円筒棺も出土している。

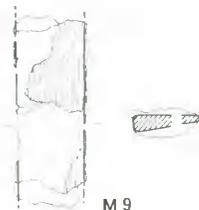
(3) 墳丘の出土遺物 (第48～54図、図版58～60)

墳丘上あるいは周辺からの出土遺物には、大刀や多くの埴輪片、円筒棺などがある。ほとんどがこの古墳に関係する可能性があり、さらに1号墳の周溝出土の埴輪もその一部である可能性が高い。

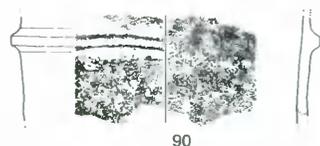
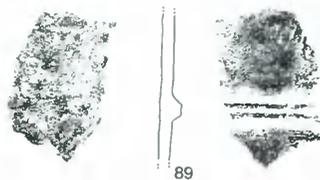
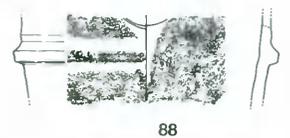
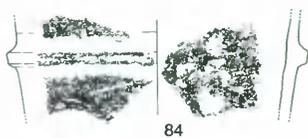
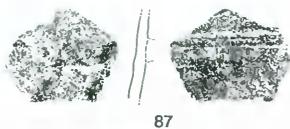
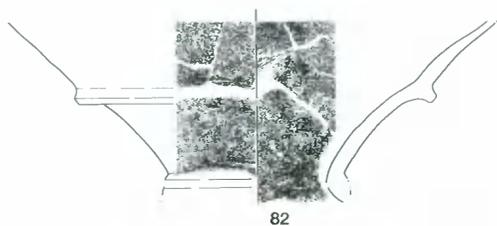
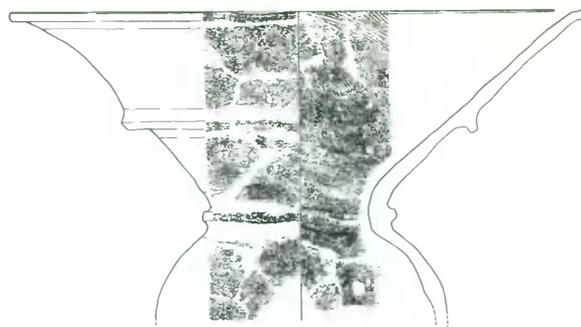
M9は大刀の茎の部分で、木質が残存している。また目釘穴が認められる。

埴輪はすべて土師質で、黒斑を有するもの(81・82・93・101・102・103・111)も認められる。確認できる器種は、朝顔形埴輪、家形埴輪、盾形埴輪、靴形埴輪、蓋形埴輪、甲冑形埴輪、鶏形埴輪などである。円筒埴輪の存在については確認できない状況である。

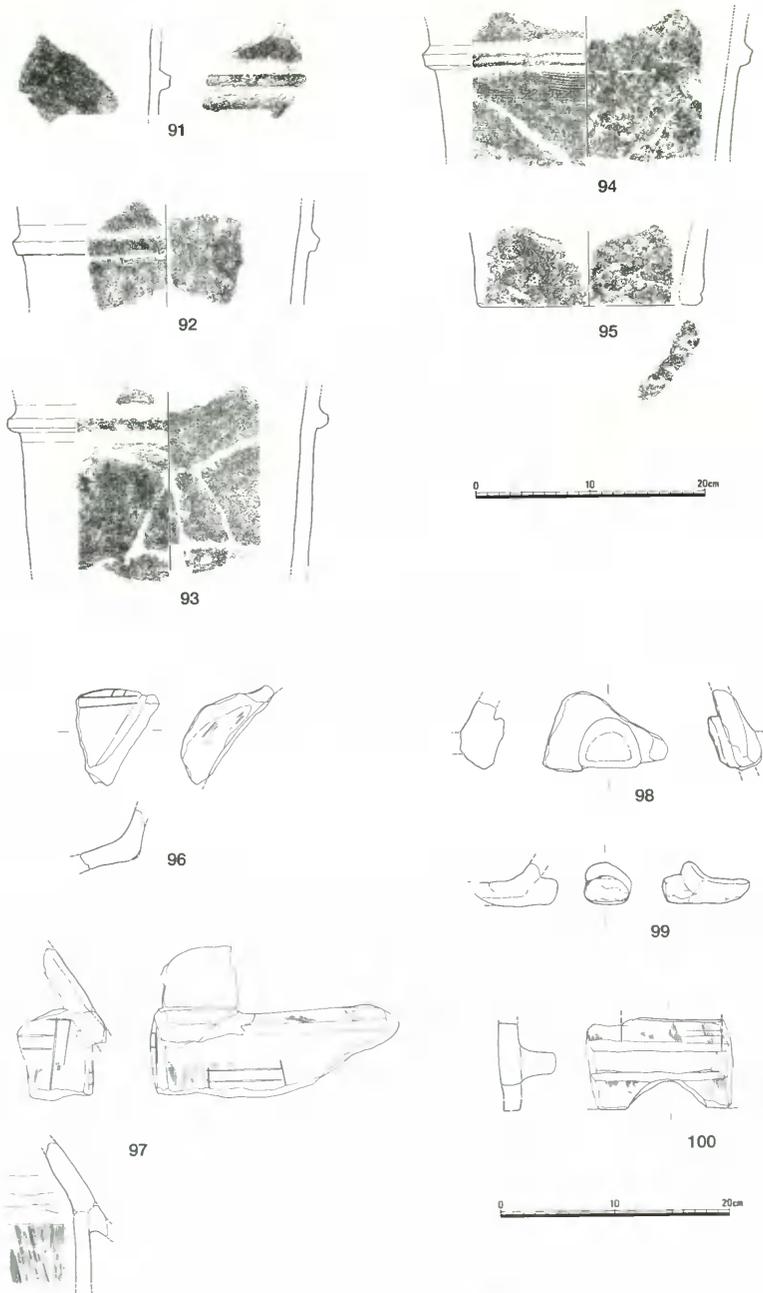
朝顔形埴輪81・82は、古墳の東西で1個体ずつ出土しており、くびれ部あるいは造出しの隅に配置されていた可能性を示す。どちらも口縁部が大きく開き、内外面ともタテハケあるいは斜め方向のハケメを施す。円筒の埴輪片の外表面はタテハケの後2次調整としてヨコハケが施される。タガを貼り付けた部分の内面はナデであるが、それ以外は不明なものが多い。ただし、93の内面は斜め方向のハケメが認められる。94と95は同一個体で基底部は肥厚している。家形埴輪はごく少数の破片96～98・100を挙げたが、1号墳周溝内のものが伴う可能性がある。盾形埴輪は東裾の南北で2個体出土している。大形の101は上縁が弧を描き、隅は突出する。外縁は沈線により3つに分かれ、最も内側の下縁のみ斜線が施される。盾の面は綾杉文により、上・内・外に区画されている。外区はコ字状に、内区はさらに区画されている。内区の下段は複線の菱形文が連続しているが、その他は複線の鋸歯文が描かれている。小形の102は平面長方形である。下方で縁になっている綾杉文は上方に向かって内側へ入る。盾の面は綾杉文でT字状に区画され、内区はさらに5つに区画されている。ただし、内区下段の綾杉文が外区にのびており変則的である。文様は基本的に複線の鋸歯文であるが、内区の中央



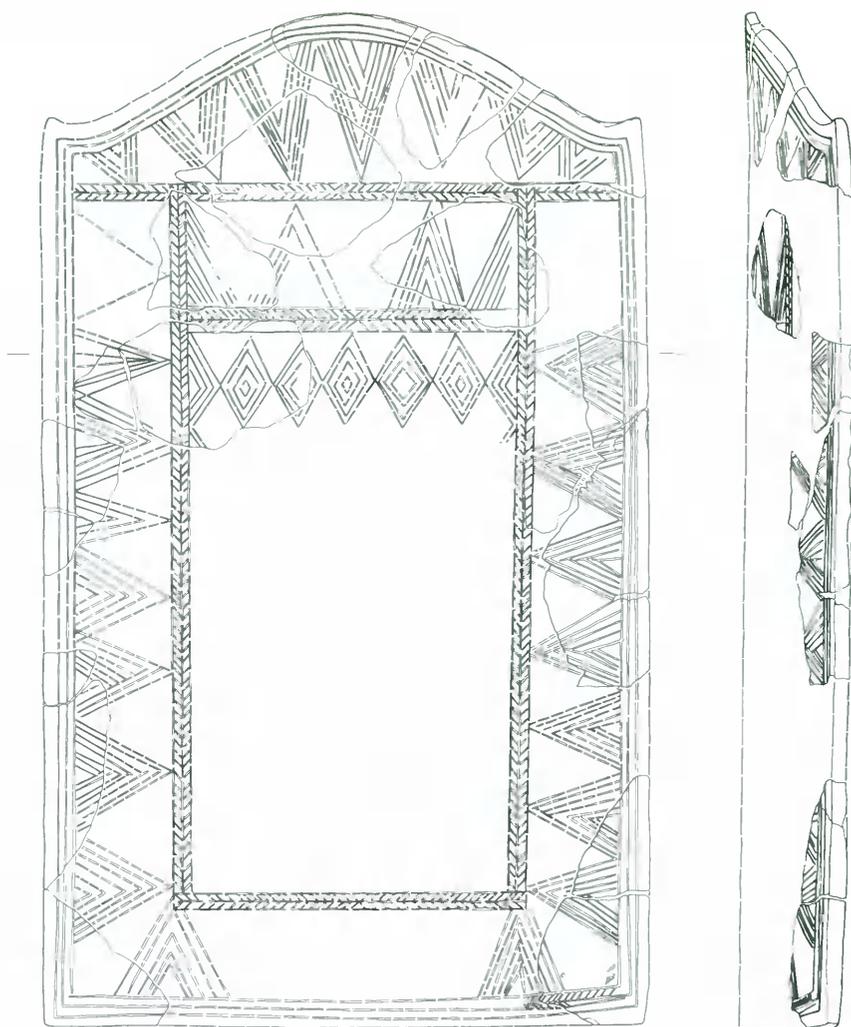
第48図 26号墳出土遺物①
(1/2)



第49図 26号墳出土遺物② (1/5)



第50図 26号墳出土遺物③ (1/5)

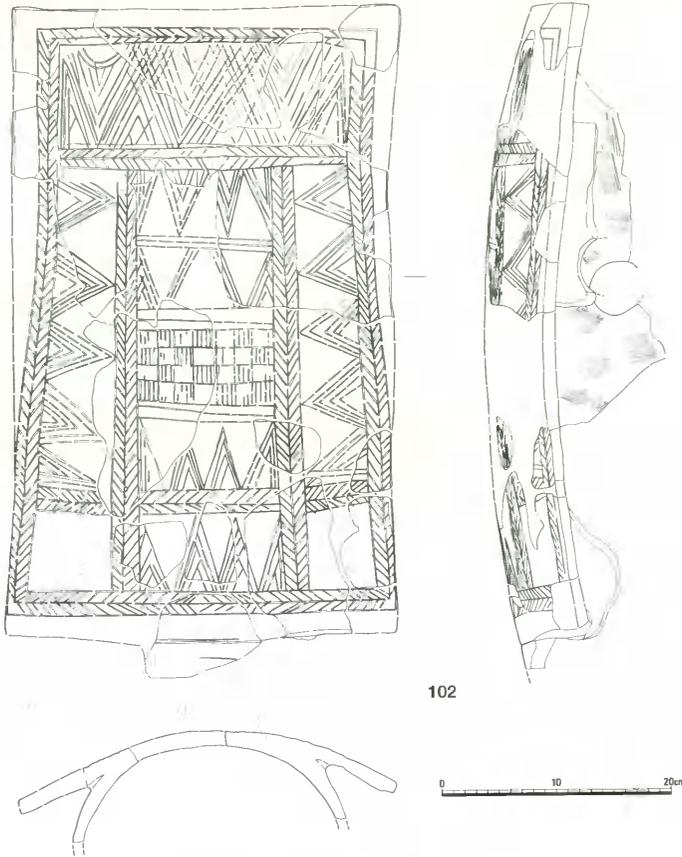


101



0 10 20cm

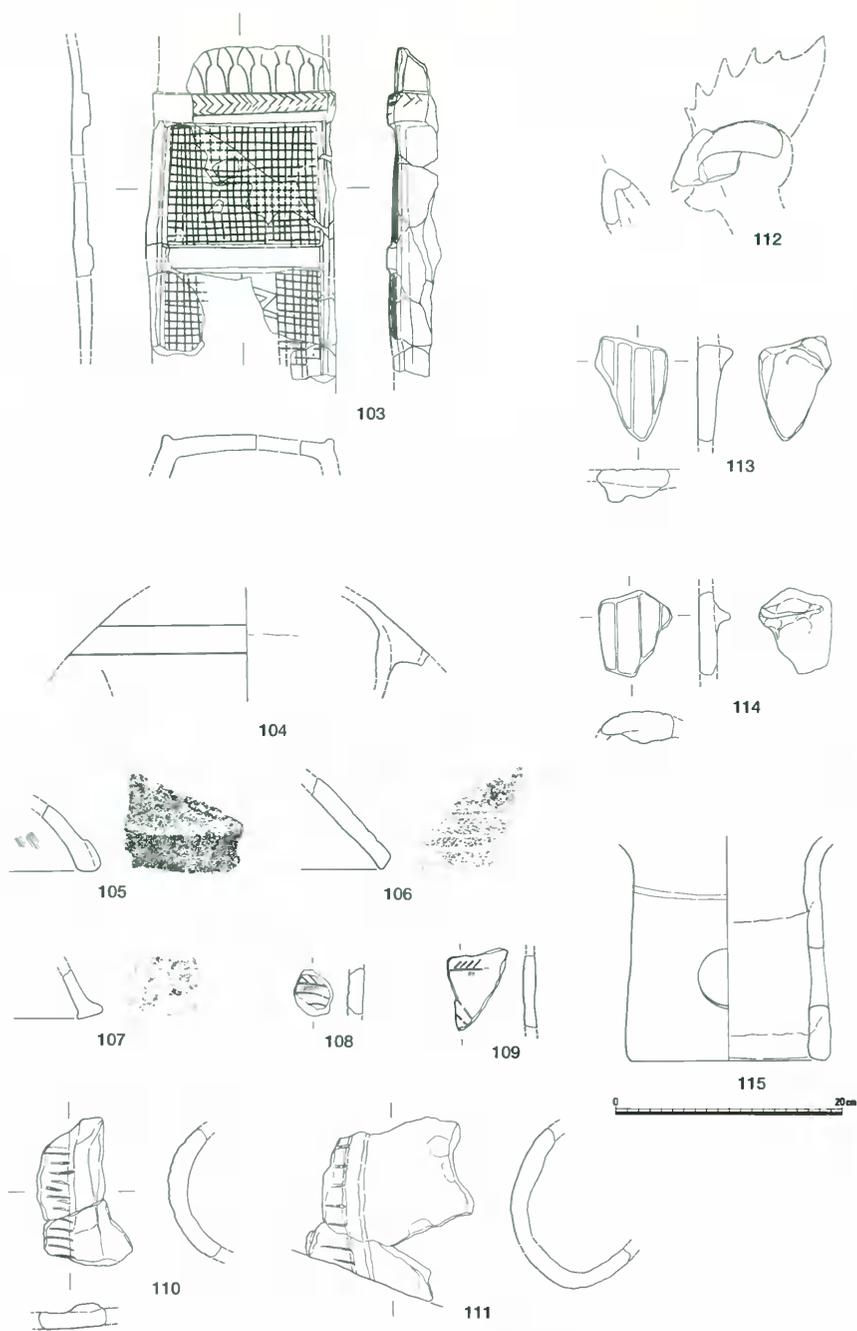
第51図 26号墳出土遺物④ (1/5)



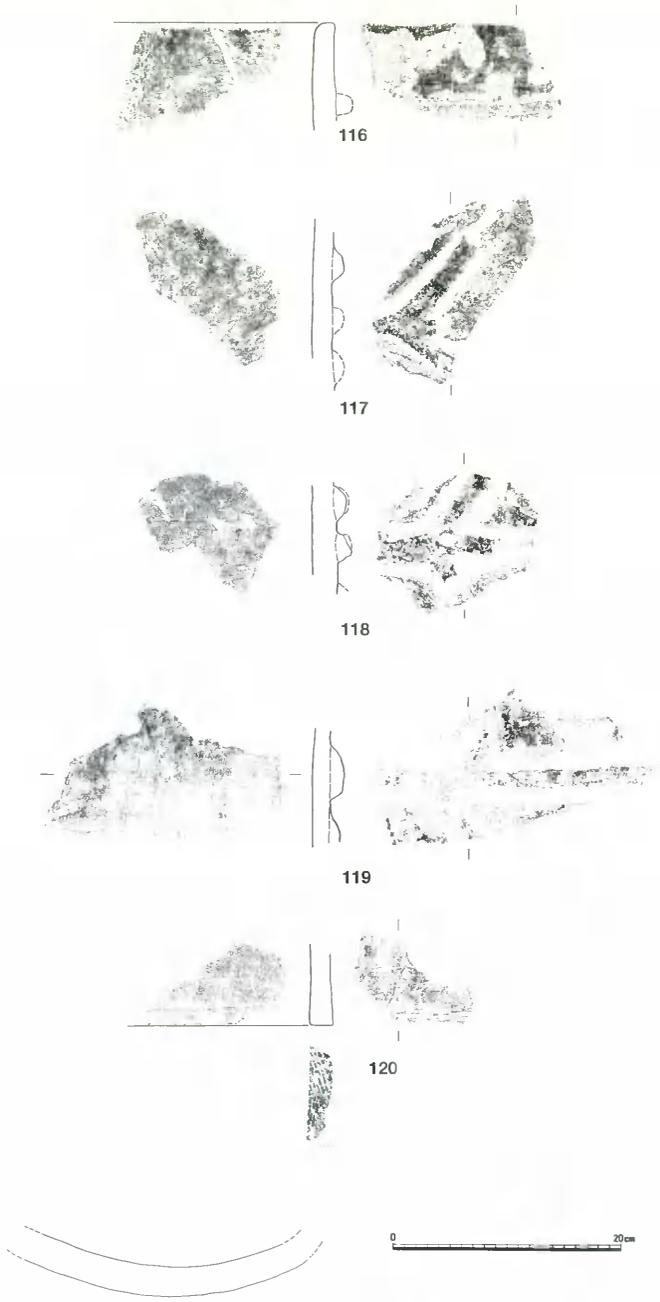
第52図 26号墳出土遺物⑤ (1/5)

は沈線による格子のなかに縦の沈線を施している。103は靴形埴輪の矢筈部である。断面は矩形を呈し、外面はタテハケの後に施文を行っている。内面上半はヨコハケ、下半はタテハケを施す。上縁には綾杉文が施されるが、帯の部分は無文である。前面には沈線による格子が描かれるが、帯の下中央には編み上げ状の文様が認められる。鍬は有茎平根式鉄鍬で柳葉式のものがかかれていと思われる。蓋形埴輪は傘部104・105が出土している。1号墳の80はこの立ち飾りの軸部と思われる。胎土や焼成は円筒棺と酷似している。111は甲冑形埴輪の草摺部の裾端部である。めぐっている沈線の間は綾杉文が施される。1号墳の72は短甲部の一部ではないかと思われる。110・111は人物埴輪の足の部分ではないかと思われる。112は鶏形埴輪の頭部と思われる。造出し南の落ちから出土しており、くびれ部付近に配置された可能性もある。115は形象埴輪の円筒部で、屈曲部分にはタガが剥離した状況が認められる。99・107・113・114の器種は不明である。

116~120は円筒棺で、蓋形埴輪104・105と胎土や焼成が酷似している。116は口縁部と思われ、端部は面を形成する。外面はタテハケの後突帯を貼り付け、2次調整としてヨコハケを施す。胴部内面はヨコハケあるいはナデを施す。外面には、横方向の突帯とそこから上下に枝状に分かれる突帯が



第53図 26号墳出土遺物⑥ (1/5)



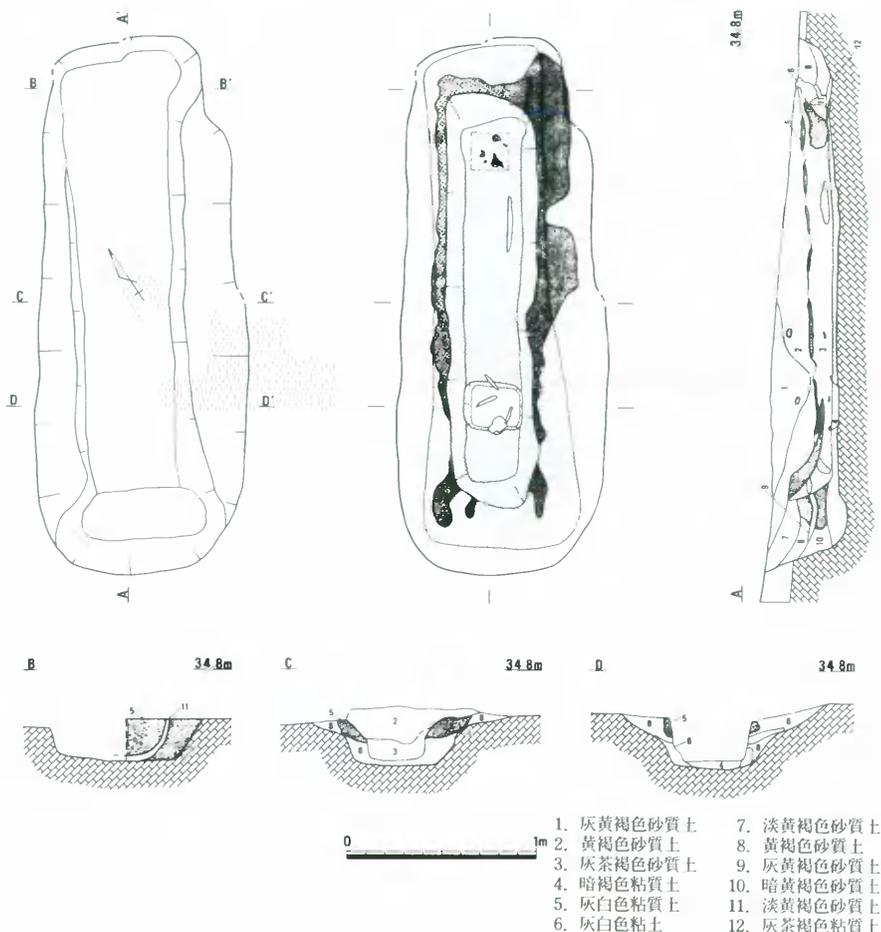
第54図 26号墳出土遺物⑦ (1/5)

貼り付けられている。120は底部と思われる、端部はかすかに肥厚する。内外面ともタテハケが施され、端部はヨコハケが認められる。117・118は内外面に、120は外面に赤色顔料が認められる。

出土した埴輪は須恵質のものが認められずⅣ期までは下らないと考えられる。円筒埴輪の外面調整からはⅢ期に相当すると思われるが、盾形埴輪の文様区画はⅡ期の可能性を示す。このような状況から、26号墳はⅡ期の新しい段階からⅢ期の間にかけて築造されたと考えたい。

(4) 埋葬施設 (第55図、図版54・55)

26号墳のほぼ中央に位置する埋葬施設である。主軸はN-34° 20′ -Eで、墳丘主軸と比較すると25° 20′ 東に振っている。墓壇の掘り方は平面隅丸長方形で、墳丘第13層を切っている。規模は検出面で、長さ282cm、幅111cm、深さ28cmを測る。掘り方はやや西寄りで2段になっており、糸巻き状の平面形を呈する。幅は60~63cmを測り、床面は平らであるが、南の方が北側に比べ6cm低い。北小口はわず



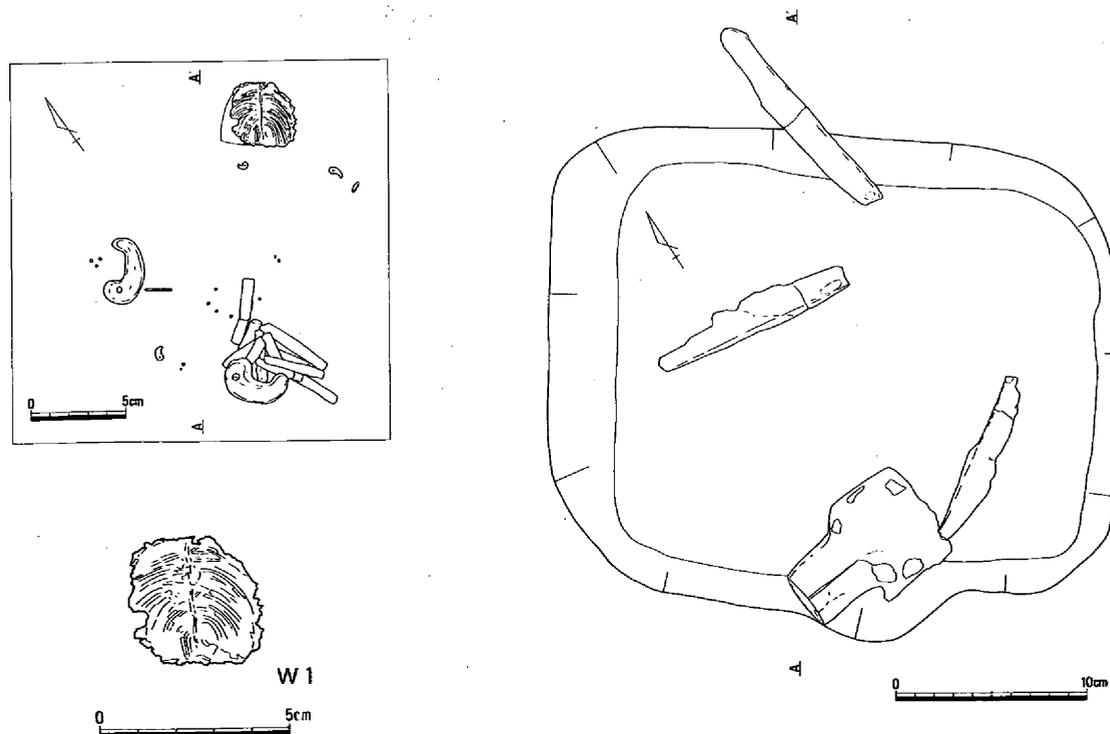
第55図 26号墳埋葬施設 (1/30)

かに凹む程度であるが、南小口は底面で65×24cm、深さ4cmの楕円形の凹が認められる。

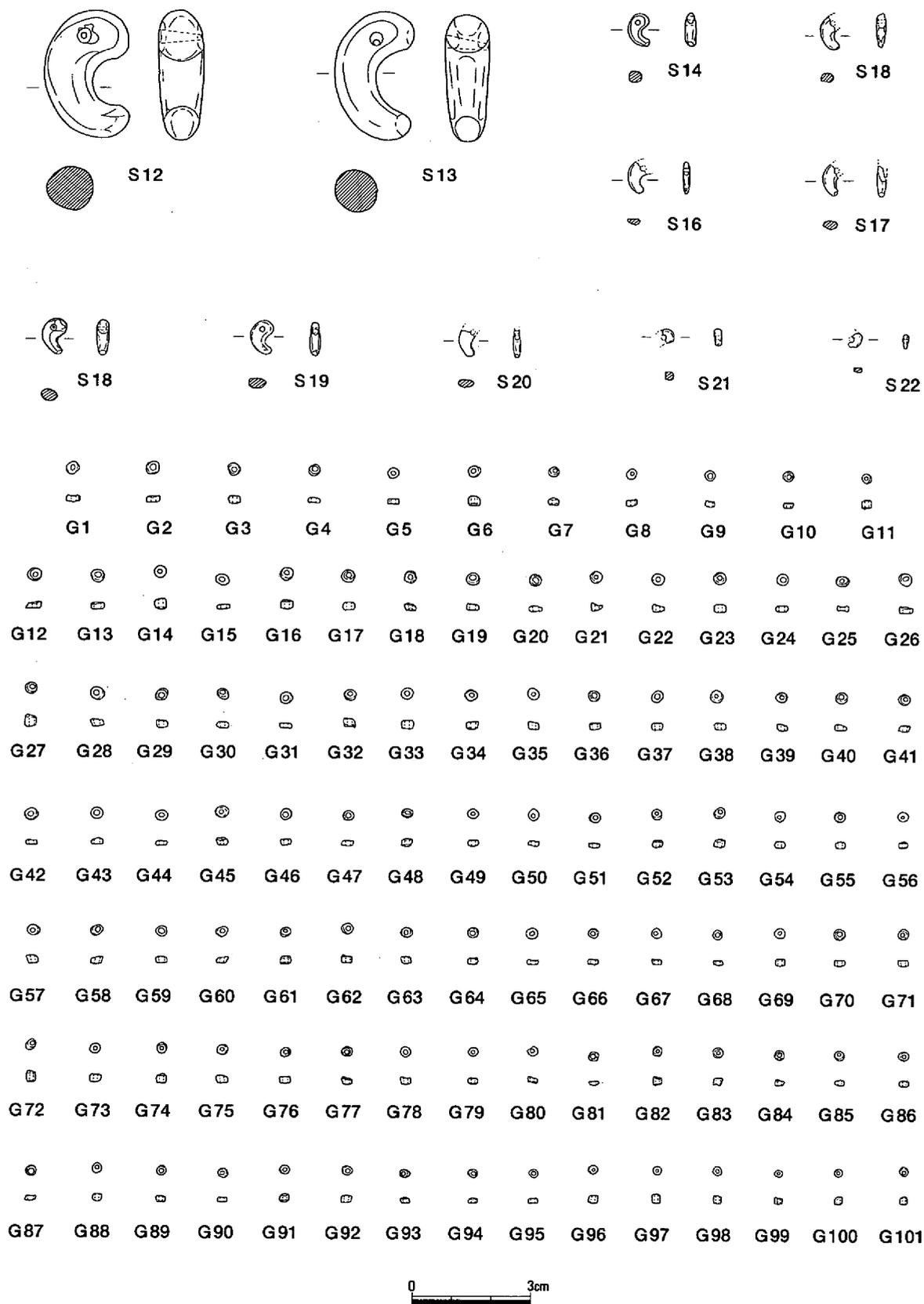
この掘り方の床面から段まで灰白色粘土を貼っている。粘土の厚さは床面で2～4cm、側壁で6～15cmを測る。この面での高さは、南の方が北側に比べ2cm低い。ただし、両小口部分はさらに厚く粘土が貼られており、北の第12層の上面と南の粘土層の間には、長さ20cmにわたって薄く朱が認められる。これは棺底を示すものと思われる。また、北小口部分で9cm程度たちあがる第11層は、小口板痕跡と考えられる。横断面では粘土の床面は水平で、側壁はわずかに外方にたちあがる。北小口部分では木棺痕跡と思われる土層と朱も確認された。さらに段から上と棺蓋は、砂混じりの灰白色粘質土や砂質土との互層で被覆されている。このような状況から、棺構造は小口板の外に側壁と底がのびるもので、箱形もしくは底面を平らにした割竹形木棺と考えられる。規模は確定できないが、外法での長さ195cm以内、幅32cmを測ると推定される。出土遺物などから北頭位と思われる。

なお床面の南半部に、31×25cmの範囲で粘土が認められない長方形の凹（深さ4cm）が検出されている。これが棺構造や副葬品の痕跡であるかどうかは不明である。

北小口から南に20cm前後の床面において、16cm四方の範囲で竖櫛と玉類が出土している。竖櫛は櫛の部分が南に向いている。この近くでは玉類3点のみが認められたが、やや離れた位置では管玉と勾玉、ガラス小玉、針状鉄器がまとまった範囲で出土している。竖櫛が身に付けられた状態であったとするならば、距離から考えてこれらの玉類は頭部の装飾品であったか他の部位の装飾品などをこの部分に置いていた可能性が考えられる。鉄剣は北小口から南に50cmほどの東脇で、先を足の方に向けて置かれている。北小口から南に160cmほどの床面において検出された長方形の凹の範囲では、刀子3点と袋状鉄斧1点がやや散乱したような状態で出土している。これらは凹に落ち込んだ状況は認められず、埋土の第4層上にほぼ水平に乗っている。ただし、上層の埋土状況などを勘案すれば、棺蓋上の棺外副葬品であった可能性も考えられる。



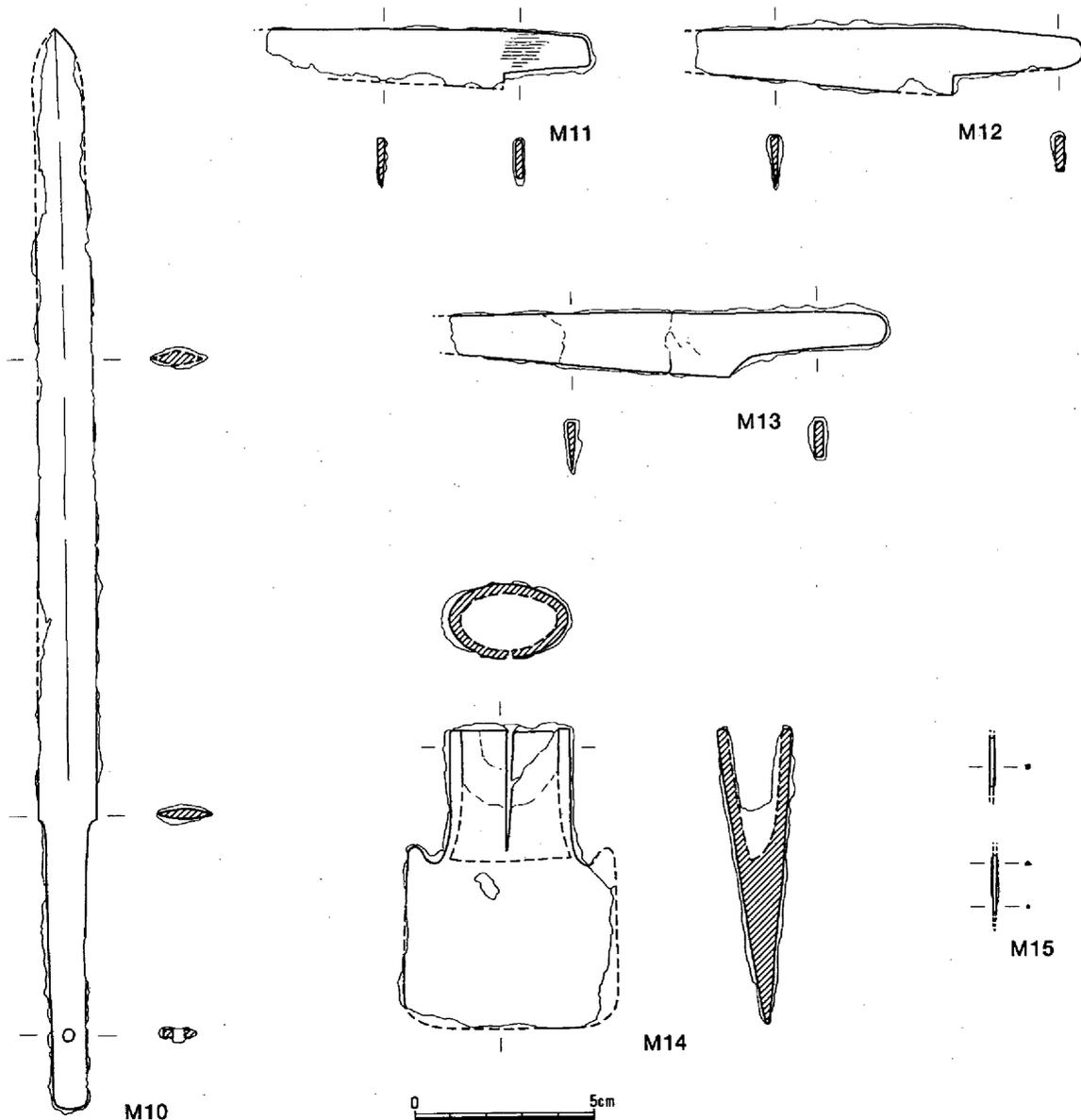
第56図 埋葬施設遺物出土状況 (1/4) ・出土遺物① (1/2)



第57図 埋葬施設出土遺物② (2/3)

(5) 埋葬施設に伴う出土遺物 (第56~58図、図版60)

W1は竖櫛で、残存状況はよくない。S12・13は滑石製の勾玉で、暗緑灰色を呈する。どちらも片面穿孔で長さなどもほとんど同じであるが、S13の方が細長く見える。S14~22は滑石製の小形の勾玉である。大きさはほぼ同じで、基本的に灰白色など白っぽい色を呈する。図示していないが、管玉が15点出土している。緑色凝灰岩製であるが、風化が著しく土壌化していた。長さは2~4cmを測るが、大きさごとの点数は確認できない。G1~101はガラス小玉である。径3mm前後で厚さ1.5~2mm前後のものが多い。M10は鉄剣である。長さは30cmを測り、茎の端部近くに目釘穴が認められる。M11~13は刀子である。いずれも先端部は欠損しており、茎の長さについてはM11は短い。M14は袋状鉄斧である。M15は針状鉄器であり、出土状況から頭髮に關係するものと思われる。(柴田)



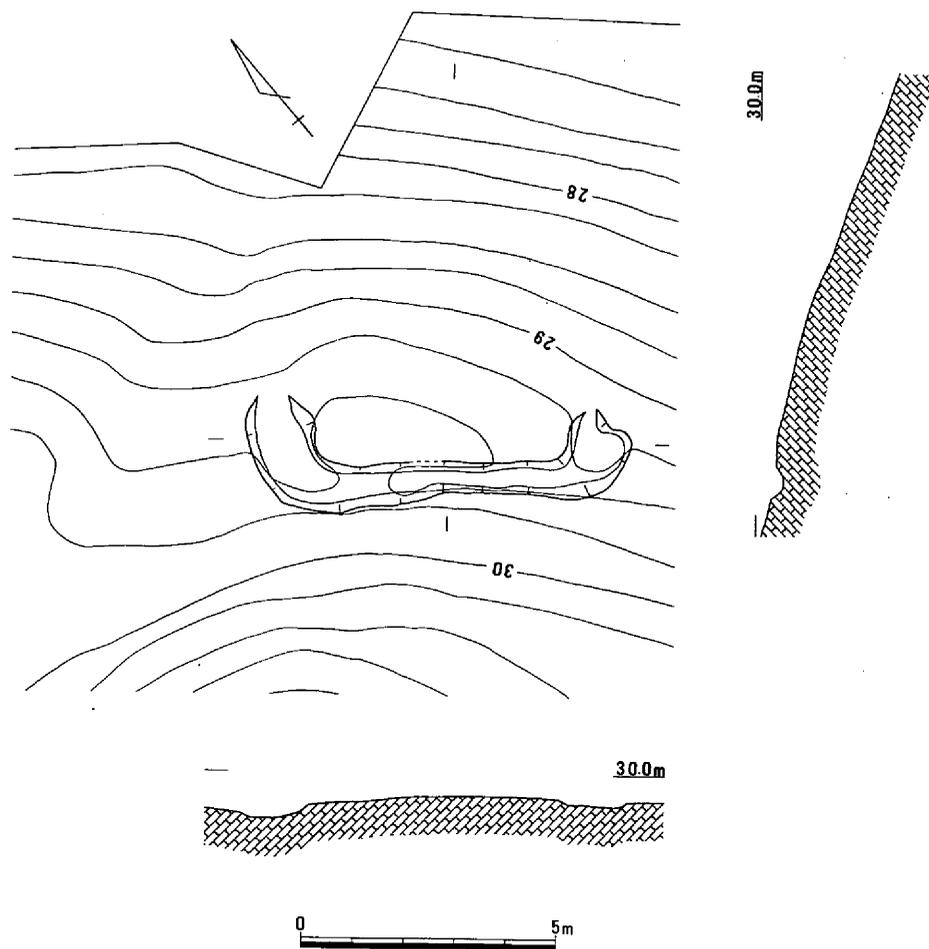
第58図 埋葬施設出土遺物③ (1/2)

5. 西山27号墳

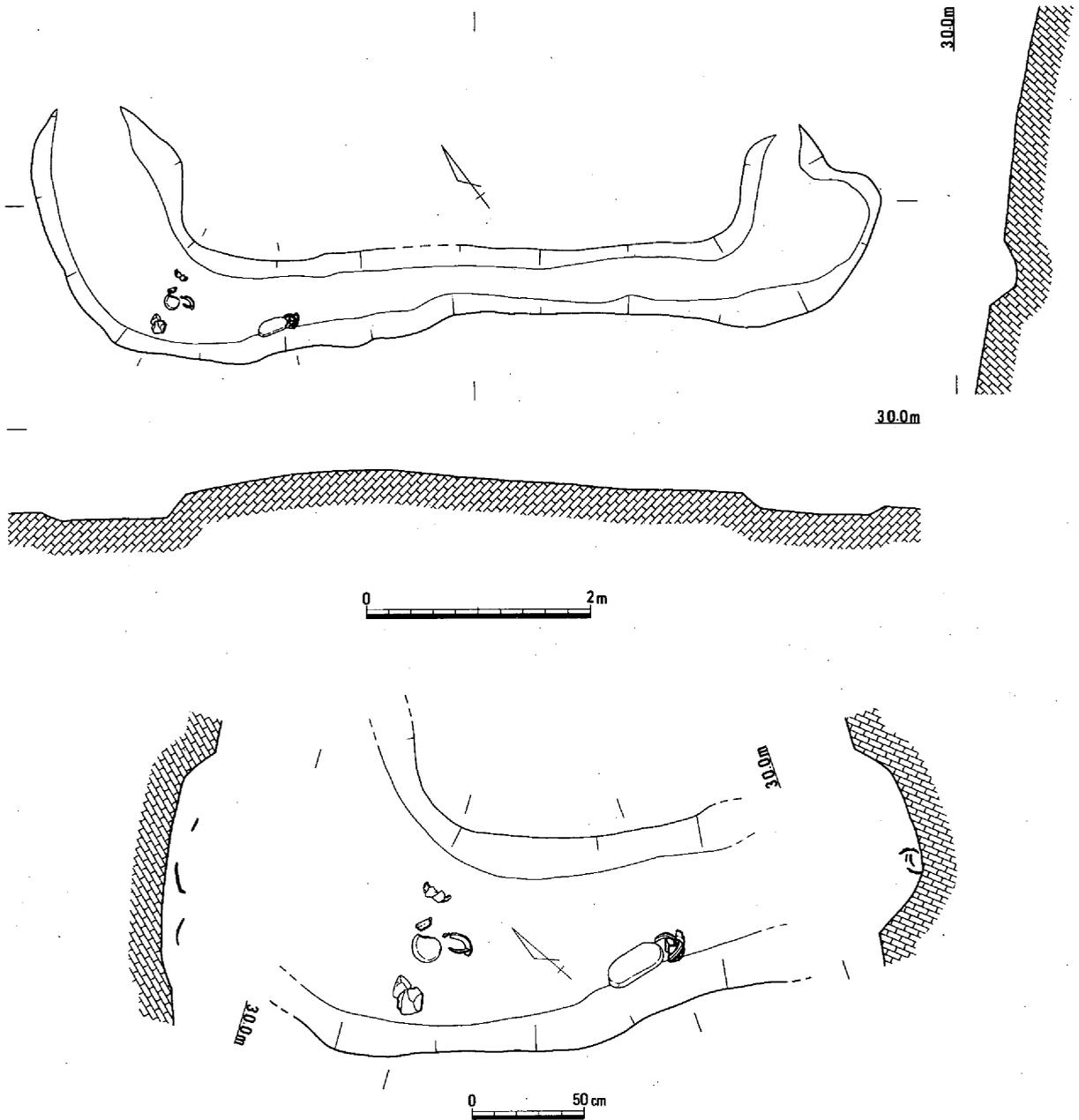
(1) 古墳の概要と位置 (第31・59・60図)

27号墳は丘陵先端付近の北東斜面に位置し、丘陵尾根筋に連続して築かれた1号墳などとは異なる立地を示している。当初この古墳が占地する部分は大半が調査区外にあったため、その存在には全く気がつかなかった。弥生の集落を追跡調査するために調査区を東側に拡張した際、初めて検出できたものである。

墳丘については周溝の形態から方墳として間違いないが、検出は地山面において行なったため、墳丘盛土の様子は確認できていない。しかし調査前の地形測量図において、この部分にわずかながら高まりが認められることから、検出前にはいくらかの盛土が残存していたものと考えている。周溝は南辺長7.6m、幅60~130cmを測り、コの字状の形態を残す。コーナー部はやや幅広となっており、南東部は検出面においてやや不整形なものとなっている。周溝断面は底面が平坦に近くになっているが、幅の狭い部分では緩やかな弧状を呈している。周溝から推定される墳丘の規模は東西6m前後を測り、非常に小型の方墳と言える。周溝底からは小型の石材と伴に、須恵器2個体分と土師器の破片が出土している。



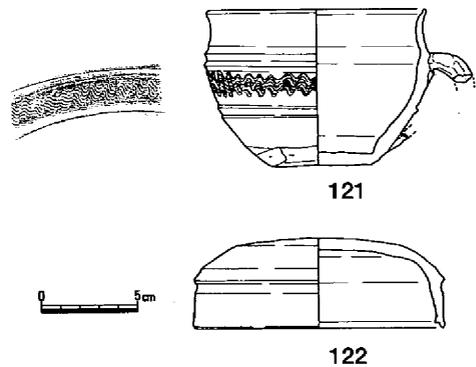
第59図 27号墳地形測量図 (1/150)



第60図 27号墳周溝 (1/60) および遺物出土状況 (1/30)

(2) 出土遺物 (第61図、図版60)

図示できたのは須恵器のみである。121は把手付きの椀で、青灰色を呈し焼成良好なものである。口縁部の一部と把手部下半を欠損するが、他はほぼ完形に復元でき、口径11.5cm、器高8.3cmを測る。口縁部は外反して立ち上がり、端部はやや上方に摘み上げられている。体部外面にはクシ状工具による波状文が施され、底部付近はヘラケズリされている。122は蓋で、灰黄色を呈し焼成不良なものである。口径13cm、器高4.8cmを測るやや偏



第61図 27号墳出土遺物 (1/4)

な形態を呈しているが、風化のため各部の調整は不明確である。天井部外面は回転ヘラケズリが稜近くまで施されていると推定される。また、口縁端部には段が認められる。

出土した須恵器の示す時期は121が畿内陶邑編年のTK-208以前、122がTK-208以降と考えられることから、27号墳の築造もこの頃になされたものと考えられる。また、古墳自体の立地から尾根稜線上の古墳群に後続する時期と考えられることから、古墳群全体の築造時期を考える上で重要な資料と言える。

第4節 結 語

今回の調査は、総数27墓以上と推定される西山古墳群の東北端に位置する5基を対象としたものである。いずれも後世の耕作地として利用されたため、完全に墳丘が遺存するものは皆無であったが、埴輪を中心に多数の遺物が出土した点は大きな成果であった。これらはこの出土遺物から、5世紀中葉～後葉にかけて連続的に造られたものと推定され、時期的には当地域最大の前方後円墳造山古墳の築造直後になると思われ、その意味においても注目される。ここでは簡単ではあるが、今後に残された課題と、わずかながらその見通しを記しておきたい。

まず古墳群の立地については、同じ西山古墳群の過去の調査成果⁽¹⁾や周辺古墳群と比較的検討する必要がある。今回調査した1・25～27号古墳は支群としては東端部に存在する点は、時期に後続する古墳群がより谷奥側に立地する点と関連するかもしれない。墳丘形態は不明な部分も多いが、少なくとも方墳群が先行して造られている可能性がある点、造り出しを持つ盟主墳的な古墳の存在などがあげられる。また後出する古墳には確実に円墳が存在し、時期不明の小型の前方後円墳も含んでいることから、ある時期を境に墳丘形態の構成に大きな変化が生じた可能性も考えられる。埋葬施設は先行期には木棺（くり抜きタイプ）を使用しており、前期末には普遍化する箱式石棺がこの時期、この地域ではいち早く衰退している可能性を感じている。副葬品は26号墳のように前代の様相をとどめるものや、中山6号墳のような後期型の竪穴式石室内に納められた新しい様相を持つものが存在することから、その変革がこの古墳群造営中に起きていると考えられる。埴輪についてはこれまでの調査からも大多数の古墳に伴う可能性が強く、その数、種類とも当地域では今のところ際立った様相を呈している。特に形象埴輪については今回十分検討できておらず、今後は周辺の古墳群出土のものと比較検討する必要性を痛感している。また、各種の埴輪が総体として一種の階層を持っているとすれば、その構造を抽出することで造山古墳出現後の社会構造を解明する手掛かりとなるであろう。

(椿)

註

(1)『総社市西山周辺古墳群』総社市教育委員会 1972年

土器一覽

西山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	1	竪穴住居1	弥生土器	底部			12.0		外面ヘラミガキ	2.5Y7/3(浅黄)	精良	
2	2	竪穴住居1	弥生土器	高杯			14.8			2.5Y8/3(浅黄)	細砂 長石粒	
3	10	竪穴住居4	弥生土器	高杯			16.3		円孔推定32	10YR7/3(鈍い黄橙)	細砂 長石	
4	12	土壌1	須恵器	甌					口縁に波状文、5とは別個体	2.5Y7/3(浅黄)	細砂	
5	11	土壌1	須恵器	甌					肩部に刺突	5Y6/1(灰)	細砂	
6	72	竪穴住居5	弥生土器	長頸壺	17.4				頸部沈線は螺旋状に巡る	10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
7	73	竪穴住居5	弥生土器	甕	22.9				凹線4条	10YR8/4(浅黄橙)	0.5mm以下の砂粒	
8	74	竪穴住居5	弥生土器	甕					外面ハケの後刺突巡る	2.5Y7/2(灰黄)	1mm程の砂粒 長石 石英・角閃石(中)	
9	71	竪穴住居5	弥生土器	底部			16.0		外面ヘラミガキ	10YR7/3(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
10	68	竪穴住居5	弥生土器	底部			7.0			10YR6/2(灰黄褐)	1mm以下の砂粒 長石(中)・石英(中)	
11	69	竪穴住居5	弥生土器	底部			10.6			2.5Y7/3(浅黄)	1.5mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
12	70	竪穴住居5	弥生土器	底部						10YR7/3(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)・石英(中)	
13	32	竪穴住居7	弥生土器	長頸壺					頸部沈線15条	5YR6/6(橙)	0.2-1mm前後砂粒 長石(多)・石英(中)	
14	31	竪穴住居7	弥生土器	壺	17.0				頸部にタタキ目痕跡	5YR6/6(橙)	0.2-3mm程の石粒 石英(多)・長石(多)	
15	13	竪穴住居7	弥生土器	壺	13.4				外面横方向のヘラミガキ	5YR6/6(橙)	3.5mm程の小石 石英(多)・長石(多)	
16	13	竪穴住居7	弥生土器	壺			8.4		15と同一個体	5YR6/6(橙)	3.5mm程の小石 石英(多)・長石(多)	
17	32	竪穴住居7	弥生土器	壺					外面ハケ目痕跡	5YR6/8(橙)	0.2-4mmの砂粒 長石・石英(多)	
18	78	竪穴住居7	弥生土器	壺	12.7				沈線状のものが巡る?	10YR6/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
19	75	竪穴住居7	弥生土器	甕	13.9					7.5YR6/3(鈍い褐)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)・石英(中)	
20	1	竪穴住居7	弥生土器	甕			7.4			10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
21	14	竪穴住居7	弥生土器	甕			7.8			7.5YR6/4(鈍い橙)	5mm以下の砂粒 石英(多)・長石(中)	
22	76	竪穴住居7	弥生土器	底部			10.0			7.5YR5/3(鈍い褐)	1.5mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
23	25	竪穴住居7	弥生土器	底部			7.8			5YR6/4(鈍い橙)	0.2-2.5mm前後の砂粒 石英(多)・長石(多)	
24	77	竪穴住居7	弥生土器	底部			5.7			10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)	
25	32	竪穴住居7	弥生土器	底部			7.0			7.5YR7/6(橙)	2mm前後の砂粒 長石(多)・石英(多)	
26	32	竪穴住居7	弥生土器	高杯			12.1		竹管文巡る	7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)・石英(中)	

西山5号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
27	3	調査区端部	須恵器	甕					内外面荒いタタキ	2.5Y6/1(黄灰)	細砂	
28	4	調査区端部	埴輪	円筒						10YR7/3(鈍い黄橙)	細砂 長石	

西山25号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
29	80	北東部	土師器	高杯					外面にハケ目、内面に絞り痕跡。	7.5YR6/1(橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)	
30	81	南部周溝	土師器	小型壺?					径約8cmの円形に欠かれている。	10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
31	25	北東部	埴輪	円筒	26.2	28.7			スカシ孔	7.5YR6/6(橙)	1-2mm程の砂粒	
32	20	北東部裾	埴輪	円筒			25.6			5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)	
33	24	北西部	埴輪	円筒			26.6			10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm前後の長石 2mm前後の赤色酸化土粒(中)	
34	23	西部周溝	埴輪	円筒	23.8	24.0			ヘラ記号	5YR6/6(橙)	0.5-3mm程度の砂粒 長石(多)・黒砂粒(中)	
35	10	北部裾	埴輪	円筒			25.4		黒斑	10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm前後の赤色酸化土粒(中)	
36	33	北西部	埴輪	円筒			31.9			10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)	
37	37	北東部	埴輪	円筒						10YR7/4(鈍い黄橙)	1cm以下の砂粒 長石(多)	
38	40	北部裾	埴輪	円筒					口縁部?	10YR7/4(鈍い黄橙)	3mm程の砂粒 赤色酸化土粒	

土器一覽

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
39	38	西部周溝	埴輪	円筒						7.5YR7/6(橙)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(多)	
40	39	西部周溝	埴輪	円筒						5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)	
41	36	南西部	埴輪	家形?		23.0				10YR6/6(橙)	1mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
42	41	南西部	埴輪	家形?						10YR6/6(橙)	1mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
43	32	南東部裾	埴輪	円筒						黒斑 5YR6/6(橙)	1-3mm程の砂粒 長石(多)・黒色粒(中)	
44	15	南周溝東	埴輪	円筒						堅緻 10YR7/3(鈍い黄橙)	1.5mm以下の石英	
45	19	南周溝東	埴輪	円筒	25.4	24.6				須恵質・内面ナデ 2.5Y7/3(浅黄)	1mm程の砂粒	
46	22	南周溝東	埴輪	円筒		25.3				堅緻 2.5Y7/4(浅黄)	1mm以下の砂粒 長石(中)・石英(中)	
47	21	南周溝東	埴輪	円筒		26.0				須恵質・内面ナデ 7.5YR6/6(橙)	1mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
48	17	南周溝東	埴輪	円筒		26.1				須恵質・内面ナデ 7.5YR6/6(橙)	1mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
49	57	南周溝東	埴輪	円筒		30.7	18.4			黒斑・堅緻 10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
50	27	南周溝東	埴輪	朝顔形円筒		16.6				7.5YR6/8(浅黄橙)	0.5-2mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(多)	
51	29	南周溝上層	埴輪	円筒						2.5YR5/6(明赤褐)	1mm程以下の砂粒 長石(多)	
52	31	南周溝上層	埴輪	円筒		24.3				1号墳55と同一 7.5YR6/6(橙)	1-2mm程度の砂粒 長石(多)	
53	35	南周溝東	埴輪	円筒		20.5	24.3			須恵質・内面ナデ 10YR7/4(鈍い黄橙)	1-2mm程度の砂粒 長石(多)	

西山1号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
54	28	西部裾南	埴輪	朝顔形円筒						10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
55	13	南周溝	埴輪	朝顔形円筒						10YR6/4(鈍い黄橙)	1-2.5mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
56	16	南周溝	埴輪	朝顔形円筒						10YR7/6(明黄褐)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
57	59	南周溝	埴輪	円筒		26.4				10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm前後の赤色酸化土粒 1mm前後の長石(多)	
58	59	南周溝	埴輪	円筒		26.0				10YR7/6(明黄褐)	1mm前後の長石(多)	
59	30	南周溝	埴輪	円筒		26.0				10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm前後の赤色酸化土粒 1mm前後の長石(多)	
60	54	南周溝	埴輪	円筒		28.7	18.9			7.5YR7/3(鈍い橙)	0.5-2mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
61	9	南周溝	埴輪	円筒		24.8	21.0			10YR7/6(明黄褐)	1mm程の砂粒 長石(多)	
62	66	南周溝	埴輪	家形						7.5YR7/6(橙)	1.5mm以下の砂粒 長石(中)	
63	65	南周溝	埴輪	家形						7.5YR7/6(橙)	2mm前後の赤色酸化土粒 (多)	
64	63	南周溝	埴輪	家形(屋根)						10YR6/4(鈍い黄橙)	3mm前後の赤色酸化土粒 1mm以下の長石(多)	
65	90	南周溝	埴輪	家形(破風・棟木)						7.5YR7/6(橙)	0.2-2mmの砂粒 赤色酸化土粒・長石(多)	
66	87	南周溝	埴輪	家形(屋根・棟木)						10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(多)	
67	120	南周溝	埴輪	家形(壁体)						7.5YR7/6(橙)	1mm前後の砂粒 赤色酸化土粒(多)	
68	53	南周溝	埴輪	器財(鞆)								
69	109	南周溝	埴輪	器財(鞆?)						2.5YR7/4(浅黄)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)	
70	110	南周溝	埴輪	器財(鞆?)						2.5YR4/2(暗灰黄)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)	
71	108	南周溝	埴輪	器財(鞆?)						5Y4/1(灰)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(中)	
72	95	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						7.5Y6/6(橙)	1mm程の砂粒 長石(中)・石英(中)	
73	115	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						10YR7/3(鈍い黄橙)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(中)	
74	116	南周溝	埴輪	器財(短甲?)						10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(中)	
75	112	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5-3mm程度の砂粒 長石(多)	
76	128	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5-1.5mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(多)	
77	111	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5-2mm程度の砂粒 長石(多)	
78	107	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)						10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)	
79	113	南周溝	埴輪	器財(短甲?)						10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5-1mm程度の砂粒 長石(多)	
80	56	南周溝	埴輪	器財(蓋小円筒?)			12.7			10YR7/4(鈍い黄橙)	0.5-3mmの砂粒 長石・赤色酸化土粒(多)	

土器一覽

西山26号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
81	64	南西部裾	埴輪	朝顔形円筒	49.8				黒斑・赤色顔料	5YR6/6(橙)	1~3mm程度の砂粒赤色酸化土粒・長石(多)	
82	58	東部裾	埴輪	朝顔形円筒					黒斑	7.5YR7/6(橙)	0.5~4mmの砂粒 赤色酸化土粒・長石(多)	
83	45	墳頂	埴輪	円筒						10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm以下の赤色酸化土粒 1mm以下の長石(中)	
84	50	南西部頂	埴輪	円筒					外面ヨコハケ	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm前後の赤色酸化土粒(多)	
85	47	北部	埴輪	円筒						10Y7/4(鈍い黄橙)	1mm前後の長石 石英(多)	
86	44	南西部	埴輪	円筒						7.5Y7/4(鈍い橙)	1mm以下の赤色酸化土粒(多)	
87	49	南西部表土	埴輪	円筒					外面タテハケ→ヨコハケ	10YR6/4(鈍い黄橙)	3mm以下の赤色酸化土粒(多)	
88	49	南西部表土	埴輪	円筒		23.6				10YR6/4(鈍い黄橙)	3mm以下の赤色酸化土粒(多)	
89	52	南西部表土	埴輪	円筒					外面ヨコハケ	7.5YR8/3(浅黄橙)	1mm以下の長石(中)	
90	42	南周溝	埴輪	円筒		24.2			外面タテハケ→ヨコハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm前後の中長石(多)	
91	48	南東部裾	埴輪	円筒					外面ヨコハケ	7.5YR7/6(橙)	2mm前後の赤色酸化土粒(多)	
92	67	南東部裾	埴輪	円筒		26.0				7.5YR6/6(橙)	2mm前後の赤色酸化土粒・長石(多)	
93	62	南東部	埴輪	円筒					黒斑・外面タテハケ→ヨコハケ	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm前後の長石(多)・赤色酸化土粒(中)	
94	51	東部裾	埴輪	円筒		27.8			外面ヨコハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	2mm前後の赤色酸化土粒(中)	
95	51	東部裾	埴輪	円筒			188.0		94と同一	7.5YR7/6(橙)	3mm前後の赤色酸化土粒(多)	
96	104	南東部裾	埴輪	家形(破風板~屋根)						10YR6/4(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒 長石(多)	
97	88	南西部裾	埴輪	家形(屋根~壁体)						10YR6/4(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒 長石(多)	
98	89	南西部表土	埴輪	家形(破風板・棟木)					赤色顔料	5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒長石(中)	
99	101	南西部	埴輪	家形(棟木?)					赤色顔料	7.5YR7/6(橙)	1.5mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(多)	
100	103	南西部表土	埴輪	家形(船部スカシ・椀状狭帯)						10YR6/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
101	129	北東部表土	埴輪	器財(盾)					黒斑	7.5YR6/4(鈍い橙)	1~4mm程度の砂粒 長石・黒雲母・石英(多)	
102	55	南東部表土	埴輪	器財(盾)					黒斑	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~2mm程度の砂粒 長石 赤色酸化土粒	
103	53	南東部裾	埴輪	器財(靴)					黒斑	10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~2mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
104	118	北~1号墳間	埴輪	器財(蓋)					円筒棺と胎土・焼成類似	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm程の砂粒 長石(中)・石英(中)	
105	94	南東部裾	埴輪	器財(蓋)					104と同一	10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)	
106	127	北東部	埴輪	器財(短甲の草摺)						2.5YR6/3(鈍い黄)	0.5~1mm程度の砂粒 長石(多)	
107	126	南東部	埴輪	器財(蓋? 冑?)					外面沈線1条	2.5YR7/3(浅黄)	0.5~1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(中)	
108	124	南東部	埴輪	器財(短甲?)						10YR7/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石 石英・角閃石(多)	
109	114	表土	埴輪	器財(短甲?)					赤色顔料	5YR6/6(橙)	0.5~2mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
110	102	南西部墳頂	埴輪	人物?						7.5YR6/6(橙)	2mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(多)・長石(中)	
111	99	北東表土	埴輪	人物?					黒斑・赤色顔料	7.5YR7/6(橙)	1mm以下の砂粒	
112	119	南周溝	埴輪	動物(鶏)					赤色顔料	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm程の赤色酸化土粒(多) 1mm以下の長石	
113	122	南東部裾	埴輪	形象						7.5YR7/6(橙)	4mm前後の赤色酸化土粒(多)	
114	121	南東部裾	埴輪	形象						7.5YR7/6(橙)	3mm以下の赤色酸化土粒(多)	
115	92	北東部表土	埴輪	器財(蓋?)			17.0		タガ剥離	10YR5/4(鈍い黄褐)	1.5mm以下の砂粒 長石(多)	
116	98	南西部表土	埴輪	円筒棺					外面タテハケ→ヨコハケ	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
117	97	南西部表土	埴輪	円筒棺					赤色顔料	7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
118	96	北東部表土	埴輪	円筒棺					赤色顔料	7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	
119	123	表採	埴輪	円筒棺						10YR7/6(明黄褐)	0.5~1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(多)	
120	125	表採	埴輪	円筒棺					端部内外面ヨコハケ	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石(中)	

西山27号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
121	105	周溝	須恵器	把手付碗	13.0	13.0		4.8	底部内面に同心円文痕跡	2.5Y7/1(灰)	1~2.5mm程の砂粒	
122	106	周溝	須恵器	杯蓋	11.5	11.8	52.5	8.3	焼成不良、天井一部欠損	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒	

土器一覽

西山27号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	種別	器種	口径 (cm)	最大幅 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
121	105	周溝	須恵器	把手付椀	13.0	13.0		4.8	底部内面に同心円文痕跡	2.5Y7/1 (灰)	1~2.5mm程の砂粒	
122	106	周溝	須恵器	杯蓋	11.5	11.8	52.5	8.3	焼成不良、天井一部欠損	10YR6/3 (鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒	

石製品一覽

西山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
S1	11	竪穴住居1	石鏃	20	17.5	4.5	1.91	サヌカイト
S2	1	竪穴住居1	石鏃	27.5	17.5	2.6	1.3	サヌカイト
S3	5	竪穴住居1	石鏃	27.5	17.5	4	1.8	サヌカイト
S4	2	竪穴住居1	石鏃	33	23.5	6.5	4.6	サヌカイト
S5	3	竪穴住居1	楔	41	27	5.8	7.5	サヌカイト
S6	4	竪穴住居1	スクレイパー	59	51	8	32.1	サヌカイト

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
S7	7	包含層	石鏃楔	16.5	18.5	4.5	1.1	サヌカイト
S8	8	包含層	スクレイパー	72	44	9	18.7	サヌカイト
S9	9	包含層	スクレイパー	56	32	7	12.8	石包丁片?
S10	6	包含層	砥石	93	22	19	58.8	流紋岩
S11	10	竪穴住居5	U.F.	54.5	32.5	4	4.1	サヌカイト

石製玉一覽

西山遺跡

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
M1	No.1	竪穴住居7	鉈	42	10	2	4.52	端部欠損
M2	No.23	土塚墓1	小刀	278	24	3.5	65.38	先端欠損
M3	No.24	土塚墓1	剃刀	148	27	1	22.72	
M4	No.25	土塚墓2	刀子	40.5	10.5	2.5	4.89	基部欠損

西山1号墳

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
M6	No.7	北トレンチ裾	鏃	69	29	2	11.38	両端欠損
M7	No.9	南部周堀上層	釘	68	7	3.5	6.28	先端欠損
M8	No.11	主体部	鉈	37	9	2	3.92	先端欠損

西山25号墳

掲載番号	実測番号	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
M5	No.2	東トレンチ	刀子	27	12	4	3.4	両端欠損

西山26号墳

掲載番号	実測番号	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
M9	No.19	南東部掘表土	大刀	65.5	24	6	35.12	基部片
M10	No.16	主体部	鉄剣	300	16	4	56.45	
M11	No.15	主体部	刀子	106	19	2.5	17.01	先端欠損
M12	No.14	主体部	刀子	80.5	15.5	2	17.01	刃部欠損
M13	No.13	主体部	刀子	120	17	2.5	9.98	先端欠損
M14	No.12	主体部	斧	82	52	12	162.1	布痕跡
M15	No.17	主体部	針?	32	1.1		0.14	

石製品一覽

西山26号墳

掲載番号	実測番号	種別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調
S12	1	勾玉	33	14	3.8	9.9	滑石	暗緑灰
S13	2	勾玉	32.5	11.5	2.55	8.37	滑石	暗緑灰
S14	4	勾玉	8.5	4	1.25	0.16	滑石	灰白
S15	17	勾玉	9	4		0.1	滑石	灰白
S16	18	勾玉	8	4		0.07	滑石	灰白
S17	3	勾玉	7.7	3.5		0.07	滑石	灰白

掲載番号	実測番号	種別	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	材質	色調
S18	A33	勾玉	9	4.65	1.25	0.18	滑石	灰白
S19	B59	勾玉	9	4.7	1.3	0.15	滑石	明オリーブ
S20	B60	勾玉	7	4		0.07	滑石	灰白やや白
S21	B61	勾玉				0.05	滑石	明オリーブ
S22	B62	勾玉				0.02	滑石	灰白やや白

ガラス小玉一覧

西山26号墳

掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	掲載 番号	実測 番号	長さ (mm)	径 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)
G1	玉10	1.7	3.65	1.25	0.04	G35	B7	2	3.2	0.95	0.03	G69	A6	1.65	2.75	1.1	0.02
G2	玉11	1.55	3.55	1.5	0.03	G36	B31	1.7	3.2	1.3	0.02	G70	B9	1.7	2.75	1.3	0.03
G3	玉12	2	3.5	1	0.04	G37	B26	2	3.2	1.35	0.02	G71	B46	1.7	2.75	0.95	0.02
G4	玉9	1.45	3.25	1.2	0.02	G38	B11	1.7	3.2	0.6	0.03	G72	B6	3.1	2.75	0.75	0.03
G5	玉15	1.55	3.2	0.8	0.02	G39	A8	3.2	1.65	0.85	0.02	G73	B28	2.15	2.75	0.8	0.03
G6	玉6	2.35	3.15	1.1	0.04	G40	B18	1.8	3.2	1.4	0.02	G74	B29	2.4	2.7	0.9	0.02
G7	玉8	2	3.95	0.7	0.02	G41	A2	1.7	3.2	1.1	0.03	G75	B27	2.1	2.7	1.15	0.02
G8	玉16	1.65	2.9	0.75	0.03	G42	B24	1.5	3.2	1	0.03	G76	A17	1.7	2.7	0.95	0.02
G9	玉13	1.45	2.85	0.8	0.02	G43	B42	1.65	3.15	1	0.02	G77	A22	1.9	2.7	1	0.02
G10	玉14	1.6	2.8	0.75	0.02	G44	B36	1.2	3.15	1	0.01	G78	B33	1.75	2.7	1.2	0.02
G11	玉7	2.1	2.7	0.75	0.03	G45	B12	1.85	3.1	0.75	0.03	G79	A27	1.8	2.7	0.7	0.02
G12	A25	1.7	4	1.15	0.03	G46	B30	1.5	3.1	1.4	0.02	G80	B53	1.6	2.7	0.75	0.02
G13	B3	1.85	3.7	1.4	0.03	G47	B49	1.35	3.1	1.15	0.02	G81	A32	1.1	2.7	1	0.01
G14	A5	2.45	3.55	1.3	0.04	G48	A14	2.2	3.05	1.1	0.01	G82	A31	2.6	2.65	0.75	0.01
G15	A12	1.8	3.55	1.25	0.02	G49	A1	3.05	1.85	0.85	0.03	G83	A15	1.75	2.65	0.75	0.01
G16	B1	2.55	3.5	0.95	0.04	G50	B15	2	2.85	0.65	0.02	G84	B47	1.8	2.65	1.05	0.02
G17	B4	2.1	3.5	1.45	0.03	G51	A26	1.35	3.05	1.05	0.02	G85	B34	1.5	2.65	0.9	0.01
G18	A30	1.65	3.5	1	0.02	G52	A9	2.1	3	0.95	0.02	G86	A13	1.6	2.65	0.9	0.02
G19	B32	2.1	3.45	1.5	0.03	G53	A18	2.15	2.95	1.1	0.02	G87	B56	1.3	2.65	1.3	0.01
G20	B55	3.45	1.7	1.05	0.02	G54	A21	1.95	2.95	1	0.03	G88	B44	2	2.6		
G21	A7	2.4	3.4	1.15	0.03	G55	A19	1.8	2.95	1.1	0.01	G89	A10	1.85	2.6	0.9	0.02
G22	B13	2.1	3.4	1.15	0.03	G56	A4	1.65	2.9	0.65	0.02	G90	B50	1.35	2.6	0.85	0.01
G23	B5	3.35	2.2	1.2	0.03	G57	B25	2	2.9	0.8	0.03	G91	A28	2.1	2.5	0.6	0.01
G24	B57	2	3.3	0.95	0.02	G58	B48	1.4	3.25	1.3	0.02	G92	B23	1.85	2.5	1.15	0.02
G25	B35	1.45	3.3	1	0.01	G59	B39	1.65	2.9	1.15	0.02	G93	A24	1.4	2.5	0.7	0.02
G26	B8	2	3.25	1.6	0.03	G60	B41	2.9	1.7	0.9	0.01	G94	A20	1.55	2.5	0.75	0.02
G27	B10	2.85	3.25	1.35	0.04	G61	A16	2.05	2.85	1.1	0.02	G95	B52	1.55	2.5	1.05	0.02
G28	B37	1.75	3.25	1.15	0.03	G62	B19	2.3	2.85	1.3	0.03	G96	B22	1.9	2.4	0.6	0.01
G29	B58	2	3.25	1	0.02	G63	B15	2	2.85	0.65	0.02	G97	B14	2.5	2.35	0.6	0.02
G30	B40	1.6	3.25	0.75	0.02	G64	A23	1.8	2.85	1	0.03	G98	B17	2.15	2.35	0.8	0.01
G31	B48	1.4	3.25	1.3	0.02	G65	B45	1.55	2.85	1.2	0.02	G99	B16	1.9	2.25	0.95	0.01
G32	B20	2.25	3.2	0.95	0.03	G66	A29	1.4	2.8	0.9	0.01	G100	A11	1.9	2.2	0.75	0.01
G33	B2	2.3	3.2	0.95	0.03	G67	B43	1.5	2.8	0.65	0.02	G101	B21	2.05	2.1	0.65	0.01
G34	A3	2.1	3.2	1	0.04	G68	B54	2.8	1.25	0.9	0.01						

第8章 服部遺跡

第1節 位置と経過

服部遺跡は総社平野の北部に位置し、行政的には総社市黒尾・北溝手である。服部の地名は、旧村名（賀陽郡服部村）であり、現在はJR駅名、地域公民館などにしか残っていない地名である。中国横断道は楨谷に沿って南下し総社平野に出た所でほぼ東西方向になり、服部遺跡は平野部の西北部にあたり、現況図を見ても条里地割が認められ、服部条里遺構として全域を遺構範囲としていた。平成5年4月末から5月にかけて確認調査を行い市道黒尾公園線から十二ヶ郷用水まで18ヶ所に試掘トレンチを入れ、ほぼ全面に弥生時代～中世に至る微高地水田層、あるいは旧河道等が拡がっていることが確認されたため、平成5年12月から翌年3月まで2班6名が、翌6年6月から10月に2班7名で北側道、南側道、橋脚38ヶ所の調査を行った。調査面積は約13000㎡である。

日誌抄

平成5年度 [椿班]

4月28日～5月13日 第1次確認調査

[浅倉班]

[柴田班]

5月6日～13日 調査開始

12月13日 機材搬入

12月13日 V(a)区・IV(E)区調査再開

IV区南側道調査開始

II区南側道調査開始

1月11日 V(b)区調査開始

1月12日 IV区北側道調査開始

2月3日 II区北側道調査開始

2月16日 I区南側道調査開始

2月28日 V区北側道調査開始

3月18日 今年度調査終了

3月18日 今年度調査終了

平成6年度 [中野班]

[伊藤班]

6月6日 機材搬入

6月16日 機材搬入・表土除去

橋脚部(P-1～)調査開始

橋脚部(P26～34)調査開始

7月1日 I区北側道調査開始

7月6日 橋脚部(P35～38)調査開始

7月19日 調査終了(北溝手遺跡へ)

7月15日 橋脚部(P25～12)調査開始

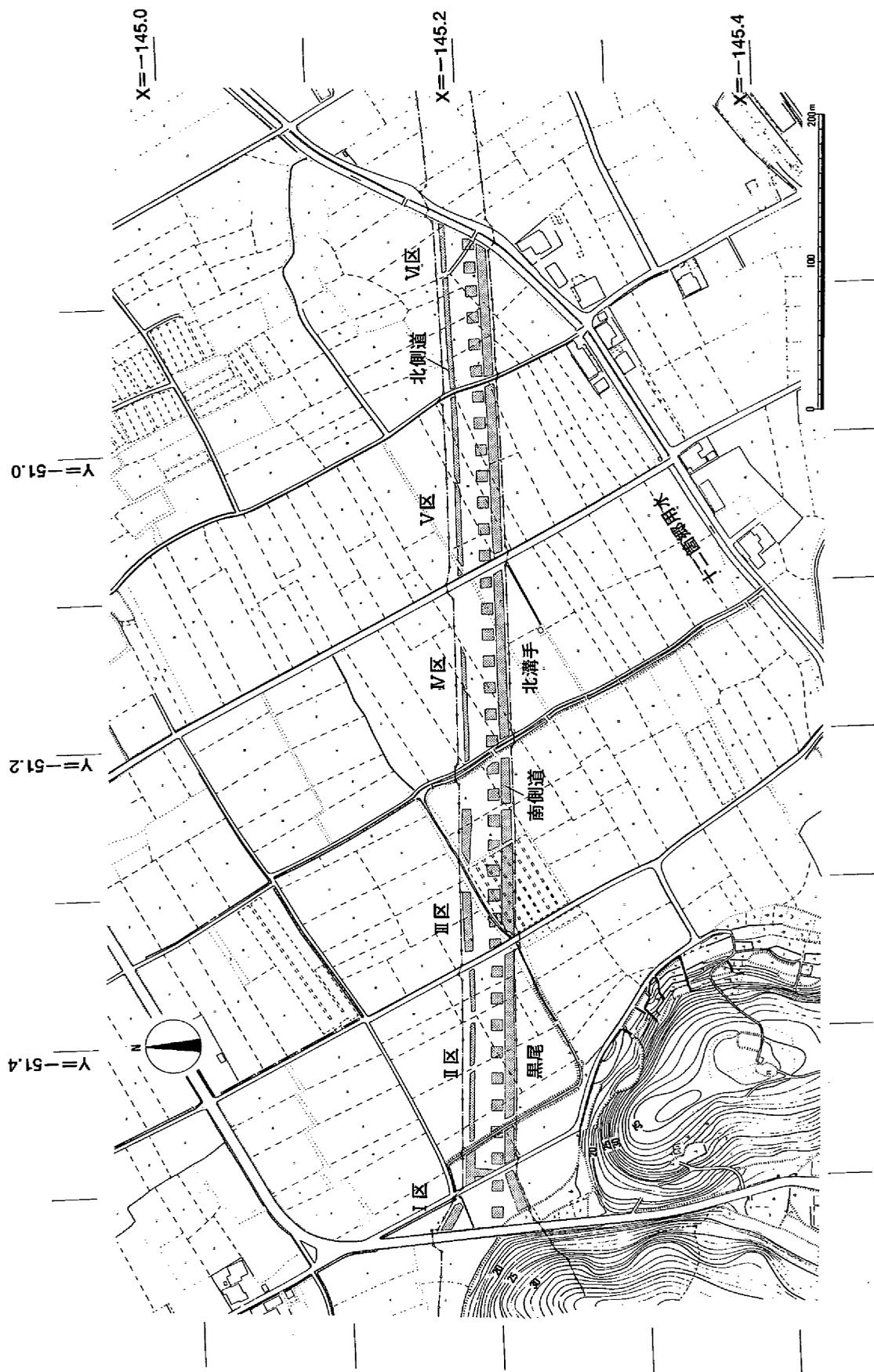
8月3日 III区南側道調査開始

8月18日 II区・IV区南側道調査開始

9月27日 IV区北側道調査開始

10月4日 III区北側道調査開始

10月13日 調査終了(窪木遺跡へ)



第1図 調査区位置図 (1/4000)

第2節 調査の概要

服部遺跡の調査は、全長約650mにおよび、南・北側道、橋脚部について調査を実施した。その調査面積は、約13000㎡におよぶものであった。

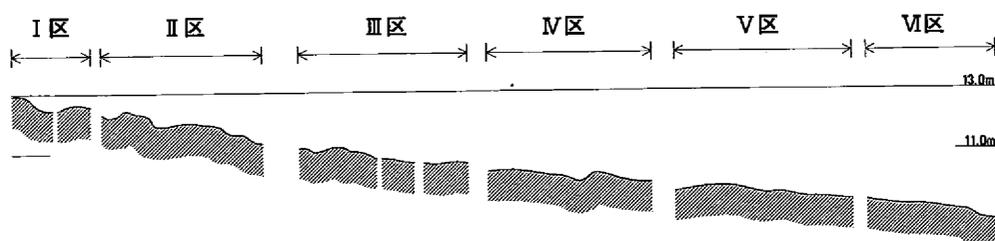
調査区は、西側丘陵の裾部から東および南に広範に広がる沖積地にあたる。この沖積地には、第1図で明らかなように条里地割が明瞭に遺存している。また、調査区の西側が最も高所にあたり、第2図で示したように基盤層の海拔は、西端部と東端部では約4mの高低差をもって傾斜している。調査は、条里地割の南北方向の基線で調査区を分割し、西側からⅠ～Ⅵ区に調査区を設定し調査を実施した。

調査の結果、西端の一部を除きほぼ全域に遺構が確認され、遺物も縄文時代～中・近世に至るものが検出された。確認された遺構は、弥生時代および中世が中心であったが、調査区の西側と東側では遺構の性格がやや異なる状況を示した。以下、時期毎に概要を記す。

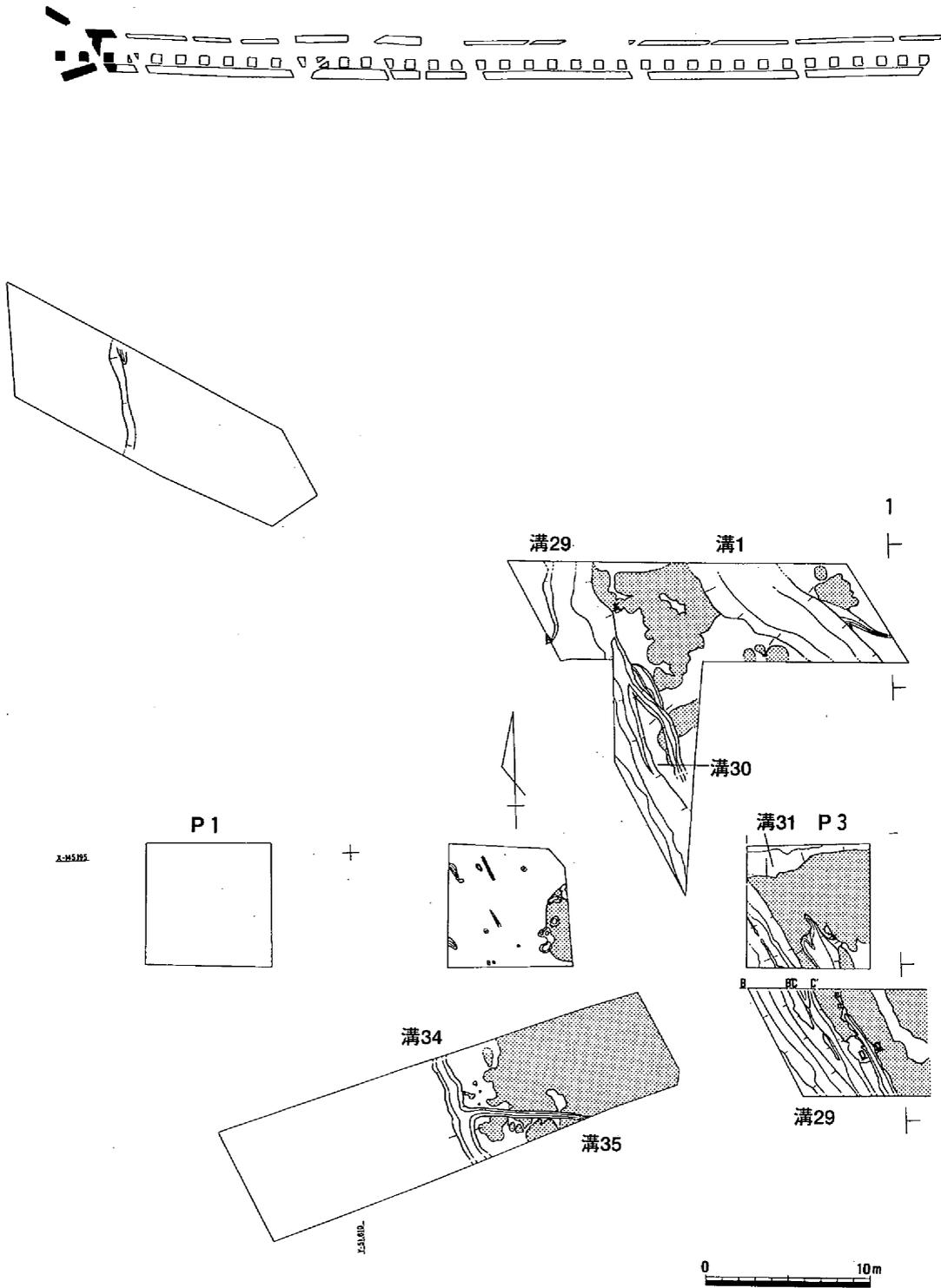
まず縄文時代では、Ⅱ・Ⅳ区の南側道部で、縄文時代晩期の土器が少量出土している河道が確認されている。この河道は、自然流路と考えられ北西から南東方向に流走する。この河道以外には、縄文期の遺構・遺物は認められず希薄な状況を示している。また、弥生前期では遺構・遺物は確認できなかった。次の弥生中期には、調査区のほぼ中央のⅣ区において弥生中期前半期の溝が数条検出されている。いずれも北西から南東方向に流れる溝であった。しかし、弥生中期前半期の遺構・遺物も単発的なもので、弥生中期の後半期には続く遺構・遺物は確認されていない。

弥生後期になると、いままで希薄であった遺構は爆発的に増加する。遺構としては、粘土採掘坑、土壌、溝が認められた。特に粘土採掘坑は、調査区の西側（Ⅰ～Ⅱ区）に広範囲に検出されたが、東側（Ⅲ～Ⅵ区）では確認されなかった。この粘土採掘坑は、規模が1～1.5mの円形ないし楕円形を呈しており、基盤層である淡黄褐色粘質土を採掘していると考えられる。この粘土採掘坑は、単独で存在することは少なく、その大部分は集中的に連続して掘削されていた。これらの時期は、Ⅰ・Ⅱ区では弥生後期前半期の土器を伴っており、Ⅲ区では弥生後期から古墳時代初頭の土器まで出土している。粘土採掘坑は、おおむね西側から東側方向へ移動したものと考えられる。他の遺構としては、土壌、溝などが確認されているが、その大半はⅢ区より東側に検出されている。しかしながら、居住域を想定するような遺構・遺物は存在しなかった。

次の古墳時代・古代では、明確な遺構は確認されておらず、遺物が少量出土したにすぎない。中世においては、密度な高くないものの再び調査区域に溝を中心として遺構が存在した。特に、Ⅰ・Ⅱ区



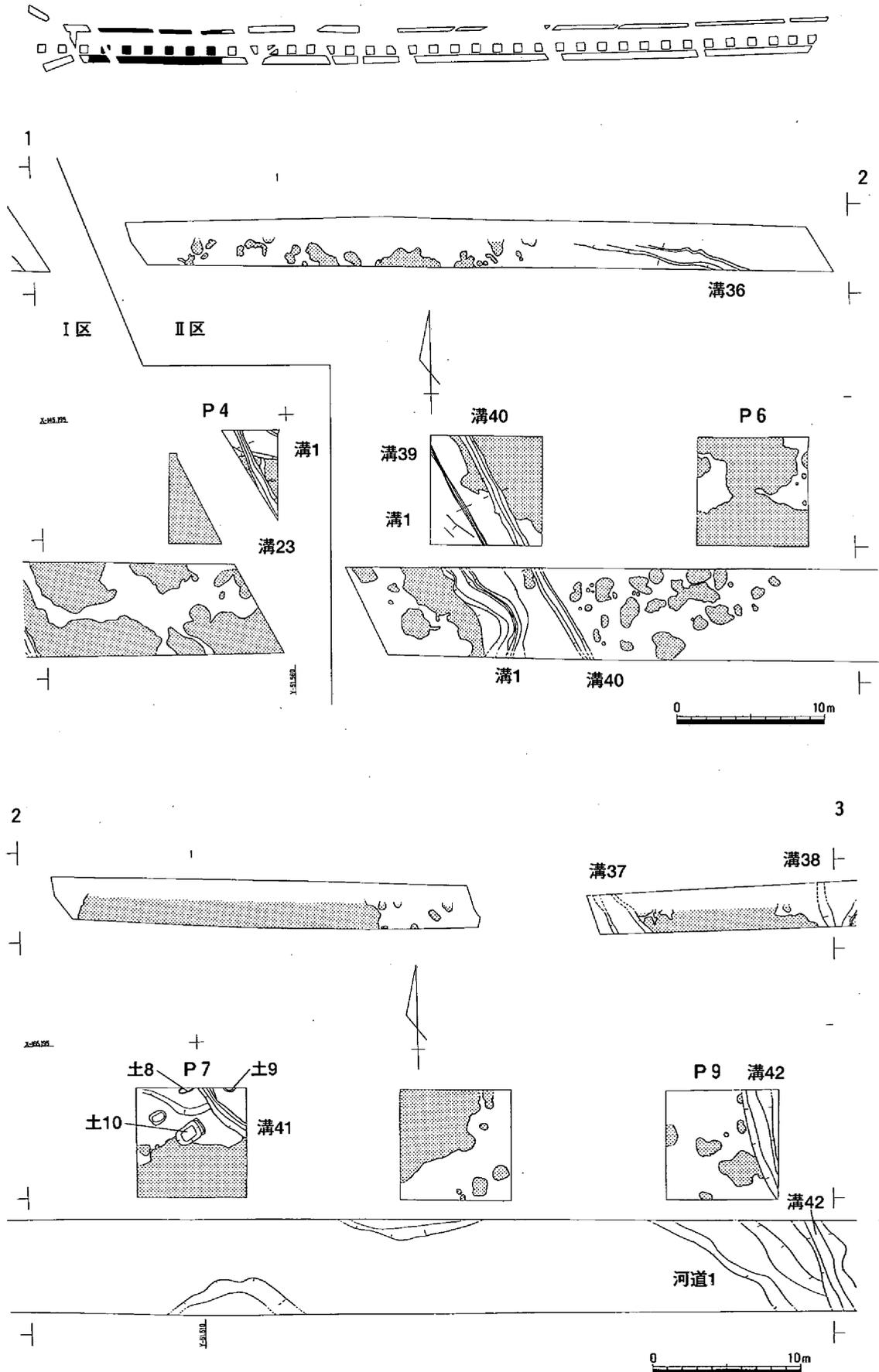
第2図 調査区地形断面図（縦1/250・横1/5000）



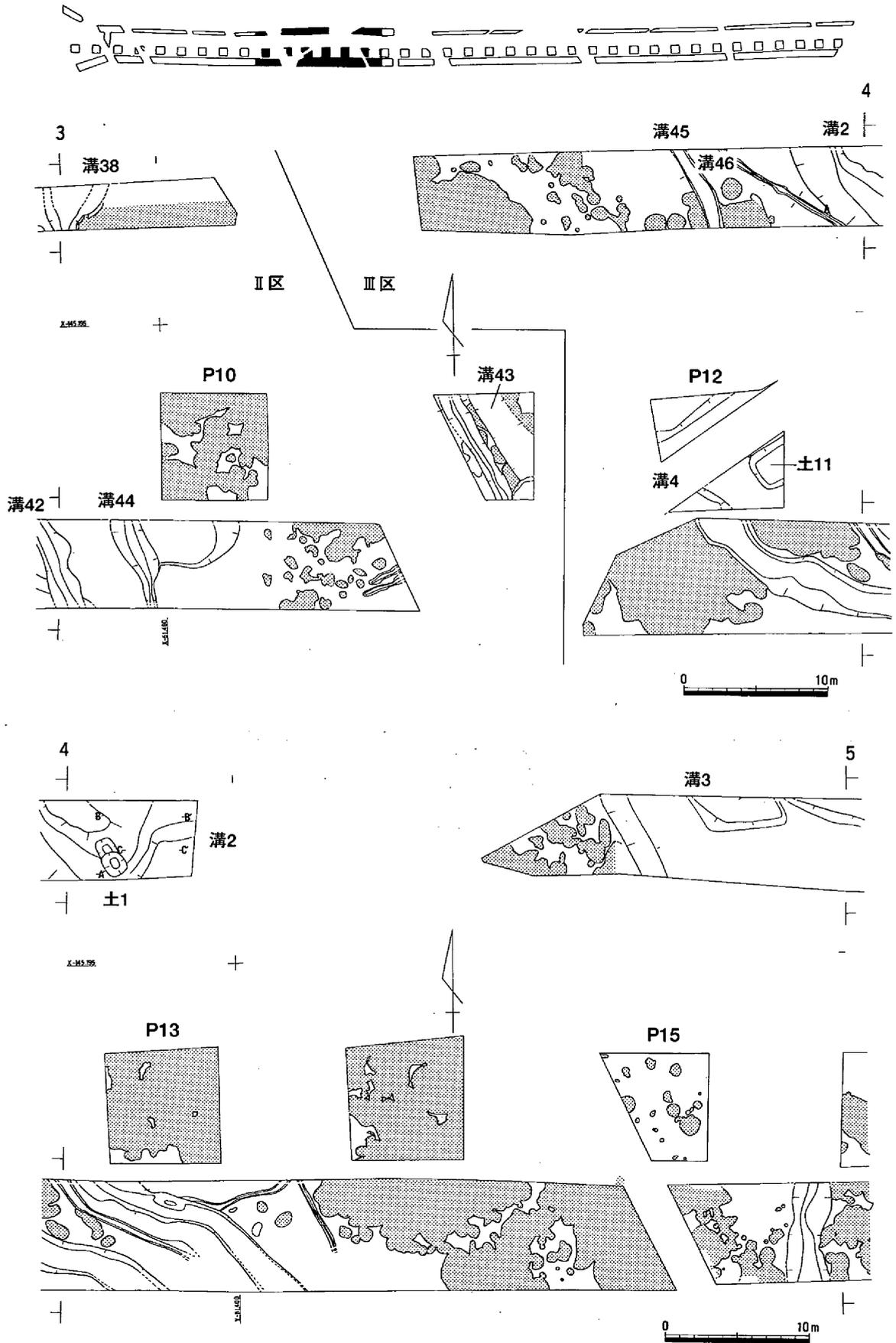
第3図 遺構配置図① (1/400)

では、条里地割の南北基線に平行する溝が数本検出されている。また、調査区東側のIV区では水田畦畔が部分的ながら確認された。中世以降は、おおむね現在に至るまで調査区全域に水田が展開していたと考えられる。

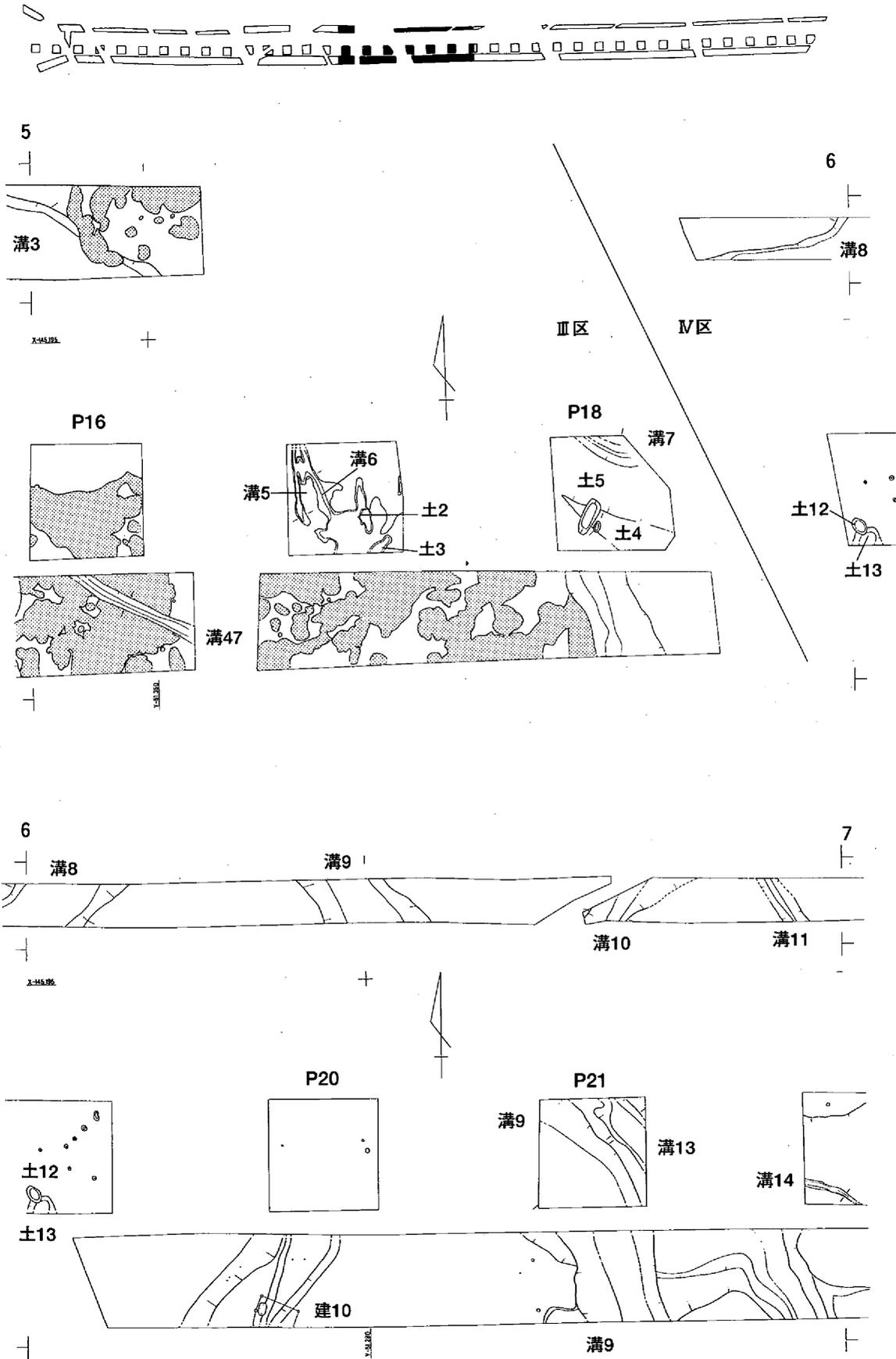
(中野)



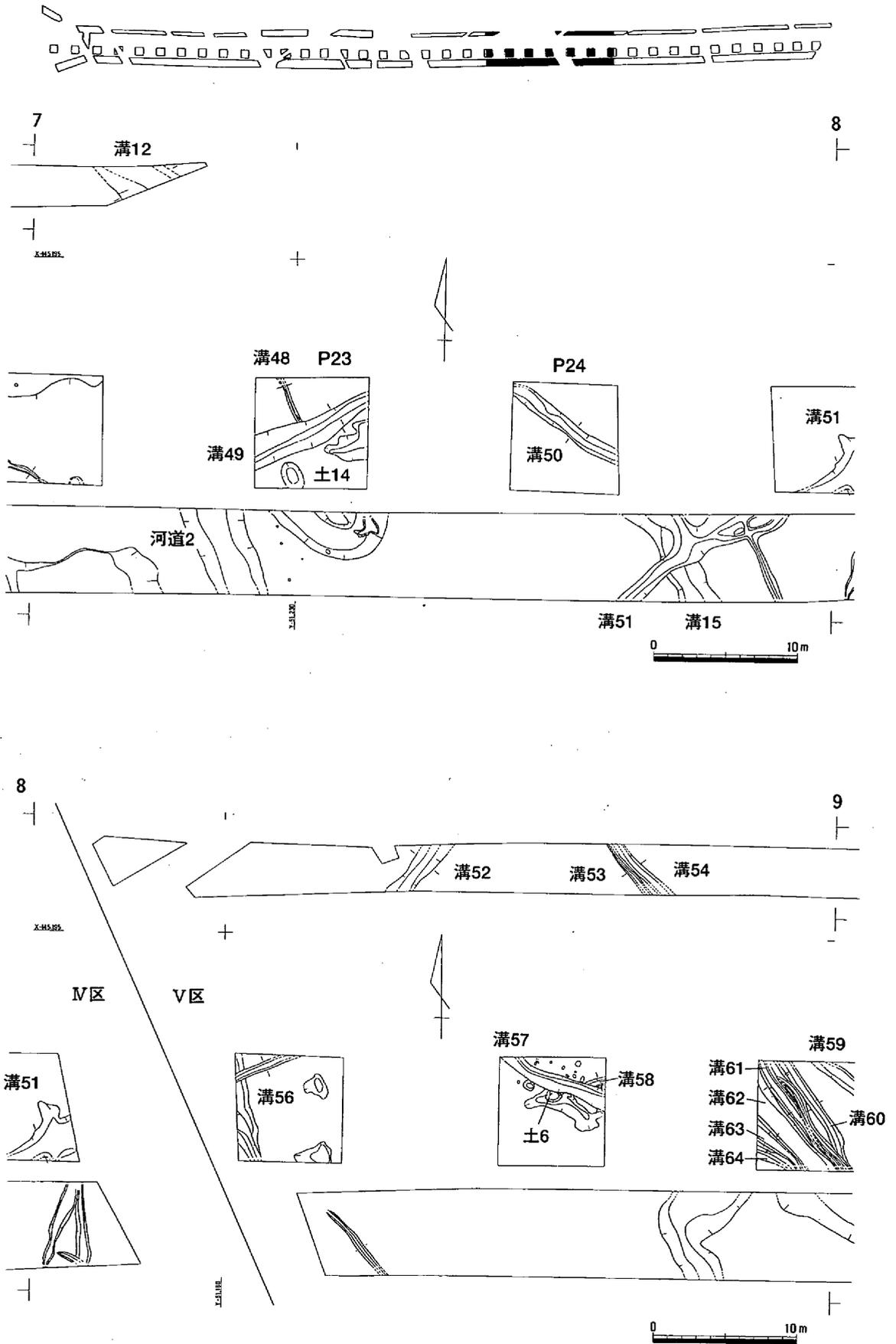
第4図 遺構配置図② (1/400)



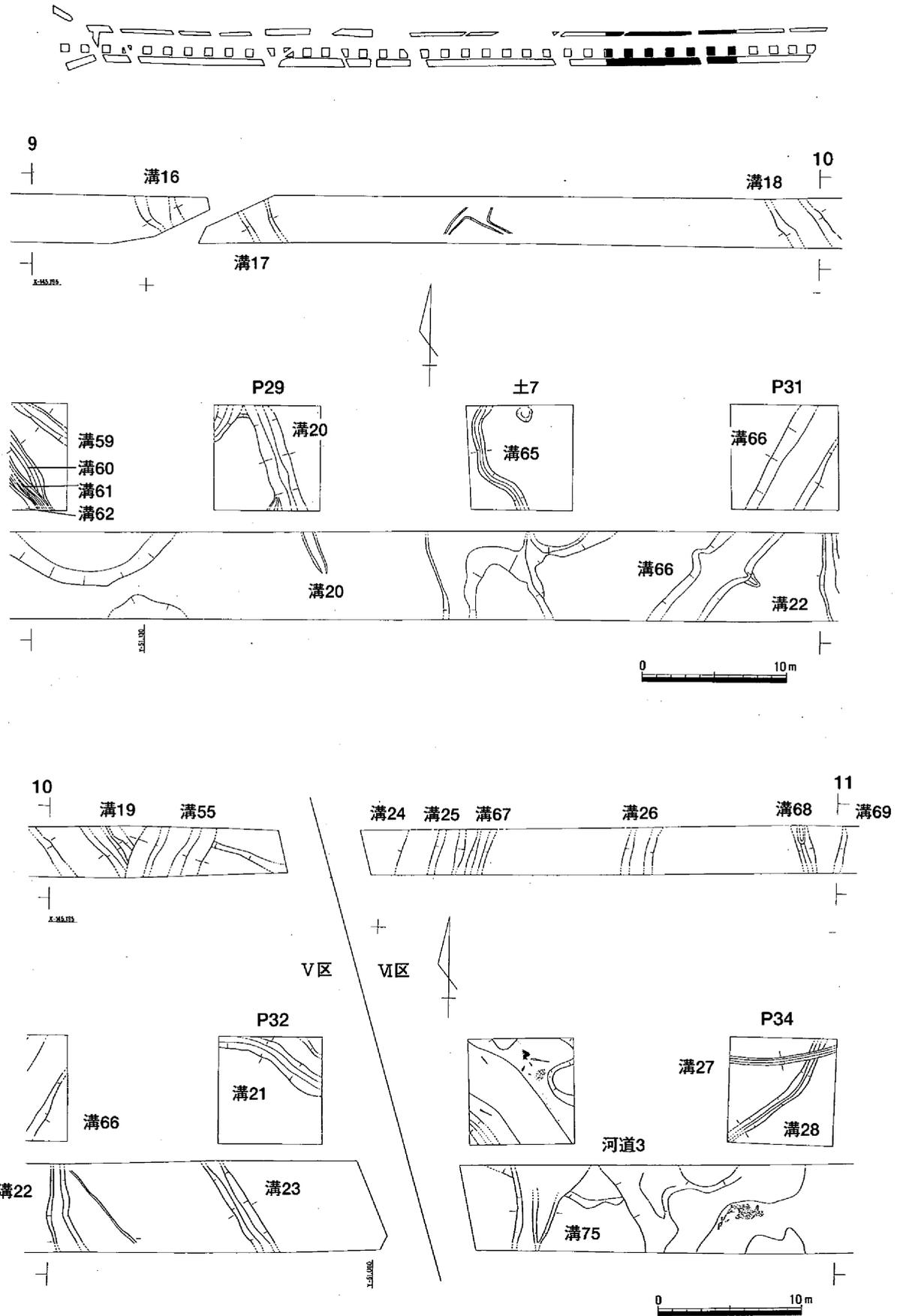
第5図 遺構配置図③ (1/400)



第6図 遺構配置図④ (1/400)

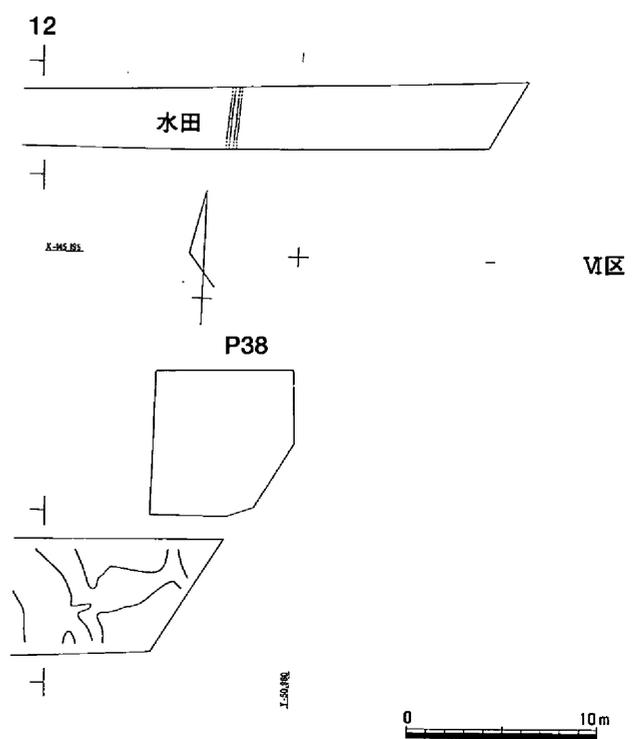
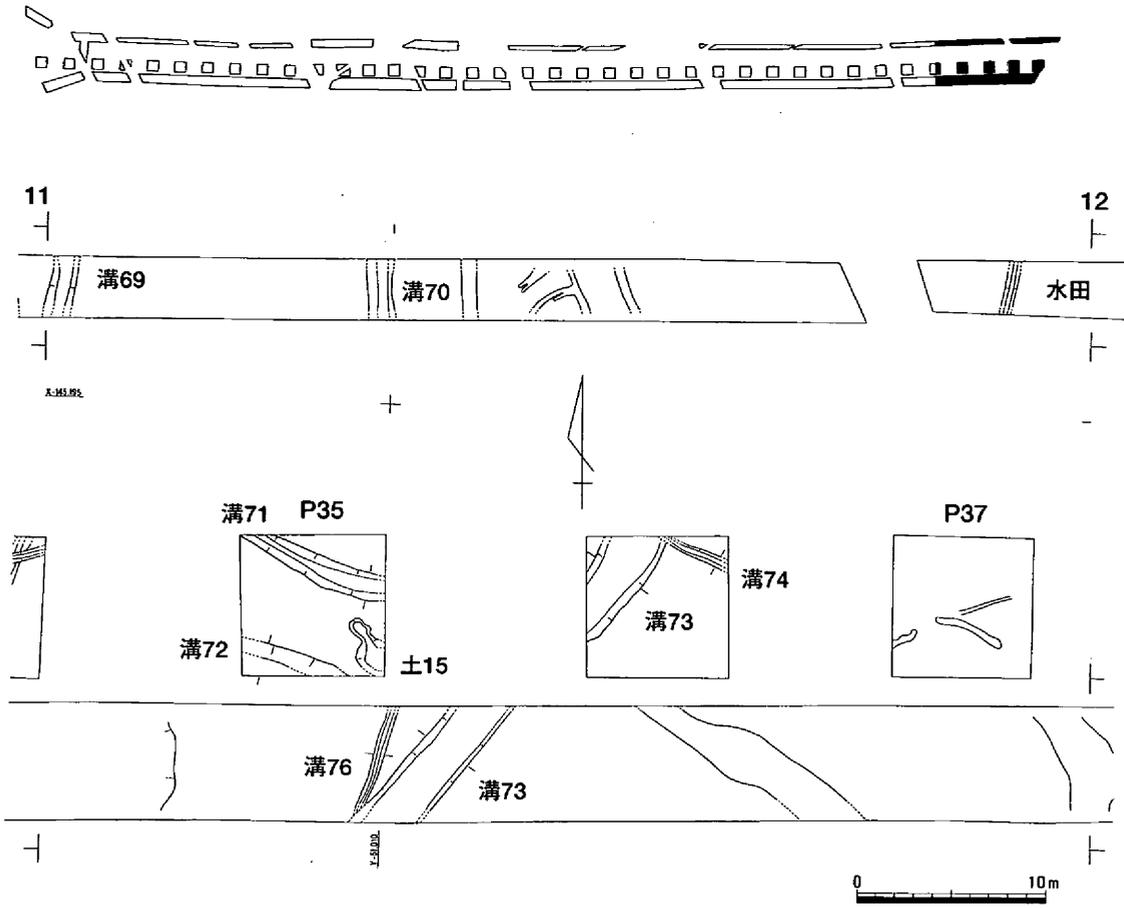


第7図 遺構配置図⑤ (1/400)



第8図 遺構配置図⑥ (1/400)

第8章 服部遺跡



第9図 遺構配置図⑦ (1/400)

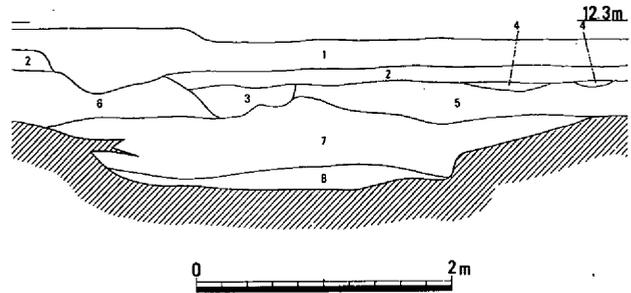
1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 河道

河道1 (第4・10図、図版63)

Ⅱ区南側道で検出した真砂で埋まった溝。検出上幅360cm、下幅240cm、深さ40cmを測る。底部は平坦で、その海拔高は、11.0m。流れの方向は北西から南東であろう。

遺物は出土していないが土層群より古いことは土層から明らかである。



- | | | |
|-------------|------------|---------|
| 1. 耕作土 | 4. 暗茶色砂質土 | 7. 茶灰色砂 |
| 2. 暗褐色灰色砂質土 | 5. 褐青灰色粘質土 | 8. 暗灰色砂 |
| 3. 淡灰色砂 | 6. 淡茶灰色砂 | |

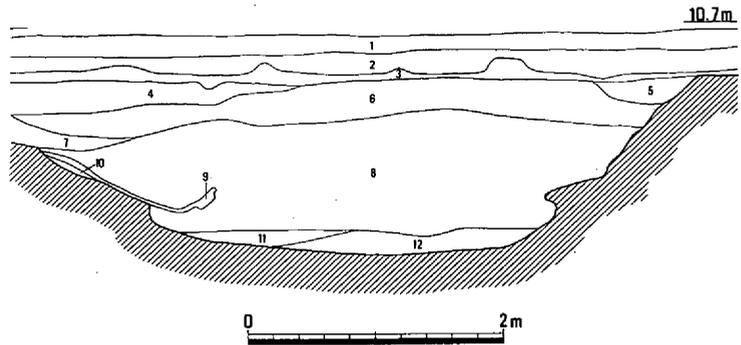
第10図 河道1 (1/60)

河道2 (第7・11図、図版63)

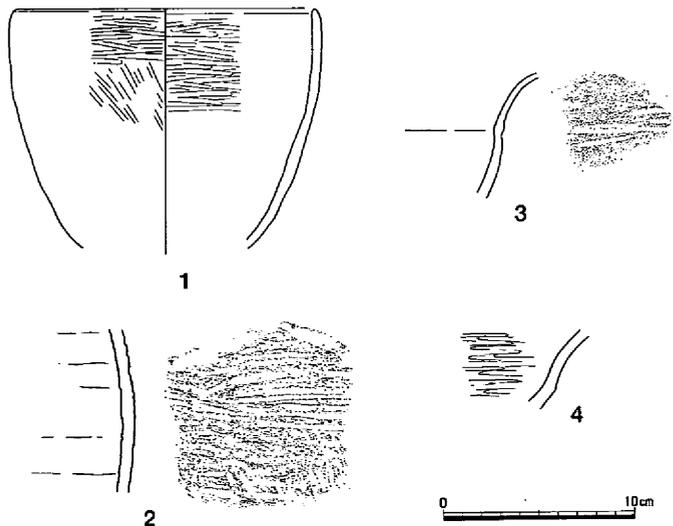
Ⅳ区南側道中央部で検出した溝。上幅500cm、下幅250cm、深さ120cm、長さ6mを測る。流れの方向は北西から南東と考えられる。土層は上層が淡黄褐色粗砂で、下層が茶灰色粗砂である。東側の壁はオーバー・ハングしている。

遺物は縄文土器が出土している。1は内外面ともにヘラ磨きされた精製土器の鉢である。2は外面に貝殻条痕の残る粗製土器で深鉢である。3は貝殻条痕をもつ浅鉢、4は内面ヘラ磨きの浅鉢である。時期は縄文晩期と考えたい。

この溝は人工物ではなく自然河道と思われる。第7図で河道2の東に検出している「し」の字形の溝もこの河道と同じ物と考えられる。(浅倉)



- | | | |
|------------|-------------|------------|
| 1. 耕作土 | 5. 暗褐色灰色砂質土 | 9. 黒灰色微砂 |
| 2. 灰色砂質土 | 6. 褐色灰色砂質土 | 10. 濃灰色微砂 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 7. 黄灰色微砂 | 11. 淡茶灰色粗砂 |
| 4. 暗茶褐色砂質土 | 8. 淡灰黄色粗砂 | 12. 茶灰色粗砂 |



第11図 河道2 (1/60) ・出土遺物 (1/4)

2. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

(1) 粘土採掘坑

調査当初、調査区の西側半分（Ⅰ～Ⅲ区）において、不定形な落ち込みが広範囲に確認された。この落ち込みは、Ⅰ～Ⅲ区で断続的に集中して認められ、その規模は数10cmを測るものから20m以上に



第12図 粘土採掘坑—Ⅰ区北側道— (1/100)

およぼ大規模なものまで存在した。その形態は、単独で存在する小規模なものは、円形ないし楕円形を呈しており、大規模なものはアメーバ状の不定形な形態を示していた。調査の結果、この規模の大きな落ち込みは、土壌が集中的に重複して生じたことが明らかとなり、また底部の凹凸もこれら土壌の重複の痕跡であった。この土壌1基の規模は、100~150cmのものがその大半を占めていた。また、土壌の底部は、おおむね一定で基盤層である淡黄灰色粘土層で止まっていた。さらに、これらの土壌は新旧の切り合いが認められるものも存在したが、その大半は、落ち込み全体として埋没している堆積を示していた。これらの落ち込みからは、出土遺物は少なく図示できたものも多くはない。このように、広範囲に検出された落ち込みは、そのあり方、形態などの状況から、基盤層である淡黄灰色粘土層の採掘を目的とした土壌いわゆる粘土採掘坑と推察できた。

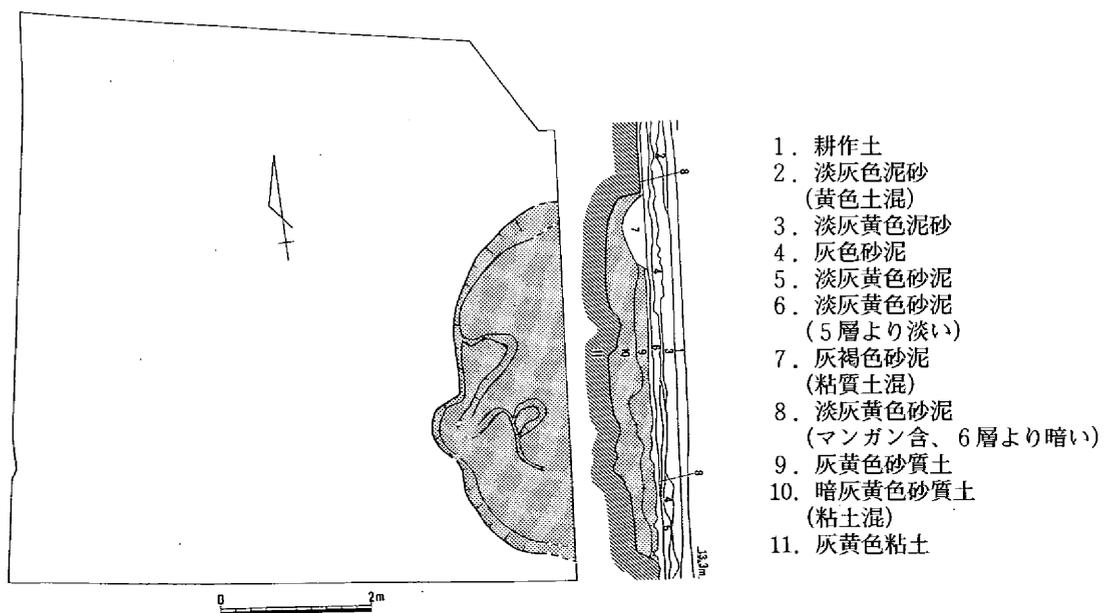
以下、各調査区での状況を述べる。

I区北側道・P2~P4 (第12~16図、図版63)

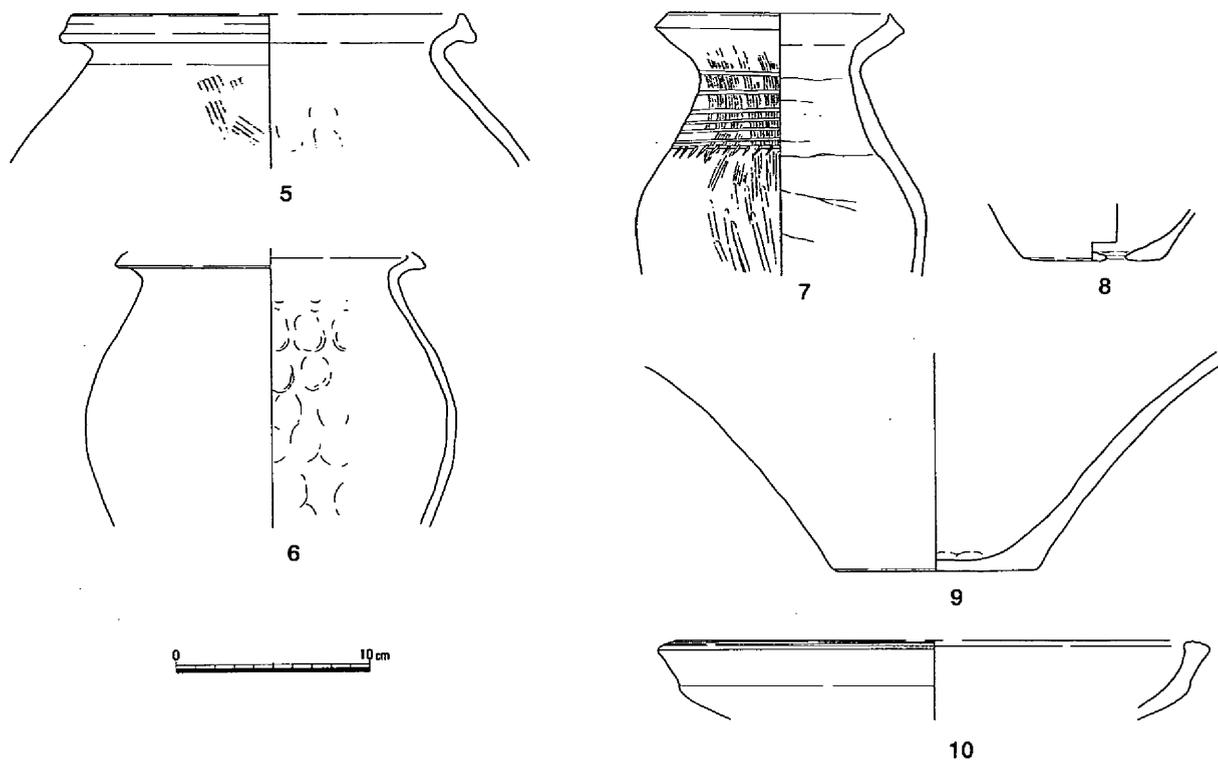
調査区の西端のI区北側道西区、P1では山際のためであろうか、粘土採掘坑は検出されておらず、I区北側道東区、P2から東側に確認されている。

I区北側道東区では、調査区の中央部を中心に粘土採掘坑が検出された。採掘坑は、後世の溝に削平を受けているものの、3~4ヶ所に分かれている。その中で規模の大きいものは、調査区中心の北端に広がっており、1m数10cmの楕円形の採掘坑が次々と拡散している状況が認められる。これらの採掘坑の残存状態の良好なところで規模をみると、長さ1~2mで円形ないし楕円形を呈しているものがその大半を占める。このような採掘坑の規模は、少人数で掘削できるものであると考えられる。また、その採掘坑の拡散のあり方をみると一定の計画的な掘削とは認めがたい状況を示している。この調査区の採掘坑からの出土遺物は少なく、図示した5・6の他少量出土したにすぎない。これらの土器はいずれも弥生後期の前半期の特徴をしていた。

P2では、東端部で検出されたがその西側部には認められなかった。検出された採掘坑は、約4.5mの半円形で、深さは約50cmを測り、底部は凹凸がある。採掘坑内は、上層に灰黄色砂質土、下層に



第13図 粘土採掘坑—I区P2—(1/100)



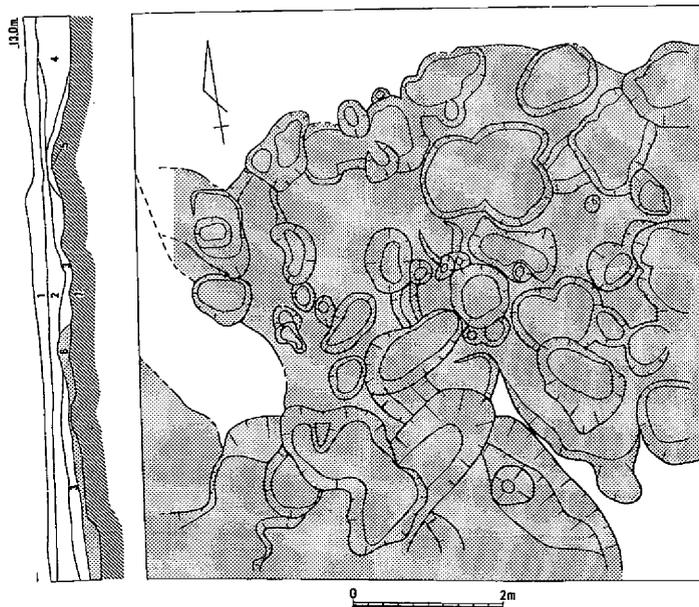
第14図 粘土採掘坑—I区北側道・P2—出土遺物① (1/4)

暗灰黄色砂質土の2層が堆積していた。出土遺物は、7～10が底部より検出された。

P3、P4では、後世の遺構に一部削平されているものの、調査区全域に採掘坑が認められた。P3では、底部の凹凸が激しく、採掘坑が集中している状況が明瞭であった。また、これらの底部の残存状況から採掘坑の単位が1～1.5mの規模でその集合体であることが明らかであった。P4でも同様な状況であった。P3、P4区とも出土遺物は少量であったが、その時期はI区北側道東区、P2区と同じであった。

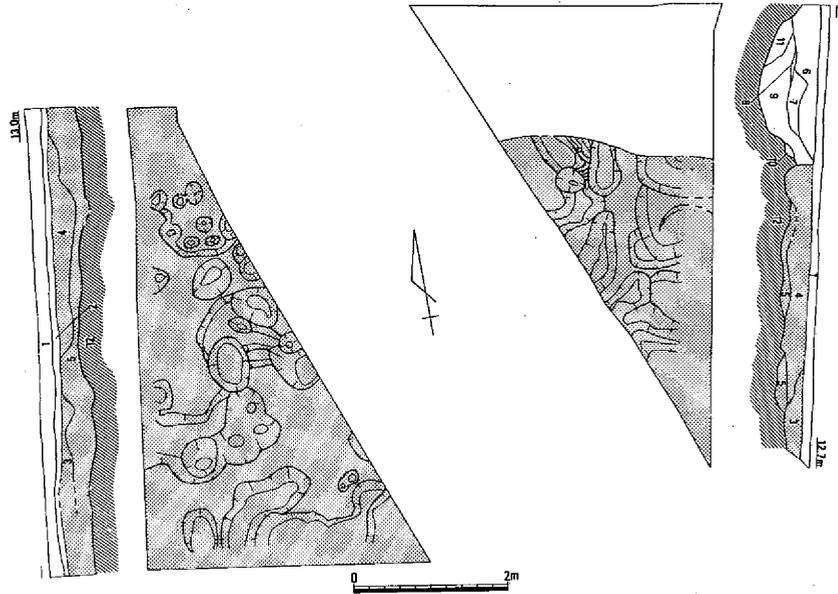
(中野)

1. 耕作土
2. 灰黄色砂質土
3. 灰色砂
4. 茶褐色砂
5. 淡黄色砂質土
6. 黄褐色粘質土
7. 灰黄色粘土



第15図 粘土採掘坑—I区P3— (1/100)

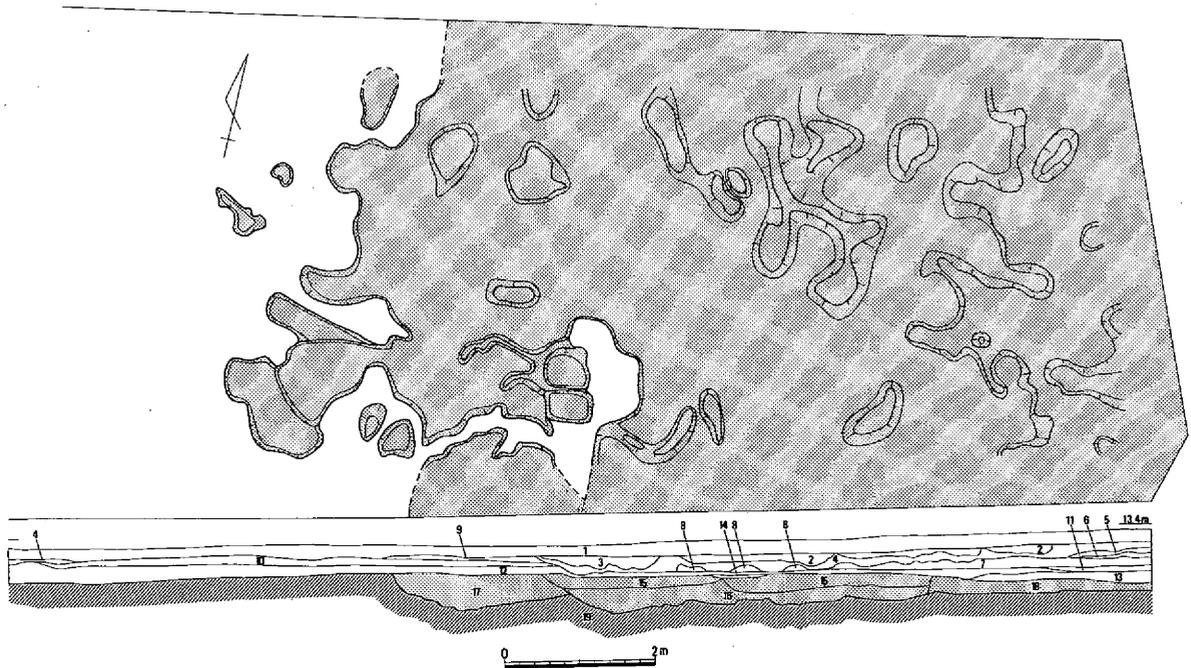
1. 耕作土
2. 茶褐色砂質土
3. 黄茶褐色泥砂
(砂混)
4. 灰黄色粘質土
5. 暗灰黄色粘質土
6. 暗灰茶褐色粘質土
7. 灰褐色砂土
8. 暗灰色粘土
9. 淡灰色砂土
10. 灰色粘質土
(茶色土混)
11. 灰色砂土
(淡灰色・褐色土混)
12. 淡灰黄色粘土



第16図 粘土採掘坑—I区P4—(1/100)

I区南側道(第17~19図、図版65)

I区南側道部分では幅6m・長さ42mの範囲でほぼ全面に亘って不定型の採掘坑を検出した。切り合い関係が明確なものもいくつかある。平面図ではアメーバー状の外形と底部の凹凸を図示し、断面



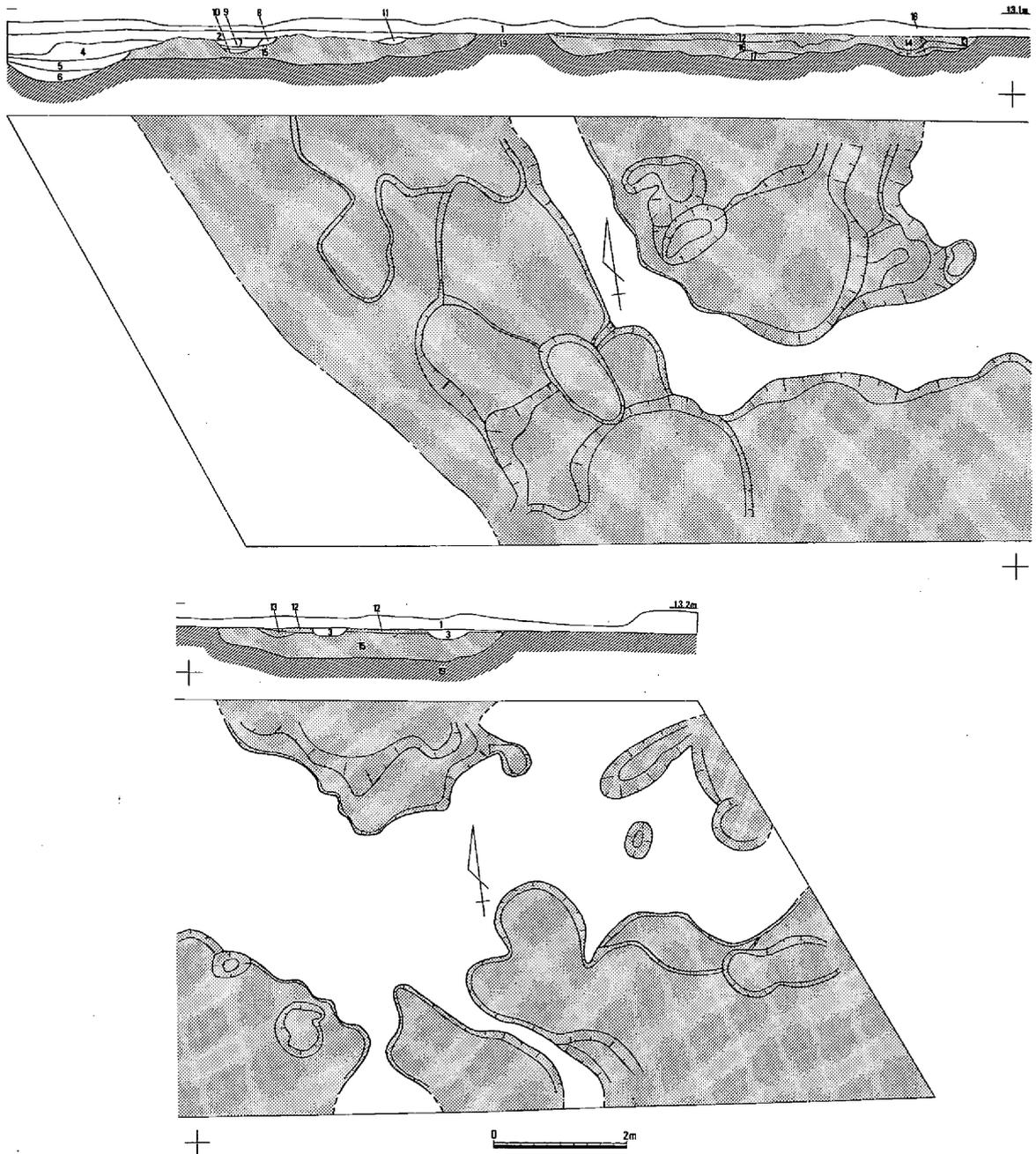
- | | | | |
|-----------|------------|-----------------------|--------------------------|
| 1. 耕作土 | 7. 茶灰色砂質土 | 13. 暗茶色砂質土 | 18. 灰褐色砂質土 |
| 2. 褐灰色砂質土 | 8. 淡灰色砂 | 14. 暗灰褐色砂質土 | 19. 青灰褐色粘土
(淡灰褐色砂質土混) |
| 3. 灰色砂質土 | 9. 淡茶褐色砂 | 15. 暗褐灰色粘質土
(黄色塊混) | |
| 4. 淡茶褐色砂 | 10. 茶灰色砂質土 | 16. 灰褐色粘質土 | |
| 5. 茶灰色砂質土 | 11. 茶灰色砂質土 | 17. 暗灰褐色砂質土 | |
| 6. 暗灰色砂質土 | 12. 茶褐色砂質土 | | |

第17図 粘土採掘坑—I区南側道①—(1/100)

第8章 服部遺跡

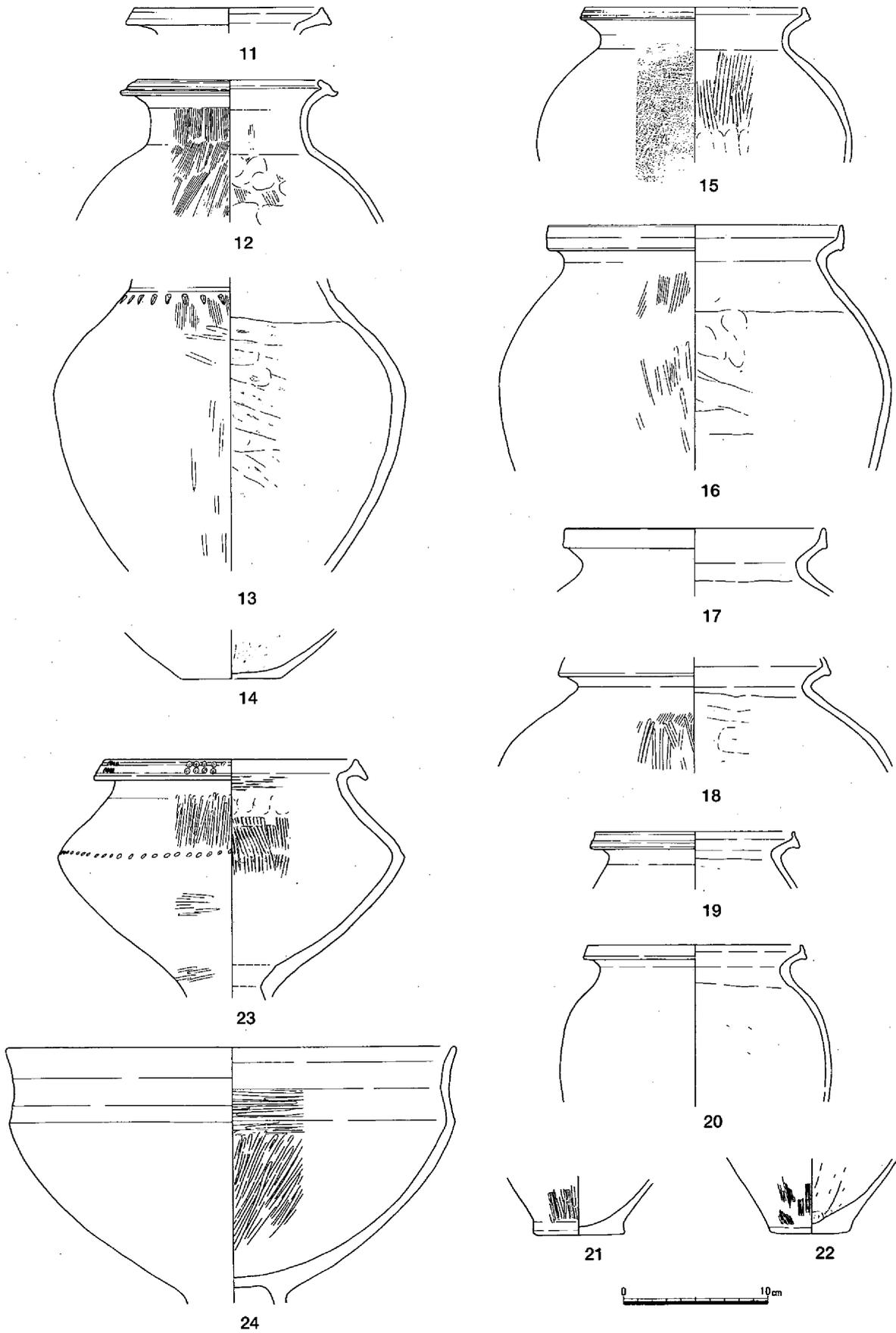
図では2～3の切り合いを示した。この付近の基盤層である淡黄褐色粘土を採掘した後にこれらの採掘坑に埋積している土は暗灰褐色砂質土で淡黄褐色粘土のブロックを大量に含んでいる。本遺構の検出面の海拔高は13mで、底部のそれは12.5mである。

I区南側道部分での出土遺物は弥生土器が少量ある。図化できたのは24点である。12は壺で、上下に拡張した口縁が45°に外傾している。23は台付鉢で、口唇に竹管文、胴部に刺突文を施文する。24は直口口縁の大型台付鉢。15以下は甕である。時期は弥生中期から同時期に当たる。(浅倉)



- | | | | |
|------------|-------------|---------------|------------------------|
| 1. 耕作土 | 6. 灰色砂質土 | 11. 暗灰褐色砂質土 | 16. 濃茶灰色砂質土 |
| 2. 褐色砂質土 | 7. 淡褐灰色砂質土 | 12. 暗褐色砂質土 | 17. 暗褐灰色砂質土
(黄色土塊含) |
| 3. 灰褐灰色粘質土 | 8. 淡褐灰色粘質土 | 13. 褐灰色砂質土 | 18. 茶灰色砂質土 |
| 4. 灰色砂質土 | 9. 淡褐灰色砂質土 | 14. 灰色砂 | 19. 淡褐青灰色粘土
(砂質土混) |
| 5. 褐色砂質土 | 10. 淡灰褐色砂質土 | 15. 暗茶褐色灰色砂質土 | |

第18図 粘土採掘坑—I区南側道②—(1/100)



第19図 粘土採掘坑—I区南側道—出土遺物② (1/4)

Ⅱ区北側道（第20～22・32図）

Ⅱ区北側道部分では幅3m・長さ110mの範囲でほぼ全面に亘って不定形な採掘坑を検出した。Ⅰ区ほど密集していないのは、現在の水田層が地下げを受けて遺構の上面がかなり削平を受けている為である。当地区の採掘坑の検出面の海拔高は12.5mで、底部のそれは11.7mである。

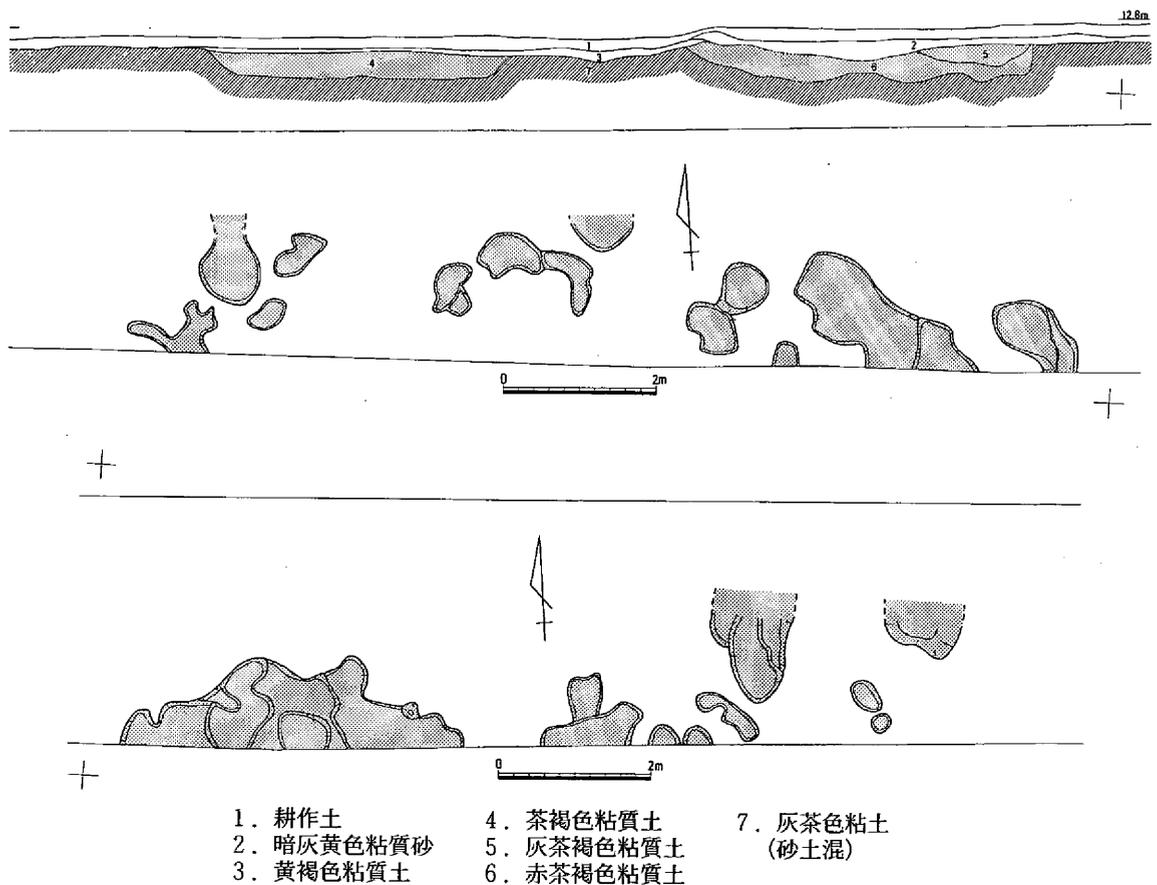
出土遺物は、26の弥生中期の甕、33の弥生後期の高杯、30の甕などの土器がある。（浅倉）

P5～P11（第23～28・31～34図、図版64・65）

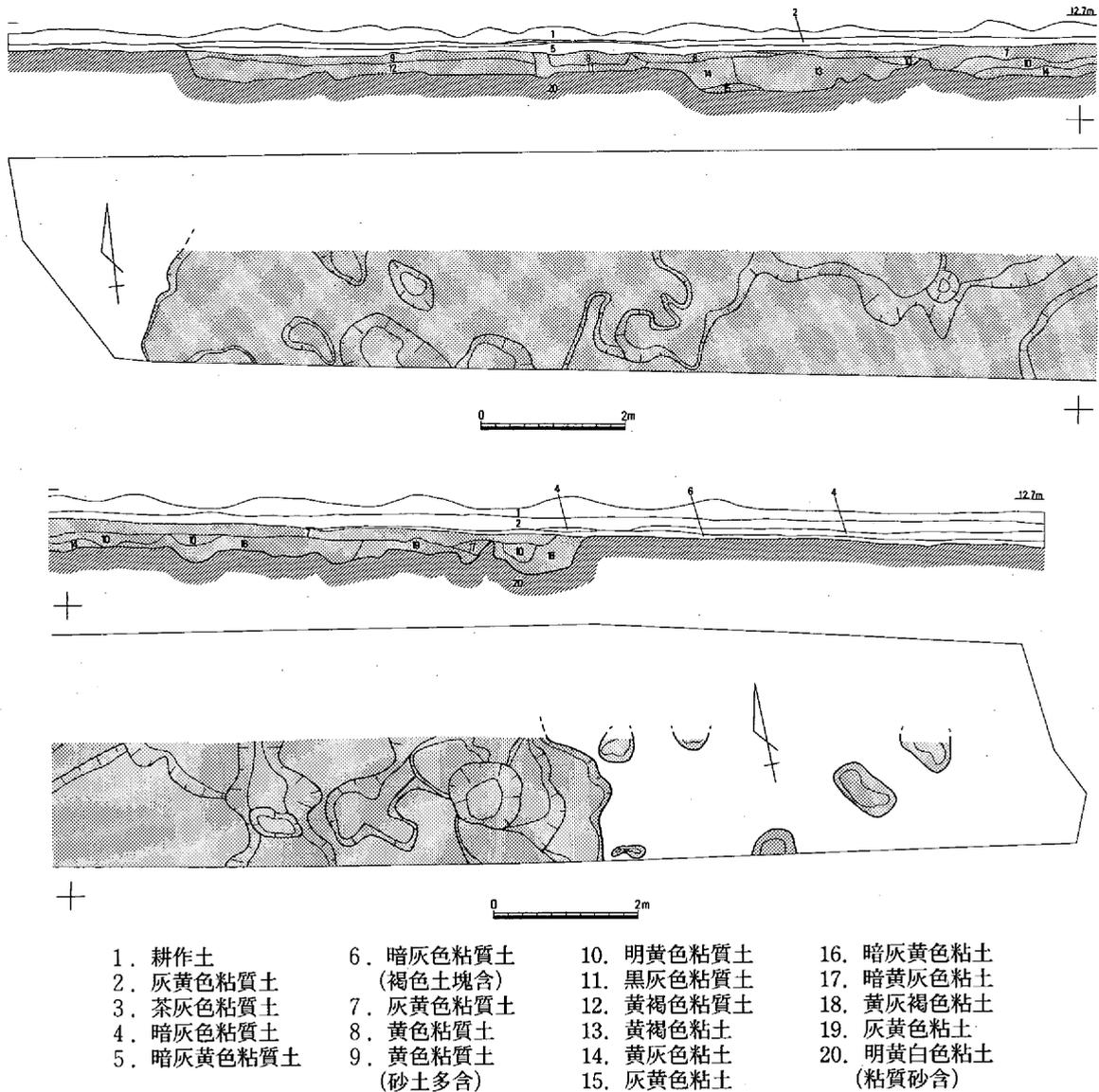
このP5～P11の調査区でも、西側のⅠ区より引き続き粘土採掘坑が広範囲に検出された。

P5では、調査区の南、西側には認められず北東部に検出された。この調査区の西側約10mのP4では調査区全域に検出されていたが、その広がりにはP5までは及んでおらずいったんときれ、新たな採掘坑群が形成されている。P5での採掘坑は、Ⅰ区での状況と同様で、採掘坑はより計画性をもった掘り方とは認められず、不定方向に拡散している状況を示していた。また、第23図採掘坑1では、目的とする基盤層にある粘土層をより多く採掘するために採掘坑の底部を袋状に掘っていた。この採掘坑からは、図示した34～37の土器が出土した。

P6では、ほぼ全域に採掘坑は広がっているものの、2カ所に空白部を残している。この調査区での採掘坑群は、その検出状況からみて南及び北側からの採掘坑群の広がりが接した状態を明瞭に残している。また、第24図採掘坑2のように単独で位置するものも認められた。出土遺物は採掘坑2から



第20図 粘土採掘坑—Ⅱ区北側道①— (1/100)



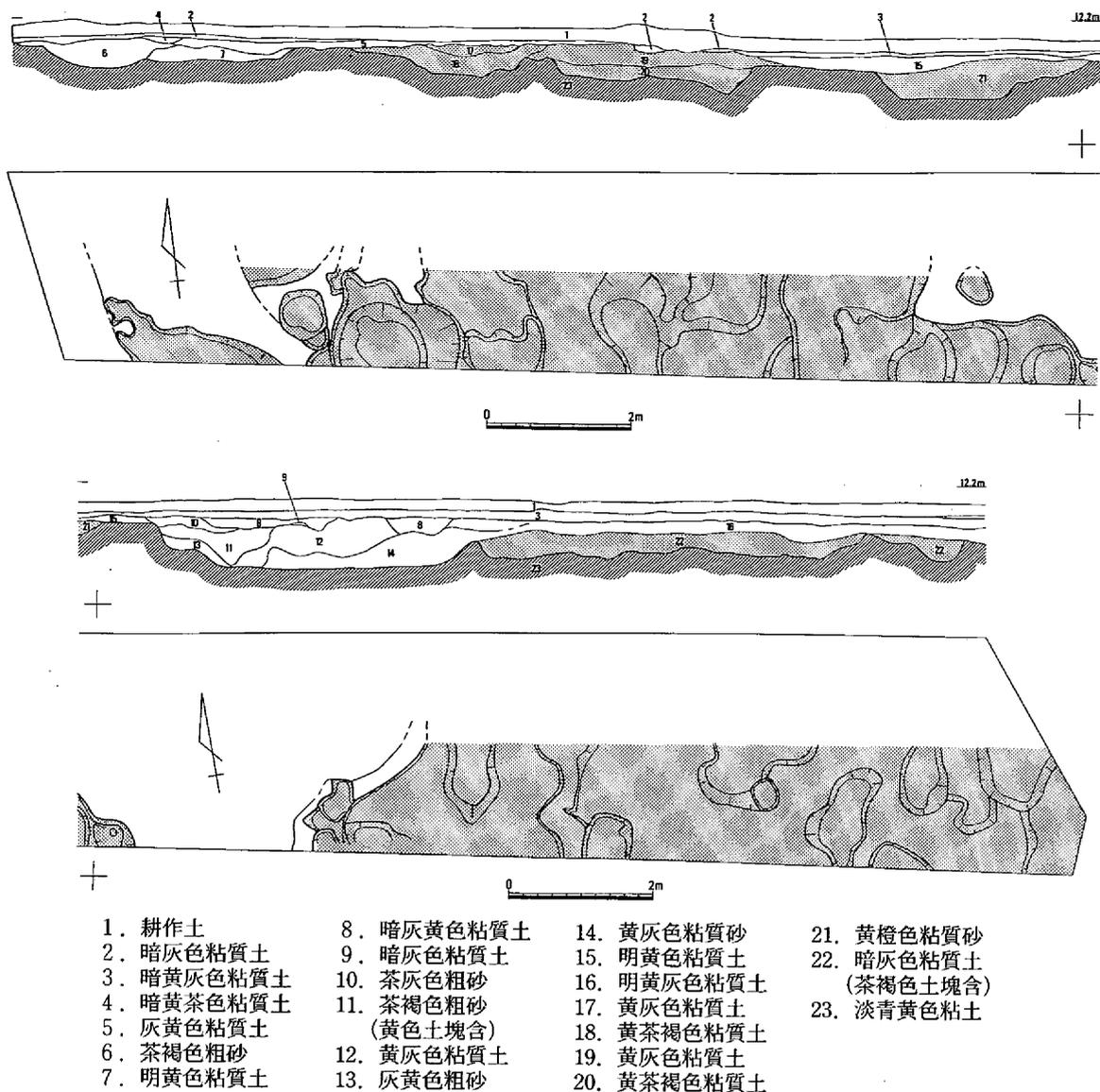
第21図 粘土採掘坑－Ⅱ区北側道②－ (1/100)

38、採掘坑3から43、他の採掘坑群から39～42の土器が出土している。

P7では、調査区の南半分に採掘坑群が広がっていた。この採掘坑群は、P6から連続する可能性が高い。しかし、調査区より約1.5m南の南側道部では検出されておらず、P6の南側採掘坑群が連続している可能性が考えられる。出土遺物としては45～48が検出された。

次のP8では、調査区の北西部に採掘坑群が確認されている。これらの採掘坑群は、P6・P7と同様な規模のものであった。この採掘坑群は、南の南側道部には検出されておらず、P6・P7からやや細長く連続するように続いていることが考えられる。また、調査区の南東部には、群をなさず、単独気味で存在するものも認められた。出土遺物としては49・50があり、前述した採掘坑群と同様の弥生後期前半期の特徴を示している。

P9では、P5～P8などで認められた、多数の採掘坑が大規模に集中する状況は認められず、単

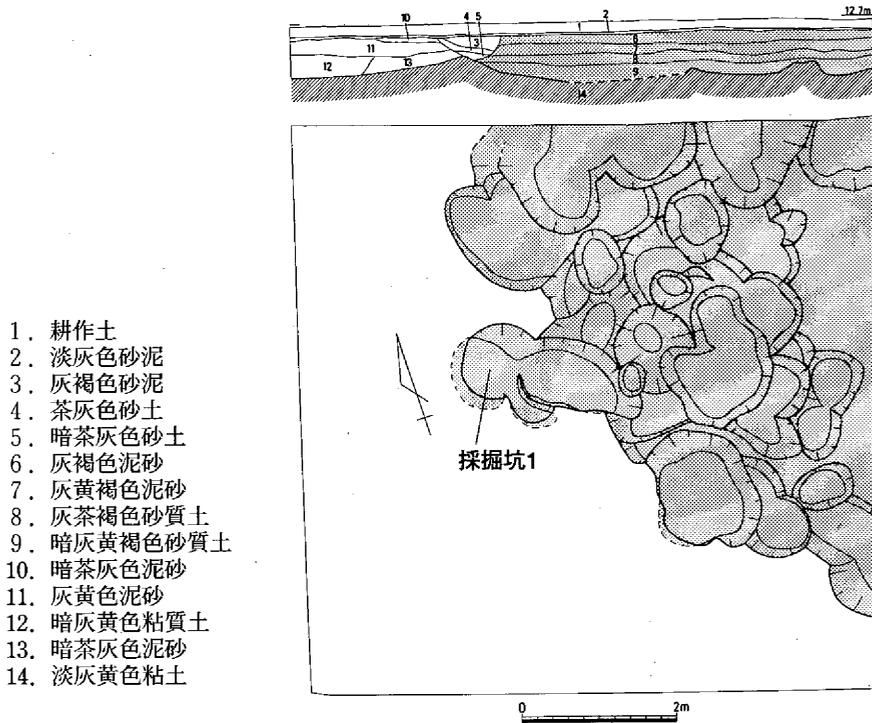


第22図 粘土採掘坑—Ⅱ区北側道③— (1/100)

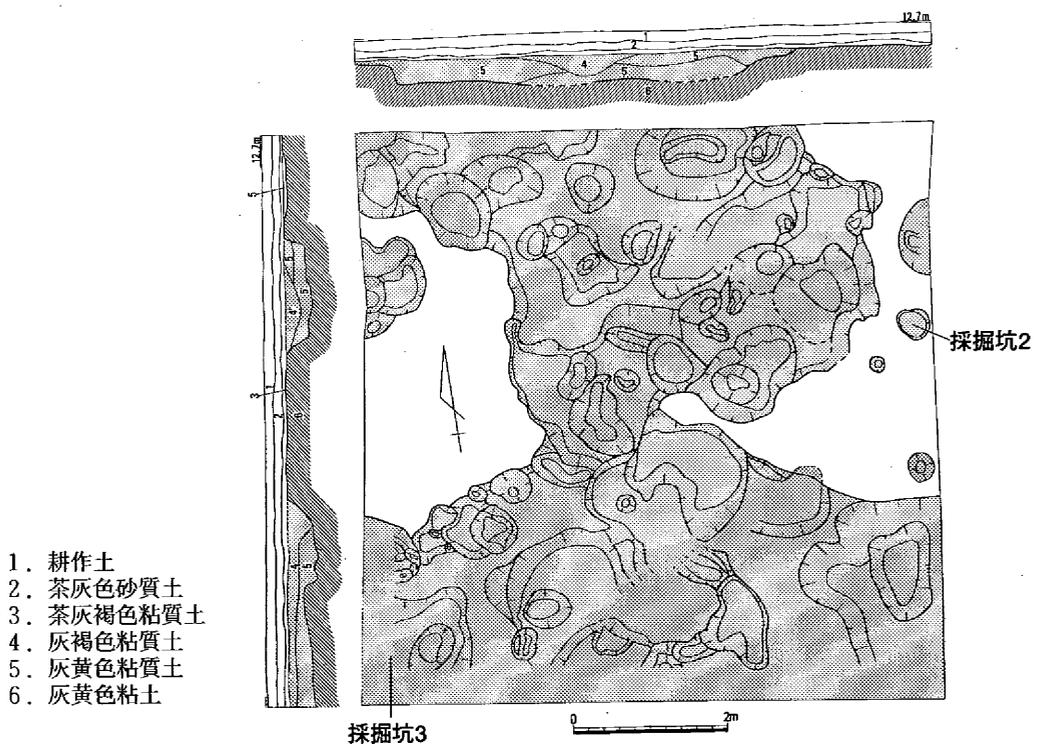
独及び少数の採掘坑が重複していた。第27図採掘坑4では、3基の採掘坑が重複している状況が明瞭に検出できた。この採掘坑では、110×60cm、90×60cmなどの規模で、楕円形を呈するものであった。深さは25～30cmほど基盤層を掘り込んでいた。また、第27図B-B'断面の採掘坑は、8基前後の採掘坑が重複しており、初めに採掘坑を掘ったのちその地点から拡散するように採掘坑が連続している状況が明らかである。この採掘坑は、断面が示すように先後関係も認められる。このような連続的に集中する状況を見る時、採掘者が同一の可能性が強いと考えられる。さらに、採掘者が同一であるならば、意識的に採掘者固有の「採掘地」として存在した可能性も想起できる。出土遺物としては、採掘坑4から51、採掘坑5から52などが検出されている。

P10では、P5～P8で確認されたように、ほぼ調査区全域に採掘坑が存在した。その採掘坑群の在り方をみる時、複数の「核」から拡幅してきている状況が認められる。このような存在の仕方は、

採掘の場所、方法などに規制的なものが及んでいなかった状況を示している。また、採掘坑の単一の規模は1~1.5mの小規模なもので、より組織的な掘削ではなかったことを物語っており、少人数で行える労働力である。さらに、採掘及びその粘土の運搬などを考える時、個々の家単位で行える規模



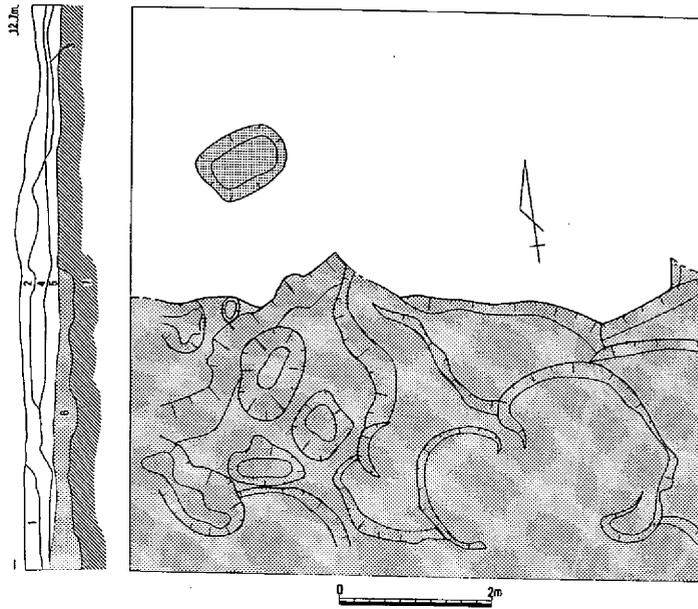
第23図 粘土採掘坑—Ⅱ区P5— (1/100)



第24図 粘土採掘坑—Ⅱ区P6— (1/100)

であると考えられる。

P11では、中世の溝などによって削平されていたが、ほぼ全域に採掘坑が存在する。その在り方、規模などについても前述した状況と同様なものである。 (中野)



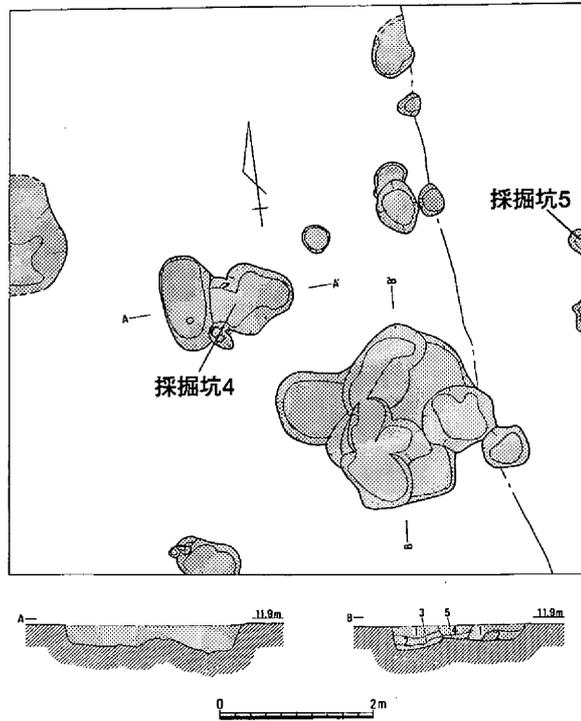
1. 造成土
2. 耕作土
3. 淡灰色砂泥
4. 淡灰黄色砂泥
5. 灰黄褐色砂泥
6. 灰黄色砂質土
7. 灰黄色砂質土 (粘土混)

第25図 粘土採掘坑—Ⅱ区P7— (1/100)



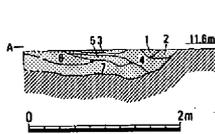
1. 耕作土
2. 淡灰色砂泥
3. 暗黄灰色粘質土 (砂混)
4. 灰黄色砂泥
5. 灰褐色砂質土 (砂混)
6. 灰褐色砂質土
7. 灰色砂土
8. 灰黄褐色砂質土
9. 暗灰黄褐色砂質土
10. 灰褐色砂土
11. 灰黄色砂質土 (粘土混)
12. 淡灰黄色砂質土 (粘土混)
13. 灰黄色粘土 (砂土混)

第26図 粘土採掘坑—Ⅱ区P8— (1/100)

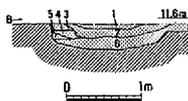


1. 灰黄褐色砂質土
2. 茶灰黄色砂質土
3. 淡灰黄褐色泥砂
(砂土混)
4. 灰色砂質土
5. 灰黄色砂質土

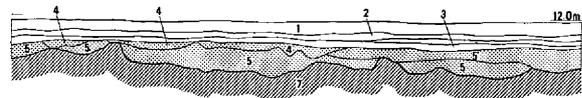
第27図 粘土採掘坑—Ⅱ区P9— (1/100)



1. 灰黄褐色粘質土
2. 灰黄色粘質土
3. 黒褐色粘質土
4. 灰褐色粘質土
5. 灰黄褐色粘質土
6. 灰黄色粘質土
7. 暗灰黄色粘質土



1. 黒褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 灰黄色粘質土
4. 灰黄褐色粘質土
5. 灰褐色粘質土
6. 暗灰黄色粘質土

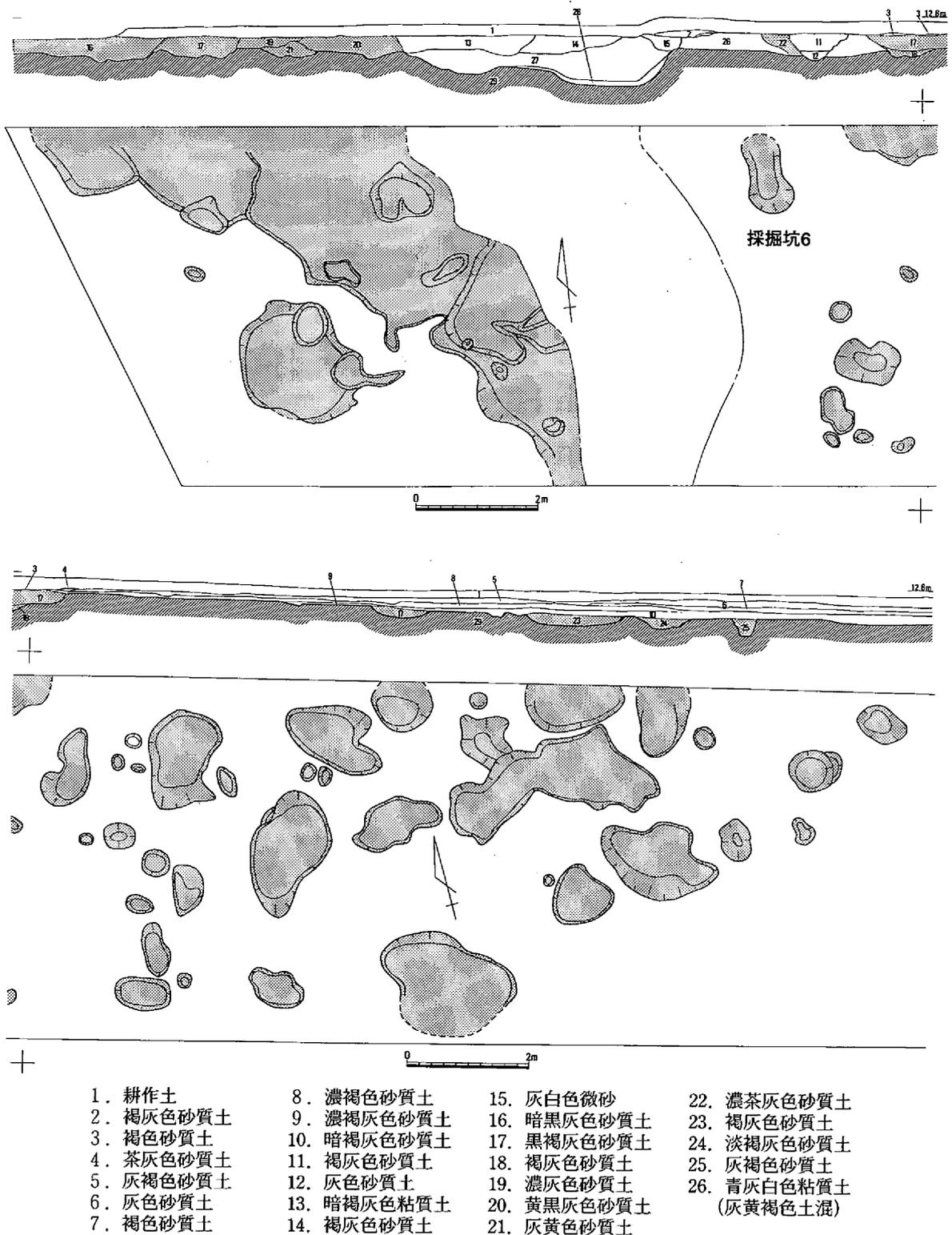


- | | | |
|------------|------------|-----------|
| 1. 耕作土 | 4. 灰黄褐色粘質土 | 6. 淡黄色粘質土 |
| 2. 茶灰色粘質土 | 5. 暗灰黄色粘質土 | 7. 灰黄色粘質土 |
| 3. 茶灰褐色粘質土 | | |

第28図 粘土採掘坑—Ⅱ区P10— (1/100)

Ⅱ区南側道（第29・30・34図）

Ⅱ区南側道部分では、幅6m・長さ110mの範囲でほぼ全面に亘って不定形な土塊を検出した。ただし中央部分においては調査初期で、まだどの面で遺構検出をして良いのか判断できていないままに

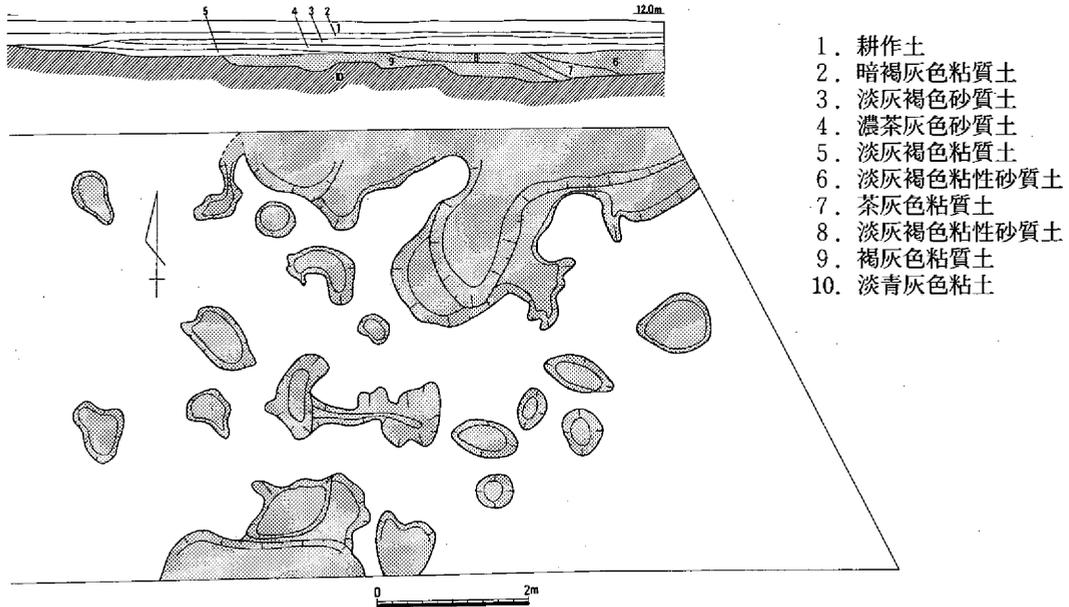


第29図 粘土探掘坑—Ⅱ区南側道①— (1/100)

重機により表土掘削の際深く掘りすぎて平面での検出を失敗している。東端での採掘坑の検出面の海拔高は11.6mで、底部のそれは11.2mである。

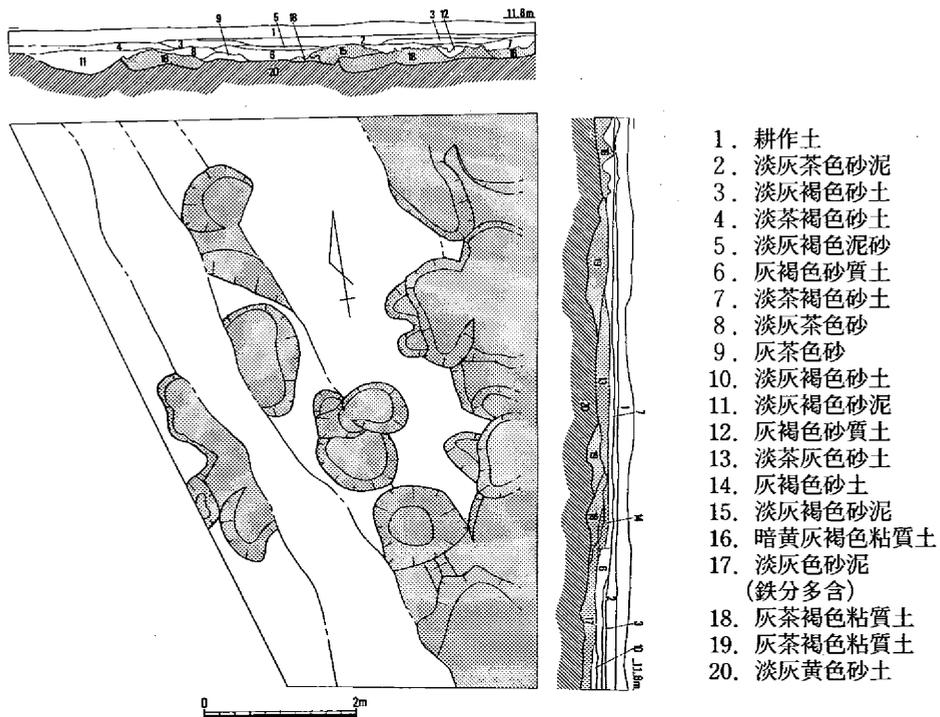
出土遺物は、55の弥生中期の甕、56の弥生後期の台付鉢などの土器がある。

(浅倉)



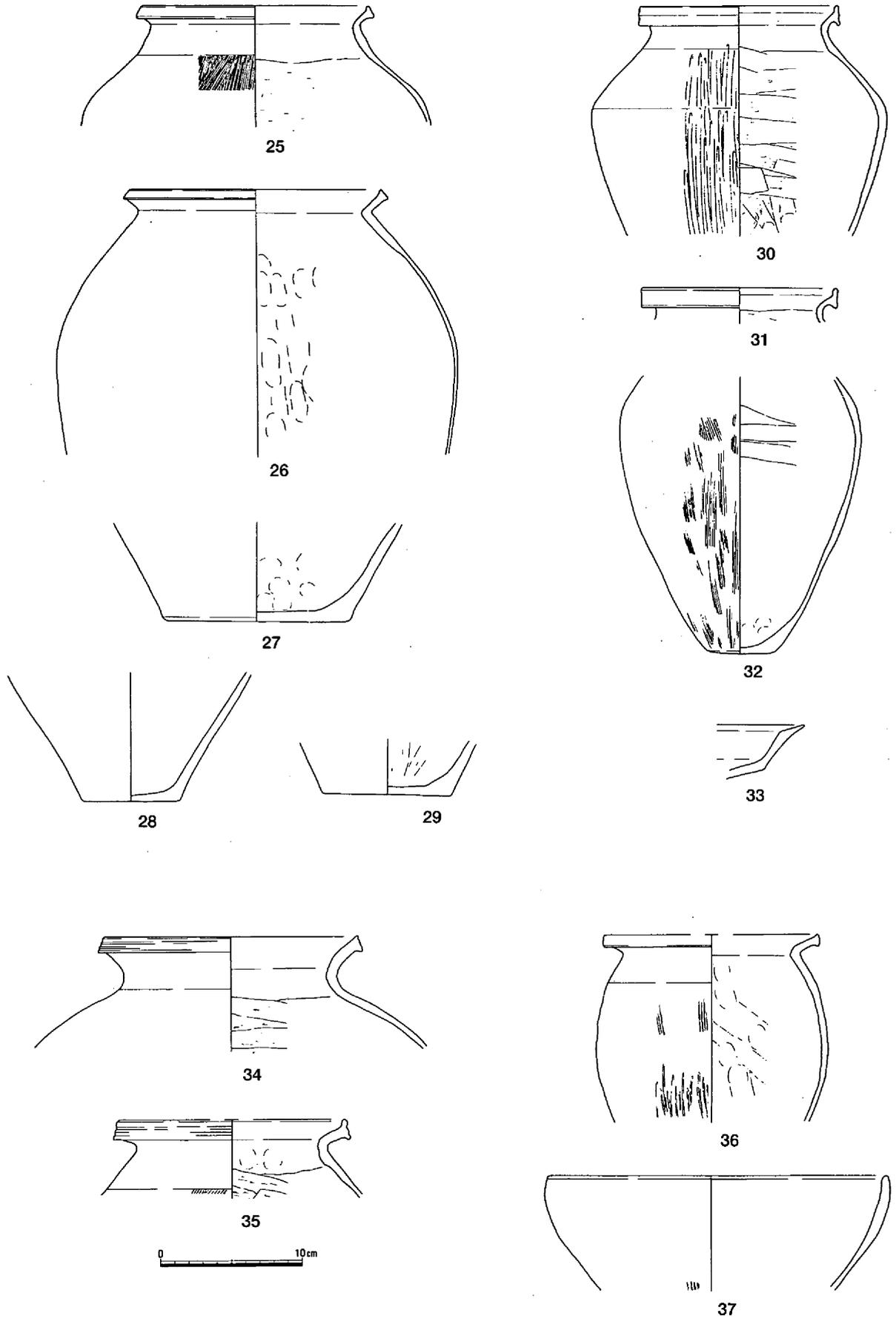
1. 耕作土
2. 暗褐灰色粘質土
3. 淡灰褐色砂質土
4. 濃茶灰色砂質土
5. 淡灰褐色粘質土
6. 淡灰褐色粘性砂質土
7. 茶灰色粘質土
8. 淡灰褐色粘性砂質土
9. 褐灰色粘質土
10. 淡青灰色粘土

第30図 粘土採掘坑－Ⅱ区南側道②－ (1/100)

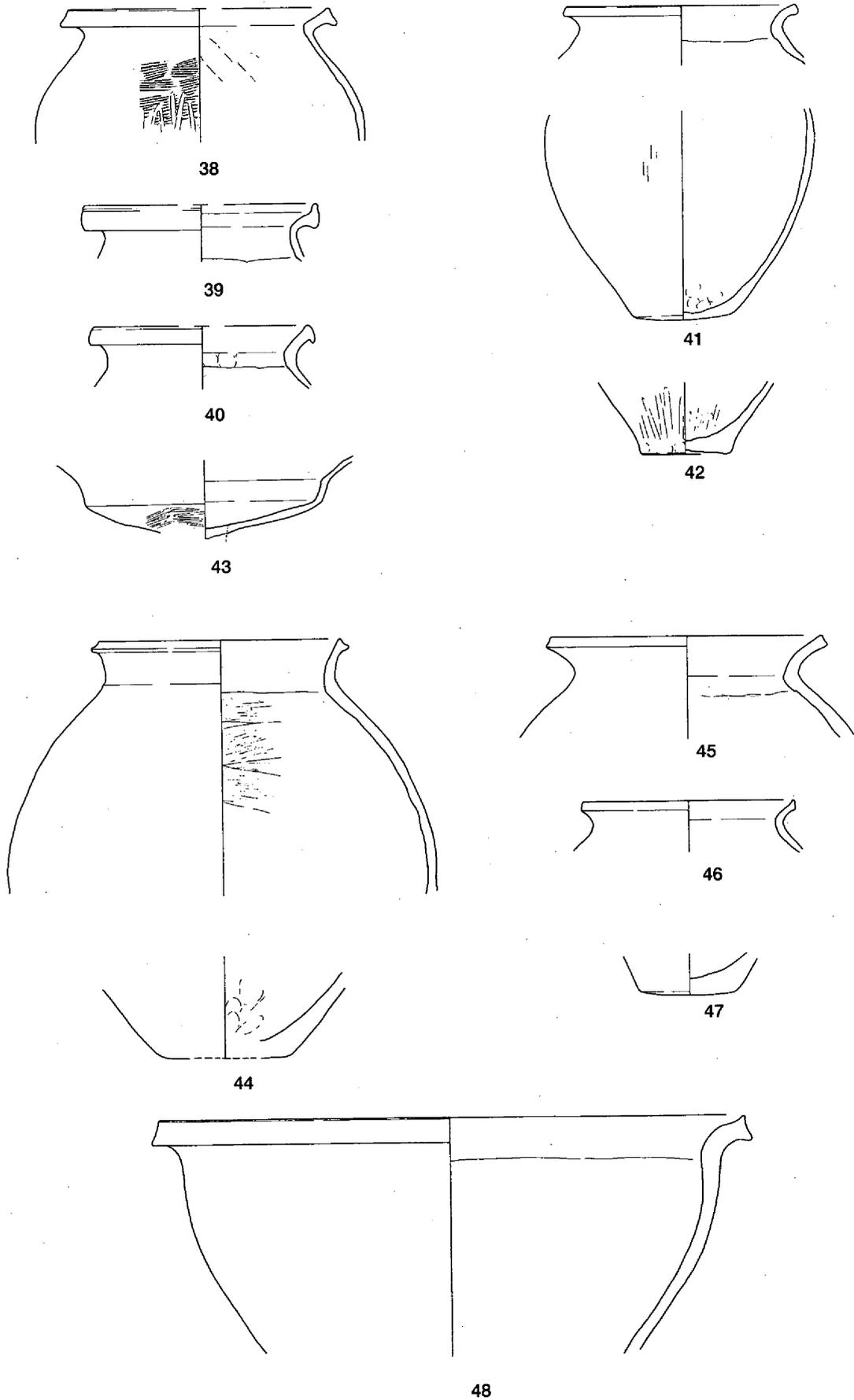


1. 耕作土
2. 淡灰茶色砂泥
3. 淡灰褐色砂土
4. 淡茶褐色砂土
5. 淡灰褐色泥砂
6. 灰褐色砂質土
7. 淡茶褐色砂土
8. 淡灰茶色砂
9. 灰茶色砂
10. 淡灰褐色砂土
11. 淡灰褐色砂泥
12. 灰褐色砂質土
13. 淡茶灰色砂土
14. 灰褐色砂土
15. 淡灰褐色砂泥
16. 暗黄灰褐色粘質土
17. 淡灰色砂泥
(鉄分多含)
18. 灰茶褐色粘質土
19. 灰茶褐色粘質土
20. 淡灰黄色砂土

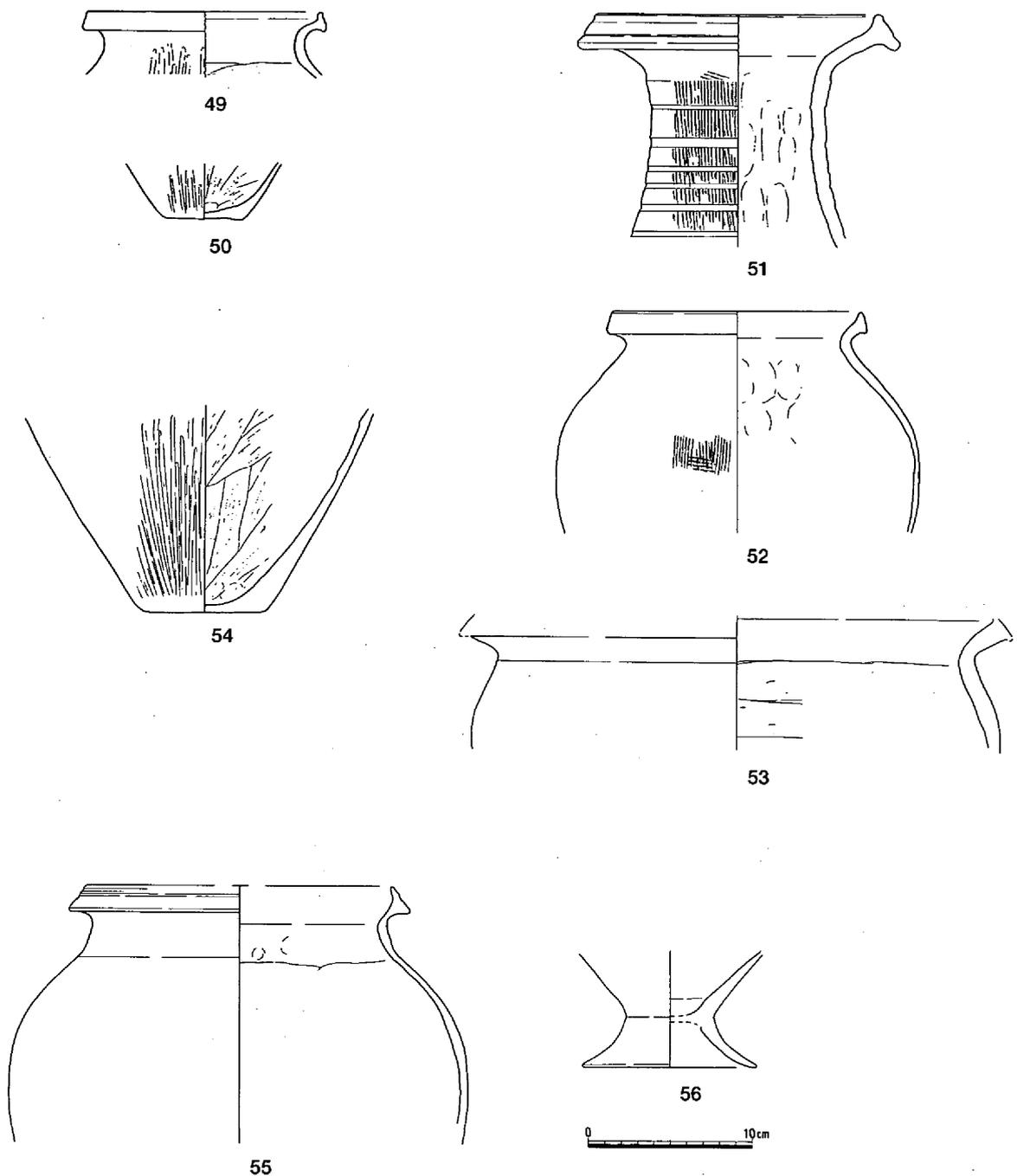
第31図 粘土採掘坑－Ⅱ区P11－ (1/100)



第32図 粘土採掘坑—II区北側道・P5—出土遺物③ (1/4)



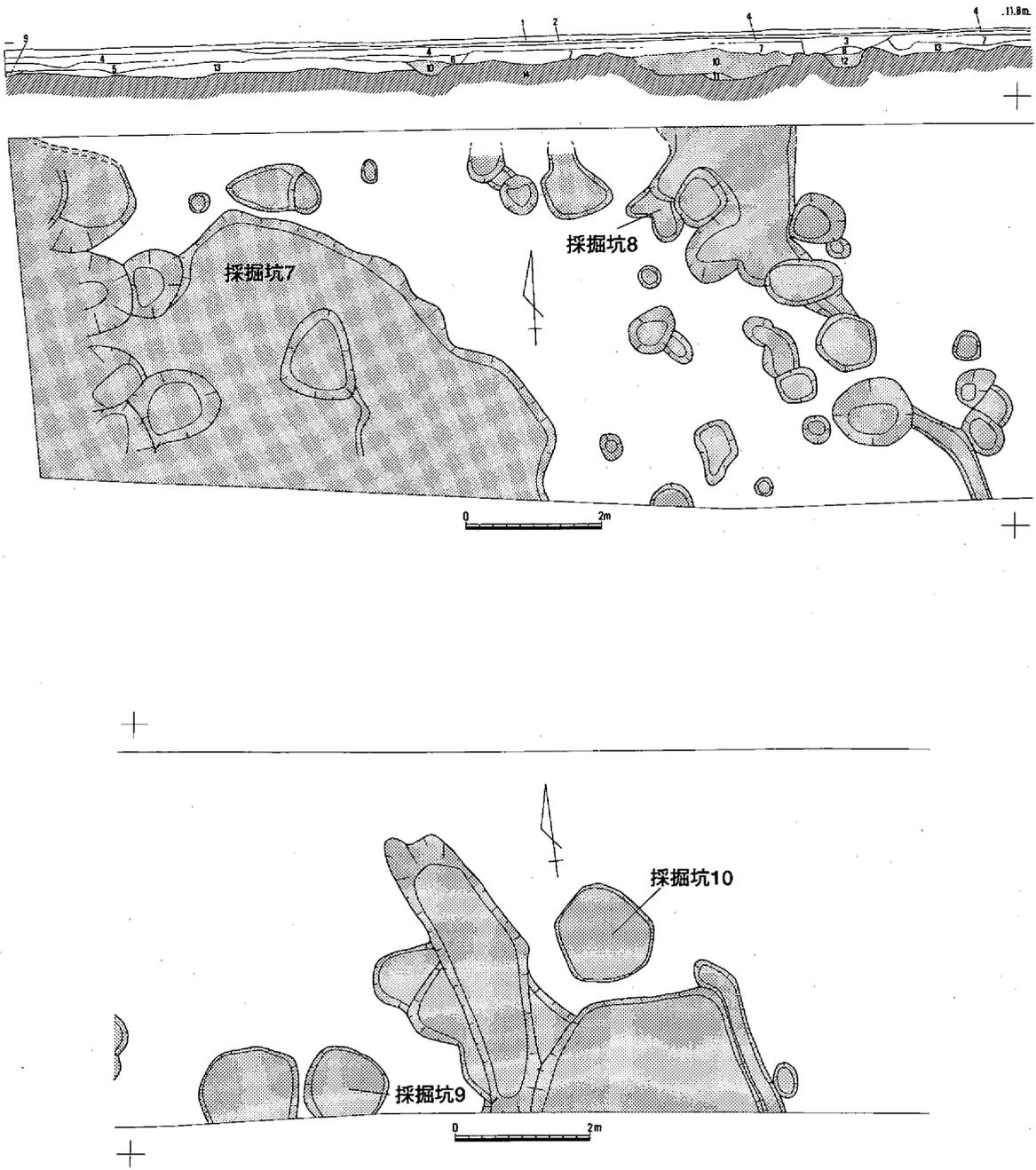
第33図 粘土採掘坑—Ⅱ区P6・P7—出土遺物④ (1/4)



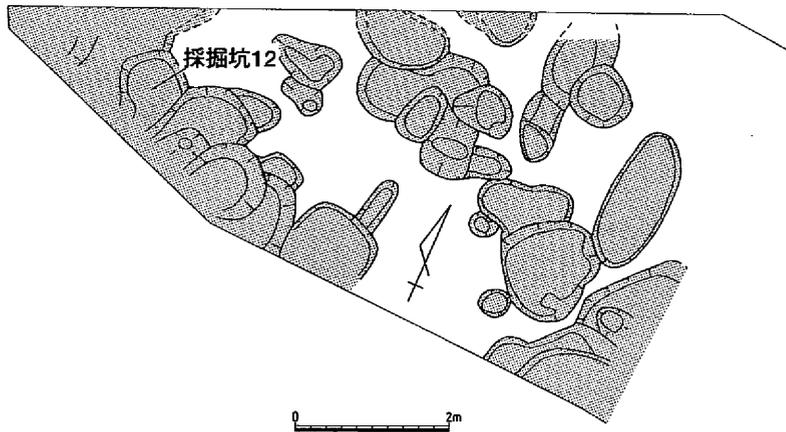
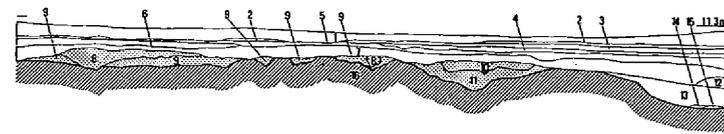
第34図 粘土採掘坑—Ⅱ区P8・P9・P10・Ⅱ区南側道—出土遺物⑤ (1/4)

Ⅲ区北側道 (第5・6・35~37図、図版65)

土坑は溝20と46を境に東側には現在用水を越えた対岸の溝3以西に一部集中して見られるが、主に中央部から西に集中している。平面形は円形・楕円形のものが多く深さは10cm~30cmまでに収まる。規模は底部のあり方などから直径50~200cmのものが多いと思われる。底部は弧を描き、緩斜面で壁が立ち上がる断面形をもつ。土坑の下部には黄色粘土が堆積しており、この土坑群は粘土を採取するために掘られたものと思われる。単独に存在するものもみられるが多くの土坑は極めて複雑に重なり

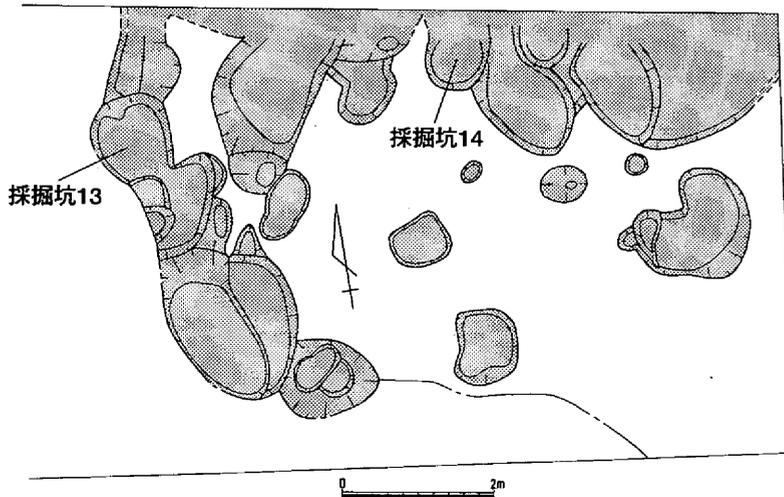
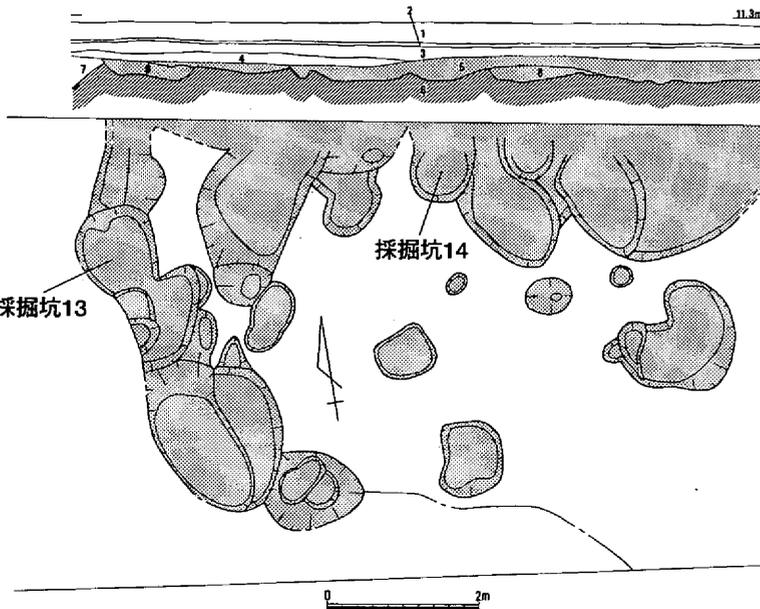


第35図 粘土採掘坑—Ⅲ区北側道①— (1/100)



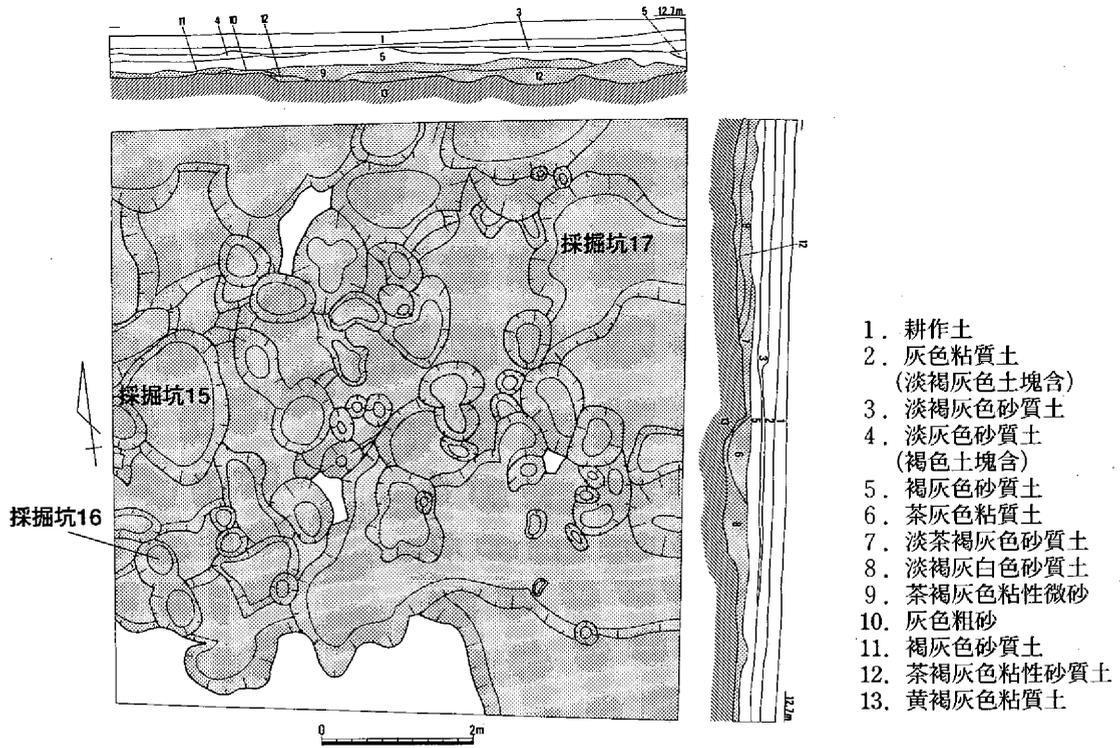
1. 耕作土
2. 赤褐色砂質土
3. 灰褐色細砂
4. 黄灰褐色粘性砂質土
5. 灰茶褐色粘性砂質土
6. 黄灰褐色粘性砂質土
7. 暗黄灰褐色粘質土
8. 灰茶褐色砂質土
9. 淡灰黄褐色粘質土
10. 灰黄茶褐色粘質土
11. 灰黄茶褐色粘性砂質土
12. 暗灰茶褐色粘性砂質土
13. 灰茶褐色粗砂
14. 暗黄灰褐色粗砂
15. 明青灰黄褐色粘質土
16. 淡灰黄白色粘質土

第36图 粘土探掘坑—Ⅲ区北側道②— (1/100)

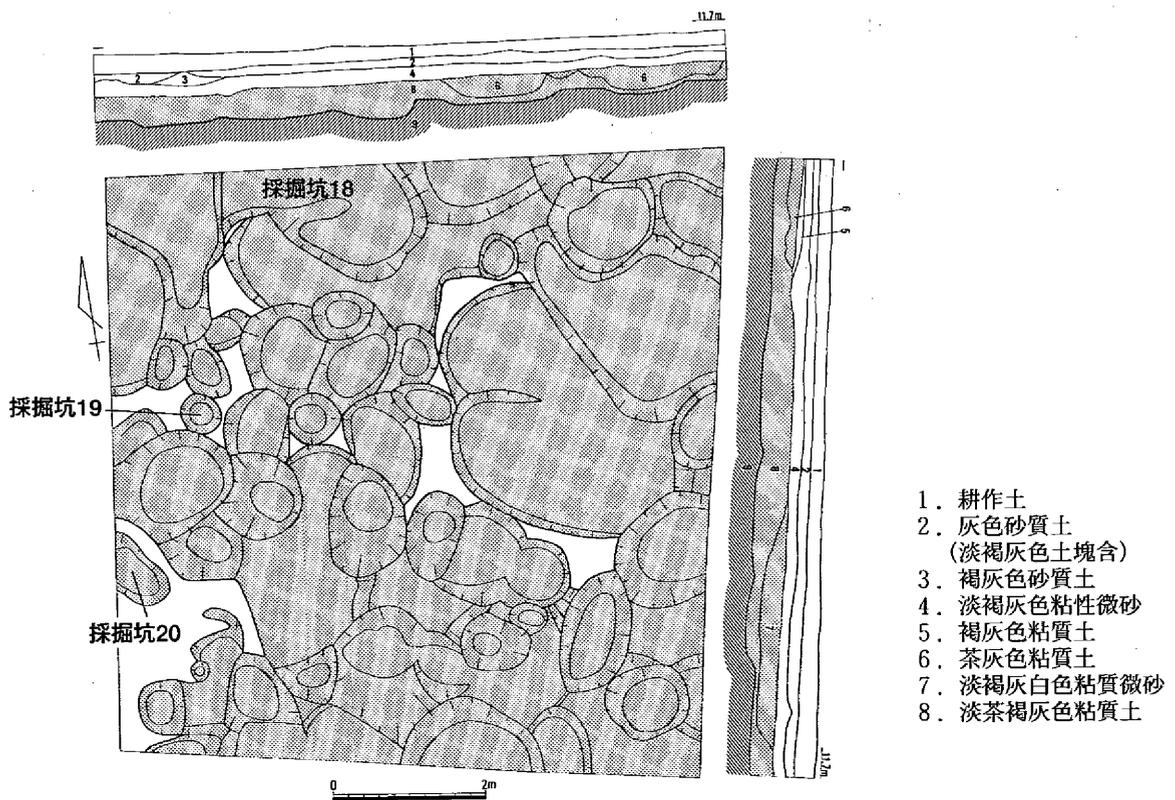


1. 耕作土
2. 赤褐色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 淡白灰褐色粗砂
5. 灰褐色粗砂
6. 茶灰黄色斑紋粘性砂質土
7. 暗黄灰褐色粘質土
8. 淡灰黄白色粘質土

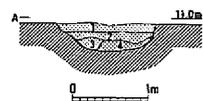
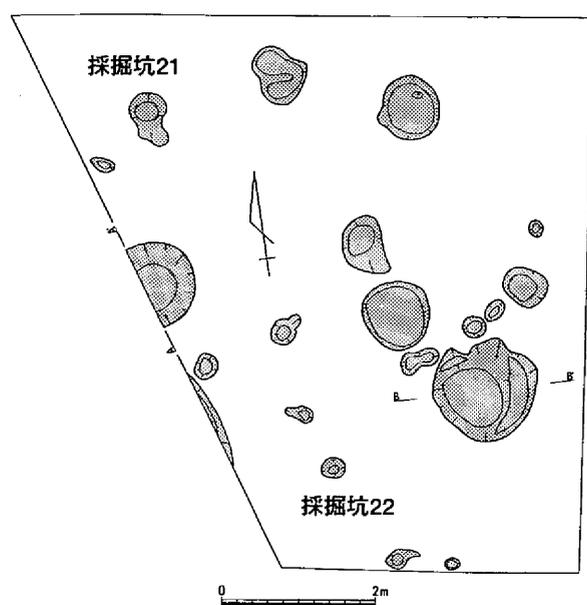
第37图 粘土探掘坑—Ⅲ区北側道③— (1/100)



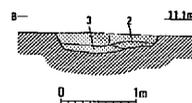
第38図 粘土採掘坑—Ⅲ区 P 13— (1/100)



第39図 粘土採掘坑—Ⅲ区 P 14— (1/100)

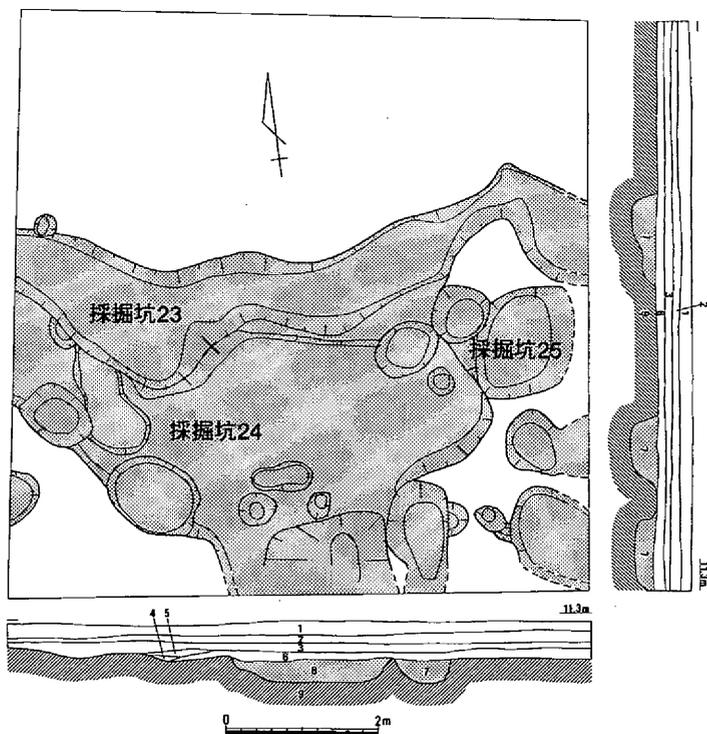


1. 黄灰褐色粘質土
2. 灰黄茶色粘質土
3. 明灰黄色粘性微砂
4. 暗茶灰色粘質土



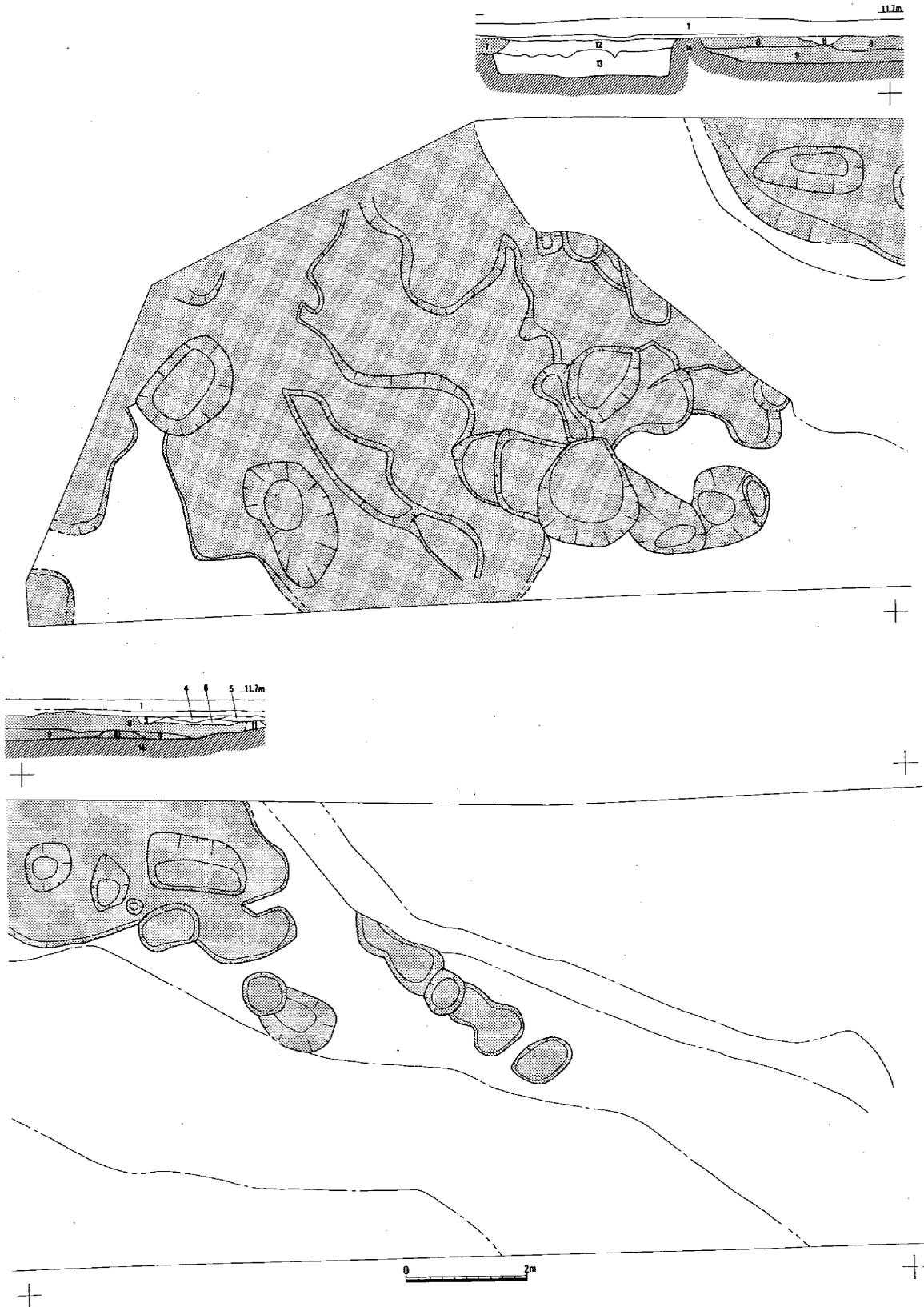
1. 灰褐茶色粘質土
2. 暗茶黄色粘質土
3. 灰茶黄色粘質土

第40图 粘土採掘坑—Ⅲ区P15— (1/100)



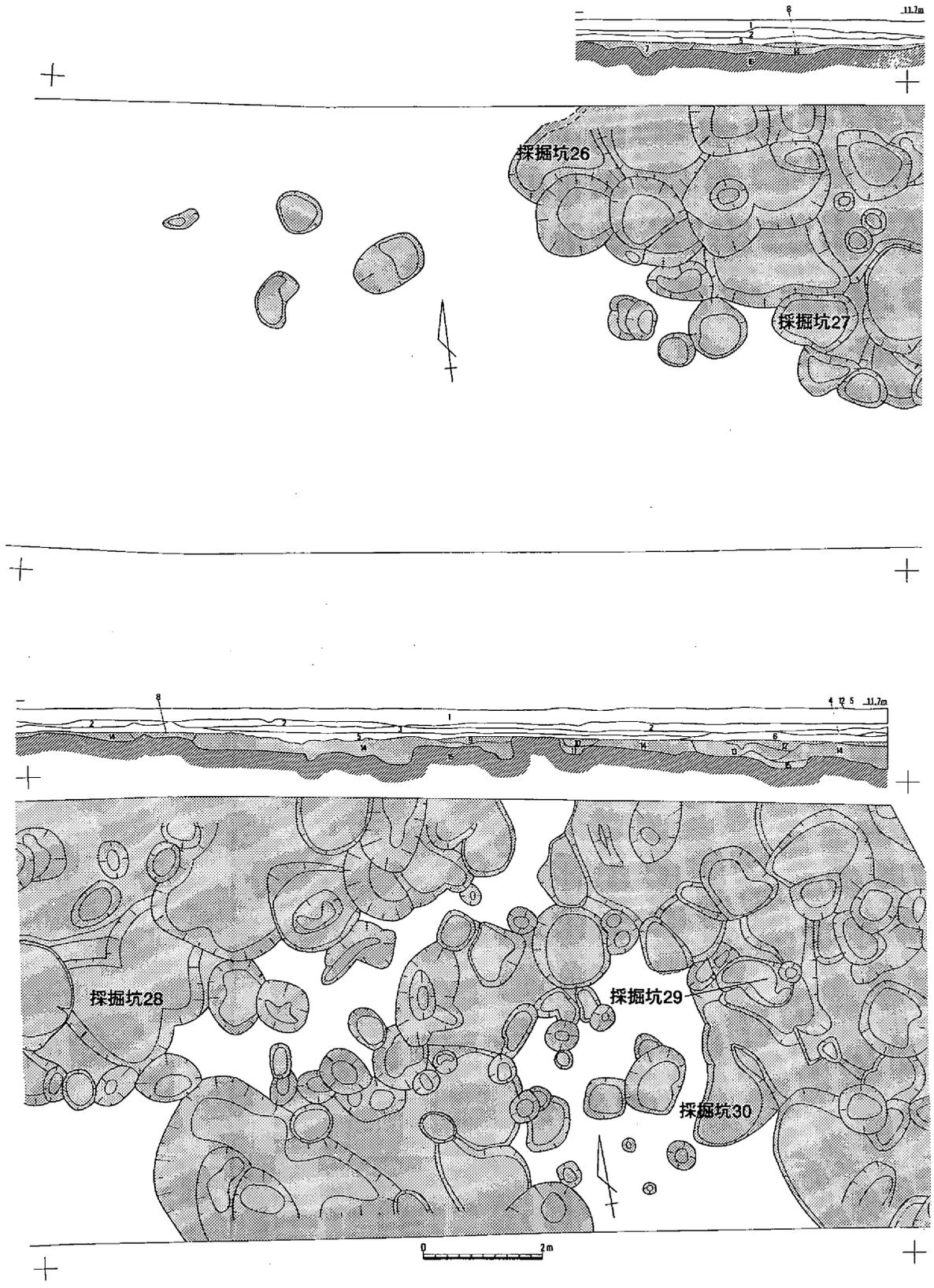
1. 耕作土
2. 灰黄褐色粘性砂質土 (礫含)
3. 淡灰黄褐色粘性砂質土 (礫含)
4. 淡灰色粗砂
5. 淡灰黄褐色細砂 (礫含)
6. 淡灰褐色粘性砂質土 (礫含)
7. 暗灰黄褐色粘性砂質土
8. 濃暗灰黄褐色粘性砂質土
9. 黄褐灰白色粘質土

第41图 粘土採掘坑—Ⅲ区P16— (1/100)



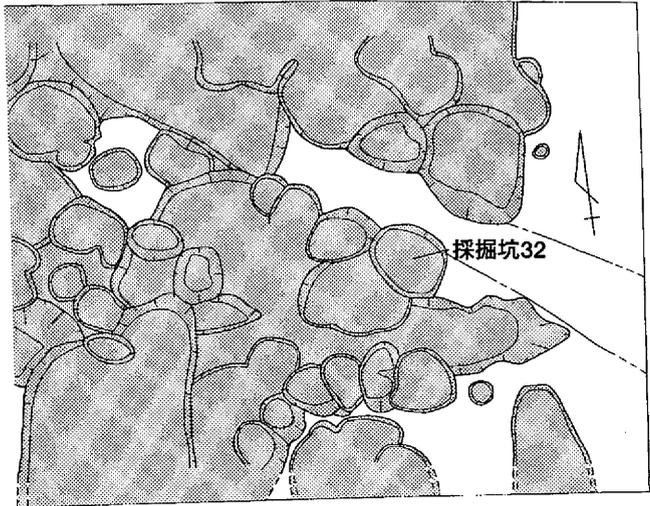
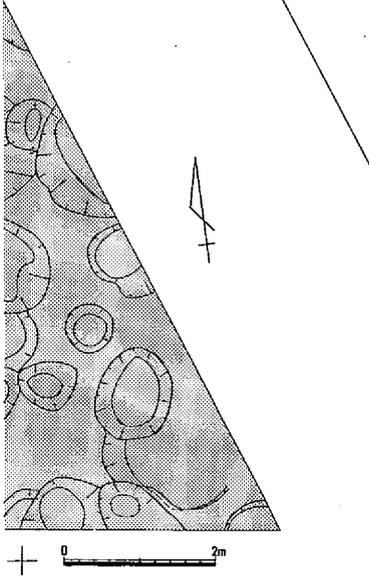
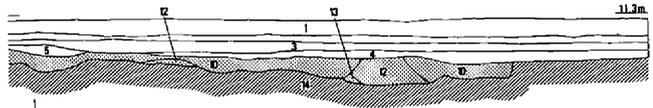
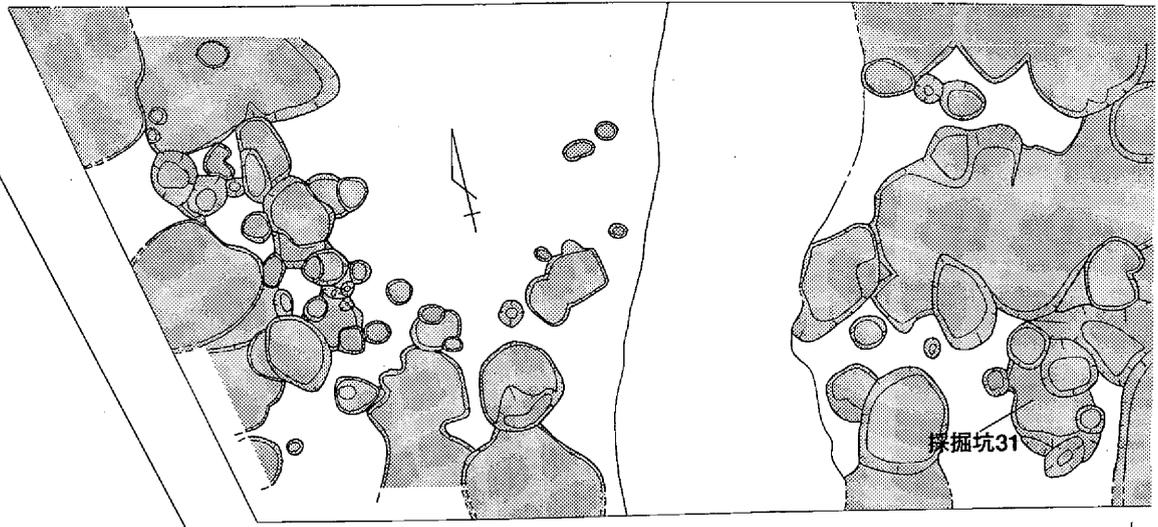
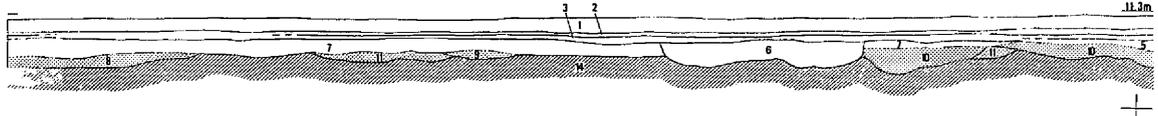
- | | | |
|-------------|---------------|--------------|
| 1. 耕作土 | 6. 茶褐灰色粘質土 | 11. 淡茶灰色砂質土 |
| 2. 褐灰色砂質土 | 7. 黄褐灰色粘性砂質土 | 12. 褐灰色砂 |
| 3. 灰黄褐色砂 | 8. 灰褐色粘質土 | 13. 灰色砂 |
| 4. 灰褐色砂質土 | 9. 黄褐灰白色粘性砂質土 | 14. 淡褐灰白色粘質土 |
| 5. 褐灰色粘性砂質土 | 10. 淡褐灰色粘性砂質土 | (砂質土・粗砂混) |

第42図 粘土採掘坑一Ⅲ区南側道①— (1/100)



- | | | | |
|------------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 耕作土 | 5. 褐灰色砂質土 | 9. 淡茶褐灰色粘質土 | 13. 淡茶褐灰色粘質土 |
| 2. 褐灰色砂質土 | 6. 暗褐灰色砂質土 | 10. 灰褐色砂質土 | 14. 淡茶黃褐灰色粘質土 |
| 3. 灰褐色砂質土 | 7. 褐灰色粘性砂質土 | 11. 淡茶灰色砂 | 15. 黃褐灰色粘質土 |
| 4. 淡褐灰色砂質土 | 8. 黃褐灰色粘質土 | 12. 暗灰褐色粘質土 | 16. 黃褐灰白色粘質土 |

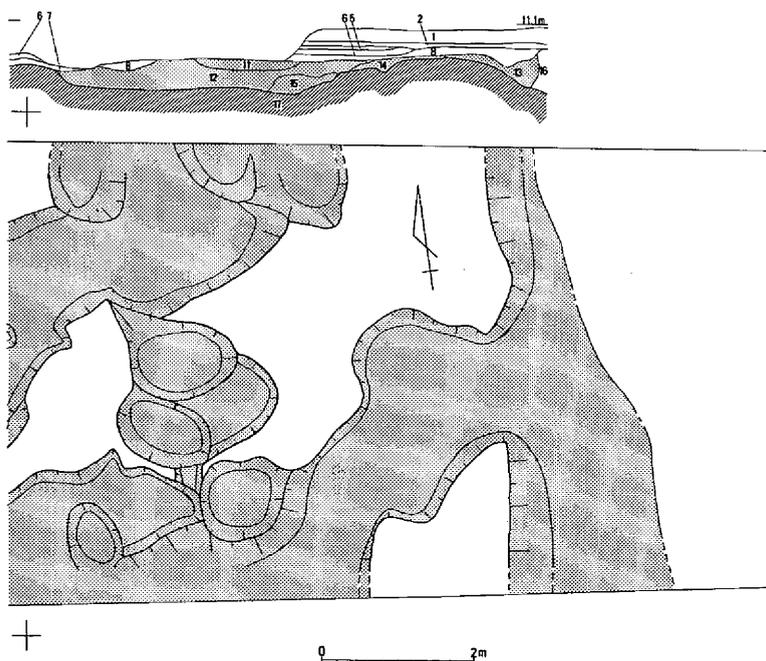
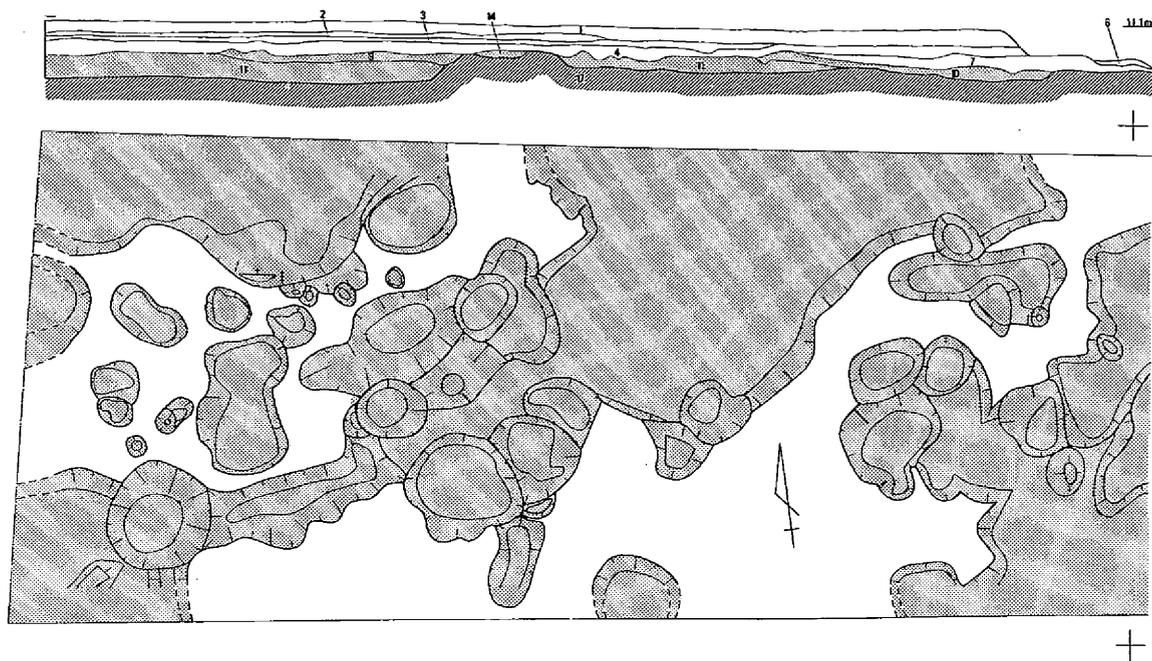
第43圖 粘土採掘坑—Ⅲ区南側道②— (1/100)



第44図 粘土採掘坑
—Ⅲ区南側道③— (1/100)

- | | |
|-------------|------------------------|
| 1. 耕作土 | 9. 淡灰褐色砂質土 |
| 2. 灰褐色砂質土 | 10. 淡茶灰黄色粘質土
(砂質土混) |
| 3. 淡褐色砂質土 | 11. 淡灰黄褐色粘質土 |
| 4. 褐色砂質土 | 12. 暗褐色粘質土 |
| 5. 暗褐色砂 | 13. 淡灰褐色砂質土 |
| 6. 淡灰黄褐色砂質土 | 14. 黄灰白色粘質土
(砂質土混) |
| 7. 淡茶灰黄色粘質土 | |
| 8. 黄褐色粘質土 | |

第45図 粘土採掘坑—Ⅲ区南側道④— (1/100)



- | | | |
|------------------------|-----------------------|------------------------|
| 1. 耕作土 | 7. 暗灰褐色粘質土 | 14. 淡黄褐色砂質土 |
| 2. 灰黄褐色砂質土 | 8. 暗褐灰色粘質土 | 15. 淡茶灰褐色粘質土 |
| 3. 褐灰色微砂 | 9. 淡黄褐色粘質土 | 16. 淡茶灰色粗砂 |
| 4. 灰色砂
(褐灰色砂質土混) | 10. 淡灰褐色砂質土 | 17. 淡褐灰白色粘質土
(砂質土混) |
| 5. 褐灰色砂質土 | 11. 褐灰白色粘質土 | |
| 6. 褐灰色砂質土
(暗褐色土塊多含) | 12. 褐灰色砂質土 | |
| | 13. 淡灰黄褐色粘質土
(粗砂混) | |

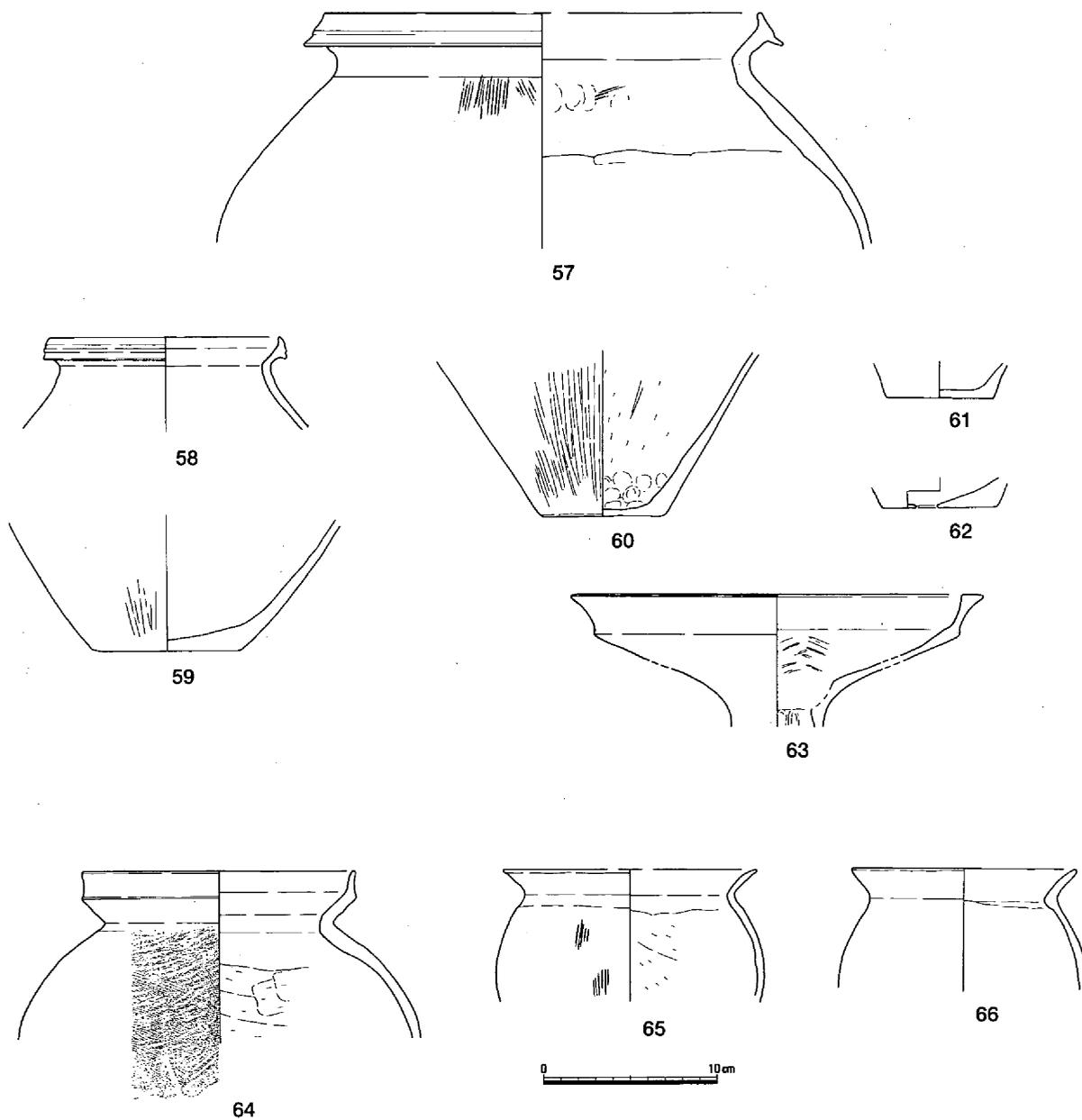
第46图 粘土探掘坑一Ⅲ区南侧道⑤— (1/100)

あっており、相互の切り合い関係は明確にしえなかった。

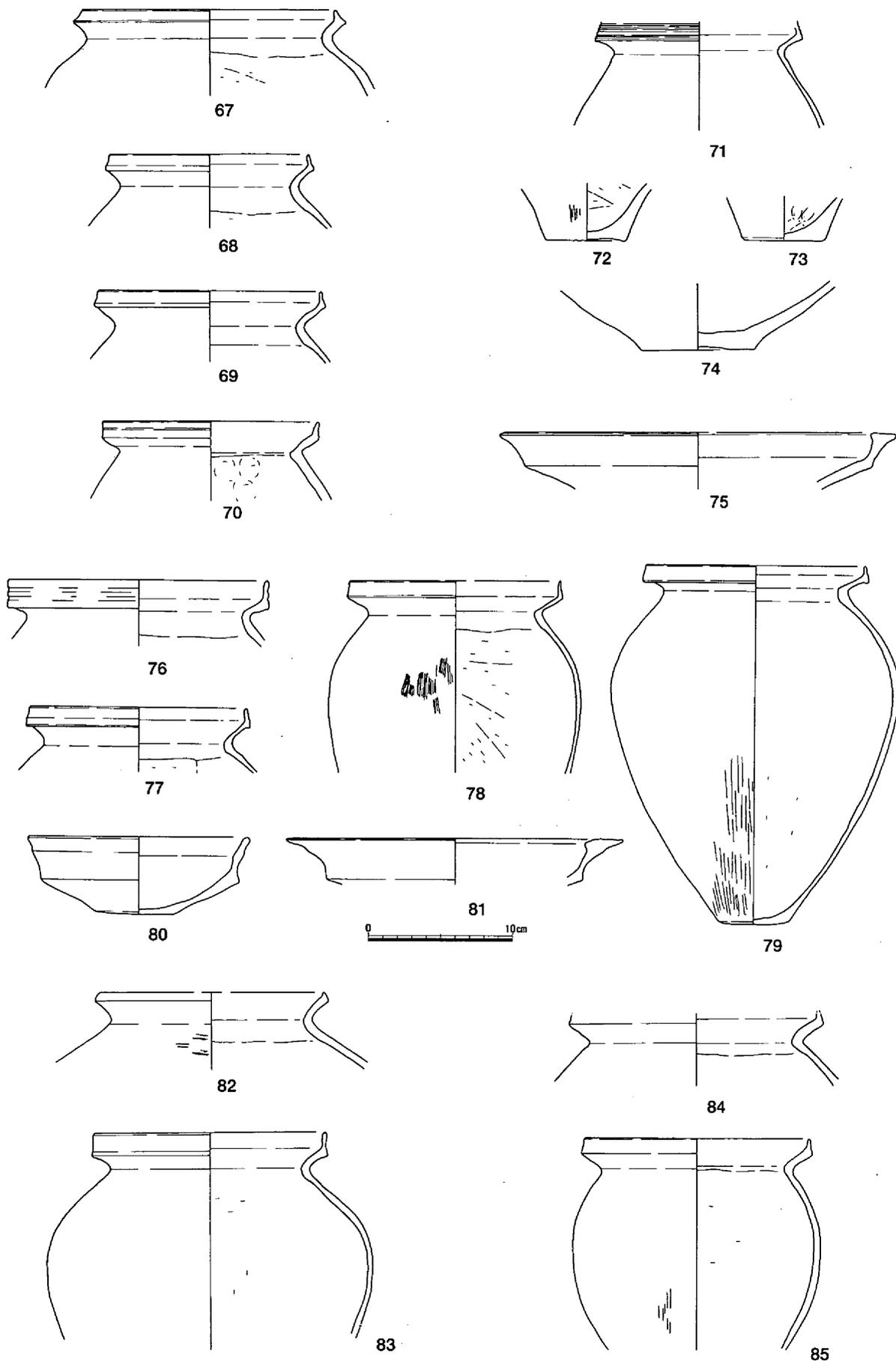
出土遺物には弥生時代後期初頭の57～63がある。このうち57～63が当調査区の西側から、古墳時代初頭に属する甕64～66があり、これらは東側から出土したものである。甕64はタタキの上位にハケメが施されている。内面は、体部上位に横方向のヘラケズリを行う。石器は石匙S1が出土した。

P13～P16区 (第5・6・38～41・48図)

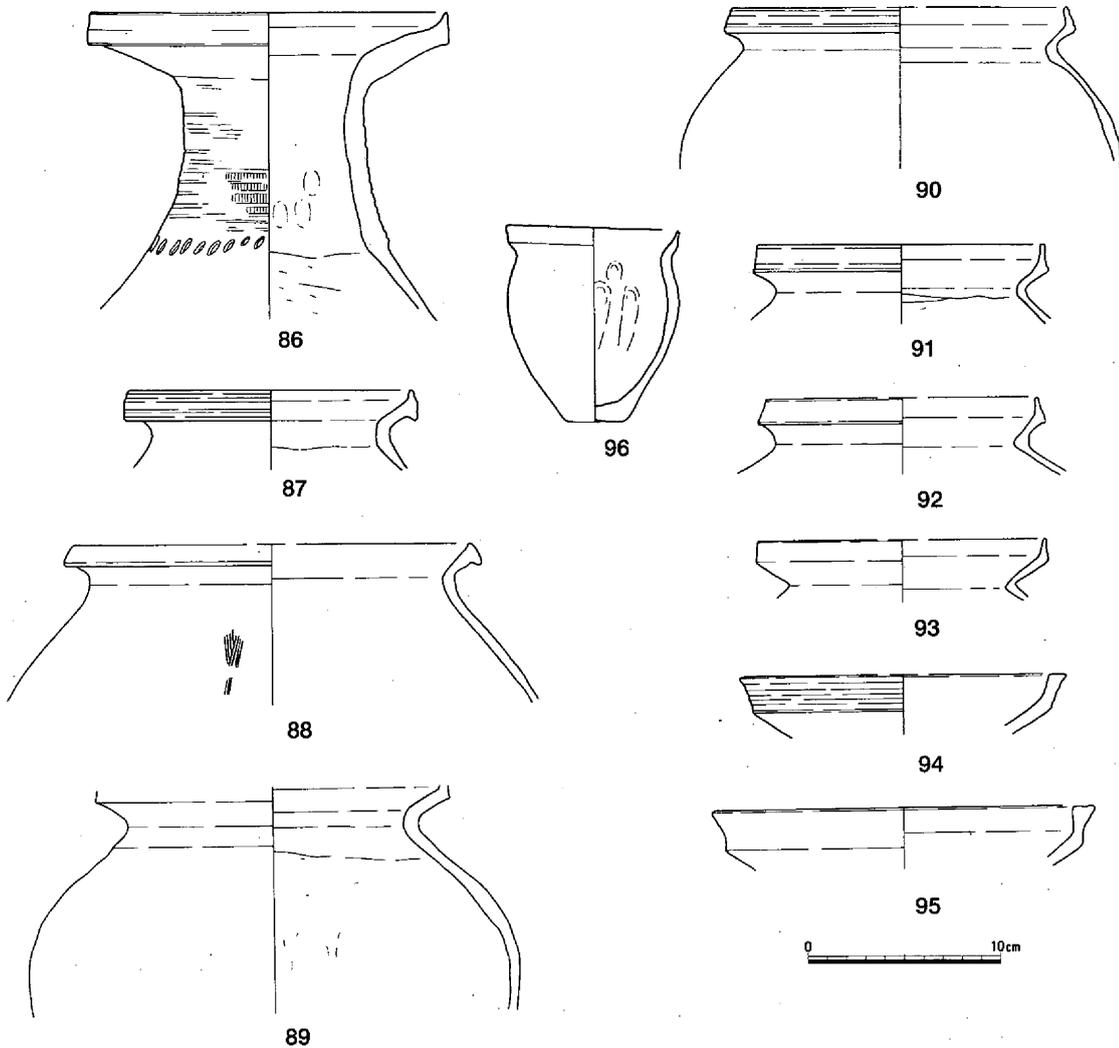
この調査区における土坑群の在り方には、3通りある。ほぼ全域に土坑が密集するP13・P14、疎らに分布するP15、南側半分にのみ密に存在するP16である。検出面からの深さは浅い所で約10cm、深い所で50cmを計る。P15を除きいずれも黄灰色粘土が土坑群の下部に堆積しており、当土坑群はこ



第47図 粘土採掘坑一Ⅲ区北側道一出土遺物⑥ (1/4)



第48图 粘土探掘坑—Ⅲ区P13·P14·P15·P16—出土遺物⑦ (1/4)



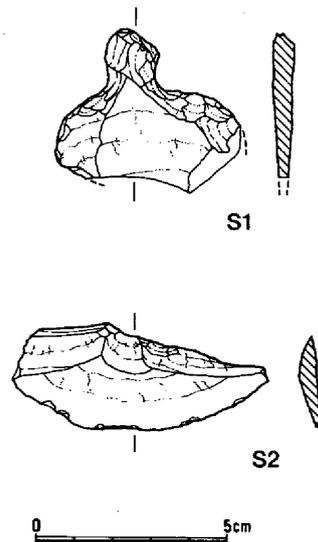
第49図 粘土採掘坑一Ⅲ区南側道一出土遺物⑧ (1/4)

の粘土を採取するために、掘られたものと想定される。出土遺物には弥生時代後期から古墳時代初頭の土器67～85がある。

南側道Ⅲ区 (第5・6・42～46・49図、図版66)

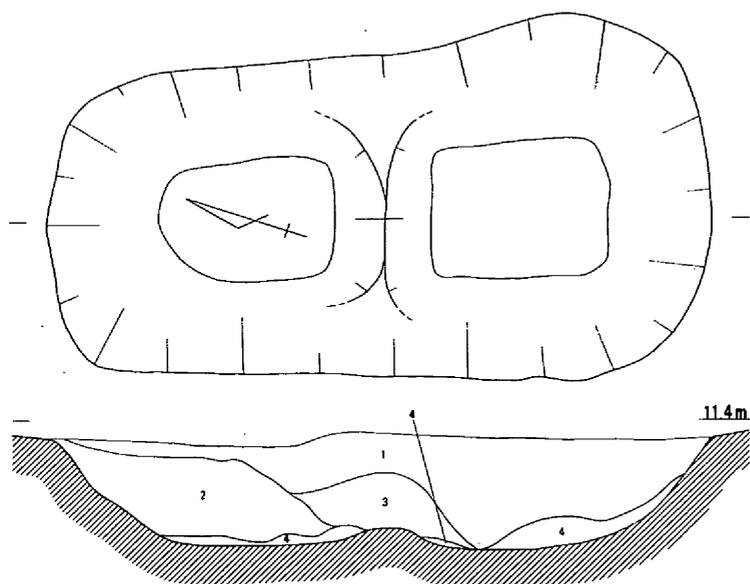
当区にも円・楕円形の土坑が重複し、密集している。P13・P15区の南においてはまばらな分布となる。検出面からの深さは約5cm～50cmを測る。黄褐色灰色粘土が土坑群下部に堆積している。出土遺物には86～96の弥生時代後期初頭に含まれる87の甕、94・95の高杯、後期中葉以降の壺86、甕90～93などの土器、サヌカイト製のスクレイパー状石器S2がある。

(蛭原)



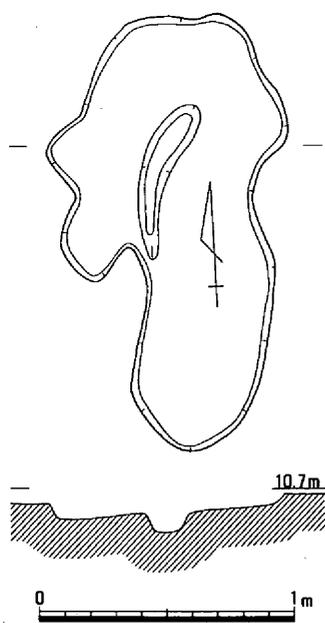
第50図 粘土採掘坑出土遺物⑨ (1/2)

(2) 土壇

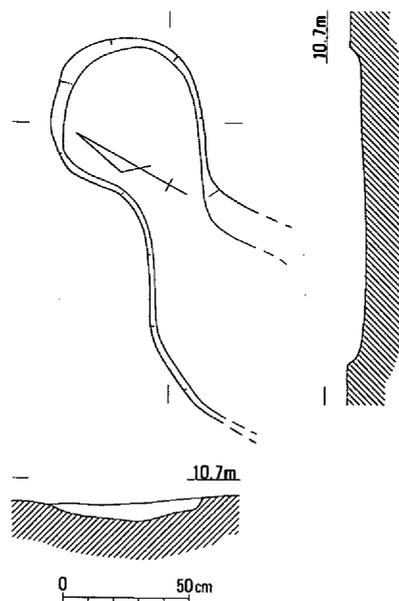


1. 淡灰黄褐色粘性砂質土
2. 灰黄褐色粘性砂質土
(淡灰褐色砂混)
3. 灰茶褐色粘質土
(淡灰褐色土塊含)
4. 淡灰褐色粘質土

第51図 土壇 1 (1/30)



第52図 土壇 2 (1/30)



第53図 土壇 3 (1/30)

土壇 1 (第5・51図)

Ⅲ区北側道の中央に位置する土壇である。平面形は、南北方向に長軸にする隅丸長方形を呈している。底部の在り方から、2基の土壇が切り合っていることも想定されたが、断面観察等から1基の土壇として報告する。規模は長さ2.6m、幅1.5m、深さ45cmを測る。当遺構の時期は、出土遺物が少量の土器細片のみしか出土しておらず判然としないが、弥生時代後期のものと思われる。

土壇 2 (第6・52図)

P17区の中央やや南東よりで検出した遺構である。南北方向に長い不整形を呈しており、長さ1.7m、幅95cm、深さ10cmを測る。土壇の中央部分に幅20cmの溝状に深くなる。時期については、遺物が少量で、明確ではないが、検出面より弥生時代後期と考えられる。

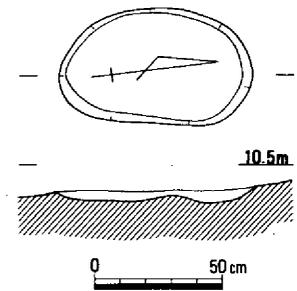
土壇 3 (第6・53図)

P17区の土壇 2 に隣接する位置で検出された。平面的には北東・南西方向の瓢箪型を呈している。時期は、出土遺物が微少な為判断

しかねるが、検出レベル・埋土とも土壌2と同じであることから弥生時代後期と思われる。

土壌4 (第6・54図)

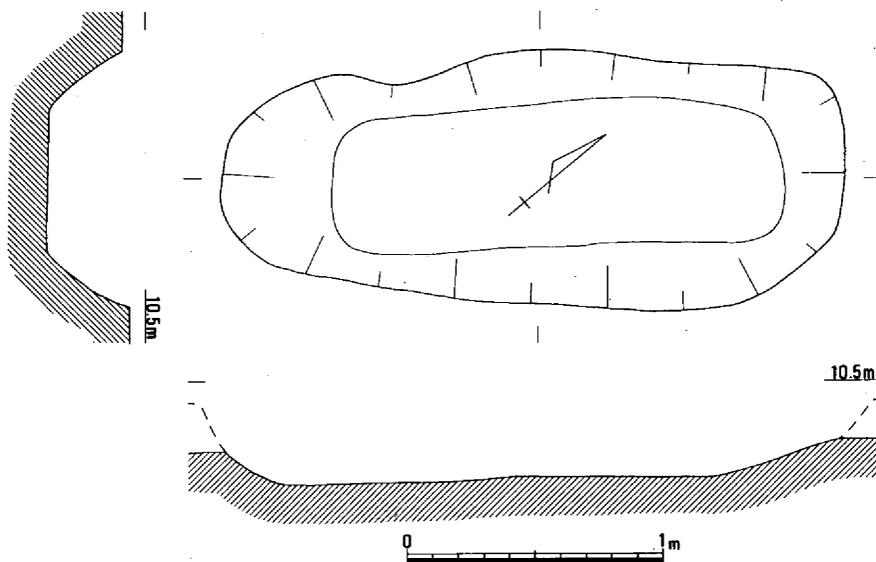
P18区の南西側において検出した遺構である。長さ75cm、幅45cmを測り、南北方向に長軸をもつ平面楕円形を呈す。検出面からの深さは極めて浅く5cmを測るのみであった。時期は弥生時代の範疇には収まると考えられる。



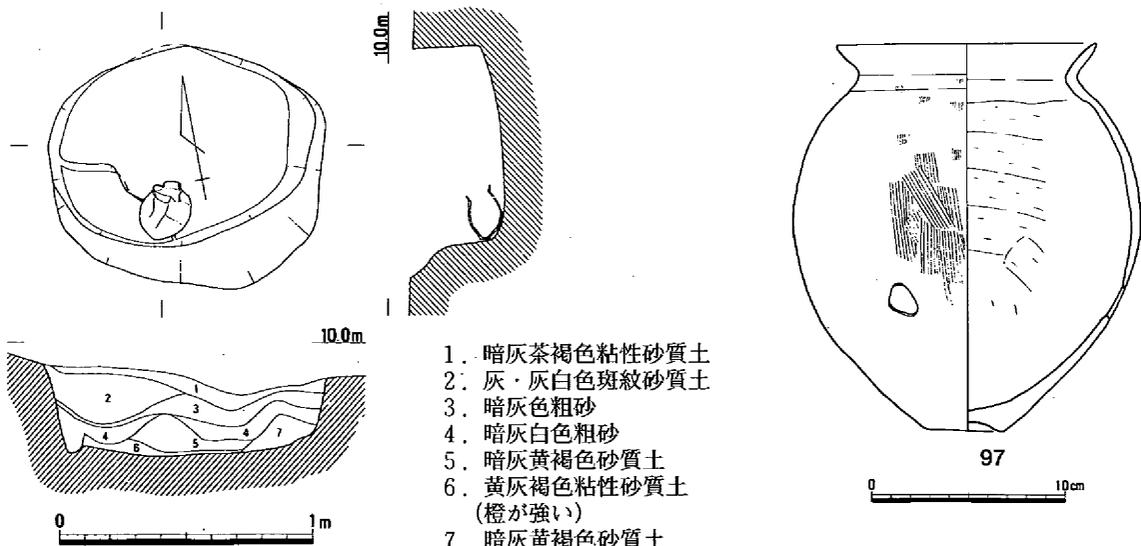
第54図 土壌4 (1/30)

土壌5 (第6・55図)

P18区の土壌4に接する位置で検出した。平面長方形を呈してお

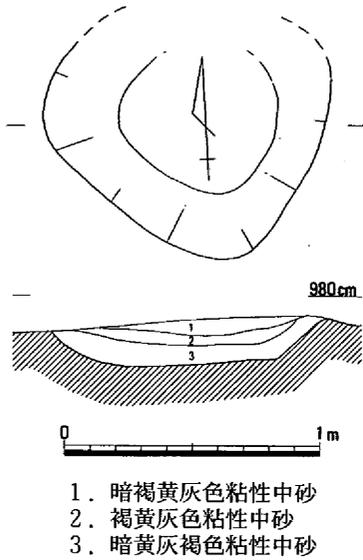


第55図 土壌5 (1/30)



1. 暗灰茶褐色粘性砂質土
2. 灰・灰白色斑紋砂質土
3. 暗灰色粗砂
4. 暗灰白色粗砂
5. 暗灰黄褐色砂質土
6. 黄灰褐色粘性砂質土
(橙が強い)
7. 暗灰黄褐色砂質土

第56図 土壌6 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第57図 土壌 7 (1/30)

1. 暗褐黄灰色粘性中砂
2. 褐黄灰色粘性中砂
3. 暗黄灰褐色粘性中砂

り、長さ2.45m、幅1mの規模である。深さは60cmを測り、底面は平らである。埋土は茶灰色系の砂のみで構成されていた。時期については、遺物が少量のため特定はできないが、弥生時代後期以前と思われる。

土壌 6 (第7・56図、図版67)

P27区の中央で検出した遺構である。規模は、1.1m×90cmの円形を呈し、深さは40cm程を測る。土壌の底部南隅に甕97が口縁部を北側に向けた状態で出土した。97はく字形の口縁部をもち、体部には穿孔がなされている。当遺構の時期は弥生時代後期後半に比定される。

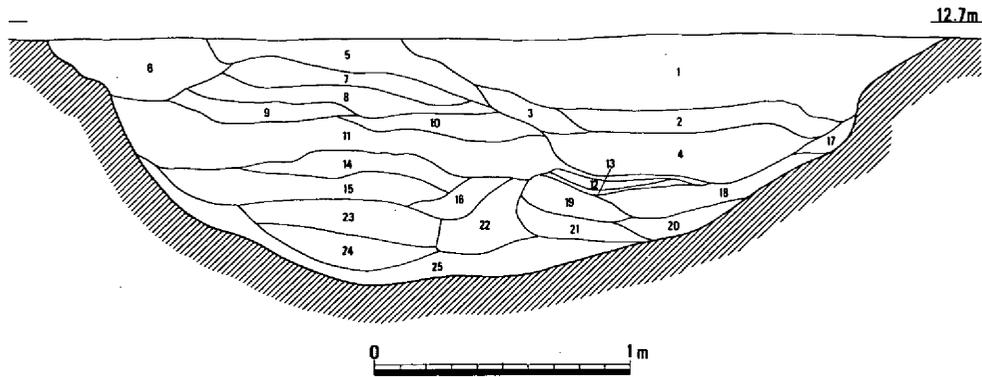
土壌 7 (第7・57図)

P30の北端部に位置する。側溝によって北側を切られている為、規模は不明であるが、概ね隅丸方形を呈すると思われる。出土遺物が皆無で時期の特定は困難であるが、検出面・埋土より弥生時代以前としたい。(蛭原)

(3) 溝

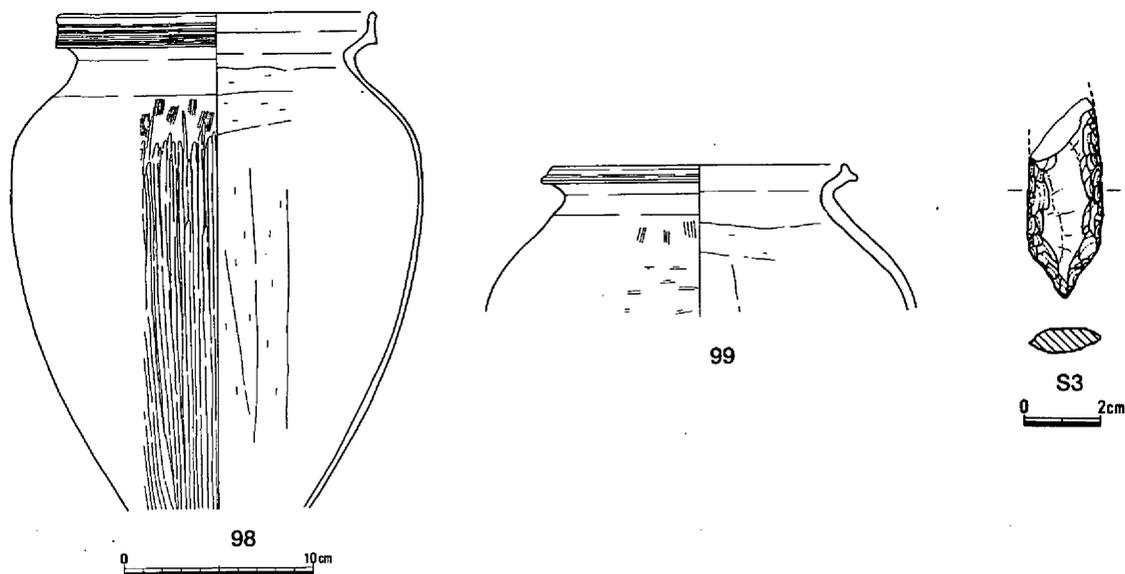
溝 1 (第3・4・58・59図、図版67)

この溝は、I区～II区にかけて検出され、I区北側道東端からP4、さらにP5の南西隅からII区



- | | | |
|-------------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1. 灰茶褐色砂質土 | 11. 灰色砂土
(茶色土混) | 19. 灰褐色砂土
(泥砂混) |
| 2. 灰色砂泥
(褐色土混) | 12. 灰褐色砂土
(茶色土混) | 20. 灰黄褐色砂泥
(茶色土混) |
| 3. 灰色泥砂
(褐色土混) | 13. 灰色粘土 | 21. 黄褐色砂泥
(茶色土混) |
| 4. 灰色砂土
(茶色土混) | 14. 灰褐色泥砂
(砂混) | 22. 黒色粘土 |
| 5. 黄茶褐色泥砂 | 15. 暗灰色粘質土
(茶色土混) | 23. 灰黄茶褐色砂泥 |
| 6. 灰褐色泥砂 | 16. 灰褐色砂土
(茶色土混) | 24. 黄褐色砂泥
(黒色土、茶色土混) |
| 7. 淡黄褐色粘土
(濃灰色土混、炭含) | 17. 灰色砂泥 | 25. 淡灰色泥砂
(暗灰土、茶色土混) |
| 8. 淡黄褐色砂土 | 18. 灰黄茶褐色砂泥
(黒色土混) | |
| 9. 淡灰黄褐色砂土 | | |
| 10. 淡黄茶褐色砂土 | | |

第58図 溝 1 (1/30)

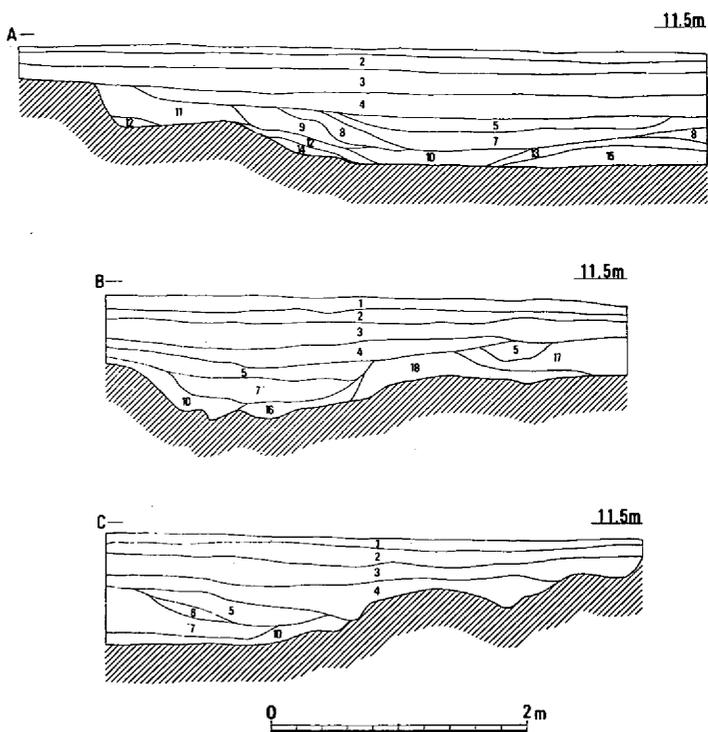


第59図 溝1出土遺物 (1/4・1/2)

南側道に至る。溝は、北西からやや蛇行気味に南東方向に流走し、Ⅱ区南側道で屈曲し南西方向に延びる。溝の幅は約350cm、深さは約96cmを測る。溝内の堆積は、基本的には粘土と砂が堆積し、第58図の断面図からは何回かの流路が存在している。また、この溝は、周辺に存在した粘土採掘坑を切っており、さらに98・99の土器が出土していることから、弥生後期中葉の後と考えられる。(中野)

溝2 (第5・60図)

Ⅲ区北側道の中央やや西において検出した溝である。北西から東へ向けて蛇行しながら流走している。最小幅は、およそ4m程を測るが、最大幅は、流域の多くが調査区外に出ていることもあり不明である。深



- | | | |
|--------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 黄灰褐色砂質土 (Mn含) | 6. 暗褐色粘性砂質土 (Mn含) | 13. 暗褐色粘土 |
| 2. 灰褐色砂質土 (Mn含) | 7. 暗褐色砂 | 14. 褐色粘性砂質土 |
| 3. 灰茶色粘質土 (Mn含) | 8. 茶黄褐灰白色粘土 (Mn・砂含) | 15. 茶褐色砂 |
| 4. 暗茶灰色粘質土 (Mn含) | 9. 暗褐色粘土 | 16. 茶黄褐灰白色砂質土 (Mn含) |
| 5. 淡茶褐色粘質土 (Mn・砂含) | 10. 黄褐色砂 | 17. 茶黄褐色粘質土 (Mn含) |
| | 11. 茶黄褐灰白色粘性砂質土 | 18. 茶黄褐色粘性砂質土 (Mn含) |
| | 12. 暗灰色粘土 | |

第60図 溝2 (1/60)

さは60cmとあまり深くなく、埋土は暗褐灰色系で構成されていた。出土遺物は、弥生時代後期の土器が若干出土したが、土壌1との関係からそれ以前と思われる。

溝3 (第5・6・61図)

Ⅲ区北側道の東部に位置する。流路はほぼ南北方向であるが、その殆どが調査区外に出ており、幅は不明である。深さも多量の湧水により確かめることが出来なかったが、1 m 50cm以上あることは確認している。P18区で検出した溝7と埋土等から同一の可能性はある。

溝4 (第5・62図)

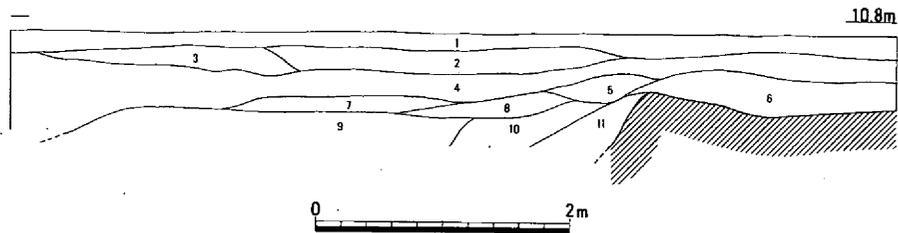
P12区の南西隅からⅢ区南側道にかけて検出した。幅約3 m、深さ90cmを測り、北西、南東方向に伸びる。出土遺物は、弥生時代後期の土器が少量確認されたが、出土状況等から周辺に存在する粘土採掘坑より先行すると想定される。

溝5 (第6・63図)

P17区の西端を南北に流走する溝である。幅50cm、検出面からの深さ10cmを測る。埋土は褐灰色砂の単一層である。時期は遺物が微量のため明確ではないが、弥生時代後期と思われる。

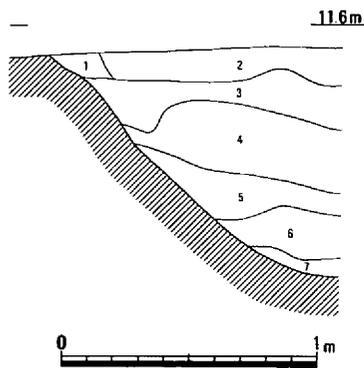
溝6 (第6・64図)

P17区の溝5に沿うように流路を形成する。検出面・規模とも溝5とほぼ同じである。溝内は褐灰色砂が埋まっている。時期は、弥生時代後期であろうか。



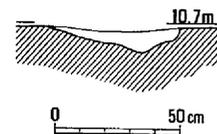
- | | |
|---------------|------------|
| 1. 灰茶褐色粘性砂質土 | 7. 灰褐色砂質土 |
| 2. 暗灰黄褐色粘性砂質土 | (礫混) |
| 3. 灰色砂質土 | 8. 淡灰黄褐色粗砂 |
| 4. 灰褐色粘性砂質土 | 9. 灰褐色粗砂 |
| 5. 淡灰黄褐色粗砂 | 10. 暗灰色粘質土 |
| (8層より薄い) | (礫混) |
| 6. 淡灰褐色粗砂 | 11. 褐灰白色粗砂 |

第61図 溝3 (1/60)

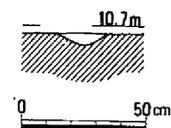


- | |
|-------------|
| 1. 褐灰色砂質土 |
| (Mn含) |
| 2. 淡灰色砂質土 |
| 3. 淡褐灰色砂質土 |
| 4. 褐灰色砂質土 |
| (Mn含) |
| 5. 灰色砂質土 |
| 6. 灰色粘性砂質土 |
| 7. 淡灰黄褐色粘質土 |
| (Mn含) |

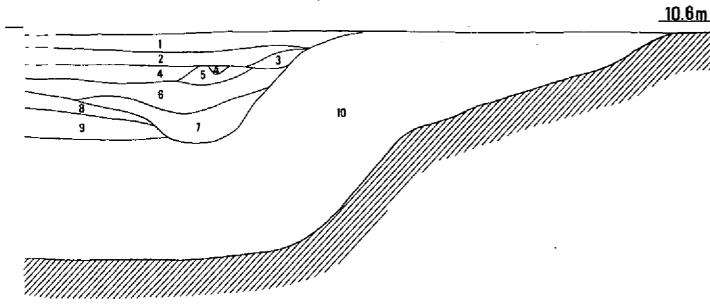
第62図 溝4 (1/60)



第63図 溝5 (1/60)

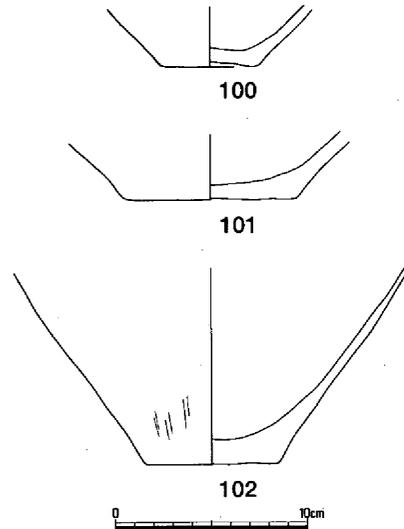


第64図 溝6 (1/60)



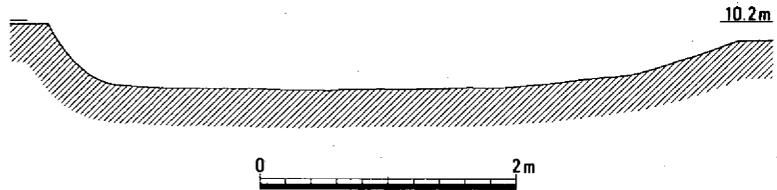
- | | |
|-------------|-----------|
| 1. 淡茶褐灰色砂質土 | 6. 黒灰色砂質土 |
| 2. 暗灰茶色砂質土 | (粘質土混) |
| 3. 淡褐灰色砂質土 | 7. 暗灰色粘質土 |
| 4. 暗灰色砂質土 | 8. 暗灰色砂 |
| (白色砂混) | 9. 淡灰色砂 |
| 5. 茶灰色砂質土 | 10. 淡褐灰色砂 |

第65図 溝7 (1/60)・出土遺物 (1/4)



溝7 (第6・65図)

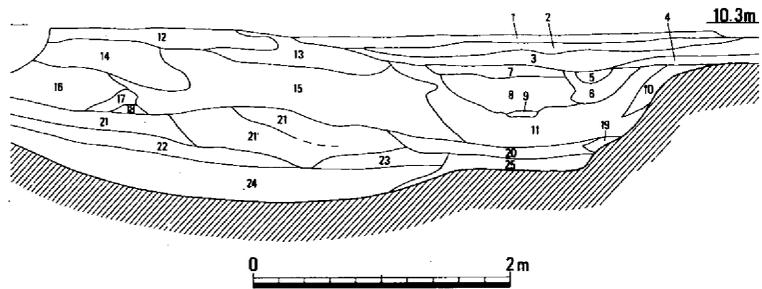
P18区を北西かあ南東に向けて流走する溝である。幅は北側半分が調査区外へ延びるため、不明であるが、検出面からの深さは、約1.8mを測る。埋土は上層部分が茶灰色系の砂質土に対して下層は褐灰色砂となっているが、堆積状況から1度埋没した後掘り直されたことが想定される。出土遺物には、100~102の弥生土器がある。当遺構の時期は弥生後期か。(蛭原)



第66図 溝8 (1/60)

溝8 (第6・66図)

IV区北側道西端で検出した溝。検出上幅550cm、下幅400cm、深さ30cmを測る。流れの方向は長さ3mしか検出していないため判断できない。埋積土は黒色粘質土で東に検出した溝9と同じ土である。溝9との関連が考えられる。遺物は全く出土していないが、弥生時代か。(浅倉)



- | | |
|-------------|---------------|
| 1. 茶灰色砂質土 | 11. 黒灰色粘質微砂 |
| 2. 暗褐灰色砂質土 | 12. 褐茶灰色砂質土 |
| 3. 灰茶褐色砂質土 | 13. 淡茶褐灰色粘質微砂 |
| 4. 黒灰色砂質土 | 14. 淡黄褐灰色砂 |
| 5. 暗灰色砂質土 | 15. 淡褐灰色粘質微砂 |
| 6. 淡褐灰色粘質微砂 | 16. 淡灰白色砂 |
| 7. 黒灰色砂質土 | 17. 淡褐灰白色砂 |
| 8. 灰黒色粘質微砂 | 18. 灰白色砂 |
| 9. 淡褐灰色粘質微砂 | 19. 灰白色粘質微砂 |
| 10. 灰白色粘質微砂 | (黒灰色砂質土混) |

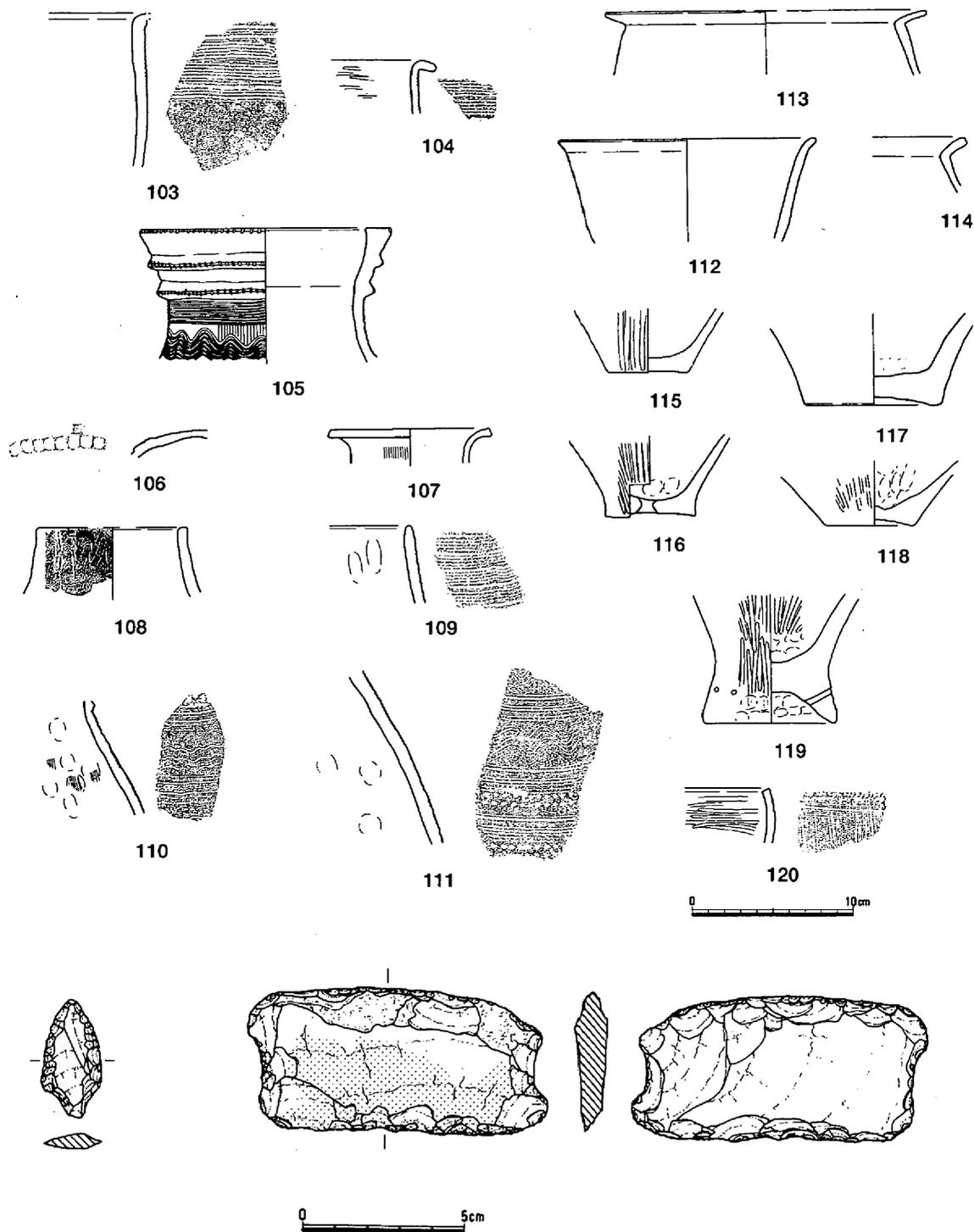
第67図 溝9 (1/60)

溝9 (第6・67・68図、図版67)

IV区北側道の中央部、P21区、IV区南側道西部において検出された溝である。ほぼ南北方向に流

路を形成し、幅約2.50m、深さ約1.30mの規模をもつ。また、堆積状況から後者が埋没した後に前者が機能していたと思われる。

遺物は弥生時代後期前半の土器103~120、石器S4、S5が出土している。土器は壺、甕、高杯、鉢などで、103・104は共に甕で、櫛描平行沈線文を口縁直下から胴部にかけて巡らしている。105は壺で口縁部には2条の刻目突帯をめぐらし、頸部には櫛描沈線文が施されている。108と109はい

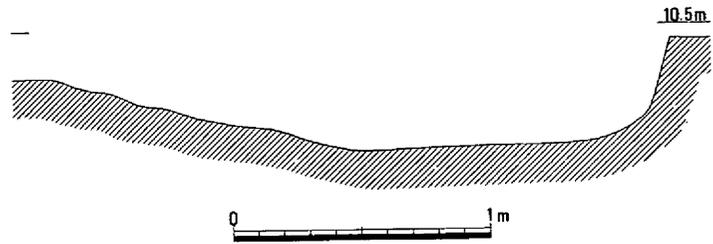


第68図 溝9出土遺物 (1/4・1/2)

ずれも無頸壺である。両方とも櫛描文であるが109は平行沈線文、108は波状文をそれぞれもつ。116は、甕の底部であるが穿孔がなされている。高杯120には、口縁端部に刻目が、口縁直下には櫛描文が施されており、内面は横方向のヘラミガキ調整をしている。石器はサヌカイト製の有茎式石鏃S4とサヌカイト製の打製石包丁S5が出土している。当溝の時期は弥生時代中期前半と推定される。(虻原)

溝10 (第6・69図)

IV区北側道東部の西端で検出した溝。調査区の幅は3mで、しかもこの溝は斜めに掛かっているため流れの方向は不明。検出面の上幅250cm、下幅120cm、深さ40cmを測る。

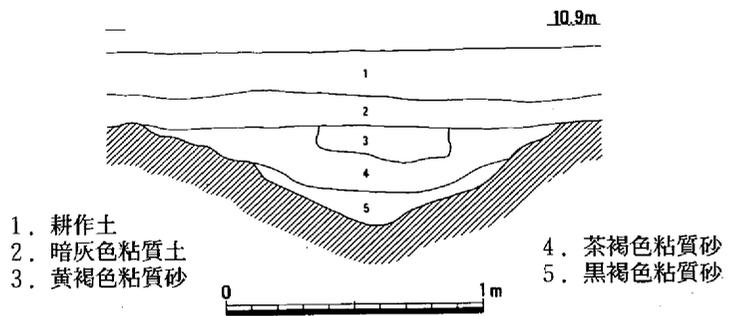


第69図 溝10 (1/30)

遺物はないが弥生か。

溝11 (第6・70図)

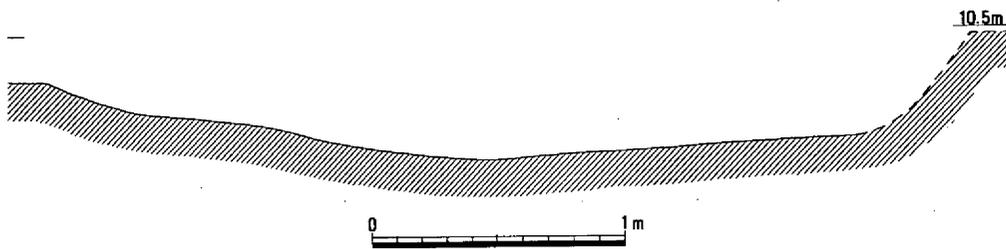
IV区北側道東部で検出した溝。検出面の上幅170cm、深さ40cm、長さ3mを測る。断面形はV字状を呈する。溝9とほぼ平行関係にある。流れの方向は現地形から考えて北西から南東であろう。



- 1. 耕作土
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 黄褐色粘質土
- 4. 茶褐色粘質砂
- 5. 黒褐色粘質砂

第70図 溝11 (1/30)

遺物は出土していないが、弥生



時代としておきたい。

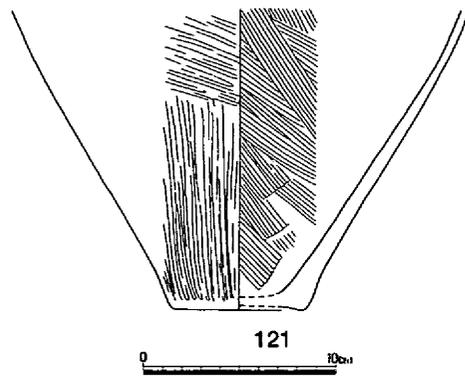
溝12 (第7・71図)

IV区北側道東部の東端で検出した溝。検出面の上幅370cm、下幅150cm、深さ40cm、長さ3mを測る。断面形はU字状を呈する。

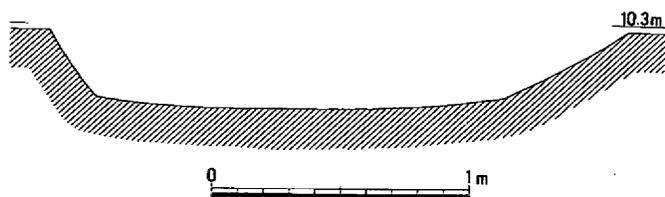
遺物としては、121の壺か甕の底部片が出土している。内面ハケ目、外面ヘラ磨き仕上げしている。弥生中期か。(浅倉)

溝13 (第6・72図)

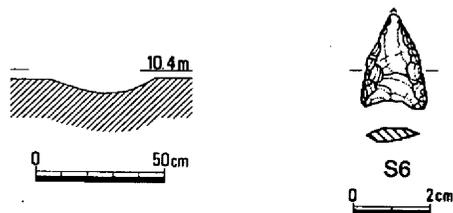
P21区溝9の東側を並走する位置にある



第71図 溝12 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第72図 溝13 (1/30)



第73図 溝14 (1/30) ・ 出土遺物 (1/2)

溝である。規模は、幅2.2m、深さ60cmを測る。底部はほぼ平坦で、壁は急傾斜で立ち上がる。遺物は出土しなかったが、埋土には淡褐灰色砂が入っていた。时期的には、弥生時代の範疇に収まると考えられる。

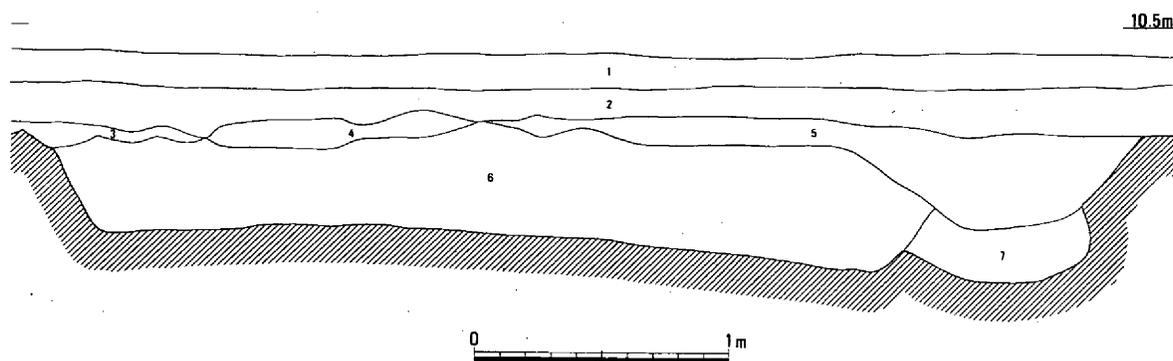
溝14 (第6・7・73図)

P22の南側において検出した遺構である。幅40cm、深さ6cmの大きさをもつが、調査区の東側では完全に消えてしまう。

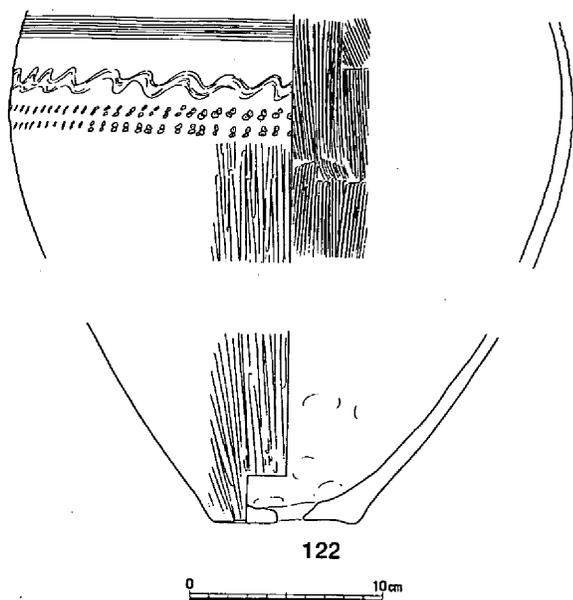
遺物は凹基式石鏃S6が出土したのみである。(蛭原)

溝15 (第7・74図)

IV区南側道東部で検出した溝。検出面



1. 耕作土
2. 淡灰褐色砂質土
3. 茶灰色粘質土
4. 灰白色粗砂
5. 淡茶灰色砂質土
6. 黄灰色砂
7. 茶灰色粘質土



第74図 溝15 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)

の上幅350cm、下層300cm、深さ40cm、長さ6mを測る。底面は平坦。流れの方向は北西から南東であろう。P24では検出できていない。溝12と同一溝と考えたい。

遺物は122の底部穿孔した壺が出土している。文様・調整から弥生中期。(浅倉)

溝16 (第8・75図)

V区北側道の中央に位置し、南北方向にのびる溝である。P29とV区南側道の溝20

と同一である可能性がある。検出面での幅は269cm、深さは29cmを測る。層位から中世以前と考えられるが、出土遺物が認められず時期の限定は困難である。

溝17 (第8・76図)

V区北側道の中央に位置し、南北方向にのびる溝である。溝16と平行しており、南側道に続くと思われる。検出面での幅は195cm、深さは14cmを測る。底面はほぼ平らで、海拔978cmを測る。層位から中世以前と考えられるが、出土遺物が認められず時期の限定は困難である。

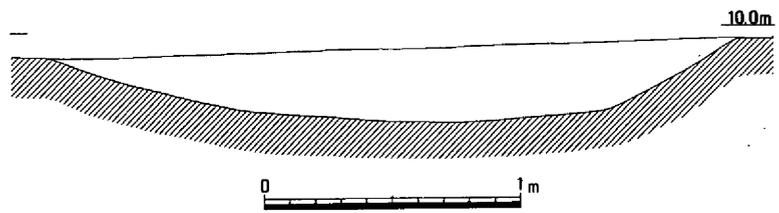
溝18 (第8・77図)

V区北側道の東端に位置し、南北方向にのびる溝である。V区南側道の溝23と同一である可能性がある。検出面での幅は265cm、深さは87cmを測る。底面は皿状で、海拔870cmを測る。埋土の砂から壺、小形壺と甕が出土している。

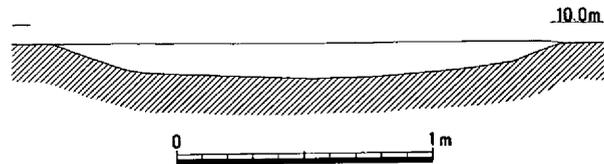
123は頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する。124は最大径が肩部に近く、内面はそこまで縦のヘラケズリ、頸部までは横のヘラケズリが認められる。125の底部は上げ底気味で、口縁部はく字状に屈曲する。口縁端部は面を有し、外方にのびる。時期は弥生時代後期初頭と思われる。

溝19 (第8・78図)

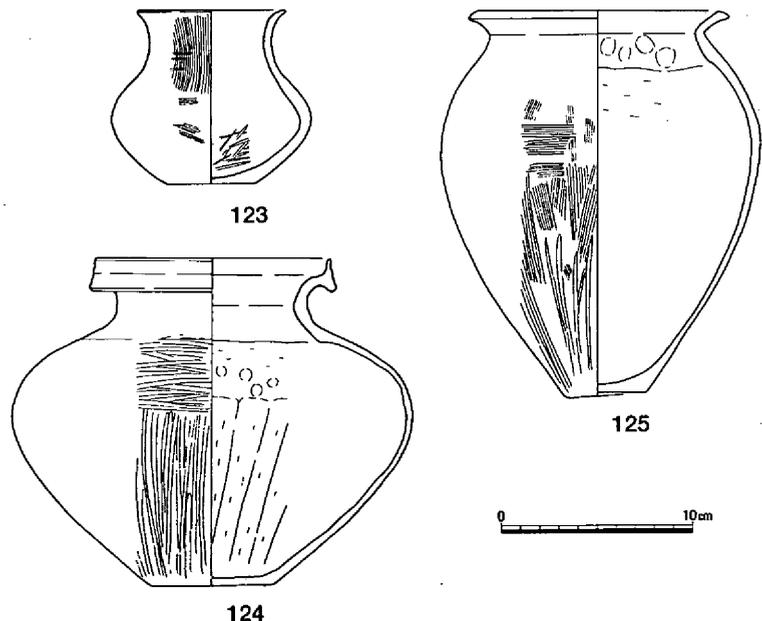
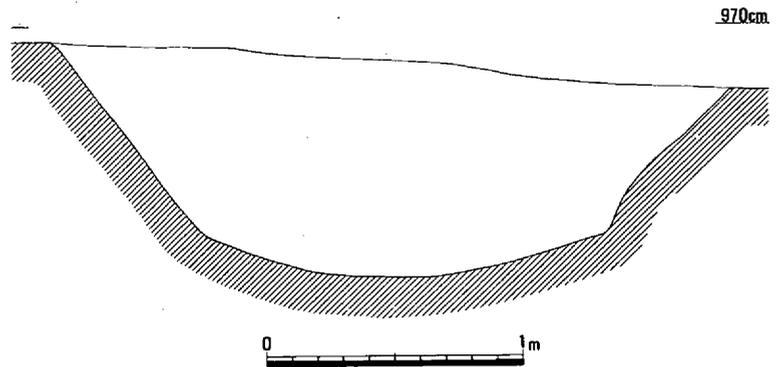
V区北側道の東端に位置し、南北方向にのびる溝である。検



第75図 溝16 (1/30)



第76図 溝17 (1/30)



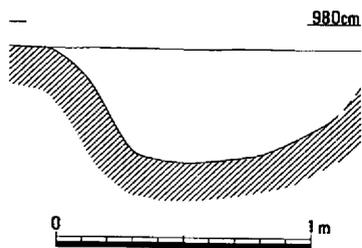
第77図 溝18 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)

出面での幅は120cm、深さは45cmを測る。底面はほぼ平坦で、海拔924cmを測る。時期は限定できないが、溝55に切られており、中世以前と思われる。

溝20 (第8・79図)

P29とV区南側道の中央に位置し、南北方向にのびる溝である。V区北側道の溝16と同一である可能性がある。検出面での幅は190cm、深さは20cmを測る。底面は皿状で、海拔973cmを測る。埋土から甕126が出土しているが、混入の可能性もある。時期を限定できないが、層位から溝66より古いことは確認されている。

(柴田)



第78図 溝19 (1/30)

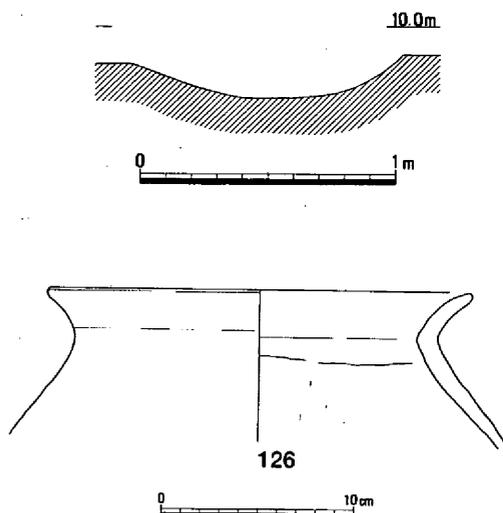
溝21 (第8・80図)

P32区で検出された溝である。調査区を北西から南東方向に横断する。規模は、幅約1.5m、検出面からの深さ35cmをそれぞれ測る。底は平坦な箇所をほとんどもない。時期は弥生時代か。

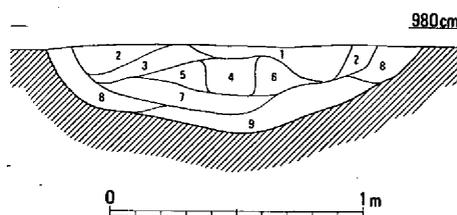
(蛭原)

溝22 (第8・81図)

V区南側道の東端に位置し、南北方向にのびる溝である。検出面での幅は274cm、深さは47cmを測る。底

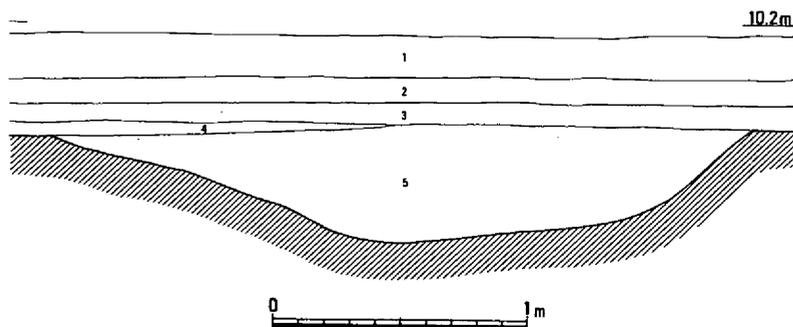


第79図 溝20 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



1. 黄灰白色粗砂
2. 淡褐黄灰色粘性細砂
3. 濃茶褐色中砂
4. 褐黄灰色粗砂
5. 淡褐灰黄色中砂
6. 褐黄灰色粗砂
7. 褐灰黄色粘性中～粗砂
8. 黄灰色粘性粗砂
9. 茶黄灰色粘性粗砂

第80図 溝21 (1/30)



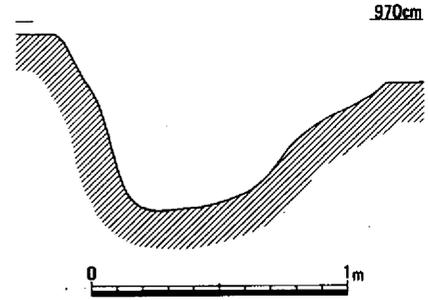
1. 耕作土
2. 灰黄褐色細砂
(粗砂・微砂混)
3. 灰白色粗砂
4. 暗褐色砂質微砂
(黒色強)
5. 灰白色粗砂

第81図 溝22 (1/30)

面は皿状で、海拔932cmを測る。出土遺物は認められず時期を限定することは困難であるが、層位から中世以前である可能性が高く、溝23より新しい。

溝23 (第8・82図)

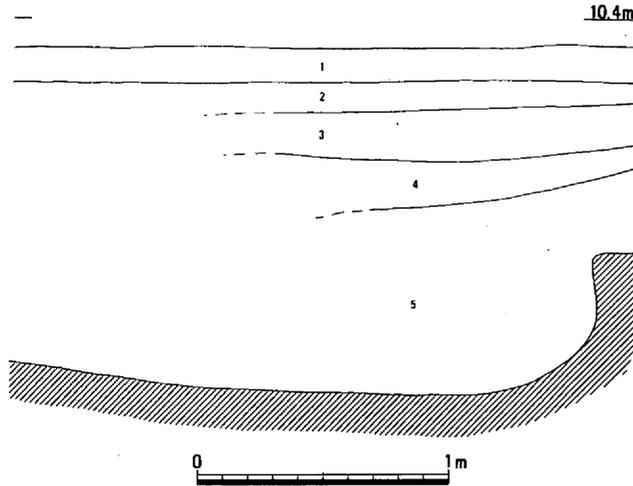
V区南側道の東端に位置し、南北方向にのびる溝である。V区北側道の溝18と同一である可能性がある。検出面での幅は127cm、深さは70cmを測る。底面は箱形に近く、海拔895cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は弥生時代後期初頭と思われる。



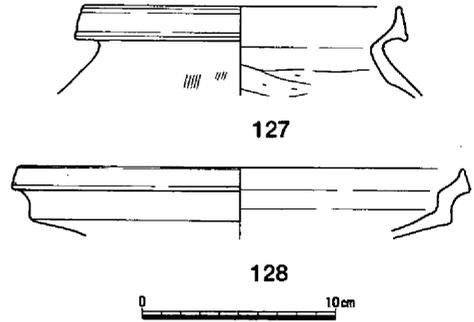
第82図 溝23 (1/30)

溝24 (第8・83図)

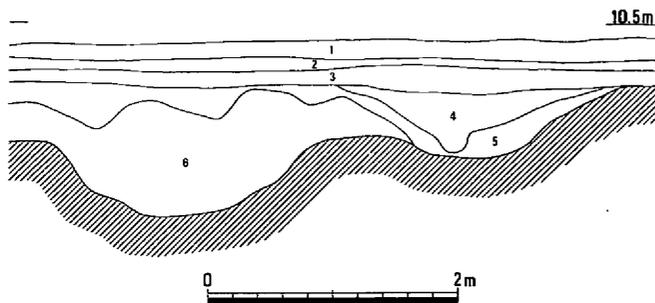
VI区北側道の西端に位置し、南北方向にのびる溝である。V区南側道の河道3の一部である可能性がある。西側の肩は明確に検出されていないが、溝55に切られた東西にのびる肩が相当すると思われる。おそらく水衝部ではないかと考えられ、やや挟れている。深さは57cmを測る。



- 1. 暗茶褐色土
- 2. 暗灰色粘質微砂
- 3. 暗灰色粗砂
- 4. 暗褐色砂質微砂 (粗砂混)
- 5. 粗砂



第83図 溝24 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



- 1. 暗茶褐色土
- 2. 暗灰色粘質微砂
- 3. 暗灰色粗砂
- 4. 茶褐色粘質微砂 (粗砂混)
- 5. 暗褐色砂質微砂 (粗砂混)
- 6. 粗砂 (溝25)

第84図 溝25 (1/30)

る。底面は平坦で、海拔890cmを測る。埋土の砂から甕と高杯が出土している。127の口縁部は上下に拡張し、内面については頸部までヘラケズリが認められる。128の口縁部は杯部から垂直に立ち上がったうえに屈曲し、端部は上方に拡張する。時期は弥生時代後期後葉と思われる。

溝25 (第8・84図)

Ⅵ区北側道の西端に位置し、南北方向にのびる溝である。Ⅵ区南側道の河道3に流れこむものと思われ、溝67に切られている。検出面での幅は215cm、深さは61cmを測る。底面は皿状で、海拔996cmを測る。出土遺物は認められないが、時期は溝24と同時期と思われる、そうであるならば弥生時代後期後葉と考えられる。

溝26 (第8・85図)

Ⅵ区北側道の西半に位置し、南北方向にのびる溝である。Ⅵ区南側道の河道3に流れこむものと思われ。検出面での幅は250cm、深さは54cmを測る。底面は皿状である。出土遺物は認められないが、

弥生時代より新しいと思われる。(柴田)

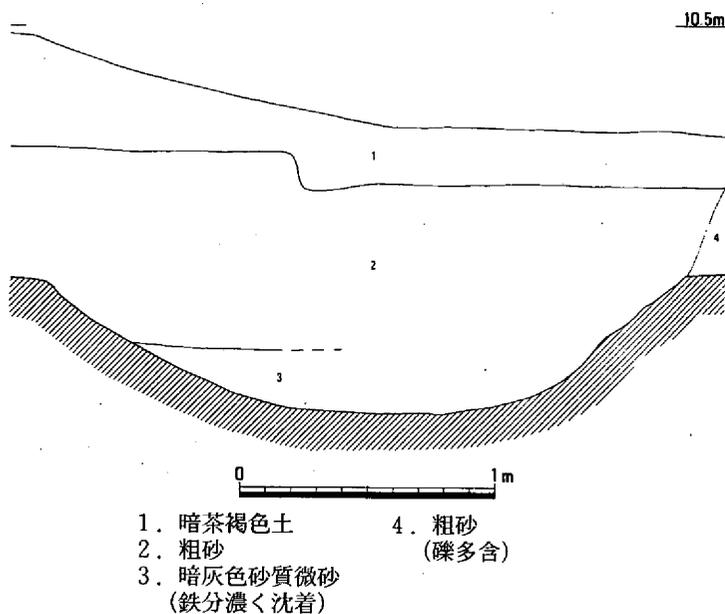
溝27 (第8・86図)

P34区の北側を東西方向に走る溝である。幅45cm、検出面からの深さ22cmほどを測る。底部は平坦ではなく、壁は急傾斜に立ち上がる。時期決定の目安となる出土遺物は皆無であったが、埋土に灰褐色系の粗砂が含まれることから、弥生時代の範疇には収まると想定した。

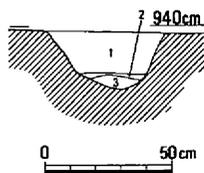
溝28 (第8・87図)

P34区を北東、南西方向に斜めに流走する溝で、規模は、幅70cm、深さ16cmを測る。断面形は逆台形を呈する。出土遺物は、土器細片のみであった。

当遺構の時期は溝27に切られていること、埋土が灰褐色粗砂であることから弥生時代か。(蛭原)

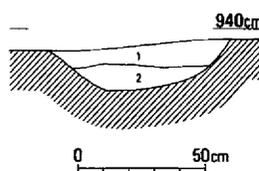


第85図 溝26 (1/30)



1. 淡灰褐色粗砂
(灰色粘性砂質土混)
2. 濃灰黄褐色粗砂
3. 灰色粗砂

第86図 溝27 (1/30)



1. 灰褐色粗砂
2. 暗灰褐色粗砂

第87図 溝28 (1/30)

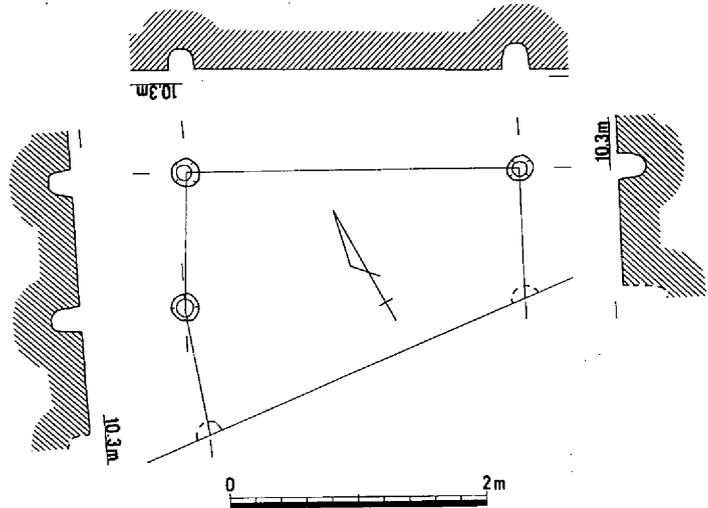
3. 古代以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

(第6・88図)

IV区南側道西部で検出した掘立柱建物で、1間×2間以上の長方形建物である。梁行1間は260cm、桁行1間は110cm、柱穴は直径30cm、深さ40cmを測る。柱穴内の土層は灰黒色粘質土。柱痕跡は検出できなかった。

遺物は全く出土していない。したがって時期は決定できないが、近世に属するようには思える。



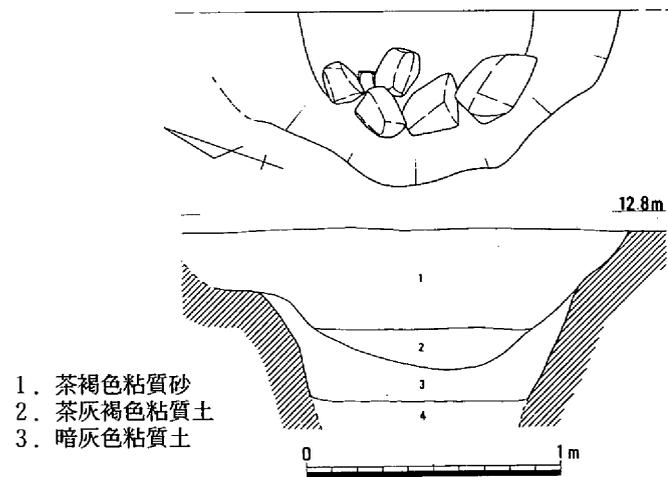
第88図 掘立柱建物 (1/60)

(2) 井戸

(第3・89図、図版68)

I区南側道東端部で検出した遺構で、現在使用中の用水土手に1/2隠れるため発掘は半分。平面形は円形か。断面形は逆台形を呈す。直径100cm、検出面からの深さ80cmを測る。埋土中には一辺30cm大の角礫が5個入っていたが、井戸側石か。

遺物は近世平瓦が出土したに過ぎない。(浅倉)



- 1. 茶褐色粘質砂
- 2. 茶灰褐色粘質土
- 3. 暗灰色粘質土

第89図 井戸 (1/30)

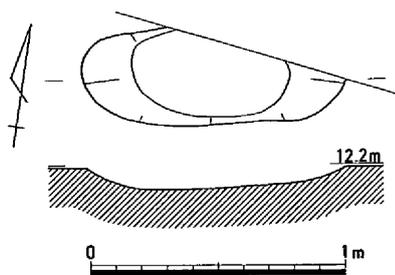
(3) 土壌

土壌8 (第4・90図)

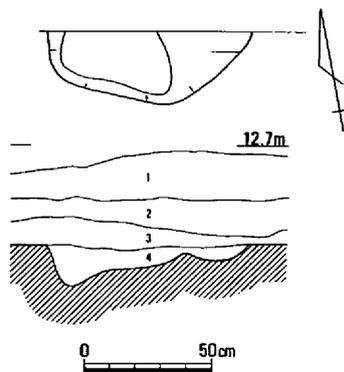
この土壌は、II区中央のP7に検出された。土壌の一部は調査区害であるが、長さは約105cm、幅は40cm前後と推定される。出土遺物はない。

土壌9 (第4・91図)

土壌9は、II区中央のP7に位置し、土壌8の東2mに検出された。土壌の北側は調査区外のため、

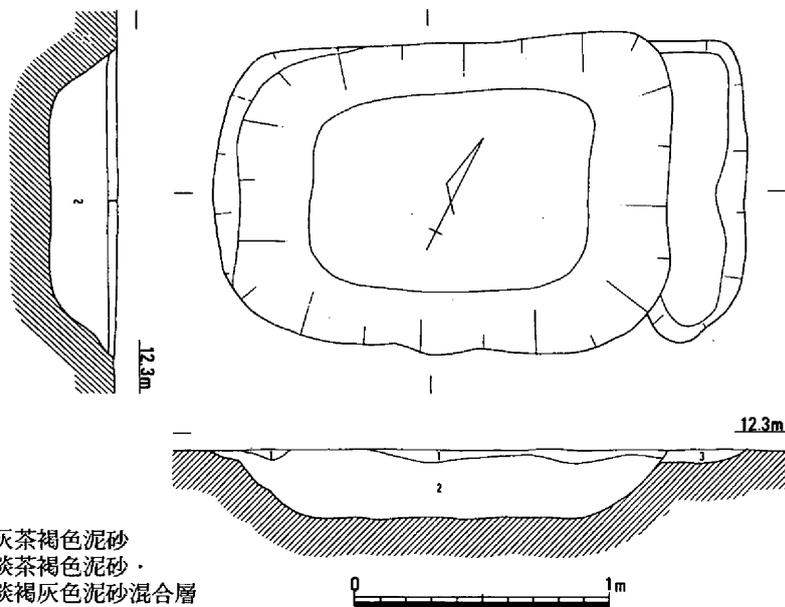


第90図 土壌8 (1/30)



1. 耕作土
2. 淡灰色砂泥
(黄色土混)
3. 灰黄色砂泥
4. 暗灰黄色砂質土

第91図 土壌9 (1/30)



1. 灰茶褐色泥砂
2. 淡茶褐色泥砂・
淡褐色泥砂混合層
3. 灰茶褐色泥砂

第92図 土壌10 (1/30)

出土遺物には亀山焼の細片があり、当遺構の時期は中世と判断される。

土壌12 (第6・7・94図)

P19区の南側に位置する土壌である。平面形は楕円形を呈し長軸1.15m、短軸85cm、深さ35cmをそれぞれ測る。底部はやや平坦で壁面は急傾斜で立ち上がる。埋土には暗灰褐色土が入っている。遺物は皆無であったが、検出面、埋土より近世の所産と思われる。

土壌13 (第6・7・95図)

P19の土壌12と接する位置で検出された。大半を側溝等によって切られており規模は不明である。遺物は含まれていなかったが、暗灰褐色土が入っており近世と想定される。

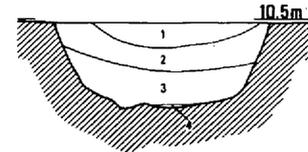
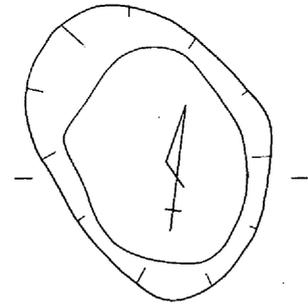
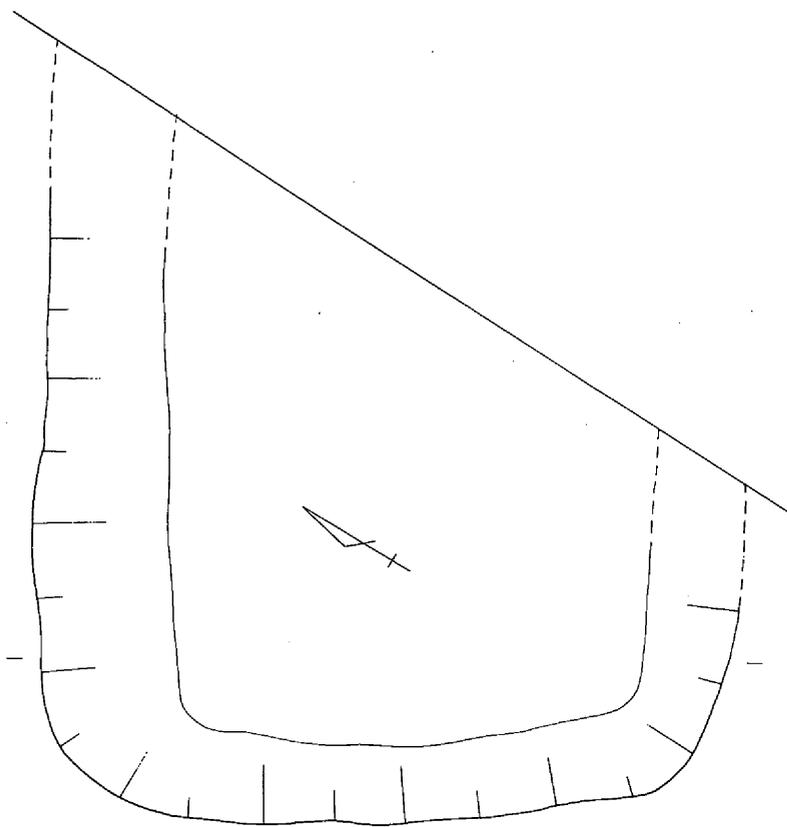
長さは80cm前後と推定されるが幅は不明である。土壌の底部は、凹凸が激しく、深さは約14cmを測る。出土遺物はない。

土壌10 (第4・92図)

土壌10は、土壌8・9と同様にⅡ区中央のP7に位置し、P7の中央部に検出された。長さは約178cm、幅約123cmを測り、隅丸の長方形を呈する。深さは約27cmで、断面形は逆台形を呈する。出土遺物は少量検出された。(中野)

土壌11 (第5・93図)

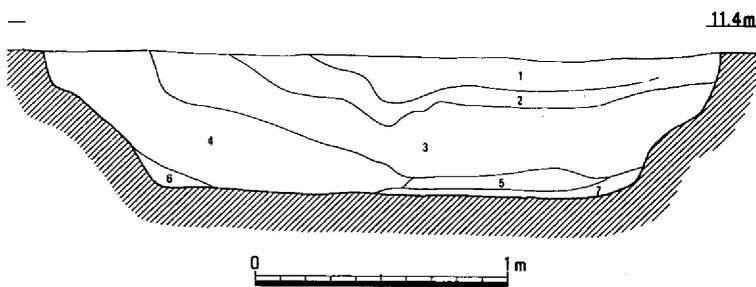
P12区の東側において検出された土壌である。遺構の東側が調査区外に出るため、規模は不明である。平面形は恐らく東西に長軸を持つ長方形を呈すると思われる。深さは55cmを測る。



0 1m

1. 暗灰褐色粘性砂質土
2. 暗灰茶褐色粘性砂質土 (礫含)
3. 黒灰褐色粘性砂質土
4. 淡灰褐色粗砂

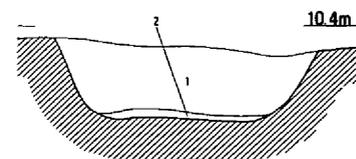
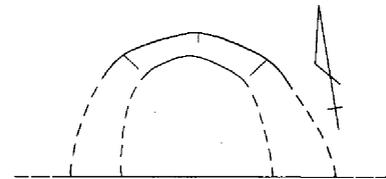
第94図 土壇12 (1/30)



0 1m

- | | |
|--------------------------------|------------------|
| 1. 褐灰色砂質土 | 5. 灰色砂質土 |
| 2. 明褐灰色砂質土 | (淡茶灰色砂質土塊含) |
| 3. 淡茶灰色砂質土 (Mn含) | 6. 淡茶灰色砂質土 (Mn含) |
| 4. 褐灰色砂質土 (淡茶灰色砂質土・淡灰黄褐色砂質土塊含) | 7. 淡灰色粘質土 |

第93図 土壇11 (1/30)



0 1m

1. 暗灰茶褐色粘性砂質土
2. 黒灰茶褐色粘性砂質土

第95図 土壇13 (1/30)

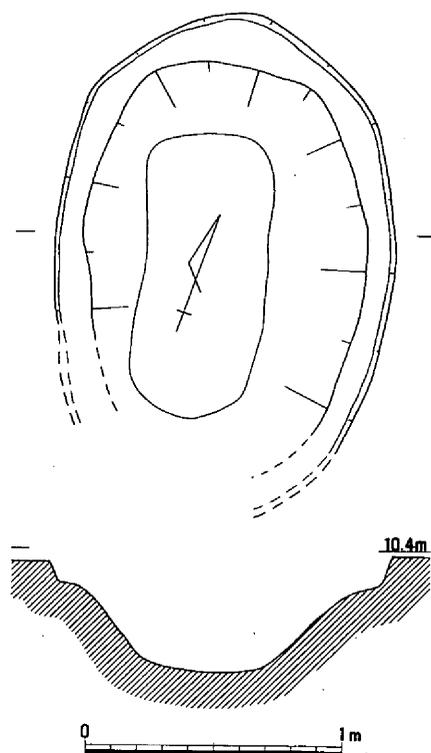
土壇14 (第7・96図)

P23区の南側で検出された平面楕円形を呈する遺構である。一部をきられているため正確な規模は不明であるが、恐らく長軸2m、短軸1.35mを測ることが予想される。断面形は壁が2段に落ち、底はほぼ平坦である。時期は中世と考えられている。なお当土壇内からは少量の骨片が出土した。

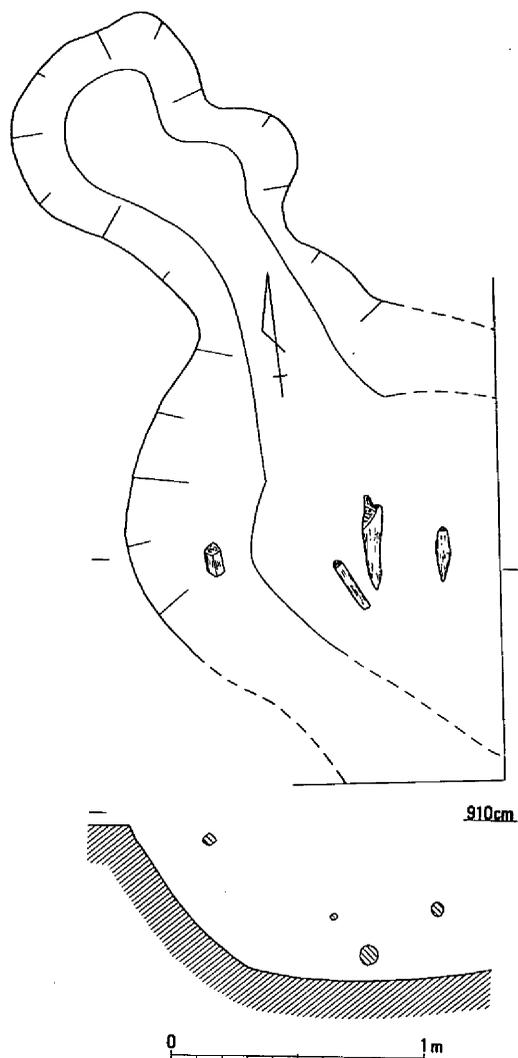
土壇15 (第9・97図)

P35区の南東隅で検出された土壇である。南東隅を側溝によって切られているため全容は不明であ

る。不整形の平面をもち、深さ60cm弱を測る。木杭が壁面に1本、底部に3本の計4本打ち込まれている。杭以外の出土遺物は土器細片があるのみで、時期は明確ではないが、近世のものと思われる。(姥原)



第96図 土坑14 (1/30)



第97図 土坑15 (1/30)

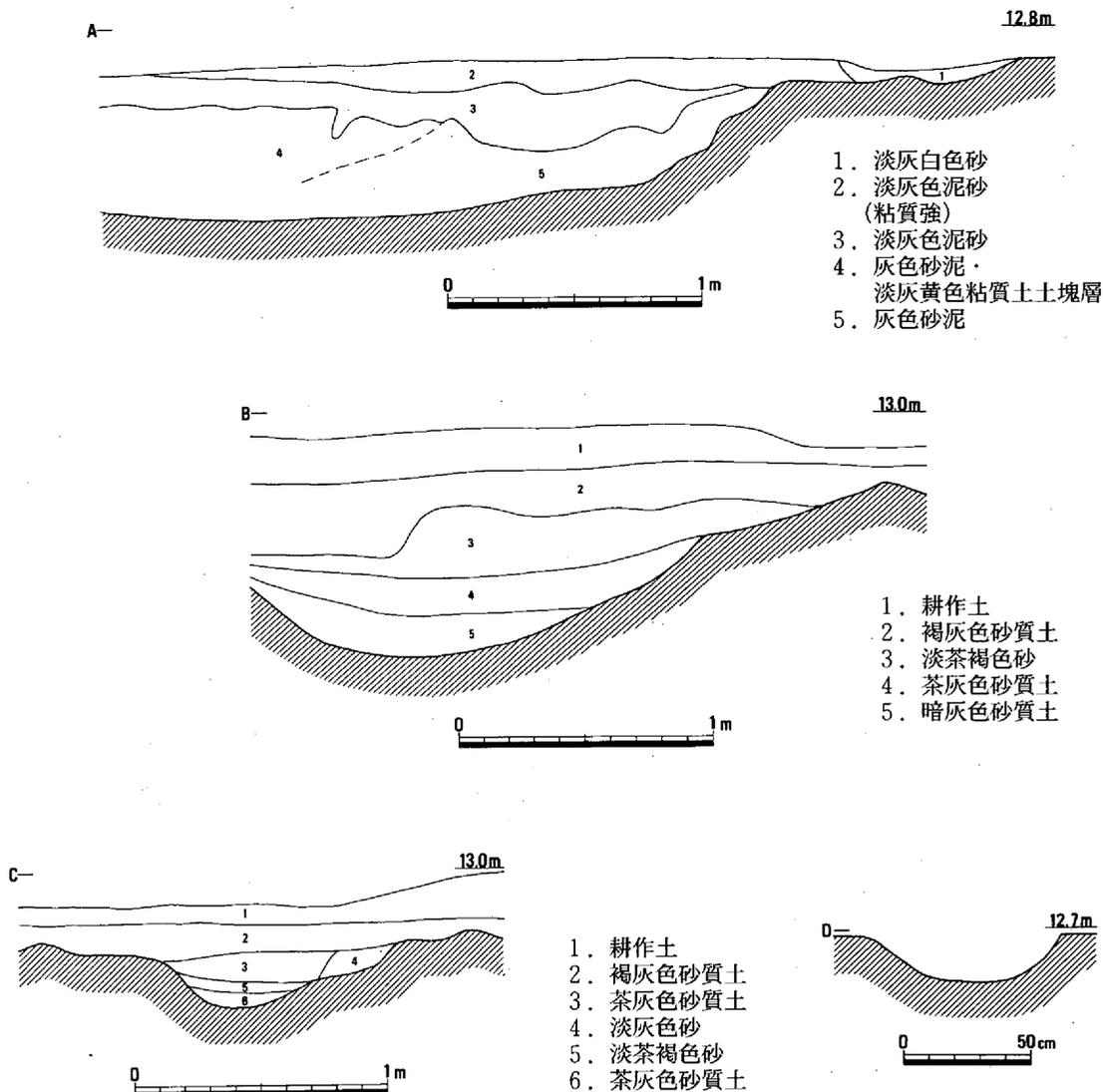
(4) 溝

溝29 (第3・4・98図)

この溝は、I区の南・北側道およびP3で検出された。溝は、ほぼ北北西から南南東方向に流走しており、現在の水路、道路などと方位が一致している。溝の規模は、溝の西側の肩口が検出されていないため明らかではないが、約400cm以上と考えられる。深さは約60cmを測る。溝底部は凹凸があり、数条の溝が存在すると考えられる。溝内は砂層が堆積しており、洪水等により埋没したと思われる。出土遺物は少量検出でき、鎌倉時代前半期の特徴を示していた。このことは、中世前半期と現在の地割が合致することが明らかで、後述する溝も同様であった。

溝30 (第3・99図)

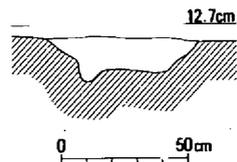
溝30は、I区の溝29の東側に検出された。溝は、溝29から派生するように検出され、溝内には溝29と同様に砂層が堆積していた。このような状況からみて、洪水時に溝29から派生した溝と考えられる。溝の幅は約30cm、深さ約15cmを測る。時期は溝29と同様であろう。(中野)



第98図 溝29 (1/30)

溝31 (第3・100図)

この溝は、I区のP3に位置し、P3の北端に一部検出された。溝はほぼ東西方向に確認でき、溝29に切られている。溝の規模は不明、溝内には茶褐色砂が堆積していた。溝は、溝29より古いものの、さほど時期差はないと思われる。



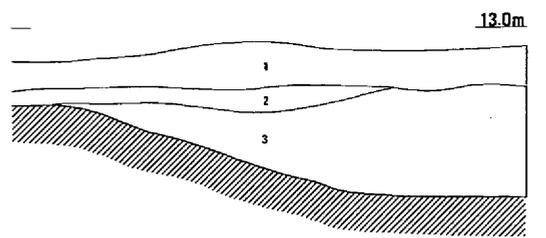
第99図 溝30 (1/30)

溝32 (第3・101図)

溝32は、I区の南側道、P3に位置し、溝29の東側に隣接して検出された。溝29とはほぼ平行しており、溝30から連続するものと考えられる。溝の幅は不定形で、深さは約15cmを測る。溝内の堆積も溝29・30と同様な砂層で埋没している。時期は中世。

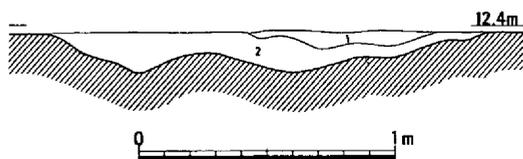
溝33 (第4・102図)

この溝は、II区東端のP4に検出された。溝は、溝29と同様に北北西から南南東に流走し、溝33の西に存在する現代水路とも方向が一致する。幅は約70cm、深さ約15cmを測る。溝内には砂層が堆積す



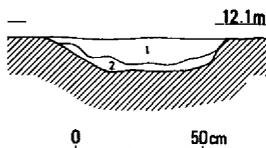
1. 耕作土 2. 灰黄色砂質土 3. 茶褐色砂

第100図 溝31 (1/30)



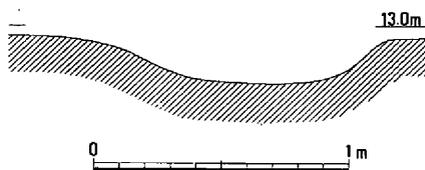
1. 灰褐色砂質土 2. 灰黄色砂

第101図 溝32 (1/30)

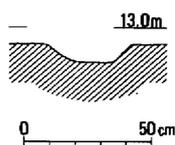


1. 淡茶灰色砂
2. 淡灰色泥砂

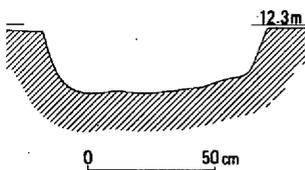
第102図 溝33 (1/30)



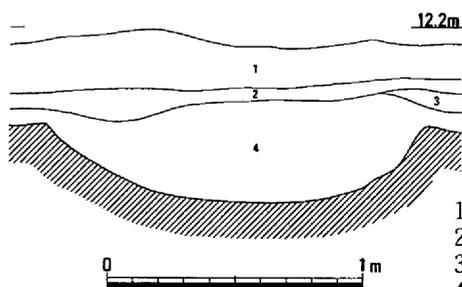
第103図 溝34 (1/30)



第104図 溝35 (1/30)



第105図 溝36 (1/30)



1. 耕作土
2. 暗灰色粘質土
3. 暗黄茶色粘質土
4. 茶褐色粗砂

第106図 溝37 (1/30)

る。溝29・30・32と同時期であろう。(中野)

溝34 (第3・103図)

I区南側道西区で検出した溝。検出上幅100cm、下幅60cm、深さ15cmを測る。

遺物としては須恵器高杯の脚部片がある。この須恵器の時期は古墳時代であるが、溝の時期ははるかに新しいと考えたい。

溝35 (第3・104図)

I区南側道西区で検出した溝。検出上幅50cm、下幅15cm、深さ5cmを測る。溝34の途中から分岐している。

したがって、時期は溝34と同一と考えられる。

溝36 (第4・105図)

II区北側道西区で検出した溝。検出上幅85cm、下幅70cm、深さ25cmを測る。流れの方向

は西北西から東南東である。

遺物は出土していないが、土層と土壌を切る関係から時期は中世としたい。

溝37 (第4・106図)

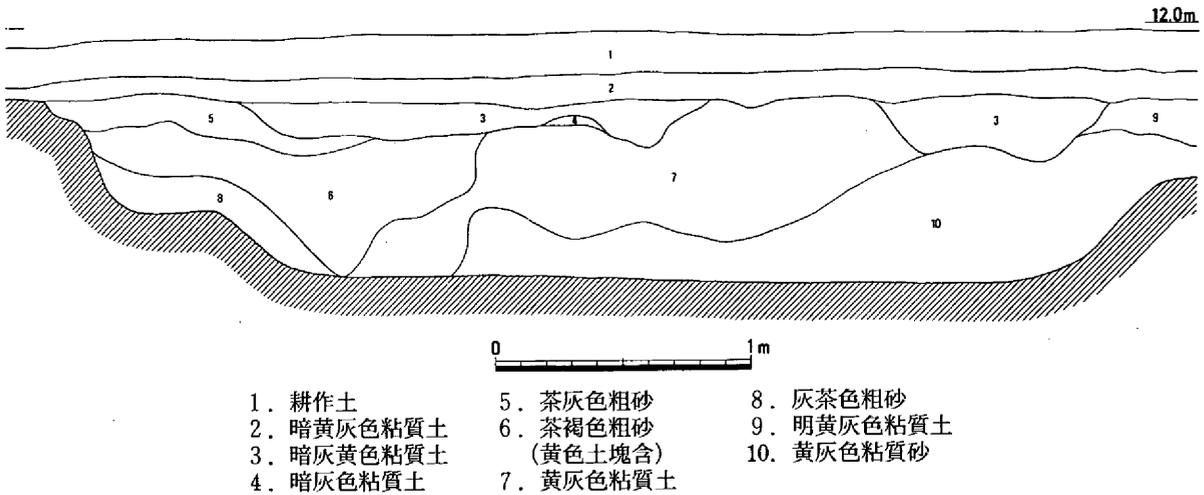
II区北側道東区の西端で検出した溝。検出上幅150cm、下幅70cm、深さ30cmを測る。流れの方向は北西から南東であろう。方向・位置から溝42と同一溝とも考えられる。

時期は中世と考えたい。

溝38 (第4・5・107図)

II区北側道東区の中央で検出した溝。平面形では逆八の字形を呈する。検出上幅北側で430cm、南側で150cm、下幅北側で270cm、南側で50cm、深さ30cmを測る。流れの方向は北から南であろう。方向・位置から溝44と同一溝とも考えられる。

時期は中世と考えたい。(浅倉)

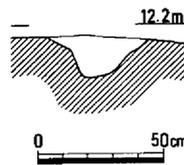


- | | | |
|------------|---------------------|------------|
| 1. 耕作土 | 5. 茶灰色粗砂 | 8. 灰茶色粗砂 |
| 2. 暗黄灰色粘質土 | 6. 茶褐色粗砂
(黄色土塊含) | 9. 明黄灰色粘質土 |
| 3. 暗灰黄色粘質土 | 7. 黄灰色粘質土 | 10. 黄灰色粘質砂 |
| 4. 暗灰色粘質土 | | |

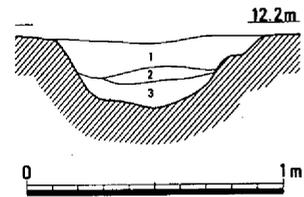
第107図 溝38 (1/30)

溝39 (第4・108図)

溝39は、Ⅱ区西端のP 5に検出された。溝の方向は、溝29・33などと同様に北北西から南南東に延びる。幅は約33cm、深さは約4cmを測る。出土遺物は認められなかったが、溝29・33と同時期の鎌倉時代前半期に含まれるものである。



第108図 溝39 (1/30)

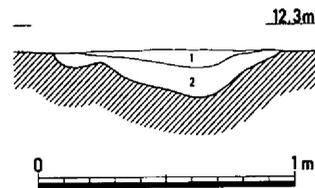


1. 淡灰泥砂
2. 淡灰褐色砂
3. 淡灰褐色細砂

第109図 溝40 (1/30)

溝40 (第4・109図)

溝40は、Ⅱ区西端のP 5に位置し、溝39の東約2mに検出できた。溝33・39などと平行している。幅は約80cm、深さ約33cmを測る。溝内は砂層が堆積していた。出土遺物は少量検出でき、中世と考えられる。

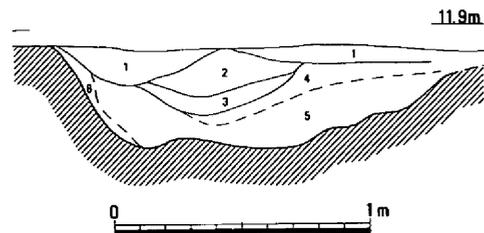


1. 灰褐色泥砂
2. 灰色砂

第110図 溝41 (1/30)

溝41 (第4・110図)

この溝は、Ⅱ区中央のP 7に検出された。溝は、やや蛇行しており、北西から南東方向に延びる。また、北側道の溝36に接続する可能性もある。幅は約90cm、深さは約20cmを測る。溝内は砂層が堆積する。時期は中世。

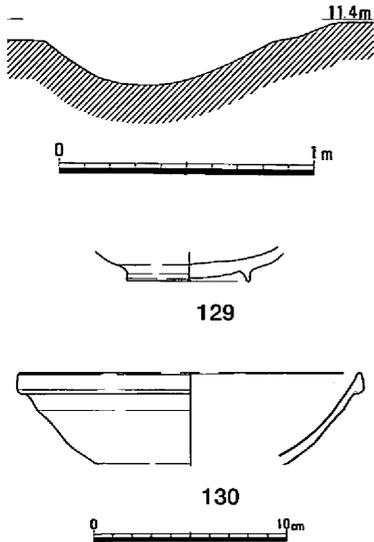


- | | |
|-----------|--------------------|
| 1. 淡灰褐色泥砂 | 5. 淡灰褐色砂
(砂粒が粗) |
| 2. 灰褐色砂泥 | 6. 灰褐色砂泥 |
| 3. 淡灰色泥砂 | |
| 4. 淡灰褐色砂 | |

第111図 溝42 (1/30)

溝42 (第4・5・111図)

溝42は、Ⅱ区東側に位置し、南・北側道、P 9に検出できた。この溝も溝29・33・39・40などと同様に北北西から南南東方向に流走する。



第112図 溝43 (1/30)・出土遺物 (1/4)

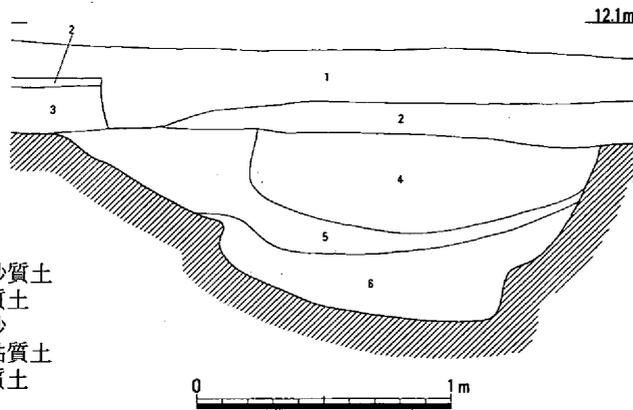
幅約200cm、深さ約40cmを測る。溝内も前述した溝と同様で砂層で埋没している。時期は中世。

溝43 (第5・112図)

この溝は、Ⅱ区東端のP11に検出された。溝は、溝42などと同様な方向と堆積土が認められる。幅は約190cm、深さは約30cmを測る。また、溝の東側にも同様な規模の溝の底部の残痕が検出されている。出土遺物から鎌倉時代前半期である。(中野)

溝44 (第5・113図)

Ⅱ区南側道で検出した溝。溝42の東に位置する。検出上幅北側で210cm、南側で80cm、下幅北側で150cm、南側で40cm、深さ60cmを測る。方向は北西から南東である。溝38と同一溝とも考えられる。(浅倉)



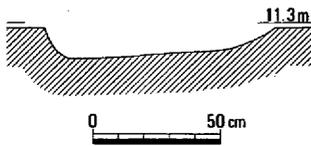
1. 耕作土
2. 暗褐灰色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 淡茶灰色砂
5. 暗青灰色粘質土
6. 黒灰色砂質土

第113図 溝44 (1/30)

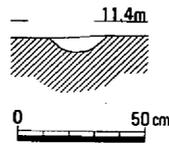
溝45 (第5・114図)

Ⅲ区北側道西部において検出された溝である。幅85cm、深さ15cmの規模を持ち、ほぼ南北方向に流走している。

出土遺物には弥生土器があるが、後世の流れ込みと思われる、時期は古代末～中世と想定される。



第114図 溝45 (1/30)



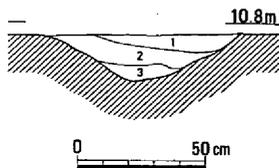
第115図 溝46 (1/30)

溝46 (第5・115図)

Ⅲ区北側道溝45の東側で検出された溝である。幅15cm、深さ10cm弱の小規模な溝であるが、Ⅲ区南側道の溝47とは並走する位置にある。時期は、遺物は皆無な為、判別しがたいが溝45より古いと考えている。

溝47 (第6・116図)

Ⅲ区南側道の中央やや東に位置し、北西から南東方向に流路を形成する。規模は幅70cm、深さ20cmを測る。底部は中央部が最も深く、平坦な箇所をほとんど持たないまま緩やかに壁が立ち上がる。



1. 褐灰色粘性中砂
2. 黄灰褐色粘性細砂
3. 明黄灰褐色粘性細砂

第116図 溝47 (1/30)

溝48 (第7・117図)

P23区の北側を南北に流走する溝である。溝49とほぼ直角に交わっており、また現代の地割とも並行する。時期は、当遺構の埋土が褐灰色砂であることから中世に収まると思われる。

溝49 (第7・118図)

P23区の中央部で検出した遺構である。調査区を東西に横断するように流走している。幅1m～2m20cm、深さ20cmの規模を持ち、底部はほぼ平坦で壁は2段に立ち上がる。時期は中世か。

溝50 (第7・119図)

P24区を北西から南東方向に流れる溝である。規模は幅90cm、深さ35cmを測る。底部は弧を描き壁は急傾斜に立ち上がる。時期は検出面、埋土より古代末～中世と思われる。(蛇原)

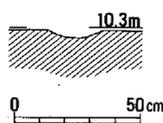
溝51 (第7・120図)

IV区南側道・P25で検出した溝。現在の畦道方向と一致する。田圃の側溝と考えられる。方向は東北東から西南西である。2カ所で直角に分岐している。北側の分岐溝はP24の溝50になる。検出上幅平均100cm、下幅50cm、深さ35cmを測る。

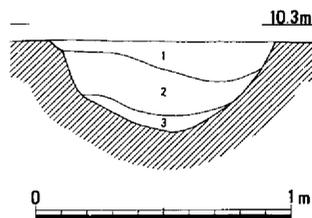
遺物は2点の早島式土器碗が出土している。これから時期は中世にしたい。(浅倉)

溝52 (第7・121図)

V区北側道の西半に位置し、南北にのびる溝である。検出面での幅は145cm、深さは74cmを測り、断面は箱形である。第1層は故意に埋めたような状況である。時期は中世の可能性はある。

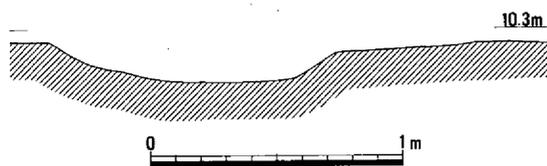


第117図 溝48 (1/30)

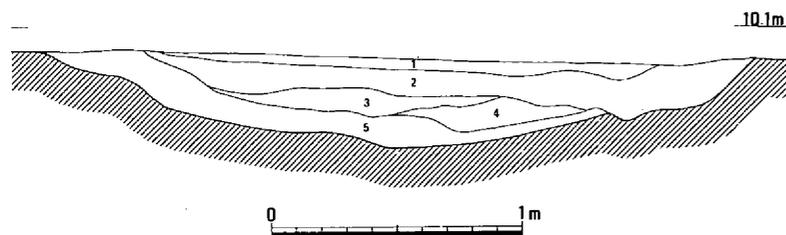


- 1. 暗灰黄色粘質土 (Mn含)
- 2. 濃茶灰黄色粘性微砂
- 3. 淡灰黄色粘性中砂

第119図 溝50 (1/30)

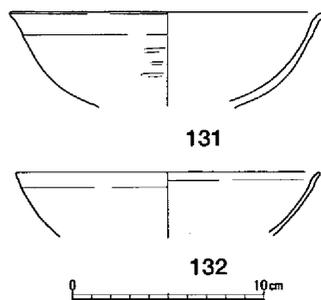


第118図 溝49 (1/30)



- 1. 明褐黄灰色微砂 (Mn含)
- 2. 黄茶灰色細砂 (Mn含)
- 3. 茶黄灰色中砂
- 4. 黄灰白色粘性中砂
- 5. 茶灰色粘性微砂

第120図 溝51 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



溝53・54 (第7・122図)

V区北側道の西半に位置し、南北方向にのびる溝である。検出面での幅は溝53で30cm、溝54で65cm、深さはそれぞれ6cmと16cmを測る。時期の限定は困難だが、中世以前と思われる。

溝55 (第8・123図)

V区北側道の東端に位置し、南北方向にのびる溝である。P31とV区南側道の溝66と同一である可能性がある。検出面での幅は428cm、深さは64cmを測る。時期は中世と思われる。(柴田)

溝56 (第7・124図)

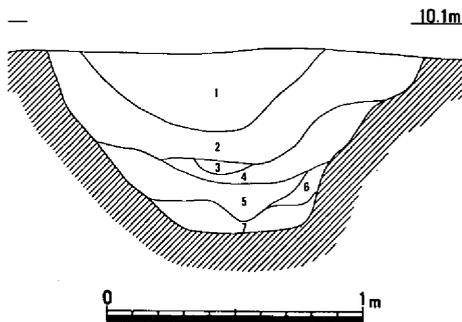
P26区の北西部に位置する。流路は南西北東方向に形成されている。検出幅には差があるが、方向的位置的に溝51につながることも考えられる。埋土は灰色砂土となっており、時期は中世か。

溝57 (第7・125図)

P27区内を北西から南東へ流走する溝である。断面形から2条の溝が重複していることも判断されるが、切り合い関係かを明確にすることができなかつた為1条の溝とした。時期は中世だろう。

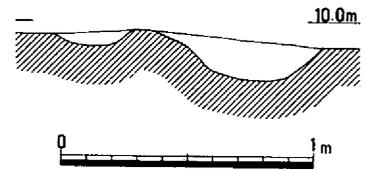
溝58 (第7・126図)

P27区の東端部で検出した溝である。大半を溝57によって切られているため全容は不明であるが、

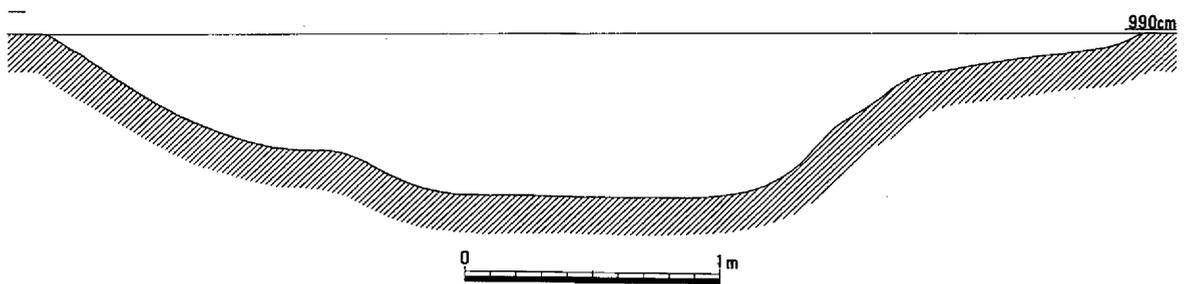


第121図 溝52 (1/30)

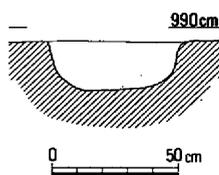
1. 淡灰茶褐色土 (黄褐色塊混)
2. 暗黄灰茶褐色土
3. 灰褐色砂質土
4. 黄茶褐色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 暗灰白色砂質土
7. 灰白色砂質土



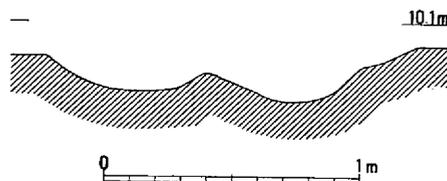
第122図 溝53・54 (1/30)



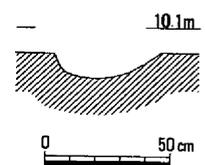
第123図 溝55 (1/30)



第124図 溝56 (1/30)



第125図 溝57 (1/30)

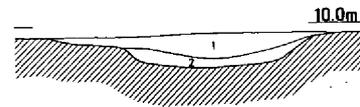


第126図 溝58 (1/30)

東西方向に流れていると思われる。時期は、埋土が灰色砂土であることから中世と考えられる。

溝59 (第7・8・127図)

P28区の北東隅において検出した溝である。規模は幅1.1m、深さ15cmを測り、底部は平坦である。溝66とは直交する位置にある。出土遺物は皆無であったが埋土より、古代末～中世の時期が与えられよう。

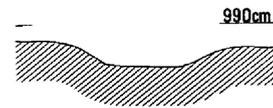


- 1. 黄褐灰色粘質粗砂
- 2. 黄褐灰色粗砂

第127図 溝59 (1/30)

溝60 (第7・8・128図)

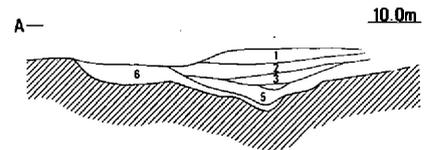
P28区を北西から南東方向に向けて流走する溝である。規模は、幅60cm、深さ10cmを測る。平坦な底部を持ち、壁は緩やかに立ち上がる。具体的な時期は不明であるが、溝59より古いと想定される。



第128図 溝60 (1/30)

溝61 (第7・8・129図)

P28区に位置し、溝60と並行するように流路がある。規模は幅約1.30m、深さ25cmを測る。中央部に窪みがあることと、堆積状況より2条の溝の重複あるいは堀直しも想定される。時期は古代以降か。

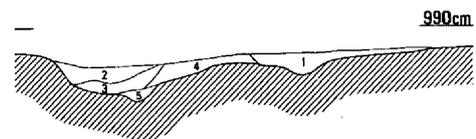


- 1. 灰褐色細砂
- 2. 淡灰褐色細砂
- 3. 灰茶褐色細砂
- 4. 灰茶褐色粗砂
- 5. 灰褐色粗砂
- 6. 灰黄褐色粗砂

第129図 溝61 (1/30)

溝62 (第7・8・130図)

P28区、溝61の西側に接する位置にある。規模は幅1.50m、深さ15cmを測る。堆積状況よりあるいは2条以上の溝の重複も想定されうる。出土遺物もなく具体的な時期は不明であるが、溝59よりは古いと思われる。



- 1. 暗褐黄灰色粘性粗砂
- 2. 淡黄灰白色粘性微砂
- 3. 黄褐灰色中砂
- 4. 明黄灰白色粘性中砂
- 5. 暗褐黄灰色粘性中砂

第130図 溝62 (1/30)

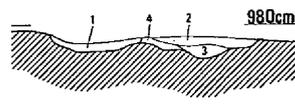
溝63 (第7・131図)

P28区の溝62の西側において検出された遺構である。幅82cm、深さ10cm弱をそれぞれ測る。断面形、及び堆積状況より2条の溝の重複も考えられる。

時期は溝62と同時期か。

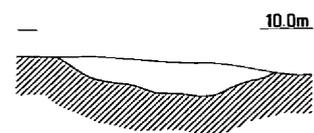
溝64 (第7・132図)

P28区の南西隅で検出された遺構である。幅82cm、深さ15cm弱の規模を持ち、断面形は皿形を呈している。埋土には茶褐色粗砂が含まれている。出土遺物が皆無で具体的な時期は不明であるが、古代以降と考えられる。



- 1. 黄褐灰色粘性粗砂
- 2. 褐灰黄色粘性粗砂
- 3. 暗褐灰黄色粘性細砂
- 4. 明黄灰色粘性粗砂

第131図 溝63 (1/30)



第132図 溝64 (1/30)

溝65 (第8・133図)

P30区の西側を流れる溝である。調査区内を南北に蛇行しながら流走している。規模は幅55cm、深さ12cmほどを測る。底部は弧を描き壁は緩やかに立ち上がり、埋土は褐灰色砂である。

当遺構の時期は埋土より、中世に比定される。

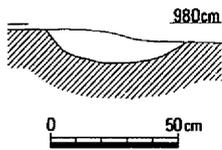
溝66 (第8・9・134図、図版69)

P31区及びV区南側道において検出された遺構である。北東から南西方向に流路を形成し、規模は、幅3.40m、深さ1.20mを測る。底部はほぼ平坦で壁は2段に立ち上がる。溝50や溝59とは直交する位置関係にあることが想定され、この溝はそれらを支線とする幹線水路の可能性もある。出土遺物には、133、134の杯がある。

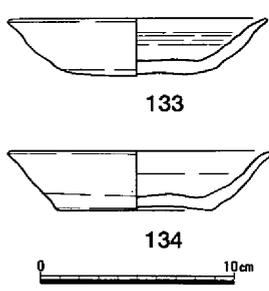
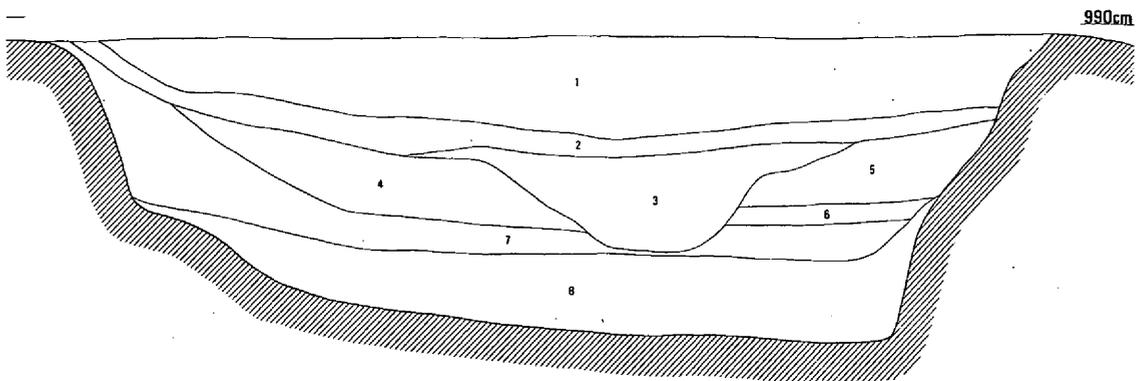
時期は出土遺物より古代末～中世を考えている。 (蛇原)

溝67 (第8・135図)

VI区北側道の西端に位置し、南北方向にのびる溝である。VI区南側道の河道3に流れこむものと思われ、溝25の埋土を切っている。検出

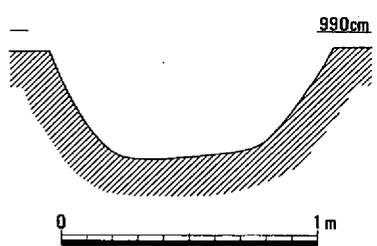


第133図 溝65 (1/30)

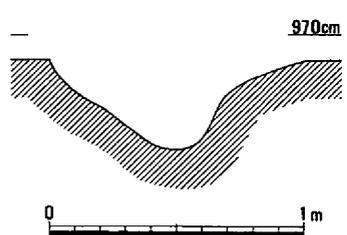


- | | |
|-----------------------|-------------------------------|
| 1. 灰褐色粘性砂質土
(礫少し混) | 5. 灰色・黄色斑紋
粘性砂質土
(粗砂多含) |
| 2. 灰色粘質土
(粗砂少し混) | 6. 淡灰色粗砂 |
| 3. 灰色粘性砂質土
(粗砂少し混) | 7. 明灰色粘質土 |
| 4. 灰黄褐色粘砂 | 8. 青灰色粘砂 |

第134図 溝66 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



第135図 溝67 (1/30)



第136図 溝68 (1/30)

面での幅は109cm、深さは43cmを測る。断面は箱形である。時期は弥生時代より新しいと思われる。

溝68 (第8・136図)

VI区北側道の西半に位置し、南北方向にのびる

溝である。溝69かP34の溝27と接続する可能性がある。検出面での幅は98cm、深さは36cmを測る。断面はU字状で、海拔924cmを測る。層位から、時期は弥生時代より新しいと思われる。

溝69 (第8・9・137図)

Ⅵ区北側道の中央に位置し、南北方向にのびる溝である。P34の溝27と同一である可能性がある。検出面での幅は100cm、深さは49cmを測る。断面は箱形で、底面は海拔915cmを測る。層位から、時期は弥生時代より新しいと思われる。

溝70 (第9・138図)

Ⅵ区北側道の東半に位置し、南北方向にのびる溝である。Ⅵ区南側道の溝76と同一である可能性がある。検出面での幅は141cm、深さは35cmを測る。底面は平坦で、海拔905cmを測る。層位から、時期は弥生時代の範疇におさまる可能性がある。

(柴田)

溝71 (第9・139図)

P35区の北側を東西に流走する溝である。規模は幅1.50m、深さ30cmを測る。底は平坦で壁面は緩やかに立ち上がる。遺物の出土が皆無であったため時期は明確ではないが、埋土、検出状況から恐らく中世であろう。

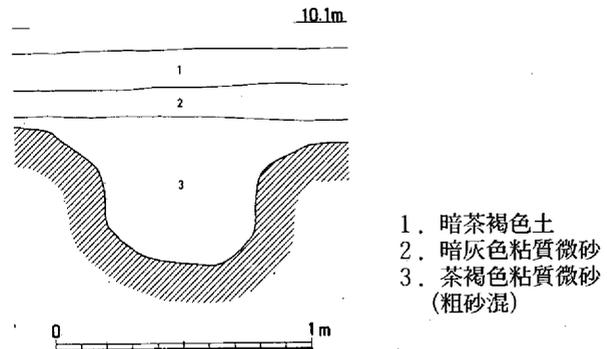
溝72 (第9・140図)

P35区の南隅において検出された溝である。南側半分が調査区外にはみだしているが、ほぼ東西方向に流れるものと思われる。Ⅵ区南側道の溝76とは直交する位置にある。

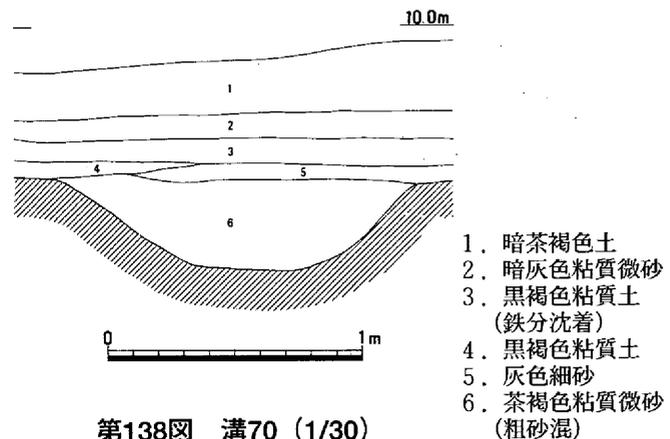
時期は中世と考えられる。

溝73 (第9・141図)

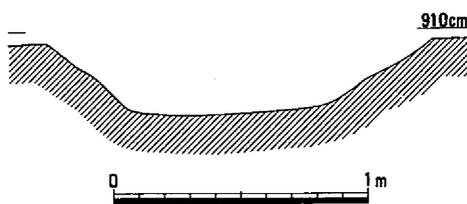
P36及びⅥ区南側道を北東～南西方向へ直線的に縦断する溝である。幅2.90m、検出面からの深さ45cmを測る。



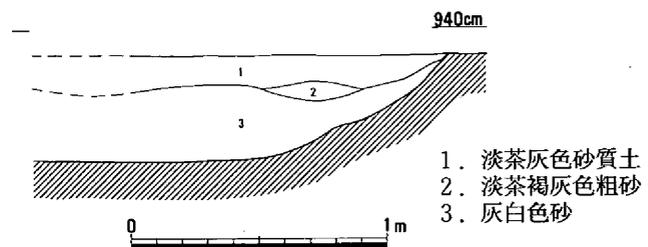
第137図 溝69 (1/30)



第138図 溝70 (1/30)



第139図 溝71 (1/30)



第140図 溝72 (1/30)

断面形は底部は平坦で、当壁は2段に西壁は急傾斜で立ち上がっており台形状を呈する。流路の位置的には、P31区やV区南側道で検出された溝66とは並行する位置にあり、なんらかの関連性が想定される。埋土には褐色系の土が入っている。

出土遺物は土師器土器碗135があるが、当遺構の時期は古代～中世と思われる。

溝74 (第9・142図)

P36区北東隅に位置する溝である。北西～南東方向に流路を形成しており、前述の溝73とほぼ直交する。断面形は台形状を呈し底部は平坦である。埋土は溝73の上層と同じ暗灰茶褐色土である。

出土遺物は検出していないが、時期は恐らく中世と考えられる。

(蛭原)

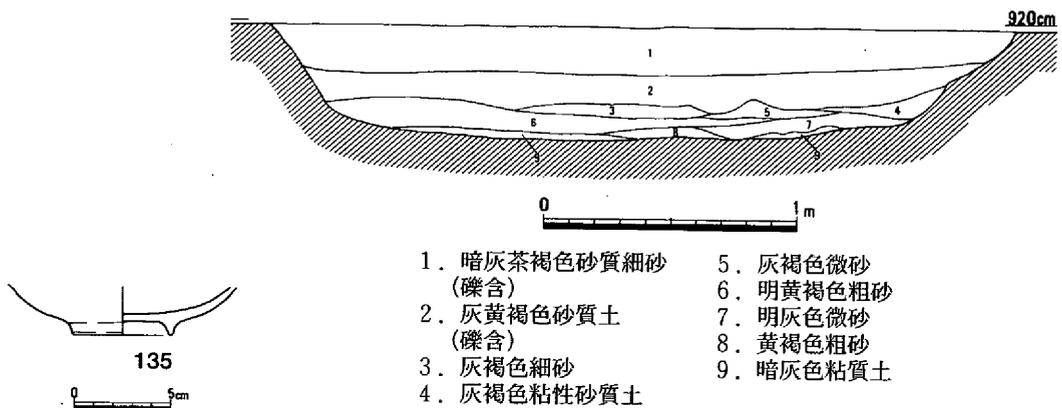
溝75 (第8・143図)

Ⅵ区南側道の西端に位置し、南北方向にのびる溝であるが、河道3の一時的な流路と考えられ、南に向かって狭くなる。検出面での幅は最大195cm、深さは30cmを測る。底面は皿状で、海拔894cmを測る。時期は弥生時代後期後葉以降と思われる。

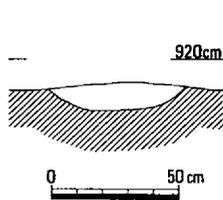
溝76 (第9・144図)

Ⅵ区南側道の中央に位置し、南北方向にのびる溝である。Ⅵ区北側道の溝70と同一である可能性がある。検出面での幅は59cm、深さは8cmを測る。底面は皿状で、海拔905cmを測る。層位から、時期は弥生時代の範疇におさまる可能性があると思われる。

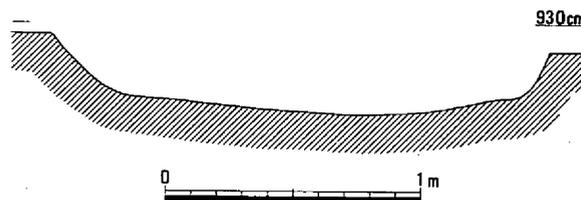
(柴田)



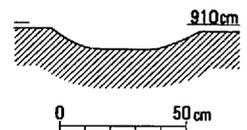
第141図 溝73 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第142図 溝74 (1/30)



第143図 溝75 (1/30)



第144図 溝76 (1/30)

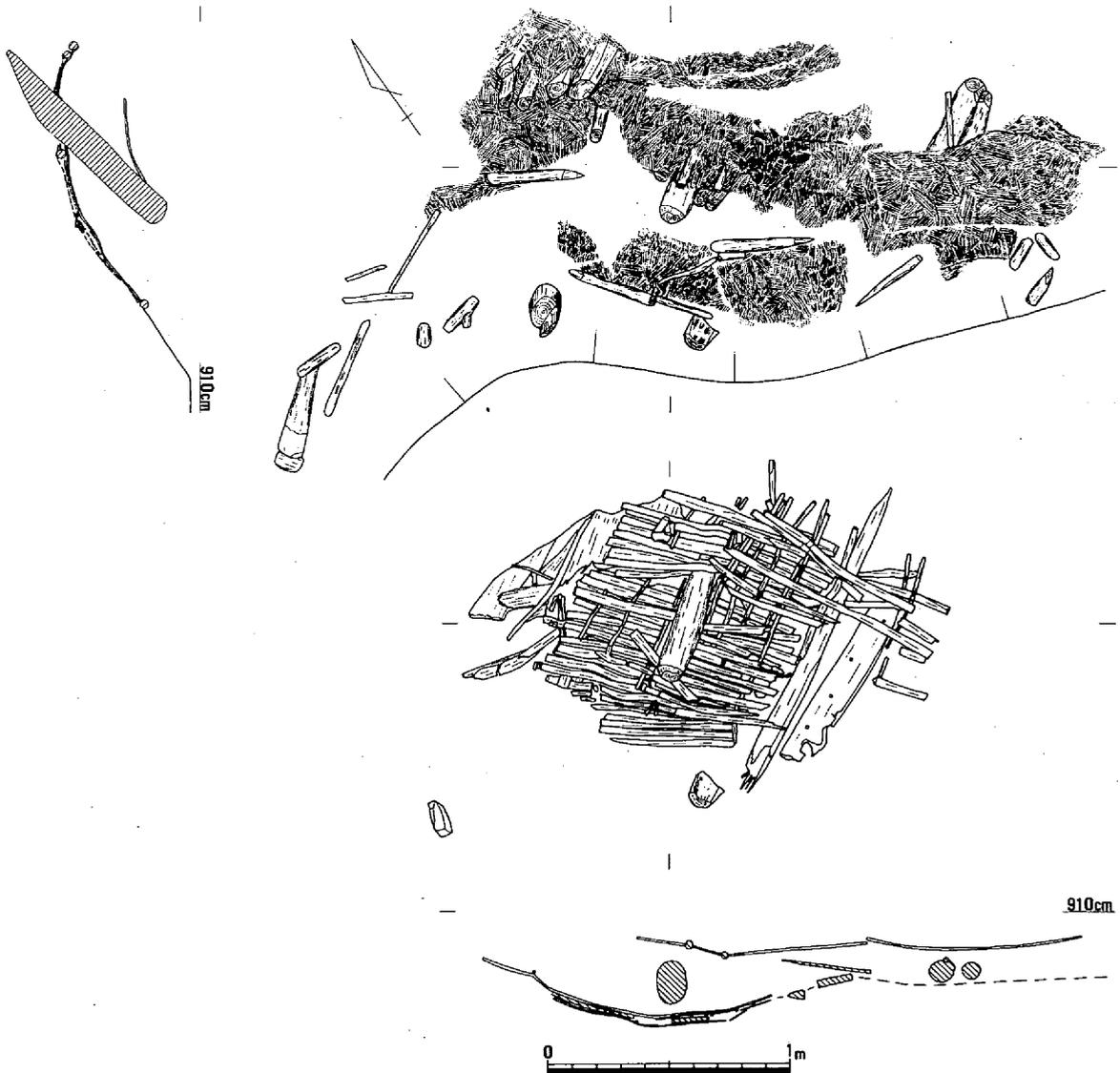
(5) 河道

河道3 (第8・9図、図版69・70)

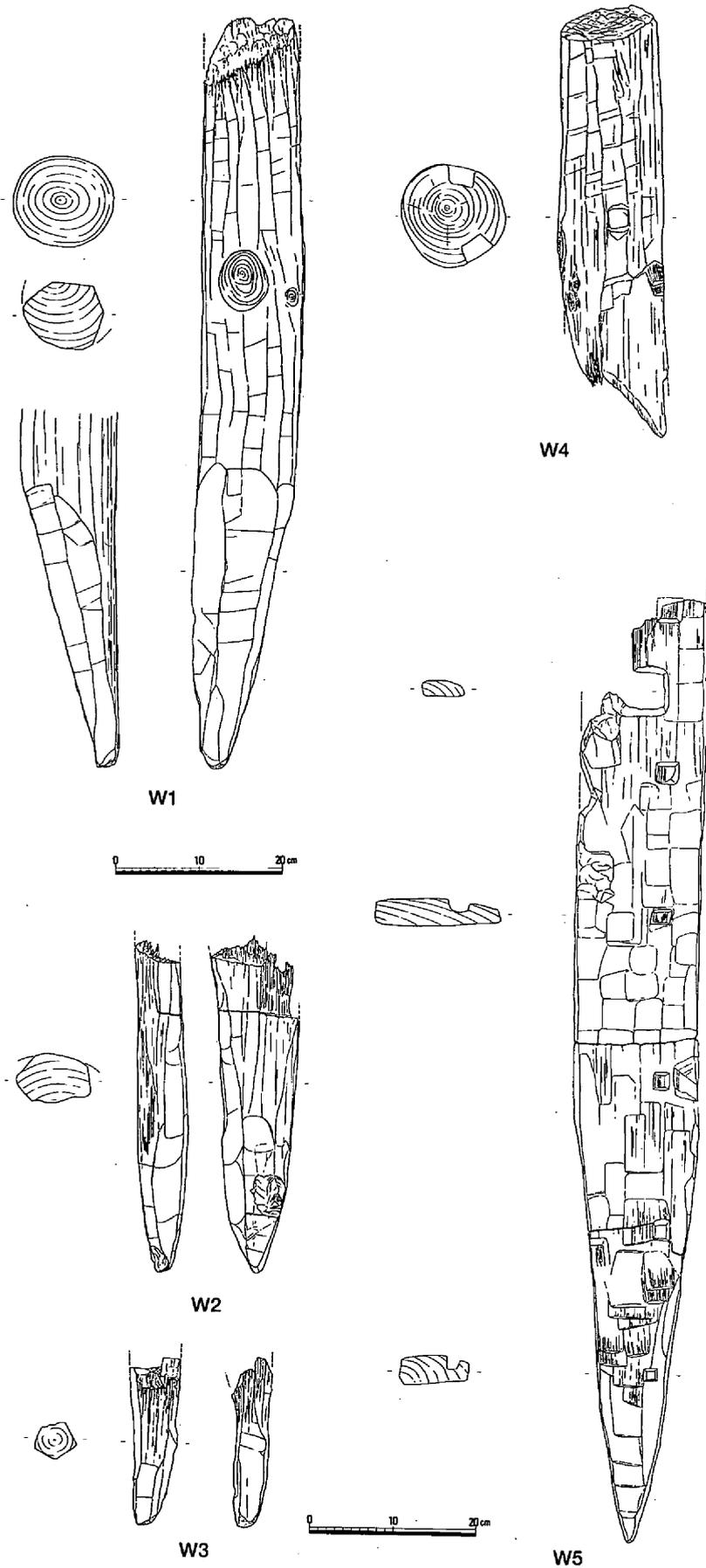
V区北側道東端から、P33・VI区南側道西半にかけて検出された河道である。1つは、北西から南東にのび、VI区南側道西半で南方向に曲がる。深さは60cm程度で、幅は不明な点が多いが南端で600cmを測る。時期の限定は困難であるが、弥生時代の範疇におさまる可能性がある。一方、これを切ってU字形に曲がる河道は、南岸が洗掘を受けている。幅は270~440cm、深さは60~70cmを測る。P33では流路方向に沿って護岸の杭列が施され、VI区南側道では水衝部に護岸施設が検出された。時期は古代~中世の間におさまる可能性がある。

護岸施設 (第8・9・145・146図)

VI区南側道の西端、河道3がU字形に屈曲する南岸に検出された。この場所は水衝部に相当すると



第145図 河道護岸施設 (1/30)



第146図 出土杭 (1/8)

考えられ、護岸を目的とした遺構と考えられる。杭と細い枝、細長い板材（長さ90~100cm・幅2~4cm・厚さ3~4mm）で構成され、長さ194cm、幅140cmの範囲が残存する。最下層には板材や枝を東西方向に敷き並べ、その上に直交するように枝などを10~20cmの間隔をあけて置き、再び東西方向に板材を並べている。編んだようにはなっていない。この上にアシが貼りついているが、人工的なものかどうか不明である。杭には、丸杭・ミカン割りの杭・板状の杭などがある。これらの杭が板材を打ち込んだ様子は見られない。むしろ、杭に貼りついている箇所も確認された。

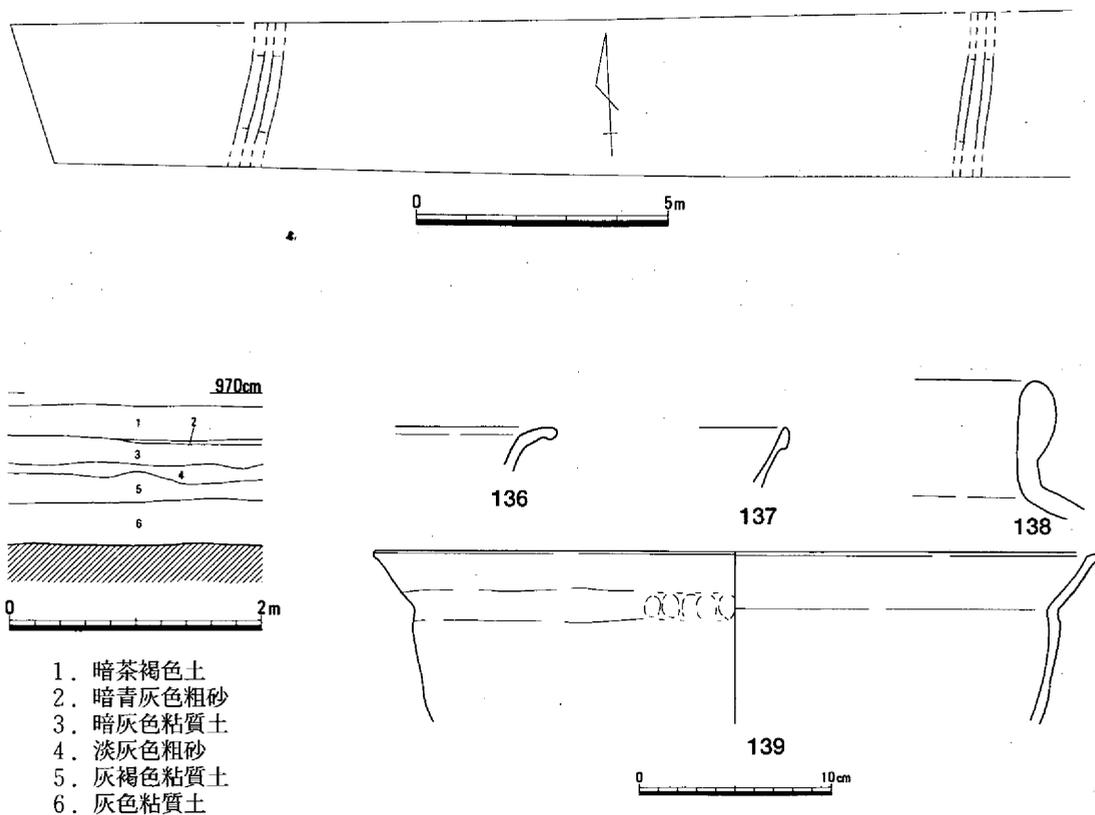
板材については図示していないが、材質はクリ・シイノキ属である。W1とW2は先端の加工は4面で、未加工部を残す。W3も一部未加工部を残す。W4は貫通しないほぞ穴が2つ施されている。W5は板材の端を尖らせたもので、貫通するほぞ穴と、列をなし貫通しないほぞ穴が施されている。材はツガ属。

(柴田)

(6) 水田 (第9・147図)

Ⅵ区北側道および南側道の東端で、時期の異なる水田が検出された。北側道で検出された水田は、第4層の洪水砂に覆われており、高さ3～4cm程度の畦が確認された。現在の畦や中世の溝73の方向とは異なり、ほぼ南北方向にのびている。この畦は上端幅20cm、裾幅60cm程度で、畦の間隔は13.9mを測る。水田面は海拔900～905cmである。この水田の覆土から136～139の土器片が出土しており、細かく限定はできないが、中世の水田であると思われる。

南側道で検出された水田は、畦の痕跡とかすかな凹凸により確認された。床土は灰色粘質土で、この上に灰褐色粘質微砂が海拔900cmまで堆積している。水田面は海拔888～890cmである。時期は限定できないが、中世より古いものである。(柴田)



第147図 水田 (1/150) および畦断面 (1/60) ・出土遺物 (1/4)

4. 遺構に伴わない遺物

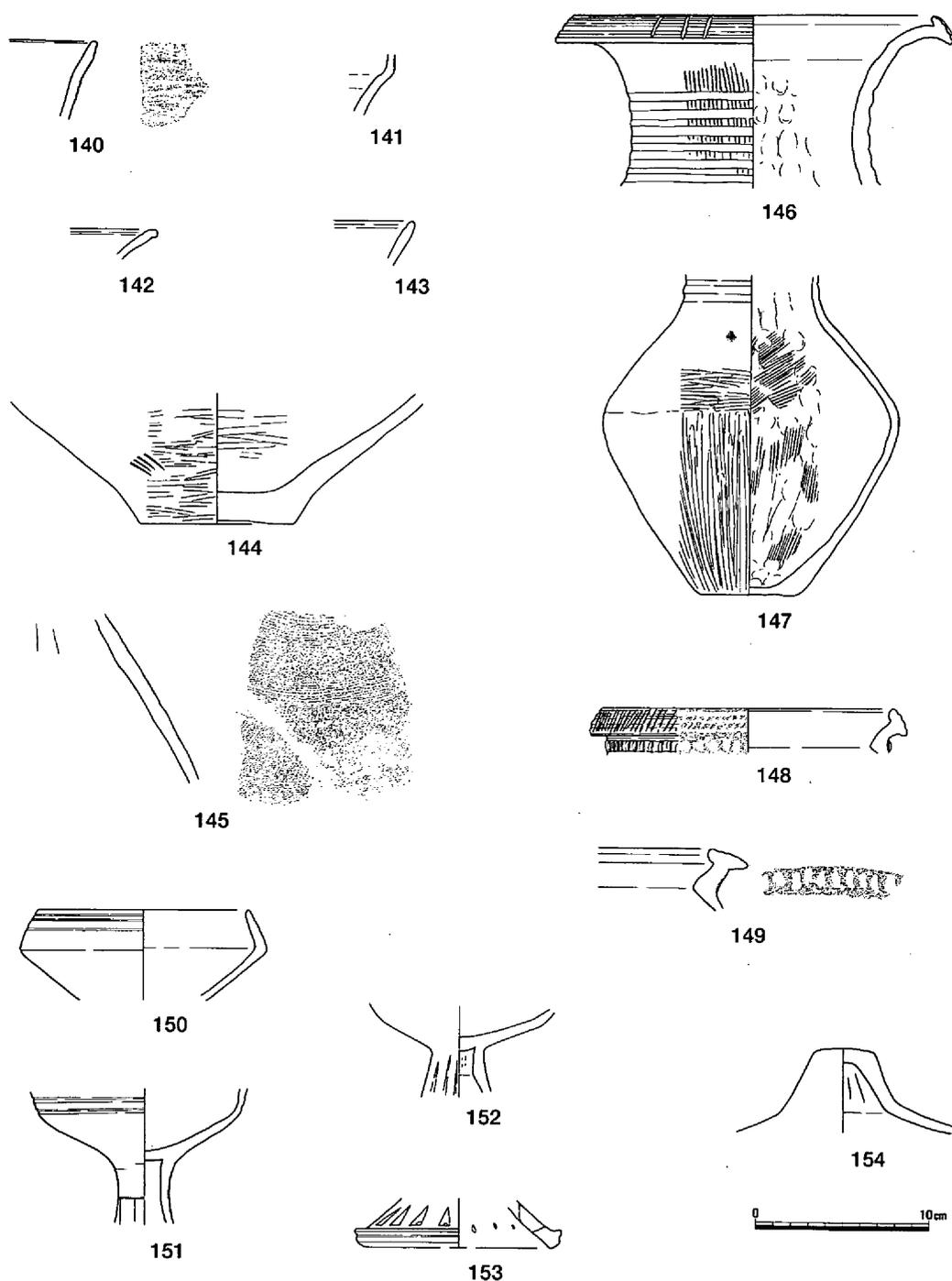
今回の調査では、遺構に伴わない遺物として縄文時代～中・近世に至る遺物が若干量出土した。以下、その代表的な遺物を紹介する。

縄文時代の遺物としては、140～143があり、深鉢、浅鉢などが検出された。いずれも縄文晩期の特徴を示していた。144は、弥生前期の壺と考えられ、内外面ともヘラミガキが認められる。145は、弥生中期前半の壺で、外面に櫛描による施文を施す。146～153は、いずれも弥生中期後半に属する土器である。146の壺の頸部には凹線文が施されている。155も146と同時期の壺である。156～170

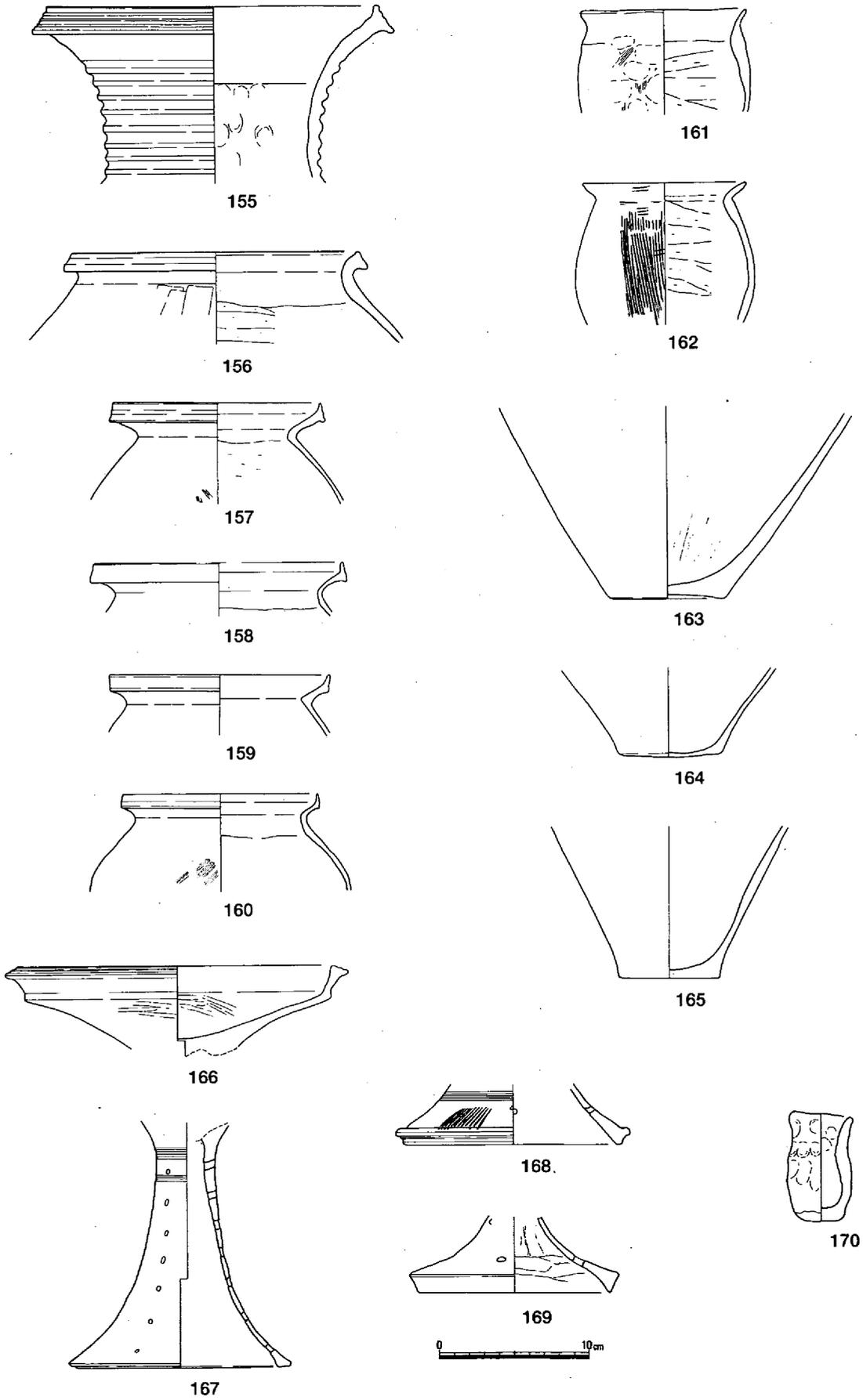
第8章 服部遺跡

は、弥生後期の特徴を有している。156～160の甕は、頸部から外反する口縁部を持ち、口縁端部を上下に肥厚させている。また、内面は頸部までヘラケズリを施している。166～169は高杯で、166の杯部口縁は、やや斜上方に立ち上がり、端部は横方向に肥厚させている。さらに、口縁端面には数条の凹線文を施している。

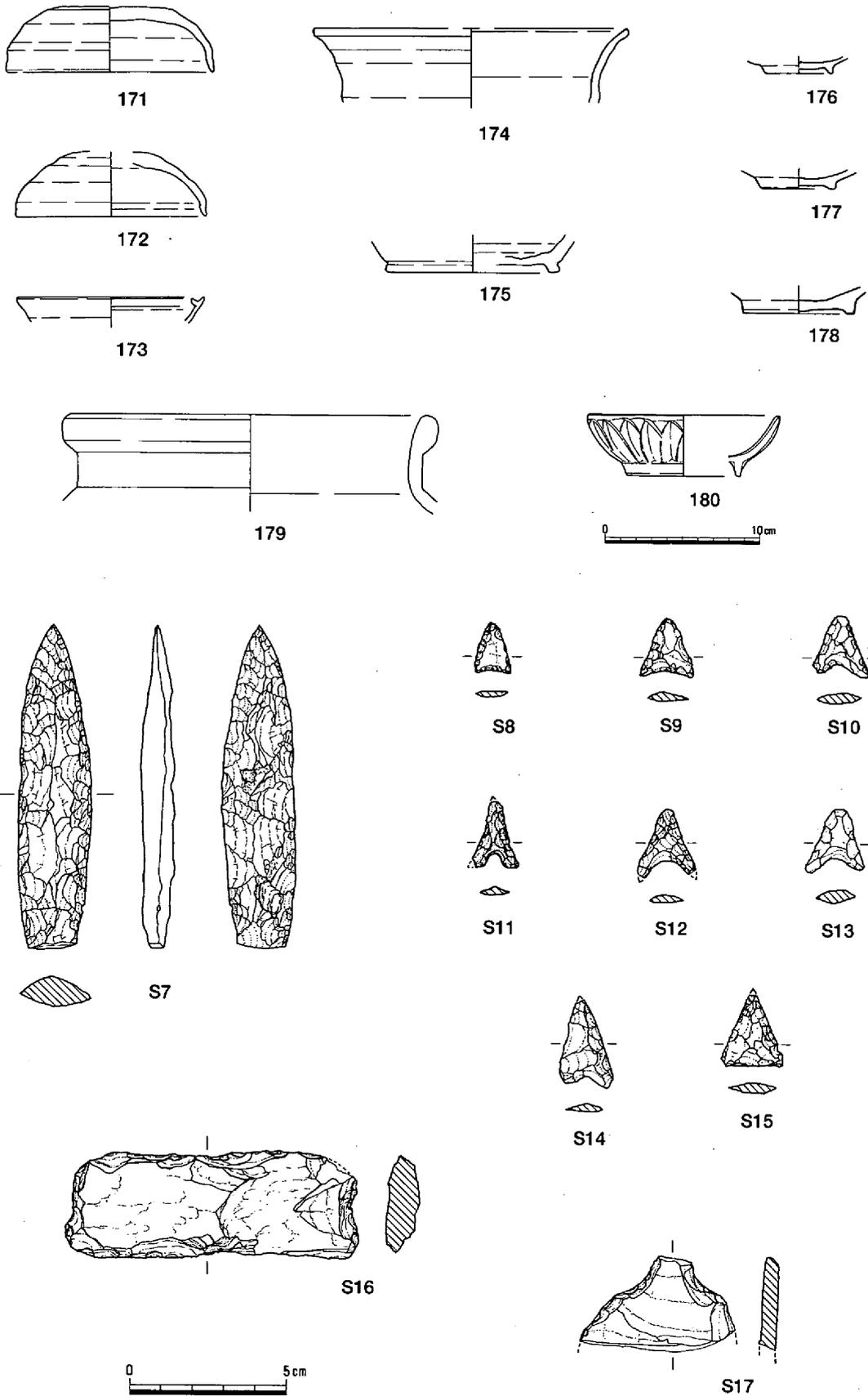
171～175は須恵器で、6世紀末から古代の時期のものである。また、176～180の中世の遺物も若干量検出されている。176は、早島式土器と呼ばれる土師器の椀である。179は、備前焼の壺の特徴を示している。180は、輸入陶磁器で青磁の椀である。



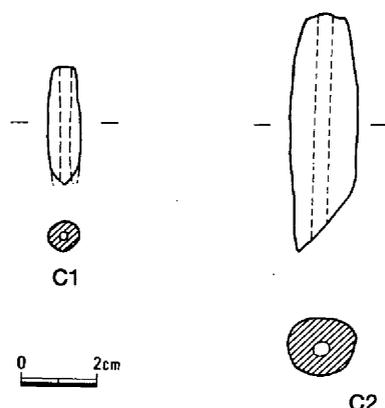
第148図 遺構に伴わない遺物① (1/4)



第149図 遺構に伴わない遺物② (1/4)



第150図 遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/2)



第151図 遺構に伴わない遺物④
(1/2)

また、土器以外にもS7～S17の石器が出土している。S7は石槍で、S8～S15の石鏃は、S11、S12などはやや古相の様相を示している。S16は打製石包丁で、S17は石匙で各種の石器が出土した。さらに、C1、C2の土錘なども検出された。

以上、遺構に伴わない遺物も、今回の調査で最も多く検出された粘土採掘坑の時期のものがその大半を占めた。

第3節 結 語

服部遺跡で出土した遺構の最も古いものは、縄文時代晩期の河道であり、新しいものは中・近世の溝・土壌であった。

なかでも当遺跡を最も特徴付けるものは、弥生時代後期を中心とし、弥生時代中期末から古墳時代初め頃まで永々と採掘された粘土採掘坑群であった。

以下このことについて少し述べ、結語としたい。

今回の調査は、全長650mにおよぶものであったが、調査区の約西側半分（Ⅰ～Ⅲ区）にあたる部分で不定形な落ち込みが広範囲に確認された。この落ち込みは、Ⅰ～Ⅲ区の全域に断続的に集中するように認められた。その形態は、小規模なものと同規模なもの両者が存在し、小規模なものは円形ないし楕円形を呈していた。この小規模な土壌は、1m数十cm～2mの規模を有する。大規模なものは、アメーバ状の不定形な形態を呈しており、20数mの規模であった。この大規模な落ち込みは、調査の結果土壌が集中的に重複して生じたことが明らかとなった。また、落ち込みの底部は凹凸があり、これらも土壌の重複の結果であった。さらに、これらの土壌の埋土もほぼ均一で、おおむね基盤層である淡黄褐色粘質土層で止まっていた。大規模な落ち込みの堆積状況は、新旧の切り合いが認められるものも若干存在したが、その大半は落ち込み全体として埋没していた。これらの落ち込みからは、出土遺物は少なく弥生中期末～古墳初期の土器が若干量認められた。このように広範囲に検出された落ち込みは、その状況から基盤層である淡黄褐色粘質土の採掘を目的とした粘土採掘坑と判断された。

また、このような群集する土壌は全国各地で確認されており、墓としての報告を散見するが、今回の調査では墓塚としての状況を示すものは皆無であった。

今回検出された粘土採掘坑の分布範囲は、前述したように調査区の西側半分（Ⅰ～Ⅲ区）に限定される。調査した地点は、総社平野の北西端部に位置し、西側の西山丘陵の裾部から東および南に広がる沖積地にあたる。調査区の西端が最も高所にあたり、南東方向に傾斜しており、西端部と東端部では約4mの高低差をもっている。粘土採掘坑が検出されたⅠ～Ⅲ区は、現地表面から20～30cmで基盤層が認められる。また、Ⅲ～Ⅳ区では第2図で示すように、基盤層は傾斜していき間層も厚くなっている。このような状況から、粘土を採掘するに際してより労働効果を期するため、目的とする基盤層の浅い場所を選地したことが考えられる。また、遺跡の東側に位置する北溝手遺跡では弥生時代の水田が確認されており、Ⅲ～Ⅳ区でも水田層は認められなかったものの、水田等の開発が行われていたことが考えられ、このため粘土採掘坑の場所が規制を受けていた可能性もある。

採掘坑は、群集する大規模なものがその大半を占めるが、単独および数基が重複する小規模な単位

のものが存在する。このような採掘坑は、いずれも単発的に存在するのではなく集中する傾向が認められ、大規模な採掘坑に隣接して存在している。大規模で不定型な採掘坑は、調査の結果から円形ないし楕円形の採掘坑が重複し、さらに連続した状況を示していた。この単一の採掘坑は、数十cm～2m前後の規模で、円形および楕円形を呈する土壌であった。このような単一の採掘坑では、目的とした基盤層の淡黄褐色粘土を20～30cm掘り下げている。また、採掘坑の中には基盤層部を横方向に掘っていて袋状を呈するものも存在し、粘土の採掘坑としての特徴を明確に示していた。大規模な不定形な採掘坑は、採掘坑が群集していることが明らかとなっているが、その形態は不定形なもので、その掘削は不定方向に連続している。このことは、最初に掘削された採掘坑を基点として、不定方向に拡散されており、一定の計画性を持った掘削ではなかったものと考えられる。Ⅰ～Ⅳ区に検出された採掘坑は全域に広がっており、複数の核となる基点の採掘坑が存在したことが理解できる。また、このような状況は、時期的なことも考慮の必要があるものの、採掘地の場所の規制的なことは存在していなかったと考えられる。さらに、採掘坑は不定方向に拡散しているが、明らかに連続して掘削されている法則性が認められる。このことは、採掘者が限定的にその採掘地を固有的なものとして認識していた可能性にもおよぶ。また、採掘が計画的法則性をもったものではなく、採掘坑が小規模なことを考え合わせると、採掘は採掘量、運搬などから個々の家単位で行われたことも想起できる。さらに、伝統的な土器作りがより大きな単位で行われていたのではなく、規制的な影響を受けずに、個々の家単位で製作されていた可能性も考えられる。

今回の調査で検出された採掘坑は、千基単位におよび、さらに未発掘部や隣接地も合わせると膨大な数の採掘坑が予想される。採掘坑からは、弥生中期末から古墳初頭の遺物が若干量出土しているが、弥生後期の前半期の遺物が最も多く、東端部では古墳初頭の土器が検出されている。採掘坑からの出土遺物からみて、採掘が弥生中期末に始まり、弥生後期を中心として古墳初頭まで続いたと考えられる。また、採掘坑は、おおむね西側から東側へ移動したと認められる。 (中野)

土器一覽

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	285	Ⅳ区南側道	河道2	弥生土器	鉢	15.6	16.4			内外面ヘラミガキ	2.5Y7/2(灰黄)	1mm程度の砂粒・長石・石英(中)	
2	287	Ⅳ区南側道	河道3	弥生土器	深鉢					内面ナデ? ナデおよびアルカ属貝条痕	10YR5/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
3	286	Ⅳ区南側道	河道4	弥生土器	深鉢					外面アルカ属貝条痕	2.5Y4/2(暗灰黄)	1.5mm以下の砂粒・長石・石英(中)	
4	313	Ⅳ区南側道	河道5	弥生土器	浅鉢					内面ヘラミガキ	2.5Y5/1(黄灰)	1~2mm程度の砂粒・長石(多)・石英(少)	
5	385	I区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕	19.8				内面押圧ナデ	2.5Y7/2(灰黄)	0.5mm以下の砂粒・長石・石英(中)	
6	364	I区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕		19.1			内面押圧ナデ	7.5YR4/1(褐灰)	2.2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
7	368	I区P-2	採掘坑群	弥生土器	壺	11.5				頸部沈線7条	2.5Y7/1(灰白)	0.5~1mm程度の砂粒・黒雲母・長石(多)	小形
8	389	I区P-2	採掘坑群	弥生土器	甕			7			2.5Y7/3(浅黄)	0.5~5mm程の砂粒・長石・石英(多)	瓶
9	376	I区P-2	採掘坑群	弥生土器	鉢?			10.8			10YR7/2(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
10	375	I区P-2	採掘坑群	弥生土器	高杯	26.8				口縁端面に3条の凹線	10YR6/2(灰白)	1mm程の砂粒・長石・石英(多)	
11	281	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	壺	12.8					7.5YR6/6(橙)	1~3mm程度の砂粒・長石・雲母(多)	
12	258	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	壺	12.5				胸部内面ハケおよび押圧	2.5YR5/6(明赤褐)	1mm程度の砂粒・長石・石英(多)・雲母(中)	
13	253	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	長頸壺		24.3				2.5Y6/1(黄灰)	2~4.5mm程の石粒(多)・長石・石英(多)	
14	273	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	壺			7			2.5YR6/6(橙)	1~2mm程度の砂粒・長石・石英(多)	
15	259	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	14.8				外面にタタキ痕跡、内面ハケ	2.5Y7/2(灰黄)	1mm程度の砂粒・長石・雲母(多)	
16	256	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	20					10YR6/6(明黄褐)	1mm程度の砂粒・長石・黒雲母(多)・石英(少)	
17	282	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	17.7					10YR6/6(明黄褐)	1~1.5mm程度の砂粒・長石・黒雲母(多)	
18	280	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕						10YR7/2(鈍い黄褐)	2mm以下の砂粒・長石(多)・石英(少)	
19	270	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	13.6					10YR7/2(鈍い黄褐)	1~2mm程度の砂粒・長石・石英(多)	
20	254	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	14.6	18.7				7.5YR8/3(浅黄橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
21	251	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕			6			10YR6/3(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
22	268	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕			5.3			10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒・長石(多)・石英(中)	
23	264	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	台付鉢	17.3	24			口縁竹筥文、胴外面ミガキ・刺突、内面ハケ	2.5Y7/2(灰黄色)	2.5mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
24	279	I区南側道	採掘坑群	弥生土器	台付鉢	31				内面ヘラミガキ	2.5YR8/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒・長石・赤色酸化土粒(多)	
25	283	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕	15.8					2.5YR8/2(灰白)	0.5~2mm程度の砂粒・4mm程度の砂粒・長石(多)	
26	289	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕	17.4	27.9			内面押圧ナデ仕上げ	5YR7/4(鈍い橙)	1~2mm程度の砂粒・赤色酸化土粒・長石(多)	煤付着
27	290	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕			13		内面押圧ナデ	10YR7/2(鈍い黄橙)	~3mm程度の砂粒・長石(多)・石英(中)	
28	293	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕			6.8			10YR6/3(鈍い黄橙)	1~4mm程度の砂粒・長石(多)・石英(中)	
29	292	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕			8.8			7.5YR6/6(橙)	1~2mm程度の砂粒・長石(中)	
30	296	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕	13.7	20.9			外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	10YR7/3(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
31	302	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕	13.7					5YR6/6(橙)	1~3mm程度の砂粒・長石・黒雲母(中)	
32	288	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	甕			4.8		外面ハケ	7.5YR8/3(浅黄橙)	1mm程度の砂粒・長石(多)・黒雲母(中)	
33	295	Ⅱ区北側道	採掘坑群	弥生土器	高杯						10YR6/2(灰黄褐)	1~3mm程度の砂粒・長石・雲母(少)	
34	366	Ⅱ区P-5	採掘坑	弥生土器	壺	17.6				3条の凹線	10YR8/2(灰白)	1~4mm程度の砂粒・石英(多)	
35	382	Ⅱ区P-5	採掘坑	弥生土器	甕	15.8				2条の凹線	10YR7/2(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(中)	
36	380	Ⅱ区P-5	採掘坑	弥生土器	甕	15				外面ハケののちヘラミガキ	2.5Y2/1(灰白)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	口縁に煤付着
37	381	Ⅱ区P-5	採掘坑	弥生土器	鉢	24.1					7.5YR7/3(鈍い橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	

土器一覽

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
38	379	Ⅱ区P-6	採掘坑2	弥生土器	甕	17.2				横方向のハケのちへラミガキ	10YR6/8(明黄褐)	1mm程の砂粒 長石・石英(中)	
39	392	Ⅱ区P-6	採掘坑群	弥生土器	甕	15.3					7.5YR6/6(橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多) 角閃石(少)	
40	393	Ⅱ区P-6	採掘坑群	弥生土器	甕	14.1					5Y7/1(灰白)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
41	384	Ⅱ区P-6	採掘坑群	弥生土器	甕	14.9		6.4			10YR7/3(鈍い黄色橙)	2mmまでの砂粒を含む 長石・赤色酸化土層(少)	外面に煤付着
42	391	Ⅱ区P-6	採掘坑群	弥生土器	甕			5.9			2.5Y8/2(灰白)	2~5mm程の砂粒 長石・石英(多)	
43	394	Ⅱ区P-6	採掘坑3	弥生土器	高杯					外面クモの渠状へラミガキ	10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm程の砂粒 長石・石英(多)	
44	387	Ⅱ区P-7	採掘坑群	弥生土器	壺	15.9					7.5YR7/6(橙)	1~3mm程の砂粒 長石・雲母(中)	
45	378	Ⅱ区P-7	採掘坑群	弥生土器	甕						10YR7/1(灰白)	1~2mm程の砂粒 長石(多) 雲母(中)	
46	388	Ⅱ区P-7	採掘坑群	弥生土器	甕						7.5YR7/6(橙)	1~2mm程の砂粒 長石(多)	黒斑
47	362	Ⅱ区P-7	採掘坑群	弥生土器	甕			6.3			2.5YR7/3(浅黄)	3mm以下の石粒、砂粒(長石・石英)を多く含む	
48	377	Ⅱ区P-7	採掘坑群	弥生土器	鉢	38.9					5YR7/4(鈍い橙)	1~3mm程度の砂粒 長石・赤色酸化土粒(多)	
49	372	Ⅱ区P-8	採掘坑群	弥生土器	甕	13.9				外面へラミガキ、内面へラケズリ	2.5Y7/1(灰白)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
50	373	Ⅱ区P-8	採掘坑群	弥生土器	甕			4.8		外面へラミガキ、内面へラケズリ	2.5Y7/1(灰白)	3mm程度石つぶ20個以上 長石・石英(中)	
51	383	Ⅱ区P-9	採掘坑4	弥生土器	長頸壺	16.9				外面にタタキ目痕跡	2.5Y8/2(灰白)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	一部に煤付着
52	386	Ⅱ区P-9	採掘坑5	弥生土器	甕	15				外面にタタキのちハケ	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	外面煤付着
53	367	Ⅱ区P-9	採掘坑群	弥生土器	鉢						10YR7/6(明黄褐)	1~3mm程度の砂粒 石英(多) 長石(中)	
54	395	Ⅱ区P-10	採掘坑群	弥生土器	壺			7.3			2.5Y7/1(灰白)	2mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
55	272	Ⅱ区南側道	採掘坑群	弥生土器	甕	18.1					5YR7/4(鈍い橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多) 黒雲母(中)	
56	260	Ⅱ区南側道	採掘坑6	弥生土器	台付鉢						10YR8/2(灰白)	1.5mm程の砂粒 長石・石英(中)	
57	183	Ⅲ区北側道	採掘坑11	弥生土器	甕	25.2				外面ハケ	10YR8/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒(多) 長石(多) 石英(少)	
58	182	Ⅲ区北側道	採掘坑7	弥生土器	甕	13.2					7.5YR8/2(灰白)	1~2mm程度の砂粒 長石・黒雲母(少)	
59	193	Ⅲ区北側道	採掘坑10	弥生土器	甕						2.5Y7/2(灰黄)	3~6mm程の石粒(中) 長石・石英(多)	
60	194	Ⅲ区北側道	採掘坑11	弥生土器	甕			7.2			10YR6/2(灰黄褐)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
61	187	Ⅲ区北側道	採掘坑8	弥生土器	甕			6.1			2.5Y8/1(灰白)	1mm以下の砂粒 長石・石英(少)	甕
62	186	Ⅲ区北側道	採掘坑7	弥生土器	甕			6.6			10YR5/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒 長石(多) 石英(少)	
63	192	Ⅲ区北側道	採掘坑9	弥生土器	高杯					口縁部に3状の凹線	5YR6/6(橙)	1~1.5mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
64	184	Ⅲ区北側道	採掘坑14	弥生土器	甕	23.9				外面にタタキ目痕跡	10YR7/2(灰白)	1~2mm程度の砂粒 長石(多)	
65	195	Ⅲ区北側道	採掘坑14	弥生土器	甕	15.7					10YR7/1(灰白)	1~1.5mm程度の砂粒 長石(多) 黒雲母(少)	
66	190	Ⅲ区北側道	採掘坑12	弥生土器	甕	14.6					10YR7/2(鈍い黄橙)	2~6mm程の砂粒、赤色酸化土粒、石英、長石(多)	
67	197	Ⅲ区P-13	採掘坑群	弥生土器	甕	12.8					2.5Y8/2(灰白)	2mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
68	226	Ⅲ区P-13	採掘坑群	弥生土器	壺	17.3					10YR8/3(浅黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
69	207	Ⅲ区P-13	採掘坑15	弥生土器	甕	13.6					5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
70	208	Ⅲ区P-13	採掘坑15	弥生土器	甕	15.3					7.5Y7/2(灰黄)	1.5mm程の砂粒 長石・石英(多)	
71	242	Ⅲ区P-13	採掘坑群	弥生土器	甕	14.8				口縁部張面に櫛状沈線	10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
72	229	Ⅲ区P-13	採掘坑16	弥生土器	甕			5.3			2.5YR7/2(灰黄)	2~2.5mm程の砂粒(中) 長石・石英(多)	
73	205	Ⅲ区P-13	採掘坑16	弥生土器	甕			5.5			10YR8/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒(多) 長石・黒雲母(多)	
74	212	Ⅲ区P-13	採掘坑17	弥生土器	鉢?						10YR7/3(鈍黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	

土器一覽

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
75	210	Ⅲ区P-13	探堀坑17	弥生土器	高杯	24.6				口縁端部に3状の凹線	2.5Y7/3(浅黄)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
76	228	Ⅲ区P-14	探堀坑18	弥生土器	甕	17.8					10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
77	243	Ⅲ区P-14	探堀坑20	弥生土器	甕	14.8					5Y8/4(淡橙)	1~2mm程度の砂粒(多) 長石(多)	
78	230	Ⅲ区P-14	探堀坑群	弥生土器	甕	14.5					10YR6/2(灰黄褐)	1~3mm程度の砂粒(多) 長石(多) 雲母(中)	
79	196	Ⅲ区P-14	探堀坑群	弥生土器	甕	15.4	20.4	4.9	25.3		7.5YR8/2(灰白)	2mm程の砂粒 長石・石英(多)	
80	203	Ⅲ区P-14	探堀坑群	弥生土器	鉢	15		5.4	5.5		5YR7/6(橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多) 赤色酸化土粒	
81	219	Ⅲ区P-14	探堀坑19	弥生土器	高杯	20					5Y8/1(灰白)	1mm程の砂粒 長石 赤色酸化土粒(僅)	
82	211	Ⅲ区P-15	探堀坑22	弥生土器	甕	15.5					10YR7/1(灰白)	2mm以下程の砂粒 長石・石英(多)	
83	249	Ⅲ区P-15	探堀坑21	弥生土器	甕	16	22.6				7.5YR8/3(浅黄褐)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
84	217	Ⅲ区P-16	探堀坑23	弥生土器	甕						10YR8/3(浅黄橙)	1mm程の砂粒 長石・石英(中)	
85	215	Ⅲ区P-16	探堀坑25	弥生土器	甕	15.8	17.4				10YR5/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多) 黒雲母(中)	
86	181	Ⅲ区南側道	探堀坑28	弥生土器	長頸壺	18.5				頸部に沈線14条	2.5Y7/1(灰白)	1~3mm程度の砂粒(多) 長石・赤色酸化土粒(多)	
87	180	Ⅲ区南側道	探堀坑29	弥生土器	甕	14.6					10YR8/2(灰白)	2mm程の石英(3~4個) 0.5mm程の砂粒	
88	167	Ⅲ区南側道	探堀坑群	弥生土器	甕	20.7				外面ハケ、内面ナデ	10YR8/2(灰白)	1mm程の砂粒 長石・赤色酸化土粒(中)	
89	179	Ⅲ区南側道	探堀坑30	弥生土器	甕						2.5YR8/2(灰白)	2.5~4mm程の砂粒(中) 長石・石英(多)	
90	170	Ⅲ区南側道	探堀坑32	弥生土器	甕	17.3					7.5YR7/4(鈍い橙)	1mm程の砂粒 長石・石英(中)	
91	175	Ⅲ区南側道	探堀坑群	弥生土器	甕	14.7					10YR8/2(灰白)	2mm程の砂粒(1個) 1mm以下の砂粒	1
92	173	Ⅲ区南側道	探堀坑群	弥生土器	甕	13.9					7.5YR8/3(浅黄橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
93	168	Ⅲ区南側道	探堀坑27	弥生土器	甕	14.9					10YR8/2(灰白)	1.5mm以下程の砂粒 長石・石英(中)	
94	174	Ⅲ区南側道	探堀坑群	弥生土器	高杯	16.1				口縁に凹線状起伏、磨滅による影響か?	10YR8/2(灰白)	1.5mm程までの砂粒 長石・赤色酸化土粒(中)	
95	176	Ⅲ区南側道	探堀坑31	弥生土器	高杯	19.4					7.5YR7/4(鈍い橙)	1.5mm程の砂粒 長石・石英(多)	
96	172	Ⅲ区南側道	探堀坑26	弥生土器	ミニチュア鉢	8.9		3	10.4		2.5Y8/1(灰白)	1~1.5mm程度の砂粒 長石・石英(多)	完形。内面に煤付着
97	250	V区P-27	土坑6	弥生土器	甕	13.4	18	3.9	20.1	外面ハケ、内面ヘラケズリ	2.5Y8/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	外面に煤付着、穿孔痕
98	257	I区P-4・II区P-5~南側道	溝1	弥生土器	甕	16.6				口縁拡張面に、外面ハケののちミガキ、内面ケズリ	10YR6/2(灰黄褐)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
99	266	I区P-4・II区P-5~南側道	溝1	弥生土器	甕	15.2				外面ハケののちミガキ、内面ケズリ	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
100	221	Ⅲ区P-18	溝9	弥生土器	甕			4.8			10YR5/3(鈍い黄褐)	1~1.5mm程度の砂粒 長石(多) 雲母(中)	
101	213	Ⅲ区P-18	溝9	弥生土器	甕			9			7.5YR5/2(灰褐)	2.5mm以下の石英、砂粒 長石・石英(多)	
102	204	Ⅲ区P-18	溝9	弥生土器	甕			7.2			10YR4/6(赤)	1mm程度の砂粒 長石(多) 石英(中)	
103	319	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	甕					口縁下に5本1単位の櫛形平行沈線文	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒、長石・石英(多) 白雲母(中)	外面に煤付着
104	314	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	甕					口縁下に5本1単位の櫛形平行沈線文	10YR5/3(鈍い黄褐)	2mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
105	316	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺	15				2条の貼付突帯に刻目、櫛形文	2.5YR6/2(灰黄)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
106	315	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺					口縁内側に貼付突帯	2.5YR6/1(黄灰)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
107	201	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺	9.7					2.5YR6/1(黄灰)	1mm程の砂粒 長石(少) 石英(僅)	
108	311	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺	9				外面に櫛形波状文	7.5YR5/1(褐灰)	0.5~4mm程度の砂粒 石英・黒雲母(多)	
109	312	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺					口縁下に5本1単位の櫛形平行沈線文	10YR6/2(灰黄褐)	0.5~2mmの砂粒 長石・石英(多)	
110	318	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺					櫛形平行文と波状文	10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
111	320	Ⅳ区北~P-21~南側道	溝9	弥生土器	壺					櫛形平行文と波状文、刺突が巡る	10YR6/2(灰黄褐)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	

土器一覽

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
112	200	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕	19.6					10YR6/2(灰黄褐)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
113	310	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	鉢	15.5					10YR6/2(灰黄褐)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)・石英(多)	
114	304	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕						10YR4/2(灰黄褐)	0.5~3mm程度の砂粒(多)・長石(多)	
115	321	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕			5			10YR6/2(灰黄褐)	1.5mm程度の砂粒 長石・石英(少)	
116	309	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕			5.6			10YR6/2(灰黄褐)	1mm程度の砂粒 長石(多) 雲母・石英(中)	甕
117	317	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕			8.2			10YR7/2(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
118	306	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	甕			5.4			2.5Y5/1(黄灰)	0.5~2mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	
119	305	Ⅳ区北-P-21-南側道	溝9	弥生土器	鉢			8.2		両側に穿孔、蓋か?	2.5Y5/1(黄灰)	1~3mm程度の砂粒 長石・石英(多) 雲母(中)	
120	222	Ⅳ区北側道	溝9	弥生土器	鉢					口縁端部に刻目、外面に櫛描波状文	10YR6/3(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石・雲母(多) 石英(中)	
121	291	Ⅳ区南側道	溝12	弥生土器	甕			6.6		内外面ハケ	10YR7/2(鈍い黄橙)	0.5~2mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
122	322	V区南側道	溝15	弥生土器	壺?			7.4		外面に櫛描文、内面にハケ	2.5Y7/2(灰黄)	1mm程の砂粒 長石・石英(多)	甕
123	342	V区北側道	溝18	弥生土器	壺	7.6	10.5	4.6	9.1	ヘケのうち部分的にヘラミガキ	10YR6/2(灰黄褐)	0.5~2mm程度の砂粒 長石(多)・石英(僅)	
124	346	V区北側道	溝18	弥生土器	壺	12.2	21	6.6	17.2	外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ	10YR6/3(鈍い黄橙)	2~4mm程度の石英(多) 長石・石英(多)	底部外面に煤付着
125	348	V区北側道	溝18	弥生土器	甕	12.5	16.6	4.1	20.3	外面ハケのちヘラミガキ	2.5Y7/3(浅黄)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)・石英(少)	外面に煤付着
126	347	V区-P-29-南側道	溝20	弥生土器	甕	21.7					10YR8/2(灰白)	3.2mm以下の砂粒(多) 石英(多)・長石(中)	
127	323	Ⅵ区北側道	溝24	弥生土器	甕	16.7					10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石・石英(中)	
128	324	Ⅵ区北側道	溝24	弥生土器	高杯	22.9					10YR5/3(鈍い黄褐)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
129	397	Ⅱ区P-11	溝43	土師質土器	高台付碗			6.4			2.5Y8/2(灰白)	1mm以下の砂粒 黒雲母(中)	
130	398	Ⅱ区P-11	溝43	白磁	碗						7.5Y7/2(灰白)		
131	307	Ⅳ区-P-25-南側道	溝51	土師質土器	高台付碗	16.3					10YR8/2(灰白)	0.5~1.5mm程度の砂粒 石英・雲母(多)	
132	308	Ⅳ区-P-25-南側道	溝51	土師質土器	高台付碗	17.8					2.5Y8/2(灰白)	0.5~1mm程度の砂粒 石英・雲母(多)	
133	325	V区-P-31-南側道	溝66	土師器	杯	13.3	13.5	7.9	3		2.5Y6/3(鈍い黄)	1mm以下の砂粒 長石・石英・角閃石(中)	
134	326	V区-P-31-南側道	溝66	土師器	杯	13.5	13.8	8.2	3.1	底部未調整	2.5Y6/3(鈍い黄)	1mm程度の砂粒 長石・石英(中)	
135	353	Ⅵ区-P-36-南側道	溝73	土師質土器	高台付碗						10YR7/2(鈍い橙)	0.5~1.5mm程度の砂粒 雲母(多)	
136	339	Ⅵ区北側道	水田	土師質土器	鍋						2.5Y6/3(鈍い黄)	1mm程度の砂粒 長石・赤色酸化土粒(少)	
137	332	Ⅵ区北側道	水田	磁器	碗						5Y7/2(灰白)		
138	335	Ⅵ区北側道	水田	備前焼	大甕						5R4/1(暗赤灰)	4mm以下の石粒・砂粒 長石・石英(中)	
139	331	Ⅵ区北側道	水田	土師質土器	鍋	37.8					10YR6/4(鈍い黄橙)	0.5~1mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	外面に煤付着
140	297	Ⅳ区南側道	包含層	縄文土器	鉢					外面にアルカ属具条痕	10YR5/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
141	299	Ⅳ区南側道	包含層	縄文土器	鉢						10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
142	298	Ⅳ区南側道	包含層	縄文土器	鉢						10YR5/3(鈍い黄褐)	2mm程の砂粒 長石・石英(多)	
143	301	Ⅳ区南側道	包含層	縄文土器	鉢						2.5Y4/1(黄灰)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
144	214	Ⅲ区P-17	包含層	弥生土器	壺			8.8		外面に線刻?	10YR6/2(灰黄褐)	2.5mm以下の石粒・砂粒 長石・石英(多)	
145	209	Ⅳ区P-21	包含層	弥生土器	壺					櫛描平行文・波状文 および刺突が巡る	5YR5/6(明赤褐)	1.5mm程の砂粒 長石・石英(多)	
146	354	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	壺					頸部に6条の凹線が残る	10YR8/2(灰白)	1mm程の砂粒 石英・長石(少)	
147	358	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	壺		17	5.7		頸部に凹線、内面ハケ および押圧	10YR5/2(灰黄褐)	2mm程の砂粒 長石・石英・角閃石(多)	
148	329	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	甕					口縁に凹線のち刻目、頸部に押圧文	10YR6/2(灰黄褐)	1.5mm程の砂粒 長石(多) 石英(少)	

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地区名	遺構名	種 別	器 種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特 徴	色 調	胎 土	備 考
149	238	V区P-29	包含層	弥生土器	甕					頸部に押圧文	10YR8/6(黄橙)	1mm程の砂粒 石英・長石(少)	
150	357	VI区南側道	包含層	弥生土器	高杯	11.9				口縁部に凹線? 3条	10YR8/4(浅黄橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(少)	
151	338	VI区北側道	包含層	弥生土器	高杯					脚部にヘラによる線彫	10YR7/6(明黄褐)	4~5mm程の石粒 長石・石英(中)	
152	235	VI区P-34	包含層	弥生土器	高杯						10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm程以下の砂粒 長石・石英(中)	
153	239	VI区P-34	包含層	弥生土器	高杯						10YR6/6(明黄褐)	1mm程の砂粒 長石・石英(多)	
154	236	VI区P-33	包含層	弥生土器	蓋					外面ナデ	2.5Y7/1(灰白)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
155	231	V区P-32	包含層	弥生土器	壺	22					10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm程度の砂粒 長石(多) 黒雲母・石英(中)	
156	234	VI区P-33	包含層	弥生土器	甕	19					2.5YR7/3(浅黄)	1~4mm程度の砂粒 長石(多) 石英(中)	
157	191	III区北側道	包含層	弥生土器	甕	13.8					10YR6/4(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石・赤色酸化土粒(多)	
158	361	I区P-3	包含層	弥生土器	甕	16.6					7.5YR8/3(浅黄橙)	水こし粘土風 1mm程の長石・石英を少し含む	
159	233	VI区P-33	包含層	弥生土器	甕	14.8					10YR6/2(灰黄褐)	1mm程度の砂粒 長石(多) 黒雲母・石英(中)	
160	340	II区北側道	包含層	弥生土器	甕	13.1					2.5Y7/1(灰白)	0.5~1mm程度の砂粒 長石(多)・黒雲母(少)	
161	303	VI区南側道	包含層	弥生土器	甕	10.7					7.5YR6/2(灰褐)	0.5~2mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	外面に煤付着
162	227	VI区P-33	包含層	弥生土器	甕	10.7				外面タタキののちハケ	10YR7/3(鈍い黄橙)	1.5mm程度の砂粒 長石・石英(中)	
163	276	II区南側道	包含層	弥生土器	甕						10YR8/3(浅黄橙)	2mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
164	263	II区南側道	包含層	弥生土器	甕			6.8			10YR7/2(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石・石英(多)	
165	343	VI区北側道	包含層	弥生土器	甕			6.6			2.5YR5/6(明赤褐)	1~3mm程度の砂粒 石英(多) 長石(中)	
166	365	III区	包含層	弥生土器	高杯	21.1				口縁に2条の凹線	10YR6/4(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒 赤色酸化土粒(僅)	
167	341	VI区北側道	包含層	弥生土器	高杯					脚部に櫛描沈線	10YR7/2(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英(多) 長石(中)	
168	241	VI区P-34	包含層	弥生土器	高杯					脚部に櫛描沈線およびヘラ描き沈線	7.5YR6/4(鈍い橙)	1mm以下程の砂粒 長石・石英(少)	
169	356	VI区南側道	包含層	弥生土器	高杯						7.5YR6/6(橙)	1mm以下の砂粒 長石・石英(中)	
170	232	VI区P-33	包含層	弥生土器	ミニチュア	3.9		2.4			10YR6/3(鈍い黄橙)	0.5~2mm程度の砂粒 長石(多) 石英(中)	
171	237	VI区P-36	包含層	須恵器	杯蓋	13	13.4		4.2		2.5Y8/1(灰白)	1mm程の砂粒 石英・長石(中)	
172	337	VI区北側道	包含層	須恵器	杯蓋	12					N6/0(灰白)	1mm程の砂粒 長石(多)	
173	345	VI区北側道	包含層	須恵器	杯身	11.9					N7/0(灰白)	1mm程の砂粒 長石(少)	
174	336	VI区北側道	包含層	須恵器		19.9					5Y6/1(灰)	1mm程の砂粒	
175	185	III区北側道	包含層	須恵器	高台付杯						N6/0(灰)	1.5mm以下程の砂粒 長石(少)	
176	369	I区北側道	包含層	土師質土器	高台付碗			4.3			10YR6/6(橙)	0.5~3mm程度の砂粒 長石(多)・石英(少)	
177	330	V区北側道	包含層	土師質土器	高台付碗			4.6			10YR7/3(鈍い黄橙)	0.5~1mm程度の砂粒 黒雲母(少)	
178	333	VI区北側道	包含層	磁器	碗					削り出し高台	素地10YR8/2(灰白) 釉2.5Y7/2(灰黄)		
179	334	VI区北側道	包含層	備前焼	甕	22.6					5PB5/1(青灰)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
180	370	I区北側道	包含層	磁器	青磁	12.2		7.3	3.9	蓮弁文、削り出し高台	素地N8/1(灰白) 釉5G6/1(緑灰)		

石製品一覧

掲載 番号	実測 番号	地区名	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考
S1	9	Ⅲ区北側道		石匙	48	43	5	9.3	サヌカイト	
S2	16	Ⅲ区P-16		U.F.	66.5	28	7	9.3	サヌカイト	
S3	10	I区北側道		石鏃?	53	20	6.5	1.7	サヌカイト	
S4	2	Ⅳ区北側道		石鏃	37	18.5	5.5	3.5	サヌカイト	
S5	4	Ⅳ区北側道		石包丁	93	45.5	11.3	52.7	サヌカイト	打製
S6	5	Ⅳ区P-22		石鏃	25	17	3.8	1.1	サヌカイト	
S7	1	Ⅱ区南側道		石槍	105	23.5	11	24.9	サヌカイト	基部欠損
S8	6	Ⅳ区P-24		石鏃	16.5	11.5	2.4	0.4	サヌカイト	
S9	12	Ⅳ区南側道		石鏃	19	17.5	3	0.7	サヌカイト	
S10	8	Ⅲ区南側道		石鏃	20	18	3.5	0.8	サヌカイト	
S11	18	Ⅳ区北側道		石鏃	21.5	14.5	2.8		サヌカイト	
S12	7	Ⅳ区P-25		石鏃	22.5	19	3	0.8	サヌカイト	
S13	3	Ⅳ区南側道		石鏃	21	19	4.3	1	サヌカイト	先端欠損
S14	13	Ⅳ区南側道		石鏃	28.5	17	4	1.4	サヌカイト	先端欠損
S15	11	Ⅱ区北側道		石鏃	23	20	3.5	1.3	サヌカイト	
S16	17	V区北側道		石包丁	94	34.5	13	41.8	片岩	打製
S17	15	Ⅳ区P-20		石匙	50.5	31	5.7	9.7	サヌカイト	

第9章 北溝手遺跡

第1節 位置と経過

北溝手遺跡は、高梁川下流域東岸に広がる総社平野の北辺に位置する。平野の北側に連なる丘陵上には多くの古墳が点在し、著名な古代山城である鬼の城も所在する。また、南側の平野部には縄文時代から中世の集落が確認された南溝手遺跡や窪木遺跡、さらに南西には備中国府推定地が所在するなど、重要な遺跡が点在する一角にあたる。

遺跡が所在する平野は標高9 m前後で、条里地割が比較的よく残存している。道路はこの平野をほぼ東西に通過する計画で、その両側には側道が付設される。調査は高架となる本線の橋脚部（P）および北側の側道（北側道）と南側の側道（南側道）が対象となるが、調査範囲が東西に長いことから、路線を南北に横断する小道ごとに分割し、西端をⅠ区、東端をⅥ区とする六つの調査区を設定して実施した。

発掘調査は1993（平成6）年度と1994年度に実施した。1993年度は1994年3月11日から3月18日まで、Ⅰ区を中心に6名の調査員が担当した。調査面積は630㎡である。

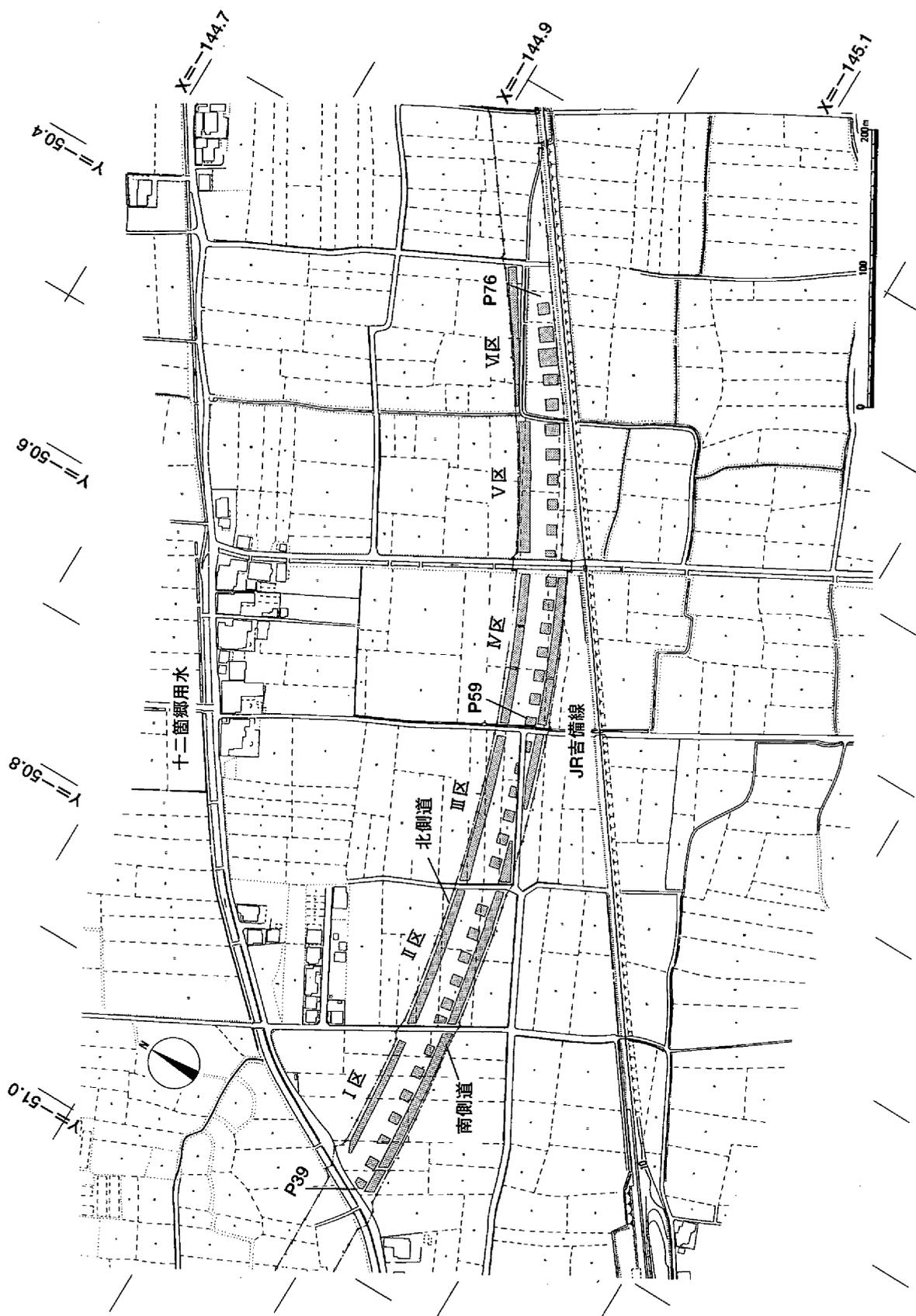
1994年度は1994年4月1日から1995年1月31日まで、10名の調査員が担当して行った。94年度は93年度に行ったⅠ区の一部以外をすべて実施した。調査面積は8666㎡である。（平井）

日誌抄

平成5年3月11日	Ⅰ区南側道の調査着手		V区橋脚・北側道の調査着手
3月18日	Ⅰ区南側道の調査終了	10月17日	Ⅵ区橋脚の調査着手
4月1日	Ⅱ区北側道の調査着手	10月24日	Ⅵ区北側道の調査終了
6月15日	Ⅰ区橋脚の調査着手	11月15日	V区橋脚・北側道の調査終了
6月16日	Ⅱ区北側道の調査終了		Ⅳ区橋脚の調査着手
7月14日	Ⅲ区北側道の調査着手、Ⅰ区 橋脚の調査終了	12月1日	Ⅳ区橋脚の調査終了
8月30日	Ⅲ区北側道の調査終了	12月5日	Ⅵ区橋脚の調査終了
9月1日	Ⅲ区橋脚・南側道の調査着手	平成6年1月10日	Ⅳ区南側道の調査終了
10月3日	Ⅲ区橋脚・南側道の調査終了		Ⅰ区北側道の調査着手
10月4日	Ⅱ区橋脚・南側道の調査着手	1月31日	Ⅰ区北側道の調査を終了し、 北溝手遺跡の調査を完了
10月11日	Ⅳ区北側道の調査着手		
11月12日	Ⅱ区橋脚・南側道の調査終了		

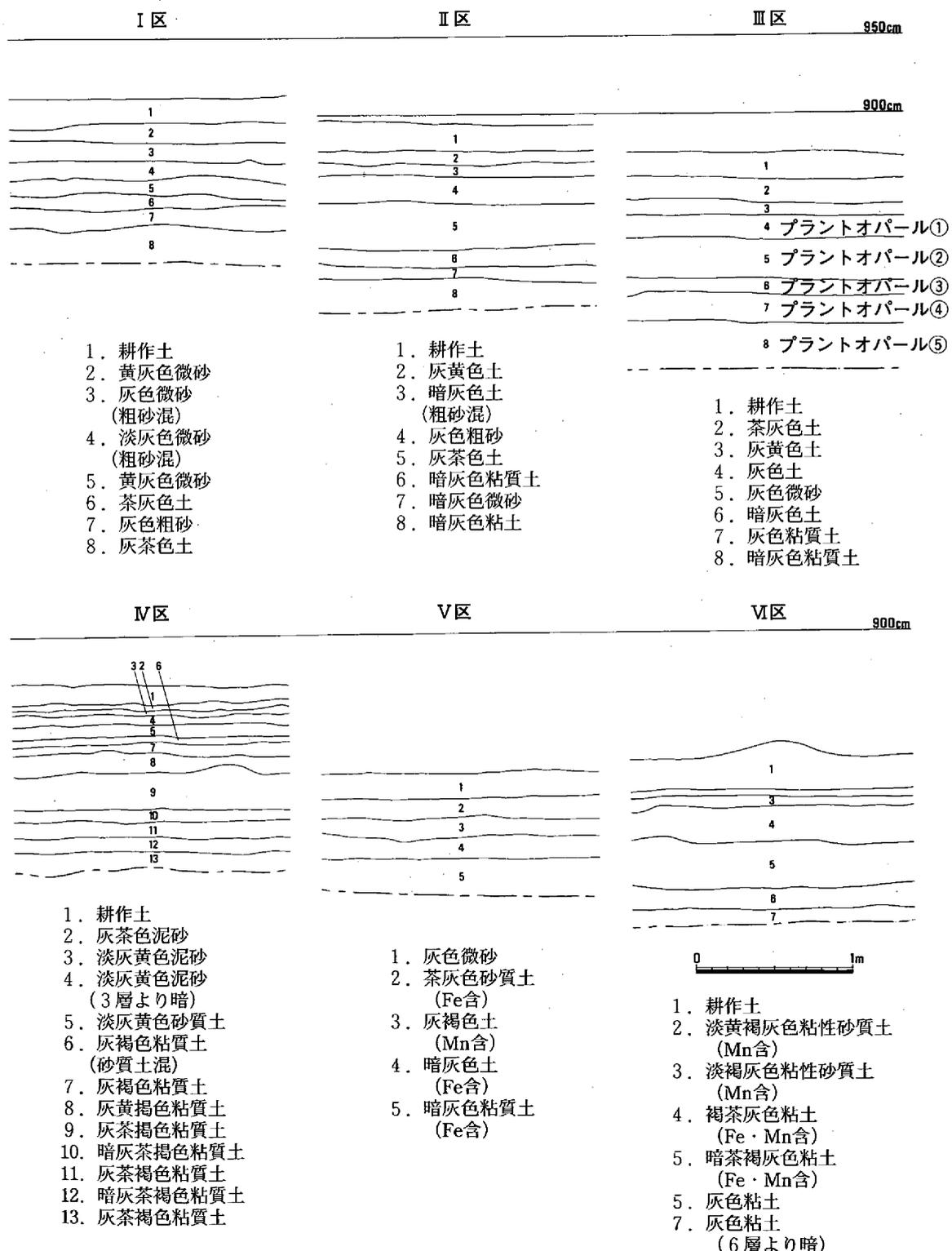
第2節 調査の概要

調査は橋脚部、北側道、南側道予定地について全面実施した。基本的な層位は第2図に示す通りで

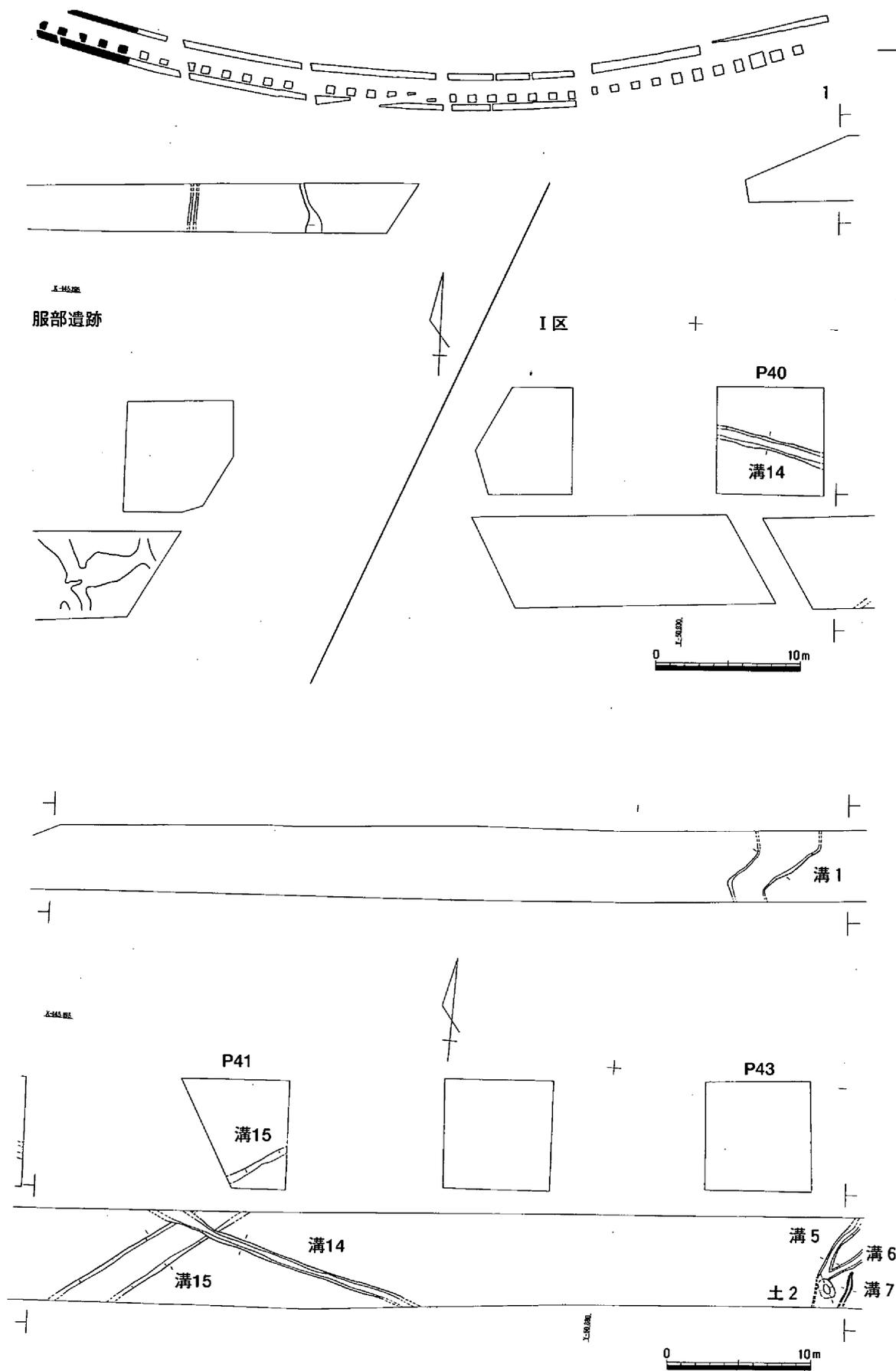


第1図 調査区位置図 (1/4000)

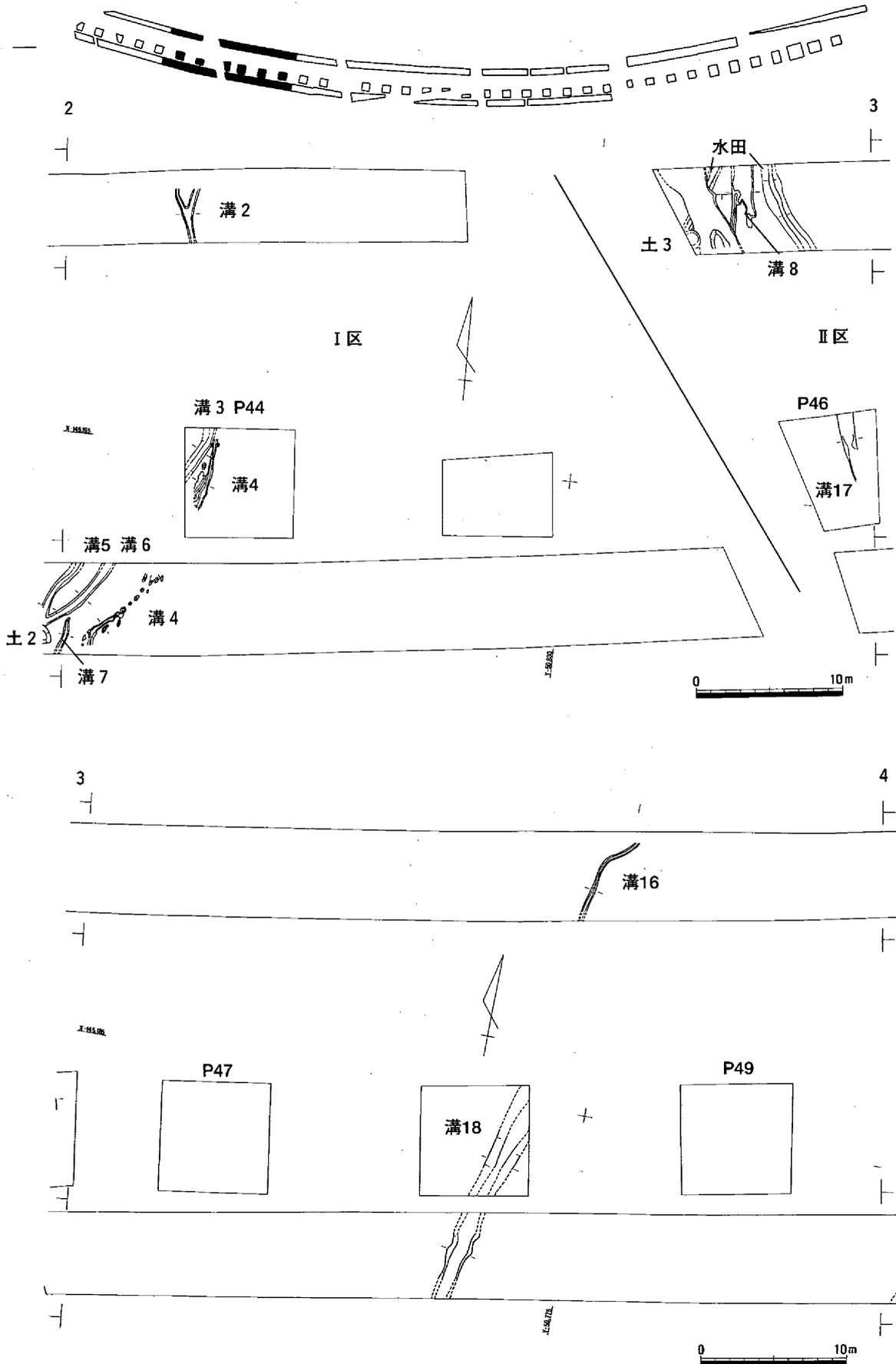
あるが、Ⅲ区北側道の低位部断面でプラント・オパール分析を行った。その結果4・5・6・7層からイネのプラント・オパールが検出された。また同時に行なった花粉分析においても7層からイネ属型が出現し始め、5・4層では増加するという結果がでている。したがって4～7層において稲作が行われていた可能性が強い。各層の時期については明確にし得ないが、7層には突帯文土器を含んでおり、4～6層はそれより新しい。長期間水田として利用されていたことが窺える。



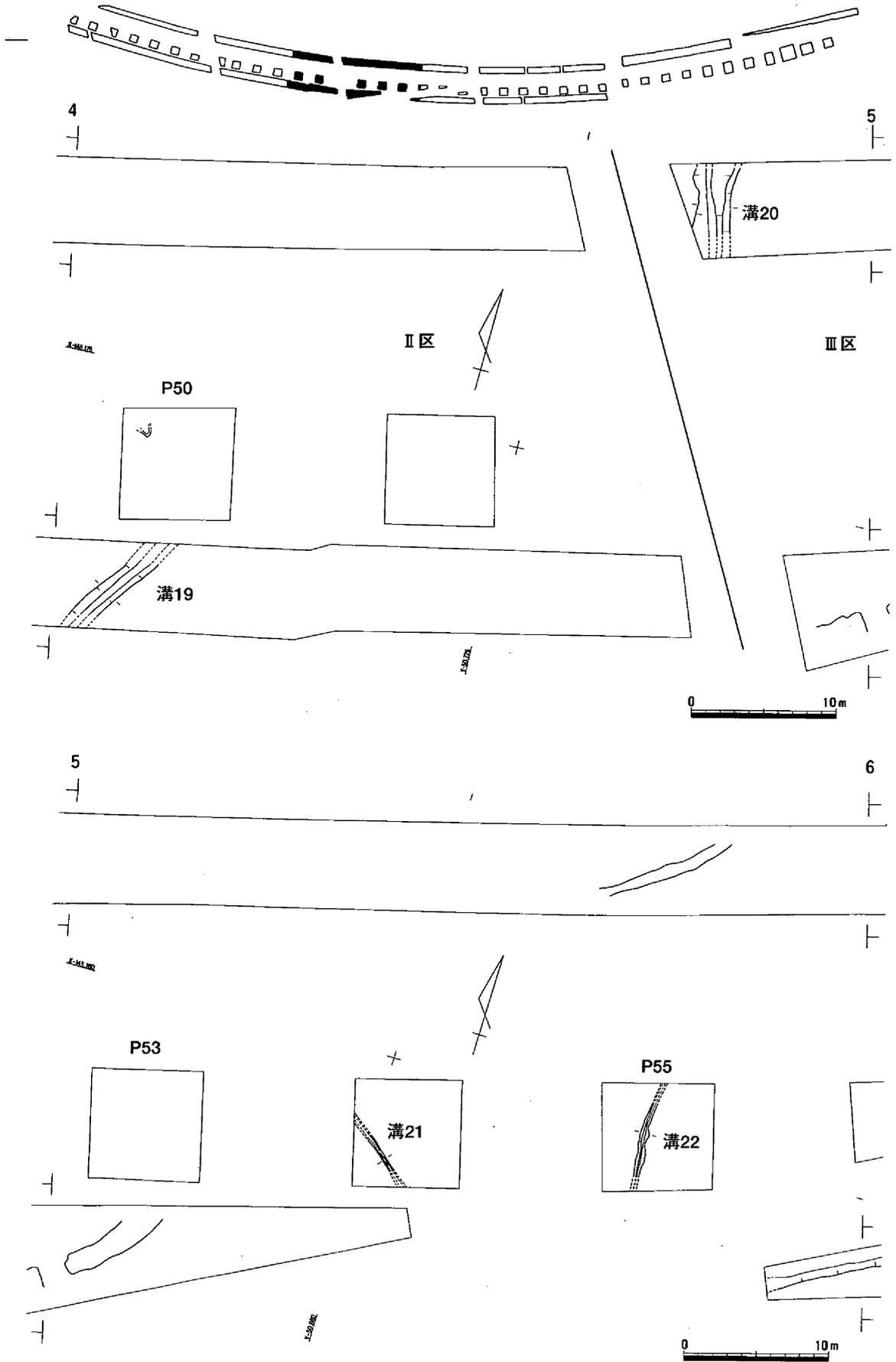
第2図 調査区土層柱状図 (1/40)



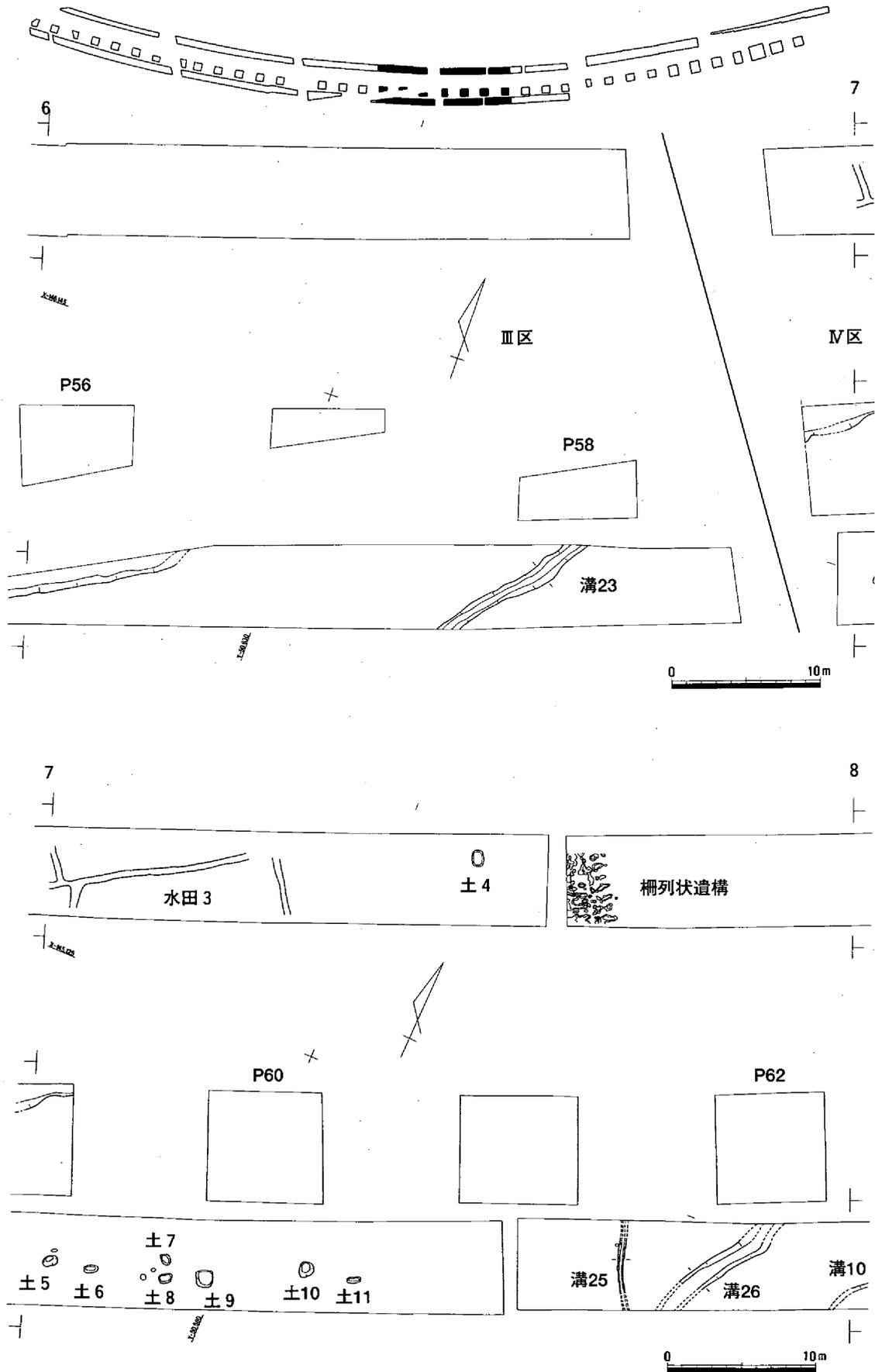
第3図 遺構配置図① (1/400)



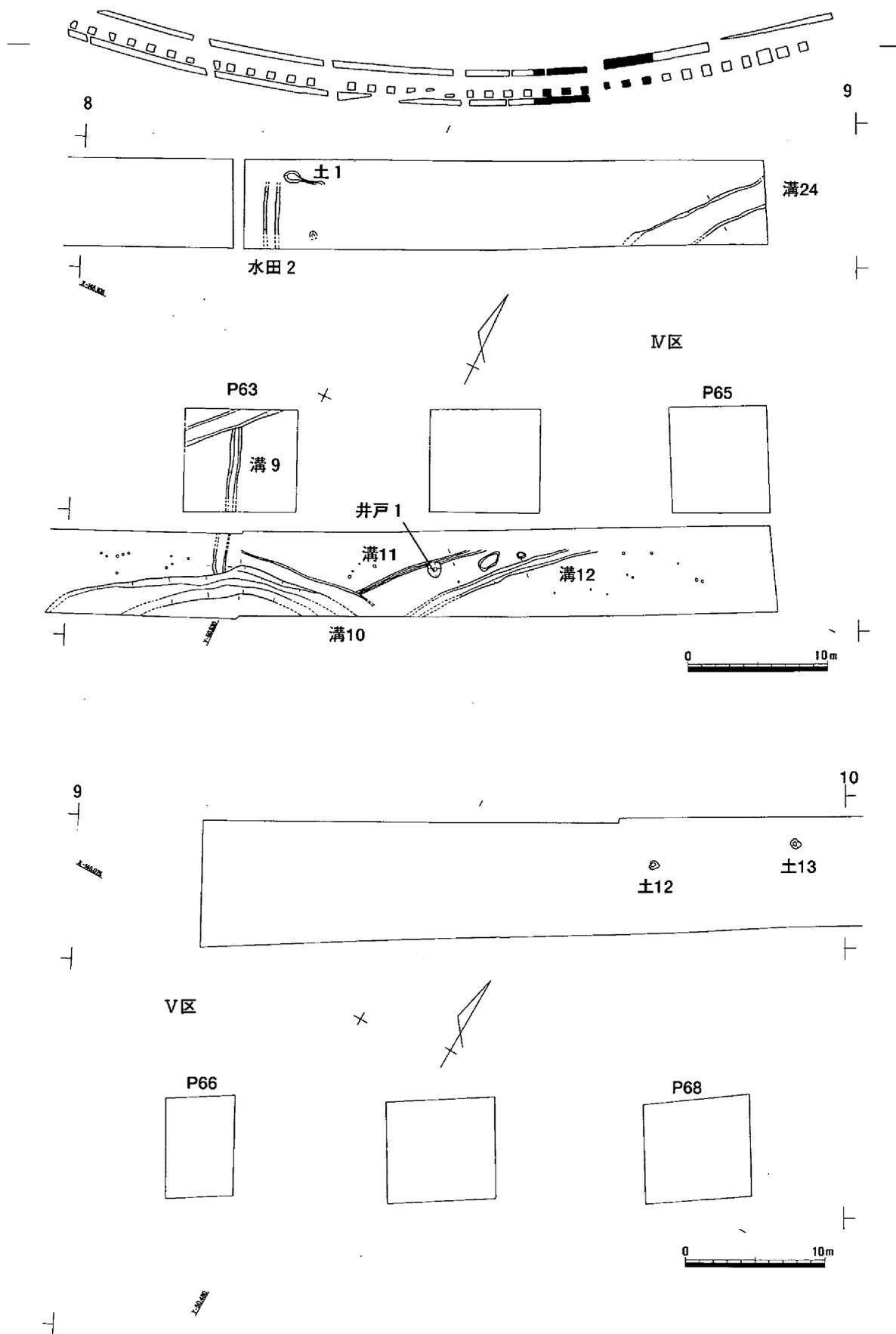
第4図 遺構配置図② (1/400)



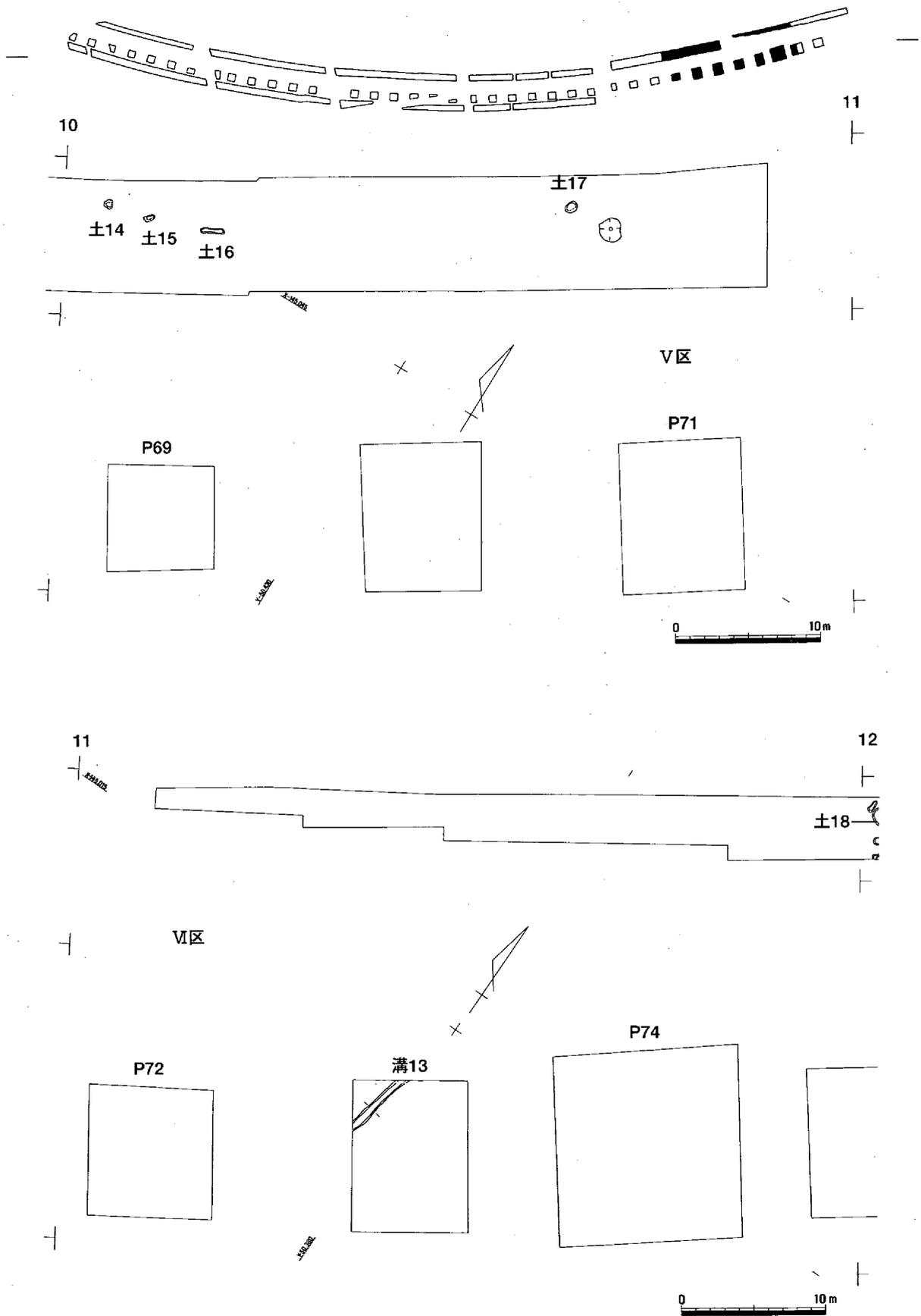
第5図 遺構配置図③ (1/400)



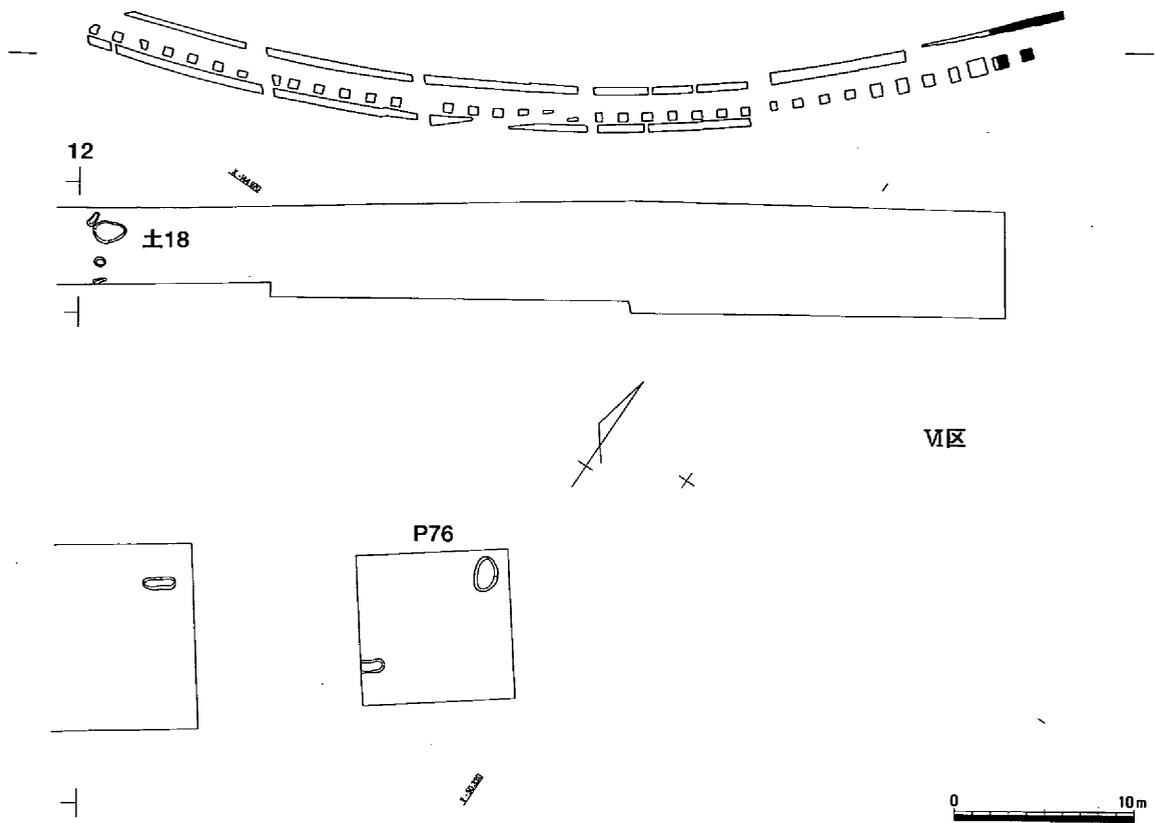
第6図 遺構配置図④ (1/400)



第7図 遺構配置図⑤ (1/400)



第8図 遺構配置図⑥ (1/400)



第9図 遺構配置図⑦ (1/400)

1. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

(1) 井戸 (第7・10図、図版72)

井戸はⅣ区南側道で検出された。平面形はやや歪んだ楕円形を呈し、南北1.15m、東西92cmを測る。内部は小さくほぼ平坦な底部から外傾する壁が立ち上がるが、底部に近い部分はやや急傾斜になる。検出面からの深さは65cmを測る。

埋土は上、中、下の三層に大別され、いずれの層もほとんど遺物は含まないが、わずかに1層と2層の境界付近で土師器の細片が認められた。遺構の時期は検出面と、埋土中の土師器の細片から古墳時代の前半期と推定される。 (平井)

(2) 土壙

土壙1 (第7・11図、図版72)

調査区中央やや東側のⅣ区北側道に検出された土壙である。土壙は、2基の楕円形の土壙が細い溝状のもので連続している特徴的な形態を有している。土壙内は、淡灰茶色粘質土が堆積しており、出土遺物は認められなかった。検出面などからみて弥生前半期か。 (中野)

(3) 溝

溝1 (第3・12図)

I区北側道で検出された溝で、流走方向は明確にし得ないが、多少蛇行しながらほぼ南北方向に延びるものと考えられる。規模は幅が2.2mを測るものの、深さは30cmと浅い。溝の断面は幅が広くてほぼ平坦な底部から暖やかに立ち上がる壁をもつ。遺構の時期は遺物が出土していないため明確にし得ない。

溝2 (第4・13図)

I区北側道で検出された南北方向に流走する溝である。検出された部分はY字状に分流する場所で、規模は合流部がやや幅広くなるものの幅30~40cm、深さ5cm前後を測る。

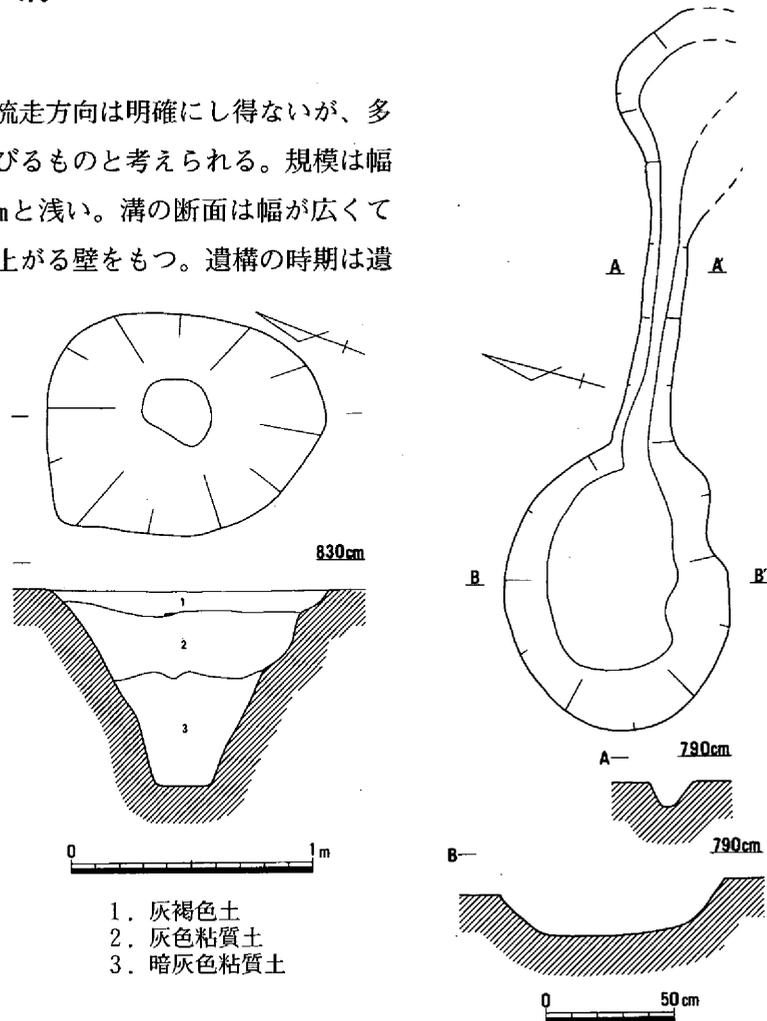
埋土は灰白色微砂である。時期は弥生時代前期か。

溝3 (第4・14図)

I区P44で検出された溝で、北東から南西方向に流走すると考えられる。規模は幅55cm前後、深さ20cm前後を測る。溝の断面は底部が幅広い平坦面をもち、壁は急傾斜で立ち上がる。おそらく南側道の溝6に続くものと思われる。時期は弥生時代前期か。

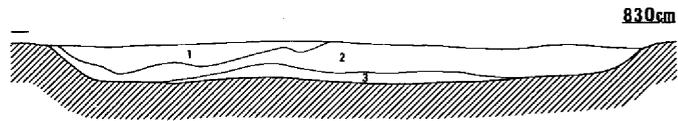
溝4 (第4・15図)

I区P44から南側道において検出された浅い溝ないし浅い凹みの連続した遺構である。流走方向はほぼ北東から南西方向であるが、P44では南北方向に近くなる。埋土は灰白色砂である。



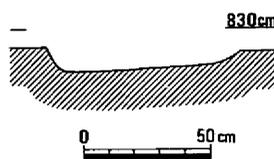
第10図 井戸1 (1/30)

第11図 土坑1 (1/30)

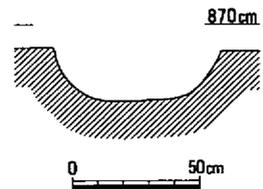


第12図 溝1 (1/30)

第12図
1. 灰色粘質土
2. 黄灰色粗砂
3. 灰色粗砂



第13図 溝2 (1/30)



第14図 溝3 (1/30)

遺構周辺の検出面からは弥生時代前期の土器が出土した。

溝5 (第3・4・16図、図版73)

I区南側道で検出された溝で、ほぼ北東から南西方向に流走する。南端は溝6と合流するが、土壌2に切られているため不明である。規模は幅50cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は粗砂である。遺物は出土しなかったが、検出面から弥生時代と考えられる。

溝6 (第3・4・17図、図版73)

I区南側道で検出された溝で、南端は溝5と合流し、北側はP44の溝3に続くものと考えられる。流走方向は北東から南西方向になる。規模は幅60cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は灰白色粗砂である。遺物は出土していないが、検出面から弥生時代と推定される。

溝7 (第3・4・18図)

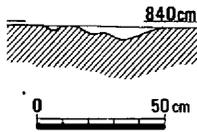
I区南側道で検出された長さ約1.5mの溝で、ほぼ南北方向に流走する。溝の北端はこれで終るものと思われるが、南端はさらに調査区外へ延びる。規模は幅30cm前後、深さ5cm前後を測る。埋土は灰褐色粗砂である。時期は検出面から弥生時代と考えられる。

溝8 (第4・19図)

II区北側道で検出された溝で、ほぼ南北に流走する。溝の北半は幅広いが、南半は細い二条の溝に分れ、そのうちの西側の溝の南端は中世の溝に切られている。規模は幅1.4m前後、深さ10cm前後を測る。時期は弥生時代から古墳時代の間に推定される。

溝9 (第7・20図)

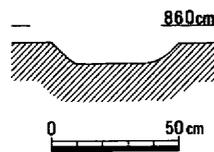
IV区P63および南側道で検出された溝で、北西から南東方向に流走する。溝は北西端を溝24で切られ、また南東端は溝10によって切られている。埋土は暗灰茶色粘質土である。時期は遺構の切り合う関係から、弥生時代後期以前か。



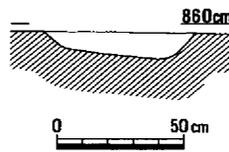
第15図 溝4 (1/30)

溝10 (第6・7・21図、図版73)

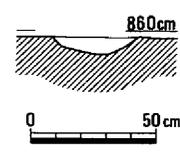
IV区南側道で検出された溝で、南側を囲むような弧を描いている。規模は幅1.4m前後、深さ1.5m前後を測る。溝の断面はほぼU字形を呈するが、上端は両側が外に向かって緩やかに広がる。埋土は三層



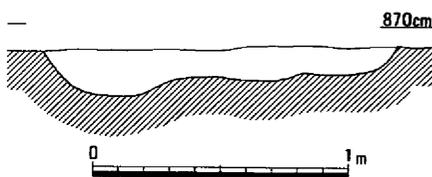
第16図 溝5 (1/30)



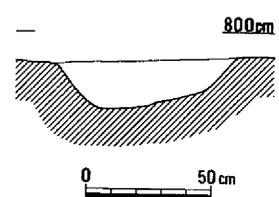
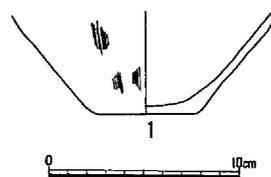
第17図 溝6 (1/30)



第18図 溝7 (1/30)



第19図 溝8 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



第20図 溝9 (1/30)

に大別され、1～3層は上層、4・5層が中層、6～10層の下層となる。いずれの層にも遺物は極めて少なく、弥生土器の細片が少量出土した。

図示し得た土器は4点で、2は甕、3は甕の底部、4は高杯の脚部、5は鉢である。いずれも弥生時代中期末の特徴をよく示している。溝の埋没は、後期初頭の土器も出土していることからほぼその時期に求められよう。

溝11 (第7・22図)

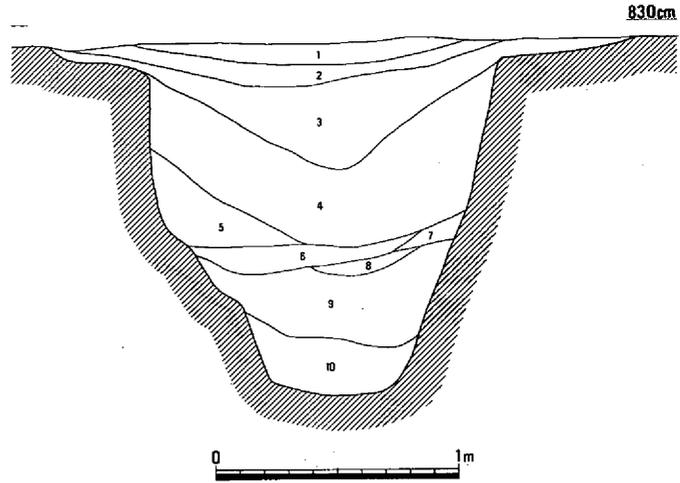
Ⅳ区南側道で検出された溝で、北東から南西方向に流走するが、南西端は溝10に切れ、北東端はさらに調査区外へ延びる。規模は幅35cm前後、深さ10cm前後を測る。溝内より遺物は出土していないが、井戸1に切られていることや、検出面などから弥生時代と考えられる。

溝12 (第7・23図)

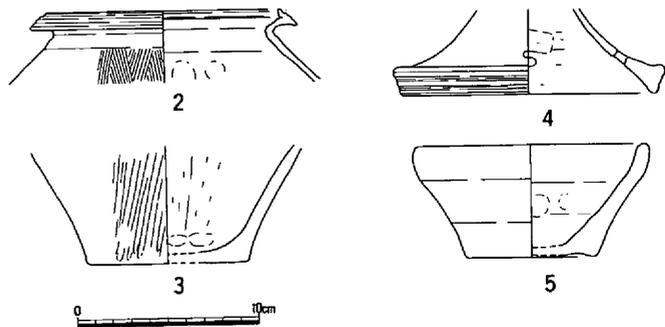
Ⅳ区南側道で検出された溝で、溝11と平行して北東から南西方向に流走するが、北東端、南西端ともに調査区外へ延びる。規模は幅70cm前後、深さ10cm前後を測る。溝の断面は弧を描く底部から緩やかに壁が立ち上がる。遺物は出土していないが、弥生時代と考えられる。(平井)

溝13 (第8・24図)

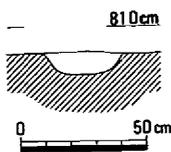
Ⅵ区P73に位置し、南北方向の溝で北側から南に橋脚部を斜めに約4m呈検出した。検出面での幅55cm、深さ18cmを測る。出土遺物がなく時期は不明である。(伊藤)



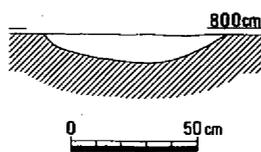
- | | |
|----------------------|------------------------|
| 1. 淡灰褐色微砂 | 6. 淡灰色粘質土
(暗灰色粘質土混) |
| 2. 灰褐色微砂 | 7. 淡青灰色粘質土 |
| 3. 淡灰色微砂
(黄灰色土塊含) | 8. 暗灰色粘質土 |
| 4. 灰色粘質土
(灰色微砂塊含) | 9. 暗灰色粘土 |
| 5. 暗灰色粘質土
(褐色土混) | 10. 灰黒色粘土 |



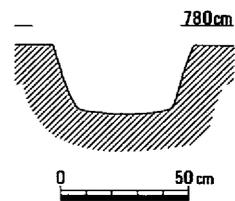
第21図 溝10 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第22図 溝11 (1/30)



第23図 溝12 (1/30)



第24図 溝13 (1/30)

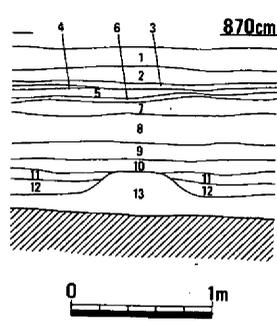
(4) 水田

水田1 (第4図、図版74)

Ⅱ区北側道の西端で検出した水田で、畦畔の一部が認められた。弥生時代後期から古墳時代の土器を含む黄灰白色粗砂層を除去すると、茶灰色粘質砂層になり、その一部が畦畔状に盛り上がっていたことから水田と考えた。ただ、水田層は東へ広がっているにも関わらず、畦畔は検出し得なかった。畦畔のうち大畦畔は幅1m、高さ10cm前後、小畦畔は幅70cm、高さ5cm前後を測る。なお、さらに下層において、低い島状高まりと水田層を確認したが、畦畔がないため明確でない。(平井)

水田2 (第7・25図、図版74)

調査区中央やや東側のⅣ区北側道で検出された。第25図第10層の暗灰茶色粘質土を除去するとほぼ南北方向に畦畔状の高まりが確認された。畦畔は、幅約80cm、高さ約15cmで比較的規模は大きかった。この畦畔は、第13層を削り出した状況を示しており、第11・12層が水田耕作土である可能性が高い。北側道Ⅳ区で、この面での検出を試みたものの他に畦畔は認められなかった。水田の時期は、検出面から推察して弥生前半期におさまると考えられる。(中野)



- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1. 耕作土 | 10. 暗灰茶色粘質土
(黒色に近い) |
| 2. 灰黄褐色泥砂 | 11. 暗灰茶色粘質土
(10より灰色が淡) |
| 3. 淡黄褐色泥砂 | 12. 暗灰茶色粘質土
(11より茶色が淡) |
| 4. 淡黄灰色砂泥 | 13. 暗灰茶色粘質土
(粘質強) |
| 5. 淡灰黄色砂質土 | |
| 6. 灰黄色砂質土 | |
| 7. 暗灰黄色粘質土 | |
| 8. 暗灰茶色粘質土
(や砂に近い) | |
| 9. 暗灰茶色粘質土 | |

第25図 水田2 畦畔断面 (1/60)

2. 古代以降の遺構と遺物

(1) 土壇

土壇2 (第3・4・26図)

Ⅰ区南側道で検出された土壇で、平面形は大略楕円形を呈する。南西側の一部を側溝によって切られているが、規模は長軸1.4m、短軸1.2mを測る。遺構の時期は、出土した肥前の鉢から江戸初期頃(1630~40年代)と考えられる。

土壇3 (第4・27図)

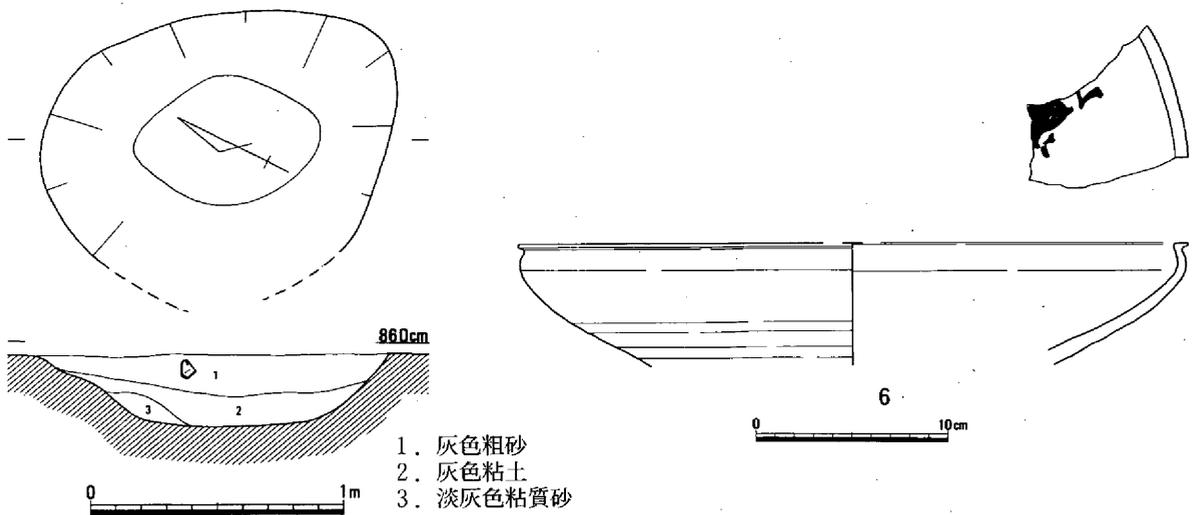
Ⅱ区北側道で検出された土壇である。南西側を側溝によって切られているため平面形は明確でないが、円形であろう。埋土は灰褐色土である。時期は検出面から近世と考えられる。(平井)

土壇4 (第6・28図、図版74)

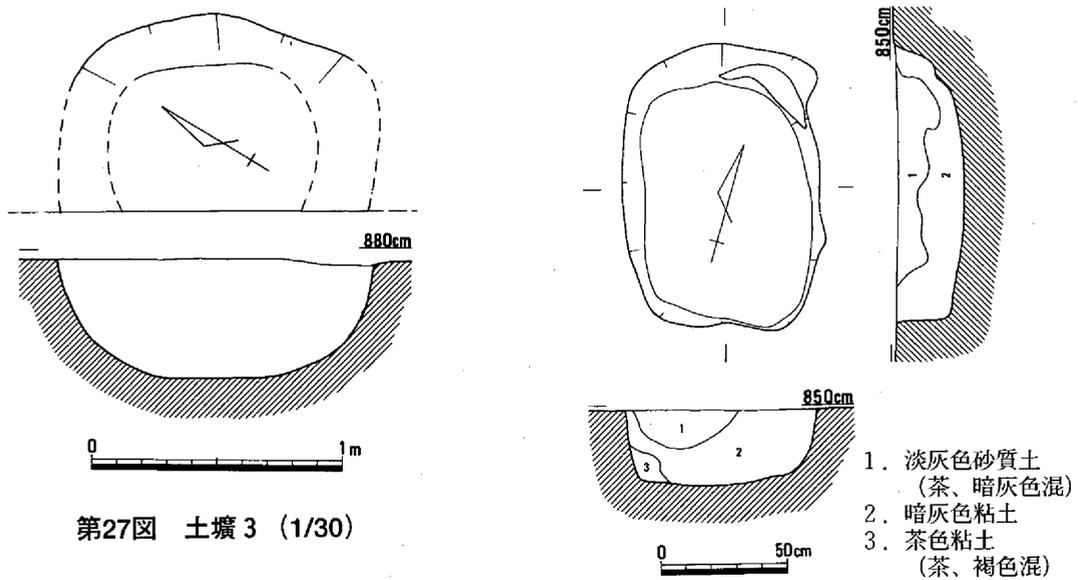
調査区中央やや東側のⅣ区北側道に検出された。規模は、108×78cmで楕円形を呈し、深さは約30cmを測る。出土遺物はないものの検出面、埋土などからみて中世以降と考えられる。(中野)

土壇5 (第6・29図)

Ⅳ区南側道で検出された土壇で、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1m、短軸65cm、深さ47cm



第26図 土壌 2 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第27図 土壌 3 (1/30)

第28図 土壌 4 (1/30)

を測る。埋土は黄灰色微砂である。遺構の時期は検出面から中世と推定される。

土壌 6 (第 6・30図)

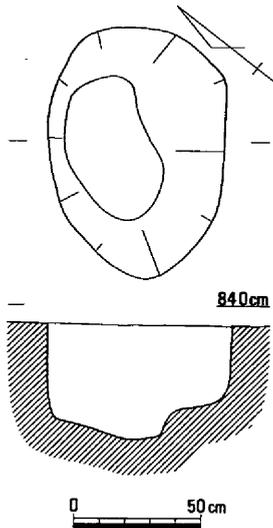
Ⅳ区南側道で検出された土壌で、平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸95cm、短軸50cm、深さ36cmを測る。埋土は黄灰色微砂である。遺構の時期は検出面から中世と考えられる。

土壌 7 (第 6・31図)

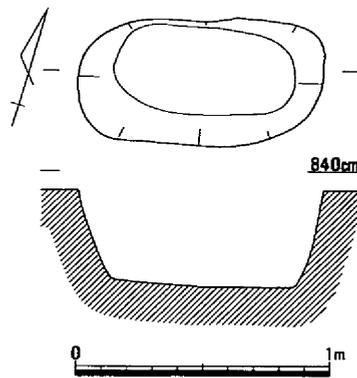
Ⅳ区南側道で検出された土壌で、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸58cm、深さ12cmを測る。埋土は灰褐色土塊を含む黄灰色微砂である。時期は検出面から中世と思われる。

土壌 8 (第 6・32図)

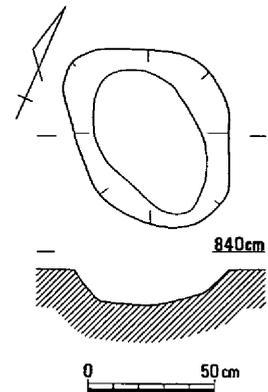
Ⅳ区南側道で検出された土壌で、平面形は大略長方形を呈する。規模は長軸86cm、短軸62cm、深さ8cmを測る。埋土は灰茶色土塊を含む黄灰色微砂である。時期は中世と推定される。



第29図 土壌5 (1/30)



第30図 土壌6 (1/30)



第31図 土壌7 (1/30)

土壌9 (第6・33図)

IV区南側道で検出された土壌で、平面形は方形を呈する。南辺を一部欠くが、規模は1辺1.1m前後、深さ18cmを測る。埋土は灰茶色土粒を含む黄灰色微砂である。時期は中世か。

土壌10 (第6・34図)

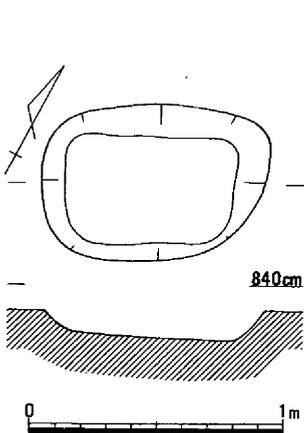
IV区南側道で検出された土壌で、平面形は大略楕円形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸1m、深さ17cmを測る。埋土は灰茶色土粒を含む黄灰色微砂である。時期は中世と考えられる。

土壌11 (第6・35図)

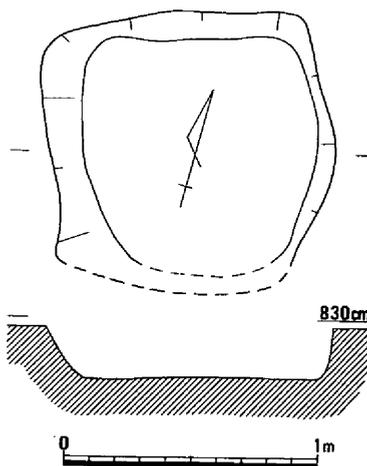
IV区南側道で検出された土壌で、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸92cm、短軸40cm、深さ6cmを測る。埋土は灰茶色土塊を含む淡灰黄色微砂である。時期は中世と考えられる。

土壌12 (第7・36図)

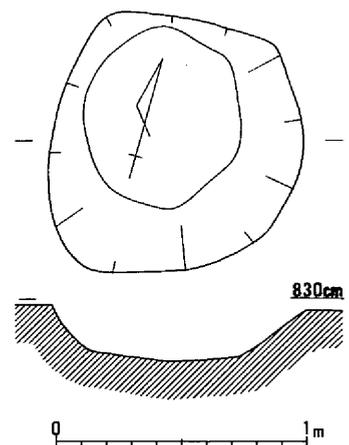
V区南側道で検出された土壌で、平面形は不定形なアメーバー状を呈している。規模は最大長74cm、深さ20cmを測る。遺構の時期は検出面および埋土から中世と考えられる。



第32図 土壌8 (1/30)



第33図 土壌9 (1/30)



第34図 土壌10 (1/30)

土壌13 (第7・37図)

V区北側道で検出された土壌で、平面形は不正円形を呈する。規模は最大長80cm、深さ14cmを測る。埋土は灰色土塊を含む灰黄色微砂である。時期は検出面から中世と考えられる。

土壌14 (第8・38図)

V区北側道で検出された土壌で、平面形は不定形なアメーバー状を呈する。規模は最大長68cm、深さ14cmを測る。遺構の時期は検出面および埋土から中世と推定される。

土壌15 (第8・39図)

V区北側道で検出された土壌で、平面形は大略長楕円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸40cm、深さ13cmを測る。埋土中から土器の細片が出土した。時期は中世と考えられる。

土壌16 (第8・40図)

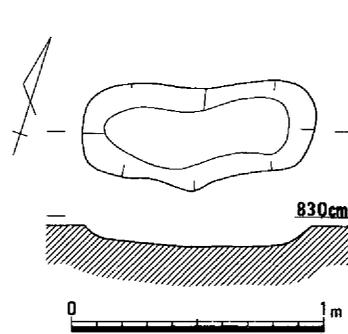
V区北側道で検出された土壌で、平面形は細長い楕円形を呈する。規模は長軸1.6m、短軸26cm、深さ12cmを測る。埋土は灰色微砂含む灰黄色微砂である。時期は中世か。

土壌17 (第8・41図)

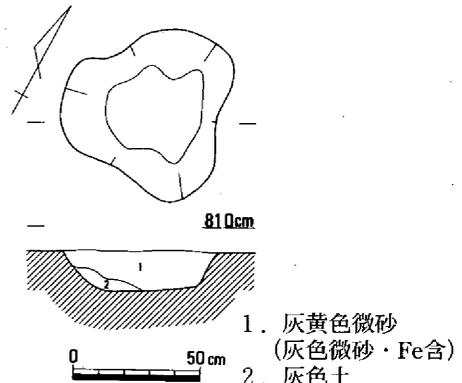
V区北側道で検出された土壌で、平面形は楕円形を呈する。規模は長軸84cm、短軸68cm、深さ6cmを測る。埋土は灰色土塊を含む灰白色微砂である。時期は中世と考えられる。 (平井)

土壌18 (第8・9・42図)

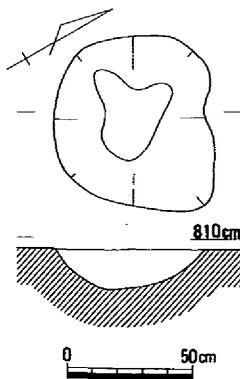
VI区北側道で検出された土壌で、平面形は不正楕円形を呈する。規模は長軸196cm、短軸122cm、深さは24cmで低部は平坦である。埋土は灰褐色粘質土が中心である。出土遺物はなく時期は不詳であるが近世・近代以前であろう。 (伊藤)



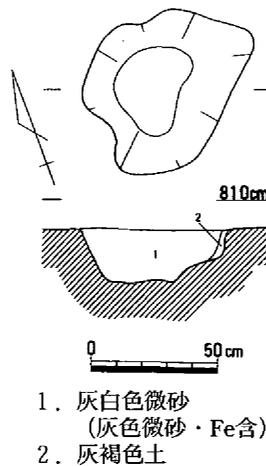
第35図 土壌11 (1/30)



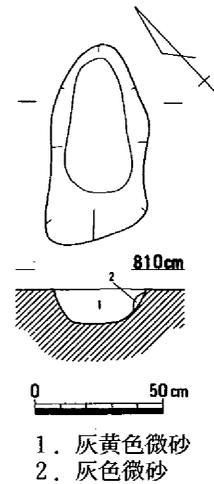
第36図 土壌12 (1/30)



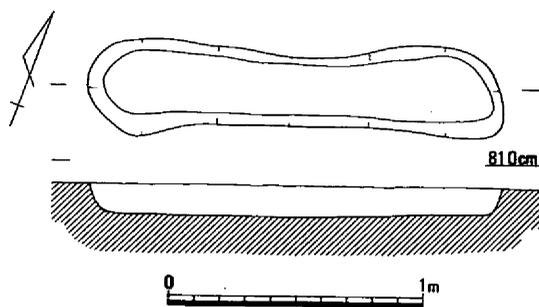
第37図 土壌13 (1/30)



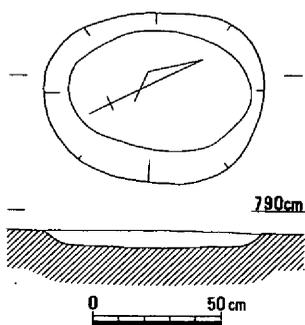
第38図 土壌14 (1/30)



第39図 土壌15 (1/30)

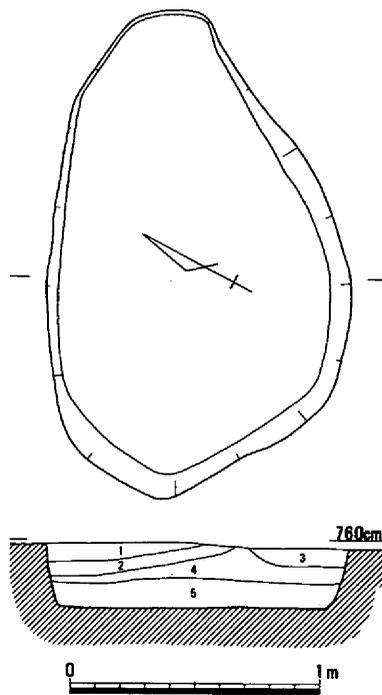


第40図 土坑16 (1/30)

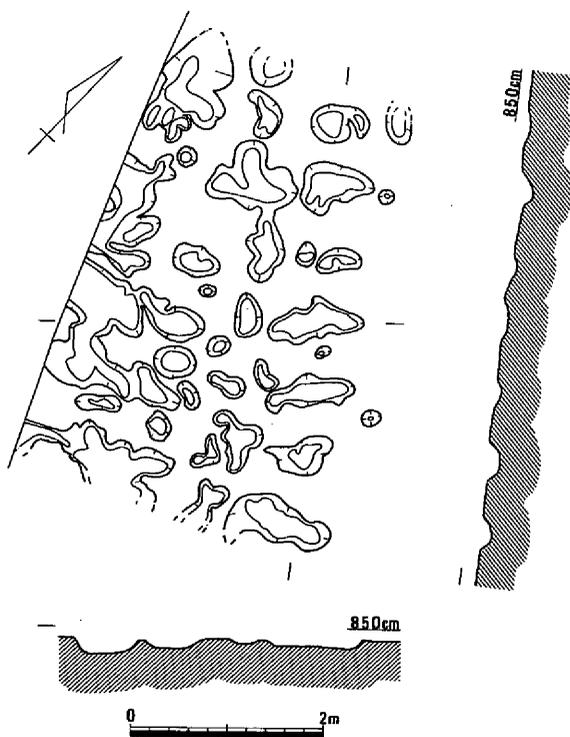


第41図 土坑17 (1/30)

1. 灰褐色粘質土 (多量のMn含)
2. 灰褐色粘質土
3. 暗灰褐色粘質土
4. 暗灰色粘質土
5. 暗灰色粘質土 (茶色土混)



第42図 土坑18 (1/30)



第43図 柵列状遺構 (1/80)

(2) 柵列状遺構 (第6・43図)

調査区中央やや東側のIV区北側道に検出された。この遺構は、第25図の第6層の下層に、ほぼ北西～南東方向に検出され、不整形な柱穴状のものが少なくとも4条以上が列をなしている。深さは、10～20cmを測るが一定ではない。この遺構の性格については不明であるが、調査区西約20mに検出された水田の畦畔痕跡の方位と共通する。出土遺物はないものの検出面から古墳時代～中世と考えられる。(中野)

(3) 溝

溝14 (第3・44図、図版75)

I区P44から南側道において検出された溝で、北西から南東方向へ流走する。規模は幅90cm前後、深さ12cm前後を測る。埋土は灰色粗砂である。時期は遺物がないため

不明であるが、検出面および埋土から中世と推定される。

溝15 (第3・45図)

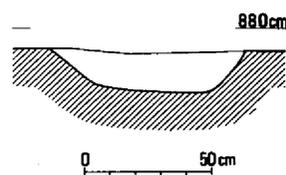
I区P41から南側道において検出された溝で、北東から南西方向に流走する。規模は幅2.5m前後、深さ40cm前後を測る。埋土は三層に大別されるが、多くは粗砂である。溝の時期は中世と考えられる溝14に切られているものの、同じ中世に属するものと思われる。

溝16 (第4・46図)

II区北側道で検出された溝である。大略北東から南西方向に流走するが、北半部は少し東側へ折れ曲る。規模は幅35cm前後、深さ6cm前後を測る。遺物が出土していないため時期の詳細は不明であるが、検出面および埋土から中世と考えられる。

溝17 (第4・47図)

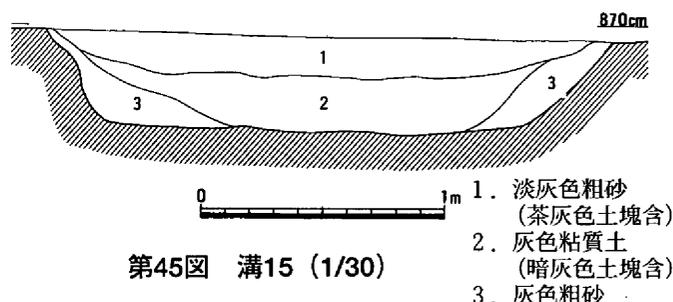
II区P46で検出された溝である。ほぼ南北方向に流走するが、北側道および南側道では検出されなかった。規模は幅90cm前後、深さ20cm前後を測る。出土遺物がなく時期については明確にしないが、検出面および埋土から中世と推定される。



第44図 溝14 (1/30)

溝18 (第4・48図)

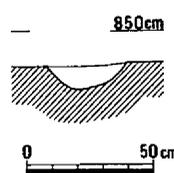
II区P48から南側道で検出された溝である。北東から南西方向に流走するが、北側道では検出されていない。規模は幅1.5m前後、深さ10cm前後を測る。埋土は二層に大別されるが、いずれにも遺物は認められなかった。溝の時期は検出面および埋土から中世と考えられる。



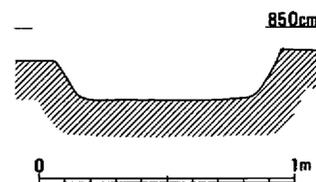
第45図 溝15 (1/30)

溝19 (第5・49図)

II区南側道で検出された溝で、北東から南西方向に流走する。溝は調査区外へ延びているが、P50ではその延長方向にあるにもかかわらず、検出されなかった。規模は幅1.5m前後、深さ45cm前後を測る。埋土は灰色微砂である。遺物がなく時期の詳細は不明であるが、埋土から中世と考えられる。



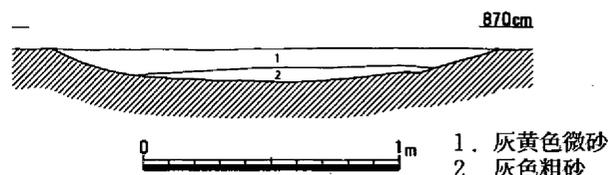
第46図 溝16 (1/30)



第47図 溝17 (1/30)

溝20 (第5・50図)

III区北側道で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走し、両端は調査区外へ延びる。規模は幅2.5m前後、深さ20cm前後を測る。断面形はほぼ平坦で幅の広い底部から緩やかに壁が立ち上がる形状を呈する。埋土は三層に大別される

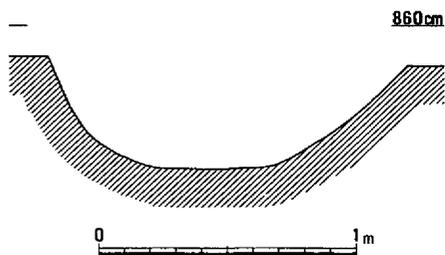


第48図 溝18 (1/30)

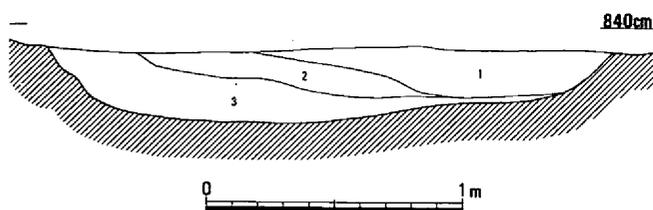
が、いずれも微砂ないし粗砂である。遺物は土師器の細片がわずかに出土した。図示した土器は土師器碗の底部である。溝の時期は中世と考えられる。

溝21 (第5・51図)

Ⅲ区P54で検出された溝である。北西から南東方向に流走し、両端は調査区外へ延びる。規模は幅30cm前後、深さ10cm前後を測る。断面形は浅いU字形を呈する。埋土は灰色微砂である。時期は検出面および埋土から中世と考えられる。

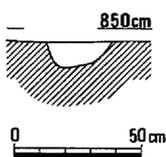


第49図 溝19 (1/30)

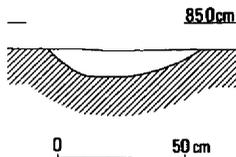


- 1. 淡灰色微砂
- 2. 茶黄色粗砂
- 3. 淡灰色微砂 (黄色土塊含)

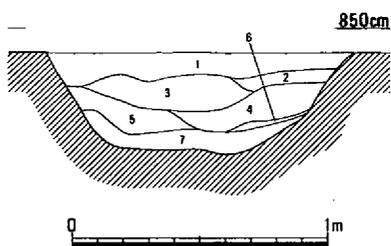
第50図 溝20 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



第51図 溝21 (1/30)



第52図 溝22 (1/30)



第53図 溝23 (1/30)

- 1. 灰黄色微砂
- 2. 灰色微砂
- 3. 灰色砂質土
- 4. 灰色細砂混土
- 5. 灰色粗砂
- 6. 灰色細砂
- 7. 灰色粘質土

溝22 (第5・52図)

Ⅲ区P55で検出された溝で、ほぼ南北方向に流走し、両端は調査区外へ延びる。規模は幅40cm前後、深さ10cm前後を測る。埋土は灰色微砂である。溝の時期は検出面および埋土から中世と思われる。

溝23 (第6・53図)

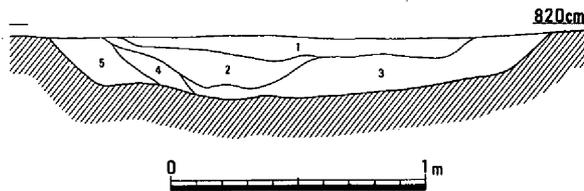
区南側道で検出された溝である。北東から南西方向へ流走し、南端は調査区外へ延びる。しかし、その延長上にあたるP58では検出されなかった。規模は幅1m前後、深さ25cm前後を測る。埋土は何層にもわたる堆積状況を呈している。溝の時期は検出面および埋土から中世と推定される。

溝24 (第7・54図、図版75)

Ⅳ区P63から北側道において検出された溝で、北東から南西方向に流走する。北東端、南西端ともに調査区外へ延び、南西端の延長上にあたる南側道の溝26は同一の溝である可能性がある。規模は幅の広い場所で1.8m前後、狭い場所で1.1m前後、深さ23cm前後を測る。時期は中世と考えられる。

溝25 (第6・55図)

Ⅳ区南側道で検出された溝である。北西から南東方向へ流走し、両端は調査区外へ延びる。規模は幅40cm前後、深さ6cm前後を測る。埋土は灰色微砂である。遺物がないため時期の詳細は不明であるが、検出面および埋土から中世と考えられる。

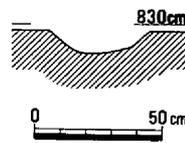


第54図 溝24 (1/30)

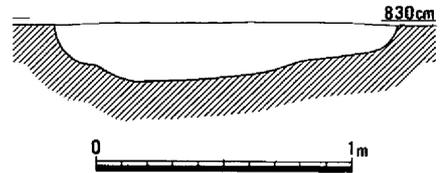
1. 茶灰色砂泥
(粘土混)
2. 暗茶灰色粘質土
(砂混)
3. 灰茶褐色砂泥
(灰色粘土・粘土混)
4. 灰褐色砂
5. 灰褐色砂質土
(茶色土混)

溝26 (第6・56図)

Ⅳ区南側道で検出された溝である。北東から南西方向へ流し、両端は調査区外へ延びるが、その延長上にあたるP62では検出されなかった。しかし、さらに北東側で検出された溝24とは同一と考えられる。(平井)



第55図 溝25 (1/30)



第56図 溝26 (1/30)

(4) 水田

水田3 (第6図)

この水田は、調査区ほぼ中央のⅣ区北側道に検出された。水田は、第25図第7層の上面で鉄、マンガンが分離集積した畦畔の痕跡と考えられるものが確認された。畦畔痕跡は、北東から南西方向を中心に、北西方向に1条、南東方向に2条が検出され、各々の畦畔痕跡は直交する位置関係を示している。南東方向の2条は、その間が約13mを測る。(中野)

3. 遺構に伴わない遺物 (第57・58図、図版76)

各遺構だけではなく、包含層を含めても全体的に遺物は少ない。遺物は土器が最も多く、少量の石器に加え、わずかに土製品が認められた。

土器は縄文時代から近世に属するものまで認められるが、いずれもわずかな量である。このうち図示し得たのは11点である。8は縄文晩期の深鉢の口縁部である。外面には二枚貝による条痕調整が施されている。

9はⅢ区北側道から出土した縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。口縁部外面には突帯をめぐらせ、その上に刻目を施す。また口縁部にも浅い刻目がめぐる。口縁部内面には浅い沈線がめぐる。

10はⅢ区北側道から出土した縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。口縁部外面には突帯を貼付け、その上に刻目を施す。また口縁端部にも刻目をめぐらす。

11はⅠ区南側道で出土した縄文時代晩期の深鉢の口縁部である。口縁部外面には刻目を施す突帯をめぐらす、その位置は口縁端部に接している。

12はⅠ区南側道で検出した弥生時代前期の壺である。タマネギ状の胴部にハの字状の頸部がつき、口縁部は外反ぎみに短かく立ち上がる。口縁端部を欠くが、おそらく丸く収めていると思われる。頸

部と口縁部の境界には2条の沈線がめぐり、頸部と胴部の境界には上下を沈線状に削り取った突帯がめぐる。胎土には砂粒を多く含む。

13はI区北側道から出土した弥生時代前期の壺である。胴部はあまり張り出さず、肩部がわずかにすぼまって頸部となる。胴部最大径付近に沈線を二条施す。胎土には砂粒を多く含む。

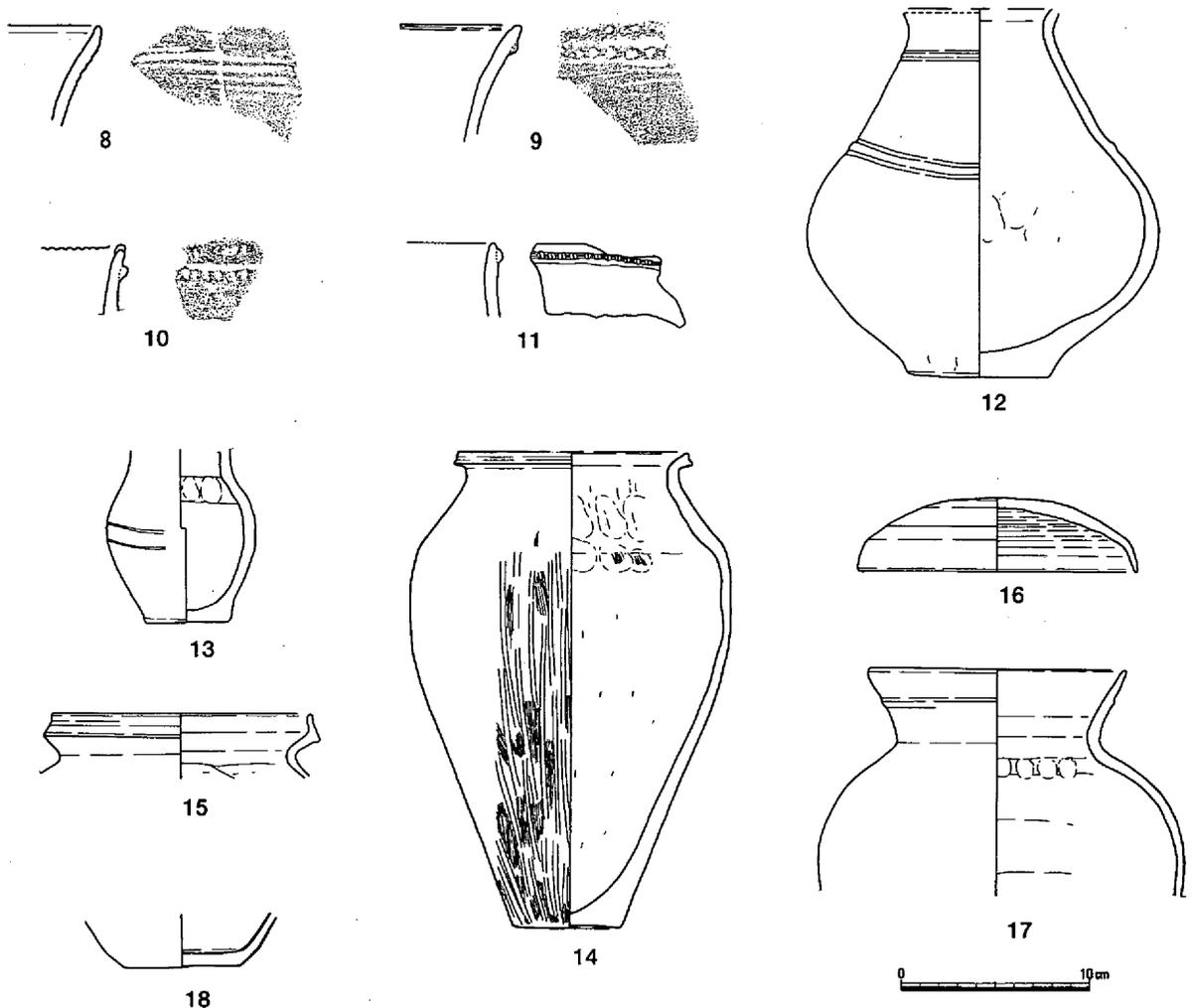
14はIV区北側道で出土した弥生時代後期初頭の甕である。調整は胴部外面をハケ後ヘラミガキ、内面はヘラケズリである。口縁部はヨコナデしている。

15はII区北側道で出土した土師器の甕の口縁部である。口縁端部は内傾ぎみに立ち上がり、内外面をヨコナデで仕上げている。時期は古墳時代初頭と考えられる。

16はIV区P62から出土した須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部の境はやや明瞭さに欠ける。天井部は時計回りのヘラケズリで仕上げている。口縁端部は丸く収める。

17はIV区P73で出土した須恵器の壺である。逆ハの字状に開く口縁部には突線がめぐり、それより上側は器壁が薄く仕上げられる。

18はIV区P60から出土した中国産口禿の皿の底部である。時期は13~14世紀前半と考えられる。



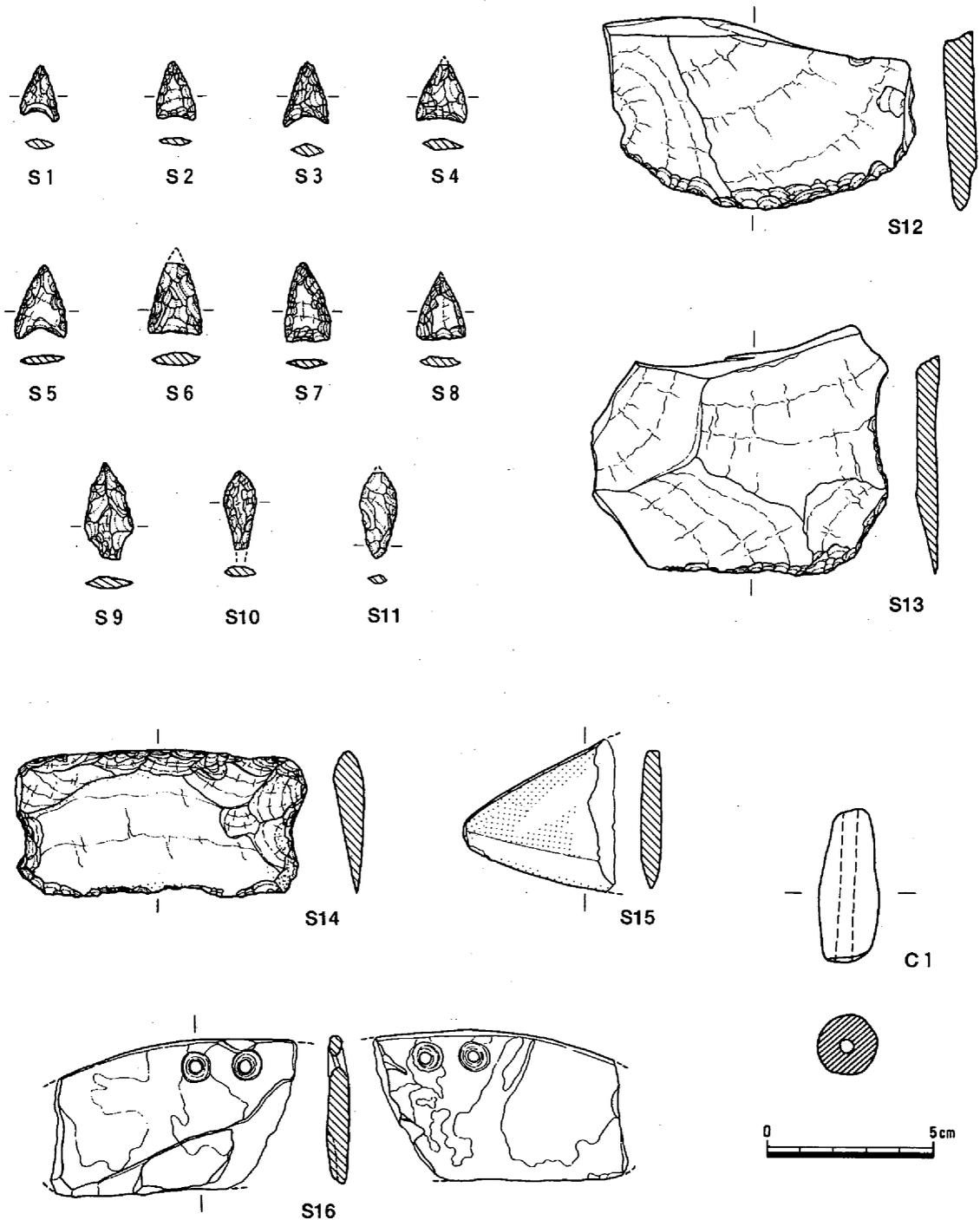
第57図 遺構に伴わない遺物 (1/4)

石器は石鏃を主体に石包丁等が出土している。S1からS11は石鏃で、材質はいずれもサヌカイトである。凹基（S1～S5）、平基（S6～S8）、有茎式（S9～S10）がある。

S11はサヌカイト製の石鏃であり、先端部が欠損している。

S12はサヌカイト製のスクレイパーである。刃部は丁寧な調整がなされているが、背部は全く調整が施されていない。

S13はサヌカイト製のスクレイパーである。刃部はわずかに調整が施されているが、その他は未調整である。



第58図 遺構に伴わない遺物 (1/2)

S14はサヌカイト製の打製石包丁である。長方形を呈し、両短辺には抉りを施す。刃部は剥片の縁辺を利用し、わずかに調整を施す。背部は丁寧に磨り潰している。

S15は緑色片岩製の磨製石包丁である。使用による光沢がみられる。

S16は緑色片岩製の磨製石包丁である。両端を欠くが、端はS15のように尖りぎみになるものと考えられる。中央の背部側には円孔が2個穿たれている。

土製品は土錘が1点出土している。全体に磨滅している。時期は中世と思われる。

第3節 結 語

北溝手遺跡からは縄文時代から中世・近世にいたる遺構・遺物が発見されているが、その量ははなはだ少ない。縄文時代晩期については土器片がⅠ区・Ⅲ区・Ⅳ区からわずかに出土したが、遺構は検出されなかった。南側に広がる南溝手遺跡では岡山県立大学建設に伴う調査⁽¹⁾において、多くの遺構・遺物が出土しており、集落の中心にあたるものと思われるが、北溝手遺跡はその北側縁辺部にあたる。

弥生時代から古墳時代の微高地はⅠ区およびⅣ・Ⅴ区で認められ、それ以外は低位部が広がっている。このうちⅣ区南側道では南側を囲むように弧を描く大溝が発見された。出土土器から後期初頭と推定されるが、同時期の同形態を呈する大溝が、南側の南溝手遺跡から岡山県立大学建設に伴う調査において検出⁽²⁾（溝158）されている。直接つながっていないため、同一の溝であるかどうかは明確でないが、北溝手遺跡の大溝が南側を囲むように屈曲しているのに対し、南溝手遺跡の大溝は北側の集落を囲むように配置されていることから、両者ともに集落を囲む溝の一部である可能性は強い。

中世の遺構は、多くが溝である。溝はそのほとんどが、北東から南西方向ないし北西から南東方向に流走する。

ところで、北溝手遺跡が所在する一帯は条里地割が極めて良好に認められ、ここが「備中国賀夜郡服部郷図」に描かれた地域であることはほぼ間違いない。この条里地割と関係する遺構については不明であるが、中世の溝8および溝30が条里の方向と一致する。しかし、その他の中世の溝は全く条里の方向を無視しており、すべて条里の軸線から45°ずれて統一されていることは注意を要する。中世の段階では現在見られる地割とは異なる地割が存在したことを推測させる資料ではあるが、現在の農道や水路を残しての調査であり、今後さらに検討が必要である。 (平井)

註

(1) a. 平井泰男・久保恵里子ほか「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100 岡山県教育委員会 1995年

b. 平井泰男・久保恵里子ほか「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』107 岡山県教育委員会 1996年

(2) 註(1)bの文献に掲載されている溝158

遺物一覽

土器

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径(cm)	最大径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	139	Ⅱ区北側道	溝 8	弥生土器	甕			5.4		外面ハケ調整。内面剥落のため不明。	10YR5/4(鈍い黄褐)	2.5~3mm程の石粒(3~5個) 長石、石英(中)	底部外面2次焼成のため赤変
2	138	Ⅳ区南側道	溝 10	弥生土器	甕	12.8				口縁に4条の凹線。胴部外面ハケ。内面押圧	10YR7/2(鈍い黄橙)	0.5mm前後の砂粒 石英(中)、長石、金雲母	
3	137	Ⅳ区南側道	溝 10	弥生土器	甕			8.6		外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	0.1~2mm前後の砂粒(多) 長石、石英(多)、赤色酸化土	
4	133	Ⅳ区南側道	溝 10	弥生土器	高杯					脚端部に凹線2条。円孔1ヶ所のみ確認。内面はヘラケズリ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	0.2~2mm前後の砂粒(多) 長石、石英(多)、赤色酸化土粒(少)	
5	128	Ⅳ区南側道	溝 10	弥生土器	鉢	12.4	13	7	6.2	内外面押圧およびヨコナデ。	2.5Y5/4(鈍い赤褐)	0.5~3.2mm程の砂粒 長石、石英(多)、白雲母(中)	
6	130	Ⅰ区南側道	土壇 2	陶器	鉢	35					素地2.5Y7/1(灰白) 釉調10Y7/1(灰白)	砂粒はあまり見られない	
7	127	Ⅲ区北側道	溝 20	土師質土器	高台付椀			7.1		内外面ナデ。	2.5Y8/2(灰白)	0.5mm程の赤色酸化土粒(僅)	
8	160	Ⅳ区北側道	包含層	縄文土器	深鉢					アルカ属貝条痕の後ナデ。	10YR8/3(浅黄橙)	0.5mm以下の砂粒 長石、石英(多)	
9	126	Ⅲ区北側道	包含層	縄文土器	深鉢					内外面ナデ。口唇および突帯に刻み目。	10YR5/2(灰黄褐)	2.5~3mm程の石粒(3~4個) 1mm程の砂粒 長石、石英(多)、雲母(僅)	
10	135	Ⅲ区北側道	包含層	縄文土器	深鉢					内外面ナデ。口唇および突帯に刻み目。	10YR6/3(鈍い黄橙)	4mm程度の砂粒 石英、長石(多)	
11	142	Ⅰ区南側道	包含層	縄文土器	深鉢					内外面ナデ。突帯に刻み目。	2.5Y7/4(浅黄)	1mm程の砂粒 石英、長石(多)	
12	143	Ⅰ区南側道	包含層	弥生土器	壺		18.6	7.5		頸胴部に削り出し突帯。器表面剥落のため調整不明瞭。	10YR7/2(鈍い黄橙)	3mm前後の砂粒(多) 石英、長石(多)、黒い0.2mm程の砂粒	
13	140	Ⅰ区北側道	包含層	弥生土器	壺		7.9	4.3		胴部に削り出し突帯状に沈線2条を施す。	2.5Y7/1(灰白)	2~5mm程の石粒(多) 2mm以下の砂粒 長石、石英(多)、角閃石(少)	
14	159	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	甕	13.5				口縁並張部はヨコナデ。胴部内面ヘラケズリ。	10YR8/2(灰白)	1~2mm程度の砂粒 長石、石英(多)、雲母(中)	
15	144	Ⅱ区北側道	包含層	弥生土器	甕	12	16.9	5.7	25.2	口縁端部凹む。外面ハケの後ミガキ。内面上半押圧ナデ、下半ケズリ。	10YR8/1(灰白)	2~4mm程の砂粒(中) 2mm以下の砂粒 長石、石英(多)、赤色砂粒(僅)	
16	132	Ⅳ区P-62	包含層	須恵器	杯蓋	14.8			3.9	口縁端部は丸く取め、ケズリの方向は時計回り。	N7/0(灰白)	1mm程度の砂粒 長石(多)	
17	158	Ⅳ区P-73	包含層	須恵器	壺	13.6				口縁に1条の突線施す。胴部外面、縦方向のハケの後ヨコナデ。	N5/0(灰)	0.2~1.5mm前後の砂粒 長石、石英、灰色っぽい砂粒(多)	
18	141	Ⅳ区P-60	包含層	陶器	皿			6		底部外面を除き7.5Y7/1(灰白)の釉かかる。底部はケズリ。	5Y7/1(灰白)	1mm程の砂が自然袖に付着	

石製品

掲載番号	実測番号	地区名	包含層	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
S1	6	Ⅱ区北側道	灰茶色土層	石 鏃	17	12	3	0.3	サヌカイト	
S2	14	V区P-67	灰黄色微砂層	石 鏃	17	12	3	0.6	サヌカイト	
S3	3	Ⅳ区北側道	4層最下層	石 鏃	19.5	13.5	3.5	0.6	サヌカイト	先端欠損
S4	12	V区北側道	灰色土層	石 鏃	17	15.5	3.2	0.7	サヌカイト	先端欠損
S5	1	V区P-68	灰茶褐色土層	石 鏃	22.5	15.5	2.5	0.7	サヌカイト	
S6	16	V区北側道	側 溝	石 鏃	21.5	16.5	4.1	1.3	サヌカイト	先端欠損
S7	17	V区北側道	灰色微砂層	石 鏃	24	14	3	1	サヌカイト	
S8	8	Ⅲ区北側道	包含層	石 鏃	19	14.5	3	0.9	サヌカイト	基部欠損
S9	11	Ⅳ区北側道	5 層	石 鏃	29	14.5	4	1.4	サヌカイト	基部欠損
S10	13	Ⅳ区P-60	灰色土層	石 鏃	24	9.5	3	0.6	サヌカイト	基部欠損
S11	2	Ⅱ区北側道	灰色粘土層	石 鏃	26	11.5	3.3	0.9	サヌカイト	先端欠損
S12	7	Ⅱ区北側道	灰茶色土層	スクレイパー	93	58	11.5	65	サヌカイト	
S13	5	Ⅱ区北側道	包含層	スクレイパー	88.5	76	8	70.4	サヌカイト	
S14	15	Ⅱ区P-47	灰褐色土層	石 包丁	88.5	44	9	45.9	サヌカイト	打製
S15	9	Ⅲ区北側道	包含層	石 包丁	46	46	6	17.8	緑色片岩	磨製
S16	4	Ⅳ区北側道	包含層	石 包丁	76.5	46	7	38.2	緑色片岩	磨製

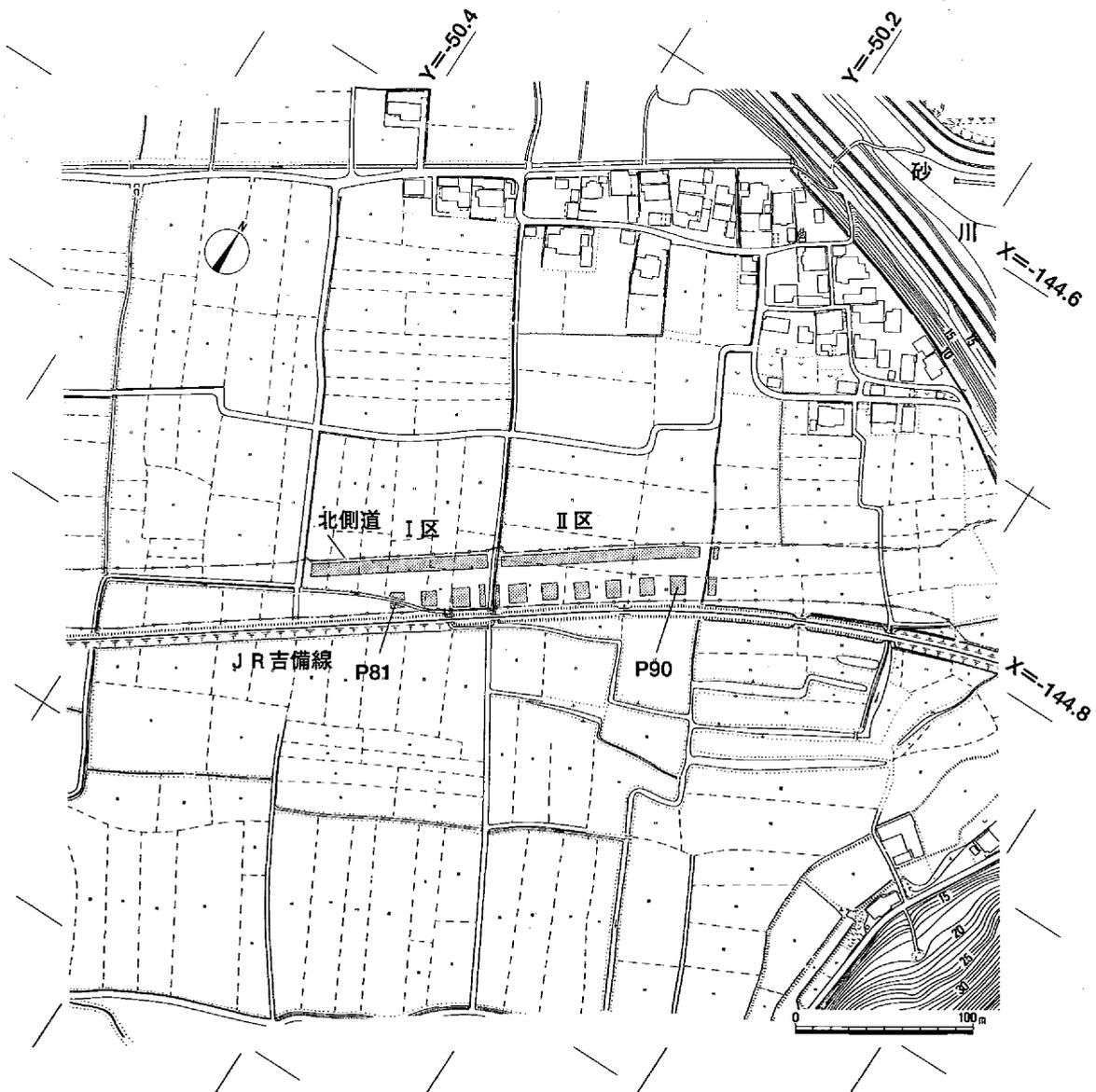
土製品

掲載番号	実測番号	地区名	包含層	器種	最大長	最大幅	最大厚	重量	材質	備考
C1	125	Ⅳ区南側道	灰色微砂層	土 鏃	46.9	17.5	18	15.38	中 世	全体に磨滅

第10章 窪木遺跡

第1節 位置と経過

窪木遺跡は総社市窪木字中道にあり、総社平野の北側を北西から南東に流走する砂川が、長良山丘陵にぶつかる西に位置し、弧口集落の南側にあたり、調査地のすぐ南をJR吉備線が走る。北溝手から窪木のJR吉備線の南側には岡山県立大学の校内であり先年発掘調査が行われた。窪木遺跡の第1次調査は平成5年4月19日から21日まで10ヶ所のトレンチを入れ、北溝手・窪木の境界付近で古代以前の水田層が検出された他は湿地状を呈していた。しかし県立大学の調査において弥生時代の溝等があり、T-18以西にそれが延びる可能性も考えられ、北側道、橋脚部の調査を平成6年11月17日～12



第1図 調査区位置図 (1/4000)

月2日の間に約2500㎡の発掘調査を行った。

日誌抄

平成5年4月19日～21日 第一次確認調査

平成6年10月11日 服部遺跡から機材移動

12日 調査開始

13日 I区北側道調査着手

17日 橋脚部調査着手

25日 II区北側道調査着手

28日 I区北側道調査終了

12月2日 II区北側道調査終了

3日 北溝手遺跡橋脚部移動調査開始

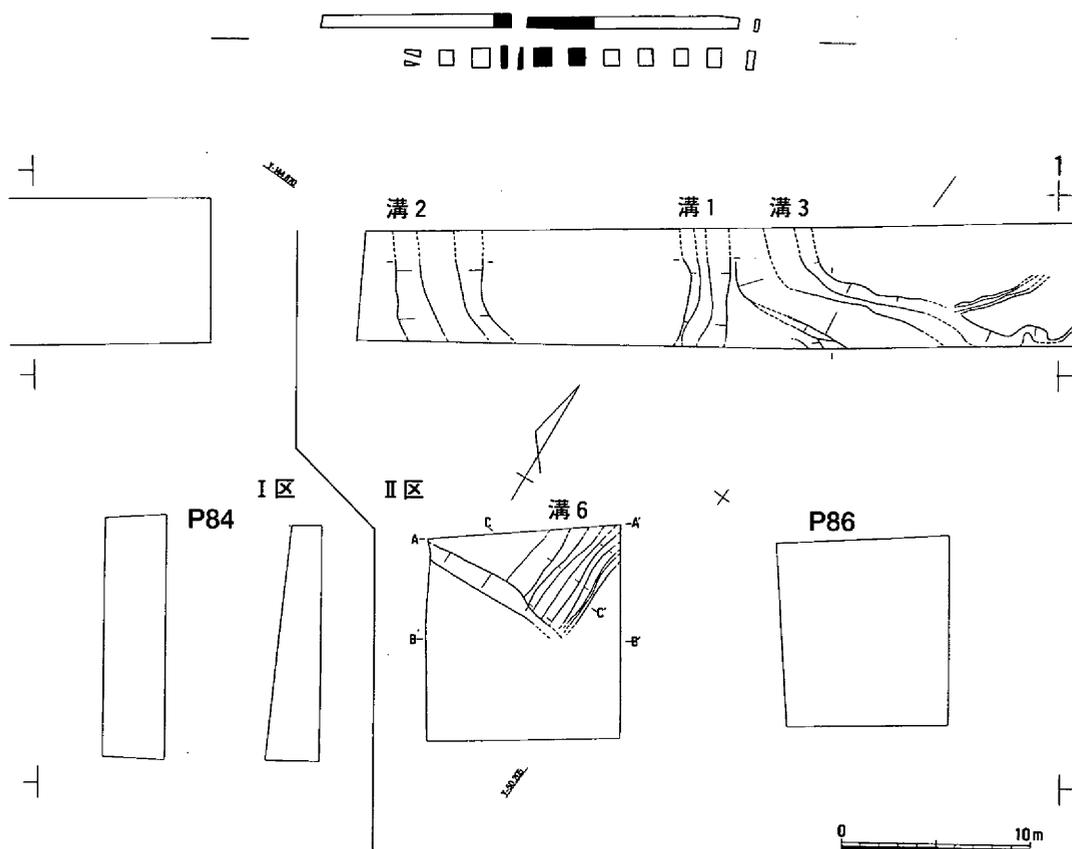
5日 橋脚部調査終了

6日 高松田中遺跡へ機材搬出

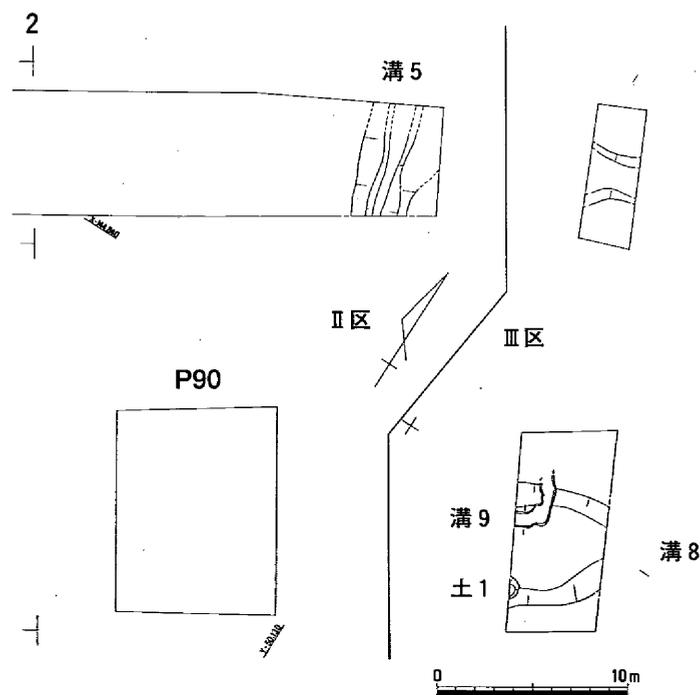
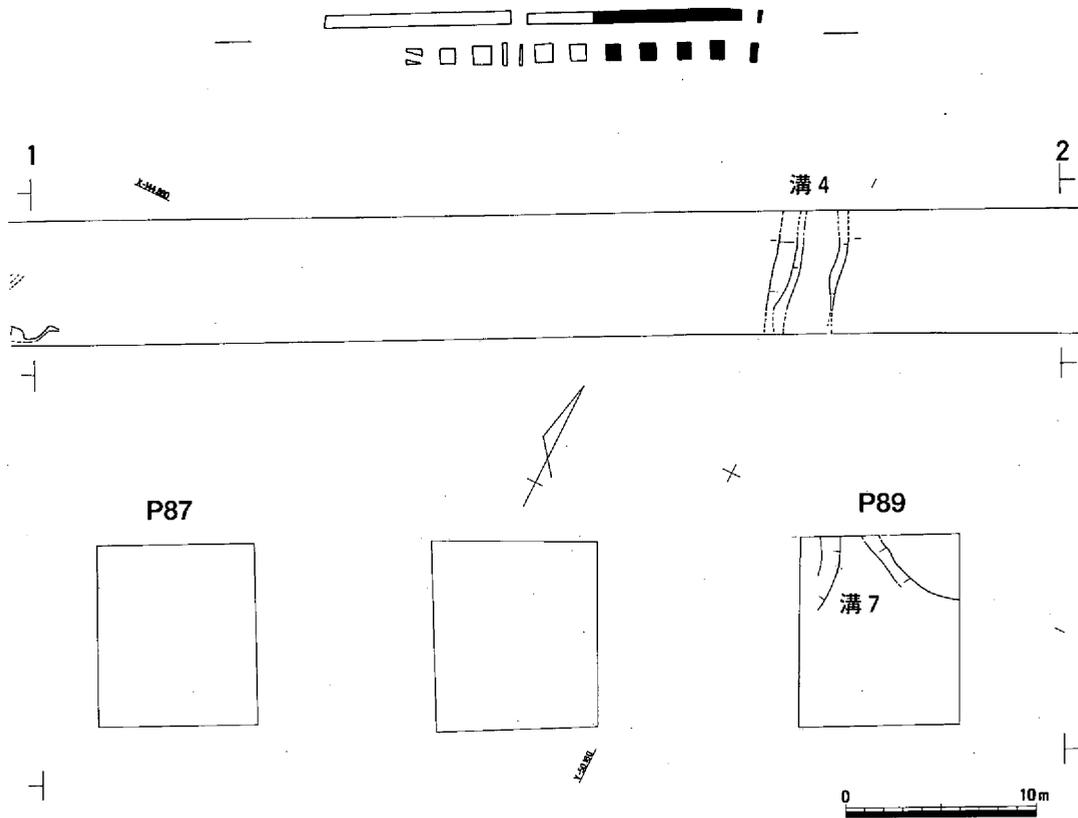
第2節 調査の概要

窪木遺跡は、南北に走る農道により、西側を1区、東側を2区として調査を進めた。1区は耕作土下約20cmで暗灰褐色～暗緑灰色の粘質土層となり、遺構は検出されなかった。

II区は北側道西端に溝2状、東側部分でも溝3状、橋脚部分では、P-84で2状、III区P-91で溝2条、土塀1が検出されたのみである。P-91以東は湿地状を呈し、確認調査のみで終了した。



第2図 遺構配置図① (1/400)



第3図 遺構配置図② (1/400)

1. 古墳時代の遺構と遺物

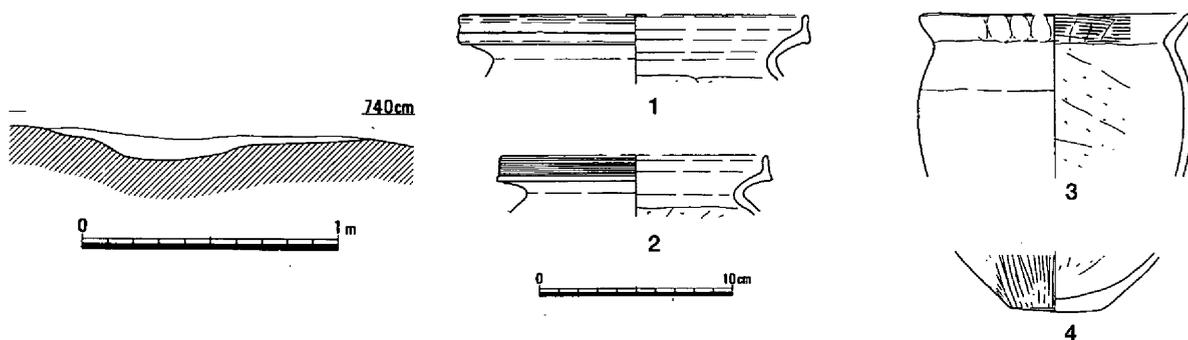
(1) 溝

溝1 (第3・5図)

I区北側道で検出した略南北に走る溝で、幅120cm、深さは検出面より深い所で10cmほどである。

溝内から古墳時代初頭の甕4点が出土している。1・2は口縁部が垂直に立ちあがり、2の立ちあがりには櫛描沈線を施す。3は「く」の字状口縁になり、口縁部を指で押え、内面はハケで調整を行っている。体部内面は頸部まで斜め方向のヘラケズリを行う。

P-85で検出した溝6とつながるようであるが、溝6の時期が不明で不確実である。



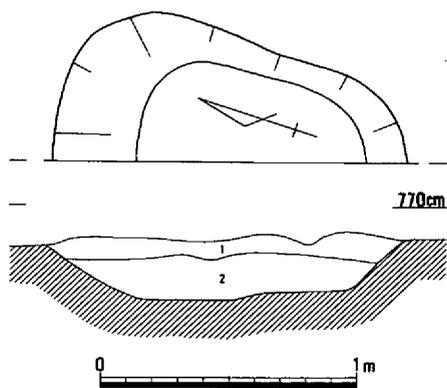
第4図 溝1 (1/30) ・出土遺跡 (1/4)

2. 古代以降の遺構と遺物

(1) 土壇

土壇1 (第4・6図)

P-90の溝8の上面で検出された径140cm不整円形の土壇で約1/2を検出している。深さは23~25cmあり、底部の標高は632cmである。埋土の上層が淡褐青灰色粘性砂質土、下層は灰色粘性砂質土である。溝8の小皿を室町時代後半と考えるとそれ以降の土壇である。



1. 淡褐青灰色粘性砂質土
2. 灰色粘性砂質土

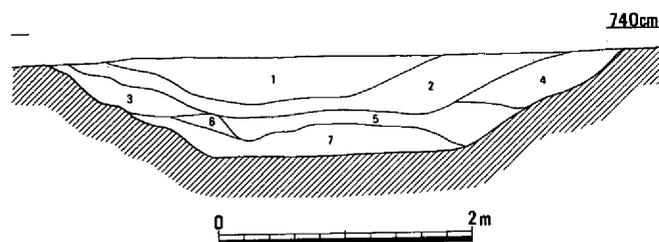
第5図 土壇1 (1/30)

(2) 溝

溝2 (第3・7図、図版77)

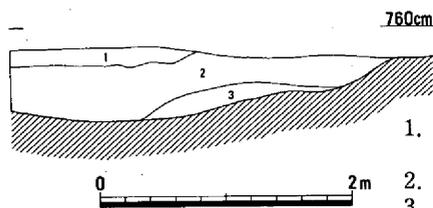
II区西端で検出された溝で、南側を少し東に振るが北西から南東に走る。断面は逆台形状を呈し、底面は水平である。幅450cm、深さは検出面から80cm、底面の標高630cmである。

第3層に木片等を含むが、出土遺物はなく、時期

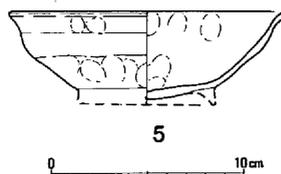


1. 暗灰色粘質土
2. 灰色粘性砂質土
3. 暗灰色粘性微砂 (木片含)
4. 灰色粘質土
5. 灰色粘質土
(灰白色砂混)
6. 灰色粘質土
(灰白色微砂混)
7. 灰色粘質土
(灰白色粗砂多含)

第6図 溝2 (1/60)



1. 淡灰色粘質土
(Fe含, 砂混)
2. 暗灰白色粘性砂質土
3. 灰黒色粘質土



第7図 溝3 (1/60) ・出土遺跡 (1/4)

は不明である。

溝3 (第3・4・8図)

溝3は溝1の東側に位置し、北から流れ調査区中程で東に向きを変えて流れる。東から小さい溝が流れこんでいる。規模は幅35~40cm、深さは検出面より55cmを測り、底面の標高690cmである。溝内より、早島式土器碗が1点出土している。これは口径14cm、高さ5cmで高台を持つものである。12世紀末~13世紀初頭頃に位置付けられる。

溝4 (第4・9図、図版78)

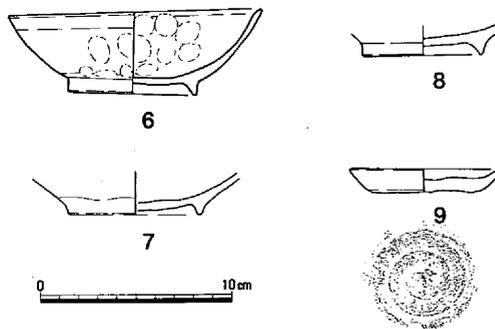
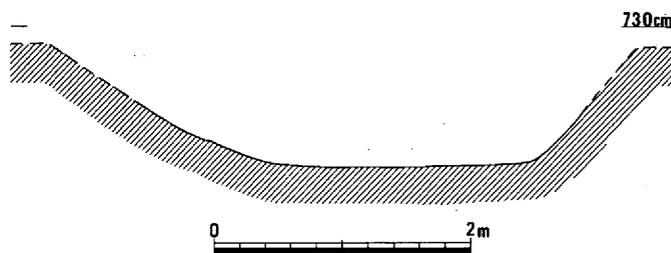
溝4はⅡ区北側道中程に位置し略南北に流路を取る。幅350cm前後で、深さは100cm、溝底面の標高620cmである。溝内より早島式土器碗3点、土師器小皿1点が出土している。6の碗は口径13cm、高さ4.4cmを測る。13世紀前半に位置付けられるものである。

溝5 (第4・10図)

Ⅱ区北側道東端で検出された溝で略南北に走る。南側での幅30cmで北側は不明である。

溝6 (第3・11図、図版78)

P-85で検出された数条の溝が重なり交差する溝状遺構である。1本は北側道Ⅱ区溝1あるいは溝

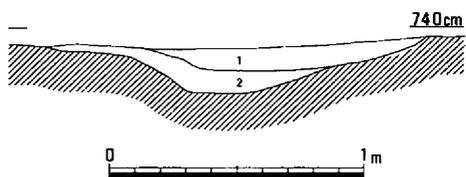


第8図 溝4 (1/60) ・出土遺跡 (1/4)

2から流れこむものと考えられる。地形的には西・南へ徐々に下っていているので、自然河道あるいは池状になる一部かも知れない。出土遺物は見られず時期は不明である。

溝7 (第4・12図)

P-89で検出された溝としたが、西・南に深く落ち込み、湿地帯あるいは地状のものになる可能性がある。深い所で耕作土下135cm程で安定した状態になる。出土遺物はなく時期は不明である。遺構



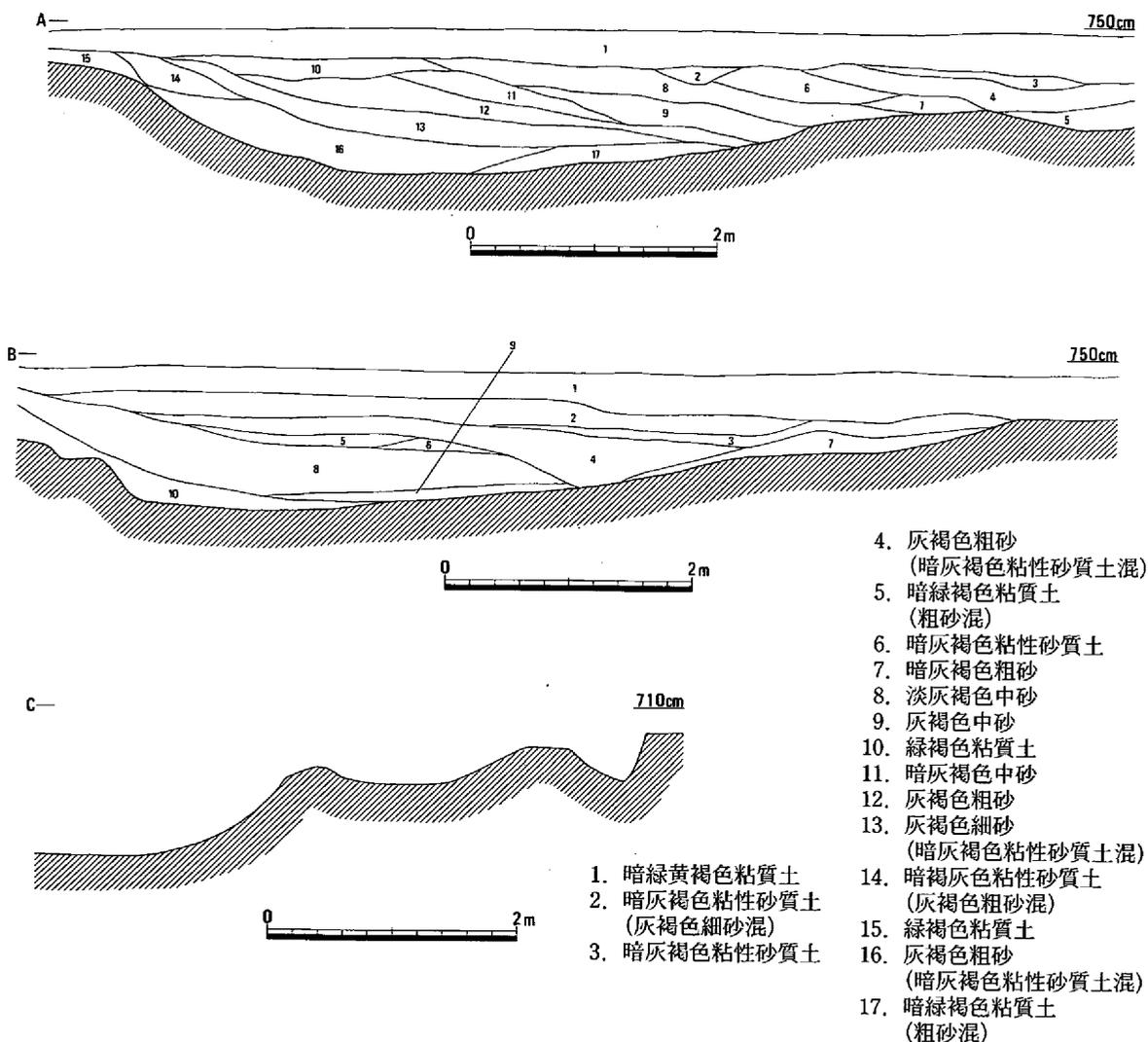
1. 灰白色砂・灰色砂・暗灰色粘質土が混在
2. 暗灰色粘質土 (灰白色砂混)

第9図 溝5 (1/30)

内の5・6・7層は肩部に併行するような土層の在り方を示し溝、池の埋まっていった状況を示しているようである。

溝8 (第4・13図)

P-90で検出された溝で430~600cmと幅がある。深さは75cm、溝底面の標高は650cmである。この遺構内では珍しく東西に流路を持っている。溝内より土師器台付小皿が1点出土している。時期ははっきりしない



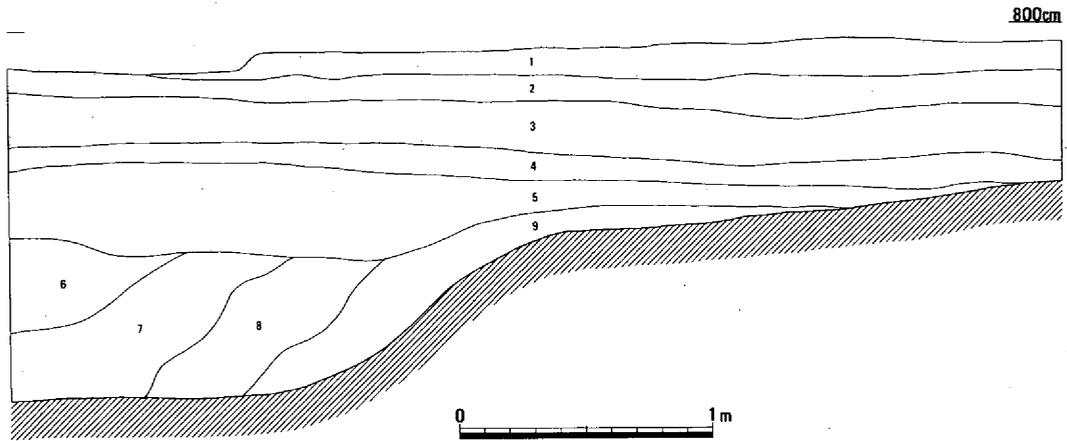
4. 灰褐色粗砂 (暗灰褐色粘性砂質土混)
5. 暗緑褐色粘質土 (粗砂混)
6. 暗灰褐色粘性砂質土
7. 暗灰褐色粗砂
8. 淡灰褐色中砂
9. 灰褐色中砂
10. 緑褐色粘質土
11. 暗灰褐色中砂
12. 灰褐色粗砂
13. 灰褐色細砂 (暗灰褐色粘性砂質土混)
14. 暗灰褐色粘性砂質土 (灰褐色粗砂混)
15. 緑褐色粘質土
16. 灰褐色粗砂 (暗灰褐色粘性砂質土混)
17. 暗緑褐色粘質土 (粗砂混)

第10図 溝6 (1/60)

が15・6世紀のものであろうか。

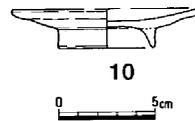
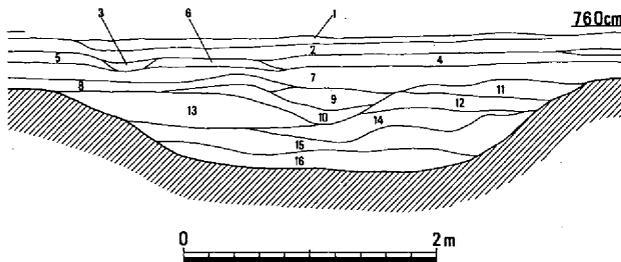
溝9 (第4・14図)

溝9は溝8内で「」状になる溝で、幅76cm、深さ10cm程の浅い溝で北側は不明確である。出土遺物はなく、溝8が15・6世紀のものとするれば、それ以降のものと考えられる。(伊藤)

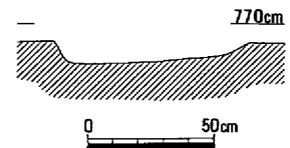


- | | | |
|----------------------|----------------------|-------------------------|
| 1. 耕作土 | 4. 淡灰色粘質土
(砂・Fe含) | 7. 暗灰色粘質微砂
(灰白色微砂混) |
| 2. 灰茶褐色砂質土
(Fe含) | 5. 灰色粘質土 | 8. 暗灰色粘質微砂
(灰白色砂少し混) |
| 3. 茶褐暗灰色砂質土
(Fe含) | 6. 暗灰色粘土 | 9. 黒灰色粘土 |

第11図 溝7 (1/30)



- | | |
|---------------------------|----------------------|
| 1. 黄灰色砂質土 | 10. 茶灰色粘性砂質土 |
| 2. 淡黄灰色粘性砂シルト
(Mn含) | 11. 淡褐灰白色砂
(灰色砂混) |
| 3. 淡茶灰褐色粘性砂質土 | 12. 灰色粘土 |
| 4. 淡茶黄灰色粘性砂質土
(Mn含) | 13. 淡褐灰白色砂 |
| 5. 明灰褐色粘性砂質土
(Mn含) | 14. 淡褐灰色砂
(灰色粘土混) |
| 6. 明灰黄褐色粘性砂質土
(淡灰褐色土混) | 15. 暗灰色粘土
(灰色粘土混) |
| 7. 暗黄褐色粘性砂質土 | 16. 淡褐灰色砂・灰色砂が混在 |
| 8. 淡茶灰色粘性砂質土
(Fe含) | |
| 9. 淡褐灰白色砂 | |



第12図 溝8 (1/60) ・出土遺跡 (1/4)

第13図 溝9 (1/30)

第11章 高松田中遺跡

第1節 位置と経過

高松田中遺跡は、岡山市高松田中にある。高松田中は岡山市の北西部に位置し、東に総社市奥谷から流れる血吸川、西北からの砂川に挟まれた、標高9 m前後の水田地帯である。南西に長良山山麓、北西4.5kmには吉備高原の南端部に位置する標高400mにある鬼城山を望むことができる。中国横断道の分布調査においては、遺物はほとんど散見出来なかった。地図上では総社平野と同方位の条里制地割が残っており、全域を調査対象地とした。

この血吸川と砂川に挟まれた平野部には、これまで遺跡の存在は知られていなかった地域である。今回の確認調査において、弥生時代から中世に至る遺跡の存在が明らかとなった。

調査は確認調査によって判明した微高地・水田跡などを便技的に西から農道・用水等によりⅠ～Ⅳ区に分けて調査を行った。平成5年度は3名の調査員で1月24日～3月18日までⅡ区南側道東半部の調査を行い、平成6年度は2班7名で4月1日～6月16日まで、11月4日～12月27日までの2回に分けて調査を行った。6月以降調査を中断したのは、周辺水田の暗渠等を切断し水漏れと周辺地権者から稲刈り終了後に調査を行うよう要望が出されたため、またⅣ区北側道部分は用地問題が未解決で田植えが行われたため調査不可能になり、調査を一時中断し、二班とも服部遺跡へ移動した。

調査は1班が12月6日に再開し12月27日までⅢ・Ⅳ区北側道、残りの橋脚部の調査を、2班が11月4日～翌年1月19日までⅠ・Ⅱ区北側道、残った橋脚部分の調査を行った。

また橋脚部の調査は当初掘り方部分を含め6 m 50cm～9 m 40cm四方の調査を行っていたが、工事中崩壊が激しいので1～2 m 掘りたいと要望があり、遺構の広がる橋脚について追加調査を行った。

日誌抄

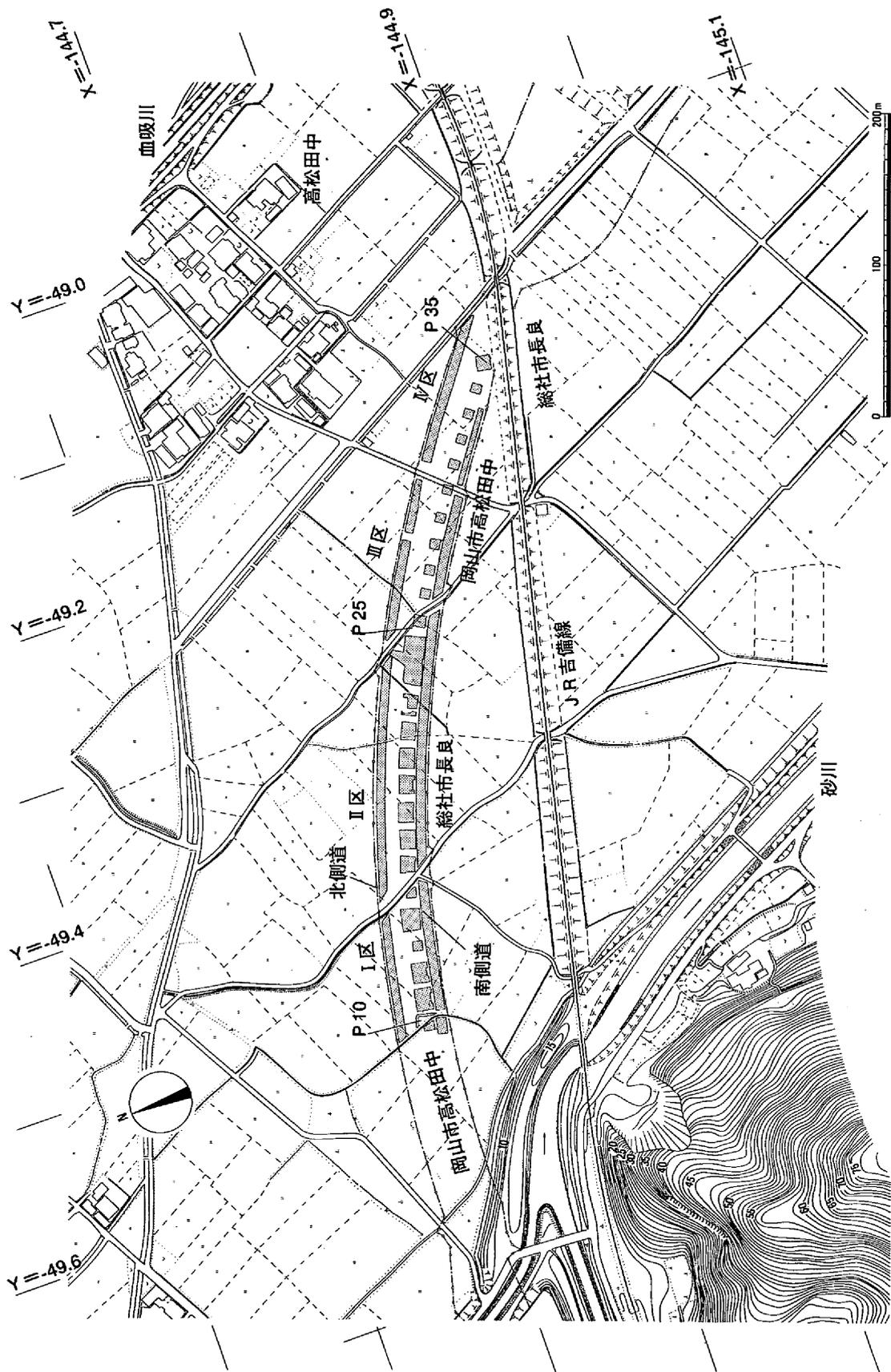
平成5年度 〔椿班〕

第1次確認調査

4月1日～6日	機材準備	1月23日	西山古墳から機材搬入
4月7日	T-1～16設定	1月24日	Ⅱ区南側道調査開始
4月12日	T-1～16調査開始	2月10日	Ⅲ区南側道調査開始
4月13日	埋め戻し開始	3月17日	Ⅱ区・Ⅲ区南側道調査終了
4月19日	埋め戻し終了(窪木遺跡へ)	3月18日	機材・用具整理

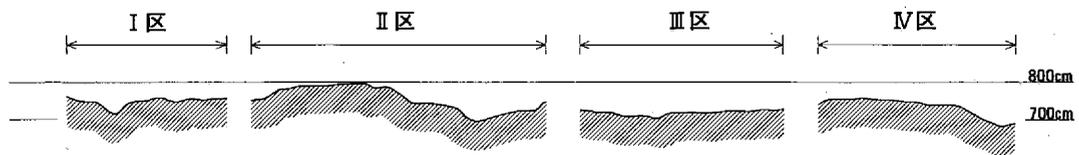
平成6年度

4月1日～4日	機材用具点検・調査準備		
4月5日	発掘資材搬入		
〔伊藤班〕	Ⅳ区南側道から調査開始	〔中野班〕	Ⅱ区南側道から調査開始
4月25日	Ⅳ区橋脚調査開始	4月6日	橋脚(P-16)調査開始
4月27日	Ⅲ区橋脚調査開始	4月25日	Ⅴ区南側道調査開始

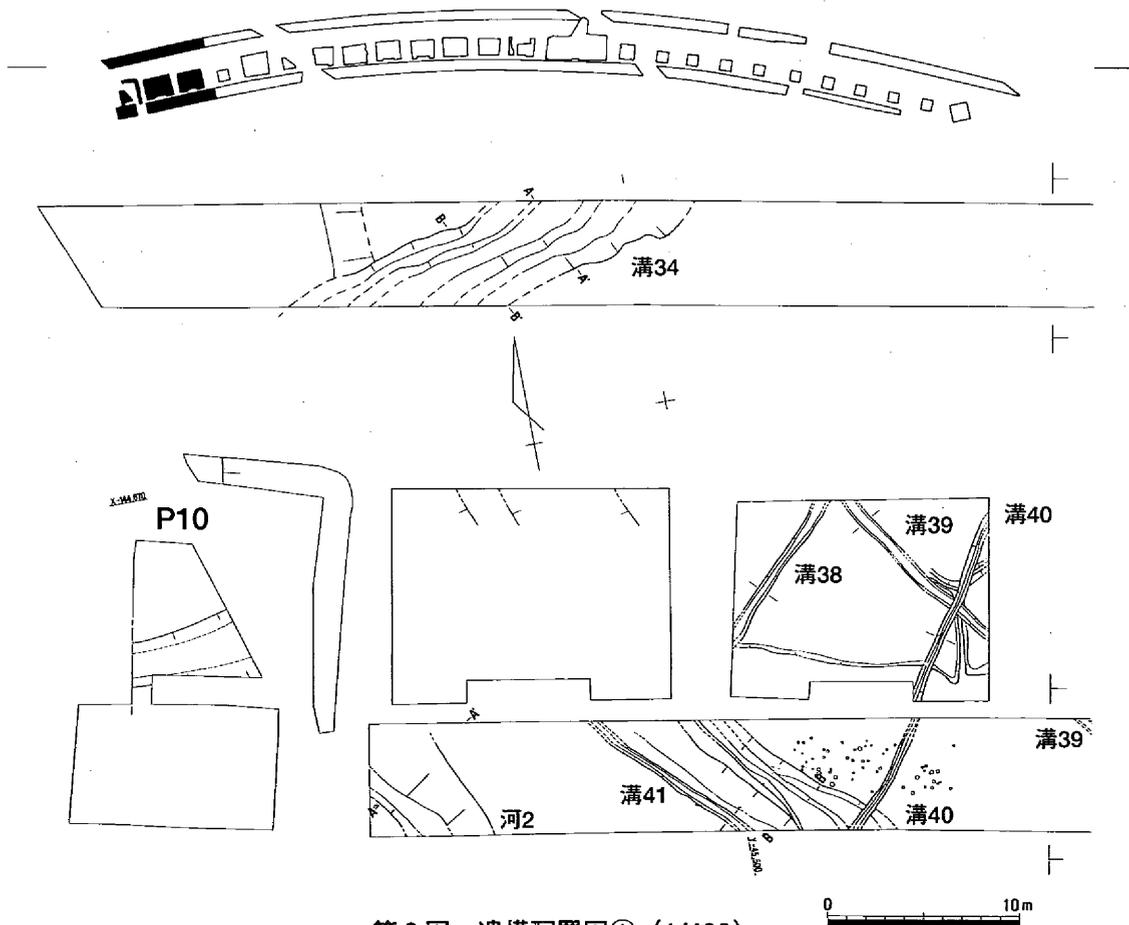


第1図 調査区位置図 (1/4000)

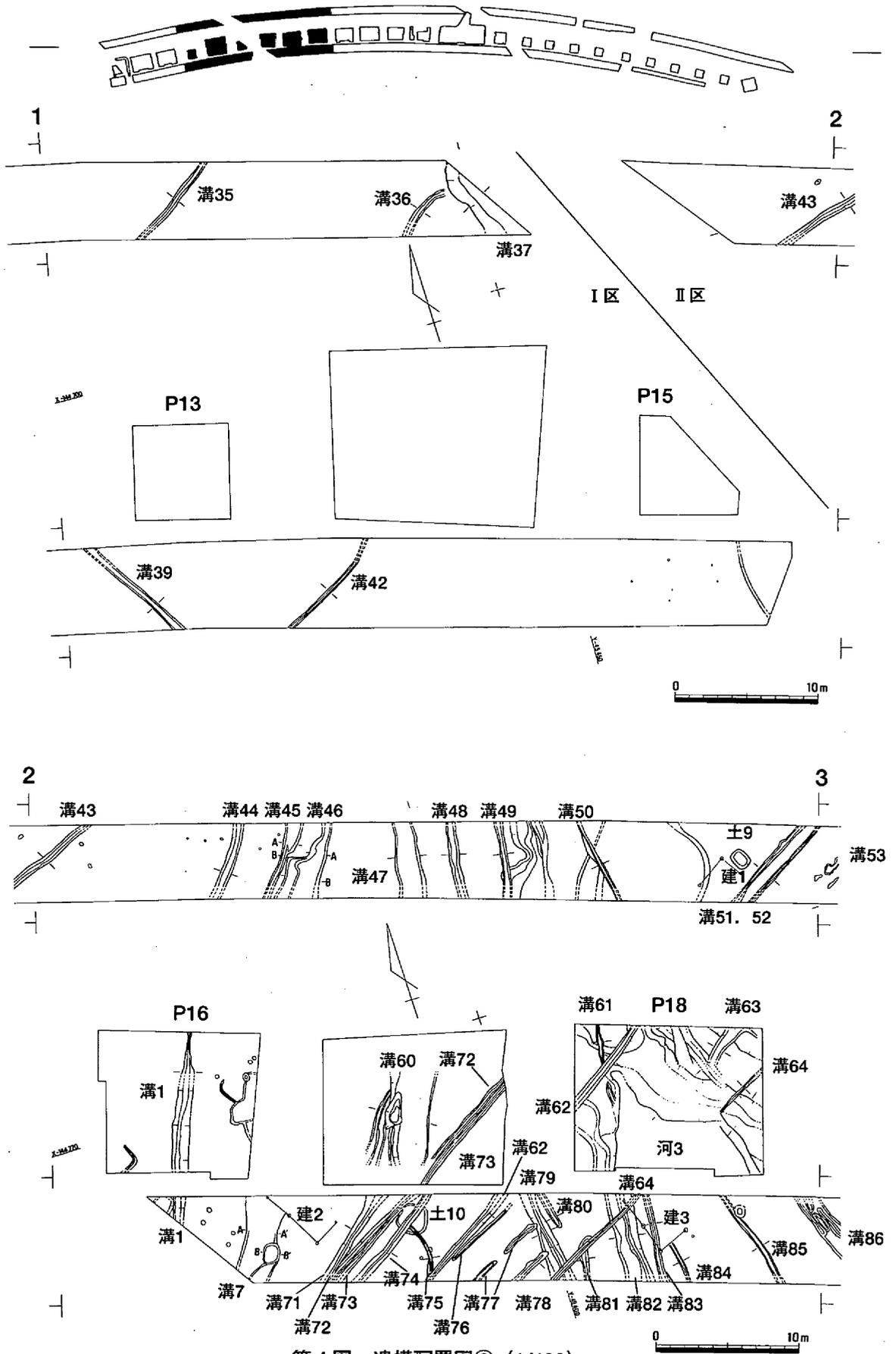
5月12日	Ⅲ区北側道調査開始	5月2日	Ⅳ区南側道調査開始
5月23日	Ⅲ区北側道調査開始	6月3日	Ⅳ・Ⅴ区南側道調査開始
6月1日	対策委員会		服部遺跡へ資材搬出
2日	Ⅱ区北側道調査終了	7月13日	(北溝手遺跡調査開始)
15日	Ⅰ区北側道調査終了	9月6日	(西山古墳調査開始)
16日	橋脚部調査終了	9日	(北溝手遺跡調査終了)
	服部遺跡へ資材搬出	11月4日	北側道Ⅳ区橋脚(12・16・18・19)
6日	高松田中遺跡再開		調査再開
7日	北側道Ⅱ区調査開始	21日	西山古墳終了
21日	橋脚P-(24)調査開始	1月19日	橋脚(21・22・23)追加調査
27日	調査終了(三手遺跡へ)		調査終了(三手遺跡へ)



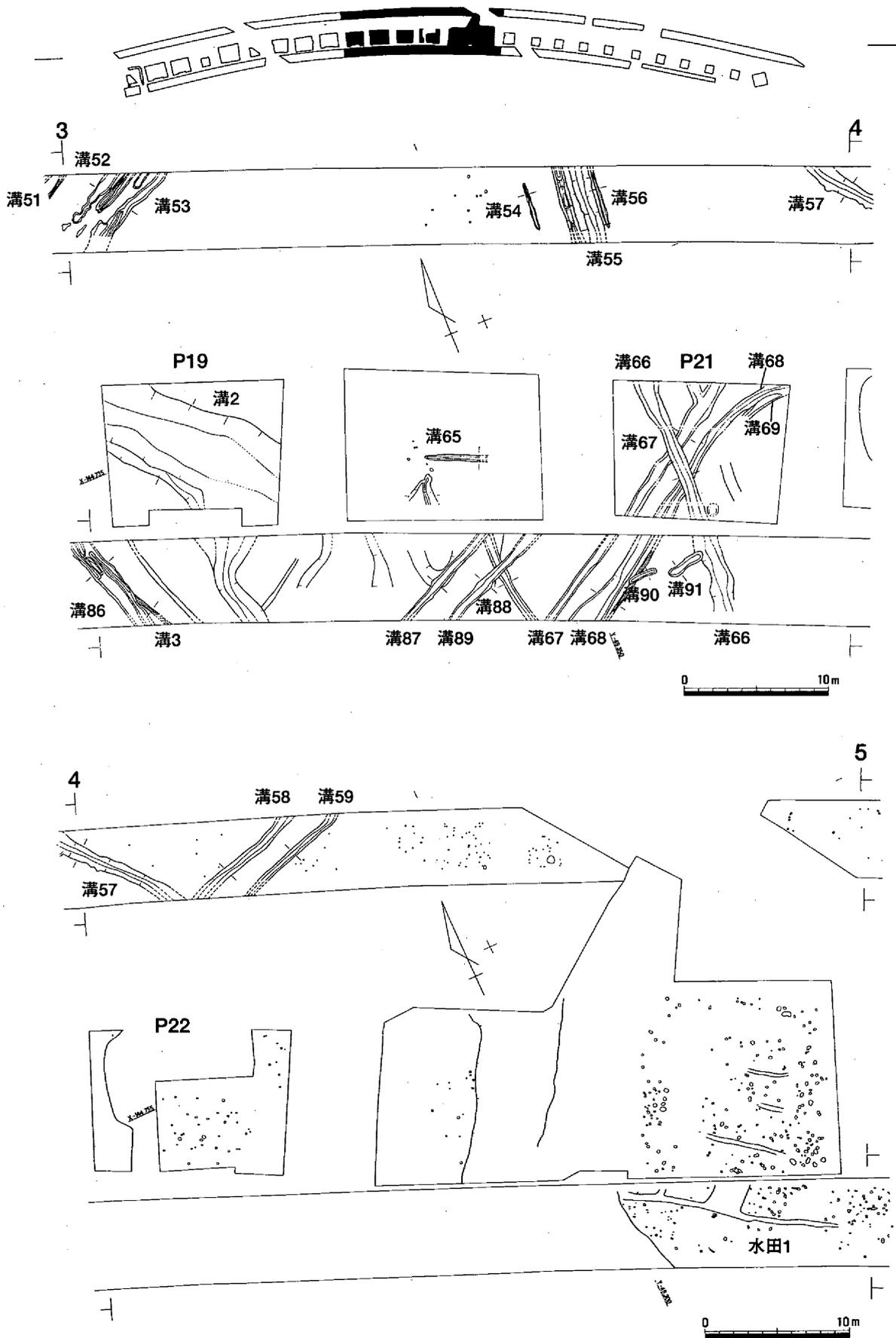
第2図 調査区地形断面図



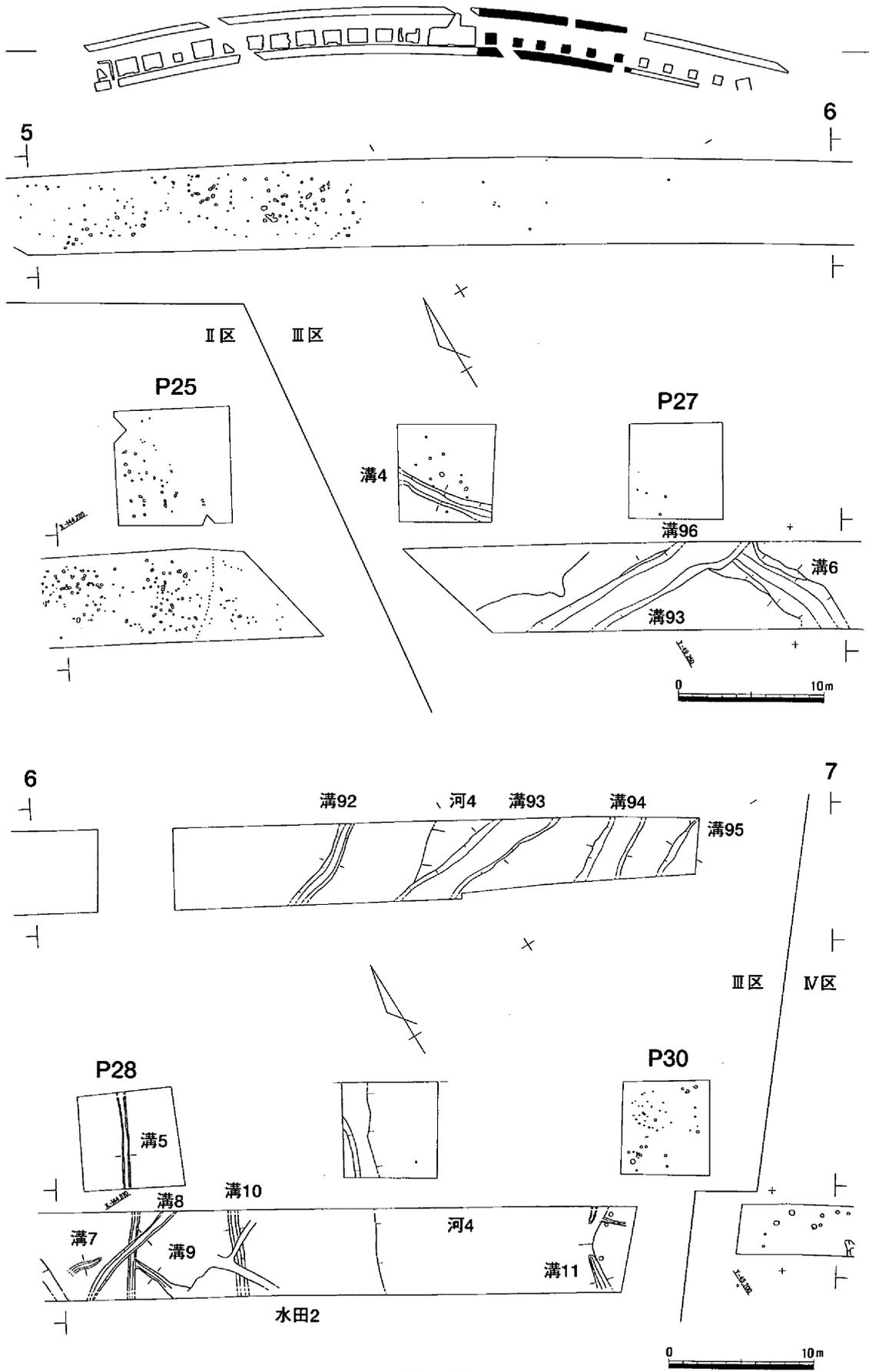
第3図 遺構配置図① (1/400)



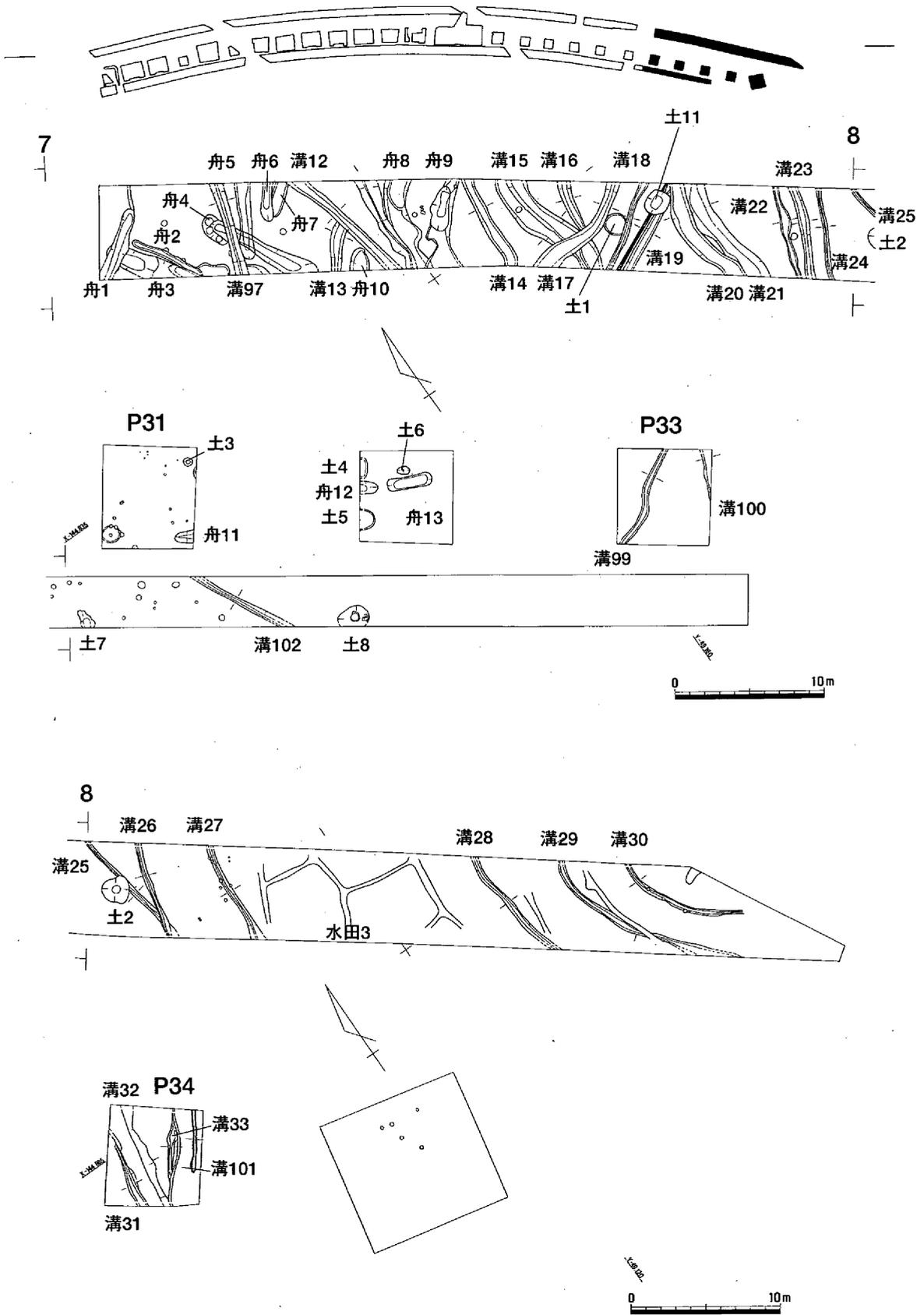
第4図 遺構配置図② (1/400)



第5図 遺構配置図③ (1/400)



第6図 遺構配置図④ (1/400)



第7図 遺構配置図⑤ (1/400)

第2節 調査の概要

1. 弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

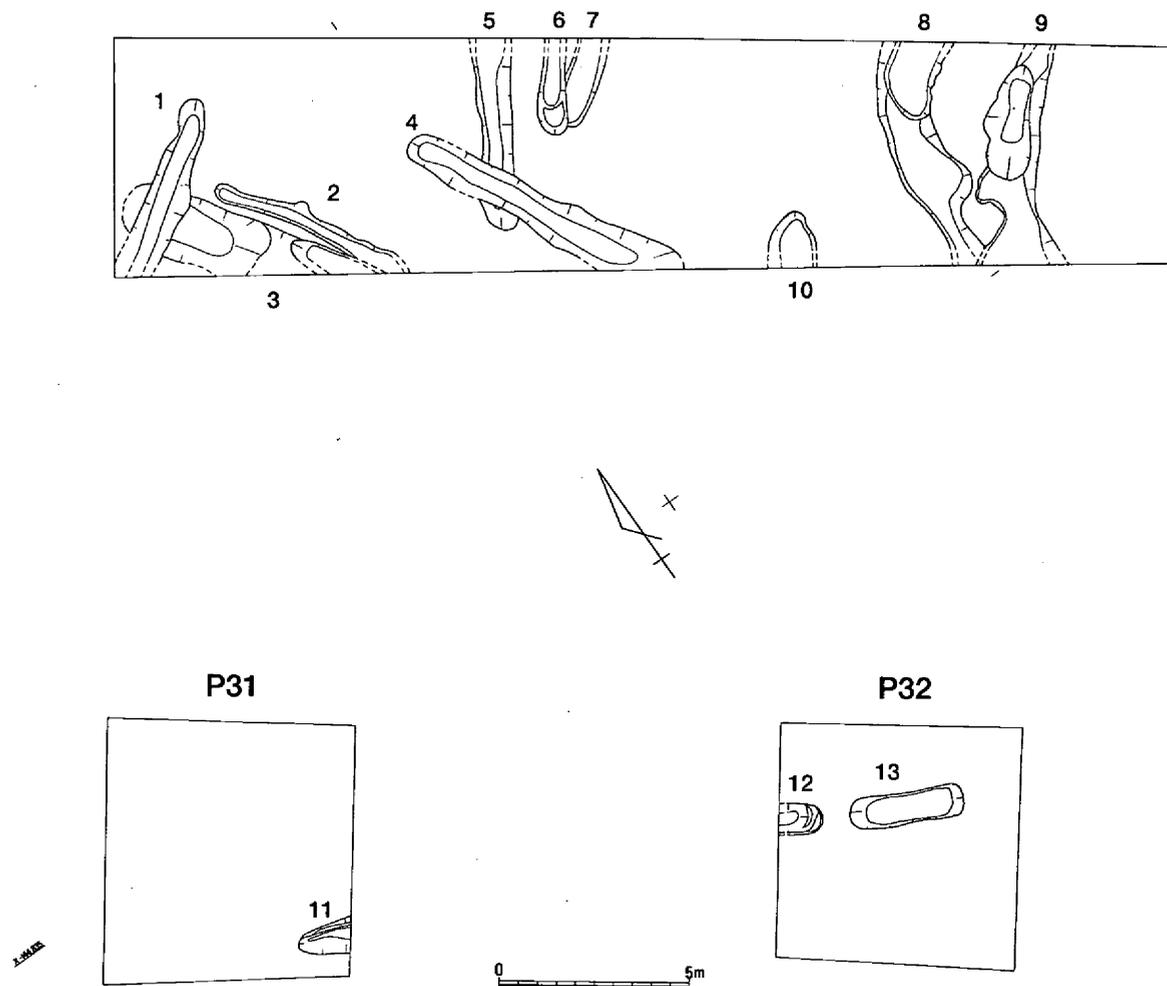
(1) 舟形土壇

Ⅳ区北側道西側道からJR吉備線にかけては明黄褐色土の弥生時代のしっかりした基盤層が存在し、弥生時代前期から後期の遺構が確認された。特にⅣ区北側道を中心に前期後葉から中期前葉につくられた舟形土壇が集中する。

調査範囲が幅6m程で大きなものは8m近くもあり溝としたものの中にも舟形土壇になる可能性のあるものもあり、またこれらを取り囲む周溝になる可能性もあるが確認できていない。

舟形土壇1 (第7・8・9図)

Ⅳ区北側道西端につくられた舟形土壇で、上部は旧河道3の肩で削られ、また舟形土壇2にも切られている。検出面での長さは500cm、幅は狭い所で65cm、広い所で110cm、深さは12cm、底面での標高



第8図 舟形土壇配置図 (1/200)

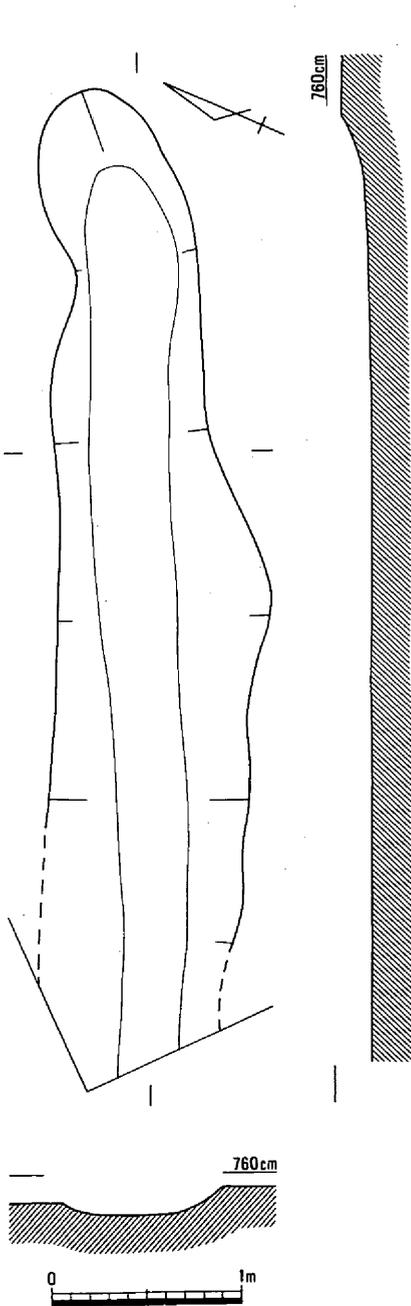
740cmである。出土遺物は見られなかったが、周辺の舟形土壙と同時期の弥生時代前期後葉から中期前葉にかけてのものと考えられる。後に述べる舟形土壙5～9と同一方向になる。

舟形土壙2 (第7・8・9図)

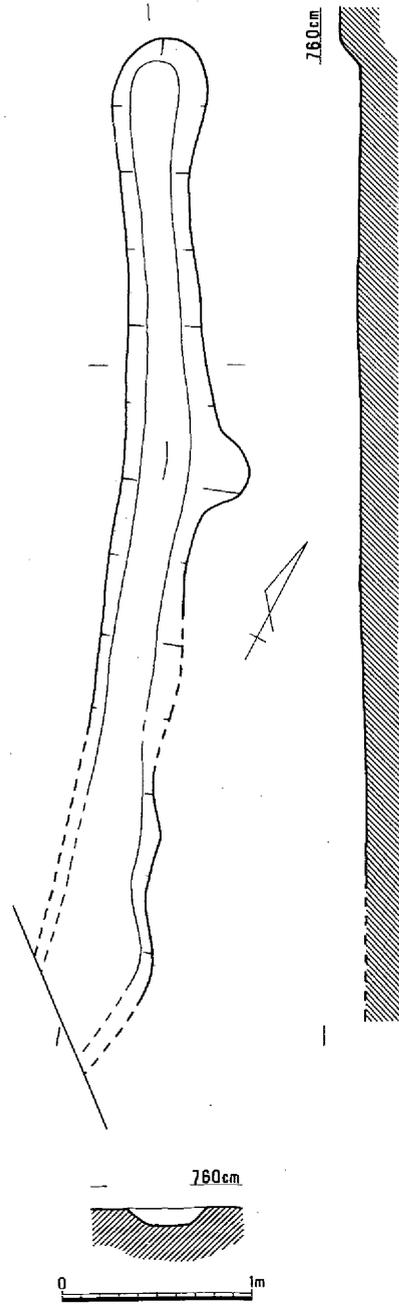
舟形土壙2は、舟形土壙1の東側に併行するような形で検出され、非常に細長く浅いものであるが土壙と考えた。南半は不明瞭である。長軸推定550cm、幅35～40cm、深さは検出面より10cm、底面の標高は7.4cmである。出土遺物はないが、土壙1と同じ時期のものであろうか。

舟形土壙3 (第7・8・11図、図版88)

舟形土壙1を切って直行するような形でつくられている。検出長500cm程で、幅146cm、深さは北側の土壙で60cm、標高680cm、南側の土壙の深い所で35cmを測り南東に下っていつている。土壙内から



第9図 舟形土壙1 (1/40)

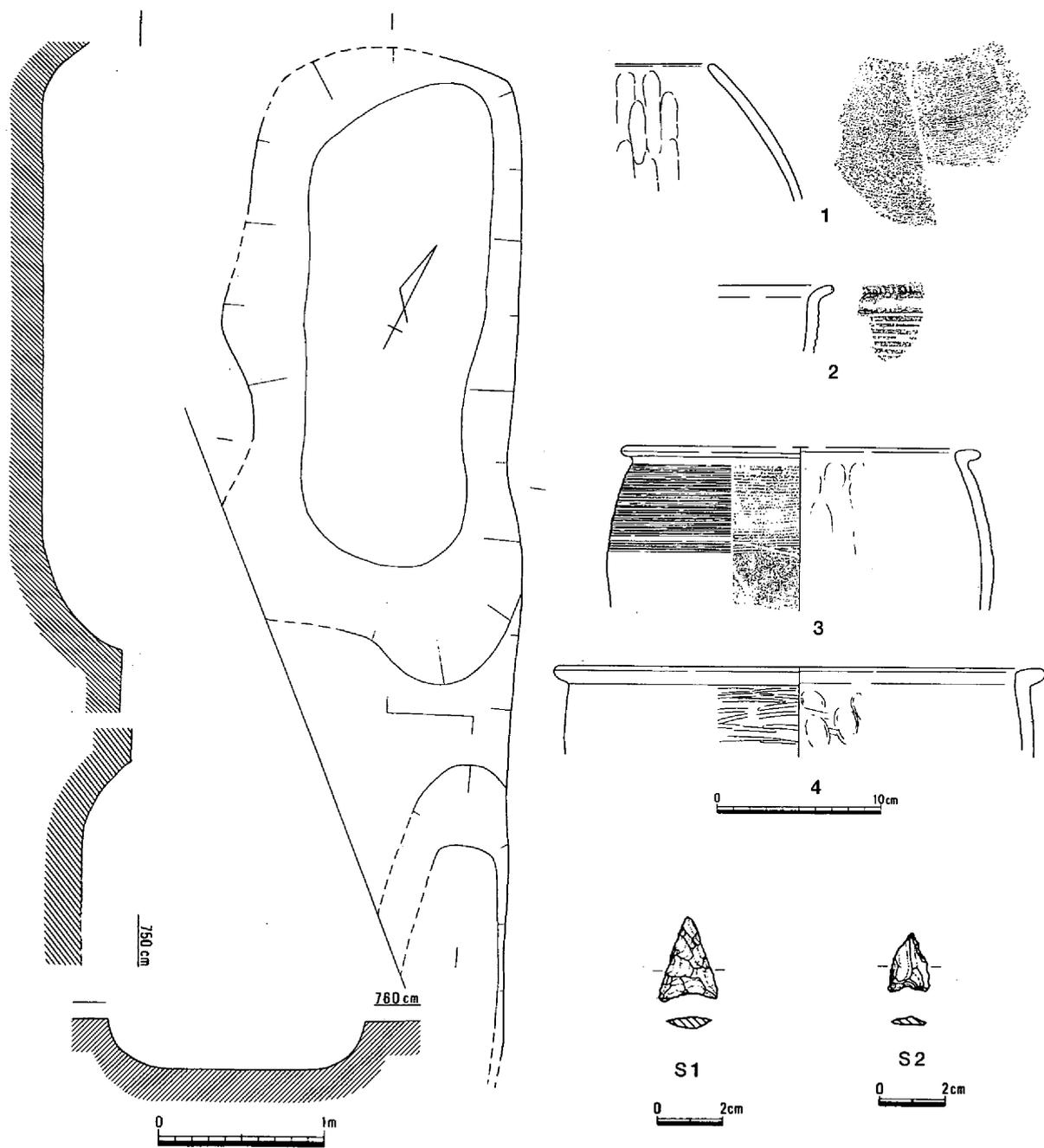


第10図 舟形土壙2 (1/40)

鉢1、2～4が出土している。2はくの字状の口縁部を持ち体部上部に7本の篋描沈線をもつ。3は口縁部が逆L字状になり、体部上部に5本単位の櫛描沈線を6回巡らせる。4も口縁部が逆L字状になり、体部は横方向の丁寧な篋磨きを行っている。他にサヌカイト製の凹基式石鏃S1が1点出土している。これらの出土遺物からこの土壙は弥生時代前期後葉のものと考えられる。

舟形土壙4（第7・8・12図、図版80・87・88）

舟形土壙4は、舟形土壙2の併行するような形で作られた非常に長軸の長い土壙である。全長推定約8m、幅は80～130cm底面は長さ640cm、幅35～60cmを測る、深さは検出面より64cmあり、底面の標高は686cmである。北側の舟形土壙13を切ってつくられている。

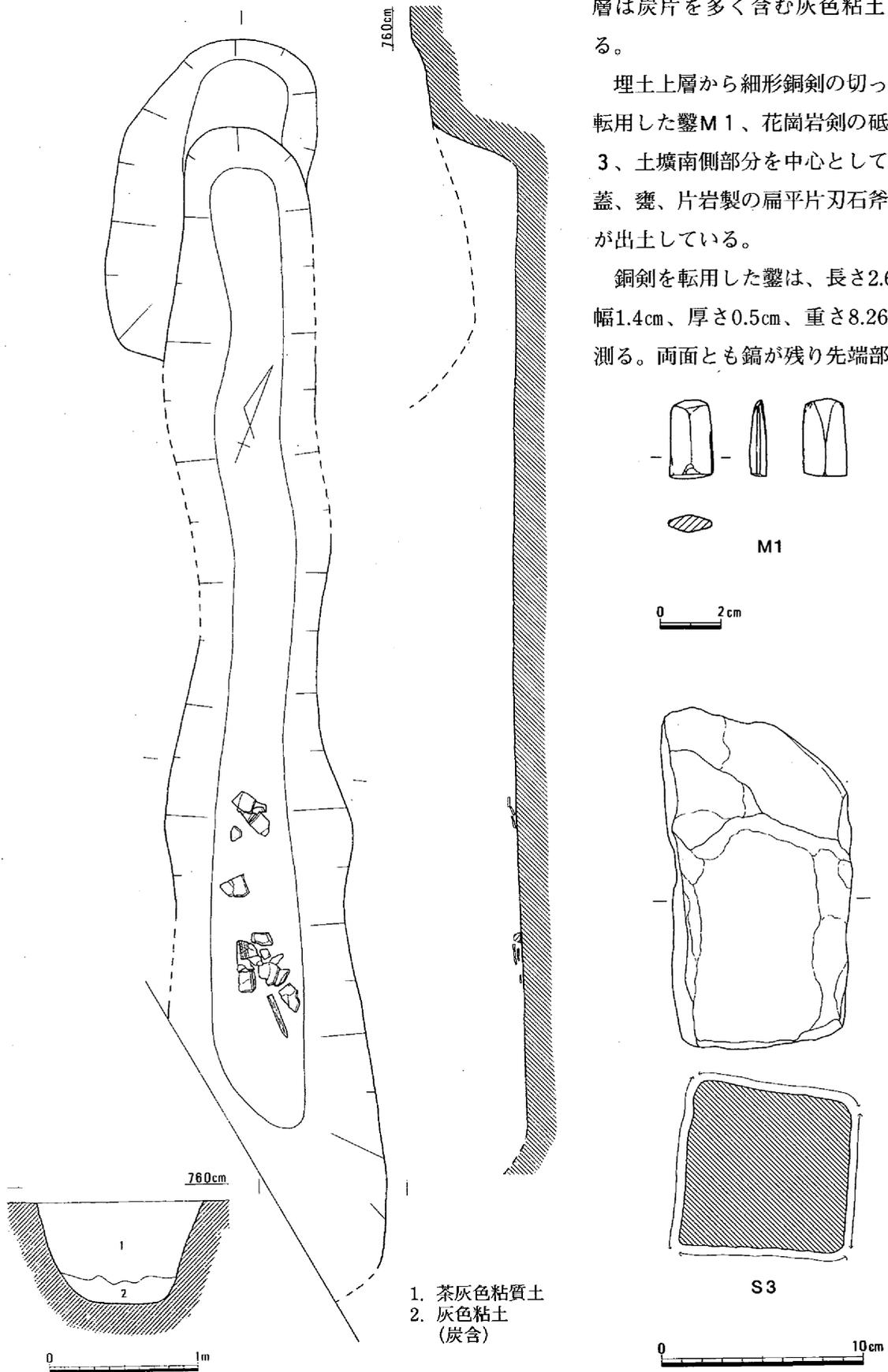


第11図 舟形土壙3（1/40）・出土遺物（1/4・1/2）

埋土は上層が茶灰色粘質土で、下層は炭片を多く含む灰色粘土である。

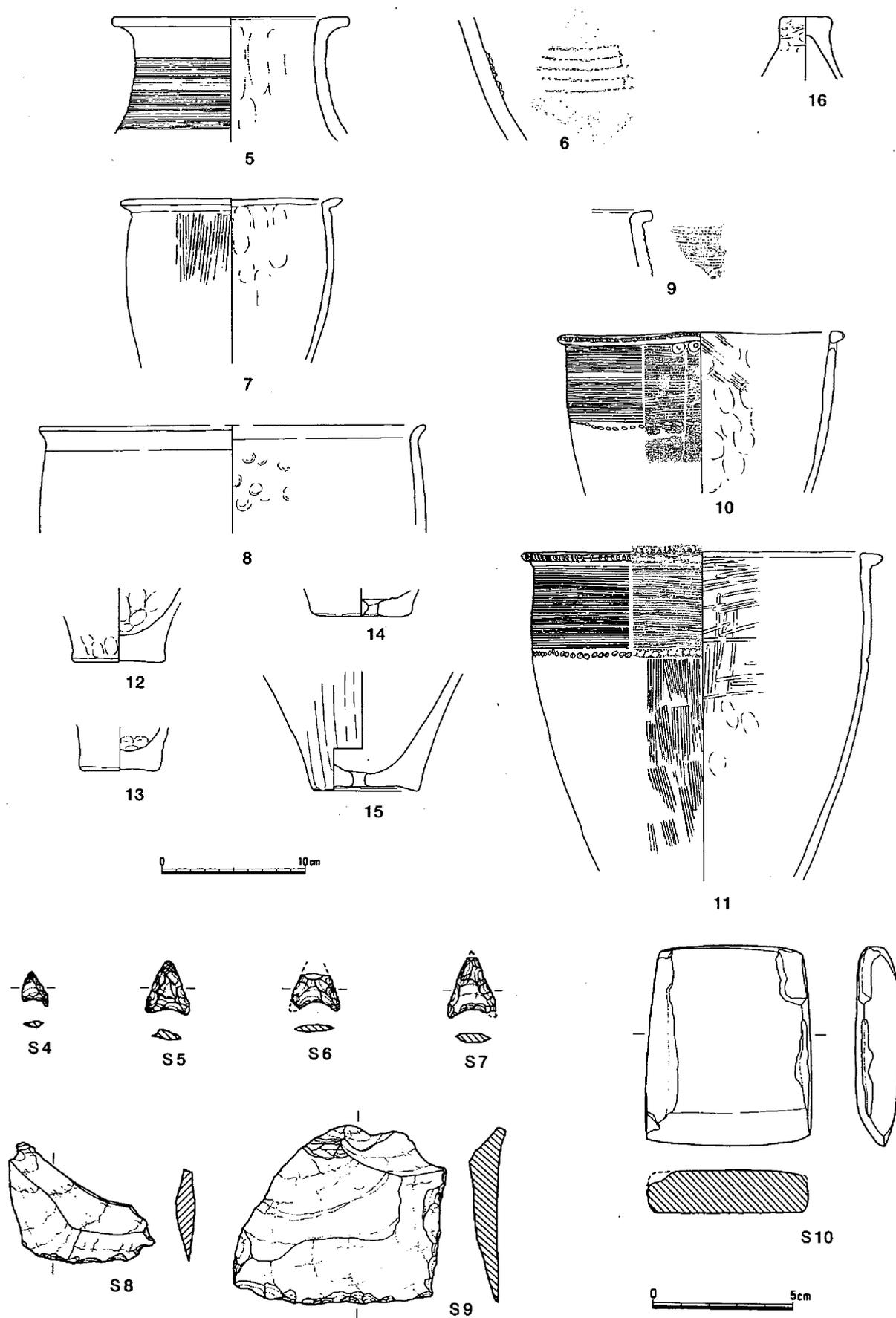
埋土上層から細形銅剣の切っ先を転用した鑿M1、花崗岩剣の砥石S3、土壙南側部分を中心として壺、蓋、甕、片岩製の扁平片刃石斧などが出土している。

銅剣を転用した鑿は、長さ2.6cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重さ8.26gを測る。両面とも鑄が残り先端部を磨



- 1. 茶灰色粘質土
- 2. 灰色粘土 (炭含)

第12図 舟形土壙4 (1/40) ・出土遺物①(1/2・1/3)



第13図 舟形土壙4出土遺物②(1/4・1/2)

いて使用されている。

5・6は壺、7～15は甕あるいは甑の底部である。16は蓋、10・11の甕は逆L字状になる口縁端部に貝殻刻目文を施し、体部上位に10は5本単位の櫛描沈線を5単位さらにその下段に刺突文を一行巡らせている。10は蓋受けの穴二孔がある。

この舟形土壇は推定ではあるが、ほぼ全貌を知ることが出来る唯一の舟形土壇である。

舟形土壇5 (第6・7・14図、図版88)

舟形土壇5は南端部を舟形土壇4に切られている。舟形土壇1～4とは主軸の方向を異にする。検出面5m、幅75～100cm、深さは検出面より26cm、底面の標高は624cmである。土壇埋土内から甕3点、サヌカイト製の有茎式石鏃1点が出土している。甕17はくの字状の口縁を持ち、表面は剥離が著しい。18は逆L字状になるもので口唇部に刻目、

体部上位に篋書きの沈線が7本以上巡る。

舟形土壇6 (第6・7・15図、図版88)

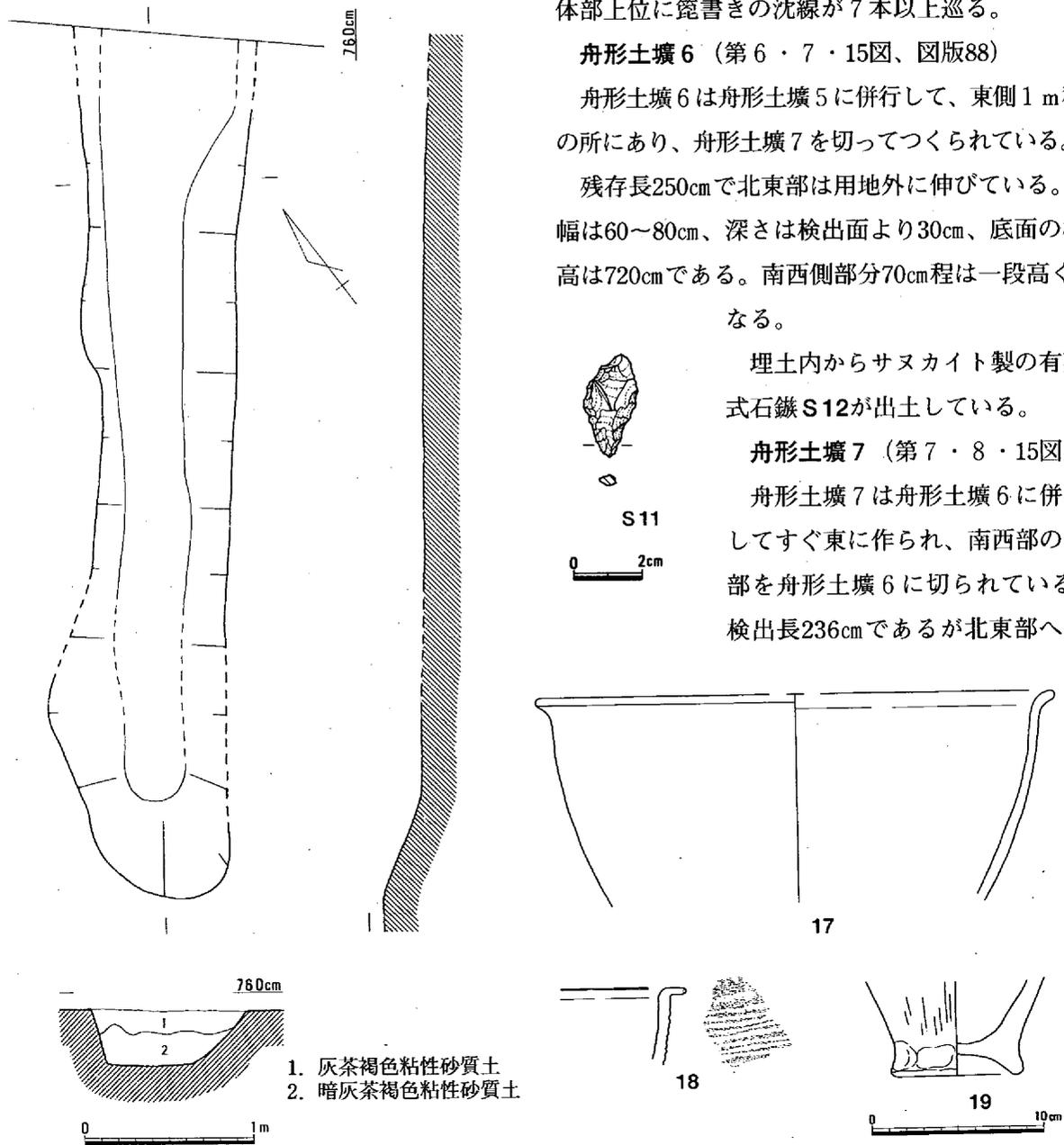
舟形土壇6は舟形土壇5に併行して、東側1m程の所にあり、舟形土壇7を切ってつくられている。

残存長250cmで北東部は用地外に伸びている。幅は60～80cm、深さは検出面より30cm、底面の標高は720cmである。南西側部分70cm程は一段高くなる。

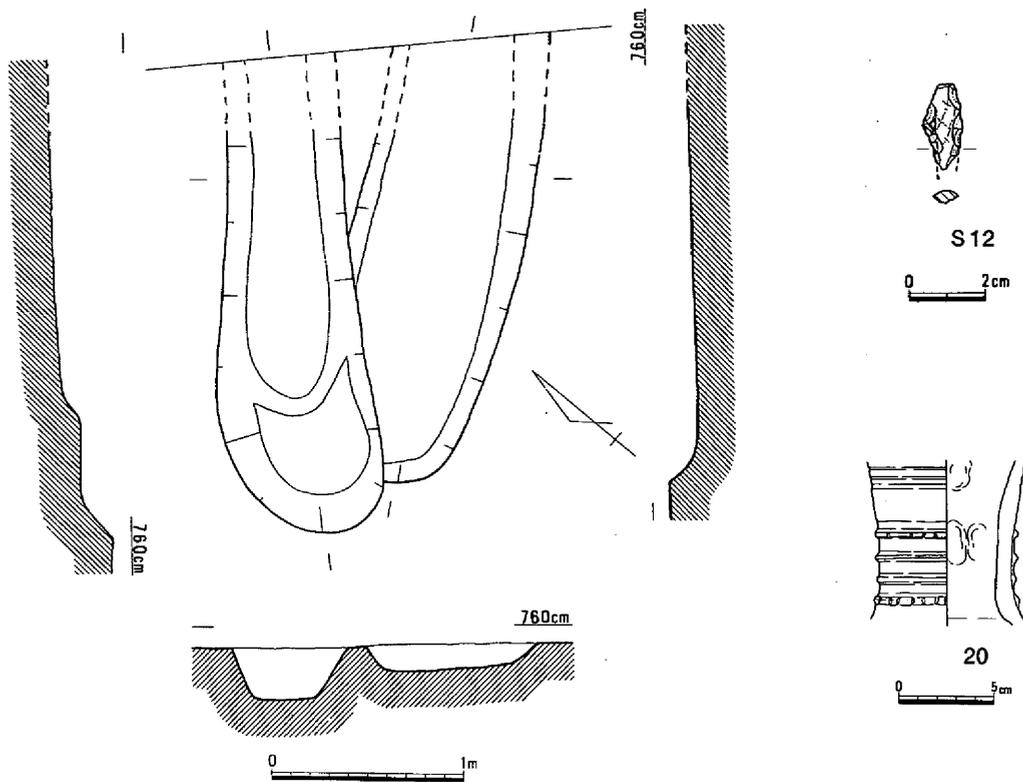
埋土内からサヌカイト製の有茎式石鏃S12が出土している。

舟形土壇7 (第7・8・15図)

舟形土壇7は舟形土壇6に併行してすぐ東に作られ、南西部の一部を舟形土壇6に切られている。検出長236cmであるが北東部へつ



第14図 舟形土壇5 (1/40) ・出土遺物 (1/4・1/2)



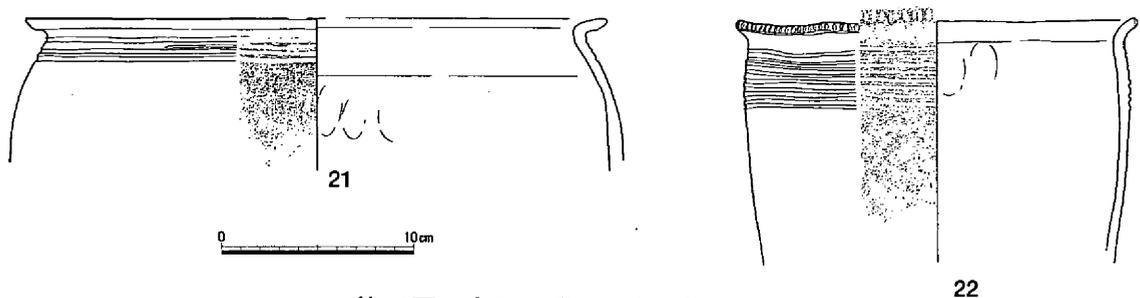
第15図 舟形土壇 6・7 (1/40) ・出土遺物 (1/4・1/2)

づく。幅86cm、深さは検出面より16cmあり、底面の標高は738cmである。

土壇埋土内より壺頸部が出土している。上部に凹線、下部に四条の刺突を廻らす貼付突帯が付く。

舟形土壇 8 (第7・8・16・17図、図版81)

舟形土壇 8 はⅣ区北側道の東側で検出された土壇で、舟形土壇 5・6・7 と方向を同一にする。土壇の長さは 6 m の北側道の調査区間内には収まらず、東・南の方へ伸びている。幅は A 断面近くで最大 170cm、B 断面付近で 150~160cm、その北 150cm の所で 128cm、C 断面の所で 60cm、その南側で 80 を測り非常に不整形である。深さも、検出面より A 付近で 32cm、B は 15cm、C は 14cm である。いま土壇は 1 つの土壇としているが、プランでは検出できなかったが 2~3 つが切り合い関係になる可能性も考えられる。1 つの土壇とすると長軸が 10m 以上になり、また弧状を描くようになり不自然な形になるからである。出土遺物は B 断面西端から多く出土している。図示できたのは 21・22 の甕で弥生時代前期後半段階のものである。



第16図 舟形土壇 8 出土遺物 (1/4)

舟形土壙9 (第7・8・

18図、図版81)

舟形土壙9は舟形土壙8の東側に併行してある。

掘り方の全貌は不明であるが、北東部と南西部が東肩部が5~10cmと一段浅く中央部に長さ310cm、幅80~130cmの不正楕円形の掘りこみがある。

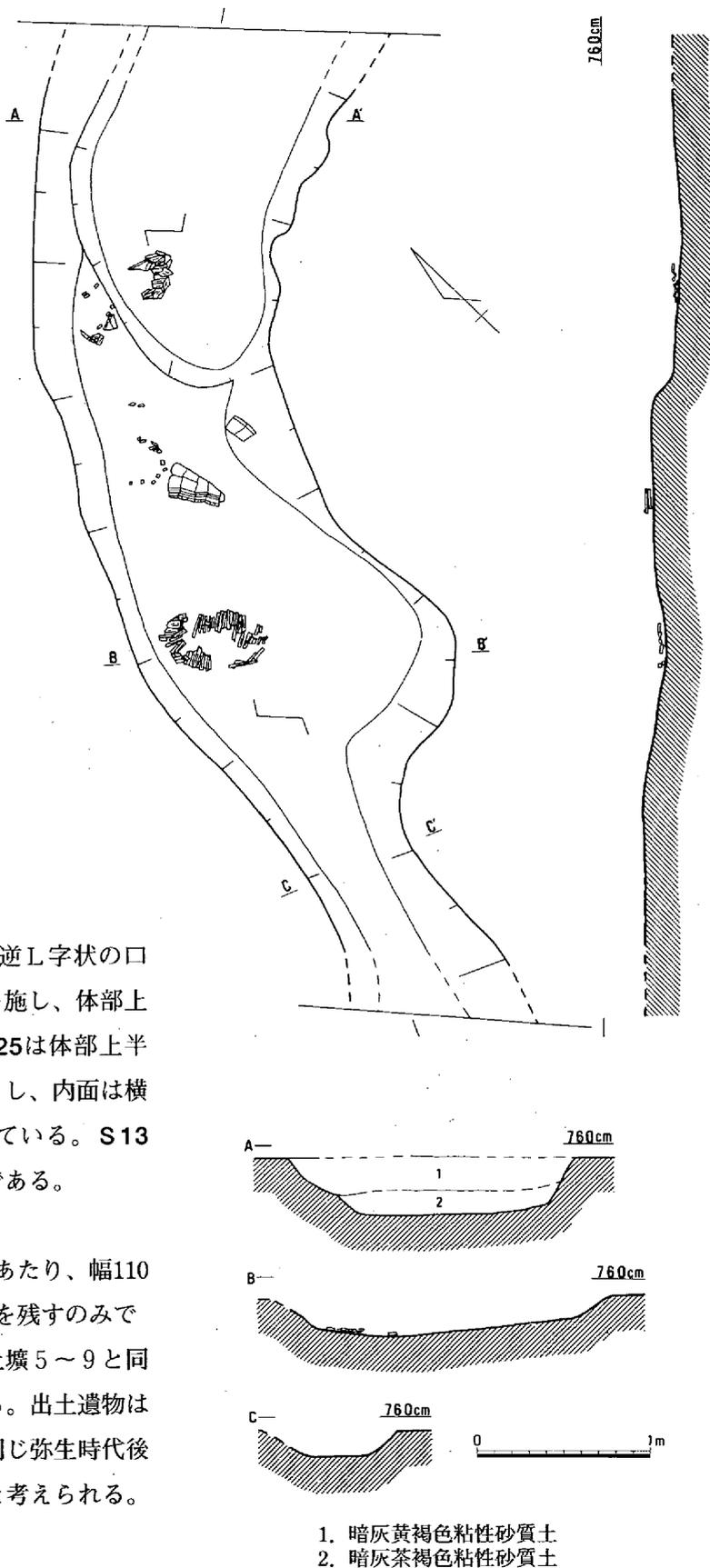
底面は長さ168cm一部狭くなる所も見られるが、幅52cmの長方形になる。底面の深さは30cmあり、底面の標高722cmである。BB'断面以南は少し広がっているの、南側に別の土壙が存在する可能性もある。土壙内より、壺・甕などが出土している。23は壺の口縁部で口縁内面に貼り付け凸帯で弧文、突帯を施す。24は逆L字状の口縁を持つ甕で口縁端部に刻目文を施し、体部上半に7本の篋描沈線を巡らす。25は体部上半に4~5本単位の櫛描沈線を巡らし、内面は横方向の丁寧なヘラミガキを行っている。S13のサヌカイト製のクサビ形石器である。

舟形土壙10 (第7・8・19図)

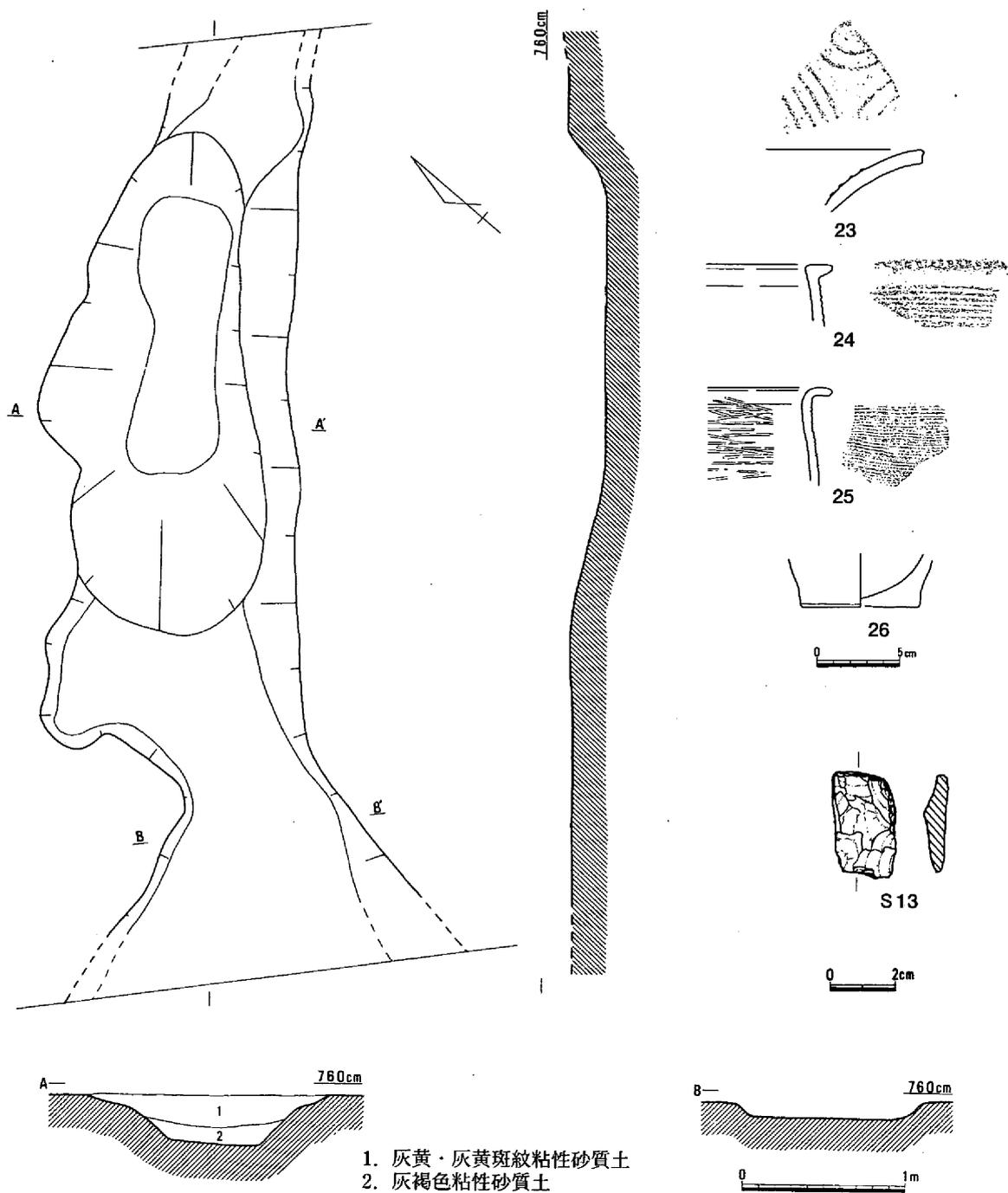
Ⅲ区北側道中央部付近の南側にあたり、幅110cm、長さ140cm、北東部分の一部を残すのみで南西の調査区外にのびる。舟形土壙5~9と同一方向になる。深さは12cmである。出土遺物はみられないが、他の舟形土壙と同じ弥生時代後葉から中期前葉にかけてのものと考えられる。

舟形土壙11 (第7・8・20図)

舟形土壙11はP31の東南隅に検出したもので、最大幅90cmで深さは32cmあり、長さ130cmを調査した。底面の標高706cmである。土壙内



第17図 舟形土壙8 (1/40)



第18図 舟形土壙 9 (1/40) ・出土遺物 (1/4・1/2)

より甕体部片 1 点が出土している。これは体部上半に 5 本を単位とする櫛描沈線、さらにその下部に刺突文が巡る。内面はナデによって調整を行っている。

舟形土壙12 (第 7・8・21 図、図版 81)

舟形土壙12はP32の西壁中央付近で検出され、長さ110cm程を調査した。幅85cm、深さ22cmを測る。土壙内からの出土遺物は見られないが、周辺の土壙と同じく弥生時代前期後葉から中期前葉に含まれるものと考えられる。

舟形土壙13 (第7・8・21・22・23図)

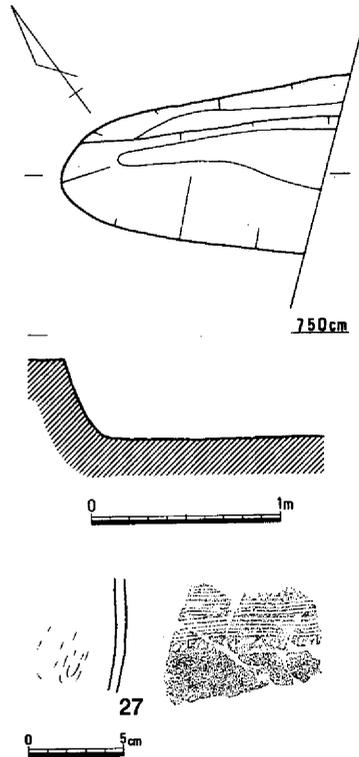
舟形土壙13はP32の中央に作られ、舟形土壙11と東西に併行してつくられている。長さ310cm、幅は西側中央で80cm、東側で90cmを底面は長さ228cm、幅は南側で64cm中央で70cm、東側で78cmを測る。深さは20cm程である。東側の南寄りに甕を転用した甕が1点出土している。その他にもこの土壙内から28・29の壺、30~36の甕などが出土している。28は甕の口縁部で口縁端部にヘラ状工具で刻目を施す。29は小形の壺の口縁部である。甕(甕)30・32・33はくの字状になる口縁部を持ち、体部上半に櫛描沈線を施す。31は8本単位で5列、下部に刺突文を持つ。32は5本単位、33は剥離が著しく観察できないが櫛描沈線を持つ。下半部は縦方向のヘラミガキを、内面は指による押圧を行っている。

これらの土器は弥生時代前期後葉から中期前葉にかけてのものである。

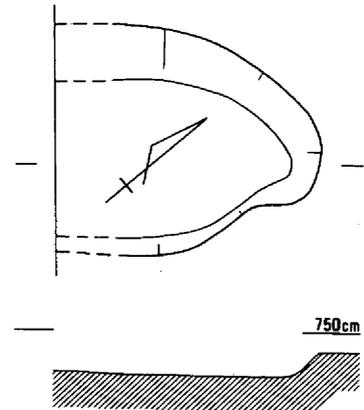
(2) 土壙

土壙1 (第7・24図)

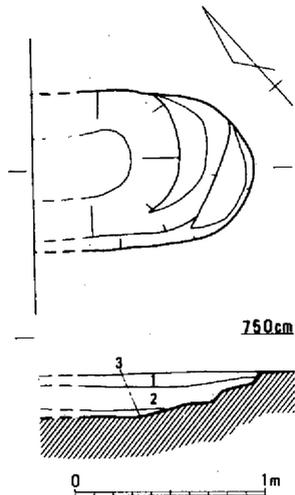
Ⅳ区北側道中程で検出された土壙で、直径155cm、深さ10cmの円形である。東側および西側の肩の一部を溝17・18に切られている。土壙の底部は平端面面をしており、底部への



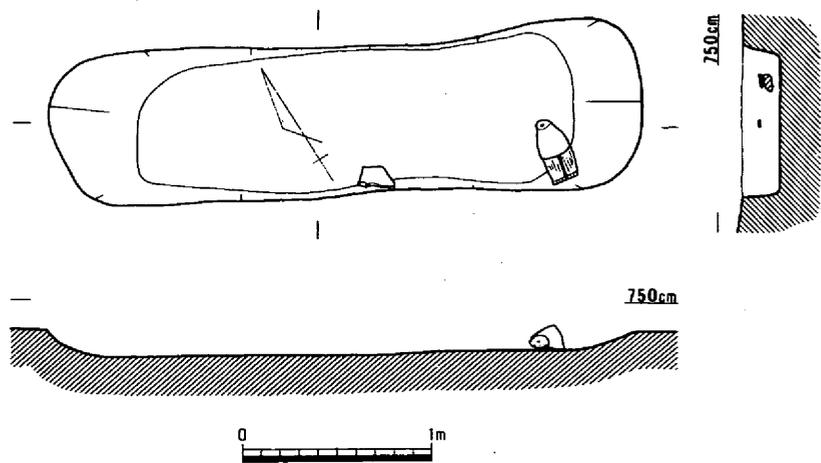
第20図 舟形土壙11 (1/40)
・出土遺物 (1/4)



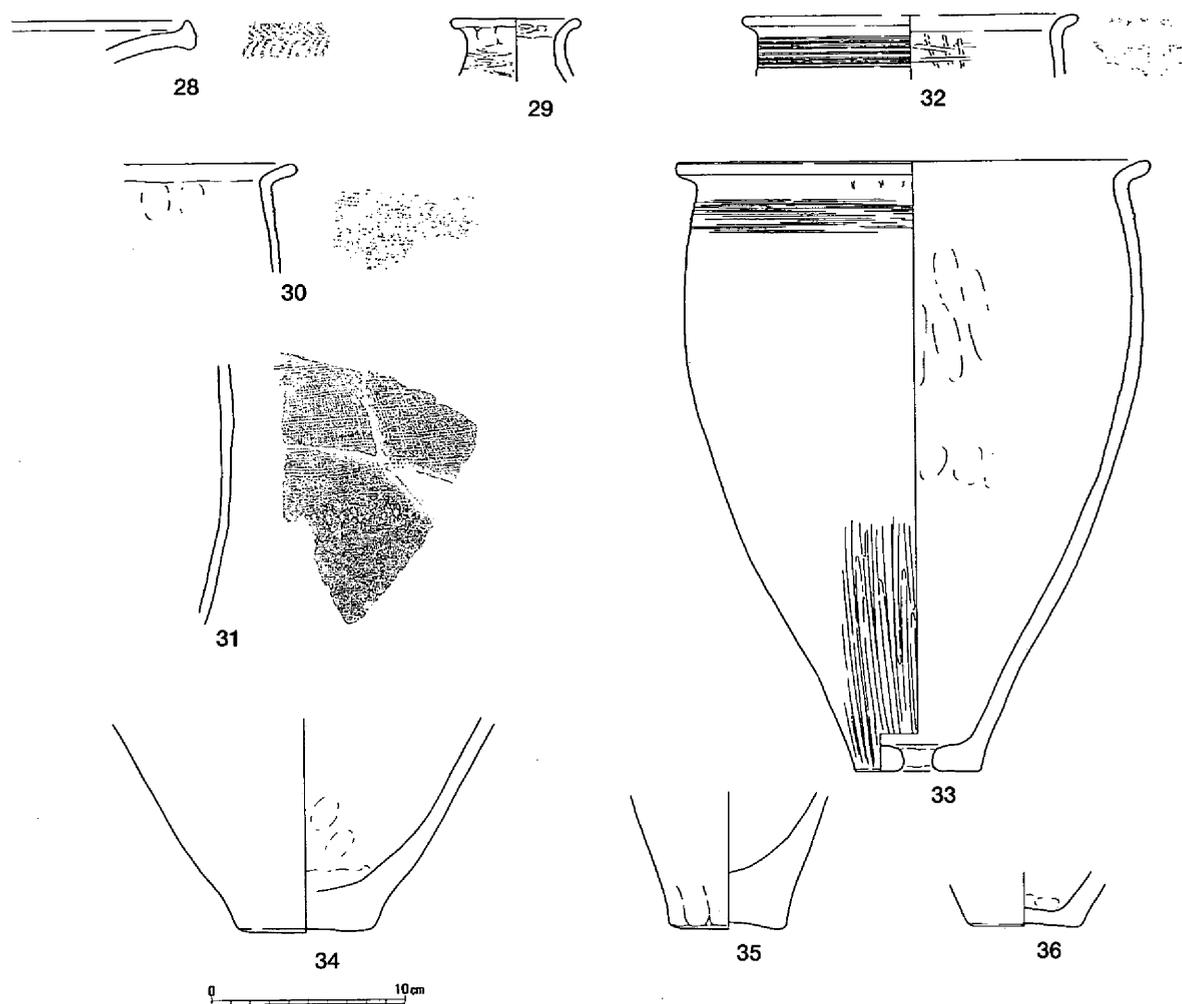
第19図 舟形土壙10 (1/40)



第21図 舟形土壙12 (1/40)



第22図 舟形土壙13 (1/40)



第23図 舟形坑13出土遺物 (1/4)

標高は730cmである。土壌内から結晶片岩製の石包丁が1点出土している。1/2程の破片である。最大長7.9cm、最大幅4.4cm、最大厚0.67cm、重さ24.9gを測り、孔が1ヶ所みられる。その他に弥生時代中期と思われる土器片が少量含まれていた。

土壌2 (第7・25図)

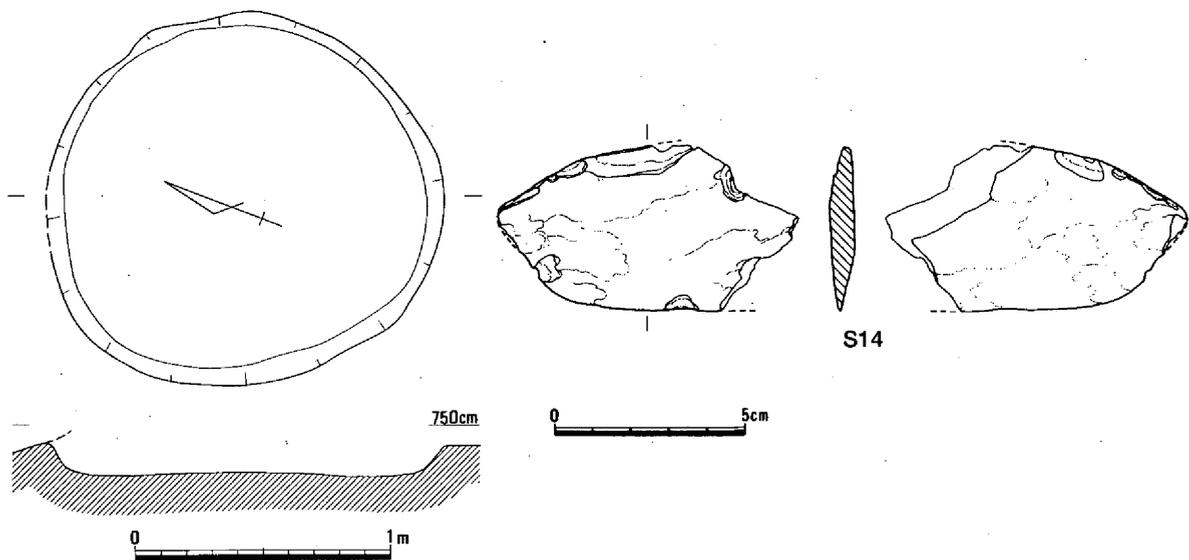
Ⅳ区北側道中程で検出した土壌で、直径163~185cmの不整円形である。深さは20cm程を測る。土壌底部の標高は685cmである。出土遺物は弥生時代中期前葉の土器片が少量含まれていたのみである。時期は中期前葉であろうか。

土壌3 (第7・26図)

Ⅳ区P31で検出した直径50~60cmの円形の土壌、あるいは柱穴状の遺構である。深さは23cmを測る。土壌内よりサヌカイト製の錐が1点出土している。

土壌4 (第7・27図)

Ⅳ区P32西北隅で検出した径90cm前後の楕円形を呈する土壌である。深さは6~7cmと浅い。底面はほぼ水平で、底面の標高は734cmである。



第24図 土壌1 (1/30) ・出土遺物 (1/2)

出土遺物は弥生時代前期～中期の土器小片が出土しているが、時期は不明である。

土壌5 (第7・28図)

Ⅳ区P32の南西隅、土壌4の南側で検出した直径120cm前後の円形になる土壌である。深さは5cm程と浅い。底面はほぼ水平である。底面の標高は734cmで土壌4と同じである。

出土遺物は弥生時代中期の土器小片が出土しているが、時期は不明である。

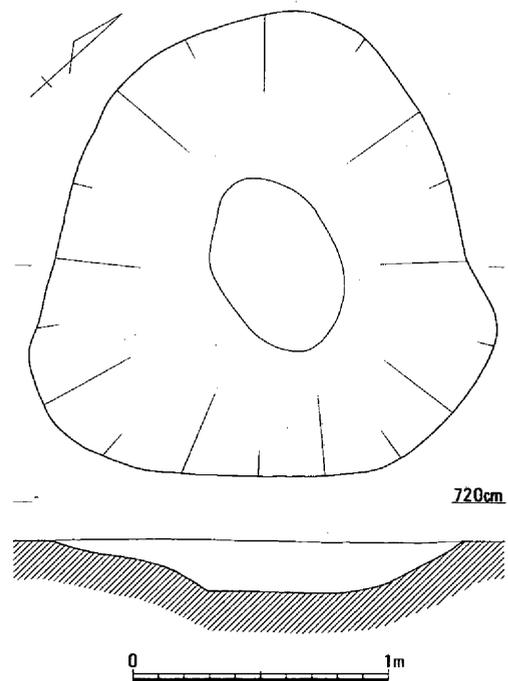
土壌6 (第7・29図)

Ⅳ区P32で検出された長径83cm、短径55cmの楕円形を呈する土壌、あるいは柱穴状の遺構である。最も深い所で23cmで、標高705cmを測る。すぐ南側に舟形土壌13が接して存在する。

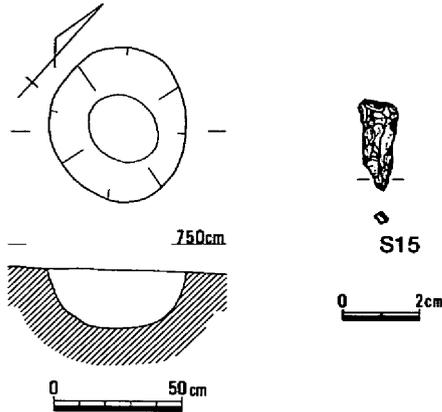
出土遺物は弥生時代中期の土器細片が出土しているが、時期は不明である。

土壌7 (第7・30図)

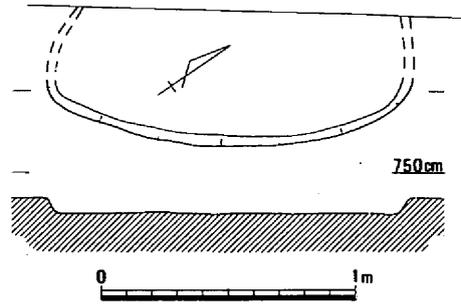
Ⅳ区南側道西よりで検出された不定形な南北に長くなると考えられる舟形土壌状の遺構である。北側に一段浅い平坦面があり、壁よりの南側が検出面から22cmと深くなり、この底面での標高は713cmを測る。埋土上層は炭混りの茶灰色粘質土で覆われていたが、浅い段から深くなる肩部には炭混りの褐色粘土層がみられた。残存する規模は短軸45～67cm、長軸105cmを測り、遺物は弥生時代前期の土器小片が出土している。土壌のあり方から、前述の舟形土壌の可能性も考えられる。



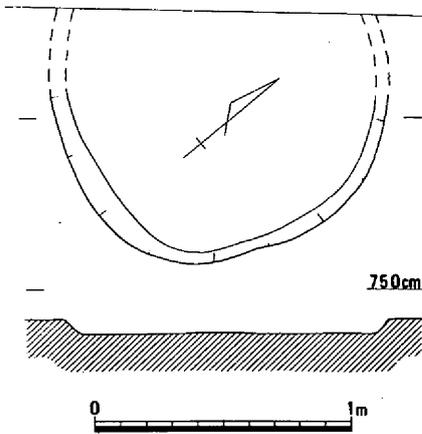
第25図 土壌2 (1/30)



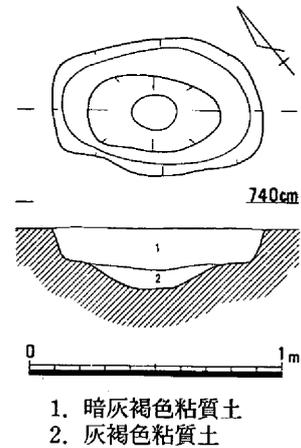
第26図 土壙3 (1/30) ・出土遺物 (1/2)



第27図 土壙4 (1/30)

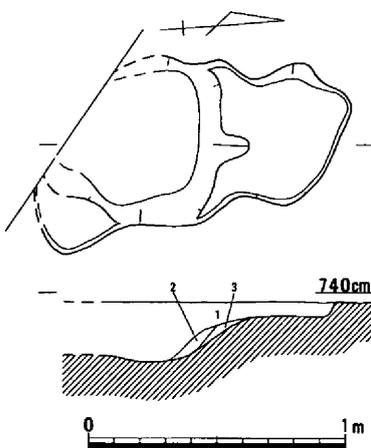


第28図 土壙5 (1/30)



1. 暗灰褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土

第29図 土壙6 (1/30)



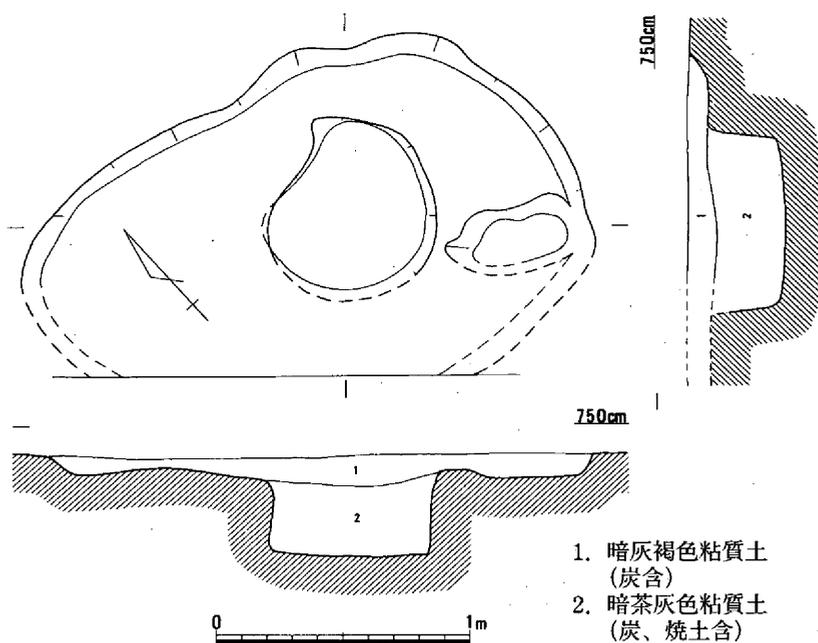
1. 茶灰色粘質土 (炭含)
2. 褐灰色粘質土 (炭含)
3. 灰色粘質土

第30図 土壙7 (1/30)

土壙8 (第7・31図)

IV区南側道中程で検出された長軸200cm、短軸150cm程の楕円形を呈し、その中央部東よりに短径60cm、長径70cmの壙が一段深く掘られている。一段目の深さは6.7cmを測り、埋土は炭・焼土を含む暗灰褐色粘質土で、下段の掘り込みは23cm程の深さになり、埋土は上部同様に炭・焼土を含む暗茶灰色粘質土であった。土壙壁は上部が比較的緩やかに下がるのに対し下部のそれは急であったが、底部はいずれも平坦である。浅い底面の標高は730cm、深いそれは698cmを測る。また、土壙の東部には不整形な凹み状を呈する穴が検出されたが、複数の土壙が重複している可能性もある。

出土遺物は弥生時代前期の土器小片が出土しているが、この土壙の性格、時期も不明である。(伊藤)



第31図 土坑 8 (1/30)

(3) 小土坑群

Ⅱ区東側からⅢ区西側において、多数のピットを検出した。個々のピットの規模は直径5cm程度のものから、同じく30cmのものまでである。深さは浅いもので約10cm、深いもので約30cmを測る。埋土は、黒褐色粘質土で基盤層との相違は明確ではない。これらのピットは、Ⅱ区西側・Ⅳ区に存在する微高地には含まれた、今回の調査区域で最も標高の低い低地に分布することや、出土遺物が皆無なこと、計画性、規模性共に乏しく在り方が無秩序なことなどから、人工的なものではなく、例えば樹木・植物の根の可能性もある。

当遺構の時期は判断しかねるが、検出面より弥生時代前期以前としたい。

(蛇原)

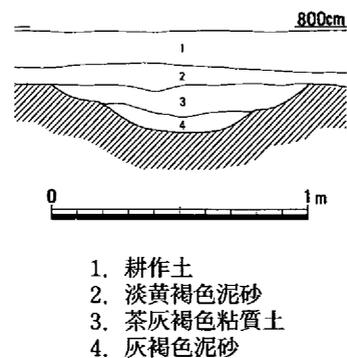
(4) 溝

溝 1 (第4・32図、図版82)

この溝は、Ⅱ区の西端に位置し、南測道、P17で検出され、さらに北側道の溝44に連続する。溝は北北東から南南西方向に走り、幅約100cm、深さ約20cmを測る。溝は二段状になっており、上下2層に堆積していた。溝からは、須恵器などが少量出土し、6世紀後半の特徴を示していた。

溝 2 (第5・33図、図版82)

この溝は、Ⅱ区中央からやや西寄りP18で検出されたものである。P18では、幅約600cm、深さ約115cmの溝状を呈している。しかし、この溝状のものは溝として南・北側道には続かず、不正形



第32図 溝 1 (1/30)

な状態で南・北側道、P18で確認されている。溝2を含めたこの不正形な溝状のものは、底部も一定せず、アメーバ状の「たわみ」として把握できる。この溝2は、河道3として報告しているものと同じである。この溝2からは、弥生時代前期後半～中期前半にかけての土器が少量出土している。

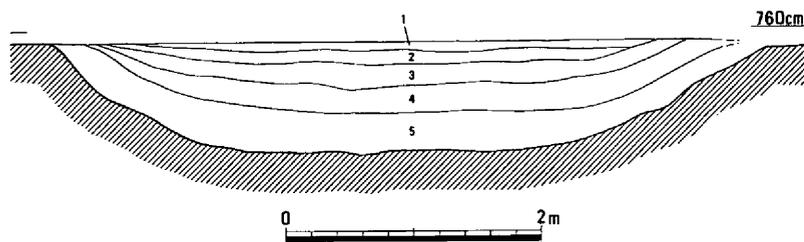
溝3 (第5・34図)

溝3は、Ⅱ区中央の西寄りの南側道に位置し、溝86の下部に検出された。この溝はP18では確認されていない。溝の幅約25cm、深さは約8cmを測る。出土遺物はないものの、溝2と同一面で検出されており同時期の可能性もある。

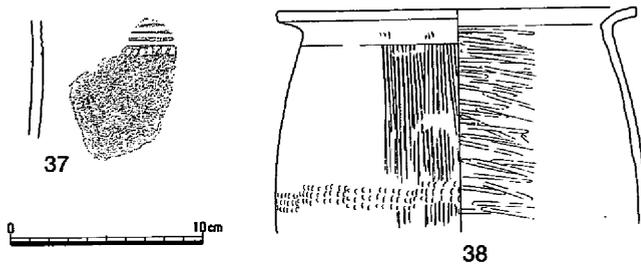
(中野)

溝4 (第6・35図)

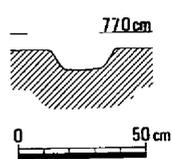
Ⅲ区P26で検出された溝で北西から南東に流れる。幅86cm、深さ8cmの浅い溝である。Ⅲ区南側道の溝6とは幅等が異なるが同一溝の可能性はある。溝底面の標高は712cmである。出土遺物はなく時期は不明である。



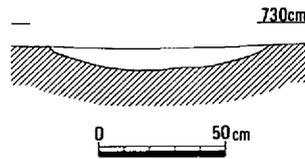
- 1. 茶灰褐色砂泥
- 2. 暗灰色粘質土
- 3. 暗灰色砂泥
- 4. 淡青灰色砂泥
- 5. 黒灰色砂質土 (灰色砂・黒灰褐色粘質土混)



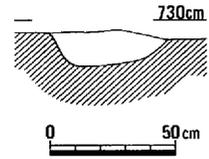
第33図 溝2 (1/30) ・出土遺物 (1/4)



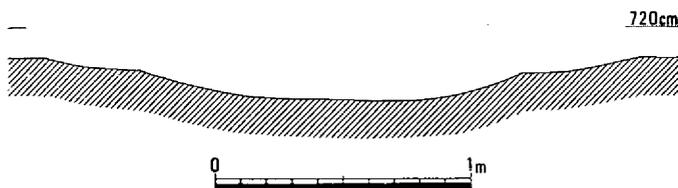
第34図 溝3 (1/30)



第35図 溝4 (1/30)



第36図 溝5 (1/30)



第37図 溝6 (1/30) ・出土遺物 (1/2)



溝5 (第6・36図)

Ⅲ区P28から南側道にかけて略南北に走る溝である。幅46cm、深さ12cmの溝である。出土遺物はなく時期は不明である。

溝6 (第6・37図)

Ⅲ区南側道の西側をほぼ南北に流走する溝である。溝93・96に切られている。幅は一定しないが、広い箇所300cm、狭い箇所215cmを測る。深さは15cm～20cmである。溝底面の標高は692cmである。埋土は土層

が暗黄灰色粘質土、下層が青灰色砂である。出土遺物には、弥生前期と思われる土器細片、サヌカイト製の凹基式石鏃S16がある。

溝7 (第5・38図)

Ⅲ区南側道の中央部に存在する。幅約40cm、深さ2cmをそれぞれ測る。ほぼ東西方向に流路を形成している。時期は、遺物が皆無いため明瞭でないが検出面よりみると弥生時代前期後葉から中期前葉のものであろうか。

溝8 (第5・39図)

Ⅲ区南側道の中央部、溝5を切って検出した溝である。調査区を東北東—西南西方向に横断し、幅約30cm、深さ11~12cmをそれぞれ測る。溝底面の標高は708cmである。埋土には、暗黄灰色粘質土が入っている。時期は遺物が出土していないため明確ではないが、おそらく弥生時代前期後葉~中期前葉の溝と思われる。

溝9 (第5・40図)

Ⅲ区南側道の中央部で検出した溝である。溝5・8と交差する位置にあり、北西—南東の方向に流走している。幅約80cm、深さ6cmである。出土遺物が皆無いため、時期は判別できないが、検出面より弥生時代前期後葉~中期前葉と思われる。

溝10 (第5・41図)

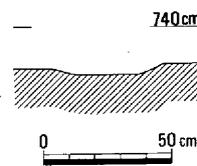
Ⅲ区南側道中央のやや西側において検出した溝である。水田跡の下層に位置する。調査区を北東—南西方向に横断し、溝5とは並行する位置関係にある。埋土には溝6・8と同じ暗黄灰粘質土が入っている。当遺構の時期は、弥生時代前期後葉~中期前葉と推定される。

溝11 (第5・42図)

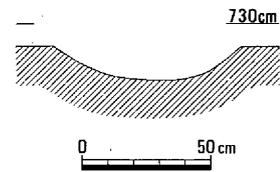
Ⅲ区南側道の東端で検出した。河道4の東岸に沿うような位置にある。幅約25cm、深さ5cmをそれぞれ測り、埋土は、河道4の埋没後の水田層(水田1)と同じ層位で検出された。古墳時代後半と考えられる。

溝12 (第6・43図)

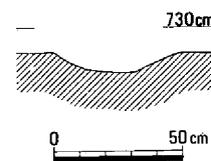
Ⅳ区北側道で検出した溝で南北に走る。幅70cm、深さ8cm程の浅い溝である。出土遺物は弥生時代



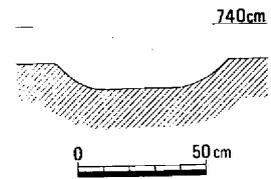
第38図 溝7 (1/30)



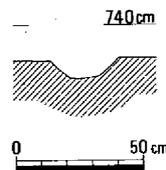
第39図 溝8 (1/30)



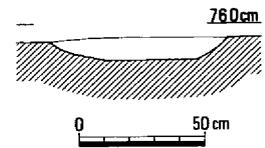
第40図 溝9 (1/30)



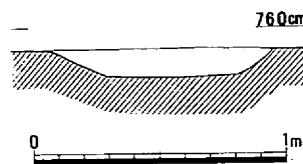
第41図 溝10 (1/30)



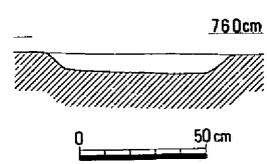
第42図 溝11 (1/30)



第43図 溝12 (1/30)



第44図 溝13 (1/30)



第45図 溝14 (1/30)

後期の小片が出土しているが、時期は不明である。

溝13 (第6・44図)

IV区北側道、溝12の南側に位置し溝12に切られている。幅90cm、深さ10cmと浅い。北側には伸びず南側に伸びる舟形土塼の可能性ある。出土遺物はなく時期は不明である。

溝14 (第7・45図)

IV区北側道中央部で検出した南北に走る、幅71cm、深さ7cm程の浅い溝である。出土遺物はなく時期は不明である。

溝15 (第7・46図)

IV区北側道中央部に位置し、南北に走る。溝17に切られている。幅は180cmを測るが、2つの溝あるいは、土塼の一部と考えられる。深さは西側が浅く6~8cm、東側のは20cm近くになる。

出土遺物は甕底部が2片出土している。弥生時代前期後葉~中期前葉にかけてのものであろうか。

溝16 (第7・47図)

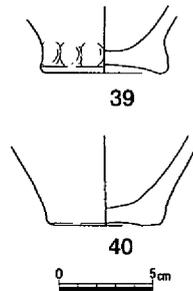
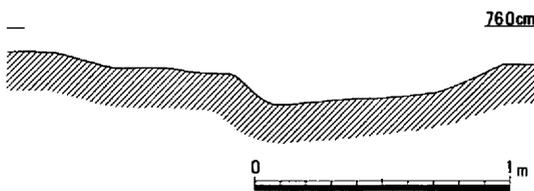
IV区北側道中程に位置し、溝17に切られている。これも舟形土塼の可能性ある。幅は北側の広い所で100cm近く、狭い所で40cm程になる。深さは20cm前後である。溝底面の標高は728cmである。出土遺物は弥生土器の小片で時期ははっきりしないが、舟形土塼とすると弥生時代前期後葉から中期前葉の可能性ある。

溝17 (第7・48図)

IV区北側道中央部で検出された溝で、北東から南西に流路を取る。幅は北側で80cm前後、南側では150cm程になる。深さは20cm前後である。次に述べる溝18・19あるいは93とともに今までの溝の方向とは異なる方向を持つ溝群である。出土遺物は弥生時代の小片が出土しているが、時期は不明である。

溝18 (第7・49図)

IV区北側道中央部にあり、北東から南西に流れる溝である。幅は50cm程で狭く、深さも10cm程の浅い溝である。出土遺物は弥生時代の小片が出土しているが、時期は不明である。

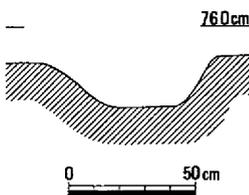


い溝である。出土遺物は弥生時代の小片が出土しているが、時期は不明である。

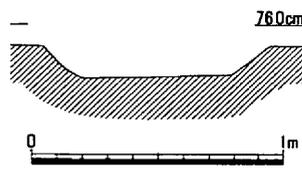
溝19 (第7・50図)

IV区北側道中央付近で北東から南西に伸びる溝で、土塼11・溝20

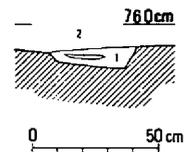
第46図 溝15 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



第47図 溝16 (1/30)



第48図 溝17 (1/30)



- 1. 暗灰茶褐色砂質土
- 2. 灰白色砂質土

第49図 溝18 (1/30)

に切られている。幅60cm、深さ6～7cmの浅い溝である。出土遺物はなく時期は不明であるが土層からみても新しい時期のものであろう。

溝20・21 (第7・51図、図版82)

IV区北側道中央付近で北から南へ少し蛇行しながら併走する溝で、溝20が溝21を切っている。また北側で溝19を、切っている。

溝20は幅140cm前後で、深さは浅い所で25cm、深い所で36cm程ある。

溝21は幅推定160cm前後あり、深さは38cmである。出土遺物は溝21から、壺・ミニチュア壺・甕・高杯・サヌカイト製のクサビ形石器などが出土している。これらから溝21は弥生時代後期初頭に位置付けられる。

溝22 (第7・52図)

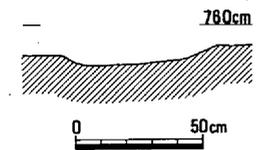
IV区北側道、溝21の東側にあり北から南に走る溝である。幅は狭い所で20cm程、広い所で50数cmになる。深さは4～5cmと浅い。出土遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉の小片が出土しているが、時期は不明である。

溝23 (第7・53図)

IV区北側道、溝22の東溝23の西に併行して北から南に走る溝である。幅は80cm、深さ40cmを測る。出土遺物は弥生時代後期の小片が出土しているが、時期は不明である。

溝24 (第7・54図)

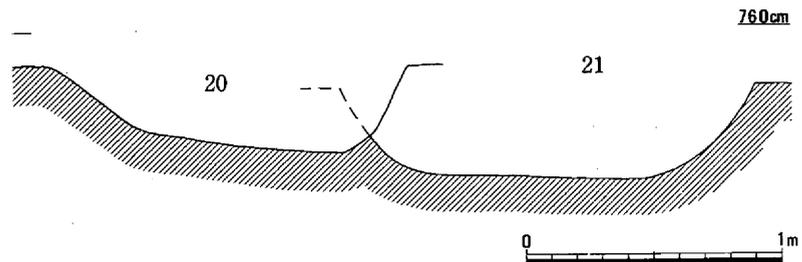
IV区北側道、溝23の東側に北から南に走る幅25cm、深さ12cmの溝である。出土遺物は弥生時代前期後葉～中期前葉の小片が出土しているが、時期は不明である。



第50図 溝19 (1/30)

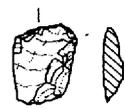
溝25 (第7・55図)

IV区北側道中央付近で北から南へ走る、幅30cm、深さ10cm程の溝である。南端で溝26に切られている。出土遺物は弥生時代の小片が出土しているが、時期は不明である。

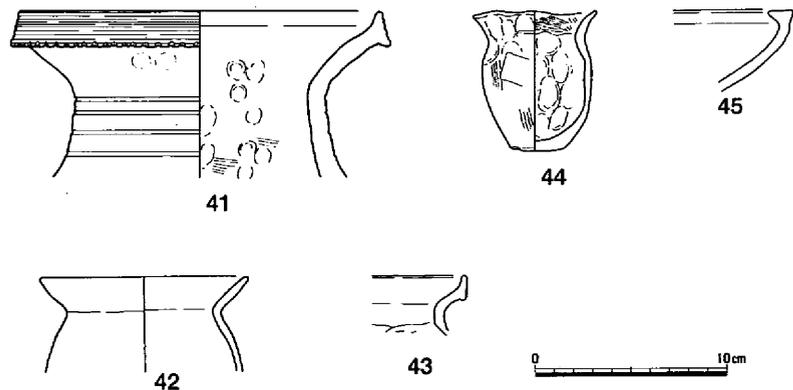


溝26 (第7・56図)

IV区北側道、溝25の東



S17

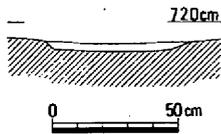


第51図 溝20・21 (1/30) ・出土遺物 (1/2・1/4)

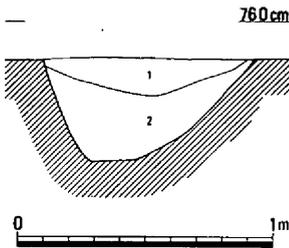
側にあり、南端で溝25を切っている。幅30cm、深さ20cm前後で、断面はU字形を呈す、出土遺物は弥生時代前期後葉の小片が出土しているが、時期は不明である。

溝27 (第7・57図)

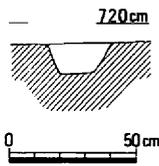
IV区北側道、溝26の東側に26と併走するように北から南に走る。幅40cm前後、深さ10数cmある。出土遺物は弥生時代後期と考えられる破片が出土しているが、時期は不明である。このあたりから基盤層の黄褐色砂質土が南へ低くなっていく。



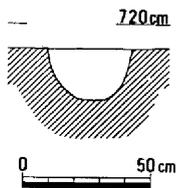
第52図 溝22 (1/30)



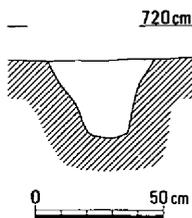
第53図 溝23 (1/30)



第54図 溝24 (1/30)



第56図 溝26 (1/30)



第58図 溝28 (1/30)

溝28 (第7・58図)

IV区北側道東端で検出され北から南に走る。幅50cm、深さ40cmを測る。出土遺物は弥生時代後期と考えられる土器片が少量出土している。西20mの溝27までの間には小区画の水田跡がみられる。

溝29 (第7・59図)

IV区北側道東端で検出された溝で北から弧状になって東へ向う。

溝28・30と併走するように走る。幅35cm、深さ10cm前後である。水田畦畔状の下層になる。

出土遺物は弥生時代前期～中期の破片がある。

溝30 (第7・60図)

IV区北側道東端にあり、溝29に200m程離れそうようにして存在する。幅30cm、深さ10cm程である。

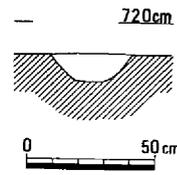
出土遺物は弥生時代前期～中期の破片がある。これら28～30の溝は、IV区東端路にあたり、弥生時代の微高地が東および南の方へ徐々に降ってゆく肩部になり、この溝は微高地に沿って北から南へ走っている。

溝31 (図7・61図)

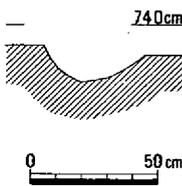
IV区P34で北から南に検出された溝である。幅は狭い所で数cm、広い所で30cm、深さは数cmから5cm程と浅い。IV区北側道のどの溝と連続するのかわからない。出土遺物はないが包含層上層から切りこまれており、中世と考えられる。

溝32 (第7・62図)

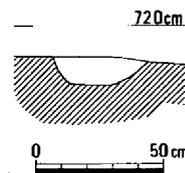
IV区P34で北から南に走る溝で、西側肩部を溝31に切られている。出土遺物は弥生時代の小片が含まれるが、時期は不明である。幅は180cm前後あり、深さは30cm前後である。このあたりで



第55図 溝25 (1/30)



第57図 溝27 (1/30)

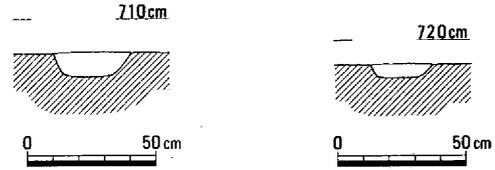


第59図 溝29 (1/30)

は微高地は南西にも下っていったようである。

溝33 (第7・63図)

IV区P34で検出された溝状あるいはたわみ状の遺構である。北東から南西にのび、西端が狭くなる。最大幅は40cm前後あり、深さは10cm程である。遺構内より、古墳時代初頭と考えられる。甕の口縁部1点が出土している。

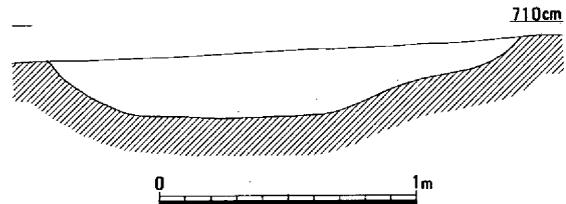


第60図 溝30 (1/30) 第61図 溝31 (1/30)

(5) 河道

河道1 (第3・64図)

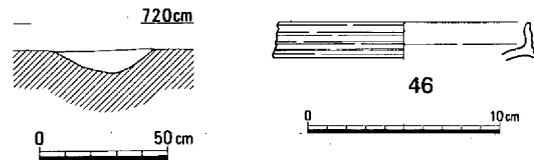
この河道は、調査区西端のP10橋脚部に位置し、ほぼ東西方向に検出された。河道は、調査区内では北側の肩部しか検出されなかったため、調査区を南側に一部拡張して河道の南側肩部を確認した。その結果、規模は幅約410cm、深さ約65cmであることが明らかとなった。堆積土は、第64図の第9～13層で、ほぼレンズ状に堆積していた。各層には、砂層のブロックを多く含んでいた。このような堆積状況は、河道の東側に隣接する幅約900cmの河道2と共通性が認められる。また、河道1は東側の調査区では



第62図 溝32 (1/30)

検出されておらず、河道1から派生した流路である可能性が高いと考えられる。さらに、河道1の堆積状況は洪水時の堆積と考えられ、東側の河道1の大きな洪水時に形成された自然河道と思われる。

出土遺物としては土師器の小片が少量出土したものの時期を限度できるものはなかった。ここでは、河道2と同時期としておく。



第63図 溝33 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)

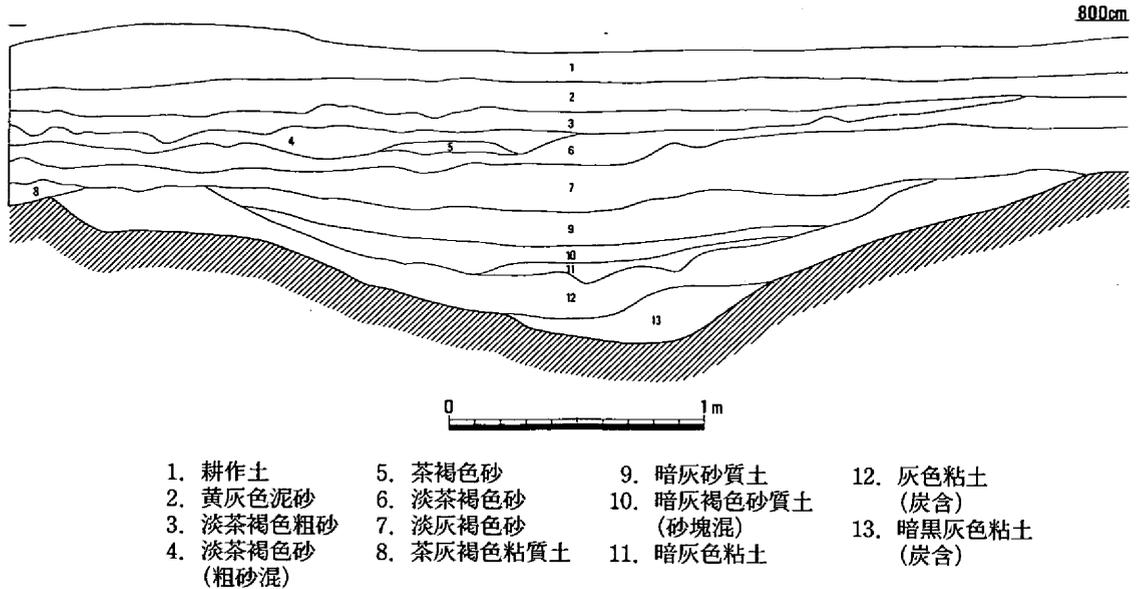
河道2 (第3・65図、図版83)

この河道は、I区の西端部に位置しており、南・北側道、P11橋脚部で検出された。北・南側道、P11では、東側の肩部が確認され、南側道の端部では西側の肩部が一部検出された。その結果、河道は北北西から南南東方向に流走すると考えられた。規模は、幅が約18mにもおよぶ大規模な河道である。河道は、東側肩口に約150cmの溝状のものが存在しており、さらに西側に落ちていく。河道内は粘土層と砂層が互層に堆積しており、さらにピート層が不規則に堆積している状況が認められた。河道の底部は、約135cmほどまでは確認できたものの、調査区が限定されていたため、最深部までは検出できなかった。河道は、このような堆積状況からみて北西方向からの大規模な洪水により埋没したものと考えられる。

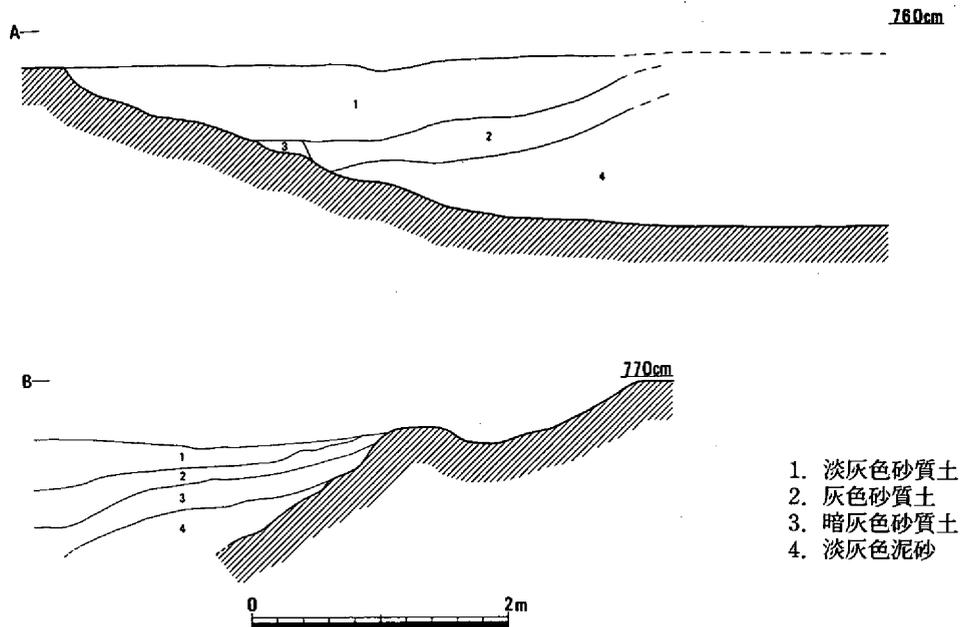
出土遺物は、弥生～古墳時代初頭の土器が少量検出されている。

河道3 (第4・66・67図、図版83・87)

この河道は、II区中央の西側に位置しており、南・北側道、P18で検出された。さらに、P19の溝2としているものもこれらに連続すると考えられる。河道は、P18・19を中心にアメーバ状に不定方



第64図 河道1 (1/30)

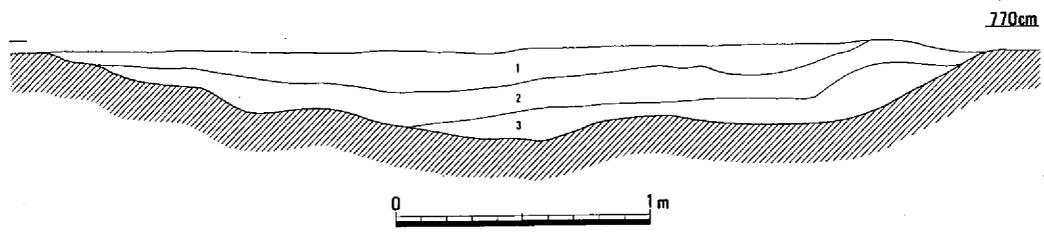


第65図 河道2 (1/60)

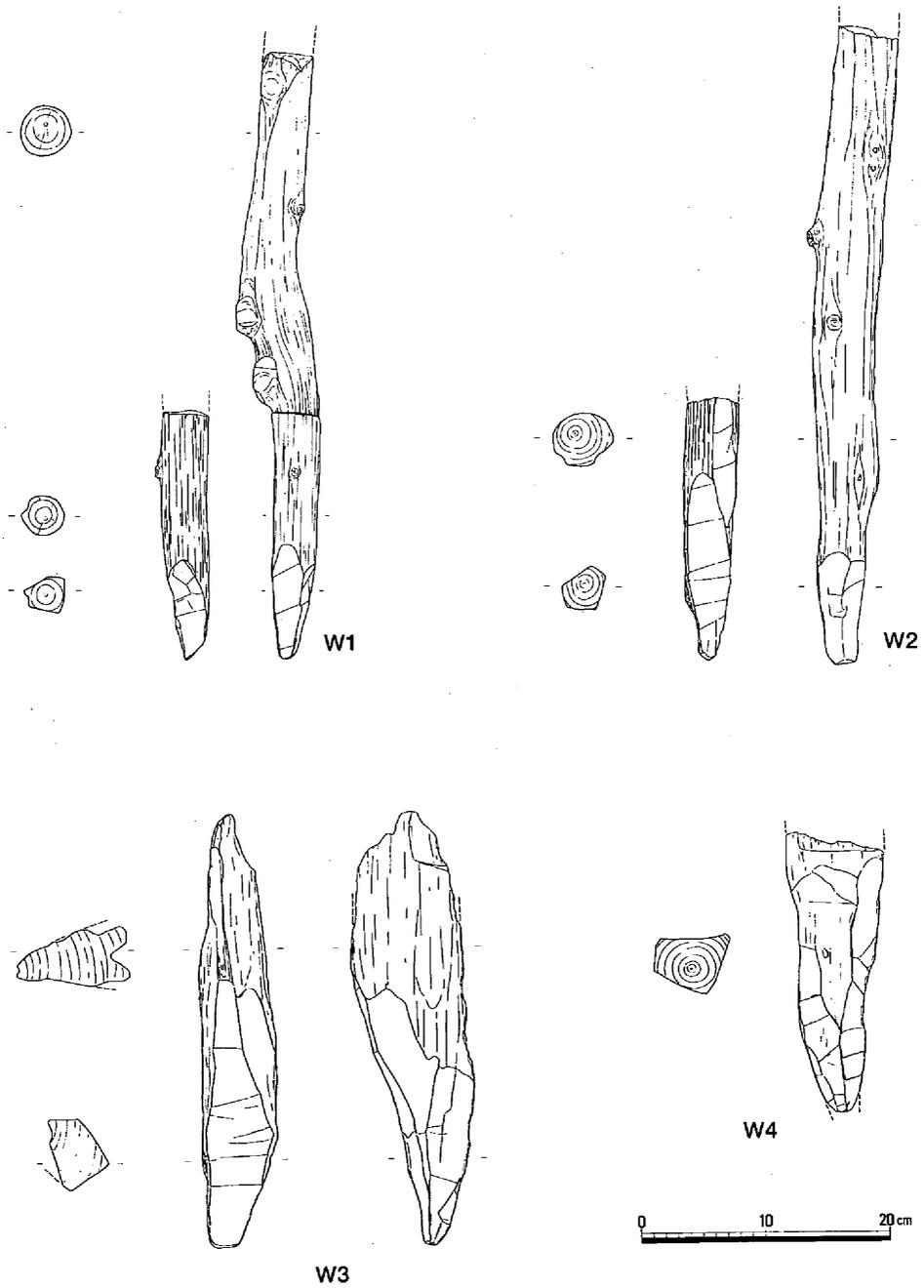
向に拡がっており、その一部は南・北側道にも派生している。この河道は、平面形および堆積状況からみて、洪水等によって生じた「たわみ」と考えられる。しかしながら、P18の西側部では不定形な「たわみ」には第66・67図で示した杭が10数本打ち込まれた状況を確認した。杭は、規則的な位置関係には存在していなかった。杭は、直径5cm前後のもの、直径10cm以上の木の割材を使用しており、先端部はいずれも鋭利なもので加工されていた。これらの杭が、どのような遺構を構成していたかは不明である。なお、樹種はタブノキ、コナラ、アカガシ、シキ属などである。

出土遺物は、図示した47など弥生時代中期前半期の土器が少量出土した。

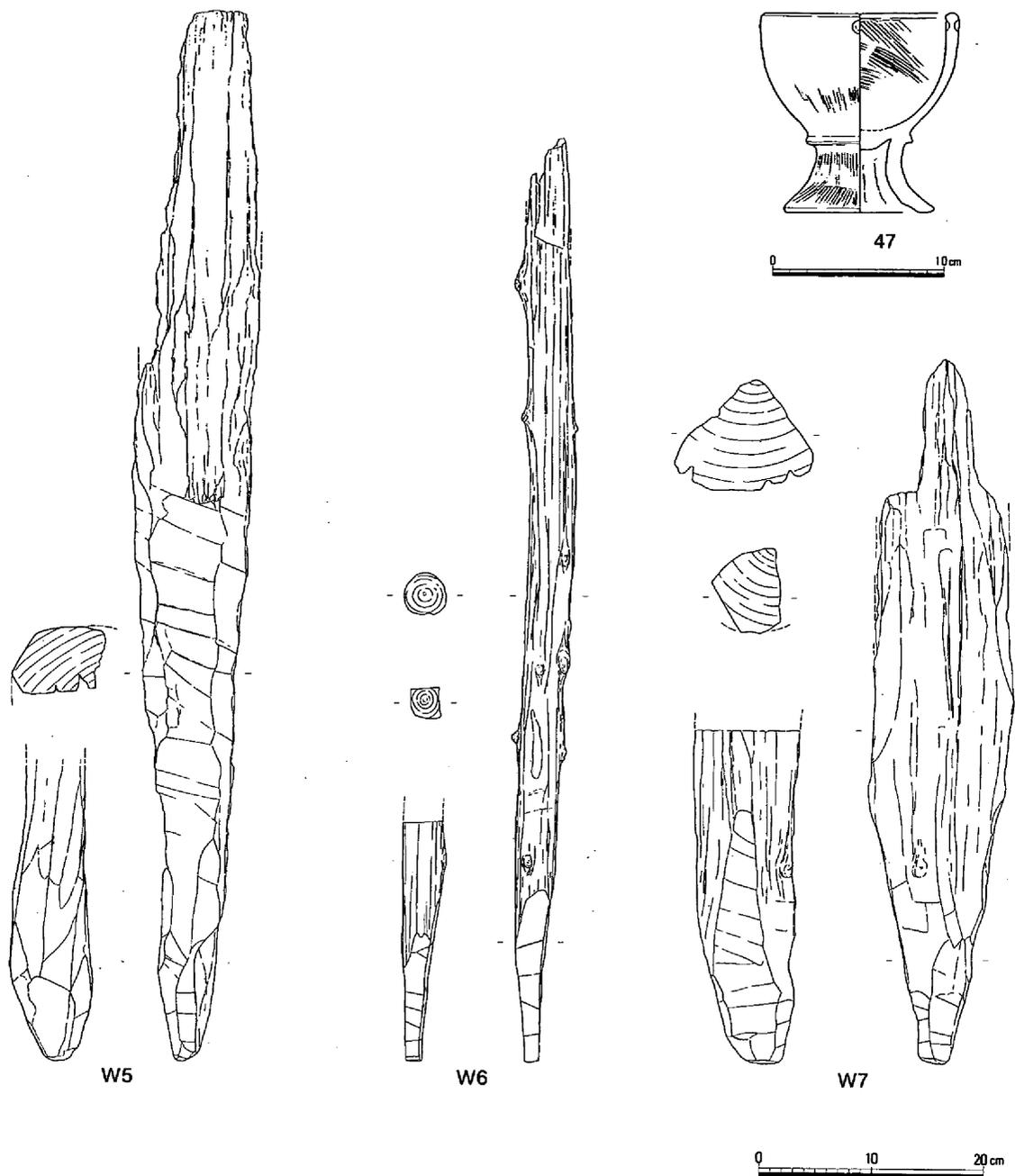
(中野)



1. 淡灰褐色粘質土 2. 暗灰褐色粘質土 3. 暗灰色泥砂



第66図 河道3 (1/30) ・出土遺物① (1/6)

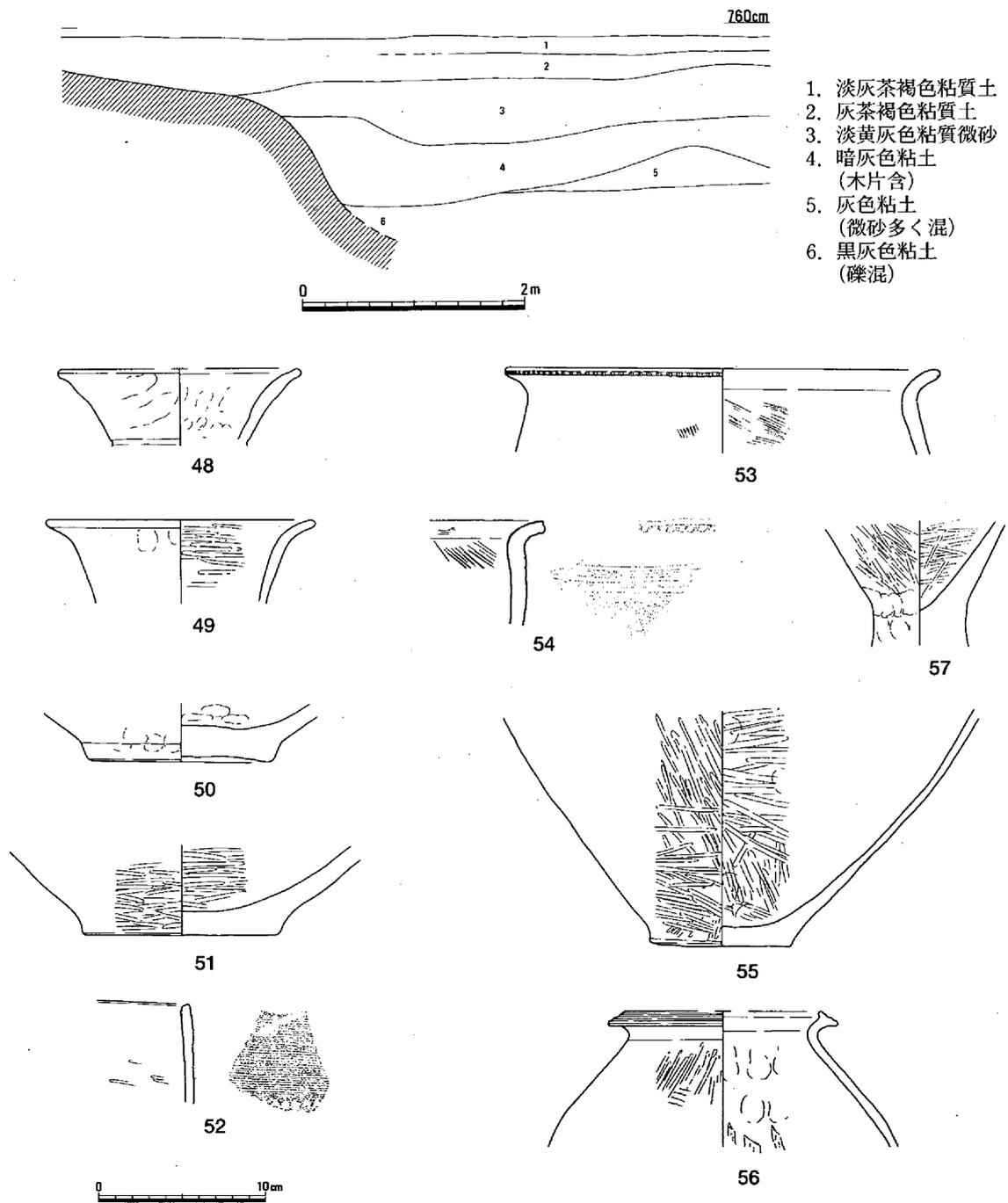


第67図 河道3出土遺物② (1/6・1/4)

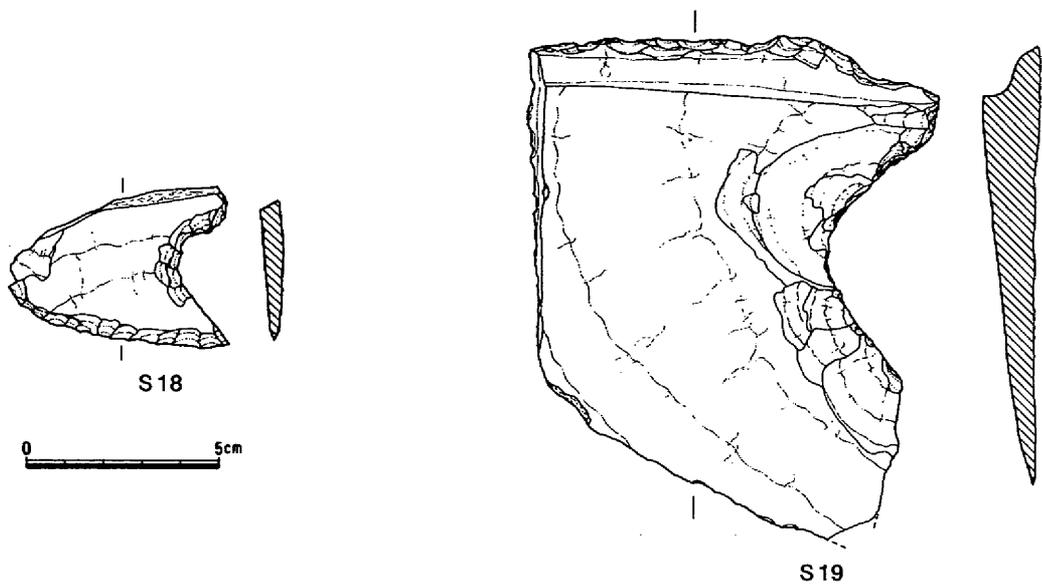
河道4 (第6・68・69図)

河道4は、Ⅲ区北側道で西肩が、Ⅳ区北側道西端において舟形土壇1の西肩に沿って、微高地が下っていく部分と重なる。東側の肩部が検出され、この部分で幅約32m程ある自然河道である。またP-26においても西側の肩部から下りの部分が、さらにⅢ区南側道において両肩を検出している。南側道部分では最大幅15.5m、狭い所でも14.5m程であり、北側道の半分程の狭さになっている。P-30では東側の肩部は検出されていないので、この北側で急激に幅を狭めるようで、河道の攻撃面にあたる可能性もある。北側道の河道上には古代末～中世にかけての溝93・94・95があるが、P-29、南側道ではみられなかった。深さは152～160cm程下げているが湧水が激しく検出できていない。Ⅲ区北側道西よりの堆積は粘土層を基本としているが、P-29、南側道では下層に砂の堆積がみられる。

河道内からは護岸に打たれたと思われる杭の他、上層から弥生時代中期後半の土器、Ⅲ区南側道砂層内の下層から前期後葉の土器が出土している。48・49は壺で逆八の字状に開く口縁部をもち、50・51は壺の底部で51は内外面とも丁寧なヘラミガキを行っている。52は無頸壺になるもので、口唇部に6本単位で5列の櫛描沈線、その下部に鋸歯文状の刺突を巡らせている。53・54の甕はくの字状の口縁部をもち、口唇部に刻目を施し、54は体部上位に3本の篋描沈線を巡らす。56の甕はくの字状の口縁部から上下に拡張する口唇部に3状の凹線が巡る。外面はハケ、内面体部上半は指押さえ、下半に縦方向のヘラケズリを行う。河道内からの土器は量的にも前期に含まれるものが圧倒的に多い。(伊藤)



第68図 河道4 (1/60) ・出土遺物① (1/4)



第69図 河道4出土遺物② (1/2)

(6) 水田

水田1 (第5図)

Ⅲ区南側道の東側において水田層、畦畔痕跡が確認された。Ⅲ区東端・Ⅳ区に広がる微高地に接するように位置し、調査区の断面に表れている堆積状況より、河道4の埋没後に開発された水田であることがうかがえる。また、水田1の東端に沿って南北方向に流れる溝11は、埋土が当水田層と同じであることから何らかの関連性が想定される。畦畔痕跡は溝10と重なる位置で検出したが、残存状況があまりよくなく区画などは不明である。

水田は、河道4の影響を受けて幾分低い部分も存在したが、ほぼ標高710~720mにあり、水田層は厚さ10cmほどで暗黄灰色粘質土1層であった。また、水田層は北西から南北方向におよそ18mの範囲で確認している。

水田層中より6世紀代の須恵器細片が出土している。

(蛭原)

水田2 (第6図)

Ⅲ区南側道にあり、水田1につづくものと思われる。畦畔痕跡が、河道4の西側に部分的に認められた。河道上は検出できていない。畦畔は北西から南東に6m程、それに直交するかたちで3m程北東、南西に伸びている。この付近で溝10の上層に検出できた。畦畔の幅は40~50cm、厚さは数cmである。水田面の標高は720cmである。

水田3 (第7図)

Ⅳ区北側道、東側部分の溝27以東で検出された畦畔痕跡である。東端部分は明瞭に残存していないが、溝27・28間は一辺400~500cm前後の方形を主とする小区画水田である。P35では水田層は確認できず南・東・西へ徐々に下っていている。水田面の標高は718~720cmである。

水田上層から弥生時代後期から中期と思われる細片が出土している。

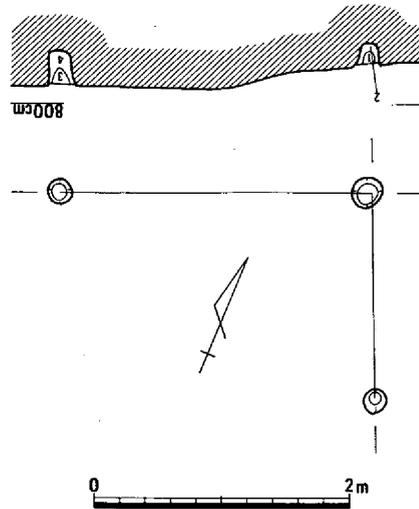
(伊藤)

2. 古代以降の遺構と遺物

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第4・70図)

この建物は、Ⅱ区北側道の西側に位置し、溝51の西側に検出された。柱穴は3本分検出され、調査区内では1×1間の建物を構成している。柱間は、245cmと160cmで、柱穴はいずれも小さく、15~20cmの直径であった。出土遺物はなかったが、堆積土などから、古代末~中世であろうか。



1. 淡灰茶色砂質土
2. 灰茶色砂質土 (粘質強)
3. 淡灰黄褐色砂質土
4. 灰黄褐色砂質土 (粘質強)

第70図 掘立柱建物1 (1/60)

掘立柱建物2 (第4・71図)

建物は、Ⅱ区の南側道部西端に検出された。この建物2が位置する溝1~71の間は地形がやや高くなっており、さらに他の柱穴も若干数検出されている。

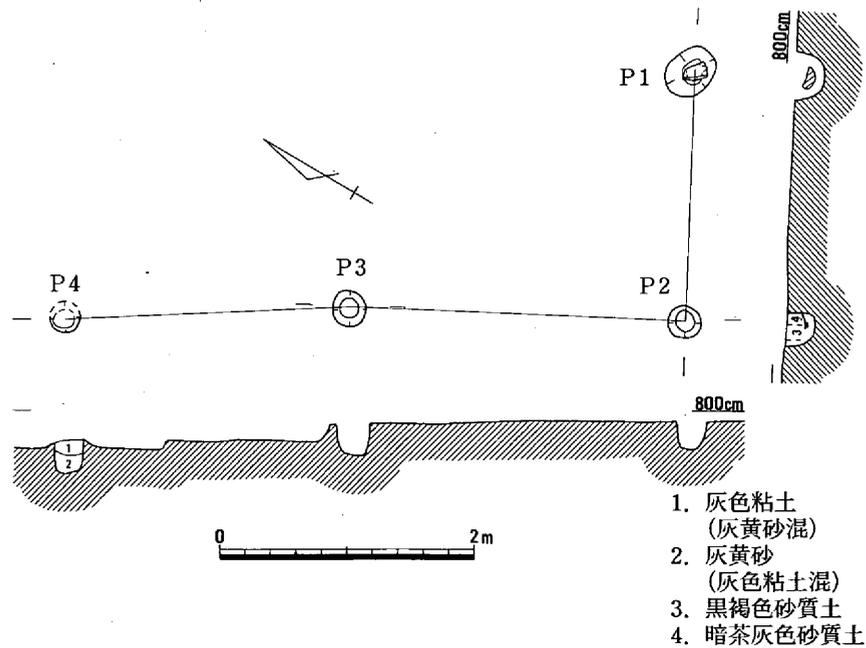
柱穴は、P1~P4の4本検出され、建物の規模は調査区内では2×1間分確認される。桁行は490cm、梁間195cmを測り、桁行の柱間は、P2~P3が260cm、P3~P4が230cmであった。

柱穴は、直径約25~40cmで円形を呈している。P1の柱穴では根石状のものが検出されている。

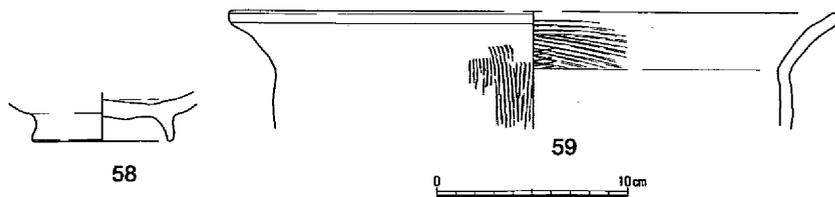
遺物は高台付椀58・鍋59などが出土した。

掘立柱建物3 (第4・72図、図版84)

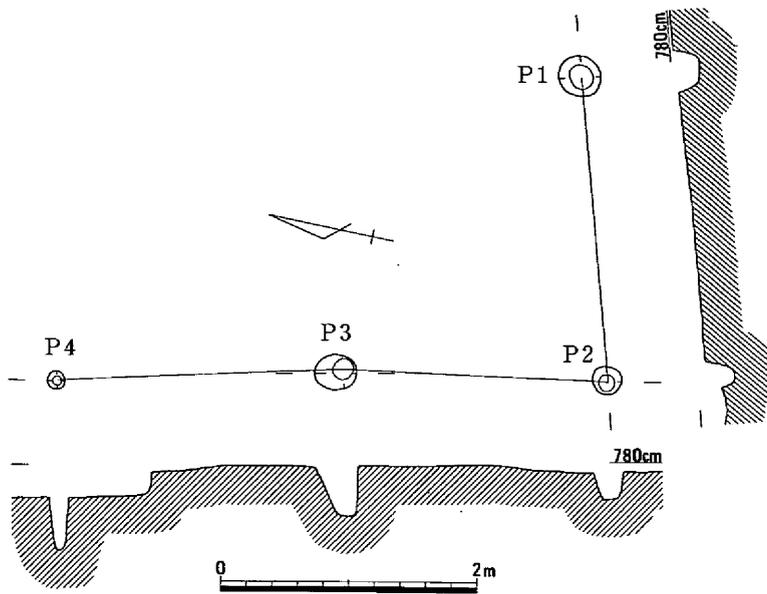
この建物は、Ⅱ区の南



1. 灰色粘土 (灰黄砂混)
2. 灰黄砂 (灰色粘土混)
3. 黒褐色砂質土
4. 暗茶灰色砂質土



第71図 掘立柱建物2 (1/60) ・ 出土遺物 (1/4)



第72図 掘立柱建物3 (1/60)

側道部西側に検出された。柱穴は、P1～P4の4本検出され、規模は調査区内では2×1間分確認される。規模は、桁行430cm、梁間235cmを測る。柱穴は、P1～P3は直径20～30cmの円形を呈するが、P4は直径約10cmと他に比べて小さい。また、P4の柱穴の深さもP1～P3に比べて深く、建物はP1～P3で構成される可能性もある。

(中野)

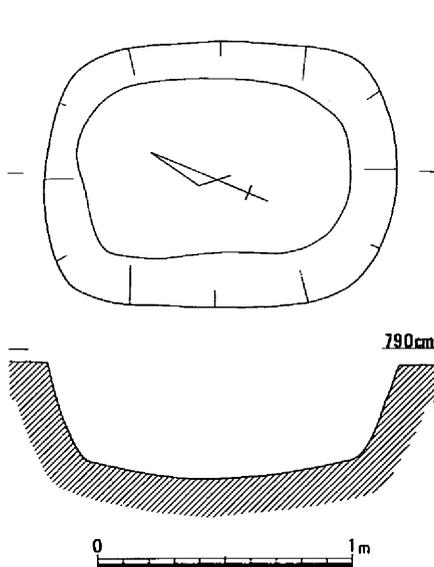
(2) 土壌

土壌9 (第4・73図)

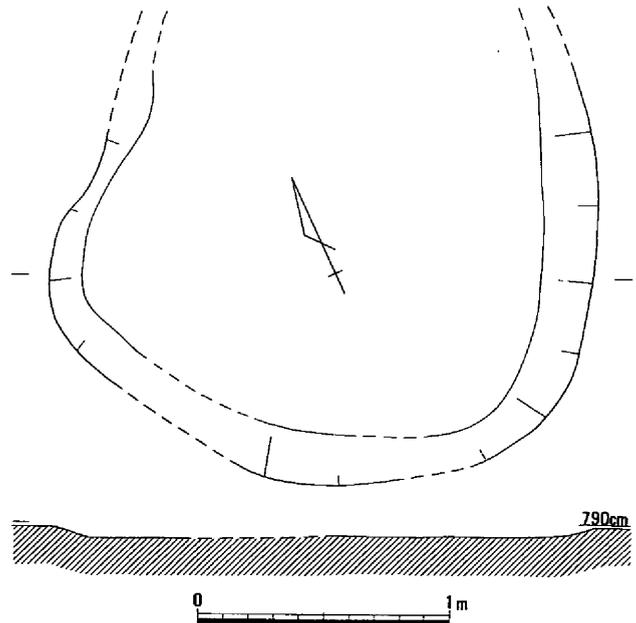
土壌は、Ⅱ区北側道部のほぼ中央に位置しており、溝51の北側に隣接して検出された。土壌の規模は、長さ約137cm、幅約106cmで、ほぼ楕円形を呈している。深さは約42cmで、灰白色粘土が堆積していた。出土遺物はないものの堆積土等から中世以降と考えられる。

土壌10 (第4・74図)

土壌は、Ⅱ区南側道の西端部に位置し、溝74・75に切られて検出された。土壌は北側を一部削平されているものの直径200cm前後の円形を呈すると考えられる。深さは約5cmと浅く、土壌内には灰褐色



第73図 土壌9 (1/30)



第74図 土壌10 (1/30)

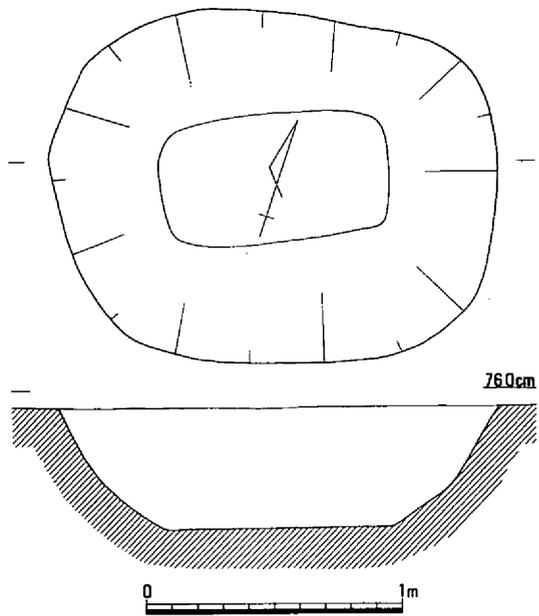
砂質土が堆積していた。時期は切り合い関係から古代末～中世と考えられる。(中野)

土墳11 (第7・75図)

IV区北側道中程にある長軸172cm、短軸142cmの楕円形を呈する土墳である。深さは48cmあり、底面は水平になり、標高704cmである。断面は播鉢形をしている。

土墳内からは出土遺物はないが、溝18・19を切っており近世に降る可能性もある。

(伊藤)

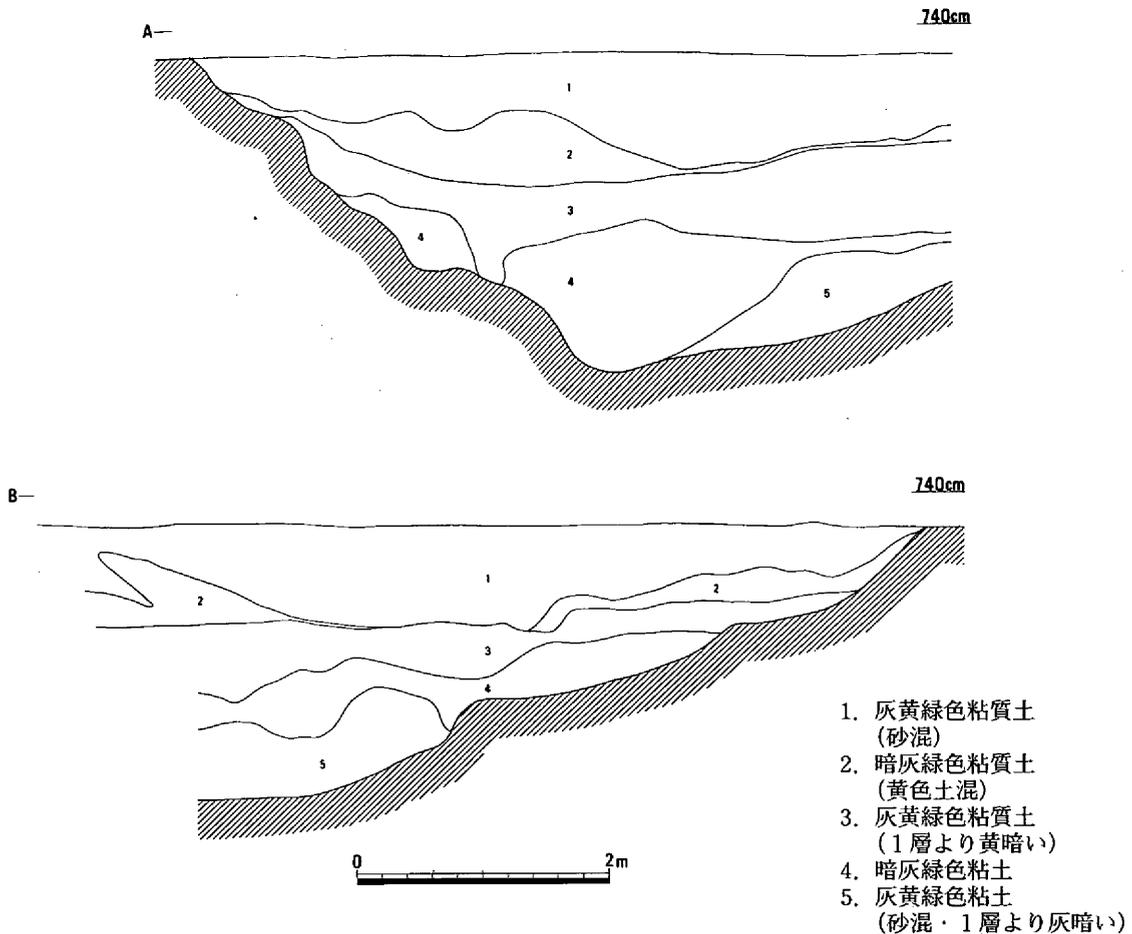


第75図 土墳11 (1/30)

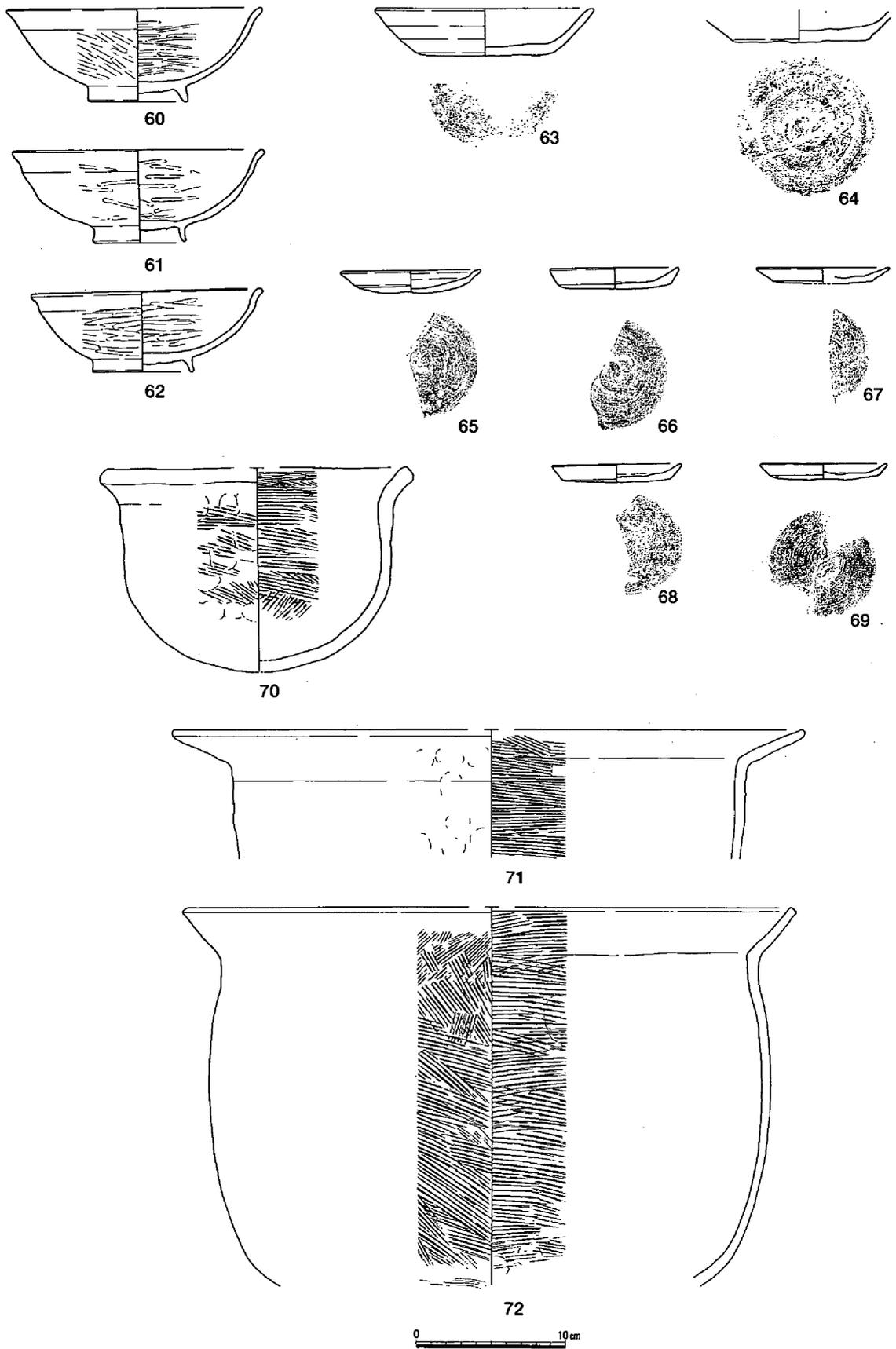
(3) 溝

溝34 (第3・76・77図、図版84・87)

この溝は、I区西端の北側道に検出された。溝は、西端部では河道2を切つて存在した。溝の方向は、北東から南西方向に延



第76図 溝34 (1/60)



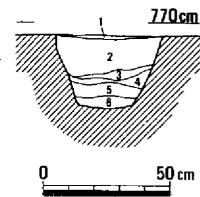
第77図 溝34出土遺物 (1/4)

びていた。規模は、幅が約500cm、深さは約120cmを測る。構内は、粘土層が主体で不規則な堆積を示しており、洪水等で埋没した可能性が考えられる。

出土遺物は、第77図で示した土器などとともに獣骨、木片などが溝の下層より出土した。60～62は、土師器の高台付の椀である。内外面とも丁寧なヘラミガキを施している。口縁部は横ナデが認められる。63・64の皿は、底部をヘラキリを行い、上部は横ナデで仕上げている。65～69は、いわゆる小皿で底部ヘラキリ、口縁部を横ナデ。70～72の甕は、小形の70とやや大形の71・72がある。内外面ともハケメを施している。これらの土器は、いずれも古代末の特徴を示している。また、溝の上層からは図示していないものの中世の土器が少量出土している。

溝35 (第4・78図、図版85)

この溝は、I区北側道の東側に位置し、溝36の西約14mに検出された。溝は、北東～南西方向に流路をとり、P12、南側道部で検出されている溝40に続く。規模は、幅約40cm、深さ約30cmを測り、断面形は「U」字形を呈している。出土遺物は認められないものの、堆積土などから中世と考えられる。

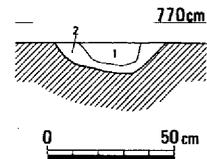


1. 灰茶褐色粘質土
2. 淡灰茶褐色粘質土
3. 暗茶灰色粘質土
4. 灰色粘土
5. 暗緑灰色粘土
6. 灰色粘土

第78図 溝35 (1/30)

溝36 (第4・79図)

この溝は、I区北側道の東端部に位置し、溝37の西側に隣接して検出された。溝は、やや弧を描くように北東～南西に方向をとる。規模は、幅約40cm、深さ約13cmを測る。構内は、上層に茶灰褐色粘質土、下層に淡灰色粘質土がレンズ状に堆積していた。出土遺物は少量出土したものの時期を限定できるものではなかった。しかしながら、堆積土などから中世～近世と考えられる。

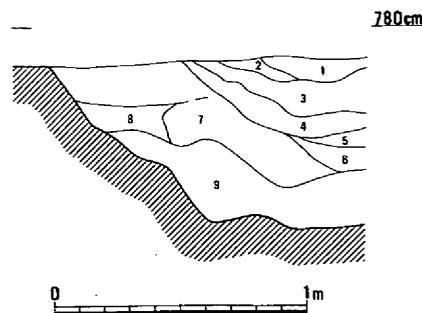


1. 茶灰褐色粘質土
2. 淡灰色粘質土

第79図 溝36 (1/30)

溝37 (第4・80図)

溝37は、I区北側道の東端に位置し、溝36の東側に検出された。溝は、調査区の関係で西側部を検出したにとどまった。溝の方向は、調査区東側に存在する水路とほぼ平行し、南北方向よりやや西方向に流走する。溝は第80図の断面図からみて何回かの掘り直しが行われており、中世以降の幹線水路として現代まで踏襲されているものと考えられる。



1. 淡灰黄色砂
2. 灰茶褐色砂質土
3. 淡灰色砂質土
4. 濃灰色粘質土 (礫含)
5. 淡灰色砂質土
6. 青灰色粘土
7. 濃青灰色粘質土
8. 青灰色粘質土
9. 暗濃青灰色粘質土 (微砂混・木片含)

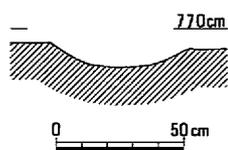
第80図 溝37 (1/30)

溝38 (第3・81図)

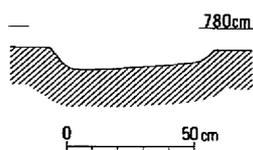
この溝は、I区の中央部P12に検出された。溝は、北東から南西方向に確認され、幅40～60cm、深さ約10cmを測る。溝内は上層に暗灰茶色粘質土、下層に灰黄褐色砂が堆積していた。出土遺物はなく、堆積土などから中世～近世のものと考えられる。

溝39 (第3・4・82図)

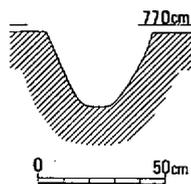
溝39は、I区のほぼ中央に位置し、



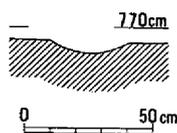
第81図 溝38 (1/30)



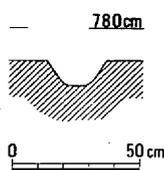
第82図 溝39 (1/30)



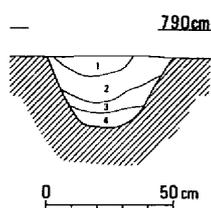
第83図 溝40 (1/30)



第84図 溝41 (1/30)

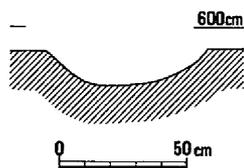


第85図 溝42 (1/30)



1. 茶灰色砂質土
2. 淡茶灰色粘質土
3. 茶灰色粘質土
4. 暗灰褐色粘土

第86図 溝43 (1/30)



第87図 溝44 (1/30)

南側道部、P12で出土された。溝は、北西から南東方向に流走している。溝38とは直交する位置関係にある。規模は、幅約60cm、深さ5～8cmを測る。出土遺物はないものの溝38と同時期であろう。

溝40 (第3・83図)

この溝は、I区の中央部に位置し、南側道、P12で出土され、さらには北側道の溝35に続く。溝は、南側道部、P12ではほぼ直線的に北東から南西方向に検出されたが、北側道部の溝35へはやや東方向に弧を描く。規模は、幅約50cm、深さは約30cmを測る。出土遺物は認められなかったが堆積土などから中世～近世のものと考えられる。

溝41 (第3・84図)

溝41は、I区南側道部の西端に位置し、河道2の埋没後の上面に検出された。溝は、溝39とは平行、溝38・40と直交する位置関係にある。溝の規模は、幅約60cm、深さ約4cmを測る。出土遺物はないが平行する溝の状況から中世～近世であろう。

溝42 (第4・85図)

この溝は、I区南側道の中央やや東寄りに位置し、溝39の東側に検出された。幅25～30cm、深さ7～9cmを測る。溝内には茶灰色粘質土が堆積しており、出土遺物は認められなかった。

溝43 (第4・86図)

溝43は、II区北側道部の西橋に位置する。溝は、溝38～42などと平行、直交する方向を示す。幅は約50cm、深さ約30cmを測り、断面形は「U」字形を呈する。出土遺物はないものの溝38～42などと同時期と考えられる。

溝44 (第4・87図)

この溝は、II区北側道の西端に位置し、溝43の東約10mに検出された。溝はP12、南側道で検出されている溝1に続くものと考えられる。溝の方向は、前述した溝35～43などとはやや異なり北北東～南南西方向に流走する。溝の規模は、幅約70cm、深さ約20cmを測る。出土遺物は古墳時代からのものが少量確認されている。

溝45・46 (第4・88・89図)

この溝は、II区北側道部に位置し、溝44の東約2.5mに検出された。溝は、溝45・46と2本の溝として検出されたが、南側道(溝70)では1本の溝として確認されている。溝の流路は、溝44と平行しており北北東

～南南西に流走する。出土遺物は少量ながら検出され、古代末～中世の特徴を示していた。

溝47 (第4・90図)

溝47は、Ⅱ区北側道の中央やや西端に位置し、溝45・46の東約4mに検出された。

この溝は、溝45・46と平行で、P17の溝60に接続すると考えられる。幅は約170cmで、深さは5～8cmを測る。出土遺物はないものの溝45・46と同時期であろうか。

溝48 (第4・91図)

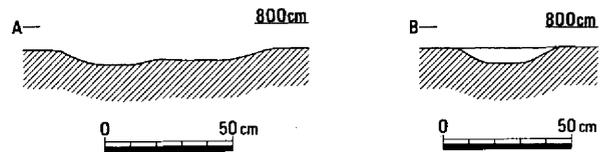
この溝は、Ⅱ区北側道の西寄りに位置し、溝47の東約2mに検出された。溝の堆積土、方向などから南側道の溝79に続くと考えられる。規模は、幅65～68cm、深さは約25cmを測る。出土遺物はないものの堆積土などから中世～近世と考えられる。

溝49 (第4・92図)

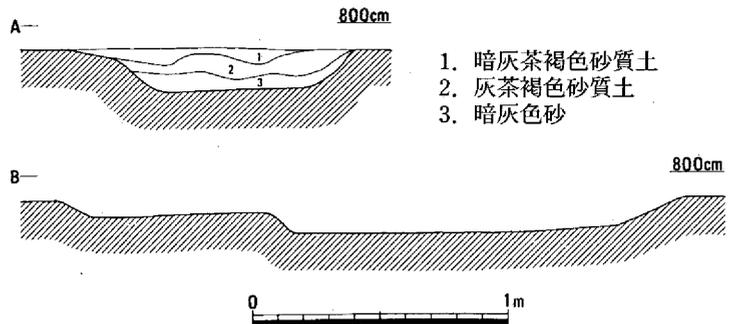
溝49は、Ⅱ区北側道の西寄りに位置し、溝48の東約2mに検出された。南側道では、この溝に対応する溝は確認されていない。規模は、幅約50cm、深さは約5cmを測る。溝内は、淡灰色砂質土が堆積しており、出土遺物は認められなかった。

溝50 (第4・93図)

溝50は、Ⅱ区北側道の中央西寄りに位置し、溝49の東約5.5mに検出された。溝は、ほぼ南北方向に検出され、幅約30cm、深さ約6cmを測り、断面形は皿状を呈しており、溝内は淡灰色砂質土が堆積していた。出土遺物はなかったものの、堆積土などから中世～近世の時期であろう。また、南側道の溝86と接続する可能性がある。

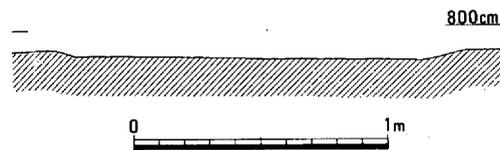


第88図 溝45 (1/30)

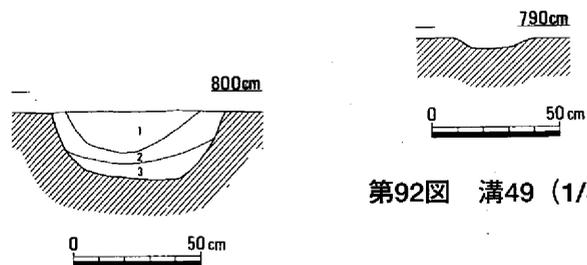


1. 暗灰茶褐色砂質土
2. 灰茶褐色砂質土
3. 暗灰色砂

第89図 溝46 (1/30)



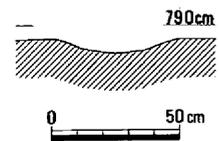
第90図 溝47 (1/30)



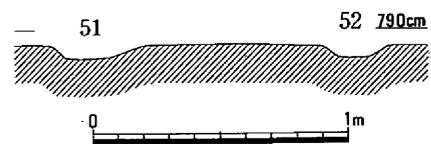
1. 灰茶褐色砂質土 (礫多含)
2. 淡灰黄色砂質土
3. 淡灰色砂質土

第91図 溝48 (1/30)

第92図 溝49 (1/30)



第93図 溝50 (1/30)



第94図 溝51・52 (1/30)

溝51 (第4・94図)

この溝は、Ⅱ区北側道の中央に土壌9の東側に隣接して検出された。規模は、幅約40cm、深さ約7cmを測る。出土遺物はないものの堆積土から近世と考えられる。

溝52 (第4・94図)

この溝は、溝51の東約1mに平行して検出された。溝の幅は約30cm、深さは約6cmを測り、溝内には暗灰色砂質土が堆積していた。

溝53 (第4・5・95図、図版85)

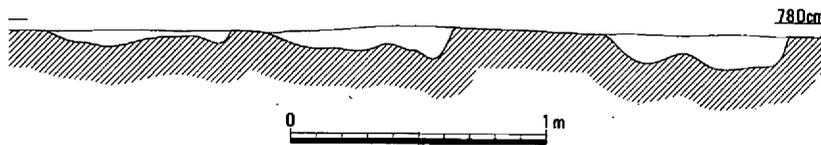
溝53は、Ⅱ区北側道の中央やや西寄りに検出された。溝は、おおむね4条の溝からなる。この溝は、P18の溝63、南側道の溝77・78に連続するものと考えられる。溝は北東～南西方向に流走する。溝の規模は、幅が約30～80cmで、深さは西端から東端の溝へ深くなっている。出土遺物はないものの時期は中世と考えられる。

溝54 (第5・96図)

この溝は、Ⅱ区北側道の中央に検出された。溝は、東側に隣接する溝55・56と同様に南北方向を示す。幅約30cm、深さ約5cmを測り、灰茶色砂質土が堆積していた。時期は近世以降。

溝55 (第5・97図)

溝55の東約3mに検出された溝である。溝は、幅約120cm、深さは約40cmを測る。溝内は、上層に淡灰黄色砂質土、下層に灰色砂質土が堆積している。時期は中世～近世。



第95図 溝53 (1/30)

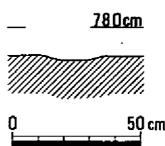
溝56 (第5・98図)

この溝は、溝55の東に隣接して検出された。溝の方向も溝55と同様に南北方向を示す。幅は約25cm、深さは約8cmを測る。

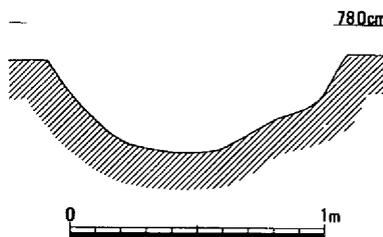
出土遺物はないものの近世と考えられる。

溝57 (第5・99図)

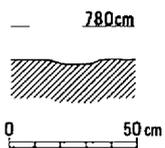
溝57は、Ⅱ区北側道の東寄りに位置しており、溝56の東約15mに検出された。溝の規模は、幅約110cm、深さ約25cmを測る。溝内は、上層に灰茶色砂質土、下層に灰茶褐色砂が堆積していた。出土遺物はないものの、堆積土などから中世～近世と考えられる。溝は、やや蛇行しながら北西から南東方向に流走するようである。



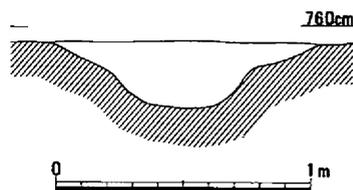
第96図 溝54 (1/30)



第97図 溝55 (1/30)



第98図 溝56 (1/30)



第99図 溝57 (1/30)

溝58 (第5・100図)

溝58は、Ⅱ区北側道の西端に検出された。この溝は、北東から南西方向に流走しており、P21、南側道で確認されている溝68と接続する可能性が高い。溝の規模は、幅が約65cm、深さは約18cmを測り、溝内には第1～3層がレンズ状に堆積している。出土遺物は認められないものの、堆積土などから中世～近世と考えられる。

溝59 (第5・101図)

この溝は、Ⅱ区北側道の西端に位置し、溝58の東約140cmに平行して検出された。溝は、P21で検出されている溝69と連続する可能性がある。溝の規模は、幅約55cm、深さ約16cmを測り、堆積土は第1～3層がレンズ状に堆積し、溝59と規模、堆積土などが類似する。出土遺物はないが溝59と同時期であろう。

溝60 (第4・102図)

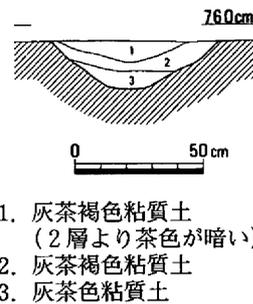
溝60は、Ⅱ区の西端部のP17に検出された。この溝は、北側道の溝47、南側道の溝71と連続し、また、数条の溝が重なり合った状況を示している。溝の底部は凹凸が有り、一部には、土壌状の深みも存在する。幅は300～370cm、深さは約15cmを測る。出土遺物は少量検出され、古代末～中世の時期を示す。

溝61 (第4・103図)

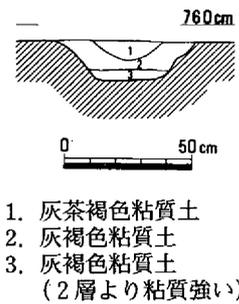
溝61は、Ⅱ区の西寄りP18に検出された。溝は現存状態が悪く、継続的に確認された。幅は約40cm、深さは約5cmを測る。出土遺物はなく、溝62の下層に存在することから中世～近世と考えられる。

溝62 (第4・104図)

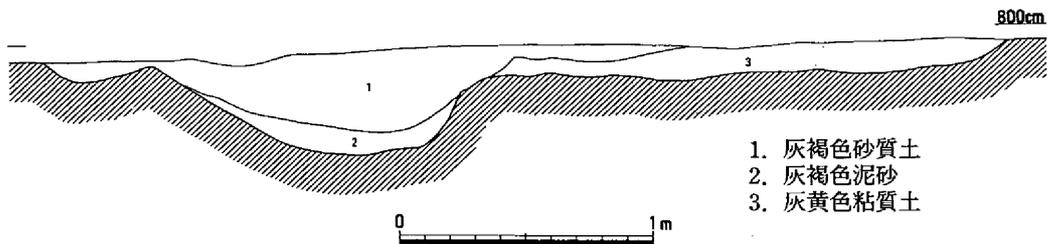
この溝は、Ⅱ区の西寄りに位置し、南側道、P18に検出された。さらに



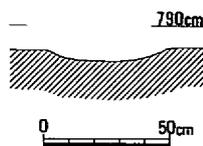
第100図 溝58 (1/30)



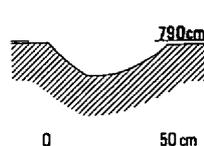
第101図 溝59 (1/30)



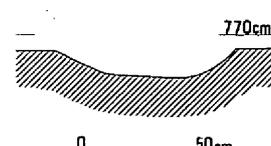
第102図 溝60 (1/30)



第103図 溝61 (1/30)



第104図 溝62 (1/30)



第105図 溝63 (1/30)

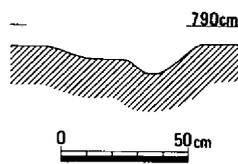
溝は、北側道51に連続すると考えられる。溝の方向はほぼ北東から南西方向を流走する。幅約60cm、深さ約12cmを測る。出土遺物はないが近世と考えられる。

溝63 (第4・105図)

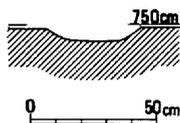
溝63はP18に検出され、北側道の溝群(溝53)さらには南側道の溝77・78に連続する。溝は、溝51・52・62・72・73などとほぼ平行し、北東から南西方向に流走する。溝の規模は、幅約70cm、深さ約10cmを測る。出土遺物はないものの、堆積土などから中世～近世と考えられる。

溝64 (第4・106図)

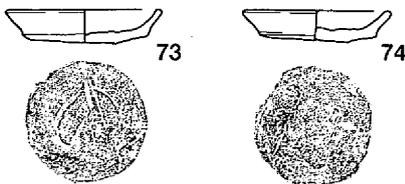
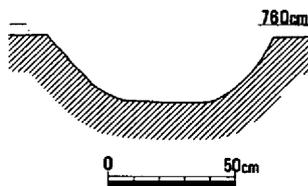
この溝は、南側道、P18に検出された。溝の残存状態は悪く、幅約25cm、深さ約5cmを測る。溝は堆積土などから近世と考えられる。



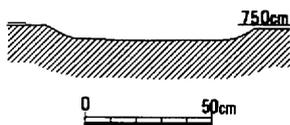
第106図 溝64 (1/30)



第107図 溝65 (1/30)



第108図 溝66 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



第109図 溝67 (1/30)

溝65 (第5・107図)

溝65は、Ⅱ区のほぼ中央P20に検出された。溝は残存状態が悪く、長さ約4mほど確認された。幅は約45cm、深さは約5cmを測る。溝は、出土遺物はないものの、P19、南側道で検出されている溝2などと同一面で検出されたもので時期は弥生時代の可能性もある。

溝66 (第5・108図)

溝66は、Ⅱ区中央のやや東寄りのP21、南側道に検出された。溝は、ほぼ南北方向に流走しており、北側道溝55に連続すると考えられ、溝67・68の上部に確認された。溝の幅は約88cm、深さ約25cmを測る。出土遺物は少量検出され、73・74などが出土している。73・74はいわゆる早島式土器の小皿で、鎌倉時代前半期の特徴を示している。

溝67 (第5・109図)

この溝は、溝66と同様にⅡ区の中央やや東寄りに位置し、南側道、P21で検出された。溝は、溝66の下部に検出され、東約1mには溝68が平行して流走している。幅約80cm、深さ約8cmを測る。堆積土などから中世と考えられる。

溝68 (第5・110図)

溝68は、P21、南側道に位置し、溝67の東1mに検出された。溝は、溝67とほぼ平行するが、P21の北端部ではやや東方向に向きを変え、北側道溝58に連続すると考えられる。幅約95cm、深さ約14cmを測る。出土遺物はないものの時期は中世～近世。

溝69 (第5・110図)

溝69は、P21北東隅に位置し、溝68の東に隣接して検出された。溝の残存状態は悪く、一部が確認されただけであるが、北側道溝59に接続する可能性がある。幅約30cm、深さ約7cmを測る。溝68と同時期か。

溝70 (第4・111図)

溝70は、南測道西端に検出され、北側道溝45・46に続くものと考えられる。溝の底部は、凹凸があり、土塊状のものもある。

溝71 (第4・112図、図版85)

この溝は、北側道溝47・P17溝60と連続する。溝60は、数条の溝が重なりあっており、溝71もその一部にあたる。溝は、黒褐色砂質土が堆積する。

溝72・73 (第4・112図)

溝72・73は、Ⅱ区西端部のP17、南測道に検出された。溝は、重なりあっており、溝73の堀り直しの溝が溝72と考えられる。溝は、北東～南西方向に流走している。溝72の規模は、幅55cm、深さ約15cmを測り、溝73はやや浅い。溝内は、灰褐色砂質土が堆積している。出土遺物は古代末～中世の土器が少量出土している。

溝74 (第4・112図)

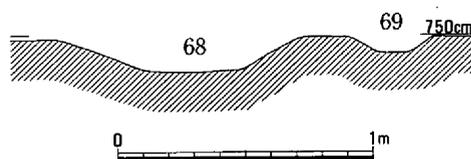
この溝は、Ⅱ区南測道の西端に位置し、溝72・73の東約70cmに検出された。溝は溝73とほぼ平行するが、P17では検出できなかった。溝の幅は約60cm、深さ約16cmを測り、溝内には暗灰褐色砂質土が堆積している。時期は溝の方向から溝72・73と同時期か。

溝75 (第4・113図)

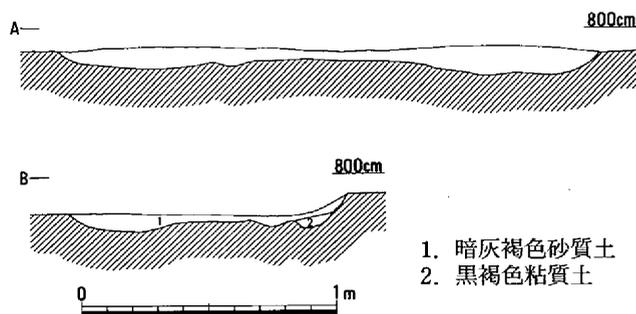
この溝は、Ⅱ区南測道の西端に検出された。溝は、溝74にきられており、西方向に湾曲して確認された。幅約38cm、深さ約8cmを測り、溝内には灰褐色砂質土が堆積する。出土遺物はない。

溝76 (第4・114図)

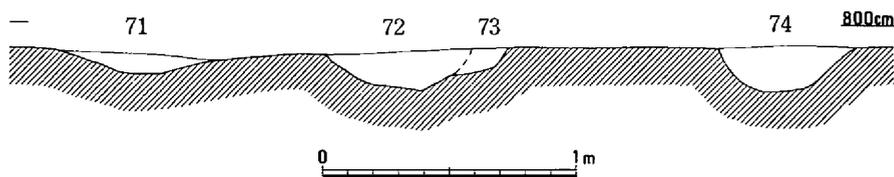
溝は、溝62の東に隣接して検出された。



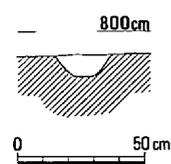
第110図 溝68・69 (1/30)



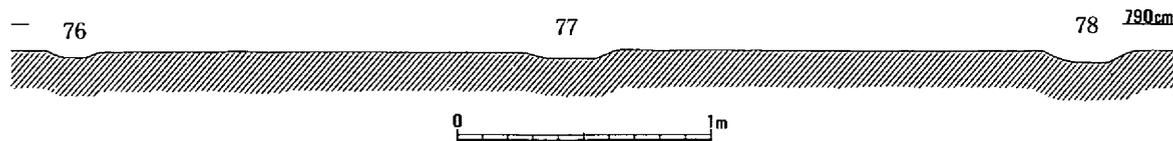
第111図 溝70 (1/30)



第112図 溝71～74 (1/30)



第113図 溝75 (1/30)

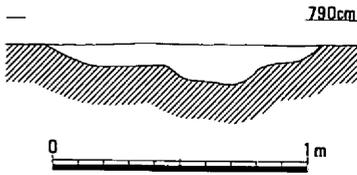


第114図 溝76～78 (1/30)

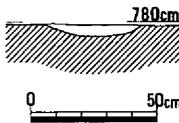
幅約20cm、深さ約5cmを測る。堆積土から近世。

溝77・78 (第4・114図)

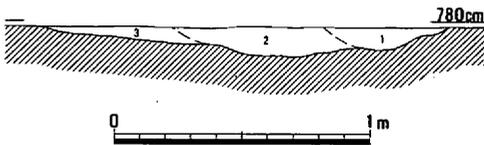
溝76の東に、断続的に検出された。溝は、P18の溝63、北側道の溝53に連続する可能性がある。溝77・78とも幅約30cm、深さ約4cmを測る。



第115図 溝79 (1/30)

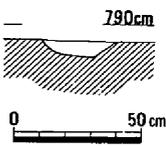


第116図 溝80 (1/30)

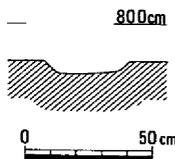


- 1. 灰黄色砂質土 (黄色土多含)
- 2. 灰黄色砂質土 (粘質強)
- 3. 灰黄色砂質土 (粘質強)

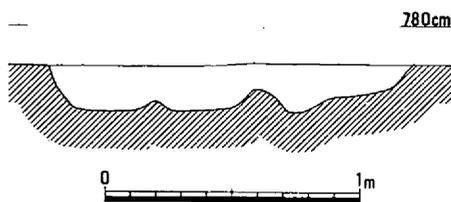
第118図 溝82 (1/30)



第120図 溝84 (1/30)



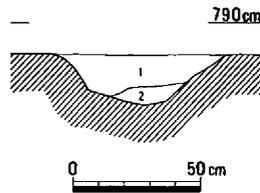
第121図 溝85 (1/30)



第122図 溝86 (1/30)

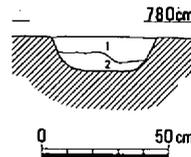
溝79 (第4・115図)

溝は、溝77・78の下部に検出され、北側道溝48に連続すると思われる。幅約105cm、深さ約15cmを測る。出土遺物はない。



- 1. 灰黄色砂質土
- 2. 灰褐色粘質土

第117図 溝81 (1/30)



- 1. 茶灰色粘質土
- 2. 暗灰黄色砂質土

第119図 溝83 (1/30)

溝は、II区南側道の溝79の東に一部が検出された。幅約70cm、深さ約18cmを測る。出土遺物は皆無であった。

溝82 (第4・118図)

溝81の東約2cmに検出された。この溝は、南側道で確認されただけで、P18では検出で

溝83 (第4・119図、図版86)

きなかった。幅は約150cmを測るが、溝は数回掘り直しが行われている。深さは約10cmを測る。出土遺物はない。

この溝は、II区南側道の溝82の東約1mに検出された。幅約45cm、深さ約12cmを測る。溝の方向はほぼ南北を示す。堆積土などから中世～近世と考えられる。

溝84 (第4・120図)

溝は、II区南側道の溝83の東約1mに一部が検出された。幅約25cm、深さ約6cmを測り、淡灰褐色砂質土が堆積している。出土遺物はない。

溝85 (第4・121図、図版86)

この溝は、Ⅱ区南測道の溝84の東約4mに、溝84と平行して検出された。幅約35cm、深さ約5cmを測る。堆積土などから中世～近世。

溝86 (第4・5・122図、図版86)

溝86は、Ⅱ区南測道の溝85の東約3.5mに検出された。溝は、溝84・85と平行である。溝の幅は約140cmで、数条の溝が重なりあっている。溝の底部は凹凸が激しく、深さは約16cmを測る。溝内は灰褐色砂質土が堆積している。出土遺物は認められなかったが、堆積土などから中世～近世。

溝87 (第5・123図)

溝87は、Ⅱ区中央の南測道に検出された。溝は、溝84～86と直交する方向を示す。溝の規模は、幅が約60cm、深さ約80cmを測る。出土遺物はないものの堆積土などから近世と考えられる。

溝88 (第5・124図)

溝は、Ⅱ区中央の南側道に検出された。溝89の下面に検出され、ほぼ南北方向に流走する。幅は約55cm、深さは約16cmを測り、灰色粘土が堆積していた。遺物は皆無であったが堆積土などから中世～近世と考えられる。

溝89 (第5・125図)

この溝は、Ⅱ区中央の南側道に検出され、溝87の東約1.7mに平行する位置にある。溝の規模は、幅が約70cm、深さは約5cmを測る。堆積土などから近世と考えられる。

溝90 (第5・126図)

この溝は、Ⅱ区南側道の溝68の上部に検出された。溝は残存状態が悪く、全長2.2m確認されただけである。溝の幅は約40cm、深さは約8cmを測る。出土遺物はない。

溝91 (第5・127図)

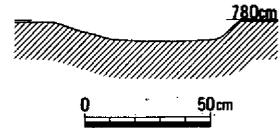
溝91は、溝90の東側に検出された。この溝も溝90と同様に残存状態が悪く、全長2.6m検出できたにとどまった。溝の幅は約60cm、深さは約8cmを測る。出土遺物はない。(中野)

溝92 (第6・128図)

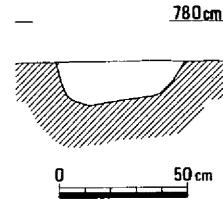
Ⅲ区北側道、東側区で検出した溝で北東から南西に向けて流れる。幅86cm深さ50cm前後である。溝内上層は茶灰色粘質土層、2層は青灰褐色の粘質の微砂層である。遺物は含んでおらず時期は不明である。(伊藤)

溝93 (第5・129図)

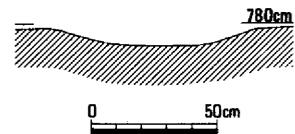
Ⅲ区北・南両側道において検出した溝である。この溝はⅢ区の



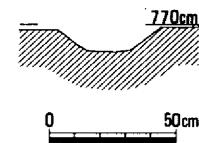
第123図 溝87 (1/30)



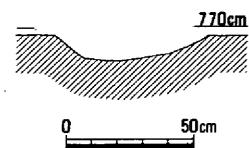
第124図 溝88 (1/30)



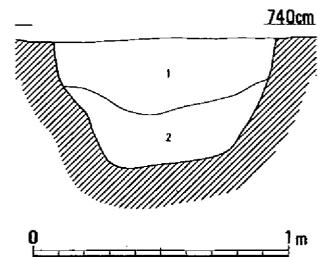
第125図 溝89 (1/30)



第126図 溝90 (1/30)



第127図 溝91 (1/30)



1. 茶灰色粘質土
2. 青灰褐色粘質微砂
第128図 溝92 (1/30)

東西方向に流路を形成する。幅2.5m、深さ25~30cmの規模をもち、断面形は底面が平坦で台形状を呈する。埋土は青灰色粘土で底部にはブロックが多く含まれる。

出土遺物には75の土師質土器碗（早島式土器）がある。これは口径15cm、高さ5cmを測り、12世紀末~13世紀初頭のものである。（蛭原）

溝94（第5・130図）

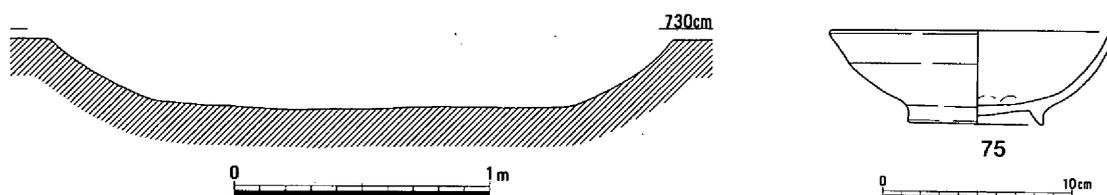
Ⅲ区北側道の河道4上につくられた溝で、河道と同方向の北東から南西に流れる。幅230cm、深さ27cm前後を測る。出土遺物はみられないが、古代末~中世のものと考えられる。

溝95（第5・131図）

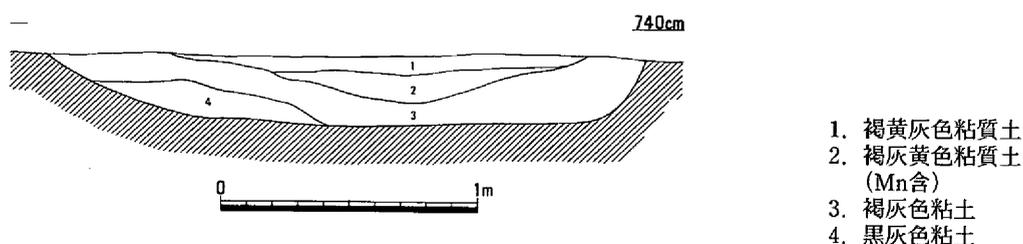
Ⅲ区東端、溝94にほぼ併行している。これも河道4上につくられている。北部肩は検出されたが、東南側は農道下、あるいはⅣ区西端が急に下っており河道の肩と同位置になる可能性もある。深さは26~30cmあり中央よりの方が少し深くなっている。出土遺物はみられないが、古代末から中世にかけての溝と考えられる。（伊藤）

溝96（第5・132図）

Ⅲ区南側道の西側で検出した溝である。溝93の下層をほぼ重なるように東西方向に流走する。幅約1.7m、深さ33~35cmをそれぞれ測る。埋土は暗青灰色粘土で、断面形は底面が平坦で台形状を呈す。

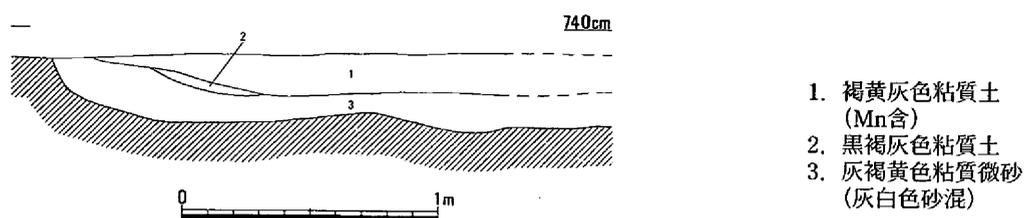


第129図 溝93 (1/30) ・ 出土遺物 (1/4)



1. 褐黄灰色粘質土
2. 褐灰黄色粘質土 (Mn含)
3. 褐灰色粘土
4. 黒灰色粘土

第130図 溝94 (1/30)



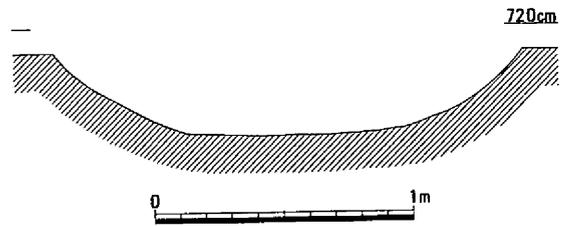
1. 褐黄灰色粘質土 (Mn含)
2. 黒褐灰色粘質土
3. 灰褐黄色粘質微砂 (灰白色砂混)

第131図 溝95 (1/30)

時代は中世と思われる。(蛇原)

溝97 (第7・133図)

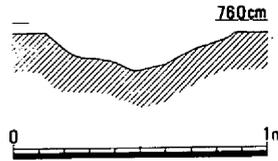
IV区北側道、西側で検出された溝で弥生時代の包含層、円形土壇4・5を切って作られている。略北から南に流れる。幅72cm 深さ15cm前後であるが、底面は凹凸をなす。出土遺物はみられないが、中世の溝と考えられる。



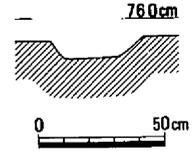
第132図 溝96 (1/30)

溝98 (第7・134図)

IV区北側道中央付近で検出された溝で、土壇11に切られている。溝19とほとんど併走し、北東から南西に走る。幅25cm、深さ6cm程の細くて浅い溝である。出土遺物は存在しない。切り合い関係・溝内土層などから中世と考えられる。



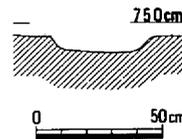
第133図 溝97 (1/30)



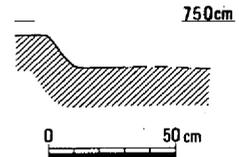
第134図 溝98 (1/30)

溝99 (第7・135図)

IV区P33で検出した溝で、北東から南西に蛇行して走る。幅38cm、深さ6cm前後である。北側道のどの溝と繋がるのか不明である。また、南側道ではみられなかった。出土遺物はない。



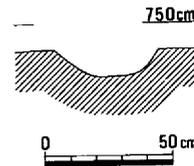
第135図 溝99 (1/30)



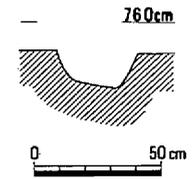
第136図 溝100 (1/30)

溝100 (第7・136図)

IV区P33の北西隅で検出した溝で南北に流れるものと思われる。深さは12cmである。出土遺物みられない。



第137図 溝101 (1/30)



第138図 溝102 (1/30)

溝101 (第7・137図)

P34にあり溝33(たわみ状遺構?)の上層に位置する。中央付近で幅40cm、深さ10cm程であるが、これもたわみ状遺構の可能性もある。出土遺物はなく時期は不明である。

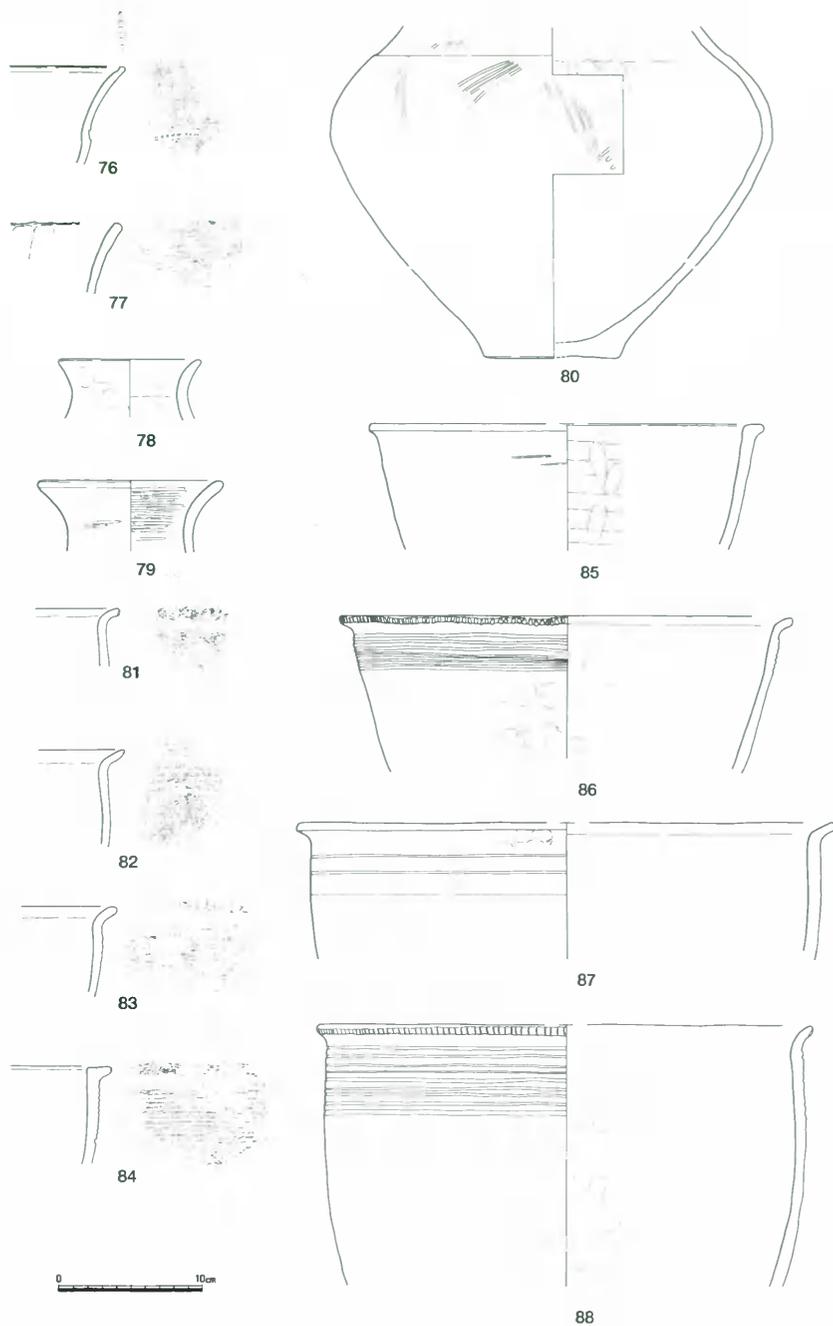
溝102 (第7・138図)

IV区南側道西よりにあり、北西から南東に向けて走る。幅30cm前後、深さ14.5cmの溝である。出土遺物は見られない。(伊藤)

3. 遺構に伴わない遺物 (第139~142図、図版87・88)

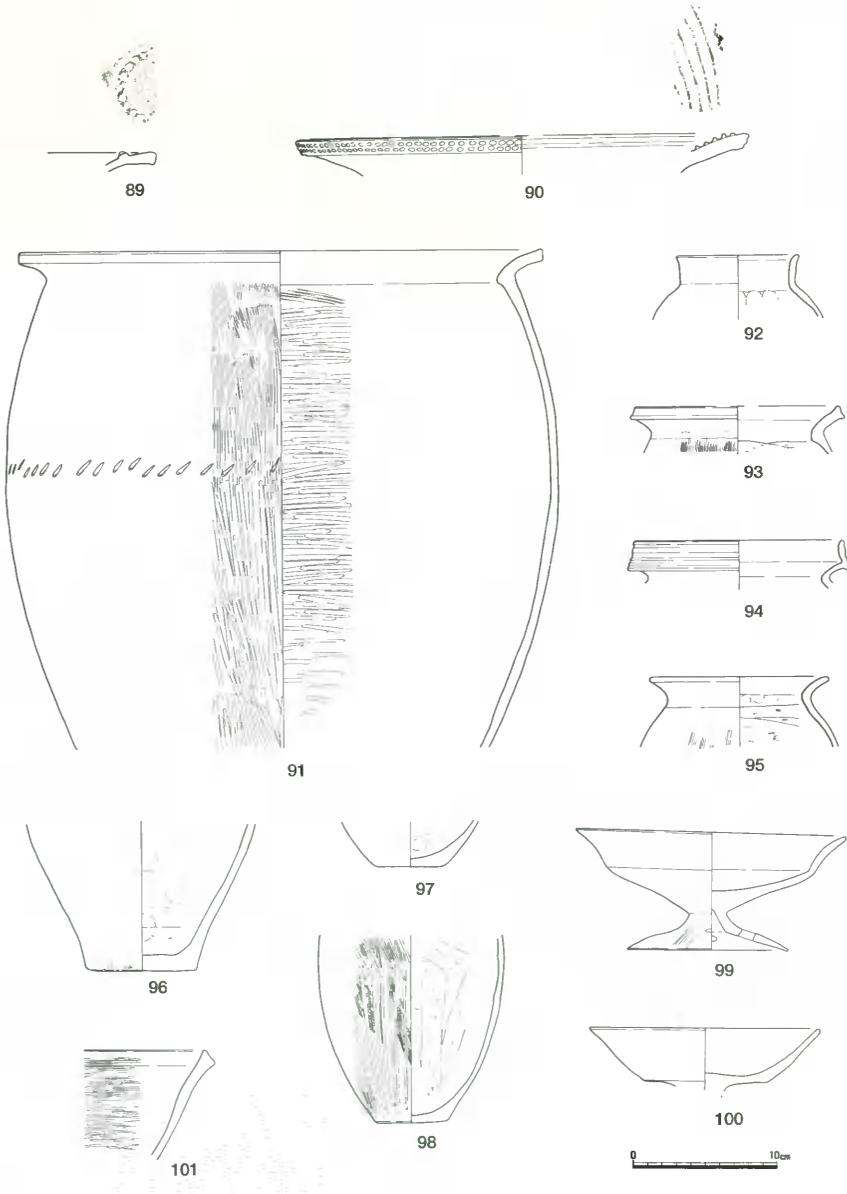
包含層から出土した土器は縄文土器から中世の土師器まで数多くあるがそのほとんどが弥生時代前期後葉から中期後葉の弥生土器で、IV区からの出土がほとんどを占めている。

縄文土器はII区のP23から2片76・77が出土している。76は晩期の浅鉢、77は晩期の深鉢になるものであろう。



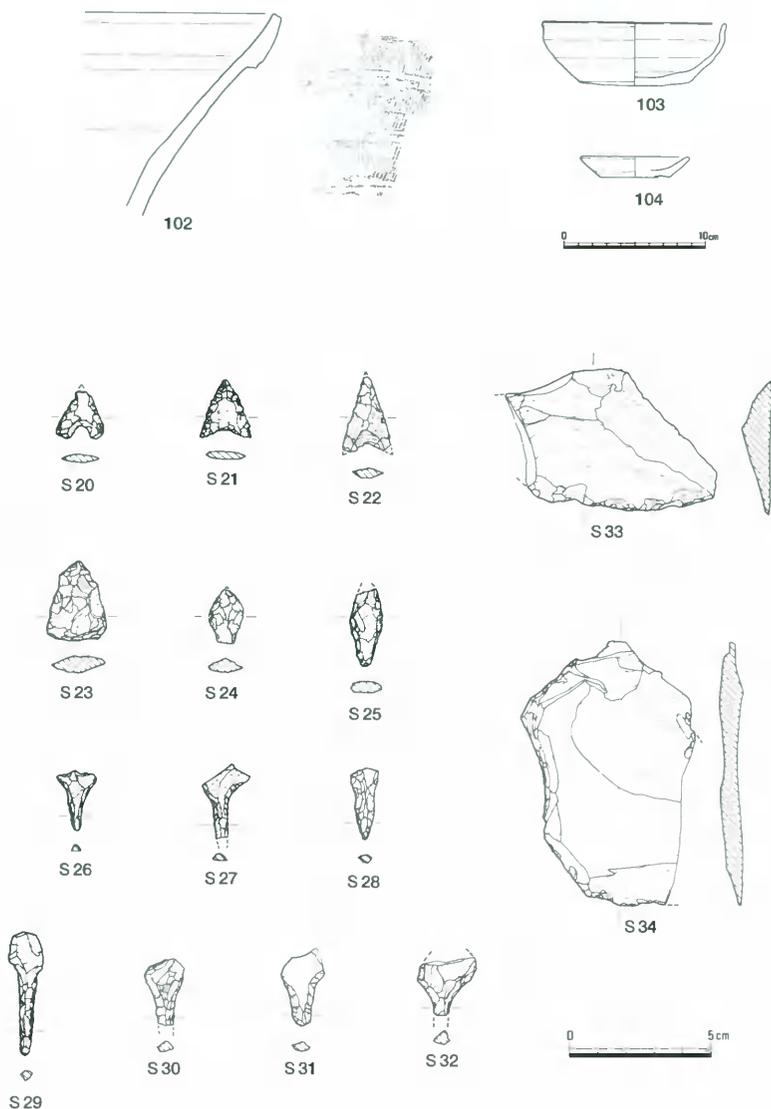
第139図 遺構に伴わない遺物① (1/4)

弥生土器は前期後集の壺78～90、甕81～88などで、84の甕以外はすべてⅣ区から出土している。80は肩部の浅い陵をもち、その下部に4本の山形文を巡らす。甕はくの字状あるいは逆L字状になる口縁を持ち、85、87以外は端部に刻目を施す。体部上半に3条～11条の篋描沈線を施している。



第140図 遺構に伴わない遺物② (1/4)

89・90は口縁部上面に貼付突帯を持つ壺で、89はさらに突帯上に刻目を施す。90の口唇部には2段の刺突文を巡らせる。91の甕はⅠ区P11から出土したもので、胴部中央に刺突文を施し、外面上半はハケ。下半および内面は丁寧なヘラミガキを行っている。92はⅣ区P35から出土した弥生時代後期の壺、93～98の甕はいずれもⅣ区から出土している。99・100の高杯、101の鉢はいずれもⅣ区

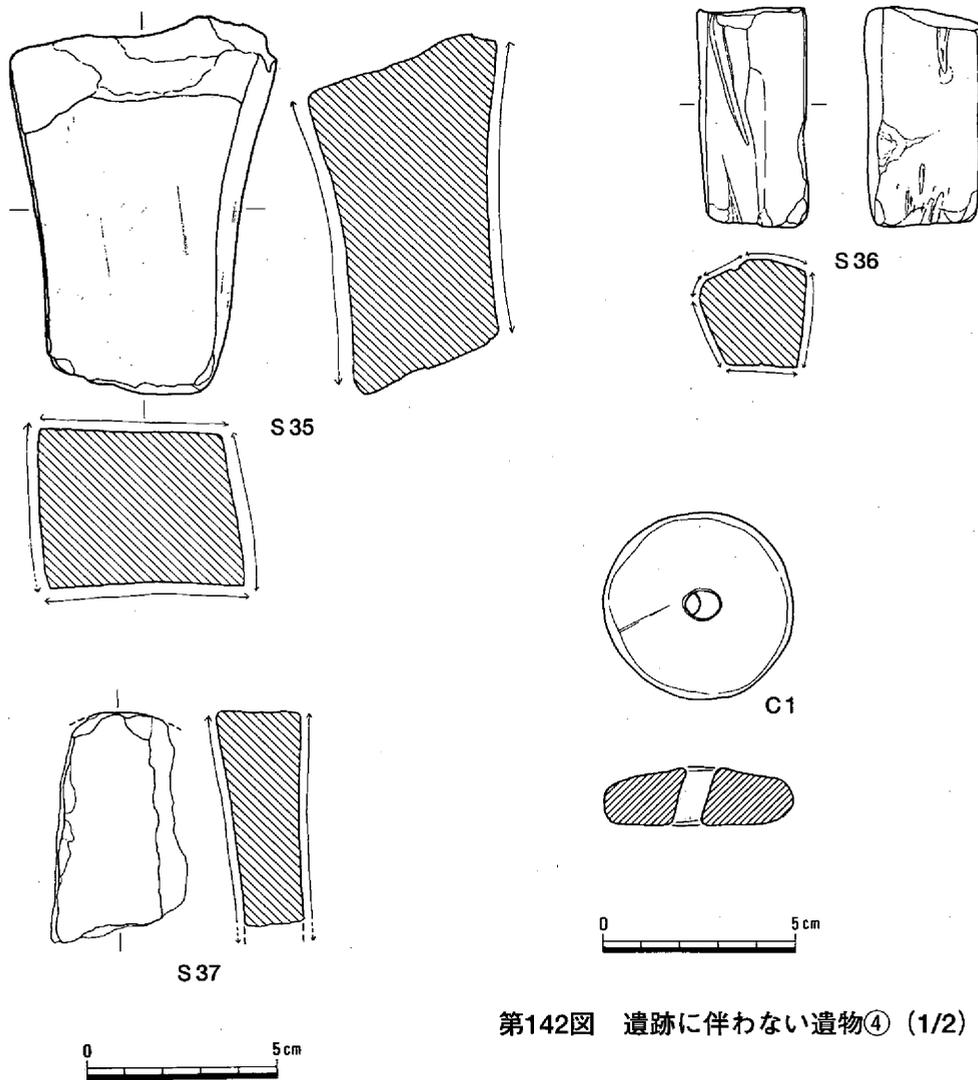


第141図 遺構に伴わない遺物③ (1/4・1/2)

から出土した弥生時代後期のものである。

その他の遺物としてはⅡ区P-18から出土した102の須恵器大甕口頸部片、Ⅳ区南側道の須恵器杯身、104の土師器小皿などがある。102・103は古墳時代後半・104は中世後半に属するものである。

石器類は縄文時代に含まれると思われる石鏃S 20の他は弥生時代の凹基式石鏃2点S 21・22、平基式1点S 23、有茎式2点S 24・25、錐7点S 26～32、スクレイパー状石器S 33・34などでいずれもサヌカイト製である。他に砥石3点S 35～37、土製紡錘車が1点C 1などがみられた。



第142図 遺跡に伴わない遺物④ (1/2)

第3節 結 語

第1節でも少し触れたように高松田中遺跡は当初条里地割が良好に残っていたため試掘を入れた所、弥生時代の微高地をはじめ古代から中世にいたる遺構の多くが検出された。特に東半部における弥生時代前期後葉から中期前葉の舟形土壙群は県内においても数少ない事例を加えたことになる。今ここではその有様を見ることでまとめにかえたい。

舟形土壙とは、土壙墓の一形態と考えられる。平面形は丸木舟のように幅は50～100cm前後で、長さ

は3 m以上と長くなり、前後が細くなって終結する。また縦断面形は前後が浅く中央に向って次第に深くなる。横断面は半円形あるいは逆台形を呈する。このような形状が、丸木舟に似ている所から舟形土壙と名付けられている。中央部に棺を設置したものと思われる。一般的な埋葬方法である。長さ2 m前後、幅60～70cm前後の長方形あるいは楕円形の土壙墓とは趣を異にしている。

高松田中遺跡での舟形土壙はⅣ区北側道において10基～12基、橋脚部P-31・32において3基を確認することができた。これらの中には舟形土壙と呼ぶにふさわしくないものも数例含まれるが、また逆に溝としたものの中に舟形土壙になる可能性のあるものもある。(例えば溝18・15)

高松田中遺跡の舟形土壙で全容が判る例はないが、舟形土壙4は推定で全長8 m近くあり、これがこの遺跡での規模を考える上で1つの手がかりになる。また、12の様に墓壙だけが残る3 m近くしかないものも舟形土壙として取り上げているが、いわゆる土壙墓の可能性もある。これは上面が削平を受けているものと考え舟形土壙に入れている。

土壙の方位は2・3・4のように北西から南東に向きを持つものが3例あり、1・5・6・8・9のように北北東から南南西になるものが6例ある。さらに南南東から西北西の向きを持つ10・11・12など三者認められる。これは時期による違いなのか、集落内での埋葬方位が異なるのか不明である。しかし、2は1を、4は5を切って作られており、1つは時期差と見ることができ、出土遺物を見る限り時期差を読み取ることはできず、ほとんどが前期後葉から中期前葉の段階のものである。

県内での出土例は余り多くが知られていないが、船山遺跡で3例⁽¹⁾、百間川原尾島遺跡で3例⁽²⁾、南溝手遺跡で1例⁽³⁾が報告されているのみである。船山遺跡の舟形土壙3は全長5 m近くある。時期はいずれも中期前葉に含まれる。百間川原尾島遺跡の例は、長さ250～390cmと幅がある。時期はすべて百・前・Ⅱの段階、すなわち前期中葉のもので最も古い例である。南溝手遺跡の例は残存長4 m近くあり、これも相当長大なものになる可能性がある。時期は前期前葉～中葉に位置付けられる。この他に南溝手遺跡ではNC1区・2区からそれぞれ7基程が溝として報告されているが、何基かが舟形土壙の可能性があるのでないだろうか⁽⁴⁾。これらの時期は前期中葉～中期前葉のものである。高松田中遺跡の最も短いものは舟形土壙12で、全長310cm、長いものは4の800cmである。深さは浅いもので10数cm、深いもので64cm程を測る。この舟形土壙の微高地は西は河道で区切られ、東・南へは徐々に降っていつている。北東の現集落付近に弥生時代前期以降の集落が展開するものと考えられる。

このように現在の所県内では、前期前葉～中期段階にその出現を見、中期前葉までつづくが、それ以降ははみられないようである。この時期に限定された特異な埋葬方法の一つとみることができ。

(伊藤)

註

- (1) 泉本知秀「船山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』 岡山県教育委員会 1972
- (2) 江見正己他「百間川原尾島遺跡Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』 岡山県教育委員会 1980
- (3) 久保恵里子他「南溝手遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』 岡山県教育委員会 1995
- (4) 大橋雅也他「南溝手遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告107』 岡山県教育委員会 1996

土器一覽

掲載番号	実測番号	地区名	遺構名	種別	器種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特徴	色調	胎土	備考
1	16	Ⅳ区北側道	舟形土壇3	弥生土器	壺					浅い櫛描沈線および2個単位の刺突が巡る。	10YR8/2(灰白)	3mm以下の砂粒 石英(多)・長石(多)	
2	15	Ⅳ区北側道	舟形土壇3	弥生土器	甕					口唇部に刻目、口縁部にヘラ描き沈線。	7.5YR7/4(鈍い橙)	4mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
3	37	Ⅳ区北側道	舟形土壇3	弥生土器	甕	21				4本単位の櫛描沈線が6条巡る。	10YR7/2(鈍い黄橙)	3mm程の砂粒 長石(多)・石英(多)	
4	7	Ⅳ区北側道	舟形土壇3	弥生土器	甕	29.4				外面横方向のミガキ。内面ミガキ痕。	10YR8/2(灰白)	0.5~3mm程の砂粒 長石・石英(多)	
5	36	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	壺	16.2				約1.2cm幅に4本単位の櫛描沈線が5条余。	7.5YR7/4(鈍い橙)	2.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
6	23	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	壺					頸~胴部片。貼付突帯が巡る。	5YR6/6(橙)	2~5mmの小石(多) 長石・石英(多)	磨滅・剥離著しい。
7	39	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕	14.2				外面ハケ。内面ナデ。	2.5Y7/1(灰白)	2mm前後の砂粒 長石・石英・赤色酸化土粒	外面に煤付着。
8	30	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕	26.8				内外面ナデ、内面に押圧痕。	2.5Y6/1(黄灰)	1~5mm程の小石粒 長石(多)	
9	35	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕					3本単位の櫛描沈線。下端に円形状の沈線。	2.5Y7/4(浅黄)	2.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
10	42	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕	19.8	20.3			口唇部・胴部に刺突。1.8cm幅に5本単位5列の櫛描沈線。	10YR5/1(褐灰)	2.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	内孔は2箇のみ確認。
11	41	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕	25.4				上記同様の刺突。7本単位5列の櫛描沈線。内面ミガキ。	2.5YR6/6(橙)	1~4mm程度の砂粒(多) 石英・長石(多)・黒雲母(中)	外面に煤付着。
12	24	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕					内外面、押圧ナデ。	2.5YR5/6(明赤褐)	6mm石粒 石英(多)・長石(中)	内面に煤付着。
13	27	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕			5.1		外面剥離、内面押圧ナデ。	2.5YR4/4(鈍い赤褐)	1~4mm程度の砂粒(多) 長石・石英(多)	
14	28	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕(瓶)			4.6		内外面ナデ。焼成後穿孔。	10YR7/2(鈍い黄橙)	2~4mm程度の砂粒(多) 長石・石英(多)	内面に煤付着。
15	22	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	甕(瓶)			7.3		外面縦方向のミガキ。焼成後穿孔。	2.5Y7/2(灰黄)	2.5mm以下の砂粒 石英(多)・長石(中)	
16	29	Ⅳ区北側道	舟形土壇4	弥生土器	蓋			3.6		内外面、押圧ナデおよび工具痕。	10YR7/1(灰白)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)・石英(多)	
17	3	Ⅳ区北側道	舟形土壇5	弥生土器	甕	29.5	30.3			剥落のため調整不明瞭。	7.5YR6/6(橙)	2~5mm程の小石(多) 長石(多)・石英(中)	
18	11	Ⅳ区北側道	舟形土壇5	弥生土器	甕					口唇部に刻目、口縁部にヘラ描き沈線。	2.5Y7/1	1~3mm程度の砂粒 長石・黒雲母(多)	
19	4	Ⅳ区北側道	舟形土壇5	弥生土器	甕					上げ底。外面ミガキ、端部押圧。	7.5YR5/3(鈍い褐)	2mm以下の砂粒 長石(多)・石英(多)	内面に煤付着。
20	31	Ⅳ区北側道	舟形土壇7	弥生土器	壺					上部に凹線、下部に刺突を巡らす貼付突帯。	10YR8/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒 石英(多)・長石(少)	
21	10	Ⅳ区北側道	舟形土壇8	弥生土器	甕	30				4本ヘラ描き沈線。下部・内面はナデ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	1~4mm程度の砂粒 長石・石英(多)	外面に煤付着。
22	40	Ⅳ区北側道	舟形土壇8	弥生土器	甕	20.8	20.3			口唇部に刻目。口縁部に8本のヘラ描き沈線。内面は押圧ナデ。	10YR6/2(灰黄褐)	3mm前後の砂粒 石英(多)・赤色酸化土粒	外面に煤付着。
23	19	Ⅳ区北側道	舟形土壇9	弥生土器	壺					口縁内面に貼付突帯。器表面剥離著しい。	10YR7/3(鈍い黄橙)	3mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	
24	18	Ⅳ区北側道	舟形土壇9	弥生土器	甕					口唇部に刻目、口縁部に7本のヘラ描き沈線。	7.5YR7/2(明褐灰)	2mm前後の砂粒 石英(多)・長石(多)	
25	26	Ⅳ区北側道	舟形土壇9	弥生土器	甕					4~5本単位の櫛描沈線。内面はミガキ。	7.5YR5/4(鈍い褐)	2mm前後の砂粒 石英(多)・長石(多)	
26	17	Ⅳ区北側道	舟形土壇9	弥生土器	甕					内外面、ケズリ後ナデ。	10R5/6(赤)	2mm前後の砂粒 石英(多)・長石(多)	
27	81	Ⅳ区P-31	舟形土壇11	弥生土器	甕					5本単位の櫛描沈線・刺突巡る。内面はナデ。	10YR6/2(灰黄褐)	1~4mm前後の砂粒 長石(多)・石英(中)	
28	80	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	壺					口縁部横ナデ。端部ヘラ状工具による施文。	10YR7/4(鈍い黄橙)	0.2~3mm前後の砂粒 石英・長石・(多)	
29	78	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	壺	6.3				内外面ミガキ。頸部内面ナデ。	7.5YR5/3(鈍い褐)	0.2~3mm前後の砂粒 石英(多)・長石(中)	
30	79	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕					浅い細かな櫛描沈線。	7.5YR7/4(鈍い橙)	2mm程の砂粒 石英・長石(多)	
31	70	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕					8本単位5列の櫛描沈線。下部に刺突。内外面に僅かミガキ痕。	5YR6/6(橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	
32	77	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕	17.2				5本単位の櫛描沈線。内面、ナデ後ミガキ。	7.5YR7/3(鈍い橙)	1.5mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
33	85	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕(瓶)	24.7	24.8	6.6	32.2	櫛描沈線。下はミガキ。内面は押圧ナデ。	7.5YR6/3(鈍い褐)	2~3mm程の小石(多) 長石・石英(多)	
34	82	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕			7		内外面剥離著しい。	2.5YR6/6(橙)	1~4mm程度の砂粒(多) 長石・石英(多)	
35	75	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕			6.2		内外面剥離著しい。	5YR5/2(灰褐)	4mm以下の砂粒 長石・石英(多)	
36	76	Ⅳ区P-32	舟形土壇13	弥生土器	甕					内外面剥離著しい。	5YR5/6(明赤褐)	5mm程の小石 石英・長石(多)	
37	396	Ⅱ区P-19	溝2	弥生土器	甕					ヘラ描き沈線、その下部に刺突を巡らす。	10YR7/1(灰白)	長石・石英(多)	外面に煤付着。

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地区名	遺構名	種 別	器 種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特 徴	色 調	胎 土	備 考
38	95	Ⅱ区P-19	溝2	弥生土器	甕	18.3	18.7			外面縦方向のハケ。内面横方向のミガキ。貝殻による剥突が巡る。	7.5YR5/4(鈍い褐)	1.5mm以下の砂粒・長石・石灰(多)・赤色酸化土粒(僅)	
39	5	Ⅳ区北側道	溝15	弥生土器	甕			6.3		僅かながら上げ底。	10YR4/2(灰黄褐)	2mm程の砂粒・長石(多)・石英(多)	
40	6	Ⅳ区北側道	溝15	弥生土器	甕			5.6		内外面剥落著しい。	7.5YR7/5(橙)	2~3.5mm程の小石・長石・石英(多)	
41	32	Ⅳ区北側道	溝21	弥生土器	壺	18.8				口縁部に凹線、口縁下端に刻目。頸部に沈線。	5YR6/6(橙)	1~2mm程度の砂粒・長石・黒雲母(多)	
42	9	Ⅳ区北側道	溝21	弥生土器	甕	10.7				口縁部横ナデ。外部ナデ。	7.5YR6/6(橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(中)	
43	33	Ⅳ区北側道	溝21	弥生土器	甕					口縁部横ナデ。胴部内面ヘラケズリ。	7.5YR8/2(灰白)	1mm程度の砂粒(少)・長石(多)	
44	38	Ⅳ区北側道	溝21	弥生土器	ミニチュア甕	5.9	5.9	2.8	7.4	ハケ成形の後、押圧ナデ仕上げ。	10YR8/2(灰白)	1mm以下の砂粒・赤色酸化土粒(多)	
45	2	Ⅳ区北側道	溝21	弥生土器	高杯					外面ミガキ、内面ナデ?	10YR7/4(鈍い黄橙)	1.5mm程度の砂粒・長石(多)・石英(多)	
46	69	Ⅳ区P-34	溝33	弥生土器	甕	13				口縁拡張部に4条の凹線。	10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒・長石(多)・黒雲母(中)	
47	86	Ⅱ区北側道	河道3	弥生土器	高杯	10.8		8.4	11.6	内外面ハケ。脚端部に貼付突起。円盤充填。	2.5Y6/1(黄灰)	1~3mm程度の砂粒(多)・長石・石英(多)	穿孔途中1ヵ所
48	121	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	壺?					内外面押圧痕。下端・凹線?	7.5YR7/3(鈍い橙)	0.5mm前後の砂粒・長石(多)	
49	122	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	壺?	15.6				内面ミガキ。外面不明。	2.5YR5/6(明赤褐)	1mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
50	118	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	壺					押圧ナデ板。	5YR7/8(橙)	4mm程度の砂粒(多)・石英・長石(多)	
51	117	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	壺?					内外面ミガキ。	10YR6/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)・角閃石(僅)・白雲母(少)	
52	123	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	壺					6本単位、5列の櫛形沈線。下部には鋸歯状の剥突が巡る。	2.5Y6/2(灰黄)	2.5mm以下の砂粒・長石・石英(中)・角閃石(僅)・白雲母(少)	
53	115	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	甕	24.8				口唇部に刻目が巡る。内面外面ハケ。	10YR7/3(鈍い黄橙)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
54	114	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	甕					口唇部刻目、口縁部3本のヘラ描き沈線。	10YR6/3(鈍い黄橙)	2mm程以下の砂粒・長石・石英(多)	内面に煤付着。
55	124	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	甕(鉢)			8.4		内外面ヘラミガキ。	2.5Y6/1(黄灰)	1mm前後の砂粒・長石(中)・石英(多)	
56	119	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	甕					3条の凹線、外面にタタキ痕、ミガキ。	10YR6/2(灰黄褐)	0.5mm前後の砂粒・長石(中)	
57	120	Ⅲ区南側道	河道4	弥生土器	高杯					杯内外面ミガキ。脚部押圧ナデ。	2.5Y6/1(黄灰)	1~3mm程度の砂粒・長石(多)	
58	99	Ⅱ区南側道	建物2	土師質土器	高台付碗					ナデ。	5YR6/8(橙)	1mm程度の砂粒・長石・赤色酸化土粒(多)	外面に煤付着。
59	100	Ⅱ区南側道	建物2	土師質土器	鍋	31.6				外面ハケ。口縁内面ハケ、胴部ナデ。	10YR5/2(灰黄褐)	2mm以下の砂粒・長石・石英(多)	
60	93	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	高台付碗	16.5	16.8		6.4	内外面ミガキ。	5Y7/1(灰白)	4~5mm程の小石(3~4個)・2mm以下の砂粒	
61	92	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	高台付碗	15	15.6		6.2	内外面ミガキ。	2.5YR8/2(灰白)	1mm以下の砂粒・長石・石英(僅)	
62	98	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	高台付碗	15			5.6	内外面ミガキ。	2.5Y8/1(灰白)	3mm前後の砂粒・石英(多)・長石(少)	
63	107	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	皿	14.4		9.1	3.1	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	2.5Y6/2(灰黄)	1mm程度の砂粒・長石・赤色酸化土粒(多)	
64	108	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	皿			9.4		口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	10YR6/2(灰黄褐)	砂粒ほとんど含まず	
65	102	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	小皿	9.1			1.5	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	2.5Y7/1(灰白)	1mm程度の砂粒(少)・石英(多)・雲母(中)	
66	105	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	小皿	8.5		7.7	1.5	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	5Y6/2(灰オリーブ)	0.5~2mm程度の砂粒・黒雲母・雲母(多)	
67	104	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	小皿	8.9		6.7	1.1	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	7.5YR5/3(鈍い褐)	1mm程度の砂粒(少)・長石(多)	
68	103	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	小皿	8.7		7.3	1.2	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	5Y7/2(灰白)	1~3mm程度の砂粒(少)・石英(多)	
69	106	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	小皿	8.4		7.5	1	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	10YR6/1(褐灰)	1~3mm程度の砂粒(少)・雲母(多)	
70	101	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	甕	20	18		13.7	内外面ハケ	10YR6/2(灰黄褐)	3mm前後の砂粒・石英(多)	外面下側に煤付着。
71	94	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	鍋	41.8				外面に押圧ナデ痕。内面はハケ。	2.5Y3/1(黒褐)	1.5mm以下の砂粒・長石・石英・角閃石(多)	外面に煤付着。
72	112	Ⅰ区北側道	溝34	土師質土器	鍋					内外面、ハケ。	2.5Y6/3(鈍い黄)	0.2~3mm前後の砂粒・長石・石英(多)	外面に煤付着。
73	96	Ⅱ区P-21	溝66	土師質土器	小皿	7.9	8.3		1.8	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	10YR7/3(鈍い黄橙)	0.2~1.5mm前後の砂粒・石英(多)	
74	97	Ⅱ区P-21	溝66	土師質土器	小皿	7.5	7.8		2	口縁横ナデ、底部ヘラキリ。	10YR7/3(鈍い黄橙)	0.2~1.5mm前後の砂粒・石英・長石(多)	

土器一覽

掲載 番号	実測 番号	地区名	遺構名	種 別	器 種	口径 (cm)	最大径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	特 徴	色 調	胎 土	備 考
75	51	Ⅱ区北側道	溝93	土師質土器	高台付椀	15		6.9	5	内外面ミガキ。	2.5YR8/1(灰白)	1mm程度の砂粒(少) 石英・長石(少)	
76	89	Ⅱ区P-23	包含層	縄文土器	浅鉢					口唇部に刻目。口縁下 端に半截竹管文。	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 石英・長石(多)	
77	90	Ⅱ区P-23	包含層	縄文土器	深鉢					アルカ属貝条痕の後ナ デ。縦方向の刺突文。	10YR6/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
78	52	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	壺	9.3				外面に押圧ナデ痕。	7.5YR6/4(鈍い橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
79	59	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	壺	12				内外面、ヘラミガキ。	2.5YR6/2(灰黄)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)・石英(中)	
80	48	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	壺		31.1	9.5		肩部に4本の山形文? 外面ヘラミガキ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	3~5mm程度の砂粒 長石・石英(多)	
81	58	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	甕					口唇部に刻目。内外 面剥落し、調整不明。	10YR7/3(鈍い黄橙)	4mm程の砂粒 長石・ 石英(多)	
82	61	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	甕					口唇部に刻目。4条の ヘラ描き沈線。	2.5YR5/8(明赤褐)	2~5mm程度の砂粒 石英・長石(多)	
83	64	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	甕					口唇部に刻目。4条の ヘラ描き沈線。	7.5YR6/6(橙)	4mm程度の砂粒 長石 (多)	外面に煤付 着
84	44	Ⅲ区P-26	包含層	弥生土器	甕					口唇部に刻目。11条のヘ ラ描き沈線。下端に刺 突。	2.5Y7/2(灰黄)	3mm前後の砂粒 長石・ 石英・赤色酸化土粒 (多)	
85	1	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	甕					内外面ナデ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	3mm以下の砂粒 長石・ 石英(多)	
86	60	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	甕	31.7				口唇部に刻み目。7条 のヘラ描き沈線。	7.5YR4/3(灰褐)	1~5mm程度の砂粒 長石・石英(多)	内外面に煤 付着
87	71	Ⅳ区P-32	包含層	弥生土器	甕					2条のヘラ描き沈線。 内外面ナデ。	10YR8/3(浅黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
88	55	Ⅳ区南側道	包含層	弥生土器	甕					口唇部に刻目。9条の ヘラ沈線。内面ナデ。	10YR7/3(鈍い黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
89	72	Ⅳ区P-32	包含層	弥生土器	壺					凸帯上に刻み目。	10YR6/4(鈍い黄橙)	2mm前後の砂粒 長石・ 石英(多)	
90	14	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	壺					口唇部に2段の刺突。 口縁上に貼付凸帯。	7.5YR6/1(灰)	1~4mm程度の砂粒 長石(多)	
91	111	Ⅰ区P-11	包含層	弥生土器	甕	35.6				胴部中央に刺突。上半ハ ケ。下半ヘラミガキ。内 面ヘラミガキ。	2.5Y7/2(灰黄)	1mm前後の砂粒 長石 (多)	
92	73	Ⅳ区P-35	包含層	弥生土器	甕	8.4				口縁部ヨコナデ。胴 部内面押圧ナデ。	5YR7/4(鈍い橙)	1.5mm前後の砂粒 長 石・石英(多)	
93	66	Ⅳ区P-34	包含層	弥生土器	甕					口縁端部凹部を呈す。 胴部外面はハケ。内面は ヘラ削り。	10YR6/2(灰黄褐)	0.5mm前後の砂粒 赤 酸化土(多)	
94	21	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	甕	14.3				口縁拡張部に4条の凹 線。	10YR7/2(鈍い黄橙)	1mm以下の砂粒。2mm 前後の赤色酸化土	
95	67	Ⅳ区P-34	包含層	弥生土器	甕	12				胴部外面ハケ、内面 ヘラ削り。	7.5YR7/3(鈍い橙)	4mm程度の砂粒 石英(多)	
96	57	Ⅳ区P-31	包含層	弥生土器	甕			7.8		外面下端押圧ナデ。 内面にケズリ痕?	5YR6/6(橙)	3mm以下の砂粒 石英・ 長石(多)	
97	74	Ⅳ区P-35	包含層	弥生土器	甕			4.6		内面に押圧痕。	7.5YR8/2(灰白)	2mm前後の砂粒 長石・ 石英(多)	
98	56	Ⅳ区P-34	包含層	弥生土器	甕			4.9		外面ハケ後ヘラミガ キ。内面ヘラケズリ。	10YR6/2(灰黄褐)	2mm前後の砂粒 石英 (多)	
99	68	Ⅳ区P-34	包含層	弥生土器	高杯	18.8		11.3	8.5	剥落のため調整不明。 脚部4カ所に凹孔。	7.5YR7/3(鈍い橙)	1~3mm程度の砂粒僅 少・石英(多)	
100	12	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	高杯	15.8				内外面剥落のため調 整不明。	7.5YR8/4(浅黄橙)	1~3mm程度の砂粒 長石(多)	
101	25	Ⅳ区北側道	包含層	弥生土器	鉢					外面縦方向、内面横 方向のヘラミガキ。	10YR7/2(鈍い黄橙)	3mm程度の砂粒 長石・ 石英(多)	
102	109	Ⅱ区P-18	包含層	須恵器	甕					頸部3カ所に凹線。	10YR7/3(鈍い黄橙)	1mm前後の砂粒僅少	
103	46	Ⅳ区南側道	包含層	須恵器	杯身	12.8					N7/1(灰白)	2.5mm以下の砂粒 長 石(多)	
104	84	Ⅲ区P-27	包含層	土師質土器	小皿	7.4		5	1.5	内外面ナデ、底部糸 切り。	2.5Y6/6(灰黄白)	2mm以下の砂粒 長石 (中)	

石製品一覽

掲載 番号	実測 番号	地区名	遺構名	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	備考
S1	24	Ⅳ区北側道	舟形土城3	石鏃	26	18	3	1.1	サヌカイト	裏面欠損
S2	4	Ⅳ区北側道	舟形土城3	石鏃	18	12.5	2.7	0.5	サヌカイト	
S3	27	Ⅳ区北側道	舟形土城4	砥石	172.5	94	102	2320	花崗岩	4面とも使用
S4	21	Ⅳ区北側道	舟形土城4	石鏃	12	9	2	0.2	サヌカイト	
S5	22	Ⅳ区北側道	舟形土城4	石鏃	19	15.5	3.4	0.6	サヌカイト	
S6	23	Ⅳ区北側道	舟形土城4	石鏃	13.5	17	2.7	0.6	サヌカイト	先端欠損
S7	26	Ⅳ区北側道	舟形土城4	石鏃	21	17	3.3	0.9	サヌカイト	
S8	3	Ⅳ区北側道	舟形土城4	R.F	52	42.5	7	11.9	サヌカイト	
S9	6	Ⅳ区北側道	舟形土城4	スクレイパー	75	63	12.5	49.5	サヌカイト	
S10	5	Ⅳ区北側道	舟形土城4	石斧	71	59	14.5	131.4	泥質片岩	側面欠損
S11	25	Ⅳ区北側道	舟形土城5	石鏃	30	15	7.3	3	サヌカイト	
S12	20	Ⅳ区北側道	舟形土城6	石鏃	23	10.5	3.7	0.9	サヌカイト	
S13	18	Ⅳ区北側道	舟形土城9	クサビ	20	32.5	7.9	4.8	サヌカイト	上端敲打
S14	29	Ⅳ区北側道	土城1	石包丁	79	44	6.6	24.9	結晶片岩	約1/2欠損
S15	1	Ⅳ区P-31	土城33	石鏃	24	10	4.8	1.1	サヌカイト	
S16	37	Ⅲ区南側道	溝6	石鏃	26	16.5	3.5	1.1	サヌカイト	
S17	28	Ⅳ区北側道	溝20	クサビ	21	17	5	2.1	サヌカイト	上端敲打
S18	35	Ⅲ区南側道	河道4	スクレイパー	57.5	43	7	16.3	サヌカイト	
S19	36	Ⅲ区南側道	河道4	スクレイパー	108	134	15.3	192.4	サヌカイト	挟りを敲打
S20	15	Ⅰ区南側道	包含層	石鏃	16.5	16	3.2	0.7	サヌカイト	
S21	2	Ⅳ区北側道	包含層	石鏃	20	17.5	2.8	0.8	サヌカイト	
S22	31	Ⅳ区南側道	包含層	石鏃	26.5	17	5	1.3	サヌカイト	
S23	11	Ⅳ区南側道	包含層	石鏃	28	20.5	6.5	3.2	サヌカイト	
S24	13	Ⅳ区P-11	包含層	石鏃	19	12	4.5	0.9	サヌカイト	
S25	7	Ⅳ区北側道	包含層	石鏃	27	11.5	4	1.4	サヌカイト	
S26	33	Ⅲ区南側道	包含層	石鏃	21	13.5	3.8	0.6	サヌカイト	
S27	34	Ⅳ区P-32	包含層	石鏃	26	16.5	3.2	0.9	サヌカイト	
S28	17	Ⅳ区北側道	包含層	石鏃	25	9.5	3.5	0.7	サヌカイト	
S29	12	Ⅳ区南側道	包含層	石鏃	43	12	5.5	1.9	サヌカイト	
S30	8	Ⅳ区北側道	包含層	石鏃	23	14	4.5	1.1	サヌカイト	
S31	32	Ⅳ区南側道	包含層	石鏃	27	15	4	1.1	サヌカイト	
S32	19	Ⅳ区北側道	包含層	石鏃	20.5	20.5	7.2	2.3	サヌカイト	
S33	30	Ⅳ区北側道	包含層	スクレイパー	76	49	11.5	36.1	サヌカイト	
S34	10	Ⅳ区南側道	包含層	スクレイパー	93	62	10.5	55.2	サヌカイト	
S35	9	Ⅳ区北側道	包含層	砥石	99.5	70	52.5	469.2	流紋岩(溶岩)	
S36	14	Ⅱ区P-23	包含層	砥石	58	28.5	30.5	88.8	流紋岩(溶岩)	
S37	16	Ⅲ区南側道	包含層	砥石	60	36.5	22.5	56.8	凝灰岩	

付載1 奥ヶ谷窯跡の地磁気年代

島根大学理学部総合理工学部

時 枝 克 安

島根職業能力開発短期大学校

伊 藤 晴 明

1. 地磁気年代法の仕組

地磁気は一定ではなく不規則な変動をしている。この地磁気変動には周期の短いものから長いものまで様々な成分が含まれているが、それらのなかでも、10年以上経過してはじめて変化したことが分かるような緩慢な変動を地磁気永年変化と称している。地磁気年代測定法で時間の機能をはたすのはこの地磁気永年変化であり、過去の地磁気の方向の時間的変化を示す曲線に年代を目盛って、地磁気の方向から逆に年代を読みとろうとする。しかし、例えば、ある焼土が何時焼けたかを知らうとするとき、焼土が焼けたときの地磁気の方向がどこかに記録されており、それを推定できなくては目的を果たせない。実は、焼けた時の地磁気の方向は焼土の熱残留磁気として記録されている。地磁気年代を求める手順を述べると、まず、焼土の定方位試料を採取し、それらの熱残留磁気を測定して、焼土が最終加熱されたときの地磁気の方向を求める。そして、標準となる地磁気永年変化曲線上にこの方向に近い点をもとめて年代目盛りを読みとることになる。

地磁気中で粘土が焼けると、粘土に含まれる磁鉄鉱、赤鉄鉱等の磁性鉱物が担い手となって、焼土は熱残留磁気を帯びる。この熱残留磁気の方法は焼けたときの地磁気の方法に一致し、しかも非常に安定であり、磁性鉱物のキュリー温度（磁鉄鉱：578℃、赤鉄鉱：675℃）以上に再加熱されないかぎり数万年以上年代が経過しても変化しない。もし、再加熱によって、焼土がキュリー温度以上になった場合は、それまで保持していた残留磁気は完全に消滅し、その代わり、新たに再加熱時の地磁気の方法を向いた熱残留磁気が獲得される。つまり、焼土は最終焼成時の地磁気を熱残留磁気として正確に記憶する。それゆえ、あらかじめ、年代既知の焼土の熱残留磁気を測定して、地磁気の方法の時間的変化をグラフにしておけば、このグラフを時計の代わりに用いて、焼土の焼けた年代を推定できる。この時計では地磁気の方法が針に相当し、焼土の熱残留磁気が焼成時の針の位置を記憶していることになる。日本では、広岡によって西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線がかなり詳しく測定されているので、この方法が焼土の簡便な年代測定法として実用化されている。地磁気年代測定法の詳細については中島による解説が参考になる⁽¹⁾。

2. 地磁気年代測定法の問題点

第一に、地磁気の方法は時間だけでなく場所によっても変化するので、地域によっては、その場所での標準曲線の形が西南日本のものからかなり相違していることが問題となる。厳密に言えば、ある焼土の地磁気年代を求めるには、焼土の熱残留磁気をその場所の標準曲線と比較しなければならない。相違が小さいときには西南日本の標準曲線を代用できるが、相違が大きときにはその地域特有の標準曲線を決定し、この曲線と焼土の残留磁気の方法を比較する必要がある。しかし、中国地域の過去

の調査例では、広岡による西南日本の標準曲線から求められた地磁気年代と土器年代はうまく整合しているので、中国地域においてこの標準曲線を代用しても問題はない。

第二に指摘すべきことは、「地磁気年代は地磁気変動という物理現象から推定されるので土器編年に左右されない」と思われがちであるが、これは誤解であり、両者には密接な相互依存の関係があるという事実である。すなわち、少数の年代定点をのぞくと、標準曲線上の年代目盛りのほとんどは考古学の土器編年体系を参照して決められている。それゆえ、地磁気年代が年代定点に近いときには問題がないが、年代定点から遠くなるほど土器編年の影響をより強く受けることになり、もし、土器編年に改訂があれば、地磁気年代もそれに伴って訂正しなければならない。年代定点の数が増加すると、地磁気年代と土器年代の相互依存は解消するが、現状ではやむをえない。しかし、地磁気を媒介とする地磁気年代測定法は、無遺物の場合でも有効である点、また、遠隔地の土器編年を地磁気変動を通じて対比できる点で独自の性格を持つ。

3. 遺構と試料

奥ヶ谷窯跡（岡山県総社市福井字奥ヶ谷）は丘陵斜面に構築された半地下式の登窯であり窯体床面の一部のみが残存している（残存部の長さ～2.4m、最大幅～1.2m）。窯の床面には段があり、床面全体の勾配は～25度である。窯体内、および、作業面埋土から、須恵器（甕片、高杯）、軟質系土器片（長胴甕、平底鉢、高杯）が出土しており、これらの土器から、窯の操業年代は5世紀前半と推定されている。地磁気年代推定用として、床面全体にわたる広い範囲から23個の定方位試料（大きさ24×24×24mm、クリノコンパスで方位測定）を採取した。

4. 測定結果

試料の残留磁気の方角をスピナー磁力計で測定した。測定結果を図1に示す。6ヶの飛び離れたデータを省略すると、残りは、図中の小円内に示すようによく揃う。これらは窯の一部分ではなく床面全体にわたる広範からのデータである。また、地盤は安定しており、窯体が最終焼成後に傾動した形跡は認められない。それゆえ、小円内の揃ったデータは最終焼成時の地磁気の方角を正しく示していると判定できる。したがって、これらを元にして地磁気年代を推定する。

表1に小円内のデータから計算された平均方向と誤差の目安となる数値をあげる。なお、kの値が大きく、 θ_{95} の値が小さいほど、残留磁気の方角がよく揃っていることを意味している。

表1 奥ヶ谷窯跡の残留磁気の平均方向

平均伏角	(I m)	46.92度
平均偏角	(D m)	-0.15度
Fisherの信頼度係数	(k)	2642
95%誤差角	(θ_{95})	0.72度
採用試料数/採取試料数	(n/N)	17/23

5. 地磁気年代

図2は奥ヶ谷窯跡の残留磁気の平均方向（十印）と誤差の範囲（点数の楕円）、および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線⁽³⁾上である。地磁気年代を求めるには、残留磁気の平均方向から近い点を永年変化曲線に求めて、その点の年代を読みとればよい。年代誤差も点線の楕円から同様にして推定できる。平均方向が交錯するために4つの地磁気年代が可能となる。すなわち、残留磁気の平均方向に近いもの順にあげると、最も可能性が大きい年代値として、～440、～1800、次に考えられる年代値として、～90、～1390がある。これらのなかから、5世紀前半という土器年代に近い値を選ぶとA.D.440±5となる。

奥ヶ谷窯跡の地磁気年代

A.D.440 ± 5

6. 考察

奥ヶ谷窯跡は安定した地盤に構築されている。また、地磁気年代を推定するために採用した残留磁気データのデータは床の狭い部分ではなく広い範囲からのものである。それゆえ、採用したデータは床の局部的変形の影響を受けておらず、最終焼成時の地磁気の方角を正しく示している。また、A.D.440±5の年代を与える標準曲線上の点は窯の残留磁気の平均方向に非常に近接している。さらに、中国地域の過去の地磁気年代調査例では、広岡による西南日本の標準曲線から求められた地磁気年代は土器年代とよく整合している。したがって、ここで得られた地磁気年代（A.D.440±5）は、土器年代ともうまく整合しているが、地磁気年代測定法の立場から見ても非常に信頼性が高いものである。

試料採取、情報提供について、岡山県古代吉備文化財センターの柴田英樹氏にお世話になりました。厚く感謝します。

註

- (1) 広岡公夫 考古地磁気および第四紀古地磁気の最近の動向『第4紀研究』 15, 200-203, 1978
- (2) 中島正志、夏原信義 「考古地磁気年代推定法」『考古学ライブラリー9』ニューサイエンス社
- (3) 註(1)に同じ

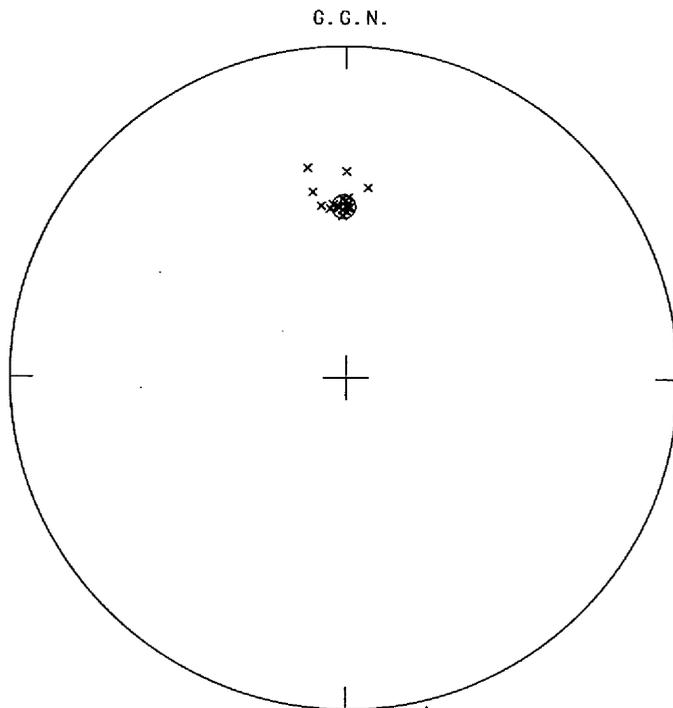


図1 奥ヶ谷窯跡の残留磁気の方向。小円内のよく揃うデータを用いて地磁気年代を求める。

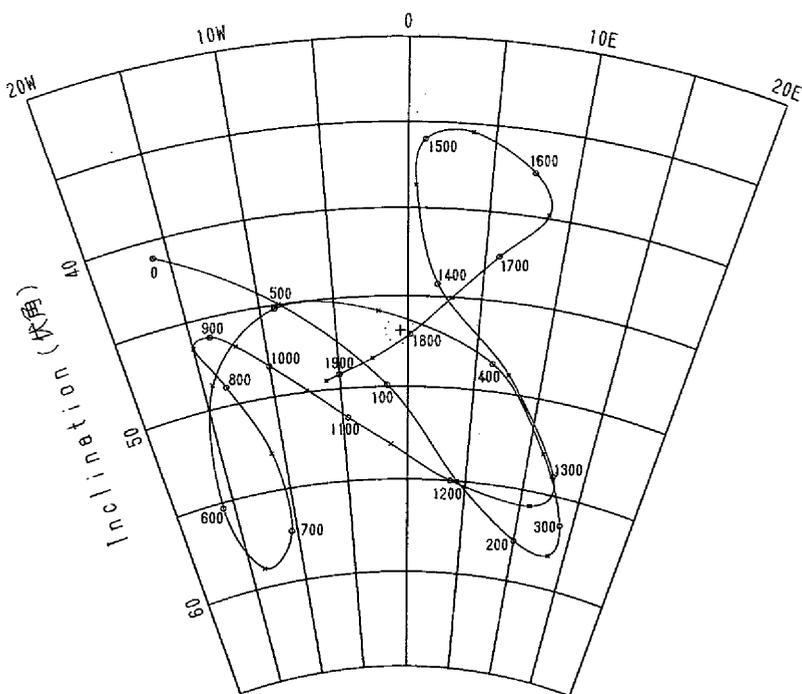


図2 奥ヶ谷窯跡の残留磁気の平均方向(+印)と誤差の範囲(点線の楕円)、および広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線

付載2 奥ヶ谷窯跡、中山・西山古墳群出土遺物の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所

白石 純

1. はじめに

この胎土分析では、蛍光X線分析法により奥ヶ谷窯跡の須恵器、中山・西山古墳群の埴輪、服部遺跡の粘土採掘坑の粘土を分析し、以下のことについて検討した。

(1) 中国横断自動車道の建設に伴い確認された吉備地方で現在もっとも古い須恵器窯跡である奥ヶ谷窯跡と大阪陶邑窯跡群（5世紀代の須恵器）、吉備地方の造山古墳周辺の各遺跡⁽¹⁾（窪木薬師遺跡、法蓮23・37号墳、榊山古墳、小寺2号墳、川入遺跡、菅生小学校裏山遺跡）で出土している初期須恵器との比較。

(2) 中山6号墳、西山1・25・26古墳出土の埴輪と備中（造山古墳および周辺古墳⁽²⁾）、備前（山陽町内の古墳⁽²⁾、牛窓町黒島古墳⁽²⁾）の5世紀代の埴輪との比較。

(3) 服部遺跡粘土採掘坑から出土した粘土（弥生後期前半）と足守川流域の弥生中期後半から古墳初頭の遺跡⁽³⁾（津寺遺跡、足守川矢部南向遺跡、矢部奥田遺跡、矢部古墳群B遺跡、上東遺跡）から出土した土器および矢部奥田遺跡粘土採掘坑出土の粘土（古墳前半期⁽⁴⁾）との比較。

2. 分析方法・結果

分析装置は、波長分散型蛍光X線分析装置を用い、測定方法・条件・試料の作製などは、今までに行っている方法である。

測定試料は、第1表に揚げた奥ヶ谷窯跡22点、中山6号墳14点、西山1・25・26号墳19点、服部遺跡粘土採掘坑4点の計59点である。

分析の結果、 K_2O 、 CaO 、 Fe_2O_3 、 TiO_2 、 Sr 、 Rb の各元素に差がみられた。特に、 K_2O 、 CaO 、 Sr 、 Rb の4元素に顕著な差があり、これら元素を用いて CaO/K_2O 、 Fe_2O_3/TiO_2 、 Sr/Rb の各元素の比をとり、XY散布図を作製し、前記したことについて比較検討した。

(1) の検討課題である須恵器の窯跡である奥ヶ谷窯跡の胎土分析では、第1図 $CaO/K_2O-Fe_2O_3/TiO_2$ 、第2図 $CaO/K_2O-Sr/Rb$ の散布図から奥ヶ谷窯跡、備中南部地域の窯跡（二子御堂奥・末の奥・道金山）、陶邑窯跡群（5世紀代）の3つの窯跡について比較した。この結果、奥ヶ谷窯跡と陶邑窯跡群が一部重複する部分があるもののほぼ識別できた（ CaO/K_2O 比が2.5~3ぐらいを境界として分かれる）。そして、時期は新しくなるが、奥ヶ谷窯跡に距離的に近い窯跡として備中地域の二子御堂奥・末の奥・道金山の各窯跡（7世紀~8世紀代）との比較では、奥ヶ谷の分布領域が半分以上、備中地域の窯跡に入る結果となった。

また、奥ヶ谷窯跡の作業面覆土から出土した試料番号104（小型甕）・105（高坏）・106（手捏

ね土器)の軟質土器のうち、104と106が奥ヶ谷窯跡の須恵器の分布領域に入らず胎土が異なった。

第3・4図の散布では、奥ヶ谷窯跡、陶邑窯跡群と吉備地方の各遺跡から出土した初期須恵器との比較を行った。この結果、窪木薬師遺跡、榊山古墳、川入遺跡、法蓮23・37号墳、小寺2号墳の各遺跡から出土した須恵器は、ほとんどが奥ヶ谷窯跡の分布領域に入ったが、菅生小学校裏山遺跡の須恵器は奥ヶ谷の領域に入らず、陶邑の領域かあるいはどちらの領域にも入らないものがあった。また、窪木薬師遺跡の須恵器のうち1点だけ菅生小学校裏山遺跡の分布範囲に入るものがあった。

(2)中山・西山古墳群出土の埴輪の胎土分析では、第5・6図に示したように備中・備前南部地域の埴輪と比較した。この結果、中山6号墳と西山1・25・26号墳の埴輪の胎土の比較では、 $\text{CaO}/\text{K}_2\text{O}$ 比が3.3ぐらいを境にして明らかに識別できた。

また、備中・備前南部地域の埴輪との比較では、西山1・25・26号墳の埴輪が造山古墳を中心とした備中南部地域の古墳から出土した埴輪の分布領域に入った。しかし、中山6号墳の埴輪は、備中南部地域の埴輪の領域に完全に入らず、少し胎土が異なるようである。

(3)服部遺跡の粘土採掘跡(粘土)と矢部奥田遺跡の粘土採掘跡(粘土)および足守川流域の各遺跡から出土した弥生中期後半～古墳初頭の土器との比較では、服部遺跡の粘土が弥生中期後半～後期初頭の土器が分布する上東遺跡、矢部堀越遺跡、矢部古墳群B遺跡、津寺遺跡の範囲に入った。しかし、矢部奥田遺跡粘土採掘跡の粘土は、各遺跡の土器の分布範囲からやや外れるところにプロットした。

3. まとめ

この胎土分析で得られた結果をもとに、新たにわかったこと、今後の課題について述べまとめたい。

(1)吉備地方で現在もっとも古い須恵器の窯である奥ヶ谷窯跡の胎土分析では、5世紀代の陶邑古窯跡群と比較した結果、両方の分布領域が一部重なるものの $\text{CaO}/\text{K}_2\text{O}$ 比が2.5～3ぐらいのところでは境界があり識別できた。また、造山古墳を中心とした地域で出土している胎土に粗い砂粒を多く含んでいる初期須恵器(窪木薬師遺跡、榊山古墳、川入遺跡、法蓮23・37号墳、小寺2号墳)の一群と、奥ヶ谷窯跡の比較では、一部の須恵器を除いてほぼ奥ヶ谷の領域に入り、蛍光X分析法による胎土分析ではこれら各遺跡から出土した須恵器は、奥ヶ谷窯跡で生産されたと推測される。そして、菅生裏山遺跡出土の陶質土器(初期須恵器)は、奥ヶ谷の領域に入らず、一部陶邑の領域に入るものがあった。

このように奥ヶ谷窯跡の分析では、吉備地方の各遺跡で出土している初期須恵器(胎土中に粗い砂粒を多く含む須恵器)が、奥ヶ谷の須恵器と胎土的に同じ分析結果となり、これらの須恵器の生産地を推定することができた。しかし、これら須恵器の中にも、何点かこの奥ヶ谷の分布領域に入らないものがあった。この奥ヶ谷の領域に入らない須恵器は、奥ヶ谷窯跡の領域がもう少し広がるのか、あるいは生産地が異なるのか、今回の分析では明確にできなかった。再検討する必要がある。

(2)中山6号墳、西山1・25・26号墳の埴輪の分析では、中山と西山の埴輪の胎土に差があり識別され胎土が異なることがわかった。また、備中・備前南部の5世紀代の埴輪との比較では、西山1・25・26号墳の埴輪がほぼ備中南部の造山古墳を中心とした地域の埴輪グループと胎土が一致した。この結果、現在のところ備中南部地域の古墳から出土する埴輪は、広いまとまりではあるがほぼ一つに

まとまる傾向をなしている。また、備前南部（山陽町、牛窓地域）の埴輪も備中とは別のグループを作る様相を呈しているが比較する分析試料点数が少なく、この地域の埴輪分布範囲が明確でないため、資料を蓄積し再検討しなければならない。

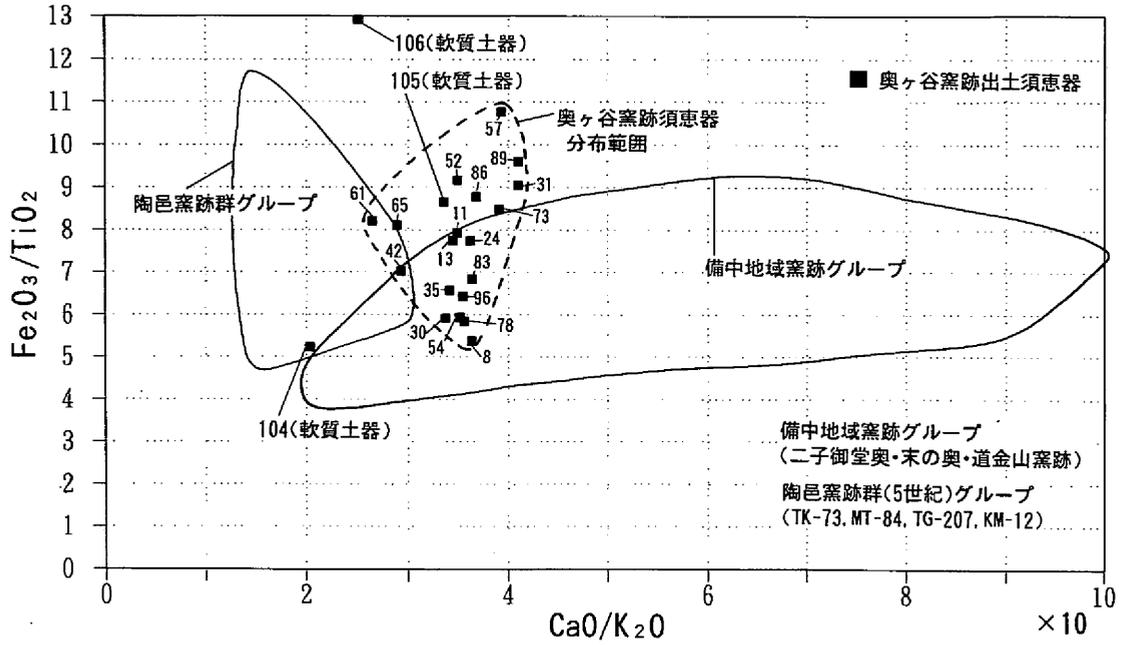
(3) 服部遺跡の粘土採掘跡の粘土分析では、足守川流域の弥生中期後半から古墳初頭の土器と比較した。この結果、弥生中期後半から後期初頭の土器がもっとも密に分布する領域に服部の粘土がプロットした。分析値からは、津寺遺跡、矢部堀越遺跡、矢部古墳群B遺跡、上東遺跡の土器の胎土にもっとも近い結果となった。また、矢部奥田遺跡の粘土採掘跡（古墳前半期）の粘土との比較では、矢部奥田遺跡の粘土がどの遺跡の分布範囲内にも確実に入らずはっきりしなかった。この粘土は、黒色～漆黒色のきめの細かい粘性のあるものであり、明らかに混和材（砂粒など）を入れて使用するような粘土であると考えられる。このような原因から矢部奥田の粘土の分析値が足守川流域の土器と一致しないことが十分推測される。このように、今回の採掘坑の粘土の分析では、土器に使用される粘土は概ね複数の粘土を使用したり、あるいは混和材（砂粒など）を入れるなどの人為的操作が行われることもあるし、服部遺跡の粘土のように単一の粘土でも弥生中期後半～後期初頭の土器と分析値が一致する粘土もある。このことより時期により異なるかもしれないが当時の土器製作者の粘土選定にもバラエティな使い方が想定される。

以上のように、蛍光X線分析法による胎土分析から大きく3つの課題について検討したが、これら分析結果に対しての考古学的な考察を加えて検討する必要があるが、項を改めて述べたい。

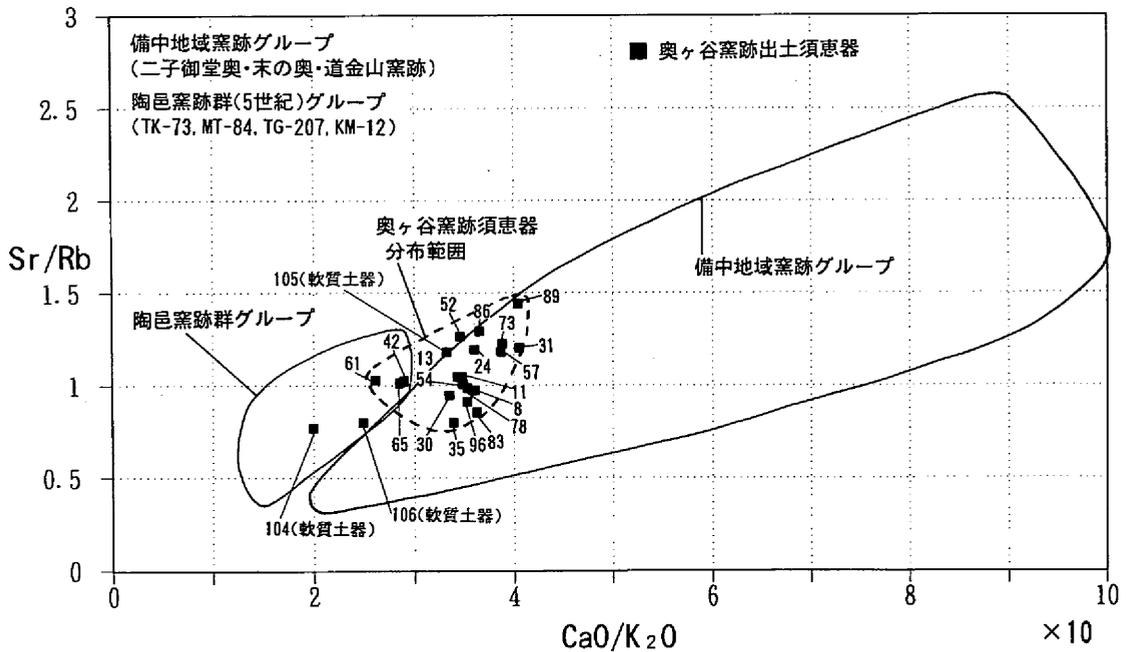
この分析を実施するにあたり、河本清氏、江見正己氏、中野雅美氏をはじめ岡山県古代吉備文化財センターの職員の方にはお世話になった。記して感謝致します。

註

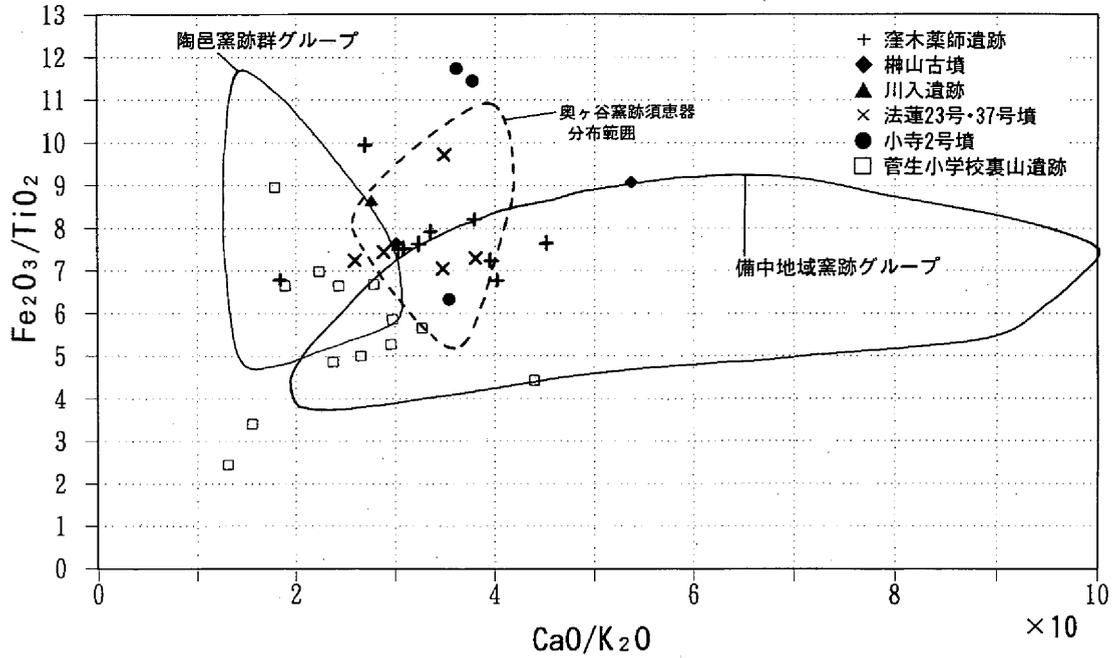
- (1) a.白石 純「菅生小学校裏山遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81 菅生小学校裏山遺跡』岡山県教育委員会 1993.3
b.白石 純「窪木薬師遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86 窪木薬師遺跡』岡山県教育委員会 1993.3
c.白石 純「岡山県地方出土初期須恵器の胎土分析（1）」『自然科学研究所研究報告第19号』岡山理科大学 1993
- (2) 白石 純「山陽自動車道関連遺跡出土遺物の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告89』岡山県教育委員会 1994.3
- (3) a.白石 純「足守川加茂A・B遺跡、足守川矢部南向遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94』岡山県教育委員会 1995.3
b.白石 純「津寺遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告98 津寺遺跡2』岡山県教育委員会 1995.3
- (4) 白石 純「津寺遺跡出土土器の胎土分析」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡3』岡山県教育委員会 1996.3



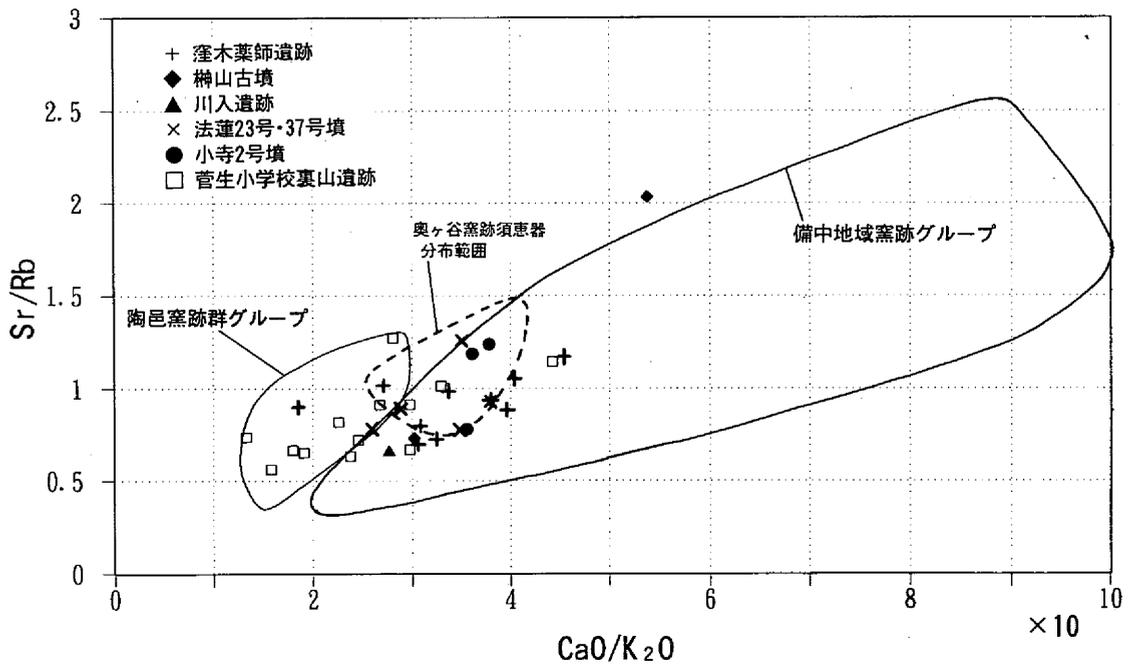
第1図 CaO/K₂O-Fe₂O₃/TiO₂散布図
奥ヶ谷窯跡と陶邑窯跡群および備中南部地域の窯跡群との比較



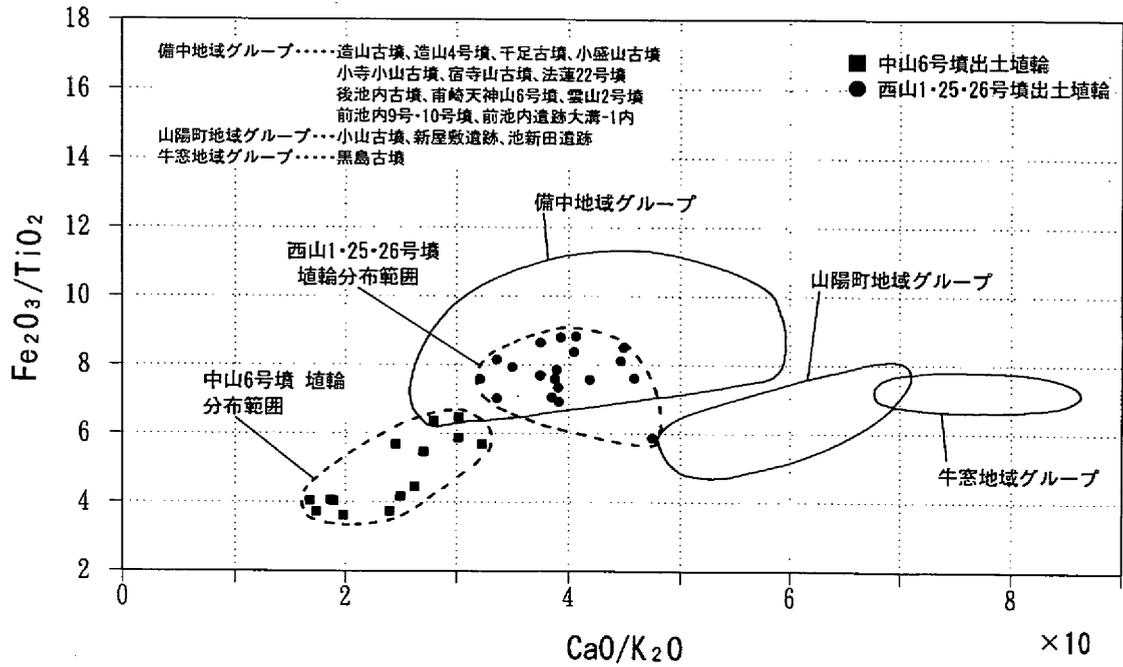
第2図 CaO/K₂O-Sr/Rb散布図
奥ヶ谷窯跡と陶邑窯跡群および備中南部地域の窯跡群との比較



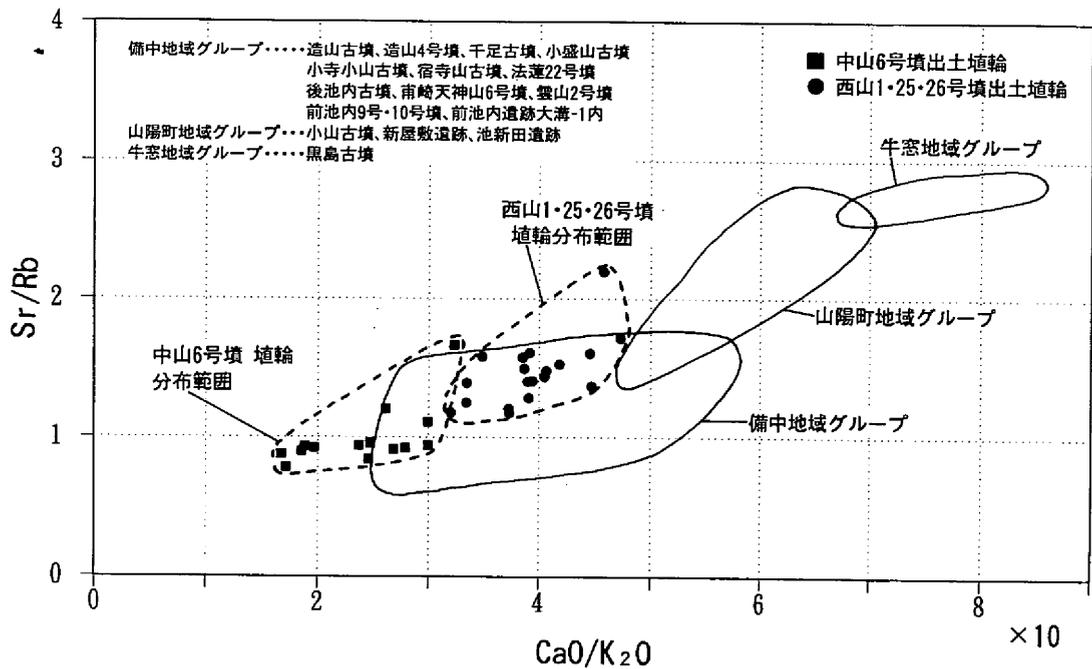
第3図 CaO/K₂O-Fe₂O₃/TiO₂散布図
奥ヶ谷窯跡と備中南部地域の各遺跡出土の初期須恵器との比較



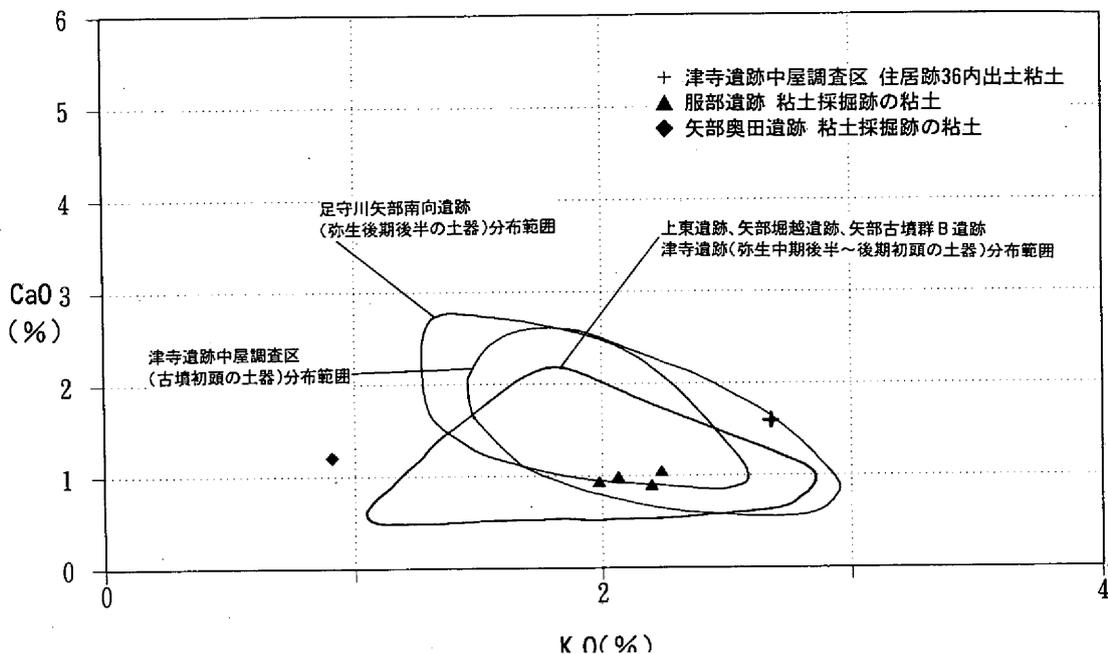
第4図 CaO/K₂O-Sr/Rb散布図
奥ヶ谷窯跡と備中南部地域の各遺跡出土の初期須恵器との比較



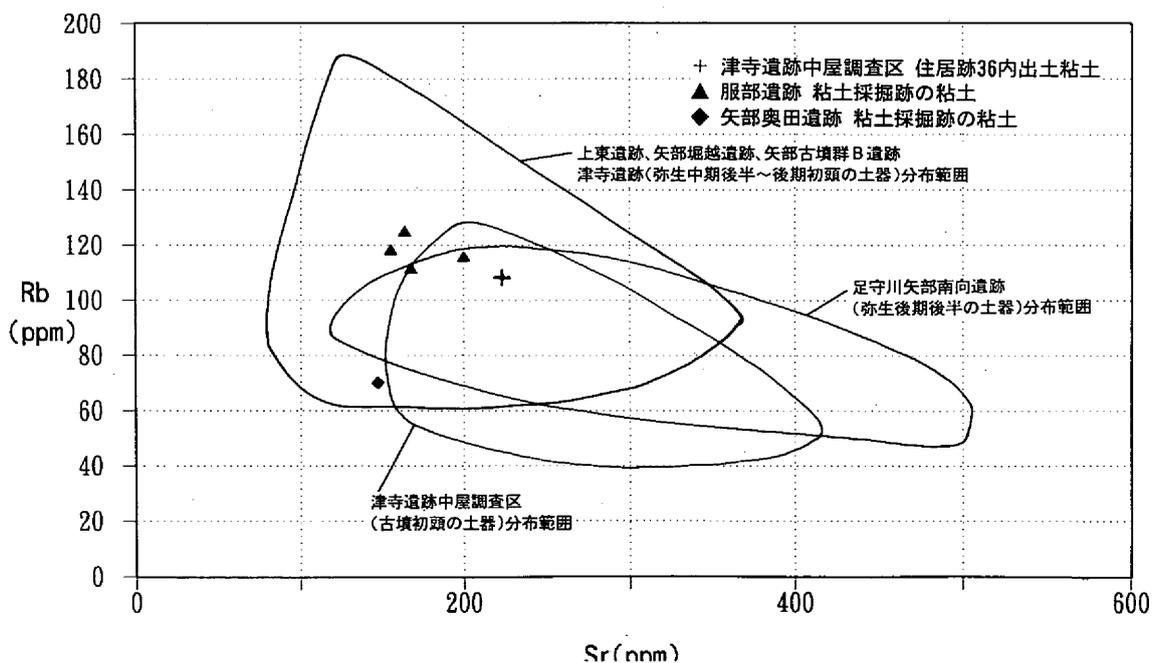
第5図 CaO/K₂O-Fe₂O₃/TiO₂散布図
 中山6号墳、西山1・25・26と備中、備前南部地域の各古墳出土の埴輪との比較



第6図 CaO/K₂O-Sr/Rb散布図
 中山6号墳、西山1・25・26と備中、備前南部地域の各古墳出土の埴輪との比較



第7図 K₂O-CaO散布図 服部遺跡粘土採掘坑(粘土)と足守川流域の遺跡出土土器(弥生中期後半～古墳初頭)との比較



第8図 Sr/Rb散布図 服部遺跡粘土採掘坑(粘土)と足守川流域の遺跡出土土器(弥生中期後半～古墳初頭)との比較

第1表 蛍光X線分析による胎土分析一覧表(%) ただしSr-Rbはppm

掲載番号	実測番号	遺跡名	出土位置	種別	器種	K ₂ O	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	Sr	Rb
8	18	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.16	5.92	71.88	1.11	17.79	0.78	112	114
11	21	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.16	7.26	61.65	0.92	22.33	0.75	116	110
13	86	奥ヶ谷窯跡	窯体床B	須恵器	甕(壺)	2.16	6.77	63.64	0.88	22.03	0.74	114	109
24	62	奥ヶ谷窯跡	窯体床B	須恵器	甕(壺)	2.08	6.87	63.66	0.89	22.30	0.75	125	104
30	110	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.11	6.26	71.24	1.07	17.87	0.71	108	114
31	3	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.25	6.37	62.20	0.70	23.34	0.91	144	120
35	49	奥ヶ谷窯跡	作業面覆土	須恵器	壺	2.07	6.64	64.15	1.01	22.12	0.70	99	124
42	45	奥ヶ谷窯跡	窯体床B	須恵器	甕(壺)	2.56	4.84	66.62	0.69	21.50	0.74	140	136
52	43	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.49	6.38	63.15	0.70	22.78	0.87	147	116
54	14	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.09	5.73	74.08	0.97	16.64	0.73	106	105
57	64	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕	2.28	7.80	61.22	0.73	21.91	0.89	132	111
61	108	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.76	5.29	67.38	0.65	20.61	0.72	137	133
65	44	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.68	5.03	68.35	0.62	19.86	0.77	126	124
73	57	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.20	5.99	61.49	0.71	24.06	0.86	140	114
78	100	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	甕(壺)	2.09	5.80	72.24	1.00	17.35	0.74	115	115
83	105	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	壺(甕)	1.93	6.79	63.92	1.00	22.79	0.70	103	121
86	4	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	壺(甕)	2.45	6.15	63.00	0.70	23.25	0.90	157	121
89	1	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	壺(甕)	2.04	7.65	59.92	0.80	22.98	0.83	139	96
96	67	奥ヶ谷窯跡	包含層	須恵器	高杯	1.97	6.62	65.98	1.03	20.36	0.70	104	114
104	82	奥ヶ谷窯跡	作業面覆土	軟質土器	小型甕	2.08	6.86	64.49	1.32	17.67	0.42	72	94
105	73	奥ヶ谷窯跡	作業面覆土	軟質土器	高杯	1.97	7.21	53.70	0.83	21.19	0.66	126	106
106	72	奥ヶ谷窯跡	作業面覆土	軟質土器	手捏土器	2.51	10.55	56.20	0.82	16.38	0.63	86	107
52	140	中山6号墳	北部裾東	埴輪	朝顔形円筒	2.49	4.63	65.27	0.81	19.29	0.81	177	106
55	141	中山6号墳	埴輪部北西	埴輪	円筒	2.01	4.27	74.14	0.67	15.37	0.56	112	121
56	40	中山6号墳	西部裾北	埴輪	円筒	2.25	3.93	70.03	0.70	17.49	0.55	107	128
57	40	中山6号墳	西部裾北	埴輪	円筒	2.66	2.58	68.34	0.62	18.68	0.66	135	141
60	39	中山6号墳	西部裾北	埴輪	円筒	2.49	2.78	72.14	0.63	19.67	0.65	142	118
67	138	中山6号墳	北部裾西	埴輪	動物(獣足?)	1.89	4.72	74.76	0.80	18.31	0.57	106	95
71	150	中山6号墳	西部裾南	埴輪	家形(破風板・棟木)	1.86	3.65	75.80	0.67	17.39	0.50	93	101
73	149	中山6号墳	北東部	埴輪	家形(軸部下半)	1.86	4.76	77.66	0.74	16.58	0.56	95	100
81	48	中山6号墳	埴輪東列08	埴輪	円筒	3.14	2.20	68.71	0.61	19.42	0.62	140	152
85	3	中山6号墳	埴輪南列05	埴輪	円筒	3.38	2.71	66.24	0.67	21.07	0.64	139	149
95	13	中山6号墳	埴輪南列15	埴輪	円筒	3.51	2.46	66.63	0.61	19.78	0.59	145	166
104	22	中山6号墳	埴輪南列24	埴輪	円筒	2.90	2.28	73.72	0.61	17.61	0.69	136	145
111	30	中山6号墳	埴輪西列06	埴輪	円筒	3.12	2.42	70.40	0.60	19.29	0.58	133	149
112	31	中山6号墳	埴輪西列07	埴輪	円筒	3.36	2.07	70.47	0.55	18.11	0.58	133	169
31	25	西山25号墳	北東部	埴輪	円筒	1.66	5.84	66.09	1.01	17.89	0.79	120	69
34	23	西山25号墳	西部周溝	埴輪	円筒	1.87	8.74	54.72	1.01	18.83	0.70	121	102
45	19	西山25号墳	南周溝東	埴輪	円筒	1.89	9.06	59.62	1.03	21.48	0.77	127	86
55	13	西山1号墳	南周溝	埴輪	朝顔形円筒	2.13	6.03	62.91	0.75	20.33	0.95	148	92
56	16	西山1号墳	南周溝	埴輪	朝顔形円筒	2.15	5.55	63.23	0.63	19.61	0.84	119	84
57	59	西山1号墳	南周溝	埴輪	円筒	2.12	5.11	61.63	0.67	20.31	0.79	120	100
63	65	西山1号墳	南周溝	埴輪	家形	2.14	5.18	60.57	0.71	20.14	0.83	125	97
65	90	西山1号墳	南周溝	埴輪	家形(破風板・棟木)	2.05	5.67	59.10	0.68	20.96	0.83	122	84
68	53	西山1号墳	南周溝	埴輪	器財(鞍)	2.65	5.12	66.74	0.63	16.76	0.89	130	93
73	115	西山1号墳	南周溝西	埴輪	器財(短甲?)	2.48	4.72	66.98	0.68	17.68	0.83	118	94
89	52	西山26号墳	南東部表土	埴輪	円筒	2.16	5.83	62.10	0.69	21.68	0.97	124	91
93	62	西山26号墳	南東部	埴輪	円筒	2.54	4.82	64.30	0.64	18.22	0.81	120	101
94	51	西山26号墳	東部裾	埴輪	円筒	2.28	5.55	65.96	0.73	20.93	0.95	144	94
101	129	西山26号墳	北東部表土	埴輪	器財(盾)	2.21	4.94	65.49	0.63	18.69	0.86	126	90
102	55	西山26号墳	南東部表土	埴輪	器財(盾)	2.50	4.57	64.41	0.58	18.17	0.87	148	93
104	118	西山26号墳	北~1号埴間	埴輪	器財(蓋)	2.51	4.66	68.40	0.66	17.15	0.97	138	87
106	127	西山26号墳	北東部	埴輪	器財(短甲の草摺)	2.37	5.09	65.75	0.73	17.47	0.93	140	87
115	92	西山26号墳	北東部表土	埴輪	器財(蓋?)	2.21	5.09	63.51	0.67	18.55	0.85	130	87
119	123	西山26号墳	表面採集	埴輪	円筒棺	2.24	5.36	63.98	0.71	18.53	1.02	171	78
		服部遺跡	P-5粘土採掘坑	粘土		2.07	5.90	59.31	0.76	20.11	1.01	156	119
		服部遺跡	P-6粘土採掘坑	粘土		2.24	5.35	58.63	0.65	20.48	1.06	200	116
		服部遺跡		粘土		2.21	4.41	59.42	0.76	21.51	0.91	165	126
		服部遺跡		粘土		2.00	5.56	57.19	0.80	21.59	0.96	168	111

菟田古墳群



1. 遠景
(秋葉山から)



2. 3号墳
調査前全景
(南から)



3. 3号墳
天井石検出
(南から)



1. 3号墳
外護列石
(南から)



2. 3号墳
墳丘背面
(北から)



3. 3号墳
周溝断面
(東から)

菟田古墳群



1. 3号墳
石室東側壁
(西から)



2. 3号墳
石室西側壁
(東から)



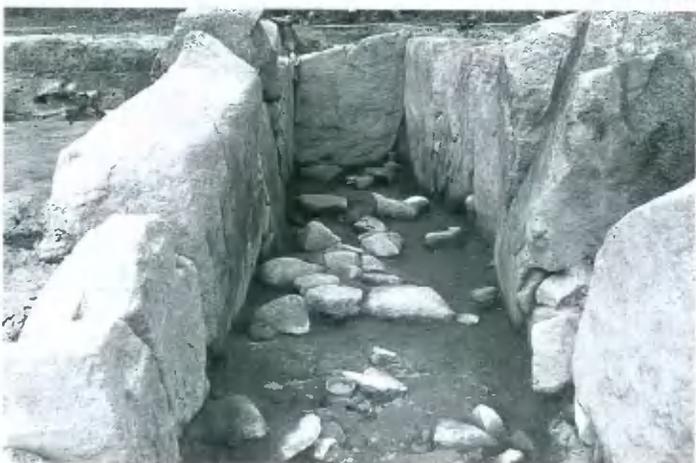
3. 3号墳
遺物出土状況
(西から)



1. 4号墳
調査前全景
(南から)



2. 4号墳
周溝断面
(北東から)



3. 4号墳
石室
(南から)

菟田古墳群

1. 4号墳
遺物出土状況①
(南から)



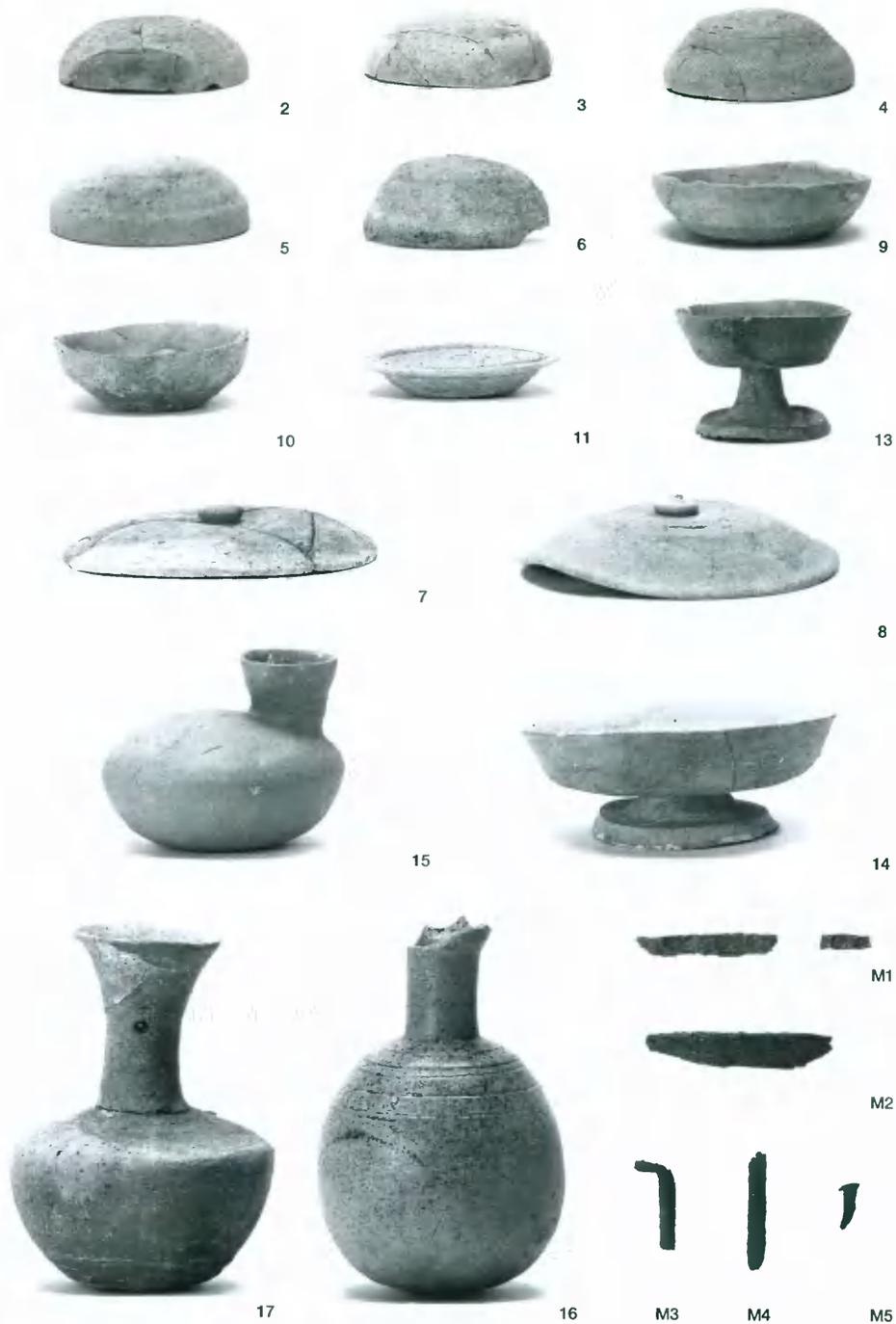
2. 4号墳
遺物出土状況②
(南から)



3. 竪穴住居
(南から)



数田古墳群



3号墳出土遺物

菟田古墳群



22



28



36



23



24



29



25



31



27



34



38



42



41



44



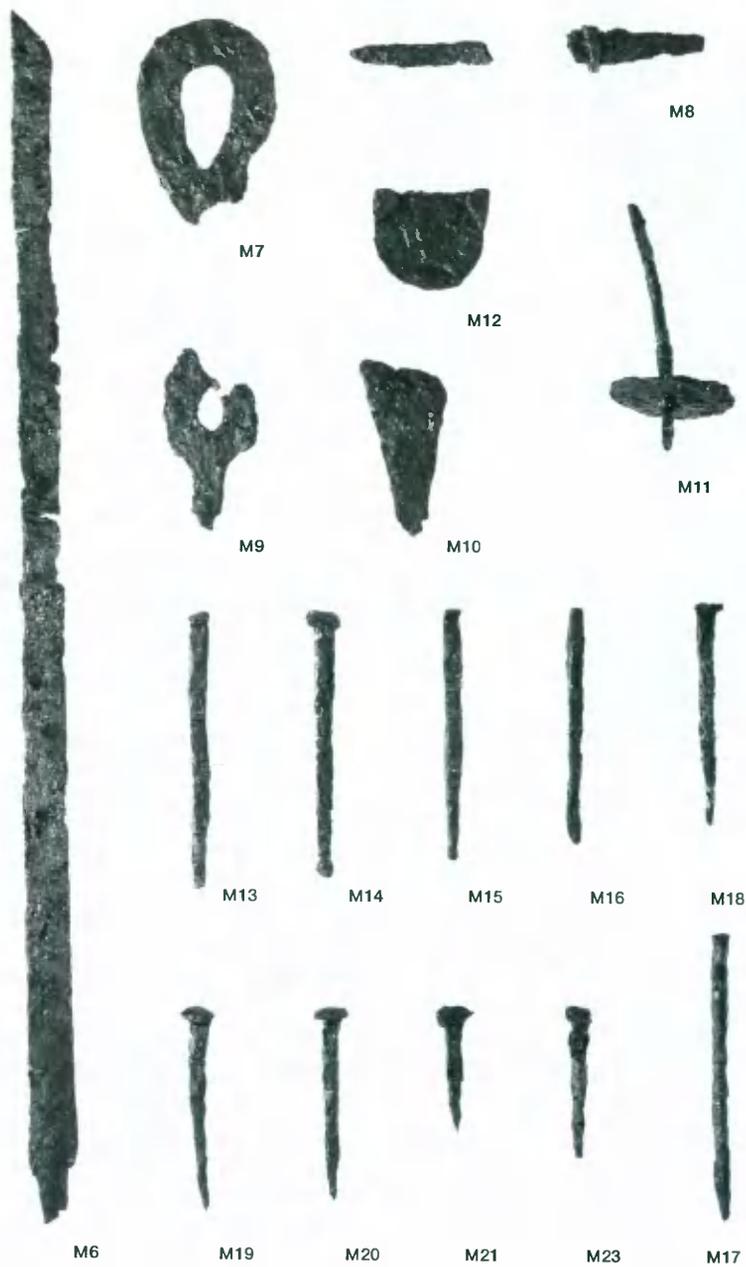
35

1. 4号墳出土土器



51

2. 竪穴住居出土土器



4号墳出土鉄器

金黒池東遺跡

1. 遠景 平成5年度
(南から)



2. 遠景 平成6年度
(南から)



3. A地区石器
出土状況
(西から)





1. B地区石囲い
1・2遠景
(東から)



2. B地区石囲い1
検出状況
(南から)



3. B地区石囲い2
検出状況
(北から)

金黒池東遺跡

1. C地区石囲い3
遠景
(南から)

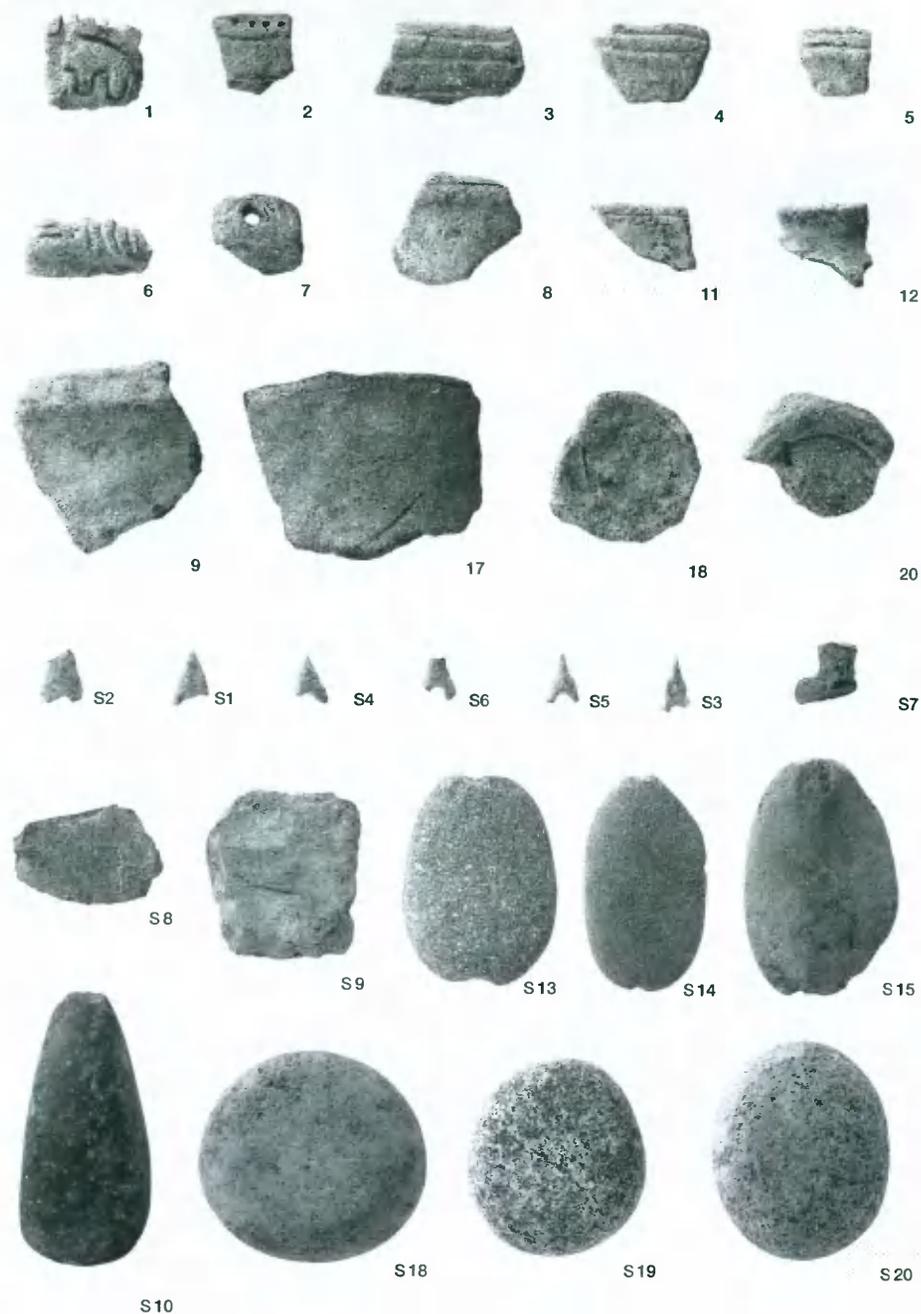


2. C地区石囲い3
(南から)



3. D地区柵列状遺構
(南から)





奥ヶ谷窯跡

1. 遠景
(東から)



2. 全景
(北から)



3. 全景
(南から)





1. 窯体床面A
遺物出土状況
(南から)



2. 窯体床面B
遺物出土状況
(南から)



3. 窯体
完掘状況
(南から)

奥ヶ谷窯跡

1. 周溝断面
(東から)

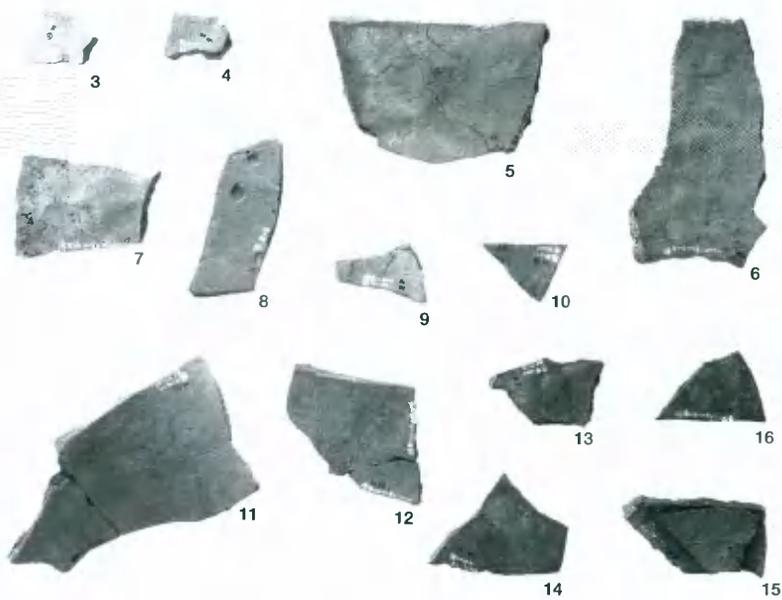
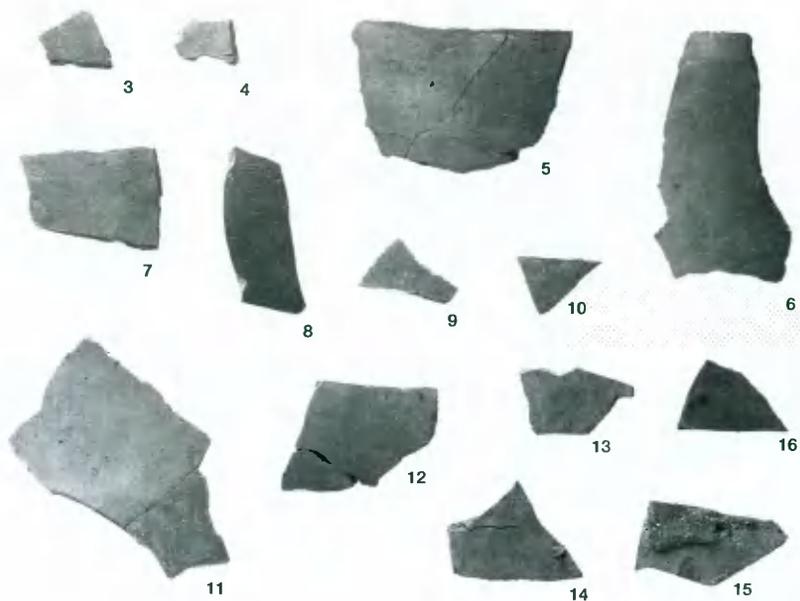


2. 作業面
(西から)



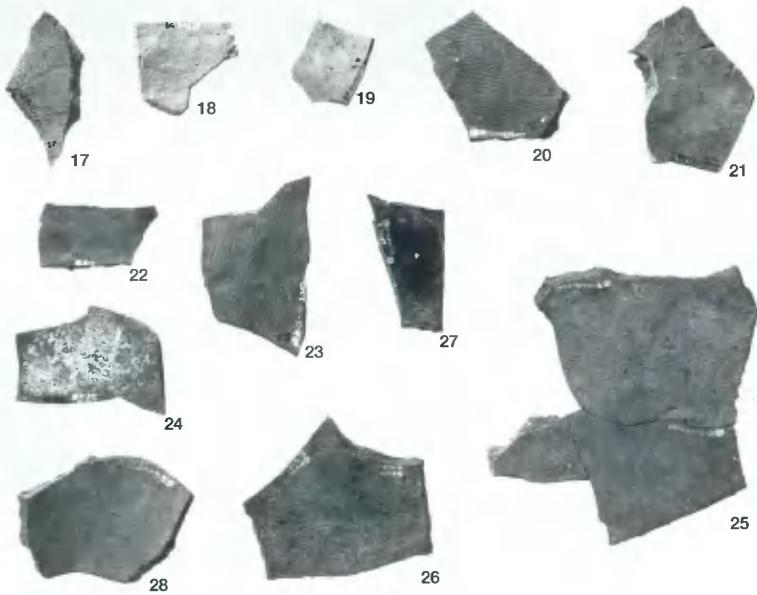
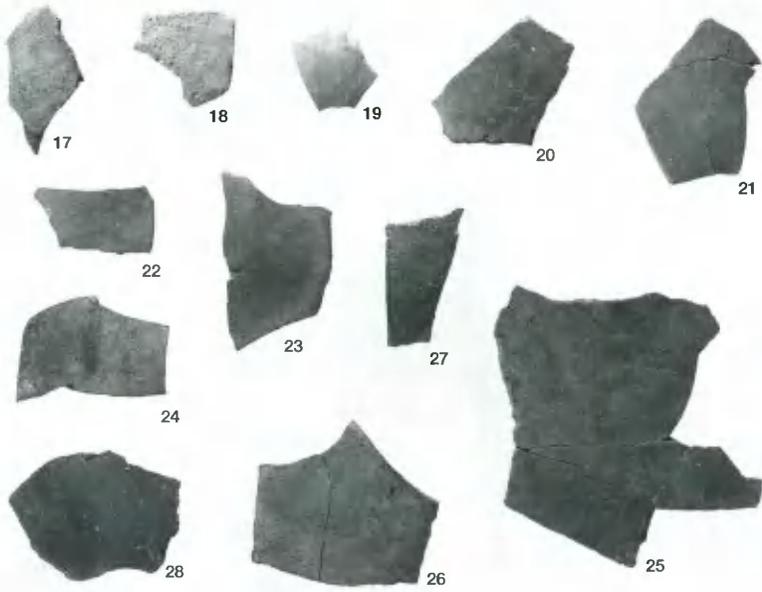
3. 作業面
遺物出土状況
(南東から)



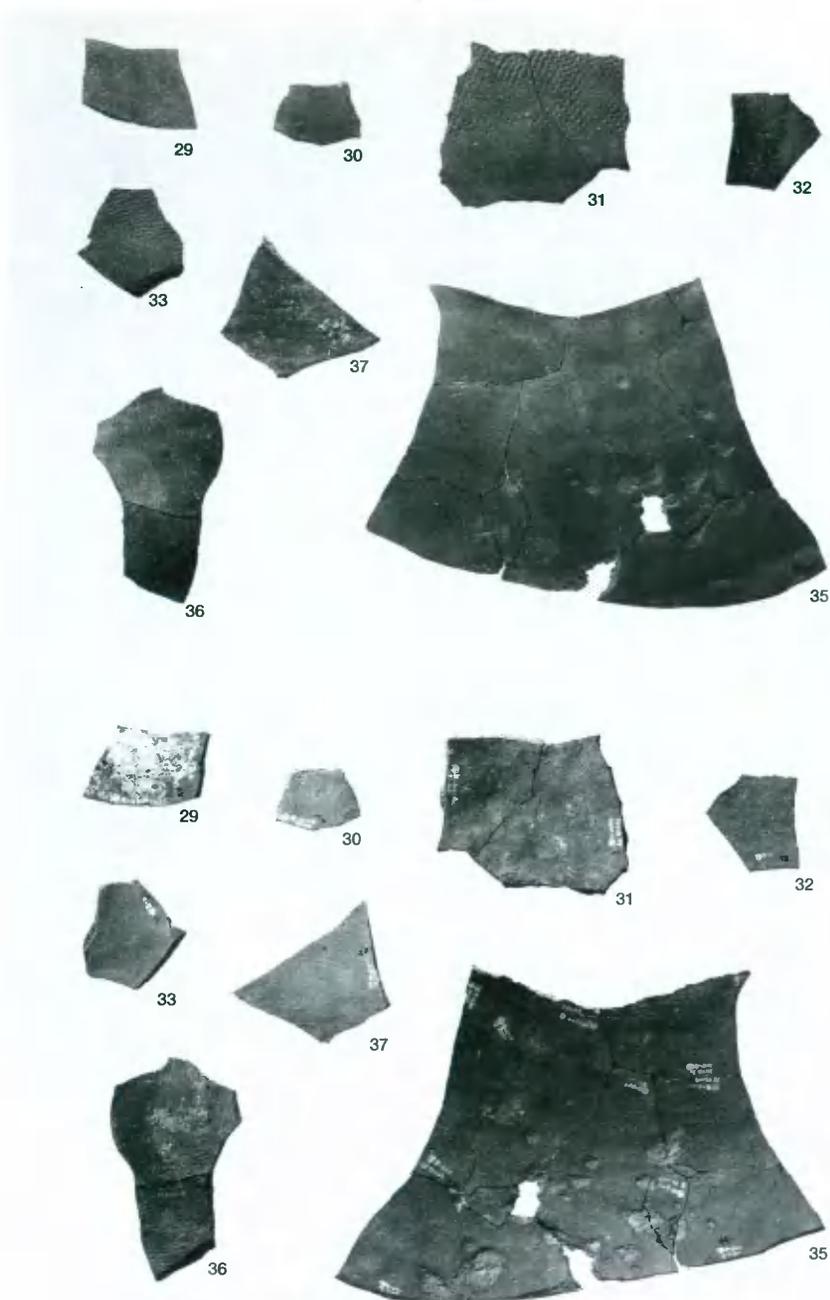


出土遺物① (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡

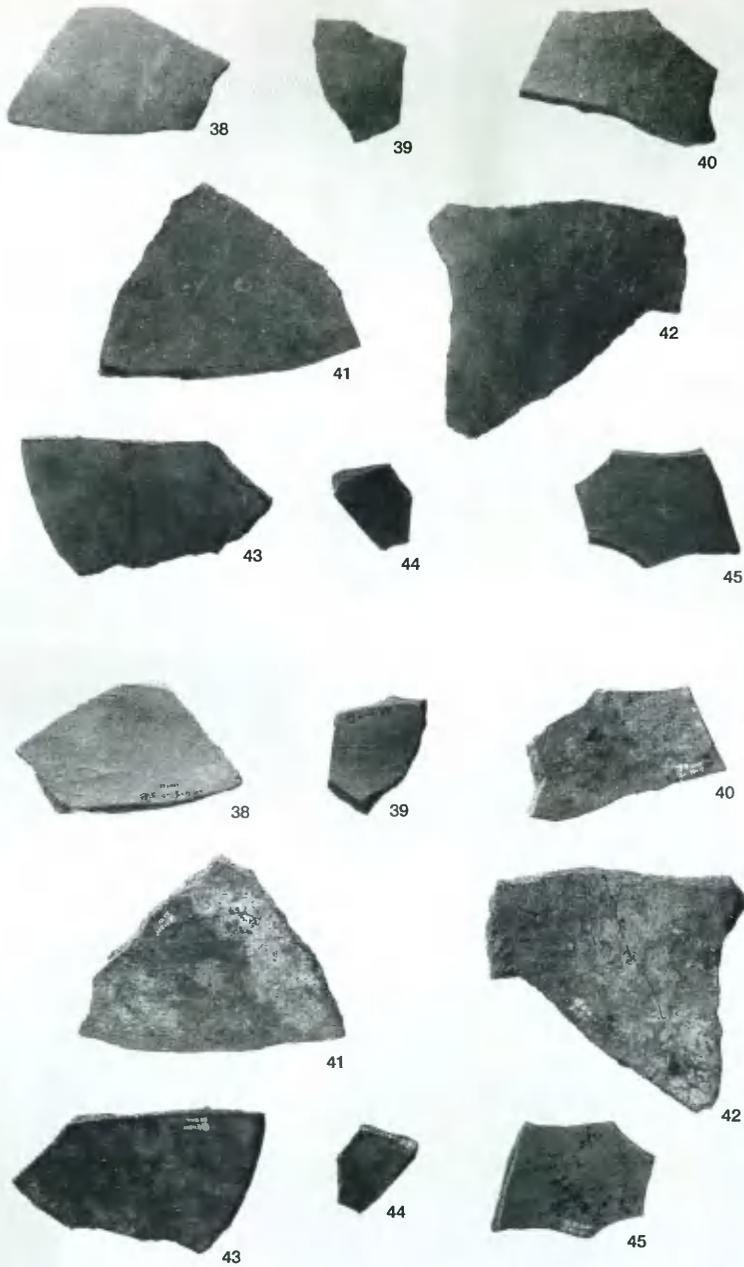


出土遺物 2 (上段 外面、下段 内面)



出土遺物③ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



出土遺物④ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



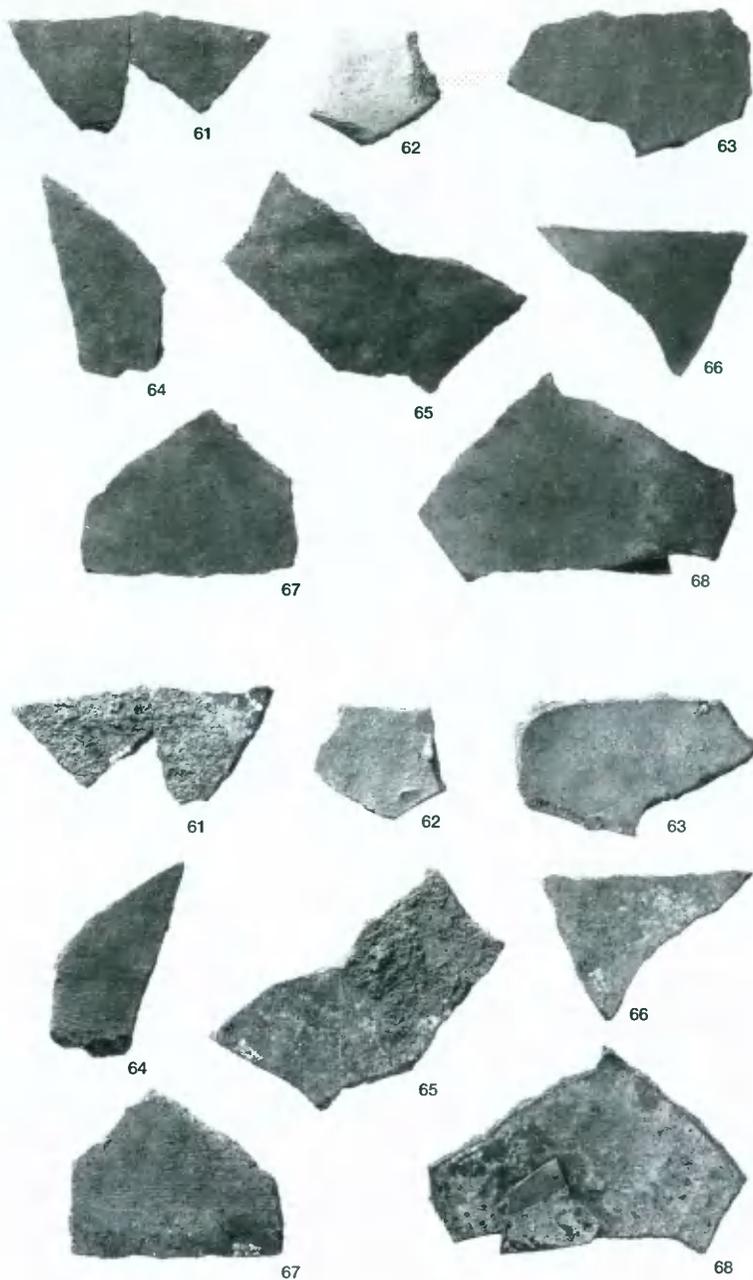
出土遺物 5 (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



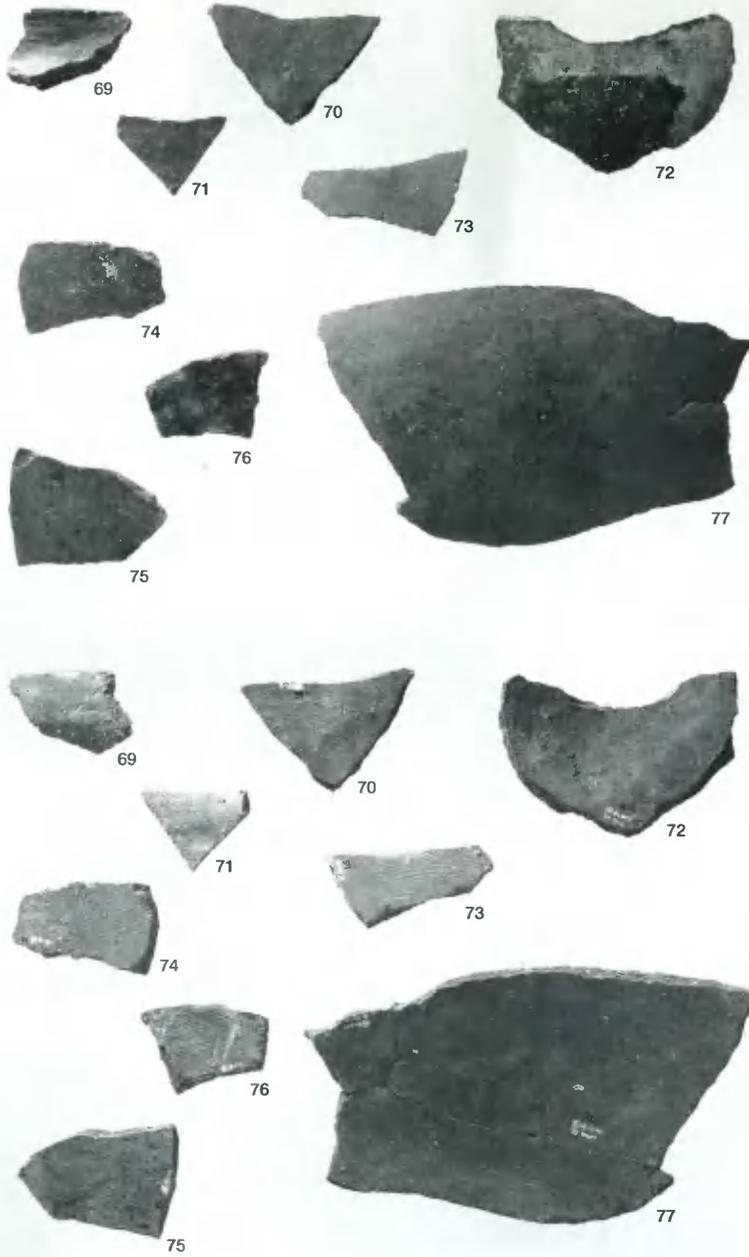
出土遺物⑥ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡

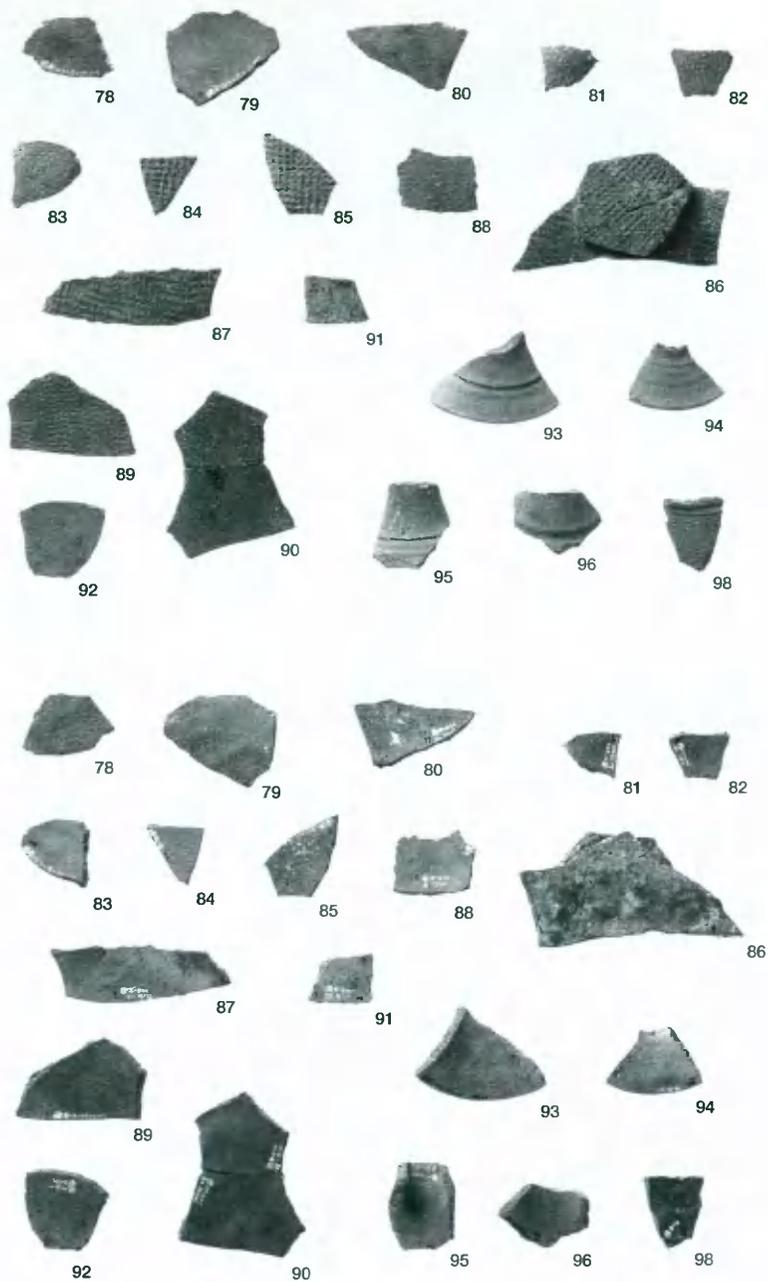


出土遺物⑦ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



出土遺物⑧ (上段 外面、下段 内面)



出土遺物⑨ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



出土遺物⑩ (上段 外面、下段 内面)

奥ヶ谷窯跡



1



C3

1. 出土遺物11
(左 表採、
右 C3)



5



17



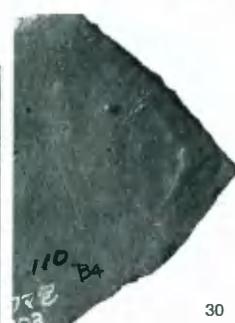
18



28



55



30



77



81

2. 内面部分拡大写真

中山遺跡

1. 遠景
(西から)



2. 南西部
(西から)

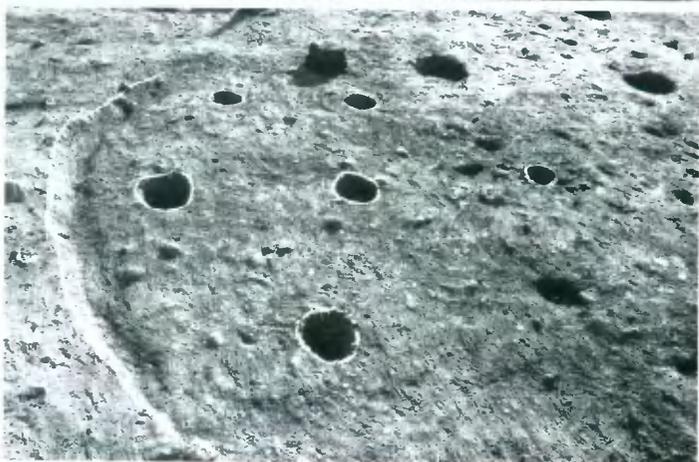


3. 南東部
(西から)





1. 竪穴住居 1
(北から)



2. 竪穴住居 2
(北から)



3. 掘立柱建物 1
(北西から)

中山遺跡



1. 掘立柱建物2
(北から)



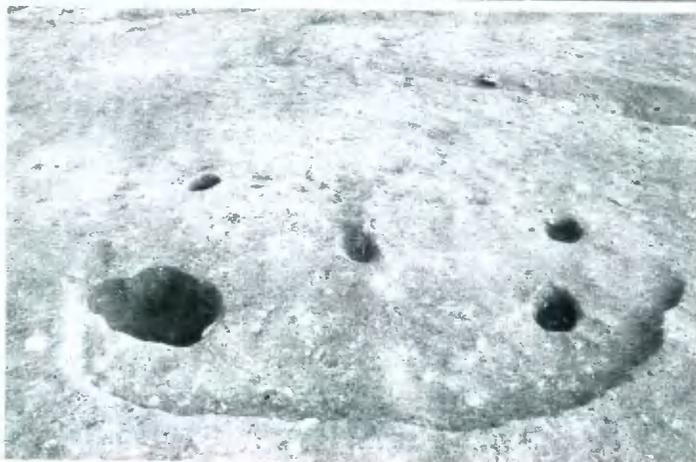
2. 掘立柱建物3
(西から)



3. 掘立柱建物4
(西から)



1. 掘立柱建物 5
(南から)



2. 掘立柱建物 6
(北西から)



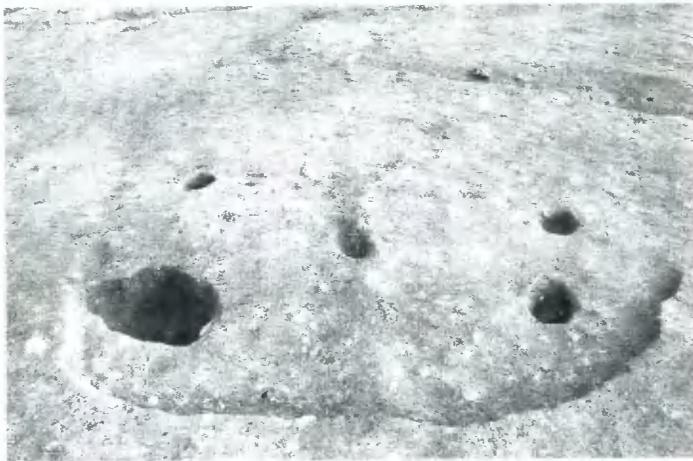
3. 掘立柱建物 7
(北から)

中山遺跡

1. 掘立柱建物 8
(北から)



2. 掘立柱建物 9
(北から)



3. 土壇 1
(南から)





1. 土壇6
(南から)



6



5



9



12



37



7



25



15



36



S2



S1



S3



S4

2. 出土遺物

中山古墳群

1. 6号墳
調査前全景
(南から)



2. 6号墳
墳丘北側断面
(西から)



3. 6号墳
墳丘南側周溝断面
(西から)





1. 6号墳
墳丘東側断面
(北から)



2. 6号墳
調査風景
(南から)



3. 6号墳
南埴輪列
(西から)

中山古墳群

1. 6号墳
南埴輪列
(南から)



2. 6号墳
埋葬施設および
埴輪列 (北から)



3. 6号墳
埋葬施設断面
(北から)





1. 6号墳
第1主体
(南から)



2. 6号墳
第1主体
遺物出土状況
(南から)



3. 6号墳
第2主体
(南から)

中山古墳群

1. 6号墳
墓壙および排水溝
(北から)



2. 7号墳
全景
(北から)



3. 7号墳
埋葬施設
(北から)





59



64



65



66



60



69



71



80



84



87



88



89



96



97



98

中山古墳群



84



87



96



96



98

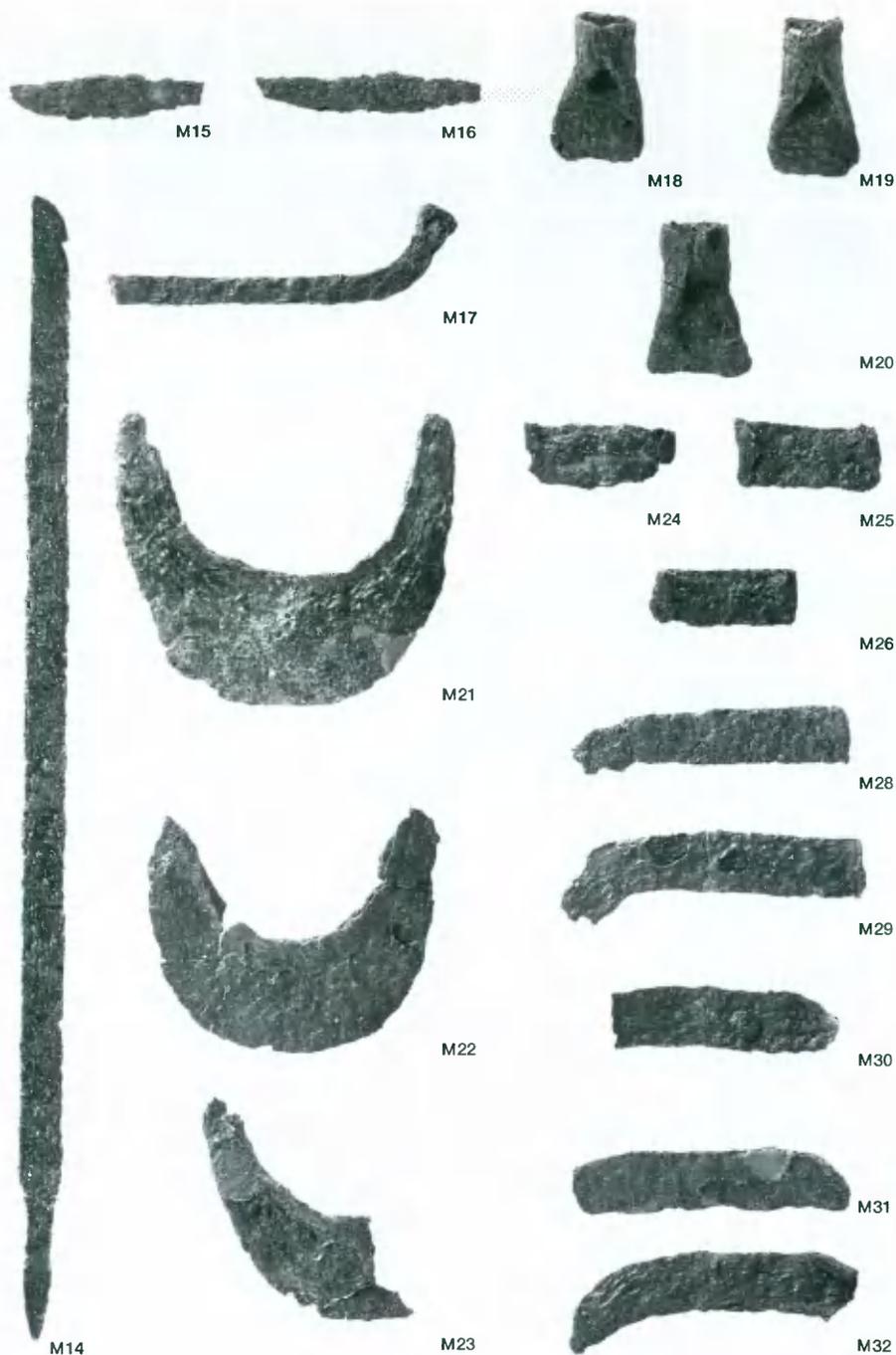


135



138

6号墳出土埴輪（部分拡大）・須恵器



6号墳出土鉄器①

中山古墳群



M33



M35



M36



M37



M38



M39



M40

M41

M42



M43



M44



M45



M46



M47

M49



M56



M57



M58



M63



M60



M61



M70



M62



1. A地区
調査前遠景
(西から)

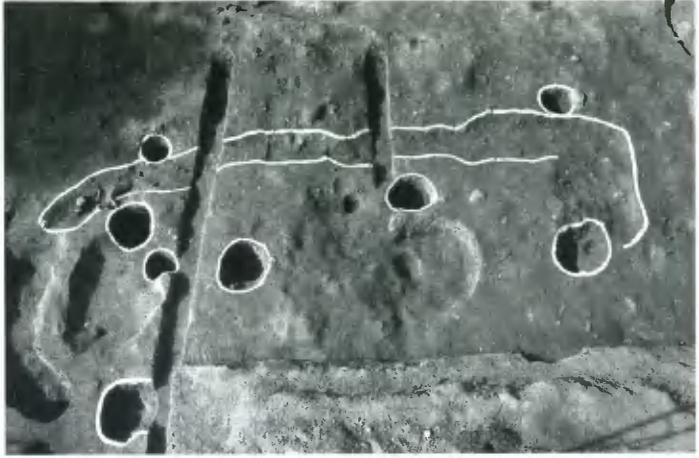


2. A地区
調査前全景
(南から)



3. 竪穴住居1
(東から)

西山遺跡



1. 竪穴住居 2
(東から)



2. 竪穴住居 4
(南から)



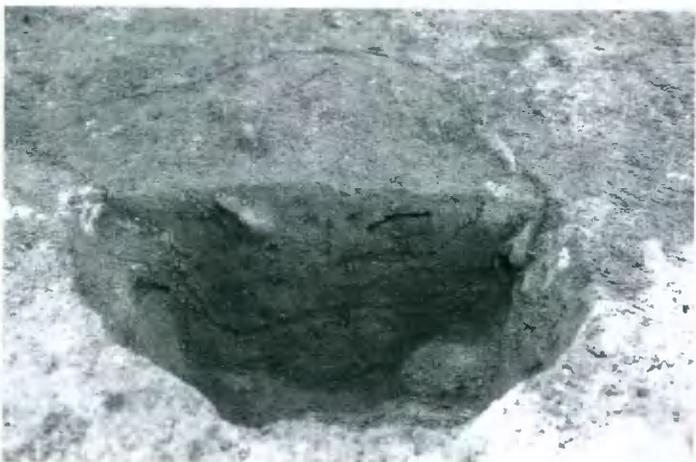
3. 土壇 2
(西から)



1. B地区
調査前近景
(南から)



2. 竪穴住居 5
(北から)



3. 竪穴住居 5
中央穴
(北から)

西山遺跡



1. 竪穴住居 6
(西から)



2. 竪穴住居 6
中央穴
(北から)



3. 掘立柱建物 1
(西から)

西山遺跡



3



4



5



17



13



15



S7



S2



S3



S4



S5



S6



S10



S9



S8



S11



M1



M2



M3

出土遺物

西山古墳群

1. 5号墳
調査前全景
(南から)



2. 5号墳
調査後全景
(南から)



3. 5号墳
墳丘南北断面
(南東から)





1. 5号墳
墳丘東西断面
(南西から)



2. 5号墳
埋葬施設から排水溝
(北から)



3. 5号墳
埋葬施設断面
(東から)

西山古墳群

1. 5号墳
埋葬施設
(東から)



2. 5号墳
排水溝入口
(東から)



3. 5号墳
排水溝
(南から)





1. 25号墳
全景
(西から)



2. 1号墳
全景
(南から)



3. 1号墳
墳丘断面
(南から)

西山古墳群



1. 1号墳
北周溝断面
(西から)



2. 1号墳
南周溝断面
(西から)



3. 1号墳
南周溝東部
埴輪出土状況
(西から)



1. 1号墳
南周溝西部
埴輪出土状況
(南から)



2. 1号墳
埋葬施設検出状況
(南から)



3. 1号墳
埋葬施設
(南から)

西山古墳群

1. 26号墳
全景
(北から)



2. 26号墳
全景
(南東から)



3. 26号墳
北周溝断面
(西から)





1. 26号墳
南周溝断面
(西から)



2. 26号墳
南周溝
埴輪出土状況
(北から)



3. 26号墳
埋葬施設断面
(北西から)

西山古墳群



1. 26号墳
埋葬施設
(南西から)



2. 26号墳
埋葬施設北部
遺物出土状況
(南から)



3. 26号墳
埋葬施設南部
遺物出土状況
(南から)



27

28



31

42

43

44



34

49

53



54

55



57

61



60



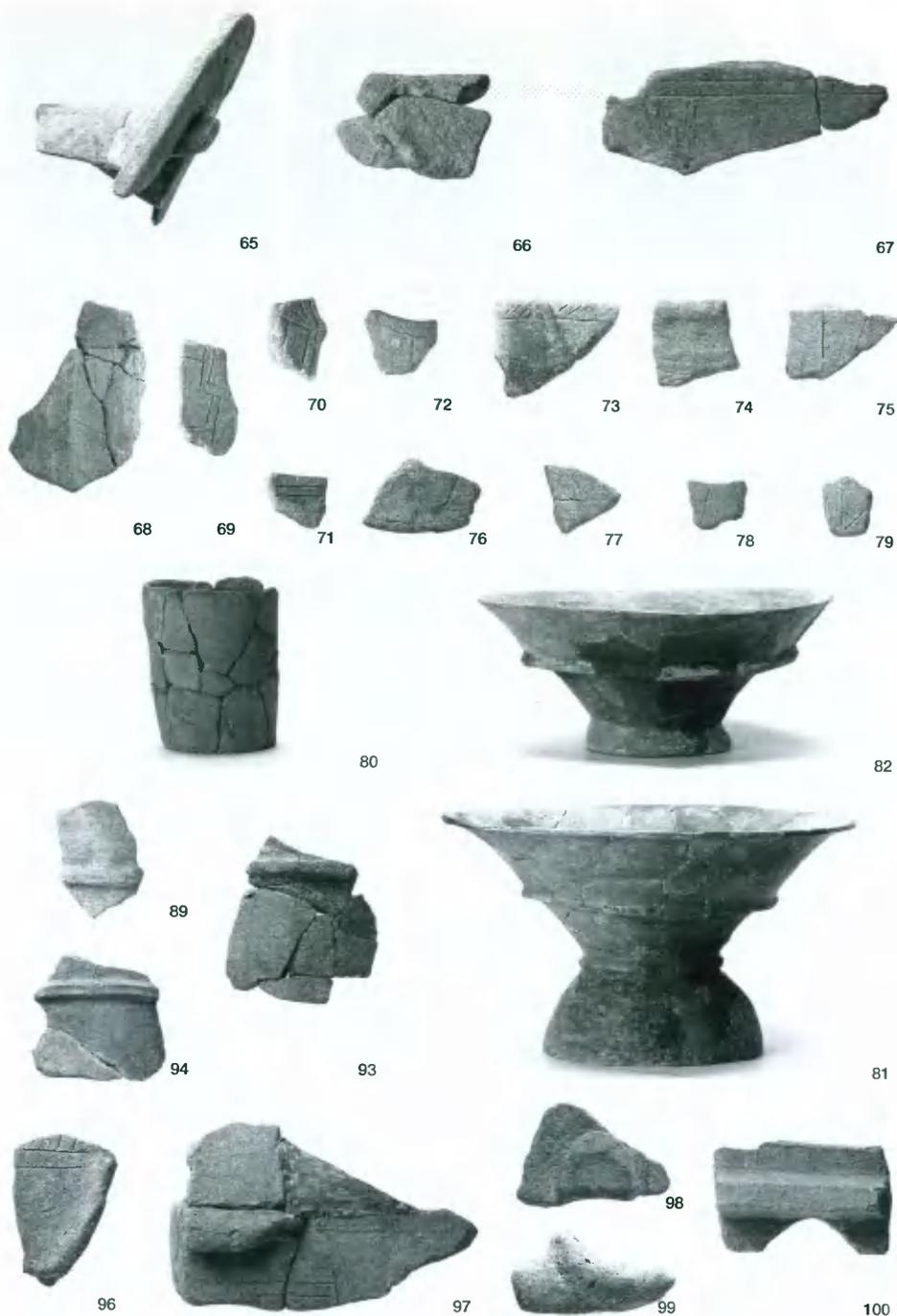
62



63



64





101



102



103



104



106



107



109



112



105



110



111



113



114



108



116



118



120



121



117



119



122



M10



M5



M6



M11



M7



M8



M9



M12



M13



M14



M15



W1



服部遺跡

1. 遠景
(西から)



2. I区南側道
(北西から)



3. II区P5
(北から)





1. II区P11
(北から)



2. VI区北側道
(南東から)



3. VI区南側道
(北東から)

服部遺跡

1. 河道1
(西から)



2. 河道2
(南から)



3. 粘土採掘坑
- I 区 P 3 -
(北から)

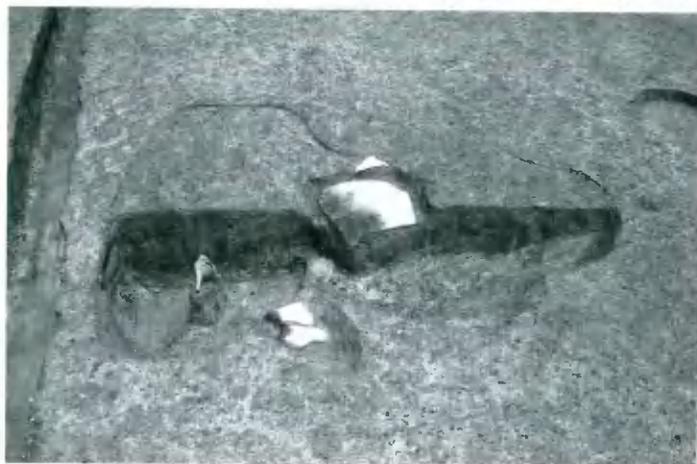




1. 粘土採掘坑
- II区P 5 -
(北から)



2. 粘土採掘坑
- II区P 9 -
(南から)



3. 粘土採掘坑 4
(南から)

服部遺跡

1. 粘土採掘坑
- II区P11 -
(北から)



2. 粘土採掘坑断面
- II区P11 -
(西から)



3. 粘土採掘坑
- III区北側道 -
(西から)



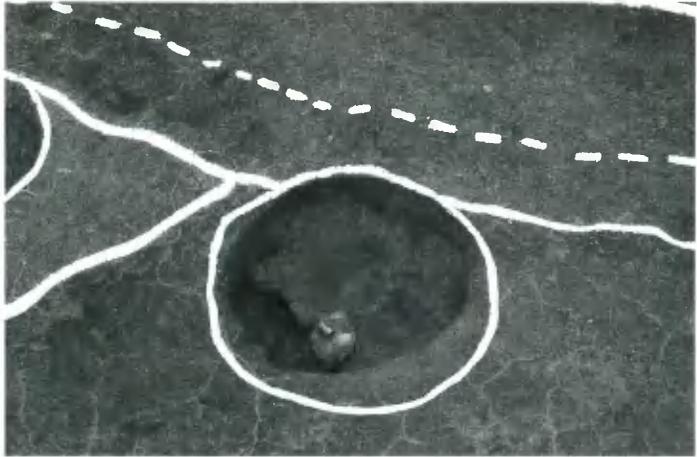


1. 粘土採掘坑—Ⅲ区南側道①—（東から）



2. 粘土採掘坑—Ⅲ区南側道②—（東から）

服部遺跡



1. 土壇6
(南から)



2. 溝1
(西から)



3. 溝9
(南から)



1. 井戸1
(西から)



2. 溝29・30
(南東から)



3. 溝51
(西から)

服部遺跡

1. 溝66
(東から)



2. 河道3
(北東から)



3. 河道3
護岸施設
(北西から)



服部遺跡



103



105



109



120



146



123



124



125



170



97



S10



S11



S1



S7



S14



S9



S8



S15



S5



S4



S3



S16



W5

出土遺物

北溝子遺跡



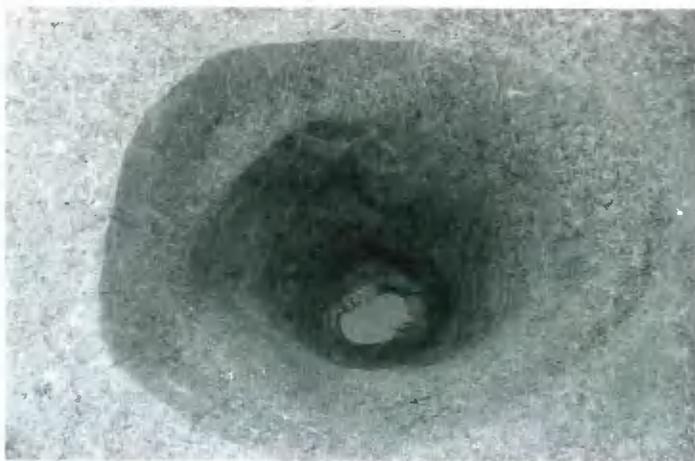
1. 近景
(西から)



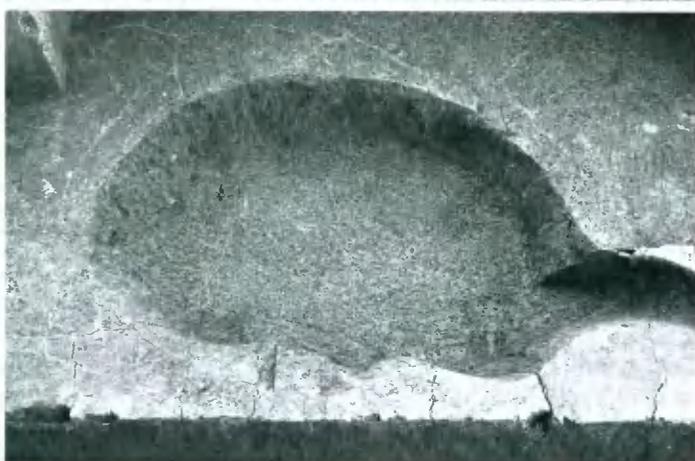
2. II区南側道
(西から)



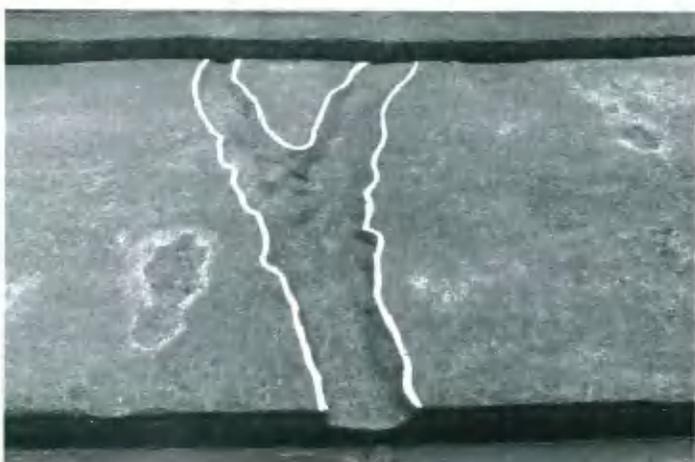
3. IV区南側道
(東から)



1. 井戸
(西から)



2. 土壇1
(南から)



3. 溝2
(南から)

北溝手遺跡

1. 溝4
(北から)



2. 溝5・6
(北東から)

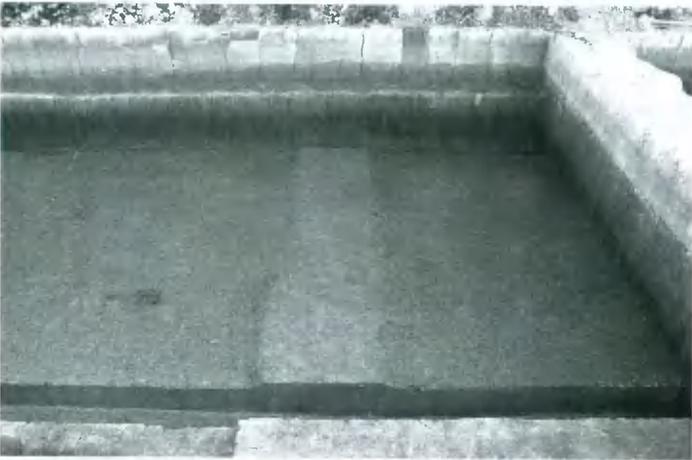


3. 溝10
(東から)





1. 水田1
(西から)



2. 水田2
(北から)



3. 土壌4
(東から)

北溝手遺跡



1. 柵列状遺構
(北から)



2. 溝14
(西から)



3. 溝24
(西から)



3



9



10



11



13



12



S1



S2



S3



S4



S5



S6



S7



S8



S9



S10



S11



S12



S13



S14



S15



S16

窪木遺跡

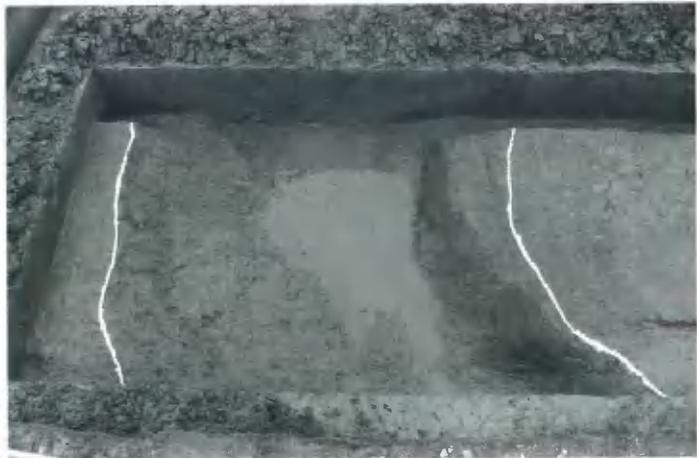
1. 近景
(西から)

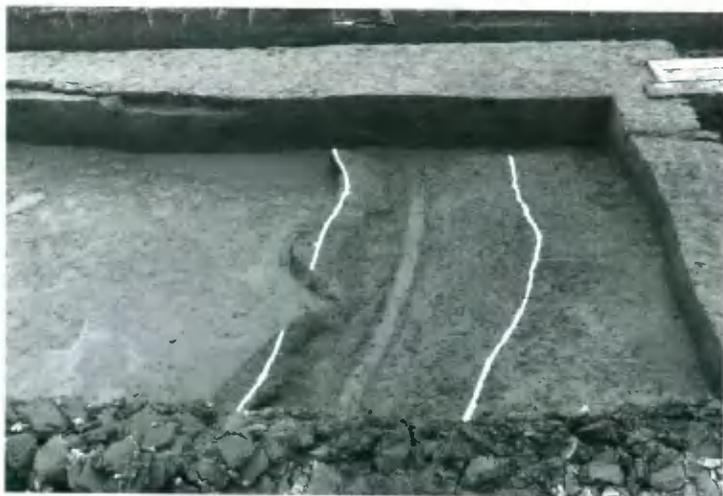


2. I区北側道
(西から)

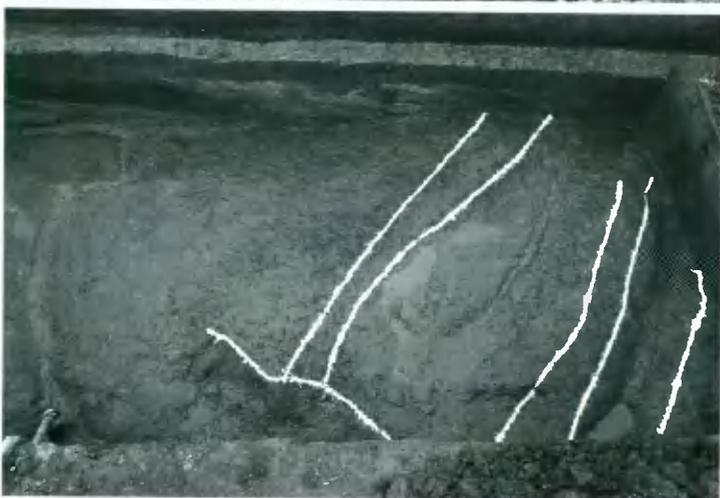


3. 溝2
(南から)





1. 溝4
(南から)



2. 溝6
(南から)



6



9

3. 出土遺物

高松田中遺跡



1. 近景
(西から)



2. II区北側道(東から)



3. II区南側道(西から)

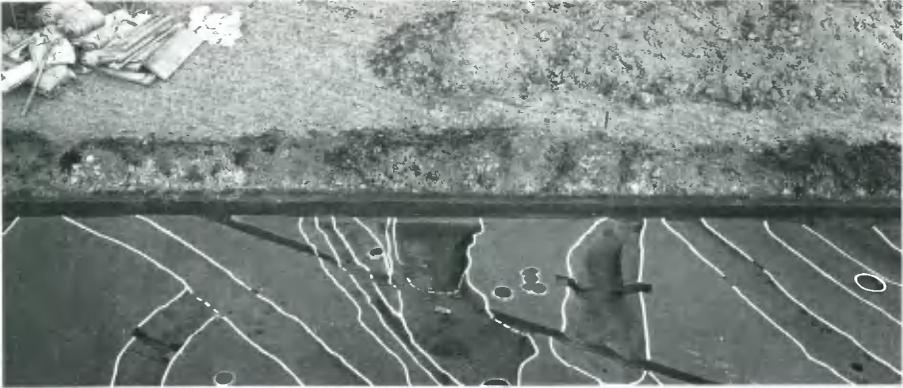


1. IV区舟形土壇群
(東から)

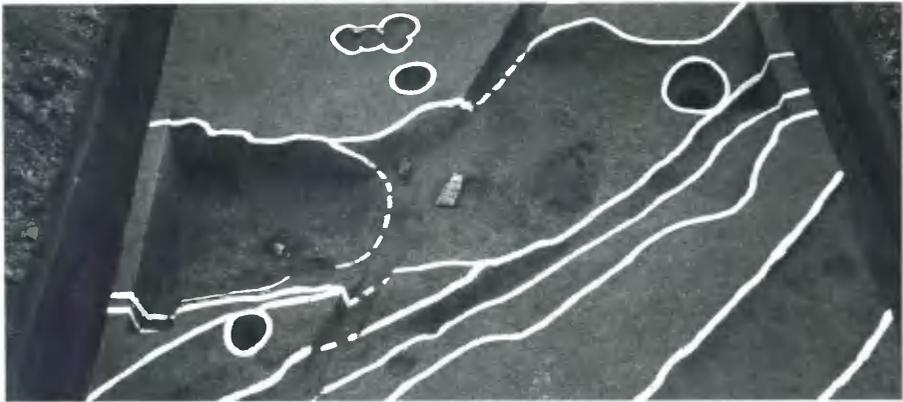


2. 舟形土壇4
(南東から)

高松田中遺跡



1. 舟形土壇8・9 (南から)



2. 舟形土壇8 (西から)



3. 舟形土壇13 (北から)



1. 溝1
(北から)



2. 溝2
(南東から)



3. 溝20
(北から)

高松田中遺跡



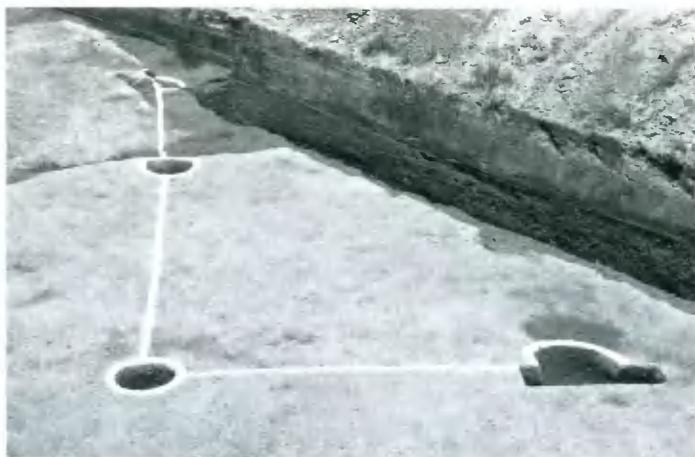
1. 河道2
(東から)



2. 河道3
(西から)



3. 水田3
(西から)



1. 掘立柱建物2
(南東から)



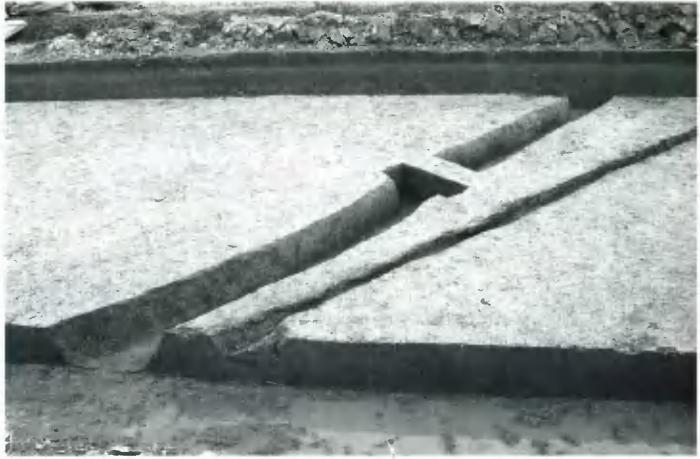
2. 掘立柱建物3
(南東から)



3. 溝34
(東から)

高松田中遺跡

1. 溝35
(南から)



2. 溝53
(南から)

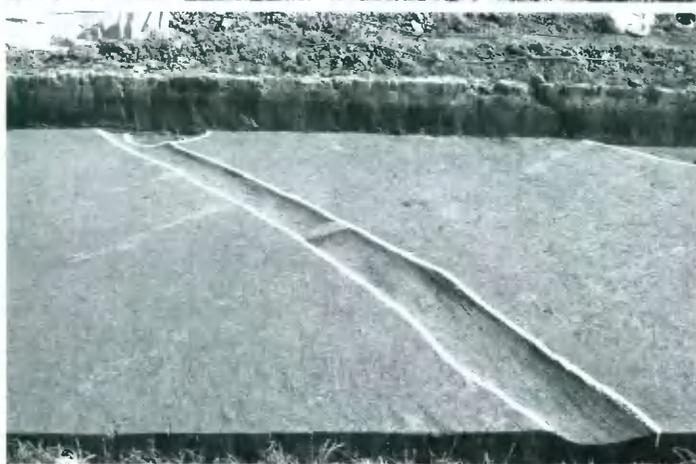


3. 溝71~74
(南から)





1. 溝82・83
(南から)



2. 溝85
(南から)



3. 溝86
(南から)

高松田中遺跡



1



6



20



25



7



10



21



11



22



76



77



47



99



69



60



70



M1



S1



S2



S4



S5



S6



S7



S11



S12



S16



S20



C1



S21



S22



S23



S24



S25



S15



S26



S27



S28



S13



S29



S30



S31



S32



S17



S10



S14



S19



S35

S18



報 告 書 抄 録

ふりがな	やぶたこふんぐん かなくろいけひがしいせき おくがたにようせき なかやまいせき・なかやまこふんぐん							
書名	藪田古墳群 金黒池東遺跡 奥ヶ谷窯跡 中山遺跡・中山古墳群							
ふりがな	にしやまいせき・にしやまこふんぐん はっとりいせき きたみぞていせき くばきいせき たかまつたなかいせき							
書名	西山遺跡・西山古墳 服部遺跡 北溝手遺跡 窪木遺跡 高松田中遺跡							
副書名	中国横断自動車道建設に伴う発掘調査							
巻次	4							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	121							
編著者名	伊藤 晃・浅倉秀昭・平井 勝・江見正己・中野雅美・小延祥夫・椿 真治・柴田英樹・蛇原啓介							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-01 岡山県岡山市西花尻 1325-3 TEL086-293-3211							
発行機関	日本道路公団中国支社岡山工事事務所		岡山県教育委員会					
所在地	〒700 岡山市津島西坂2-4-34 TEL086-255-1221		〒700 岡山県岡山市内山下 2-4-6 TEL086-224-2111					
発行年月日	1997年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藪田古墳群	総社市身延	208		34°45'30"	133°44'15"	H5.9.1~H5.11.16 H6.3.1~H6.3.7 H6.6.23	918	中国横断道自動車道建設に伴う発掘調査
金黒池東遺跡	総社市福井	208		34°41'55"	133°45'10"	H5.5.17~H5.6.4 H6.6.27~H6.7.5	780	
奥ヶ谷窯跡	総社市福井	208		34°41'40"	133°45'26"	H5.11.2~H5.12.8	450	
中山遺跡 中山古墳群	総社市福井	208		34°41'38"	133°45'33"	H5.6.7~H5.8.23 H5.11.4~H5.12.8	1,950	
西山遺跡 西山古墳群	総社市総社	208		34°41'20"	133°45'58"	H5.8.17~H5.11.8 H5.12.9~H6.1.21 H6.8.22~H6.11.21	3,581	
服部遺跡	総社市黒尾	208		34°41'20"	133°46'27"	H5.4.28~H5.5.13 H5.12.13~H6.3.18 H6.6.3~H6.10.13	9,106	
北溝手遺跡	総社市北溝手	208		34°41'27"	133°46'52"	H5.4.21~H5.4.28 H6.3.11~H6.3.18 H6.4.1~H6.6.24 H6.7.6~H7.1.31	9,355	
窪木遺跡	総社市窪木	208		34°41'35"	133°47'07"	H5.4.19~H5.4.21 H6.10.17~H6.12.2	2,443	
高松田中遺跡	岡山市高松田中	201		34°41'37"	133°47'45"	H5.4.12~H5.4.19 H6.1.24~H6.3.18 H6.4.1~H6.6.16 H6.11.4~H7.1.20	7,395	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
藪田古墳群	古墳	古墳後期	横穴式石室	須恵器・土師器				
金黒池東遺跡	集落 墓地	縄文後期 古代	石囲い遺構	縄文土器・石器 須恵器	巡方出土			
奥ヶ谷窯跡	生産跡	古墳中期	窯・周溝・作業面	須恵器	吉備最古の須恵器窯			
中山遺跡 中山古墳群	集落 古墳	弥生中期 古墳後期	竪穴住居・掘立柱建物 竪穴式石室	弥生土器 鉄器・ガラス玉・埴輪	円筒埴輪群が豊富			
西山遺跡 西山古墳群	集落 古墳	弥生中・後期 古墳中期	竪穴住居 木棺直葬	弥生土器 埴輪・埴輪棺	形象埴輪群が多数出土			
服部遺跡	集落・生産跡	弥生~中世	粘土探掘坑・溝	弥生土器・土師器	広範囲から粘土探掘坑群 検出			
北溝手遺跡	集落	弥生~中世	溝・土壌	弥生土器・土師器				
窪木遺跡	集落	弥生~中世	溝・土壌	弥生土器・土師器				
高松田中遺跡	集落	弥生~中世	溝・建物・舟形土壌	弥生土器・土師器	舟形土壌を多数検出			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告121

藪田古墳群
金黒池東遺跡
奥ヶ谷窯跡
中山遺跡・中山古墳群
西山遺跡・西山古墳群
服部遺跡
北溝手遺跡
窪木遺跡
高松田中遺跡

中国横断自動車道建設に伴う発掘調査 4

平成9年3月15日 印刷

平成9年3月31日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
発行 日本道路公団中国支社岡山工事事務所
岡山県教育委員会
印刷 西尾総合印刷株式会社